

新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡
掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡

一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査 I

2004

岡山県教育委員会



発掘調査地と周辺（航空写真：南東上空から）

卷頭図版 2



1 中撫川遺跡1区 溝5 弥生土器出土状態（北東から）



2 中撫川遺跡3区 井戸13土師器出土状態（東から）



1 掛無堂遺跡 護岸検出状態（北から）



2 中撫川遺跡3区 たわみ4 緑釉陶器865・885出土状態（北から）

卷頭図版 4



1 中撫川遺跡 1～3区 手焙り形土器



2 中撫川遺跡 3区 溝12出土土師器



3 中撫川遺跡 3区 土器溜まり 3出土土師器



B1

管玉 (中撫川遺跡2区溝2
出土: 約×1.5)



B4

管玉 (中撫川遺跡2区たわみ1
出土: 約×1.5)



M8

金環 (中撫川遺跡3区
出土: 約×1.4)



776

円面硯 (中撫川遺跡1区溝25
出土: ×0.5)



鉛弾 (新邸・郷ノ溝・仏生田遺跡出土)



c9

銅印鑄型と銅塊 (中撫川遺跡2区たわみ3出土: 右約×0.6)
: 手前約×0.8)



緑釉陶器集合写真 (中撫川遺跡2・3区 たわみ3・4出土)

卷頭図版 6



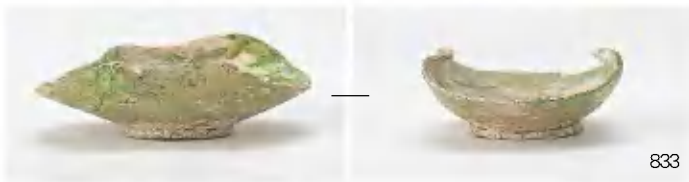
仏生田118



813



814



833



842

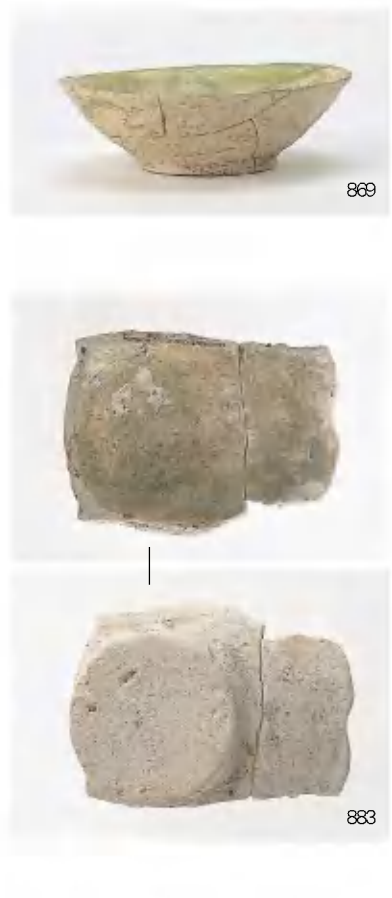
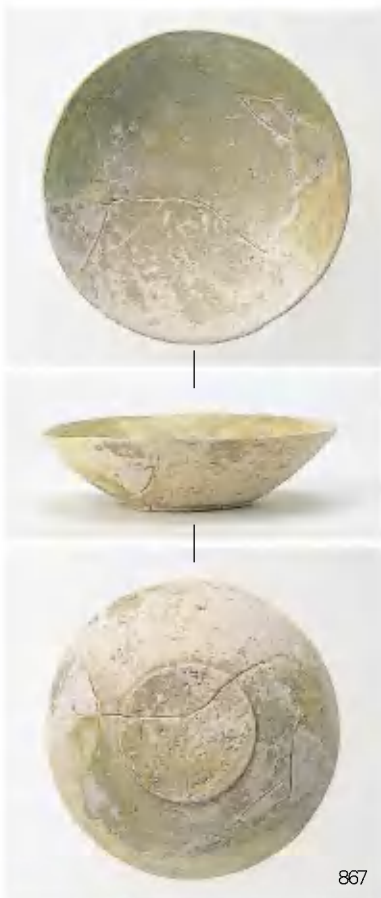
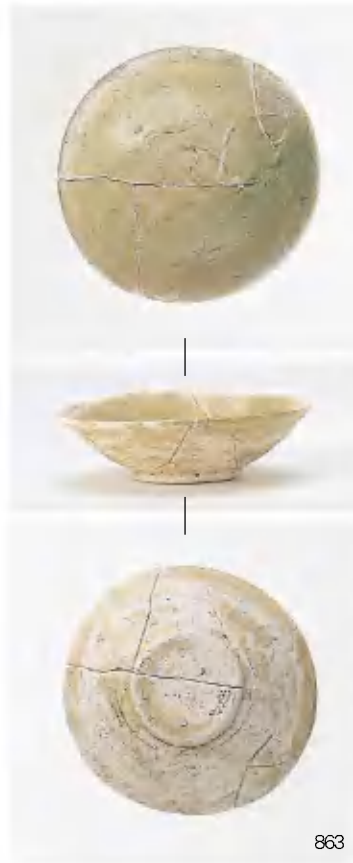


843



845

仏生田遺跡5区、中撫川遺跡2区たわみ3出土緑釉陶器



中撫川遺跡3区たわみ4出土緑釉陶器(1)

卷頭図版 8



中撫川遺跡 3区たわみ 4 出土緑釉陶器 (2)

序

吉備高原に源を発する足守川の中・下流域には、岡山県でも有数の遺跡が多数存在しています。とりわけ、縄文時代にさかのぼる稲作の開始や、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落の形成、古代の寺院や官衙の造立など、長期間にわたる遺跡群の存在が確認され、まさしくこの地域が古代吉備の中核部であったことを物語っています。

川入遺跡は、すでに昭和45年以降山陽新幹線建設に伴う発掘調査などによって、弥生時代前期から室町時代にかけての大規模な集落遺跡であることが判明しています。古代の川入遺跡は、瀬戸内海から吉備の中心部へ通じる出入り口にあたりと推定され、遺跡北方の「吉備津」の地名にその名残をとどめています。

岡山県古代吉備文化財センターでは、平成12年度から14年度にかけて一般県道吉備津松島線改築にさきがけて、川入遺跡ほか新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・中撫川遺跡の発掘調査を実施しました。これらの遺跡名は、周知の遺跡のほかに新たに命名した遺跡も含まれています。

発掘調査では、幅広い時期の多数の遺構が検出されました。弥生時代から古墳時代にかけての溝群の多くは、水稲耕作に不可欠な用排水などの目的で掘られたものと考えられます。土木技術を駆使し、多大な労力が注がれたことを示す遺構です。溝からは壺・甕など多量の土器が出土していますが、その中には、近畿地方や山陰地方、遠く南九州から搬入されたと考えられる土器が確認され、当時の人々の広範な交流を示す資料と考えられます。

古代の遺構としては、護岸施設や建物群が発見されました。前者では、河道の岸辺に多数の杭を打ち込んで構築された様子が詳しく観察されました。建物の多くは中撫川遺跡で集中して発見されましたが、付近から円面硯や銅印の鋳型が出土しています。これらは、京都で生産された貴重な焼き物、緑釉陶器の大量出土とともに、遺跡の公的な性格を物語ると特筆すべき発掘成果といえるでしょう。

本書が文化財の保護・保存に活用されるとともに、今後の地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、専門委員会の先生方から有益な御指導・御助言を賜りました。また、地域住民の皆様をはじめ、岡山地方振興局からは多大な御協力を賜りました。記して深甚の謝意を表する次第です。

平成16年 3月

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 正 岡 睦 夫

例 言

1 本書は、岡山県教育委員会が県道吉備津松島線改築に伴い、岡山地方振興局の依頼を受けて、平成12（2000）年度から平成14（2002）年度にかけて発掘調査を実施した、新邸（しんやしき）遺跡・郷ノ溝（ごうのみぞ）遺跡・仏生田（ぶしょうでん）遺跡・掛無堂（かけなしどう）遺跡・川入（かわいり）遺跡・中撫川（なかなつかわ）遺跡の発掘調査報告書である。

遺跡名は、発掘調査当時の名称を変更し、その照合については第2表に明記した。

2 新邸遺跡は岡山市吉備津字新邸2292-2番地ほかと倉敷市日畑字狐堂飛地1061番地、郷ノ溝遺跡は岡山市納所郷ノ溝253-1番地ほか、仏生田遺跡は1区が岡山市納所字藤ノ木206番地ほかと岡山市納所字仏生田228-1番地、2区が岡山市納所字仏生田188-1番地ほかと倉敷市日畑字木ノ子町1223-1番地ほか、3区が岡山市納所字仏生田168番地ほか、5区が岡山市納所字仏生田159-1番地、掛無堂遺跡は岡山市納所掛無堂156-1番地ほか、川入遺跡は岡山市川入大字大道西266-1番地ほか、中撫川遺跡は岡山市中撫川字法万寺402番地ほかに所在する。

以上の収載遺跡の位置については、第1図に示す。

3 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し、本報告書に掲載した遺跡の発掘調査の期間は第3表、担当者は第4表に示す。

4 発掘調査および報告書作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の高橋 護、狩野 久の両先生に専門委員を委嘱し、有益な御指導・御助言を賜った。記して深く感謝の意を表する次第である。

5 本報告書の作成は、平成14年度に川入遺跡整理事務所において、センター職員岡田 博、井上 弘、三宅健夫、関 幸代が担当して行った。

6 本報告書に係る遺物や遺跡の土壌等については鑑定・同定あるいは、分析を次の諸氏ならびに機関に依頼し、有益な御教示を得た。その一部については報文に掲載した。記して厚くお礼申し上げる次第である。（順不同）

緑釉陶器の産地同定	高橋照彦（大阪大学大学院文学研究科）
緑釉陶器の釉薬、赤色顔料等分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
鉄滓の分析・同定	大澤正巳（九州テクノリサーチ）
人骨の鑑定	大塚愛二（岡山大学大学院医歯学総合研究科）
炭化種子の識別	松谷暁子（東京大学総合研究博物館人類先史部門）
石器・石製品の石材同定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学国際教養学部）
動物遺存体の分析	富岡直人（岡山理科大学理学部）
花粉・プラントオパール・珪藻分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
木製品の樹種、種子の同定	パリノ・サーヴェイ株式会社

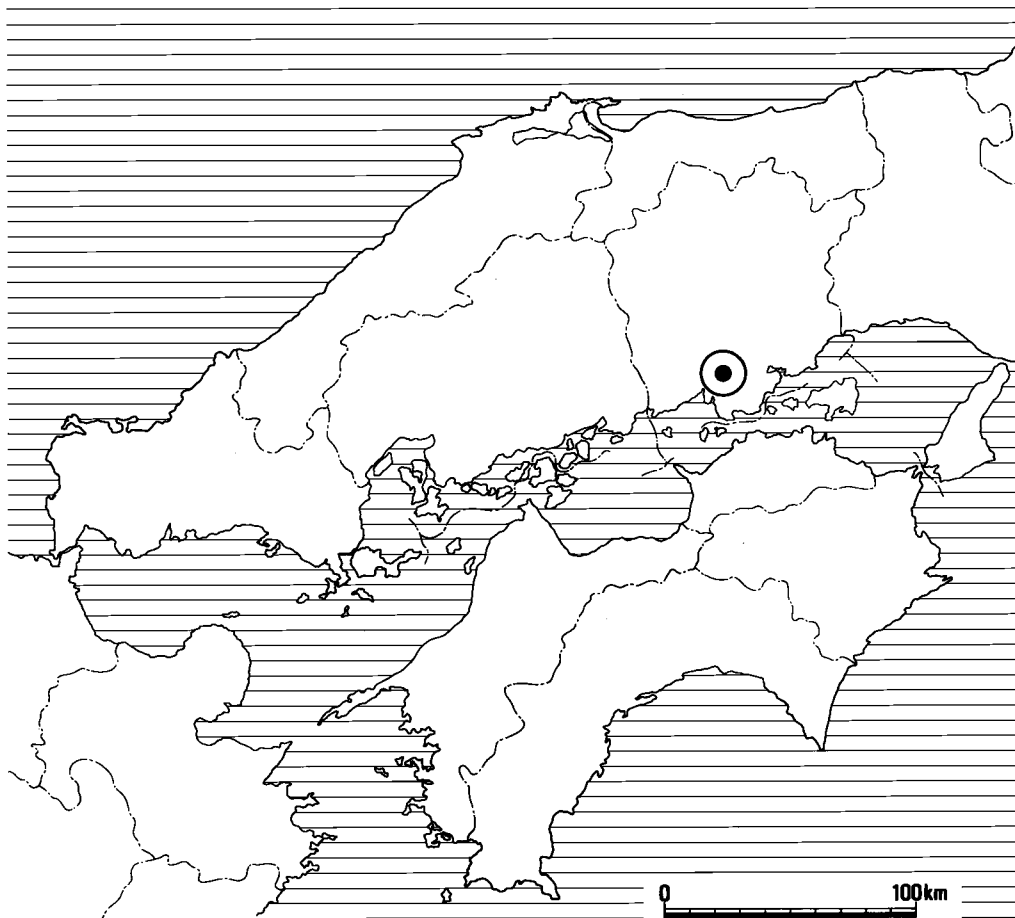
7 本書の執筆は、基本的に発掘調査担当者が分担し、文責は文末に明記した。なお、全体の編集は岡田・井上が行った。

8 発掘調査中の記録写真のすべてを、調査担当者が撮影したが、航空写真については、セスナ機お

よびラジコンヘリコプターによるものを使用した。

遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を頂いた。

- 9 出土遺物ならびに図面・写真等の記録は、すべて岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。



遺跡の位置

凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は、海拔高である。
- 2 遺跡の調査に用いたグリッドは、旧日本測地系に準拠しており平面直角座標V系による。
- 3 報告書の作成にあたり、各遺跡の位置表示を統一化するために座標のX=、Y=を基準に100mの方眼を組み、X軸に北からアルファベット大文字A・B・Cと、Y軸に西からアルファベット小文字a・b・cと割り振り、さらにその間を基本的に20mで割った数値を付すことにより示している。(付参照)
- 4 図面に用いた方位は、特に断りがない限り真北で表示している。掲載遺跡付近の磁北は西偏7°を測る。
- 5 本報告書掲載の遺構および遺物の縮尺は、次のように統一している。例外については、挿図に縮尺率を図示もしくは明記している。

遺構

竪穴住居：1/60 掘立柱建物：1/60 墓・土壇等：1/30 井戸：1/30

遺物

土器：1/4 土製品：1/2・1/3 石製品：1/2・1/3 金属製品：1/2・1/3
玉・耳環：1/1・1/2 木製品：1/4・1/6

- 6 本報告書の挿図番号・表番号は、遺構番号、遺物番号とともに、遺跡ごとの通し番号であるが、写真図版については、遺構・遺物とも遺跡ごとに巻末にまとめて収載した。
- 7 本書の遺構配置図に示した遺構名は、次のように省略している。
竪穴住居：住 掘立柱建物：建 井戸：井 土壇：土 土器溜まり：溜
- 8 遺物番号は、土器以外のものについてはその素材を示すため番号の前に次の略号を付した。
石製品：S 土製品：C 金属製品：M 玉類：B 木製品：W
- 9 遺構図のうち、被熱・加熱範囲や炭の分布範囲については、次のスクリーントーンで表現している。



- 10 土層断面図・土器観察表などに使用した土色は、各調査員の記述に従っており、特に統一していない。記号化して表記しているものは、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）によっている。
- 11 本書第2図は、岡山市および倉敷市発行の都市計画図（原図：1/2,500）を複製、加筆、縮尺したものである。
- 12 本書に用いた時代、時期区分は明確には統一していない。一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。弥生時代から古墳時代前期にかけての時期区分は、第1表の編年対比表を参考に記述する場合もある。古墳時代後期は須恵器出現期である5世紀中頃前後から

7世紀前半、飛鳥I期までに比定している。古代の時期区分については、次による。

古代I期……………7世紀中葉前後から7世紀末

古代II期……………8世紀代

古代III期……………9世紀代

古代IV期……………10～11世紀代

第1表 編年対比表

		津寺(註1)	川入・上東(註2)	百間川(註3)	雄町(註4)	おもな遺跡と型式	高橋編年(註5)	
弥生時代	前期	弥・前・I		百・前・I		津島	I期 { a b c	
		弥・前・II		百・前・II	雄町1	門田	II期 { a b c	
		弥・前・III		百・前・III	雄町2			
	中期	弥・中・I		百・中・I	高田 雄町3	南方	III期 { a b	
		弥・中・II		百・中・II	船山5 菰池 雄町4			菰池
		弥・中・III		鬼川市0	百・中・III	前山東 雄町5	前山II	
	後期	弥・後・I	鬼川市I		百・後・I	雄町7 雄町8		上東
		弥・後・II	鬼川市II	百・後・II	雄町9 雄町10	VIII期 { a b c d		
		弥・後・III	鬼川市III	百・後・III	+		グランド上層	IX期 { a b c
		弥・後・IV	才ノ町I 才ノ町II	百・後・IV	雄町11 雄町12	酒津		
	古墳時代	前期	古・前・I	下田所	百・古・I	雄町13	王泊六層	X期 { a b c d e
			古・前・II	亀川上層 +	百・古・II	雄町14		
古・前・III			川入・大溝上層	百・古・III	雄町15	XI期 { a b		

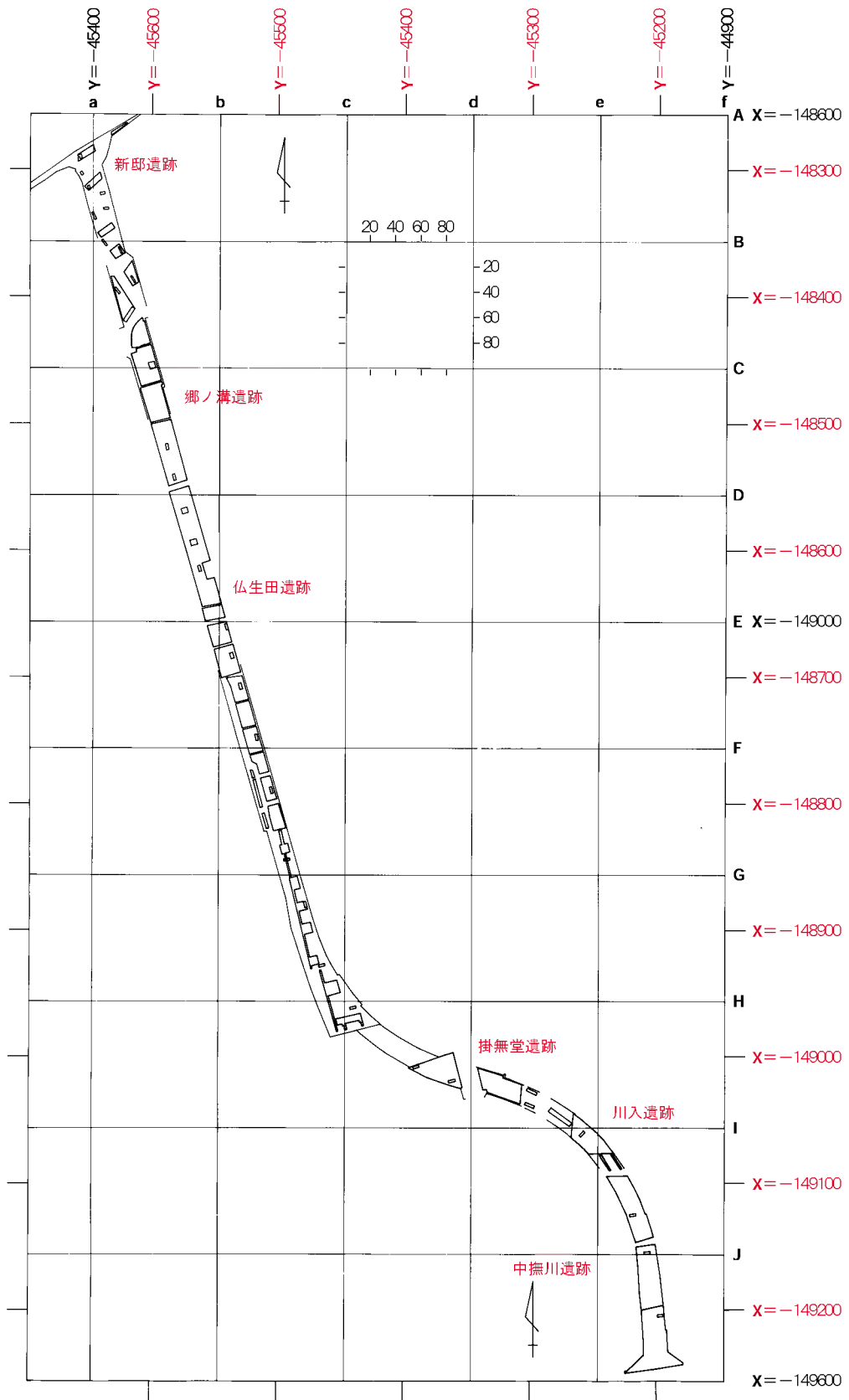
註1 正岡睦夫「津寺遺跡2 時期区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会 1995年。

註2 柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」〔川入・上東〕
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会 1977年。

註3 江見正己「百間川原尾島1～時期区分」〔百間川原尾島遺跡1〕『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』
岡山県教育委員会 1980年。

註4 正岡睦夫「雄町遺跡～時期区分」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』岡山県教育委員会 1972年。

註5 高橋 護「入門講座～弥生土器」(山陽) 考古学ジャーナル175 1980年。



付図 発掘調査区域図 (1/5,000)

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

(付 弥生土器編年対照表)

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 発掘調査・報告書作成の経緯	6
第1節 発掘調査の契機と経過	6
第2節 調査および報告書作成の体制	7
第3節 発掘調査の概要(付 日誌抄)	9
第4節 報告書作成の経過と概要	13
第3章 新邸遺跡	15
第1節 遺跡の概要	15
第2節 1・2区(G1~4、試掘坑1~9)の調査	15
1 1区の調査概要	15
2 2区の調査概要	20
第3節 3区(G5、試掘坑10)の調査	23
1 調査概要	23
2 出土遺物	25
第4節 4区(G6、試掘坑11・12)の調査	28
1 調査概要	28
2 出土遺物	30
第5節 小結	31
遺物一覧(観察)表	32
第4章 郷ノ溝遺跡	35
第1節 遺跡の概要	35
第2節 弥生時代の遺構・遺物	36
1 溝	36
2 遺構に伴わない遺物	42
第3節 古墳時代の遺構・遺物	43
1 竪穴住居	43
2 井戸	47
3 溝	47
4 遺構に伴わない遺物	52

第4節 古代・中世以降の遺構・遺物	54
1 たわみ	54
2 溝	54
3 柱列	63
4 水田	63
5 遺構に伴わない遺物	65
第5節 小結	68
遺物一覧（観察）表	69
第5章 仏生田遺跡	69
第1節 遺跡の概要	69
第2節 1区の調査	70
1 弥生時代の遺構・遺物	70
(1) 溝	70
(2) 遺構に伴わない遺物	77
2 古墳時代の遺構・遺物	80
(1) 竪穴遺構	80
(2) 溝	80
(3) 遺構に伴わない遺物	81
3 古代・中世以降の遺構・遺物	82
(1) 井戸	82
(2) 土壌	82
(3) 溝	83
(4) 水田	85
(5) 遺構に伴わない遺物	86
第3節 2区の調査	90
1 検出遺構と出土遺物の概要	90
(1) 溝	92
(2) 土壌	93
(3) たわみ	93
2 遺構に伴わない遺物	93
第4節 3区の調査	95
1 調査の概要	95
第5節 5区の調査	98
1 調査区の概要	98
(1) 溝	98
(2) 古代水田跡	99
(3) 土壌	99
(4) 中世水田跡と耕作痕跡	102

2 出土遺物の概要	102
第6節 小結	103
第6章 掛無堂遺跡	107
第1節 遺跡の概要	107
第2節 調査の概要	109
1 掘立柱建物	109
2 護岸遺構	110
3 出土遺物の概要	115
第3節 小結	116
遺物一覧（観察）表	117
第7章 川入遺跡	119
第1節 遺跡の概要	119
第2節 川入遺跡大道西調査区1・2区の調査	121
1 トレンチ調査	121
2 遺構の概要	121
3 遺構に伴わない出土遺物	122
第3節 川入遺跡大道西調査区3・4区の調査	123
1 調査区の概要	123
2 出土遺物の概要	125
第4節 小結	125
遺物一覧（観察）表	126
第8章 中撫川遺跡	127
第1節 遺跡の概要	127
第2節 弥生時代前期～中期の遺構・遺物	135
1 概要	135
2 溝	135
3 遺構に伴わない遺物	144
第3節 弥生時代後期の遺構・遺物	145
1 概要	145
2 竪穴住居	147
3 井戸	148
4 土壇	151
5 溝	154
6 土器溜まり	169
7 遺構に伴わない遺物	174
第4節 古墳時代前期の遺構・遺物	175
1 概要	175
2 竪穴住居	177

3	井戸	178
4	溝	195
5	祭祀遺構	210
6	たわみ	215
第5節	古墳時代後期の遺構・遺物	220
1	概要	220
2	土壌	221
3	溝	224
4	遺構に伴わない遺物	226
第6節	古代の遺構・遺物	227
1	概要	227
2	掘立柱建物	231
3	柱列	245
4	土壌	245
5	焼成土壌	246
6	溝	247
7	たわみ	252
8	集石遺構	264
9	遺構に伴わない遺物	266
第7節	中世の遺構・遺物	270
1	概要	270
2	掘立柱建物	272
3	柱列	277
4	竪穴遺構	282
5	井戸	284
6	土壌	284
7	墓	292
8	溝	293
9	河道	299
10	たわみ（水田）	300
11	遺構に伴わない遺物	300
第8節	小結	303
	遺物一覧（観察）表	304
第9章	まとめ	329
第1節	発掘調査の成果	329
第2節	中撫川遺跡の弥生～古墳時代溝群	336
第3節	銅印の鋳型について	340

付 載 自然科学分野における報告

付載 1	郷ノ溝遺跡・新邸遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査 (大澤正己)……………	347
付載 2	中撫川遺跡ほか出土緑釉陶器の胎土分析 (白石 純)……………	355
付載 3	中撫川遺跡出土炭化種子の識別 (松谷暁子)……………	361
付載 4	中撫川遺跡 (法万寺調査区) 墓出土の人骨について (大塚愛二)……………	371
付載 5	新邸遺跡・中撫川遺跡出土動物遺存体の分析 (富岡直人)……………	375

報告書抄録

写真図版

挿 図 目 次

凡例

付図 発掘調査区域図 (1/5,000)

第 1 章 遺跡の位置と環境

第 1 図 遺跡の位置と主要遺跡分布図(1/25,000)…………… 2

第 3 章 新邸遺跡

第 1 図 1 トレンチ土層断面図 (1/60) …………… 15

第 2 図 新邸遺跡発掘調査区域図 (数字のみはトレンチ、
G は拡張区: 1/800) …………… 16

第 3 図 G 2 北壁土層断面図 (1/60) …………… 17

第 4 図 1 区出土遺物 1 (縄文土器: 1/4) …………… 17

第 5 図 1 区出土遺物 2 (弥生土器ほか: 1/4・1/
2・1/3) …………… 18

第 6 図 1 区出土遺物 3 (土師器・須恵器: 1/4) …… 19

第 7 図 1 区出土遺物 4 (1/2) …………… 19

第 8 図 G 3 北壁土層断面図 (1/60) …………… 20

第 9 図 G 4 北壁土層断面図 (1/60) …………… 21

第 10 図 2 区出土遺物 1 (弥生時代: 1/3・1/2) …… 22

第 11 図 2 区出土遺物 2 (古代～中世土師器・須恵器:
1/4) …………… 22

第 12 図 2 区出土遺物 3 (中世遺物: 1/4・1/3・1
/1) …………… 23

第 4 章 郷ノ溝遺跡

第 1 図 郷ノ溝遺跡発掘調査区域図 (1/900) …………… 35

第 2 図 郷ノ溝遺跡 2 区弥生時代遺構図(1/300) …… 36

第 3 図 郷ノ溝遺跡 2 区微高地土層断面図(1/60) …… 36

第 4 図 郷ノ溝遺跡 2 区出土弥生土器 (1/4) …………… 37

第 5 図 郷ノ溝遺跡 2・3 区境界東西土層断面図 (1

第 2 図 遺跡周辺の字名位置図(1/10,000) …………… 3

第 13 図 3 区 G 5 北西壁土層断面図 (1/60) …………… 24

第 14 図 3 区出土遺物 1 (弥生土器・石器: 1/4・1/
3・1/2) …………… 24

第 15 図 3 区出土遺物 2 (須恵器・土師器: 1/4) …… 25

第 16 図 3 区出土遺物 3 (須恵器・土師器: 1/4) …… 26

第 17 図 3 区出土遺物 4 (製塩土器・木製品: 1/4・
1/3) …………… 27

第 18 図 3 区出土遺物 5 (土師器・備前焼他: 1/4)
…………… 27

第 19 図 4 区発掘区域図、獣骨出土状態 (1/300・1/30)
…………… 28

第 20 図 4 区土層断面図 (1/60) …………… 29

第 21 図 4 区出土遺物 1 (弥生土器: 1/4) …………… 29

第 22 図 4 区出土遺物 2 (中世遺物: 1/4) …………… 30

第 23 図 4 区出土遺物 3 (銭貨・土錘・下駄: 1/2・
1/3・1/4) …………… 31

/60) …………… 37

第 6 図 郷ノ溝遺跡 3 区弥生時代遺構図(1/300) …… 38

第 7 図 郷ノ溝遺跡 2 区東壁土層断面図(1/80) …… 38

第 8 図 郷ノ溝遺跡 3 区溝 2 土層断面図・出土遺物
(1/30・1/4・1/2) …………… 39

第9図	郷ノ溝遺跡3区南端土層断面図(1/60) … 40	第32図	郷ノ溝遺跡2区溝11・12土層断面図・溝11 出土遺物1(1/60・1/4・1/3) …… 56
第10図	郷ノ溝遺跡3区溝3土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4) …… 41	第33図	郷ノ溝遺跡2区溝11出土遺物2 (平瓦:1/4) …… 57
第11図	郷ノ溝遺跡3区溝4土層断面図・出土遺物 (1/30・1/2・1/4) …… 41	第34図	郷ノ溝遺跡2区溝13土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4) …… 57
第12図	郷ノ溝遺跡2区微高地縁辺たわみ出土弥生土器 (1/4) …… 42	第35図	郷ノ溝遺跡2区溝13・14土層断面図(1/60) … 58
第13図	郷ノ溝遺跡2・3区包含層出土遺物(弥生土器・ 紡錘車・石製品・鉄鏃:1/4・1/3・1/2) … 43	第36図	郷ノ溝遺跡2区溝15土層断面図(1/60) …… 58
第14図	郷ノ溝遺跡3区古墳時代前期遺構図 (1/300) …… 44	第37図	郷ノ溝遺跡2区溝16土層断面図(1/30) …… 58
第15図	郷ノ溝遺跡3区古墳時代後期遺構図 (1/300) …… 44	第38図	郷ノ溝遺跡2区溝17土層断面図(1/30) …… 58
第16図	郷ノ溝遺跡3区竪穴住居1(1/60) …… 45	第39図	郷ノ溝遺跡2区溝18土層断面図(1/30) …… 58
第17図	郷ノ溝遺跡3区竪穴住居2(1/60) …… 46	第40図	郷ノ溝遺跡2区C00付近東西土層断面図 (1/80) …… 59
第18図	郷ノ溝遺跡3区竪穴住居3(1/60) …… 46	第41図	郷ノ溝遺跡2区東壁土層断面図(1/80) …… 59
第19図	郷ノ溝遺跡3区井戸1(1/30) …… 47	第42図	郷ノ溝遺跡2区溝19土層断面図(1/60) …… 59
第20図	郷ノ溝遺跡3区C80付近東西土層断面図 (1/60) …… 48	第43図	郷ノ溝遺跡2区溝20土層断面図(1/60) …… 60
第21図	郷ノ溝遺跡3区溝5土層断面図・出土遺物(1 /60・1/4) …… 48	第44図	郷ノ溝遺跡2区溝21土層断面図(1/60) …… 60
第22図	郷ノ溝遺跡3区溝6土層断面図・出土遺物(1 /60・1/4) …… 49	第45図	郷ノ溝遺跡2区溝22土層断面図(1/60) …… 60
第23図	郷ノ溝遺跡3区溝7土層断面図・出土遺物(1 /60・1/4) …… 50	第46図	郷ノ溝遺跡2区溝21・23ほか土層断面図 (1/60) …… 60
第24図	郷ノ溝遺跡3区溝8土層断面図・出土遺物(1 /30) …… 51	第47図	郷ノ溝遺跡2区溝24・25土層断面図(1/60) … 60
第25図	郷ノ溝遺跡3区溝9土層断面図・出土遺物(1 /60・1/4・1/1) …… 51	第48図	郷ノ溝遺跡3区古代～中世遺構図(1/300) … 61
第26図	郷ノ溝遺跡3区溝10土層断面図・出土遺物(1 /30・1/4・1/3) …… 52	第49図	郷ノ溝遺跡3区溝26(1/60・1/30) …… 62
第27図	郷ノ溝遺跡2・3区出土遺物(1/4・1/3) … 53	第50図	郷ノ溝遺跡3区溝27断面図(1/60) …… 62
第28図	郷ノ溝遺跡2区たわみ1土層断面図・出土遺物 (1/30・1/4) …… 54	第51図	郷ノ溝遺跡3区溝28断面図(1/60) …… 62
第29図	郷ノ溝遺跡1・2区古代～中世遺構図 (1/400) …… 55	第52図	郷ノ溝遺跡3区溝29・30断面図(1/60) … 62
第30図	郷ノ溝遺跡1・2区中世遺構図(1/400) … 55	第53図	郷ノ溝遺跡2区柱列1・出土遺物 (1/60・1/4) …… 63
第31図	郷ノ溝遺跡1区東壁南北土層断面図(1/60) … 56	第54図	郷ノ溝遺跡3区柱穴土層断面図・出土遺物(1 /60・1/4) …… 63
		第55図	郷ノ溝遺跡2区水田畦畔断面図(1/30) …… 63
		第56図	郷ノ溝遺跡2区南半水田畦畔・出土遺物1 (1/300・1/4) …… 64
		第57図	郷ノ溝遺跡2区水田出土遺物2(1/4・1/3・ 1/2) …… 65
		第58図	郷ノ溝遺跡1区中世低位部断面図(1/60) … 65
		第59図	郷ノ溝遺跡1区中世低位部出土遺物 (銭貨:1/2) …… 65

第60図	郷ノ溝遺跡2・3区古代～中世出土遺物1 (1/4)……………	66	(1/3・1/2)……………	67
第61図	郷ノ溝遺跡2・3区古代～中世出土遺物2		(1/4・1/1)……………	67
第5章	仏生田遺跡			
第1図	仏生田遺跡発掘調査区域図(1/8000) ……	69		
第2図	1区弥生時代遺構配置図(1/400) ……	70		
第3図	溝1土層断面図(1/60) ……	70		
第4図	溝2土層断面図・出土遺物(1/60・1/4) ……	70		
第5図	溝3土層断面図(1/60) ……	70		
第6図	溝4土層断面図・出土遺物(1/60・1/4) ……	70		
第7図	溝5土層断面図(1/60) ……	72		
第8図	溝5出土遺物(1/4) ……	73		
第9図	D20ライン南、東西土層断面図 (溝5・6関連;1/60) ……	74		
第10図	溝6・7土層断面図(1/60) ……	74		
第11図	溝6出土遺物1(1/4) ……	75		
第12図	溝6土層断面図(1/30) ……	76		
第13図	溝6出土遺物2(1/4・1/3・1/2) ……	76		
第14図	溝7土層断面図(1/60) ……	77		
第15図	溝8土層断面図(1/60) ……	77		
第16図	遺構に伴わない出土遺物(1/4・1/2) ……	77		
第17図	1区南半調査区(1/200) ……	78		
第18図	1区南半調査区各所土層断面図(1/60) ……	79		
第19図	竪穴遺構1(1/60) ……	80		
第20図	溝9・10土層断面図(1/60) ……	80		
第21図	1区古墳時代遺構配置図(1/400) ……	81		
第22図	溝11・12土層断面図(1/60・1/30) ……	81		
第23図	遺構に伴わない出土遺物(1/4) ……	81		
第24図	1区古代・中世遺構配置図(1/600) ……	82		
第25図	井戸1(1/30) ……	82		
第26図	土壌1・土壌2(1/30) ……	83		
第27図	溝13土層断面図(1/30) ……	83		
第28図	溝14土層断面図(1/60) ……	83		
第29図	溝14出土遺物1(1/4) ……	83		
第30図	溝14周辺関連土層断面図(1/60) ……	84		
第31図	溝14出土遺物2(1/4・1/3) ……	84		
第32図	溝15・16土層断面図(1/60) ……	84		
第33図	溝17土層断面図(1/60) ……	85		
第34図	水田層出土遺物(1/4・1/3) ……	85		
第35図	遺構に伴わない出土遺物(1/4・1/3) ……	85		
第36図	仏生田遺跡2区全体図(1/600) ……	86		
第37図	2-E区トレンチ土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)……………	86		
第38図	仏生田遺跡2-A～E区土層柱状図(1/60) ……	87		
第39図	仏生田遺跡2-A区土層断面図(1/60) ……	87		
第40図	仏生田遺跡2-C区全体図(1/300) ……	87		
第41図	2-C区溝18土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)……………	87		
第42図	2-C区設定トレンチ土層断面図(1/60) ……	88		
第43図	仏生田遺跡2-E・F区遺構全体図 (溝19・たわみ:1/200)……………	88		
第44図	仏生田遺跡2-E区遺構全体図(溝20:1/200) ……………	88		
第45図	2-E区土壌3・出土遺物(1/30) ……	89		
第46図	2-E区土壌4(1/30) ……	89		
第47図	仏生田遺跡2-F区土層断面図(1/60) ……	90		
第48図	2区包含層出土遺物(1/3・1/1・1/4) ……	90		
第49図	3区調査区設定図・土層柱状位置図(1/1500) ……………	95		
第50図	土層柱状図 ……	96		
第51図	3区北調査区土層断面図・出土遺物 (1/80・1/4)……………	96		
第52図	3区トレンチ土層断面図(1/60) ……	97		
第53図	3区出土遺物(1/4) ……	97		
第54図	5区遺構全体図(1/400) ……	98		
第55図	5区土層断面図(1/80) ……	99		
第56図	溝21断面図(1/30) ……	100		
第57図	溝22断面図(1/30) ……	100		
第58図	水田・畦畔断面図(1/300・1/30) ……	100		
第59図	土壌5、6・出土遺物(1/30・1/4・1/3) ……	101		
第60図	土壌7(1/30) ……	101		
第61図	土壌8(1/30) ……	101		

第62図 土壌9 (1/30)	101	第63図 5区出土遺物 (1/4)	103
第6章 掛無堂遺跡			
第1図 遺構全体図 (1/400)	107	第6図 護岸 (1/40)	111
第2図 トレンチ土層断面図・出土遺物 (1/100・1/4・1/3)	108	第7図 護岸出土遺物1 (1/4・1/3)	112
第3図 調査区土層断面図 (1/80)	108	第8図 護岸出土遺物2 (木器: 1/6)	113
第4図 掘立柱建物1 (1/60)	109	第9図 護岸出土遺物3 (木器: 1/4・1/6)	114
第5図 掘立柱建物2 (1/60)	110	第10図 包含層出土遺物 (1/4)	115
第7章 川入遺跡			
第1図 川入遺跡大道西調査区1・2区全体図 (1/400)	119	第6図 川入遺跡大道西調査区3・4区全体図 (1/300)	123
第2図 大道西調査区1区トレンチ土層断面図・出土遺物 (1/80・1/4)	120	第7図 大道西調査区3区トレンチ2土層断面図 (1/60)	124
第3図 大道西調査区2区土層断面図 (1/80)	120	第8図 大道西調査区4区西壁土層断面図 (1/60)	124
第4図 土壌1・出土遺物 (1/30・1/4)	121	第9図 河道出土遺物 (1/4)	124
第5図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4)	122		
第8章 中撫川遺跡			
第1図 1区中央土層断面図 (1/60)	127	第19図 溝2出土遺物2 (1/4)	140
第2図 1区出土縄文土器 (1/4)	127	第20図 溝3断面図 (1/60)	141
第3図 弥生時代遺構全体図 (1/800)	128	第21図 3区弥生時代中期遺構全体図 (1/400)	141
第4図 古墳時代遺構全体図 (1/800)	129	第22図 溝3出土遺物 (1/4・1/3)	142
第5図 古代遺構全体図 (1/800)	130	第23図 溝4断面図 (1/60)	142
第6図 中世遺構全体図 (1/800)	131	第24図 溝4出土遺物 (1/4)	143
第7図 1区南壁土層断面図 (1/60)	132	第25図 遺構に伴わない出土遺物1 (弥生時代中期: 1/4)	143
第8図 2区溝群土層断面図 (1/60)	133	第26図 遺構に伴わない出土遺物2 (石器: 1/2)	144
第9図 3区南壁土層断面図 (1/60)	134	第27図 1・2区弥生時代後期遺構全体図 (1/400)	145
第10図 溝1出土遺物 (1/4)	135	第28図 3区弥生時代後期遺構全体図 (1/400)	146
第11図 1・2区弥生時代前期～中期遺構全体図 (1/400)	136	第29図 竪穴住居1・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)	147
第12図 1区溝1断面図 (1/60)	136	第30図 井戸1・出土遺物 (1/30・1/4)	148
第13図 2区溝1断面図 (1/60)	136	第31図 井戸2・出土遺物 (1/30・1/4)	148
第14図 1～3区 遺構に伴わない出土遺物1 (弥生時代前期: 1/4)	137	第32図 井戸3 (1/30)	149
第15図 1～3区 遺構に伴わない出土遺物1 (弥生時代前期: 1/4・1/3)	138	第33図 井戸4 (1/30)	149
第16図 1区溝2断面図 (1/60)	139	第34図 井戸4出土遺物1 (1/4)	150
第17図 2区溝2断面図 (1/60)	139	第35図 井戸4出土遺物2 (1/4)	151
第18図 溝2出土遺物1 (1/4)	139	第36図 土壌1・出土遺物 (1/30・1/4)	152

第37図	土塙2・出土遺物(1/30・1/4) ……	153	第74図	井戸10(1/30) ……	182
第38図	土塙3(1/30) ……	153	第75図	井戸11・出土遺物(1/30・1/4) ……	182
第39図	土塙4・出土遺物(1/30・1/4) ……	153	第76図	井戸12・出土遺物1(1/30・1/3) ……	183
第40図	溝5断面図1(1/60) ……	154	第77図	井戸12出土遺物2(1/4) ……	184
第41図	溝5出土遺物1(1/4) ……	155	第78図	井戸12出土遺物3(1/4) ……	185
第42図	溝5出土遺物2(1/4) ……	156	第79図	井戸13・出土遺物1(1/30・1/3) ……	186
第43図	溝5断面図2(1/60) ……	156	第80図	井戸13出土遺物2(1/4) ……	187
第44図	溝5出土遺物3(1/4・1/3) ……	157	第81図	井戸13出土遺物3(1/4) ……	188
第45図	溝5出土遺物4(1/4) ……	159	第82図	井戸13出土遺物4(1/4) ……	189
第46図	溝5出土遺物5(1/4) ……	160	第83図	井戸13出土遺物5(1/4) ……	190
第47図	溝5出土遺物6(1/4) ……	161	第84図	井戸13出土遺物6(木製品1)(1/4) ……	191
第48図	溝5出土遺物7(1/4) ……	162	第85図	井戸13出土遺物7(木製品2)(1/4) ……	192
第49図	溝5出土遺物8(1/4) ……	163	第86図	井戸14・出土遺物(1/30・1/4) ……	193
第50図	溝5出土遺物9(1/4・1/3) ……	164	第87図	井戸15(1/30) ……	194
第51図	溝6断面図(1/60) ……	165	第88図	井戸15出土遺物(1/4) ……	195
第52図	溝6出土遺物1(1/4) ……	165	第89図	溝10出土遺物(1/4) ……	196
第53図	溝6出土遺物2(1/4) ……	166	第90図	溝11断面図1(1/60) ……	197
第54図	溝6出土遺物3(1/4) ……	167	第91図	溝11断面図2(1/60) ……	197
第55図	溝7断面図(1/60) ……	167	第92図	溝11出土遺物1(1/4) ……	197
第56図	溝7出土遺物(1/4) ……	168	第93図	溝11出土遺物2(1/4) ……	198
第57図	溝8断面図(1/60) ……	168	第94図	溝11出土遺物3(1/4) ……	199
第58図	溝8出土遺物(1/4) ……	169	第95図	溝12断面図1(1/60) ……	200
第59図	溝9断面図・出土遺物(1/60・1/4) ……	169	第96図	溝12断面図2(1/60) ……	200
第60図	土器溜まり1出土遺物(1/4) ……	170	第97図	溝12出土遺物1(1/4) ……	201
第61図	遺構に伴わない出土遺物1(1/4) ……	171	第98図	溝12出土遺物2(1/4) ……	202
第62図	遺構に伴わない出土遺物2(1/4) ……	172	第99図	溝12出土遺物3(1/4) ……	203
第63図	遺構に伴わない出土遺物3(1/4) ……	173	第100図	溝12出土遺物4(1/4) ……	205
第64図	包含層出土石器(1/3) ……	174	第101図	溝12出土遺物5(1/4) ……	206
第65図	1・2区古墳時代前期遺構全体図(1/400) ……	175	第102図	溝12出土遺物6(1/4) ……	207
第66図	3区古墳時代後期遺構全体図(1/400) ……	176	第103図	溝12出土遺物7(1/4・1/3) ……	208
第67図	竪穴住居2・出土遺物(1/60・1/4・1/3) ……	177	第104図	溝13断面図・出土遺物(1/30・1/4) ……	209
第68図	井戸5・出土遺物(1/30・1/4) ……	178	第105図	溝14断面図・出土遺物(1/30・1/4) ……	209
第69図	井戸6(1/30) ……	178	第106図	溝15・16断面図(1/60) ……	209
第70図	井戸6出土遺物(1/4) ……	179	第107図	土器溜まり2(1/10) ……	210
第71図	井戸7・出土遺物(1/30・1/4) ……	180	第108図	土器溜まり2出土遺物(1/4) ……	211
第72図	井戸8・出土遺物(1/30・1/4) ……	180	第109図	土器溜まり3(1/40・1/30) ……	212
第73図	井戸9・出土遺物(1/30・1/4) ……	181	第110図	土器溜まり3出土遺物1(1/4) ……	213
			第111図	土器溜まり3出土遺物2(1/4) ……	214

第112図	土器溜まり3出土遺物3(1/4) ……	215	第143図	掘立柱建物2(1/60) ……	233
第113図	土器溜まり3出土遺物4(1/4・1/2・1/1) ……	216	第144図	掘立柱建物3(1/60) ……	234
第114図	たわみ1断面図(1/60) ……	216	第145図	掘立柱建物4(1/60) ……	235
第115図	たわみ1出土遺物1(1/4) ……	217	第146図	掘立柱建物5(1/60) ……	235
第116図	たわみ1出土遺物2(1/4) ……	218	第147図	1区掘立柱建物周辺出土遺物1(1/4) ……	236
第117図	たわみ1出土遺物3(1/4) ……	219	第148図	1区掘立柱建物周辺出土遺物2(1/4) ……	237
第118図	たわみ1出土遺物4(1/1・1/3) ……	219	第149図	掘立柱建物6(1/60) ……	238
第119図	1・2区古墳時代後期遺構全体図(1/400) ……	220	第150図	掘立柱建物7・出土遺物(1/40) ……	238
第120図	3区古墳時代後期遺構全体図(1/400) ……	221	第151図	掘立柱建物7出土遺物(1/60) ……	239
第121図	土壌5(1/30) ……	221	第152図	掘立柱建物8・出土遺物(1/60・1/4) ……	240
第122図	土壌6・出土遺物(1/30・1/4) ……	222	第153図	掘立柱建物9(1/60) ……	241
第123図	土壌7(1/30) ……	222	第154図	掘立柱建物10(1/60) ……	242
第124図	土壌7出土遺物(1/4) ……	222	第155図	掘立柱建物11・出土遺物(1/60・1/4) ……	243
第125図	土壌8・出土遺物(1/30・1/4) ……	223	第156図	掘立柱建物12・出土遺物(1/60・1/4) ……	244
第126図	土壌9(1/30) ……	223	第157図	柱列1(1/60) ……	244
第127図	土壌10・出土遺物(1/30・1/4) ……	223	第158図	柱列2(1/60) ……	244
第128図	土壌11(1/30) ……	223	第159図	柱列3(1/60) ……	244
第129図	溝17断面図(1/30) ……	224	第160図	土壌12・出土遺物(1/30・1/4) ……	245
第130図	溝18断面図・出土遺物(1/30・1/4) ……	224	第161図	土壌13・出土遺物(1/30・1/4) ……	245
第131図	溝19断面図・出土遺物(1/60・1/4・1/3) ……………	224	第162図	土壌14・出土遺物(1/30・1/4) ……	246
第132図	溝20～22断面図(1/60・1/30) ……	225	第163図	焼成土壌・出土遺物(1/30・1/4) ……	246
第133図	溝23断面図(1/60) ……	225	第164図	溝24断面図・出土遺物(1/60・1/4) ……	247
第134図	3区遺構に伴わない出土遺物(須恵器・金環・ 砥石:1/4・1/1・1/3) ……	226	第165図	1区溝25断面図(1/30) ……	247
第135図	1区古代遺構全体図(古代I・II期)(1/400) ……………	227	第166図	2区溝25断面図(1/60) ……	248
第136図	2区古代遺構全体図(古代I・II期)(1/400) ……………	227	第167図	溝25出土遺物1(1/6・1/3) ……	248
第137図	2区古代遺構全体図(古代I・II期)(1/400) ……………	228	第168図	溝25出土遺物2(1区出土:1/4) ……	249
第138図	2区古代遺構全体図(古代III期)(1/400) ……………	229	第169図	溝25出土遺物3(2・3区出土:1/4) ……	250
第139図	3区古代遺構全体図(古代III期)(1/400) ……………	229	第170図	溝36断面図(1/30) ……	251
第140図	3区中央土層断面図(1/80) ……	230	第171図	溝37～40断面図(1/30) ……	251
第141図	1区古代遺構全体図(1/300) ……	231	第172図	溝41断面図(1/30) ……	251
第142図	掘立柱建物1(1/60) ……	232	第173図	たわみ3(1/200) ……	252
			第174図	たわみ3断面図(1/80) ……	252
			第175図	たわみ3出土遺物1(緑釉陶器:1/4) ……	253
			第176図	たわみ3出土遺物2(土師器・鋳型他:1/ 2・1/3・1/4) ……	254
			第177図	たわみ3出土遺物3(竈:1/6) ……	255
			第178図	たわみ4・主要土器の分布(1/200・1/6) ……………	256

第179図	たわみ4断面図(1/80) ……………	257	第211図	1区P3出土遺物(土師器:1/4) ……	280
第180図	たわみ4出土遺物1(緑釉陶器:1/4) …	258	第212図	1区P4出土遺物(銭貨:1/2) ……	280
第181図	たわみ4出土遺物2(灰釉陶器:1/4) …	259	第213図	1区P5出土遺物(銭貨・砥石:1/2・1/3) ……………	280
第182図	たわみ4出土遺物3(土師器:1/4) …	260	第214図	1区中世柱穴出土遺物(土師器:1/4) …	280
第183図	たわみ4出土遺物4(土師器:1/4) …	261	第215図	1区P6(1/30) ……………	280
第184図	たわみ4出土遺物5(土師器・須恵器:1/4) ……………	262	第216図	柱穴出土遺物(土師器・砥石:1/4・1/3) ……………	281
第185図	たわみ4出土遺物6(土師器:1/4) …	263	第217図	竪穴遺構1(1/60) ……………	282
第186図	たわみ5断面図・出土遺物(1/4) ……	264	第218図	竪穴遺構1出土遺物(土師器・銭貨ほか:1/ 4・1/2・1/3) ……………	283
第187図	集石1(1/50) ……………	265	第219図	井戸16・出土遺物(1/30・1/4) ……	284
第188図	集石1出土遺物(1/4) ……………	266	第220図	井戸17(1/40) ……………	285
第189図	1～3区包含層・柱穴出土遺物(須恵器・土 師器・円面硯:1/4) ……………	267	第221図	井戸17出土遺物(1/4) ……………	285
第190図	3区柱穴出土遺物(須恵器・土師器:1/4) …	268	第222図	土壇15～19(1/30) ……………	285
第191図	1～3区包含層ほか、遺構に伴わない緑釉陶器 (1/4) ……………	269	第223図	土壇20・出土遺物(1/30・1/4) ……	286
第192図	2区包含層・柱穴出土遺物(鉄器・砥石:1/ 3) ……………	269	第224図	土壇21(1/30) ……………	286
第193図	1区中世遺構全体図(1/400) ……………	270	第225図	土壇22・出土遺物(1/40・1/4・1/3) ……………	287
第194図	2区中世遺構全体図(1/400) ……………	270	第226図	土壇23(1/30) ……………	288
第195図	3区中世遺構全体図(1/400) ……………	271	第227図	土壇24(1/30) ……………	288
第196図	掘立柱建物13・出土遺物(1/60・1/4) ……………	272	第228図	土壇24出土遺物(1/4) ……………	288
第197図	掘立柱建物14(1/60) ……………	273	第229図	土壇25(1/30) ……………	288
第198図	掘立柱建物15(1/60) ……………	274	第230図	土壇26(1/30) ……………	289
第199図	掘立柱建物16(1/60) ……………	274	第231図	土壇27(1/30) ……………	289
第200図	掘立柱建物17(1/60) ……………	275	第232図	土壇28・出土遺物(1/30・1/4) ……	289
第201図	掘立柱建物18(1/60) ……………	275	第233図	土壇29・出土遺物(1/30・1/4) ……	289
第202図	掘立柱建物19(1/60) ……………	276	第234図	土壇30・出土遺物(1/30・1/4) ……	290
第203図	柱列4(1/60) ……………	277	第235図	土壇31(1/30) ……………	290
第204図	柱列5(1/60) ……………	277	第236図	土壇32・出土遺物(1/40・1/4) ……	291
第205図	柱列6(1/60) ……………	277	第237図	墓1・出土遺物(1/20・1/3) ……	292
第206図	柱列7(1/60) ……………	278	第238図	墓2(1/20) ……………	292
第207図	柱列8(1/60) ……………	278	第239図	溝42土層断面図・出土遺物(1/60・1/4) …	293
第208図	柱列9(1/60) ……………	278	第240図	溝43(1/100・1/30) ……………	294
第209図	1区中世遺構図(土壇・柱穴詳細図:1/300) ……………	279	第241図	溝43出土遺物1(備前焼壺:1/4) ……	295
第210図	1区P1・2、出土遺物(1/30・1/4) …	280	第242図	溝43出土遺物2(備前焼播鉢・甕:1/4) ……………	296
			第243図	溝43出土遺物3(土師器・亀山焼・石製品・	

鉄釘：1/4・1/3) ……………	297
第244図 溝44断面図・出土遺物(1/30・1/4) ……	298
第245図 溝45断面図(1/30) ……………	298
第246図 溝46断面図(1/30) ……………	298
第247図 溝47断面図(1/30) ……………	298
第248図 溝48断面図(1/30) ……………	298
第249図 1区河道断面図・出土遺物(1/60・1/4) ……………	299
第9章 まとめ	
第255図 中撫川遺跡出土円面硯(再掲図：1/3) ……	332
第256図 弥生時代中期の遺構と遺物(1/600・1/8) ……	336
第257図 弥生時代後期の遺構と遺物(1/600・1/8) ……	337

第250図 1～3区包含層出土遺物1(土師器・青磁： 1/4) ……………	300
第251図 1・2区包含層出土遺物1(土鍾：1/3) ……………	301
第252図 1～3区包含層出土遺物2(砥石：1/3) ……	301
第253図 1・2区包含層出土遺物2(銭貨：1/2) ……	301
第254図 2・3区たわみ4上位出土遺物(土鍾・鉄釘 ほか：1/3) ……………	302
第258図 古墳時代前期の遺構と遺物(1/600・1/8) ……	338
第259図 中撫川遺跡出土鑄型実測図(1/2) ……	340

表 目 次

第1表 編年対比表 ……………(凡例)	
第2表 遺跡名称対照表 ……………	10
第3表 通年発掘調査実施一覧表 ……………	10
第4表 発掘調査担当者一覧表 ……………	11

第5表 掛無堂遺跡 掘立柱建物一覧表 ……………	331
第6表 中撫川遺跡 掘立柱建物一覧表 ……………	331
第7表 銅塊蛍光X線定性分析結果 ……………	343
第8表 鑄型付着溶銅分析結果 ……………	343

図 版 目 次

巻頭カラー図版1	発掘調査地と周辺(航空写真： 南東上空から)
巻頭カラー図版2-1	中撫川遺跡1区溝5弥生土器出 土状態(北東から)
-2	中撫川遺跡3区井戸13土師器出 土状態(東から)
巻頭カラー図版3-1	掛無堂遺跡護岸検出状態(北か ら)
-2	中撫川遺跡3区たわみ4緑釉陶 器865・885出土状態(北から)
巻頭カラー図版4-1	中撫川遺跡1～3区出土手焙り 形土器
-2	中撫川遺跡3区溝12出土土師器
-3	中撫川遺跡3区土器溜まり3出 土土師器
巻頭カラー図版5	中撫川遺跡ほか出土玉類・金属

製品・緑釉陶器ほか	
巻頭カラー図版6	仏生田遺跡5区、中撫川遺跡2 区たわみ3出土緑釉陶器
巻頭カラー図版7	中撫川遺跡3区たわみ4出土緑 釉陶器(1)
巻頭カラー図版8	中撫川遺跡3区たわみ4出土緑 釉陶器(2)
図版1-1	発掘調査実施遺跡の位置(矢印：鬼城山から)
-2	新邸遺跡3区発掘前(南から)
-3	新邸貝塚の現状(西から)
図版2-1	新邸遺跡1区G2発掘調査状況(西から)
-2	新邸遺跡2区G3北壁土層断面(南から)
-3	新邸遺跡3区から1・2区を望む(南から)
図版3-1	新邸遺跡3区発掘調査風景(南から)
-2	新邸遺跡3区獣骨出土状態(北から)
-3	新邸遺跡3区獣骨(ウシ)顎骨出土状態

- (東から)
- 図版4-1 新邸遺跡3区完掘状況(北から)
- 2 新邸遺跡4区発掘作業風景(南東から)
- 3 新邸遺跡4区発掘作業風景(北から)
- 図版5-1 新邸遺跡4区獣骨(ウシ・ウマ)出土状態
(北から)
- 2 獣骨(ウシ・ウマ)出土状態(北から)
- 3 新邸遺跡4区河道内下駄出土状態(北から)
- 図版6 新邸遺跡出土遺物(縄文土器・土師器ほか)
- 図版7-1 郷ノ溝遺跡1区(北から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区溝2(北東から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区溝2下層弥生土器出土状態
(北から)
- 図版8-1 郷ノ溝遺跡3区溝3完掘状況(南から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区溝2・3土層断面(西から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区弥生～古墳時代溝群(南から)
- 図版9-1 郷ノ溝遺跡3区溝4完掘状況(南から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区溝4弥生土器出土状況(南西から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区溝4・8(北から)
- 図版10-1 郷ノ溝遺跡3区中央部東西土層断面(西から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区古墳時代遺構検出作業(北から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区弥生～古墳時代の溝群(南から)
- 図版11-1 郷ノ溝遺跡3区溝6発掘作業風景(北から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区溝6北端部土器出土状態
(北から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区溝6土器出土状態(南から)
- 図版12-1 郷ノ溝遺跡3区溝5土器溜まり(北から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区溝7土層断面(南から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区溝7(北から)
- 図版13-1 郷ノ溝遺跡3区古墳時代溝群(北から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区井戸1(北西から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区南半古墳時代の遺構群(北から)
- 図版14-1 郷ノ溝遺跡3区竪穴住居1(南東から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区竪穴住居2検出状況(南東から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区溝9周辺発掘調査風景(南東から)
- 図版15-1 郷ノ溝遺跡3区溝9完掘状況(南東から)
- 2 郷ノ溝遺跡1区東壁土層断面(南から)
- 3 郷ノ溝遺跡2区たわみ1・溝11(東から)
- 図版16-1 郷ノ溝遺跡2区溝11～13(東から)
- 2 郷ノ溝遺跡2区溝13・19・21(南から)
- 3 郷ノ溝遺跡2区溝11・12周辺たわみ(南西から)
- 図版17-1 郷ノ溝遺跡2区柱列1(東から)
- 2 郷ノ溝遺跡2区溝16(北から)
- 3 郷ノ溝遺跡2区水田畦畔(南から)
- 図版18-1 郷ノ溝遺跡3区溝26(東から)
- 2 郷ノ溝遺跡3区溝29・30(南から)
- 3 郷ノ溝遺跡3区低位部(北から)
- 図版19 郷ノ溝遺跡出土遺物(弥生土器・土師器・須恵器ほか)
- 図版20-1 仏生田遺跡1区発掘調査風景(東から)
- 2 仏生田遺跡1区溝6・7付近発掘作業風景
(北から)
- 3 仏生田遺跡1区溝4発掘作業風景(北から)
- 図版21-1 仏生田遺跡1区溝5発掘作業風景(北から)
- 2 仏生田遺跡1区溝5土器出土状態清掃作業
(北から)
- 3 仏生田遺跡1区溝5土器集中出土部分
(北から)
- 図版22-1 仏生田遺跡1区溝2・4・5(北東から)
- 2 仏生田遺跡1区溝2・4～7(北東から)
- 3 仏生田遺跡1区遺構完掘状況(北から)
- 図版23-1 仏生田遺跡1区溝5(北東から)
- 2 仏生田遺跡1区溝14(北東から)
- 3 仏生田遺跡1区井戸1(西から)
- 図版24-1 仏生田遺跡1区E20付近発掘作業風景(北から)
- 2 仏生田遺跡1区溝8(北から)

— 3 仏生田遺跡 2-D 区北壁土層断面(東から)
図版25— 1 仏生田遺跡 2 区全景(南から)
— 2 仏生田遺跡 2 区発掘調査風景(北から)
— 3 仏生田遺跡 2-D 区北壁土層断面(南東から)
図版26— 1 仏生田遺跡 2-E 区遺構検出状況(北から)
— 2 仏生田遺跡 2-E 区土壌 3(南から)
— 3 仏生田遺跡 2-F 区土層断面(北から)
図版27— 1 仏生田遺跡 3 区北区(南から)
— 2 仏生田遺跡 3 区トレンチ(南から)
— 3 仏生田遺跡 3 区 T 5 南壁(北から)
図版28— 1 仏生田遺跡 5 区溝 21・22(南から)
— 2 仏生田遺跡 5 区古代水田(西から)
— 3 仏生田遺跡 5 区古代水田下層(西から)
図版29— 1 仏生田遺跡 5 区土壌 5・6(南から)
— 2 仏生田遺跡 5 区土壌 8(南から)
— 3 仏生田遺跡 5 区中世水田耕作痕(西から)
図版30 仏生田遺跡 1 区出土遺物(1) 弥生土器・須恵器ほか
図版31 仏生田遺跡 1 区・2 区・5 区出土遺物(2) 土師器・石製品ほか
図版32— 1 掛無堂遺跡掘立柱建物 1(北から)
— 2 掛無堂遺跡掘立柱建物 2(北から)
— 3 掛無堂遺跡掘立柱建物群(北から)
図版33— 1 掛無堂遺跡護岸断面(北から)
— 2 掛無堂遺跡護岸盤出土状態(北から)
— 3 掛無堂遺跡護岸槽、曲物出土状態(西から)
図版34— 1 掛無堂遺跡護岸検出状態(北西から)
— 2 掛無堂遺跡南壁断面(北西から)
— 3 掛無堂遺跡トレンチ 1 南壁断面(北から)
図版35— 1 掛無堂遺跡遠景(北上空から)
— 2 掛無堂遺跡空中写真
— 3 掛無堂遺跡現地説明会風景(北から)
図版36 掛無堂遺跡出土遺物
図版37— 1 川入遺跡 1 区トレンチ南壁断面(北から)
— 2 川入遺跡 2 区遺構全景(西から)
— 3 川入遺跡 2 区土壌 1(南西から)
図版38— 1 川入遺跡 3 区トレンチ断面(北西から)

— 2 川入遺跡 4 区溝 1 調査風景(東から)
— 3 川入遺跡 4 区溝 1(西から)
図版39 川入遺跡出土遺物
図版40— 1 中撫川遺跡調査着手前全景(北から)
— 2 中撫川遺跡 2・3 区調査前(南から)
— 3 中撫川遺跡 1 区弥生時代発掘作業風景(北から)
図版41— 1 中撫川遺跡 1 区溝 5・7 ほか(南から)
— 2 中撫川遺跡 1 区溝調査風景(南から)
— 3 中撫川遺跡 1 区溝 1 ほか(南から)
図版42— 1 中撫川遺跡 1 区溝群完掘状況(北から)
— 2 中撫川遺跡 1 区溝 2(南から)
— 3 中撫川遺跡 1 区溝 2 土層断面(南から)
図版43— 1 中撫川遺跡 2 区溝群完掘状況(北から)
— 2 中撫川遺跡 3 区溝群(北上空から)
— 3 中撫川遺跡 3 区溝群完掘状況(北から)
図版44— 1 中撫川遺跡 3 区溝 3(南から)
— 2 中撫川遺跡 1 区溝 5 発掘風景(南から)
— 3 中撫川遺跡 1 区溝 5 土器出土状態(北から)
図版45— 1 中撫川遺跡 1 区溝 5 土器出土状態(東から)
— 2 中撫川遺跡 1 区溝 5 土器群(東から)
— 3 中撫川遺跡 2 区溝 5 土器出土状態(北から)
図版46— 1 中撫川遺跡 3 区溝 6 発掘風景(西から)
— 2 中撫川遺跡 3 区溝 6(南から)
— 3 中撫川遺跡 3 区溝 6 土層断面(北から)
図版47— 1 中撫川遺跡 2 区溝 5(北から)
— 2 中撫川遺跡 3 区溝 10 土器集中部分(南から)
— 3 中撫川遺跡 1～3 区完掘状況(上空から)
図版48— 1 中撫川遺跡 3 区竪穴住居 1(南から)
— 2 中撫川遺跡 2 区井戸 2(北から)
— 3 中撫川遺跡 2 区井戸 3 土層断面(北から)
図版49 中撫川遺跡 1～3 区古墳時代から弥生時代の溝群(北上空から)
図版50— 1 中撫川遺跡 3 区井戸 4(北から)
— 2 中撫川遺跡 1 区土器溜まり 1(東から)
— 3 中撫川遺跡 2 区竪穴住居 2(北から)
図版51— 1 中撫川遺跡 1 区井戸 6 検出状態(南東から)
— 2 中撫川遺跡 2 区井戸 8 土層断面(北から)

- 3 中撫川遺跡2区井戸8完掘状況(北から)
- 図版52— 1 中撫川遺跡2区井戸9(北から)
- 2 中撫川遺跡2区井戸11(北から)
- 3 中撫川遺跡3区井戸12(東から)
- 図版53— 1 中撫川遺跡3区井戸13土器出土状態(東から)
- 2 中撫川遺跡3区井戸13中層木製品出土状態(西から)
- 3 中撫川遺跡3区井戸13下層土器出土状態(西から)
- 図版54— 1 中撫川遺跡3区井戸15(東から)
- 2 中撫川遺跡2区たわみ1手焙り形土器出土状態(北から)
- 3 中撫川遺跡2区土壌7(北から)
- 図版55— 1 中撫川遺跡3区土壌10(南から)
- 2 中撫川遺跡3区土壌11(東から)
- 3 中撫川遺跡2区土器溜まり2(北から)
- 図版56— 1 中撫川遺跡3区土器溜まり3全景(北から)
- 2 中撫川遺跡3区土器溜まり3「入れ子」の土器(北から)
- 3 中撫川遺跡3区土器溜まり3土器出土状態(北から)
- 図版57 中撫川遺跡1・2区古代建物群全景(北上空から)
- 図版58— 1 中撫川遺跡1区掘立柱建物群(西から)
- 2 中撫川遺跡1区掘立柱建物5(北から)
- 3 中撫川遺跡2区掘立柱建物7(北から)
- 図版59— 1 中撫川遺跡2区掘立柱建物7柱穴断面(東から)
- 2 中撫川遺跡2区掘立柱建物8(北から)
- 3 中撫川遺跡2区掘立柱建物9(東から)
- 図版60— 1 中撫川遺跡2区掘立柱建物8・9(北から)
- 2 中撫川遺跡2区掘立柱建物10(南から)
- 3 中撫川遺跡3区掘立柱建物11(北から)
- 図版61— 1 中撫川遺跡3区掘立柱建物12(北から)
- 2 中撫川遺跡1・2区掘立柱建物群と周辺地形(西上空から)
- 3 中撫川遺跡3区たわみ4と集石1調査風景(北から)
- 図版62— 1 中撫川遺跡3区集石1と柱列2(北から)
- 2 中撫川遺跡3区集石1(北東から)
- 3 中撫川遺跡2区たわみ4検出状態(東から)
- 図版63— 1 中撫川遺跡3区たわみ4全景(北から)
- 2 中撫川遺跡3区溝11・4・19土層断面(北西から)
- 3 中撫川遺跡1区溝25遺物出土状況(南東から)
- 図版64— 1 中撫川遺跡1区溝25円面硯出土状態(西から)
- 2 中撫川遺跡1区溝25調査風景(北から)
- 3 中撫川遺跡1区溝25完掘状況(南東から)
- 図版65— 1 中撫川遺跡1区河道西壁土層断面(北東から)
- 2 中撫川遺跡1区河道東壁(北西から)
- 3 中撫川遺跡1区中世河道調査風景(北西から)
- 図版66— 1 中撫川遺跡1区河道・溝42(北から)
- 2 中撫川遺跡1区北半中世遺構群全景(西から)
- 3 中撫川遺跡1区竪穴遺構1と柱列8(北から)
- 図版67— 1 中撫川遺跡1区竪穴遺構1(東から)
- 2 中撫川遺跡2区中世遺構群(北から)
- 3 中撫川遺跡2区掘立柱建物13(北から)
- 図版68— 1 中撫川遺跡2区掘立柱建物14(南から)
- 2 中撫川遺跡2区掘立柱建物16(北から)
- 3 中撫川遺跡2区墓1(東から)
- 図版69— 1 中撫川遺跡2区墓2(北から)
- 2 中撫川遺跡2区井戸17(南東から)
- 3 中撫川遺跡1区土壌20土器出土状態(西から)
- 図版70— 1 中撫川遺跡2区土壌29(南から)
- 2 中撫川遺跡3区土壌32(北から)
- 3 中撫川遺跡2区溝44・45(西から)
- 図版71— 1 中撫川遺跡1区溝42土層断面(西から)
- 2 中撫川遺跡1区溝42備前焼出土状態(西か

- ら)
- － 3 中撫川遺跡 1 区溝42中央部土師器出土状態
(東から)
- 図版72－ 1 現地説明会、テント内の展示(平成13年11
月10日)
- － 2 現地説明会、中撫川遺跡 3 区溝 6 土器出土
状況(南から)
 - － 3 現地説明会、中撫川遺跡 3 区井戸12・13付
近(東から)
- 図版73 中撫川遺跡出土遺物(1) 弥生土器
- 図版74 中撫川遺跡出土遺物(2) 弥生土器
- 図版75 中撫川遺跡出土遺物(3) 弥生土器
- 図版76 中撫川遺跡出土遺物(4) 弥生土器
- 図版77 中撫川遺跡出土遺物(5) 弥生土器
- 図版78 中撫川遺跡出土遺物(6) 弥生土器・土師

- 器
- 図版79 中撫川遺跡出土遺物(7) 土師器
- 図版80 中撫川遺跡出土遺物(8) 土師器
- 図版81 中撫川遺跡出土遺物(9) 土師器
- 図版82 中撫川遺跡出土遺物(10) 土師器・ミニチュ
ア土器
- 図版83 中撫川遺跡出土遺物(11) ミニチュア土器・
土師器
- 図版84 中撫川遺跡出土遺物(12) 土師器・須恵器
- 図版85 中撫川遺跡出土遺物(13) 緑釉陶器・土師
器ほか
- 図版86 中撫川遺跡出土遺物(14) 石器・石製品
- 図版87 中撫川遺跡出土遺物(15) 鉄器・銭貨ほか
金属製品
- 図版88 中撫川遺跡出土遺物(16) 銭貨・木製品

第1章 歴史的・地理的環境

吉備高原に源を発する足守川は、瀬戸内海へ注ぐおよそ10数キロの間、肥沃な沖積平野を形成している。その支流に、吉備高原の南端に開放する谷あいから砂川や血吸川など小規模な河川が形成されている。新邸遺跡から中撫川遺跡にかけての遺跡地は、足守川の沖積作用によって形成された自然堤防上およびその縁辺部に立地している(註1)。

縄文時代後期から晩期にかけては、すでにこの平野部の一面で稲作を開始したとみられ、南溝手遺跡(註2)がこの時期の集落として広く知られている。

弥生時代になると、集落の数や規模はいっそう増加・拡大し、農業生産を基盤とした営みが本格化し始めている。この足守川流域こそが古代吉備の中核部ともいえるかもしれない。

後期の集落遺跡としては南西方1.3 kmの上東遺跡(註3)が広く知られているように、大規模な拠点ともいべき集落が次々に形成される。北方の足守川加茂遺跡・矢部南向遺跡(註4)、政所遺跡(註5)、津寺遺跡(註6)、高塚遺跡(註7)などもこのような集落の一つである。高塚遺跡では、貨泉が後期前半の土壙から18枚も一括出土し、大陸との交流を示す遺物として注目を集めた。さらに高塚遺跡では、流水文銅鐸が埋納土壙から出土している。

後期後半には、足守川下流域を基盤とした有力者が出現し、傑出した墳墓の造営が開始される。その一つが、新邸遺跡・郷ノ溝遺跡から西方間近に眺望できる楯築遺跡である(註8)。

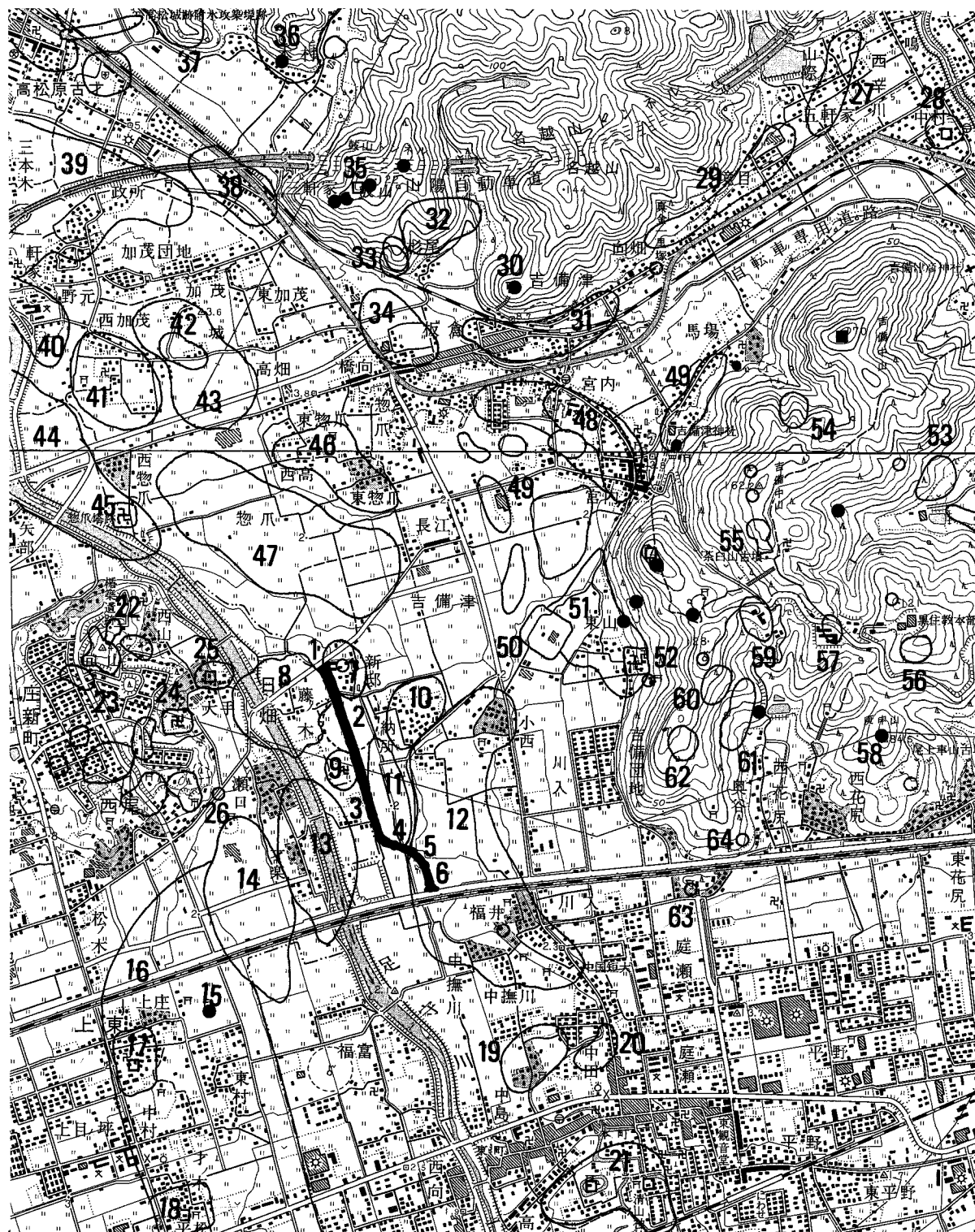
古墳時代にはさらに集落も増加するが、おおむね弥生時代後期の集落遺跡と重複・拡大傾向にある。津寺遺跡ではさまざまな地域からの搬入土器が認められ、人々の交流がいっそう盛んになったことを物語っている。また、居住・生活遺構のみならず、鉄生産や鉄器の製作に直接関わる遺跡も出現する(註9)。そして、明らかに朝鮮半島からの搬入土器を日常的に使われた住居(註10)など、特筆すべき事実が得られるのもこの足守川流域の特色である。

時を経ずして、巨大な前方後円墳の築造が開始され、旧山陽道沿いには有数の前方後円墳が築かれる。なかでも傑出した規模を誇る造山古墳は全国第4位、吉備最大の墳長約360mを測り、北西方約3 kmに位置している(註11)。また遺跡に近い北東方約1.9 kmの丘陵頂部には、中山茶白山古墳(註12)が築かれ、足守川流域と平野部を睥睨する。本殿や拜殿が国宝に指定されている吉備津神社の背後に位置し、東西の山陽道が丘陵に挟まれて狭隘となる要衝を見下ろす。

古墳時代後期には群集墳の築造も盛んとなり、楯築遺跡が位置する足守川西岸の低丘陵部には、おもに横穴式石室を主体とした中小の古墳が連綿と築かれている。(註13)

古代の遺跡所在地は、備中国都宇(つう)郡撫川(なつかわ)郷にあたと想定され、すぐ東は賀夜(かや)郡、西は窪屋(くぼや)郡に接している。「延喜式」民部上には「ツウ」、今昔物語集17第4話には「津郡」と記されている(註14)。これらの記述から、遺跡が「泊」あるいは「港津」のような臨海施設と密接な関係があったことは確実であろう。現在の地名、吉備津にその名残が伝えられているといっても過言ではない。なお、遺跡の北東方約900mには、賀陽氏館跡の伝承地が旧河道に接して所在することも注意される(註15)。第2図の字、城廻の名称は特筆される。

なお、法万寺(中撫川遺跡)と大道西(川入遺跡)字名の境界にあたる位置に、蛇行する大きな旧



1. 新郎遺跡 2. 郷ノ溝遺跡 3. 仏生田遺跡 4. 掛無堂遺跡 5. 川入遺跡 6. 中撫川遺跡 7. 新郎貝塚 8. 日畑橋遺跡
9. カキナシ堂遺跡 10. 散布地 11. 散布地 12. 川入遺跡 13. 才楽遺跡 14. 岩倉遺跡 15. 荒神古墳 16. 上東遺跡
17. 庄城跡 18. 平松城跡 19. 散布地・古墓群? 20. 庭瀬川崎遺跡 21. 撫川城・庭瀬城跡 22. 楯築遺跡 23. 王墓山古墳群
24. 日畑廃寺 25. 日畑城跡 26. 西尾貝塚 27. 散布地 28. 館跡 29. 散布地・古墳 30. 真城寺裏山古墳 31. 散布地
32. 杉尾古墳群 33. 吉備津杉尾西遺跡 34. 吉備津奥田遺跡 35. 鼓山古墳群・鼓山城跡 36. 勝負谷古墳群ほか
37. 観音山古墳群 38. 高松原古才・立田遺跡 39. 津寺三本木・津寺一軒屋・加茂政所遺跡 40. 津寺遺跡 41. 幸利神社遺跡
42. 加茂城跡 43. 散布地 44. 加茂・矢部南向遺跡 45. 惣爪廃寺・塔跡 46. 高田遺跡 47. 散布地 48. 吉野口遺跡ほか
49. 吉備津神社・吉備津神社境内古墳 50. 伝賀陽氏館跡 51. 東山遺跡ほか 52. 如真堂遺跡 53. 北浦古墳群
54. 高麗廃寺ほか 55. 中山茶白山古墳 56. 三坑古墳群 57. 散布地 58. 矢頭治山弥生墳丘墓 59. 散布地 60. 山神下古墳群
61. 奥谷古墳群 62. 向山古墳群 63. 八幡神社貝塚 64. 祭祀遺跡

第1図 遺跡の位置と主要遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 遺跡周辺の字名位置図（1/10,000、網目は旧河道もしくは低位部）

第1章 歴史的・地理的環境

河道が存在するが、その東側あたりに当時の郡境が設定される可能性が高い(註16)。

古代寺院として、遺跡地の近くには北西方約1.5kmの惣爪廃寺と西方約600mの日畑廃寺(註17)が現在の足守川を挟んで存在する。前者は、旧山陽道のすぐ南側に位置し、塔心礎が残される。いずれも全容は明らかではないが、奈良時代に創建された可能性が高い。後者は、以前に確認調査が実施され、平成15年度、さらに調査が進められている。

今回の発掘調査による出土遺物からみると、弥生時代から古代にかけての製塩土器や、木製の浮き子や土錘などの漁労具が継続的にみられ、中世に至るまで瀬戸内海交通による人々の交流や交易が、連綿と続いたことを知ることができる。

弥生時代から、足守川の沖積作用によって自然堤防状の狭小な微高地の安定化が進行するが、中世末期から近世にかけては、さらに海退作用も加わって遺跡地周辺の水田化が進行する。その一方で、一二ヶ郷用水(註18)など、先人の積極的な開田や灌漑に要した、莫大な労力をしのばせる景観が、今なお地域の農業生産を支えている。(岡田)

註

(註1) 改訂岡山県遺跡地図～第5(倉敷)・第6(岡山)分冊 岡山県教育委員会 2003年

(註2) 平井泰男ほか「南溝手遺跡1－岡山県立大学建設に伴う発掘調査1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会 1995年

平井泰男ほか「南溝手遺跡2－岡山県立大学建設に伴う発掘調査2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107』岡山県教育委員会 1996年

(註3) 上東遺跡については下記の発掘調査報告書がある。

- ・伊藤 晃ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2－山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)－』岡山県教育委員会 1974年
- ・柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16－都市計画道路(富本町・三田線)に伴う埋蔵文化財発掘調査－』岡山県教育委員会 1977年
- ・伊藤 晃ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158－主要地方道箕島高松線改良工事に伴う発掘調査3』岡山県教育委員会 2001年
- ・下澤公明ほか「下庄遺跡・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157－主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査2』岡山県教育委員会 2001年

(註4) 松本和男・山磨康平・江見正己ほか「足守川加茂A・B遺跡・矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94－足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1995年

(註5) 松本和男ほか「加茂政所遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138－山陽自動車道建設に伴う発掘調査17－』日本道路公団中国支社津山工事事務所 岡山県教育委員会 1999年

(註6) 下記の報告書が刊行されている。

- ・『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90～三手遺跡・津寺遺跡～山陽自動車道建設に伴う発掘調査9』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1994年
- ・『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98～津寺遺跡2～山陽自動車道建設に伴う発掘調査10』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1995年
- ・『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104～津寺遺跡3～山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1996年
- ・『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116～津寺遺跡4～山陽自動車道建設に伴う発掘調査14』日本道路公団中国支社岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1997年
- ・『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127～津寺遺跡5～山陽自動車道建設に伴う発掘調査15』日本道路公団中国支社津山工事事務所 岡山県教育委員会 1998年

(註7) 江見正己ほか「高塚遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150－山陽自動車道建設に伴う発掘調査18－』

日本道路公団中国支社津山工事事務所 岡山県教育委員会 2000年

(註8) 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992年

(註9) 武田恭彰「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告15』総社市教育委員会 1999年

(註10) 5世紀前半に比定される竪穴住居13からは、鉄鋌や半島系の須恵器のほか鉄鏝などが出土している。

・島崎 東「窪木薬師遺跡―前川改修工事に伴う発掘調査―」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』岡山県教育委員会 1993年

(註11) 葛原克人「造山古墳とその時代」『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社 1992年

(註12) 「吉備中山総合調査報告」岡山市教育委員会・吉備中山総合調査委員会 1975年

(註13) 間壁忠彦・間壁菫子ほか「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報第10号』倉敷考古館 1974年

(註14) 池邊 彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館 1981年

三好基之「都宇郡」『国史大辞典第9巻』吉川弘文館 1988年

(註15) 根木 修・出宮徳尚「中世・近世」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年

(註16) 草原孝典「妹尾住田遺跡―古代の公的港湾施設関連遺跡の発掘調査報告―」岡山市教育委員会 2000年
草原氏からは、最新の発掘調査の成果ほか種々ご教示を賜った。

(註17) 間壁忠彦・間壁菫子「仏教遺跡」『新修倉敷市史第1巻考古』倉敷市史研究会 倉敷市 1996年

(註18) 藤井 駿・加原耕作共著『備中湛井十二箇郷用水史』湛井十二箇郷組合 1976年

※2001年に復刻された。

第2章 発掘調査・報告書作成の経緯

第1節 発掘調査の契機と経過

現在の一般県道吉備津松島線は、国道180号線と倉敷市東部を結ぶ交通量もかなり多い幹線道路である。しかしながら、大型車両の対面通行などが困難となっている狭小な箇所が、今なお点在する。これらが起因する渋滞や事故の発生を防ぎ、円滑な車両の通行を図る一方、岡山市中撫川と吉備津間のバイパス道路整備という側面等も考慮し、岡山県は同線の改築を計画し、平成10年度から用地の取得が図られてきた。

平成11年度に計画路線内の埋蔵文化財について協議が開始された。計画路線北端の現道との起点付近には、周知の遺跡である新邸貝塚が所在し、南端の新幹線側道付近には、すでに山陽新幹線建設に伴う発掘調査等によって広く知られる川入遺跡が所在することが確認されていた。

平成11年度には、この川入遺跡に隣接する中撫川遺跡の発掘調査が、岡山市教育委員会によって開始されており、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物など多くの知見が得られていた。この発掘調査対象部分は、旧国道2号線と新幹線側道の間を結ぶ都市計画道路路線である。

平成11年12月から翌年1月にかけて、岡山地方振興局建設部担当課（工務二課）と岡山県教育庁文化課・岡山県古代吉備文化財センターは、発掘調査実施に際しての具体的な条件整備や協議を行った。

まず、用水路や農道などの保全や発掘調査による排土の円滑な処理のための借地、発掘区と隣接地の境界に畦畔を造成することなどのほか、路線内に散在する未調印箇所の確認と見込み等についても現地で確認が行われた。

平成12年4月の発掘調査開始後も、岡山地方振興局工務二課および用地推進班の担当者とは、発掘調査を実施する上での問題点・条件整備について綿密な連絡調整を行った。また、地元の土木委員をはじめ、隣接土地所有者の各位には、暖かいご協力を賜った。記して謝意を表します。

発掘調査実施の拠点となる発掘調査事務所は、岡山市納所地内の借地に建築され、発掘器材や出土遺物の保管・整理場所、および担当調査員の常駐基地とした。後の平成14年度は、この事務所を報告書作成のための整理事務所に移行した。

平成12年度の発掘調査は、平成12年4月10日に開始し、路線の北方の新邸遺跡から着手し、郷ノ溝遺跡から仏生田遺跡1区までを実施し、平行して中撫川遺跡まで遺跡の存在や広がりをお確かめるための試掘調査も実施した。

平成13年度の発掘調査は、平成13年4月2日に開始し、仏生田遺跡2・3・5区、掛無堂遺跡、川入遺跡、中撫川遺跡と広汎に実施したが、年度途中で調印が締結された郷ノ溝遺跡1区の発掘調査を完了することができた。なお川入遺跡の一部は、発掘承諾書によって発掘調査が実現した。関係者、ならびに地権者の御尽力・御協力に深く謝意を表する次第である。

平成14年度は、仏生田遺跡3区の路線内に残されていた未調印箇所が、調印締結により発掘可能となり、10月に発掘調査を実施した。（岡田）

第2節 調査および報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山地方振興局から委託を受け、平成12年度から平成14年度にかけて実施した。本報告書に掲載した新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡の6遺跡は、当初川入遺跡と総称していたが、地名・小字などのほか、平成14年度に刊行された新版岡山県遺跡地図を参照し、あらためて命名したものである。発掘中の調査区との対照は第2表に掲げる。

発掘調査の実施体制は、平成12年度は2班（5～6名）、平成13年度は3班（10名）体制で実施し、平成14年度に4名で報告書作成に伴う整理作業を行った。

岡山県教育委員会では、発掘調査と報告書作成事業の遂行にあたり、専門的な指導や助言を得るため、岡山県文化財保護審議会委員 高橋 護、狩野 久両委員を専門委員に委嘱し、発掘調査現場や現地事務所では有益な御教示を得た。録して深甚の謝意を表します。

発掘調査			
平成12（2000）年度			
岡山県教育委員会		文化財保護主査	築地 由行
教育長	黒瀬 定生	文化財保護主事	小嶋 善邦
岡山県教育庁		（平成12年4月～9月、平成13年1月～3月）	
教育次長	宮野 正司	文化財保護主事	三宅 健夫
文化課		平成13（2001）年度	
課長	松井 英治	岡山県教育委員会	
課長代理	佐々部 和生	教育長	宮野 正司
課長代理（埋蔵文化財係長）	松本 和男	岡山県教育庁	
文化財保護主査	福本 明	教育次長	國貞 忠克
主任	奥山 修司	文化課	
岡山県古代吉備文化財センター		課長	松井 英治
所長	正岡 睦夫	課長代理（埋蔵文化財係長）	松本 和男
次長	能登原 巧	課長代理	藤井 守雄
〈総務課〉		主任	奥山 修司
課長	小倉 昇	岡山県古代吉備文化財センター	
課長補佐（総務係長）	安西 正則	所長	正岡 睦夫
主査	山本 恭輔	次長	能登原 巧
〈調査第三課〉		〈総務課〉	
課長	柳瀬 昭彦	課長	安西 正則
課長補佐（第三係長）	岡田 博	総務係長	田中 秀樹
文化財保護主幹	内藤 善史	主任	小坂 文男
	（平成13年1～3月）	〈調査三課〉	
文化財保護主査	高田 恭一郎	課長	柳瀬 昭彦

課長補佐（第三係長）	岡田 博	文化課	
文化財保護主幹	井上 弘	課 長	西山 猛
文化財保護主査	徳田 正紀	課長代理（埋蔵文化財係長）	松本 和男
文化財保護主任	奥野 光廣	課長代理	宮田 正彦
文化財保護主任	氏平 昭則	文化財保護主任	尾上 元規
文化財保護主事	三宅 健夫	主 事	浜原 浩司
文化財保護主事	松尾 佳子	岡山県古代吉備文化財センター	
	(平成13年4月～7月)	所 長	正岡 睦夫
主 事	大熊 美穂	次 長	藤川 洋二
主 事	関 幸代	〈総務課〉	
主 事	稲谷 知子	課 長	安西 正則
	(平成13年8月～平成14年3月)	課長補佐（総務係長）	田中 秀樹
報告書作成		主 任	小坂 文男
平成14（2002）年度		〈調査第三課〉	
岡山県教育委員会		課 長	柳瀬 昭彦
教 育 長	宮野 正司	課長補佐（報告書担当）	岡田 博
岡山県教育庁		文化財保護主幹（報告書担当）	井上 弘
教育次長	三浦 一男	文化財保護主事（報告書担当）	三宅 健夫
		主 事（報告書担当）	関 幸代

報告書作成協力者

金藤敦子 大西理世 富田友恵 仙野智子 坂本治美 福田彰浩 練尾隆子 江田知由貴
 太田敬子 長谷川恵美子 末吉綾子 山本鈴子 田中淑子 柴田明美

第3節 発掘調査の概要

発掘調査は平成12～14年度にかけて実施したが、通年にわたって実施したのは平成12・13年度の2年間である。

平成12年度は2班体制5名の調査員が専従し、年度途中10～12月は4名、年度末の1～3月は6名と異動があった。

4月当初からの発掘調査開始は、改築路線の北端の起点となる新邸遺跡から着手し、2班で調査区を分担しおもに河道を対象とした精査・記録保存を行った。

新邸遺跡は、昭和25年に近藤義郎岡山大学名誉教授によって発掘調査が行われ、弥生時代中期の貝塚が発見されている。宅地化に伴って、岡山市教育委員会による立会調査も行われている周知の遺跡である。発掘に着手した初期の段階で、調査区対象範囲は大規模な旧河道の中にあたることが判明した。仮に全面発掘を実施した場合、発掘区内の湧水・崩落が発生し、発掘作業の安全性確保が困難で、しかも周辺に及ぼす影響が大きいことが予想されたため、最終的にトレンチ調査に留まった箇所、トレンチを可能な範囲で拡張したグリッド（小調査区）に分けて実施した。これらの調査区では、縄文土器

第2章 発掘調査・報告書作成の経緯

第2表 遺跡名称対照表

新遺跡・調査区名	旧遺跡・調査区名	所在地	おもな遺構	出土遺物の年代	調査年度	備考
新邸遺跡(1~4区)	川入遺跡 新邸調査区(1~4区)	岡山市吉備津、倉敷市日畑	河道	縄文~中世	平成12	4区は倉敷市日畑
郷ノ溝遺跡(1~3区)	川入遺跡 郷ノ溝調査区(1・2区)	岡山市納所	溝・竪穴住居・井戸・柱穴群・水田	弥生~中世	平成12・13	
仏生田遺跡(1区) (2~5区)	川入遺跡 藤ノ木調査区(1・2区)	岡山市納所	溝・井戸・土壇	弥生~中世	平成12	未調査区あり
	川入遺跡 仏生田調査区(1~5区)	岡山市納所、倉敷市日畑	土壇・柱穴・水田	弥生~中世	平成13・14	4区は未調査
掛無堂遺跡	川入遺跡 掛無堂調査区(1・2区)	岡山市納所	護岸遺構・建物	古墳~古代	平成13	
川入遺跡(1~4区)	川入遺跡 大道西調査区(1~4区)	岡山市川入	土壇・柱穴・河道・土壇	中世	平成13	
中撫川遺跡(1~3区)	川入遺跡 法万寺調査区(1~7区)	岡山市中撫川	溝・建物群・竪穴住居・井戸・墓	弥生~中世	平成13	

第3表 通年発掘調査実施一覧表（実線：発掘調査、点線：確認調査）

遺跡名	H12										H13			調査面積 ㎡	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
新邸遺跡	—————													600	
郷ノ溝遺跡		—————												2,400
仏生田遺跡			9,900	
掛無堂遺跡													600		
川入遺跡												800		
中撫川遺跡												3,100		
計													17,400		

（晩期）や弥生土器をはじめ、古式の須恵器や土師器に加え、古代から中世にかけての幅広い時期の遺物が出土している。これらの遺物から、河道の周辺や上流部の集落の存在を知ることができる。

発掘調査の実施過程では、排土置き場を予定していた借地の契約変更や、発掘調査終了後の埋め戻し措置など、いくつかの問題が発生したが、梅雨の最中7月上旬には調査をすべて終えることができた。

郷ノ溝遺跡は、1区の買収が完了していなかったため、2・3区の発掘調査を先行して実施した。1区については、関係者のご尽力により年度内の調印が予想されていたが、最終的に次年度後半に調査を行った。1区の土地所有者は、作業に関わる関係者の通行や、表土除去のための重機の進入など快諾して頂いた。

2区の大半は低位部で、中世から近世にかけての水田痕跡が検出されたが、下層には古代・中世の溝群のみが現れた。2区の微高地縁辺では、弥生時代前期の微高地部分は3区へ広がり、そこでは弥生時代中期にさかのぼる溝が検出された。

微高地の方向は、やや東振する南北方向を指し示し、ほぼそれに沿って溝は検出されている。古墳時代の溝や竪穴住居が検出されているが、後期の溝は必ずしも微高地の方向に沿わず、西方から南東方向へ流路を示すものもある。古代~中世にかけての溝や柱穴群は、後世の削平を受けてやや不明瞭な検出状態であった。

仏生田遺跡1区は、調査時には藤ノ木調査区と呼称していた。路線の中で西側と東側の字名が異なり、東側の郷ノ溝と混同を避けるため、その西側の名称「藤ノ木」を採用していたのである。

第4表 発掘調査担当者一覧（※遺物数は整理コンテナ（16×34×54cm）に換算）

	調査年度	遺物数（箱）	発掘調査担当者
新邸遺跡 1・2区 3・4区	平成12	35	高田・築地 岡田・小嶋・三宅
郷ノ溝遺跡 1区 2区 3区	平成13	80	氏平・三宅・関
	平成12		高田・築地 岡田・小嶋・三宅
仏生田遺跡 1区 2区 3区 5区	平成12	195	岡田・内藤・高田・築地・小嶋・三宅
	平成13・14		岡田・奥野・大熊
			柳瀬・岡田・井上・氏平・三宅・関
			井上・徳田・松尾・稲谷
掛無堂遺跡	平成13	20	井上・徳田・稲谷
川入遺跡 1・2区 3・4区	平成13	30	井上・徳田・松尾
			岡田・奥野・大熊
中撫川遺跡 1区 2区 3区	平成13	670	岡田・奥野・大熊
			井上・徳田・稲谷
			柳瀬・氏平・三宅・関

遺跡の北端部は、郷ノ溝遺跡から連なる弥生時代中期と、後期の溝群が相次いで検出されている。後期の溝の中には、山陰系の弥生土器を伴うものがある。1区の南方では徐々に地形が下降し、低位部になる。弥生時代から古墳時代の水田となる可能性も考えられたが、水平に近いレベルの均一性は認められず、また畦畔も検出できなかった。溝群や包含層や出土遺物は、弥生時代中期から中世までの広範な土器が確認されているが、明確な居住遺構や建築遺構は発見されなかった。

平成12年度は、仏生田遺跡1区の全面調査をもって完了したが、一方で次年度以降の発掘予定地への試掘調査も平行して行ってきた。11月、仏生田遺跡2区に設定したトレンチから、朝鮮半島系の須恵器片が出土したが、後の全面調査では当該時期の明確な遺構群は発見できなかった。試掘調査の最終段階では、川入遺跡から中撫川遺跡にかけての試掘を行い、前者では旧河道の北側に中世の微高地が存在することが確かめられた。後者では、弥生時代にさかのぼる微高地が確認され、中世にかけての多様な遺物が出土した。その中には緑釉陶器が含まれ、全面調査の成果に期待が寄せられた。

平成13年度は3班体制で発掘調査計画が上程され、10名の調査員が専従した。同時に3遺跡、すなわち仏生田遺跡2区、川入遺跡、中撫川遺跡の調査に着手し、年度中に未調印地点を除く路線内のすべての調査対象遺跡の調査完了を目指した。

中撫川遺跡は、過去の発掘調査や山陽新幹線の南側で行われてきた岡山市教育委員会の調査でも、もっとも遺構密度が高い遺跡である。時期的な幅もさることながら、出土遺物の量もきわめて多い。おもに溝を中心とした遺構群が重複して検出されたため、複雑な発掘技術や時間を要し、4月初から着手した1班担当の中撫川遺跡3区での調査期間は、実に9か月以上を要した。最終段階の弥生時代の溝群の検出に至るまでには、農耕具などの木製品が出土した古墳時代の井戸のほか、多数の緑釉陶器が土師器の皿などとともに出土した、古代の池状のたわみ遺構が注目を集めた。施釉陶器については、奈良国立博物館 高橋照彦氏（現在は大阪大学）のご教示を得、地方でのまとまった出土が珍しい9世紀前半の京都産緑釉陶器であることが確認された。

また、11月10日（土）には同年より制定された「おかやま教育の日」協賛事業として現地説明会を実施した。9月から発掘調査を開始していた掛無堂遺跡で検出された古代の護岸遺構や建物群と、中撫川遺跡3区の古墳時代の井戸・溝などの検出状況の説明や、テント内での出土遺物・写真パネルの展示を行い、230名を超える見学者で賑わった。

中撫川遺跡1・2区の調査過程では、3区と同様表土直下から検出された中世遺構の記録採取に手

第2章 発掘調査・報告書作成の経緯

間取りながらも、平成14年1月には10棟以上の古代の掘立柱建物群を検出した。付近の溝からは、ほぼ完全な小型円面硯が出土し、建物群が公的な性格をもち、役所の一部か出先機関、あるいは港湾施設などの可能性が高まった。次年度の整理作業の最中に、2区から銅印の鋳型が出土していたことが判明し、その可能性は一層高まったといえる。これらの建物群は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。(図版57)

年度末の2・3月にかけては、弥生～古墳時代の溝群の掘り下げ作業に専念し、最終的に弥生時代前期の溝を検出することができた。最終的に3月19日、すべての発掘調査を完了し、器材の撤収を行った。

2年間にわたる発掘作業は、借地への排土搬出のため、ベルトコンベアの使用に依存するところが多かったが、その運搬方法や移動・設置には苦心した。

当該年度より、センターでは発掘現場での労働災害を防止するため、「安全衛生基準」を定める方向が推進・強化され、調査担当者はもとより発掘現場の作業員に対する研修を日常的に実施するようになった。また、ベルトコンベア使用中の事故発生を未然に防止するための緊急停止装置の改良が図られ、管轄の労働基準監督官を交え、製造業者・納入業者・センター職員が、仏生田遺跡3区の現場に会い、改良に向けての検討を行った。以降、センターで使用されるベルトコンベアは、改良型が多く採用されるようになった。

平成14年10月には、4名の担当調査員が報告書の作成にあたっていたが、新たに用地買収が締結された仏生田遺跡3区の北端調査区の発掘調査を実施した。発掘対象地点は、電源設備やベルトコンベアの搬入が困難であり、狭い調査区でもあったので、終始一輪車使用によって発掘作業を進めた。出土遺物は比較的少量で、しかも古代以前にさかのぼる明確な遺構は検出されなかった。(岡田)

調査日誌抄

平成12年度

平成12(2000)年

4月10日(月) 発掘資材搬入、新邸遺跡発掘調査開始。

6月5日(月) 郷ノ溝遺跡発掘調査開始。

7月10日(月) 新邸遺跡発掘調査完了、撤収。

10月16日(月) 仏生田遺跡ほか確認調査開始。

23日(月) 専門委員会開催。

12月6日(水) 仏生田遺跡1区発掘調査開始。

平成13(2001)年

1月30日(火) 郷ノ溝遺跡発掘調査完了。

3月13日(火) 確認調査完了。

22日(木) 仏生田遺跡1区発掘調査完了。平成12年度調査終了。

平成13年度

平成13(2001)年

4月2日(月) 発掘調査準備着手。

9日(月) 発掘調査資材搬入、中撫川遺跡、川入遺跡、仏生田遺跡発掘調査開始。

9月4日(火) 掛無堂遺跡発掘調査開始。

- 26日（水） 川入遺跡発掘調査完了、撤収。
 10月29日（月） 専門委員会開催。
 11月10日（土） 現地説明会（「教育の日」協賛事業）開催。
 12月17日（月） 郷ノ溝遺跡1区発掘調査開始。
 27日（木） 掛無堂遺跡発掘調査完了、撤収。
- 平成14（2002）年
 1月18日（金） 仏生田遺跡発掘調査完了、撤収。
 3月29日（金） 中撫川遺跡、郷ノ溝遺跡発掘調査完了、撤収。
- 平成14年度
 10月1日（火） 仏生田遺跡3区発掘調査開始。
 25日（木） 仏生田遺跡発掘調査完了。

第4節 報告書作成の経過

報告書の作成は、平成12・13年度の現地発掘調査事務所（岡山市納所）をほぼそのままの状態で使用し、実施した。

出土遺物総数は整理コンテナ箱に1,000箱（平成12年度：260箱、平成13年度：770箱）を越え、発掘調査中に水洗作業と注記作業に取り組んではいたが、台帳整備作業などはほとんど着手できていなかった。まず、遺跡や調査区ごとの台帳作成、遺構に伴う重要遺物の抽出・分離などに取り組んだ。

遺物の整理作業の大半は土器について費やし、復元・接合作業を重点的に進めた。進行状況を把握しながら、漸次実測作業に移行し、最終的に写真撮影が必要と思われる土器については、石膏による補填作業と着色作業を終えたものについて、センターで写真撮影を行った。

一方、金属製品や木質遺体・獣骨など、適切な保存処理が必要な遺物については、その継続的管理や抽出作業を日常的に行い、適切な処理を施した。

出土遺物の大半を占める土器については極力図化に努め、最終的におよそ1600点の実測図を本書に掲載することができた。ことに弥生時代終末期から古墳時代の初頭の土器については、弥生土器と土師器の境界設定には苦慮した。重複して検出された溝群は、発掘調査の実施では難渋したが、時期的に純粋な型式を抽出する作業は困難をきわめた。

発掘調査現場で記録された膨大な実測図については、遺構の時期的評価など現場作業で解決できなかった点に注意しながら、出土遺物の整理作業と平行して進めた。この作業は、時期別の遺構全体図作成にとっては欠くことのできない重要な作業でもあった。これらの作業過程で、遺構の性格や名称の変更も検討された。たとえば、遺構名称を便宜的に土壌としていたものが、井戸に変更すべき遺構として認識された例などである。遺構図とともに記録写真との照合も併せて行い、調査区ごとの遺構配置図や各遺構図についてトレース（浄写）図を作成し、縮尺などの統一を図った後、報告書掲載の仕様に基いてマイクロ写真の撮影、製版作業に鋭意取り組んだ。

整理事務所は2階建のプレハブ事務所であったため、トレース作業は、室内歩行や隣接道路の車の通行による振動で、トレース台がかなり揺れ、整理担当者を悩ませる現象となった。しかし、閑静な環境には恵まれていたといつてよい。

第2章 発掘調査・報告書作成の経緯

以上の整理・報告書作成作業は、金属器の錆落としや写真撮影等を除くすべての作業をこの整理事務所で行ったが、年度末の平成15年1月からは、出土遺物はもとより、図面・写真などの膨大な記録類やトレース台などの備品類を、計画的にセンターへ移送する作業に着手せざるを得ず、このための準備や梱包作業は予想を越える大きな負担となった。3月19日には、整理作業員の献身的な作業にも助けられ、すべての出土遺物のセンター移送を終えることができた。職員は、31日まで事務所撤収に向けた残務整理にあたった。(岡田)

整理日誌抄

平成14年

- 4月1日(月) 図面・写真・遺物等、整理作業開始
- 6月 新邸遺跡出土遺物整理作業終了
- 8月 川入遺跡出土遺物整理作業終了
- 9月 樹種同定・花粉分析試料の抽出作業
中撫川遺跡3区出土遺物整理作業終了
- 10月 郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡1区出土遺物整理作業終了
- 11月 中撫川遺跡1・2区出土遺物整理作業終了
大阪大学 高橋照彦氏による緑釉陶器の生産地調査
- 12月 岡山理科大学 白石 純氏による緑釉陶器・赤色顔料の成分分析
岡山理科大学 富岡直人氏による獣骨同定作業
倉敷芸術科学大学 妹尾 護氏による第1回石材同定
掛無堂遺跡・仏生田遺跡2～5区出土遺物整理作業終了

平成15年

- 1月 倉敷芸術科学大学 妹尾 護氏による第2回石材同定
- 2月21日(金) 出土遺物搬出作業開始
- 25日(火) 専門委員会開催
- 3月19日(水) 遺物搬出作業終了
- 31日(月) 整理作業終了



川入遺跡発掘調査・整理事務所(西から)

第3章 新邸遺跡

第1節 遺跡の概要

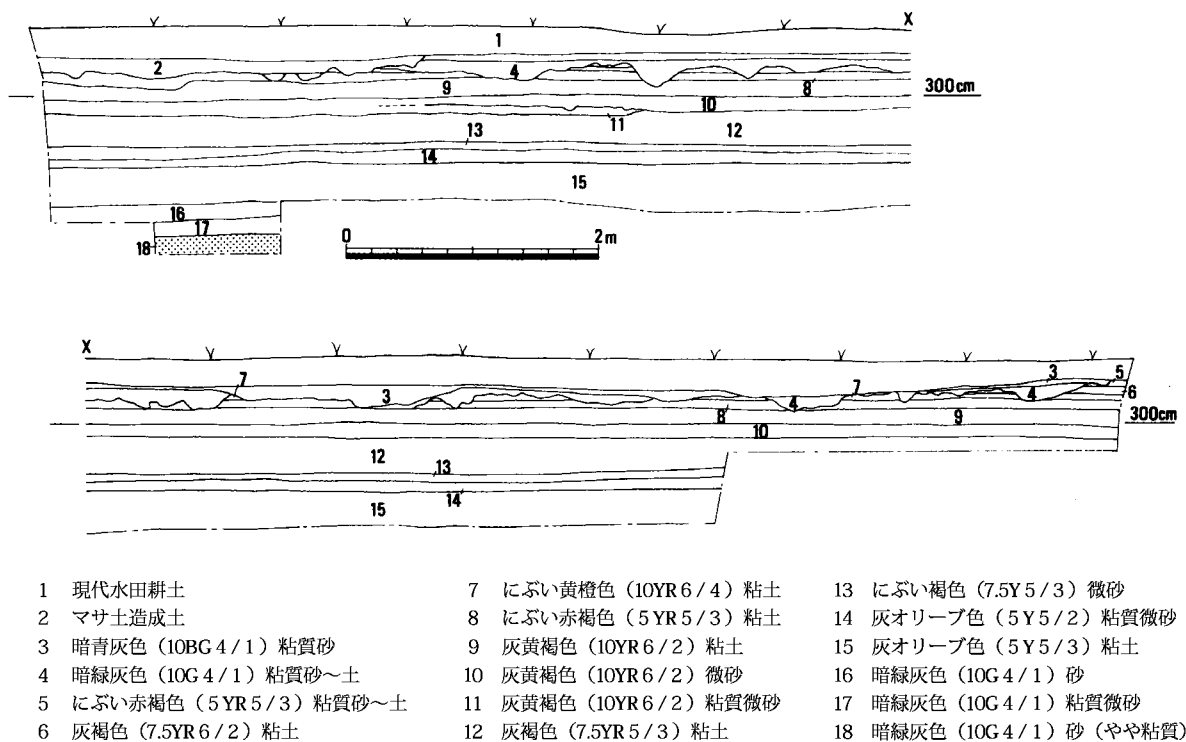
新邸遺跡は、周知の遺跡の呼称としては「新邸貝塚」を核とする、弥生時代中期の集落遺跡と考えるべきであろう。「新邸貝塚」は1950年、発掘調査が行われ中期中葉の弥生土器や石器が、ヤマトシジミを主体とした貝殻と共に出土している。その地点は1区の東方約70mの水田にあたる。

発掘調査は、まず試掘トレンチによる確認調査から開始したが、ほどなく全面が河道内であることが明らかとなり、土置場や調査の安全性を考慮しつつ、G1～G6各区の設定を行った。（岡田）

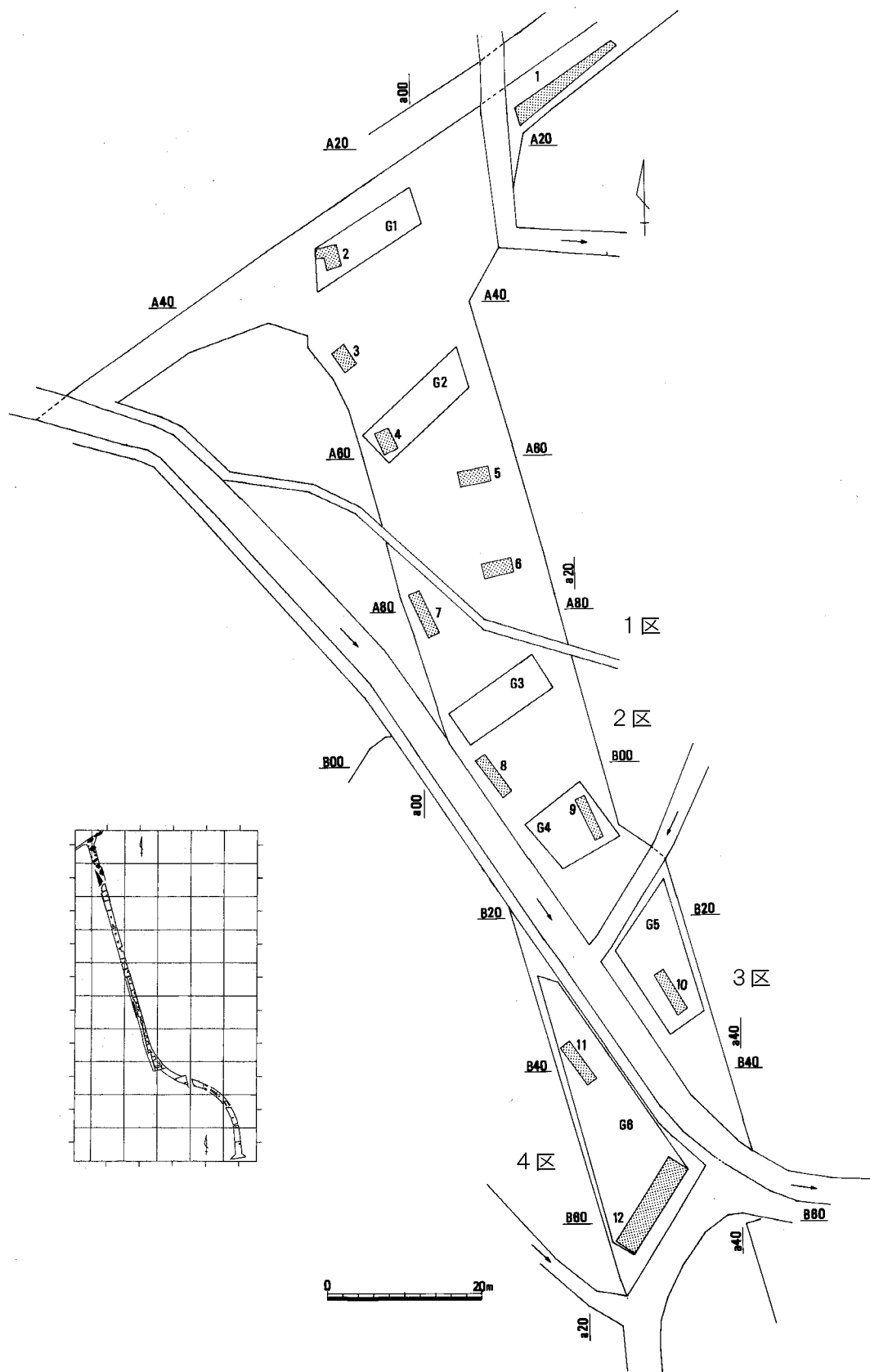
第2節 1・2区（G1～4、試掘坑1～9）の調査

1 1区の調査概要

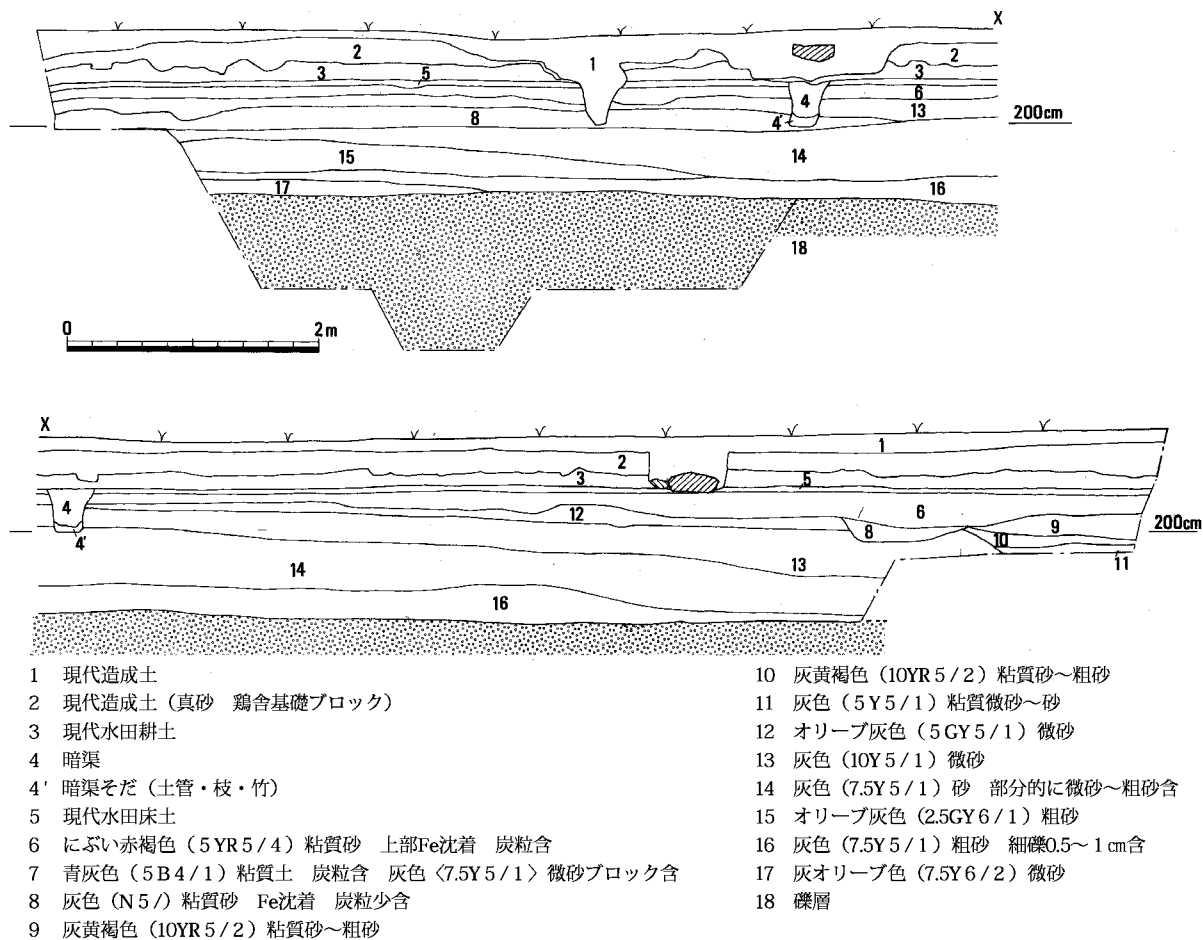
試掘坑1～6の知見と現存する用水路から、河道の流れはおおよそ北西から南東方向にあるものと推定された。このため、河道の堆積状況と左岸側の肩口を確認する目的で、河道に直交すると予想されるG1・2を設定した。結果は、河道の左岸肩口についてはG1・2内で確認できず、さらに東側となり、試掘坑1までの間に推定される。また、海拔1.5m以下は礫層となり、激しい湧水のために全



第1図 1トレンチ土層断面図 (1/60)



第2図 新邸遺跡発掘調査区域図（数字のみはトレンチ、Gは拡張区；1/800）

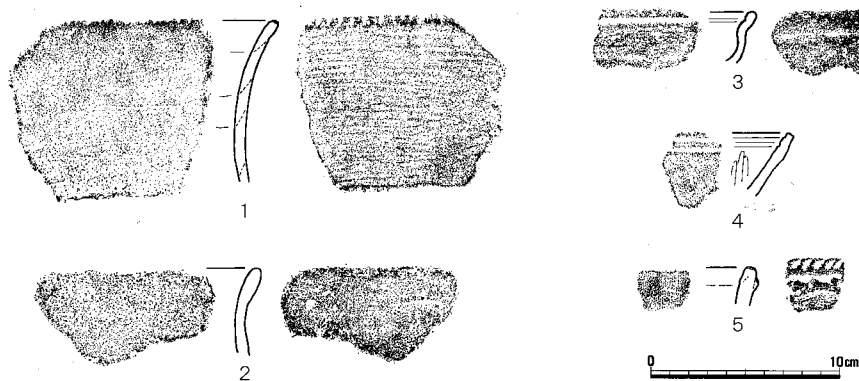


第3図 G2北壁土層断面図 (1/60)

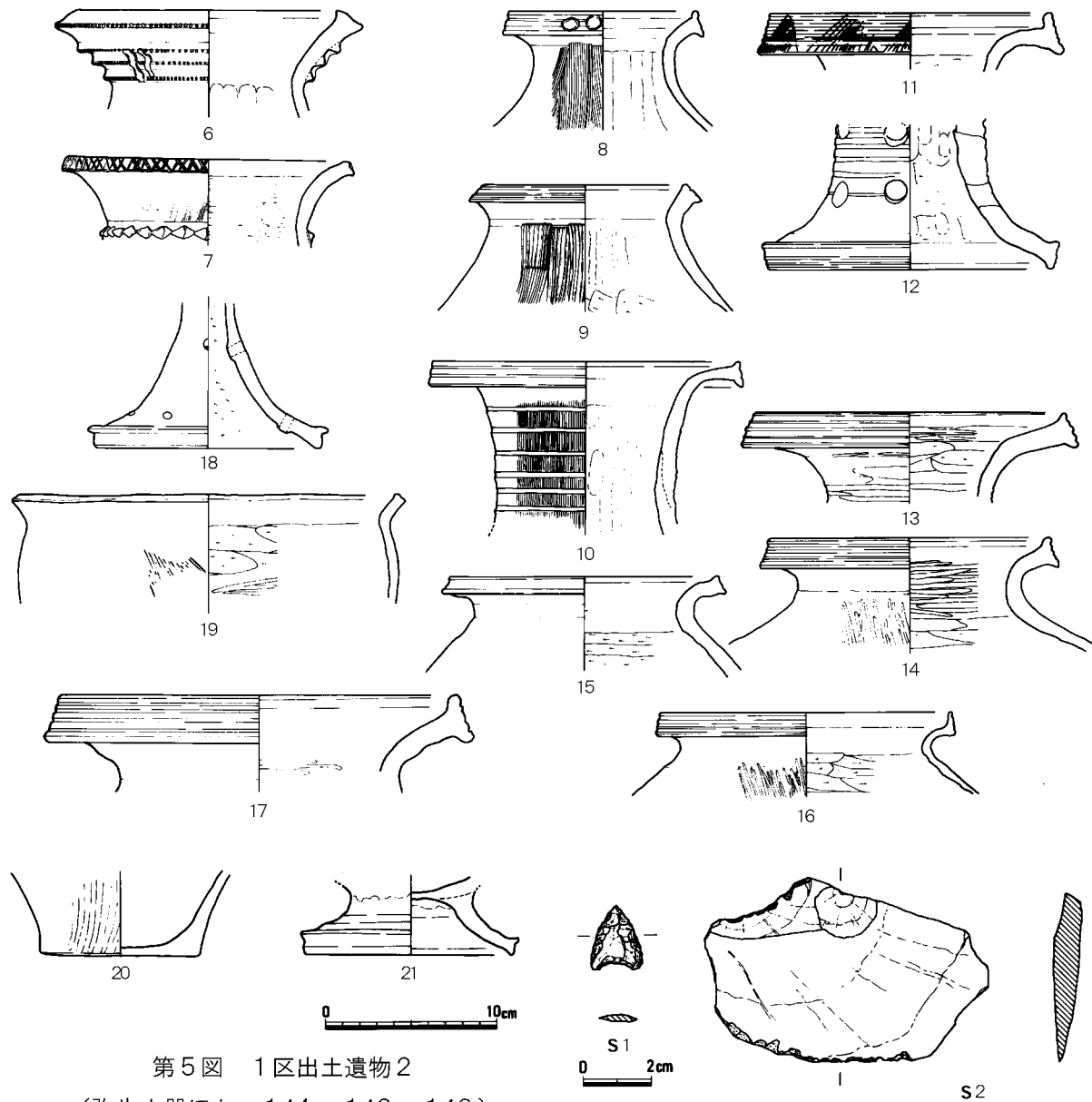
体的な掘り下げを断念し、一部の深掘りにとどめている。

第1図は、最北東部に位置する1トレンチの土層断面図である。海拔2m以下の堆積は、粘土と砂の互層となる。出土遺物は土器細片と輸入銭のみで、各層の時期は不明であるが、河道の氾濫を繰り返した箇所と考えられる。

第3図は、1区の中央部に位置するG2の土層断面図である。現代水田の床土よりも下層は砂の堆積となり、南西から北東方向に傾斜する。第18層は、礫層で上面の海拔高は南西隅で1.5m、北東隅で1.3mを測る。また南西隅の礫層を海拔20cmまで下げたが、その下端の確認はできていない。遺物は、この礫層を中心に上層の第16・17層から大量に出土する。縄文土器・弥生土器・土師器があり、弥生



第4図 1区出土遺物1 (縄文土器; 1/4)

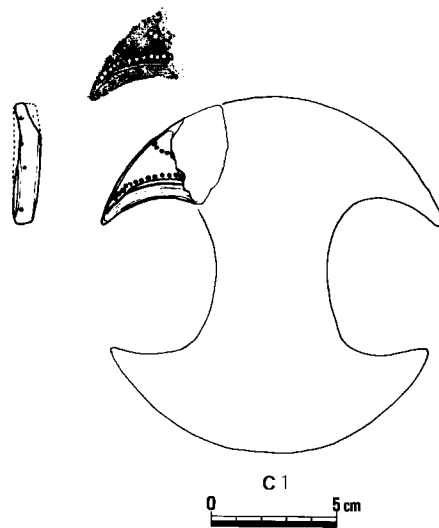


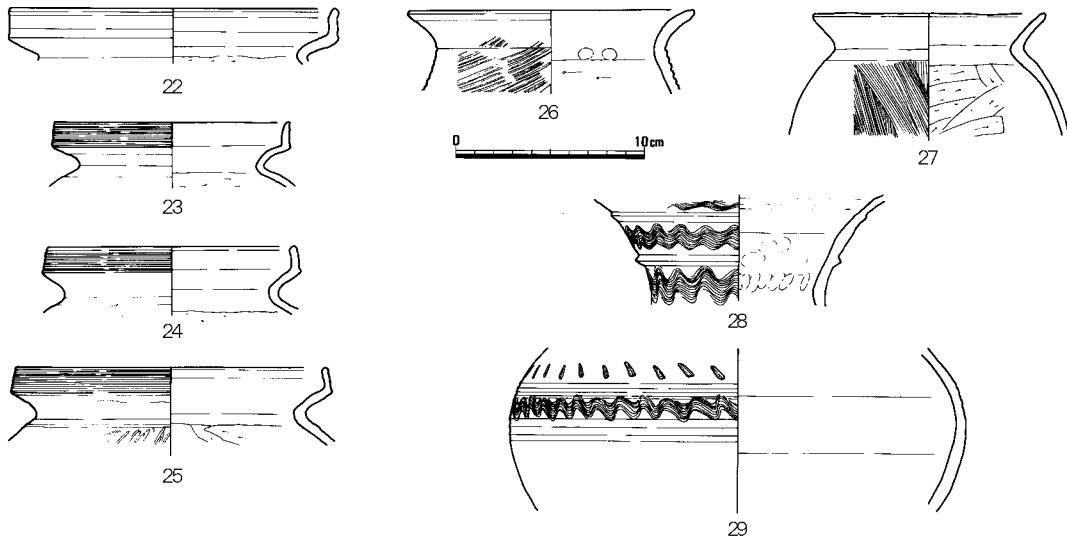
第5図 1区出土遺物2
(弥生土器ほか；1/4・1/2・1/3)

時代後期の土器と土師器については比較的磨滅が少ない。
河道の埋没は、古墳時代以降である。

第4図はG2から出土した縄文土器を掲載している。
深鉢1・2・5と浅鉢3・4がある。

1は口縁端部に刻み目を施し、頸部外面を二枚貝条痕
で仕上げる。粘土帯の接合部分は内傾する。2はやや肥
厚する口縁端部を丸く収める。5はやや面をもつ口縁端
部に刻み目を施し、端部外面に接して刻み目突帯を貼り
付ける。3・4の浅鉢は椀形の器形と考えられる。3は
くびれをもち、口縁内面に1条の沈線を施す。4は直線
的で口縁内面に2条の沈線を施している。以上の縄文土
器は、晩期中～後葉に属するものと考えられる。





第6図 1区出土遺物3（土師器・須恵器；1/4）

第5図にはG2出土の弥生土器、石器、土製品を掲載している。土器は壺6～11・13・14・17、甕15・16・20、高杯18、鉢19・21、器台12である。石器はいずれもサヌカイト製で石鏃S1、スクレイパーS2である。C1は分銅形土製品である。

6・7は広口壺である。6は口縁部が外反し、端部に向かって肥厚し、端部は平坦面となる。外面には3条の突帯を貼り付け、口縁端部と突帯に細かい刻み目を施し、さらに棒状浮文を2本貼り付ける。7は外反する口縁の端部に斜格子文を施し、頸部に指頭圧痕文の突帯を貼り付ける。8～11・13・14・17の壺は短頸や長頸のものがある。いずれも口縁を外反させ、端部を肥厚して凹線や擬凹線を施文する。さらに8は2個一対と考えられる円形浮文を貼り付け、11はヘラ描きによる鋸歯文を施文する。13の口縁部の上面には赤色顔料の痕跡がみられる。頸部はハケによる調整で終えるものと、さらに沈線文を施すものがある。甕のうち16は複合口縁のもので、上方へ拡張した口縁外面に擬凹線を施し、薄手の作りとなる。20は薄手の底部である。18は高杯の脚部で、細い柱部から裾部が開き、端部を肥厚させる。円孔は2段に穿孔し、内部をヘラケズリする。19は「く」字状の口縁となる鉢で、21は台付鉢あるいは壺の脚台である。分銅形土製品C1は、上半の挟り部のみが残存する。挟りの先端は鋭く、表面に櫛描文と刺突文を施文し、上端部から裏面に貫通する小孔をもつ。以上の遺物は、6・7・C1が中期中葉で新邱貝塚の時期、16が後期中葉、19が後期後葉と考えられる。その他は後期前葉と考えられるが、8は中期後葉の可能性もある。

第6図は、G2から出土した土師器と、G1の西端から出土した須恵器を掲載した。

22～27の甕は、口縁端を上方に拡張するものと、「く」字状のものがある。前者には拡張部外面に多条の櫛描き沈線文を施すものと、ヨコナデするものがある。26の頸部外面はタタキがみられる。28・29は同一個体の甕と考えられる。28は頸部で、逆「ハ」字状となる。2本の突帯を挟んで3帯の櫛描波状文を施す。29は胴部で、最大径の位置に櫛描波状文を施し、その上下に3本ずつの沈線を配す。さらにそれらの上側に櫛状工具による刺突文を施すものである。以上の遺物は、土師器が古墳時代初頭、須恵器は5世紀前半代と考えられる。

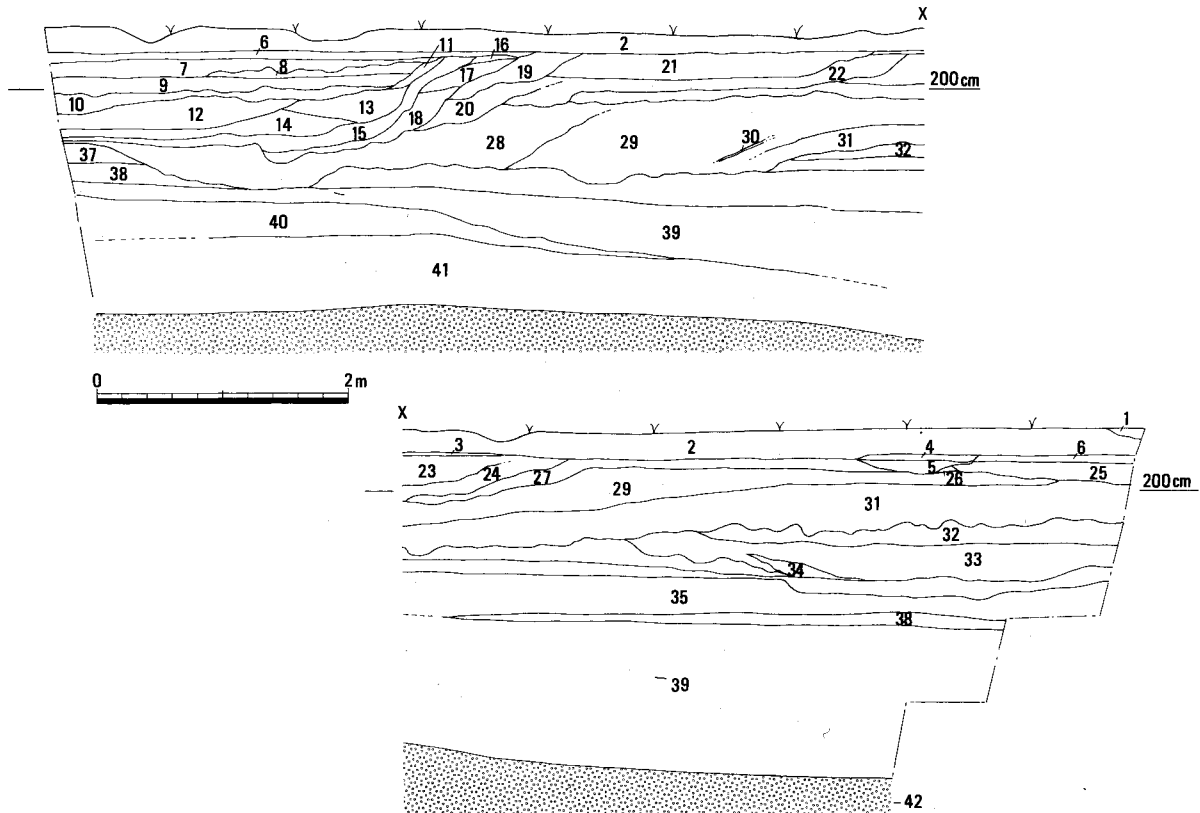


第7図

第7図のM1は、輸入銭の祥符元宝で、トレンチ1から出土した。（高田）1区出土遺物4(1/2)

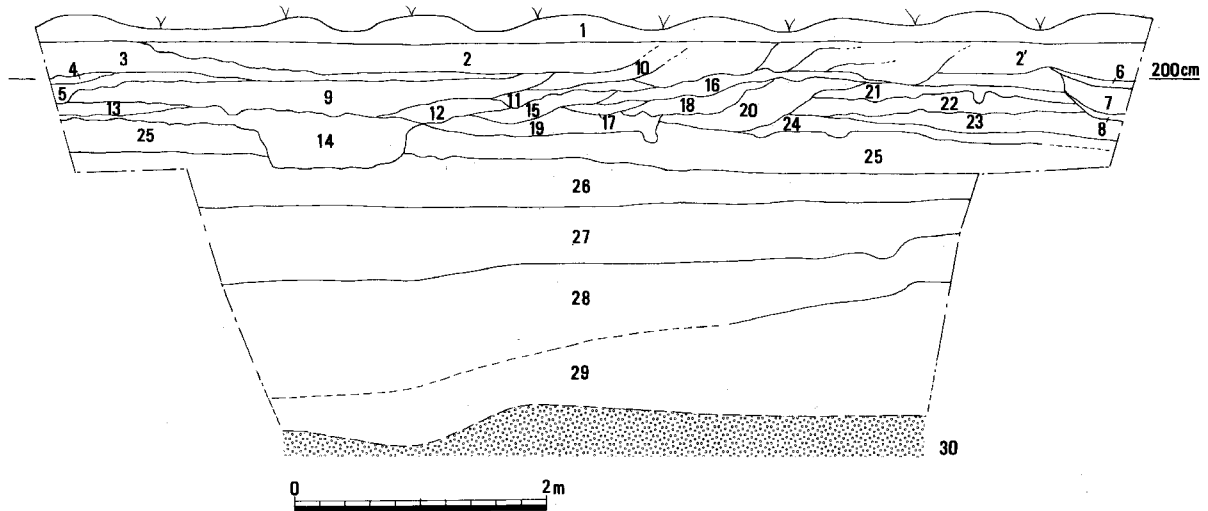
2 2区の調査概要

2区は、1区と農道を挟んだ南側に位置し、3区とは北西からの用水路を境とする。また南西側には現代用水路が流れる。試掘坑7～9の知見と1・3区の調査状況から、河道の堆積状況を把握する目的でG3・4を設定した。結果は、G3・4でよく似た堆積状況を示し、1区のG2や3・4区とは異なっている。つまり、G2や3・4区ではみられない砂層の顕著な堆積がG3・4にみられ、2区に近世以降の河道が位置することである。この旧河道は東から西に向かって徐々に流れを寄せたことが判り、最終的に現代用水路に収斂したものと推定される。また、下流の3・4区にみられないことから、3・4区間においては現代用水路に重なる流路である可能性が高い。なお、礫層については、



- | | |
|--|--|
| 1 廃材堆積 | 22 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質微砂 |
| 2 現代耕作土 | 23 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質微砂 浅黄色 (2.5Y7/3) 微砂斑含 |
| 3 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 上部Fe沈着 | 24 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質微砂 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂斑含 |
| 4 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質微砂斑含 Fe沈着 | 25 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質砂 |
| 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質砂 | 26 浅黄色 (2.5Y7/4) 粗砂 |
| 6 黄褐色 (2.5Y5/5) 砂質土 | 27 灰青褐色 (10YR5/2) 砂 |
| 7 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土 粗～細砂多含 | 28 灰色 (5Y6/1) 砂と黄灰色 (2.5Y6/1) 粗砂互層 |
| 8 灰オリーブ色 (5Y5/3) 微砂 | 29 灰色 (5Y6/1) 砂～粗砂と黄灰色 (2.5Y6/1) |
| 9 灰オリーブ色 (5Y5/3) 微砂 灰オリーブ色 (5Y6/2) 微砂斑含 | 30 灰色 (5Y6/1) 粗砂から細砂 |
| 10 灰色 (5Y5/1) 粘質砂 灰色 (10Y6/1) 砂斑少含 | 31 灰色 (5Y6/1) 砂～粗砂と黄灰色 (2.5Y6/1) 砂の互層 |
| 11 オリーブ黄色 (7.5Y6/3) 粗砂 灰色 (10Y6/1) 粗砂含 | 32 緑灰色 (10G5/1) 粘質微砂～微砂 |
| 12 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 粗砂 灰色 (10Y6/1) 微砂薄層含 | 33 緑灰色 (10G5/1) 粘土 |
| 13 灰色 (10Y5/1) 粘質微砂 オリーブ灰色 (10Y6/2) 微砂～粗砂含 | 34 緑灰色 (10G5/1) 粘土 |
| 14 灰赤色 (2.5YR5/2) ～明席褐色 (2.5YR5/6) 砂～粗砂 | 35 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土 |
| 15 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質微砂とオリーブ灰色 (2.5GY6/1) 微砂 | 36 緑灰色 (5G5/1) 粘土 |
| 16 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 砂 灰色 (10Y6/1) 砂含 | 37 緑灰色 (10G5/1) 微砂 (粘質) |
| 17 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 砂～粗砂 灰色 (10Y6/1) 砂含 | 38 青灰色 (5BG5/1) 粘土 |
| 18 灰色 (7.5Y5/1) 微砂 灰色 (7.5Y6/1) 微砂斑含 | 39 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土 (ピート層) 植物遺体炭粘多含 |
| 19 灰オリーブ色 (7.5Y5/1) 砂質土 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂多含 | 40 灰色 (N6/) 砂 灰色 (N5/) 粘土斑含 |
| 20 灰色 (7.5Y5/1) 粘質微砂 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂～細砂多含 | 41 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土 緑灰色 (10G5/1) 砂含 |
| 21 にぶい赤褐色 (5YR4/4) 微砂～粗砂 | 42 砂礫層 小児頭大円礫含 |

第8図 2区G3北壁土層断面図 (1/60)

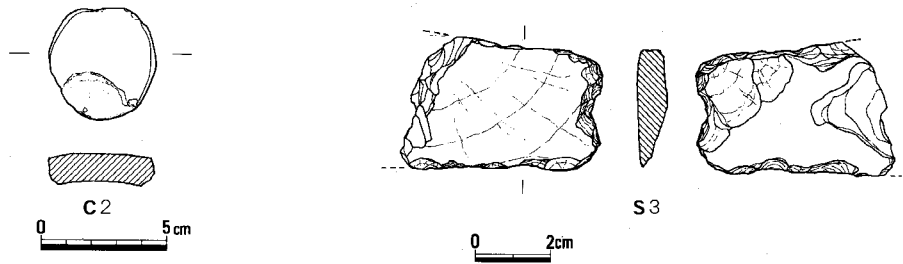


- 1 現代耕作土(畑地) 2層上部に鉄沈着層顕著
- 2 にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘質砂~粗砂
- 2' にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘質微砂~砂
- 3 にぶい黄褐色(10YR 6/3)微砂 灰黄色(2.5Y 7/2)微砂塊含
- 4 明黄褐色(10YR 6/6)微砂
- 5 褐色灰(10YR 6/1)砂
- 6 緑灰色(5G 5/1)粘質砂
- 7 灰白色(10Y 7/1)~浅黄色(5Y 7/3)微砂と灰色(10Y 6/1)粘質微砂の薄い互層
- 8 灰色(10Y 6/1)微砂と緑灰色(10G 5/1)粘質微砂の互層
- 9 緑灰色(5G 5/1)粘質砂~微砂塊と灰色(5Y 6/1)粗砂塊で充填
- 10 灰黄褐色(10YR 5/2)粘質砂~粗砂 黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土塊含
- 11 灰色(10Y 5/1)粘質微砂から砂(Fe沈着)
- 12 緑灰色(10G 5/1)粘質砂~砂 灰色(5Y 6/1)砂塊含
- 13 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘土 黄灰色(2.5Y 6/1)砂塊含 灰白色(7.5Y 7/2)微砂斑含
- 14 灰色(10Y 6/1~5/1)砂~粗砂 下部は粗砂多い
- 15 灰色(5Y 6/1)砂~粗砂
- 16 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)微砂 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)砂~粗砂塊含
- 17 オリーブ灰色(5GY 5/1)粘質微砂~砂 灰色(5Y 6/1)砂含
- 18 緑灰色(10GY 5/1)粘質微砂
- 19 灰色(5Y 6/1~5/1)砂~粗砂 オリーブ灰色(5GY 6/1)粘質微砂層
- 20 緑灰色(10GY 5/1)粘質微砂と緑灰色(10GY 5/1)微砂の薄い互層 灰色(5Y 6/1)砂塊含
- 21 灰白色(7.5Y 7/2)微砂~砂 オリーブ灰色(5GY 6/1)粘質微砂薄層含
- 22 暗緑灰色(10G 4/1)粘質微砂 灰色(5Y 6/1)微砂塊含
- 23 緑灰色(7.5GY 6/1)微砂
- 24 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粘質微砂 オリーブ灰色(2.5GY 6/1)微砂塊含
- 25 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粘土 暗緑灰色(10GY 3/1)粘土塊少含 灰白色(7.5Y 7/2)微砂斑含
- 26 緑灰色(10GY 5/1)粘土
- 27 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粘土 炭粒 植物遺体多含
- 28 暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)粘土~微砂粘土 炭粒 植物遺体含 にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘質微砂斑含
- 29 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)微砂~粘質微砂 炭粒 植物遺体含
- 30 砂礫層

第9図 2区G4北壁土層断面図(1/60)

その上面がG2で海拔1.5m以下なのに対して、G3では海拔0cm前後、G4では海拔-70cm以下となり、G2・3間で急激に深くなる。これらの礫層が同一層である確認はできないが、いずれも激しい湧水がみられる。

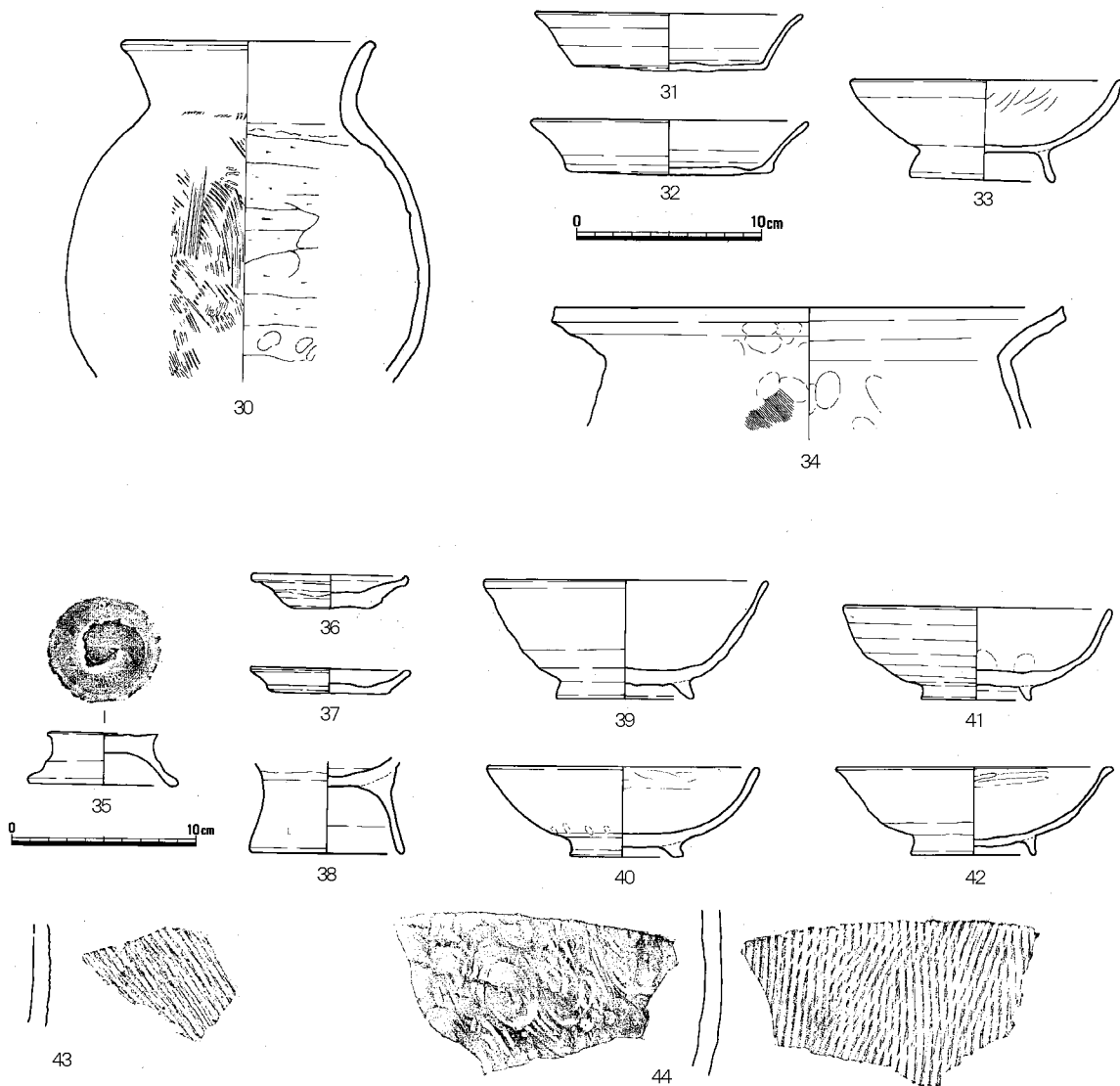
第8図は、1区のG2から約30m南側に位置するG3の土層断面図である。畑地である現代耕作土直下から約1mまでの深さについては、砂の顕著な堆積である。各層は東から西に向かって傾斜し、その底面は激しい凹凸がみられる。これらの堆積は激しい流水によるものと考えられ、その流水は近世以降の河道によるもので、流路を東から西へ移動させたものと理解する。つぎに、近世以降の河道より下層の礫層までは粘土層であり、大半は植物遺体を多く含むピート層である。湿地状態か河道の滞水によって堆積したものと考えられる。後述するように、古代から中世の土器と戦国期の金属遺物が出土している。最下層は礫層で、その上面の海拔高は西端で25cm、東端で-25cmを測り、西から東に傾斜している。



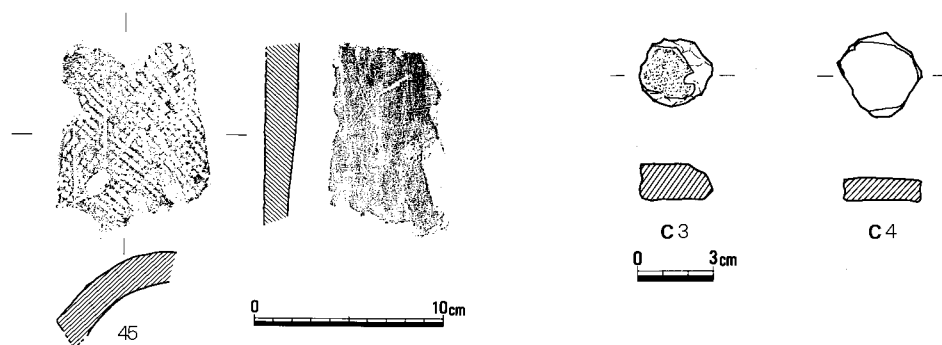
第10図 2区出土遺物1（弥生時代；1/3・1/2）

第9図は、G 3から約12m南側に位置するG 4の土層断面図である。現代耕作土直下から約70cm～1mの深さについては、近世以降の河道による砂の顕著な堆積によるもので、流路を東から西へ移動させたことが判る。それ以下は2.3～2.5mと厚いPEAT層で、後述する古代の遺物を含む。最下層の礫層上面の海拔高は、-70～-90cmを測り、深くなる。

第10図は、近世以降の河道内から出土した遺物を掲載している。C 2は弥生土器片転用の円板状土製品、S 3はサヌカイト製の石庖丁である。



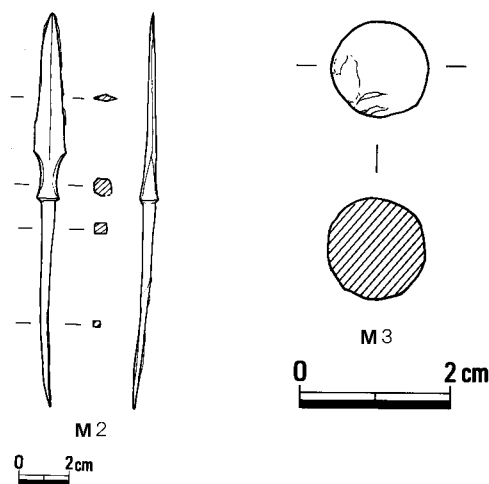
第11図 2区出土遺物2（古代～中世土師器・須恵器；1/4）



第12図 2区出土遺物3（中世遺物；1/4・1/3・1/1）

第11図は、古代の土師器30～34、中世の土師器35～42、須恵質土器43・44を掲載している。その多くがG3・4の粘土・ピート層から出土している。

30はやや下膨れの甕である。31・32は杯で、外底面を除き赤色顔料を塗布する。33は高台付椀、34は甕である。時期は30が7世紀代、その他は幅があるが平安時代と考えられる。35は台で、ヘラ切りする。36・37は小皿、38は高台付椀の台である。39～42は灰白色の色調を呈する土師質高台付椀である。39は口径15.2cm、器高6.4cm、40～42の口径は14.5cm前後、器高4.7～5cmを測る。43は亀山焼の甕、44は東播系の甕と考えられる。以上の時期は、おおむね中世前葉に属するものと考えられる。



第13図は、中世遺物として瓦45、円板状土製品C3・4、鉄鏃M2、鉛弾M3を掲載している。45は凸面は格子目叩きで布目の須恵質の丸瓦で、亀山焼と考えられる。C3は瓦、C4は備前焼を転用している。M2・3は第8図の第38層から出土したもので、M2は全長15.8cm、M3は径1.35cmを測る。ともに戦国期に属する資料として注目される。（高田）

第3節 3区（G5、試掘坑10）の調査

1 調査概要

3区は新邸遺跡の南東側、北西から南東に流走する用水路の東側に所在している。

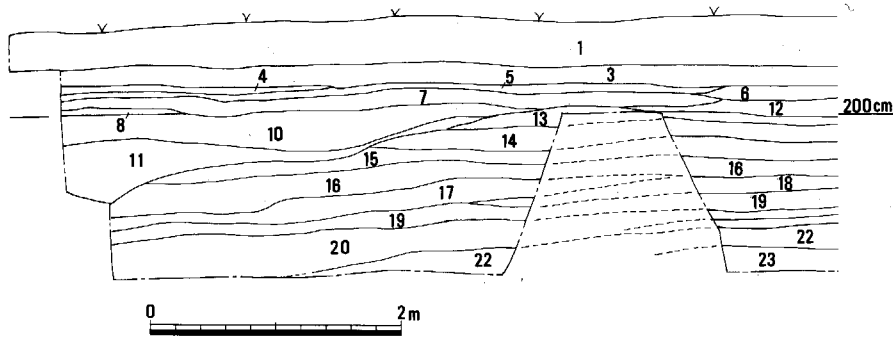
確認調査は3区の中央部に長さ6m、幅1.5mの試掘坑10を設定して行った。調査の結果、3区は中世の河道内であると判断したが、遺物が多数出土したため、3区北側部分（G5区）の調査を行うことになった。

G5区はいびつな台形状を呈し、調査面積は112㎡である。調査区内は基本的に中世に埋没した河道内であり、グライ化した粘土および粘質土と砂が互層に堆積していた。河道埋土からは備前焼の播鉢や早島式（吉備系）土器椀などが出土している。さらにそれらの遺物とともに海拔1.5m付近（主に第17層中）で動物遺存体（ウシの上腕骨・中手骨・肋骨・下顎骨など）がやや密集した状態で検出され

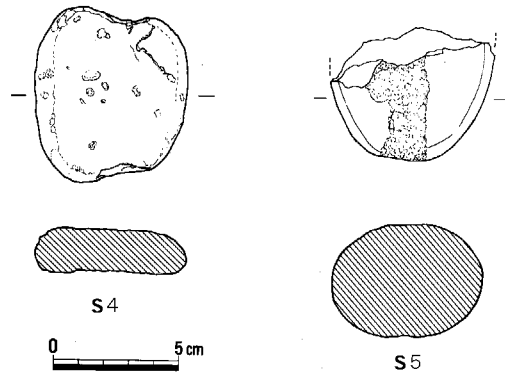
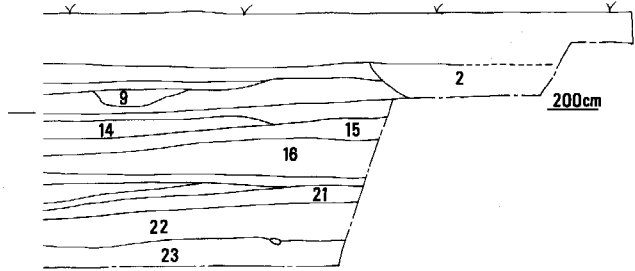
第3章 新邸遺跡

た。詳細は付載5に譲るが、下顎骨には加工痕らしき穿孔が認められる。

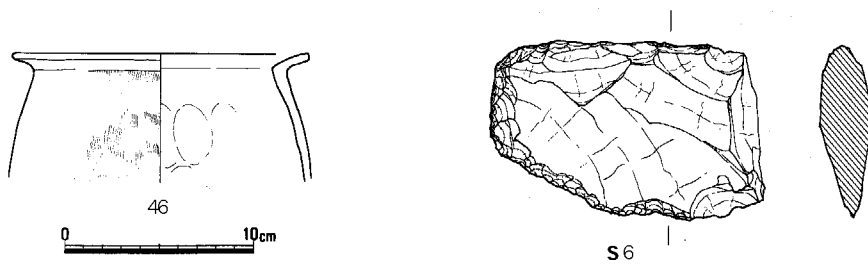
この中世の河道埋土を掘り下げると、調査区東壁の北端から7m南側と南壁の東端から4m西側を結ぶラインから東側で、微高地が検出された。この微高地は北西に向かって緩やかに傾斜し、北西端は先述の中世の河道により削平されている。微高地は調査区東壁際では海拔約1.4mを測り、北西端部では約1.2m前後であった。この微高地の西端部付近から7世紀代の遺物が土器溜り状に検出され、それらの遺物は微高地直上に薄く堆積していた暗褐色砂中から出土している。(小嶋)



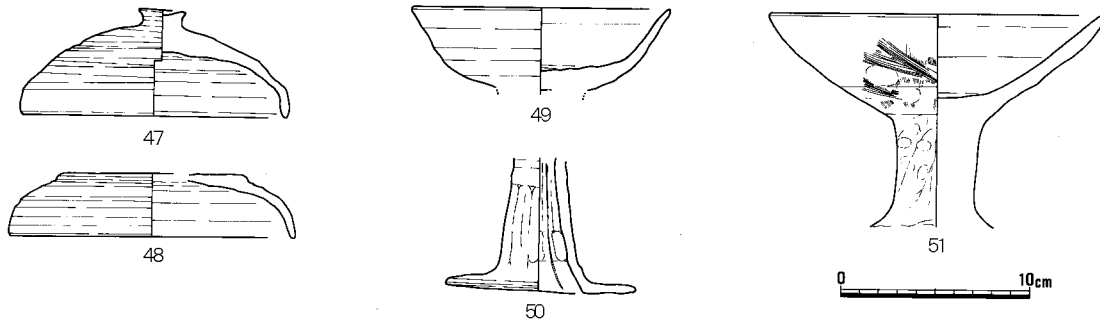
- 1 表土
- 2 明赤褐色 (5YR/4) 土
- 3 にぶい橙色 (5YR 6/4) 砂質土
- 4 にぶい橙色 (5YR 5/6) 砂質土
- 5 明赤褐色 (5YR 5/6) 細砂
- 6 褐灰色 (7.5YR 6/1) 砂質土
- 7 にぶい赤褐色 (5YR 5/4) 土
- 8 赤灰色 (2.5YR 5/1) 細砂
- 9 褐灰色 (10YR 5/1) 細砂
- 10 灰黄色 (2.5YR 7/2) 砂質土
- 11 褐灰色 (7.5YR)
- 12 にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 細砂
- 13 褐灰色 (10YR 6/1) 粘質微砂
- 14 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質微砂
- 15 青灰色 (10BG 5/1) 粘質微砂
- 16 青灰色 (10BG 5/1) 粘質土
- 17 青灰色 (10BG 5/1) 微砂
- 18 青灰色 (10BG 5/1) 粘質土
- 19 青灰色 (10BG 5/1) 細砂
- 20 青灰色 (10BG 5/1) 粘質微砂+青灰色粘質土
- 21 青灰色 (10BG 5/1) 粘質土
- 22 灰色 (N 5/) 微砂
- 23 黒褐色 (5YR 3/1) 粘質微砂



第13図 3区G5北西壁土層断面図 (1/60)



第14図 3区出土遺物1 (弥生土器・石器; 1/4・1/3・1/2)



第15図 3区出土遺物2（須恵器・土師器；1/4）

2 出土遺物

3区の出土遺物は、1・2区の出土遺物と共通する時期の弥生土器も散見するが、6世紀後半から7世紀代、さらに中世にかけての幅広い土器類が確認されている。

第14図に、弥生時代に比定される石製品・石器、弥生土器を掲載する。

S4・5はいずれも打製の石錘で前者はいびつな形状を示すが、ほぼ完全である。後者は1/2以下の残存であるが、比較的丁寧な作りで、縦方向の溝が明瞭に観察される。いずれも包含層中から採集されたものであるが、時期的には弥生時代の時期的範囲に比定される可能性が高い。

46は中期中葉に比定される甕である。1区で同時期に比定される壺がみられるが（6～8など）やはり新邱貝塚とほぼ同時期の弥生土器と考えて良いだろう。

第15図には古墳時代の出土遺物を掲載する。

47～49は須恵器で、前者は有蓋高杯の扁平なツマミをもつ蓋で残りも良い。後者は杯の蓋で、径は47のわずかに上回る。

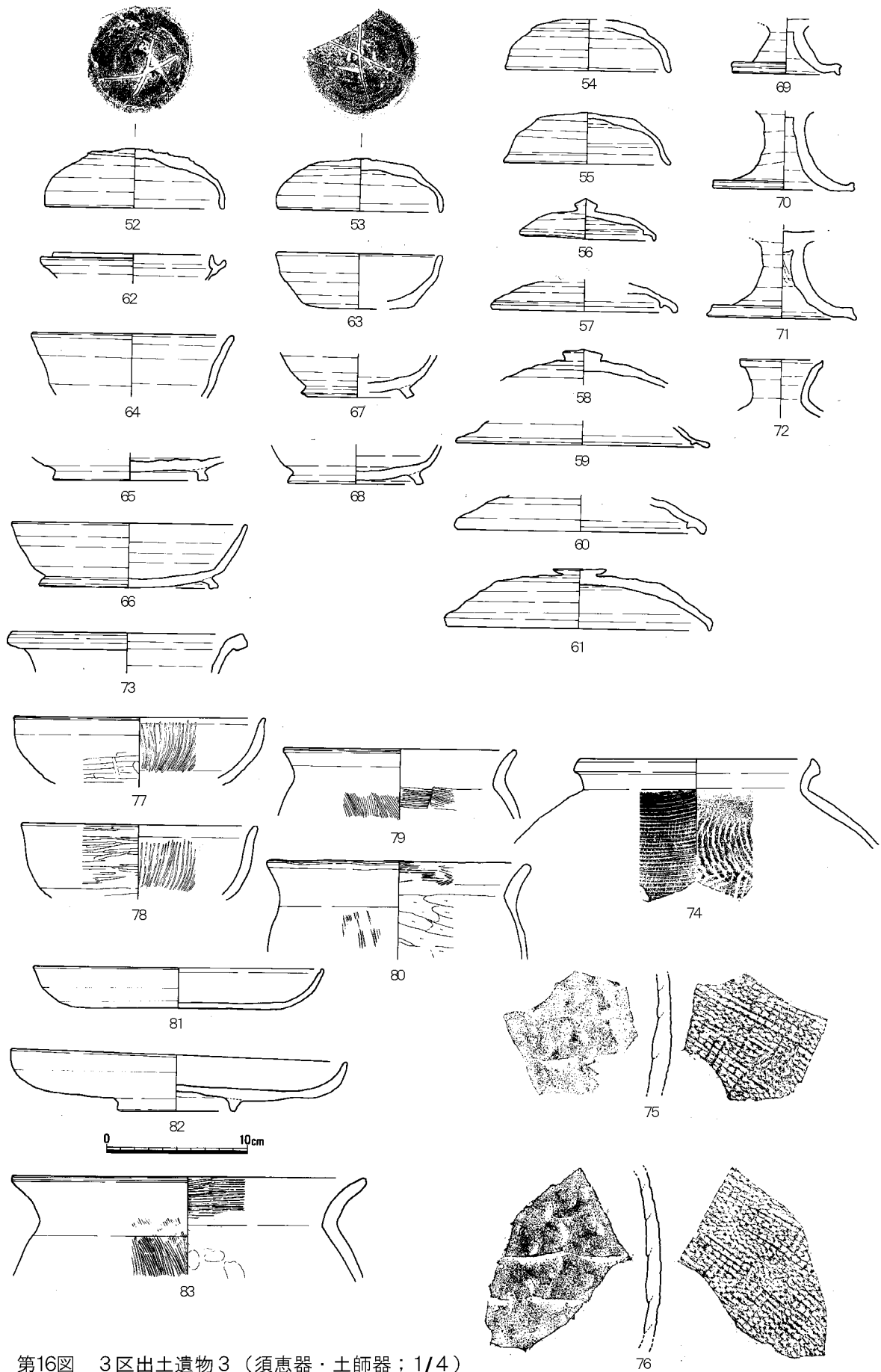
50・51は土師器でいずれも高杯である。51は脚柱は中実で49・50より後出的である。47・48とほぼ同時期に比定されるだろう。

第16図には7世紀前半から後半、降って8世紀前半までの出土遺物を掲載する。これは古墳時代終末期から飛鳥・藤原期、奈良時代にかけての時期と言い換えることもできる。本書での古代1～3期にあたる遺物が含まれる。

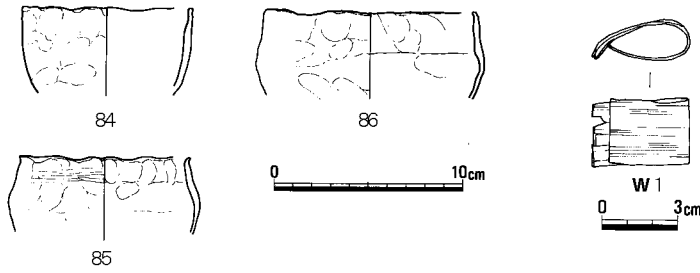
52～61はいずれも須恵器の蓋である。52・53には天井部に×のヘラ記号がみられ、胎土や焼成からも同一窯の生産品と推定される。56は天井中央に小型の宝珠ツマミをもつ。口縁内側に身受けのカエリがあるが、口唇部より下に位置しない。

57・59・60も身受けのカエリを持つ点で共通し、7世紀第4四半期、飛鳥・藤原IV期に比定される可能性が高い。58・61の天井部には扁平なツマミがつく。62～66はいずれも杯である。62は6世紀末から7世紀前半に比定される。65～68には外底部に高台が取り付けられる。断面台形の高台はやや外方する。74は横瓶で特徴的なカキ目調整が見られる。75・76は同一器種（甕？）の破片であるが、外面は格子目タタキで仕上げられ、焼成堅緻である。

77～83は土師器である。77・78は小型の供膳器種で、内外面には丁寧なミガキが見られる。内面には暗文が施され、特徴的な口唇部とともに注目される。81・82は皿で、後者には外底部中ほどに貼り付け高台が付けられる。79・80・83はいずれも小型・中型の甕である。



第16图 3区出土遺物3 (須惠器・土師器; 1/4)

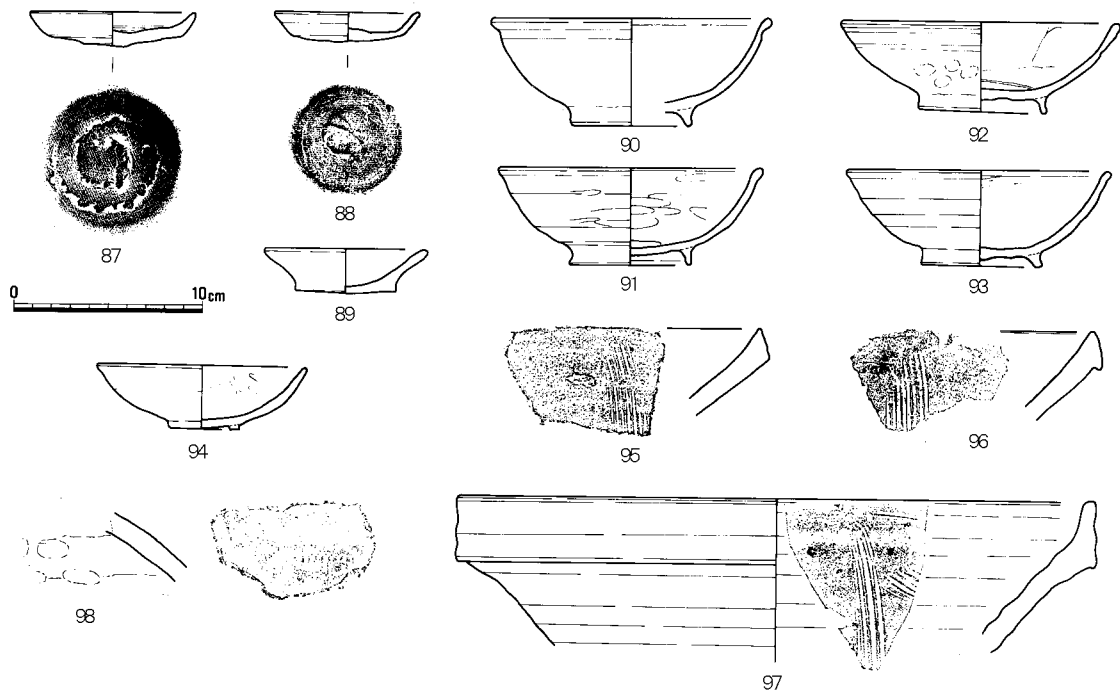


第17図 3区出土遺物4（製塩土器・木製品；1/4・1/3）

84～85は製塩土器と考えられ、統一された形状を示さず、作りが粗雑である点が特徴といえる。暗褐色を呈する小片が集中して出土し、口径が復元推定できたものを作図して掲載した。W1とW2は近接して出土した。前者はサクラの樹皮と推定され曲物に使用される綴じ皮の材料と考えられる。後者は曲物の底板（ヒノキ）と考えられ、周縁は焼け焦げている。綴じ穴の配列からやや楕円形の容器が推定される。時期的には第18図に掲げる中世土器とほぼ同時期に比定される。

87～94は土師器である。皿（87～89）と椀（90～94）があり、後者はいわゆる早島式椀（吉備系椀）と呼称されている。90・91など口径が大きく、高い高台をもつ椀と、94のように小ぶりでやや不安定な高台をもつものがあるが、概ね鎌倉時代の時期的範囲で、一般的に使用された日常什器であろう。

95～97は備前焼播鉢でいずれも内面に放射状の卸し目が観察される。98は常滑焼と考えられ、甕の肩部の小片である。特徴的な格子目のタタキが灰緑色の自然釉の素地に観察される。（岡田）



第18図 3区出土遺物5（土師器・備前焼他；1/4）

第4節 4区（G6、試掘坑11・12）の調査

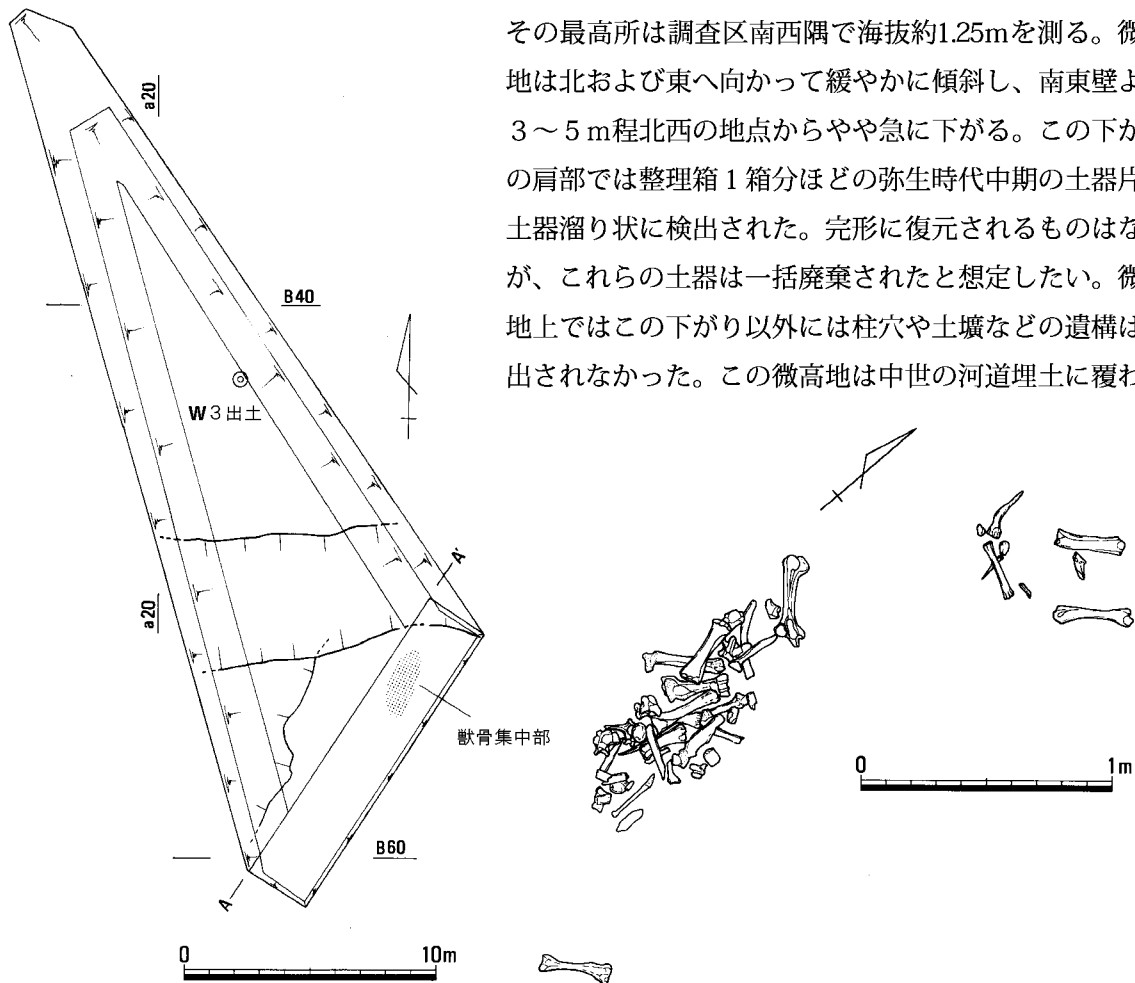
1 調査概要

4区は新邸遺跡の南西側に所在し、調査区の北東および南西側では、北西から南東に流走する水路が走っている。

確認調査は、4区中央部からやや北側に試掘坑11（6×1.5m）と4区南端に試掘坑12（13×3m）を設定して行った。調査の結果、両試掘坑とも中世に埋没した河道内と想定される堆積状況を呈していた。ただし試掘坑12の東側で動物遺存体が密集して検出され、さらに遺物が多数出土したため、4区の全面調査を行うこととなった。

G6区は平面三角形状を呈する調査区で、その面積は255㎡を測る。検出された遺構は河道状の溝のみであり、その他に微高地およびその下がり、動物遺存体の一括廃棄が確認された。調査区は埋土や付近の調査区の状況から基本的に中世の河道内であり、グライ化した粘土または粘質土と細砂ないしは粗砂が互層で堆積している。この河道底面を確認するため海拔約1.0mまで掘り下げたが、激しい湧水のため検出できなかった。

微高地（第20図第14層）は調査区の南東側で検出され、その最高所は調査区南西隅で海拔約1.25mを測る。微高地は北および東へ向かって緩やかに傾斜し、南東壁より3～5m程北西の地点からやや急に下がる。この下がりの肩部では整理箱1箱分ほどの弥生時代中期の土器片が土器溜り状に検出された。完形に復元されるものはないが、これらの土器は一括廃棄されたと想定したい。微高地上ではこの下がり以外には柱穴や土壌などの遺構は検出されなかった。この微高地は中世の河道埋土に覆われ



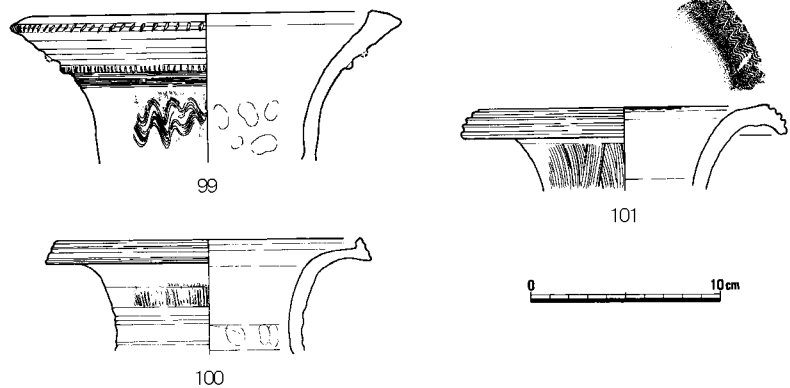
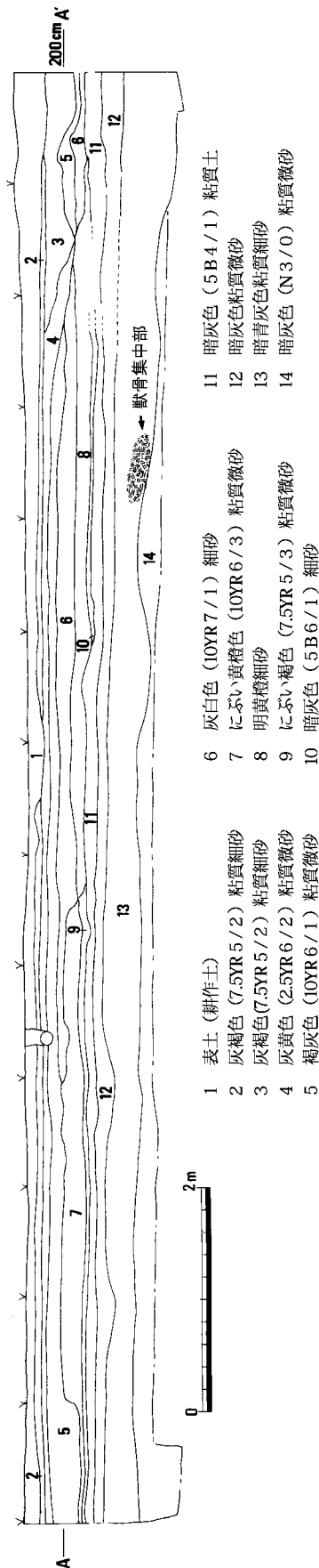
第19図 4区発掘区域図、獣骨出土状態（1/300・1/30）

しており、下がり端部は後述する近世の河道状の溝により削平されている。

動物遺存体の一括廃棄は調査区の北東端で検出された。出土レベルは海拔1.5m前後を測る。これらは大きく南側と北側に分布域が分かれ、南側は1.2m×50cmの範囲に密集し、北側は径60cmの範囲に散在している。南側では主にウシの遺存体、北側では主にウマの遺存体で占められており、分布域別に目が分かれていることは興味深い。南側では計37点の動物遺存体が出土し、その部位は脛骨・肋骨・足根骨・頸骨・胸骨・距骨・胸椎・中足骨・頸椎・上腕骨・大腿骨・橈骨・尺骨等である。ただしこれらが一頭のウシからなるものかは不明である。北側は計9点出土し、その部位は大腿骨・頸骨・中足骨・足根骨・椎骨が認められる。その他にこの付近からは、ウシの環椎・肩甲骨・上腕骨等が出土している（詳細な分析は付載5に掲載している）。これらはいずれも先述の弥生時代中期の微高地直上付近から出土しているが、動物遺存体の周囲からは中世の遺物が出土し、さらに中世の河道埋土中から検出されていることから、動物遺存体の帰属時期は中世と想定した。

西から東へと流走している河道状の溝は調査区中央部からやや南側で検出された。遺構は耕作土直下から確認され、幅は検出面で約5mを測る。壁面は緩やかな弧状を呈して立ち上がる。溝埋土は粘土および粘質土と砂が互層に堆積し、最下層では灰色粗砂が厚く堆積していた。この粗砂を掘り下げている途中で湧水が発生したため、底面を確認できなかったが、検出された最低面は海拔高75cmである。

この遺構の時期は、出土遺物や検出状況から、中世もしくは近世に比定される。(小嶋)

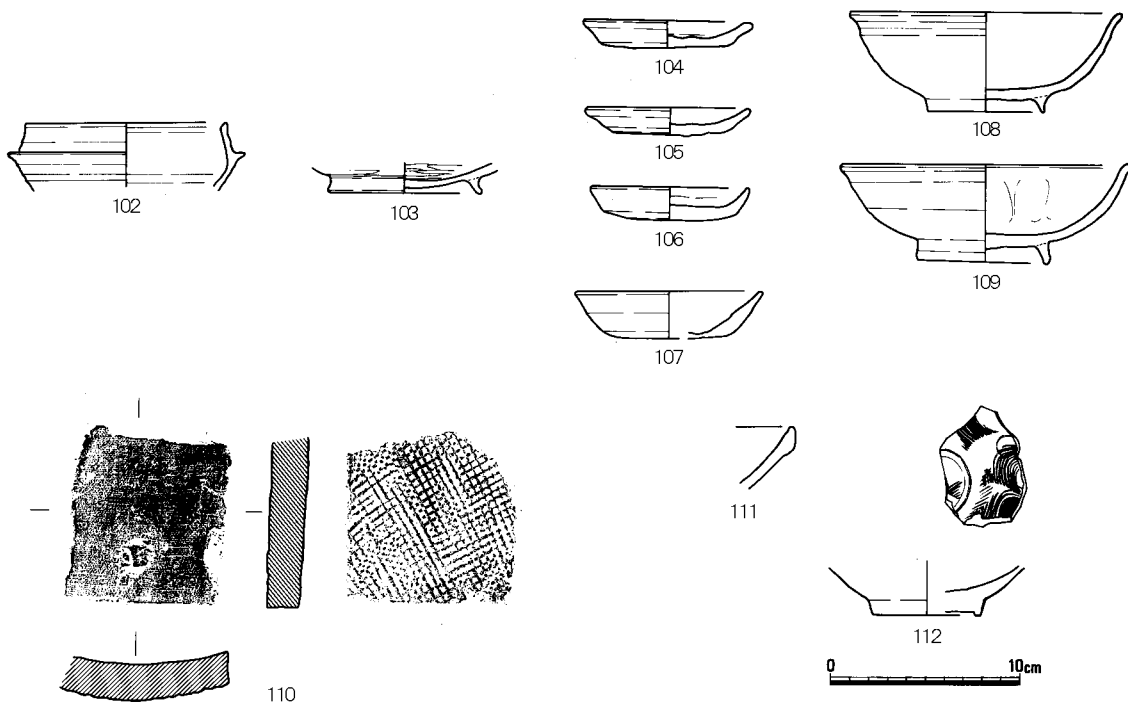


第21図 4区出土遺物1 (弥生土器; 1/4)

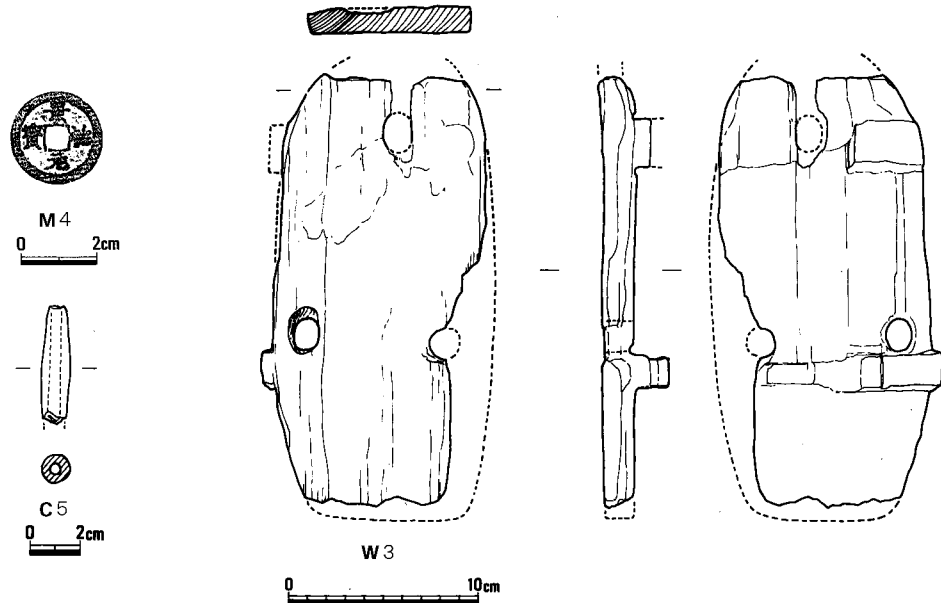
2 出土遺物

本調査区からは弥生時代中期から中・近世にかけての遺物が出土した。

弥生時代中期の土器は99～101を図示した。すべて微高地下がりの肩部から出土したものである。壺99はやや肥厚させた口縁端部に刻み目を施し、口縁下部に2条の突帯を貼り付けている。上の突帯は剥落しており不明であるが、下の突帯には刻み目を加飾している。頸部には櫛描き波状文が施されている。壺100は口縁部を外反させ、端部を上方に拡張し、そこに凹線を3条巡らしている。また頸部にも凹線が施されている。壺101は外反させた口縁上部に櫛描き波状文を施し、垂下させた口縁端部には凹線が4条認められる。土器102～112、鉄器M4、土製品C5、木製品W3はいずれも中世の河道内からの出土である。102は須恵器杯身、103は黒色土器で、黒色土器の内面には暗文状のミガキが認められる。104～107は土師器の皿である。104～106は早島式（吉備系）土器の皿で、色調は灰白色を呈し、口径8.5cm前後、器高2cm前後を測る。107は浅黄色を呈し、口径9.8cm、器高2.5cmを測る。内面には煤が付着していた。108・109は早島式（吉備系）土器の椀である。108は口縁部をわずかに外反させ、外面はヨコナデ、内面はナデの後若干ミガキが施されている。高台の断面形は三角形を呈する。体部は丸みを帯び、口径14.3cm、器高5.3cmを測る。109は口縁端部が若干肥厚し、端部をわずかに外反させる。高台は108と同様貼り付け高台であるが、108と比べると高く、また厚みをもつ。内外面の調整は剥落気味のため不明である。口径15.1cm、器高5.2cmを測る。110は平瓦破片で、凹面は布目、凸面は格子目の叩きが観察できる。M4は「景祐元寶」であり、残存状況は良好である。C5は土錘、W3はスギ製の連歯下駄である。出土位置は第19図の調査区平面図の◎印である。出土レベルは海拔1.02mであった。台部と歯部は一木製である。台部の形状は、原状をとどめている部位が台表左側縁のみであるため詳細な復元は困難であるが、後部は方形を呈し、前部は円みを帯びていると想定される。台部



第22図 4区出土遺物2（中世遺物；1/4）



第23図 4区出土遺物3（銭貨・土錘・下駄；1/2・1/3・1/4）

からほぼ垂直に下りる歯部は後歯の右側のみが生きており、磨耗が顕著である。現状の歯部の高さは1.8cmであった。歯部の厚さは前歯が2.5cm、後歯が1.8cmを測り、前歯の方が厚い。前緒孔は前歯の中央付近に位置していることから、前歯は中央付近が挟り込まれていたと想定できる。横緒孔は後歯より前方に位置している。台表の磨耗状況が前緒孔の左側が弧状を描き、右側が円形を呈していることから、左履きの下駄と考えられる。木取りの方向は台部とほぼ45°の角度を測る。（小嶋）

第5節 小 結

新邸遺跡では、明確な人工的な生活遺構の痕跡を検出することはできなかったが、遺跡の本体である新邸貝塚と同時期の弥生土器を得ることができた。調査区の全体は、推定幅約60m以上の旧河道であることも判明した。最終的な埋没時期は中世、室町時代前半には大規模な流路は姿を消し、水田耕作が開始されたことが推察される。

出土遺物の中でもっとも古い晩期の縄文土器は、ローリングを受けており、調査地の北方に存在すると思われる離れた遺跡から流れ着いたことが想像される。

後期弥生土器の多くは多少のローリングによる磨滅が認められたが、石器の出土に加えて、小片ながら分銅型土製品の出土も特筆されるだろう。古墳時代の出土遺物の中でも、28・29の古式須恵器の出土は注目される。後述の仏生田遺跡2区の朝鮮半島の影響を受けたとみられる高杯片77（第5章土器番号）とあわせ、貴重な資料が得られたといえる。古代の出土遺物の中では、7世紀代のまとまった須恵器・土師器の出土は、官衙遺跡から出土しても違和感のない、供膳器種が含まれている点に注意を払う必要があるだろう。遺跡から眺望できる古代山城、鬼城山と同時期と考えられる時期に、周辺に古代集落が形成されていたことを示すものであろう。

中世の出土遺物では、4区でのまとまった獣骨のほかに、16世紀後半に比定されるM2・M3の鉄鏃、鉛弾がある。これらは、高松城の水攻めに近い時期の出土遺物として興味深い。（岡田）

新邸遺跡土器観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	形態・手法の特徴など
1	S10	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	縄文土器	深鉢	75YR/4にぶい橙色	長石・石英	口唇部に刻み目、晩期中葉
2	S13	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6	縄文土器	深鉢	25Y8/2灰白色	長石・石英	磨減、晩期後半
3	S09	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	縄文土器	浅鉢	25Y7/1灰白色	長石・石英	磨減、晩期後半
4	S11	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6第6層	縄文土器	浅鉢	10YR/3にぶい黄褐色	長石・石英	磨減、晩期後半
5	S12	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6第7層	縄文土器	深鉢	75YR/3褐色	長石・石英	貼付突帯に刻み目、晩期後半
6	S4	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	5YR/2灰褐色	長石多	刻み目をもつ貼付突帯3条
7	S0	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	5/3にぶい褐色	石英多	口縁部にへら描き連続文
8	S6	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	8/3浅黄色	長石・石英	口縁部に、2個単位の円形浮文
9	S8	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	6/8褐色	長石・石英	
10	S5	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	7/3にぶい黄褐色	長石・石英	
11	S8	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	器台?	5YR/6明赤褐色	長石・石英	凹線5条に鋸歯文を加飾
12	S5	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	器台	25YR/6褐色	長石・石英	2個一組の円孔を飾る
13	S7	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	器台?	25YR/6褐色	長石・石英	口縁部に浅い鋸歯文
14	S3	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	5YR/6褐色	長石・石英	
15	S3	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	甕	6/8褐色	石英・長石	
16	S6	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	甕	5YR/6褐色	石英・長石	加熱痕跡なし
17	S5	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	6/6褐色	長石・石英	
18	S4	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	高杯	7/6褐色	長石・石英	
19	S9	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	鉢	25YR/6褐色	長石・石英	
20	S0	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	壺	25YR/8褐色	石英	内面に煤付着
21	S1	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	弥生土器	台付き壺?	10YR/3浅黄褐色	石英	
22	S7	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	土師器	甕	7/2にぶい黄褐色	長石・雲母	
23	S1	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	土師器	甕	7/3にぶい黄褐色	石英・長石	
24	S4	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	土師器	甕	5YR/6褐色	長石・石英	口縁部櫛描き沈線
25	S0	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	土師器	甕	75YR/4褐色	長石・石英	口縁部櫛描き沈線
26	S9	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	土師器	甕	にぶい褐色/3	長石・石英	体部外面に斜行タタキ
27	S2	1区	河道砂礫層	新邸1区	T6砂礫層	土師器	甕	7/2灰黄色	石英・長石	
28	S9a	1区	包含層	新邸1区	T7包含層	須恵器	壺?	N6/灰色	微砂	櫛描き波状文を飾る
29	S9b	1区	包含層	新邸1区	T7包含層	須恵器	壺	N5/灰色	長石・石英	櫛描き波状文、刺突文を飾る
30	S8	2区	河道	新邸2区	T18第9層 ピート層	土師器	壺	25Y7/2灰黄色	長石・石英	
31	S0	2区	河道	新邸2区	T19ピート層	土師器	杯	75YR/4にぶい橙色	長石・石英	赤褐色の顔料塗布?
32	S9	2区	河道	新邸2区	T19ピート層	土師器	杯	5YR/4にぶい橙色	長石・石英	赤褐色の顔料塗布
33	S5	2区	河道	新邸2区	T19ピート層	土師器	椀	7/2にぶい黄褐色	長石	煤付着
34	S5	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	甕	10YR/3にぶい黄褐色	砂粒	
35	S0	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	台	25Y8/1灰白色	微砂	
36	S5	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	皿	5Y8/1灰白色	石英	底部は分厚い
37	S6	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	皿	25Y8/2灰白色	微砂	
38	S1	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	椀?	25Y8/2灰白色	長石・石英	台付き椀の高台
39	S4	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	椀	25Y8/1灰白色	長石・石英	早島式椀
40	S2	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	椀	25Y8/2灰白色	長石・石英	早島式椀
41	S5	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	椀	25Y8/1灰白色	石英	早島式椀
42	S8	2区	河道	新邸2区	T18	土師器	椀	25Y7/3浅黄色	石英・長石	早島式椀
43	S03	2区	河道	新邸2区	T18	須恵器	甕	N6/灰色	微砂	亀山焼
44	S06	2区	河道	新邸2区	T19ピート層	須恵器	甕	N7/灰色	長石・石英	東播磨の可能性あり
45	S07	2区	河道	新邸2区	T18第8層	瓦	丸瓦	N6/灰色	長石・石英	須恵質
46	S6	3区	微高地直上	新邸3区	微高地側溝	弥生土器	甕	25YR/8明赤褐色	石英・長石	煤付着
47	S9	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	25Y6/1黄灰色	長石・石英	有蓋高杯の蓋、天井部にツمام
48	S8	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	10YR/1褐灰色	長石多	
49	S2	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	高杯	N7/1灰白色	微砂	
50	S5	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	土師器	高杯	75YR/4にぶい黄褐色	石英	脚柱部完存、内面シボリ目
51	S6	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	土師器	高杯	5YR/3淡褐色	長石・石英	脚柱部中実、赤色酸化粒含む
52	S8	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N6/灰色	長石・石英	天井部に×印のへら記号
53	S3	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N6/灰色	長石	天井外面に×印のへら記号
54	S7	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	10YR/2灰黄褐色	長石・石英	煤付着
55	S4	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	5Y8/1灰白色	長石	身の可能性もある
56	S1	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N6/灰色	微砂	天井部に自然釉、乳首状のツمام
57	S7	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N4/灰色	長石・石英	口縁部内面にカエリ
58	S8	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N4/1灰白色	微砂	瓦質
59	S6	3区	微高地直上	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N6/1灰白色	石英	やや瓦質
60	S9	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	N6/青灰色	長石・石英	
61	S0	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	蓋	25Y8/1灰白色	微砂	
62	S1	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	N6/1灰白色	微砂	
63	S0	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	N21黒色	微砂粒	瓦質
64	S1	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	N7/1灰白色	微砂	
65	S9	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	N8/1灰白色	微砂	
66	S4	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	N6/灰色	長石多	体部外面に煤付着
67	S0	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	N7/1灰白色	長石・石英	壺の可能性あり
68	S23	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	5Y7/1灰白色	長石・石英	外底部火燵様の痕跡
69	S7	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	杯	5B1/1暗青灰色	微砂	
70	S5	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	高杯	N7/1灰白色	長石・石英	脚柱部完存
71	S4	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	高杯	N5/灰色	長石・石英	
72	S2	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	平瓶か壺?	10B7/1明青灰色	石英・長石	
73	S3	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	壺?	5YR/3淡橙～暗青灰色	微砂	横瓶の可能性あり
74	S7	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	横瓶	5B5/1青灰色	微砂	体部外面カキ目

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	器種	色調			胎土	形態・手法の特徴など
75	S04	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	甕	N / 灰白色			長石・石英	長方形の格子目タタキ
76	S05	3区	包含層	新邸3区	包含層	須恵器	甕	N8 / 灰白色			長石・石英	長方形の格子目タタキ
77	S12	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	杯	25 Y7 / 2 灰黄色			長石・石英	外面ケズリ、内面放射状暗文
78	S13	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	杯	5 YR7 / 6 褐色			長石・石英	体部外面ミガキ、内面放射状暗文
79	S00	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	甕	5 YR7 / 4 にぶい 褐色			長石・石英	煤付着
80	S6	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	甕	5 YR7 / 6 褐色			長石・石英	口縁部ひずみ
81	S4	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	盤	10 YR8 / 3 浅黄褐色			石英	口縁内側に段
82	S7	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	台付盤	75 YR8 / 4 浅黄色			長石・石英	
83	S1	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	甕	5 YR6 / 6 褐色			長石・石英	
84	S2	3区	包含層	新邸3区	包含層	製塩土器	鉢	5 YR6 / 6 褐色			長石・石英	
85	S3	3区	包含層	新邸3区	包含層	製塩土器	鉢	5 YR6 / 6 褐色			長石・石英	
86	S4	3区	包含層	新邸3区	包含層	製塩土器	鉢	25 Y8 / 2 灰白色			長石・石英	
87	S15	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	皿	10 YR7 / 3 にぶい 黄褐色			長石・石英	
88	S26	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	皿	8 / 2 灰白色			微砂	ヘラ切り
89	S18	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	皿	25 Y8 / 1 灰白色			長石・石英	白っぽい灰色
90	S17	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	碗	25 Y8 / 1 灰白色			長石・石英	早島式碗、全体的に磨滅
91	S19	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	碗	25 Y8 / 2 灰白色			微砂	早島式碗
92	S13	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	碗	25 Y8 / 1 灰白色			長石・石英	早島式碗
93	S22	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	碗	10 YR8 / 3 浅黄褐色			長石・石英	早島式碗
94	S73	3区	包含層	新邸3区	包含層	土師器	碗	10 YR8 / 3 浅黄褐色			石英	早島式碗
95	S01	3区	包含層	新邸3区	包含層	備前焼	播鉢	5 YR7 / 6 褐色			長石・石英	卸し目1条7本
96	S02	3区	包含層	新邸3区	包含層	備前焼	播鉢	N6 / 暗灰色			長石・石英	卸し目1条8本
97	S8	3区	包含層	新邸3区	包含層	備前焼	播鉢	10 F5 / 6 赤色			砂粒	卸し目1条6本
98	S08	3区	包含層	新邸3区	包含層	常滑	甕?	75 Y1 / 2			長石・石英	外面に平行タタキ目・深い緑色の釉
99	S7	4区	河道	新邸4区	河道	弥生土器	壺	10 YR6 / 2 灰黄褐色			長石・石英	頸部に波状文、口縁部にはキザミ目
100	S1	4区	河道	新邸4区	河道	弥生土器	壺	10 YR8 / 3 浅黄褐色			長石・石英	頸部には横位の凹線
101	S2	4区	河道	新邸4区	河道	弥生土器	壺	75 YR7 / 6 褐色			長石・石英	口縁内側上面に櫛描き波状文
102	S10	4区	河道	新邸4区	河道	須恵器	杯	N5 / 灰色			長石・石英	古式須恵器
103	S14	4区	河道	新邸4区	河道	黒色土器	碗	5 YR7 / 6 褐色			長石・石英	内面ヘラミガキ
104	S9	4区	河道	新邸4区	河道	土師器	皿	25 Y8 / 1 灰白色			石英・長石	
105	S8	4区	河道	新邸4区	河道	土師器	皿	5 Y8 / 1 灰白色			石英	
106	S12	4区	河道	新邸4区	河道	土師器	皿	25 Y8 / 1 灰白色			長石・石英	全体的に磨滅
107	S11	4区	河道	新邸4区	河道	土師器	皿	25 Y7 / 3 浅黄色			長石・石英	外底部ヘラ切り 後ナデ
108	S7	4区	河道	新邸4区	河道	土師器	碗	5 Y8 / 1 灰白色			長石・石英	早島式碗
109	S16	4区	河道	新邸4区	河道	土師器	碗	25 Y8 / 2 灰白色			長石・石英	早島式碗
110	S16	4区	河道	新邸4区	河道	瓦	平瓦	75 Y7 / 1 灰白色			長石・石英	亀山焼、凸面は格子目タタキ
111	S15	4区	河道	新邸4区	河道	白磁	碗	白色			精緻	
112	S14	4区	河道	新邸4区	河道	青磁	碗	緑灰色			精緻	見込みに櫛描き文

新邸遺跡土製品観察表

掲載番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
						最大長	最大幅	最大厚						
C1	新邸1区	河道	新邸調査区1区	T16 第6層	分銅形土製品		13600	950		白っぽい黄橙	長石・石英・角閃石	良好	弥生	復元最大径約14cm
C2	新邸2区	河道	新邸調査区2区	T18 第水田層下層	円板	4200	3200	1200	2800	10 YR7.5 にぶい黄橙	長石・石英	良好	弥生?	弥生土器片
C3	新邸2区	河道	新邸調査区2区	T18 第38層	土製円板	2600	2900	1500	1200	25 Y6.1 黄灰	長石・石英	瓦質	中世	互転用、布目あり
C4	新邸2区	河道	新邸調査区2区	T18 砂層	土製円板	3300	3100	1000	1300	25 Y8.3 淡黄	長石・石英	良好	中世	素材は備前焼、自然釉
C5	新邸4区	河道	新邸調査区4区		土鍾	4700	1150	1100	600	25 Y7.1 灰白	長石・石英	土師質	中世	棒状単孔

新邸遺跡石器・石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	出土遺構名	掲載遺構名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	備考
						最大長	最大幅	最大厚				
S1	S-S1	新邸1区	T16 付近	包含層	石鎌	185	147	2	052	サヌカイト	弥生	無蓋凹基
S2	S-S2	新邸1区	T16 第6層	包含層	スクレイパー	837	515	8	3445	サヌカイト	弥生	
S3	S-S3	新邸2区	T18 第29層	包含層	石包丁	523	35	8	2033	サヌカイト	弥生	欠損部少し磨滅
S4	S-S4	新邸3区	青灰色土	包含層	石鍾	515	655	47	20181	花崗岩	弥生?	
S5	S-S5	新邸3区	排土中	包含層	石鍾	695	61	135	119	玢岩	弥生?	
S6	S-S6	新邸3区	北壁21・26層	包含層	石包丁	72	47	135		サヌカイト	弥生	欠損後スクレイパーに転用、珪酸付着

新邸遺跡金属製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考	
							最大長	最大幅	最大厚					
M1		新邸1区	7区	河道上層	新邸調査区1区	T13	銅銭		2400		銅	中世	銭文は 祥符通寶(北宋、初鑄008年)	
M2	S2-M1	新邸2区	G3	河道上層	新邸調査区2区	T18 第38層	鉄鎌	15750	13	800	1381	中世	鎌身中心には縦方向の稜(鑄)	
M3	S2-M2	新邸2区	G3	河道上層	新邸調査区2区	T18 第38層	鉛弾		1350		1314	中世	16世紀後半に比定	
M4		新邸4区	G6	河道上層	新邸調査区4区	獣骨出土層	銅銭		2400			銅	中世	銭文は 景祐元寶(北宋、初鑄034年)

新邸遺跡木製品観察表

掲載 番号	出土地区	遺構・ 土層名	旧出土地区名	旧遺構・ 土層名	種別	計測値 (mm)			樹種	木取り	時期	備考
						最大長	最大幅	最大厚				
W1	新邸3区	斜面堆積	新邸調査区3区	斜面堆積	樹皮	4000	2600	08~10	サクラ?		中世	曲物の綴じ皮素材か
W2	新邸3区	斜面堆積	新邸調査区3区	斜面堆積	底板	31900	10050	900	ヒノキ	板目	中世	周縁は焼焦げている
W3	新邸4区	河道	新邸調査区4区	河道	下駄	22600	10800	3500	スギ	板目	中世	連菌下駄、左履きか

第4章 郷ノ溝遺跡

第1節 遺跡の概要

郷ノ溝遺跡は発掘当初、川入遺跡郷ノ溝調査区1・2区と呼称し、それぞれ1班の発掘体制で平成12年度に調査を実施した。第1図の2区が旧1区、3区が旧2区にあたる。1区は、用地買収の調印を待って平成13年度に発掘調査を実施した。

発掘調査地の原状は水田で、その上面は海拔240～260cm前後を測る。旧地形は、1区の方が低位部となり新邸遺跡で確認された旧河道の影響が強い。

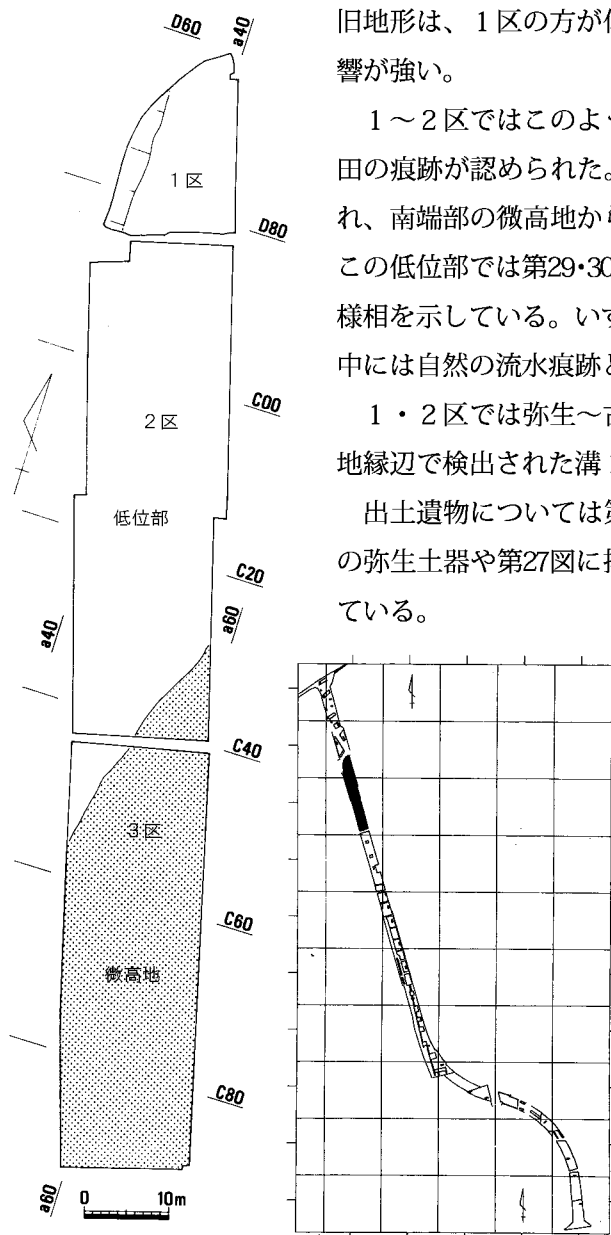
1～2区ではこのような低位部に営まれた中世から近世にかけて水田の痕跡が認められた。2区では中世に比定される畦畔痕跡が確認され、南端部の微高地から派生する様子が第56図のように確認された。この低位部では第29・30図に掲げるような溝群がまず検出され、複雑な様相を示している。いずれも人工的な掘削による遺構と考えられるが、中には自然の流水痕跡とみられる溝もある。

1・2区では弥生～古墳時代にかけての明確な遺構は少なく、微高地縁辺で検出された溝1が唯一の遺構である。

出土遺物については第13図に掲げるように、前期から後期にかけての弥生土器や第27図に掲げる古墳時代の須恵器など多彩な様相を呈している。

2区の南端から3区にかけては微高地が検出され、弥生時代から中世にかけての遺構群が検出された。弥生時代の遺構としては、溝1～3の3条が検出された。うち2条は、中期にさかのぼり新邸遺跡（貝塚）との関連はもとより、調査地周縁での集落の存在が考えられる。地形的にいずれも北から南の方向へ流路が推定される。

古墳時代では竪穴住居の検出により、集落の存在と広がりに興味を深まる。同時期の溝も2条確認されている。古代以降の柱穴も多数検出され、中世にかけての集落の存続が明らかとなった。（岡田）



第1図 郷ノ溝遺跡発掘調査区域図（1/900）

第2節 弥生時代の遺構・遺物

1 溝

溝1 (第2・3図)

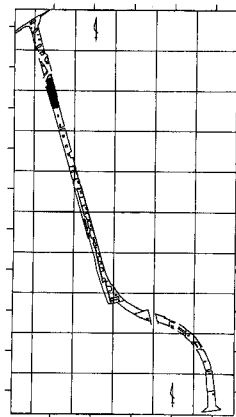
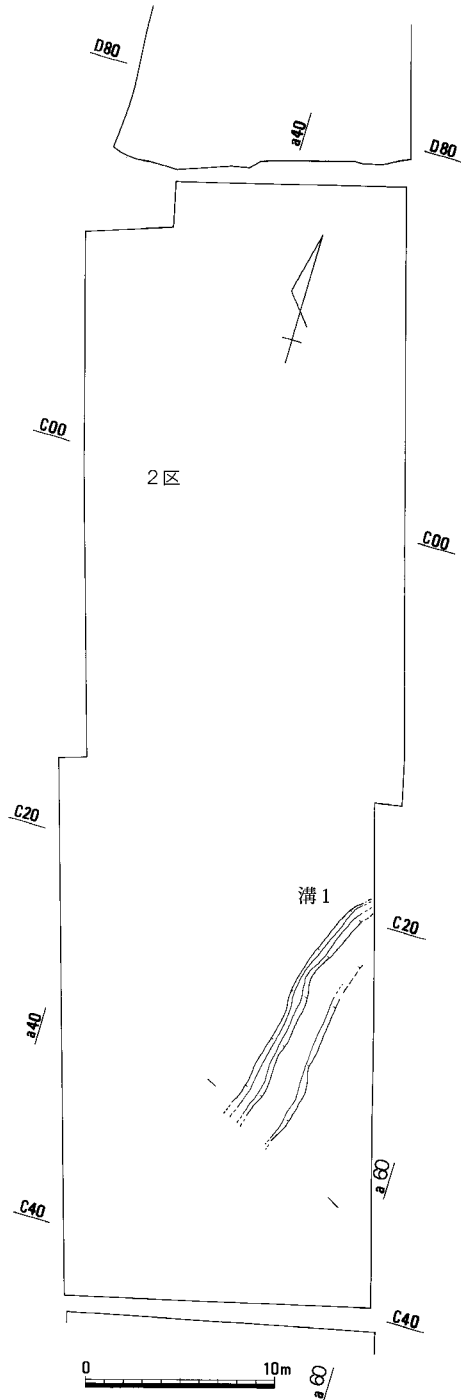
2区の南西部から南側については弥生時代以降に微高地となる。地形は微高地から西側の低位部に向かって徐々に下がっていくが、この斜面部を掘り下げたところ、下がり途中において微高地の縁辺に沿う溝を検出した。

検出時の溝の規模は幅1m、深さ35cm、底面海拔高100cm前後を測る。第3図の第13層が溝の埋土である。溝の東端は、第7図の第16層に対応するが、この部分においては肩が不明瞭となる。また溝の南東端についても明確にし得なかった。なお、溝の微高地側には1.5~2m幅のテラス状の平坦面があり、第2図に示している。第3図の第10・12層と、第7図の第15層が溝の直上層であり、この平坦面の形成に対応している。

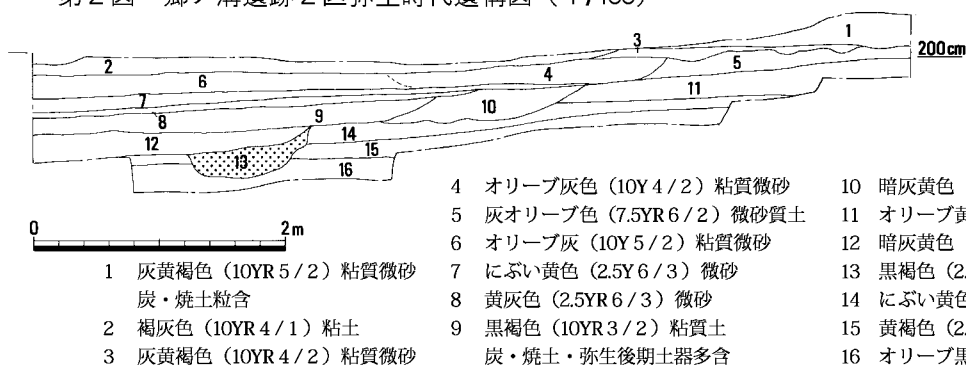
溝の出土遺物には少量の弥生土器片がある。これらにつ

いては、図化し得ないが、前期に属すると思われる。また、溝の直上層からも少量ながら前期と考えられる土器細片が出土している。

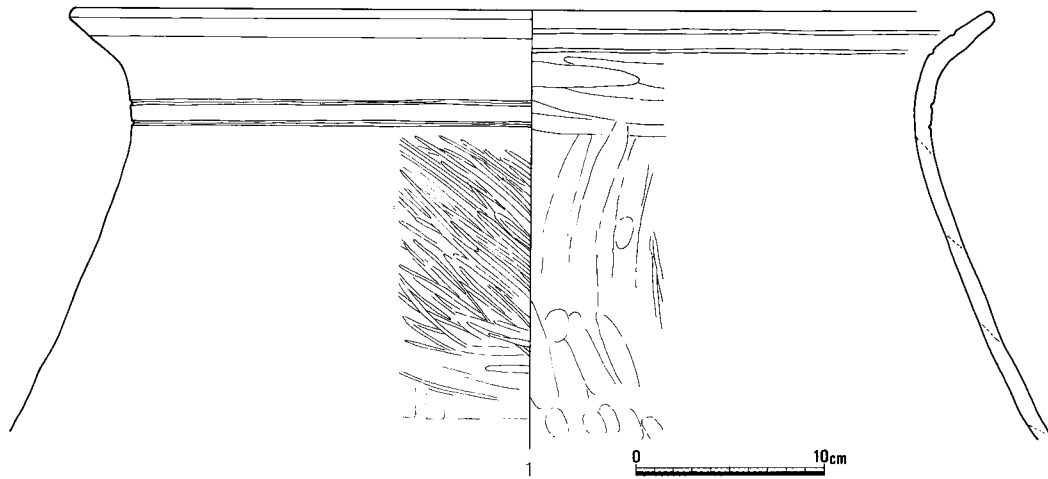
第4図に示したものは、第3図の第9層から出土した大形の広口壺である。同層は微高地縁辺たわみとして後述する後期後葉の包含層だが、溝の時期を示す可能性がある遺物としてここに掲載した。



第2図 郷ノ溝遺跡2区弥生時代遺構図 (1/400)



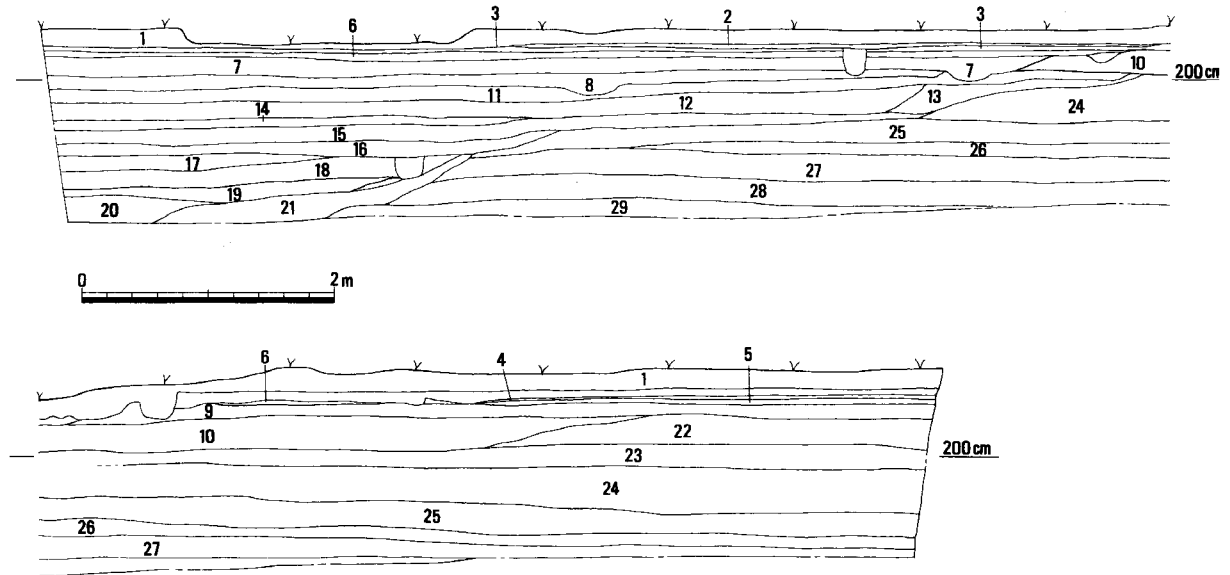
第3図 郷ノ溝遺跡2区微高地土層断面図 (1/60)



第4図 郷ノ溝遺跡2区出土弥生土器（1/4）

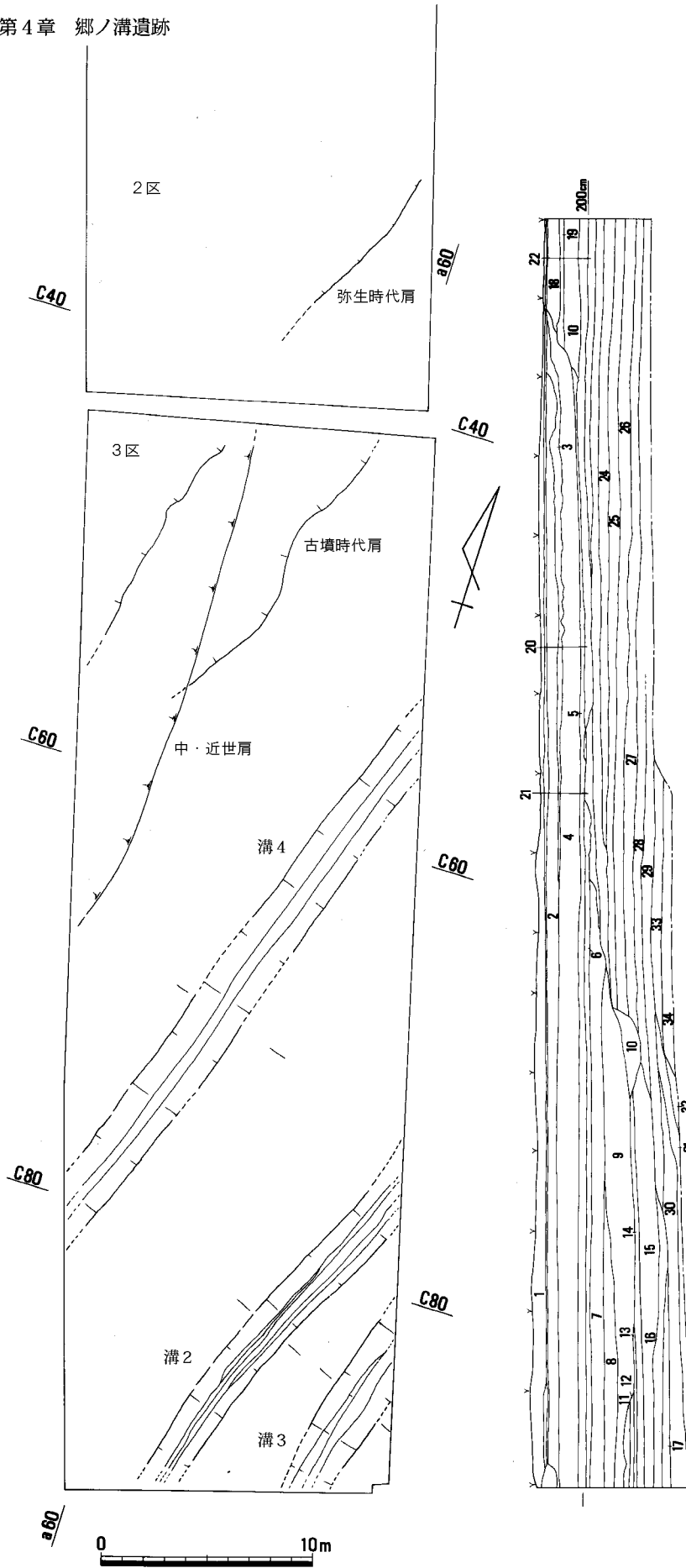
広口壺1は肩から下部を失うもので、短く外反する口縁をもつ。口縁部の屈曲部外面には削り出し突帯から置き換わった2条のへら描き平行沈線文を施す。また口縁部内面にも同様の2条のへら描き平行沈線文を施している。断面には外傾する数段の粘土帯接合痕が観察できる。接合部分の内面に対応する箇所にはユビオサエ痕が残る。

広口壺1はその特徴から前期中段階と考えられ、溝出土の他の前期土器片と勘案し、溝の時期もこれに近いものと考えたい。（高田）



- | | | | |
|---------------------|-------------|-------------|------------|
| 1 褐色土 水田耕作土 | 9 褐灰色砂質土 | 17 褐灰色粘質微砂 | 25 褐色粘質微砂 |
| 2 灰色砂質土 | 10 茶褐色砂質土 | 18 黄灰褐色粘質微砂 | 26 黄褐色粘質微砂 |
| 3 青灰色砂質土 | 11 暗褐色粘質微砂 | 19 明褐色粘質微砂 | 27 明褐色粘質微砂 |
| 4 赤褐色砂質土 酸化鉄沈着 | 12 暗褐灰色粘質微砂 | 20 青灰色粘質土 | 28 暗灰色粘質微砂 |
| 5 淡黄色砂質土 | 13 褐色粘質微砂 | 21 灰色砂 | 29 灰色粘土 |
| 6 黄灰色砂質土 | 14 黄褐色砂質土 | 22 黄灰色砂質土 | |
| 7 淡灰色砂質土 酸化鉄、マンガン沈着 | 15 明褐色粘質微砂 | 23 茶褐色砂質土 | |
| 8 灰色砂質土 酸化鉄、マンガン沈着 | 16 暗灰色粘質微砂 | 24 暗橙褐色砂質土 | |

第5図 郷ノ溝遺跡2・3区境界東西土層断面図（1/60）



第6図 郷ノ溝遺跡3区弥生時代遺構図 (1/300)

- | | | | |
|----|-----------------------------------|----|-----------------------|
| 1 | 水田耕作土 | 26 | 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 微砂 |
| 2 | 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 | 27 | 灰オリーブ色 (7.5Y6/3) 微砂 |
| 3 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂 | 28 | 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土 |
| 4 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂質土 | 29 | 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質土 |
| 5 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質微砂 | 30 | 暗緑灰色 (10G4/1) 粘質砂~粘土 |
| 6 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質微砂 | 31 | 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 微砂 |
| 7 | 褐灰色 (10YR4/1) 粘土 | 32 | 暗緑灰色 (10GY3/1) 粘土 |
| 8 | 灰オリーブ色 (5Y5/2) 微砂 | 33 | 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土 |
| 9 | 黒褐色 (10YR3/1) ~ 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 | 34 | 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘土 |
| 10 | 灰黄褐色 (10YR5/2) 微砂ブロック含む | | |
| 11 | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 | 18 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂 |
| 12 | 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土 | 19 | 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 |
| 13 | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 微砂 | 20 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 微砂 |
| 14 | 黄褐色 (2.5Y5/3) 微砂 | 21 | にぶい黄色 (2.5Y6/3) 微砂 |
| 15 | 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質微砂 | 22 | 黄褐色 (2.5Y5/3) 微砂 |
| 16 | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質微砂 | 23 | 灰黄褐色 (10YR6/2) 微砂粘質土 |
| 17 | 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質微砂 | 24 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂 |
| | | 25 | オリーブ黄色 (7.5YR6/3) 微砂 |

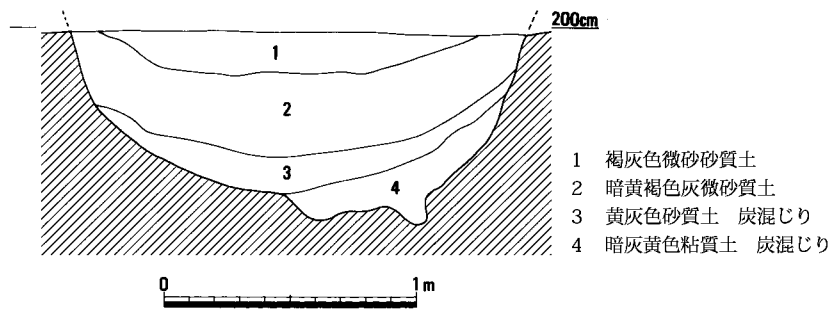
第7図 郷ノ溝遺跡2区東壁土層断面図 (1/80)

溝2 (第6・8図、図版7・8)

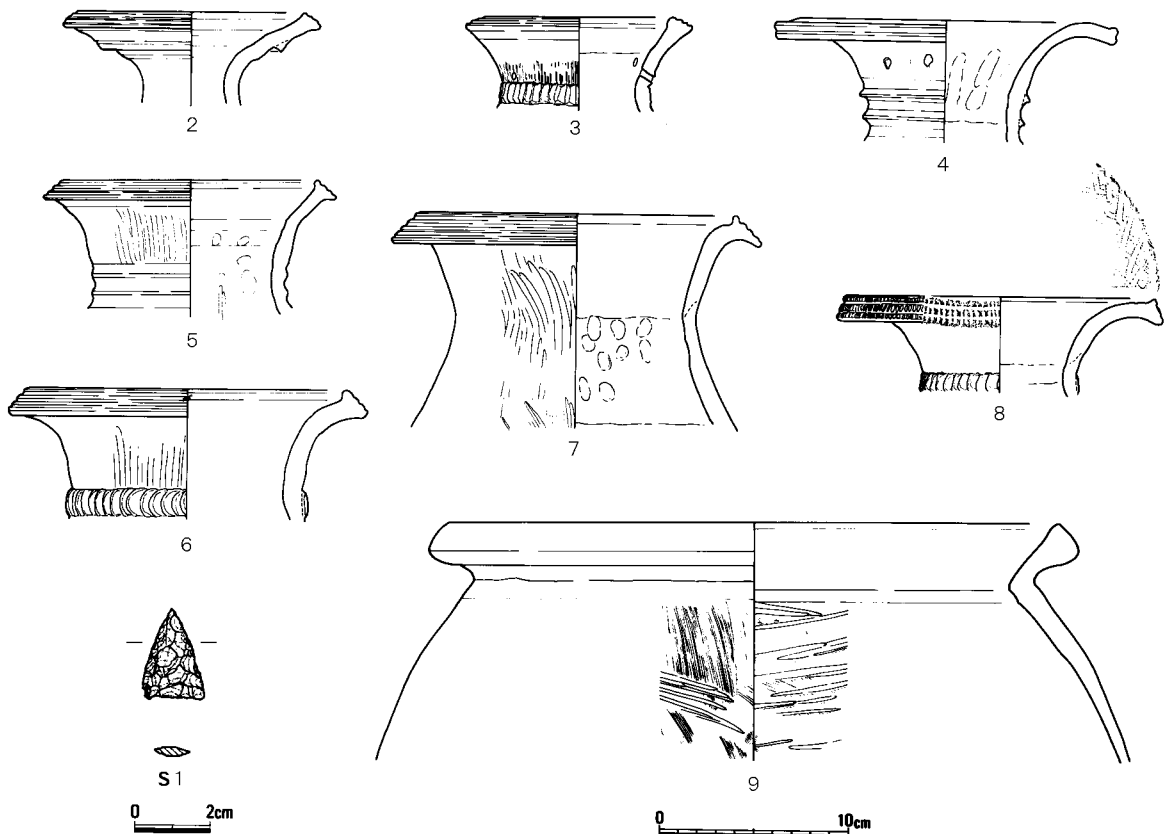
3区の南東側で検出された溝で、両端は調査区外に延び、検出長は21mほどである。

溝は北東から南西へほぼ一直線に流走し、その上面幅は約2mと一定している。検出面から底面までの深さは70cm前後を測る。溝底は一段緩やかに深くなっており、その海拔高は約1.2mであった。埋土は中央付近では4層(第8図)、南端では3層(第9図第15~17層)認められ、いずれも人為的に埋め戻した痕跡は見られない。

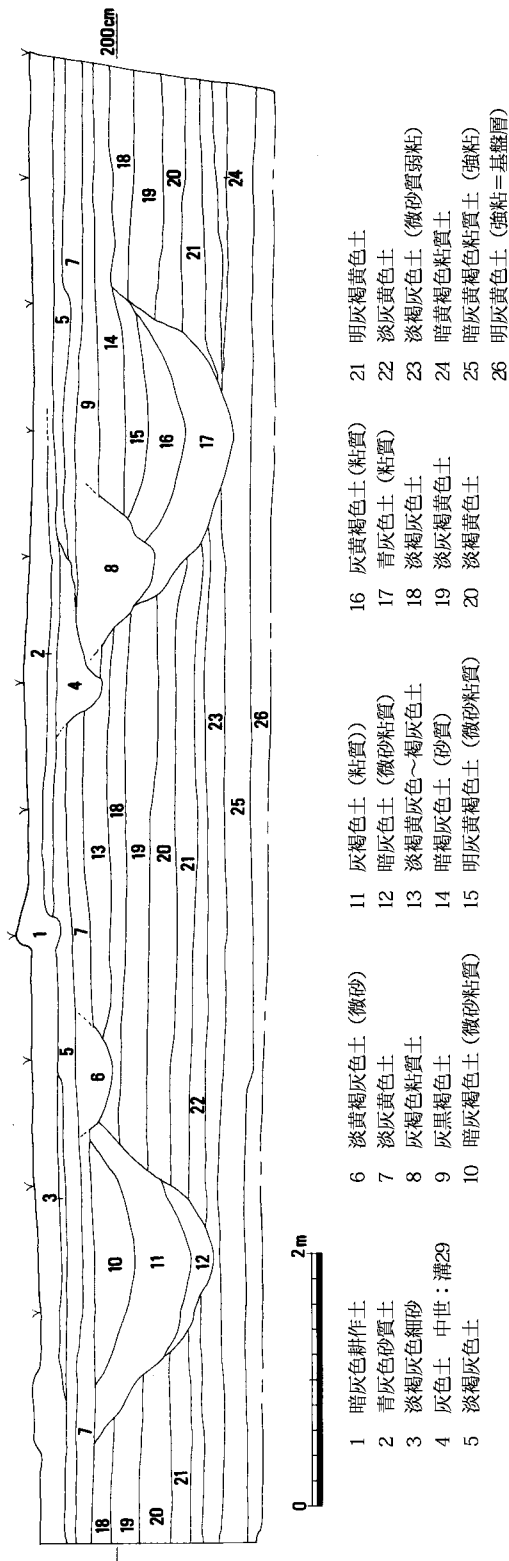
遺物は溝全域から散漫に出土し、完形に復元されるものはなかった。図示した遺物は2~8の壺と9の甕、S1の石鏃である。2はやや肥厚させた口縁端部に凹線が施され、口縁から頸部にかけての部位に断面三角形の突帯が貼り付けられている。3は頸部に指頭による圧痕が施された粘土紐を貼り付け、やや拡張させた口縁端部には凹線が巡っている。貼付突帯の上方に2孔1対の穿孔が認められる。4は口縁部を大きく外反させ、端部はやや肥厚している。頸部には断面三角形の突帯が2条認められる。5・7は上下に拡張させた口縁端部に凹線が施されている。8は口縁部を外反させ、肥厚させた口縁端部には刻み目が施されている。またやや水平な口縁上部は斜格子文で飾られ



られる。5・7は上下に拡張させた口縁端部に凹線が施されている。8は口縁部を外反させ、肥厚させた口縁端部には刻み目が施されている。またやや水平な口縁上部は斜格子文で飾られ



第8図 郷ノ溝遺跡3区溝2土層断面図・出土遺物(1/30・1/4・1/2)



第9図 郷ノ溝遺跡3区南端土層断面図 (1/60)

ている。9は大型の甕で、口縁部は「く」の字状に外反し、端部を肥厚させている。調整は外面には縦方向のハケメのち横方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキが施されている。石鏝はサヌカイト製で、基部を若干抉り込んで製作されている。

これらの出土遺物から、遺構の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

なお、この溝は郷ノ溝遺跡の弥生時代から古墳時代前期に帰属するその他の溝と同様に、2区南東側から3区北西側で検出された微高地下がりの肩と平行している。

(小嶋)

溝3 (第6・10図、図版8)

3区の南西端、先述の溝2の東側約3mに位置し、微高地下がりの肩と平行している溝である。流走方向は溝2・4と同様に北東から南西であった。北側は調査区外に延び、南側は仏生田遺跡で検出された溝2 (第5章 第2図) に続く。断面図は第10図および第9図第10~12層がそれにあたる。

溝の上面幅はほぼ一定しており、最大幅は約2.6mを測る。検出面から底面までの深さは約95cmで、底面海拔高は北端では1.11m、南端では1.08mを測る。溝底は平坦であった。

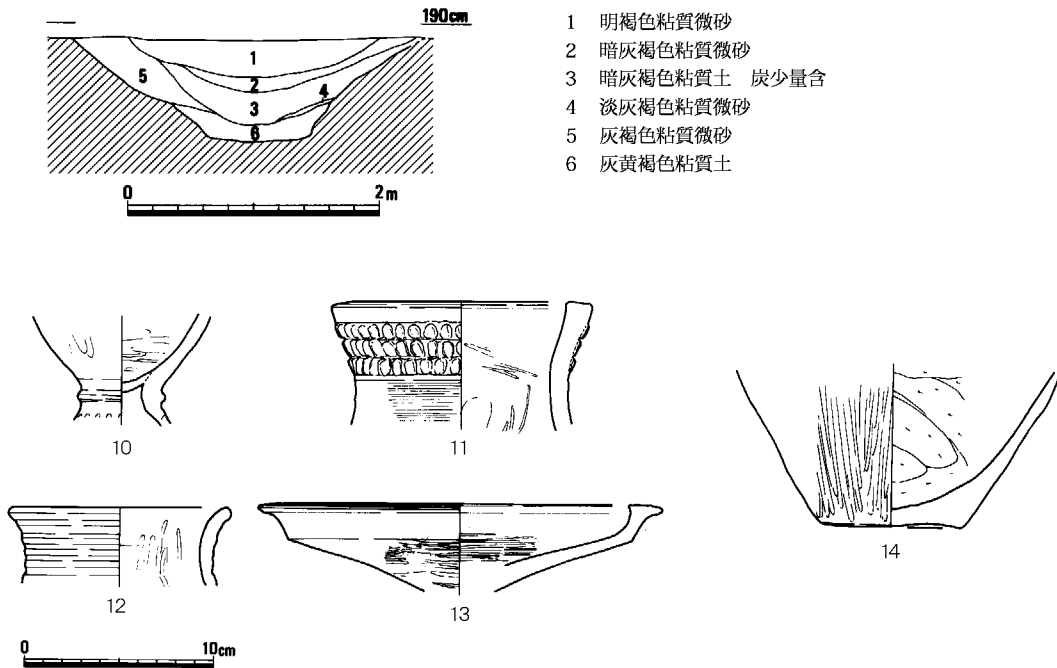
遺物は図示した壺・甕・高杯などが出土している。10は杯部が深い高杯で、杯部の内外面ともヘラミガキが施されている。壺11は頸部に突帯を3条貼り付け、指頭による圧痕が施されている。12は頸部に凹線が施された壺である。13は杯部が浅い高杯で、内外面の調整は多角形状のヘラミガキが施されている。口縁部は外側に開いて立ち上がり、口縁上端部平坦面は外側に拡張している。14は壺の底部で、外面には縦方向のヘラミガキが認められる。

遺構の時期は出土遺物や検出状況等から弥生時代後期前半に比定される。

(小嶋)

溝4 (第6・11・20図、図版9)

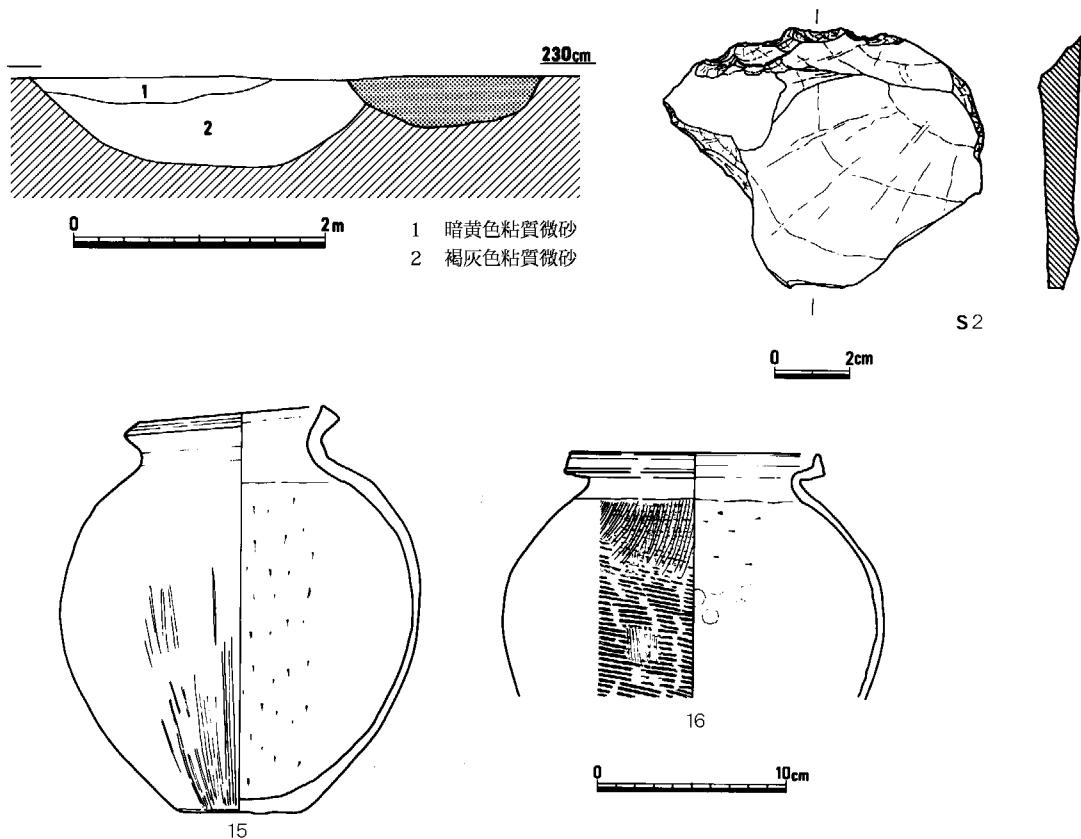
3区の中央部に位置する検出全長約30mを測る、ほぼ南北方向の溝である。2・3区を通じてもっとも長大な溝である。幅約2.6m前後、深さ約60~70cmを測り、断面形は、丸みをもった凸レンズ形を呈する。埋積土は2~3層で、比較的単純な層位が観察される。最上層は暗黄色粘質微砂で、明瞭な平



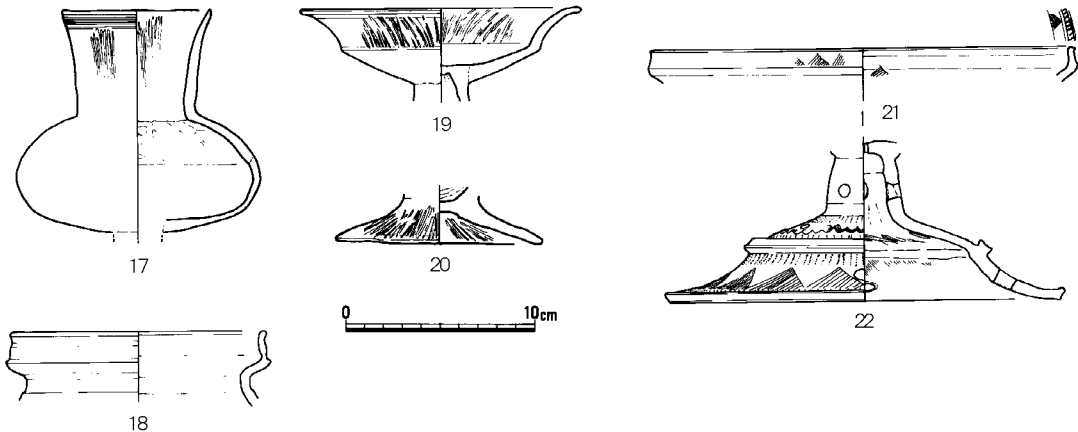
第10図 郷ノ溝遺跡3区溝3土層断面図・出土遺物（1/60・1/4）

面形の検出に労力を要した。

出土遺物は比較的少量で、図化できた土器は15・16の甕のみである。後者は淡いチョコレート色＝暗褐色を呈し、搬入土器の可能性が高い。時期的には後期中葉に比定される。（岡田）



第11図 郷ノ溝遺跡3区溝4土層断面図・出土遺物（1/60・1/2・1/4）



第12図 郷ノ遺跡2区微高地縁辺たわみ出土弥生土器（1/4）

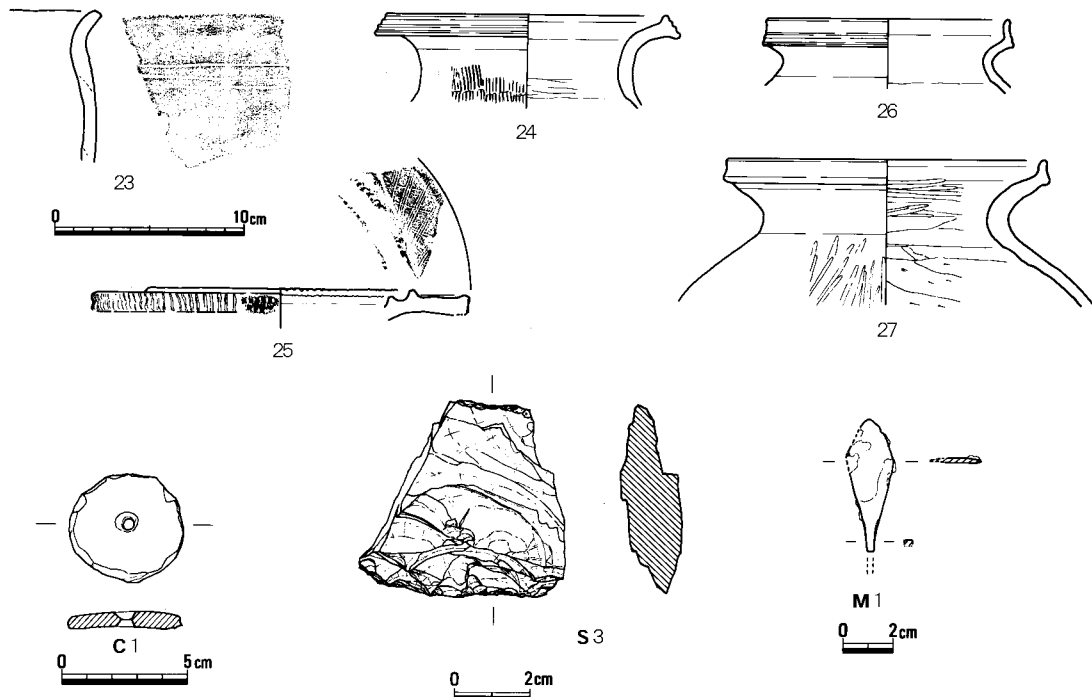
2 遺構に伴わない遺物（第12・13図）

第12・13図には、包含層等から出土した遺物を掲載した。

第12図は、2区の東壁付近の微高地縁辺たわみ部分から出土した遺物である。層位は第3図における第9層と、第7図の第9層である。これは10～35cmの厚さに堆積した黒褐色粘質土層であり、層の底面には比較的凹凸がみられたが、人為的な遺構とは認められない。土器片とともに炭や焼土粒が出土している。

図示したものは、台付直口壺17、甕18、高杯19、台付鉢20、装飾高杯21・22である。台付直口壺17は精良な胎土である。高杯と同様の短い脚部が付くと考えられるが、脚部は欠失している。太目の頸部から口縁部がやや開き気味に立ち上がる。口縁外面の調整は縦方向の細かいヘラミガキで、端部に数条の擬凹線文がみられる。甕18は複合口縁で、上方に立ち上がった口縁端部には強いヨコナデが施される。高杯19は杯部と脚柱部が残存している。杯部は皿部から口縁部が外反しながら大きくひろがるもので、口縁部内外面には縦方向の細かいヘラミガキが観察できる。台付鉢20は鉢の一部と脚部が残存している。鉢内部にはヘラミガキが施される。脚部内外面には縦方向の細かいヘラミガキが施される。装飾高杯21・22はいずれも精良な胎土であり、同一個体と考えられる。杯部21は口縁部のみの残存である。端部を上方に1cmほど拡張し、さらにその口唇部を外方にわずかに肥厚させている。施文は、口縁部外面と杯部内面に鋸歯文、口唇部に刻み目を施す。脚部22は筒状の短い脚柱部から裾部が一度段をもち、そこからさらに外反して開くものである。脚柱部には円形の透かし孔を3か所配している。裾部は段に突帯を貼り付け、裾端部は面をもつ。脚柱部とこの突帯間の施文は、上から連点文・波状文・連点文である。また上の連点文と波状文間には円形の透かし孔を4か所配する。次に突帯から裾端部にかけての施文は、上から連点文・鋸歯文・連点文を施文するもので、鋸歯文帯に円形の透かし孔を4か所配している。このような装飾高杯は、後期中葉段階からエンタシス状の脚柱部をもち、比較的变化の少ない器種として知られる。本例では精良な胎土を用い、脚柱部が短くなるなど、新しい要素がみられる。なお、裾部の内面には煤の付着がみられ、蓋として使用されていた可能性がある。

以上の微高地縁辺たわみ部分から出土遺物は、後期後葉に属すると考えられる。同時期の遺構は郷ノ溝の微高地上では3区の溝4のみだが、同一微高地上の仏生田1区における溝群の存在と合わせ、北側調査区外の微高地上に同時期の集落が想定される。



第13図 郷ノ溝遺跡2区包含層出土遺物（弥生土器・紡錘車・石製品・鉄鏃；1/4・1/3・1/2）

第13図は、2・3区の包含層から出土した遺物である。甕23は、ややふくらみをもつと考えられる胴部から緩やかに「く」字状に外反する口縁部をもつ。胴部と口縁部の境には外面に3条のヘラ描きの平行沈線文を施す。前期中葉と考えられる。短頸壺24は、口縁部を肥厚させ凹線文を施す。後期前葉と考えられる。広口壺25は、水平に広がる口縁部の上面に、2条の貼り付け突帯を配し、この突帯と口唇部間に斜格子文を施す。また突帯と口唇部には刻み目を入れる。中期中葉に属する。甕26は複合口縁で、口縁端部を大きく上方に立ち上げる。短頸広口壺27は、口縁端部を少し上方に拡張させる。甕26とともに後期後葉に属すると考えられる。

C1は弥生土器片転用の紡錘車である。S3はサヌカイト製の楔形石器である。M1は鉄製の柳葉鏃で茎部を欠損する。C1とS3については、2区の微高地斜面部掘り下げ中に出土したもので、先述したたわみ部分の時期と考えられる。M1については微高地からかなり離れた低位部の包含層中から出土したものである。
(高田)

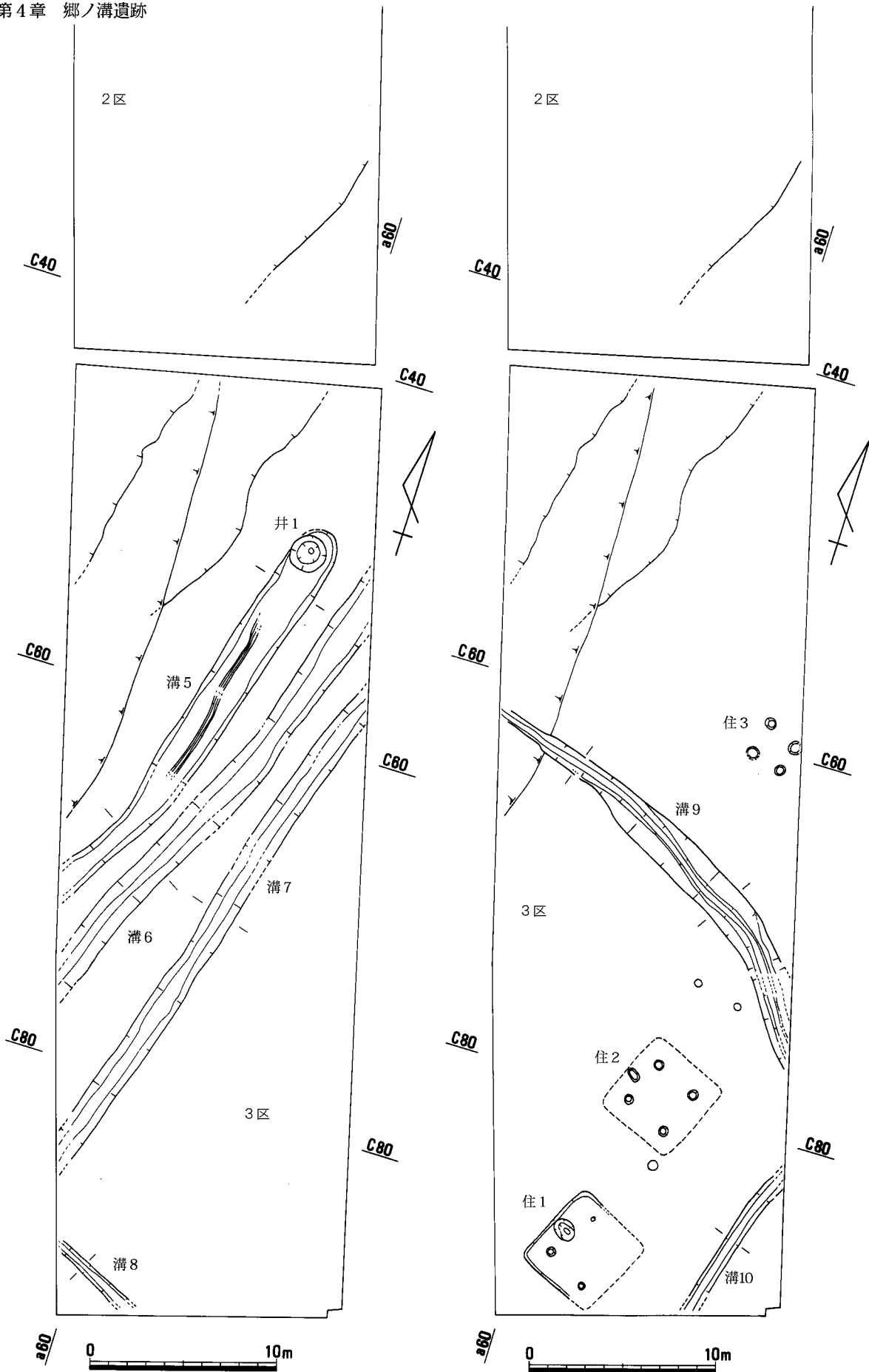
第3節 古墳時代の遺構・遺物

1 竪穴住居

竪穴住居1（第15・16図、図版14）

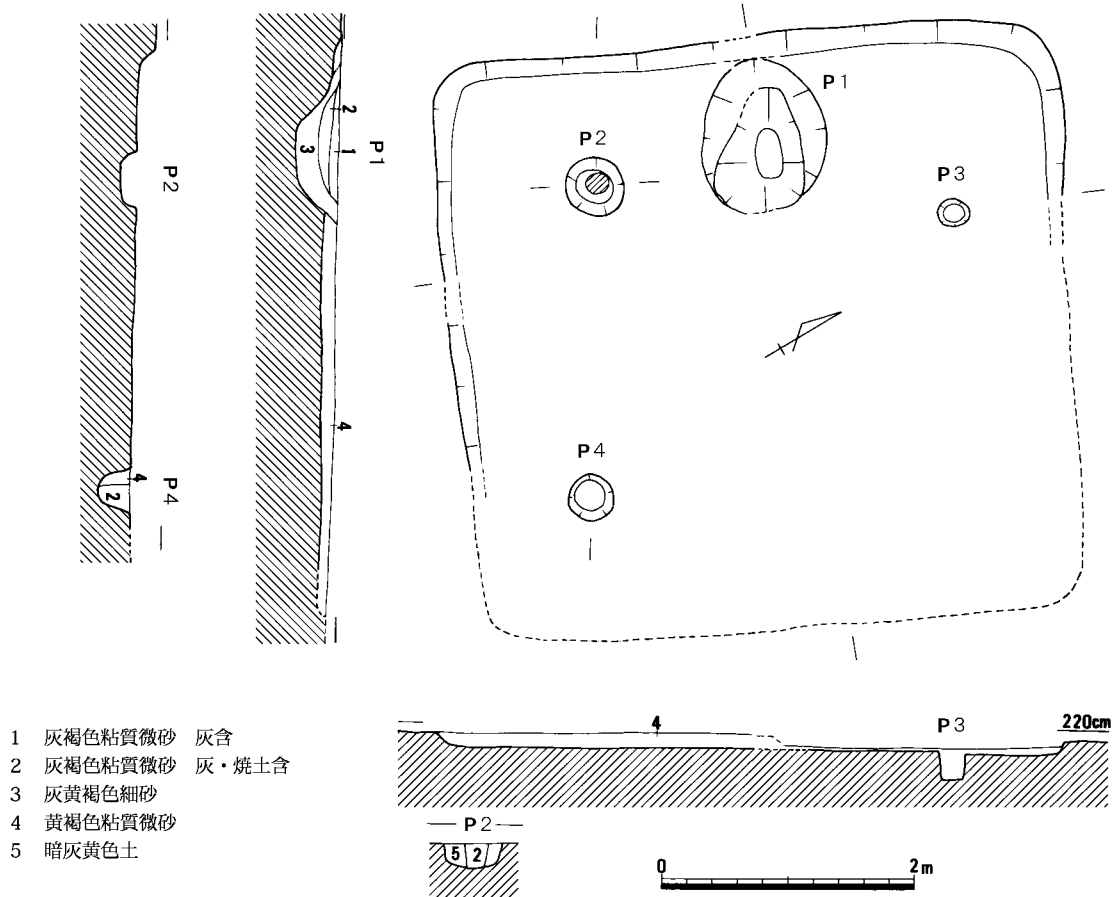
3区の南端に位置している竪穴住居である。北辺東側および東辺は確認調査時のトレンチと中世の溝30により、南辺東側は調査区南端の側溝により削平を受けている。竪穴住居の規模は、南北長が削平を受けていない西辺から一辺約5m、東西長がP2とP4の位置関係から約4.7mと推定したい。よって平面形は長方形を呈すると想定される。後世に上面が削平を受けており、掘り方の深さはわず

第4章 郷ノ溝遺跡

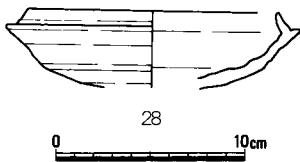


第14図 郷ノ遺跡 3区古墳時代前期遺構図(1/300)

第15図 郷ノ遺跡 3区古墳時代後期遺構図(1/300)



第16図 郷ノ溝遺跡3区竪穴住居1・出土遺物(1/60・1/40)



か10cmほどであった。柱穴は検出されたP2～P4の配置から4本と想定される。北東の柱穴は確認調査のトレンチにより削平されたと考えられる。柱穴はすべて円形の掘り方を呈し、規模はP2が径46cm、深さ21cm、P3が径25cm、深さ23cm、P4が径35cm、深さ34cmである。P2では径約20cmを測る柱痕跡が認められた。柱穴間距離はP2-P3が2.85m、P2-P4が2.5mである。西辺中央部にP1が検出され、竈の下部構造と考えられる。この土壌は平面楕円形を呈し、規模は長軸長1.2m、短軸長1.01mを測る。検出面から底面までの深さは42cm、海拔1.85mであった。壁面は南東側では椀状に、その他は一段段差がついて立ち上がる。埋土は第1層には炭が、第2層には炭と焼土が含まれていた。土壌底面には被熱痕跡は認められない。この土壌の上層からは図示した須恵器杯身28が出土している。住居の主軸は微高地の地形と直交している。

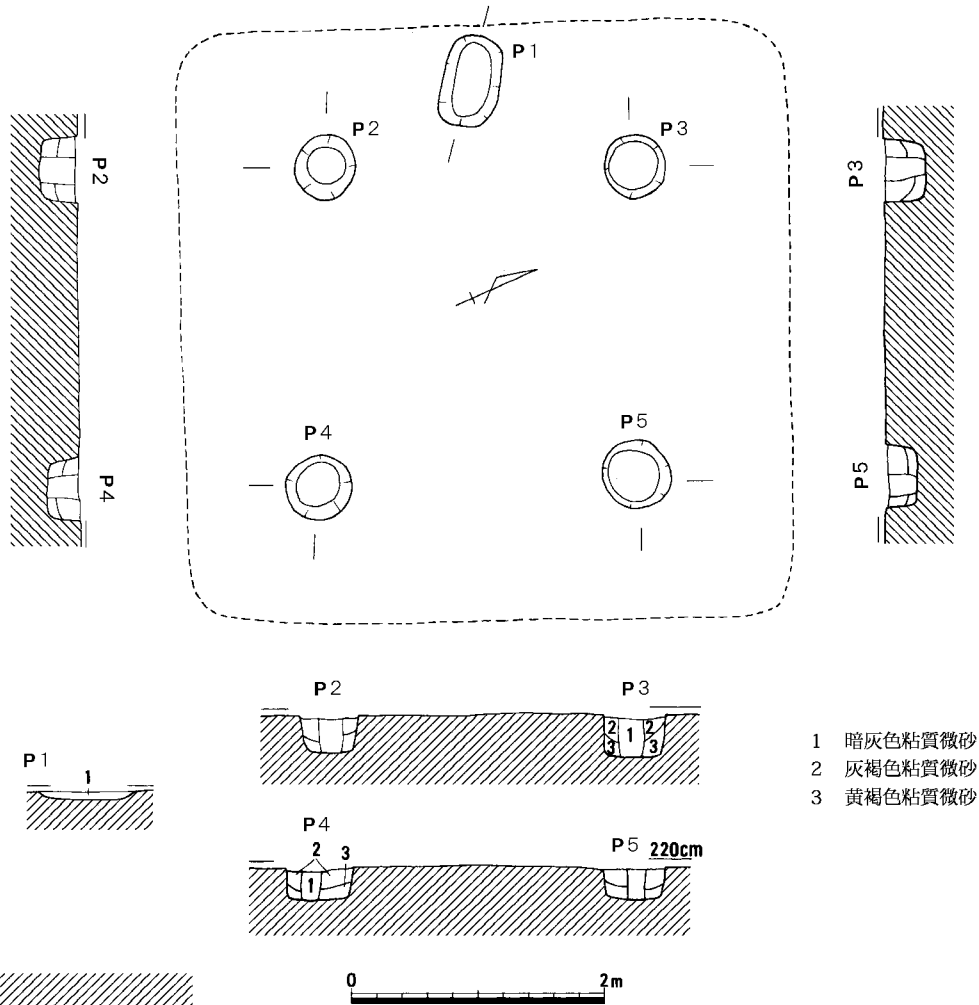
遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期に比定される。

(小嶋)

竪穴住居2 (第15・17図、図版14)

先述の竪穴住居1から約4m北側に位置している。各柱穴(P2～5)と方形土壌(P1)の位置関係から竪穴住居と判断した。住居の掘り方は後世の削平により認められない。

4本柱の住居で、すべての柱穴に径20cm前後の柱痕跡が確認されている。柱穴掘り方は径約50cm、深さは30cm前後である。柱穴間距離はP2-P3が2.42m、P3-P5が2.5m、P5-P4が2.5m、P4-P2が2.52mを測り、柱穴の配置はほぼ正方形を呈する。方形土壌は住居西辺と想定される位置で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸長72cm、短軸長46cmである。深さは浅く、検



第17図 郷ノ遺跡3区竪穴住居2 (1/60)

出面から6cmを測るにすぎない。埋土は一層のみで炭・焼土を含んでいたが、土壌底面には被熱痕跡は認められない。住居の主軸は先述の竪穴住居1とほぼ同一であり、微高地の地形と直交している。

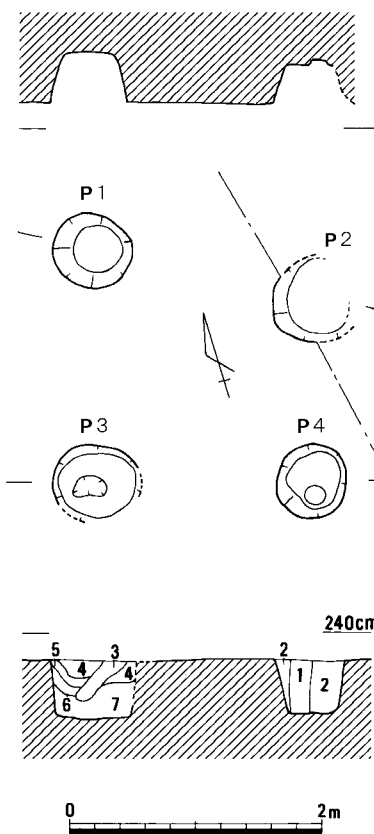
竪穴住居の時期は、出土遺物が皆無であるが、検出状況や埋土から古墳時代後期と想定したい。(小嶋)

竪穴住居3 (第15・18図)

溝9の北約8mで検出された、比較的大きな柱穴4本を竪穴住居と推定した。竪穴住居1・2と同様上面の削平が顕著

で、明確な全体規模や、形態を復元することはできなかった。

検出時には、柱穴の規模から、むしろ掘立柱建物の一部である可能性を模索していた。P3の埋積状態はやや複雑であるが、P4では明瞭な柱痕跡が認められる。(岡田)



第18図 郷ノ遺跡3区竪穴住居3 (1/60)

2 井戸

井戸1 (第14・19図、図版13)

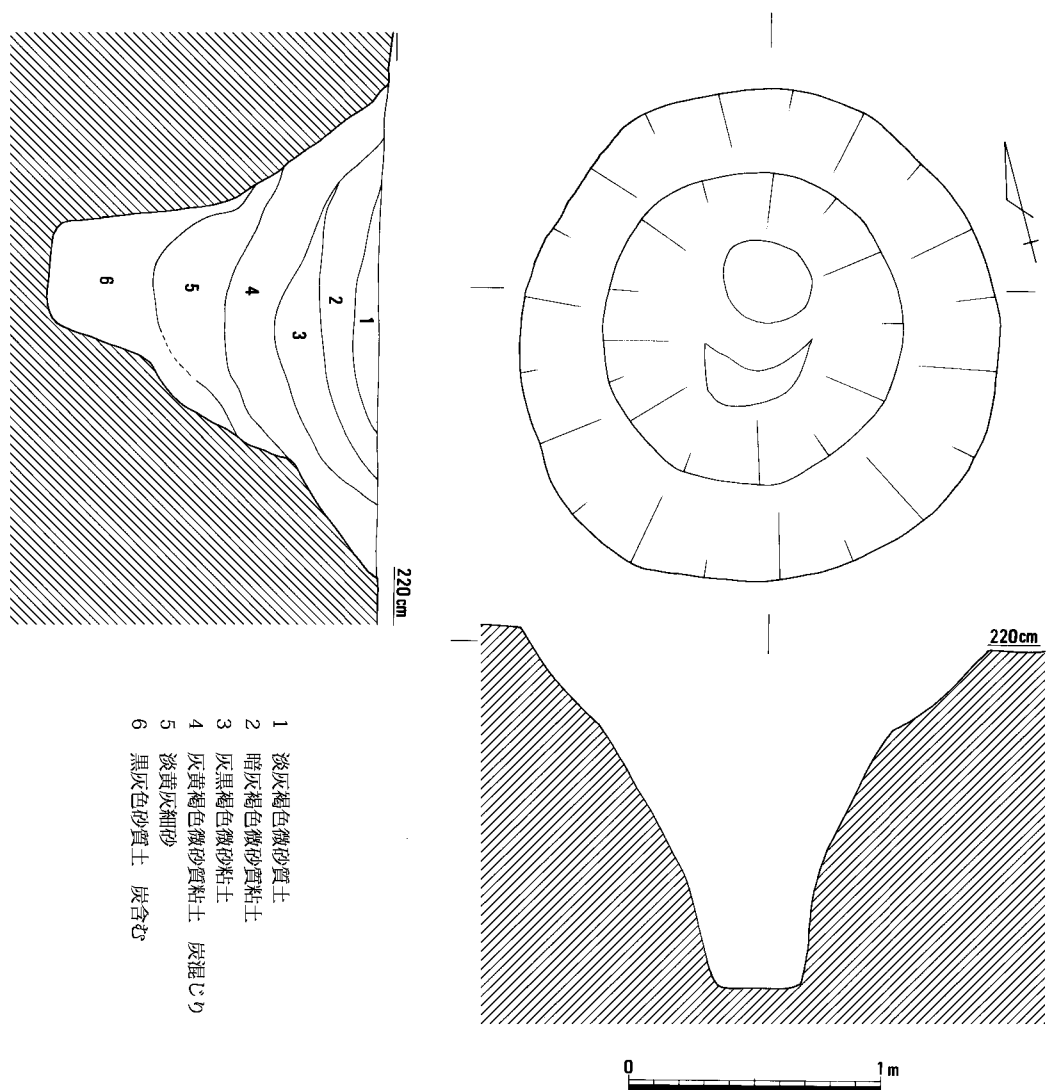
3区の北方、溝5の北端で検出された。掘り方は径約1.9mの円形を示し、通常の井戸に比べるとかなり大型である。井底は急激にすぼんで径約30cmほどの平坦な状態で終る。

出土遺物は土師器の小片がわずかに認められるの過ぎないが、口縁部に平行櫛描き沈線を施した甕の破片があり、時期的には古墳時代前半に使用、埋没した井戸であることが推察される。溝5との時期的関係は、不明確である。(岡田)

3 溝

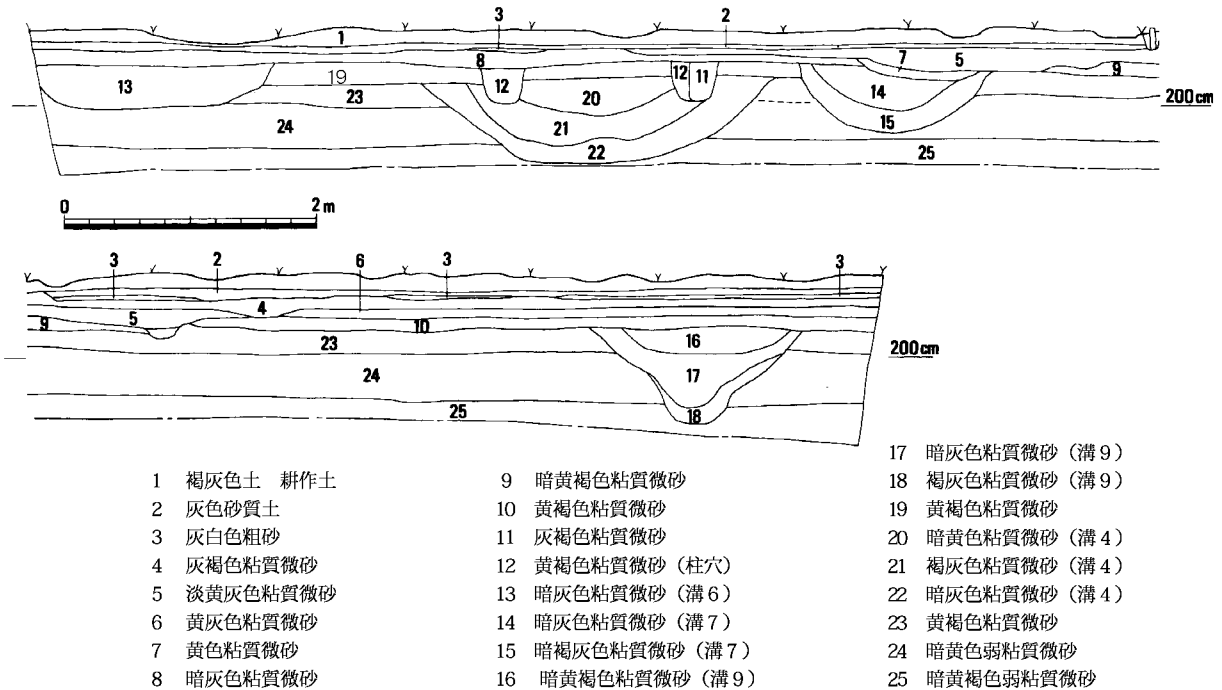
溝5 (第14・21図、図版12)

3区の北東側に位置し、微高地下がりの肩と平行して検出された溝である。流走方向は北東―南西である。北端部が先述の井戸1とほぼ重なっているため井戸1からこの溝が延びているように見受け



第19図 郷ノ溝遺跡3区井戸1 (1/30)

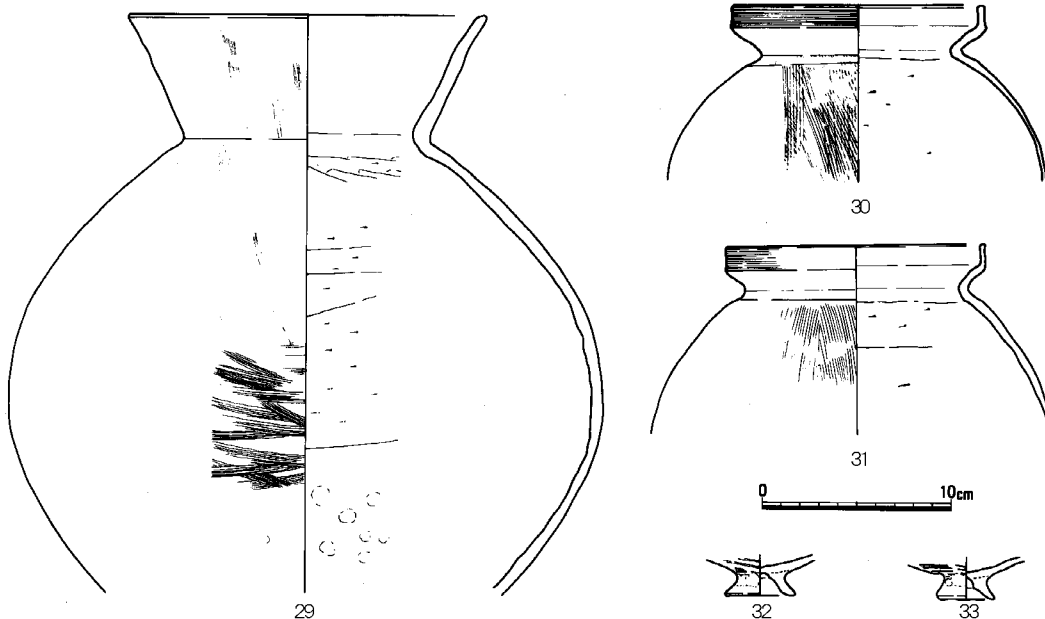
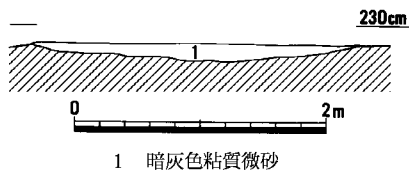
第4章 郷ノ溝遺跡



第20図 郷ノ溝遺跡3区C80付近東西土層断面図 (1/60)

られるが、井戸1に付随する溝ではない。検出幅は北側が2.5mで、南に下がるにしたがい狭くなり1.2mを測る。断面形は基本的に浅い皿状を呈するが、C60ライン付近では約10mの長さで幅30cm、深さ6cm程一段深くなっていた。

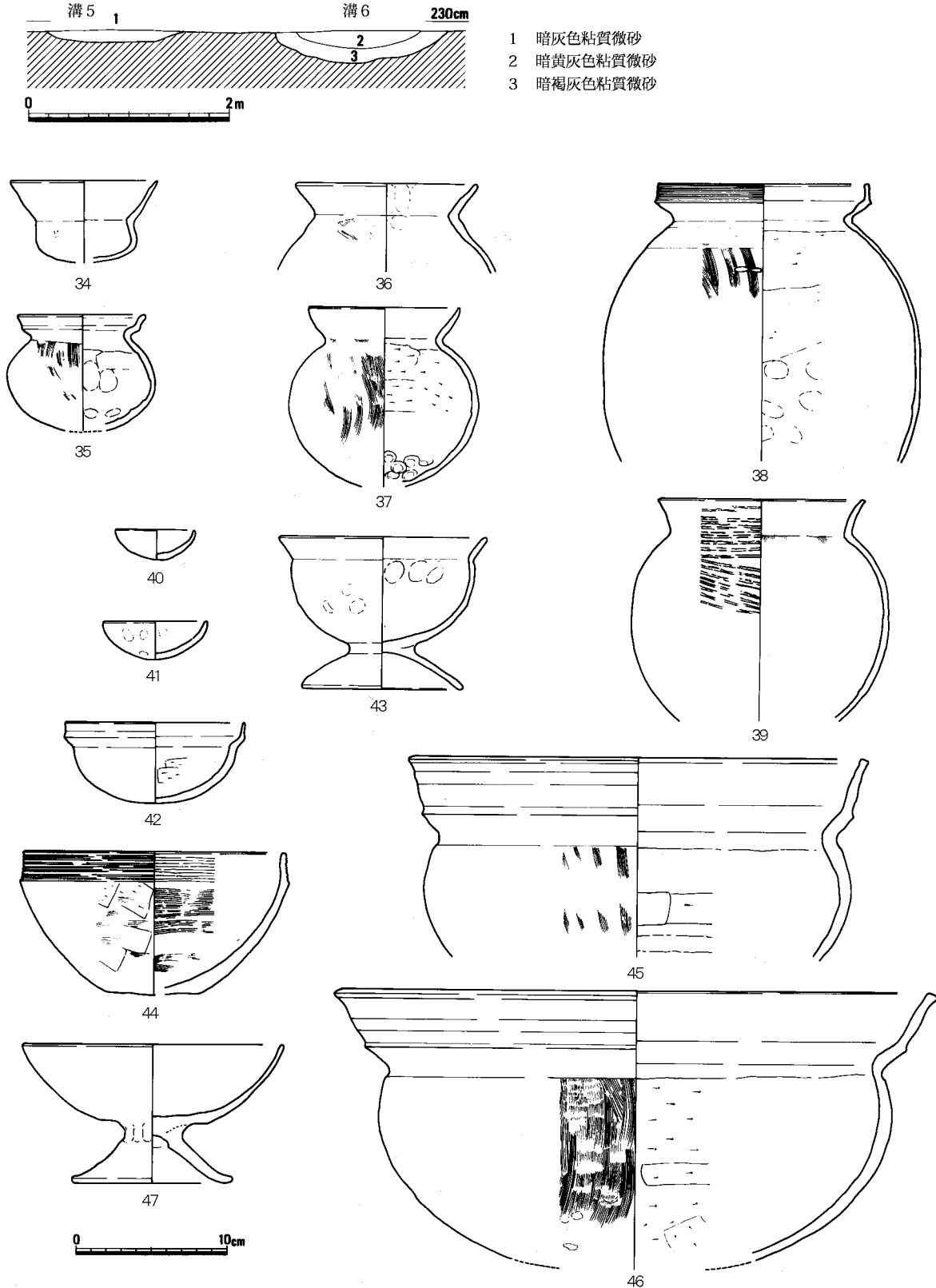
遺物は溝南端部と北端から約5m南側の地点からやや密集して出土した。南端部側では長軸長約1m、短軸長約50cmを測る平面長楕円形を呈する範囲から土師器壺29や甕30・31などが出土している。北端部側は製塩土器の一括廃棄で、最低でも数個体分認められる。溝の時期はこれらの出土遺物から古墳時代前期前半に比定される。(小嶋)



第21図 郷ノ遺跡3区溝5土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

溝6 (第14・22図、図版11)

先述の溝5から約1.5m南東側に位置している溝である。検出幅は約2mと一定していた。溝は中央部付近で流路が若干西側に屈曲するが、北東から南西に向かってほぼ一直線に流走している。断面形は浅い椀状を呈し、検出面から底面までの深さは30cm前後を測る。埋土は2層認められ、人為的に埋



第22図 郷ノ溝遺跡3区溝6土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

第4章 郷ノ溝遺跡

め戻した状況は認められない。溝の底面は若干波打ち、壁面は緩やかな弧状を呈して立ち上がる。底面海拔高は北端で1.98m、南端で1.79mを測る。

遺物は小型丸底埴34、甕35~39、鉢40~46、高杯47などが出土している。35は口径8.4cm、推定器高7.7cmの小型の甕である。調整は外面には縦方向のハケメ、内面にはヘラケズリが認められる。36・37は口縁部を「く」の字状に外反させている甕である。38の甕は体部上半に刺突が2個認められる。39の甕は口縁部を「く」の字状に外反させ、調整は外面ではタタキのちナデ、内面では頸部付近に縦方向のハケメ、胴部中位から下位にかけてナデが施されている。40・41は隣接して出土したほぼ完形のミニチュアの鉢で、入れ子で廃棄されていたかもしれない。42の鉢の内面には赤味を帯びた箇所が認められ、赤色顔料の塗布ないしはその容器である可能性が考えられる。44の鉢は口縁部が垂直に立ち上がり、7条の櫛描き沈線文を施している。体部の調整は外面がヘラケズリのちハケメ、内面が横方向のハケメが施されている。被熱痕跡らしきものが観察される。45・46は複合口縁の大型の鉢で、口縁部はやや垂直に立ち上がるものと逆「ハ」の字状に広がるものが見られる。調整は両者とも外面が縦方向のハケメ、内面が横方向のケズリのちナデが施されている。これらの遺物の内、甕36・37・38、鉢40~42・45、台付鉢43、高杯47などが溝北端、調査区際の底面直上からまとまって出土した。40・41のミニチュアの鉢や42の鉢などから祭祀に伴う可能性も想定される。

溝の時期は出土遺物から古墳時代前期前半に比定される。 (小嶋)

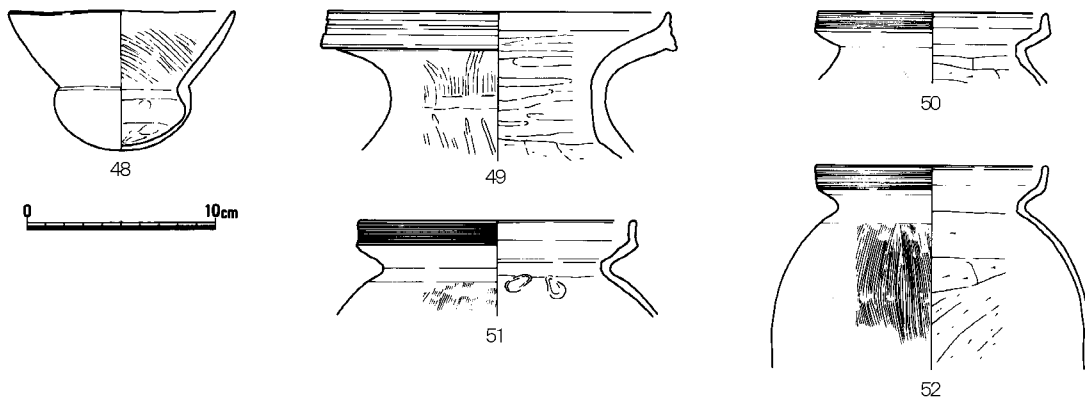
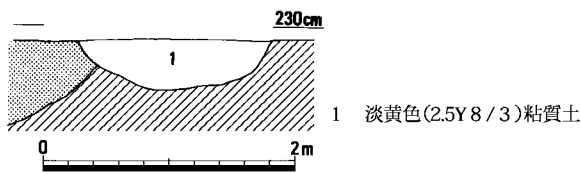
溝7 (第15・23図、図版12)

古墳時代前期に帰属し、流走方向が北東-南西を呈する3条の溝の中で東端に位置している溝である。検出幅はほぼ一定しており、約1.5mを測る。検出面から底面までの深さは約40cmであり、3条の溝の中では一番深い。溝の壁面は緩やかな弧状を呈して立ち上がり、底面は若干波打っている。底面海拔高は溝南端で1.8mを測る。

遺物は壺や甕などが出土している。小型丸底埴48は溝北半から出土し、口縁部内面には斜め方向のハケメが施されている。壺49は口縁端部が上方に拡張し、擬凹線が施されている。甕50~52は口縁部が短く立ち上がり、そこに櫛描き沈線文が巡る。調整は外面には縦方向のハケメ、内面にはヘラケズ

リが施されている。遺構の時期は先述の溝5・6と同様に古墳時代前期前半である。

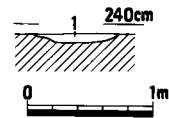
なお、49の壺は51の甕と同一地点から混入出土したため、あえて掲載した。 (小嶋)



第23図 郷ノ遺跡3区溝7土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

溝8 (第14・24図)

3区の南西隅で検出された狭小な溝である。北西から南西方向の流路が想定される。溝9とほぼ平行して検出された点や、溝10との平面的な合流など考えられるが、それらと比べると平面形の検出は不明瞭であった。出土遺物は皆無である。



1 灰褐色粘質微砂 (焼土含む)

(岡田) 第24図 郷ノ溝遺跡3区
溝8土層断面図 (1/60)

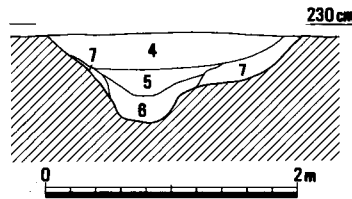
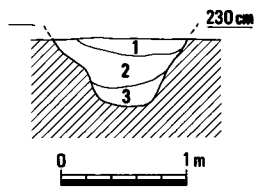
溝9 (第14・25図、図版14・15)

C60ラインからC80ラインにかけて、つまり北西から南東方向に弧を描くように検出された。検出全長は約26mであるが、北西端は中世以降の低位部となり、約3mほどは溝の下部を検出したにとどまる。

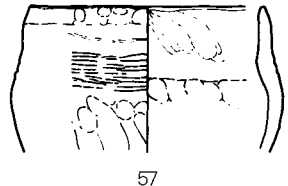
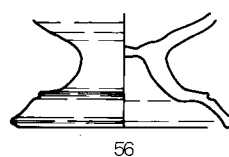
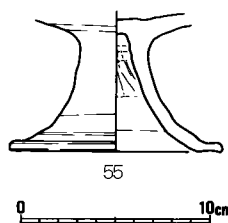
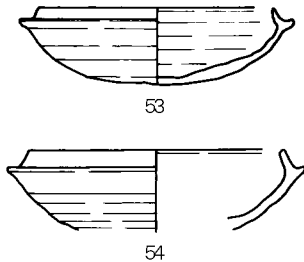
溝の幅は1~2m、深さは30~40cm前後を測り、比較的平らな溝底のレベルは南東方向へ徐々に下がる。検出状況から、数次にわたる改修が行われたことが推察されるが、溝下部のラインは大幅な変化を示さない。

溝の最南端を延長すると、溝10と重なることになるが、規模や形状がかなり異なることから、むしろ溝10は溝9の支流とも考えることができる。

出土遺物は53~56の須恵器や製塩土器57のほか、C2の練り玉がある。53・54は杯、55は高杯である。56は台付壺などの台部あるいは、脚部と考えられる。下位に特徴的な段が作り出され安定性を増し



- 1 暗灰褐色微砂質土
- 2 淡灰黄褐色土
- 3 褐灰色微砂質土
- 4 にぶい赤褐色粘質微砂
- 5 褐灰色粘質微砂
- 6 黒褐色粘質微砂
- 7 にぶい赤褐色粘質微砂



第25図 郷ノ溝遺跡3区溝9土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4・1/1)

ている。57は小片であるが、製塩土器の特徴である手づくね風の粗雑な作りと、外面の平行タタキが観察される。

C2は溝上層から出土した土製の練り玉である。外面は黒色を呈し、黒漆の塗布が考えられる。ほぼ中心に貫通孔が穿たれる。これらの出土遺物から、溝の存続時期は6世紀後半に比定される。



C2

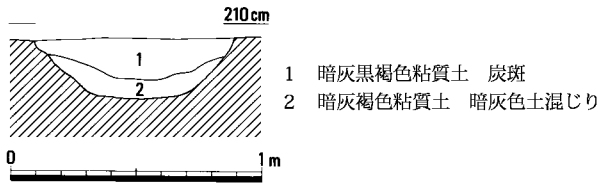


(岡田)

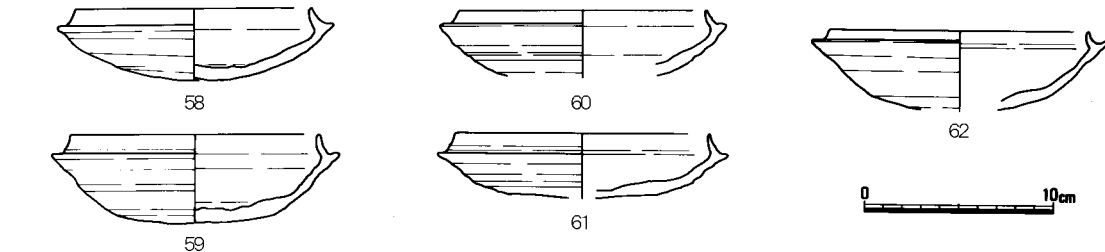
溝10 (第15・26図)

3区の南東隅で検出されたほぼ南北方向の溝である。検出全長は約8m、幅約80cm、深さ25cm前後を測る。断面形は丸みを帯びた逆台形を示す。

出土遺物には須恵器杯58~62のほか、S4の小型の砥石がある。石材は白っぽいホルンフェルスで



ある。全体に使用による磨滅が認められ、平滑な感触がある。また鉄滓が少量認められる。後者は鍛冶滓であることが確かめられており、集落内あるいは周辺での鍛冶が推定される。



第26図 郷ノ遺跡3区溝10土層断面図・出土遺物（1/30・1/4・1/3）



溝の存続時期は、須恵器が示す6世紀後半に比定される。上層から出土した59や60と、下層から出土した62とは基本的に時期的な差異はない。すべて杯身のみで、蓋が出土していない点に注意される。



S4

前述のとおり、溝9の支流の可能性も考えられ、時期的にはほぼ一致するとみて良いだろう。



溝9がそのままこの溝10に連なる可能性は、発掘区東壁のC80付近での微妙な形状から、交叉する可能性はあるにせよむしろあり得ないと判断している。（岡田）

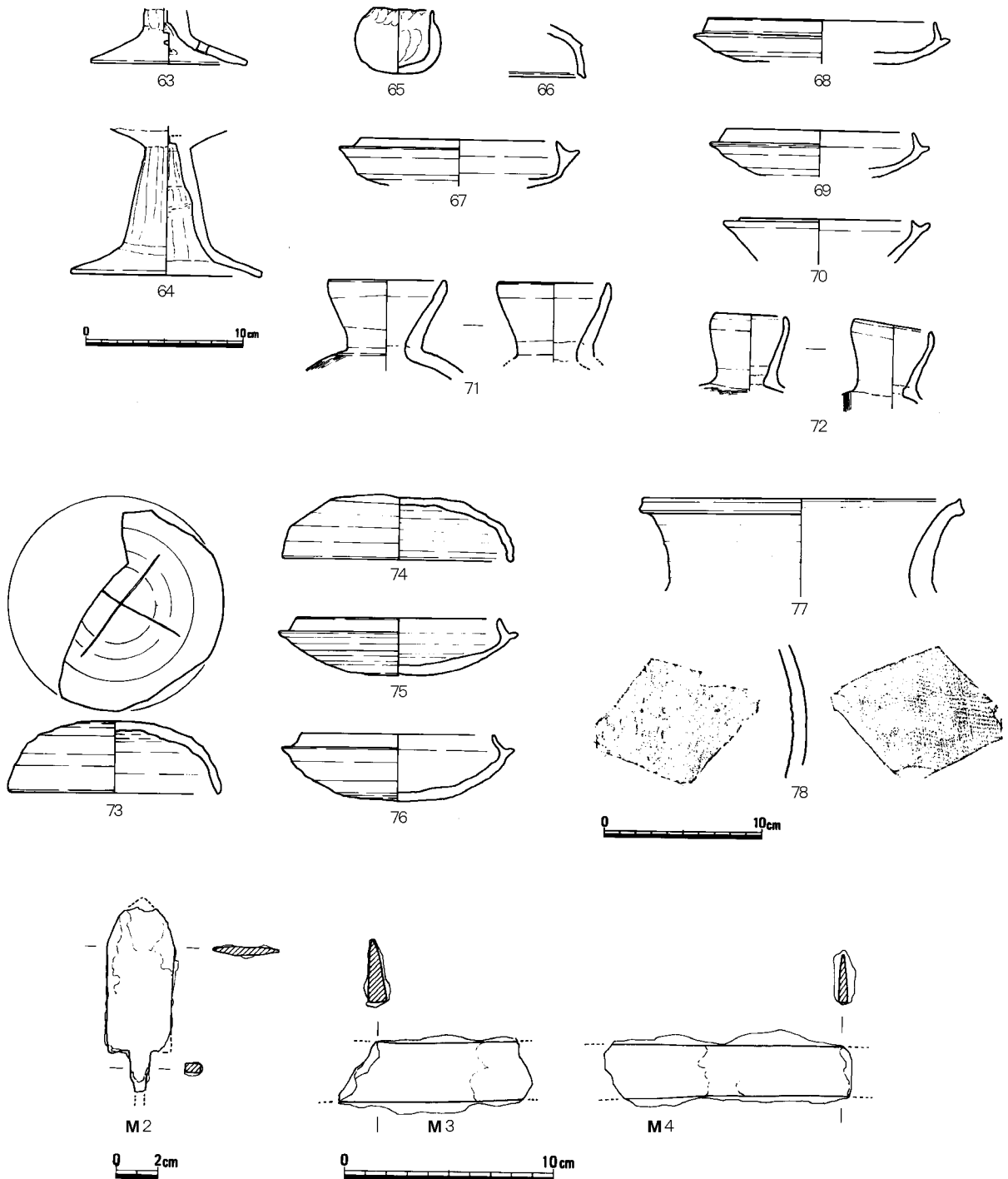
4 遺構に伴わない遺物

この項で取り扱う遺物は、おもに包含層からの出土遺物であり、それらのうち図示可能な遺物について取り上げた。

2区の包含層中からは、土師器63～65、須恵器66～73が出土している。63・64は土師器高杯の脚部である。63は短い脚柱部を持ち、脚部に円形の透かし孔が4か所認められる。64は杯部と脚柱部が残存している。脚柱部は「中空」形態を呈し、外面には縦方向のミガキが施されている。65はほぼ完形品の手づくねの鉢である。口径3.8～4.0cm、器高4.1cmを測る。66は須恵器の杯蓋である。天井部と体部の境にはやや鋭い稜が見られる。この須恵器の時期に帰属する遺構は今回の調査では検出されていないが、周辺に存在している可能性が想定される。67～70は須恵器杯身である。蓋の受け部はやや内傾し、それほど立ち上がらない。ロクロの回転方向が確認できたものは67・69・70で、67・69は右回転、70は左回転であった。71・72は須恵器の提瓶である。口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はタテ方向のナデ、外面にはカキメが施されている。73は須恵器杯蓋である。天井部と体部の境目の稜はほとんど認められず、天井部の回転ヘラケズリの範囲は狭い。天井部には「×」印のヘラ記号が認められる。

土器74～78、金属器M2～4は3区から出土した遺物である。

74は須恵器杯蓋、75・76は須恵器杯身である。これらの須恵器のうち74・75は3区の南東端部に設定した確認調査のトレンチから出土した土器である。このトレンチは先述した竪穴住居1の北辺の一部および東辺を削平している。74・75の須恵器は竪穴住居1の想定範囲内から出土し、さらにその出



第27図 郷ノ溝遺跡2・3区出土遺物(1/4・1/3)

土レベルも住居床面とほぼ一致することから竪穴住居1に伴う遺物と想定したい。77は口径20.0cmを測る須恵器甕の口縁部、78は横瓶の体部小片である。調整は内面には同心円のタタキ、外面には平行タタキの後カキメが施されている。M2は3区北西端の微高地下がりから出土した平根式鉄鎌である。鎌身部先端を欠損しているが、平面五角形状を呈すると想定される。現存長8.8cm、先端部を復元した鎌身部分の長さは7.5cmを測る。鎌身関部はやや逆刺状を呈している。M3・M4は接合しないが、同一個体と考えられる大刀である。この大刀は溝5と溝9が交差している付近から出土し、おそらく溝9に伴う可能性が高い。(小嶋)

第4節 古代・中世の遺構・遺物

はじめに

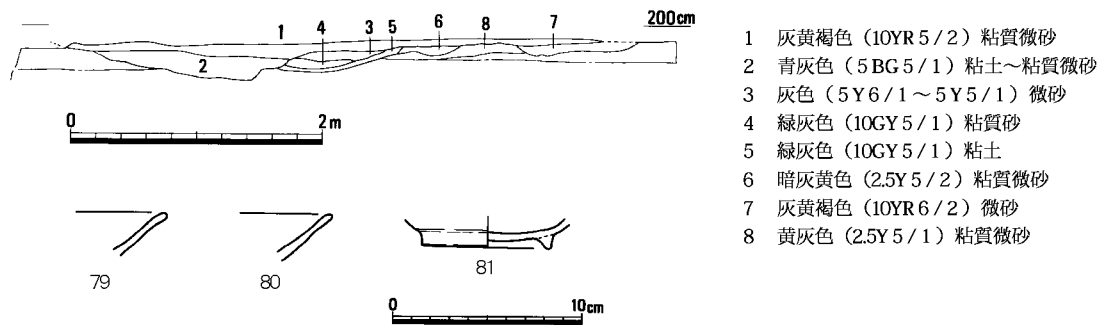
第29・30図に掲げるように、古代～中世にかけての検出遺構は、溝あるいは溝状を示す遺構が大半を占める。それらはおよそ20条を優に越えるが、明確な時期の判定や、人工的な掘開を示す手がかりが十分に得られたものは少ない。第29図に掲げた遺構群も時期的な判別が困難な遺構も含まれるが、層位的な判断で整理し掲載することとした。また第29図には、近世初期の遺構も含まれ、おそらく全域にわたって展開したと思われる、当該時期の水田に伴う溝状の痕跡は収載を避け、第56図に中世水田の畦畔図を加えるにとどめたい。(岡田)

1 たわみ

たわみ1 (第28・29図)

2区の北西端に位置する。これは、北東から流走してきた溝11がその方向をやや西寄りに変える地点にあたり、溝の南側に接して南北6m、東西4mの範囲がたわみとなる。底面は数段に落ち込み、検出面からの深さは30cm前後を測る。これは溝11の底面レベルとほぼ等しい。埋土は砂と粘土で、底面は鉄分とマンガンの沈着が著しく、激しい流水と滞水が繰り返したものと考えられる。

図示した遺物は、緑釉陶器椀79・80と土師器椀81である。緑釉陶器椀はいずれも須恵質の素地に緑色の釉調を呈する京都産で、同一個体の可能性もある。また、このほかに製錬滓である炉底塊が出土している(付載3)。たわみは、検出状況から溝11の氾濫部と考えられる。(高田)

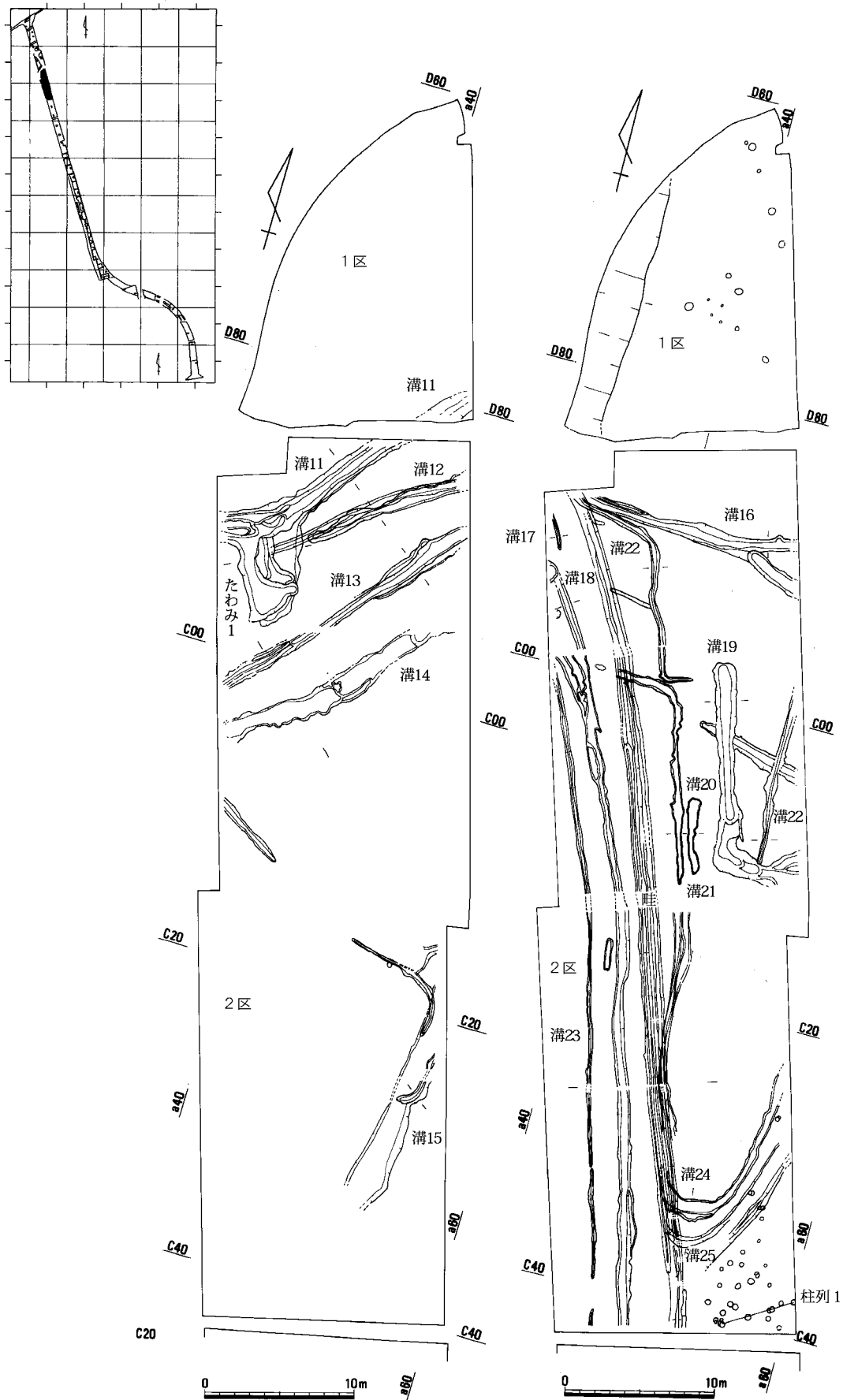


第28図 郷ノ溝遺跡2区たわみ1土層断面図・出土遺物(1/60・1/4)

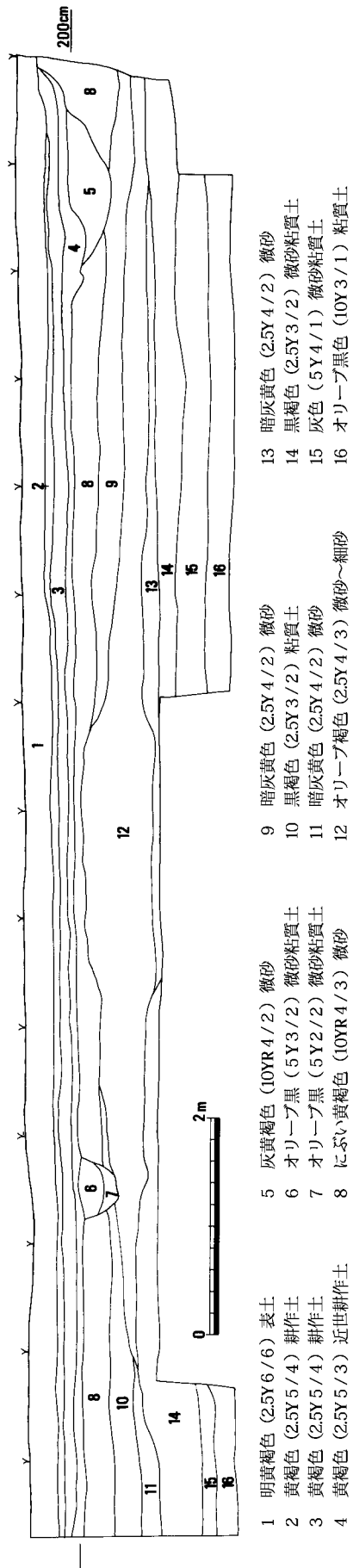
2 溝

溝11 (第29・30・32・33図、図版15・16)

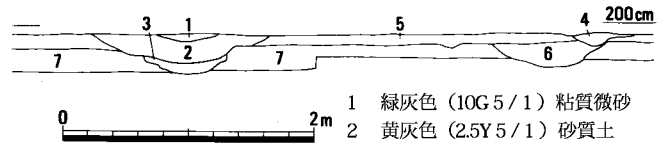
1・2区の境界付近で検出した溝である。北東から南西方向に直線的に流走した溝は、たわみ1と接する部分でやや西寄りに流路を変える。その先は新邸遺跡4区で確認している旧河道に注ぐものと推定される。検出時の溝の規模は、たわみ1までが幅1.5～2m、深さ30cm、底面海拔高は1.6m前後を測る。断面形は椀形を呈し、やや丸い底から段をもちながら壁が立ち上がる。この段は溝の掘り直しによるものと考えられ、段よりも上層となる第32図の第2層が砂質土であるのに対し、第3層は粘質土である。また、たわみ1付近から西については、幅2.5mと広がり、中央の高まりを介して溝底が分岐するようになる。この地点はたわみ1の底面同様に鉄分とマンガンの沈着が著しい。



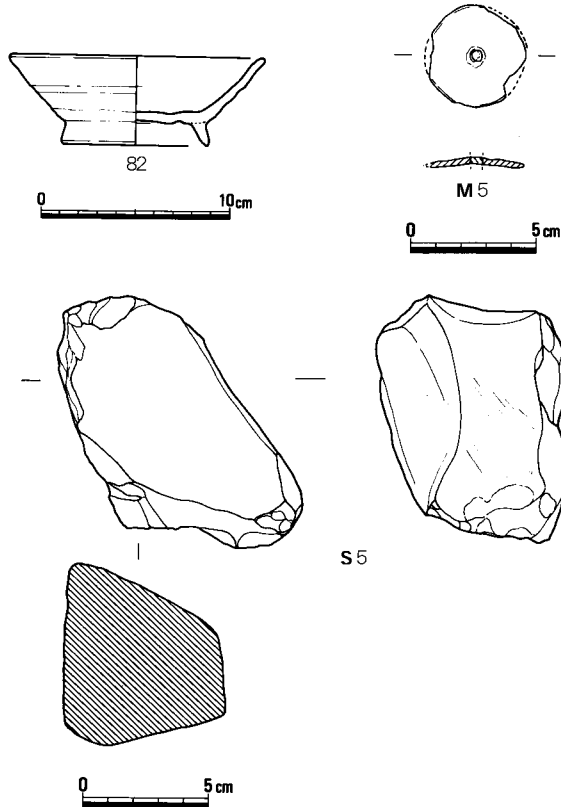
第29図 郷ノ溝遺跡1・2区古代～中世遺構図(1/400) 第30図 郷ノ溝遺跡1・2区中世遺構図(1/400)



第31図 郷ノ溝遺跡1区東壁南北土層断面図 (1/60)



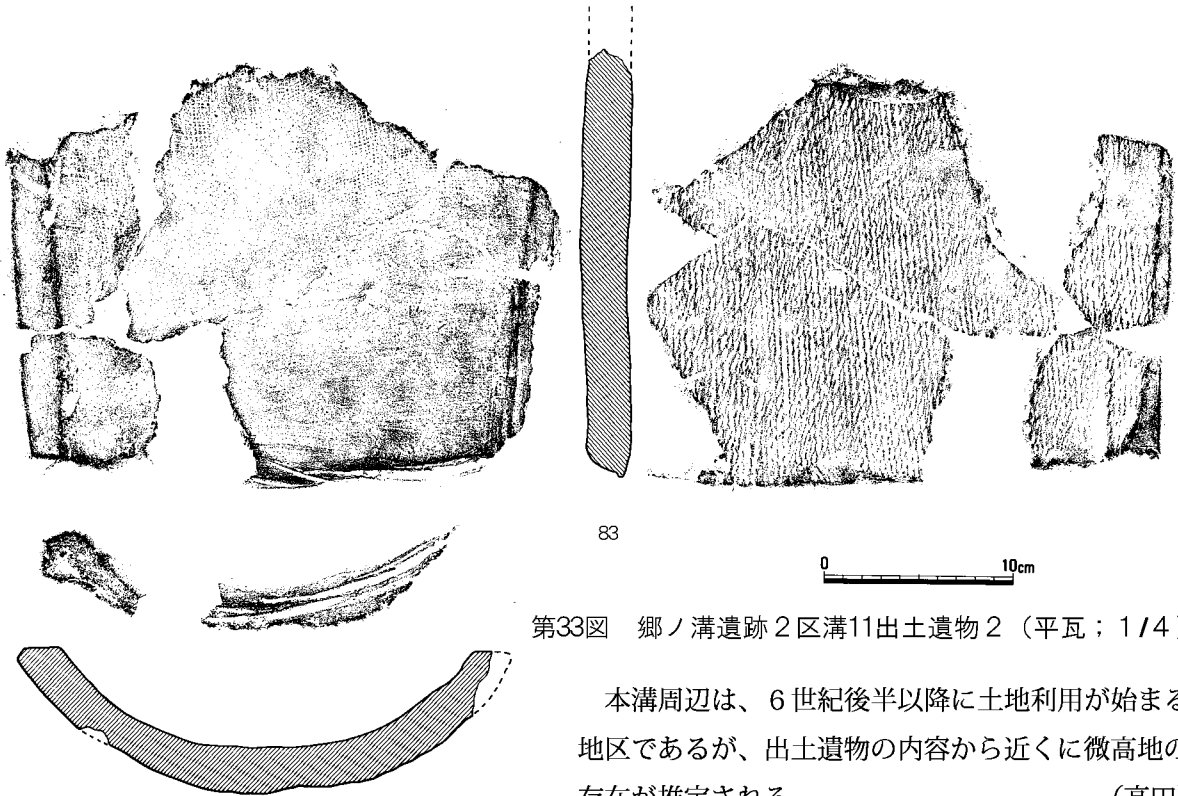
- 1 緑灰色 (10G 5/1) 粘質微砂
 2 黄灰色 (2.5Y 5/1) 砂質土
 3 暗緑灰色 (10G 4/1) 粘質土
 4 褐灰色 (7.5YR 4/1) 粘土
 5 にぶい黄褐色 (5YR 5/3) 微砂
 6 褐灰色 (10YR 5/1) 粘質土
 7 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質土



第32図 郷ノ溝遺跡2区溝11・12土層断面図・
溝11出土遺物1 (1/60・1/4・1/3)

図示した出土遺物は、土師器高台椀82、縄目タタキで布目の平瓦83、鉄製紡錘車M5、砥石S5である。土師器高台椀82は、口径13.2cm、器高4.8cm、高台径7.9cmを測る。このほかの遺物として製錬滓である流出孔滓が出土し、たわみ1出土の製錬滓と合わせ、周囲での一貫した製鉄・鍛冶操業が推定されている (付載3)。

出土した土師器高台椀82の製作時期は、10世紀後半から11世紀前半代と考えられる。これに対して、有機的な関係が推定されるたわみ1から出土した緑釉陶器椀の製作時期は9世紀後半から10世紀前半代と考えられる。このことから溝の埋没時期については、土師器高台椀の示す時期と推定され、存続時期はやや長期に亘るものと考えたい。



第33図 郷ノ溝遺跡2区溝11出土遺物2（平瓦；1/4）

本溝周辺は、6世紀後半以降に土地利用が始まる地区であるが、出土遺物の内容から近くに微高地の存在が推定される。（高田）

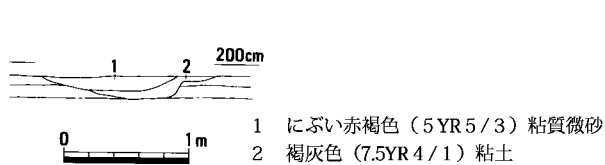
溝12（第29・32図、図版16）

2区の北部で検出した溝である。検出時の規模は幅45cm～1m、深さ10cm前後と浅く、南西端はたわみ1の手前で途切れる。断面形は東半で皿形を呈して底が平坦となり、西半では椀形を呈する。溝の埋土は、第32図の第4層で溝13・14と酷似し、溝13と同一面から掘り込まれる。なお、第32図の第6層に示すように、ほぼ重なる位置の下層に西端がたわみ1に切られる溝がある。

出土遺物は土器細片のみで、検出状況から古墳時代後半と考えられる。（高田）

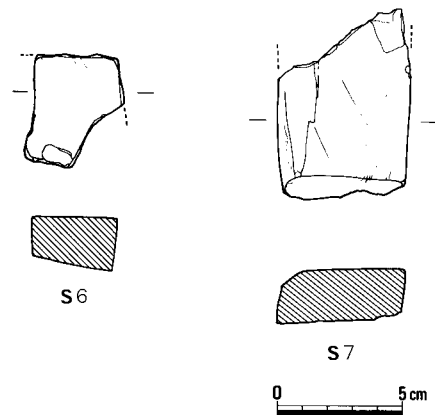
溝13（第29・34・35図、図版16）

溝12の南側で検出した北西—南東方向の溝である。検出時の規模は幅1.65m、深さ20cmを測る。断面形は皿形を呈するが、平坦な底から段を持ちながら壁が立ち上がる。溝11とは約6.5mの距離を置いて平行する。溝の埋土は褐灰色粘土である。これは、6世紀後半代の須恵器を出土する周辺の包含層と同一と考えられるものである。

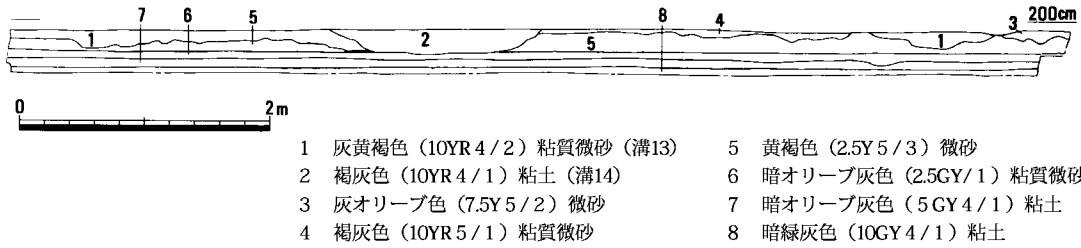


第34図 郷ノ溝遺跡2区溝13土層断面図・
出土遺物（1/60・1/4）

出土遺物は土器細片と、図示した砥石S6・7である。いずれも流紋岩製であり、欠損する部分以外の各辺を使用している。溝の時期は、検出状況から古墳時代後半と考えられる。（高田）



第4章 郷ノ溝遺跡



第35図 郷ノ溝遺跡2区溝13・14土層断面図 (1/60)

溝14 (第29・35図)

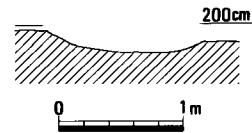
溝13の南側で検出した北西—南東方向の溝である。検出時の規模は幅1.65m、深さ20cmを測る。その断面形は逆台形を呈し、平坦な底から壁が急斜に立ち上がり、底面は北東に向かって数段に落ち込む。溝の埋土は先述の溝12・13と酷似する。

出土遺物は少量の土器細片のみで、時期は検出状況から古墳時代後半と考えられる。(高田)

溝15 (第29・36図)

2区中央から南半部に位置する溝で、微高地際の南北方向とそこから西に途切れながら延びるものを検出した。埋土は褐灰色粘土で、周辺の溝と酷似する。

検出状況から古墳時代後半と考えられる。(高田)

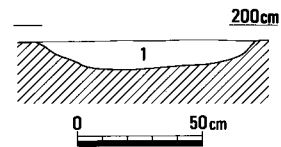


第36図 郷ノ溝遺跡2区溝15土層断面図 (1/60)

溝16 (第30・37図、図版17)

2区北端部に位置し、中世水田層下の褐灰色粘土層上面で検出した。東西方向に直流し、東端で浅い土壌状が分岐する。規模は幅86cm、深さ11cmを測り、断面形は逆台形を呈する。

溝の時期は中世と考えられる。(高田)

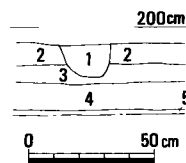


1 淡黄色 (2.5Y 8/4) 粘質土
第37図 郷ノ溝遺跡2区溝16土層断面図 (1/30)

溝17 (第30・38図)

2区北西端部に位置し、たわみ1と溝11の上層に堆積した中世水田層を除去して検出した。南端は浅くなって途切れ、北端は現代攪乱によって切られ、その先は不明となる。溝の規模は幅20cm、深さ13cmを測り、断面形は「U」字形を呈する。

溝の時期は、検出状況から中世と考えられる。(高田)

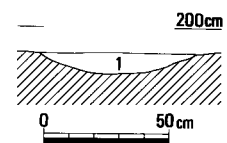


1 灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質土
2 灰黄褐色 (10YR 6/2) 砂質土
3 褐灰色 (10YR 6/1) 粘質砂~微砂
4 褐灰色 (10YR 5/1) 粘質微砂
第38図 郷ノ溝遺跡2区溝17土層断面図 (1/30)

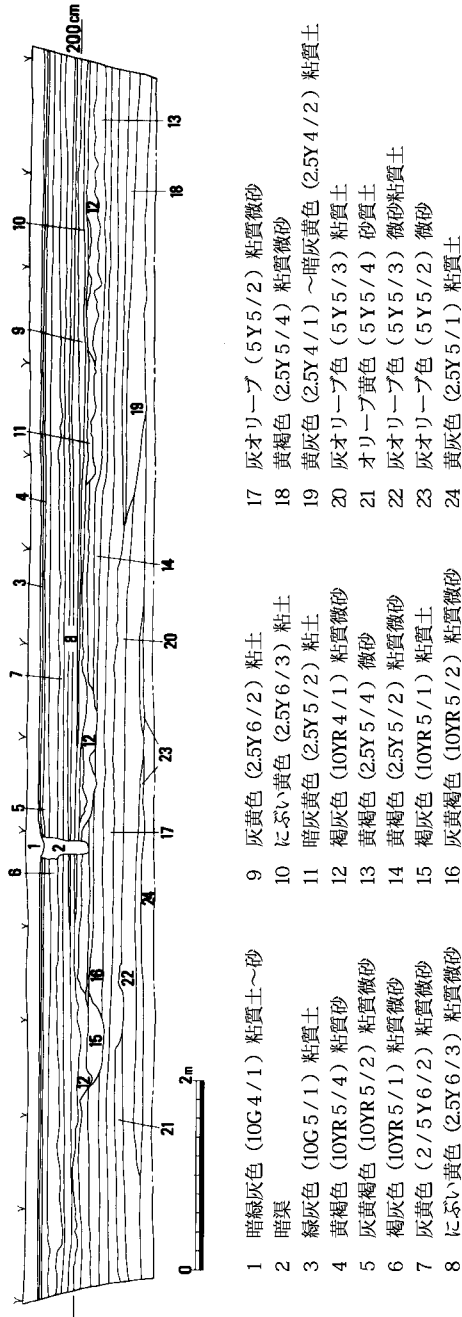
溝18 (第30・39・46図)

2・3区に位置する溝で、全長約66mにわたり検出した。2区においては、水田畦畔の西約1~2.5mの距離でほぼ平行し、2区南端から3区では、微高地端から西に3m前後離れて平行する。第46図の第11層であり、畦畔に対応する水田層よりも下層の水田層下となる。溝の規模は、幅50cm~1.2m、深さ10~20cmを測る。断面形は皿状を呈し底面に凹凸がある。

溝は、畦畔や水田形成に伴う掘削痕と考えられる。(高田)

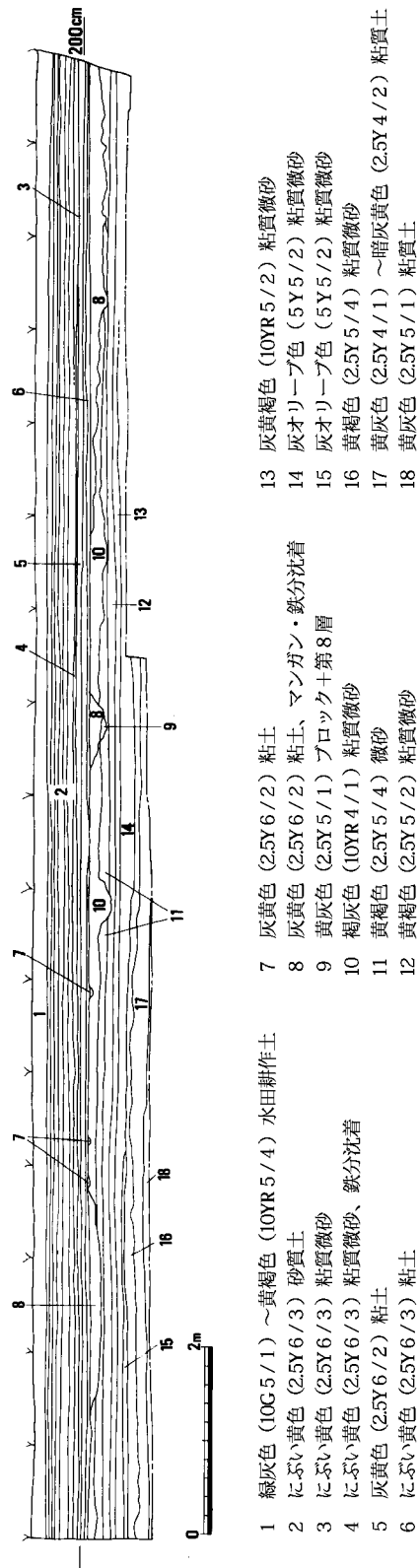


1 淡黄色 (2.5Y 8/3) 砂質土
第39図 郷ノ溝遺跡2区溝18土層断面図 (1/30)



- 1 暗緑灰色 (10G4/1) 粘質土～砂
- 2 暗渠
- 3 緑灰色 (10G5/1) 粘質土
- 4 黄褐色 (10YR5/4) 粘質砂
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂
- 7 灰黄色 (2/5Y6/2) 粘質微砂
- 8 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質微砂
- 9 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土
- 10 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土
- 11 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土
- 12 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 13 黄褐色 (2.5Y5/4) 微砂
- 14 黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質微砂
- 15 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 16 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 17 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土
- 18 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 19 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質微砂
- 20 暗灰黄色 (2.5Y4/1)～暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土
- 21 灰黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
- 22 オリーブ黄色 (5Y5/4) 砂質土
- 23 灰黄褐色 (5Y5/3) 微砂粘質土
- 24 灰黄褐色 (2.5Y5/2) 微砂

第40図 郷ノ溝遺跡2区東壁土層断面図 (1/80)

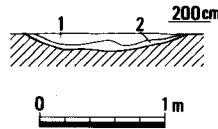


- 1 緑灰色 (10G5/1)～黄褐色 (10YR5/4) 水田耕作土
- 2 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土
- 3 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質微砂
- 4 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質微砂、鉄分沈着
- 5 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土
- 6 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土
- 7 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土
- 8 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土、マンガ、鉄分沈着
- 9 黄褐色 (2.5Y5/1) プロック+第8層
- 10 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 11 黄褐色 (2.5Y5/4) 微砂
- 12 黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質微砂
- 13 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 14 灰黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質微砂
- 15 灰黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質微砂
- 16 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質微砂
- 17 黄褐色 (2.5Y4/1)～暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土
- 18 黄褐色 (2.5Y5/1) 粘質土

第41図 郷ノ溝遺跡2区東壁土層断面図 (1/80)

溝19(第30・42図、図版16)

2区北半部に位置し、中世水田層下の褐灰色粘土層上面で検出したものである。平面形は「L」字状を呈し、東端は調査区外に延び、北端は丸く



- 1 褐灰色 (10YR6/1) やや粘質
- 2 にぶい黄橙色土

第42図 郷ノ溝遺跡2区溝19土層断面図 (1/60)

終わる。後述の溝22と切り合い、本溝のほうが新しいことを確認した。検出時の規模は幅90cm～1.7mを測り、底は数段に落ち込み、屈曲部付近が最も深くなる。

検出状況から中世に属するものと考えられる。

(高田)

第4章 郷ノ溝遺跡

溝20 (第30・43図)

2区北半部に位置する。他の溝同様に中世水田層下の褐灰色粘土層上面で検出した。平面形は複雑で、水田畦畔に平行するものから東西に屈曲して短く伸びて終わる。溝の南端は2区中央付近で途切れるが、その南側の溝24につながる可能性が高い。幅40~60cm、深さ5cm前後を測る。

畦畔よりも古く、下層水田の形成に伴う溝と考えられる。(高田)

溝21 (第30・44図、図版16)

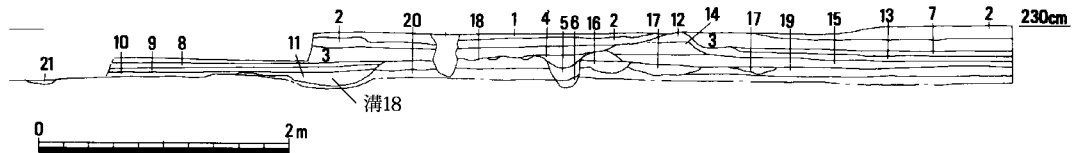
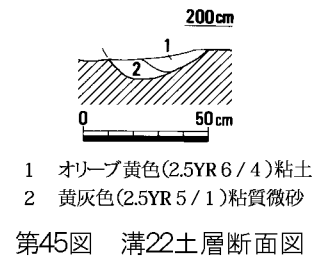
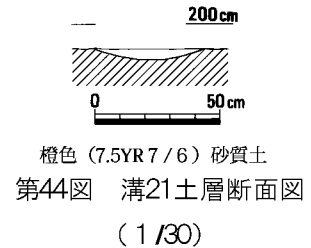
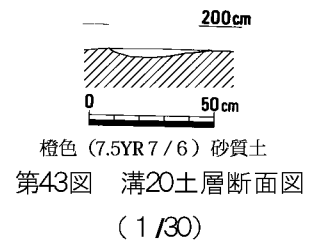
溝20の南端付近の東側に平行する。南北5m、幅40~80cm、深さ5cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面は凹凸がある。埋土は溝20と酷似する。溝20と同様に、その南側の溝につながる可能性がある。

下層水田の形成に伴う溝の痕跡と考えられる。(高田)

溝22 (第30・45図)

先述の溝19の西側に位置し、一部重なる溝である。平面形は「X」字状を呈し、その西と南は溝19付近で途切れて終わり、東と北は徐々に深くなりながら、調査区外に延びていく。規模は東西溝がやや大きく幅1m前後を測り、南北溝は幅40~60cmを測る。断面形は多様であり、浅い皿状から逆台形を呈し、底は凹凸がある。

検出状況から中世に属するものと考えられる。(高田)



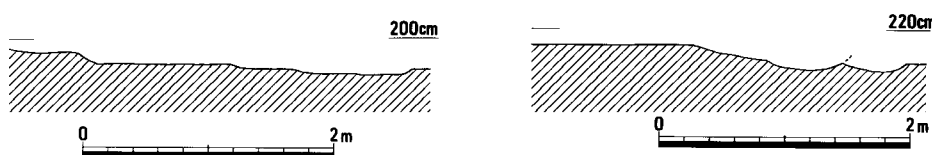
- | | | |
|--------------------------|----------------------------|-------------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粗砂 | 8 にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土 (水田) | 15 オリーブ黄色 (5Y 6/3) 粘質土 |
| 2 オリーブ黄色 (7.5Y 6/3) 粘質微砂 | 9 にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土 (水田) | 16 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質土 |
| 3 灰オリーブ色 (7.5Y 5/3) 粘質微砂 | 10 にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 粘土 | 17 灰黄褐色 (10YR 6/2) 粘土 |
| 4 にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘質微砂 | 11 にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 粘土 | 18 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘土 |
| 5 灰黄色 (2.5Y 6/2) 粘質土 | 12 灰褐色 (7.5YR 5/2) 粘質土 | 19 灰褐色 () 粘質土 |
| 6 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘質土 | 13 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質土 | 20 灰褐色 (7.5YR 5/2) 粘質土 |
| 7 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質土 | 14 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質土 | 21 オリーブ黄色 (2.5Y 6/4) 粘土 (溝23) |

第46図 郷ノ溝遺跡2区溝18・23ほか土層断面図 (1/60)

溝23 (第30・46図)

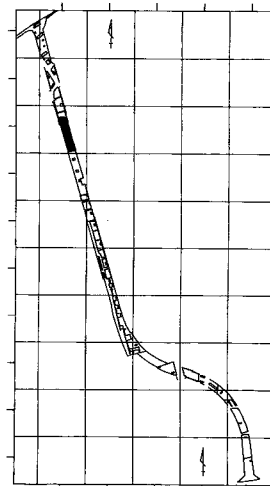
2・3区に位置する溝で、途切れながらも全長約48mにわたり検出した。溝18とはその西側約1~1.8mの距離でほぼ平行する。下層水田層の除去後に検出したものである。溝の規模は幅20cm、深さ5cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面には凹凸がある。

溝は、西から東への畦畔の移動や水田形成に伴う掘削痕と考えられる。(高田)



第47図 郷ノ溝遺跡2区溝24・25土層断面図 (1/60)

溝24 (第30・47図)



中世水田の畦畔は、南北方向の微高地に対して北北東側から取り付く。本溝は畦畔と微高地が鋭角をなす部分に位置するもので、平面形は「U」字形を呈する。北端は溝20・21につながる可能性が高く、微高地の溝25に平行する。また、南北方向の一部は畦畔除去後に

検出した。検出時の規模は幅35cm～1.5m、深さ10cm前後を測る。埋土は灰黄褐色粘質土である。

水田の形成に伴う溝と考えられる。(高田)

溝25 (第30・47図)

溝24とほぼ重複する、平面形「U」字形を呈する溝である。その南側は微高地斜面に位置し、南北部分は溝24と重複しながら北に延びる。さらに北側は溝20・21につながる可能性がある。南北部分の一部は畦畔除去後に検出している。また切り合いから、溝24よりも本溝が新しいことを確認している。

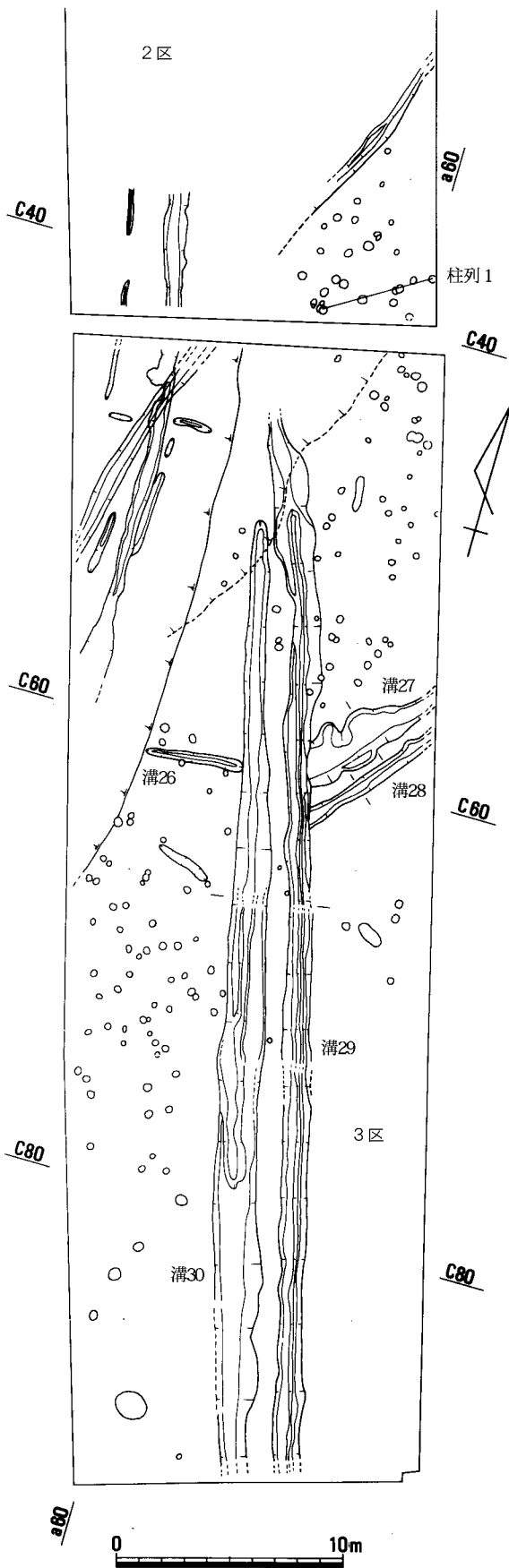
以上のことから、本溝は水田形成に伴う痕跡と考えられ、溝24の次段階に微高地斜面を掘削した際のものとして理解する。(高田)

溝26 (第48・49図、図版18)

3区C60ラインとほぼ平行する位置で検出された東西方向の溝である。

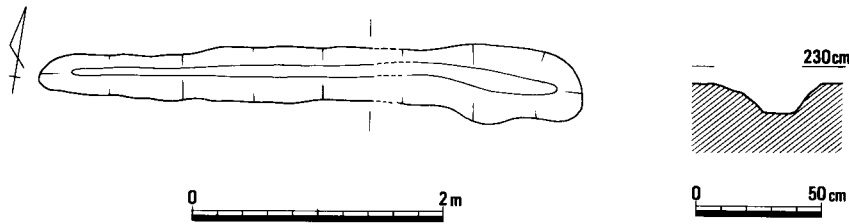
検出全長は約4.3m、深さ10数cmを測り、淡灰褐色の砂質土が埋積する。溝の断面形は逆台形を示すが西端では東端の半分ほどに狭まる。溝の規模や形状から、建物に伴う雨落ち溝のような機能が考えられるが、それを裏付ける遺構は確認できなかった。

出土遺物は土器小片がわずかに認められたが、赤褐色の備前焼小片があり、室町時代以降に存在した可能性ももっとも高い。(岡田)



第48図 郷ノ溝遺跡3区古代～中世遺構図(1/300)

第4章 郷ノ溝遺跡



第49図 郷ノ溝遺跡 3区溝26 (1/60・1/30)

溝27 (第48・50図)

3区の東側に位置し、C60ラインよりやや北側から検出された溝である。流走方向は北東から南西である。後述する溝29に合流する可能性も否定できない。

溝の南肩はほぼ直線を呈しているが、北肩は蛇行しているため溝の幅は一定せず、最大幅2.3m、最小幅82cmを測る。検出面からの深さは5～10cmと一定ではなく、底面には凹凸が見られる。溝は灰黄褐色粘質微砂で埋まっていた。

遺構の詳細な時期は特定できないが、中世の範囲に収まる。(小嶋)

溝28 (第48・51図)

先述の溝27から約50cm南で検出された溝である。溝27と同様に北東から南西に流走し、溝29に合流する可能性も否定できない。検出幅は約70cm、底面までの深さは5cmと浅い。溝埋土は灰黄色粘質微砂である。

遺物は土器小片のみであるが、それらから遺構の時期は中世の範囲に収まる。

なお、溝27・28は先述の溝7と同一地点で検出されていることから、溝として機能しているのではなく溝7埋没後のたわみに灰黄色粘質微砂が落ち込んでいるものかもしれない。(小嶋)

溝29 (第48・52図、図版18)

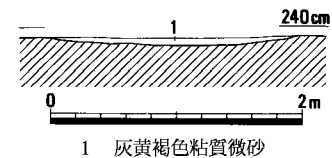
3区の中央部で検出された、北西から南東にかけて流走している溝である。北端は後世の削平により失われている。この溝は南側に隣接する仏生田遺跡1区では確認されていない。これは後世の水田造成等で中世の遺構面が削平されているためと考えられる。溝の埋土は灰黄色粘質微砂の一層のみである。溝はテラス状の段が数か所検出された。底面の海拔高は2.2mでほぼ一定している。

遺物は少量出土しており、それらから遺構の時期は中世の範囲に収まる。(小嶋)

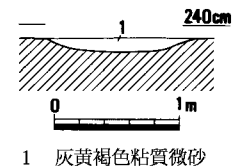
溝30 (第48・52図、図版18)

先述の溝29の約1m西側で検出された溝で、溝29と同様に北西から南東にかけて一直線に流走している。溝の幅は北半部が約90cm前後、南半部が約2m前後で、南に下るにしたがい広がっている。断面形は浅い皿状となっており、検出面から底面までの深さは10cm前後、海拔約2.2mを測る。

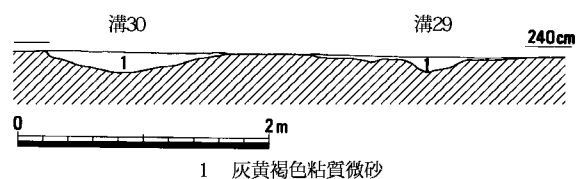
遺構の時期は、出土遺物と埋土の状況から中世に比定される。(小嶋)



第50図 溝27断面図 (1/60)



第51図 溝28断面図 (1/60)

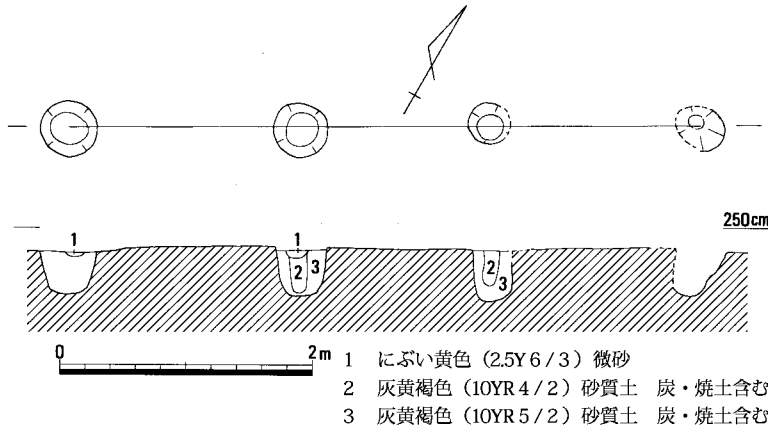


第52図 郷ノ溝遺跡 3区溝29・30断面図 (1/60)

3 柱列

柱列1 (第30・48・53図、図版17)

2区南東隅の微高地上で、北東—南西方向の柱列を検出した。これらは、微高地上の柱穴群中、掘り方が比較的大ぶりで柱痕跡をもつ4本としてまとめられたものである。検出面は灰黄褐色砂質土層であり、海拔高は2.35mである。柱列の規模は全長で5mを測る。また各柱間の距離は、南側から1.85m、1.5m、1.65mを測る。柱穴掘り方の径は30~45cm、深さは40cm前後で、径12~15cmの柱痕跡をもつ。



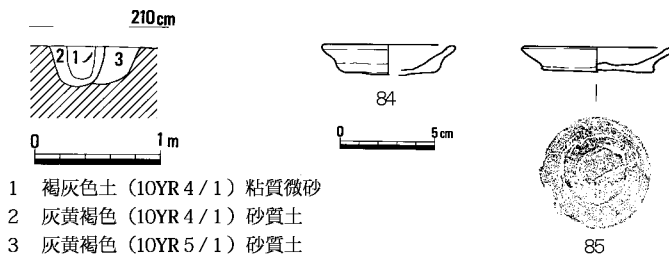
第53図 郷ノ溝遺跡2区柱列1 (1/60)

出土遺物は土師質高台付椀の細片があり、柱列の時期は中世と考えられる。(高田)

その他の柱穴 (第48・54図)

2区南東端から3区にかけての微高地上で多数の柱穴を検出した。

土師器小皿84・85等から、柱穴の時期は鎌倉時代を中心とするものと考えられる。(高田)

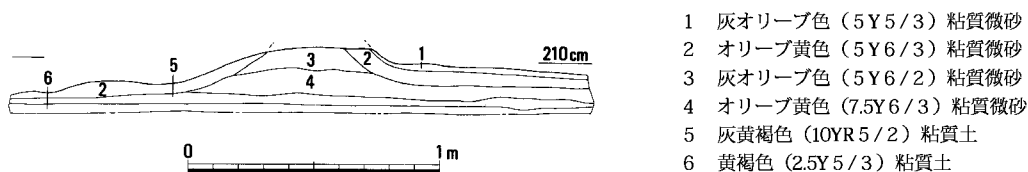


第54図 郷ノ溝遺跡2区柱穴土層断面図・出土遺物(1/60・1/4)

4 水田 (第55~57図)

1~3区の低位部において中世水田を検出した。これは、南北方向の微高地に対して北北東側から取り付く直線的な畦畔と、それによって東西に分けられる水田面で構成される。東西方向の畦畔は検出していない。

水田層はオリーブ黄色粘質微砂で厚さ4cmを測り、層下は鉄分とマンガンを顕著に沈着する。田面の海拔高は畦畔の西側で2.03m、東側で2.06mを測り、東側が若干高い。また畦畔の西側の水田層下にはさらに2~3層の下層水田層がみられる。水田覆土はにぶい黄色微砂~砂質土で、厚さ27cm前後を測る。鉄分の水平沈着が4~6層みられ、近世水田層の可能性もある。中世水田が洪水等で埋没した後に再び水田化したものと思われる。



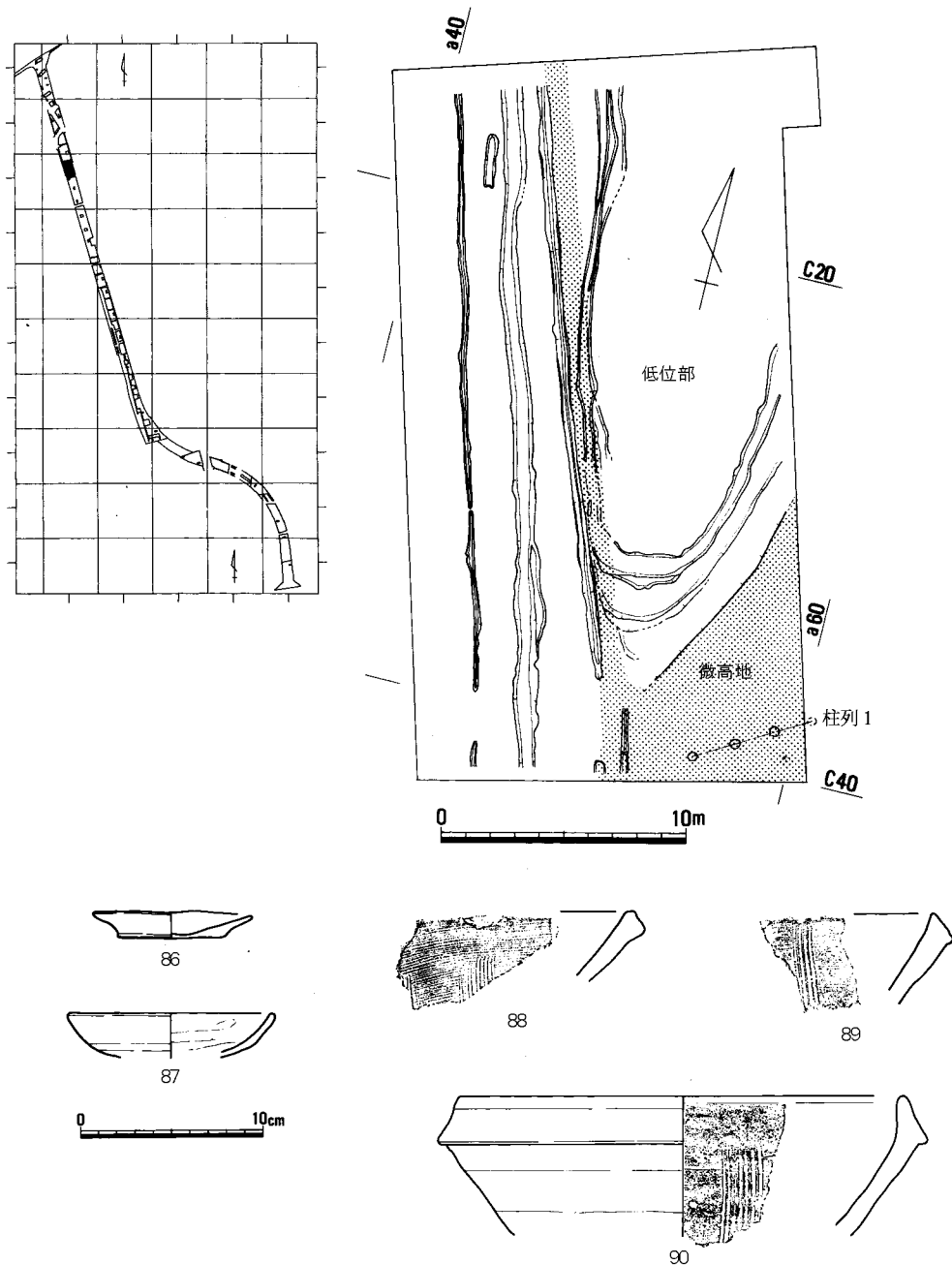
第55図 郷ノ溝遺跡2区水田畦畔断面図 (1/30)

第4章 郷ノ溝遺跡

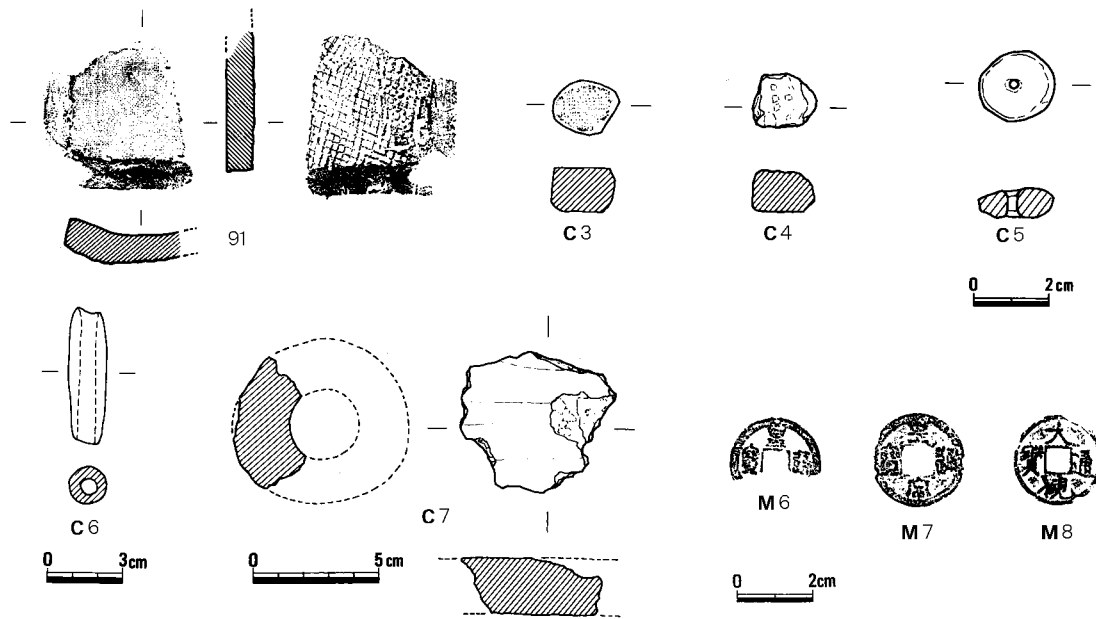
畦畔は盛土によるもので、幅1m、高さ25cmを測り、西側に接して幅45cm、深さ25cmの溝がある。この溝の埋土は水田層と酷似し、覆土と異なる。このことから溝は、畦畔形成時の掘削痕であり、水田耕作時に埋没したものと考えられる。畦畔の西側に平行する溝18・23についても、下層水田層除去後に検出することから、下層水田段階の畦畔形成に伴う掘削痕と考えたい。さらに、溝20・24・25についても畦畔下で検出していることから、下層水田段階の掘削痕と思われる。

以上の検出状況から、2・3区の中世水田の形成段階を復元してみたい。まず、最も西側の溝23を掘削して畦畔を形成する。続いて東側の溝18が掘削され、畦畔が移動する。これら下層水田段階で溝24・25も掘削される。さらに東側に畦畔が移動して水田化した後、最終的に洪水砂で埋没するというものである。

図示した遺物は、中世水田層から出土したものである。土師器小皿86、土師質高台付椀87、土師質



第56図 郷ノ溝遺跡2区南半水田畦畔(アミ目)・出土遺物(1/300・1/4)



第57図 郷ノ溝遺跡2区水田出土遺物2 (1/4・1/3・1/2)

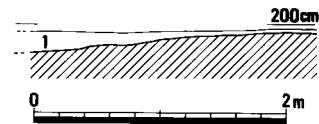
播鉢88、備前焼播鉢89・90、平瓦91、瓦片転用土製品C3・4、土製平玉C5、土錘C6、フイゴ羽口C7、輸入銭の皇宋通寶M6・7、大観通寶M8である。

出土遺物の特徴から、水田の時期は室町時代と考えられる。(高田)

5 遺構に伴わない遺物

1区 (第58・59図)

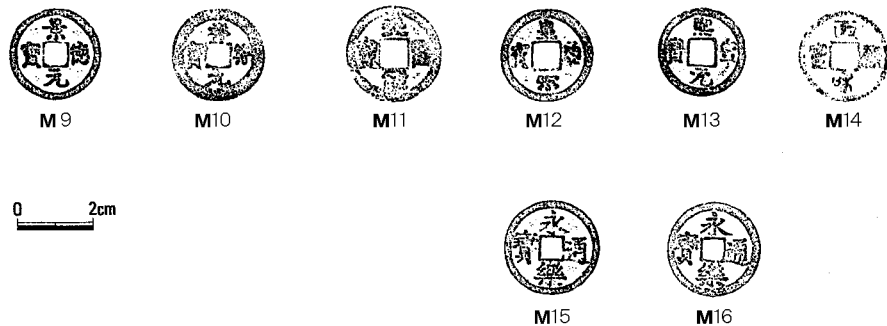
1区西端で確認した中世の低位部などから8枚の銅銭が出土した。低位部は標高2m弱で検出し、東岸の長さは16mで、肩は直線ではほぼ南北方向を向く。深さは調査区内で25cmで、しまりの弱い砂質土が堆積していた。銅銭のうちM10のみが近世包含層から、他7枚はこの低位部の岸から1~2m西側に寄った地点、標高1.8~2mで見つかっている。調査時から永楽通寶の存在は認識していたが、後に北宋銭が多いことが判明した。北宋銭がM9景德元寶(1004年初鑄)、M10祥符元寶(1008年)、M11天聖元寶(1023年)、M12皇宋通寶(1039年)、M13熙寧元寶(1068年)、M14政和通寶(1111年)、明銭がM15・M16の永楽通寶(1408年)である。



1 にふい黄色(2.5Y6/3)砂質土

第58図 郷ノ溝遺跡1区
中世低位部断面図(1/60)

(氏平)



第59図 郷ノ溝遺跡1区中世低位部出土遺物(銭貨:1/2)

第4章 郷ノ溝遺跡

2・3区 (第60~62図)

本項ではおもに包含層出土遺物について触れるが、明確な遺構たとえば一部の柱穴から出土した遺物についても触れておく。

第60図では2・3区の遺物、おもに土器類について掲載する。

92は須恵器蓋で短頸壺のような小型器種の蓋と考えられる。93は内面に暗文がみられる黒色土器で、幅広で台形の高台が付けられる。

94・95は土師器椀でいずれも細く高い高台を持つ。

96は平瓦で凸面には縄目のタタキ、凹面にはかすかに布目が残る。

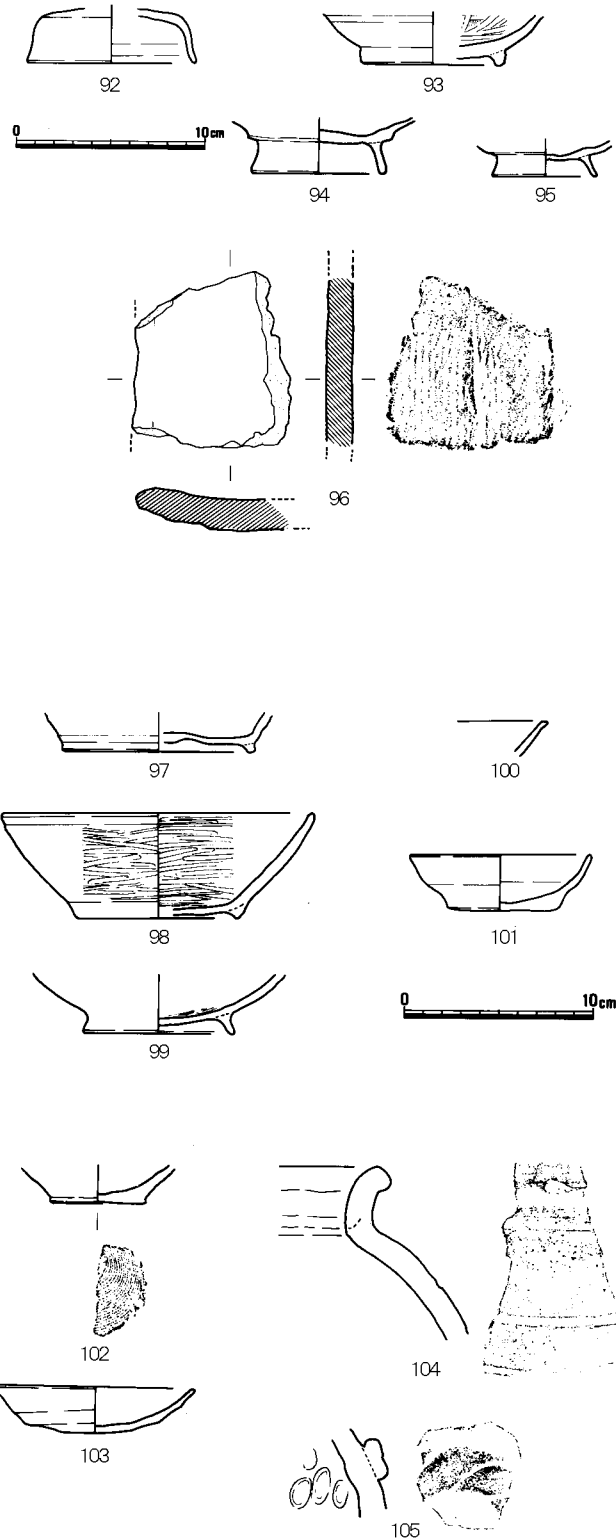
以上の遺物は、2区で出土したもので、古代Ⅱ~Ⅲ期に比定される。

97~101は3区から出土した古代の土器である。97は須恵器杯で低い高台が付けられる。98は黒色土器で、内外面に横方向の細かいミガキ調整の痕跡がみられる。99は94・95と同一の器種である。100は緑釉陶器の小片である。椀の可能性が高い。101は土師器の小型杯である。これらの土器はおおむね9~10世紀、古代Ⅲ期に比定されよう。

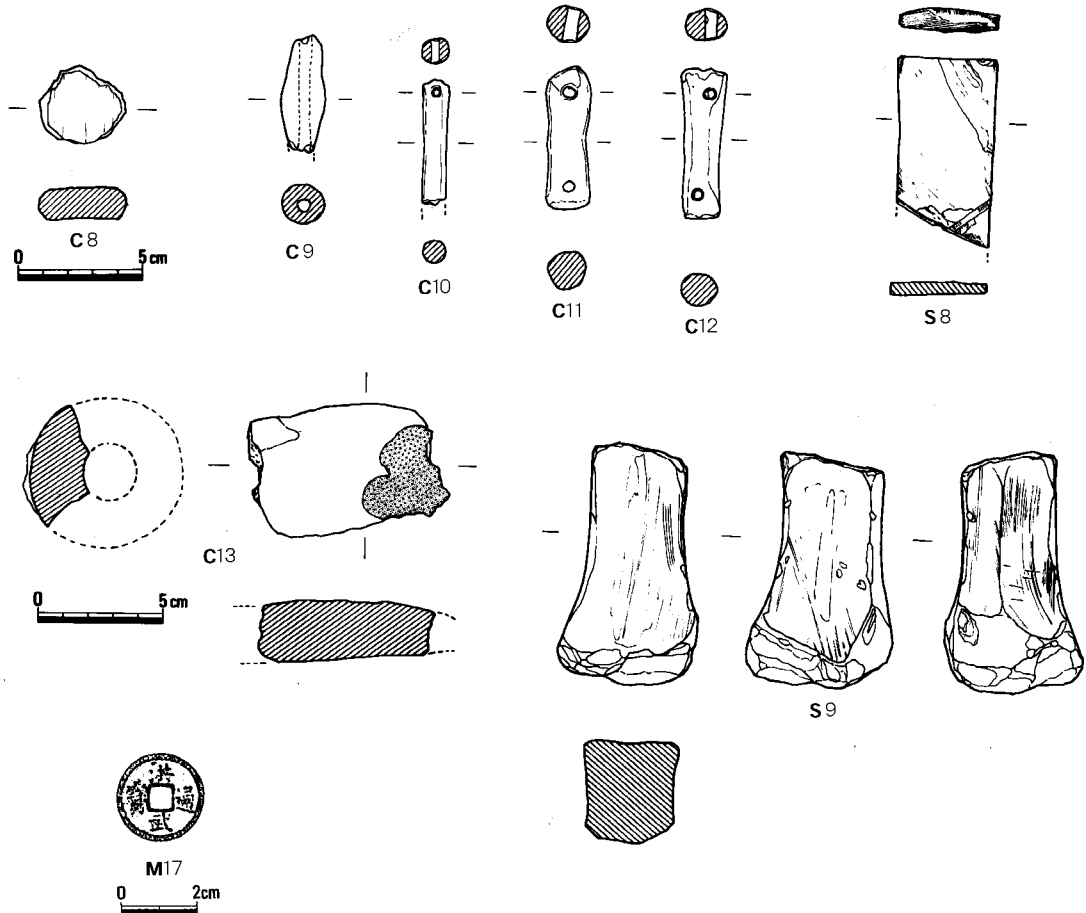
102は備前焼椀で、須恵器と同一の焼成である。外底部には糸切りの痕跡が観察される。103は土師器皿である。104・105は備前焼である。前者は102と同様青灰色を呈し、体部上位に平行沈線文を飾る。口縁端部は明瞭な玉縁を示さない。

105はいわゆる水屋甕でその体部上位に、粘土紐を円形に貼り付けた装飾部分である。以上の出土遺物はおおむね中世、鎌倉時代から室町時代に比定される。

第61図には、土製品および石製品、銭貨を掲載する。C8は遊戯具と考えられる土製円盤で、素材は備前焼である。C9~12は、棒状の小型土錘で、単孔と双孔の2種類がある。C13は円筒形の鞆の羽口の破片で、一部に熔融付着物が観察される。鉄滓の出



第60図 郷ノ溝遺跡2・3区古代~中世出土遺物1(1/4)



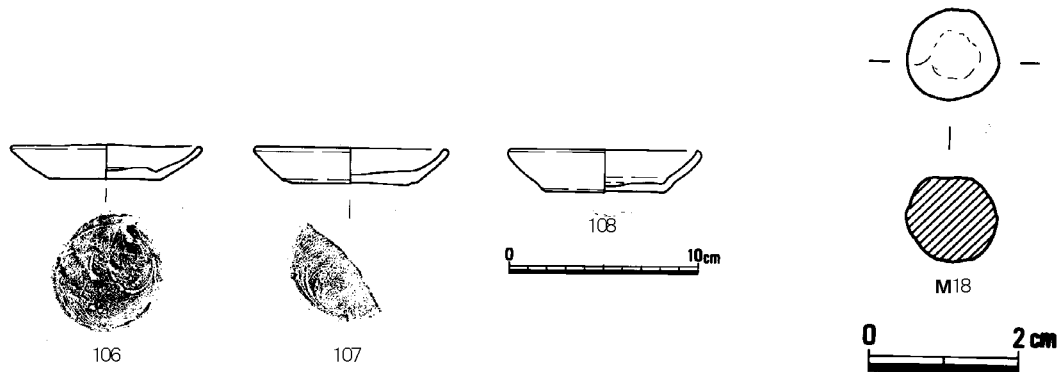
第61図 郷ノ溝遺跡2・3区古代～中世出土遺物2（1/3・1/2）

土とともに鍛冶に関連する重要な遺物である。

S8・9は小型の砥石である。前者は扁平な粘板岩を素材としている。後者は、ほぼ前面に使用痕跡が認められ、素材は砂岩である。M17は洪武通寶で、初鑄年は1368年の明銭である。鮮明かつ鑄上りの良好な銭文を残す。

第62図には、16世紀後半以降に比定される出土遺物を掲載した。106～108は、3区溝29の北端付近で検出された近世に比定される「野つぼ」状の土壌から出土した土師器皿である。体部は比較的薄手に作られ、口縁端部は丸くおさまる。外底部には糸切り痕跡が残される。

M18は鉛製の銃弾で、前述の土師器皿と一緒に出土している。ややいびつな球形を示すが、発射弾ではないだろう。重さは8.62gを量る。
(岡田)



第62図 郷ノ溝遺跡3区中世～近世出土遺物（1/4・1/1）

第5節 小 結

本稿では、郷ノ溝遺跡について検出された遺構・遺物について概略を述べた。

遺跡の立地は、新邸遺跡で確認された旧河道の南方に広がる沖積平野の一角を占める。調査地の北側の約6割は低位部で、中世以降水田が形成された痕跡が確かめられた。これは、発掘直前まで存続していたことになる。

南側では微高地が検出され、その下層周縁部で弥生前期土器1や23が出土している。このことは、弥生時代中期を主体とする新邸遺跡に先行する集落遺跡の存在を示唆する重要な遺物と考えられる。また、同時期中期に比定される溝2・3の存在は、調査地周辺や北方に集落の存在が推定され、それも新邸遺跡と一体となる大規模な集落を想定して良いだろう。

溝4は弥生後期に比定される溝であるが、方向は溝2・3と平行して検出されている。後述の仏生田遺跡1区でも溝の流走方向は、ほぼ同一である点は、溝のもつ機能が共通するものと理解される。これらの溝群については、まず下流域での水田耕作に伴う用配水、上流域での排水機能あるいは、集落の浸水防御などさまざまな性格が考えられるが、狭小な発掘範囲の中での結論は困難である。

なお、溝2の最下層からは、少量ながらもイネ科の花粉が検出されているので、稲作を生活基盤とした集落が間近に存在していたことは確実であろう。

古墳時代でも、ほぼ同一方向の溝群が形成される。時代を越えて、これらの溝群が必要不可欠な存在であったことを物語っているといえよう。

古墳時代前期までの住居はまったくその痕跡すら確認できなかったが、後期の6世紀後半に比定される竪穴住居の存在を、部分的ながらも検出することができた。竪穴住居1・2は、ほぼ同規模の隅丸方形を示し、北西辺に竈の下部施設と考えられる浅い土壌が検出されている。

ほぼ同時期の溝9は、これまでの時期の溝群とは異なり、西方から東方へ流走する。このことは、調査地の西側にも集落が広がる可能性を示しているかも知れない。また、同時期の溝10からは少量の鍛冶滓が出土しており、鉄器と関わりの深い砥石S4の出土とあわせ、注意を払う必要がある。包含層出土のM2～4も、同時期の鉄製品と考えられ、鉄器製作に深く関わる集団の集落の存在も想定される。

古代から中世にかけての遺構は、やはり溝と柱穴が大半を占める。なかでも溝は、貫流する溝のみならず、溝19や溝26のような完結する区画溝のような直線的な溝も確認されている。いずれも建物などの建築遺構との共存は確かめられなかったが、人々の居住場所としてこの場所が利用されていたことは確実である。古代の遺物では、緑釉陶器79・80・100や平瓦83の出土が特筆される。前者のうち79・80は京都産、100は周防産の緑釉陶器碗の可能性が高い。一方、須恵器杯97や土師器82、黒色土器98など9世紀から10世紀代にかけての日常的な土器類は、中撫川遺跡の出土土器との比較が必要となろう。

中世の遺物としては、備前焼の出土のほかに亀山焼も散見し、備前国と備中国の境界に位置する遺跡地の特色が感じられる。M9～16などの輸入銭のまとまった出土は、さまざまな物資の交易を物語る具体的な資料といえるかも知れない。 (岡田)

郷ノ溝遺跡土器観察表

掲載 番号	実測 番号	出土 地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・ 土層名	種別	器種	色調	胎土	焼成	形態・手法の特徴など
1	G38	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	N39たわみ	弥生土器	広口壺	5YR6 橙色	長石・石英	良好	頸部にヘラガキ沈線2条
2	G1	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝7	弥生土器	壺	7.5YR6Aにぶい橙色	長石・石英	良好	頸部に貼付突帯を巡らす 円孔2か所、頸部に突帯文
3	G70	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝8	弥生土器	壺	5YR6 橙色	長石・石英	良好	貼付突帯文2条が巡る
4	G71	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝8	弥生土器	壺	5YR6 橙色	長石・石英	良好	頸部には凹線が巡る
5	G60	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝6, 7	弥生土器	壺	10YR8 灰白色	長石・石英	良好	突帯文に押圧刻み目
6	G38	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝8	弥生土器	壺	2.5YR4 浅黄橙色	長石・石英	良好	頸部には縦方向のミガキ
7	G69	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝7	弥生土器	壺	5YR6 橙色	長石・石英	良好	頸部に突帯文、口縁上面に 櫛描き文
8	G72	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝8	弥生土器	壺	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	体部内外面、ハケ調整の後 ヘラミガキを加える
9	Q107	3区	溝2	郷ノ溝調査区2区	溝7	弥生土器	甕	10YR8 浅黄褐色	長石・石英	良好	脚部上位に刺突文が巡る、 円板充填
10	G63	3区	溝3	郷ノ溝調査区2区	溝1	弥生土器	高杯	2.5Y8 灰白色	長石・石英	良好	押圧文を加飾した突帯文 が巡る
11	G65	3区	溝3	郷ノ溝調査区2区	溝1	弥生土器	壺	5YR6 橙色	長石・石英	良好	内外面に加熱痕跡
12	G64	3区	溝3	郷ノ溝調査区2区	溝1	弥生土器	壺	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	口縁端部上面は擬凹線、 杯部ミガキ
13	G62	3区	溝3	郷ノ溝調査区2区	溝1	弥生土器	高杯	7.5YR6Aにぶい橙色	長石・石英	良好	外底部ミガキ、煤付着 加熱痕跡あり、器表剥落
14	G61	3区	溝3	郷ノ溝調査区2区	溝1	弥生土器	甕	10YR6 灰黄褐色	長石・石英	良好	体部外面タタキ後ハケ目、 搬入土器か
15	G67	3区	溝4	郷ノ溝調査区2区	溝8	弥生土器	壺	5YR6 橙色	石英多含	良好	精製土器
16	G79	3区	溝4	郷ノ溝調査区2区	溝8	弥生土器	甕	10YR6Aにぶい黄褐色	雲母多含	良好	
17	Q1	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	微高地縁辺	弥生土器	台付壺	5YR6 橙色	長石・石英	良好	
18	Q40	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	微高地縁辺	弥生土器	甕	5YR6 橙色	長石・石英	良好	
19	Q25	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	微高地縁辺	弥生土器	高杯	7.5YR6Aにぶい橙色	長石・石英	良好	
20	Q10	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	微高地縁辺	弥生土器	高杯	5YR6 橙色	長石・石英	良好	杯部内外面ヘラミガキ
21	G39	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	N39たわみ	弥生土器	裝飾高杯	5YR6 橙色	長石・石英	良好	櫛状工具による刺突、 鋸歯文が巡る
22	G22	2区	微高地縁辺	郷ノ溝調査区1区	N39たわみ	弥生土器	裝飾高杯	5YR6 橙色	長石・石英	良好	
23	G28	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	弥生土器	甕	5YR6 橙色	長石・石英	良好	体部上位にヘラガキ沈線 2条
24	G38	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	弥生土器	壺	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	口縁部櫛描き沈線
25	G26	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	弥生土器	壺	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	口唇部刻み目、口縁上面 には格子目
26	Q14	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	弥生土器	甕	10YR6 灰黄褐色	長石・石英	良好	体部外面に斜行タタキ
27	Q15	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	弥生土器	壺	10YR8 浅黄褐色	長石・石英	良好	体部外面ヘラミガキ、内 面ヘラクスリ
28	G57	3区	堅6住居1	郷ノ溝調査区2区	土層1	須恵器	杯	5Y7 灰白色	長石・石英	良好	櫛描き波状文を飾る
29	G97	3区	溝5	郷ノ溝調査区2区	溝0	土師器	壺	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	口頸部欠損目立つ
30	G100	3区	溝5	郷ノ溝調査区2区	溝0	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	石英・長石	良好	口縁部には、浅い櫛描き 沈線が巡る
31	G95	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	
32	G90	3区	溝5	郷ノ溝調査区2区	溝0	土師器	製塩土器	5YR6 赤褐色	長石・石英	良好	器表剥落、体部外面は平 行タタキ
33	G91	3区	溝5	郷ノ溝調査区2区	溝0	土師器	製塩土器	5YR6 赤褐色	長石・石英	良好	器表剥落、体部外面は平 行タタキ
34	G77	3区	溝5	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	小型丸底埴	5YR6 橙色	石英・長石	良好	器表剥落
35	G65	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	小型甕	10YR6にぶい黄褐色	石英多含	良好	
36	G76	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	石英多含	良好	器表面剥落
37	G74	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝0	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	石英・長石	やや不良	雲母も多く含む
38	G98	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	石英・長石	良好	肩部に刺突2か所
39	G75	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	甕	7.5YR4 浅黄褐色	石英多含	良好	体部外面タタキ
40	G86	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	小型鉢	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	ミニチュア、丁寧な作り
41	G87	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	小型鉢	10YR6 褐灰色	長石・石英	良好	ミニチュア、丁寧な作り
42	G94	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	鉢	5YR6 橙色	雲母多含	良好	内面に赤色顔料付着痕跡 あり、容器か?
43	G73	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	台付鉢	7.5YR6 浅黄褐色	石英	良好	器表面剥落
44	G83	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	鉢	2.5YR6 橙色	石英・角閃石	良好	口縁部上位は荒い、櫛描き 沈線、一部加熱痕跡
45	G86	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	鉢	5YR6 橙色	長石・石英	良好	須恵質
46	G83	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	鉢	10YR6 明黄褐色	長石・石英	良好	器表剥落
47	Q101	3区	溝6	郷ノ溝調査区2区	溝9	土師器	高杯	10YR6 浅黄褐色	石英・長石	不良	器表剥落
48	G51	3区	溝7	郷ノ溝調査区2区	溝4	土師器	小型丸底埴	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	ほぼ完品
49	G55	3区	溝7	郷ノ溝調査区2区	溝4	弥生土器	壺	7.5YR6Aにぶい橙色	長石・石英	良好	
50	G59	3区	溝7	郷ノ溝調査区2区	溝4	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	口縁部櫛描き沈線
51	G56	3区	溝7	郷ノ溝調査区2区	溝4	土師器	甕	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	脚柱部中実、赤色酸化粒 含む
52	G18	3区	溝7	郷ノ溝調査区2区	溝4	土師器	甕	7.5YR6にぶい褐色	長石・石英	良好	天井部に×印のヘラ記号
53	G92	3区	溝7	郷ノ溝調査区2区	溝6	須恵器	杯	2.5YR6 灰白色	長石・石英	やや不良	天井部に×印のヘラ記号
54	G45	3区	溝9	郷ノ溝調査区2区	溝6	須恵器	杯	2.5Y8 灰白色	長石・石英	良好	煤付着
55	G44	3区	溝9	郷ノ溝調査区2区	溝6	須恵器	高杯	5Y8 灰白色	長石・石英	良好	内面シボり目
56	G80	3区	溝9	郷ノ溝調査区2区	溝6	須恵器	高杯?	5Y6 灰白色	長石・石英	良好	
57	Q110	3区	溝9	郷ノ溝調査区2区	溝6	土師器	製塩土器	10YR6にぶい黄褐色	長石・石英	良好	体部上位は横位のタタキ、 下半はナデ

掲載 番号	実測 番号	出土 地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・ 土層名	種別	器種	色調	胎土	焼成	形態・手法の特徴など
58	G50	3区	溝0	郷ノ溝調査区2区	溝5	須恵器	杯	N6/灰色	長石多含	不良	ほぼ完形
59	G47	3区	溝0	郷ノ溝調査区2区	溝5	須恵器	杯	25Y7.2灰黄色	長石・石英	不良	
60	G46	3区	溝0	郷ノ溝調査区2区	溝5	須恵器	杯	25Y8.1灰白色	長石・石英	不良?	
61	G53	3区	溝0	郷ノ溝調査区2区	溝5	須恵器	杯	N7/灰白色	長石・石英	良好	
62	G52	3区	溝0	郷ノ溝調査区2区	溝5	須恵器?	杯	5Y8.1灰白色	長石・石英	不良	
63	G8	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	土師器	高杯	25Y7.8浅黄色	石英・長石	良好	小型で短脚
64	G4	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	土師器	高杯	10YR8.8浅黄橙色	微砂	良好	脚柱内面にシボリ目
65	Q.6	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	土師器	甕	5YR7.6橙色	長石・石英	良好	手づくねミニチュア土器、 黒斑あり
66	G7	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	蓋	N6/灰色	長石・石英	良好	体部と天井部の境は鋭い 突帯
67	Q.7	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	杯	N5/灰色	長石・石英	良好	
68	Q.2	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	杯	5PB.1青灰色	長石・石英	良好	
69	G9	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	杯	N6/灰色	長石・石英	良好	
70	G24	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	杯	N8/灰色	長石・石英	良好	
71	G37	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	提瓶	N7/灰白色	長石・石英	良好	
72	G36	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	平瓶?	N7/灰白色	長石・石英	良好	提瓶の可能性あり
73	Q.02	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	トレンチ	須恵器	蓋	N5/灰色	長石・石英	良好	天井部内面に×のヘラ記 号
74		2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	トレンチ	須恵器	蓋	10Y6.1灰色	長石・石英	良好	ほぼ完形
75	G2	3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	トレンチ	須恵器	杯	25Y7.2灰黄色	長石・石英	不良?	堅穴住居1に関連か?
76	G66	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	側溝	須恵器	杯	N5/灰色	長石・石英	良好	
77	G43	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	須恵器	甕	5PB.1青灰色	長石・石英	良好	壺の可能性あり
78	G39	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	須恵器	横瓶	5Y7.1灰白色	長石・石英	良好	体部内面の同心円タタキ が良好に残る
79	GR2	2区	たわみ1	郷ノ溝調査区1区	No.8 たわみ	緑釉陶器	碗?	緑色	精良	良好	京都産、9世紀後半~10 世紀前半
80	GR1	2区	たわみ1	郷ノ溝調査区1区	No.8 たわみ	緑釉陶器	碗?	緑色	精良	良好	京都産、9世紀後半~10 世紀初
81	G29	2区	たわみ	郷ノ溝調査区1区		土師器	碗	5YR6.6橙色	長石・石英	良好	
82	G5	2区	溝1・12	郷ノ溝調査区1区		土師器	碗	10YR.2にぶい黄橙色	長石・石英	良好	10~11世紀?
83	Q.11	2区	溝1	郷ノ溝調査区1区		瓦	平瓦	25Y4.1黄灰色	長石・石英	良好	両端残存、凸面は縄目タ タキ
84	G33	3区	柱穴	郷ノ溝調査区1区	P.8	土師器	皿	25Y8.1灰白色	長石・石英	良好	外底部ヘラキリ
85	G34		柱穴	郷ノ溝調査区1区	P.15	土師器	皿	少し黄みがかった乳 白色	長石・石英	良好	外底部ヘラキリ
86	G21	2区	南半水田畦畔	郷ノ溝調査区1区		土師器	皿	25Y8.2灰白色よりさ らに白い	長石	良好	
87	G22	2区	南半水田畦畔	郷ノ溝調査区1区		土師器	皿	10YR8.2灰白色	長石・石英	良好	
88	G27	2区	南半水田畦畔	郷ノ溝調査区1区		土師器	播鉢	10YR7.4にぶい黄橙色	長石・石英	良好	内面卸し目は、横方向の 刷毛目の後
89	G23	2区	南半水田畦畔	郷ノ溝調査区1区		備前焼	播鉢	10YR1.4暗赤灰色	長石ほか	良好	卸し目は1条4本単位
90	G35	2区	南半水田畦畔	郷ノ溝調査区1区		備前焼	播鉢	5YR5.2灰褐色	長石・石英	良好	卸し目は1条7本単位
91	Q.09	2区	水田	郷ノ溝調査区1区	No.10水田	瓦	平瓦	N5.0灰色	長石・石英	良好	亀山焼
92	Q.9	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	須恵器	蓋	5Y7.1灰白色	長石・石英	良好	
93	G6	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	黒色土器	碗	25Y8.1灰白色	長石・石英	良好	内面ミガキ
94	Q.20	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	土師器	碗?	25Y8.1灰白色	長石・石英	良好	高い高台
95	Q.7	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	土師器	早島碗	25Y8.2灰白色	長石・石英	良好	細く高い高台をもつ
96	Q.08	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	瓦	平瓦	N5.0灰色	長石・石英	良好	凸面は縄目タタキ
97	G49	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	須恵器	杯	5Y7.1灰白色	長石・石英	良好	貼付高台
98	G85	2・3区	柱穴	郷ノ溝調査区2区	柱穴	黒色土器	碗	10YR8.1黒褐色	石英・雲母	良好	内外面ヘラミガキ、内面 黒色
99	G88	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	土師器	碗	10YR8.2灰黄褐色	長石・石英	良好	体部は被熱赤変
100	GR1	3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	近世土壌付 近	緑釉陶器	碗?	濃緑色	精良	良好	周防産、10世紀代
101	G54	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区		土師器	皿	10YR7.4にぶい黄橙色	微砂	良好	11世紀代か
102	Q.3	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区1区		須恵器	碗	5Y7.1灰白色	長石・石英	良好	外底部糸切り底
103	G84	3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	土師器	皿	75YR7.4にぶい橙色	長石・石英	良好	外底部ヘラオコシ後ナデ
104	G82	3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	備前焼	壺	25Y4.1黄灰色	長石・石英	良好	鎌倉期にさかのぼるタイ プ
105	G81	2・3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	備前焼	甕	75YR8.1黒褐色	長石・石英	良好	いわゆる水屋甕の体部上 位の貼付飾り
106	G32	3区	包含層	郷ノ溝調査区1区		土師器	皿	10YR8.8浅黄褐色	長石・石英	良好	外底部糸切り底
107	G30	3区	包含層	郷ノ溝調査区1区		土師器	皿	10YR8.2灰黄褐色	長石・石英	良好	外底部糸切り底
108	G31	3区	包含層	郷ノ溝調査区1区		土師器	皿	10YR8.8浅黄褐色	長石・石英	良好	体部~口縁部に煤付着

郷ノ溝遺跡土製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値(mm)			重量(g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚						
C1	C-8	2区	微高地トレンチ	郷ノ溝調査区1区	微高地トレンチ	紡錘車	43	45	6	15	淡赤橙色	長石含	弥生土器	弥生	中期瀬川用か？
C2		2区	溝9上層	郷ノ溝調査区1区	溝6上層	練玉	8	88	81	06	黒色	精良	軟質	古墳	黒漆塗りか？
C3		2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	円板	21	265	17	11	灰白色	砂粒多含	瓦質	中世？	布目瓦転用
C4		2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	円板	21.5	245	16.5	10	灰白色	砂粒多含	瓦質	中世？	格子目瓦転用
C5		2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	土製平玉？	18	20	85	3	浅黄橙色	精良	土師質	古代～	中央に穿孔
C6		2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	土錘	54	15	155	13	灰白色	長石含	土師質	中世？	棒状単孔
C7	C-20	2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	繻の羽口	55	62	22		黄白灰色	砂粒	土師質	中世？	径約6.5cm
C8	C-6	2区		郷ノ溝調査区1区	Na29土壇	円板	30	345	125	15	褐灰色	長石含	須恵質	中世	備前焼
C9	C-11	2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	灰黄色砂質土	土錘	46	18	16	11	黄褐色	長石・石英	土師質	中世	棒状単孔
C10	C-10	2区		郷ノ溝調査区1区		土錘	49.5	105	10	7	黄褐色	長石含	土師質	中世？	双孔
C11		2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	灰黄色砂質土	土錘	57	18	14	18	灰褐色	長石・石英	土師質	中世？	双孔
C12		2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	灰黄色砂質土	土錘	60	18	13	15	灰白色	長石・石英	土師質	中世？	双孔
C13	C-13	2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	Na21溝南たわみ	繻の羽口	70	49	24		赤橙色	砂粒	土師質	中世？	溶融付着物

郷ノ溝遺跡石器・石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
S1	14	郷ノ溝遺跡3区	溝2上面	郷ノ溝調査区2区	溝7上面	石鏃	2370	1700	400	113	サヌカイト	弥生	一部欠損
S2		郷ノ溝遺跡3区	溝4北端	郷ノ溝調査区2区	溝8北端	石核	8400	6850	1850	7885	サヌカイト	弥生	
S3		郷ノ溝遺跡2区	微高地下方(ウ)	郷ノ溝調査区1区	微高地下方(ウ)	スルーパー	5400	5200	1700	5031	サヌカイト	弥生	稜の可能性あり
S4		郷ノ溝遺跡3区	溝10下層	郷ノ溝調査区2区	溝5下層	砥石	4150	3050	2000	3900	流紋岩	古墳	白っぽい
S5		郷ノ溝遺跡2区	溝1	郷ノ溝調査区1区	Na2溝	砥石	9250	7550	7050	74500	ホルンフェルス	古代？	
S6		郷ノ溝遺跡2区	溝3	郷ノ溝調査区1区	Na3溝	砥石	4500	3500	2800	4900	流紋岩	古代？	
S7		郷ノ溝遺跡2区	溝3	郷ノ溝調査区1区	Na3溝	砥石	7200	5200	2100	11400	流紋岩	古代？	
S8		郷ノ溝遺跡2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	包含層	砥石	7470	3920	850	3200	頁岩	古代？	
S9		郷ノ溝遺跡3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	砥石	9450	5350	5650	34000	砂岩	古代～中世	欠損後スクレイパーに転用、珪酸付着

郷ノ溝遺跡金属製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
M1	G1-M1	郷ノ溝遺跡2区	包含層	郷ノ溝調査区1区	弥生包含層	鉄鏃	5250	1800	200	279	鉄	弥生	柳葉鏃
M2	G2-M1	郷ノ溝遺跡3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	北拡張区下がり	鉄鏃	8800	321	500	982	鉄	古墳？	三角形鏃
M3		郷ノ溝遺跡3区	溝5上面	郷ノ溝調査区2区	溝0上面	大刀	9000	369	090	8600	鉄	古墳？	大刀の刀身と推定、M4と同一個体か
M4		郷ノ溝遺跡3区	溝5上面	郷ノ溝調査区2区	溝0上面	大刀	11900	3200	400	10200	鉄	古墳？	M3と同一個体か
M5		郷ノ溝遺跡2区	溝1	郷ノ溝調査区1区	Na2溝	紡錘車		4000	200		鉄	古代？	中央部に軸棒の痕跡あり
M6	M2	郷ノ溝遺跡2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	銅銭		2200			銅	中世	銭文は「皇宋通寶」か(北宋初鑄039年)対読
M7	M1	郷ノ溝遺跡2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	銅銭		2300			銅	中世	銭文は「皇宋通寶」(北宋初鑄039年)対読
M8	M4	郷ノ溝遺跡2区	水田	郷ノ溝調査区1区	Na10水田	銅銭		2200			銅	中世	銭文は「大觀通寶」(北宋初鑄107年)対読
M9	M7	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2400			銅	中世	銭文は「景德元寶」(北層初鑄004年)順読
M10	M10	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2400			銅	中世	銭文は「祥符元寶」(北宋初鑄008年)順読
M11	M4	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2300			銅	中世	銭文は「祥符元寶」(北宋初鑄008年)順読
M12	M6	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2500			銅	中世	銭文は「天聖通寶」(北宋初鑄023年)対読
M13	M8	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2300			銅	中世	銭文は「熙寧元寶」(北宋初鑄068年)順読
M14	M3	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2400			銅	中世	銭文は「政和通寶」(北宋初鑄111年)対読
M15	M9	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2500			銅	中世	銭文は「永樂通寶」(明初鑄1408年)対読
M16	M5	郷ノ溝遺跡1区	低位部	郷ノ溝調査区1区	低位部	銅銭		2500			銅	中世	銭文は「永樂通寶」(明初鑄1408年)対読
M17	M5	郷ノ溝遺跡3区	包含層	郷ノ溝調査区2区	包含層	銅銭		2400			銅	中世	銭文は「洪武通寶」(明初鑄1368年)対読
M18	G1-M2	郷ノ溝遺跡3区	近世土壇	郷ノ溝調査区2区	近世土壇	鉛弾	1120	1200	1190	862	鉛	中世	白っぽい、16世紀後半に比定

第5章 仏生田遺跡

第1節 遺跡の概要

仏生田遺跡は、今回の道路敷き路線内の発掘調査対象地の中ほどに位置する。南北約500mを測る発掘対象部分の大半は、水田として耕作が行われており、一部に畑地および農道が存在していた。

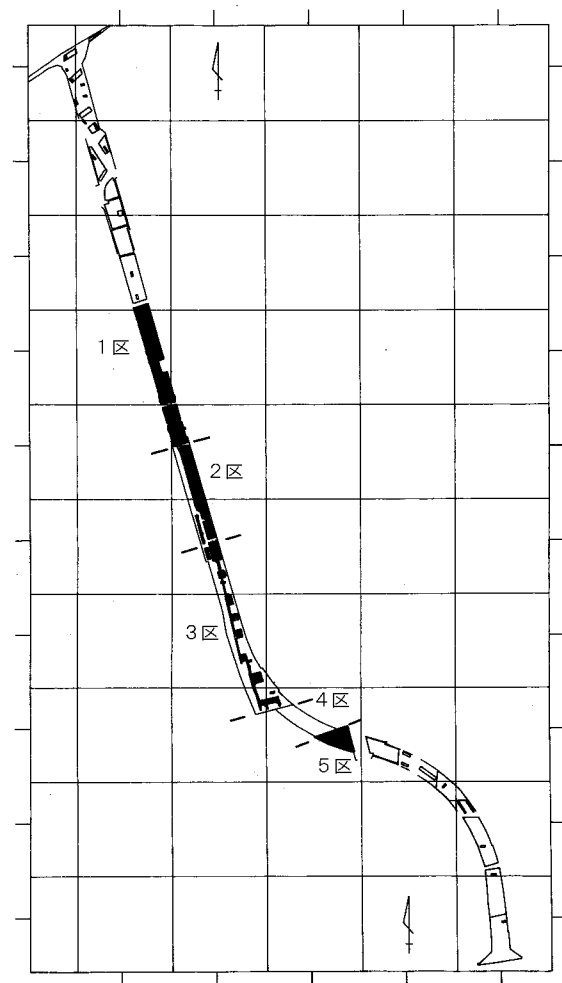
発掘調査は、既述のとおり平成12年度に試掘トレンチを設定し、最終的に未買収地として調査が実施できなかった4区を除く、1～3区・5区に計8本のトレンチを設定した。その結果、1区は郷ノ溝遺跡3区で確認された微高地がそのまま広がって行き、D80ライン付近からしだいに低位部へと移行することが確かめられた。

2区では安定した微高地は確認できなかったが、粘質土層が水平堆積した状況、すなわち中世の水田層が存在することが認められた。しかし、E区に設定したトレンチから77の須恵器片が出土したことから、低位部ながら遺構の存在が推察されたことから、平成13年度当初から平面的な発掘調査を行った。この須恵器は高杯杯部の小片であるが、明らかに朝鮮半島の影響を受けたものであることから、遺構の存在や同時期の遺物のさらなる出土が期待されたが、同一個体の磨滅した小破片が1点出土したに留まった。

3区は、水田耕作土を除去すると直下に分厚い砂層が存在し、しかも激しい湧水が始まり、深い層までトレンチによって確かめることはできなかった。ローリングを受けた多少の土器片も出土したことから、広い範囲を発掘調査対象とした。平成13年度の発掘調査では湧水と周壁の崩落を防ぎながら、埋積状況や砂堆の下層などの精査に苦心した。なお、3区の北端部の一部については平成13年度に発掘調査を実施した。

トレンチ調査で、水田層が確認された5区は、3区の状況とはかなり異なり、砂層が存在しない。全面調査によって、古代の水田層や中世の土壌などの遺構が現れ、居住地として利用された時期が確かめられた。出土遺物としては近江産の緑釉陶器があり、後述の中撫川遺跡出土資料と併せ、特筆される。

(岡田)



第1図 仏生田遺跡発掘調査区域図 (1/8000)

第2節 1区の調査

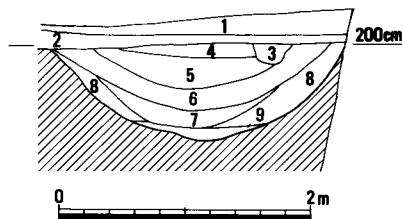
1 弥生時代の遺構・遺物

(1) 溝

溝1 (第2・3図)

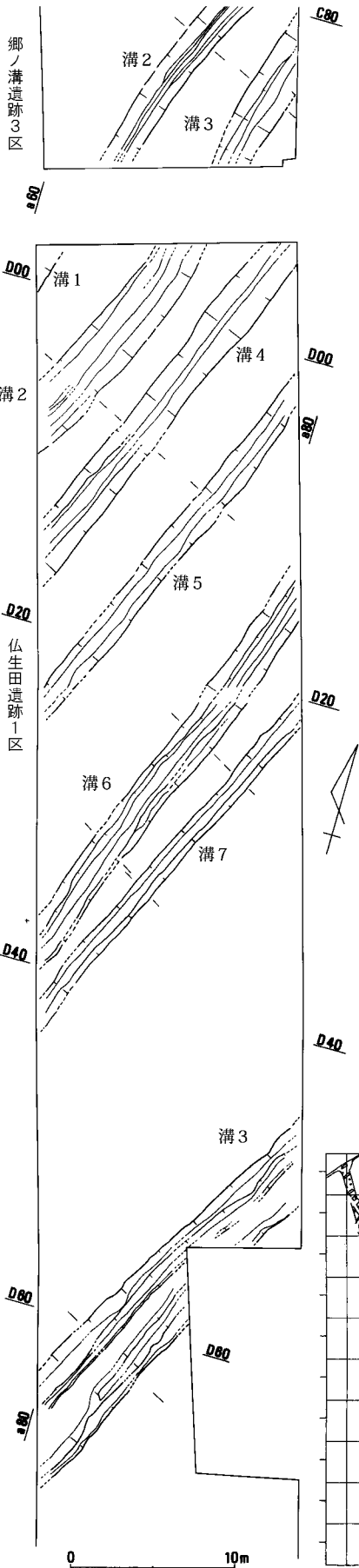
調査区の北西端において、その東肩のみを検出した溝である。これは、北側の郷ノ溝遺跡3区の溝2から続く、北北東から南南西に直線的に流走する溝の一部と考えられる。検出面からの深さは77cm、底面の海拔高は1.23mを測り、1区の弥生時代の溝においては溝7に次いで浅い。

出土遺物は少量の弥生土器細片のみである。溝の時期は、郷ノ溝遺跡の知見から中期後半と考えられる。(高田)



- 1 現代水田耕作土
- 2 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質微砂 中近世水田耕作土
- 3 にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘質微砂 柱穴?
- 4 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質微砂
- 5 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質微砂 炭・焼土含
- 6 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質微砂 炭・焼土含
- 7 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質微砂 炭・焼土多含
- 8 灰黄褐色 (10YR 5/2) 粘質微砂
- 9 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 粘土 炭・焼土含

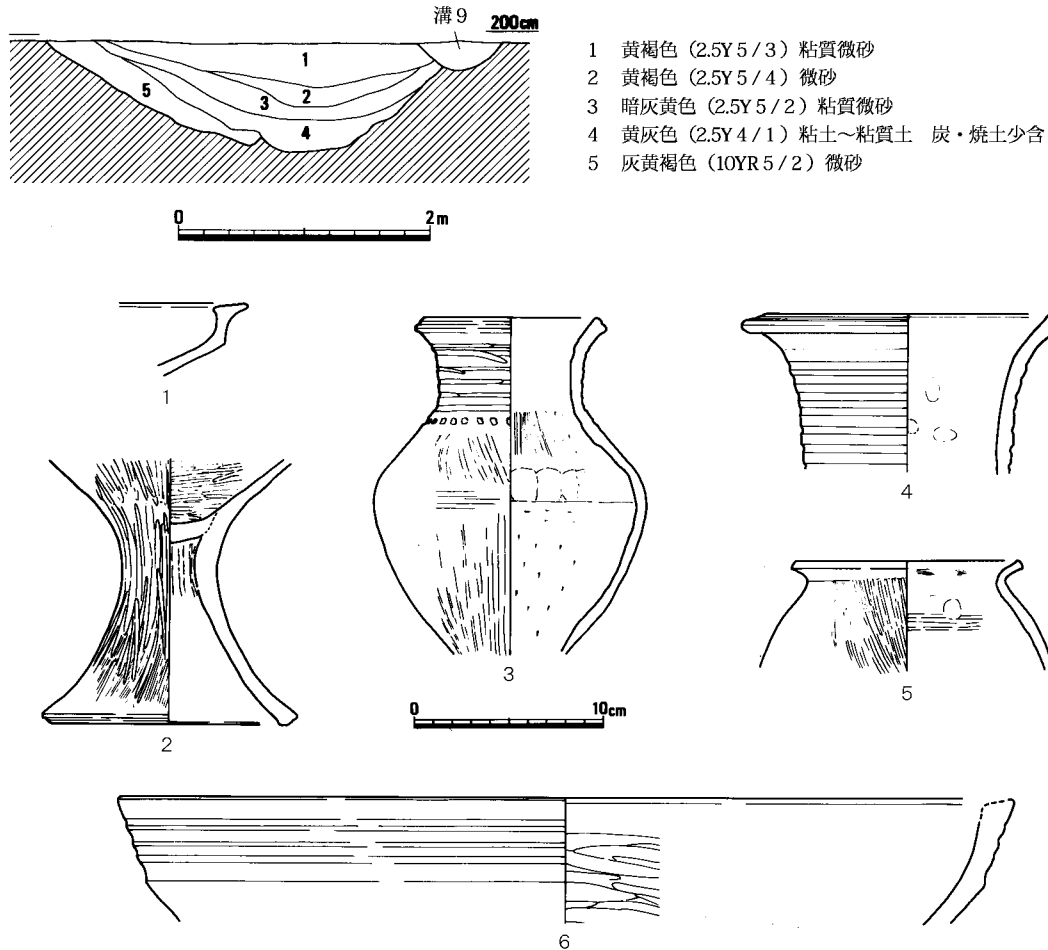
第3図 溝1土層断面図 (1/60)



第2図 1区弥生時代遺構配置図 (1/400)

溝2 (第2・4図、図版22)

調査区北西部において検出した溝である。北北東から南南西方向に直流し、その北側は郷ノ溝遺跡3区の溝3に続くものと考えられる。他の溝と並行し、溝1とは約4m、溝4とは約2mの距離を置く。検出時の溝の規模は幅3m前後、深さ85cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面がさらに一段深くなる。底面は平坦でその海拔高は1.05m前後を測る。これは溝3～6の底面海拔高とほぼ揃うものである。



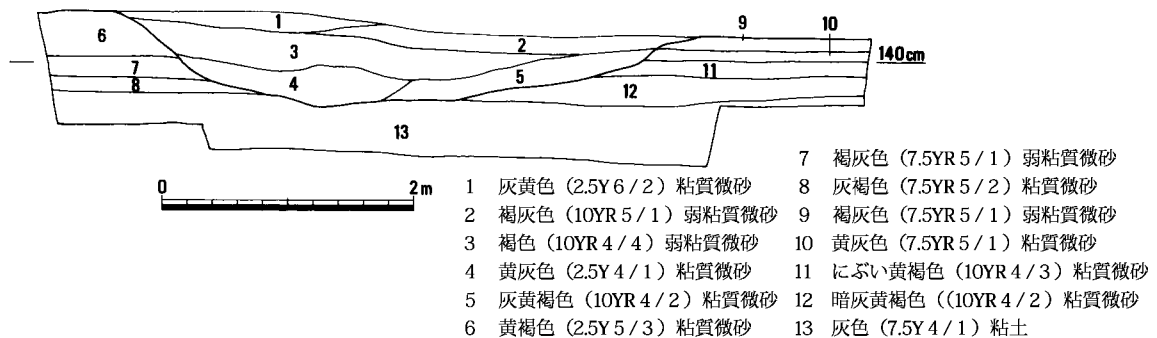
第4図 溝2土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

遺物は弥生土器が出土している。出土状況に顕著な偏りはない。図示した土器は、高杯1・2、壺3・4、甕5、鉢6である。遺物の時期は、中期中葉~後期初頭と考えられ、幅がある。これは、郷ノ溝遺跡3区の溝3での遺物のあり方に似ている。

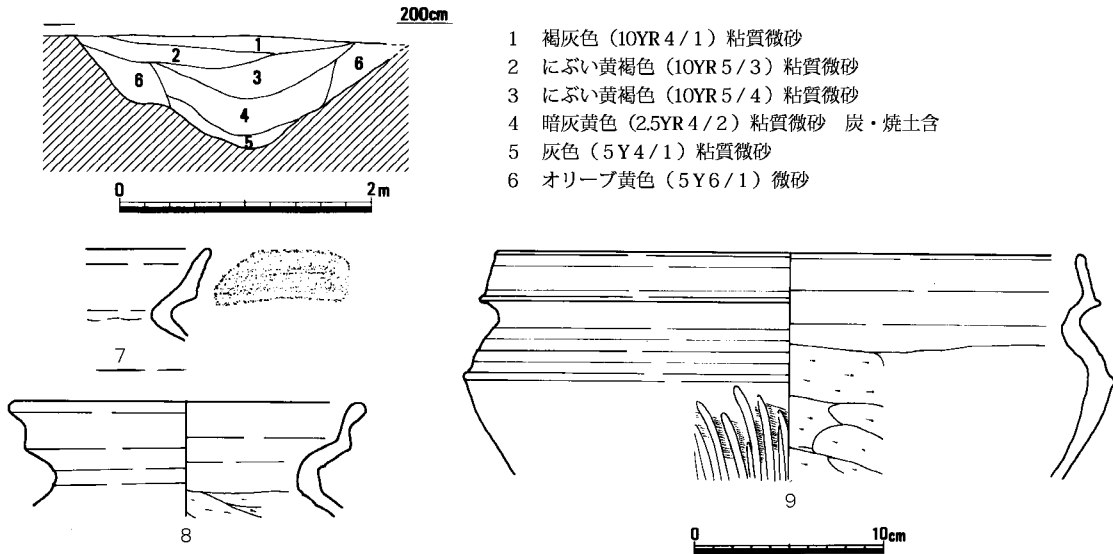
周囲に中期中葉の時期の遺構がみられないことから、溝は中期以降に掘削され、その最終埋没時期は後期前葉と考えたい。(高田)

溝3 (第2・5図)

調査区の中央で検出した溝で、東岸の一部に未調査地がかかる。他の溝と同様に、北北東から南南西に直線的に流走するが、西側の溝7とは約15m離れる。微高地が緩やかに下がる場所に位置し、上



第5図 溝3土層断面図 (1/60)



第6図 溝4土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

層の中世水田層を除去して検出した。検出時の規模は幅4.5～5m、深さ75cmと、調査区で最大である。その断面形は他の溝と異なり、数段のテラス面を持ちながら壁が立ち上がり、西岸のほうが東岸に比べてやや急斜となる。底面の中央は幅約60cmの平坦面となり、海拔高は1.05m前後を測る。

溝の規模に比べて出土遺物は少量の弥生土器細片のみで、図示し得るものはない。出土状況も散漫で、後述の溝5・6とは対象的である。これら遺物の時期は後期後葉と考えられるが、確実に捉えられるものはなかった。(高田)

溝4 (第2・6図、図版20)

他の弥生時代の溝と同様の流走方向を示す溝で、西側の溝2とは約2m、東側の溝5とは約4mの距離を置く。検出時の規模は幅2.7m、深さ90cmを測る。また底面の海拔高は1m前後で、溝2・3・5・6とほぼ揃う。その断面形は「V」字形に近く、段を持ちながら壁が立ち上がる。この段より上部に堆積する第6層は顕著な微砂であり、他の溝と比較して特徴的である。

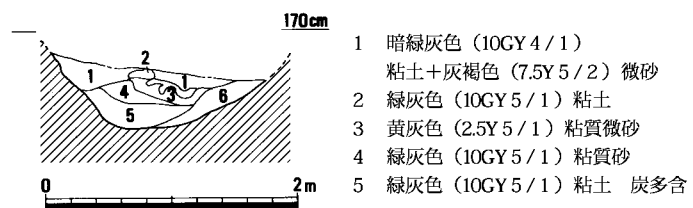
遺物は弥生土器片が出土している。出土状況に特徴はなく、いずれも細片である。図示したものは、壺と鉢である。7は、口縁部外面に櫛あるいは貝殻腹縁によって描かれた直線文を施す。出雲地域からの搬入品と考えられる。9は大形の鉢で、複合口縁で体部に鋭い屈曲を有する。備後地域からの搬入品と考えられる。遺物量には大差があるが、溝5・6の内容に近似するものといえよう。

溝の時期は後期後葉と考えられる。

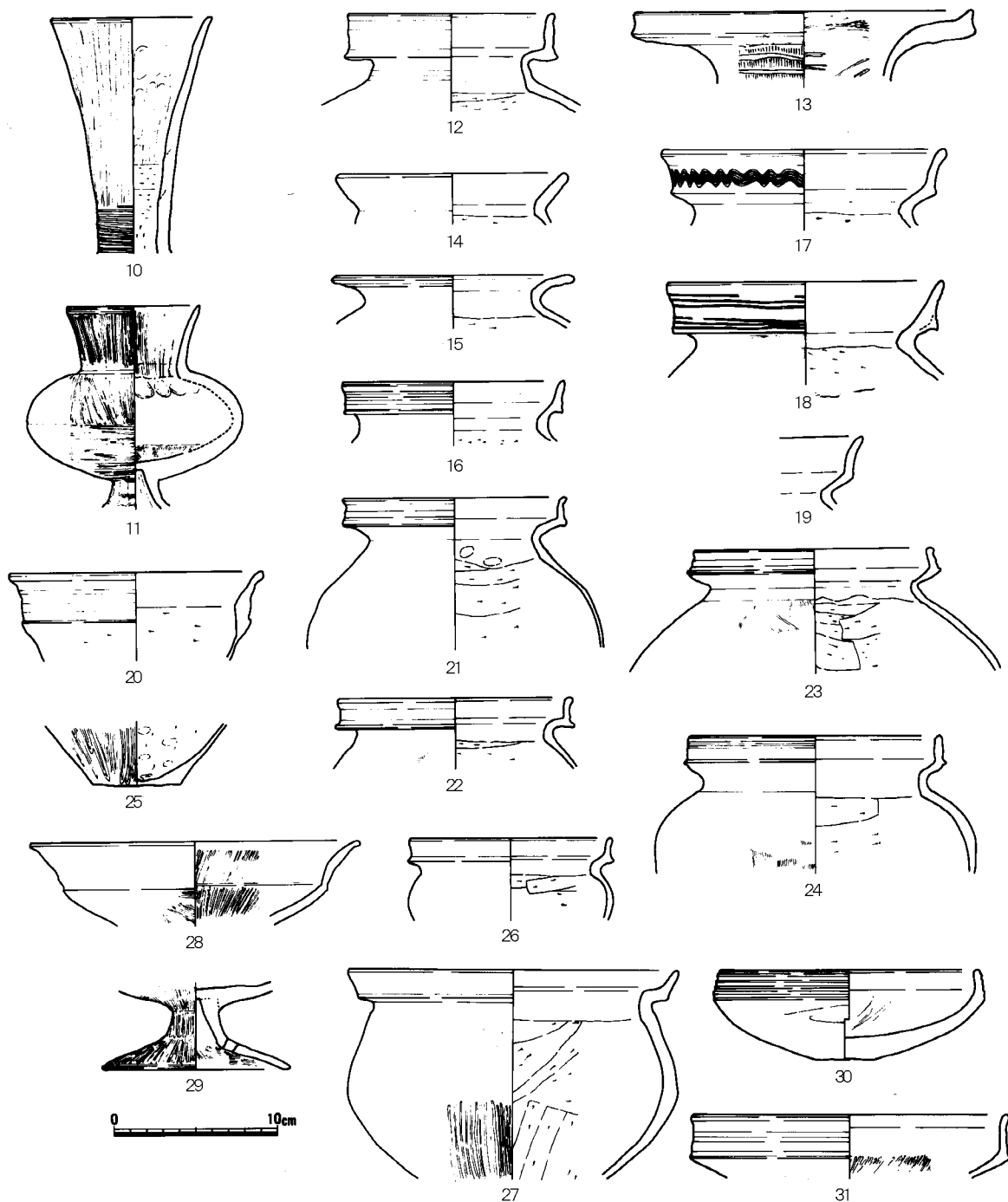
(高田)

溝5 (第2・7～9図、図版21)

北北東から南南西に直線的に流走する溝で、西側の溝4とは約4m、東側の溝6とは約6mの距離を置く。同方向に流走する古代の溝14の底面で検出した。このため上部を大きく削平されていると考えられ、検出時の規模は幅1.7m、深さ60cmを測るに過ぎない。底面の海拔高は95cm前後で、その断面形は枕形を呈する。埋土は中位よりも上層でブロック状の堆積がみられ、人為的な埋め戻しの可能性がある。なお、溝14による影響でグライ



第7図 溝5土層断面図 (1/60)

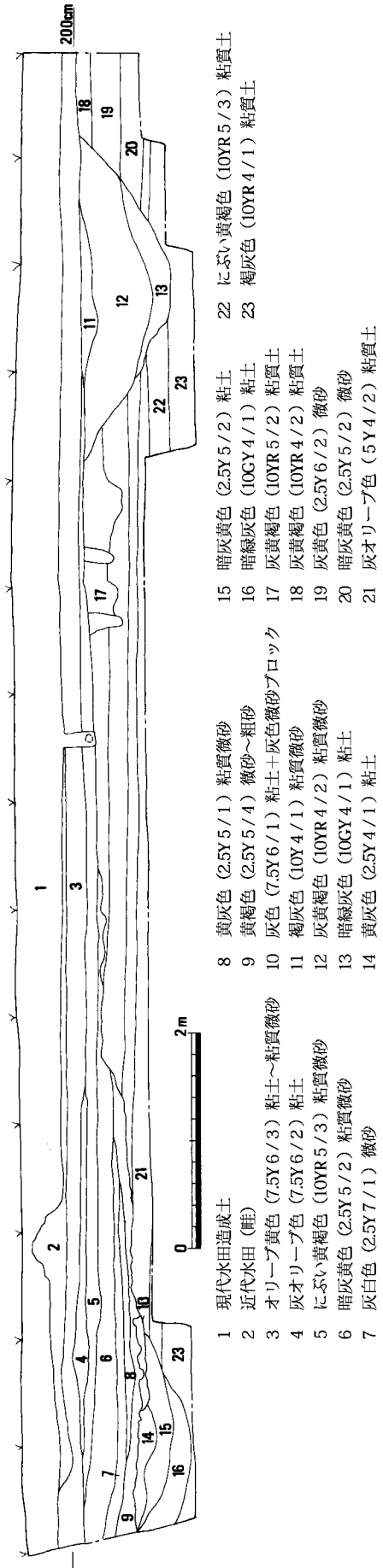


第8図 溝5出土遺物(1/4)

化が強く、その検出と掘り下げはやや困難であった。

遺物は大量の弥生土器片が出土している。その状況は中位から上層において顕著で、重なり合い密着した状態のものが多い。図示したものは、直口壺10・11、壺12・13、甕14~19・21~25、鉢20・26・27・30・31、高杯28・29である。

10は直口壺の細長い頸部で、玉葱状の胴部が付くものと考えられる。外面には丹塗りが施される。11は直口壺に短い脚部が付く。12は口縁短部がほぼ垂直に立ち上がる壺で、頸部は短い。13は長頸壺になると考えられる。甕の口縁は、「く」字状に屈曲するもの、複合口縁で垂直に立ち上がるものや内傾するもの、外傾するものがある。口縁部の調整はヨコナデするものがほとんどであるが、17は外面



第9図 D20ライン南、東西土層断面図 (溝5・6関連; 1/60)

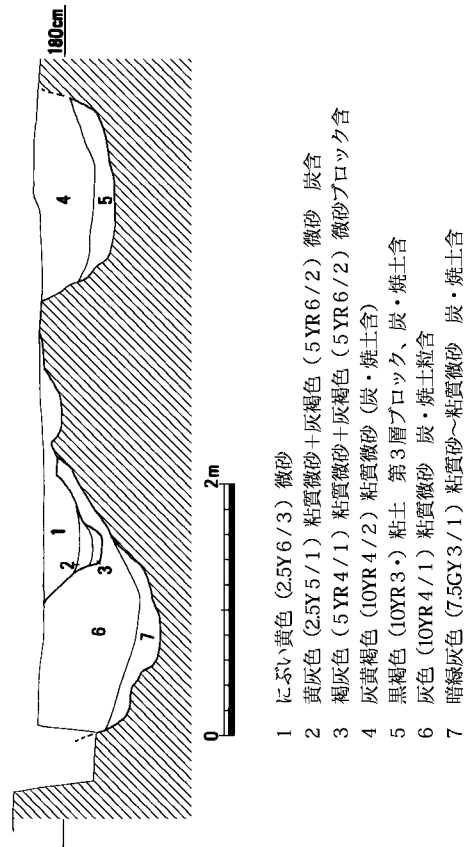
に櫛状工具による波状文を施し、18は櫛あるいは貝殻腹縁によって描かれた直線文を施す。25は平底となる甕の底部で、内面にはユビオサエ後にケズリを施す。鉢は複合口縁のもと、直立口縁のものがある。20は胴部内外面のケズリにより器壁を薄く仕上げている。27はやや厚手の作りで口縁端部が外反する。30はやや内湾して立ち上がる直立口縁外面に擬凹線を施す。31は体部外面をヘラケズリし、口縁部との境に鋭い稜をもつ。図示した遺物のうち、16~19は山陰地方からの搬入品と考えられ、30・31は備後地域からの搬入品と考えられる。

溝はその上部を古代の溝で削平されているにもかかわらず、大量の土器を出土した。その内容は後述の溝6に類似することが指摘できる。

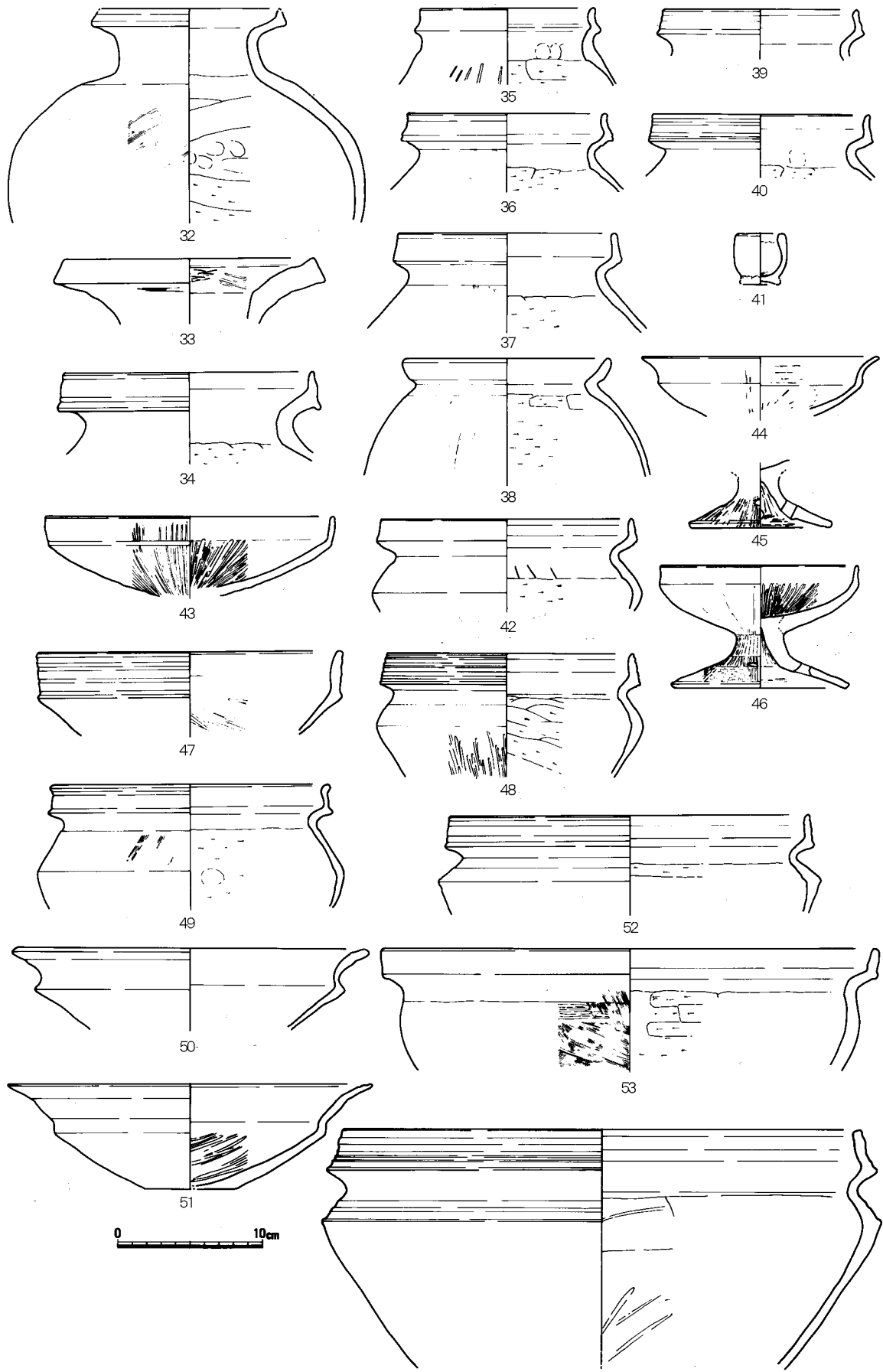
溝の時期は後期後葉と考えられる。 (高田)

溝6 (第2・9~13図、図版20)

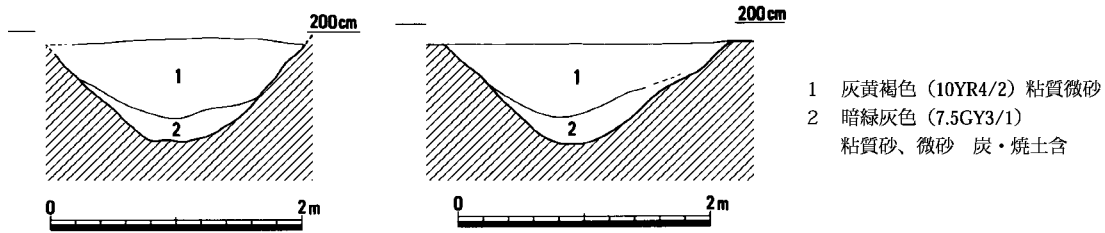
他の溝同様に北北東から南南西に直線的に流走する溝である。西側の溝5とは約6m、東側の溝6とは0.7~2mの距離を置く。検出時の規模は幅2.3m、深さ80cm、底面の海拔高は1.05m前後を測る。断面形は椀形あるいは



第10図 溝6・7土層断面図 (1/60)

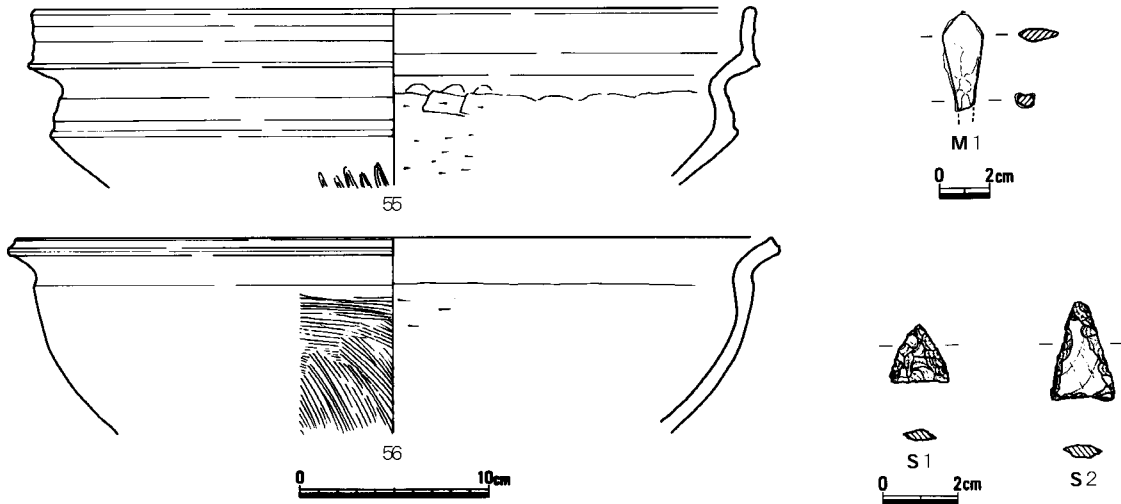


第11図 溝6出土遺物1 (1/4)⁵⁴



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 粘質砂、微砂 炭・焼土含

第12図 溝6土層断面図 (1/30)



第13図 溝6出土遺物2 (1/4・1/3・1/2)

「V」字形を呈し、底面にわずかな平坦面をもつ。壁は中位に段をもちながら斜め上方に大きく広がりながら立ち上がる。埋土は上下2層で、下層は粘質砂や微砂である。

出土遺物は大量の弥生土器片と、鉄鏃、石鏃である。その出土状況は、溝の南半部上層からの出土が顕著である。図示した土器は、壺32、甕34~40、鉢42・47~49・51~56、高杯43~46・50、器台33、ミニチュアの鉢41である。

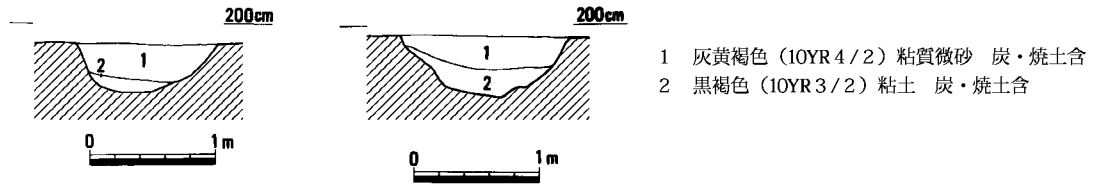
32は短頸の広口壺である。甕の口縁は、複合口縁と「く」字状に屈曲するものがある。複合口縁は内傾するものが多く、口縁部の拡張区下端が垂れ下がるものとそうでないものがある。34は比較的大形の甕と考えられる。鉢は大中小があり、それぞれ口径20cm以下、25cm前後、35cm以上で分類される。また、口縁の形状でもいくつかに分けられる。42・48・49・52~55は複合口縁で、やや内傾するものが多い。47は直立口縁である。51は大きく外反するもので、口唇部を細く仕上げる。56は「く」字状に折り曲げるものである。複合口縁のものは、体部に屈曲を有するものが多く、52・54・55は鋭い稜をもつ。高杯の杯部はいずれも皿状であるが、口縁部が直立するものと外反するものがある。また脚部はいずれも短脚である。33は小形の器台と考えられる。41はミニチュアの鉢である。手捏ねにより成形するが、器面の磨滅が著しい。底部を台状につまみ出すものと考えられる。

以上の土器のうち、直立口縁の鉢や複合口縁で体部に鋭い稜をもつ鉢は、備後地域からの搬入品と考えられる。同様の遺物は溝4・5で出土している。

鉄鏃M1は茎部を欠失するものの、後期後葉に出現する圭頭鏃である。石鏃はいずれもサヌカイト製で、S1の基部は直線となるが、S2はやや内湾ぎみとなる。

溝の時期は出土遺物の特徴から、後期後葉と考えられる。

(高田)



第14図 溝7土層断面図 (1/60)

溝7 (第2・10・14図、図版20・22)

溝6とは0.7~2mの距離を置いて並行する溝である。検出時の規模は幅1.3m、深さ45cmを測る。また底面の海拔高は1.4m前後で、周囲の溝群中最も浅い。その断面形は楕形あるいは逆台形であり、一部に段を持ちながら壁が急斜に立ち上がる。底面は部分的に平坦面をもつ。埋土は2層である。上層は溝6と酷似するが、下層は粘土であり、溝6とは異なる。

出土遺物は弥生土器細片が出土しているが、図化し得るものはない。

溝の時期は、検出状況から後期と考えられる。

(高田)



第15図 溝8土層断面図 (1/60)

溝8 (第15・17図、図版24)

検出全長約10m、幅20~40cm、深さ10cmを測る不安定な形状を示す溝で、ほぼ南北方向を示す。出土遺物は皆無であるが、時期的には弥生時代後期後半に比定される。

第15図に層位を示すが、第3層は幅2~4mの断面形台形を示し、大畔あるいは道状の遺構とも考えられた。第18図にも関連土層図を掲載するが、水田遺構と断定できる小畦畔は確認できなかった。

D-D'では第7層以下、水平堆積を示し粘質微砂層あるいは粘土層となる。

(岡田)

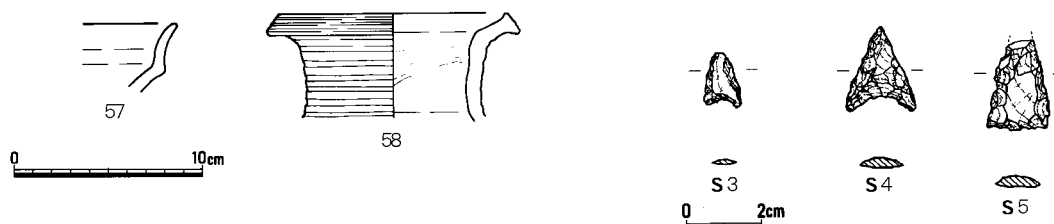
(2) 遺構に伴わない遺物 (第16図)

第16図には後世の遺構や包含層から出土した弥生時代の遺物を掲載している。

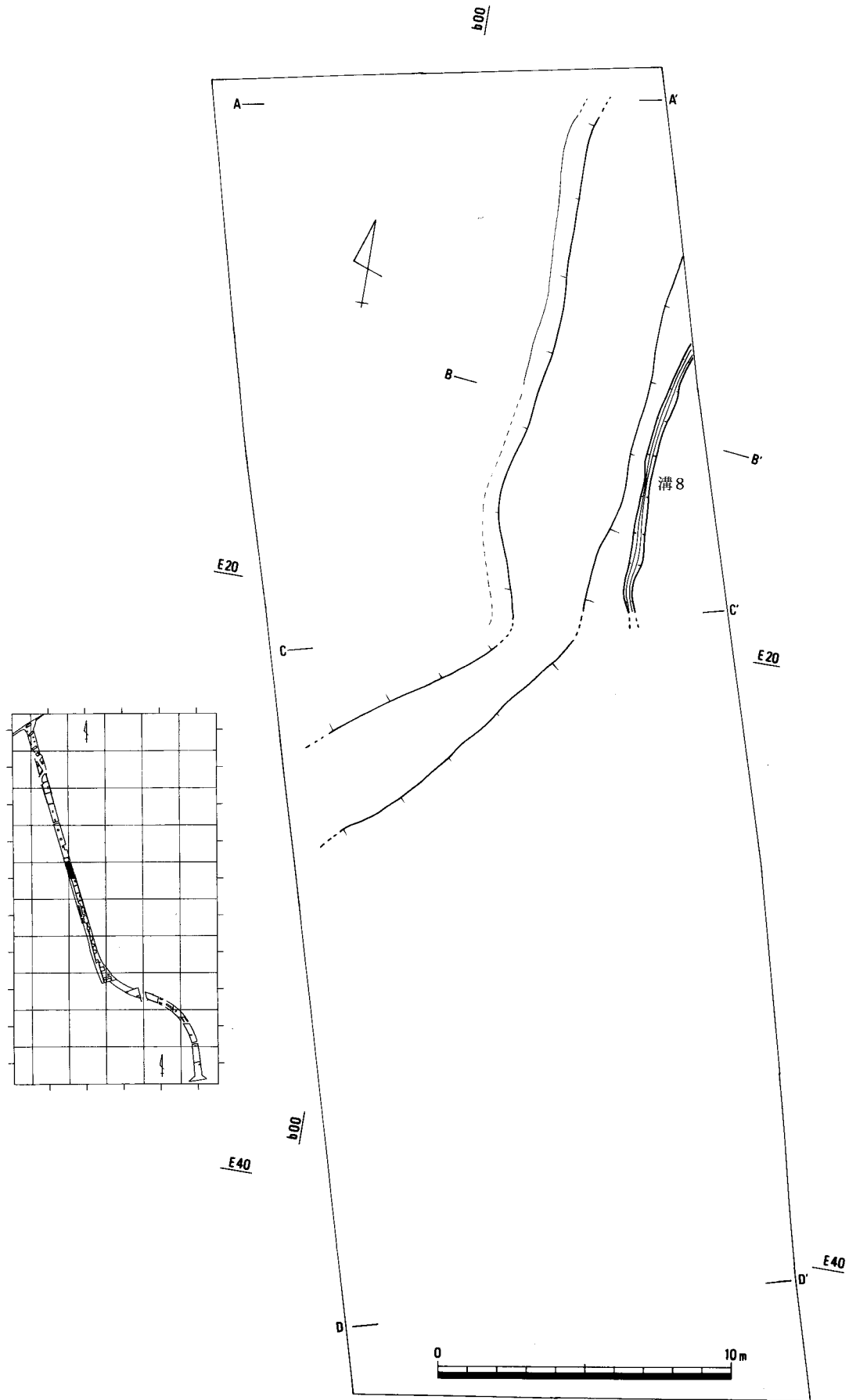
57は甕の口縁部で、山陰系と考えられる。58は長頸壺で、肥厚した口縁短部に擬凹線を施し、頸部外面にヘラ状工具による沈線を施す。S4~6はいずれもサヌカイト製の石鏃である。平面形は三角形を呈し、基部は内湾するものと直線となるものがある。

57・58とS3は古代の溝14から、S4は中世の水田層、S5は竪穴状遺構1からそれぞれ出土している。

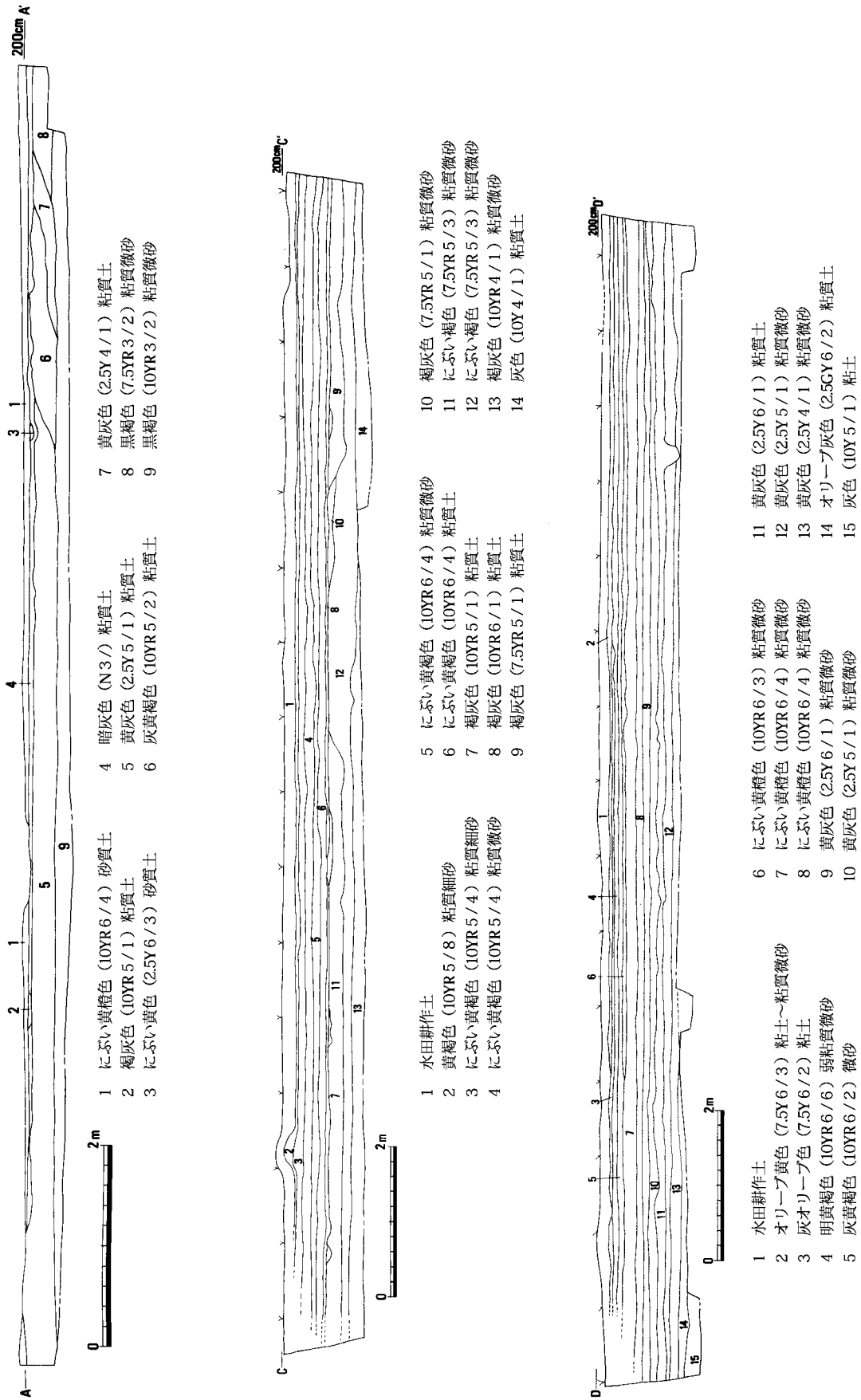
(高田)



第16図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4・1/2)



第17図 1区南半調査区 (1/200)



第18図 1区南半調査区各所土層断面図 (1/60・1/80)

2 古墳時代の遺構・遺物

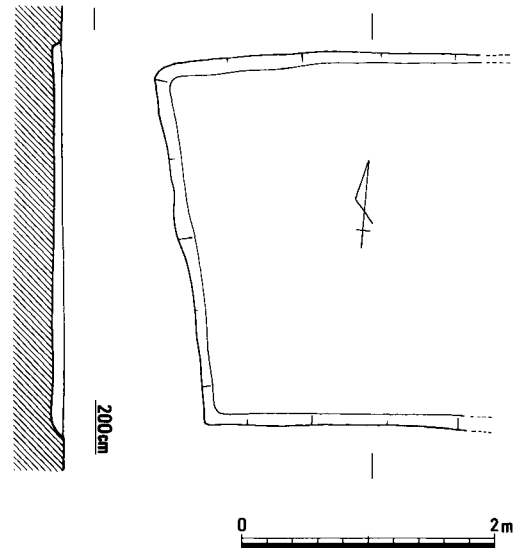
(1) 竪穴遺構

竪穴遺構 1 (第19・21図)

調査区北東部に位置する遺構である。その東側は調査区外となるために全体の規模は不明だが、検出部分については南北長3m、東西長2.5mのやや歪な矩形を呈する。検出面からの深さは10cmを測り、底面はほぼ平坦となる。壁は斜めに立ち上がるため、その断面形は逆台形状となる。埋土は灰黄褐色粘質微砂である。

後述の溝11とは、東側の側溝内および壁面部分で切り合っている。埋土に顕著な差異は認められないが、壁面での観察では溝のほうが新しい。

出土遺物はないが、検出状況から古墳時代に属するものと考えたい。(高田)



第19図 竪穴遺構 1 (1/60)

(2) 溝

溝 9 (第20・21図)

調査区の北西端において検出した溝である。北側の郷ノ溝遺跡3区の溝10から続く溝の一部と考えられる。上面と北半を削平により失い、南半の底部のみ残ることから、検出面からの深さは4~5cmと浅い。底面の海拔高は1.9mを測る。断面形は本来逆台形を呈するものと考えられる。

出土遺物は少量の土師器細片のみであるが、周辺の清掃中に須恵器片を採集している。溝の時期は、郷ノ溝遺跡の知見から6世紀後半と考えられる。(高田)

溝10 (第20・21図)

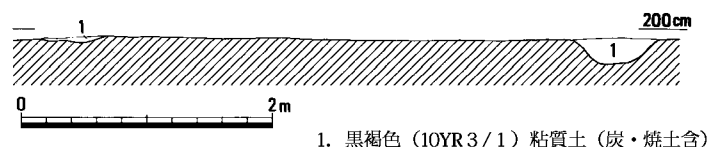
溝9の東側に約4mの距離をおいて並行する溝で、北北東から南南西に直線的に流走する。検出時の規模は幅70cm、深さ20cm、底面の海拔高は1.73m前後を測る。断面形は逆台形を呈し、平坦な底面をもつ。溝9とは底面海拔高にこそ差があるが、その形態や埋土が酷似するものである。

溝9・10の西側には同時期の竪穴住居がみられ、さらにその住居の北側に東西方向の溝が位置すること、本溝の東側には遺構がみられないことから同時期の生活域を区画する溝と考えられる。

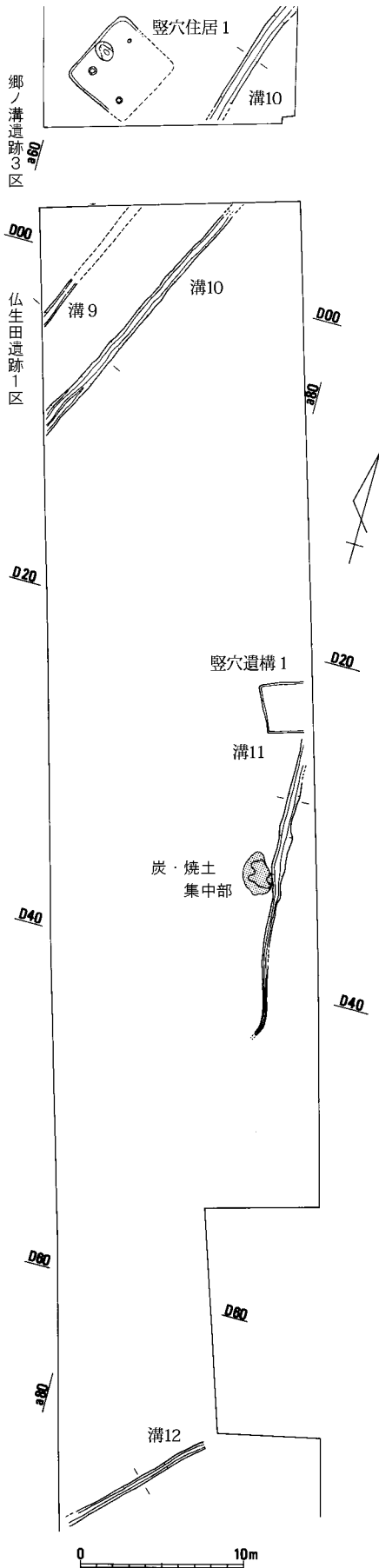
出土遺物は須恵器や土師器片と鉄滓である。時期は検出状況から6世紀後半と考えたい。(高田)

溝11 (第21・22図)

1区の北半で検出した南北方向の溝である。溝の規模は幅34cmで、断面形は皿形を呈する。同区の弥生~古墳時代の溝がほぼ並行するのに対して、本溝は方向を異にする。溝の北端は竪穴



第20図 溝9・10土層断面図 (1/60)



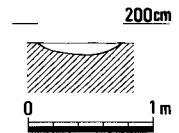
第21図 1区古墳時代遺構配置図 (1/400)

遺構1と切り合い、南端は中世の水田層に切られる。また、溝の中程に接して1.5×2.5m範囲に炭と焼土塊が集中する範囲があり、被熱した弥生土器片が出土している。

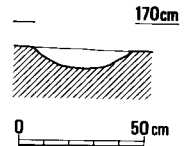
溝の時期は古墳時代か。(高田) 溝12 (第21・22図)

1区中央部で検出した溝である。北東一南西方向に直線的に流走し、幅38cm、検出面からの深さ18cmを測

り、断面形は碗形を呈する。出土遺物はないが、埋土は先述の溝9・10と類似する。このことから溝の時期は古墳時代後半と考えたい。(高田)



灰黄褐色(10YR 5/2)微砂質土



黒灰褐色粘土

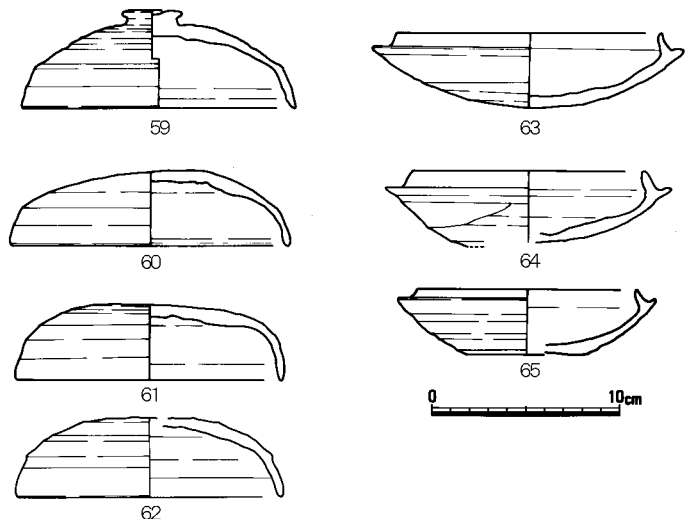
第22図 溝11・12土層り、断面図 (1/60・1/30)

(3) 遺構に伴わない遺物 (第23図)

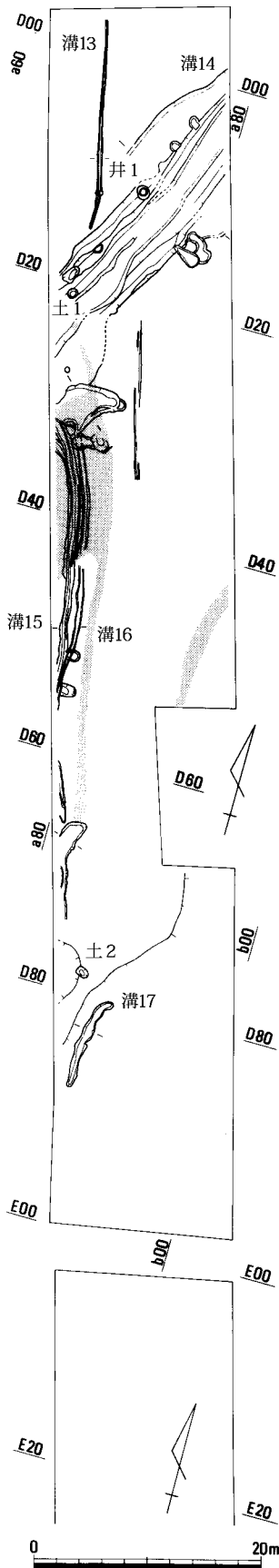
第23図には後述する古代の溝14から出土した古墳時代の遺物を掲載している。

いずれも須恵器で、有蓋高杯の蓋59と杯蓋60~62、杯身63~65である。蓋の口径は14.0~14.6cmを測り、器高は60・61で4.0cmを測る。身の口径は63が14.0cmを測るのに対し、65は11.5cmと小振りである。また、ヘラケズリ範囲も65は底部接地面のみとなる。

これらの時期は6世紀後半代と考えられるが、65についてはやや新しくなる。6世紀後半代の遺構は、郷ノ溝遺跡3区から仏生田遺跡1区北半に集中しており、これらの遺物もその範囲からの出土と考えられる。(高田)



第23図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4)



第24図 1区古代・中世遺構配置図 (1/600)

3 古代・中世の遺構・遺物

(1) 井戸

井戸1 (第24・25図、図版23)

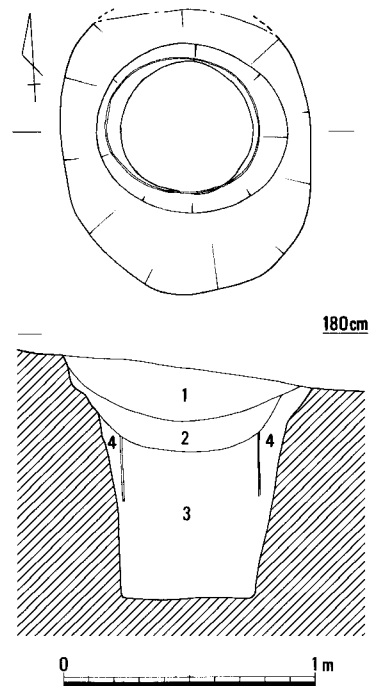
溝14の西肩斜面に重なる井戸である。溝の掘り下げ途中に炭粒の分布がみられたことから検出した。検出時の平面形は長楕円形を呈し、その規模は南北長1.13m、東西長1mを測る。底面までの深さは96cmで、底面海拔高は75cmである。掘り方は2段となり、上部は逆「ハ」字状に大きく開き、以下の壁面はほぼ垂直になる。底面は径50cmのほぼ円形の平坦面である。

井戸の中位には、木質がほとんど粘土に置き換わった状態の曲物を検出した。径は53~60cmを測る。本来は底面までさらに1・2段積んであった可能性が高い。

埋土は4層で、第25図の第1・2層は砂質が強い。第3層は粘土で、薄い炭の層が縞状に堆積する。第4層は井側の裏込め土と考えられる。

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・土師質高台付碗の細片があるが、図化し得るものはない。

井戸の時期は、溝14よりも新しいということと、出土遺物から中世と考えられる。(高田)



- 1 黄褐色(2.5Y 5/3) 微砂質土 炭・焼土粒含む
- 2 暗灰黄色(2.5Y 5/2) 砂質土 炭・焼土粒含む
- 3 黄灰色(2.5Y 4/1) 粘土 炭が縞状堆積
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘質微砂 炭・焼土粒含む

第25図 井戸1 (1/30)

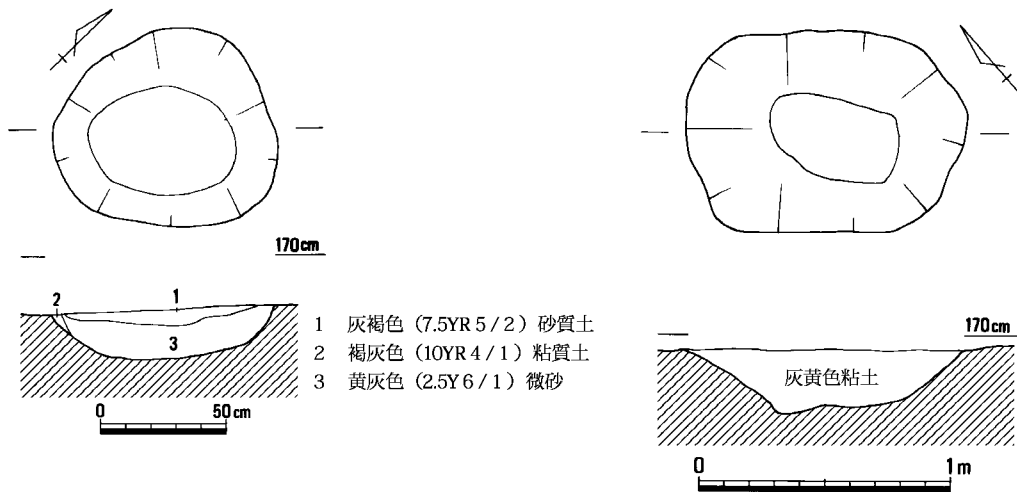
(2) 土壌

土壌1 (第24・26図)

溝14の掘り下げ中、その南端部で検出した。長径90cmの歪な円形を呈する。出土遺物はないが、溝14よりも新しい。(高田)

土壌2 (第24・26図)

1区の中央付近で検出した。中世以降の水田の肩部に位置する。平面形は歪な小判型を呈し、長軸1.12m、短軸80cm、深さ25cmを測る。出土遺物はないが、中世以降の水田耕土と埋土が酷似する。(高田)

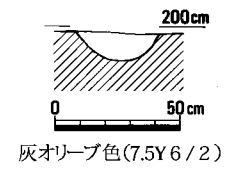


第26図 土壌1・土壌2 (1/30)

(3) 溝

溝13 (第24・27図)

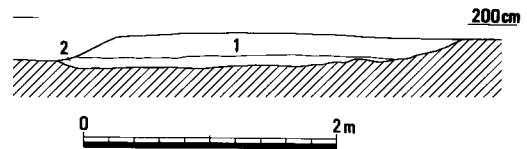
1区北端部で検出したほぼ直線的に流走する南北溝である。検出時の規模は、幅33cm、深さ11cmを測り、底面高は溝14方向に低くなる。埋土は砂質土で、これは、溝14の上層のたわみとして掘り下げた層と同一であり、第9図の第7層に対応する。溝14埋没後にその上層に流れ込む溝であると考えられる。(高田)



第27図 溝13土層断面図 (1/30)

溝14 (第24・28~31図)

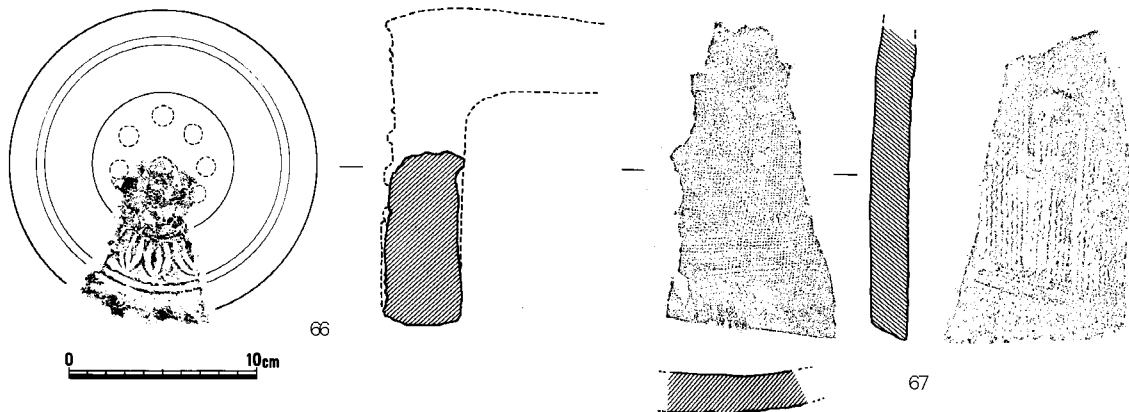
1区北端を北北東から南南西方向に流走する溝である。検出時の規模は幅10m、深さ55cm、底面の海拔高1.3m前後を測る。壁は凹凸の激しい河床から段をもちながら緩やかに立ち上がる。南端からは溝15・16が分岐し、東側からの流路の落ち込みがみられる。



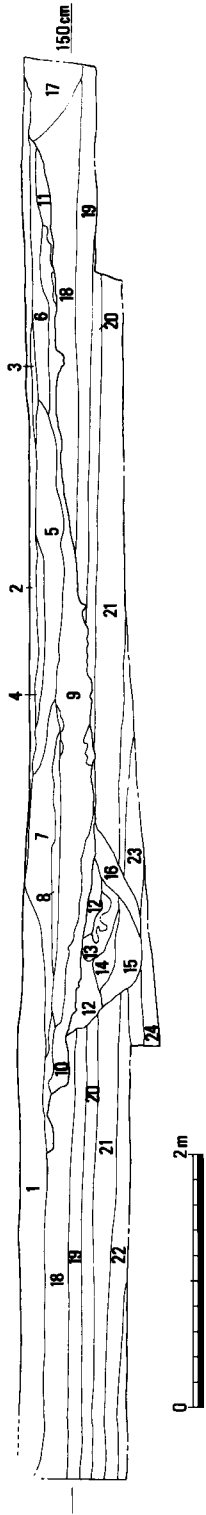
1 灰黄褐色(10YR 5/2)粘質微砂
2 黄灰色(2.5Y 6/1)微砂 黄褐色粘土ブロック含

第28図 溝14土層断面図 (1/60)

溝の埋土は、第30図の第8~11層にみられるように基本的に微砂で、鉄分やマンガンの沈着が著しく、激



第29図 溝14出土遺物1 (1/4)



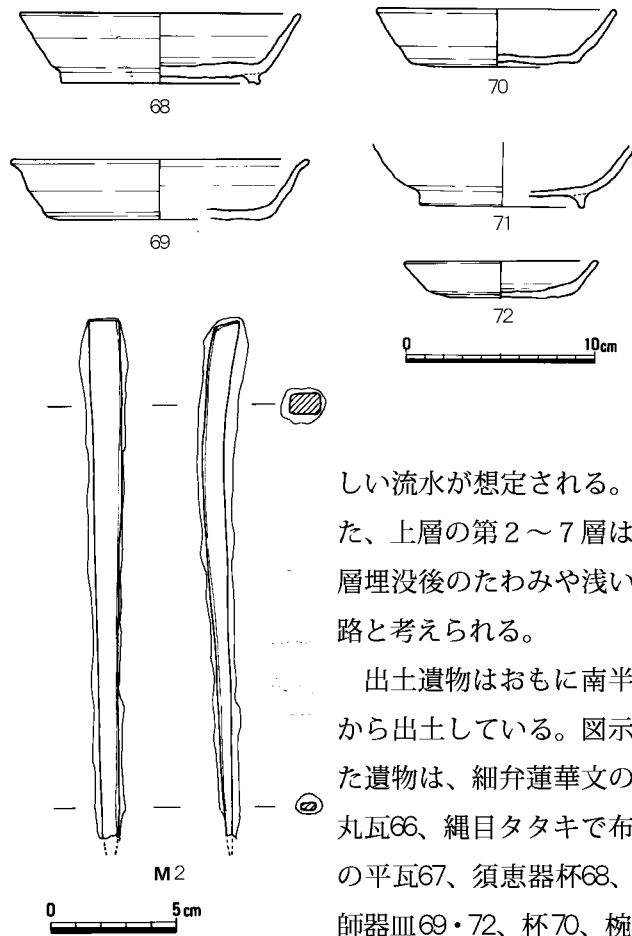
- | | | | | | |
|---|---------------------|----|----------------------------------|----|---------------------|
| 1 | 灰黄褐色(10YR 5/2)粘質微砂 | 7 | にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘質微砂 | 13 | 緑灰色(10GY 5/1)粘土 |
| 2 | 灰黄色(2.5Y 6/2)粘質微砂 | 8 | 灰黄色(2.5Y 6/2)微砂 | 14 | 黄灰色(2.5Y 5/1)粘質微砂 |
| 3 | にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘質微砂 | 9 | 褐灰色(10YR 6/1)微砂 | 15 | 緑灰色(10GY 5/1)粘質砂 |
| 4 | 黄灰色(2.5Y 5/1)粘質微砂 | 10 | 緑灰色(10G 5/1)微砂 | 16 | 緑灰色(10GY 5/1)粘土 炭多含 |
| 5 | 黄灰色(2.5Y 6/1)粘質微砂 | 11 | 灰オリーブ色(7.5Y 5/2)粘質微砂 | 17 | 褐灰色(10YR 4/1)粘質微砂 |
| 6 | 灰黄褐色(10YR 5/2)粘質土 | 12 | 暗緑灰色(10GY 4/1)粘土+灰褐色(7.5Y 5/2)微砂 | 18 | にぶい黄褐色(10YR 5/3)微砂 |
| | | | | 19 | にぶい黄褐色(10YR 5/4)微砂 |
| | | | | 20 | 灰黄褐色(10YR 4/2)粘質微砂 |
| | | | | 21 | 黄褐色(2.5Y 5/3)粘質微砂 |
| | | | | 22 | 暗灰黄色(2.5Y 5/2)砂質土 |
| | | | | 23 | 暗灰黄色(2.5Y 5/2)粘質微砂 |
| | | | | 24 | オリーブ黒色(5Y 3/2)粘土 |

溝17 (第24・33図)

1区中央部に位置し、中世以降の水田耕土下で検出した。埋土は水田耕土ブロックで、底面は凹凸が激しい。

水田の肩の形状に沿うことと、その埋土から耕作に伴う掘削痕と考えられる。(高田)

第30図 溝14周辺関連土層断面図(1/60)



第31図 溝14出土遺物2 (1/4・1/3)

しい流水が想定される。また、上層の第2～7層は下層埋没後のたわみや浅い流路と考えられる。

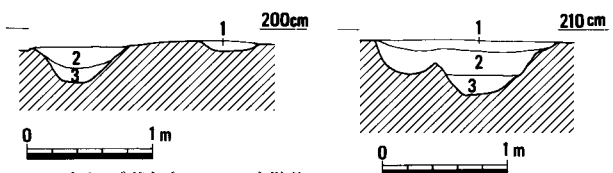
出土遺物はおもに南半部から出土している。図示した遺物は、細弁蓮華文の軒丸瓦66、縄目タタキで布目の平瓦67、須恵器杯68、土師器皿69・72、杯70、椀71、鉄釘M2である。このほか黒色土器、鉄滓等がある。

66は周辺遺跡からの出土が報告される平城宮6225式垂式瓦である。69は内面に、70は外面に赤色顔料を塗布する。これらは66～70が下層、71・72の年代を示す。時期は下層が8世紀後半～9世紀中頃と考えられる。(高田)

溝15・16 (第24・32図)

1区北半に位置する溝である。溝14の南端に接し、ここから南側約43mにわたって検出した。後述する中～近世水田の畦畔下にほぼ重なる。断面形は溝15が逆台形、溝16が皿形を呈する。切り合いから溝16が新しい。

溝の時期は検出状況から古代と考えられる。(高田)



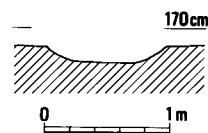
- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1 | オリーブ黄色(7.5Y 6/3)微砂 |
| 2 | 灰オリーブ色(5Y 5/2)砂質土 |
| 3 | 褐灰色(10YR 4/1)粘土ブロック+灰オリーブ色(5Y 5/2)微砂 |

第32図 溝15・16土層断面図(1/60)

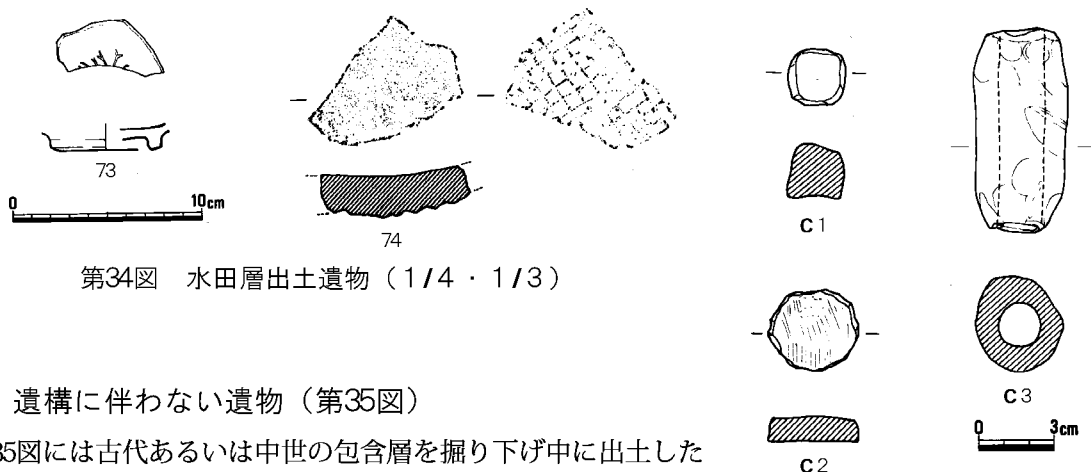
(4) 水田 (第24・34図)

溝14以南で耕作層を確認し、第24図の網目で示す畦畔を検出した。1区北半の地形は東に向かって傾斜することから、畦畔は等高線に平行する。

出土遺物は土師器・須恵器・備前焼・亀山焼・輸入および国産陶磁器・瓦・鉄釘・土製品などである。図示したものは、龍泉窯系の青磁碗73、格子目タタキ平瓦74と、土製品の賽? C1、須恵器転用の円板C2、土錘C3である。水田の時期は中世以降と考えられる。(高田)



第33図 溝17土層断面図 (1/60)

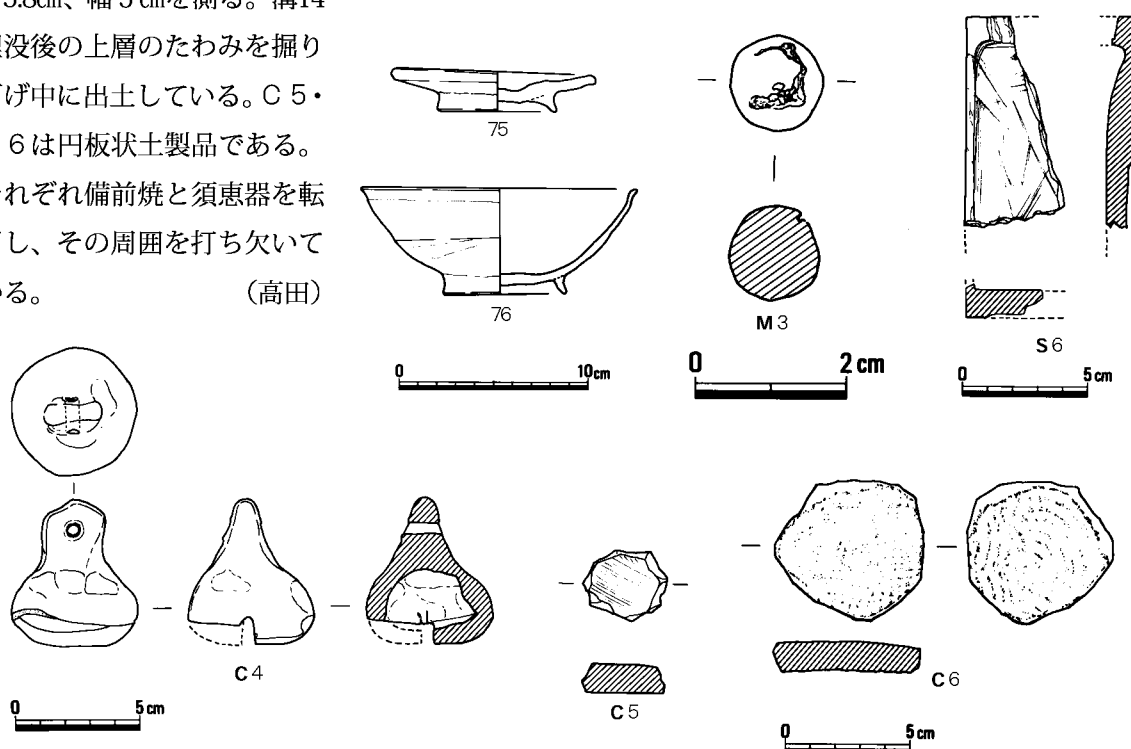


第34図 水田層出土遺物 (1/4・1/3)

(5) 遺構に伴わない遺物 (第35図)

第35図には古代あるいは中世の包含層を掘り下げ中に出土した遺物を掲載している。

75は土師器の皿である。76は口径14.5cm、器高5.7cmを測る土師質高台付椀で、内外面とも丁寧なナデを施している。いずれも水田層下の褐灰色粘質土層から出土している。M3は鉛弾で径12mm前後、重さ7gを測る。S6は頁岩製の硯である。C4は土鈴である。吊り手に穿孔し、芯は欠失する。高さ5.8cm、幅5cmを測る。溝14埋没後の上層のたわみを掘り下げ中に出土している。C5・C6は円板状土製品である。それぞれ備前焼と須恵器を転用し、その周囲を打ち欠いている。(高田)



第35図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4・1/3)

第3節 2区の調査

1 検出遺構と出土遺物の概要

2区は、調査実施時期が周囲の水田耕作時期にあたるため、第36図に示すようにA～F区と6区に分割し、周囲の水田からの漏水や雨水の湛水処理に配慮した。

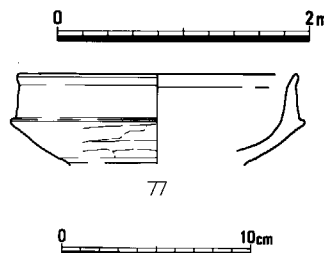
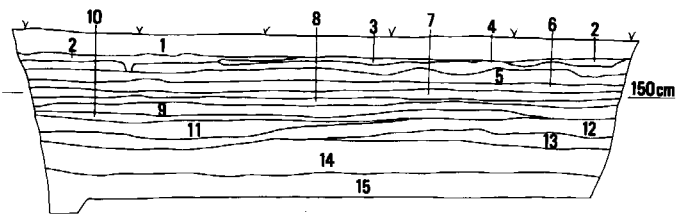
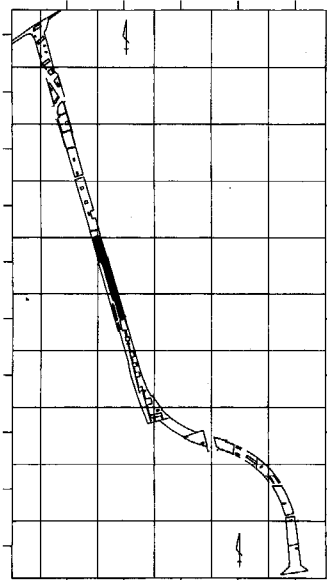
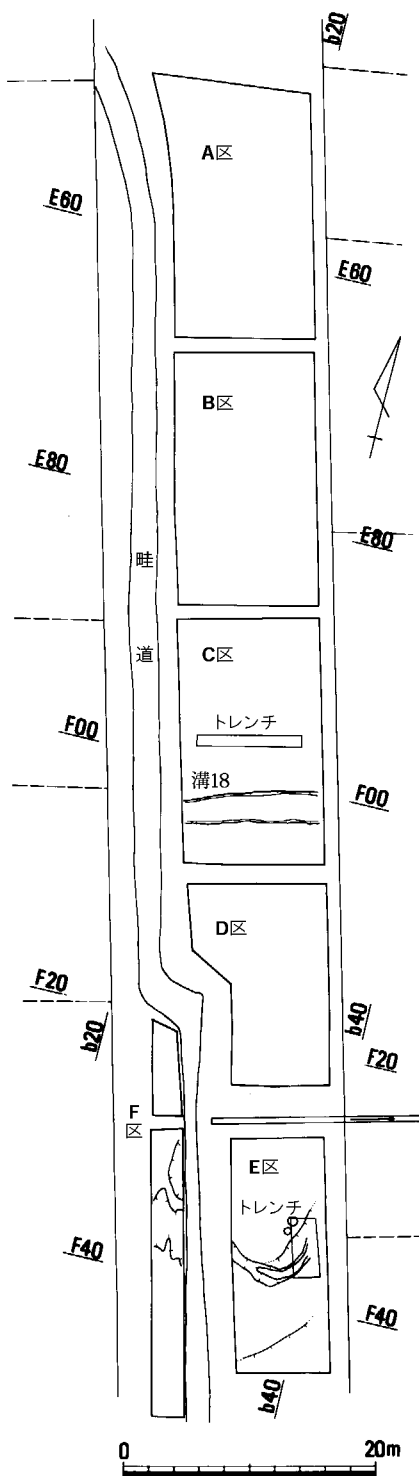
調査はA区から南下して進め、基本的に各区は平面的に掘り下げた。周囲の水田耕作に必要な農道などは、発掘調査によって明確な遺構が検出された場合は、撤去もしくは付け替えの方向を考慮していたが、終始原状を維持した状態で発掘を進めた。

明確な遺構は、C区の溝18とE・F区の溝19・20、土壌などがあるが、全体的に希薄な状況を示している。

出土遺物も比較的少量で、中世～近世にかけての陶磁器がその大半を占める。

E区に設定したトレンチでは、77の須恵器高杯が出土している。第37図の11層から出土したもので、少量の土師器片も伴う。これは、溝20の延長線上にあたる。

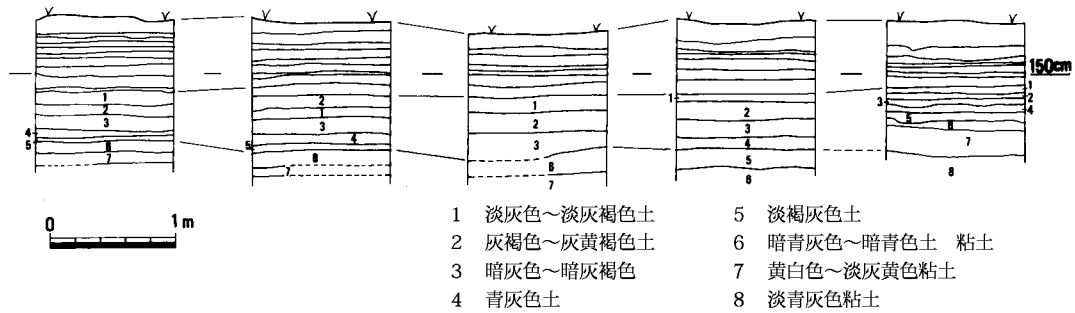
第38図には、A～E区の柱状図を掲げる。多少の起伏は



- | | |
|----------|------------|
| 1 耕作土 | 9 黄褐色粘土 |
| 2 灰青色微砂 | 10 白灰色粘土 |
| 3 灰黄色微砂 | 11 灰褐色粘土 |
| 4 粗砂 | 12 淡灰褐色砂質土 |
| 5 淡灰褐色微砂 | 13 淡灰褐色粘土 |
| 6 黄褐色土 | 14 黄白色粘土 |
| 7 淡黄褐色土 | 15 淡青灰色粘土 |
| 8 淡黄灰色土 | |

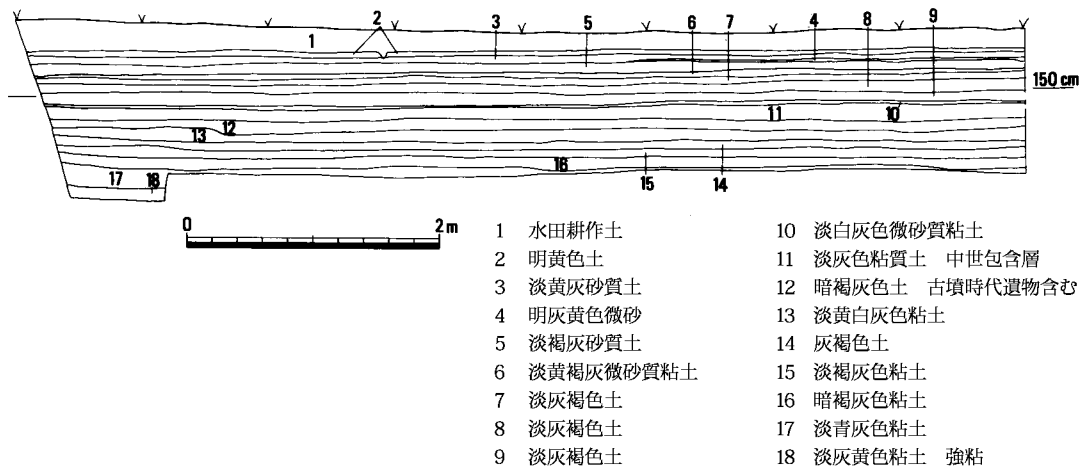
第36図 仏生田遺跡2区全体図(1/600)

第37図 2-E区トレンチ土層断面図・出土遺物(1/60・1/4)

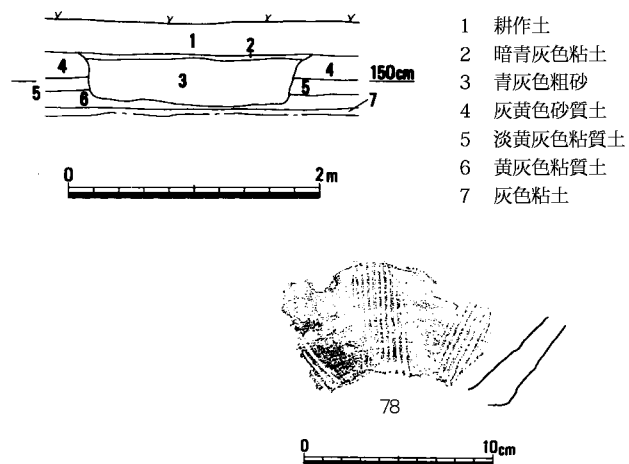
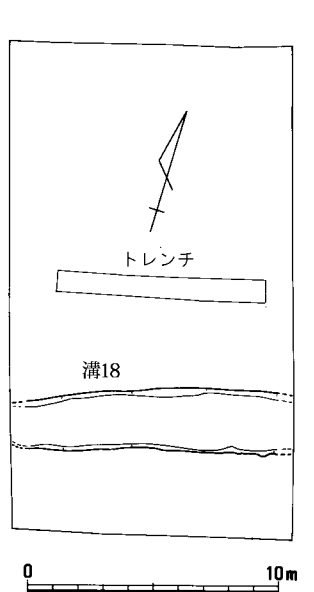


第38図 仏生田遺跡 2-A～E区土層柱状図(1/60)

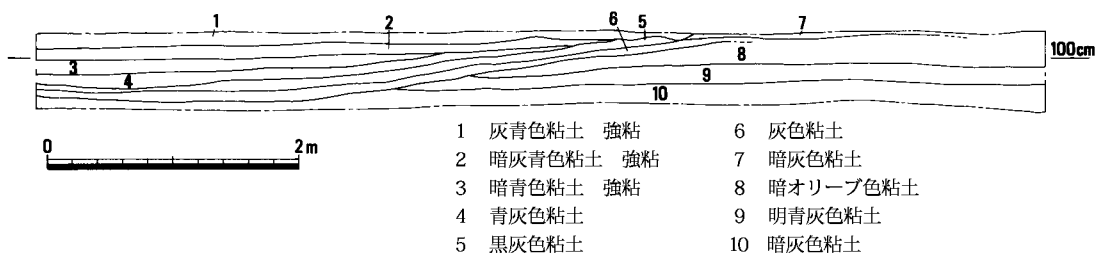
あるが、基本的に水平堆積層が形成されている。灰色～灰褐色の土層は、水田特有の鉄分やマンガンの凝着が観察される。下層では、黄白色ないし青灰色を呈する粘土層があり、基盤層に該当する。C区では第42図のようにさらに深掘りを試みたが、粘土層の微妙な起伏も看取されたものの人工的な遺構の存在は全く認められない。(岡田)



第39図 仏生田遺跡 2-A区土層断面図(1/60)



第40図 仏生田遺跡 2-C区全体図(1/300) 第41図 2-C区溝18土層断面図・出土遺物(1/60・1/4)



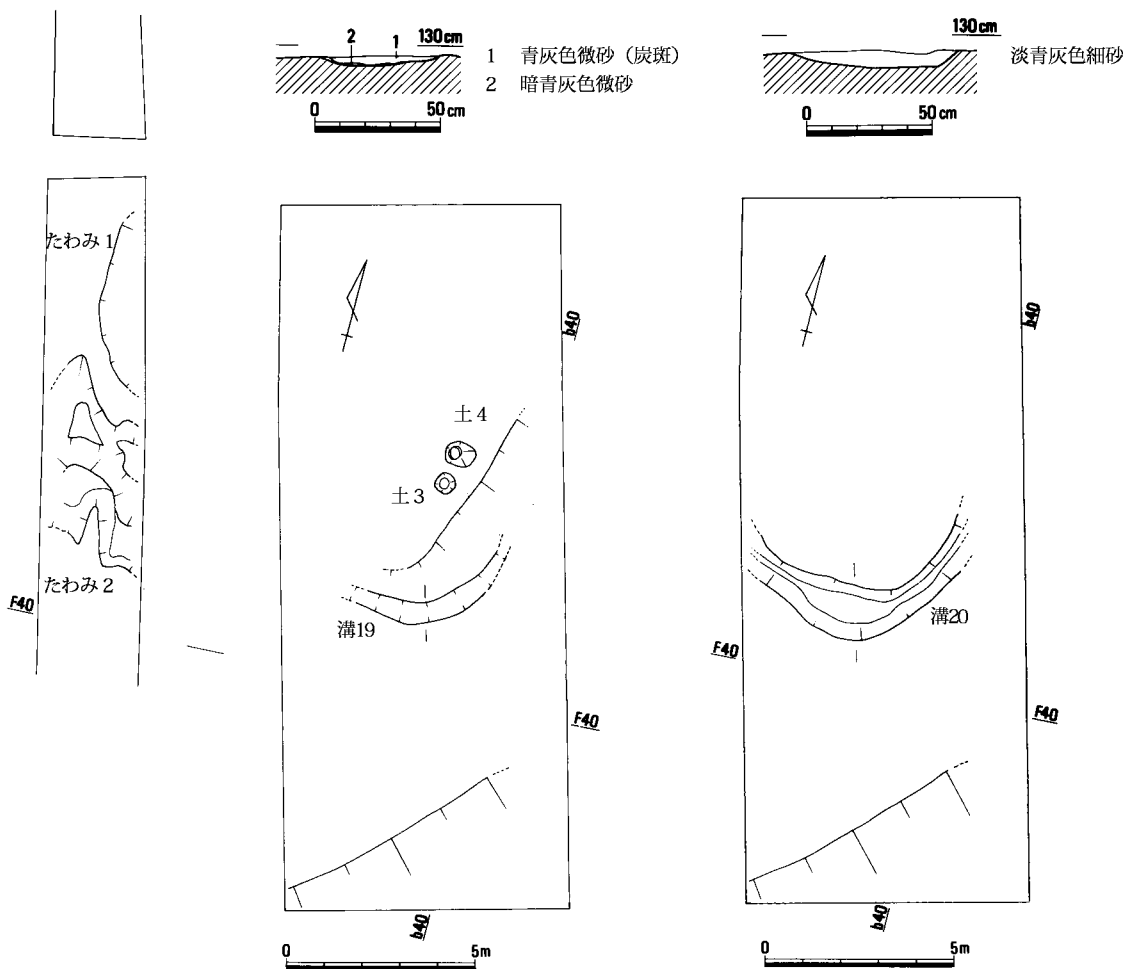
第42図 2-C区設定トレンチ土層断面図 (1/60)

(1) 溝

溝18 (第40・41図)

C区の南よりで検出された、ほぼ東西方向を示す浅い溝である。埋積土は青灰色の粗砂で、78の備前焼播鉢片が出土しているが、時期的には近世の可能性が高く、農耕に伴う溝と考えられる。(岡田) 溝19・20 (第43・44図、図版26)

いずれもE区の中央部で検出された溝で、弧を描くような形状を示す。西方のF区で検出されたたわみ1・2と同質の微砂質の埋積土である。出土遺物は土師器細片が少量認められたが、既述の77に



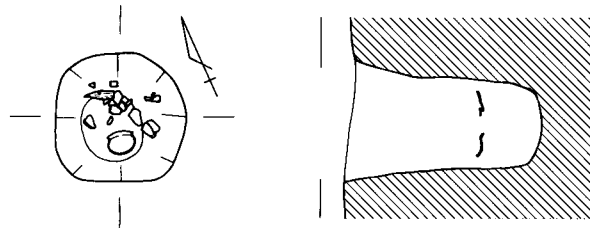
第43図 仏生田遺跡2-E・F区遺構全体図 (溝19・たわみ: 1/200)

第44図 仏生田遺跡2-E区遺構全体図 (溝20: 1/200)

伴うまとまった遺物は得られなかった。

溝19は溝20の上位たわみ部分と想定することも可能である。これらの溝が人工的なものであるか、明確な手がかりはないが、地形に沿って増水時に自然に形成された溝である可能性の方がむしろ高いといえるだろう。

(岡田)



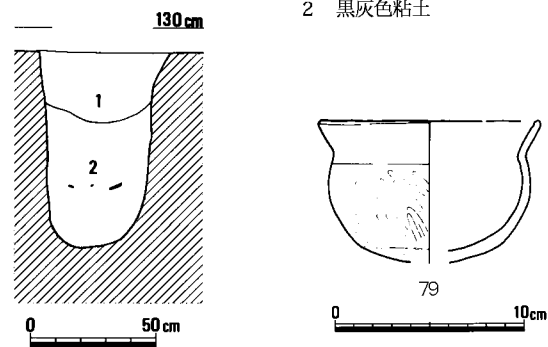
(2) 土壌

土壌3 (第43・45図、図版26)

C区で検出された不整な円形を示す深い土壌である。径50cm前後、深さ約80cmとかなり深く掘りこまれており、下層から79の小型の土師器鉢が出土している。

検出時は、このような土壌が複数まとまって建物あるいは、竪穴住居の柱を構成する可能性を考えたが、これを証明することはできなかった。時期的には、古墳時代前期に比定される。

(岡田)



- 1 青灰色粘土 炭混じり
- 2 黒灰色粘土

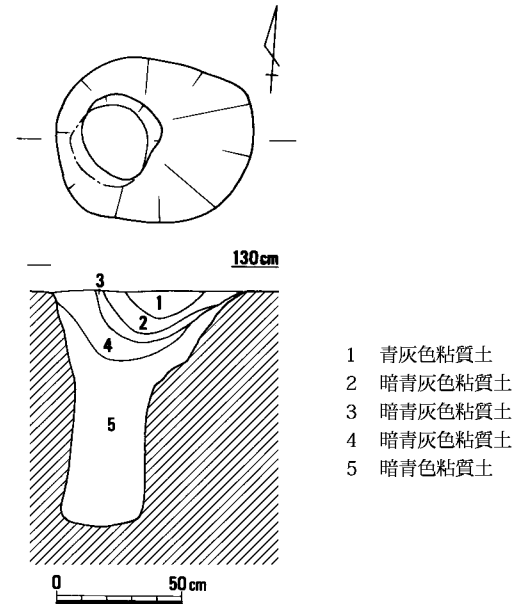
第45図 2-E区土壌3・出土遺物 (1/30)

土壌4 (第43・46図、図版26)

土壌3のすぐ南側で検出されたひとまわり大きな土壌で、深さは90cmにも達する。

壙底はやや平らで、位置は平面形とずれている。埋積土は土壌3と類似する。

(岡田)



- 1 青灰色粘質土
- 2 暗青灰色粘質土
- 3 暗青灰色粘質土
- 4 暗青灰色粘質土
- 5 暗青色粘質土

第46図 2-E区土壌4 (1/30)

(3) たわみ

たわみ1・2 (第43・47図)

F区の北よりで検出された砂層が埋積した浅いくぼ地である。

人工的な掘りこみが行われた遺構とはいいがたく、西方からの流水によって形成されたと理解される。出土遺物には、土師器小片が少量認められるに過ぎない。

(岡田)

2 遺構に伴わない出土遺物

調査区全体での出土遺物はきわめて少なく、図化が可能な土器類はごく少量である。第48図に遺構に伴わない、水田層を主体として出土した遺物を掲載する。

C7・8は球形を呈する小型の土錘と考えられ、後者には紐通しの細い溝が作り出される。C9は

第5章 仏生田遺跡

備前焼の破片を素材とする円板で、玩具としての使用が考えられる。

M4は鉛の銃弾である。新邸遺跡、郷ノ溝遺跡でも出土しており、16世紀後半の高松城の水攻めの時期に比定されだろう。図に示すような亀裂が観察され、発射弾である可能性も考えられる。

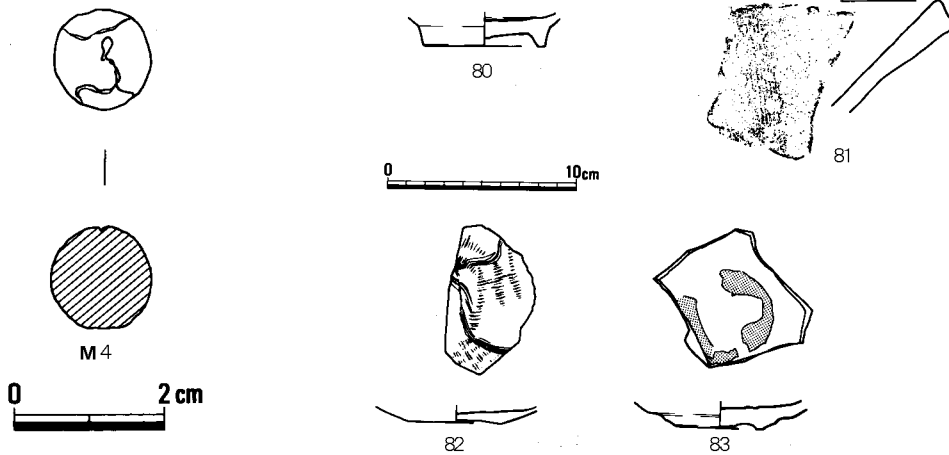
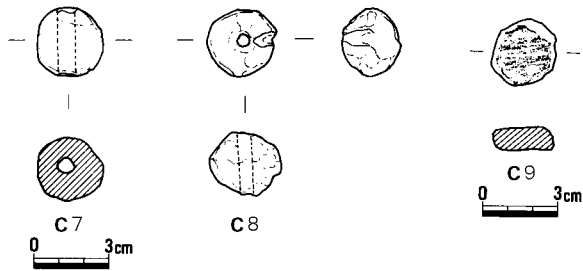
80は白磁碗のケズリ出し高台の破片である。精良な胎土が観察される。

81は亀山焼の播鉢口縁部の破片である。内面には放射状の細かい卸し目の痕跡が残される。軟質の焼成で一見土師質のような印象を受ける。

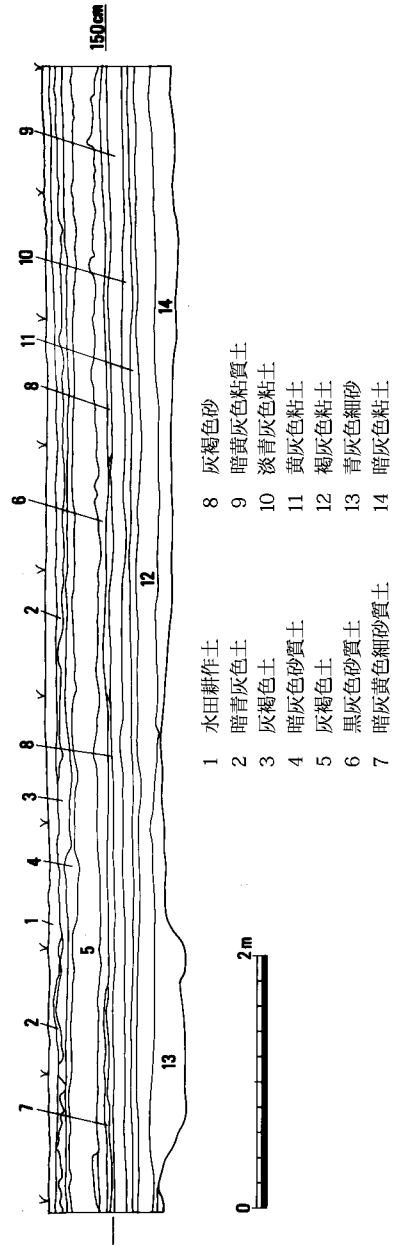
82は青磁皿の底部小片である。内面底部には櫛描きによる文様が施される。外底部はやや揚げ底である。

83は国産陶器で唐津碗と考えられる。見込みに、砂目積が観察され、16世紀末から17世紀はじめの時期が考えられる。高台は低く焼成もさほど堅緻とはいえない。80・82は輸入磁器で、おもに鎌倉時代に輸入されたことが推定される。

(岡田)



第48図 2区包含層出土遺物 (1/3・1/1・1/4)



第47図 仏生田遺跡2-F区土層断面図 (1/60)

第4節 3区の調査

1 調査の概要

北区の調査（第49・51図、図版27）

この調査区は、平成13年度は用地買収が完了していなかった。そのため調査は、用地の問題が解決した平成14年度の10月にほぼ1か月かけて実施した。調査区に接して北側は、古墳時代の遺構も検出されていた。しかし、南側においては、遺構の存在する様相はみられなかった。そのため、生活区としての微高地がどこまで広がるものかが重要な課題となっていた。

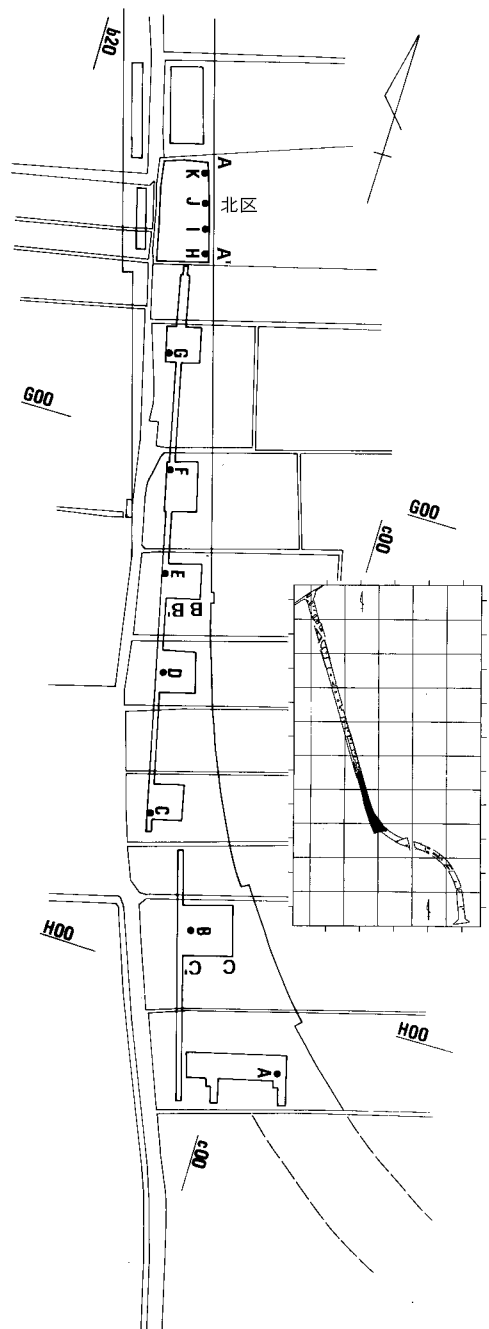
調査の結果は、造成土直下において盛土直前の耕作土と畦畔を検出した以外に、遺構は検出されなかった。そこで、北側調査区で遺構を検出した基盤層の続きを追求することにした。その結果、基盤となる層は南に向けて下がり、調査区のほぼ中央がもっとも深くなる。また南に向けては、少し上昇する傾向がみられた。第51図23層がそれに相当する。基盤層がもっとも下がる付近に、東西方向のトレンチを設定して調査したところ、東西方向では、水平に近い堆積を示していた。このことは、東西方向に長い窪地を形成していることを示すものと推測される。以上のことから、北から南に広がる微高地はこの付近を境とし、一つのまとまりある微高地を形成することが判明した。

出土遺物としては、須恵器・土師器・陶器・磁器・中世土師器・近世染め付けなどがある。いずれもそのほとんどは小破片であり、また出土量も少ない。84は、蓮弁風の装飾が巡る白磁の合子である。（井上）

トレンチ調査（第49・50・53図、図版27）

トレンチ調査は、北区を除く3区の大半を対象に行った。1次調査の際、この地点は表土直下が砂層で崩れやすく、また湧水が激しく掘り下げが困難であった。このため、砂層の時期と深さ、砂層下での遺構の有無が確認できなかった。そこで、1次調査より深く掘削することを目的に、より広く調査区を設定し、排水や壁面養生に注意を払いながら平断面の精査を行った。各調査区を、柱状図位置のアルファベットに従いA～G調査区と呼称する。

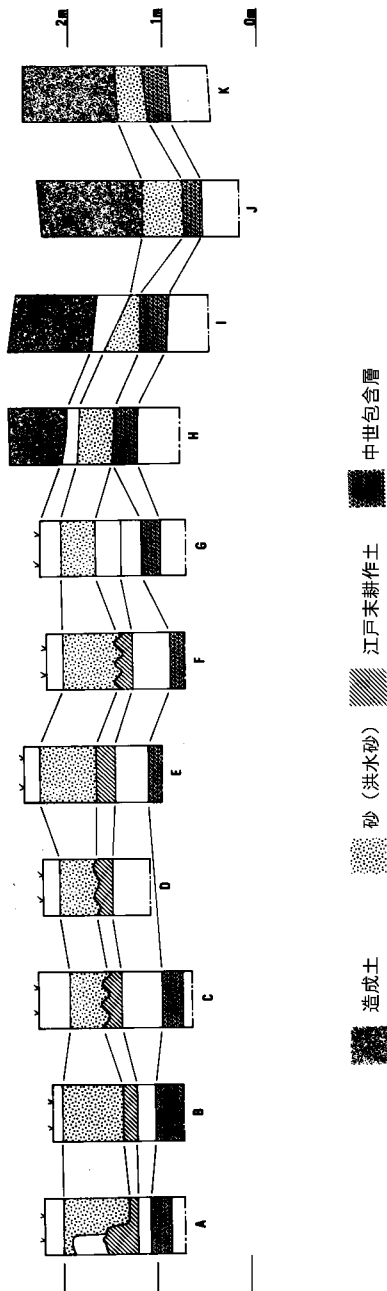
さて、調査の結果であるが、現地表は調査区のほぼ中央、E調査区が最も高い。表土下には厚さ50～70cmの洪水砂が



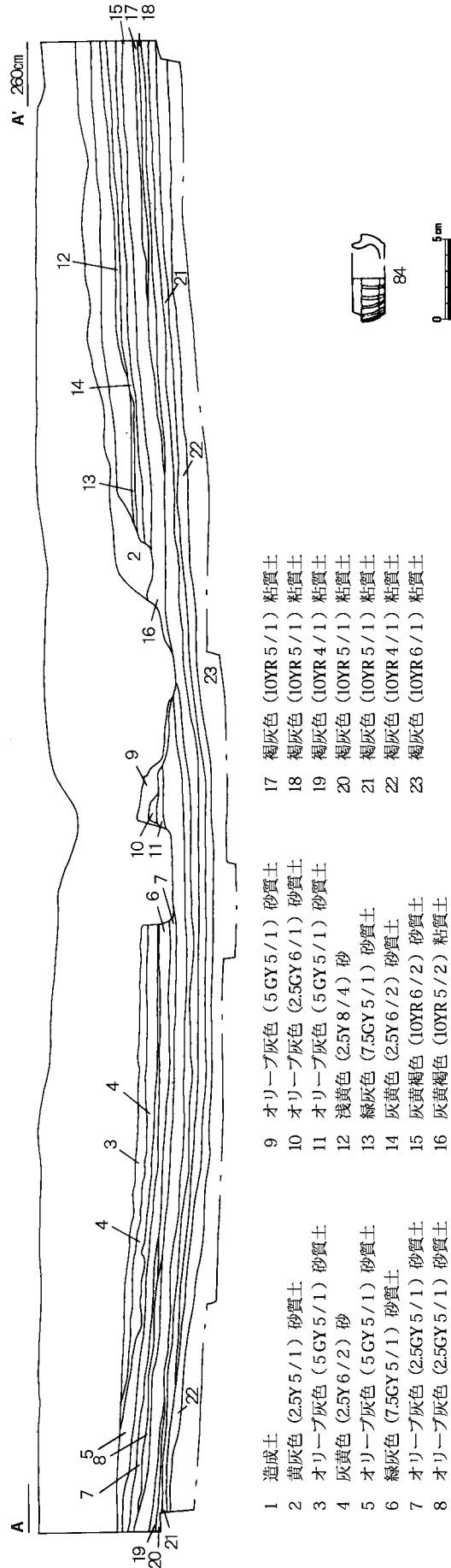
第49図 3区調査区設定図
・土層柱状位置図（1/1500）

存在した。この洪水砂は、後述する遺物などにより、近世～近代に堆積した可能性が高い。

洪水砂直下では、柱状図で波状に表したC・D・F調査区で、畝状の耕作痕を確認した。B調査区では、第52図下図の第3層のような畦が存在した。これとは別に、A調査区では洪水砂中に土手状の盛土を検出した。この盛土は単に粘土を盛っただけの構造で、その下層に存在する近世の畦畔をかさ上げする形で東西方向に作られている。時期は近世以降と考えられるが、土手とい



第50図 土層柱状図



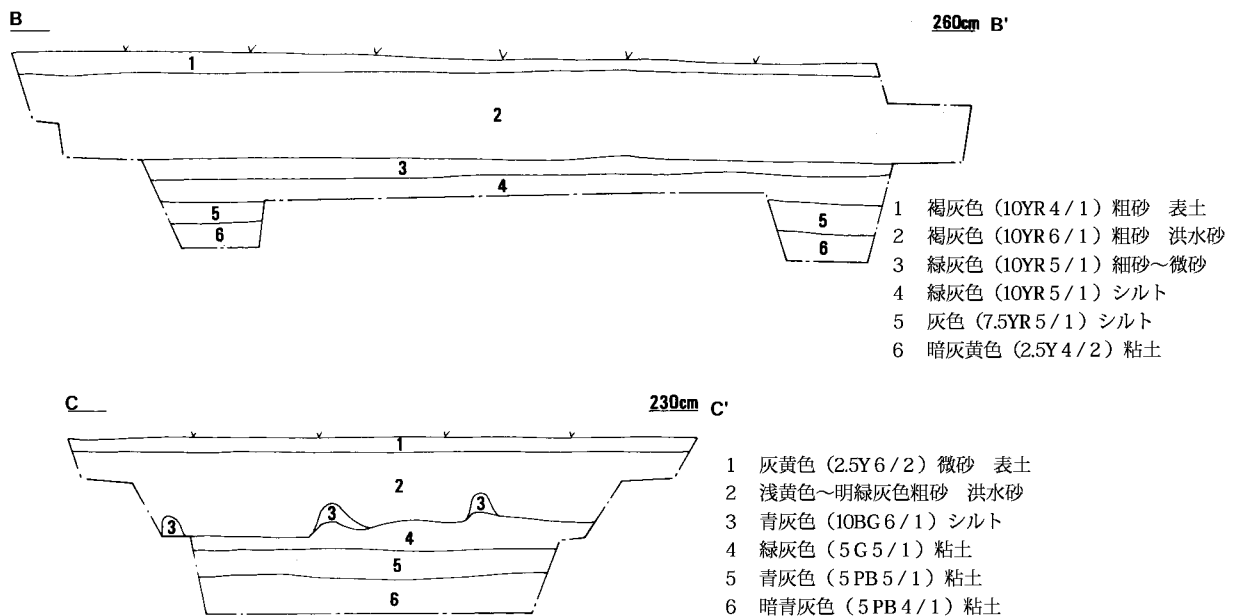
第51図 3区北調査区土層断面図・出土遺物 (1/80・1/4)

うには貧弱である。洪水の後、一時的に補修したものが再び洪水に見舞われたのかもしれない。

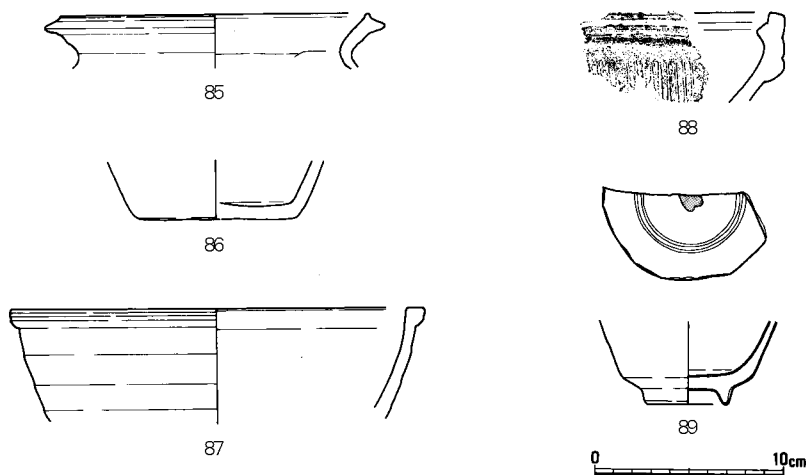
近世の耕作土より下の土層は、ほぼ水平に堆積している。間層を置いて中世の遺物を含む包含層を確認したが、遺物のごくわずかで遺構もみられない。さらに下層は粘土質が強くなっていくが、遺物は確認できなかった。

このことから、トレンチ調査の範囲は近世まで低位部で、近世になって耕作地となったことがわかった。その上に堆積した砂層は一気に堆積している。遺物が少ないためはっきりといえないが、明治になって岡山県を襲った洪水のうち、最も大規模な明治25・26年の洪水による可能性が高い。

各調査区出土遺物は少量である。洪水砂からは85の弥生土器、87の陶器、89の染付などが出土した。85は弥生時代後期前葉の甕である。87は肥前の鉢で、刷毛目模様を施す。18世紀代であろう。89は内面に2重圏線、高台底面に砂が付着する。86はG地点の中世包含層出土の須恵器壺底部で、色調は灰白色である。88は表土出土の備前焼播鉢で、細かい卸し目が内面全面に見られる。(氏平)



第52図 3区トレンチ土層断面図 (1/60)



第53図 3区出土遺物 (1/4)

第5節 5区の調査

1 調査区の概要

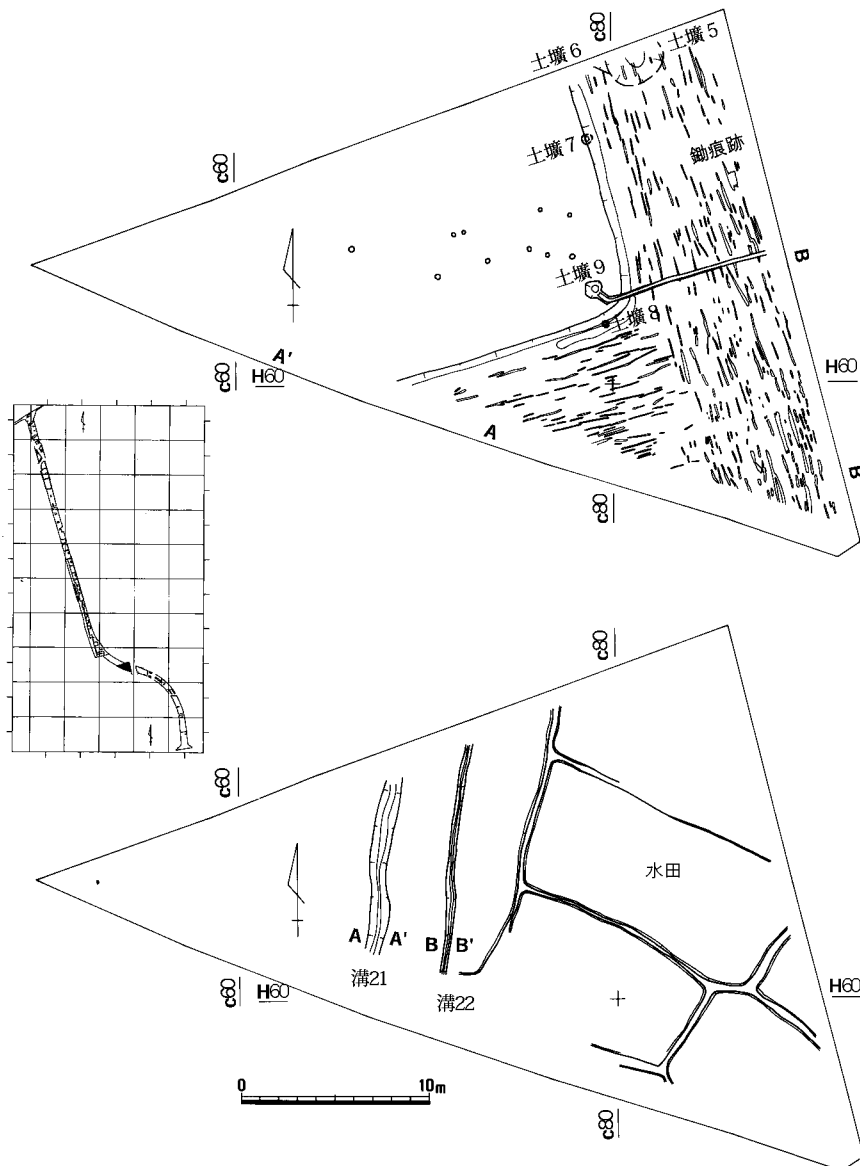
(1) 溝

溝21 (第54・56図、図版28)

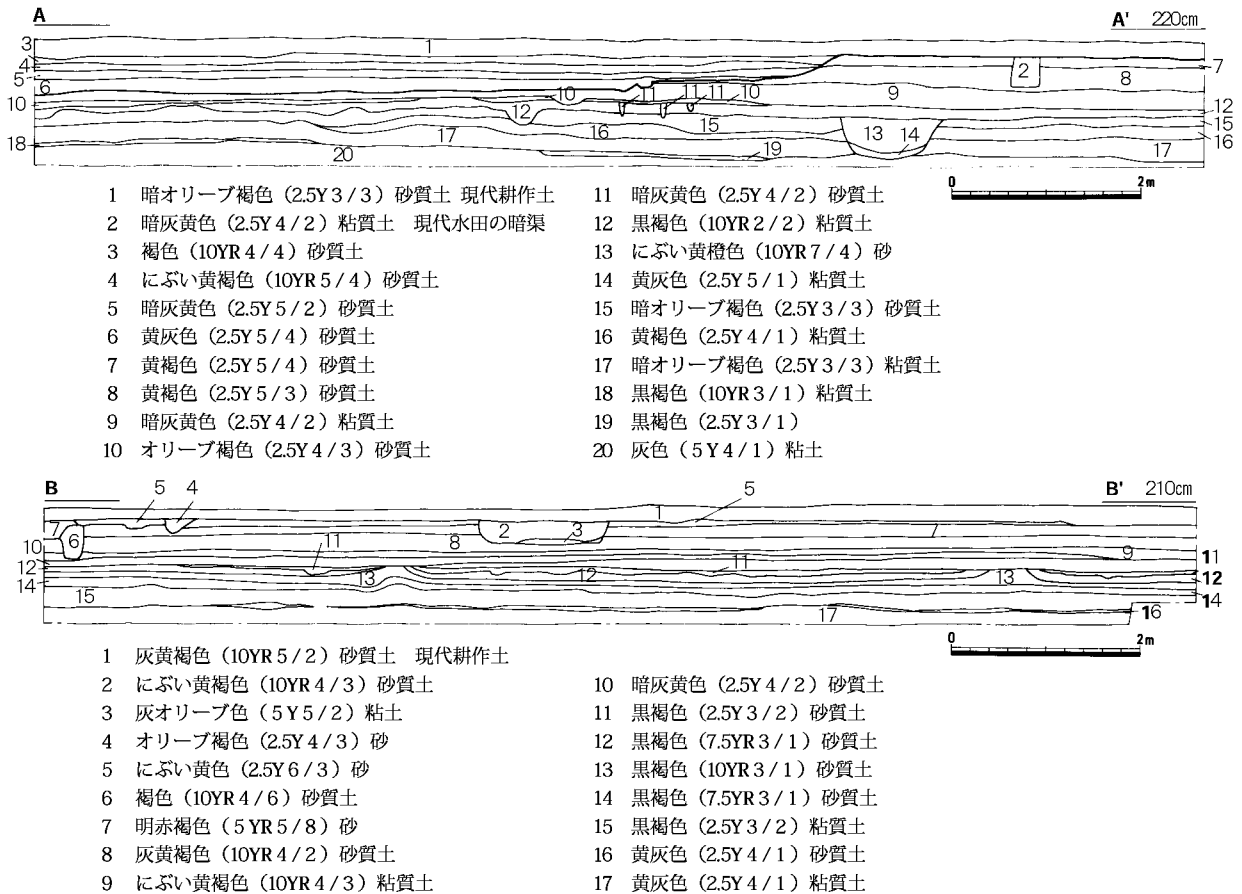
調査区の中央部から少し西よりの位置に検出した溝で、ほぼ南北方向に流れる。検出した全長はほぼ10m、幅は1.1mを測る。断面形はU字形を呈し、深さ42cmを測る。溝の埋土は2層みられ、上層は砂で埋まる。下層は、やや粘質の強い土で埋まる。出土遺物がないため、明確な時期は不明であるが、古代水田跡よりは古いことから、古墳時代中葉以前とすることができる。(井上)

溝22 (第54・57図、図版28)

溝3にほぼ並行してその東約3mの位置に検出した。検出した全長は12.5mを測る。幅は、30~40cm、深さ15cmを測る。埋まる土は1層のみで、第55図上段の土層断面図の12層を除去後に検出したが、同層との区別はできなかった。このことは、溝4と12層の形成時期は、非常に近い事を示すものと考えられる。また、溝21は、12層とは明らかに異なり、溝22より古いことを示している。溝の時期であるが、出土遺物がないため明確には不明であるが、古墳時代後期の早い時期に属するものと考えられる。(井上)



第54図 5区遺構全体図 (1/400)



第55図 5区土層断面図 (1/80)

(2) 古代水田跡

古代水田 (第54・58図・図版28)

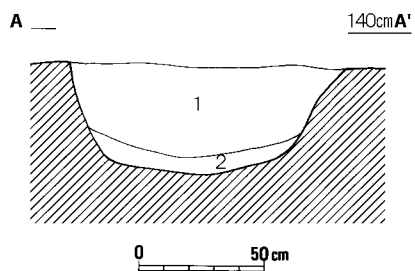
調査区の東半分に検出した古代以前の水田跡である。長方形に区画する畦畔を3面検出した。区画される水田は、各面共に少し形を異にするが、畦畔の位置はほぼ同じ位置に造られている。水田区画の長軸方向をみると、北西から南東方向を示すものが多い。水田区画の最も大きいもので長辺約14m、短辺約6mを測る。最も小さい区画は、2面に検出したもので、長辺約6.5m、短辺約5.3mを測る。1面のA-A'において畦畔の断面をみると、5層とした部分に畦が形成されている。その後、畦畔の東側に4層を足すかたちで畦畔が拡張される。最終的には、それを基礎に畦畔と水田が形成された状況がみられる。水田層の基盤は、北東方向に向けて高くなる状況がみられた。

水田の時期であるが、終末は10世紀後半から末、始まりは、6世紀頃と推定される。 (井上)

(3) 土壇

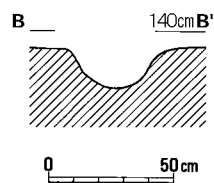
土壇5 (第54・59図・図版29)

調査区の北東端部に検出した。一部が、調査区外に広がるため全体の形状と規模は不明であるが、円形に近い楕円形を呈するものと考えられる。断面形は、「U」字形を呈するものである。判明する規模は、長径3m、深さ81cmを測る。土壇内からは、遺存状態が悪く取り上げられなかったため種の同定はできなかったが、大形動物の骨が出土した。 (井上)



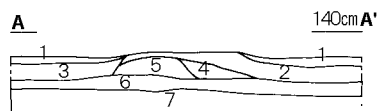
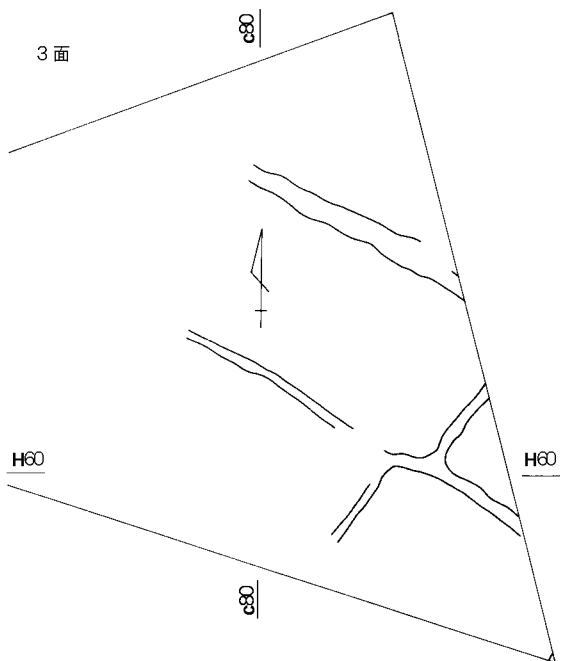
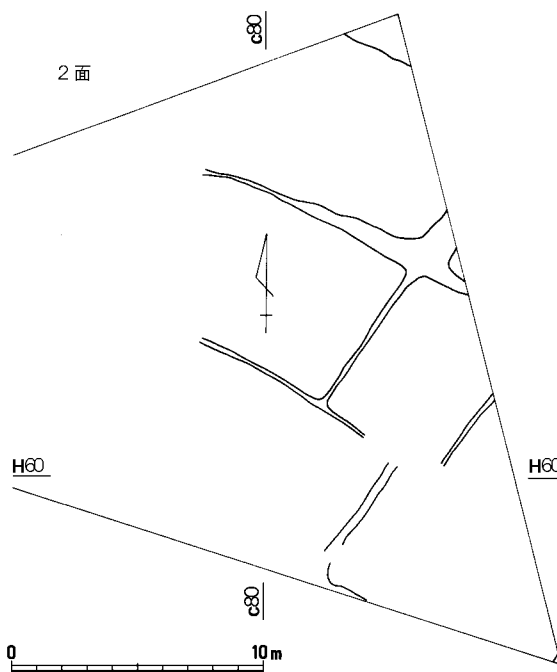
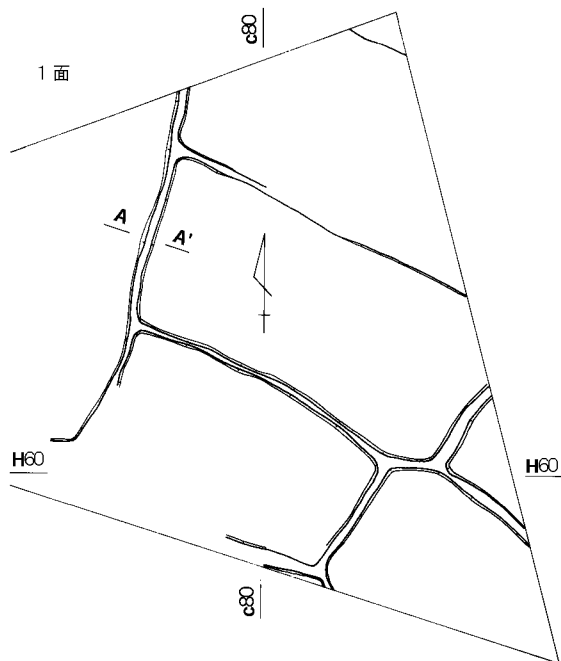
- 1 にぶい黄橙色 (10YR 7/4) 砂
- 2 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘質土

第56図 溝21断面図 (1/30)



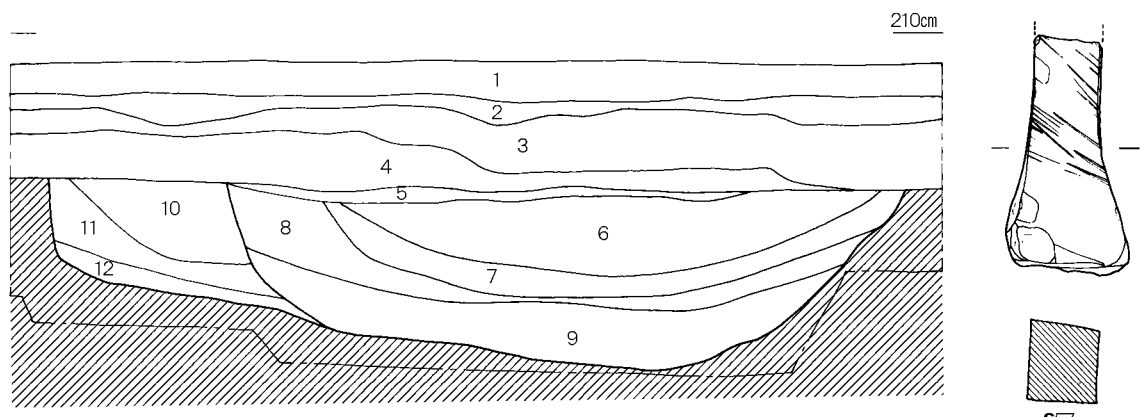
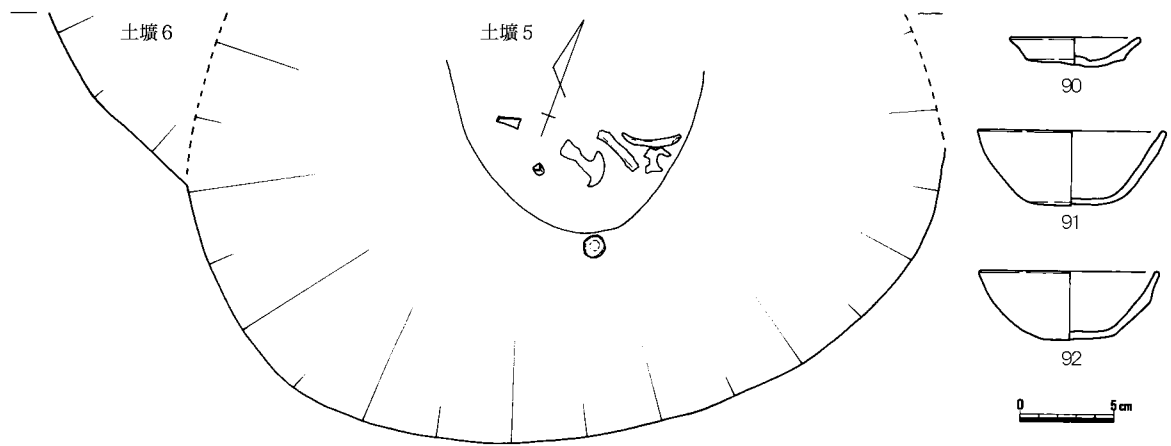
黒褐色 (10YR 2/2) 粘質土

第57図 溝22断面図 (1/30)



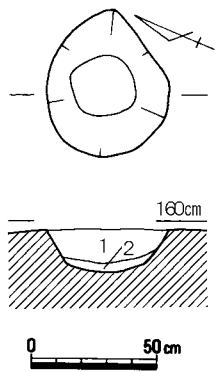
- 1 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 (10Y 4/3) 粘質土
- 3 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土
- 5 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘質土
- 6 褐色 (10YR 4/4) 砂質土
- 7 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂質土

第58図 水田・畦畔断面図 (1/300・1/30)



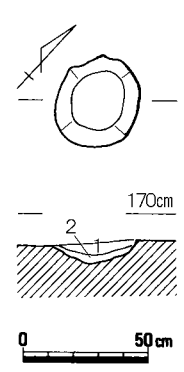
- | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|---------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 1 鈍黄橙色 (10YR 4/3) 砂質土 | 2 褐色 (7.5YR 4/4) 砂層 | 3 黄褐色 (2.5Y 5/3) 粘質砂 | 4 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 | 5 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 | 6 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 | 7 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質砂 | 8 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 9 灰色 (5YR 4/1) 粘質土 | 10 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質砂 | 11 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質砂 | 12 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 |
|-----------------------|---------------------|----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------|------------------------|------------------------|------------------------|

第59図 土壙5・6・出土遺物 (1/30・1/4・1/3)



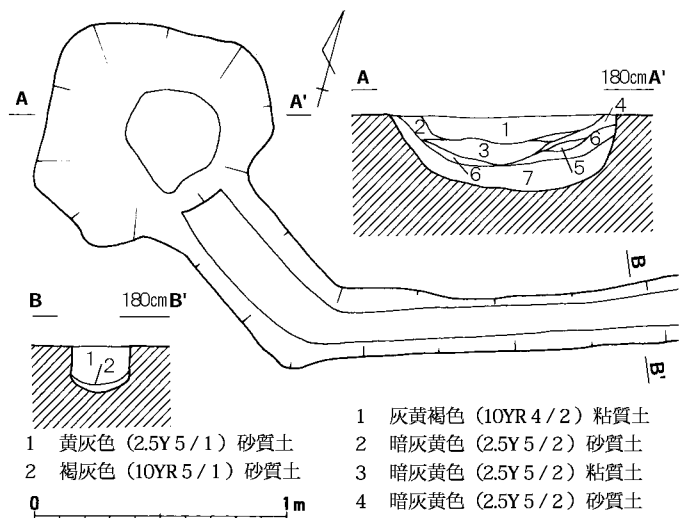
- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 | 2 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 |
|-----------------------|-----------------------|

第60図 土壙7 (1/30)



- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 褐灰色 (10YR 5/1) 粘質土 | 2 褐灰色 (10YR 5/1) 粘質土 |
|----------------------|----------------------|

第61図 土壙8 (1/30)



- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 黄灰色 (2.5Y 5/1) 砂質土 | 2 褐灰色 (10YR 5/1) 砂質土 |
|----------------------|----------------------|

第62図 土壙9 (1/30)

- | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 2 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土 | 3 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土 | 4 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土 | 5 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土 | 6 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 微砂粘質土 | 7 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-------------------------|-----------------------|

第5章 仏生田遺跡

出土遺物としては、90は小皿である。全体にナデによる仕上げが施されている。91・92は、椀である。全体にナデ仕上げが施されており、底部は、わずかに揚げ底に作られている。S7は、砥石で、4面を使用しており、石材は流紋岩である。土壌の時期は、14世紀後半から末と考えられる。（井上）
土壌6（第54・59図、図版29）

土壌5と重複して西側に検出した。調査中は土壌5と同一の遺構と見ていたが、断面観察の結果2基存在することが判明した。土壌6は、調査区には一部分のみがかかること、土壌5に切られていることから全体の形状、規模等は不明である。時期は、14世紀代と推測される。（井上）

土壌7（第54・60図、図版29）

土壌5の南西約3mの位置に検出した。平面形が長円形を呈するもので、長径59cm、短径50cmを測る。断面形は椀形を呈するもので、検出面からの深さ18cmを測る。土壌の時期は、検出状況から土壌5に近いと考えられる。（井上）

土壌8（第54・61図）

土壌7の南約10mの位置に検出した。平面形はほぼ円形を呈するもので、長径38cm、短径32cmを測る。土壌は、浅く窪むもので、壁の一部が被熱により赤変していた。検出面からの深さは、8cmを測る。土壌の時期は土壌5に近いと考えられる。（井上）

土壌9（第54・62図）

土壌8の北約1mの位置に検出した。平面形は五角形を呈するもので、長径1.02m、短径90cmを測る。土壌からは、1本の溝が接続しており東に延びて調査区外まで続く。溝の底には砂がみられ、水が流れた痕跡と考えられる。時期は、中世末ないし近世と考えられる。（井上）

（4） 中世水田跡と耕作痕（第54・55、図版29）

中世に形成された微高地の東側と南側を削平して水田としたものである。第55図上段の土層図で示すと3～6層がそれに相当する。これらの土層内には鉄分層の水平堆積が数層観察されることから、水田耕作を推測させる。また、6層の上面からは、第54図上段の図面に示すように、一定方向を向いた浅い溝が、とぎれとぎれに検出された。その方向は、東側では南北方向であり、南側では東西方向を向く。この浅い溝を鋤による耕作痕跡と推測するものである。

この水田層の下層には、古代の水田層が存在しており、10世紀末頃までは水田として機能していた可能性がある。その後、微高地が形成され、14世紀代には土壌が存在しており、その土壌を削平する状態で耕作痕が存在することから、中世水田の形成は15世紀頃に始まるものと推測される。（井上）

2 出土遺物の概要

93～102までは中世土師器である。93は、高さの低い高台が貼り付けられるものである。94～98までは、わずかに高い高台が貼り付けられる。99～102・106・107は比較的しっかりした高台が貼り付けられるものである。103は細く長い高台が貼り付けられる。104は内外面にヘラミガキが施される。108・109は須恵器の蓋のツマミである。103は扁平で、109は宝珠形をしている。110は、須恵器の高杯の脚部である。短脚で、方形の透かしが施される。111～114はミニチュア土器である。いずれも指オサエ、指ナデが見られる。115～118は、緑釉陶器である。118は皿で濃緑色を呈している。外底部に糸切りが見られ釉薬は施されていない。高台には段がみられる。（井上）

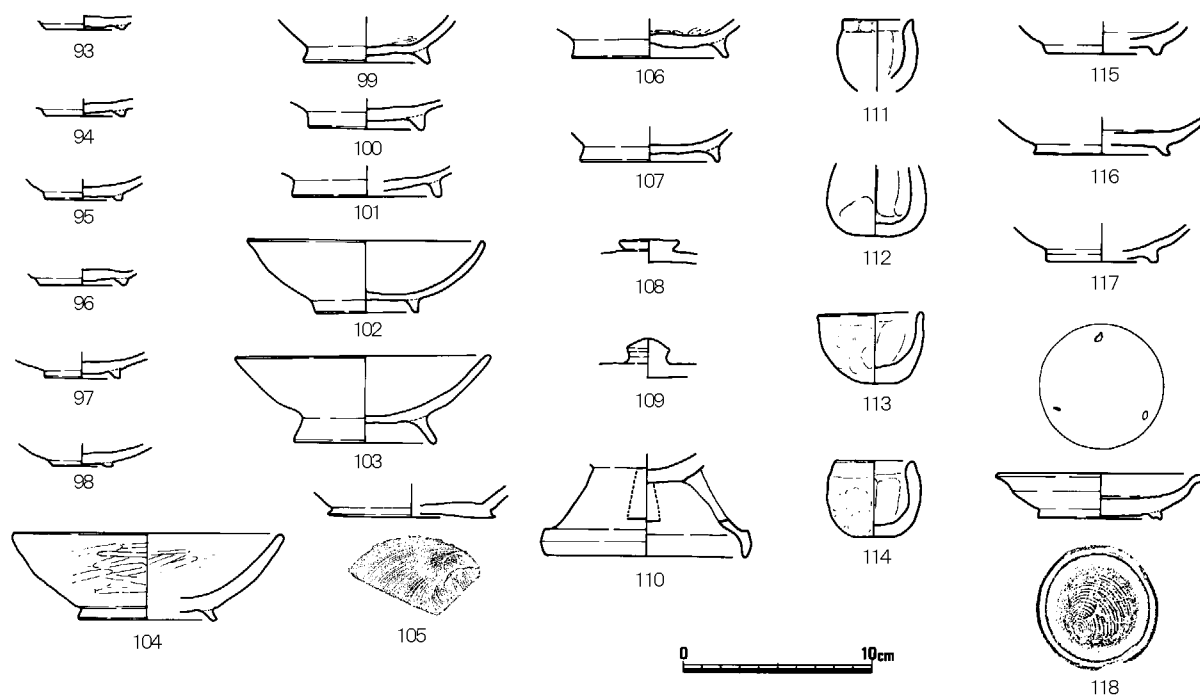
第6節 小結

仏生田遺跡は、南北に長い調査区となった。全長は約500mを測る。そのことも影響してか、遺跡の内容は北と南では異なるものがみられる。北の調査区である1区では、弥生時代、古墳時代、古代、中世と遺構の濃淡はあるが各時代の遺構がみられる。1区の北半に集中するが、北東から南西方向を向く溝が集中している。7条の溝が平行するように検出された。時期は弥生時代中期から後期にかけての遺構である。南半では1条の溝を検出したものである。古墳時代の遺構は、竪穴遺構、溝などである。密度的には散漫である。溝は、弥生時代の溝と流れの方向を同じくする溝が2条検出されている。位置的にもそれらと重なるものである。古代、中世の遺構は、井戸・溝・土壇などがみられる。遺物としては、軒丸瓦・須恵器・土師器・土鈴・硯などが出土している。

2区は、古墳時代の土壇、溝などがみられる。遺構を検出したのは、南端の調査区からである。他の調査区においては、溝1条を検出したのみである。しかし、調査区の土層断面を観察すると、水平堆積であり水田耕作の痕跡を示す状況もみられた。南端の調査区においては、朝鮮半島の影響を受けたと考えられる須恵器の高杯片が出土している。

3区は、確認調査においても現在の耕作土直下から砂層を検出していた。今回の調査においてもその砂層は3区のほぼ全域を覆うものであることが判明した。砂層下の状況を探るべく努力をしたが、湧水により壁が崩落する危険が生じたため深掘りはできなかった。

5区は、古墳時代の溝、古代の水田、中世の微高地と土壇、水田を検出した。溝は、古墳時代と推定されるものである。古代の水田は、3層検出した。その最下層の水田層から須恵器の短脚高杯片が出土しており、その時期より新しいものとする事ができる。また、最上層の水田の上面から、10世紀後半の緑釉陶器が出土しており、終末をその時期と推測している。(井上)



第63図 5区出土遺物(1/4)

仏生田遺跡土器観察表

掲載 番号	実測 番号	出土地区	遺構・土層名	山出地区名	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	形態・手法の特徴など
1	F46	1区	溝2	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	高杯	10YR7/2にぶい黄褐色	長石・石英ほか	磨滅
2	F26	1区	溝2	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	高杯	5YR6/6明赤褐色	長石・石英ほか	内外面にヘラミガキ
3	F65	1区	溝2	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	壺	7.5YR7/3にぶい橙色	長石・石英ほか	頸部に平行沈線文、体部上位に刺突文
4	F28	1区	溝2	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	壺	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	頸部に沈線7条残る
5	F73	1区	溝2	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	壺	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	体部内面ナデ
6	F32	1区	溝2	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	鉢	10YR7/2にぶい黄褐色	長石・石英ほか	体部外面上位に凹線4条が巡る
7	F74	1区	溝4	藤ノ木1区	N26壁	弥生土器	甕	7.5YR7/Aにぶい橙色	石英多	山陰系、口縁部に平行沈線
8	F20	1区	溝4	藤ノ木1区	N26溝	土師器	壺	7.5YR7/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	口縁部に、2個単位の円形浮文
9	F21	1区	溝4	藤ノ木1区	N26溝	土師器	鉢	5YR7/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	備後地方からの搬入か
10	F52	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	壺	2.5YR6/6明赤褐色	長石・石英ほか	閃緑岩多く含む、外面赤色顔料塗布
11	F69	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	台付壺	10YR7/2橙色	長石・石英ほか	精製土器
12	F49	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	壺	10YR6/3にぶい黄褐色	石英・角閃石	内外面に赤色顔料塗布
13	F67	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	壺	2.5Y8/2灰白色	長石・石英ほか	頸部に浅い平行沈線文が巡る
14	F56	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	土師器	甕	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	外面煤付着
15	F55	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	土師器	甕	10YR6/3にぶい黄褐色	長石・石英ほか	
16	F47	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	7.5YR7/Aにぶい橙色	石英多	山陰系
17	F45	1区	溝5	藤ノ木1区	N25溝	弥生土器	甕	2.5Y8/2灰白色	石英多	山陰系、口縁部外面は波状文が巡る
18	F44	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	10YR6/3浅黄褐色	石英多	山陰系、口縁部外面は平行沈線
19	F48	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	7.5YR7/6橙色	長石・石英ほか	山陰系?
20	F59	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕?	7.5YR7/3にぶい橙色	長石・石英ほか	内面に煤付着
21	F60	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	10YR6/3にぶい黄褐色	長石・石英ほか	
22	F57	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	2.5YR6/6明赤褐色	長石・石英ほか	外面煤付着
23	F51	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	7.5YR6/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	
24	F53	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	10YR6/3にぶい黄褐色	長石・石英ほか	外面に赤色顔料塗布
25	F61	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	7.5YR6/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	外面煤付着
26	F58	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	2.5YR6/6橙色	長石・石英ほか	赤色顔料塗布
27	F62	1区	溝5	藤ノ木	N27溝	弥生土器	鉢	2.5Y6/6にぶい黄色	長石・石英ほか	煤付着、胎土中に金雲母多含
28	F50	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	高杯	5YR7/6橙色	石英・雲母多	精製土器
29	F68	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	高杯	7.5YR6/Aにぶい橙色	石英・長石多	精製土器
30	F27	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	鉢	7.5YR6/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	口縁部上位に擬凹線が巡る
31	F54	1区	溝5	藤ノ木1区	N27溝	弥生土器	甕	7.5YR7/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	赤褐色の顔料塗布?
32	F1	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	壺	2.5YR6/6橙色	長石・石英ほか	体部外面・頸部内面上位に赤色顔料塗布
33	F42	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	器台	10YR6/2灰黄褐色	長石	赤色酸化粒目立つ
34	F18	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	甕	5YR7/6橙色	長石・石英ほか	加熱痕跡あり
35	F41	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	壺	5YR6/6明赤褐色	長石・石英ほか	
36	F17	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	壺	10YR7/2にぶい黄褐色	長石・石英ほか	
37	F40	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	甕	7.5YR7/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	
38	F71	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	甕	2.5YR6/6橙色	長石・石英ほか	
39	F36	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	壺	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	
40	F39	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	甕	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	
41	F15	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	10YR7/3にぶい黄褐色	長石・石英ほか	ミニチュア土器、磨滅目立つ
42	F37	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	甕	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	
43	F16	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	高杯	10YR7/2灰白色	長石・石英ほか	白っぽく、丁寧な作り
44	F35	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	高杯	10YR6/3浅黄褐色	精良	赤色酸化粒が多く含む精製土器
45	F43	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	高杯	2.5YR6/2灰白色	長石多	
46	F13	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	高杯	5YR7/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	径約3cmの円盤五填痕跡
47	F9	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	器壁剥落目立つ
48	F12	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	7.5YR6/6橙色	長石・石英ほか	搬入土器か
49	F14	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	10YR7/2にぶい黄褐色	長石・石英ほか	加熱による煤付着
50	F19	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	高杯	5YR7/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	搬入土器か
51	F10	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	口縁部内面上位に沈線2条、器表剥落
52	F34	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	7.5YR7/2明褐色	長石・石英ほか	備後地方からの搬入土器か
53	F70	1区	溝6	藤ノ木1区	Na0溝	弥生土器	鉢	2.5YR6/6橙色	雲母・角閃石	赤色顔料塗布、内面上位は塗布後ケズリ
54	F11	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	5YR6/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	備後地方からの搬入土器か
55	F38	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	5YR6/6明赤褐色	長石・石英ほか	備後地方からの搬入土器か
56	F33	1区	溝6	藤ノ木2区	Na0溝	弥生土器	鉢	10YR7/3にぶい黄褐色	長石・石英ほか	器表磨滅
57	F29	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	弥生土器	甕	7.5YR6/Aにぶい橙色	長石・石英ほか	山陰系か、外面に煤付着
58	E23	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	弥生土器	長頸壺	5YR6/6橙色	長石・石英ほか	頸部に沈線が巡る
59	F6	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	蓋	5Y8/A灰白色	長石・石英ほか	高杯の蓋、天井中央に扁平なツマミ
60	F7	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯蓋	少し青緑がかった灰色	長石・石英ほか	
61	F8	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯蓋	N6/灰色	長石・石英ほか	
62	F25	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯蓋	N6/灰色	長石・石英ほか	天井部ヘラケズリ
63	F5	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯	2.5Y7/3浅黄色	長石・石英ほか	
64	F2	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯身	N6/灰色	長石・石英ほか	底部欠損
65	F63	1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯	5Y6/A灰色	長石・石英ほか	
66		1区	遺構に伴わない	藤ノ木1区	Na9落ち込み	瓦	軒丸瓦	NH0/灰色	長石・石英ほか	中房は1+8の珠文を記す凸面は縄目、凹面布目
67	F78	1区	溝4	藤ノ木1区	Na9落ち込み	瓦	平瓦	5Y7/A灰白色	長石・石英ほか	
68	F24	1区	溝4	藤ノ木1区	Na9落ち込み	須恵器	杯	N6/灰色	長石・石英ほか	貼付高台

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	形態・手法の特徴など
69	F60	1区	溝4	藤ノ木1区	No.9 落ち込み	土師器	皿	25YR6 橙色	長石・石英ほか	外底部を除く全面に赤色顔料塗布
70	F66	1区	溝4	藤ノ木1区	No.9 落ち込み	土師器	杯	7.5YR7Aにぶい橙色	長石・石英ほか	体部外面に赤色顔料
71	F22	1区	溝4	藤ノ木1区	No.9 落ち込み	土師器	椀	5YR7Aにぶい橙色	長石・石英ほか	器表磨減
72	F81	1区	溝4	藤ノ木1区	No.9 落ち込み	土師器	皿	10YR7Aにぶい黄橙色	長石・石英ほか	ヘラキリ
73	F77	1区	水田層	藤ノ木3区	中世水田層	青磁	碗	7.5GY6A 緑灰色	精良	見込みに型押し文
74	F75	1区	水田層	藤ノ木3区	中世水田層	瓦	平瓦	5Y8A 灰白色	長石・石英ほか	凸面は格子目タタキ
75	F64	1区	遺構に伴わない	藤ノ木2区	北西さがり	土師器	皿	2.5YR8 灰白色	石英・雲母多	低い高台が付く
76	F3	1区	遺構に伴わない	藤ノ木2区	包含層	土師器	椀	2.5Y7 2 灰黄色	長石・石英ほか	早島式椀
77	B1-2	2-E区	溝20?	仏生田1-E区	トレンチ	須恵器	高杯	暗青灰色	長石少量	断面は赤紫色
78	B C 7	1-C区	溝1	仏生田1-C区	溝1	備前焼	挿鉢	5YR7Aにぶい橙色	長石・石英ほか	使用による磨減あり
79	B 1-4	2-E区	土壇3	仏生田1-E区	Pit 2	土師器	鉢	2.5Y7 2 灰黄色	微砂	外面はミガキ痕跡、煤付着
80	B E 6	1-E西区	包含層	仏生田1-E区	包含層	白磁	碗	5Y8A 灰白色	精良	釉は透明でガラス質
81	B C 6	1-B区	包含層	仏生田1-B区	包含層	備前焼	挿鉢	5Y8A オリーブ黒色	長石・石英ほか	器表磨減
82	B C 6	1-C区	包含層	仏生田1-C区	包含層	青磁	皿	2.5GY7A 明オリーブ灰色	精良	外底部は露胎
83	B B 4	1-B区	包含層	仏生田1-B区	包含層	陶器	碗	5Y7A 灰白～5Y6 2 オリーブ色	精良	唐津、見込みに砂目積み
84	B E 6	2区	包含層	仏生田2区	中世包含層	磁器	合子	淡青灰色	精良	押型による蓮弁風の裝飾
85	B 2-2	2区	包含層	仏生田2区	トレンチ8	弥生土器	壺	5YR7 6 橙色	石英・長石・雲母・角閃石	
86	B 1-4	2区	包含層	仏生田2区	トレンチ8	須恵器	壺	N7 0 灰白色	石英・長石・雲母	
87	B 4-2	2区	包含層	仏生田2区	T 6 砂層	陶器	鉢	10YR8 2 灰黄褐色	石英・長石・雲母	唐津
88	B 5-2	2区	包含層	仏生田2区	南北トレンチ	備前焼	挿鉢	にぶい赤褐色	石英・長石・雲母・角閃石	卸し目は細く、全面に放射状に施される
89	B 3-2	2区	包含層	仏生田2区	T 6 砂層	白磁	合子	10GY6A 緑灰色		内底部染め付けによる圏線
90	B 5-15	5区	土壇5	仏生田5区	土壇3	土師器	小皿	10YR7 6 にぶい橙色	雲母	内外面ナデ
91	B 5-14	5区	土壇5	仏生田5区	土壇3	土師器	椀	10YR7Aにぶい橙色	石英・長石	内外面ナデ
92	B 5-16	5区	土壇5	仏生田5区	土壇3	土師器	椀	2.5Y7 6 浅黄色	石英・長石	内外面ナデ
93	B 5-9	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	10YR8 6 浅黄褐色	石英・長石ほか	貼り付け高台、早島
94	B 5-8	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	10YR7 6 にぶい黄褐色	長石	貼り付け高台、早島
95	B 5-7	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	2.5Y4 2 暗灰黄色	雲母・長石ほか	貼り付け高台、早島
96	B 5-6	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	10YR7Aにぶい黄褐色	石英・長石	貼り付け高台、早島
97	B 5-4	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	10YR7Aにぶい黄褐色	石英・長石	貼り付け高台、早島
98	B 5-5	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	10YR8 6 にぶい黄褐色	雲母・長石ほか	貼り付け高台、早島
99	B 5-11	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	7.5YR6 6 橙色	石英・長石	貼り付け高台、内面ミガキ
100	B 5-1	5区	包含層	仏生田5区	中世水田層	土師器	椀	10YR8 6 浅黄褐色	石英・長石	貼り付け高台、早島
101	B 5-22	5区	包含層	仏生田5区	中世水田層	土師器	椀	10YR7 2 にぶい黄褐色	長石・石英ほか	内面煤、貼り付け高台
102	B 5-10	5区	包含層	仏生田5区	Pit 2	土師器	椀	10YR7Aにぶい橙色	石英・長石	貼り付け高台、早島、見込みに重ね焼き痕
103	B 5-21	5区	包含層	仏生田5区	中世水田層	土師器	椀	10YR8 6 浅黄褐色	石英・長石	貼り付け高台
104	B 5-12	5区	包含層	仏生田5区	微高地包含層	土師器	椀	2.5YR6 6 橙色	雲母・石英	貼り付け高台、内面ミガキ
105	B 5-2	5区	包含層	仏生田5区	中世水田層	須恵器	椀	N6 0 灰色	長石	外底部糸切り
106	B 5-17	5区	包含層	仏生田5区	水田層	土師器	椀	7.5YR7 6 橙色	長石・石英	内面ミガキ、黒色土器
107	B 5-18	5区	包含層	仏生田5区	包含層	土師器	椀	5YR6 6 橙色	石英・長石	貼り付け高台、早島
108	B 5-19	5区	包含層	仏生田5区	包含層	須恵器	蓋	N7/0 灰白色	石英・長石	
109	B 5-20	5区	包含層	仏生田5区	包含層	須恵器	蓋	N7/0 灰白色	長石・石英	
110	B 5-29	5区	包含層	仏生田5区	古代水田層	須恵器	高杯	N7/0 灰白色	長石・石英	方形透かし
111	B 5-25	5区	包含層	仏生田5区	古代水田層	土師器	ミニチュア土器	10YR7/2にぶい黄褐色	石英・長石ほか	ユビオサエ、ユビナデ
112	B 5-27	5区	包含層	仏生田5区	古代水田層	土師器	ミニチュア土器	10YR7/4にぶい橙色	石英・長石ほか	ユビオサエ、ユビナデ
113	B 5-26	5区	包含層	仏生田5区	古代水田層	土師器	ミニチュア土器	7.5YR7/4にぶい橙色	石英・長石ほか	ユビオサエ、ユビナデ
114	B 5-24	5区	包含層	仏生田5区	古代水田層	土師器	ミニチュア土器	10YR6/3にぶい黄褐色	石英・長石	オサエ、ナデ、黒斑
115	B 5-GR4	5区	包含層	仏生田5区	包含層	緑釉陶器	椀	灰緑色	精良、硬質	素地・須恵質、輪高台、京都 備産、10世紀初～前半
116	B 5-GR2	5区	包含層	仏生田5区	中世水田下層	緑釉陶器	皿	濃灰緑色	精良、硬質	素地・須恵質、貼り付け高台、近江産、10世紀後半
117	B 5-GR3	5区	包含層	仏生田5区	中世水田下層	緑釉陶器	椀	淡灰緑色	精良、硬質	素地・須恵質、輪高台、京都 備産、10世紀初～前半
118	B 5-GR1	5区	包含層	仏生田5区	中世水田下層	緑釉陶器	皿	濃緑色	精良、硬質	素地・須恵質、貼り付け高台、近江産、10世紀後半

仏生田遺跡土製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚						
C1	C-17	1区	中世水田層	藤ノ木調査区3区	中世水田層	不明	2300	2100	2200	1500	25Y7.8浅黄色	長石・角閃石	良好	中世?	サイコロ形を示す磨減
C2	C-16	1区	中世水田層	藤ノ木調査区3区	中世水田層	円板	3200	3600	1000	1500	N7.0灰白色	長石	良好	中世	須恵器を利用
C3	C-14	1区	水田耕作土	藤ノ木調査区2区	水田耕作土	土錘	7120	3700	3800	11500	25Y6.2灰白色	長石・石英ほか	良好	中世?	やや大型の円筒形、黒斑
C4	C-15	1区	包含層	藤ノ木調査区2区	包含層	土鈴	5800	5000		6300	25Y7.8浅黄色	長石・雲母	良好	古代	ほぼ中央に割り貫き
C5	C-18	1区	黄灰色粘土	藤ノ木調査区4区	黄灰色粘土	円板	2200	3300	1100	1400	2YR6.4にぶい橙色	長石・赤色酸化粒	良好	中世	素材は備前焼
C6	2F176	1区	黄灰色土	藤ノ木調査区4区	黄灰色土	円板	5600	5900	1200	5000	N6/灰色	長石・石英	良好	中世	素材は須恵器
C7		1-E区	包含層	仏生田調査区1-E区	包含層	土錘	2800	2600	250	1800	10YR6.8にぶい黄褐色	長石・石英	土師質	中世	
C8		1-C区	包含層	仏生田調査区1-C区	包含層	土錘	2500	2900	270	1500	7.5YR6.4にぶい褐色	長石・赤色酸化粒	土師質	中世	
C9		1-C区	包含層	仏生田調査区1-C区	包含層	円板	2500	2500	1000	800	N8/灰白色	長石・石英	良好	中世	須恵器を利用

仏生田遺跡石器・石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
S1	F2-S1	1区	溝6	藤ノ木2区	Na10溝 中層	石鏃	152	153	3	059	サヌカイト	弥生	無茎平基
S2	F1-S1	1区	溝6	藤ノ木1区	Na10溝 中層	石鏃	258	166	32	13	サヌカイト	弥生	無茎凹基
S3	F1-S2	1区	包含層	藤ノ木1区	Na9 落ちこみ中層	石鏃	14	10	21	028	サヌカイト	弥生	無茎凹基
S4	F2-S2	1区	包含層	藤ノ木2区	Na1 水田耕作土	石鏃	222	182	32	088	サヌカイト	弥生	無茎凹基
S5	F2-S3	1区	包含層	藤ノ木2区	方形土壇	石鏃	24	115	3	127	サヌカイト	弥生	無茎平基
S6		1区	包含層	藤ノ木3区	包含層	硯	84	39	131	52	頁岩	中世	使用による磨減顕著
S7	B5-S1	5区	土壇5	仏生田5区	土壇5	砥石	925	475	495	237	流紋岩	中世	

仏生田金属製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
M1		1区	溝6 中層	藤ノ木調査区2区	Na10溝中層	鉄鏃	3800	1650	520	582	鉄	弥生後期	莖頭鏃、茎部欠損
M2		1区	溝4 上層	藤ノ木調査区1区	Na9 落ち込み上層	釘	20800	1300	1700	9908	鉄	古代?	下端欠損
M3		1区	水田層 (包含層)	藤ノ木調査区2区	水田層検出中	銃弾		1190	1200	700	鉛	中世	火縄銃の弾、発射弾か亀裂あり
M4		2区	包含層	仏生田調査区1区	側溝	銃弾		1300		1175	鉛	中世	火縄銃の弾

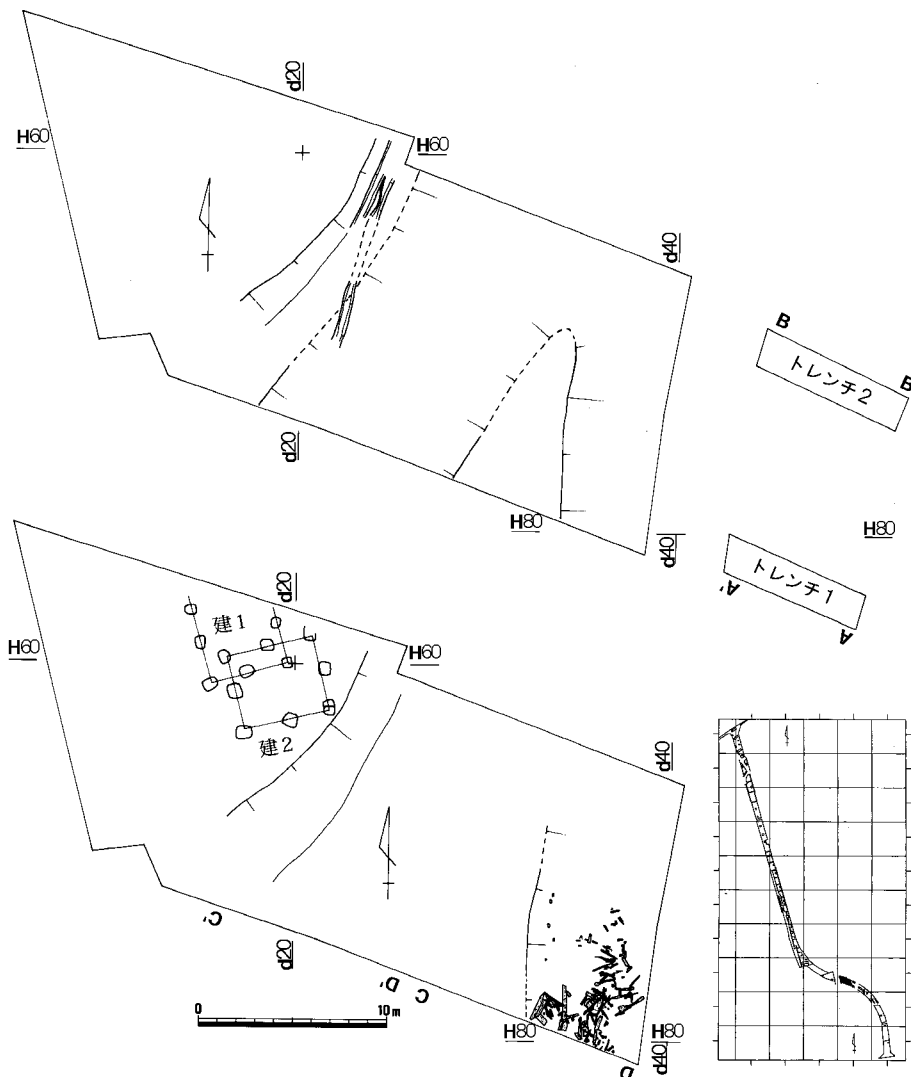
第6章 掛無堂遺跡

第1節 遺跡の概要

掛無堂遺跡は、仏生田遺跡に隣接して東側に存在する。仏生田遺跡の古代水田を調査中に、水田層下層の基盤層が東、および東北に向けて安定度が増すと同時に徐々に上昇する傾向がみられた。このことから、その方向に同時代の生活区としての微高地が広がると推測されていた。調査の結果は、調査区の西側には安定した微高地を検出した。調査区の東側は、地図や航空写真で見ると旧河道が読みとれる。実際の地形からも一段低く、その地形の中央に現在も用水路が存在している。そのような状況をふまえてトレンチを設定して調査した結果、近世以降に50~60cmの盛土をして現況の水田地形になった状況が窺える。近世の盛土の下層は、粘質の強い土が堆積しており、トレンチを設定した付近は湿地の状況を呈しており中世においては河道の中であった状況が窺える。トレンチからは、中世土

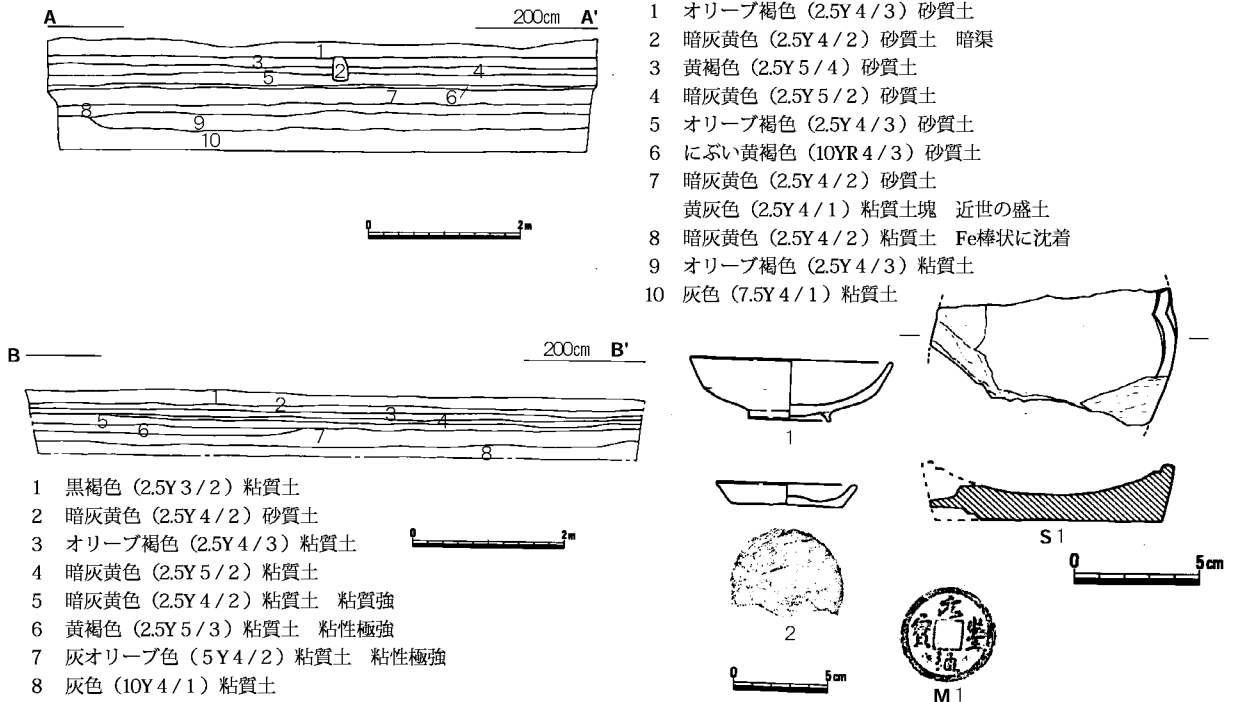
師器椀・銅銭・硯などが出土した。調査区南壁の土層断面を見ると、19層から29層までは中世の河道である。その河道も、西から東に向けて埋まってゆく状況が見られる。34層・46層は、古代の基盤となる層である。この層が、一つの微高地を形成し、北に向けては上面の標高が高くなることで古代の生活面を形成していた。今回調査した掘立柱建物や護岸遺構はその一部と考えられる。

(井上)

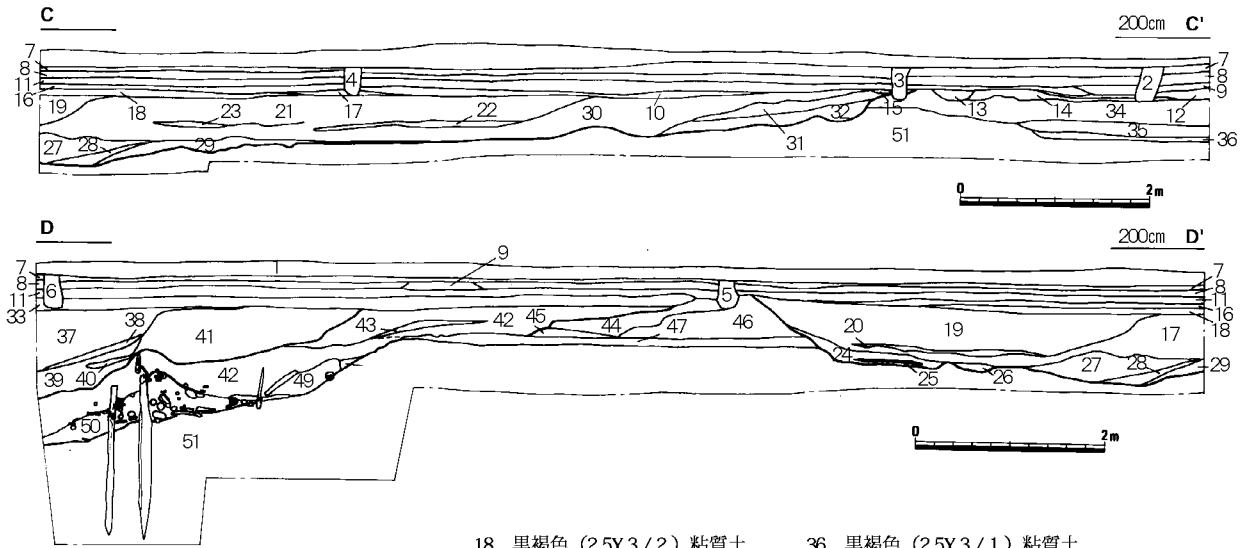


第1図 遺構全体図 (1/400)

第6章 掛無堂遺跡



第2図 トレンチ土層断面図・出土遺物 (1/100・1/4・1/3)



- | | | |
|----------------------------|------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 耕作土 | 18 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 36 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 2 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 暗渠 | 19 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 37 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 |
| 3 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 暗渠 | 20 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂質土 | 38 灰色 (5Y 4/1) 砂質土 |
| 4 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 暗渠 | 21 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 39 オリーブ黒色 (5Y 3/1) 砂質土 |
| 5 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 暗渠 | 22 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 40 灰色 (5Y 4/1) 砂 |
| 6 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 暗渠 | 23 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 41 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 粘性 微砂 |
| 7 にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土 | 24 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 42 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 細砂 |
| 8 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 | 25 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 43 褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土 |
| 9 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 | 26 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂質土 | 44 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 |
| 10 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 | 27 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 45 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 11 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 | 28 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 | 46 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土 |
| 12 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 | 29 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂質土 | 47 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 粘性強 |
| 13 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 | 30 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | 48 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 |
| 14 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 | 31 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 49 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土 粘性強 |
| 15 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 | 32 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 50 黒褐色 (2.5Y 3/1) 砂質土 |
| 16 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土 | 33 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 51 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土 |
| 17 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 | 34 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 | ~暗緑灰色 (10GY 4/1) 粘土 |
| | 35 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 | |

第3図 調査区土層断面図 (1/80)

第2節 調査の概要

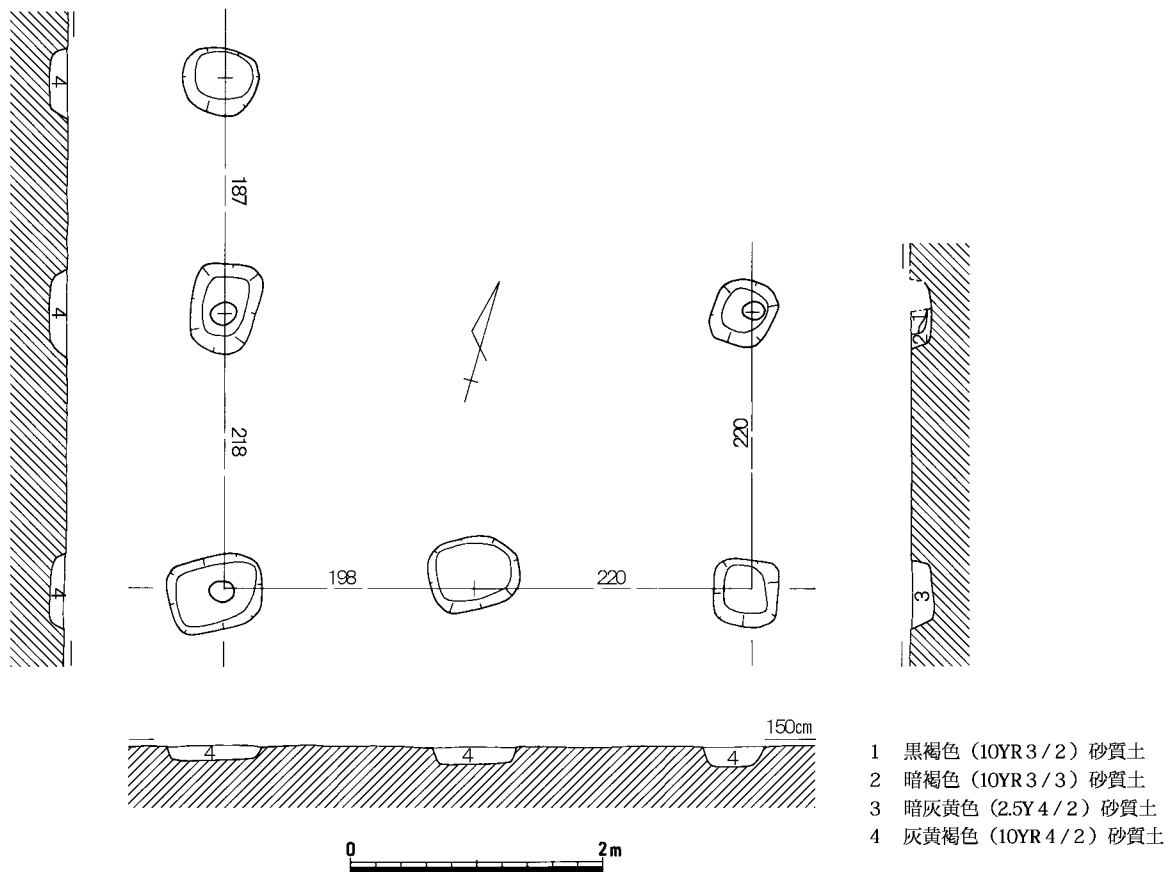
1 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第1・4図、図版32)

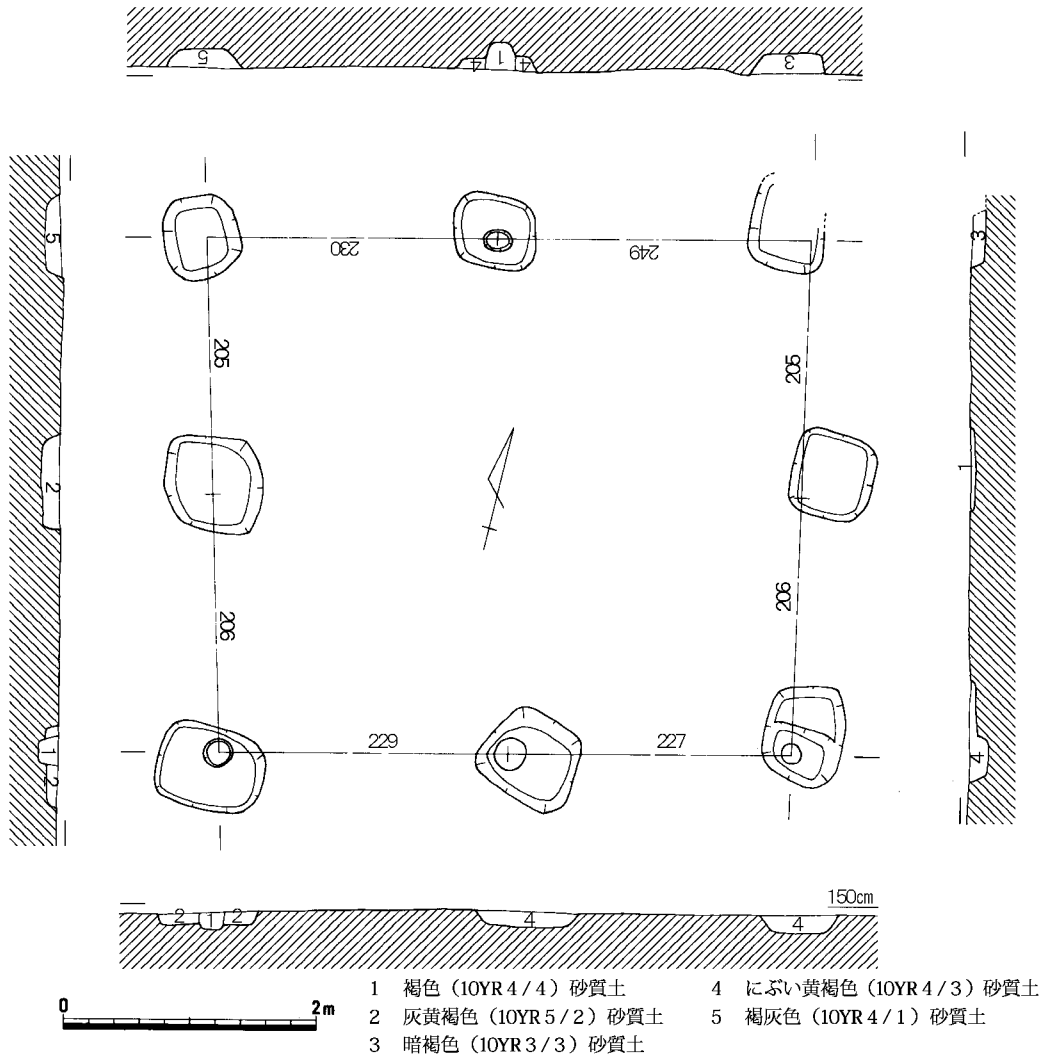
調査区の西側に検出した。一部調査区外に延びるため建物の全体は不明である。梁間2間、桁行き2間以上と考えられる掘立柱建物である。柱の掘り方は、方形もしくは長方形を呈するものである。掘り方の規模は、小さいもので50cm四方を測る。大きな柱穴では長辺75cm、短辺57cmを測る。一部の柱穴は、耕作土を除去した面で確認していた。しかし、柱穴を埋める土と、基盤となる微高地の土の色はほとんど見分けがつかなかった。ただ、柱穴を埋める土が幾分粘質を帯びる程度の差であり、十分な確信が持てなかつたので15~20cm掘り下げた面で改めて確認した。そのために確認できた柱穴の深さは13~18cmを測る。3個の柱穴の底面からは、直径約20cmで円形に窪むものを検出した。窪む深さは1~2cm程度を測り、柱根の位置を示すものと考えられる。柱間の距離は、1.87mから2.2mを測る。建物の長軸の方向は、ほぼ南北を向くもので、真北との角度差は、N-16°-Wを測る。(井上)

掘立柱建物2 (第1・5図、図版32)

掘立柱建物1と一部重複する状態で検出した。梁間2間、桁行2間の掘立柱建物である。この建物も、耕作土直下において一部の柱穴は検出していた。しかし、確信の持てない柱穴も存在したので、



第4図 掘立柱建物1 (1/60)



第5図 掘立柱建物2 (1/60)

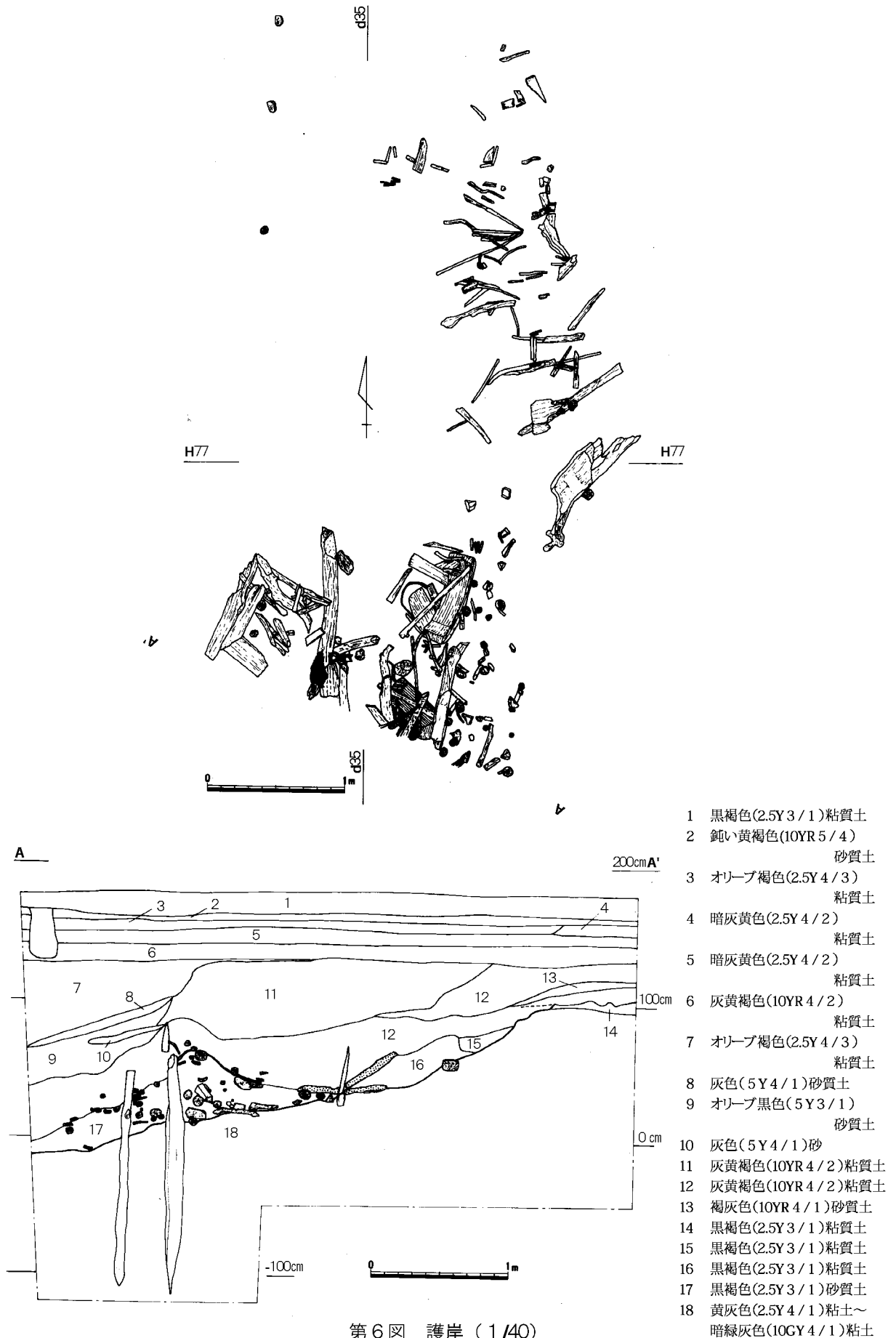
15cm~20cm掘り下げた面で全体を確認した。柱穴の平面形は、方形もしくは長方形を呈するものである。柱穴の規模は、大きいもので一辺80cm、小さいもので58cmを測る。検出した深さは10~15cmを測る。2個の柱穴には柱痕跡を検出した。断面観察から、直径20cm程度であり、使用された柱の大きさを示すものとしてすることができる。柱間の距離は、梁間で2.05m、2.06m、桁行きで2.27mから2.49mを測る。建物の長軸の方向は、ほぼ東西を向くもので、真北との角度差はN-103°30'-Wを測る。

掘立柱建物1・2共に出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、古代Ⅱ期の奈良時代に属するものと考えられる。 (井上)

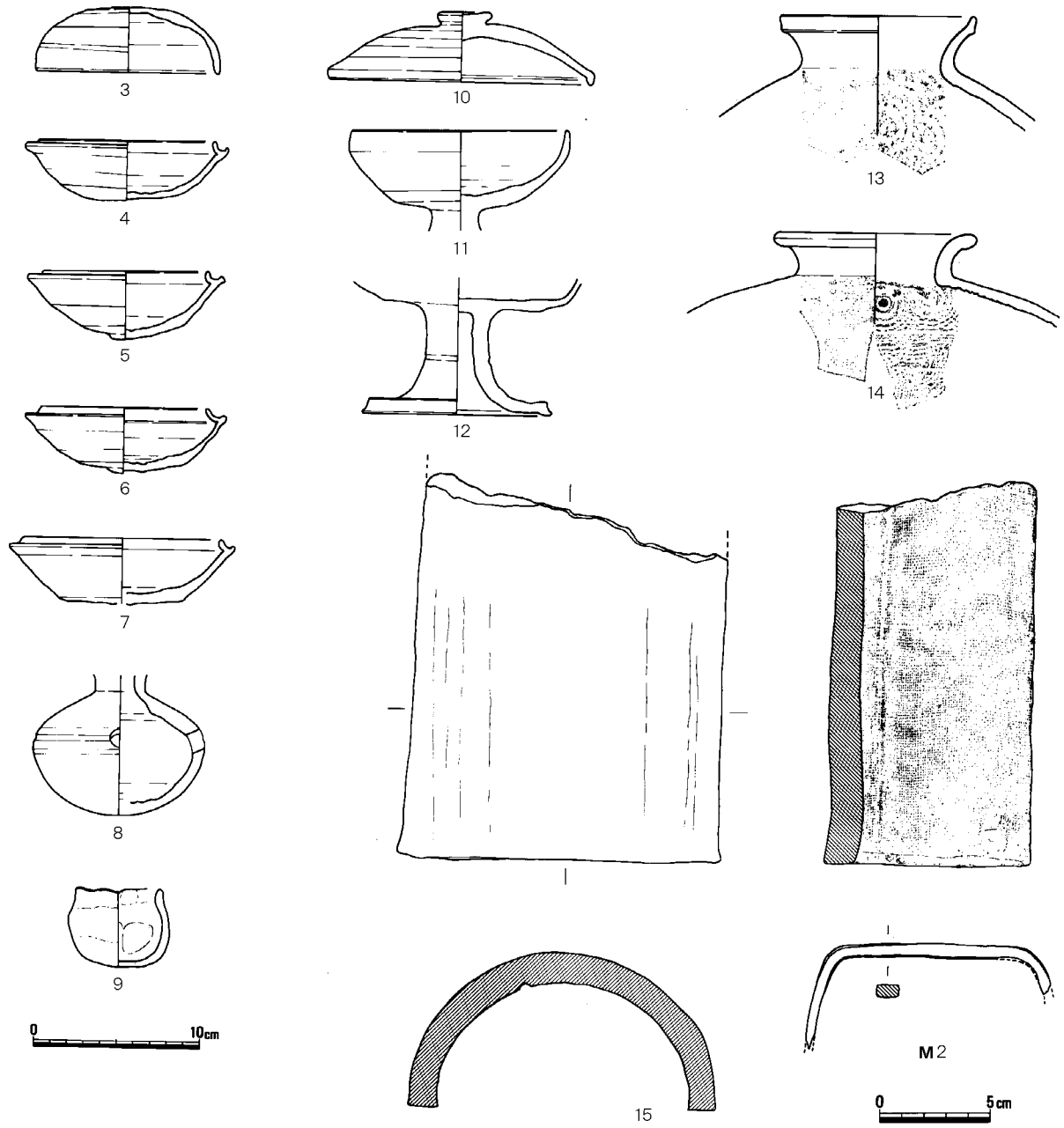
2 護岸遺構

護岸遺構 (第1・6~9図、図版33・34・36)

調査区の東端に検出した。調査区の南壁に沿ってトレンチを設定して掘り下げていたところ、東端に近い部分で一本の木と須恵器の杯を検出した。その部分から南には多くの木材が出土し始めた。それら木材は、直径が10~20cmの丸太が多く、他に木製品の壊れたものが混じっていた。護岸の平面図を見ると、H77ラインを境に北と南では木材の出土状態に違いがみられる。北側は密度が粗いことに加えてその方向が乱雑である。それに比べて、南側は、一つのまとまりと、木材の方向性に一定方向



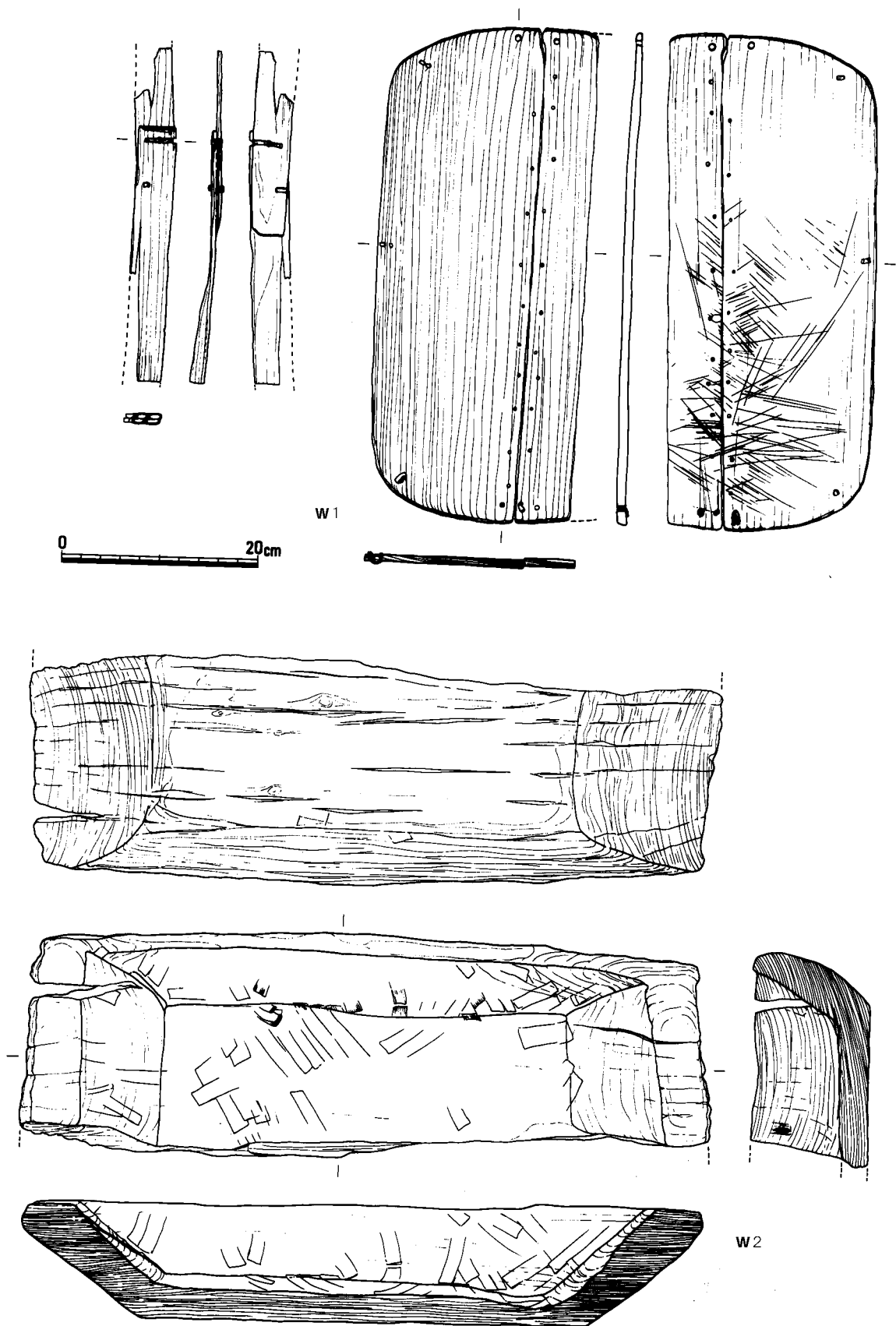
第6図 護岸 (1/40)



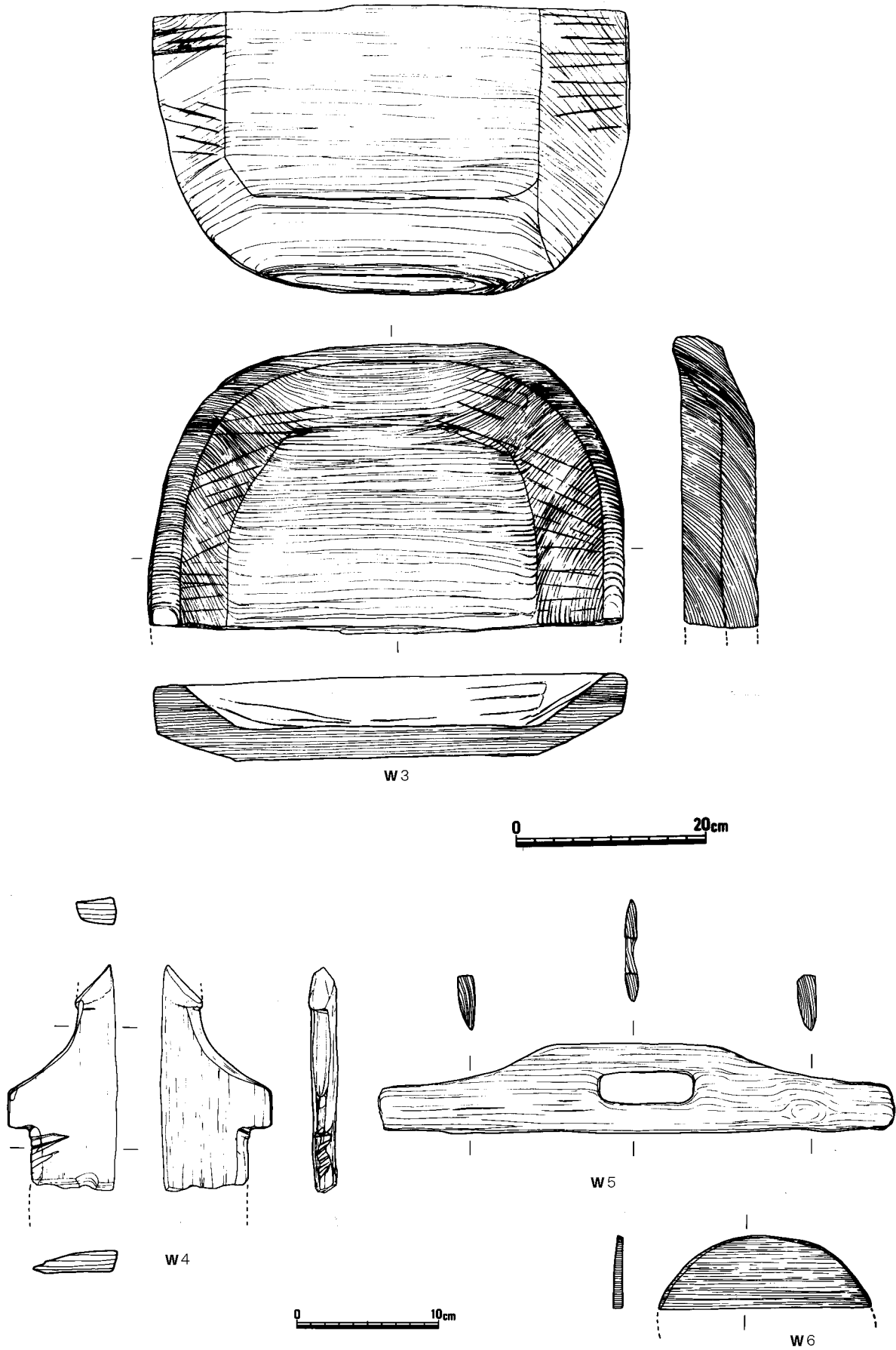
第7図 護岸出土遺物1 (1/4・1/3)

を向く傾向が見られ、丸太等の多くは南北方向を向くものが多い。また、丸太の東側に杭が打ち込まれている状況がみられた。それらの状況を考えると、護岸施設はH77ラインから南がそれに相当するもので、この部分より始まりさらに南に延びるものと考えられる。護岸の木材の間から、盤、槽、曲げ物などの木製品の壊れたものが出土した。断面図で説明すると、18層は微高地の基盤となる粘土層である。この基盤層の上面から木材が置かれている。特に16層の下面に置かれた木材の直上から3～5の須恵器が出土している。16層の下端には点々で示しているが植物遺体が層をなす状態が観察された。この状況は、盛土の途中に草の類を挟み込んだものと考えられ、15・16層は盛土の一部と考えられる。17層は、木材を特に多く検出した層である。この上面にも厚さは薄いが同じような状況が観察された。この3層については、護岸築造時の盛土と考えられる。

出土遺物を見ると、須恵器の蓋杯・杯身・高杯・壺などが出土している。3は蓋杯である。天井部



第8図 護岸出土遺物2 (1/6)



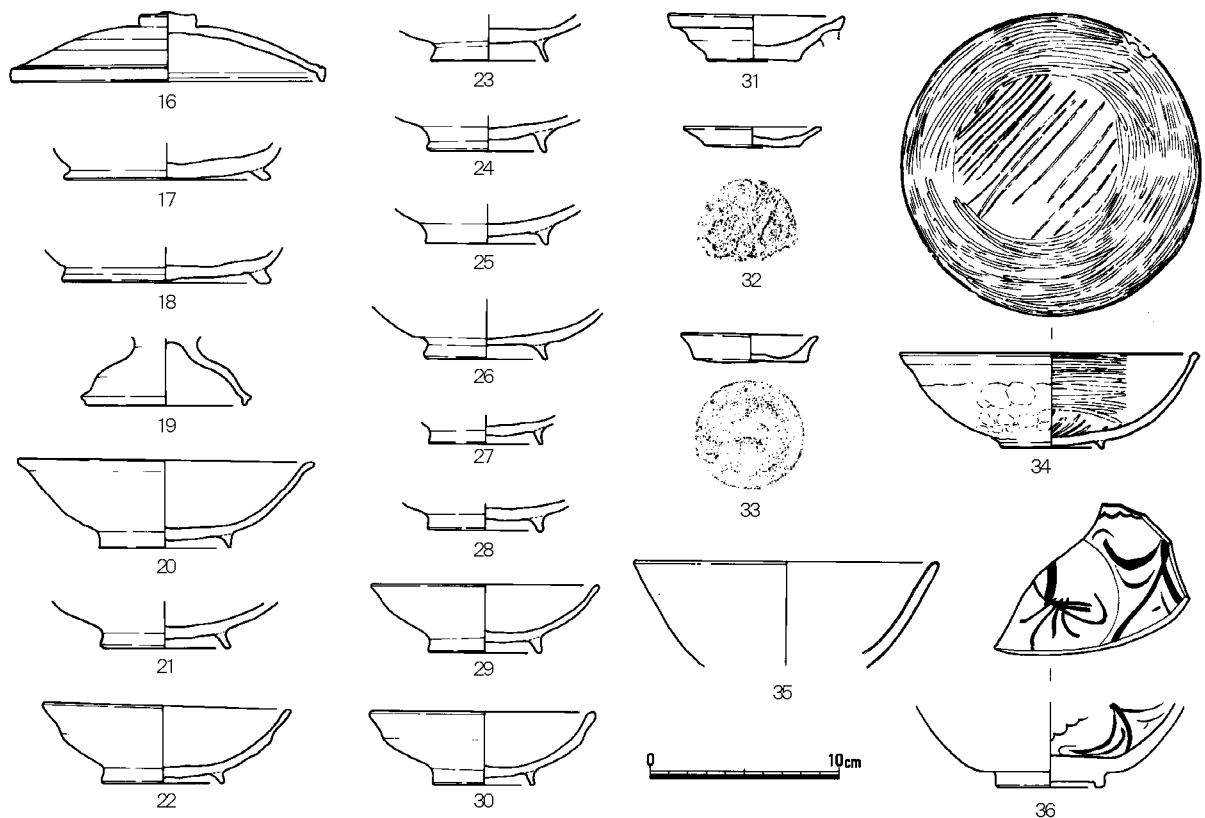
第9図 護岸出土遺物3 (1/6)

は丸く体部との境は明瞭ではない。4・5は杯身である。立ち上がり部は短く、受け部よりわずかに高い程度である。6・7も杯身である。4・5に比べて立ち上がり部がわずかに高い。8は甕である。球形に近い胴部に細い頸部が付く。10はつまみの付く蓋である。天井部は丸く器高も高い。11・12は高杯である。15は丸瓦である。外面は工具によるナデ、内面は全体に布目が見られる。M1は鉄製品である。完形品でないため用途は不明であるが、コの字状を呈している。

W1は曲げ物である。蓋になるのか身になるのかは不明であるが、出土したときには敷き板と側板とは近接していた。敷き板は、壊れた物を綴じて修理した痕跡がある。材質はヒノキである。W2は槽である。丸木を半裁し、内側を削り貫いたもので、わずかに工具の痕跡もみられる。外底部は平らであるが、側面は弧を描き、両端部は斜めに切り落とされている。材質はケヤキである。W3は盤である。円形もしくは長円形を呈するものである。一枚の板から削り貫かれており、その深さは約5cmを測る。W4は鋤の一部で、材質はカシである。W5は山形に整形した板の中央付近を方形に削り貫く物で、材質はコナラである。W6は曲げ物の敷き板と考えられ、材質はスギである。 (井上)

3 出土遺物の概要

図の表題に包含層出土遺物としているが、基本的には中世の河道からの出土になるものである。16は、須恵器の蓋である。天井部はやや高く緩やかな弧を描く。端部は垂直に折れ曲がる。17・18は、杯の底部である。外反する高台が貼り付けられている。19は高杯の脚部である。23・24は土師器の杯である。細く長い高台を貼り付けている。20～22、25～30は、中世の土師器碗である。20は口径15.7cm、器高4.8cmを測るものである。高台は貼り付けられている。22は、口径約13cmを測り、口縁部は斜



第10図 包含層出土遺物 (1/4)

め上方に引き上げられ、端部は丸く収められている。29・30は、口径約12cmを測るものである。高台はいずれも貼り付けられている。31は、3本の脚が付く小さな盤である。三か所にその痕跡がみられる。皿の外底部はヘラオコシの跡が見られる。32・33は小皿である。33の外底部にはヘラオコシの痕跡が明瞭にみられる。34は、瓦器碗である。内面はヘラミガキが入念になされている。35・36は、青磁碗である。35は無紋であるが、36には内面に櫛描き花文が施される。(井上)

第3節 小結

掛無堂遺跡で検出した遺構は、掘立柱建物2棟、護岸遺構、中世河道である。掘立柱建物は、伴出する遺物がないために明確な時期については不明であるが、柱穴の形状、大きさなどからおおむね奈良時代に属するものと推測している。2棟の建物は一部重なり合うために同時に存在したことはあり得ず、新旧の差はあるものの、その前後関係については不明である。しかし、建物の方向性については非常に近いものがあり、ほぼ同一の方向を向いている。建物の柱穴を検出したのは、一部ではあるが耕作土を除去した面からである。その面からの柱穴の深さは、約30cmであり、本来の深さからすれば浅い。そのことからすると、この建物が存在した時期には、生活面はさらに高く、後世の削平が大きいことを窺わせる。

護岸遺構であるが、検出したのはごく一部と推測される。検出した位置からさらに南に延びるものと推測している。この付近の地形を、地図や航空写真から観察すると、北東方向からの河道の痕跡をみることができる。その河道が、護岸を検出した部分から数10m南において屈曲してその流れを東に変えている状況を読みとることができる。その河道と古代の微高地の関係は、この掛無堂遺跡においてはよく一致する。つまり、河道が曲がることによる水流の微高地に対する攻撃面がこの付近から始まることが推測される。そのことに対する防御としての護岸が今回調査した一部に相当すると考えられる。護岸の築造された時期であるが、護岸を調査中に検出した遺物の内、3～5は、本文中にも書いたが護岸の盛土の中からの出土であり、よくその時期を示しているものと考えられる。7世紀前半の遺物とすることができその時期に築造が始まったものと推測される。その後、奈良時代までは維持されており、掘立柱建物が存在する頃にも機能していたものと考えられる。

掘立柱建物と護岸遺構との間に埋没した河道をみることができる。第3図での19層から32層がそれに相当する。調査区の北東端部付近から微高地を浸食するものである。微高地を浸食し押し流した時期であるが、第11図の16～19は護岸が機能していて時期であり除外できる。次に古いのが23・24であり、11世紀頃の遺物と考えられる。最も多いのは中世土師器である。20～22、25～30の遺物である。12世紀から13世紀頃を示す遺物である。このことから、古ければ11世紀頃、新しくても12世紀にはこの河道は存在していたものと推測される。その後、河道はその幅を次第に狭め、14世紀頃には完全に埋没していたと考えられる。その後、14世紀後半、もしくは15世紀前半には安定した微高地が完成したものと推測される。第3図7、8層には、水田耕作の痕跡が観察され、中世末もしくは近世初頭には水田として機能していた。(井上)

掛無堂遺跡土器観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
1	K2-2	掛無堂2区	トレンチ1	土師器	椀	灰白色	75 YR 2	石英・長石・雲母	貼り付け高台、早島
2	K2-1	掛無堂2区	トレンチ1	土師器	小皿	灰白色	10 YR 2	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	ヘラキリ板目痕跡
3	K1-31	掛無堂1区	河道青灰色粘質土	須恵器	蓋	灰白色	N 0	長石・角閃石	頂部ヘラケズリ、体部ヨコナデ、ナデ
4	K1-32	掛無堂1区	河道青灰色粘質土	須恵器	杯	灰白色	N 0	長石・石英	ヨコナデ、ヘラケズリ
5	K1-33	掛無堂1区	河道青灰色粘質土	須恵器	杯	灰色	N 0	石英・雲母・角閃石	ヨコナデ、ヘラケズリ
6	K1-27	掛無堂1区	古代河道 杭の間	須恵器	杯	灰色	N 6 5 0	長石・雲母・石英	外面ヘラケズリ、ヨコナデ、内面ヨコナデ
7	K1-12	掛無堂1区	護岸	須恵器	杯	褐灰色	10 YR 4	長石	外底部ヘラオコシ、
8	K1-38	掛無堂1区	護岸	須恵器	甃	灰色	N 0	石英・長石・角閃石	ナデ、ヨコナデ、胴部に穿孔
9	K1-22	掛無堂1区	河道	土師器	ミニチュア	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・雲母・赤色酸化粒	外底部黒斑
10	K1-30	掛無堂1区	護岸	須恵器	蓋	灰色	N 0	石英・長石	ヘラケズリ、ヨコナデ、内面に墨痕
11	K1-37	掛無堂1区	河道青灰色粘質土	須恵器	高杯	灰白色	N 0 6 0	石英・長石・雲母・赤色酸化粒	ナデ、ヨコナデ、ヘラケズリ
12	K1-26	掛無堂1区	護岸	須恵器	高杯	暗灰色	N 0	石英・雲母・長石	外面ヨコナデ、脚柱部内面シボリ後ナデ
13	K1-23	掛無堂1区	護岸	須恵器	横瓶	黄灰色	2.5 Y 6 1	長石・雲母	タタキ、カキメ
14	K1-24	掛無堂1区	護岸	須恵器	横瓶	黄灰色	2.5 Y 6 1	長石・石英	タタキ、カキメ
15	K1-39	掛無堂1区	河道青灰色粘質土	瓦	丸瓦	黄灰色	2.5 Y 6 1	石英・長石・雲母・角閃石	凸面ナデ、凹面布目、端面は、鋭利な刃物で切り離す
16	K1-29	掛無堂1区	包含層 L=βm)	須恵器	蓋	灰色	N 0	石英・長石・角閃石	ヘラケズリ、ヨコナデ
17	K1-14	掛無堂1区	包含層	須恵器	杯	灰色	N 0	長石・石英	外底部ヘラオコシ、
18	K1-13	掛無堂1区	中世河道	須恵器	杯	オリ一ブ黒色	5 Y 3 1	石英	胎土は瓦質、7 C後半
19	K1-20	掛無堂1区	中世包含層	須恵器	高杯	灰色	N 0	長石・雲母	ヨコナデ
20	K1-5	掛無堂1区	包含層	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 3	石英・長石・雲母	貼り付け高台、早島
21	K1-7	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	灰白色	2.5 Y 8 2	石英・長石・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
22	K1-2	掛無堂1区	中世包含層	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・長石	貼り付け高台、早島、内底部重ね焼き痕
23	K1-49	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 2	石英・長石・雲母・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
24	K1-34	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・長石・雲母	貼り付け高台、ナデ
25	K1-45	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	灰黄色	2.5 Y 7 2	長石・石英・雲母	貼り付け高台、早島
26	K1-17	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 2	石英・長石	貼り付け高台、早島
27	K1-9	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 3	石英・長石・雲母	貼り付け高台、早島
28	K1-36	掛無堂1区	中世河道	土師器	椀	灰白色	2.5 Y 8 2	石英・長石・赤色酸化粒・雲母	貼り付け高台、ナデ
29	K1-1	掛無堂1区	中世包含層	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英	貼り付け高台、早島
30	K1-3	掛無堂1区	中世包含層	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・雲母・長石	貼り付け高台、早島、煤付着
31	K1-4	掛無堂1区	中世河道	土師器	脚付盤	灰白色	10 YR 2	石英・雲母	脚の痕跡3か所
32	K1-18	掛無堂1区	中世河道	土師器	小皿	浅黄橙色	7.5 YR 4	石英・長石・赤色酸化粒	ナデ、ヨコナデ
33	K1-16	掛無堂1区	包含層	土師器	小皿	にぶい黄橙色	10 YR 3	石英・雲母・赤色酸化粒	ヘラキリ、ヨコナデ
34	K1-28	掛無堂1区	中世水田	瓦器	椀	暗灰色	N 0	石英・雲母・赤色酸化粒	外面ニビオサエ、内面暗文
35	K1-21	掛無堂1区	中世包含層	磁器	碗	灰オリ一ブ色	7.5 Y 6 2	精良	青磁碗
36	K1-25	掛無堂1区	中世河道	磁器	碗	オリ一ブ灰色	10 Y 6 2	精良	内面カキメによる文様

掛無堂遺跡石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	備考
						最大長	最大幅	最大厚				
S 1	K2-S1	掛無堂遺跡2区	トレンチ1	トレンチ1	硯	9.7	5.4	2.2	90	頁岩	中世	使用により 陸部磨滅してくぼむ

掛無堂遺跡金属製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
M1		掛無堂	トレンチ	掛無堂2区		銅銭		25.00			銅	初鑄1078年	北宋 元豊通寶

掛無堂木器観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			樹種	木取り	時期	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
W1	K1-W4	掛無堂1区	護岸遺構	曲物	50.4	21.5	9	ヒノキ	柱目	古代	曲物の蓋、天板と側板
W2	K1-W5	掛無堂1区	護岸遺構	槽	70.4	229	65	ケヤキ	板目	古代	割り 抜きの容器、内面に工具の痕跡
W3	K1-W6	掛無堂1区	護岸遺構	盤	497	303	62	モミ属	板目	古代	割り 抜きの容器、円形に近い形状を呈する
W4	K1-W3	掛無堂1区	護岸遺構	鋤	157.5	76	19	カン属	柱目	古代	先端に鉄製の刃を装着する
W5	K1-W2	掛無堂1区	護岸遺構		365	63	14	コナラ属	柱目	古代	
W6	K1-W1	掛無堂1区	護岸遺構	蓋	150	51	6.5	スギ	柱目	古代	曲物の底板

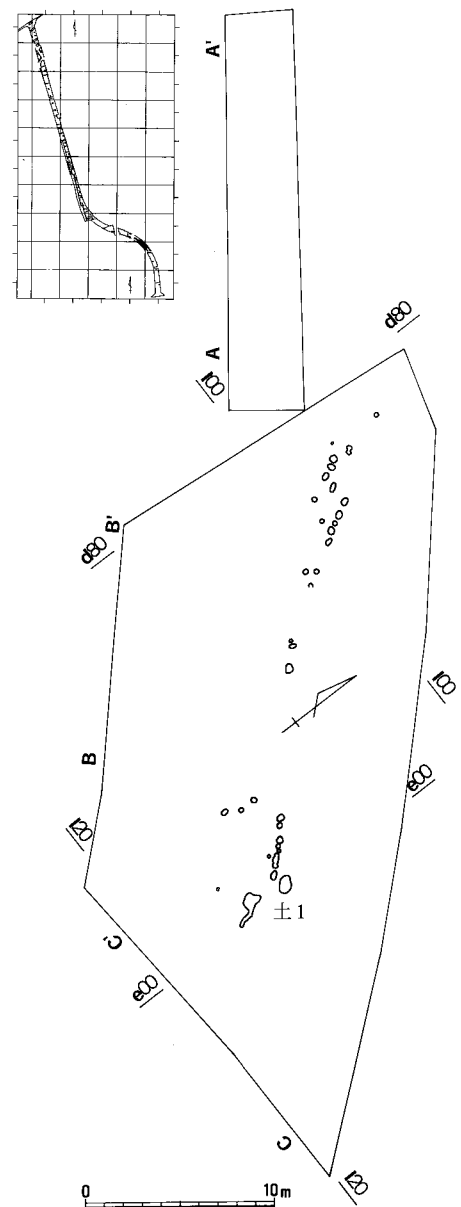
第7章 川入遺跡

第1節 遺跡の概要

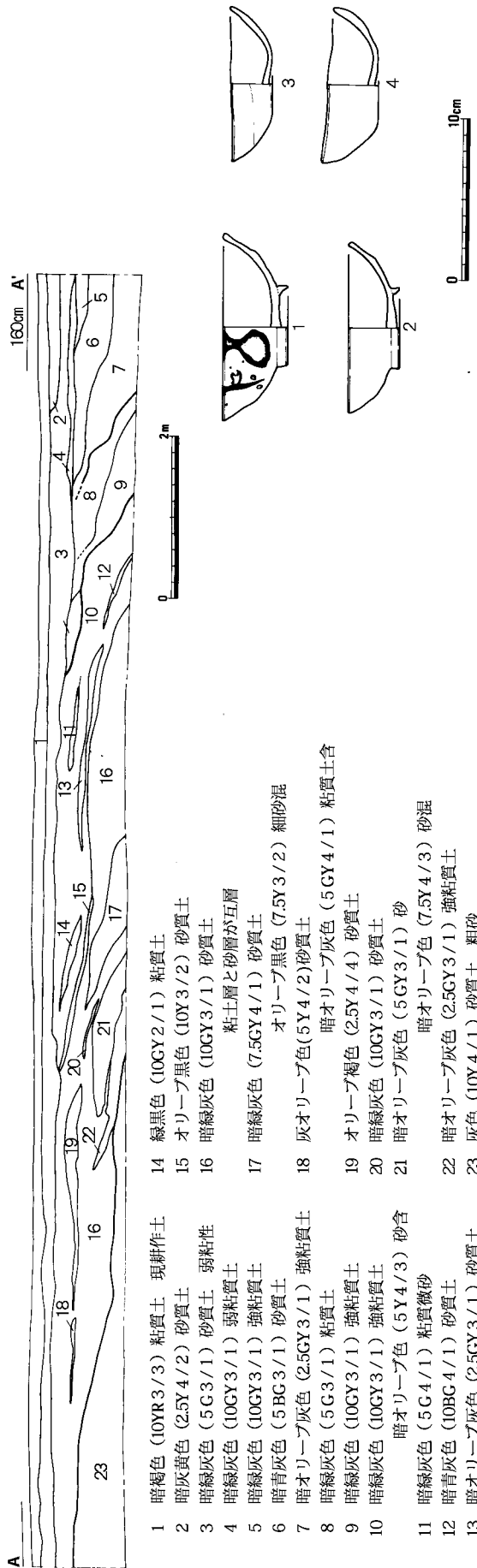
川入遺跡は、掛無堂遺跡の東、中撫川遺跡の北に位置する。この位置は、地図や航空写真から地形を読みとると旧河道の痕跡がみられる。北北東から南流するこの河道は、川入遺跡付近でその流れを大きく東に変える。その河道に囲まれるようにこの遺跡は存在している。そのため、掛無堂遺跡との間には大きな河道が存在する。同じく中撫川遺跡との間にも同様な状態が存在するものと予測された。調査の結果からもその予測は正しいことが判明した。検出した微高地は、中世の遺構が存在するものである。しかし、その痕跡は非常に希薄である。今回の調査地点は、生活区からすれば中心からは大きく外れた端部に位置していたものと推測される。この調査区においても近くにしっかりとした生活区が存在したことを予測させる状況があった。それは、調査区の南東端部に存在するものである。この付近からは、その南側に存在する河道に向かうため、地形は下降する傾向にある。そのため、北西側に対して一段低い地形を呈していたのである。それを現在のような地形にするために、一段低かった水田を嵩上げするための客土が必要となる。第3図6～8層はそのための客土である。この層は、調査区の土に比べて色、質共に異なっており明らかに他所からの土である。この層からは残存状態は悪いが非常に多くの中世の遺物が出土した。その量からすれば、比較的規模の大きい集落を予測させるものがある。

今回検出した中世の微高地は、遺構の数も少ないが時期的にも短期間であったと推測される。遺構検出面の土も砂質が強いものであり、遺構検出面から20～30cm下層はさらさらの砂である。掘り下げを試みたが、湧水もあり、水と共に砂が流出して壁が崩れるため深掘りはできなかった。鉄棒を差し込んでみた感触では、そのような砂がさらに1m以上は続くようである。そのようなことから、未だ安定した微高地ではなかったものと思える。さらに、河道に直面する位置であり、河川の増水を考えると住居を構えるには、未だ不向きな位置であったと考えられる。

(井上)

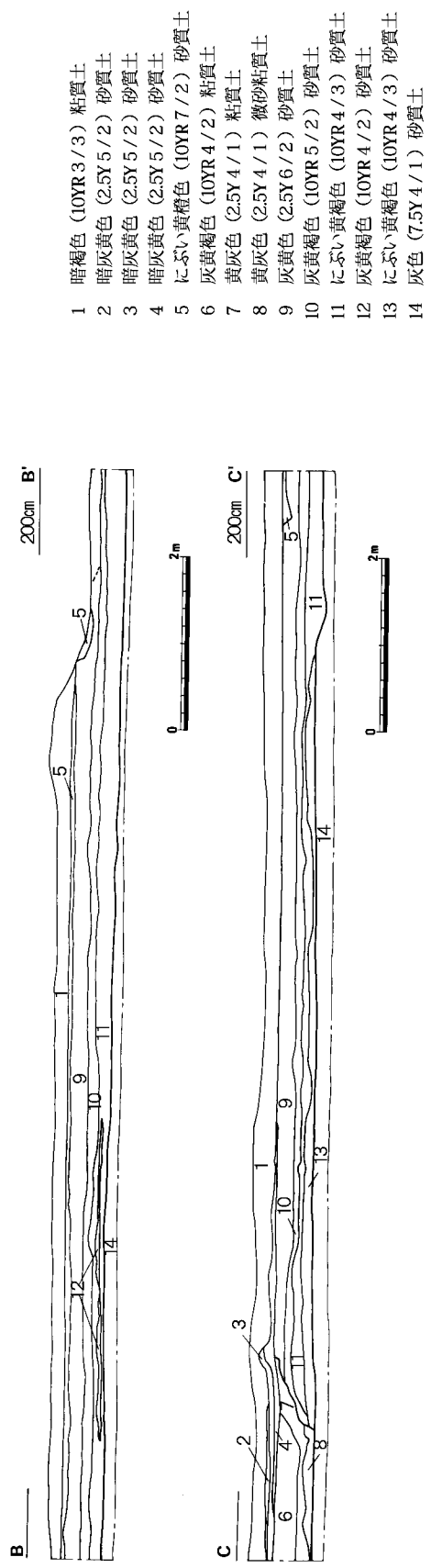


第1図 川入遺跡大道西調査区
1・2区全体図(1/400)



- 1 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土
- 2 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂質土
- 3 暗緑灰色 (5G 3/1) 砂質土 弱粘性
- 4 暗緑灰色 (10GY 3/1) 弱粘質土
- 5 暗緑灰色 (10GY 3/1) 強粘質土
- 6 暗青灰色 (5BG 3/1) 砂質土
- 7 暗オリーブ灰色 (2.5GY 3/1) 強粘質土
- 8 暗緑灰色 (5G 3/1) 粘質土
- 9 暗緑灰色 (10GY 3/1) 強粘質土
- 10 暗緑灰色 (10GY 3/1) 強粘質土
- 11 暗オリーブ色 (5Y 4/3) 砂含
- 12 暗緑灰色 (5G 4/1) 粘質微砂
- 13 暗青灰色 (10BG 4/1) 砂質土
- 14 暗オリーブ灰色 (2.5GY 3/1) 砂質土
- 15 緑黒色 (10GY 2/1) 粘質土
- 16 オリーブ黒色 (10Y 3/2) 砂質土
- 17 暗緑灰色 (10GY 3/1) 砂質土
- 18 粘土層と砂層が互層
- 19 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 砂質土
- 20 オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) 細砂混
- 21 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂質土
- 22 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 粘質土含
- 23 オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 砂質土
- 24 暗緑灰色 (10GY 3/1) 砂質土
- 25 暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) 砂
- 26 暗オリーブ色 (7.5Y 4/3) 砂混
- 27 暗オリーブ灰色 (2.5GY 3/1) 強粘質土
- 28 灰色 (10Y 4/1) 砂質土 粗砂

第2図 大道西調査区1区トレンチ土層断面図・出土遺物 (1/80・1/4)



- 1 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土
- 2 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
- 3 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
- 4 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR 7/2) 砂質土
- 6 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土
- 7 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘質土
- 8 黄灰色 (2.5Y 4/1) 微砂粘質土
- 9 灰黄色 (2.5Y 6/2) 砂質土
- 10 灰黄褐色 (10YR 5/2) 砂質土
- 11 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土
- 12 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土
- 13 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土
- 14 灰色 (7.5Y 4/1) 砂質土

第3図 大道西調査区2区土層断面図 (1/80)

第2節 川入遺跡大道西調査区1・2区の調査

1 トレンチ調査

トレンチを設定したのは、掛無堂遺跡に面した北西側である。この位置は地形上からも掛無堂遺跡との間に旧河道が存在すると想定される位置である。しかし、河道の幅については未だ不明であるため、トレンチ調査の結果を見て必要な調査範囲を確定することにした。トレンチは、幅4mで、長さ21mのものを設定した。調査の結果は、トレンチの南東端部から4m付近から北西は河道の様相を呈してきた。基本的に砂が堆積するもので、その間に細長く粘土が縞模様に堆積している。そのような状況にあっても、7層と8層の境と、同9層と10層の境は明瞭であった。この状況は、広い河道が埋まってゆく過程である時期の河道の肩口を示すものと考えられる。23層は、南東に向けて緩やかに高さを増しており、この層が大道西調査区の微高地の基盤層となる。

出土遺物として、中世土師器がある。1は、16層からの出土である。2は中央部から少し西によった付近からの出土である。何れも早島式土器と呼ばれるものである。3、4は、6、7層からの出土である。底部が少し窪む。遺物から14世紀頃までは河道の状況を保っていたと推測される。(井上)

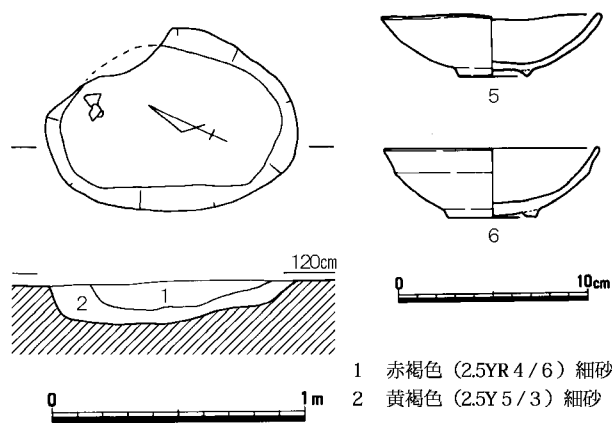
2 遺構の概要

柱穴群(第1図、図版37)

すべてが柱穴になるかについては不明な部分もあるが、30数個を検出した。検出した位置は調査区の中央部付近で、北西部から南東方向に列をなすようにもみえる。しかし、柱列とするにはその並びや間隔に企画性がみられない。また、建物になるような並びもみられなかった。大きなまとまりとしては、調査区の北西部と、南東部に群をなし、中央部には薄い。何れも検出面からの深さは浅く、10~20cmを測る。平面形は円形を呈するもので、直径10~30cmを測る。(井上)

土壌1(第1・4、図版37・39)

調査区の中央部から少し南東によった位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので、長軸の方向は南北に近い方向を示している。規模は長軸方向が1m、短軸方向が76cmを測る。検出面からの深さは、17cmを測る。土壌からは、中世土師器



1 赤褐色 (2.5YR 4/6) 細砂
2 黄褐色 (2.5Y 5/3) 細砂

や鉄滓が多く出土した。鉄滓は、鍛冶滓である。同時に小破片ではあるが羽口も出土しており、鍛冶工房からの廃棄物を埋めた土壌と考えられる。5は、口径約12cmを測る椀である。高台は貼り付けられるものでその高さは低い。6は、口径11.6cmを測る椀で、高台は貼り付けられている。何れも早島式土器と呼ばれるもので、14世紀前半と考えられ、土壌の時期も同時期と考えられる。(井上)

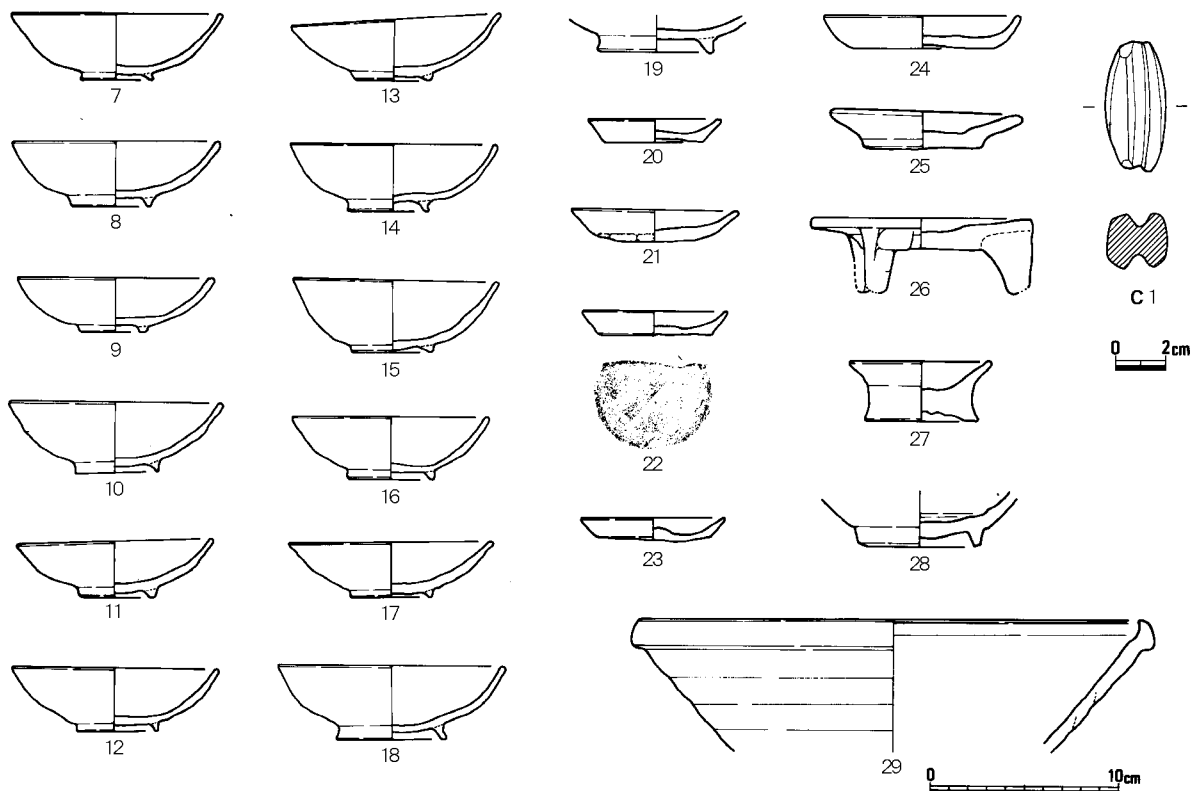
第4図 土壌1・出土遺物(1/30・1/4)

3 遺構に伴わない遺物

包含層から出土した遺物は、主に土器と土製品である。7～19は土師質土器の椀で、早島式土器あるいは吉備系土師器椀とも呼称される。おおむね胎土は精良で色調は灰白色～黄灰色。調整は内外面ともナデ調整。10・16の内外面には煤が付着している。20・22～25は土師質土器の皿で、20・22・23・24の底部外面にはヘラオコシの痕跡が観察できる。21は瓦器皿で、内外面は基本的にナデ調整を施しているが、底部外面には指頭による押圧痕が明瞭にみられる。26は脚付盤である。珍しい器種で、扁平な盤の底部に3つの脚が付く。胎土・色調は共に、7～19の土師質土器椀に酷似している。調整は内外面ナデ調整で、脚部には指頭圧痕がある。27は土師質土器の小杯で、内外面共にナデ調整。底部外面にはヘラ切り痕が観察できる。28は青磁碗の底部である。高台は角高台で、底部外面には施釉が施されていない。また見込み部分の釉薬は、環状に削り込まれている。上半部分が欠損しているため、産地は不詳。29は須恵質土器の鉢で、口縁端部の形態や胎土から東播系であると思われる。口縁部外面には重ね焼き痕が認められる。C1は砲弾形の土錘で、2対の溝が観察できる。

これら包含層からの出土土器は、その形態や口径などからおおよその年代幅を類推することができる。すなわち、21の瓦器皿あるいは口径のやや大きい24・25の土師質土器皿は若干古い時期のものと考えられるが、7～18の土師質土器椀の口径が11cm内外であることや、20・22・23の土師質土器皿の口径および形態、あるいは29の東播系須恵器の形態から14世紀前半頃の時期を当てはめることができよう。

(松尾)



第5図 包含層出土遺物(1/4)

第3節 川入遺跡大道西調査区3・4区の調査

1 調査区の概要（第6～9図、図版38）

3区は2区の南側低位部、さらに水路を挟んで南側に4区を設定した。この両区は買収については未調印であったが、関係各位の尽力によって発掘承諾書を得、発掘調査が可能となったものである。発掘前の地形観察によつては、この地点に旧河道が存在することは明白であった。すでに微高地縁辺であることが確認されていた2区の遺構検出面からみてもそのレベル差から、河道の存在は疑う余地はなく、まずトレンチを設定し、その状況をみて平面的に発掘区を拡張するかどうかを判断することとした。

東側に設定したT1は、用地境に近いため慎重に掘り下げ作業を進めたが、1m近く掘り下げると湧水が始まり、河道埋積土である砂層の浸食が瞬く間に進行し、実測等の記録は不可能となった。

T2はT1の西約7mに設定した。第7図に示すように、掘り下げはおおよそ1mが限度で、湧水による壁面の崩落が始まるまでに、実測図の作成、写真撮影を行った。

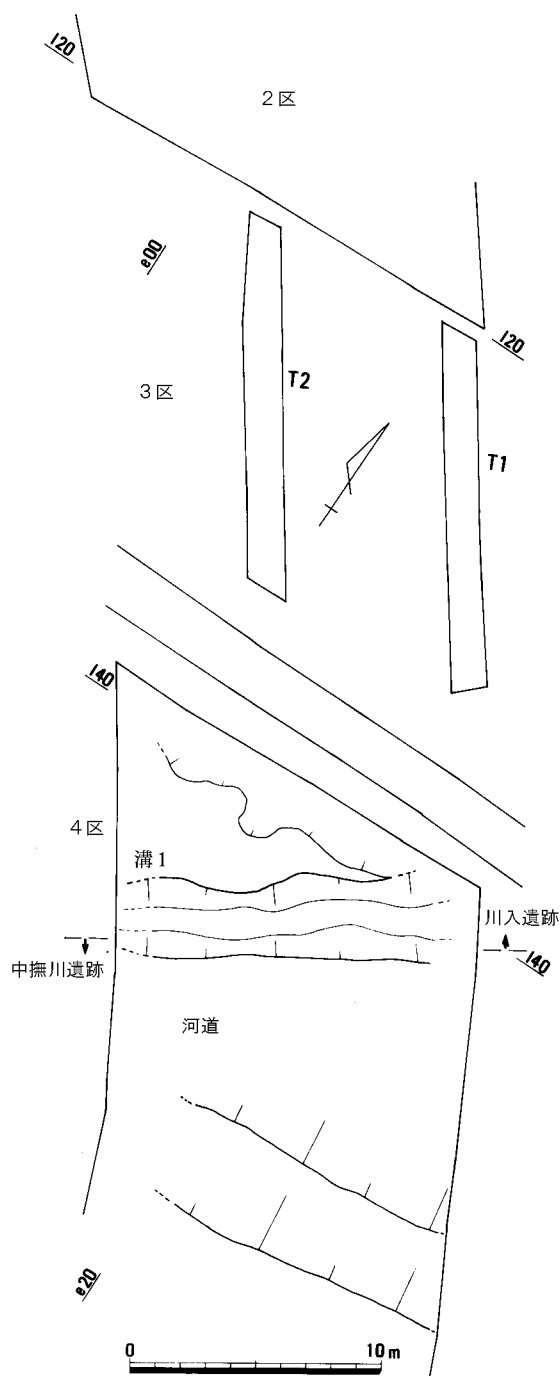
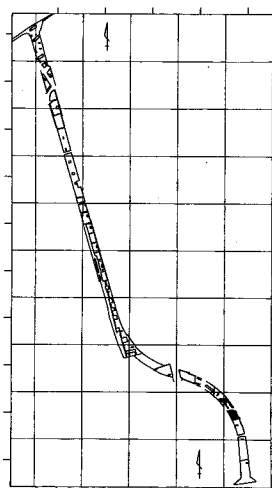
この位置の堆積層は、北側から南側への細砂層の傾斜が認められる。比較的下層の第18層・20層は粗砂が埋積している。

以上のように3区では、用地の全面を発掘することは、隣接地の崩落を招く恐れがあるので、T2による土層確認のみを行った。

4区では、南側の調査区、中撫川遺跡の微高地部分を挟むように河道南岸が検出された。

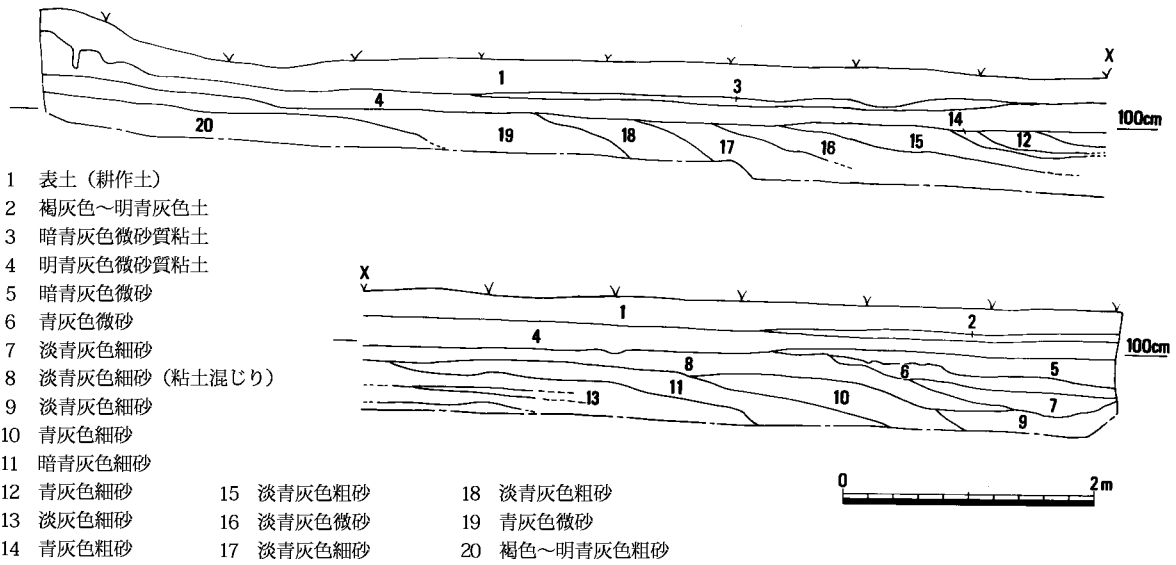
溝1は、河道が中世にほぼ埋没していた後、掘開された浅い溝である。

出土遺物には、近世に比定される陶磁器の小片などが少量認められる。

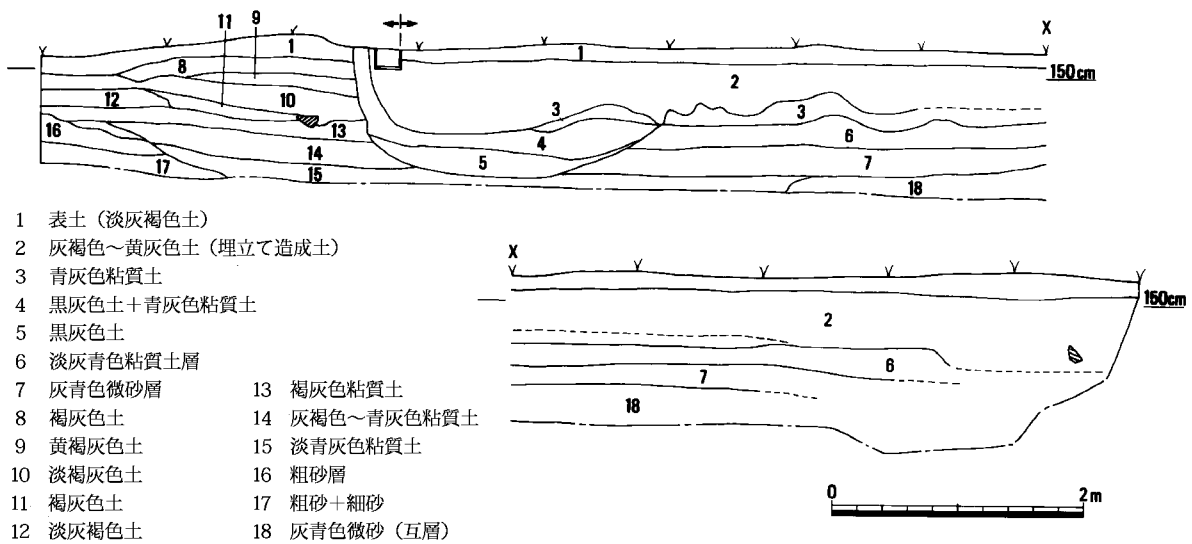


第6図 川入遺跡大道西調査区3・4区全体図
(1/300)

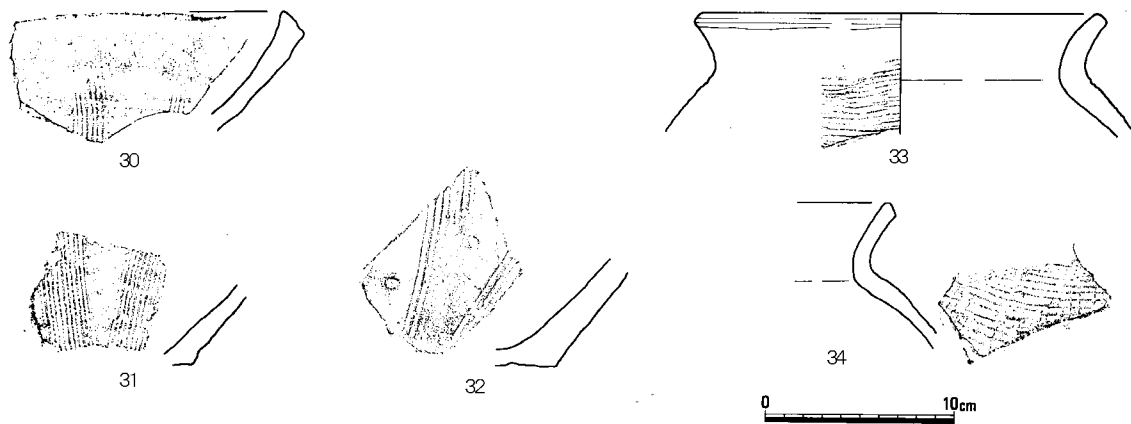
第7章 川入遺跡



第7図 大道西調査区3区トレンチ2土層断面図 (1/60)



第8図 大道西調査区4区西壁土層断面図 (1/60)



第9図 河道出土遺物 (1/4)

溝1はやや西偏する東西方向を示しているが、この線上を境に北が川入、南が中撫川と字境を示している点に注意される。

4区の河道からの出土遺物には、第9図に掲げる中世土器がある。

いずれも小片であるが、30～32は備前焼播鉢、33・34は亀山焼の甕である。30は播鉢の体部上位から口縁部にかけての破片で、内面には、2条の放射状卸し目の一部が観察される。口縁端部の肥厚は目立たず、口唇端部はやや内傾する。

31は播鉢の体部下半から底部にかけての破片である。体部下半に比べると底部の厚みは、かなり薄くなっていく。体部内面には2条の卸し目が観察され、さらに使用による磨滅も認められる。

32は31とほぼ同様な部位の破片であるが、31に比べるとやや大型の播鉢で、体部下半の厚みの差は顕著である。やはり体部内面下半には2条の卸し目が残存し、同様に使用による磨滅痕跡が明瞭に観察される。これらの備前焼は、いずれも赤褐色～灰褐色を呈しており、典型的な備前焼特有の発色を看取することができる。

33・34はいずれも亀山焼の甕の口頸部の破片である。亀山焼は須恵器系の中世陶器で、特徴的な灰色～灰青色の焼成が観察される。33は体部外面のタタキは平行タタキが観察される。口縁部は、やや丸みを持って分厚く外方する。

34もやはり甕の口頸部であるが、口径の正確な計測は不可能な破片である。33と異なり、体部外面には一般的にしばしばみられる、格子目のタタキが施されている。体部内面には、同心円タタキをナゲ消した痕跡が認められる。

以上の出土遺物は、鎌倉時代から室町時代前半期、すなわち13～14世紀代に比定され、河道の埋没・終焉に近い時期を示しているといえる。(岡田)

第4節 小 結

以上、発掘調査の概要について述べた。3区については、大幅な制約を受けた小規模な発掘であったが、調査地点が河道であることが確かめられた。

4区は、中撫川遺跡法万寺調査区1区と同時に並行して発掘を行ったが、河道に伴う遺物の確認や、埋没後の字境であることを示す溝1を検出することができた。

この調査区での河道の幅は、約30～40mであることが推察され、かつては船舶の進入も可能であったと思われる。この河道のもっとも古い時期は、出土遺物から推定することはできなかったが、前述の掛無堂遺跡における護岸遺構の存続時期、すなわち古代Ⅰ・Ⅱ期に遡ることは確実であろう。当時は、この河道が郡境とも推定されているが、その後流路の大きな変化は生じなかったようである。

しかし、その時期の河道は今回検出した規模よりはかなり小規模であったと考えられ、この中世段階の河道の川幅は、最大時の規模を示している可能性が高い。

ただ、近世には納所の集落の一角に常夜灯が残されているように、「舟入」が可能な程度の河道があったようである。(岡田)

川入遺跡土器観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構名・層位	掲載遺構名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考
1	Q2-31	大道西1区	トレンチ	トレンチ	土師器	椀	浅黄色25 Y8 A	長石・石英・雲母、赤色酸化粒	貼り付け高台、煤もしくは油煙付着
2	Q2-32	大道西1区	トレンチ	トレンチ	土師器	椀	にぶい黄橙色0 YR 2	長石・石英・雲母	貼り付け高台、早島
3	Q2-29	大道西1区	トレンチ	トレンチ	土師器	椀	にぶい黄橙色25 Y6 B	雲母・長石	揚げ底
4	Q2-30	大道西1区	トレンチ	トレンチ	土師器	椀	浅黄色25 Y7 A	石英・長石・雲母	揚げ底
5	Q2-4	大道西2区	土壌1	包含層	土師器	椀	にぶい黄橙色0 YR 3	雲母・石英・赤色酸化粒、長石	貼り付け高台
6	Q2-2	大道西2区	土壌1	包含層	土師器	椀	にぶい黄橙色75 YR 3	赤色酸化粒・長石	貼り付け高台
7	Q2-40	大道西2区	土器6	包含層	土師器	椀	灰白色0 YR 2	石英・雲母・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島、見込みに重ね焼き痕
8	Q2-13	大道西2区	土器8	包含層	土師器	椀	灰白色0 YR 2	石英・長石・雲母・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
9	Q2-14	大道西2区	土器9	包含層	土師器	椀	浅黄橙色0 YR 3	石英・赤色酸化粒・長石、雲母	貼り付け高台、早島
10	Q2-16	大道西2区	土器2	包含層	土師器	椀	灰白色0 YR 2	石英・長石・赤色酸化粒、雲母	貼り付け高台、早島、内外面煤付着
11	Q2-17	大道西2区	土器3	包含層	土師器	椀	浅黄橙色0 YR 3	石英・長石・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
12	Q2-18	大道西2区	土器4	包含層	土師器	椀	浅黄橙色0 YR 3	石英・雲母・長石・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
13	Q2-19	大道西2区	土器1	包含層	土師器	椀	浅黄橙色0 YR 3	長石・赤色酸化粒・雲母、角閃石	貼り付け高台、早島
14	Q2-20	大道西2区	土器1	包含層	土師器	椀	灰白色0 YR 2	長石・雲母・石英・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
15	Q2-21	大道西2区	土器1	包含層	土師器	椀	灰白色0 YR 2	石英	貼り付け高台、早島
16	Q2-27	大道西2区	包含層	包含層	土師器	椀	浅黄橙色0 YR 3	雲母・長石・石英・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
17	Q2-28	大道西2区	包含層	包含層	土師器	椀	灰黄色25 Y6 2	石英・雲母・赤色酸化粒	貼り付け高台、早島
18	Q2-25	大道西2区	包含層	包含層	土師器	椀	にぶい黄橙色0 YR 2	長石・雲母・赤色酸化粒	貼り付け高台、体部外面布目痕跡、早島
19	Q2-5	大道西2区	東端客土	包含層	土師器	椀	浅黄橙色0 YR 3	石英・長石・雲母	貼り付け高台、早島
20	Q2-15	大道西2区	土器0	包含層	土師器	小皿	橙色75 YR 6	石英・長石・赤色酸化粒、雲母	外底部ヘラオコシ
21	Q2-22	大道西2区	包含層	包含層	瓦器	皿	暗灰色N3 0	雲母・長石・赤色酸化粒	外底部オサエ
22	Q2-6	大道西2区	東端客土	包含層	土師器	小皿	灰黄色25 Y7 2	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	外底部板目
23	Q2-4	大道西2区	東端客土	包含層	土師器	小皿	浅黄橙色0 YR 3	石英・長石・雲母	口縁部に油煙状のもの付着
24	Q2-26	大道西2区	包含層	包含層	土師器	皿	橙色75 YR 6	赤色酸化粒・長石・石英・雲母	外底部ヘラオコシ
25	Q2-9	大道西2区	東端客土	包含層	土師器	皿	浅黄橙色75 YR 4	赤色酸化粒・長石・石英・雲母	外底部ヘラオコシ後ナデ
26	Q2-7	大道西2区	東端客土	包含層	土師器	脚付盆	灰白色25 Y8 A	石英	脚3本
27	Q2-11	大道西2区	包含層	包含層	土師器	杯	浅黄橙色0 YR 3	石英・雲母・赤色酸化粒	ヘラオコシ痕
28	Q2-33	大道西2区	包含層	包含層	磁器	碗	灰白色 Y 2		削り出し高台、露胎、内面釉薬
29	Q2-8	大道西2区	東端客土	包含層	須恵器	鉢	灰色N6 0	石英・長石・雲母	東播系
30		大道西4区	河道	河道	備前焼	播鉢	灰褐～赤褐色75 YR 2	長石・石英	片口部分わずかに残存
31		大道西4区	河道	河道	備前焼	播鉢	灰褐色5 YR 2	長石・石英	削し目は1条0本単位
32		大道西4区	河道	河道	備前焼	播鉢	黒褐～灰赤色0 YR 1	長石・石英	削し目は1条8本単位
33		大道西4区	西側溝	西側溝	亀山焼	甕	灰～灰白色N5 /	長石・石英	体部外面は平行タタキ
34		大道西4区	河道	河道	亀山焼	甕	灰色N5 /	長石・石英	体部外面は格子目タタキ

川入遺跡土製品観察表

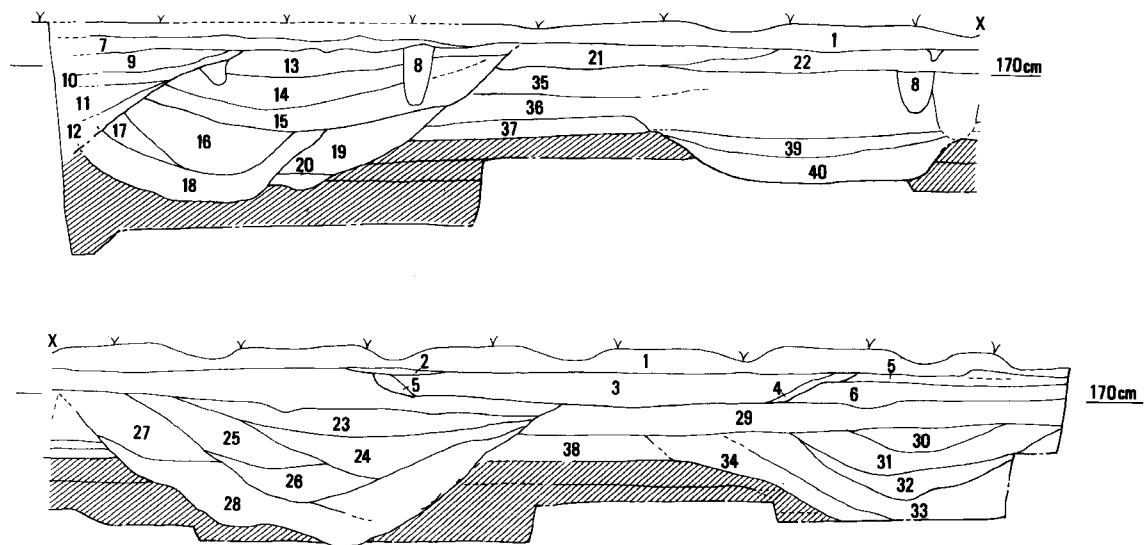
掲載番号	実測番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
C1	O2-C1	川入・大道西2区	包含層	大道西2区	楊灰色砂質土	土錘	52	24	21.5	24	にぶい黄橙色	中世	両側面に溝

第8章 中撫川遺跡

第1節 遺跡の概要

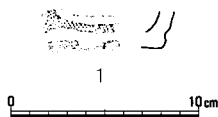
中撫川遺跡は、従来呼称されてきた川入遺跡のもっとも中心にあたる地点で、法万寺調査区としていたが、今回の発掘調査を期に遺跡名を改めた。また、これは岡山市教育委員会による発掘調査でもすでに使用されている遺跡名で、かつての川入遺跡は「川入・中撫川遺跡」と呼称されている。

今回の発掘調査では、南北約150m、路線幅約20m、南端の新幹線側道では車線のアプローチのため約45mと広めに開いて終る範囲が調査対象となった。従来の2度にわたる発掘調査が、東西方向の調査区であったのに対し、南北方向を指し示す調査設定区となり、微高地部分についての遺跡の広がり、遺構や遺物の時期や性格に関心が寄せられた。



- | | | | |
|-----------|---------------------|-------------------|--------------------|
| 1 表土(耕作土) | 12 黒灰色土 | 23 灰黄褐色土 | 34 淡黄灰色土(微砂質) |
| 2 淡黄灰色土 | 13 淡褐色土 | 24 暗灰黄褐色土(炭・焼土斑含) | 35 黄褐色土 |
| 3 淡黄灰色粘質土 | 14 褐色土 | 25 淡黄褐色土 | 36 淡黄褐色土 |
| 4 灰黄褐色粘質土 | 15 淡灰色土~黄灰色土(溝25下層) | 26 微砂質暗黄灰土 | 37 明褐色土(基盤層表層) |
| 5 褐色土 | 16 暗灰黄褐色土(炭斑) | 27 明灰黄色土 | 38 明黄色基盤層(弥生後期の基盤) |
| 6 淡灰褐色土 | 17 灰黄褐色土 | 28 微砂質黄灰色土 | 39 淡灰黄色土 |
| 7 暗灰色土 | 18 灰青土(炭混じり微砂質粘土) | 29 淡灰黄褐色土 | 40 黄灰色土 |
| 8 淡灰黄色土 | 19 灰黄褐色土 | 30 暗灰黄褐色土 | |
| 9 淡褐色土 | 20 淡灰青色土(微砂質粘土) | 31 黄褐色土(やや締まった土) | |
| 10 褐色土 | 21 淡褐色土 | 32 黄褐色土 | |
| 11 暗灰色粘質土 | 22 暗褐色土 | 33 暗黄褐色土 | |

第1図 1区中央土層断面図(1/60)



第2図 1区出土縄文土器(1/4)

調査区は北から1~3区に分割し、それぞれ担当班が発掘調査を実施した。発掘着手時の現状は水路に隔てられて1区が畑、2・3区は水田で、海拔約2mほどの高まりを形成していた。

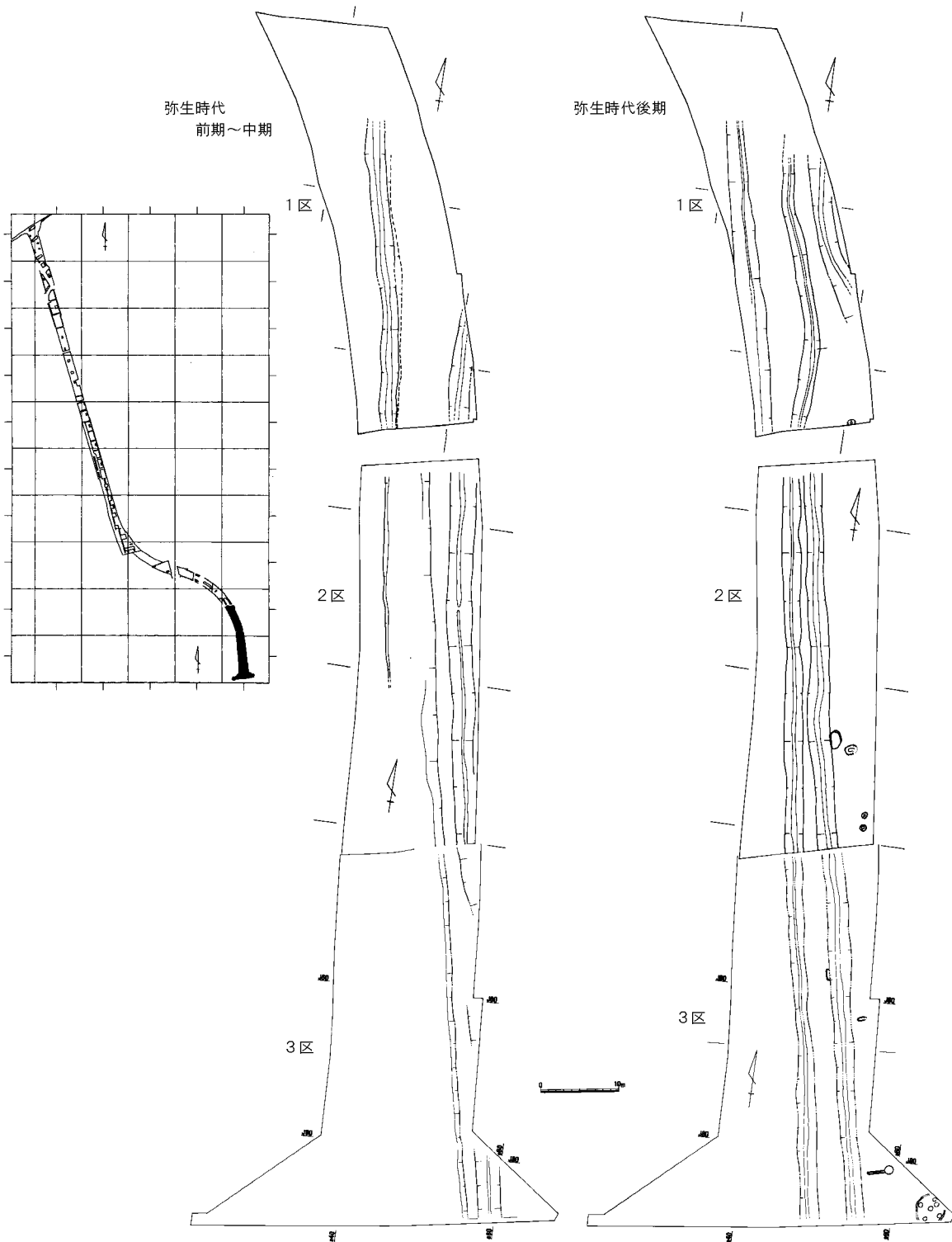
基本的な層位は第1図に掲げるように、海拔約1.2m前後で安

第8章 中撫川遺跡

定した基盤層に到達する。

基盤層は、比較的堅硬で締りのある淡灰黄色の微砂質粘土層で、表層部分では弥生前期土器が少なからず出土している。

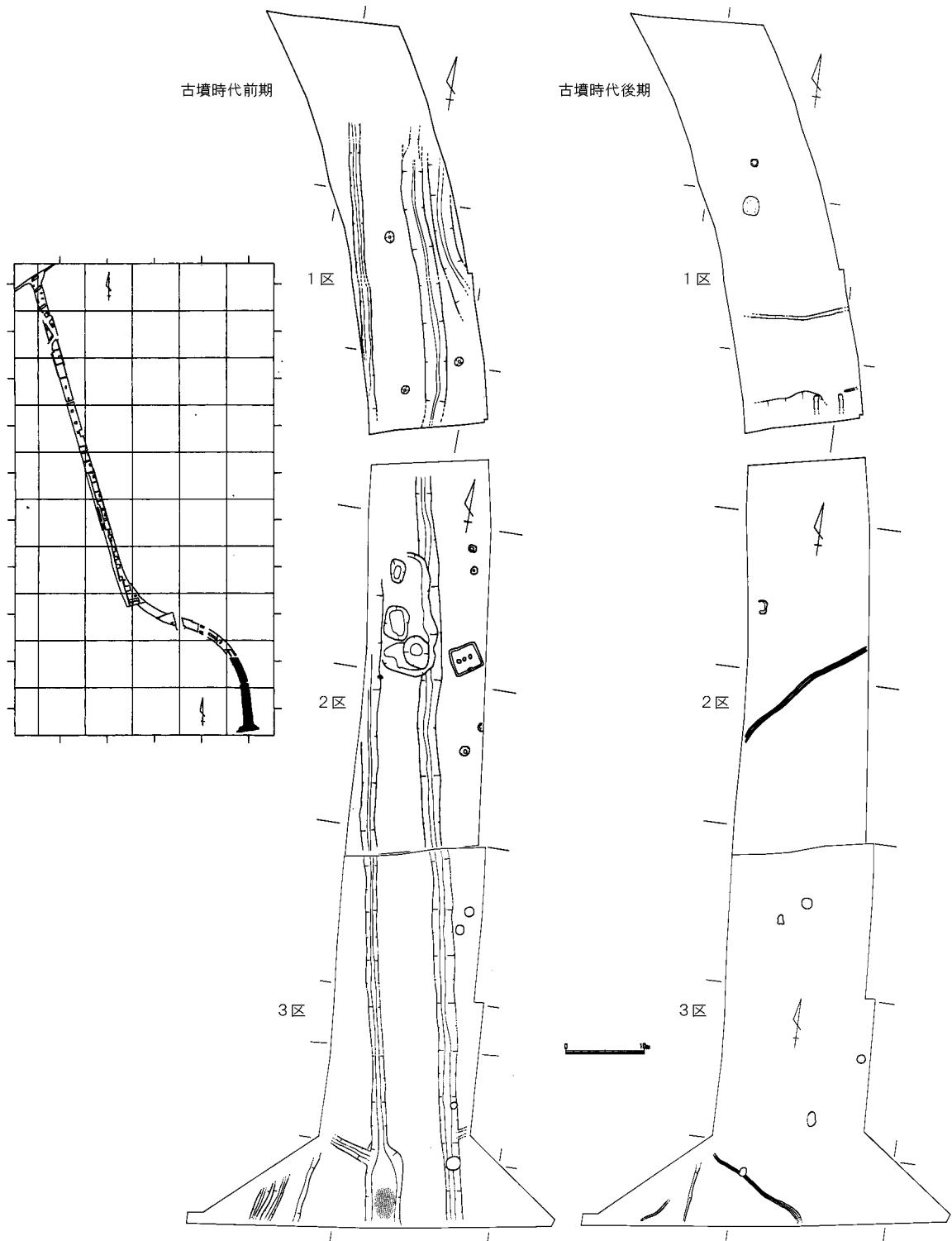
出土遺物の中でもっとも古いものと考えられるのは、沈線文の一部と縄文が観察される縄文土器1である。小片であるが、瀬戸内地方の後期初頭の型式「中津式」に比定される。



第3図 弥生時代遺構全体図 (1/800)

明確な遺構が検出されるのは、弥生時代になってからで、前期の溝1が唯一の遺構である。1区から2区にかけて南北方向に検出され、全長約70m、良好な残存幅2.3m前後を測る。第1図の第39・40層が溝1にあたる。

溝1の検出レベルに到達するまでには、中世～古代～古墳時代の幾多の遺構群が重複、しかも多数の弥生～古墳時代の溝群は、随所で平面的に錯綜して検出されたため、残存状況は不良で、当時の形状や規模は不明である。

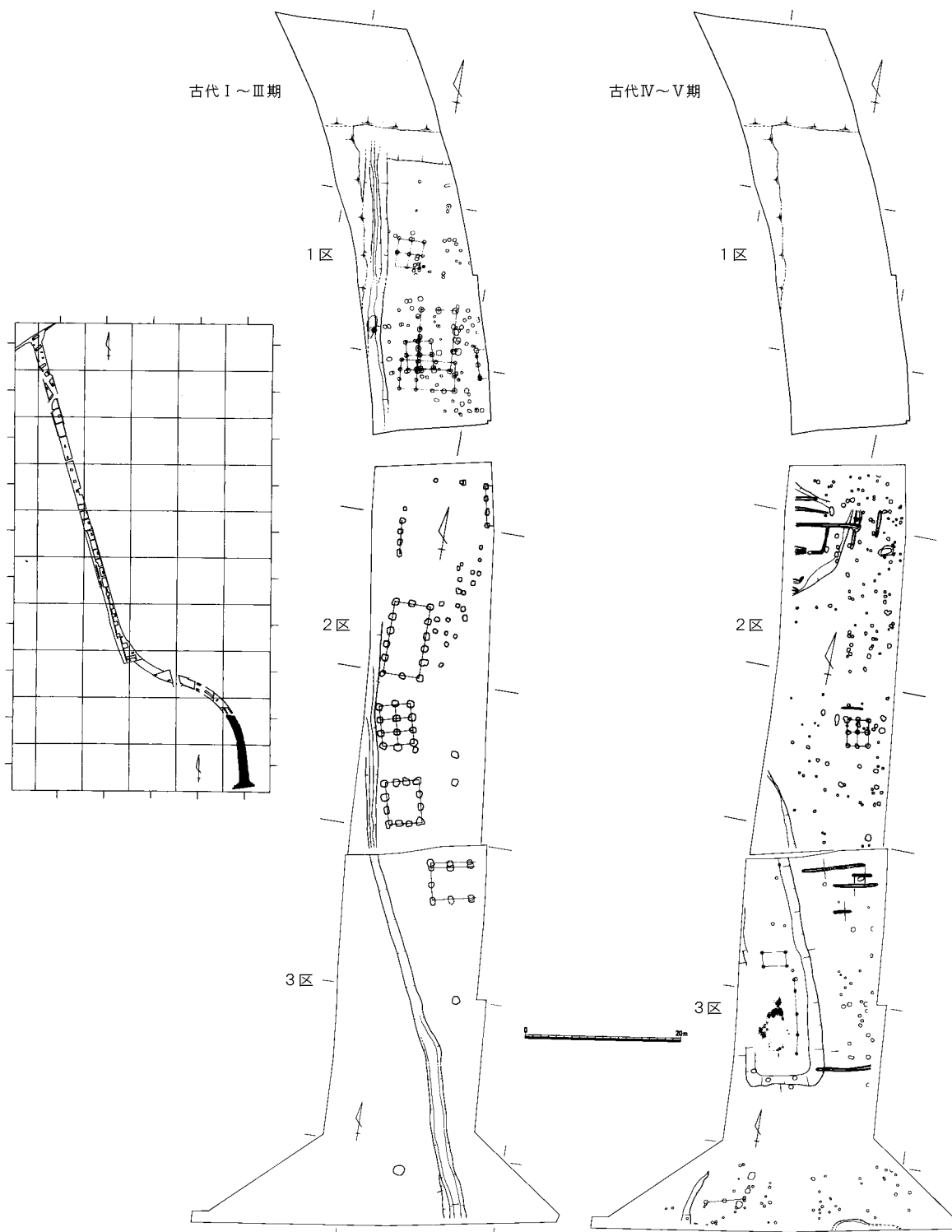


第4図 古墳時代遺構全体図 (1/800)

第8章 中撫川遺跡

しかし、溝1は人為的に掘開された溝であることは確実で、第14・15図に掲げるような弥生前期土器やS2の磨製石包丁の出土によって、周辺に集落が形成されていたことは疑い得ないだろう。

中期の溝としては溝2～4があるが、これらもいずれも南北方向を示しているが、全容の検出には至っていない。後期の溝は溝5～8の4条が検出された。溝5は1区から3区まで貫流するが、溝6については1区では不明瞭であった。溝6と重なる可能性も考えられる。溝以外の遺構としては、井戸や土壇のほか、3区南東隅でかろうじて検出された竪穴住居1がある。



第5図 古代遺構全体図 (1/800)

古墳時代では前期に比定される溝群が1区から3区にかけて検出され、井戸も10基を越えて発見された。須恵器を伴う後期の遺構は、一転して希薄となる。古代から中世にかけての遺構の主体は建築遺構であり、柱列や柱穴が多数検出された。これらの遺構に伴う出土遺物も質量ともに豊富である。とりわけ、たわみ状の遺構から出土した緑釉陶器は、質量ともに特筆すべき遺物である。7世紀代から8世紀にかけての溝25は、1区から3区にかけて検出され、建物群の西側にあることから区画溝の可能性もある。以下1～3区の概要について概述し、個別の遺構についても触れたい。(岡田)

1区の概要

川入遺跡の項ですでに述べたように、1区の調査区の北端には河道が存在し、文字通り「川入」を示している。中撫川遺跡の調査範囲の全体は微高地で、弥生～古墳時代の南北方向の溝群は、この河道によって切断されたことになる。

この河道の初源は、おそらく掛無堂遺跡で検出された護岸遺構の時期、すなわち古墳時代終末期から古代I期と考えられる。

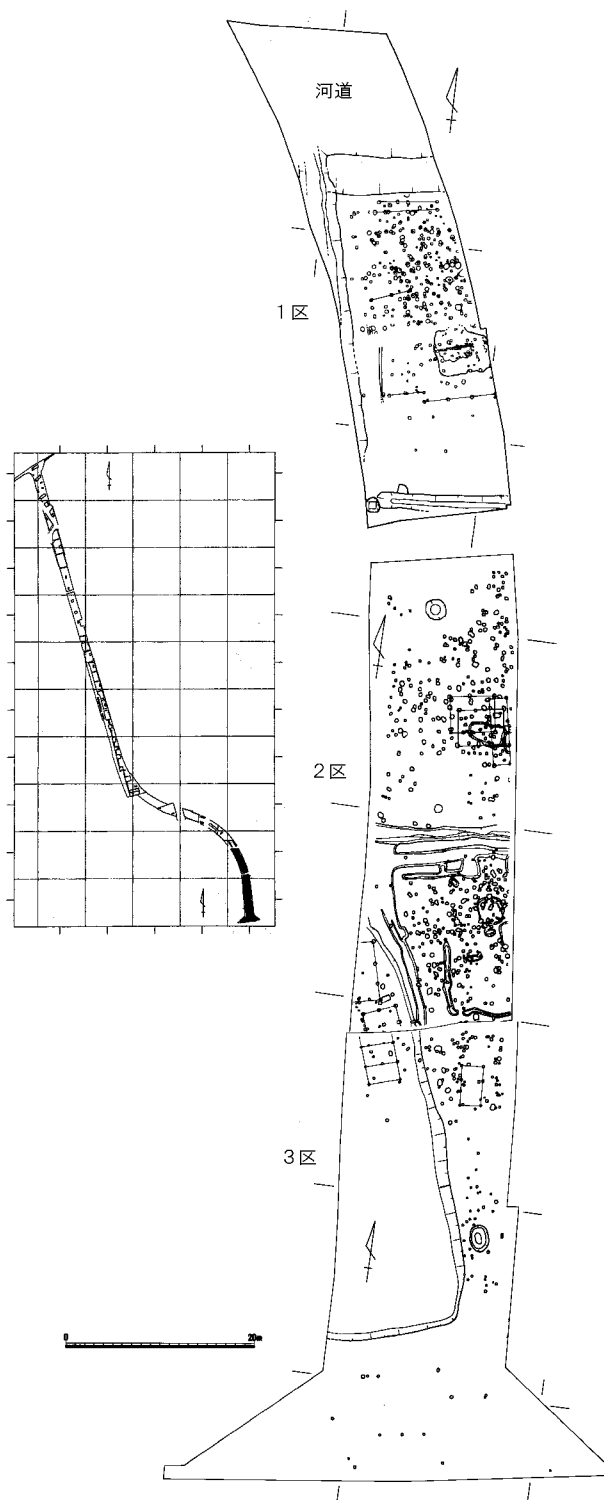
1区の発掘調査は、まず北側の河道部分から開始した。河道部分は、発掘着手前から地表面の段差が明瞭に観察され、巻頭カラー図版1では蛇行していく河道の様子がよくわかる。

微高地では、中世の遺構とりわけ多数の柱穴群が検出され、河道の南岸辺から東西方向の溝43までの空間に、多くの建物群が存在したことを示唆している。これらの遺構群の検出は、厚さ20cmほどの表土(耕作土)の直下、海拔1.8m前後で可能となった。

古代の遺構は、海拔1.5～1.7m前後で検出された。掘立柱建物1～5と溝25、焼成土壌1のほか、柱穴群が確認された。概ね古代I・II期に比定される土器類を中心とした出土遺物が得られた。

古墳時代から弥生時代にかけての遺構群は、古代の遺構検出時、すでにその概形は現れ始め、南北に流走する溝群や、井戸などが多くの遺物を伴って確認された。

発掘区全体の掘り下げは、海拔1.2m前後の基盤層まで行き、最終的に弥生時代前期に比定される、溝1の検出・精査をもってすべての調査を終了した。(岡田)



第6図 中世遺構全体図(1/800)

2区の概要

2区で検出した遺構をみると、もっとも古いものは、弥生時代前期に属する。明瞭な形では検出できなかったが、溝を1条調査した。1区より続くものである。中期の遺構は、溝を2条調査した。溝2は、明瞭な形で調査できたが、溝4については、古墳時代の溝と重複関係にあり、東側の肩部を検出したのみである。後期の遺構は、井戸2基、土壌2基、溝2条を調査した。遺物としては、大量の土器があり、他地域から搬入された土器もみられる。特別な遺物として、管玉・板状鉄斧がある。

古墳時代の遺構は、竪穴住居1軒、井戸4基、土器溜まり1か所、たわみ1基、溝3条、土壌1基である。溝やたわみからは、大量の土器が出土した。この時期も、関西など他地域からの搬入土器がみられる。たわみからの出土遺物に、鼓形土器・手焙り型土器・管玉・鉄斧などがある。

古代の遺構としては、掘立柱建物・土壌・たわみなどがある。掘立柱建物は、側柱のものと、総柱のものがあり、棟方向に企画性が見られる。たわみからは多くの緑釉陶器が出土した。また、銅印の鋳型と銅塊が出土している。

中世の遺構は、掘立柱建物・井戸・土壌・墓・溝などがある。柱穴は多数検出したが、建物としてのまとまりは3棟のみであった。(井上)

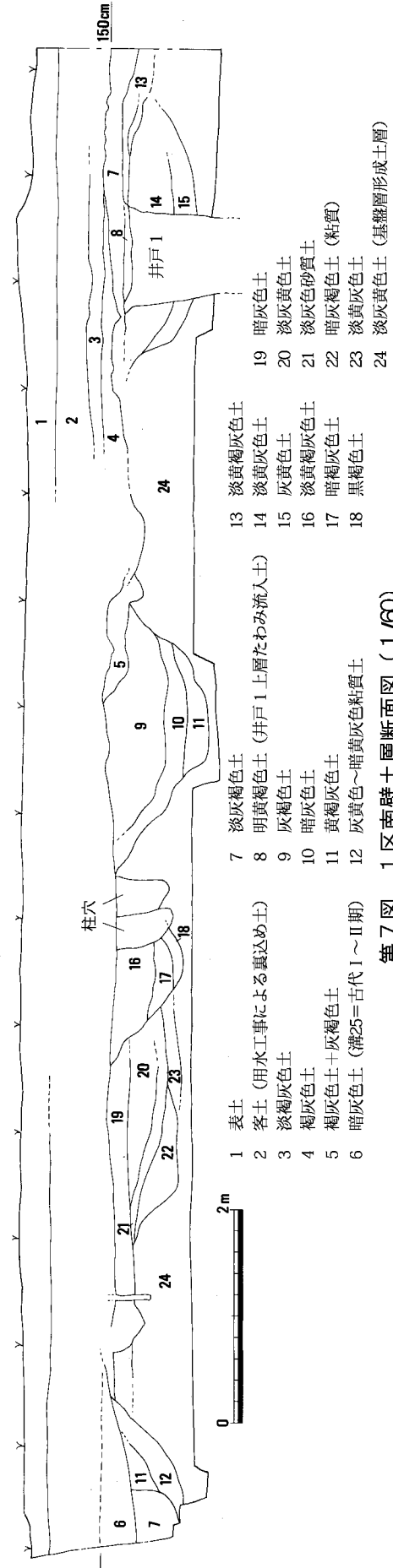
3区の概要

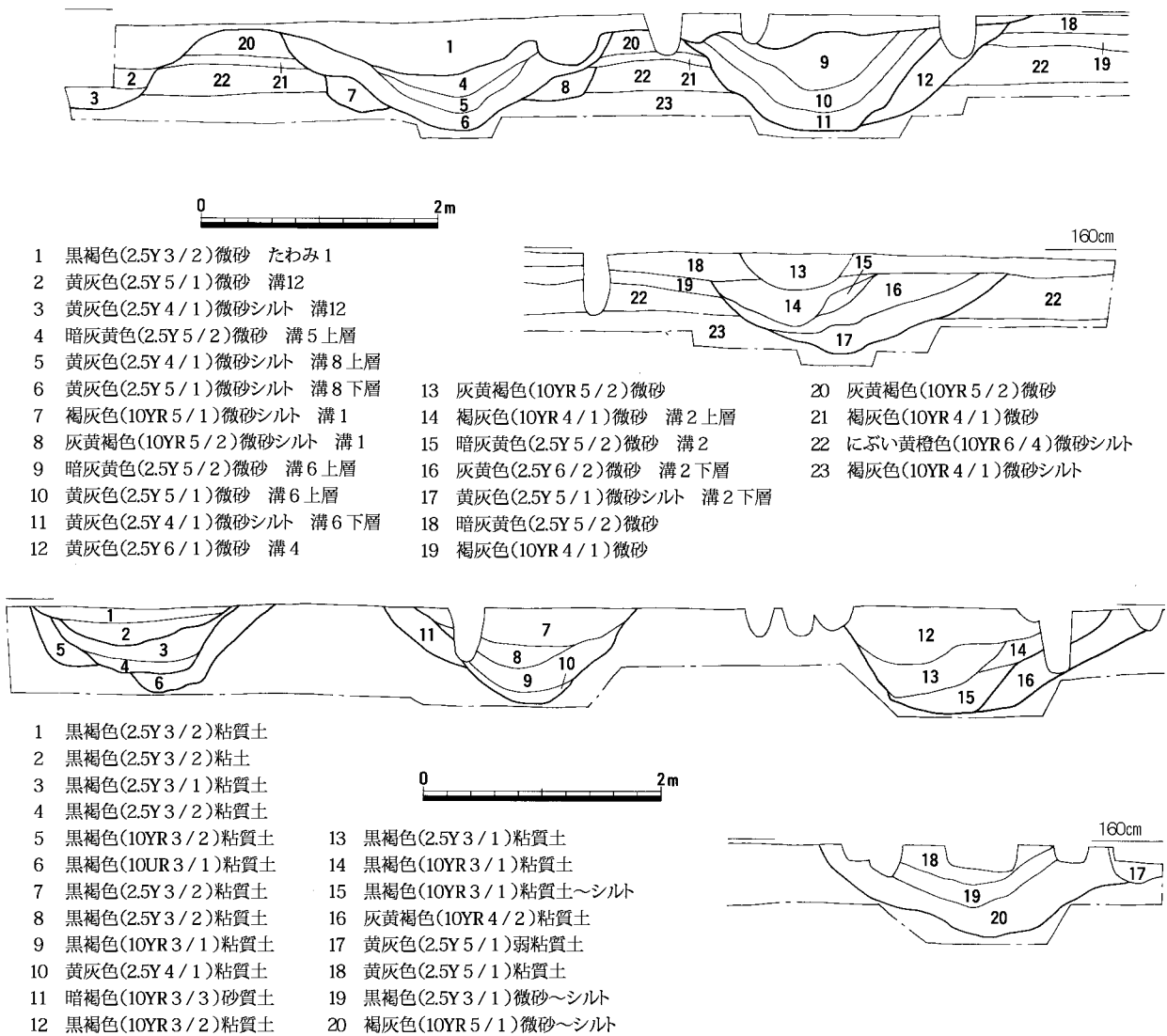
3区は、今回の調査区では最も南に位置する。3区の南側では、かつて新幹線および都市計画道路建設に伴い発掘調査が行われた。調査区の南端土層をもとにして、層位の上の方から調査区の時代別概略を述べてみる。

まず現在の様子だが、調査区の現地表はすべて水田で、地形は北東から南西へ低くなっている。耕作土を除去すると、その直下には中世の遺構面が存在する。

中世遺構面は調査区中央から南側では密度は低く、中央から北西側では古代たわみの上層に水田が存在し、北東側では掘立柱建物や土壌が散見される。

古代の遺構は、調査区中央から北に集中する。古代後半期は調査区北西にたわみや集石などが、南西端に土器溜りを伴う下がりが見られた。古代前半では1区から続く掘立柱建物群の南端が北東で確認でき、またこれも2区から続いて調査区を南北に流れる溝が存在している。

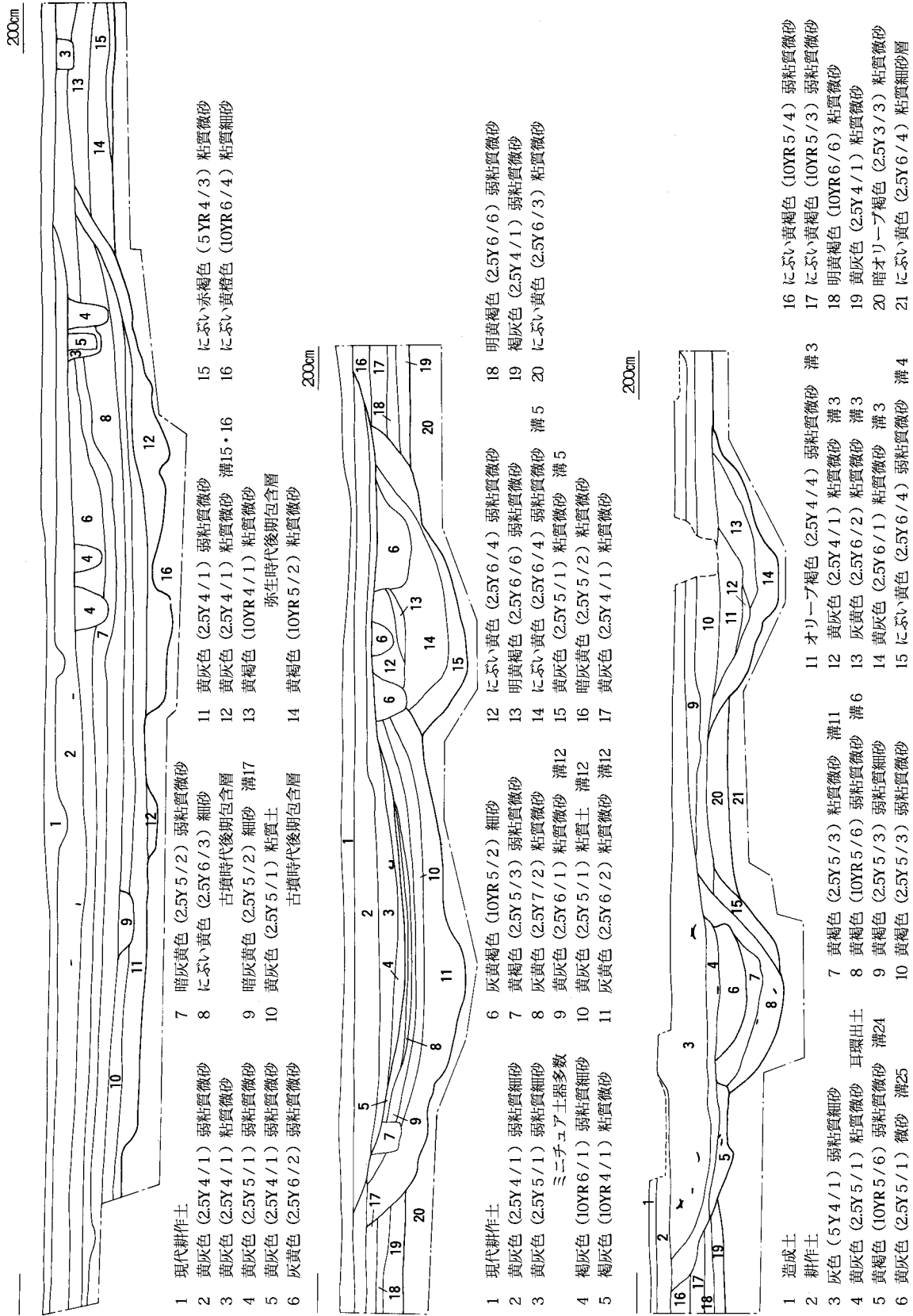




第8図 2区溝群土層断面図 (1/60)

古墳時代の遺構は、古代から10cm程度下で確認した。古墳時代後半には調査区の南側で溝と下がり
が認められるにすぎない。そして、古墳時代前半に堆積した砂層を除去していくと、都市計画道路建
設に伴う調査で川入大溝とした溝の上層を検出することとなった。今回の調査では、手捏ね・ミニチュ
ア土器が多数集中して出土し、祭祀が行われた可能性が高い。その下層は、川入大溝下層に相当する。
古墳時代前期の溝で、この時期の溝が調査区幅いっぱい合計6条確認された。南北方向に流れる2
条が主であるが、東西方向に流れ南北の溝と合流するものもある。これら溝の内には、土器が密集し
て捨てられている。井戸は前期に多く掘削され、それらにも廃絶の際には土器が埋められた。竪穴住
居は認められなかったが、土器の量は膨大なものである。

弥生時代後期・中期も古墳時代と変わらず、調査区を南北に2条の溝が貫いている。これらの溝よ
り西は遺構が認められず、中期から後期の段階では利用されていなかったと思われる。これらの溝の
東側、調査区南東端では後期の竪穴住居、井戸を確認した。溝群の東側が集落域として利用されて
いたといえる。前期までさかのぼると、包含層は存在したが、遺構は確認できなかった。(氏平)



第9図 3区南壁土層断面図 (1/60)

第2節 弥生時代前期～中期の遺構・遺物

1 概要

1～3区で検出されたこの時期の遺構は、溝1～4がすべてである。当然のことながら、いずれも発掘調査の最終時期に検出されたため、後続時期の溝に切られ、片側の肩の検出に留まったものもある。

該当時期の出土遺物は、土器を中心に比較的良好な資料が得られているが、その多くは包含層から得られたものが大半を占める。土器以外の出土遺物としては、サヌカイト製の多様な石器があり、鏃の他に石包丁などが確認された。なおB1の管玉は、中期の装身具として貴重な資料である。(岡田)

2 溝

溝1 (第10～12図、図版42・49)

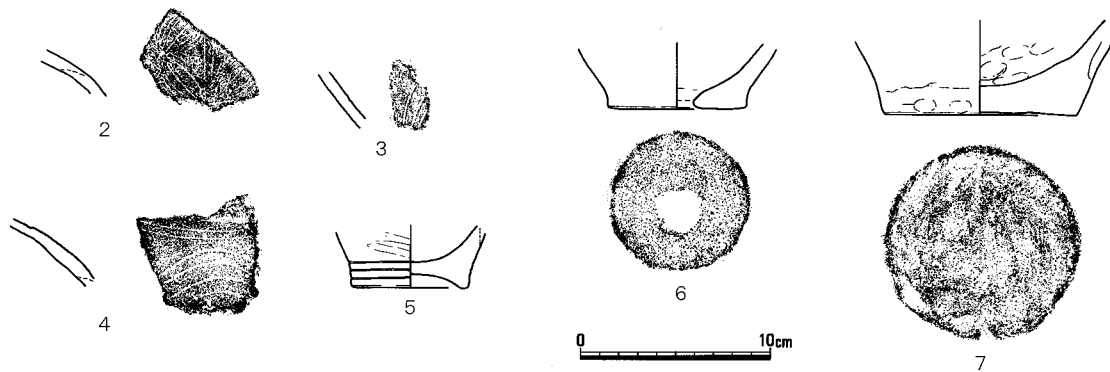
1・2区で検出された検出全長約65mの南北方向の溝であるが、全容の形状が判明したのは、1区の調査部分約40mである。

第12図に示す断面形では、深さ約60cm、幅2.5mを測り、削平による上層部分の消失を考慮すると、もとはかなり大規模な溝であったことが推察される。

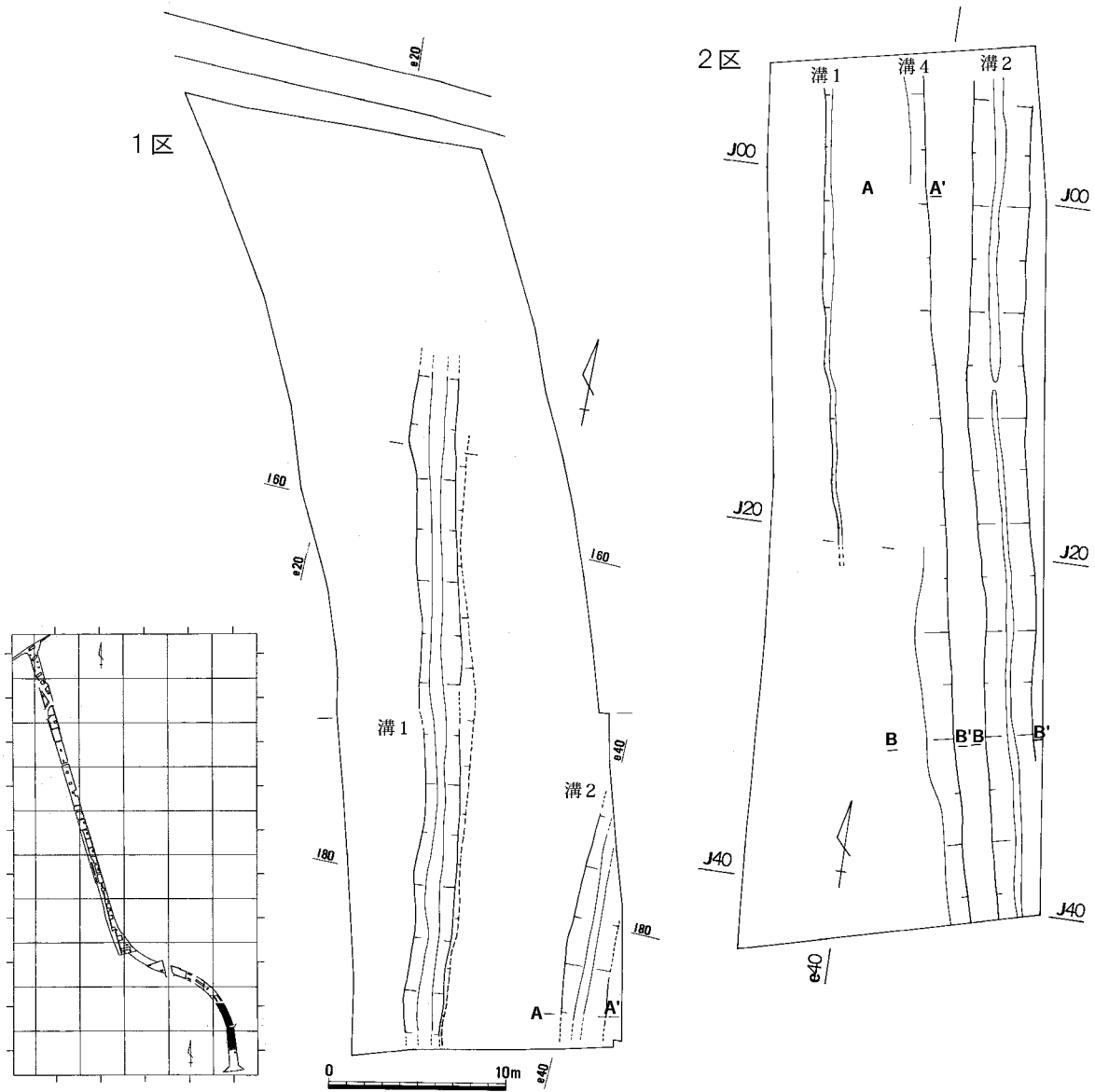
埋積土は、褐色系の微砂質土で少量の炭片が含まれている。最上層は灰黄褐色土が埋積し、上面での検出時にはやや不明瞭な平面形であった。

出土遺物としては第10図の土器が、確実に溝1に伴うものとして掲載した。すでに述べたように、上層では後続時期の遺構群が多数検出されているが、平面的に近接して検出した溝8などでは、前期の遺物が混入しており、それらを第14・15図に掲載した。

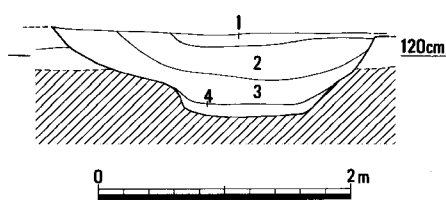
2～5は壺の破片である。2～4にはヘラ描きによる木葉文や重弧文が飾られる。5は壺の底部であるが、下部に2条のヘラ描き沈線が巡る。蓋の可能性も少なからず考えられる。6は甕であるが、底部に焼成後の穿孔がみられる。7は壺の底部で、内外面にユビナデによる調整痕跡が観察される。8～21は壺の体部の破片で、すべてにヘラ描き沈線による木葉文あるいは、重弧文が飾られる。いずれも小片のため、文様の単位は不明確であるが、木葉文には有軸と無軸とがみられ、それらは直線文



第10図 溝1出土遺物(1/4)

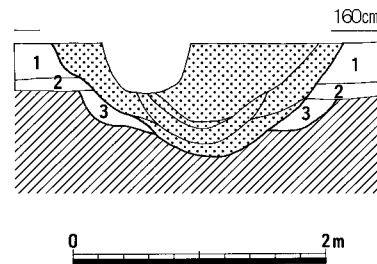


第11図 1・2区弥生時代前期～中期遺構全体図 (1/400)



- 1 灰黄褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土 (黄灰色土ブロック含)

第12図 1区溝1断面図 (1/60)

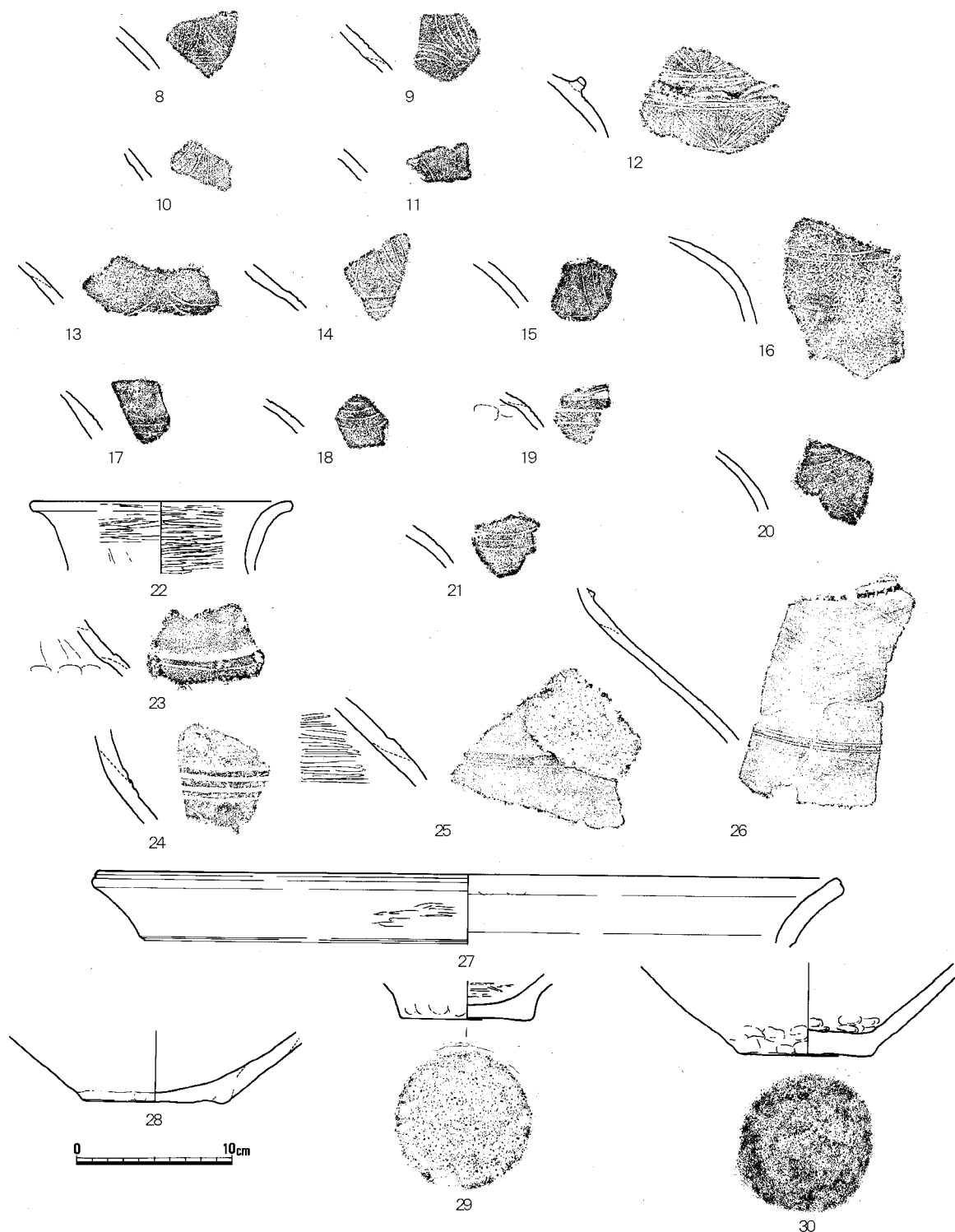


- 1 にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土
- 2 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質土
- 3 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土 溝1

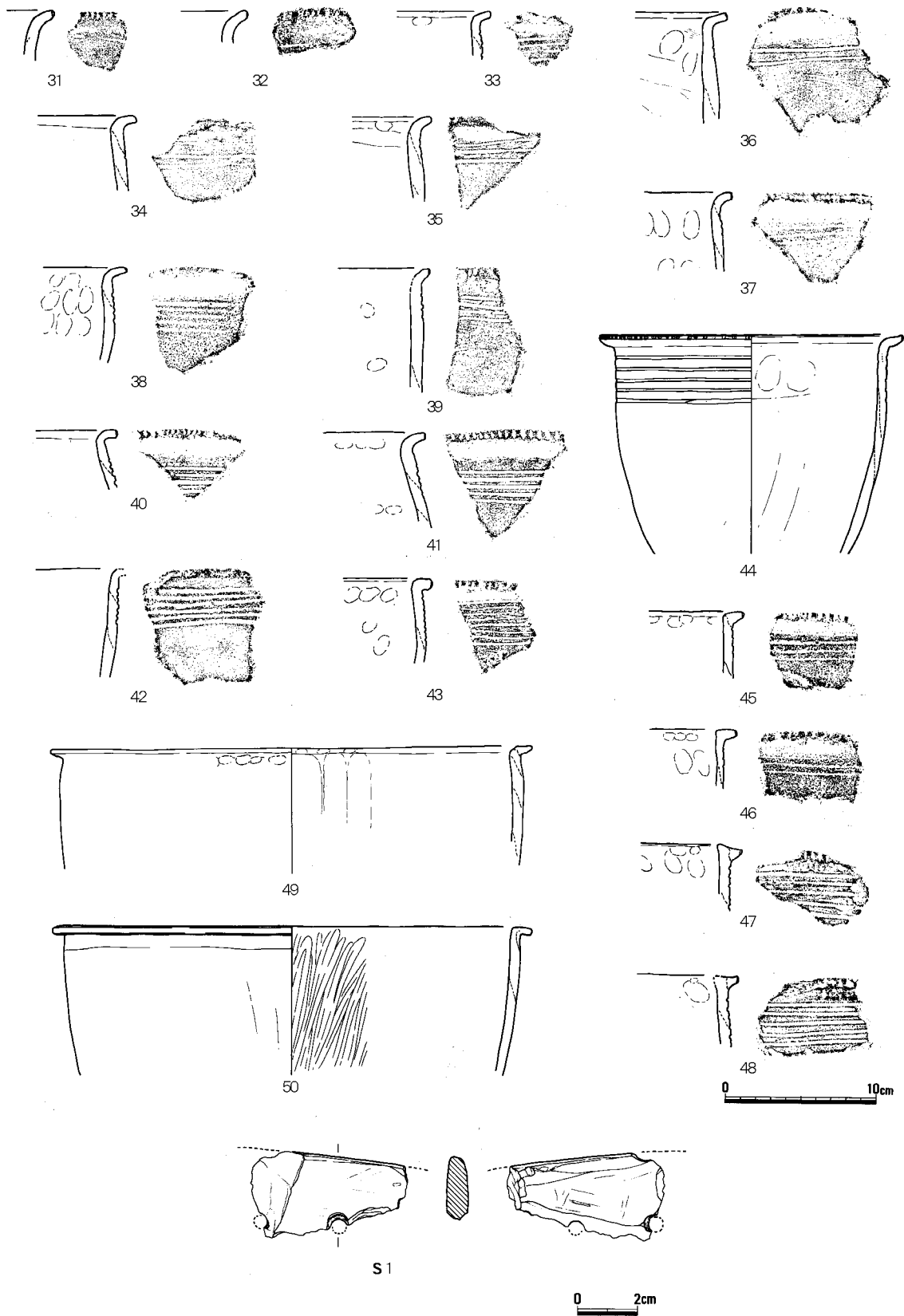
第13図 2区溝1断面図 (1/60)

で区画されている点に注意される。12は肩部に幅広な押圧文を施した貼付け突帯が巡り、上下に木葉文が飾られる。23・25には肩部に削り出された段がある。26はやや大型の壺で、頸部に刻み目を施した細い貼付け突帯、体部には沈線が巡る。28～30はいずれも壺あるいは鉢の底部である。

第15図31～48は、すべて甕で口縁端部が外反する。口唇部にはほとんど刻み目が飾られるが、49・50のいわゆるL字口縁の甕の口唇部にはみられない。これらの甕の体部は、断面の観察ではほとんどすべてが内傾接合である。また、体部上位の平行ヘラ描き沈線は、数条から5条以上に多条化するも



第14図 1～3区 遺構に伴わない出土遺物1（弥生時代前期；1/4）



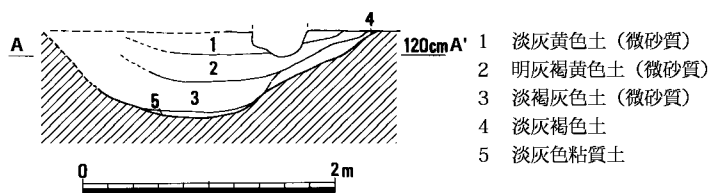
第15図 1～3区 遺構に伴わない出土遺物1（弥生時代前期；1/4・1/3）

のもみられ、形式的に時期幅すなわち前期中葉から後葉に比定されるだろう。S1は3区で出土した磨製石包丁の破片である。周辺での稲作を物語る貴重な遺物と考えられる。（岡田）

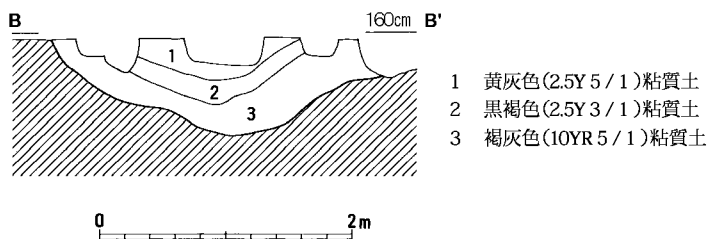
溝 2 (第11・16～19図、図版42)

調査区の東側に検出した溝である。溝は、1区から3区まで貫流するものであるが、1区では、調査区の南東端部をかすめるような位置に検出した。2区では調査区の東壁に沿って縦断するように検出し、3区では、北東端部を斜めにかすめるような位置に検出した。溝の方向は、ほぼ南北方向を向くものであるが、緩やかに東に曲がり弧状を呈している。調査した全長は、約75mを測る。検出面での溝の幅は2.8～3.3mを測る。断面形をみると、底面は少し窪むが、平坦面に近いものがある。壁面は少し開きながら立ち上がる。溝は、基本的には3層の土で埋まるもので、いずれも微砂質を帯びた粘質土である。検出面からの深さは、70～80cmを測る。溝の流れる方向は、北から南に流れていたものと考えられる。

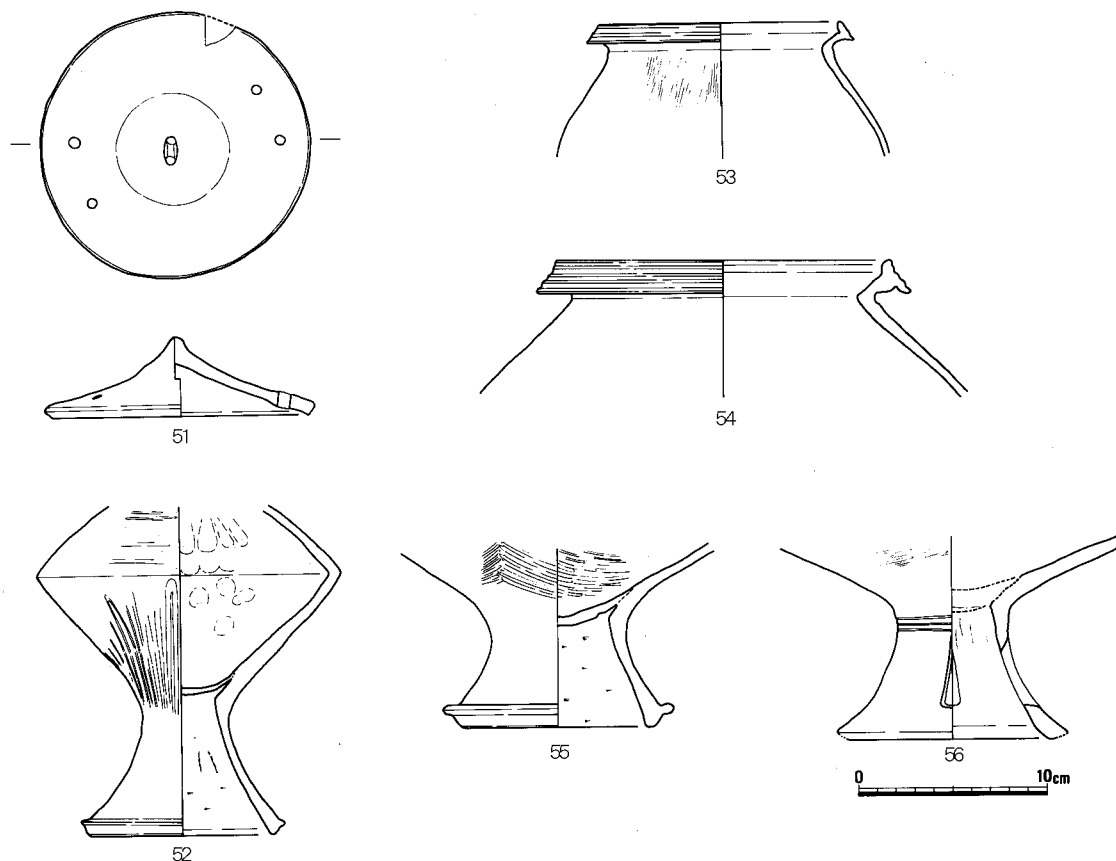
出土遺物は少ない。51は、蓋である。断面形は円錐状を呈しているが、高さは低い。頂部は扁平で平面形は楕円形を呈している。縁部には、2個一対の円孔が対称的な位置に2か所穿たれる。52は、脚付壺である。外面はヘラミガキ、内面はユビオサエとユビナデによる調整が施される脚部と体部の



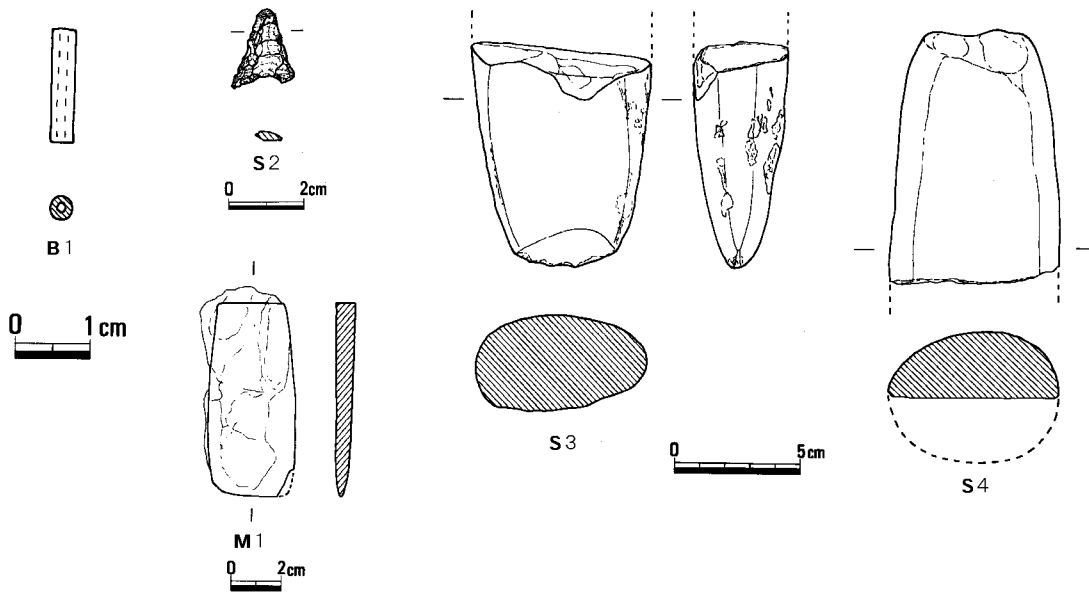
第16図 1区溝2断面図 (1/60)



第17図 2区溝2断面図 (1/60)



第18図 溝2出土遺物1 (1/4)



第19図 溝2出土遺物2 (1/1・1/2・1/3)

境は円盤状の粘土で充填される。53・54は、甕である。口縁端部が上下に拡張され、外面に凹線が施される。胴部外面はハケメ、内面はナデによる調整が施される。55は、脚付鉢である。体部の内外面は、ヘラミガキが施される。脚部と体部の境は円盤状の粘土で充填される。56も脚付鉢である。外面の調整は表面剥離のため不明である。脚部には三角形の透かし孔が施される。体部と脚部の境は、円盤状の粘土で充填される。

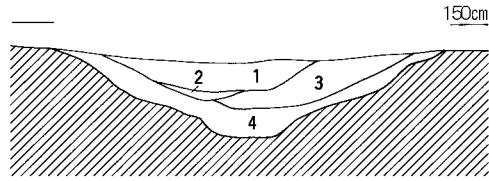
B1は、碧玉製の管玉である。長さ15.3mm、直径3.2mmを測る細長い型式のものである。円孔は、両面から穿孔するもので、径1.3mmを測る。研磨は丁寧で光沢があり、明緑色を呈している。M1は、板状鉄斧である。平面形は、中央部が少し大きく、両端に少し細くなる。刃部は両刃に造られている。頭部は平坦で、厚さ8mmを測り、刃部に向けて厚さを減じてゆく。最大長77mm、最大幅35mmを測る。S2は、凹基式の石鏃である。基部の一部を欠損している。石材はサヌカイトである。S3は、磨製蛤刃石斧である。欠損しており刃部のみの出土である。石材は、玢岩である。S4も磨製蛤刃石斧である。刃部を欠損している。石材は、玢岩である。溝の時期であるが、出土遺物から弥生時代中期後半と考えられる。(井上)

溝3 (第20～22図、図版44)

溝3は3区中央東と南東で検出された、南北に流れる溝である。確認できた部分では、ほぼ直線に掘削されている。調査区中央部では東端のみ確認できたが、南東端では全体を掘り下げることができた。南東端での断面は緩やかなV字形を示すが、中央部がさらに1段下がるような形である。断面図の第1・2層を上層、第3層を中層、第4層を下層として掘り下げたが、後述するとおり各層出土遺物で時期の差は認められない。幅は最大3.07mで、深さは最大73cmを測る。底面標高は南端で65cmである。底面の傾斜は、6m進んで約3cm南側へ下がるという、非常に緩やかな流れであった。

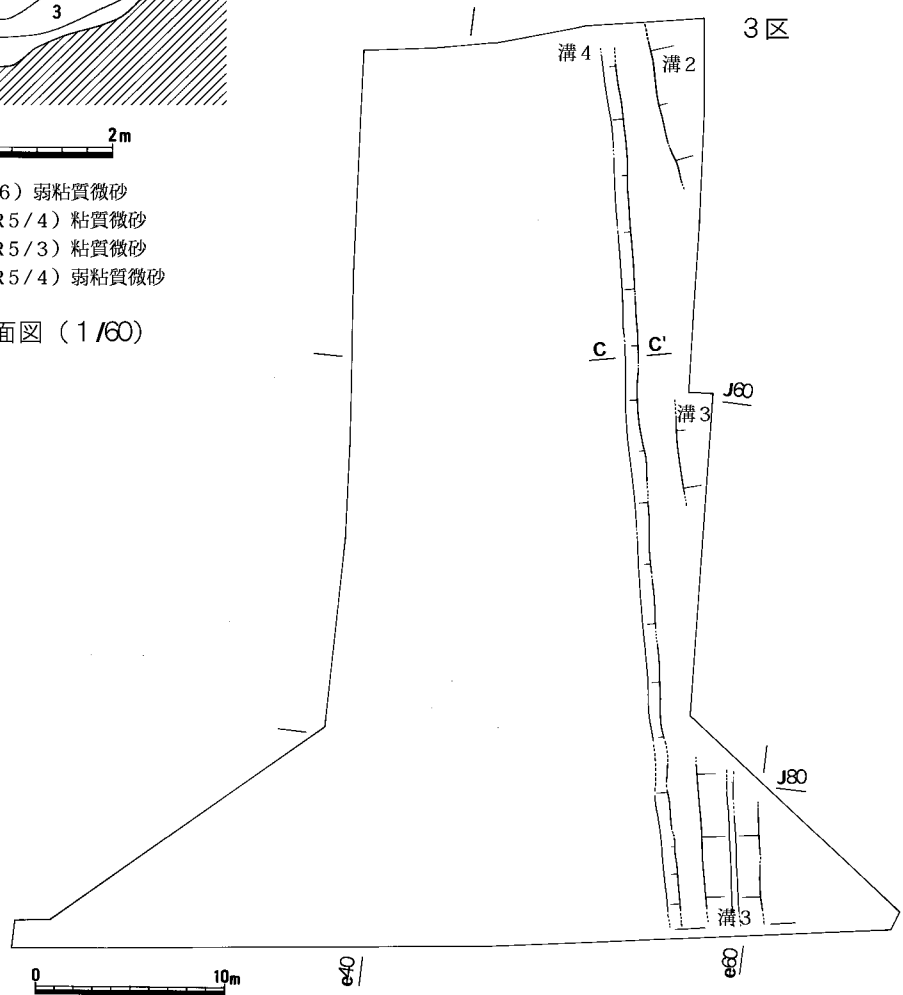
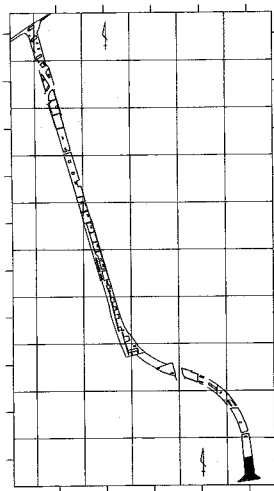
出土遺物には、土器と石器がある。いずれも散在していたが、破片だけでなく完形に近い形に復元できる60なども見られた。

土器は、出土量は少ないながら壺・甕・高杯が見られる。出土層位は、58が上層、60が中層、57・59が下層である。壺は直口の57や短頸気味の58がある。57の穿孔は2つが1対になって3か所あった



- 1 明黄褐色 (10YR 6/6) 弱粘質微砂
- 2 にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質微砂
- 3 にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 粘質微砂
- 4 にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 弱粘質微砂

第20図 溝3断面図 (1/60)



第21図 3区弥生時代中期遺構全体図 (1/400)

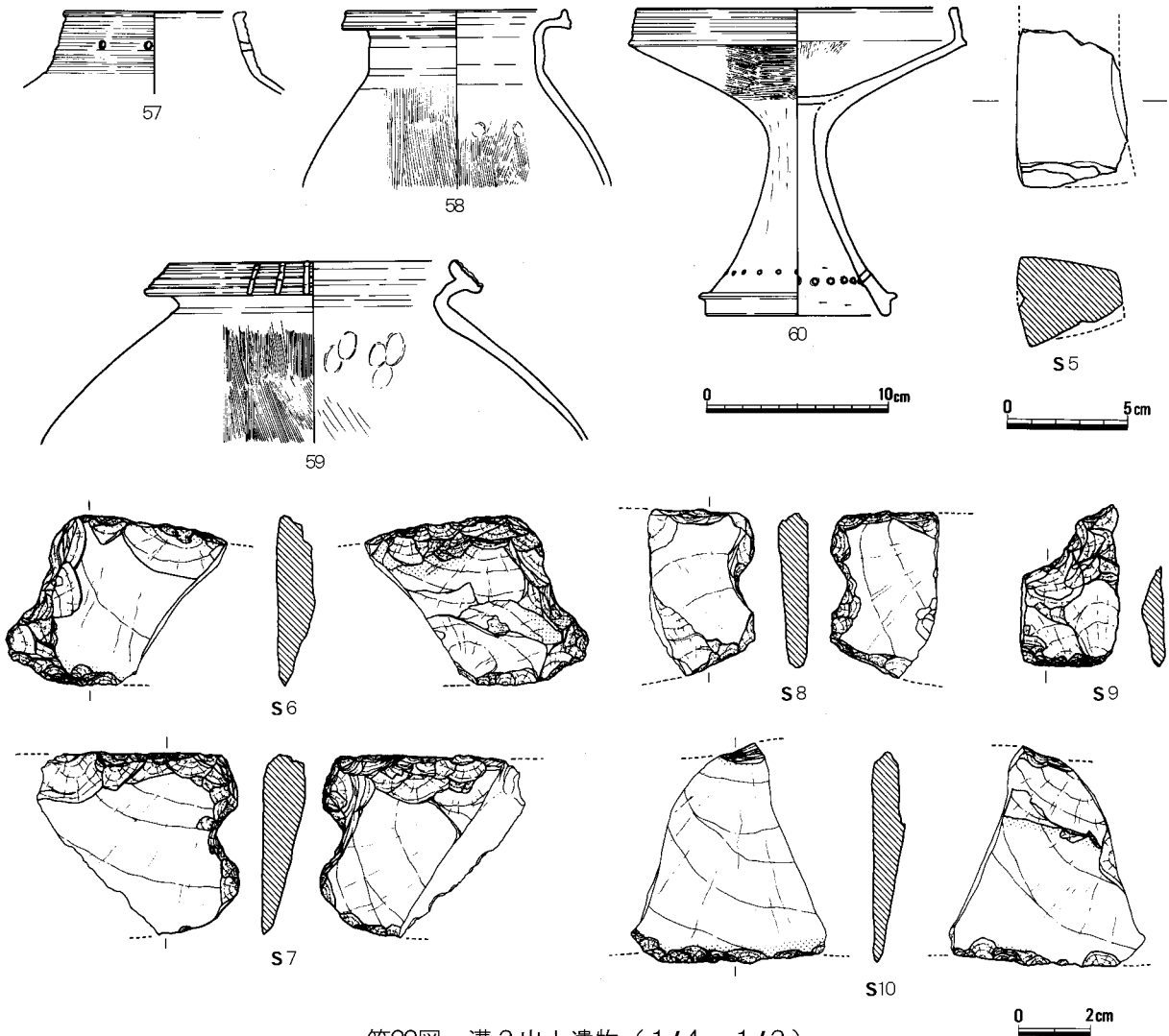
ものと思われる。58の口縁は折りこんで上方に拡張する。甕は大型品59がある。口縁外面に棒状浮文を施し、3本で1対になるものが2か所残存していた。高杯は直立した口縁外面に凹線を施す60で、脚部の穿孔は円形である。穿孔は19個が残っており、総数は25個と想定できる。これら土器の時期は出土層位によって差はみられず、全体として中期後葉といえる。

石器であるが、器種がわかるものはすべて図示した。出土層位はS6・S8・S10が上層、S5・S7・S9が中層である。S5は砥石片で、S6～S8は打製石包丁の破片である。S9は両側縁を欠損するため全形が不明であるが、石包丁を転用したスクレイパーの可能性はある。S10は石包丁転用スクレイパーと考えられる。S6・S10では表面に珪酸の付着がみられた。

最後にこの溝と溝2との関係であるが、溝2と流れる方向が同じで、出土遺物もほとんど同じ時期であることから、同一の溝である可能性が高いことを指摘しておきたい。(氏平)

溝4 (第21・23・24図、図版49・63)

溝4は2区から3区南端で検出された、南北に流れる溝である。弥生時代後期の溝6に西側を切られるため、東肩部のみが残存していた。溝2・3の西側に位置し、溝2・3との間を北側で最大2.7m、南端で最小1.4mあけて併走している。溝2・3と同じく、調査区内をほぼ直線に北から南へ流れる。

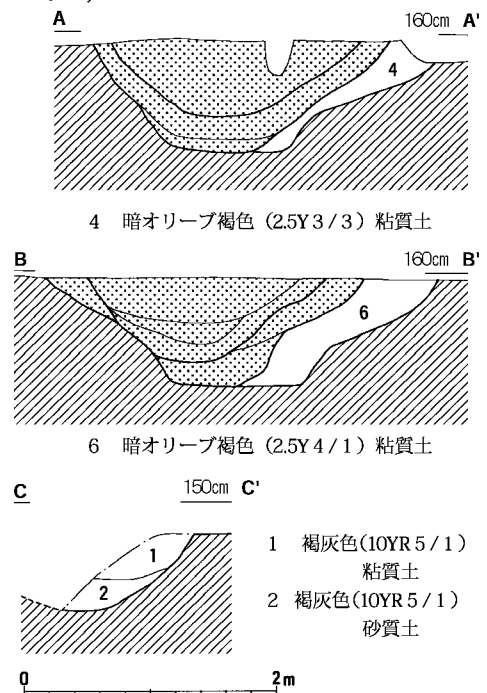


第22図 溝3出土遺物 (1/4・1/3)

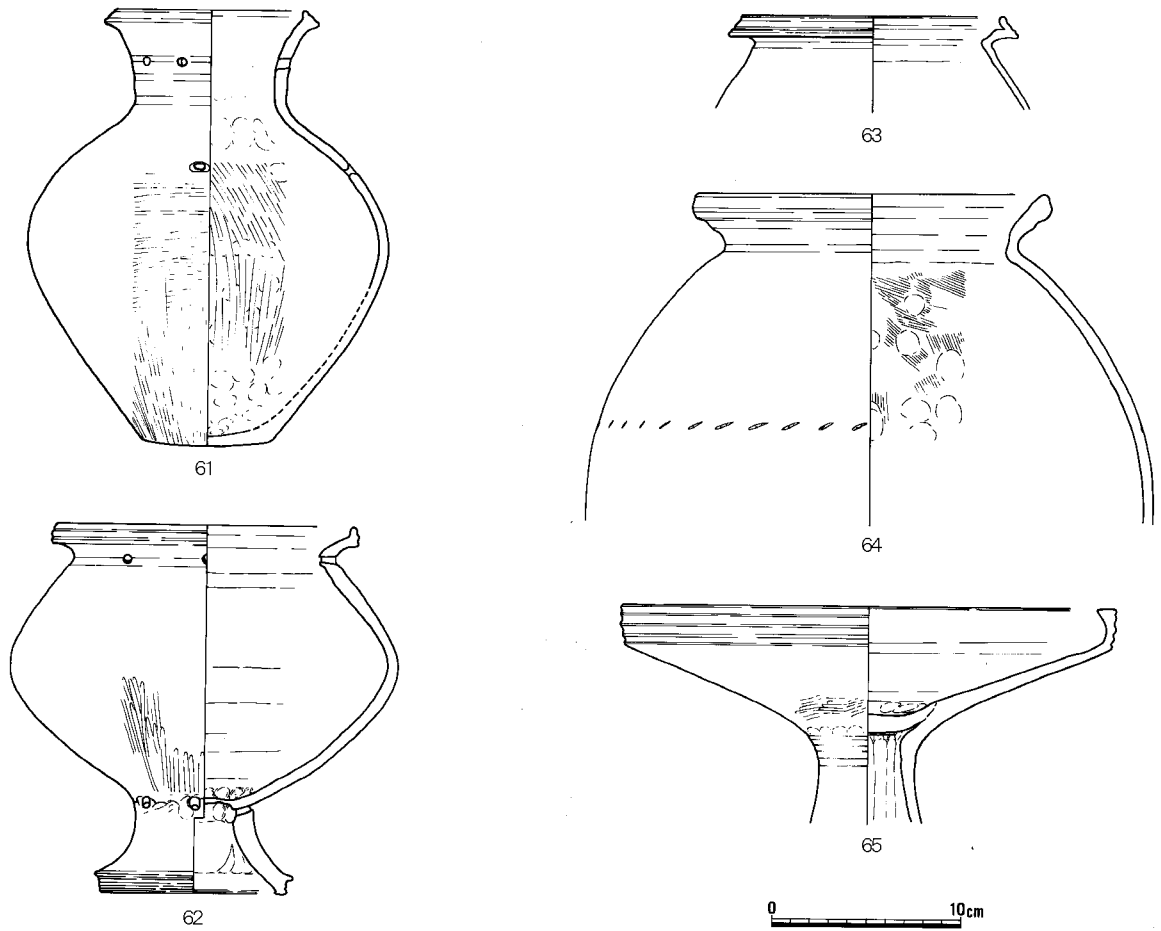
埋土の土質と色調が基盤層に似るため、当初は土層断面でも把握するのが困難であり、平面での検出はさらに難しかった。ところが、溝6の掘り下げ中に中期の土器が壁面にかかって検出されたことや、溝6の底面東側で基盤層が確認できなかったことにより、溝4の存在がわかったのである。

断面は皿形を示すが、中央部がさらに1段下がるような形である。埋土は分層が困難で、全体を1層でしか認識できなかった部分が多い。

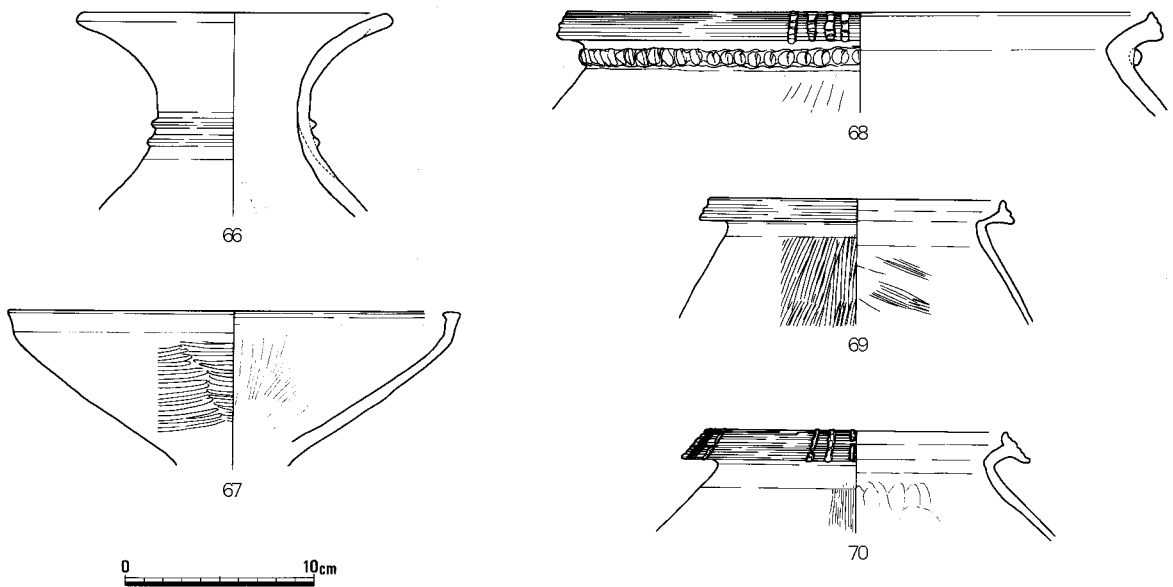
幅は溝6に西側を切り取られていたため、よくわからない。さらに2区中央では、溝6のため全く消失している。深さは、2区では検出面から最大91cm、3区では最大70cmを測る。底面標高は2区北端で74cm、2・3区境で69cm、3区中央66cm、3区南端で60cmを測る。底面傾斜を測ってみると、2区では49mで途中凹凸はあるものの5cm、3区



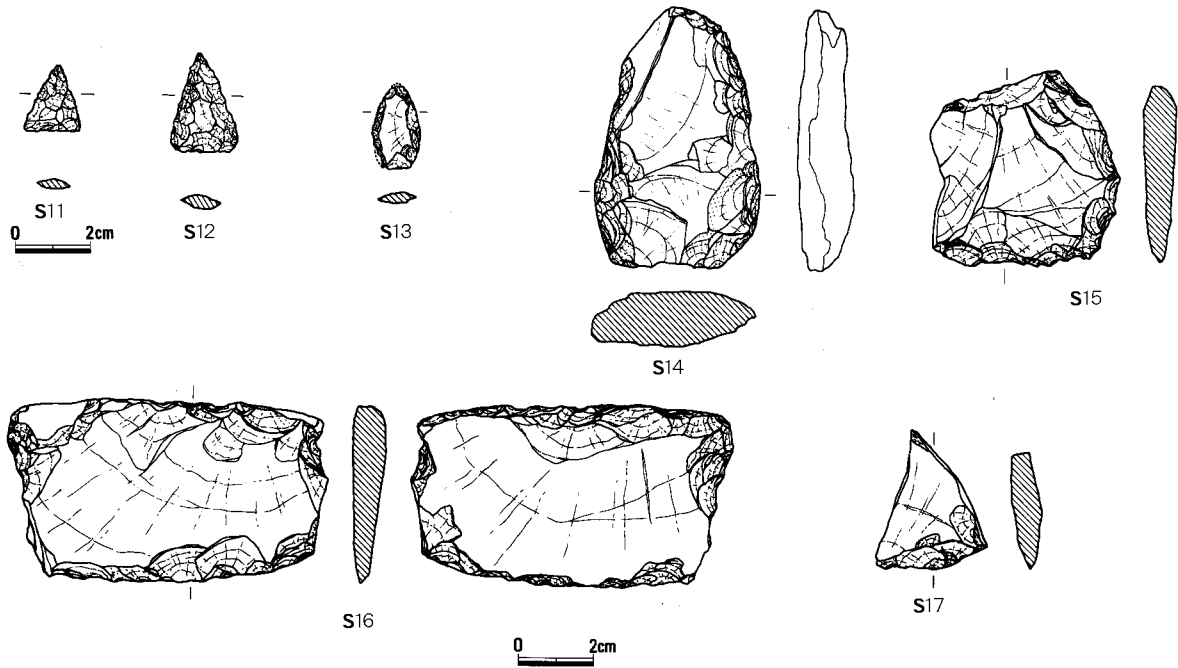
第23図 溝4断面図 (1/60)



第24図 溝4出土遺物（1/4）



第25図 遺構に伴わない出土遺物1（弥生時代中期：1/4）



第26図 遺構に伴わない出土遺物2（石器：1/2）

では45mで9cm南側へ下がるといったもので、これもまた非常に緩やかな傾斜である。

出土遺物としては、土器がある。ここで取り上げたもののうち、61・65は溝6からの出土であるが、この溝に由来すると考えられる遺物で、それ以外は溝埋土中からの出土である。61の頸部穿孔は、2個で1対になるものが2か所ある。62の頸部・脚部穿孔は、それぞれの場所において2個で1対になるものが2か所ある。64は口縁部内外面をヨコナデで調整する。これら出土土器の時期は、64にやや古い傾向がうかがえるものの、全体として中期後葉と考えられる。（氏平）

3 遺構に伴わない遺物

ここでは、中撫川遺跡出土の弥生時代中期に相当する遺物を扱う。今回の調査区が微高地の西側で、遺構が溝だけということもあるが、総じて遺物は少なかった。

土器の代表的なものを挙げていくと、66の壺は3区南側包含層出土である。内外面の調整は不明で、外面に貼り付け突帯がある。時期は前期後葉～中期前葉にあたる。67の高杯と68・69の甕は1区南側で溝5に混ざって出土した。68は棒状浮文4本が1か所のみ残存している。70の甕は3区北側の包含層出土である。棒状浮文が2か所残存している。67・68は中期中葉、69・70は中期後葉の時期に相当する。

石器では石鏃・石包丁・スクレイパーがあり、素材はいずれもサヌカイトを用いる。S11は1区で表面採取されたもので、S12も1区から出土した。S13～S15は3区の溝6から、S16は3区溝12から、S17は3区井戸12から出土したが、いずれも出土した遺構の時代より以前の遺物で、混入と考えられる。S13は最大長21.3mmの石鏃である。

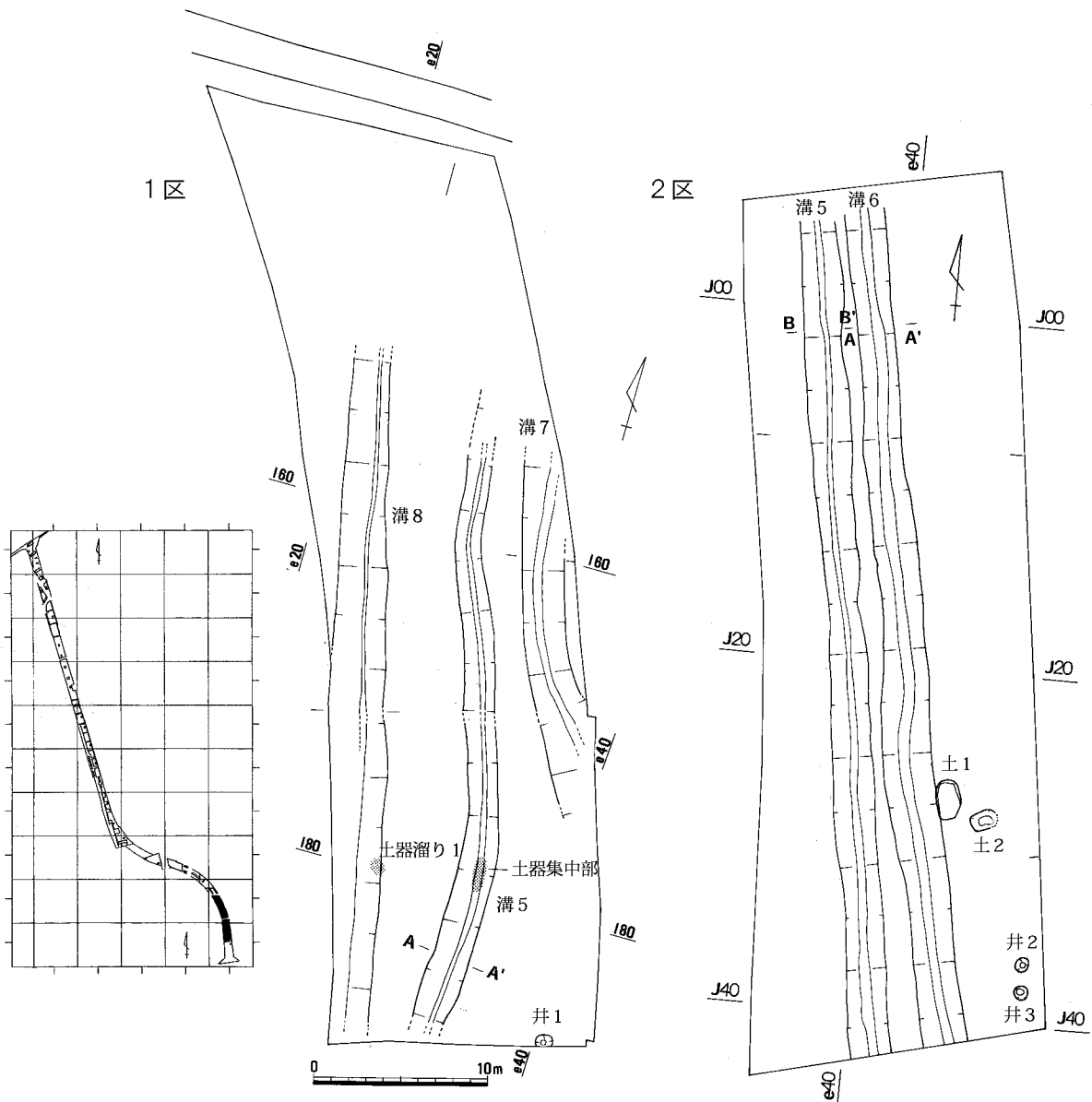
S14は最大長78.5mm、最大幅43.5mmの石鏃で、側縁と刃部に使用による磨滅が見られる。S16は最大長85.0mm、最大幅48.5mmの打製石包丁で、ほぼ完形と考えられる。（氏平）

第3節 弥生時代後期の遺構・遺物

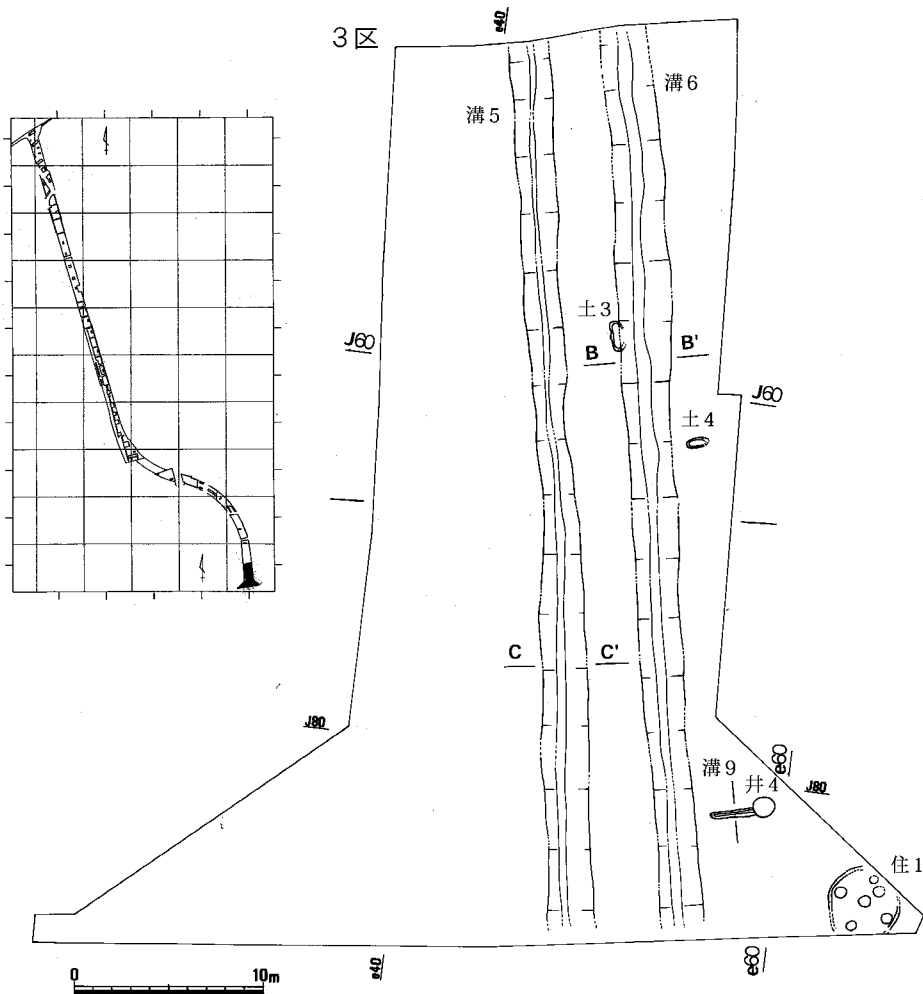
1 概要

弥生時代後期は、中期と同様に調査区内に沿って南北に溝が流れている様子が引き続きみられる。地形は東から西へ低く、1区から2区の途中までは北側へ、2区から3区は南側へ低い。全体として、微高地西側の縁辺部であることに変わりはない。井戸は後葉を中心に、合計4基を検出した。遺構密度は、3区南東端を除いて低い。出土遺物を概観すると、土器は後期中葉から後葉のものが大半を占め、それより前の時期の土器はほとんどみられない。

調査区ごとに概要を述べると、1区では、北端は中世の河道に切られるため、遺構は残っていない。



第27図 1・2区弥生時代後期遺構全体図 (1/400)



第28図 3区弥生時代後期遺構全体図 (1/400)

それ以外の部分で、調査区幅いっぱい北側へ向かって流れる3条の溝を確認した。最も西側の溝8は西の調査区外から流れ、東側の溝7は調査区東側から流れてくる。中央の溝5が2区・3区でも引き続き検出された溝である。溝5・8内には土器の集中して廃棄された場所があった。調査区内唯一の井戸1は調査区南東の壁面で検出した。

2区では、1区から続く溝5と、それと並行して流れる溝6が検出された。溝8の続きが認識できなかったが、2区では調査区西端に古墳時代の溝12が存在するので、これにより切られている可能性が高い。溝7の続きも認識できなかった。溝6東側では、南側で土壇と井戸それぞれ2基が点在するにすぎない。この時代には、すでに弥生時代中期の溝3は埋没しているはずだが、その上でも遺構はあまり多くない。調査区の中央東～北東部分では、溝6と調査区境の間に遺構の空白地帯が存在する。溝5西側はおそらく低位部であろう。2区の遺構の状況は、後述する3区の状況と類似している。

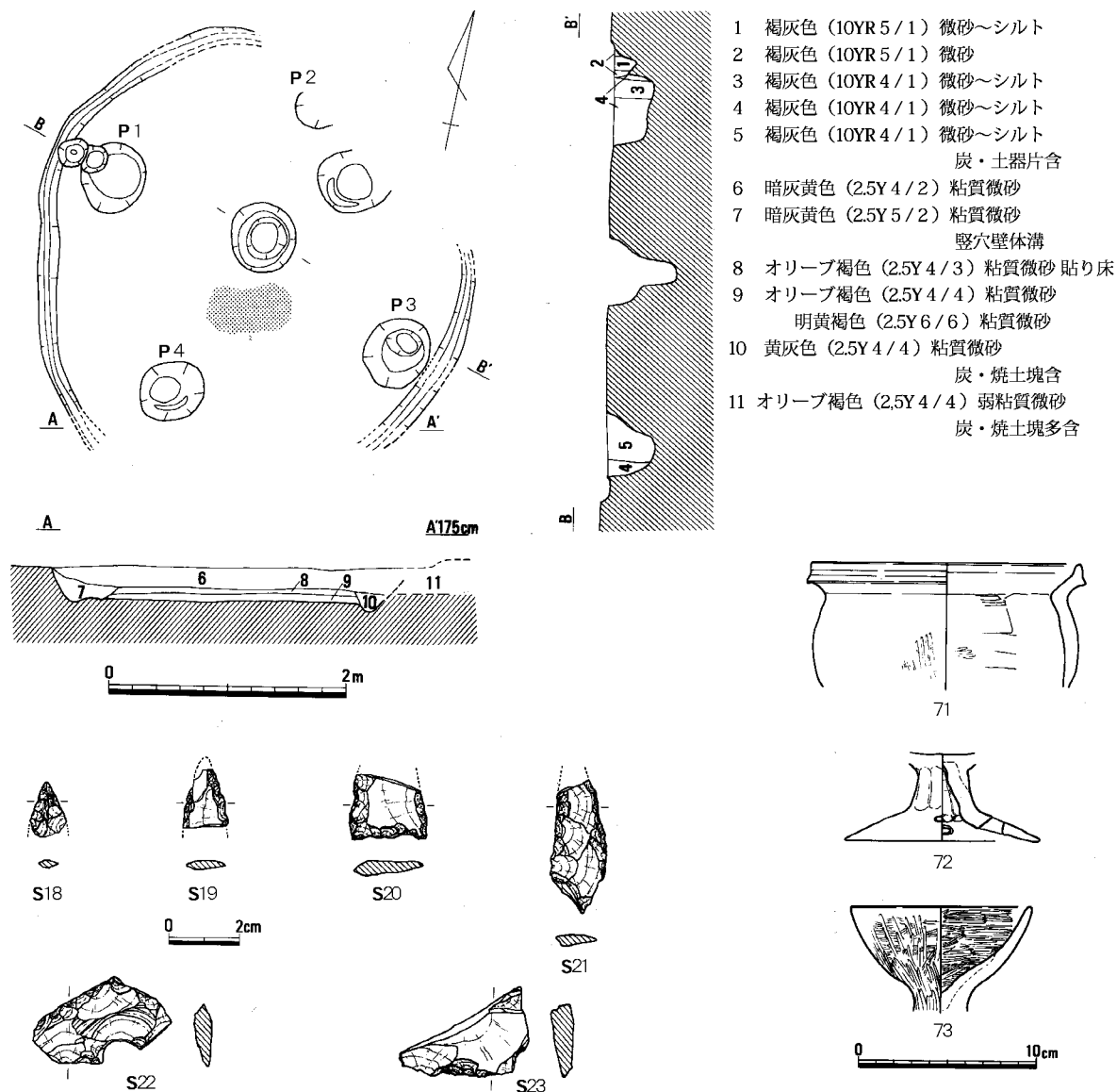
3区は、ほぼ中央を溝5・6の2条の溝が北から南へ貫いている。その東側は、南端で竪穴住居1が認められ、井戸4や土壇4などが確認できた。このような3区南東端の状況から、この部分は微高地上であるといえよう。溝5の西側は低位部だが、その部分には古墳時代の溝12や南西端の下がり・溝群があり、それらに切られている部分が多い。また、古墳時代の遺構に切られなかった部分では、弥生後期の遺構は認められなかった。ただし、溝5より東側に比べさらに地形が低くなることから、生活するのは困難であっただろう。削平がなくても、溝しか存在しなかった可能性が高い。(氏平)

2 竪穴住居

竪穴住居 1 (第28・29図、図版48)

竪穴住居 1 は、3 区南東端に位置する円形の住居である。この住居の東側に焼土・炭層を含む層 (第11層) が存在し、住居はこの層を切っている。直径は3.9mで、深さは20cmである。支柱穴はP1～P4の4本を確認し、柱穴間の距離は1.7～2.1mを測る。中央にある穴は、断面形状と柱痕跡の存在から、住居に伴わない柱穴の可能性が高い。また、この住居床面には炭の集中範囲がみられた (床面のトーン部分)。

出土遺物には石器と土器があるが、石器は埋土中からの出土である。S18～S20は石鏃、S21は石鏃か錐で、S22・S23は使用痕ある剥片である。いずれも混入の可能性が高い。土器は床面からは破片しか出土してしない。図示したのは住居の位置を確定する以前に検出したもので、厳密に住居出土とは言い難いが、おそらく埋土中と思われる。土器の示す時期から、この住居は弥生時代後期の後葉、鬼川市Ⅲ式併行期に埋没したと考えられる。 (氏平)



第29図 竪穴住居 1・出土遺物 (1/60・1/4・1/2)

3 井戸

井戸1 (第27・30図)

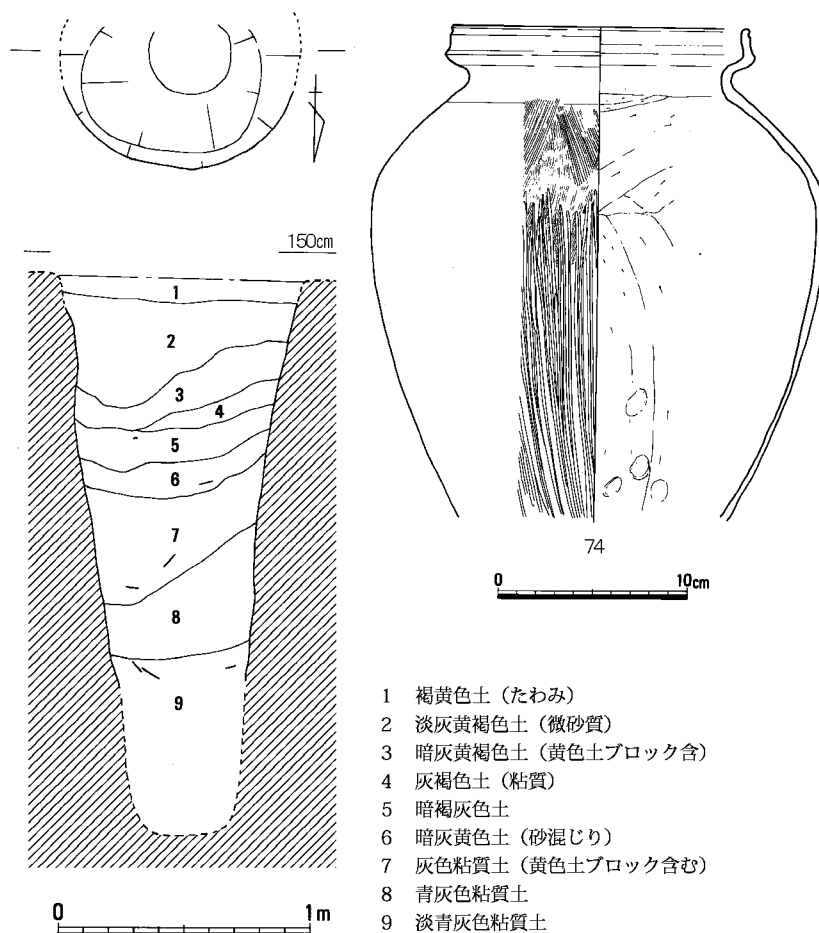
1区の南東隅、溝5の東で検出された直径約90cm、深さ約2.1mを測る円形を示す。

埋積土は粘質で、灰色を帯びた黄色あるいは褐色系の土で占められる。

井底は確認できなかった。第6～9層にかけて弥生土器甕片が出土しているが、いずれも使用されて煤が付着した細片である。

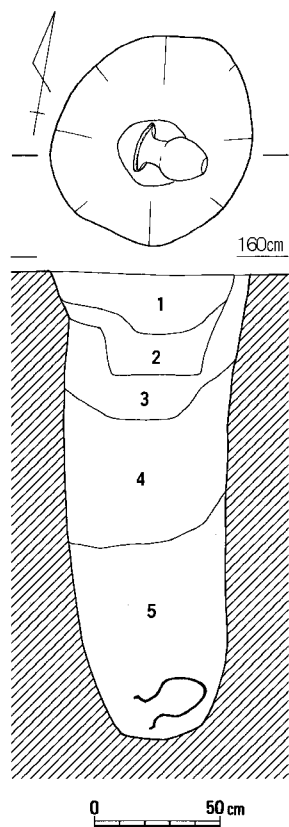
74は唯一復元可能となり実測した甕である。

時期的には、後期後半に比定され、溝5とほぼ同時期と考えられる。(岡田)



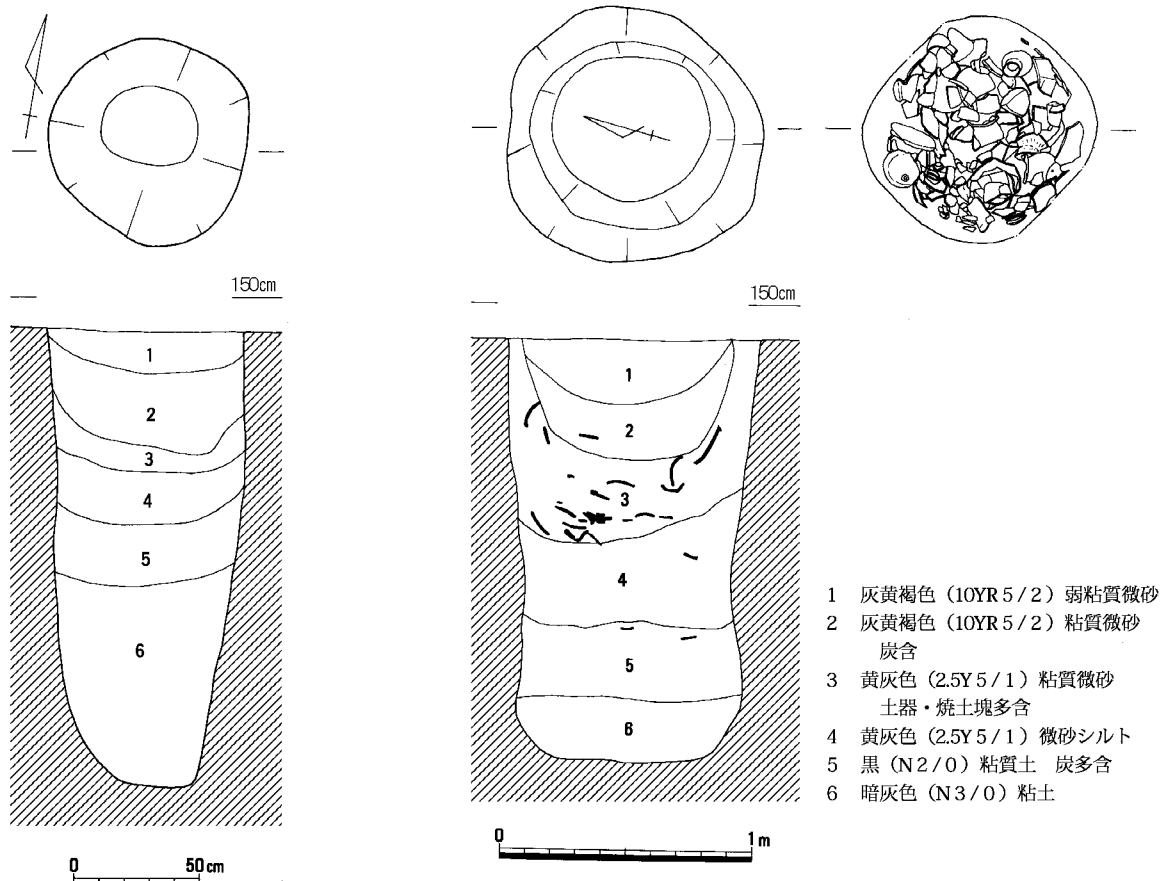
- 1 褐黄色土 (たわみ)
- 2 淡灰黄褐色土 (微砂質)
- 3 暗灰黄褐色土 (黄色土ブロック含)
- 4 灰褐色土 (粘質)
- 5 暗褐灰色土
- 6 暗灰黄色土 (砂混じり)
- 7 灰色粘質土 (黄色土ブロック含む)
- 8 青灰色粘質土
- 9 淡青灰色粘質土

第30図 井戸1・出土遺物 (1/30・1/4)



- 1 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
- 2 黒褐色 (10YR 3/1) 粘質土
- 3 灰黄褐色 (10TR 4/2) 粘質土
暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘土塊、
褐色 (10YR 4/6) 砂質土塊多含
- 4 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土
- 5 黒色 (5Y 2/1) 粘質土

第31図 井戸2・出土遺物 (1/30・1/4)



- 1 黒褐色(10YR 3/1)粘質土
- 2 黒褐色(10YR 3/2)粘質土
- 3 褐色(10Y 4/1)粘質土
- 4 黒褐色(10YR 3/1)粘質土
- 5 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘質土
- 6 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘質土

第32図 井戸3 (1/30)

第33図 井戸4 (1/30)

井戸2 (第27・31図、図版48)

2区南東部に位置し、平面形は径約80cmの円形で、断面はU字形である。検出面からの深さ約1.85m、底面の海拔高は-33cmに達する。遺物量は少ないが、井戸底で完形の長頸壺76が、口をやや下方に向け横向きで見つかった。76は出土時には暗緑色を呈しており、グライ化したものである。75は直口壺頸部である。これらの時期は弥・後・Ⅲと考えられ、井戸使用もこの時期で終了したと思われる。76は完形なので、井戸廃絶に伴い祭祀が行なわれた可能性が示唆できよう。第3層は人為的埋め戻し、第1・2層は掘り返しと考えられるがこの層からも壺76と同時期と思われる土器片が出土し、短時間に上層まで埋まったものと考えられる。(稲谷)

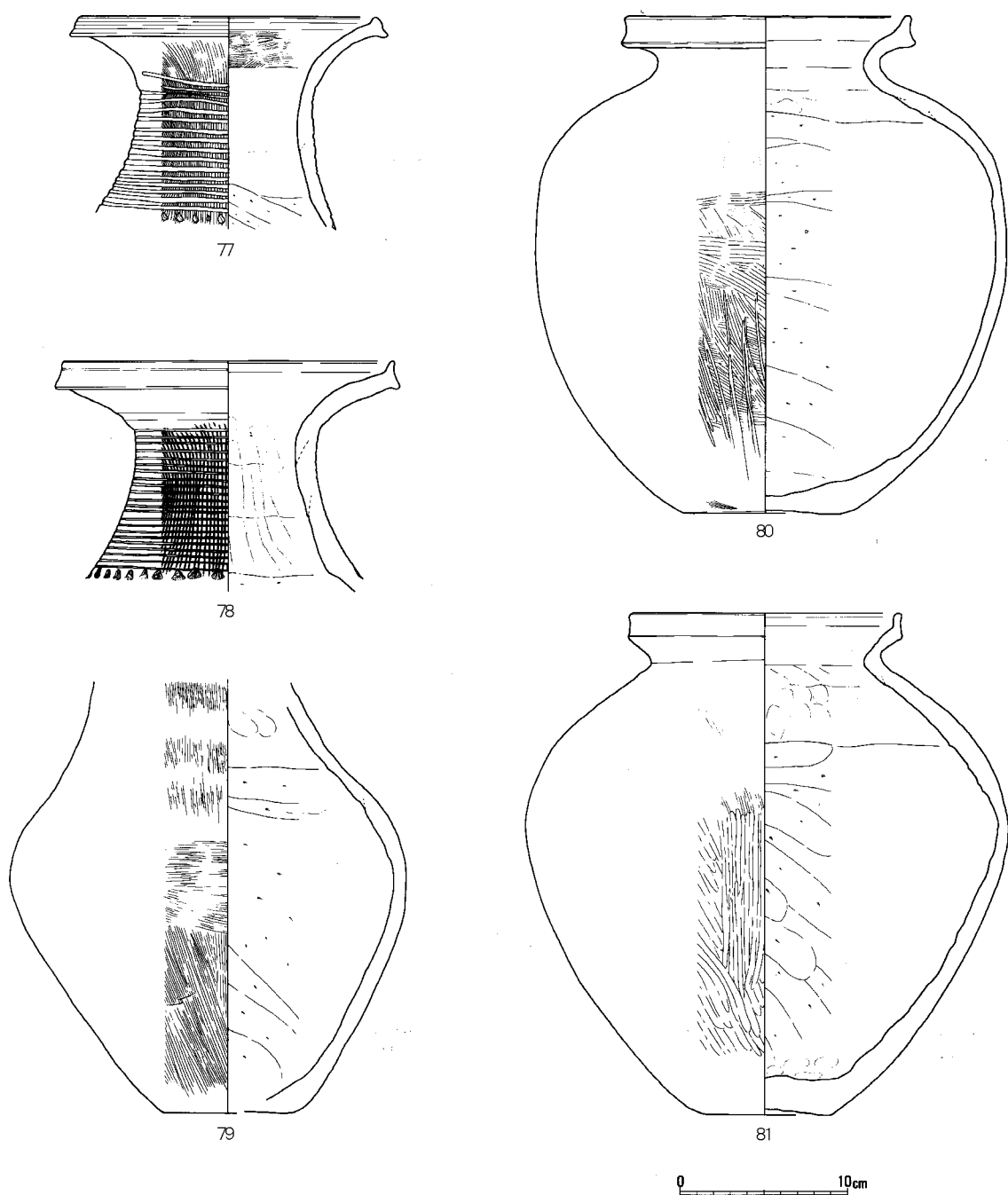
井戸3 (第27・32図、図版48)

2区南端、井戸2の約2m南に位置する。平面・断面形態、規模ともに井戸2と似たものである。埋土は6層に分層できるが最下層は遺物を全く含まず、粘土が厚く自然堆積した状態であり、第1～5層も土器細片をわずかに含むのみであった。時期の判明する遺物がないため井戸の使用・廃絶時期を断定することはできないが、井戸の形態や立地から弥生時代後期後半頃としておく。(稲谷)

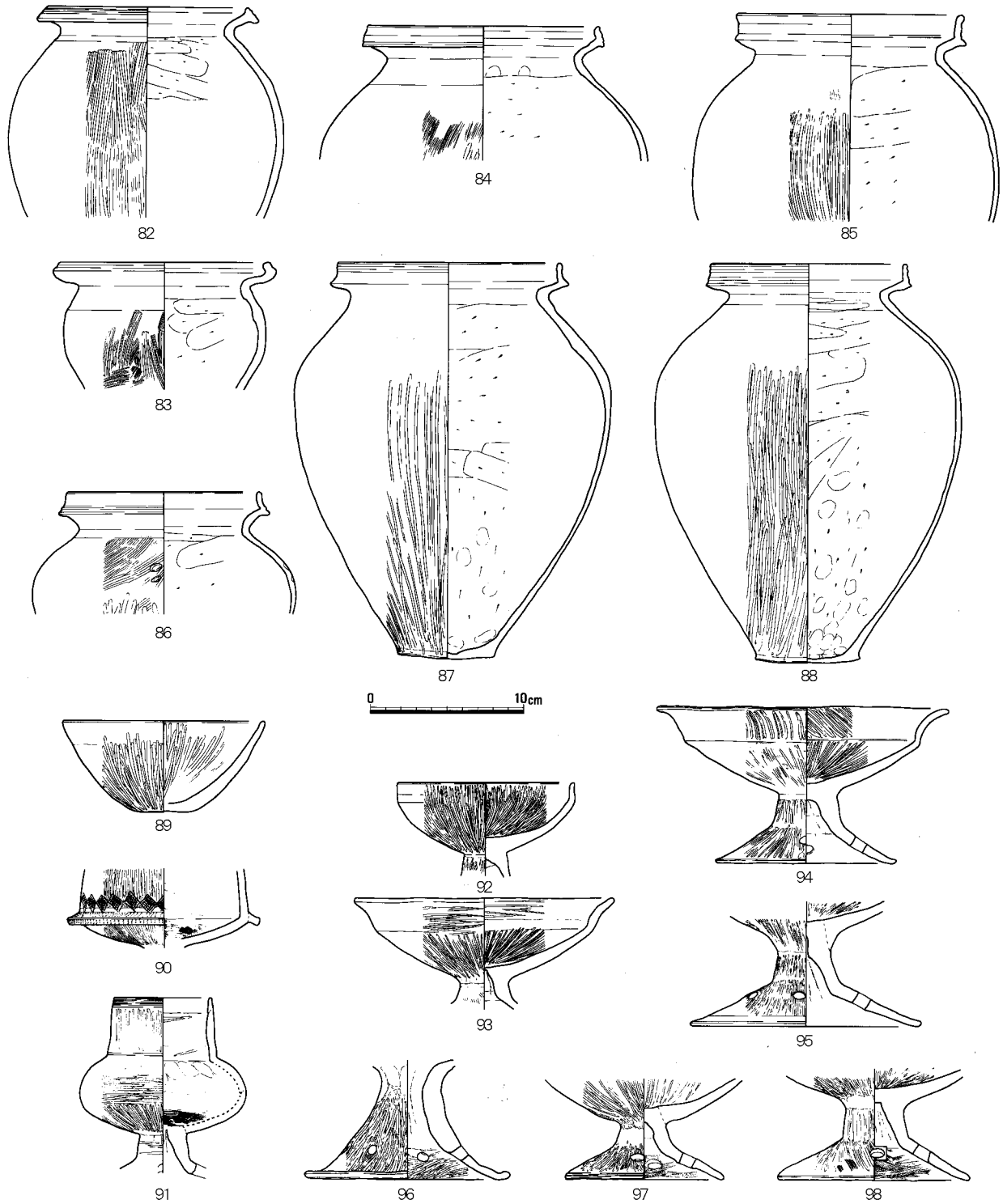
井戸4 (第28・33～35図、図版50)

井戸4は3区南東端に位置する。平面はやや不整な円形で直径1.0m、深さは検出面から最も深いところで約1.7mを測る。土層は6層に分層できる。第1層と第2層は土質・色調が類似し、遺物は少ない。第3層は大量の土器を含んでいるが、焼土が非常に多く、土器の間に層状に堆積している部分も

確認できた。第4層は均質な土層で遺物は少ない。第5層はもとの形状がわからないほど細かい炭化物を多く含む層で、木片・種子と土器片を含んでいる。このような土層の観察から、第1・2層は井戸埋没後の窪みに堆積した層、第3層は土器片と焼土などを集積した層、第4層は井戸を埋めた土の可能性が高く、第5層が井戸使用後か使用中の堆積土、第6層は均質な粘土である。第3層の土器の堆積状況は、井戸の終焉に際してわざわざ土器を大量に廃棄したものといえよう。出土遺物は土器で、図示したものは89が第2層、90が第4層、96が第5層出土で、それ以外は第3層から出土した。第3層の土器は整理箱にして約3箱であるが、完形品は存在せず、台付直口壺91・高杯94の残存状況がよい程度である。第3層の土器をみると、壺は長頸・短頸がある。甕はほとんど二重口縁で、底部は平底で器壁が薄い。高杯は脚が短く、杯部のヘラミガキは放射状である。このように器種が一通り揃っ



第34図 井戸4出土遺物1 (1/4)



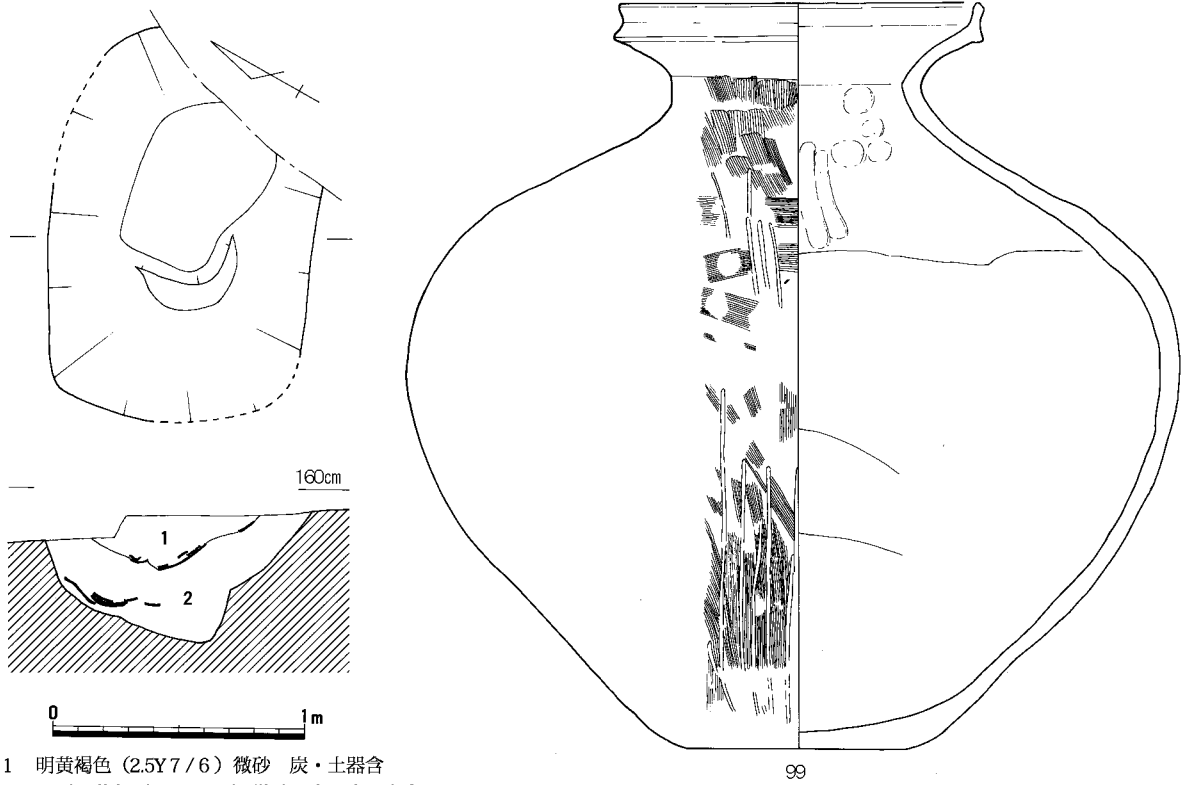
第35図 井戸4出土遺物2 (1/4)

ていて、一括性の高い土器群であるといえよう。96がやや古い傾向だが、全体として後期後葉、鬼川市Ⅲ式併行の時期を示している。(氏平)

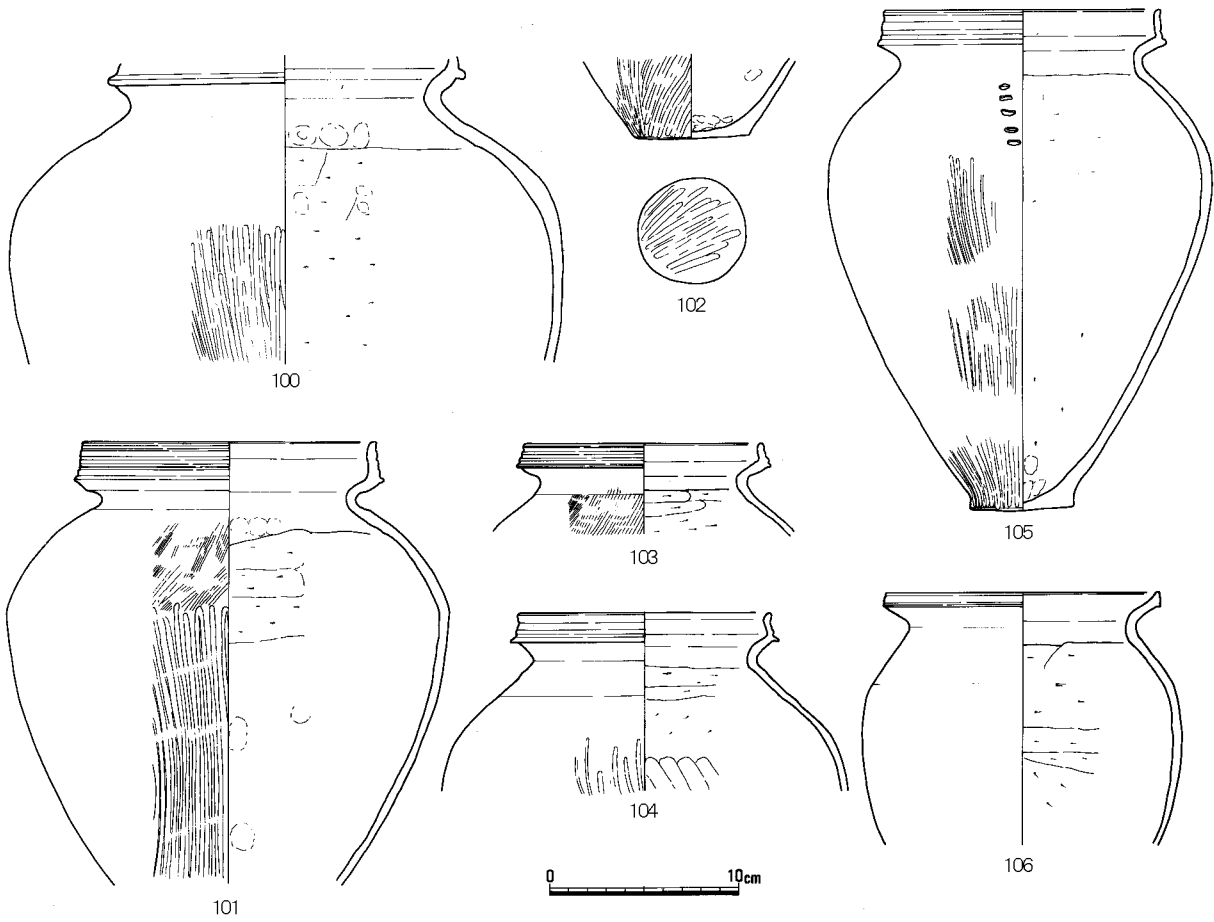
4 土壙

土壙1 (第27・36図)

2区中央部を少し南に下がった位置に検出した。平面形は小判形を呈するものである。一部削平さ

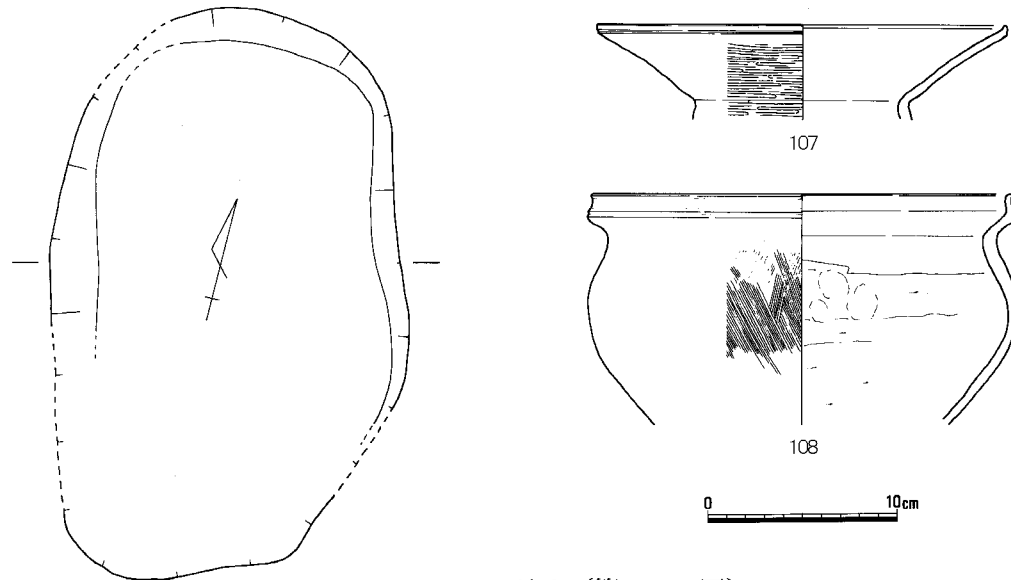


- 1 明黄褐色 (2.5Y7/6) 微砂 炭・土器含
- 2 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 微砂 炭・土器多含



第36図 土壌1・出土遺物 (1/30・1/4)

れているため、長軸方向の長さは不明であるが、1.6m程度、短軸方向は1.07mを測る。土器は比較的多く出土した。99は壺である。外面はハケメとヘラミガキ、内面はケズリが施される。100~106は甕である。外面は肩部にハケメ、下半にはヘラミガキが施される。内面はケズリがみられる。土壌の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。(井上)

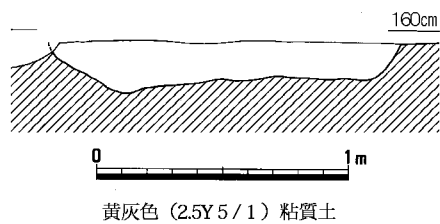


土壌2 (第27・37図)

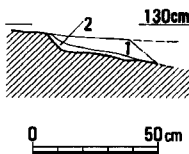
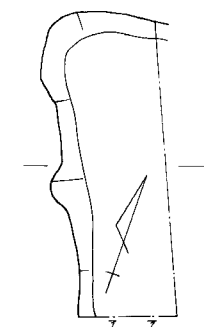
土壌1の西約1mの位置に検出した。西壁は溝6とほとんど接した状態で検出した。平面形は、南側が一部削平されているために正確な形状は不明であるが隅丸長方形を呈している。長軸の方向は南北を向くもので、2.23mを測る。東西の最大長は1.44mを測る。底面はほぼ平坦であるが、一部西側に少し深い部分がある。検出面からの深さは、もっとも深い部分で21cm、浅い部分で15cmを測る。

107は、高杯である。胎土は精良で、内外面に横方向の細かいミガキが施される。108は鉢である。外面は斜め方向のハケメ、内面は横方向にケズリがみられる。土壌の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。(井上)

第37図 土壌2・出土遺物(1/30・1/4)

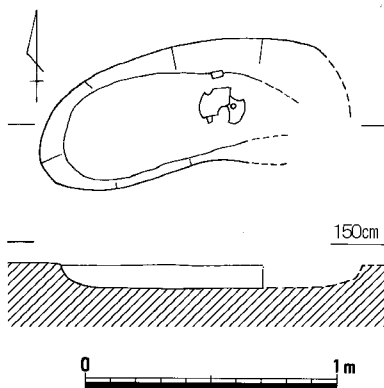


黄灰色(2.5Y5/1)粘質土



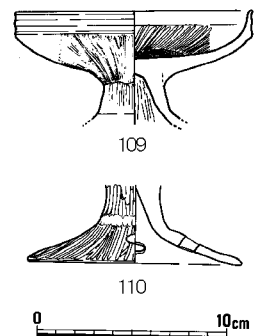
- 1 褐灰色(7.5YR5/1)弱粘質微砂
- 2 褐灰色(7.5YR5/1)弱粘質微砂
焼土塊・炭片含

第38図 土壌3 (1/30)



褐灰色(7.5YR4/1)粘質微砂 焼土塊・炭片含

第39図 土壌4・出土遺物(1/30・1/4)



土壙3 (第28・38図)

土壙3は3区の中央よりやや北側に位置し、溝6に東側を切られている。南端は確認できなかった。平面は不整形な楕円形で、規模は長さ1.3m以上、幅30cm以上である。底面は不整形で凹凸がある。断面では東側へ緩やかに下がっている様子が観察できた。埋土は2層に分層でき、下層には炭と焼土を多く含んでいる。平断面の形状から、この土壙は人工的な掘削の跡とは考えにくい。遺物は土器の小片のみで、時期は確定しにくいがおそらく弥生時代後期に属する。(氏平)

土壙4 (第28・第39図)

土壙4は3区の中央東側に位置する、楕円形の土壙である。東側を古代の柱穴で切られる。検出面で長さ1.3m以上、最大幅47cmで、深さは9cmを測る。出土遺物はいずれも土器で、量はあまり多くない。110の高杯は平面図に表わしたとおり、脚端部を上に向け、裏返しで出土した。他に杯部が半分残った109が存在する。これらから、この土壙の埋没時期は弥生時代後期後葉である。(氏平)

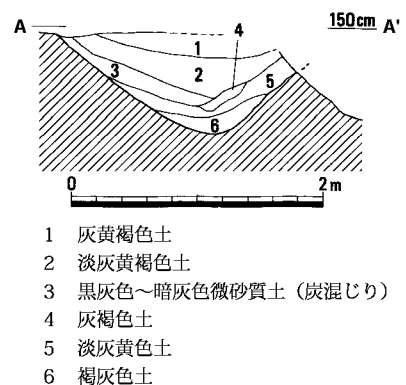
5 溝

溝5 〈1区〉 (第27・40~42図、図版44・45)

1区での溝5は、全長約35mを測る。調査区のほぼ中央部をやや蛇行して検出され、古墳時代の溝11に東側が重複することもある。東側肩は不明瞭である。復元推定幅は約2.2mで、深さは約80cmである。断面形は幅広なU字形を示し、溝底は水流を物語るように、褐灰色の砂質土が埋積する。

出土遺物は弥生土器がすべてで、長頸壺を含む壺、甕・高杯などがある。

112~116・122などは、巻頭カラー図版2に示すように、下層から良好な状態で一括出土した土器群である。長頸壺の口縁端部を観察すると、114のように直立する新しい様相を帯びるものを含むが、おおむね後期後半に位置付けられる特徴を示している。これらの長頸壺の頸部には、基本的に螺旋状の沈線が巡らされているが、その間隔には個体によって粗密の差がある。115の体部中央部には、長円形の焼成後の穿孔がみられる。また体部最大径近くに布目の圧痕が看取されるが、衣服の圧痕とは考えにくく、成形あるいは調整時に布が使われた可能性もある。116は白っぽい色調と、特徴的な口頸部に注意される。(岡田)

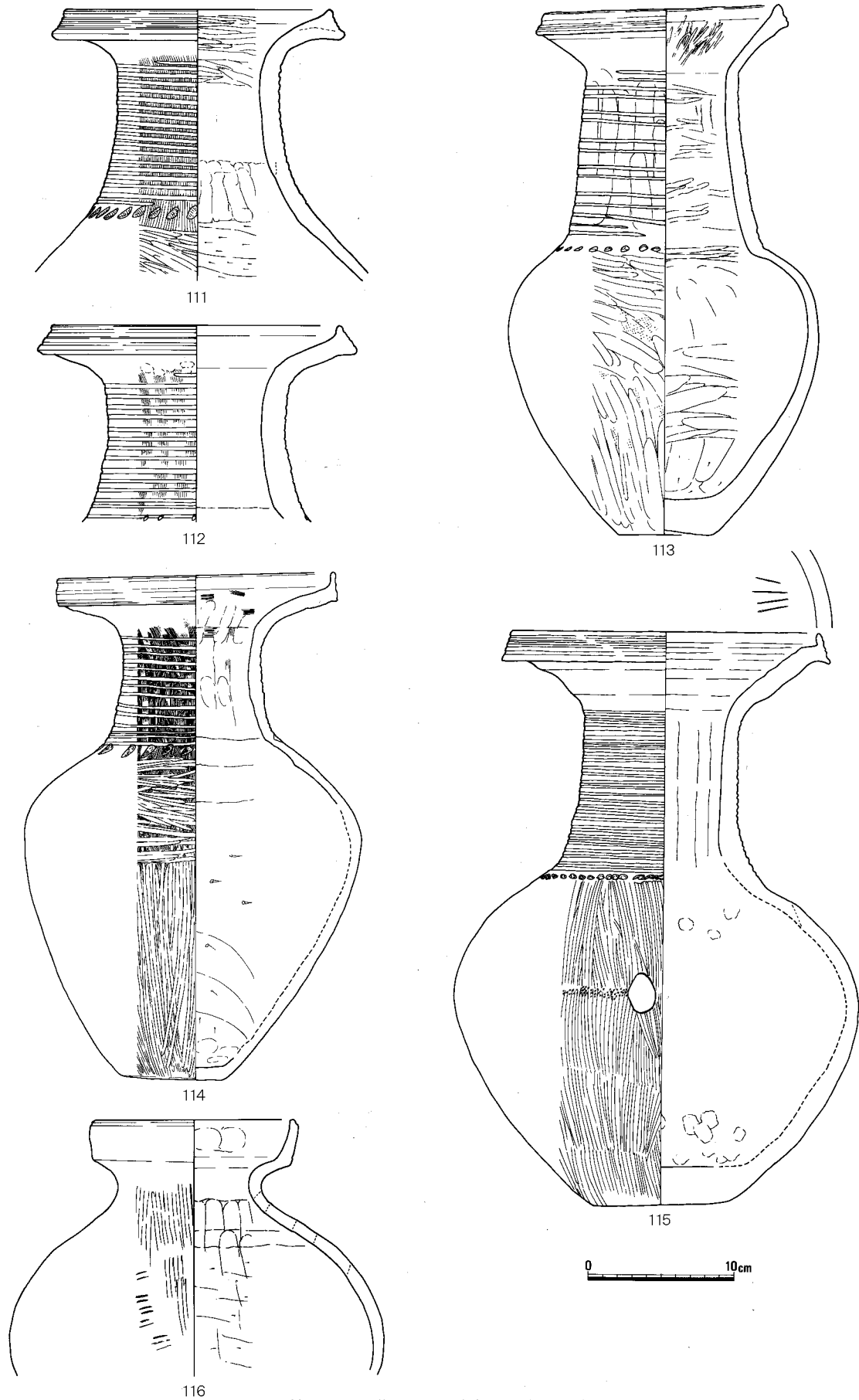


第40図 溝5断面図1 (1/60)

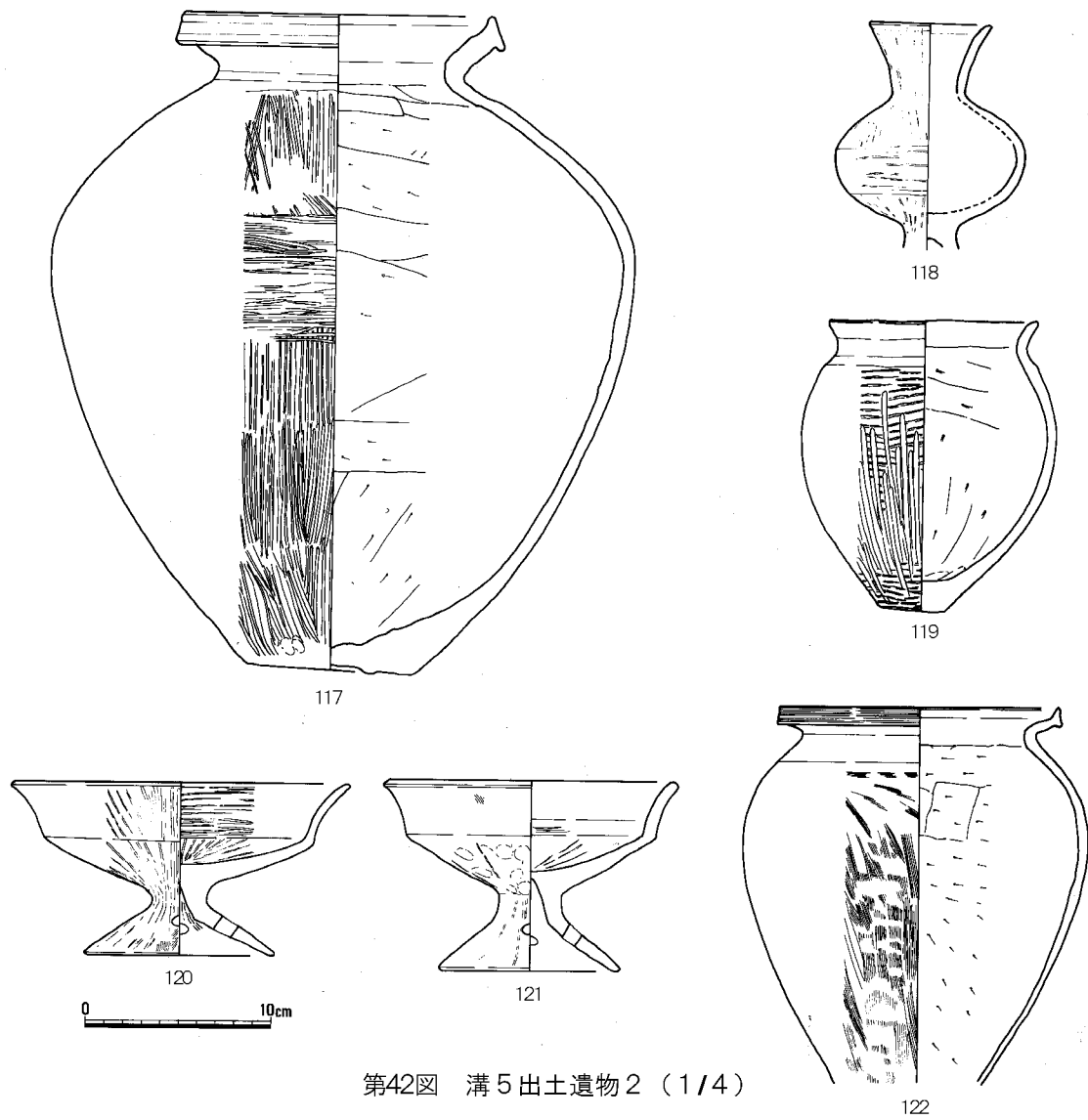
溝5 〈2・3区〉 (第27・28・43~50図、図版45・47)

溝5は、今回の調査区全体、つまり1区から3区を貫いて南北に流れる溝である。ここでは2・3区での状況について述べる。完掘した状態で見ると、溝の長さは2区49m、3区48mである。溝の断面は緩やかなV字形で、検出面での幅は2区北端で2.25m、2・3区境で2.22m、3区南端2.44mで、深さは2区北端で73cm、2・3区境で72cm、3区南端で97cmを測る。底面の高さは2区北端で標高60cm、2・3区境で最も高く標高75cm、3区中央部で65cm、3区南端で50cmを測る。つまり、この溝は2区・3区を境にして、北側へ15cm、南側へ25cm下がっていることになる。

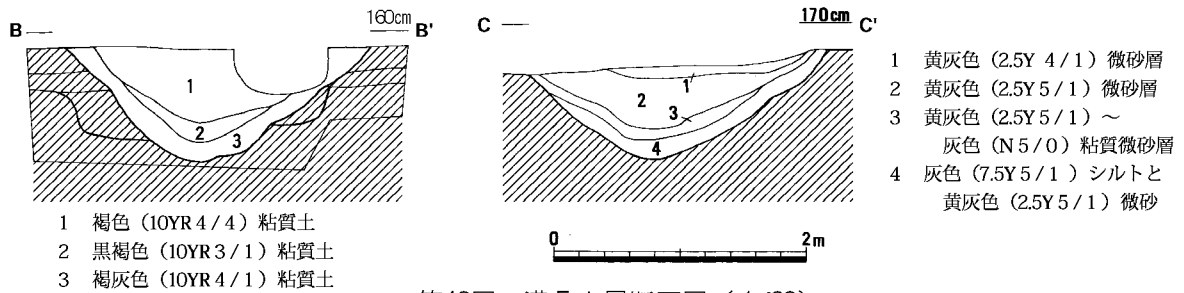
土層は大きく3層に分かれるが、第43図左側の断面で第1・2層、右側で第2・3層が上層、その下を下層として、上下2段階と認識した。ちなみに右側の断面図の第1層は、溝とは無関係に堆積し



第41図 溝5出土遺物1 (1/4)



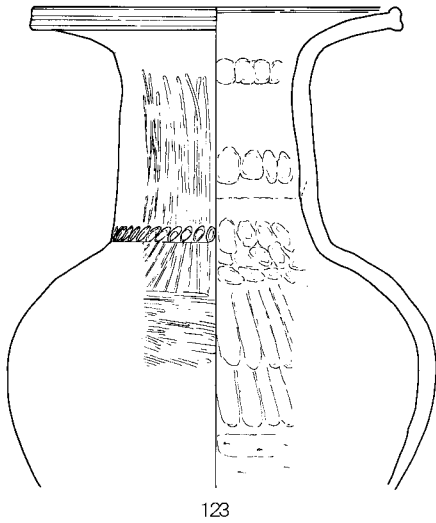
第42図 溝5出土遺物2 (1/4)



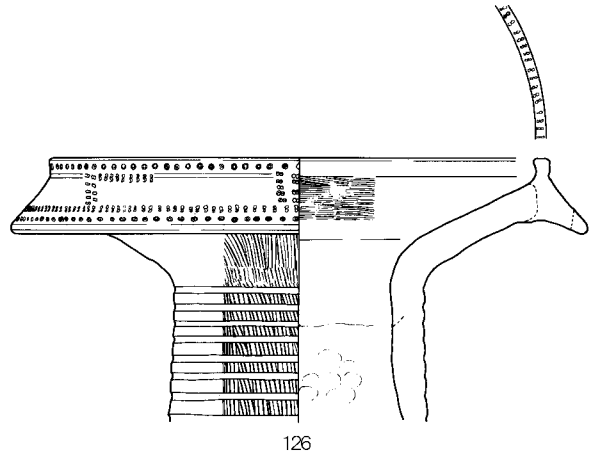
第43図 溝5土層断面図 (1/60)

た層と考えている。

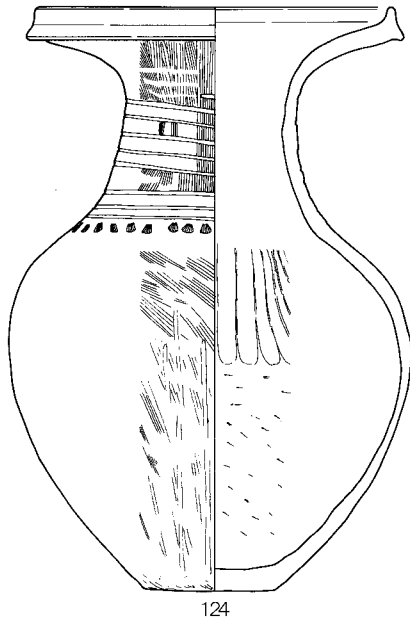
溝内の遺物出土状況は、土器が散見する地点と、集石・土器溜まりが存在した。集石は3区に1か所、土器溜まりも3区で確認できた。それらの範囲は、最大長4m程度に限定されている。遺物の出土状況を垂直方向に観察すると、3区北側では底面から約30cm上、標高0.95~1.20mに集中し、3区南側は底面から約20~40cm上、標高0.75~1.20mに集中する。この範囲は、断面土層で先に上層とした層位にほぼ一致する。2区でも、3区と同様の傾向がうかがえる。



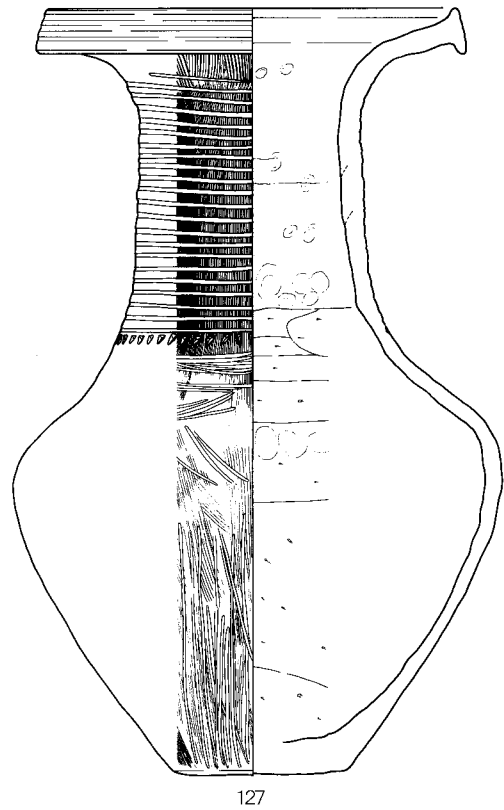
123



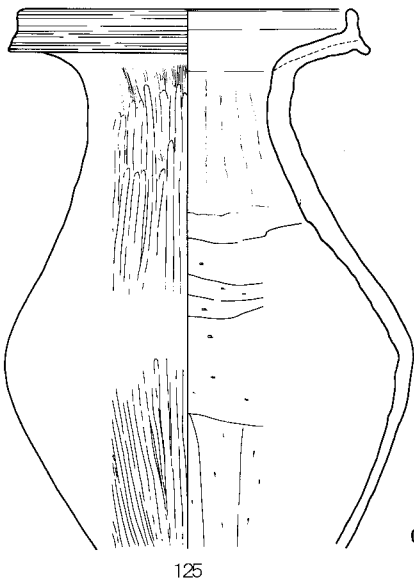
126



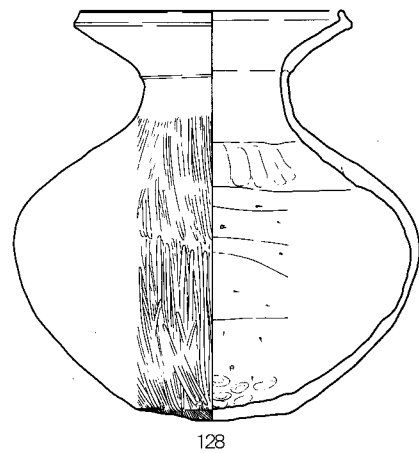
124



127



125



128



第44図 溝5出土遺物3 (1/4・1/3)

出土した遺物は、様々な器種・形態の土器と、少数の石器である。土器は壺・甕・高杯・鉢の各種が揃っているが、ここでは代表的なもの、特徴的なものを挙げていきたい。

おおよその出土位置をここで述べておくと、2区北側で壺132・135、甕139・149・153・154・159～163・165・166・169・170、台付壺172、高杯174・175・177・178、鉢181～184・186が、2区南側で壺123・124・133、甕156・157・161、台付壺171、鉢185・190・192、台付鉢187・188、手焙形土器197が出土した。3区北側には壺125・129・130・136・137、甕143～147・150～152・167、台付鉢189、鉢195があり、3区南側からは壺126～128・131・134・138、甕140～142・148・155・158・164・168、高杯173・176・179、鉢180・191・196、製塩土器193・194が出土している。

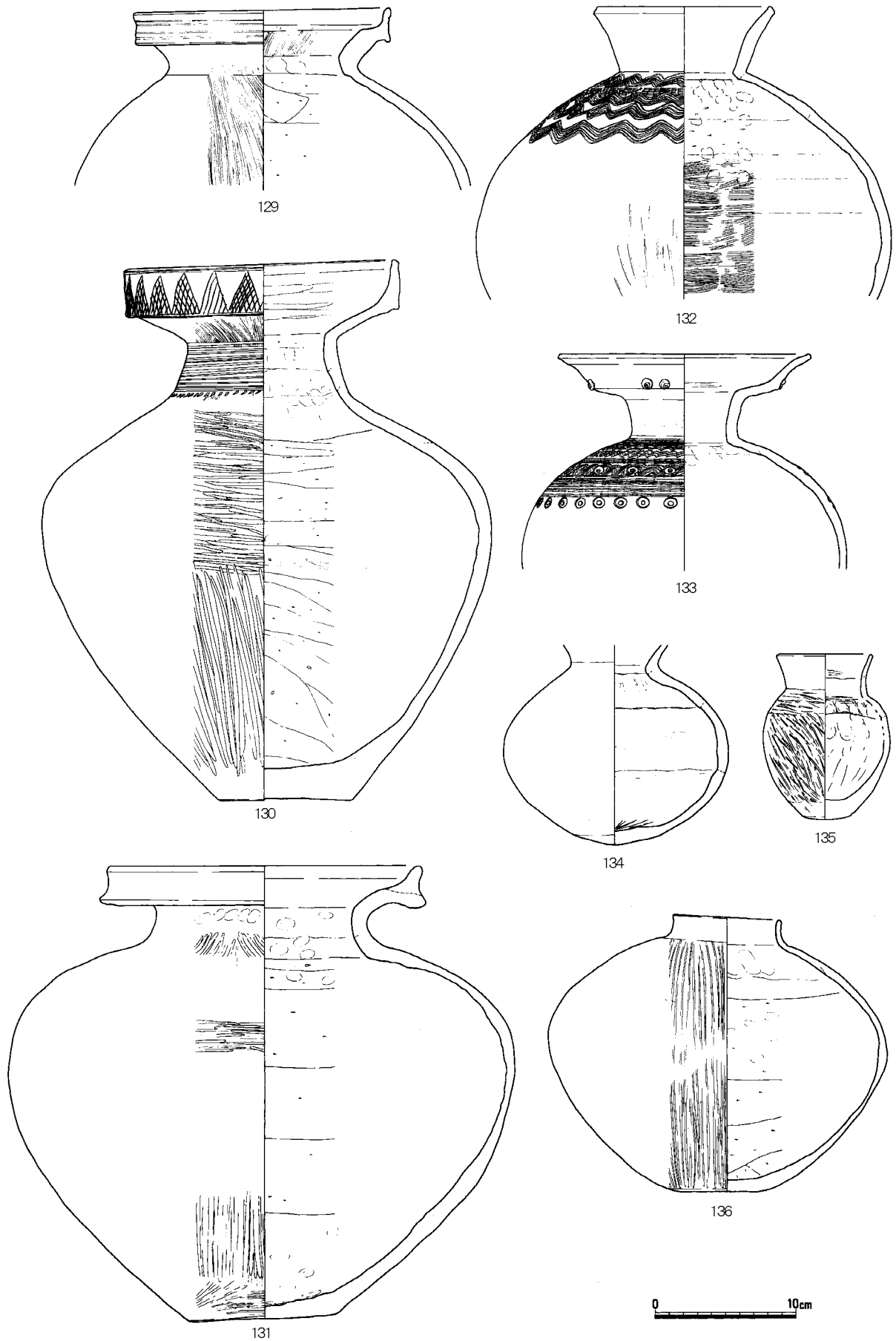
器種ごとに特徴を述べる。壺では、123～127が長頸壺である。123頸部外面は荒いタテハケメを施す。124頸部下外面の刺突は2枚貝の圧痕である。長頸壺の変化として、口縁端部の拡張・頸部直立からハの字への変化が挙げられるが、そうすると124・125が最も新しい形状である。128～134、137・138が短頸壺である。130は底部付近外面に、137は口縁端部内面と胴部外面に、138は胴部外面に黒斑がある。典型的といえるのは129～131・137・138で、129～131に対し137・138は口縁端部の拡張が強い。132は肩部外面に簾状文1条、その上から波状文4条が施文される。畿内系の可能性が高い。133は畿内庄内系の壺である。口縁外面に竹管文を付けた円形浮文、肩から胴部外面を簾状文と波状文、竹管文で装飾する。134は外面剥離激しく、135はほぼ完形で底部外面に黒斑がある。無頸壺136は溝底面付近で検出した。肩部外面に黒斑がある。女男岩遺跡遺構「二」(註1)、上東遺跡波止場状遺構(註2)、津島遺跡河道1(註3)などで出土例がある。

甕は二重口縁の143～148・150・155～162、口縁端部をつまみ上げる149・151～154、素縁または微妙な面を作る163～170がある。139の甕は素縁でほぼ完形、肩部外面に黒斑がある。142も一応甕に分類した。ほぼ完形で、胴部～底部外面に煤が付着する。2重口縁のものでは143～148・150・155～158が平底、159～162は角のない平底～丸底である。素縁のものは163を除いて丸底か尖底である。143は底面外面にもヘラミガキがあり、144は胴部と底面に穿孔がある。144・145・154・155・158・170には底部外面に、151・168には胴部外面に、157は底部外面と胴部内面に、159は底面外面に黒斑がある。148は底部外面と胴部内面に、153・156は底部～底面外面に、155・158は底部外面に、164・167は胴部外面に、169は内面全面と外面一部に煤が付着する。165・167外面はタタキの後工具ナデ、168外面はタタキの後ハケメ、166外面は工具ナデを施す。

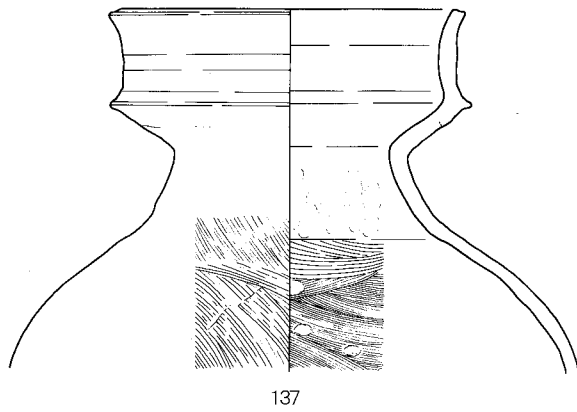
171・172は台付直口壺である。173・174は口縁が直立する高杯、175・177～179は口縁を外反する高杯である。脚部が短く口縁の外反が緩い177・178と脚部が長く口径が大きくなる175・179の2種類が存在する。173を除き高杯のヘラミガキは横方向である。176は高杯を転用した鉢であろう。

鉢は、大形から小形まで、様々な形態のものが含まれている。製塩土器は、脚部のみが見つかることが多く、凶化できるものは少ない。193・194では底部がわずかに残っていて、この上に直線的に立ち上がる胴部を持つ形態であることがわかる。手焙り形土器は197が1点出土した。天蓋部分の3分の2を失う他はほぼ完形で、円筒形の胴部に天蓋部分を接合した作りである。

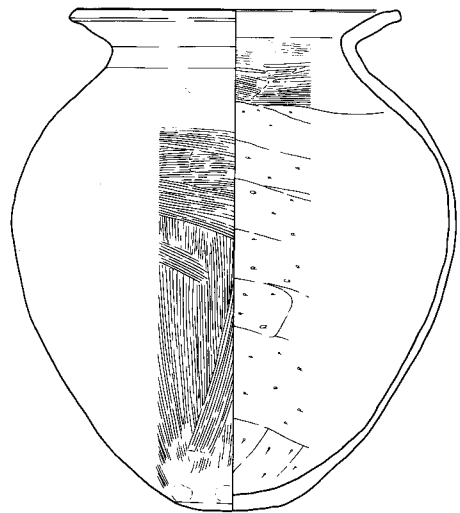
最後に、出土土器の編年的位置づけを述べてみたい。溝という遺構の性格上、遺物の新旧が混合することが起こりえる。壺・甕・高杯といった各器種における特徴の差異から、これまでの編年案に沿って位置づけるとすると、弥生時代後期後葉でも前半(鬼川市Ⅲ式併行)と後半(才の町Ⅰ・Ⅱ式併行)の2時期に相当する。前半の典型的な土器として長頸壺124～127、短頸壺129～131、甕の平底である



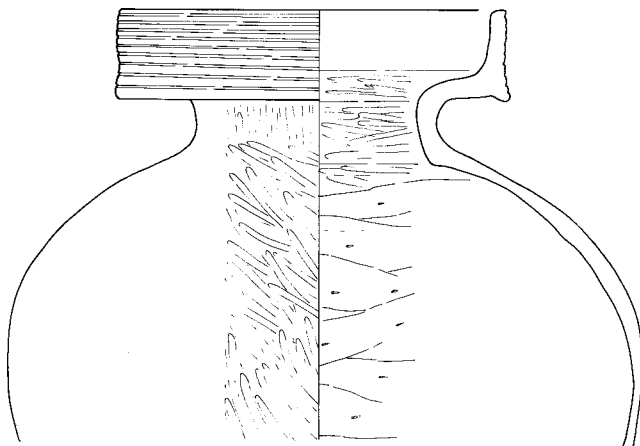
第45図 溝5出土遺物4 (1/4)



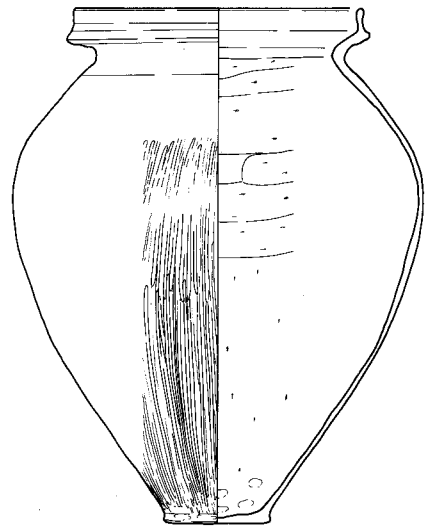
137



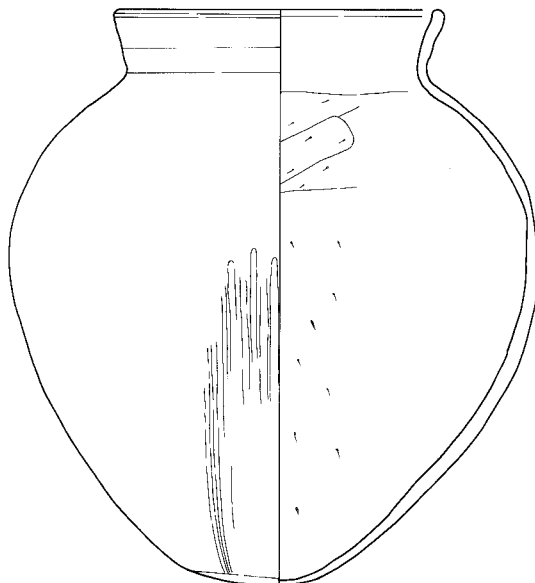
142



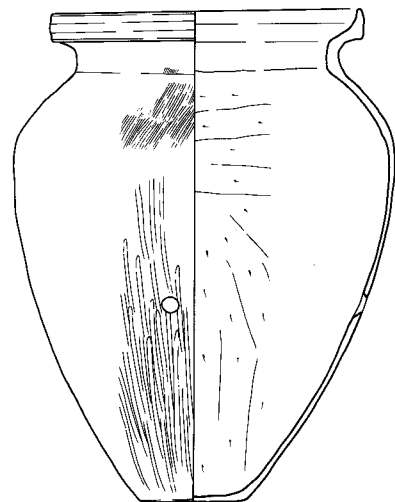
138



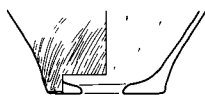
143



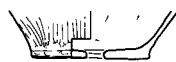
139



144



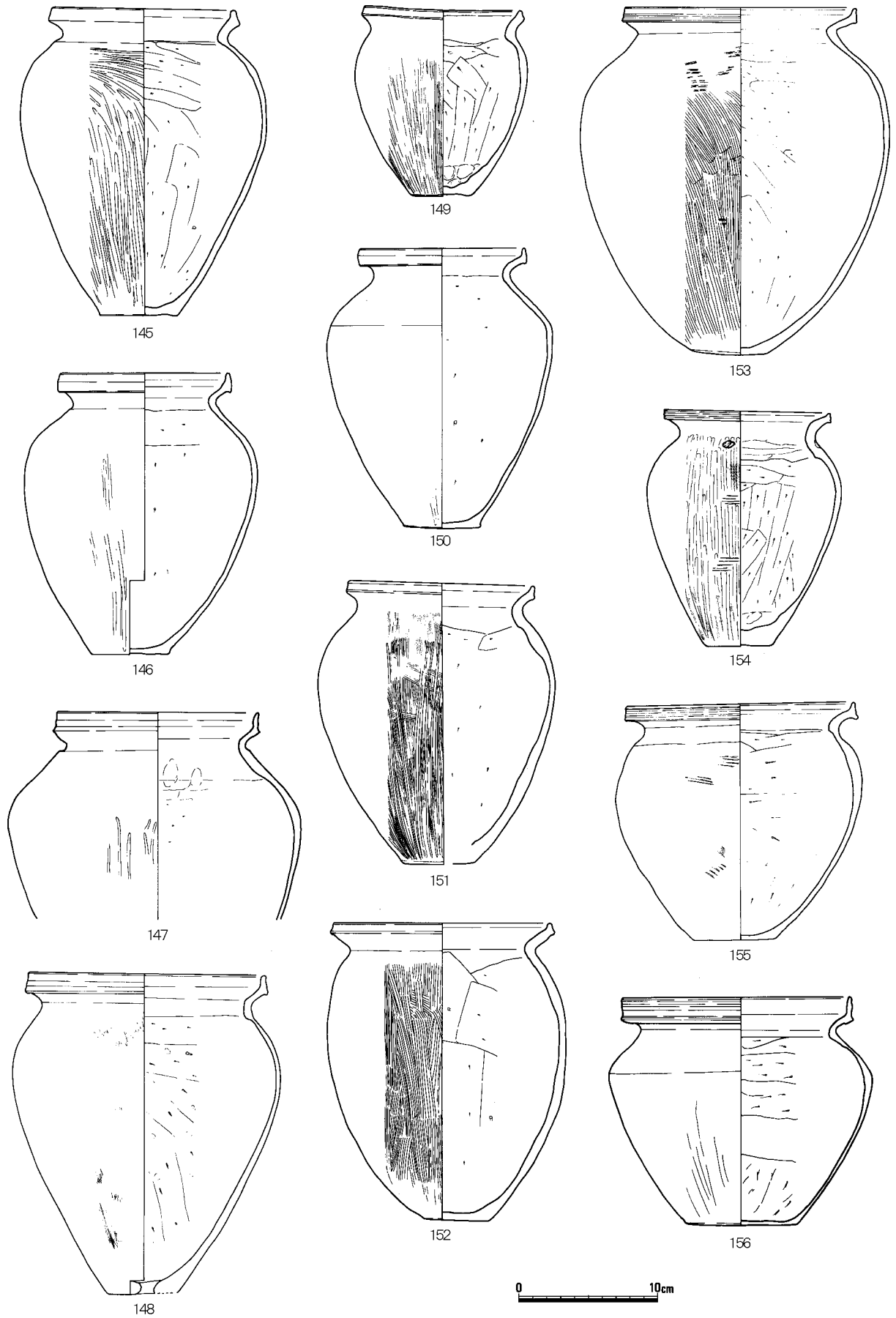
140



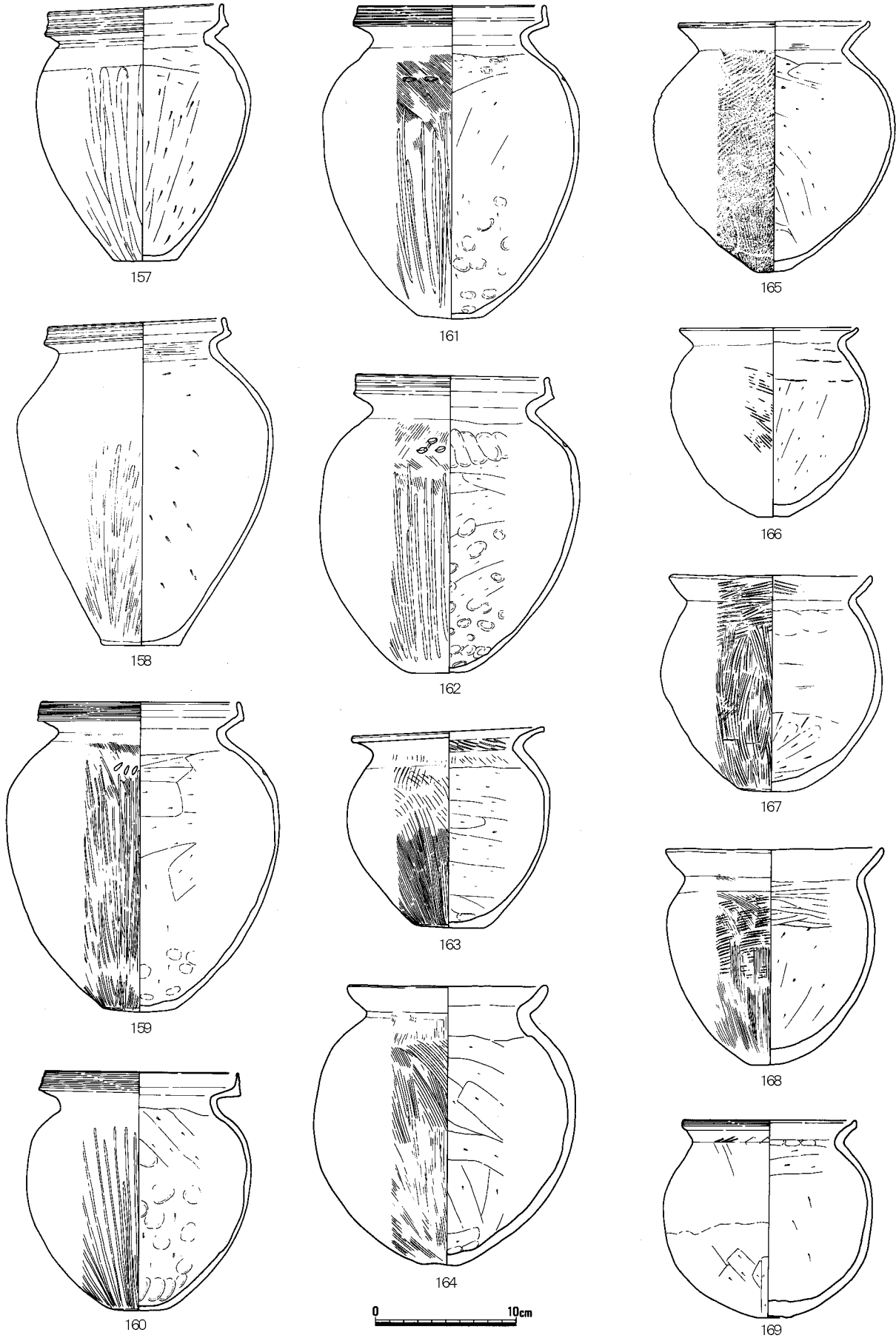
141



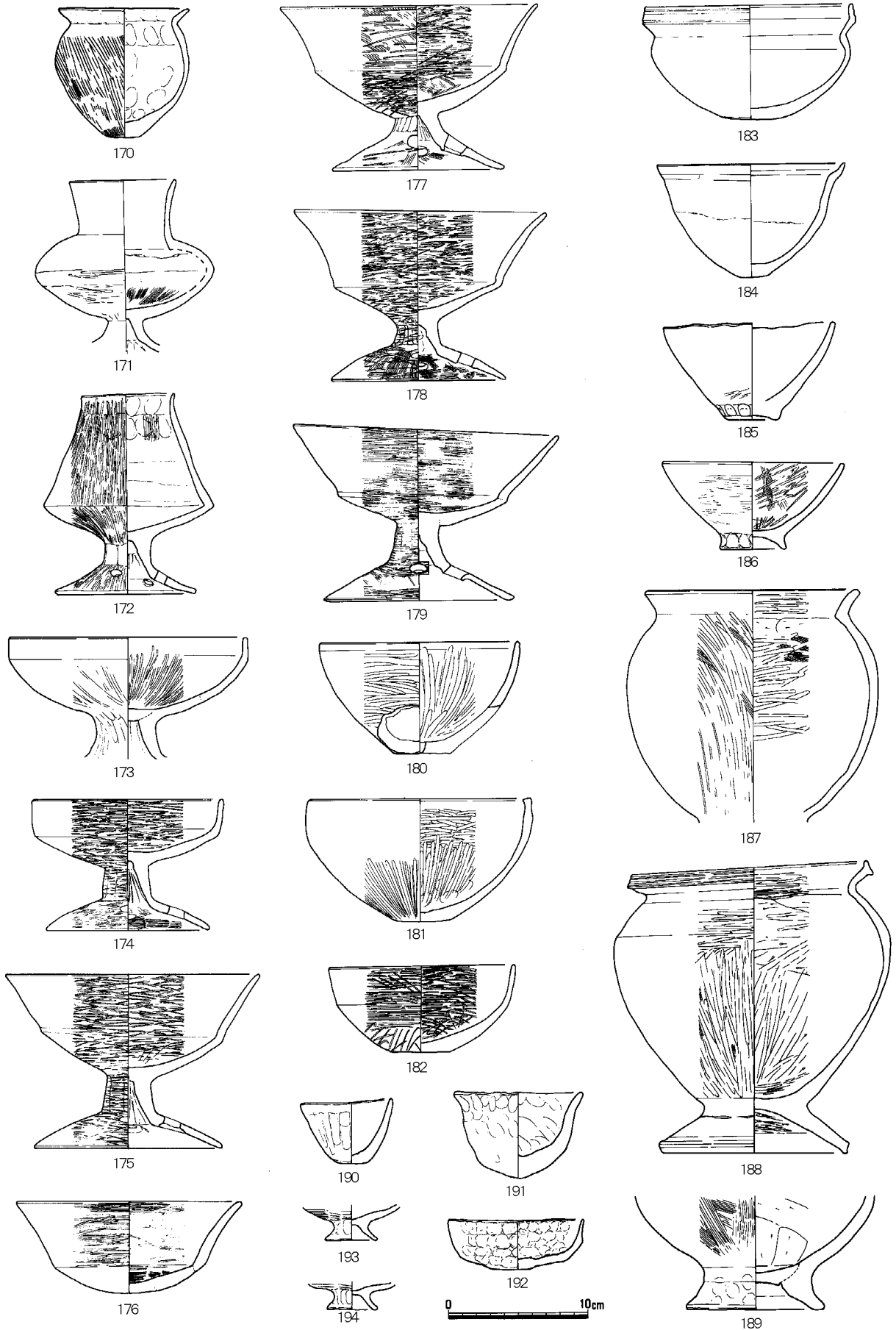
第46図 溝5出土遺物5 (1/4)



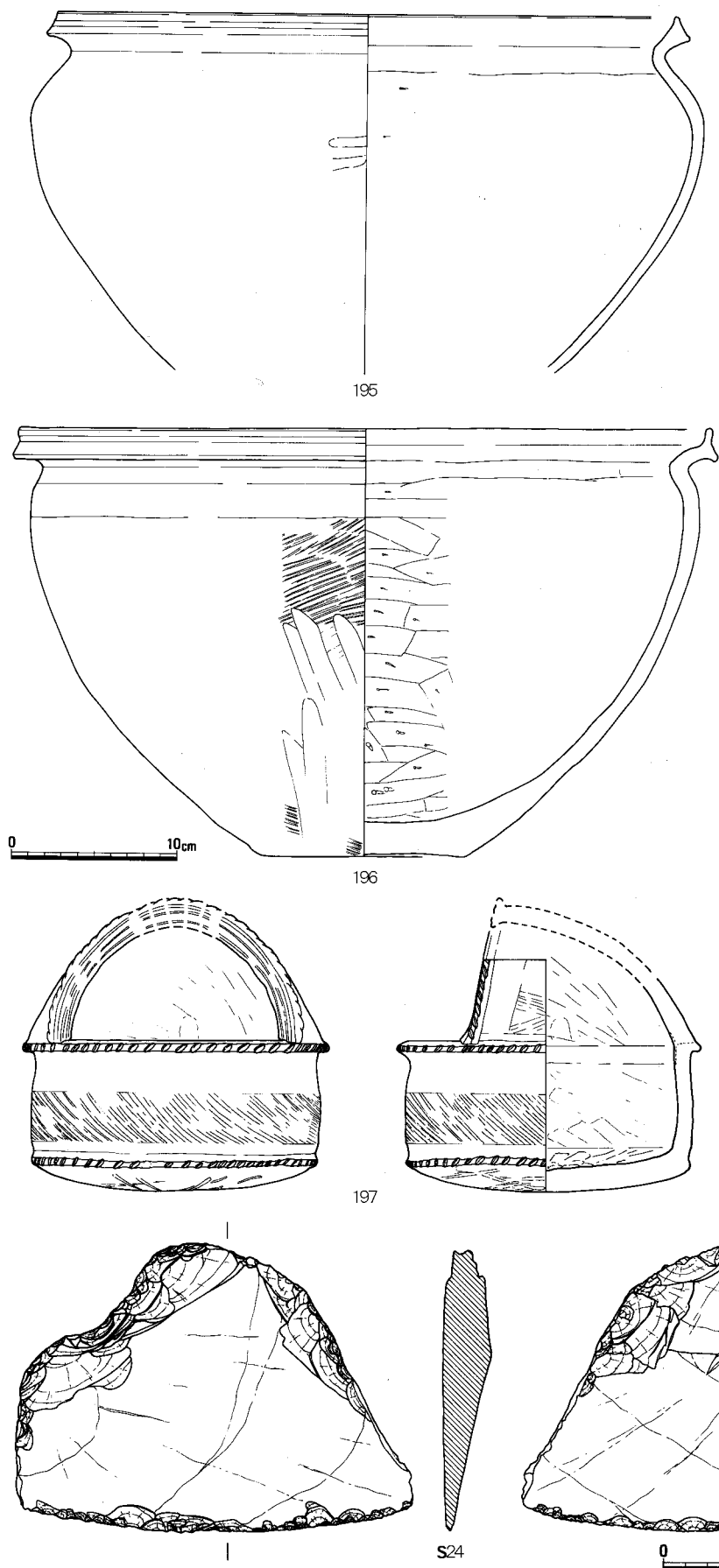
第47図 溝5出土遺物6 (1/4)



第48図 溝5出土遺物7 (1/4)



第49図 溝5出土遺物8 (1/4)



143~148・150・155~158、高杯173、鉢195が挙げられよう。また、後半の典型的なものとしては短頸壺137・138、甕の丸底である159~162、高杯175~179、鉢196がある。この溝の埋没時期は、その2時期の中でも新しい方で、弥生時代後期後葉の後半であるといえよう。

なお、土器に混ざって出土した石器のうち、1点を紹介する。S24は3区北側にあったスクレイパーである。形状から、出土土器より古い弥生時代前期の可能性が高い。

(氏平)

註

(註1)間壁忠彦・間壁葎子「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報第10号』1974年

(註2)下澤公明ほか「下庄遺跡・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157』2001年

(註3)島崎 東ほか「津島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173』2003年

第50図 溝5出土遺物9 (1/4・1/3)

溝6 (第27・28・51~54図、図版46)

2区~3区を南北に流れる溝である。この溝の埋没後に、流路を踏襲する形で古墳時代前半の溝11が掘削されたため、残部は少ない。

溝の断面形は楕円形であるが、側面の所々に平坦な部分が観察できた。検出面での幅は、西岸が古墳時代前期の溝11に切られるため確定できなかった。深さは2区北端で95cm、2・3区境は86cm、3区南端で84cmを測る。底面の高さは2区北端で標高58cm、2区北から

30m地点で最も高く71cm、2・3区境で標高68cm、3区中央部で58cm、3区南端で52cmを測る。この溝の長さは2区49m、3区48mであるが、2区北から30m地点を境にして北側へ13cm、南側へ19cm下がっていることになる。

埋土が残っている部分では、土層は大きく上層と下層の2層に分かれる。上下層共に土器を含むが、下層の方が粘質は強くなり、炭を含んでいる。

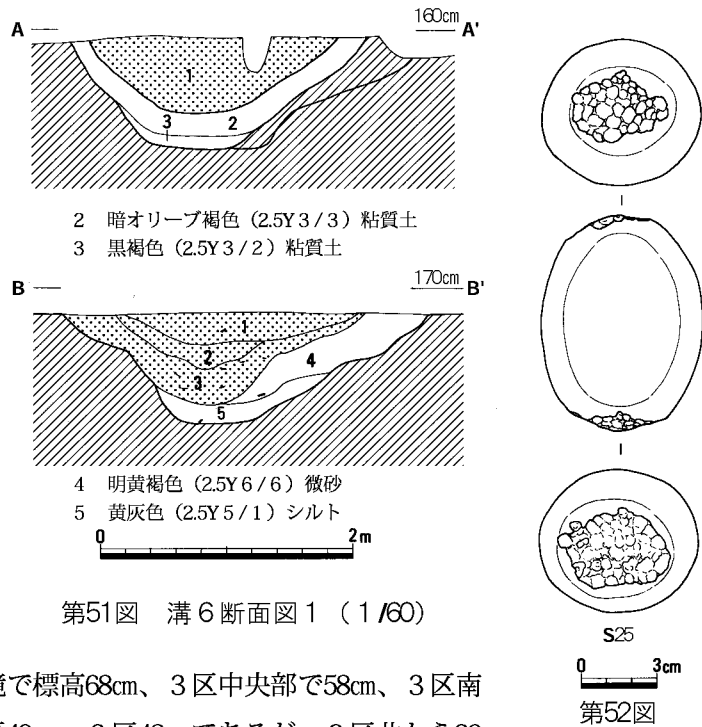
遺物出土状況では、集石や土器溜りは確認できなかった。溝5と同様、もともとは土器が廃棄されていたと思われるが、古墳時代の溝11により西側と埋土の3分の2以上が削られた時に、土器も一緒に掘り上げられたのであろう。溝11に含まれる弥生時代後期の遺物は、もともとはこの溝の遺物であった可能性が高い。

出土した遺物には、石器と土器がある。石器は少ないが、S25の叩き石がある。土器には壺・甕・高杯・鉢の各種があるが、ここでは溝11出土の199・200・203~205・208~214も挙げている。また、201・206は古墳時代前期の井戸15上層部分と認識して取り上げたが、その位置からこの溝に由来すると思われる土器である。2区北側では198・207・208、2区南側で200・202・203、3区北側は205・210・212、3区南側で199・204・209・213・214が出土している。

198は短頸壺であるが、胴部外面に煤が付着している。201はほぼ完形で、胎土は精良で色調はにぶい橙色を呈する。底部外面付近には、既述の115と同様な布目の圧痕がついている。204はほぼ完形であるが、直立しない。205には胴部外面に籾殻の痕跡がある。206は庄内系の甕で、内面に口縁部・胴部・底部3段階に分かれた粘土紐接合が観察できる。内面はケズリの後丁寧なナデを施す。外面にはタタキメは観察できない。

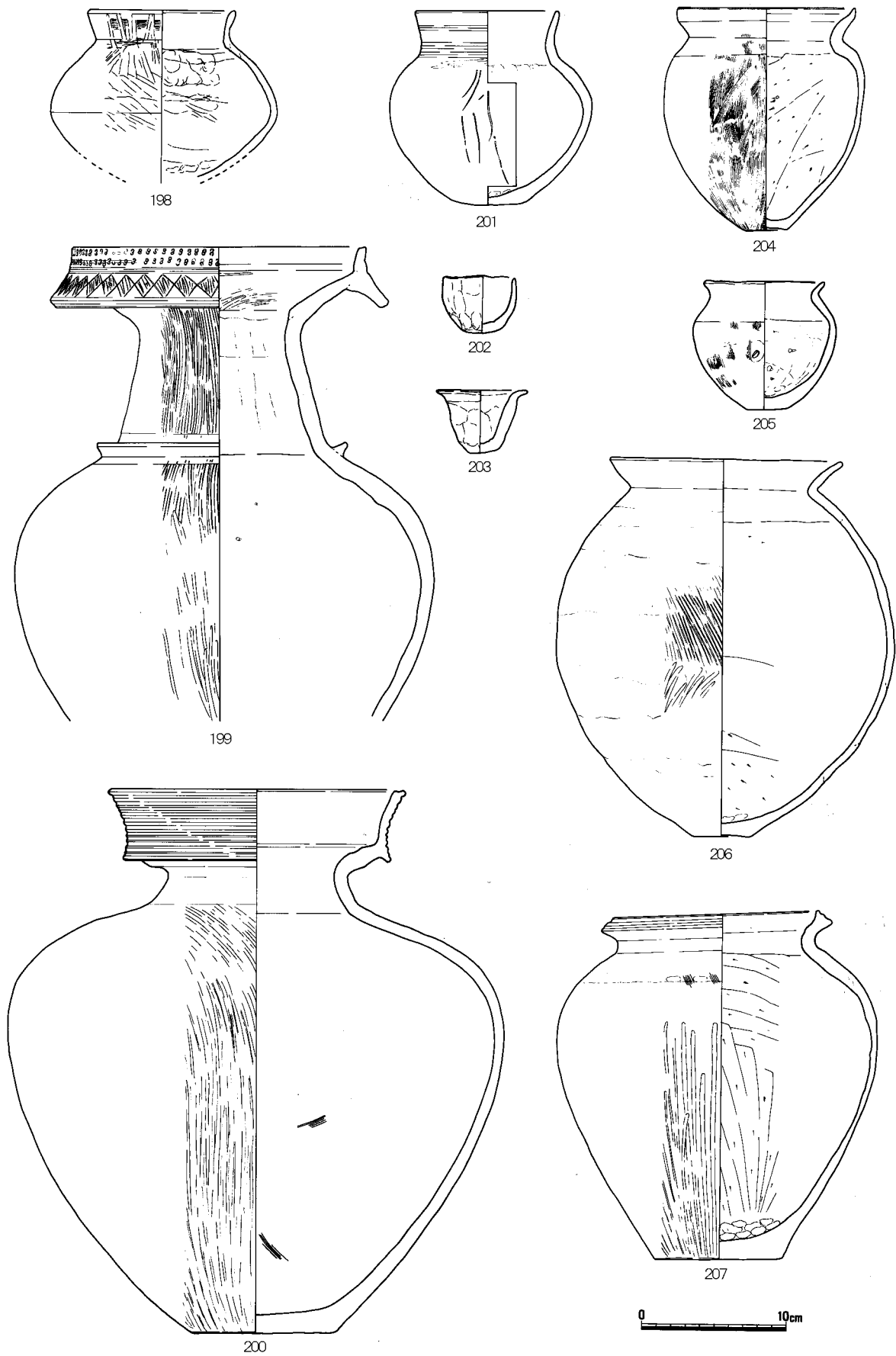
以上、溝6出土土器には弥生時代後期前葉(鬼川市I式併行)~古墳時代前葉(下田所式併行)までの時期幅が存在するが、最も新しい古墳時代前葉(下田所式併行)が溝6の埋没した時期の可能性が高いだろう。そうすると、溝11と継続時期が重複することになり、遺構の切り合いと若干の齟齬を来す可能性がある。そこで、先程も述べたように溝11出土の一部の遺物を溝6出土として認定しなければならない状況であることから、溝6の埋没時期はさらに古く、弥生時代後期後葉の中に入れてもいいのではないだろうか。

(氏平)

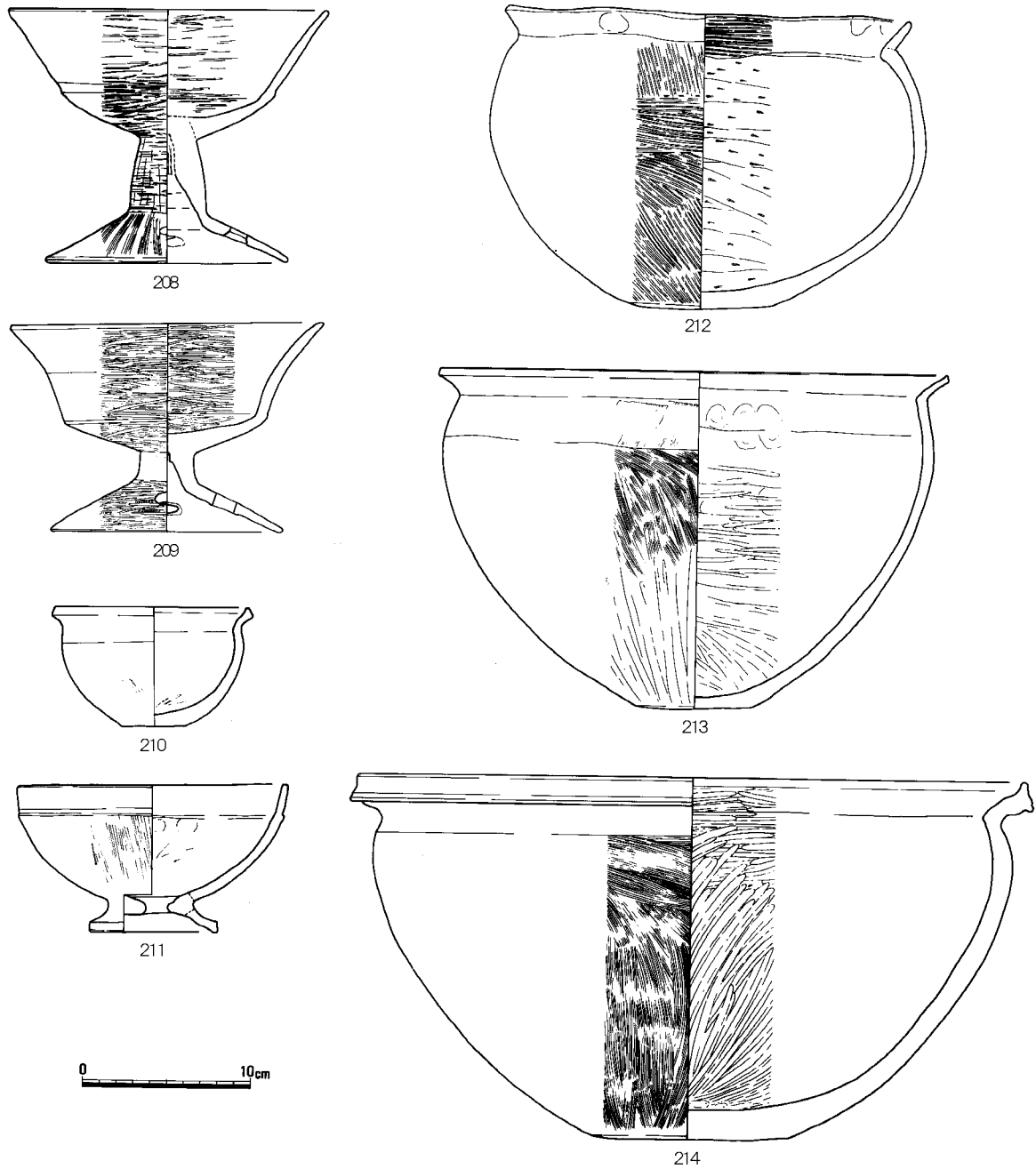


第51図 溝6断面図1 (1/60)

溝6出土遺物1 (1/4)



第53図 溝6出土遺物2 (1/4)



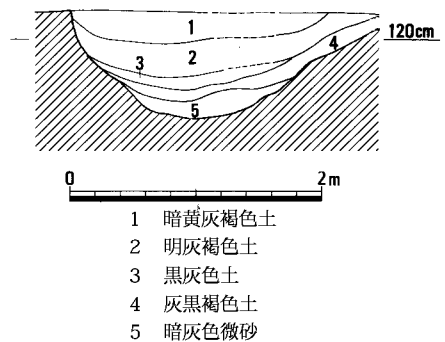
第54図 溝6出土遺物3 (1/4)

溝7 (第27・55・56図、図版49)

溝5の東側で、やや弧を描くように検出された溝である。上層では明らかに土師器が出土しているので、溝10として分離し古墳時代の項で再掲する。

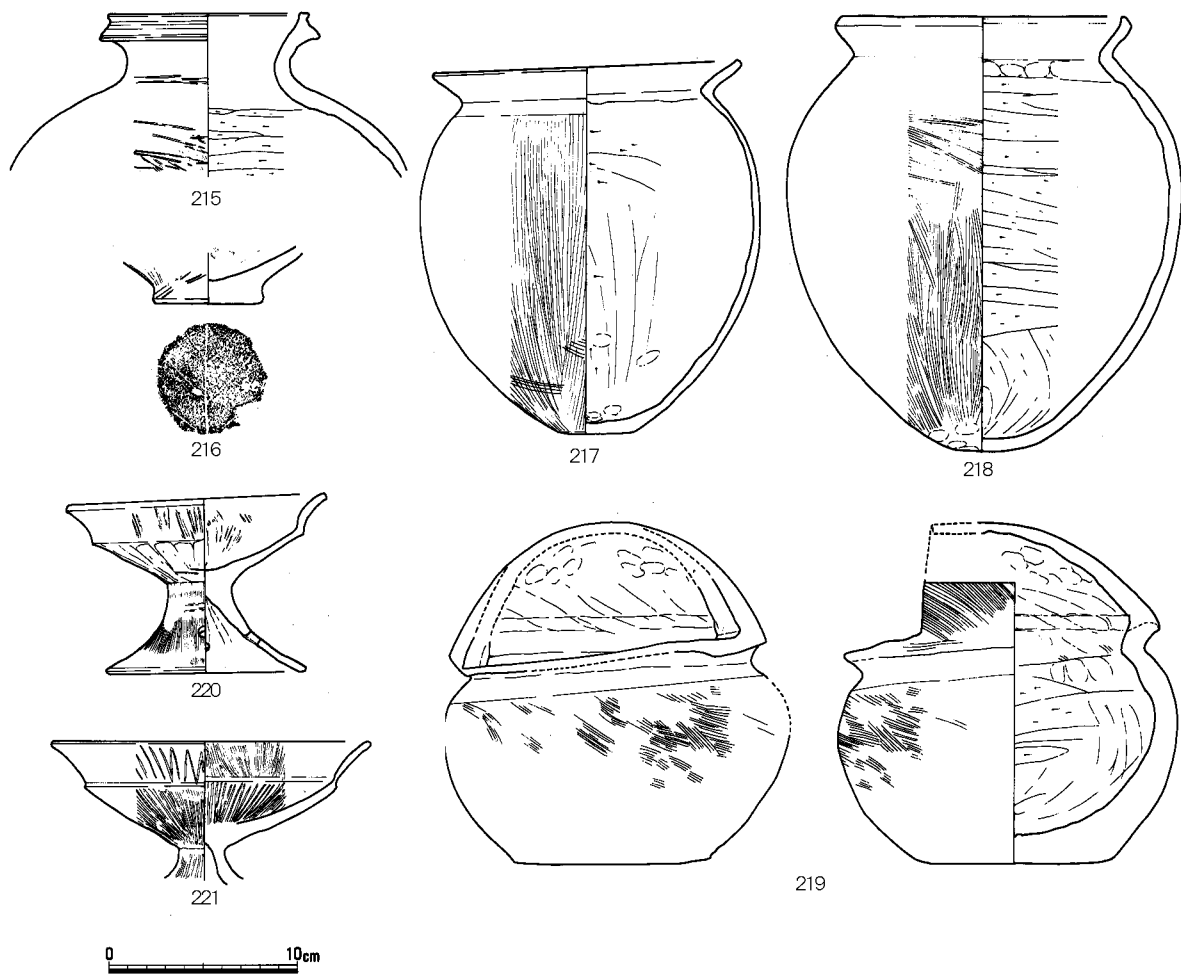
検出全長約20m、幅約2.4m、深さ約80cmを測り、断面形は緩やかなU字形を示す。

出土遺物は土器のみであるが、おおむね後期後半に位置付けられる。壺215のほか、鉢216、高杯219・220、甕217・218のほかには手焙り形土器219が出土している。



第55図 溝7断面図 (1/60)

- 1 暗黄灰褐色土
- 2 明灰褐色土
- 3 黒灰色土
- 4 灰黒褐色土
- 5 暗灰色微砂

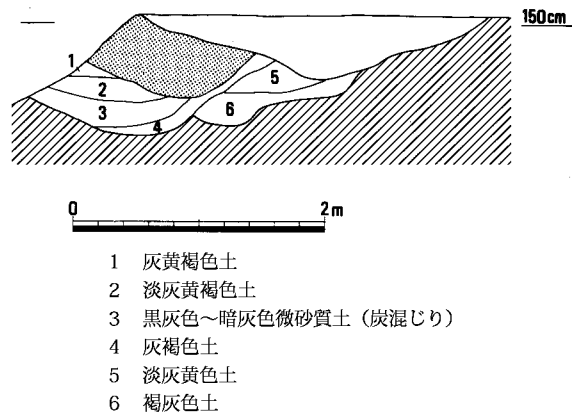


第56図 溝7出土遺物 (1/4)

216は外底部に木葉の圧痕が明瞭に残る。

219は北端部の最下層第5層から出土した。鈍重な体部と底部が特徴的である。220・221はいずれも低脚の高杯である。杯部外面には特徴的なヘラミガキがみられる。内面にも丁寧なヘラミガキが施される特徴が共通する。(岡田) 溝8 (第27・57・58図、図版49)

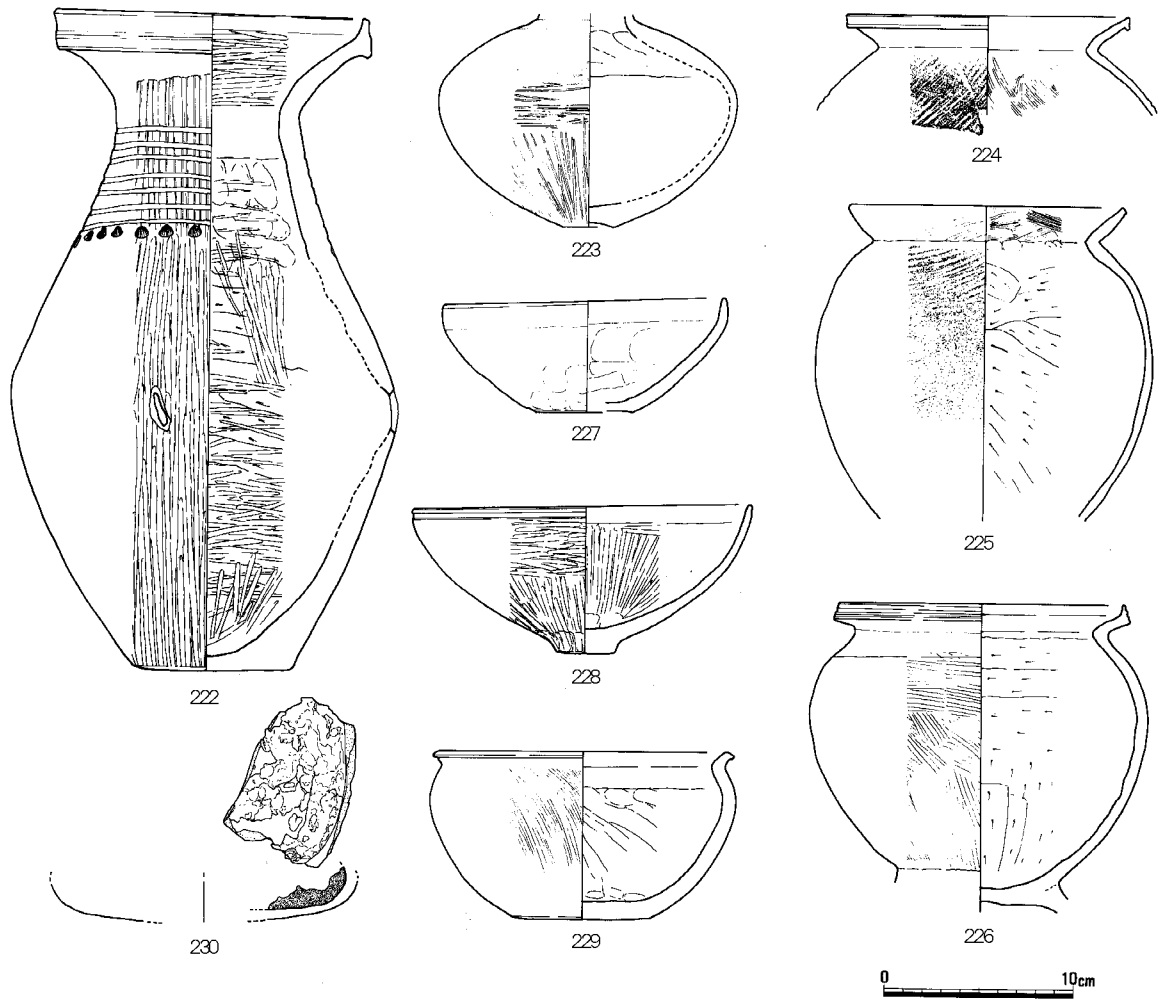
1区の西辺で検出された南北方向の直線的な溝である。検出全長は約40mを測り、2区では全く検出できなかった。第57図に示すように、2条の溝あるいは、掘り直しともいえる痕跡が認められるが、出土土器の时期的な差はほとんどない。ただ上面で検出された溝12に伴う出土土器との混濁があり、この溝に伴うと理解ができたものは、第56図に掲げる土器である。222は長頸壺で、先に触れた115と同様体部中央部に焼成後の穿孔がある。230には漆が付着しており、その容器として利用された高杯か鉢と推定している。224・225には体部外面に斜行するタタキが観察される。これらの土器は後期後葉に比定される。



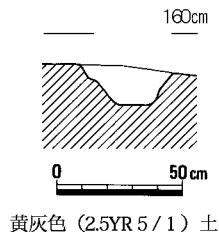
- 1 灰黄褐色土
- 2 淡灰黄褐色土
- 3 黒灰色～暗灰色微砂質土 (炭混じり)
- 4 灰褐色土
- 5 淡灰黄色土
- 6 褐灰色土

第57図 溝8断面図 (1/60)

(岡田)



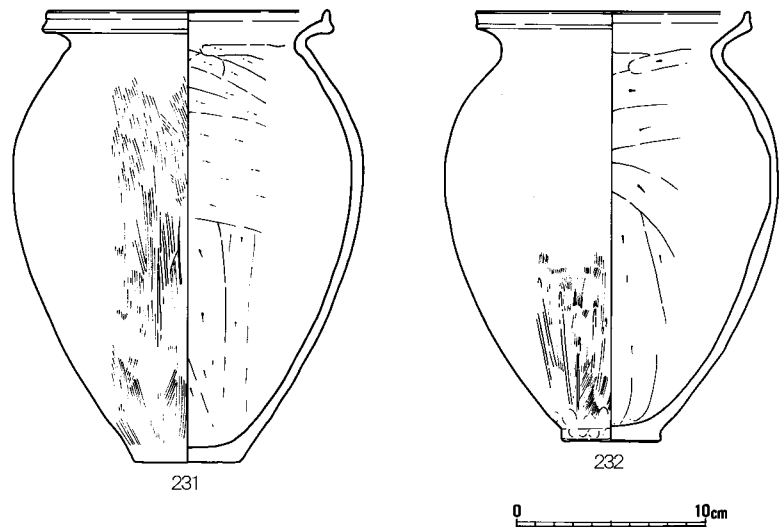
第58図 溝8出土遺物 (1/4)



黄灰色 (2.5YR 5/1) 土

溝9 (第28・59図、図版49)

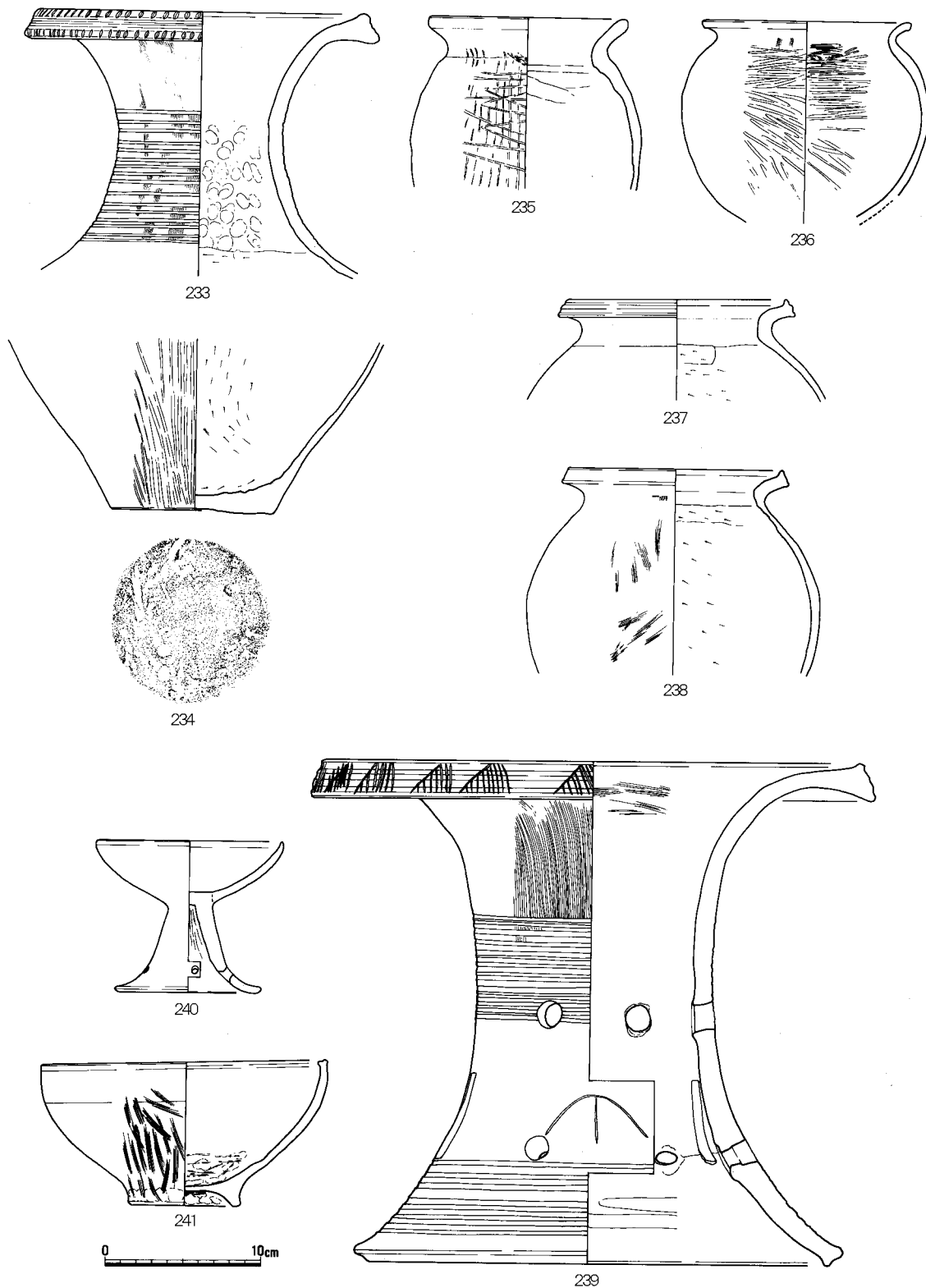
溝9は、3区南東端を東西に流れる溝で、長さ2.3m、幅39cmを測る。上部に231・232の甕等からなる帯状の土器溜りがある。時期は弥生後期後葉である。(氏平)



第59図 溝9断面図・出土遺物 (1/30・1/4)

6 土器溜り

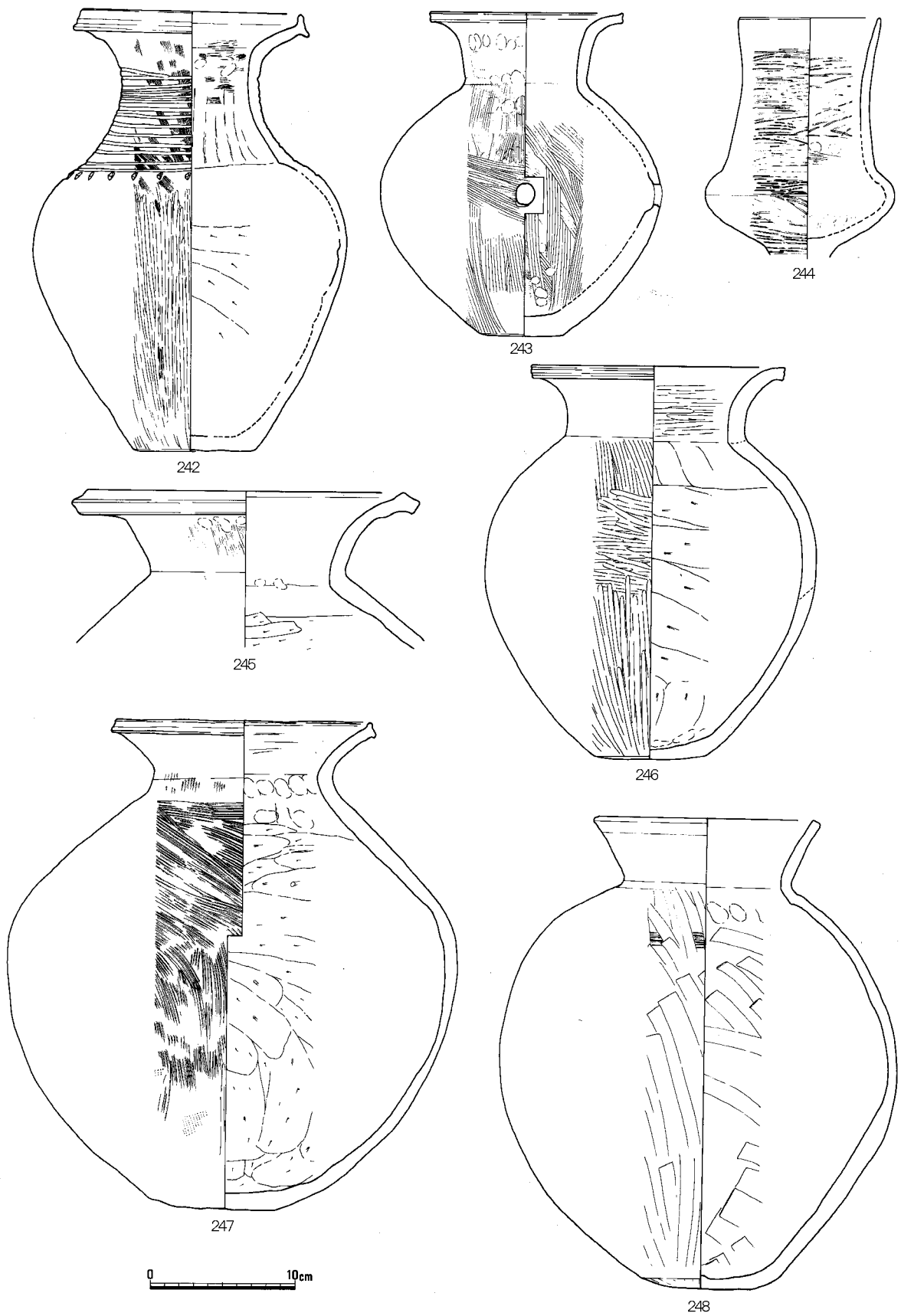
土器溜り1 (第27・60図、図版50)



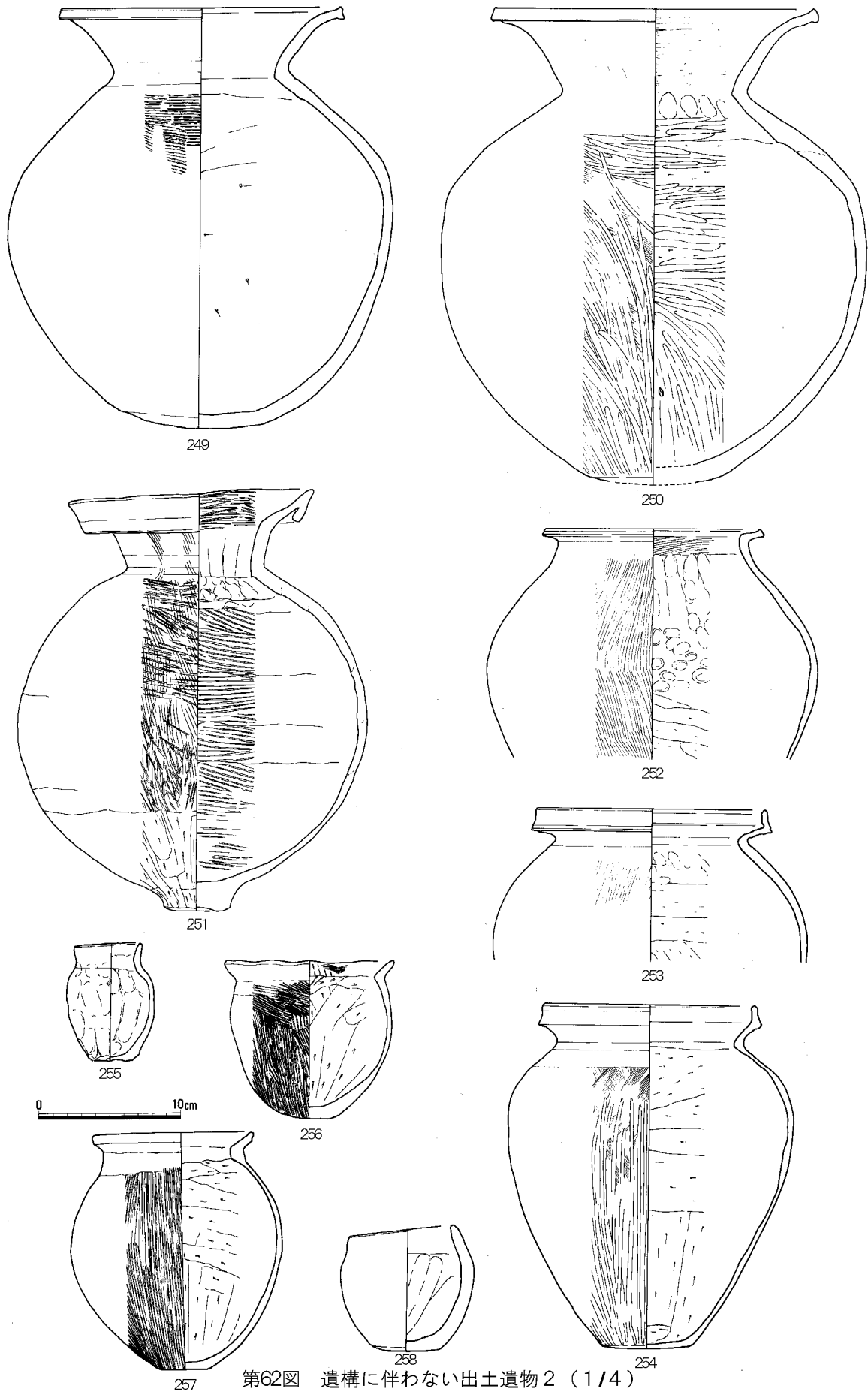
第60図 土器溜まり1出土遺物（1/4）

1区の南方、溝8の東肩付近で検出された。ほぼ1m四方の範囲に弥生土器が密集して現れるという検出状態は、溝8が掘り込まれた際一部が削り取られたものの、その一部が高まりとして残されたという状況と理解された。

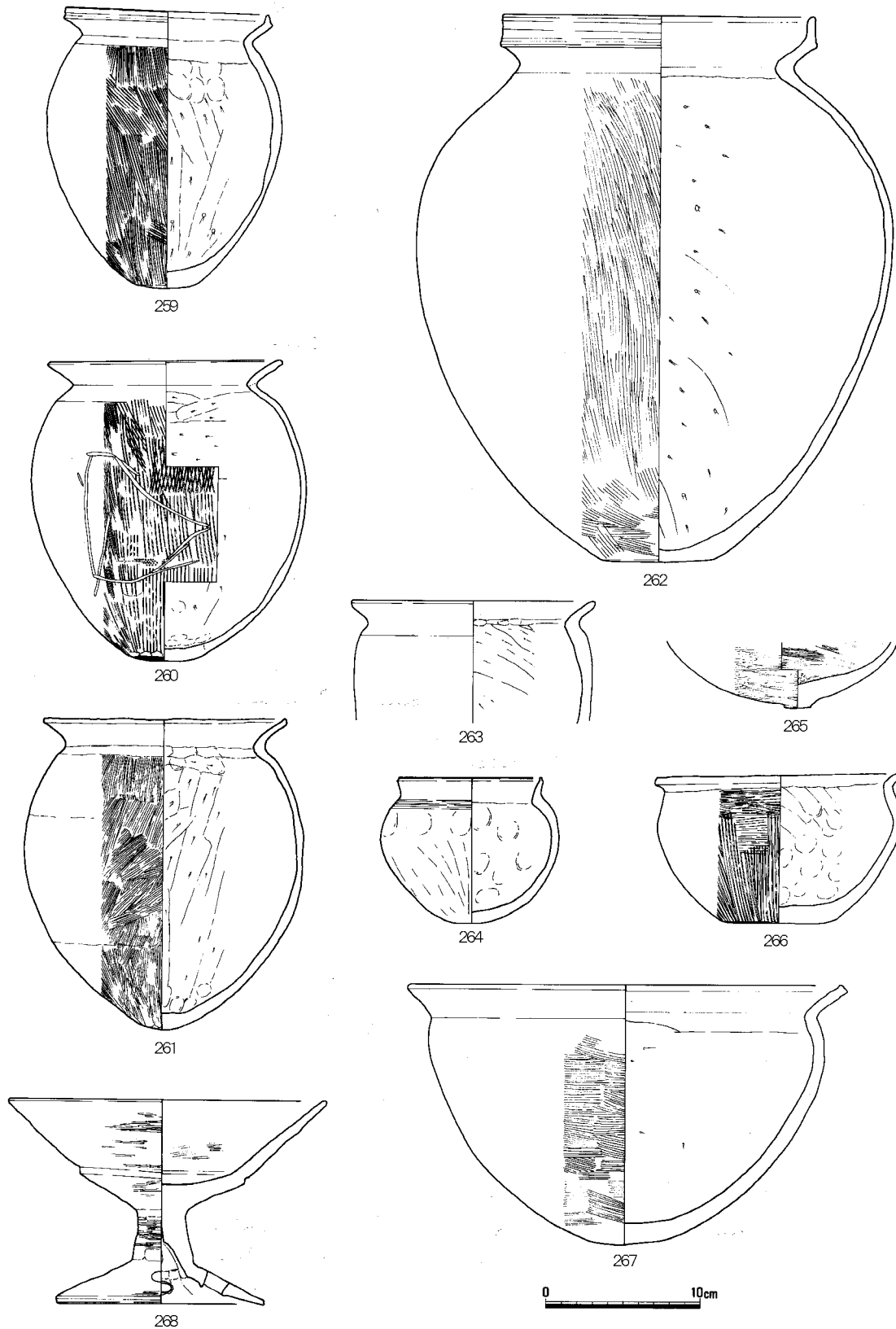
出土遺物のすべては、弥生土器である。長頸壺233は口頸部のみ完存する。口縁部には上端・下端に



第61図 遺構に伴わない出土遺物1 (1/4)



第62図 遺構に伴わない出土遺物2 (1/4)



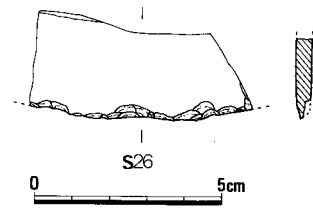
第63図 遺構に伴わない出土遺物3 (1/4)

刻み目が飾られる。

235~238は甕で、比較的小型の器種で占められる。235の体部外面には、縦横に細いヘラミガキの

痕跡が残される。

239は、ほぼ完形に復元することができた器台である。いわゆる「上東式」の典型的な形状を示す。凹線が巡る口縁部にはヘラ描き鋸歯文が加飾される。筒部には円形と方形の透かし孔が配置され、下位にヘラ描きの単純な図形が描かれている。傘形の線刻の中央下に、縦線を1本加えただけの図案であるが、何を意味するのかは不明である。これらの土器の時期は、後期中頃に比定される。(岡田)



第64図 包含層出土石器(1/3)

7 遺構に伴わない遺物

第61～63図に掲げる弥生土器は、大半が1区の古墳時代前期の溝11から出土したもので、おそらくは溝5に伴う可能性が極めて高いと判断されるものである。これらの土器を発掘中に分離抽出することは、かなり困難であった。単純に、1条の弥生時代の溝を古墳時代の溝が切る、という状況ではなく、数条の溝が重なり合うという複雑な様相があった。したがって、明らかに溝11に伴う可能性が低い弥生土器と推定される土器をすべて掲載することとした。ただ、一部の土器は弥生時代終末期に比定されるもので、厳密に弥生土器と土師器の境界の設定は微妙かつ困難で、多少の混濁があることは否めない。

第61図にはすべて壺を掲載する。長頸壺とわずかに頸部をもつもの、口縁部が短く外方するもののほか、小型の台付壺がある。

242は114に類似する長頸壺である。長頸壺に対し、比較的短い頸部を持ち、外方する口頸部が特徴的な243・245～250などの壺も存在する。いずれも加熱痕跡はなく、もっぱら容器として利用されたようであるが、243のように体部中央に円孔が穿たれるものもある。

249の体部外面には横位のタタキが観察される。250の体部は、内外面ともにヘラミガキが多用される特色がある。これらは古式の土師器へ移行する過渡期的形式の可能性が高い。

244は台付きの直口壺で、外面には丁寧なヘラミガキによる調整・仕上げが施される。胎土は精良で、いわゆる精製土器である。

251は球形に近い体部、張り出したぶ厚い底部、特徴的な口縁部をもつ壺である。体部外面には平行タタキ、内面には粗い横方向のハケ調整のみが観察され、他地域からの搬入土器と考えられる。

252は短く薄手の口縁部と、茶褐色で雲母を含む胎土が特徴的な甕である。薄手の体部内面には、ヘラケズリは認められず指頭圧痕が観察される。讃岐地方からの搬入土器の可能性が高い。

253・254はいずれも「オノ町」I式に相当する甕で直立する口縁部、薄手に作られた体部が特色である。

260の体部外面にはヘラ状工具で描いたような痕跡が認められるが、何を描こうとしたのか明らかではない。意図的な絵とは思えないが、偶然性の高い工具の痕跡ではないだろう。

262はほぼ完形に復元された甕で、体部下半には煤が付着する。全体に明るい色調を示し、直立する口唇部など在地の土器とは趣が異なる。

266・267は鉢である。266は安定性を増す広い底部が特徴的である。内面には指頭痕跡が残る。

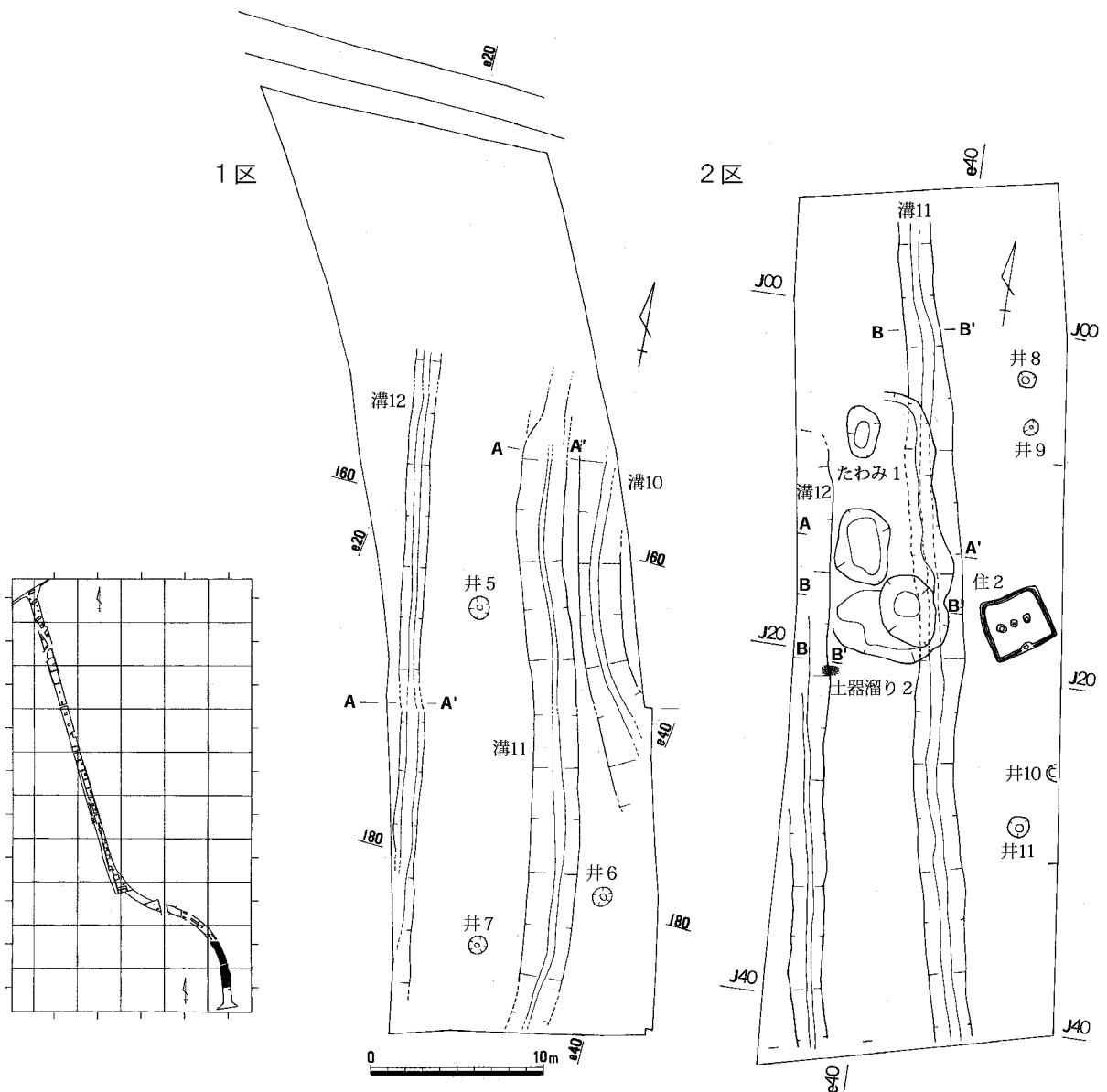
S26は包含層から出土した紅簾片岩製の石鋸と考えられ、玉作りの施溝分割技法に利用された可能性が高い。時期的には古墳時代よりむしろ弥生時代に比定される可能性を指摘しておく。(岡田)

第4節 古墳時代前期の遺構・遺物

1 概要

古墳時代前期の遺構としては、竪穴住居1軒、井戸11基、溝7条、たわみ2基を検出した。竪穴住居は、2区の中央部東よりに検出した。長方形を呈する住居で、支柱穴は2本で、南壁の中央に小さな土嚢を持つ。井戸は、11基を検出したが、中でも井戸12・13からは、大量の遺物が出土し、3回もしくは4回にわたる廃棄の状況がみられる。また、井戸13からは、木製品が出土している。浮き子・二又鋤・盤などが出土した。土器では、東海系のS字口縁を持つ台付甕が出土している。

溝は、溝10が、1区の中のみで検出されたのに対し、溝11・溝12は、1区から3区までを南北に貫

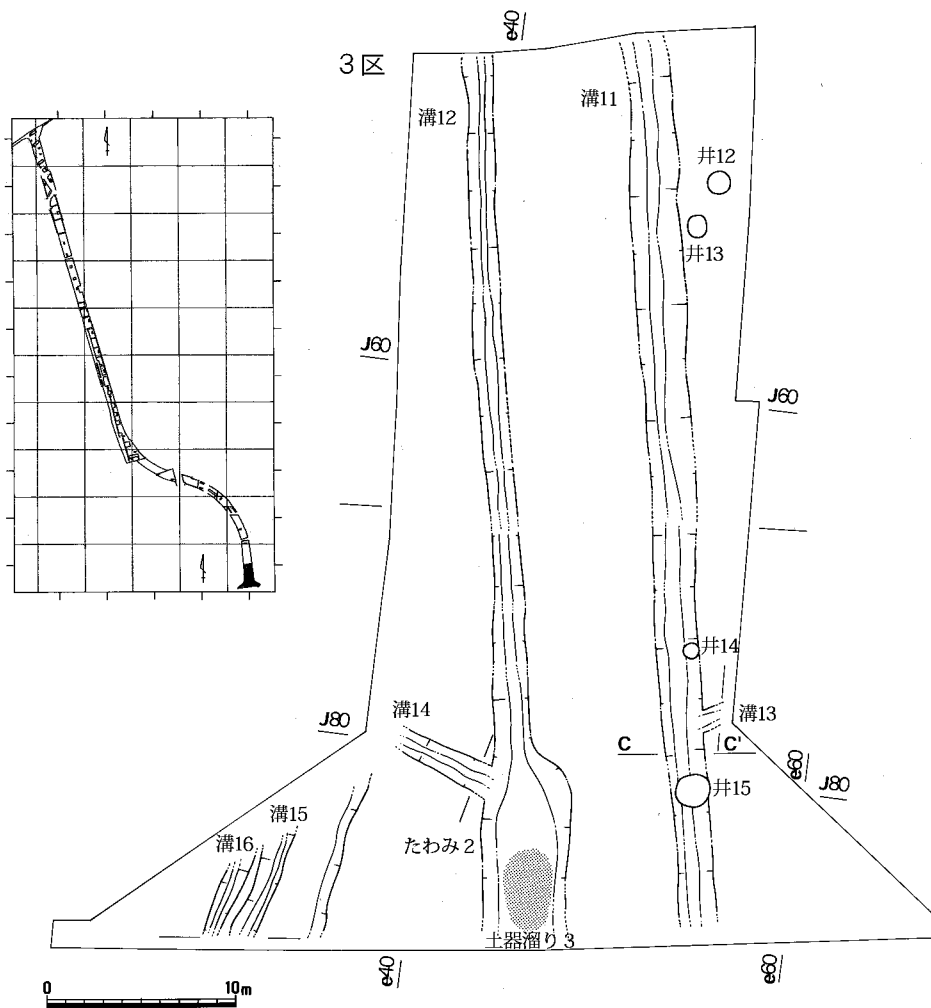


第65図 1・2区古墳時代前期遺構全体図 (1/400)

くものである。溝10~12からは、多くの土器が出土している。在地の土器がほとんどであるが、中には、讃岐地方、畿内地方、山陰地方、遠くは鹿児島県からの土器も出土している。溝11には、土器を製作し、完成した後で底部を抉り取っている土器がみられる。タタキでは、非常に細かいタタキが施されたものがみられる。また、手焙り形土器・鼓形土器・鉄製鎌なども出土している。

土器溜まりを2か所に検出している。いずれも手捏ねによるミニチュア土器の一群を検出したものである。状態からみて、祭祀を行った跡と考えられる。土器溜まり2は、狭い範囲にまとまっている。長さ1m、幅45cmの範囲に集中するものである。それに比べて、土器溜まり3は、南北4m、東西3.6mの範囲に広がっている。また、ミニチュア土器を入れ子にしたものや、ミニチュア土器に鉄製品や、白玉を中に納めたものなどがみられ、祭祀の状況をうかがわせるものがある。

たわみは、2基を検出している。たわみ1は、2区の溝11と溝12に挟まれるように検出した。このたわみからは、多くの遺物が出土した。ほとんどが壺・甕などの土器であるが、手焙り形土器は、完形品が1個体出土している。また、鼓形土器は、4個体分が出土している。装飾品では、碧玉製の管玉が1点出土している。鉄製の斧も1点出土している。たわみ2は、3区の南端に、溝12と重なった状態で検出した。浅く窪むものであり、この窪みの中層からは、何らかの祭祀に関係したと考えられるミニチュア土器が数多く出土している。 (井上)



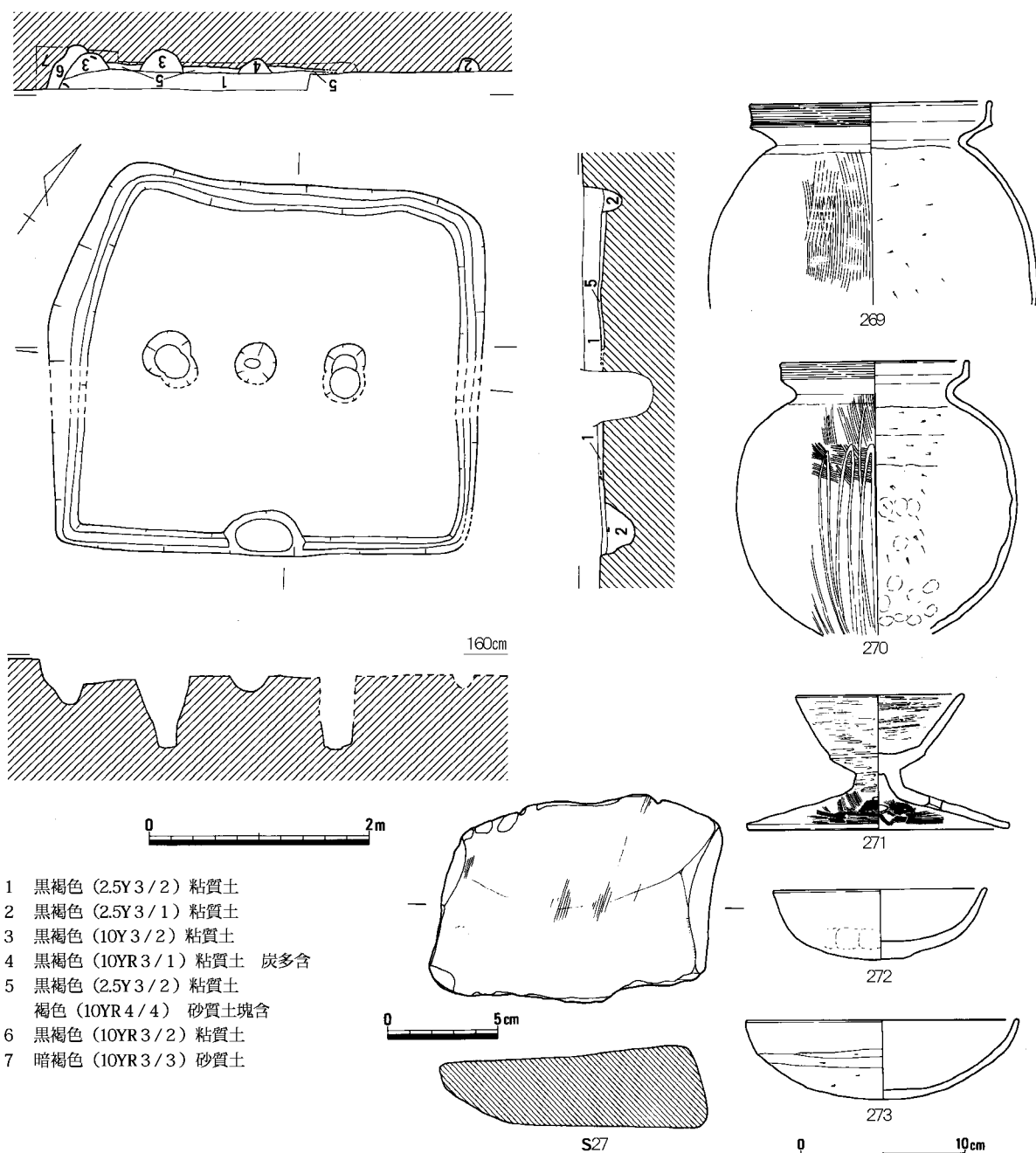
第66図 3区古墳時代前期遺構全体図 (1/400)

2 竪穴住居

竪穴住居 2 (第65・67図、図版50)

2区の中央部東よりに検出した長方形の竪穴住居である。住居の規模は長辺4m、短辺3.4mを測る。住居の床面からは、2本の柱穴と、1個の中央穴を検出した。2本の柱穴はいずれも若干のずれを持って2回掘られており、1度の建て替えを示している。また南壁の中央に楕円形を呈する土塋を検出した。壁に沿って壁体溝が巡る。床面の一部に貼り床を検出した。中央部を溝23に切られる。

出土遺物は、269・270は甕で口縁部外面に沈線が巡る。胴部内面はヘラケズリが施される。271は短脚の高杯である。ヘラミガキと細かいハケメがみられる。272・273は鉢である。S27は平坦な外面に擦痕のみられる石である。時期は古墳時代前期初頭と考えられる。(井上)



- 1 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土
- 2 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土
- 3 黒褐色 (10Y 3/2) 粘質土
- 4 黒褐色 (10YR 3/1) 粘質土 炭多含
- 5 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土
- 6 黒褐色 (10YR 4/4) 砂質土塊含
- 7 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
- 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質土

第67図 竪穴住居 2・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

3 井戸

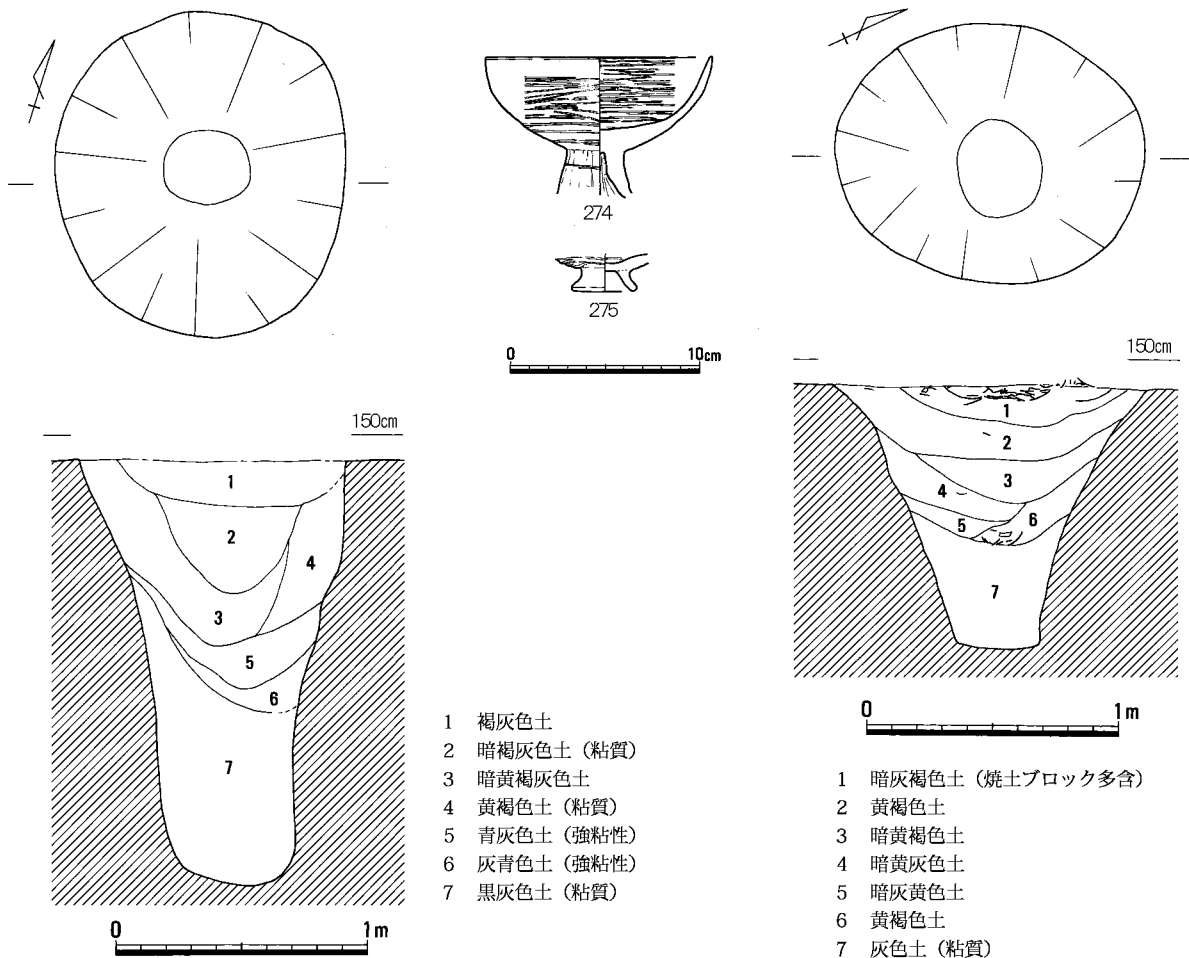
井戸5 (第65・68図)

1区微高地部分のほぼ中央で検出された、長径約1.3m、短径約1.1m、深さ約1.7mを測る素掘りの井戸である。断面形は筒形を呈し、下層は黒灰土が多量かつ一時に埋積したことが観察できる。西側に溝12、東側に溝11があり、南方の井戸7や井戸6と切り合い関係が認められない点に注意される。出土遺物には274の高杯と275の製塩土器脚部片がある。後者には、体部下位に特徴的な平行タタキがみられる。これらの図化できた土器のほか少量の甕片があるが、体部は薄手でいずれも口縁部に櫛描き平行沈線が施された吉備型甕である。 (岡田)

井戸6 (第65・69・70図、図版51)

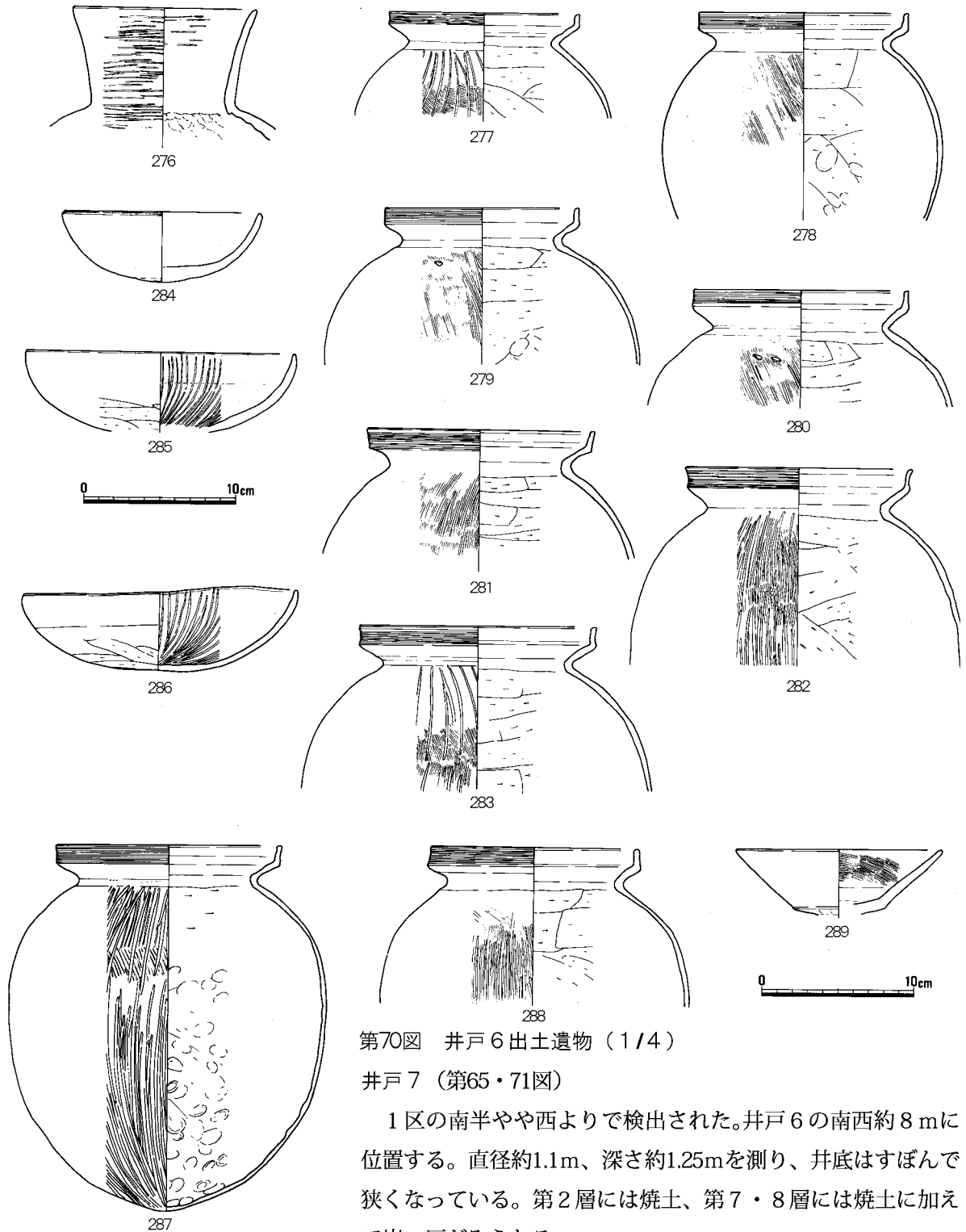
溝11をはさんで南東方約18mで検出された、長径約1.25m、短径約1m、深さ約1.1mを測る素掘りの井戸である。断面形は逆台形を示し、上位は大きく開く。井底は比較的平坦である。

中層と上層で土器の集中がみられるが、大きな時期差は認められない。276~283が上層、287~289が中層、第4~6層から出土した土器である。上層・下層ともに圧倒的に甕の出土が多く、その大半は口縁部に櫛描き平行沈線が施された吉備型甕で占められる。276は壺、285・286は内面に放射状のヘラミガキが施された浅い鉢である。289は高杯の杯部で、胎土は精良である。 (岡田)



第68図 井戸5・出土遺物 (1/30・1/4)

第69図 井戸6 (1/30)



第70図 井戸6出土遺物(1/4)

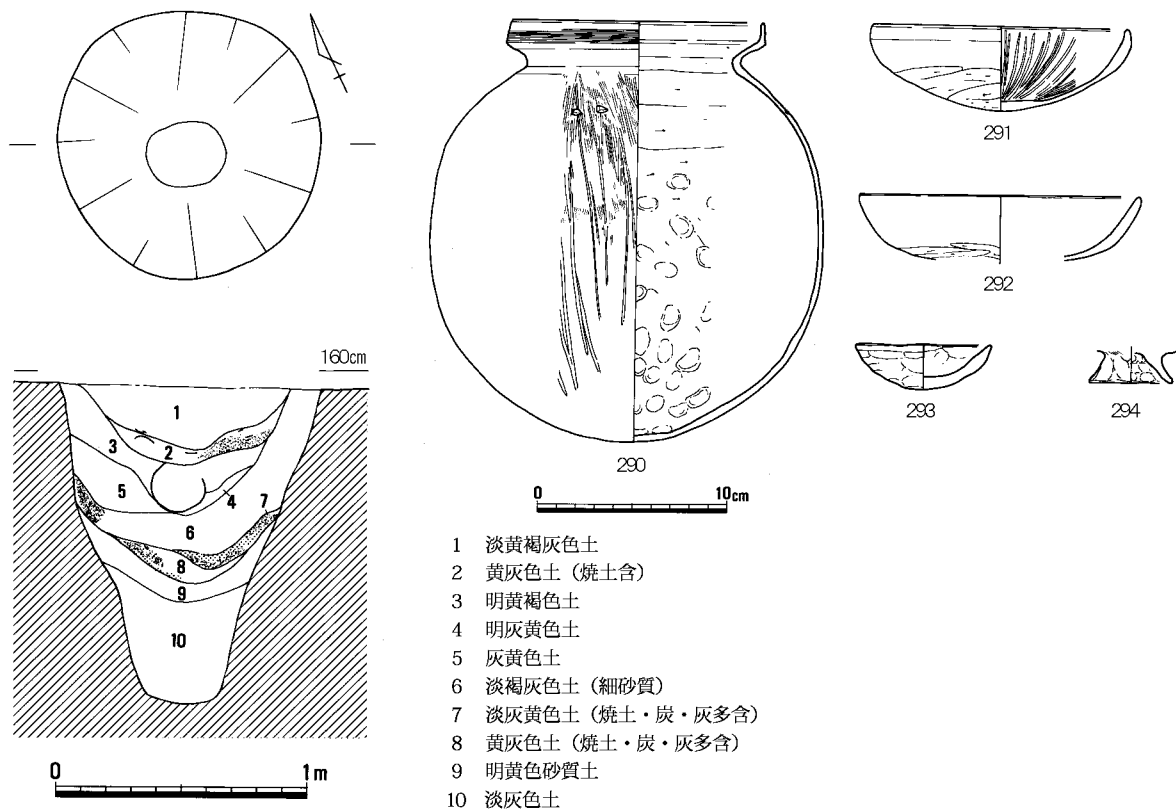
井戸7(第65・71図)

1区の南半やや西よりで検出された。井戸6の南西約8mに位置する。直径約1.1m、深さ約1.25mを測り、井底はすぼんで狭くなっている。第2層には焼土、第7・8層には焼土に加えて炭・灰がみられる。

出土遺物には甕290、鉢291~293、製塩土器294がある。290はいわゆる吉備型甕で、口縁部に櫛描き平行沈線が巡る。体部は球形に近く、井戸6や井戸8の器種に比べると新相を示す。(岡田)

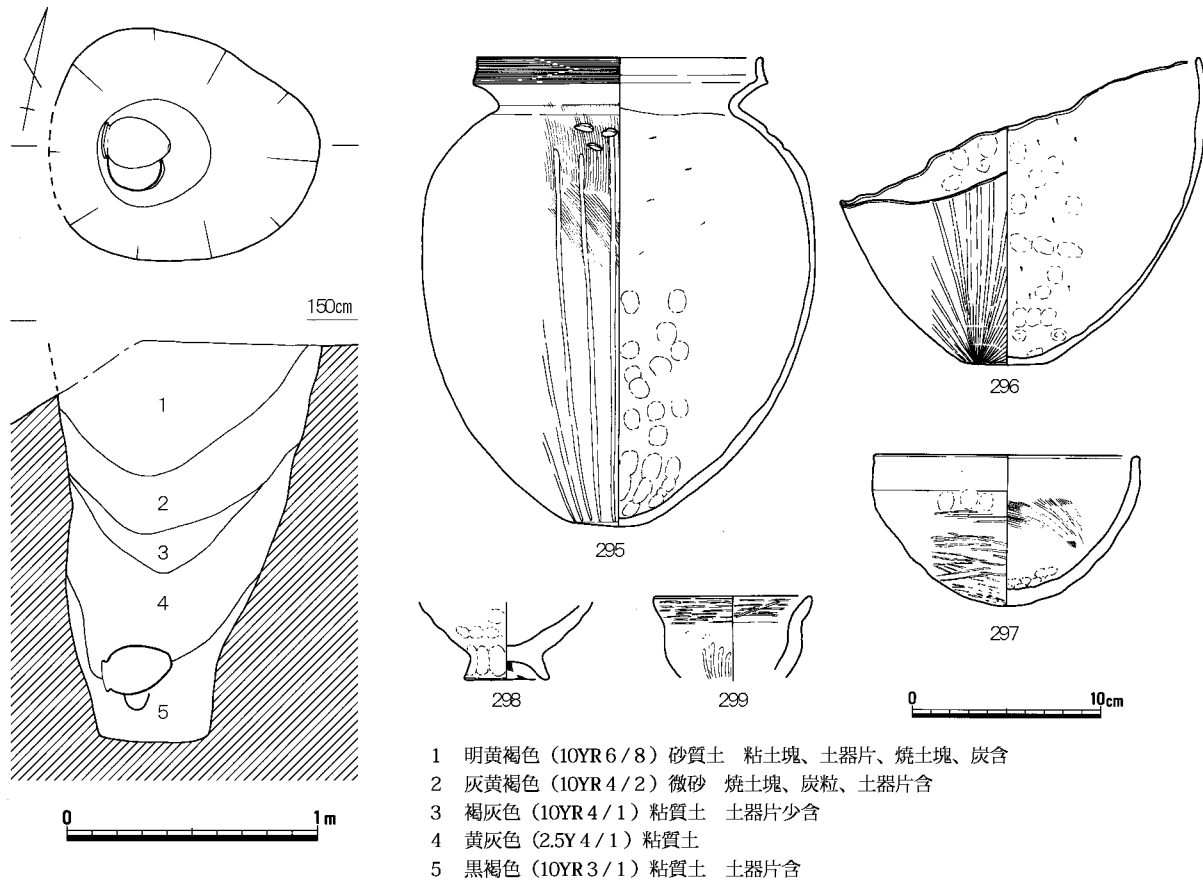
井戸8(第65・72図、図版51)

2区の北東部に位置する。平面は不整楕円、断面は逆台形を呈する。最深部の海拔高は-20cmにまで達する。最下層から口縁部を欠いた甕296、ミニチュア鉢299と貝の殻皮が出土している。第4層の下方から完形の甕295、上方から鉢297が出土しているほか、桃核を多く含んでいた。第2、3層も多



- 1 淡黄褐灰色土
- 2 黄灰色土 (焼土含)
- 3 明黄褐色土
- 4 明灰黄色土
- 5 灰黄色土
- 6 淡褐灰色土 (細砂質)
- 7 淡灰黄色土 (焼土・炭・灰多含)
- 8 黄灰色土 (焼土・炭・灰多含)
- 9 明黄色砂質土
- 10 淡灰色土

第71図 井戸7・出土遺物 (1/30・1/4)



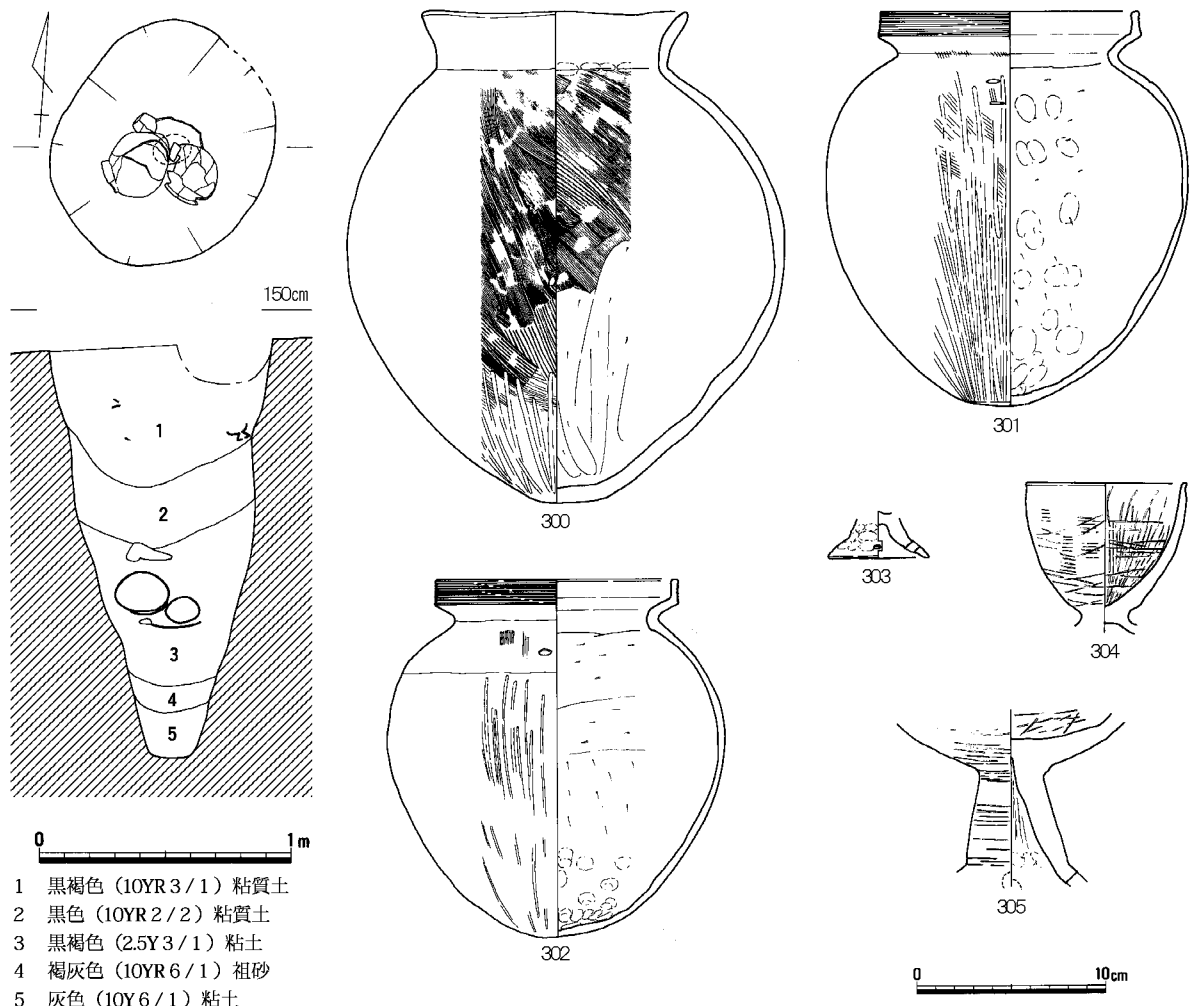
- 1 明黄褐色 (10YR 6/8) 砂質土 粘土塊、土器片、焼土塊、炭含
- 2 灰黄褐色 (10YR 4/2) 微砂 焼土塊、炭粒、土器片含
- 3 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土 土器片少含
- 4 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘質土
- 5 黑褐色 (10YR 3/1) 粘質土 土器片含

第72図 井戸8・出土遺物 (1/30・1/4)

少の土器片を含み、自然堆積中に流入したものと思われる。第1層は白色粘土塊を含み、人為的な埋め戻しと思われる。図示した土器の時期はいずれも下田所式と考えられ、295・296・299は清水を得られなくなった時点で廃棄された可能性がある。298は第2層から出土しており、最下層の土器と時期差はないことから、井戸使用・廃絶ともこの期のうちにおさまるであろう。(稲谷)

井戸9 (第65・73図、図版52)

井戸8の約2m南に位置する。平面は不整楕円形を呈し、底に向けかなり幅を狭め、底面は円形で直径20cmほどを測るのみである。最下層は多量の甕の細片を含み、2個体以上に識別可能だが完品にはならない。体積の割に土器量が多く人為的廃棄か流入なのかはわからない。第4層は砂利が堆積するが、他の井戸にはみられない埋土である。第3層からは亀裂が入り押し潰れた甕4個体、ミニチュア高杯と胎土の精良な台付鉢が出土している。甕は投棄する時点では完形であったと思われる。最上層から出土した土器305・第3層の甕300~302・最下層の甕細片ともに時期差はみられず下田所式と思われ、使用から廃棄、その後の最上層埋め戻しまでがこの土器型式の範疇で捉えられる。(稲谷)



第73図 井戸9・出土遺物 (1/30・1/4)

井戸10 (第65・74図)

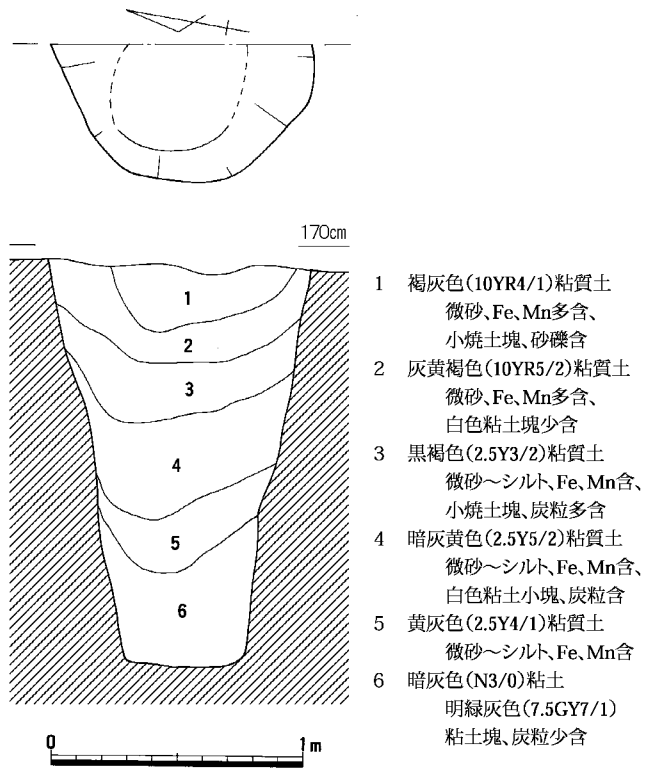
竪穴住居2の南約6mに位置する。2区の東壁際に検出しており東半分は調査区外のため未調査だが、平面は径1m程の円形か楕円形になるであろう。断面は逆台形で検出面からの深さ約1.7mを測る。遺物は埋土6層中にごくわずかに残っていたが、土器も細片のみで時期を決定し難いものであった。

第8章 中撫川遺跡

第2層から弥生末期かと思われる製塩土器と高杯の小片が出土しており、これだけで井戸の時期を判断できないが、弥生末期に近いものであった可能性を示唆しておく。(稲谷) 井戸11 (第65・75図、図版52)

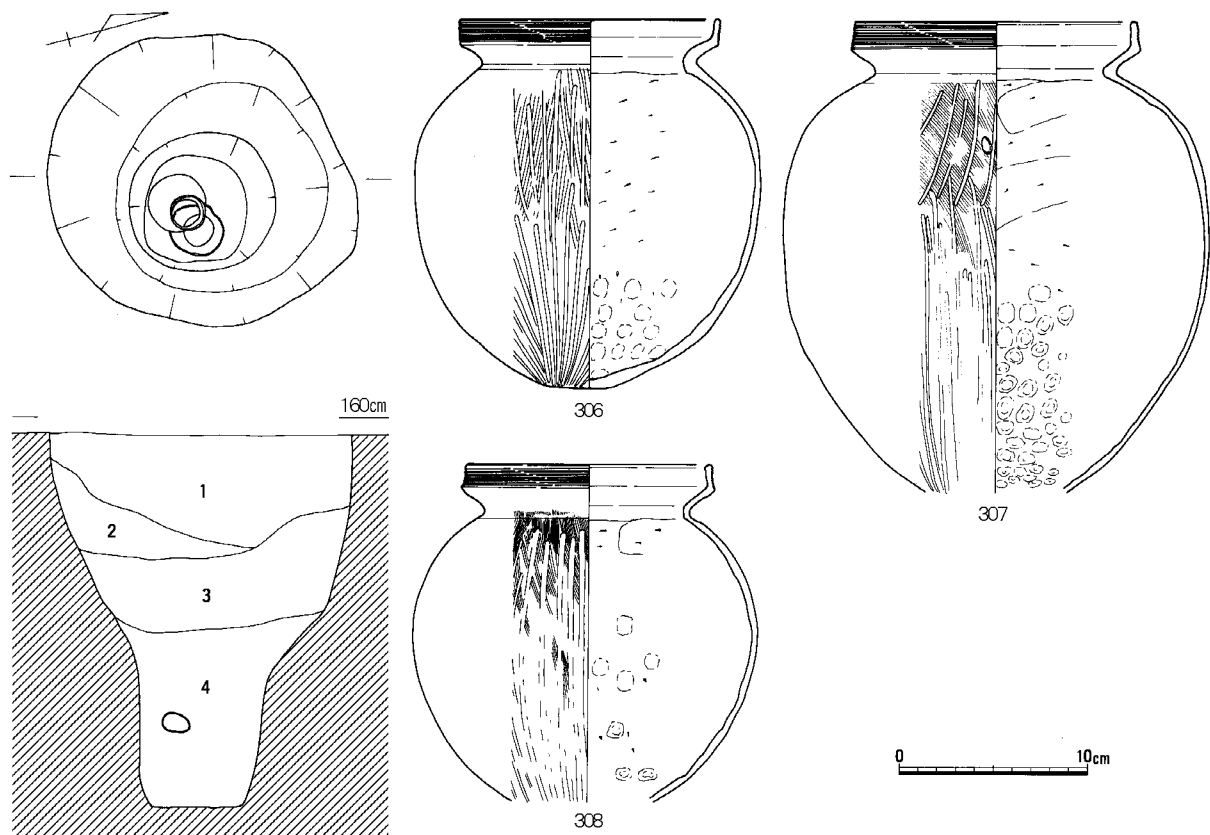
2区の南東部、井戸10の南側に位置する。平面は短径約1.1m、長径約1.2mの不整円形、断面は漏斗状で、海拔80cmあたりで幅を狭める。検出面からの深さは約1.7mあり、海拔0m近くにまで達する。最下層からは完形のものを含む甕が4点出土しており、そのうち一番底のものは下半部を欠いており、口縁を下に向けた状態で出土している。土器は亀川上層期に相当すると思われ、最下層に他時期の遺物混入はみられないため、この期のうちに井戸の使用を終え、廃棄したのであろう。

(稲谷)



- 1 褐灰色(10YR4/1)粘質土
微砂、Fe、Mn多含、
小焼土塊、砂礫含
- 2 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
微砂、Fe、Mn多含、
白色粘土塊少含
- 3 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土
微砂～シルト、Fe、Mn含、
小焼土塊、炭粒多含
- 4 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
微砂～シルト、Fe、Mn含、
白色粘土小塊、炭粒含
- 5 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土
微砂～シルト、Fe、Mn含
- 6 暗灰色(N3/0)粘土
明緑灰色(7.5GY7/1)
粘土塊、炭粒少含

第74図 井戸10 (1/30)



- 1 黒褐色(10YR3/2)粘質土 微砂、Fe、Mn少含
- 2 黒褐色(10YR3/2)粘質土 シルト、Fe、Mn少含
- 3 黒褐色(10YR3/2)粘質土 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土塊少含
- 4 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土 シルト、Fe多含

第75図 井戸11・出土遺物 (1/30・1/4)

井戸12 (第66・76~78図、図版52)

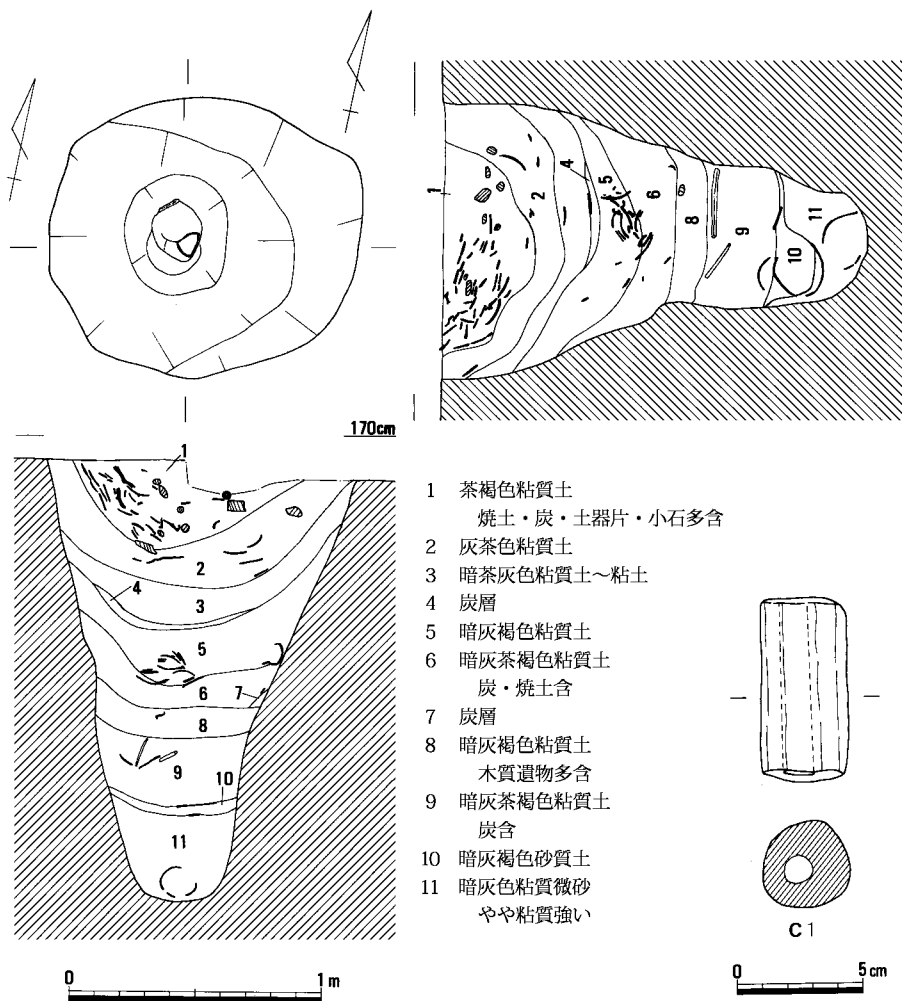
3区の北東部に位置する。楕円形の平面形をもつ井戸である。規模は長軸約1.3m、短軸約1.1mを測り、深さは最深部で約1.7mを測る。井戸の内部は、底に向かって次第に狭くすぼみ、深い漏斗形を呈する。埋土は11層に分層されるが、大きくは上層(1~5層)・中層(6~9層)・下層(10・11層)に分かれる。埋まる過程では、下層1度・上層2度(1・5層)にわたる比較的まとまった遺物廃棄の痕跡を観察することができる。最上層(1層)の遺物は、断面図のとおり比較的小さな破片が折り重なるように出土しており、土器の量はテン箱3箱余りと多数にのぼる。また、これらは整理の過程でも大半が復元困難であった。最終廃棄の時期は井戸13とほぼ同時期で、古墳時代前期の亀川上層期の範疇である。また、下層には3個体分(10層に2個体・11層に1個体)の甕が出土していて、これらの甕(322等)はこの井戸の使用開始時期により近いと思われるが、廃絶後の最上層の土器(316・318・321等)との比較において、型式的にとくに大きな違いは認められない。

以上の埋土状況は、井戸の底に完形または完形に近い甕を1~2個もち、さらにある程度自然堆積で埋まったのち、復元が困難なほどに破損した土器が一括して廃棄されるなど、時期に多少の差があるものの、倉敷市上東遺跡P一へ(凡例註2文献)と酷似している。井戸の廃絶後、または廃絶過程で具体的にどんな状況があったのかは不明ながら、何らかの人為的・儀礼的行為が行われた可能性は否定できない。さらにまた、井戸13とも酷似している点は、そういう行為が古墳時代前期に日常的、

かつ少なくとも弥生後期後葉からのち伝統的に行われていたことも考えられよう。

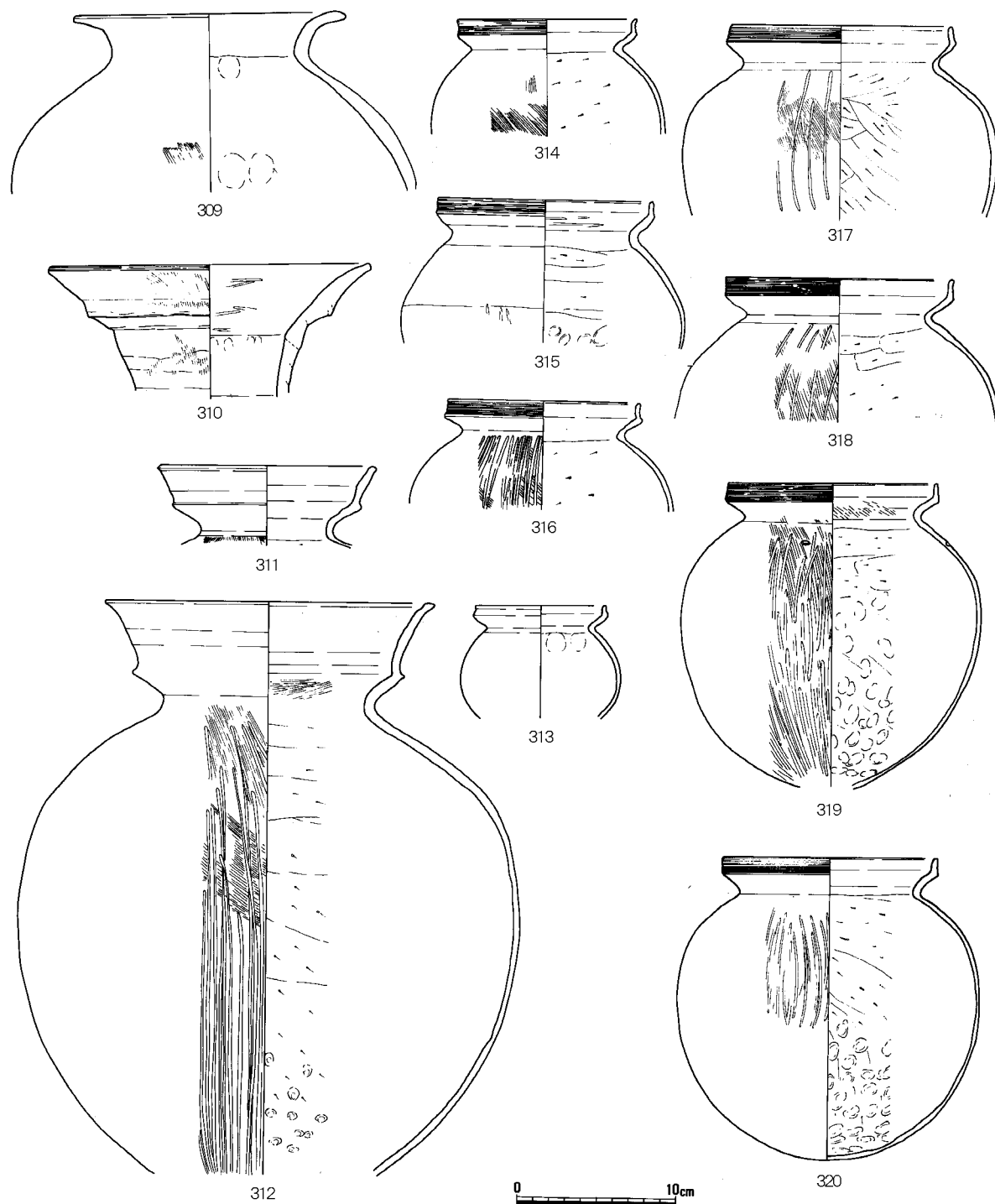
C1の円筒状の土鍾は、第1層から出土していて、形態的にはこの時期に一般的である。

壺はわずかに外傾して短く立ち上がる頸部から大きく開く口縁部をもつ309、逆ハの字状に立ち上がる頸部から二重口縁風にラップ状に広がる口縁部をもつ310、外方に短く屈曲する頸部から上部外方へ外湾し

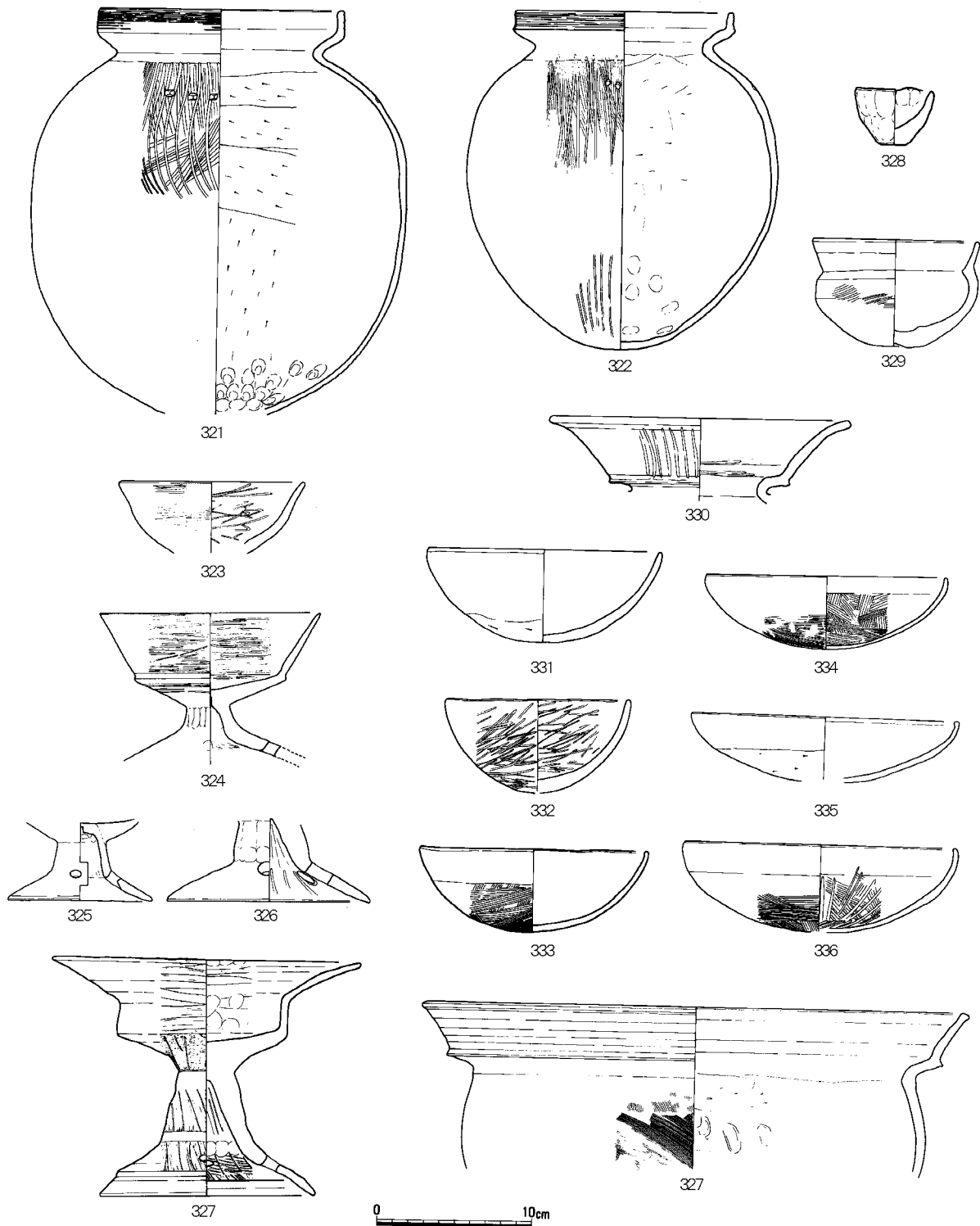


第76図 井戸12・出土遺物1 (1/30・1/3)

て長く立ち上がる口縁部（二重口縁）をもつ311・312の、3タイプがある。そのうち、310は胎土が白っぽく、成形手法も形態もあまり見慣れない壺で、吉備ではない周辺（山陰あるいは播磨？）からの移入の可能性もある。甕の大半（314～322）は、短く立ち上がる口縁部外面に数条の櫛描き沈線を巡らせ、胴部下半から底にかけて指頭圧痕を残すなどの特徴をもつ、いわゆる吉備型甕であり、わずかに底部の痕跡を残す319・322と体部がほとんど球形化した320の両者が混在する。小形の甕313は、口縁外面に沈線をもたず、胎土が水漉し粘土である点で他と区別される。高杯は、杯部が椀状を呈す323、短い脚柱部をもち杯部口縁が斜め上方へ深く立ち上がる326、緩やかに2段に広がる裾部と短く



第77図 井戸12出土遺物2（1/4）



第78図 井戸12出土遺物3 (1/4)

筒状に立ち上がる身部からラップ状に大きく広がる口縁部が特徴的な327など、3種が認められる。324の短脚などの特徴は、後述する井戸13の379と同種の、どちらかというとな下田所式の範疇である。高杯327は播磨系の土器であろうか。小椀あるいは小鉢の類331～336は、甕・高杯に次いで出土個体数が多い。多少深めの331～333と浅めの334～336が存在し、これらが同時期に使用された用途の違いによ

るのか型式差によるのかわからないが、少なくとも332は胎土が水漉し粘土であり、先行する型式とみてよい。大形鉢337は二重口縁を呈し、成形手法の同じ壺312などとセット関係にある。そのほか、手捏ね土器328や小壺329、鼓形器台330がある。329は内面に赤色顔料（丹？）が付着していて、その容器に間違いはない。器台は内外面に丹が塗られ、薄い黄橙色の胎土に黒雲母を含む。山陰産というより、県北産か。

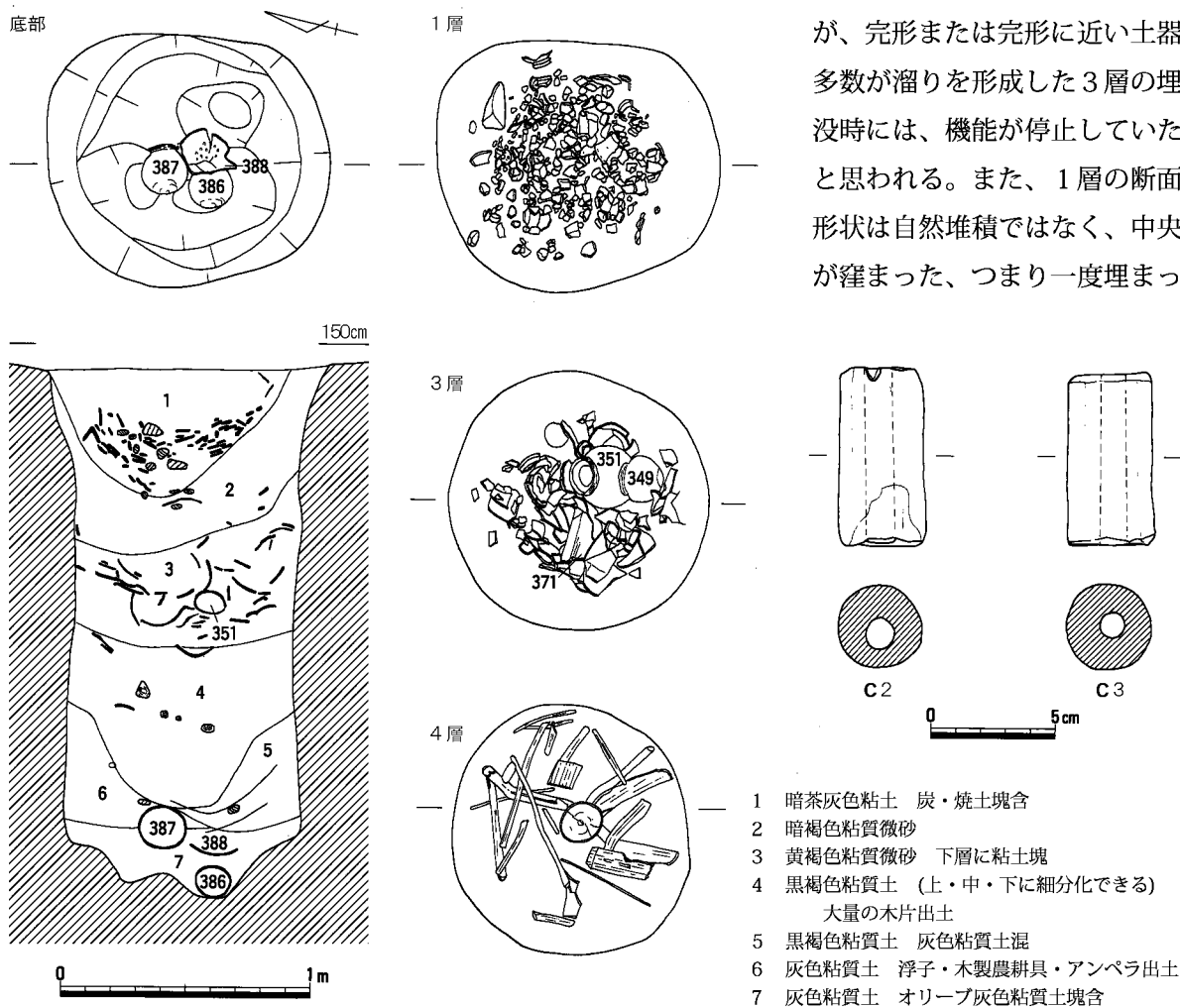
以上の遺構・遺物の特徴により、この井戸は亀川上層期のやや古い時期に使用され、廃絶時あるいは廃絶後に単なるゴミ捨て場になったのではなく、何らかの祭祀的な行為を伴ったと考えられる。

（三宅・柳瀬）

井戸13（第66・79～85図、図版53）

3区の北東部に位置し、井戸13に隣接して検出された。円形の平面形態を呈する井戸である。規模は、直径約1.1m、検出面からの最深は約2.1mを測る。断面形は、深い円筒状の形状をもつ。埋土は7層に分層されるが、埋まる過程で少なくとも4回にわたる廃棄された形跡が看取される。それは、下位から順に、最下層の土器（386～388）が埋没した井戸として使用中あるいは廃絶初期、次に4層下部の木製品廃棄時、そして3層中の土器溜りが形成された時期、さらにおもに1層下半の土器小片と礫の廃棄時である。井戸の機能としては、木製品の廃棄により全体的には約1/3が埋まった時点では、

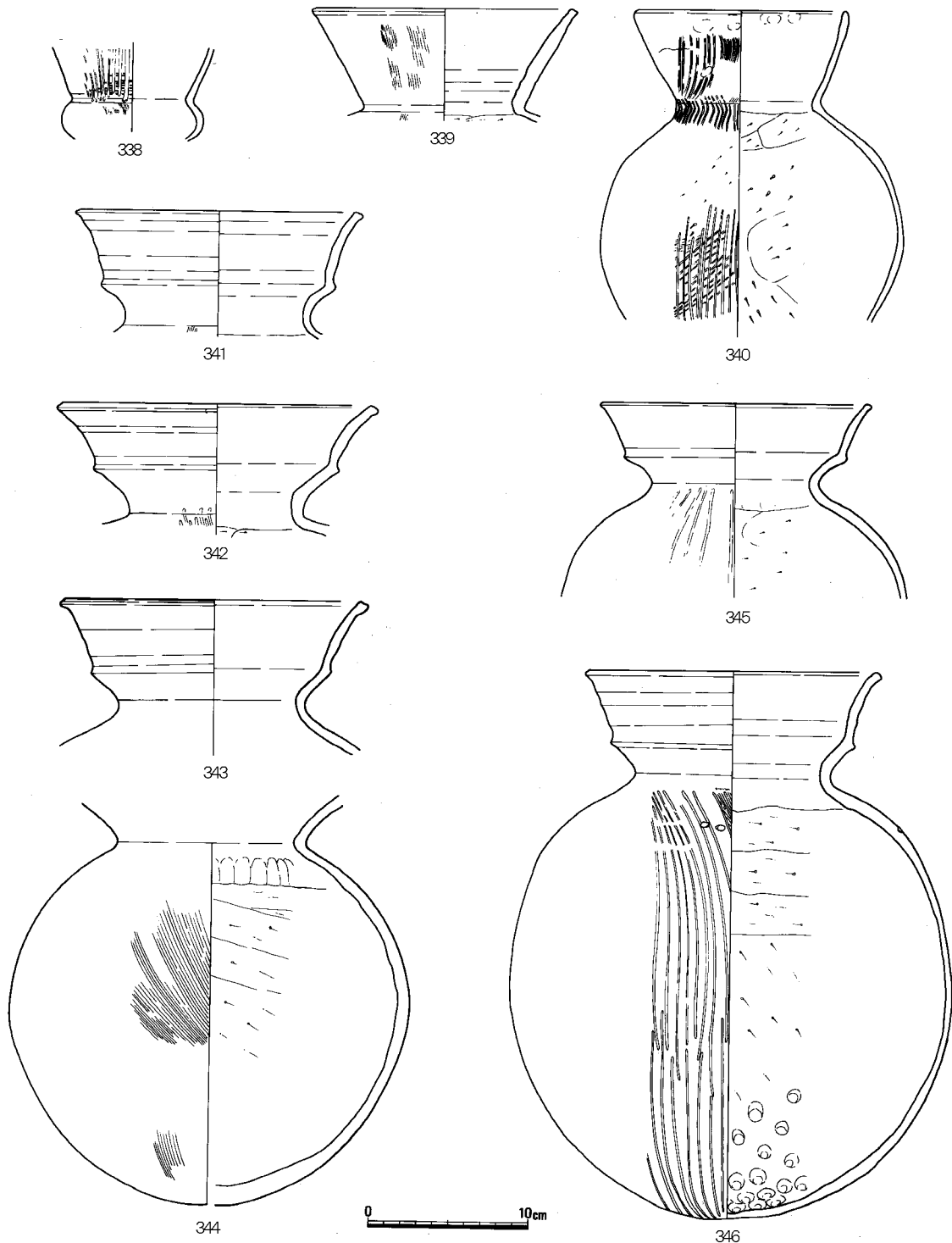
まだ使用していた可能性もあるが、完形または完形に近い土器多数が溜りを形成した3層の埋没時には、機能が停止していたと思われる。また、1層の断面形状は自然堆積ではなく、中央が窪まった、つまり一度埋まっ



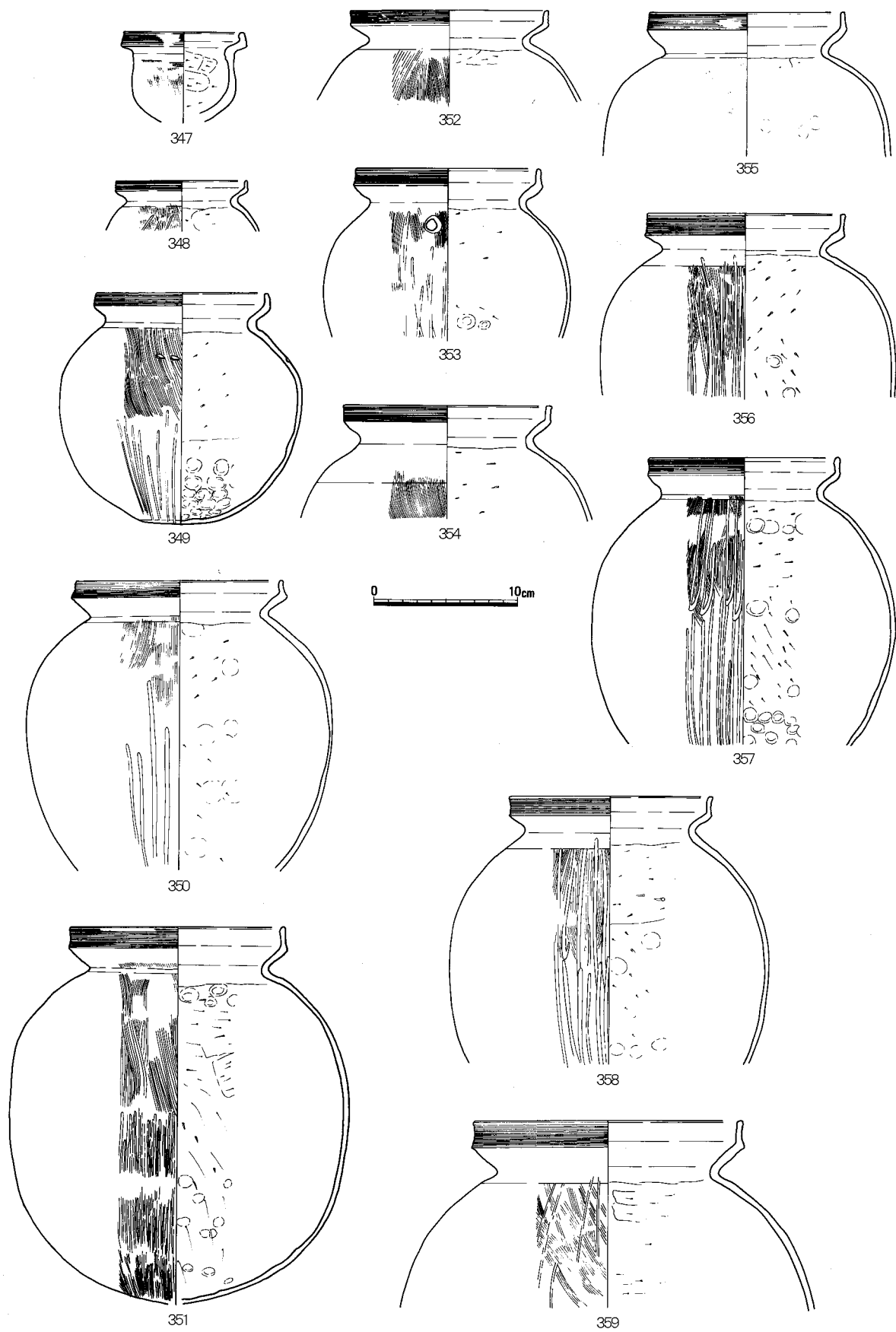
第79図 井戸13・出土遺物1（1/30・1/3）

た井戸の中央部を新たに掘り窪められたような状況を呈し、さらにの中に復元が困難なほどに破損した（させた？）土器が多量に入り込んでいるなど、これもまた井戸12と共通する。

338の小形丸底埴、339・341・342の壺は1層から出土している。339・340の壺は逆ハの字形に、339は外反、340は内湾して開く口縁部をもつ。340は、他の二重口縁の壺（341～343・345・346）と比較して焼成は堅緻ながら作りが雑で、外面の調整もヘラケズリが残るなど、希有な土器である。二重口縁の壺は、頸部の括れ具合と口縁部の開く角度などに多少の違いが認められるが、器形全体のバラ

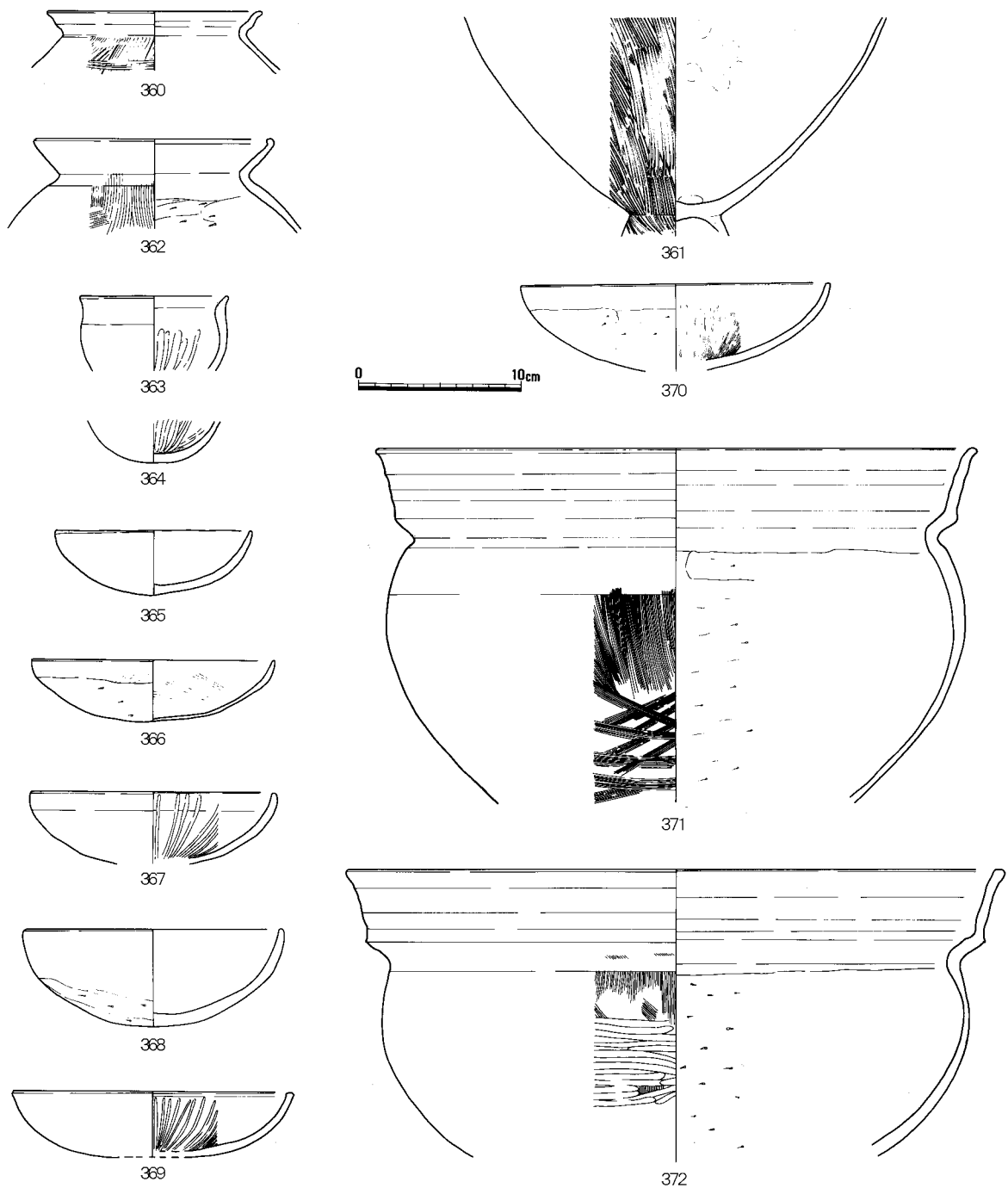


第80図 井戸13出土遺物2（1/4）

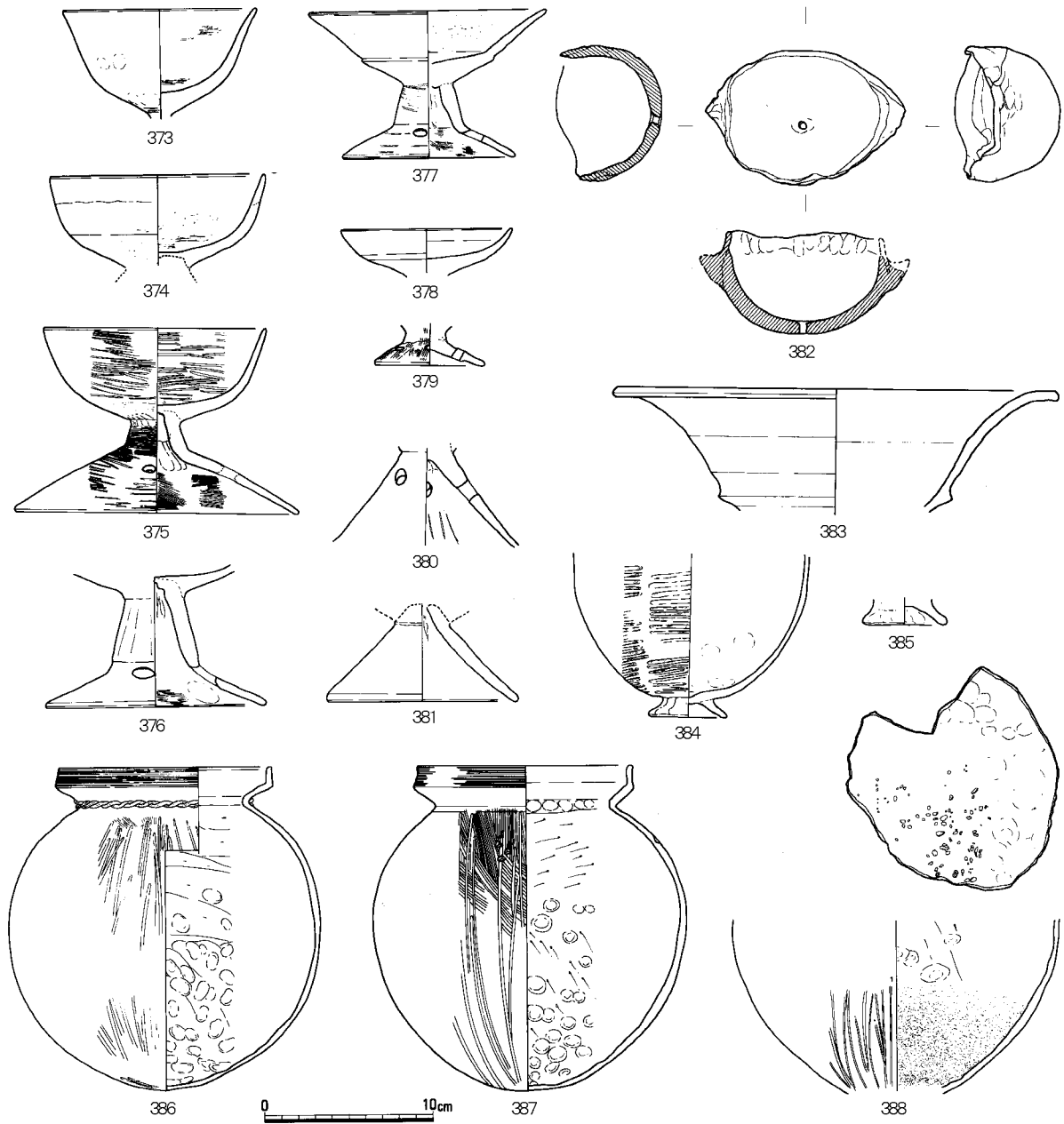


第81図 井戸13出土遺物3 (1/4)

ス、成形・調整手法は完形の346と大差はないと思われる。また、344の口縁端部を欠く壺は、346と比較して厚い器壁、球形の胴部、外面ハケ調整のみなどに違いがあり、二重口縁の一群とは別の「く」の字口縁の可能性が強い。348～359は口縁端部外面に櫛描き沈線を施し、球形に近い胴部の外面は肩～上半部にハケ調整、その上ないし下半を縦方向のヘラミガキ調整、内面はていねいなヘラケズリと指頭による押圧でそれぞれ調整して器壁を薄く成形した、いわゆる吉備型甕である。そのうち、4層下層の354と1～2層の355以外のほとんどは、土器溜まりを形成していた3層の出土である。また、同類の386～388は最下層から出土している。完形の甕2個体のうち片方(386)は、縞りをかけた植物



第82図 井戸13出土遺物4 (1/4)



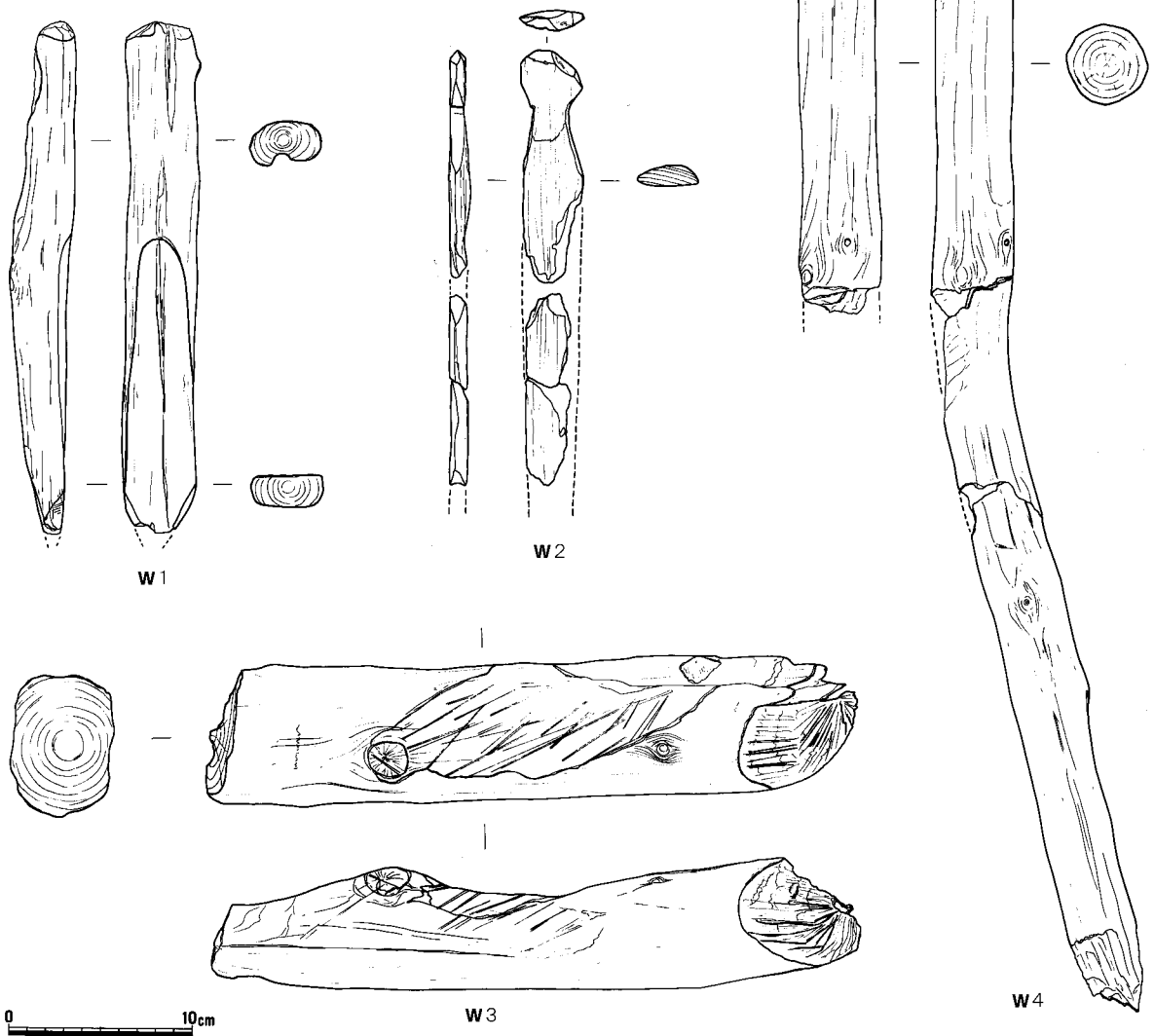
第83図 井戸13出土遺物5 (1/4)

質の繊維が頸部に巻き付けられたままの状態に遺存していたことから、水を汲む時の釣瓶として使用されていた甕とみられる。ただ、井戸の底に遺存していた意味が、使用中に紐状の繊維が切れるなどして誤って落としたままになったのか、廃絶の時の儀式的な行為（例えば使用していた釣瓶を人為的に底に沈める等）そのものであったのかの判断はつかない。また、388の底部に点々と残存する炭化物は、その形状から炭化したコメとみてよい。347は甕の口縁部を意識して作られているが、実用的でないミニチュア壺の部類に入ろう。ちなみに347は1層からの出土である。他の甕として、360～362がある。360・361は、いわゆる東海系のS字口縁をもつ台付き甕である。360は灰色系の色調であるのに対し、361は黄橙色を呈す。前者は伊勢湾または近江周辺からの搬入、後者については形態・調整手法的には搬入土器の要素が強いものの、地元産かも知れない。また、362の布留系の甕は胎土が白っぽく、山陰産の可能性もある。小形の鉢363・364は内面に赤色顔料の残存（鑑定では水銀朱）がみられ、容

器として利用されていたらしい。小形浅鉢365~370および大形鉢371・372は、井戸12のそれぞれの同種と大差はない。高杯は、杯部が椀形の373~375と、口縁端部が斜め外方に長く拡張し、前者より長い脚柱部をもつ376・377の2種がある。378の浅い杯部は379の脚部と対になるのではなく、380ないし381などの椀広がり脚部と対になり、小形器台の受部とみられる。また、382は精製土で作られた小椀形の土製品であるが、底部に小穿孔がみられるなどその用途は不明である。1層の土器溜りから出土した383の鼓形土器は、内外面ともに赤色顔料（丹）が塗布され、胎土の色調（浅黄橙色）や質（黒雲母混）から備中北部産とみてよい。384の製塩土器は、完形に近い形で見つかることの少ないなかで希有である。

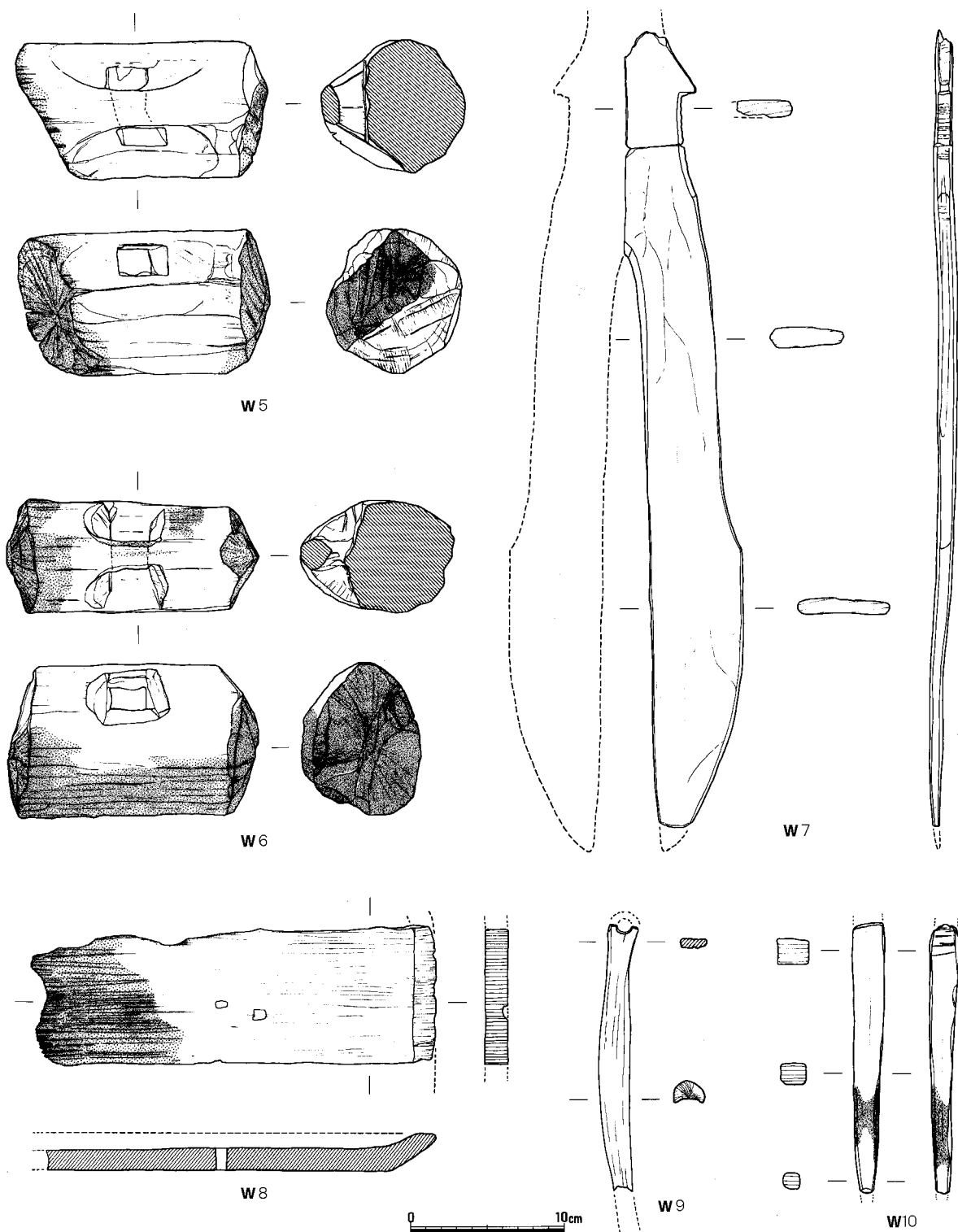
C1・2の筒形の土鍾は井戸12のC1と同類で、重さ・形態ともほとんど差がない。

木製品は、4層から6層にかけての広い範囲で出土した。W1は先端部をV字状に加工した芯材である。用途は特定できない。W2は、面取りや抉り加工を施した板状製品である。W3は、木肌に木材加工時の使用痕跡（刃跡）を残す。先端部を部分的に加工したW4は、耕作具などの柄の一部であろうか。W5・6はいずれも被熱による炭化部分



第84図 井戸13出土遺物6（木製品1）（1/4）

を持つ浮子である。W7の二又鍬は、表面は鉄器による面取り痕、基部側面には波状の縛り痕跡を残す。W8のスギ材を加工した盤は、中央部に1か所の穿孔部分、また部分的に被熱による炭化部分がある。W9は、先端部分を板状に加工し、穿孔部をもつ。W10は楔状の加工材で一部炭化、樹種の同じ二又鍬W7の基部の先端部分の可能性もある。また、これらのほかに杭などの加工木、モモの種子や草木類（イネ・カヤツリグサ等）で作られたアンペラなどを確認したが、そのほとんどは取り上げ



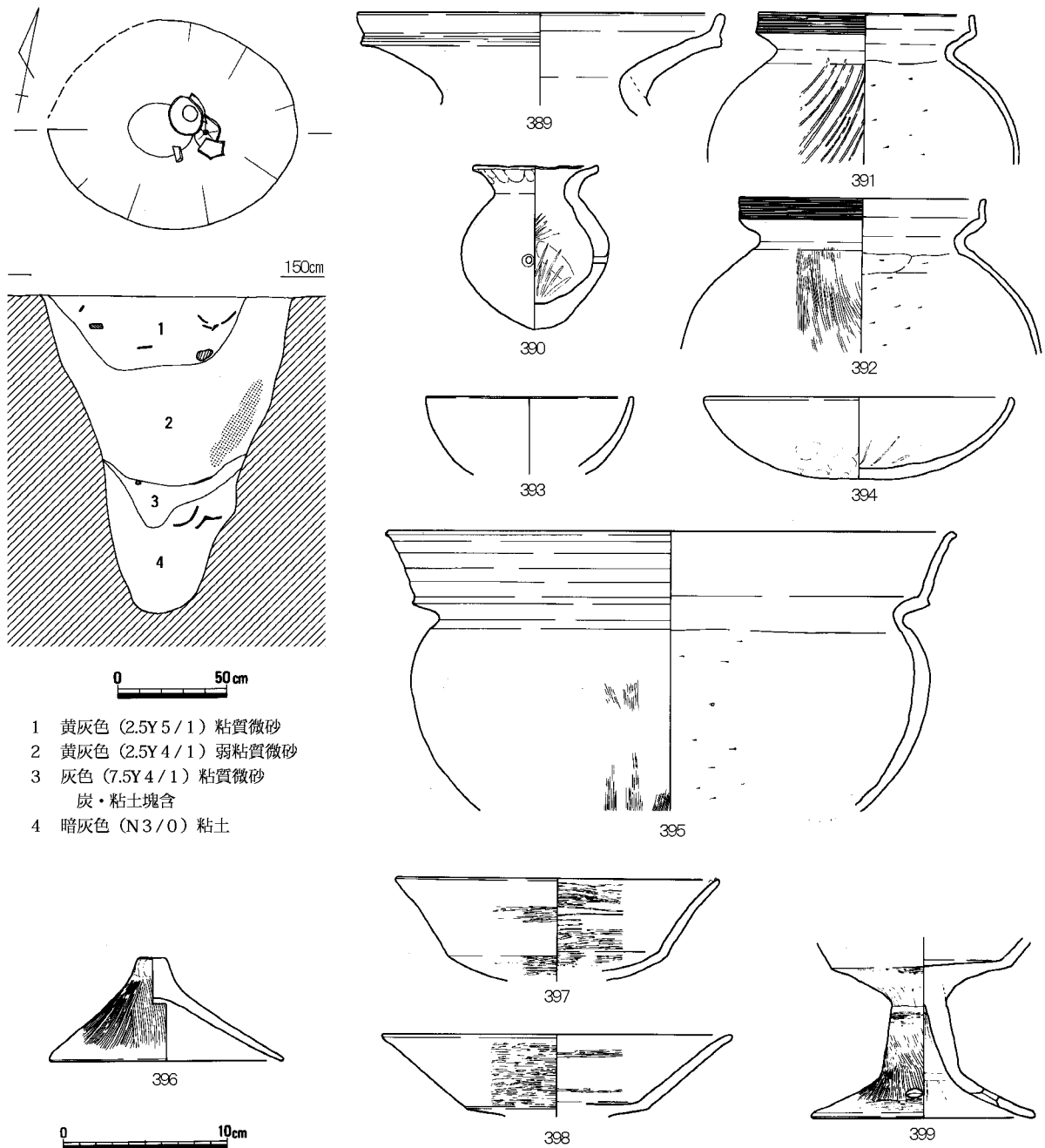
第85図 井戸13出土遺物7（木製品2）（1/4）

後の保存状態が悪く、写真でのみ記録保存としたものも多い。

本井戸は、木製品の包含を除けば井戸12の埋土状況や遺物出土状況は酷似しており、井戸12と同様、井戸の廃絶にあたり何らかの儀礼的な行為が行われたとみられる。出土土器の特徴から、時期は亀川上層期の範疇であり、井戸12にわずかに後出すると思われる。 (三宅・柳瀬)

井戸14 (第66・86図)

この井戸は3区のはぼ中央の北東寄りに位置し、平面形は楕円を呈する。規模は長軸約1.2m、短軸約95cmを測り、最深部で深さ約1.45mを測る。断面はV字状の形状をもち、埋土は4層に大別することができる。1層は、前出の井戸ほど土器溜まりを形成せず、土器の細片と小礫のみの出土という点では類似する。この層からは鉢395と高杯398、2層は壺389・小壺390・高杯399などが出土している。



- 1 黄灰色 (2.5Y 5 / 1) 粘質微砂
- 2 黄灰色 (2.5Y 4 / 1) 弱粘質微砂
- 3 灰色 (7.5Y 4 / 1) 粘質微砂
炭・粘土塊含
- 4 暗灰色 (N 3 / 0) 粘土

第86図 井戸14・出土遺物 (1/30・1/4)

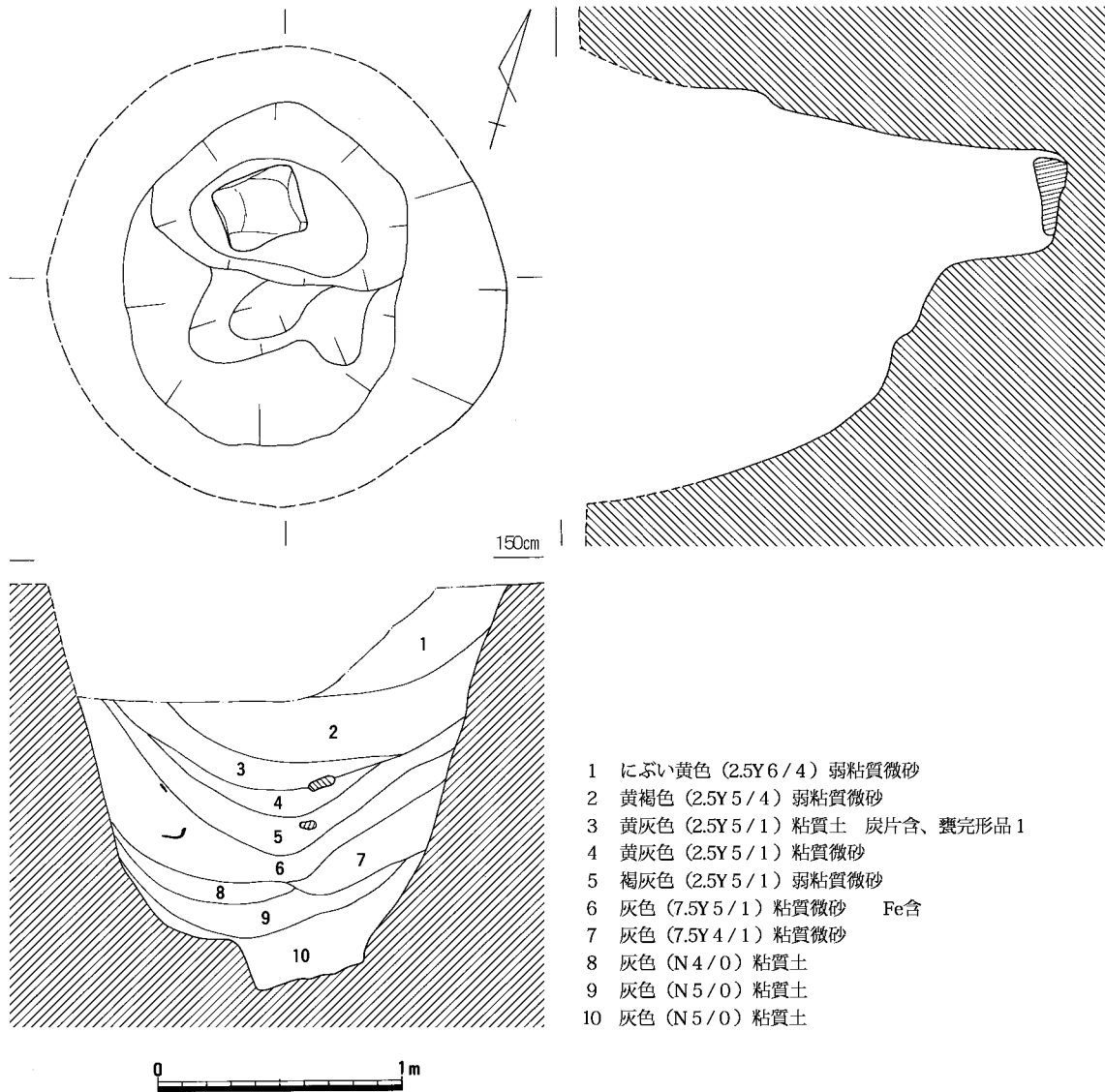
第8章 中撫川遺跡

また、3層は小鉢394、4層は甕391・392と小形器台の脚396などを抽出できた。全体的に土器の出土量は概して少なく、完形土器も含まない。井戸12・13と比べ、1層のあり方に多少の共通点が認められるものの、同種の儀礼的な行為が伴ったかどうかの確証はない。

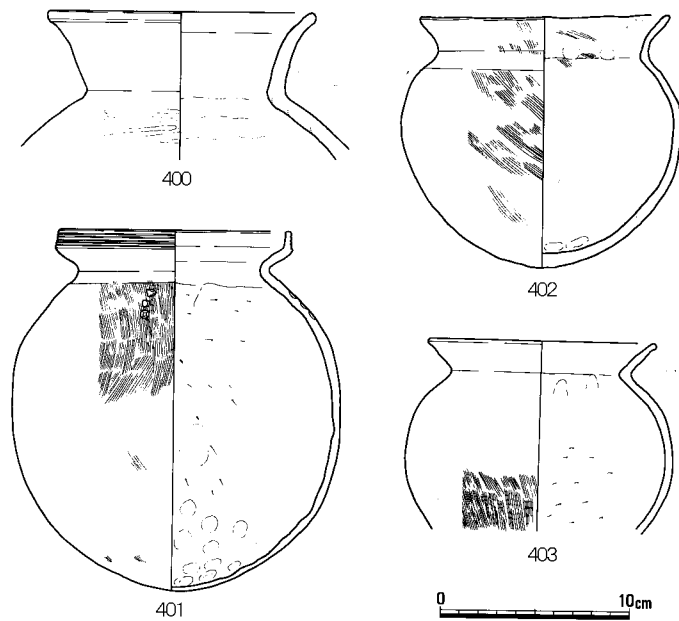
壺389は、大きく外湾して開く口縁端部を上方に短く拡張させた口唇部をもつ。このタイプは、精製土の小椀393や同じ胎土の高杯397などとともに入田所式の特徴をもち、他にわずかに先行する。390の手捏ねの小壺は、側面に小穿孔をもつ。391・392の吉備型甕は、肩部外面の調整にハケメとヘラミガキの差があるだけで、他の特徴は共通する。394の小鉢は器壁が多少荒れているが、調整は井戸12の336や同13の370などと同じとみられる。395の二重口縁の大形鉢は、体部が深めの井戸13の371と形態・調整ともに類似する。脚の396は器台の脚を蓋に転用された可能性もある。399の高杯は398のような杯部をもつ。この井戸は、出土遺物や溝11に後出する切り合い関係などから、廃絶の時期は古墳時代前期（亀川上層期）と考えられ、井戸12とほぼ同時期と推定される。 (三宅・柳瀬)

井戸15 (第66・87・88図、図版54)

3区中央南東寄りに位置し、溝11を切って存在する。検出時には、平面形が溝11とほとんど重複し



第87図 井戸15 (1/30)



第88図 井戸15出土遺物(1/4)

ていたため分からず、溝11の掘り下げ途中にその存在が判明した。平面形はほぼ円形と推定され、径約1.9m前後、最深部の深さ約2mの規模をもつ。断面はU字形の底から部分的に深く掘り窪められた多少歪な形状を呈する。最深部には28×35cmほどの隅丸方形の石が置かれていた。埋土は10層に細分され、とくに下半の分層が多い。この土層のあり方から、下半は井戸として機能する期間中に自然堆積で埋没し、廃絶ののち1・2層による比較的短期間のうちの、人為的な埋め立てが行われた可能性が看取される。なお、本井戸上部を

溝11の埋土として掘り下げていた時にも、1層に相当する部分に井戸12・13のような土器溜まりは認められていない。ただ、出土土器のうち完形の甕401が推定廃絶直前の3層上面(2層に埋まった状態)から単独で出土していて、何か意味をもつのかも知れない。また、壺400・甕402・403は前二者が8層、後者が9層下部相当から出土している。壺400は、球形の肩部から外湾して上方に立ち上がる口縁部をもち、端部はわずかに開き丸くおさめる。甕401は、球形に近い胴部と二重口縁の外面に櫛描き沈線を巡らせる吉備型甕で、肩部に3個の刺突文を施す。402・403はどちらも球形の胴部に「く」の字口縁をもち、402は復元ながらほぼ完形を呈す。この井戸の機能時期は、亀川上層期=川入大溝下層期とみてよい。(三宅・柳瀬)

4 溝

溝10(第65・89図、図版47・49)

1区の微高地部分の東辺北よりで検出された。南端で弥生中期の溝2を切る。すでに前節で触れたように、平面形は溝7と重複し、上層部分を溝10として扱う。

出土遺物は壺404・405、甕406、鉢407、手焙り形土器408がある。405は在地の土器形式にはみられない搬入土器と考えられ、瀬戸内海をはさんだ讃岐地方の土器と推定される。特徴的な内傾する口縁部と体部の一部には赤色顔料が観察される。406は薄手の甕で、やや内傾する口縁部には吉備型甕の特徴といえる櫛描き平行沈線が巡る。底部は丸みを持ちながらも明確に体部と境界があり、やや古相を示す。408は外面にはまんべんなくハケ目による調整が行われる。体部下位と底部の境界は、不明瞭である。(岡田)

溝11〈1区〉(第65・90・92図、図版49)

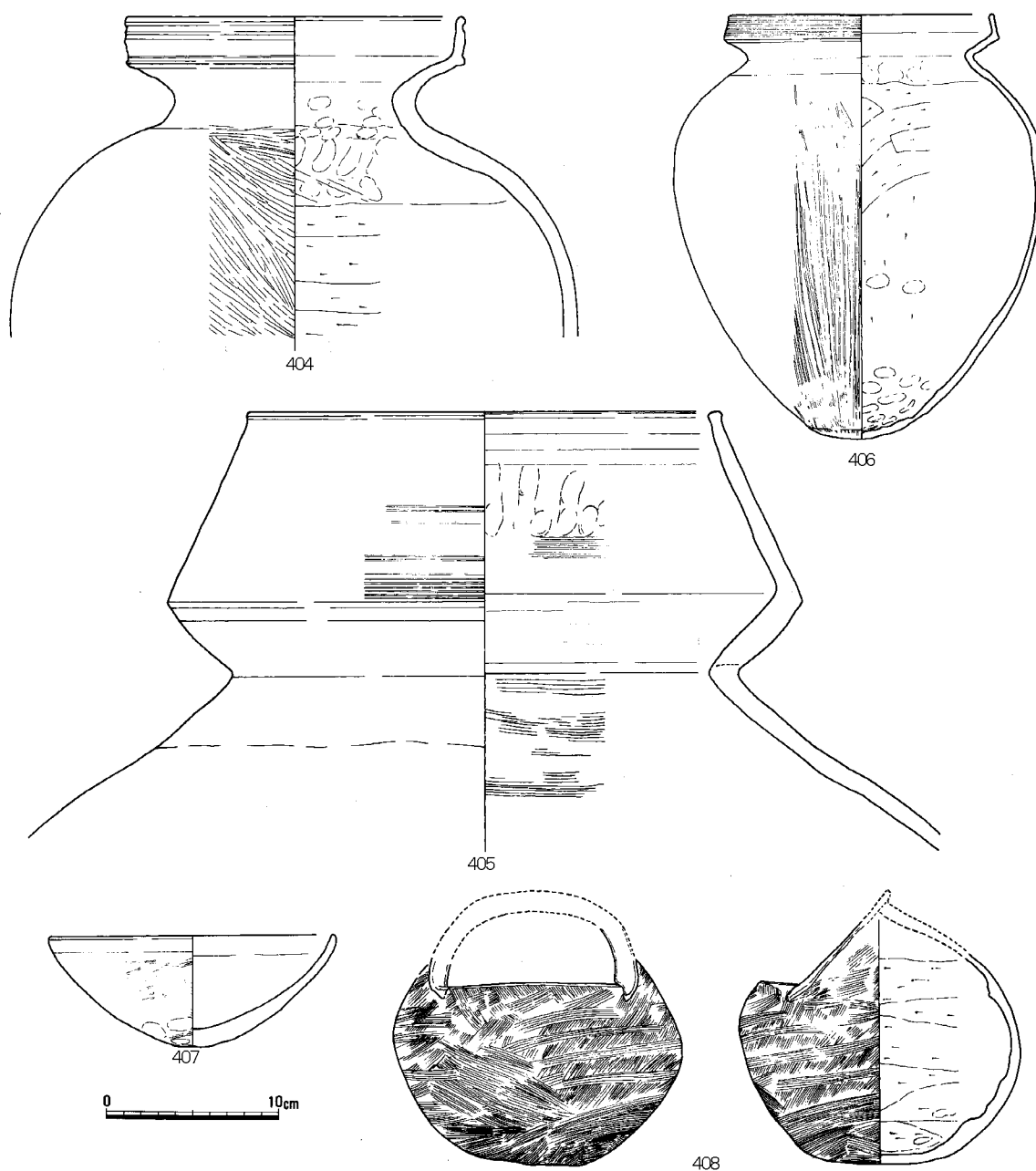
1区の中央やや東よりで検出された南北方向の溝で、3区にかけての検出全長は130m以上に及ぶ。1区では、弥生時代後期の溝5と重複していたため平面形の検出には細心の注意を要した。

検出幅は約3m、深さ約80cmを測り、かなり広く感じられる。断面形は緩やかな凸レンズ形を示す。埋積土は比較的単純で、徐々に埋没した状況が観察される。

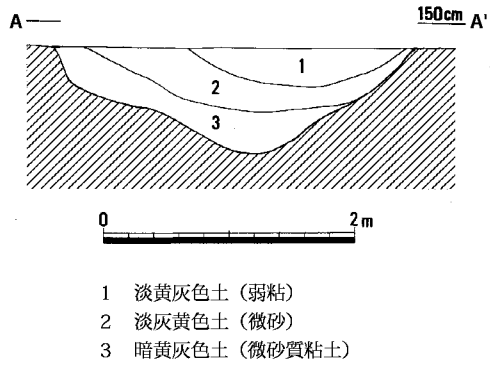
出土遺物には壺409・410、甕411、ミニチュアともいふべき小型鉢412・413、台付鉢414、高杯415～417がある。直立する口頸部が特徴的な410や甕411は、明らかに山陰系の土器と考えられ、独特の白っぽい色調も看取される。搬入土器と考えるか、山陰地方からの移住者が、遺跡地で製作した土器なのか、今後の研究課題である。 (岡田)

溝11<2・3区> (第65・66・91・93・94図、図版49・63)

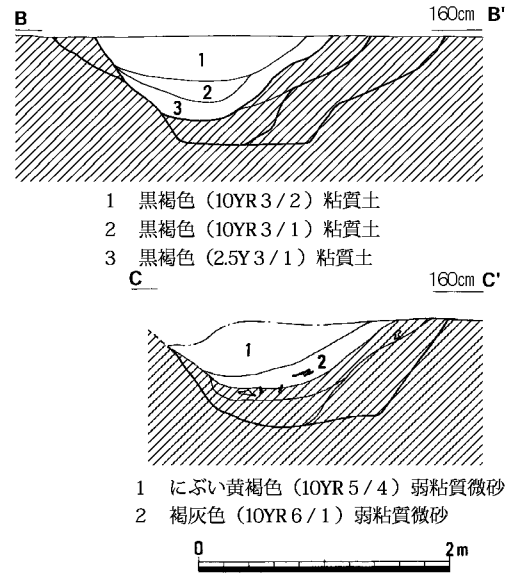
南北に長い調査区を縦断するように検出した。2区では、調査区のほぼ中央部を、3区では調査区の東よりに検出した。検出した全長は、約98m、検出面での溝の幅は2.2～2.6mを測る。この溝は、弥生時代後期の溝6と重なりその上層に検出した。溝の断面形は、椀形に窪むものである。検出面からの深さは65cm前後を測る。出土遺物を見ると、418は壺の口縁部である。外面に円形の浮文が貼り付けられている。419は壺の胴部で、肩部に櫛描き波状文と竹管文が施される。418と419は、胎



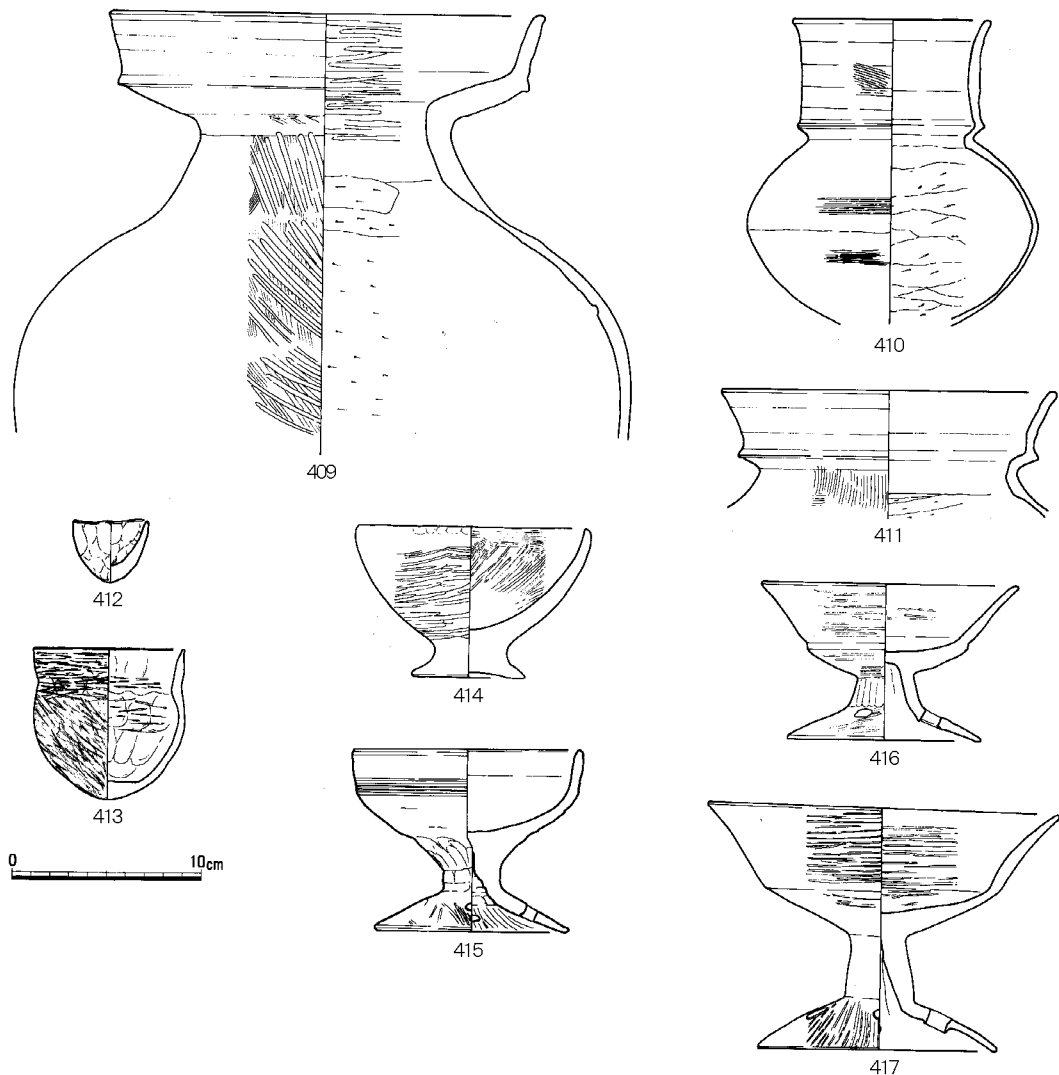
第89図 溝10出土遺物 (1/4)



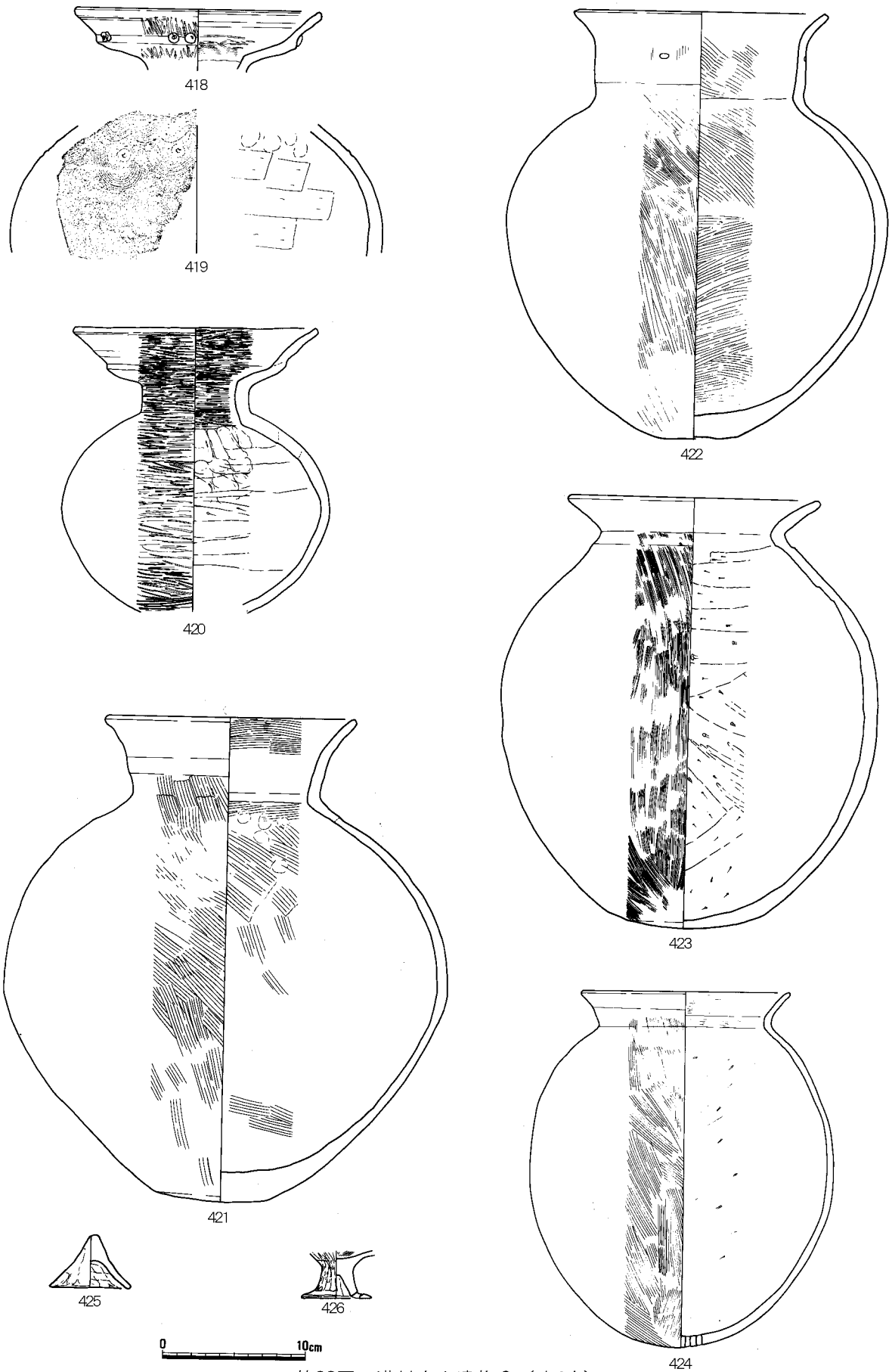
第90図 溝11断面図1（1/60）



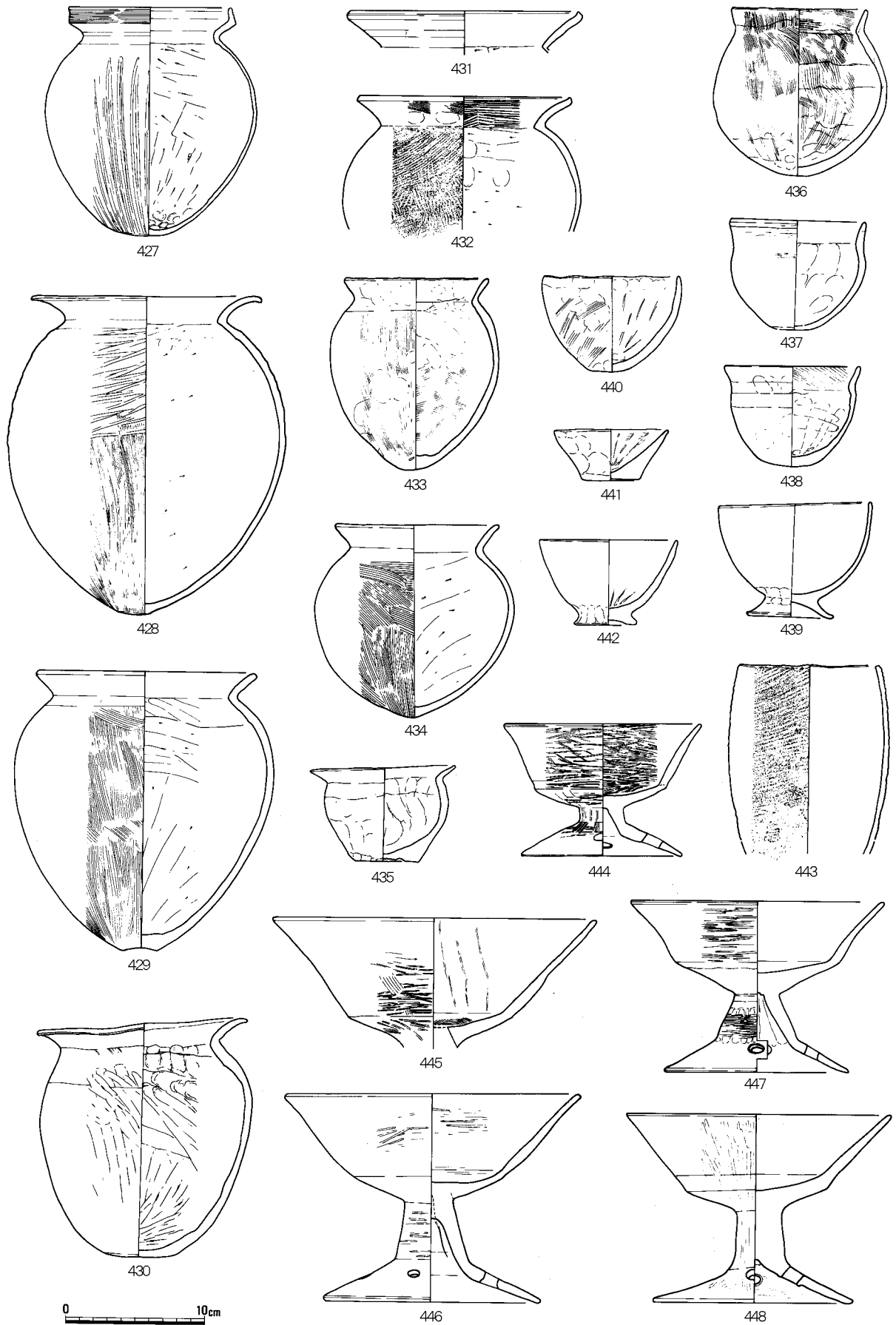
第91図 溝11断面図2（1/60）



第92図 溝11出土遺物1（1/4）

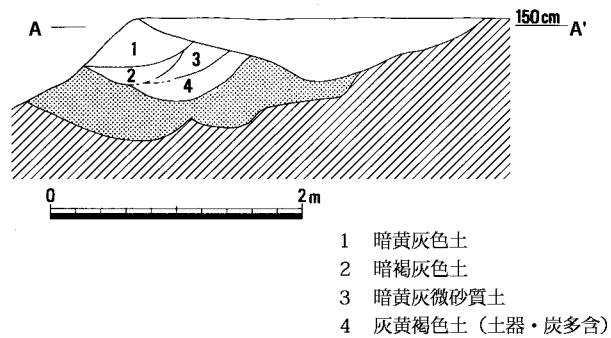


第93図 溝11出土遺物2 (1/4)



第94図 溝11出土遺物3 (1/4)

土・製作技法などから同一の可能性が高い。420も壺である。胴部内面はヘラケズリ、その他は細かいヘラミガキが施されており、その部分は赤色顔料が塗られている。421・422も壺で、内外面ハケメが施される。427は甕である。口縁部外面に沈線が施され、わずかに底部がみられる。429も甕である。外面ハケメ、内面ヘラケズリが施され、底面は抉るように削り取られている。432も甕である。口縁短部がわずかに上方に尖り、胴部外面は細かいタタキが施される。443は外面にタタキが施される製塩土器である。444は内外面細かなヘラミガキが施された短脚の高杯である。溝の時期は、古墳時代前期前半と考えられる。



第95図 溝12断面図1 (1/60)

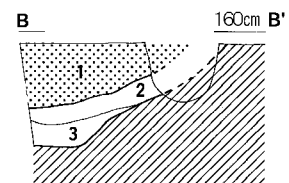
溝12〈1区〉(第65・95・97~99図、図版49)

1区から3区にかけて検出された溝で、2区の北隅で一部後世の遺構によって損壊を受けるが、溝11と同様、検出全長130m以上に及ぶ長大な溝である。1区では、やはり後世の遺構、古代の溝25によって切られる一方、下位には弥生時代後期の溝8が存在し、溝底の確認や出土遺物の区分は困難であった。ほかの溝と同様、幾度かの掘り直しや改修があったようで、第95図にはそれを示す層位が観察される。出土遺物のすべては土器である。壺449~458、小型丸底埴459~463、甕464~475、鉢476~486・488~491、台付鉢487、製塩土器492~495、高杯496~498がある。壺449の頸部下端には刻み目が施された貼付けの突帯が巡る。451の外面には赤色顔料が塗布され、その一部は内面に垂れ流れている。452は、台付きの無頸壺といえる器種と考えられるが、体部上位には把手か注口が剥落した痕跡がある。また、櫛状の工具による連続刺突文が3段巡らされている点に注意される。胎土は白っぽく、山陰系の可能性もある。453の口縁部下端には、円形の貼付け浮文が2個一組で飾られる。458は壺の体部の破片と思われるが、焼成前のヘラ状工具による直線的な文様の一部が認められる。甕464は搬入土器の可能性もある。468・475は吉備型甕であるが、体部上位に2~3か所の刺突痕跡が観察される。棒状工具による470~472・474には体部外面に平行タタキが施される。製塩土器の中には、495のように極めて小型のものが含まれる。496は外面全体に赤色顔料が塗布されている。他地域からの搬入土器の可能性もある。

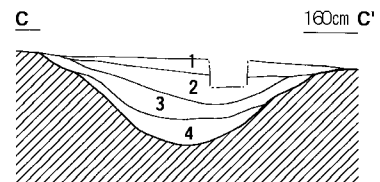
溝12〈2・3区〉(第65・66・100~103図、図版49)

溝12は、1区から3区まで南北に流れる溝である。ここでは2・3区部分、84m分の状況について述べる。

検出状況であるが、2区北端では、溝の東肩が調査区境に位置したため、平面でも断面でも精査したが検出できなかった。そのため、溝は調査区外へ流れてしまったものと考えた。後に遺構図面の整理の際、この溝は1区南端で調査区内ぎりぎりに位置することがわかった。この溝が2区北端で急激に西へ流れを変え、また東へ戻ってくるとは考えにくいので、1区南端と2区北側の消失した肩部を直

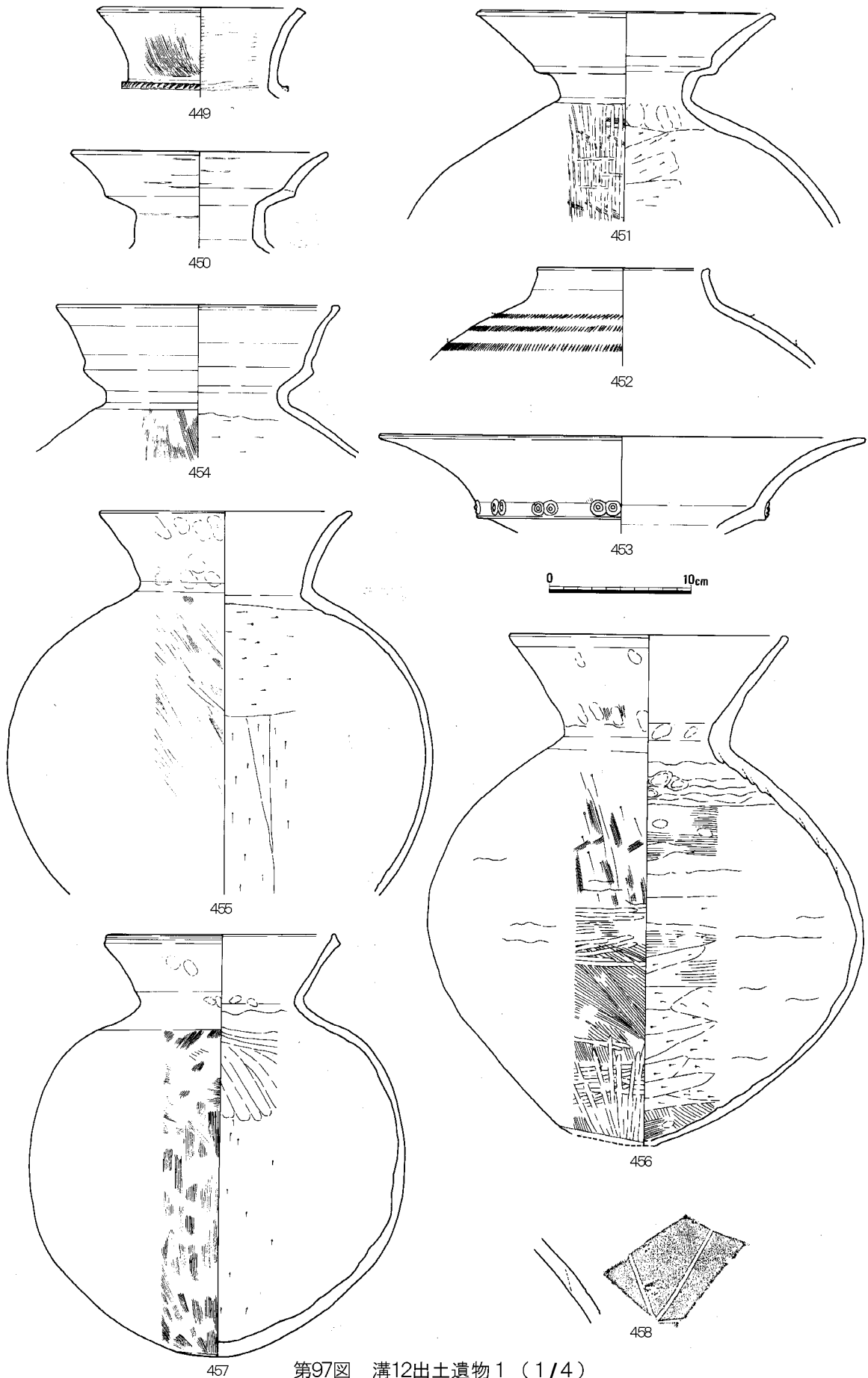


2 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘質土
3 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質土

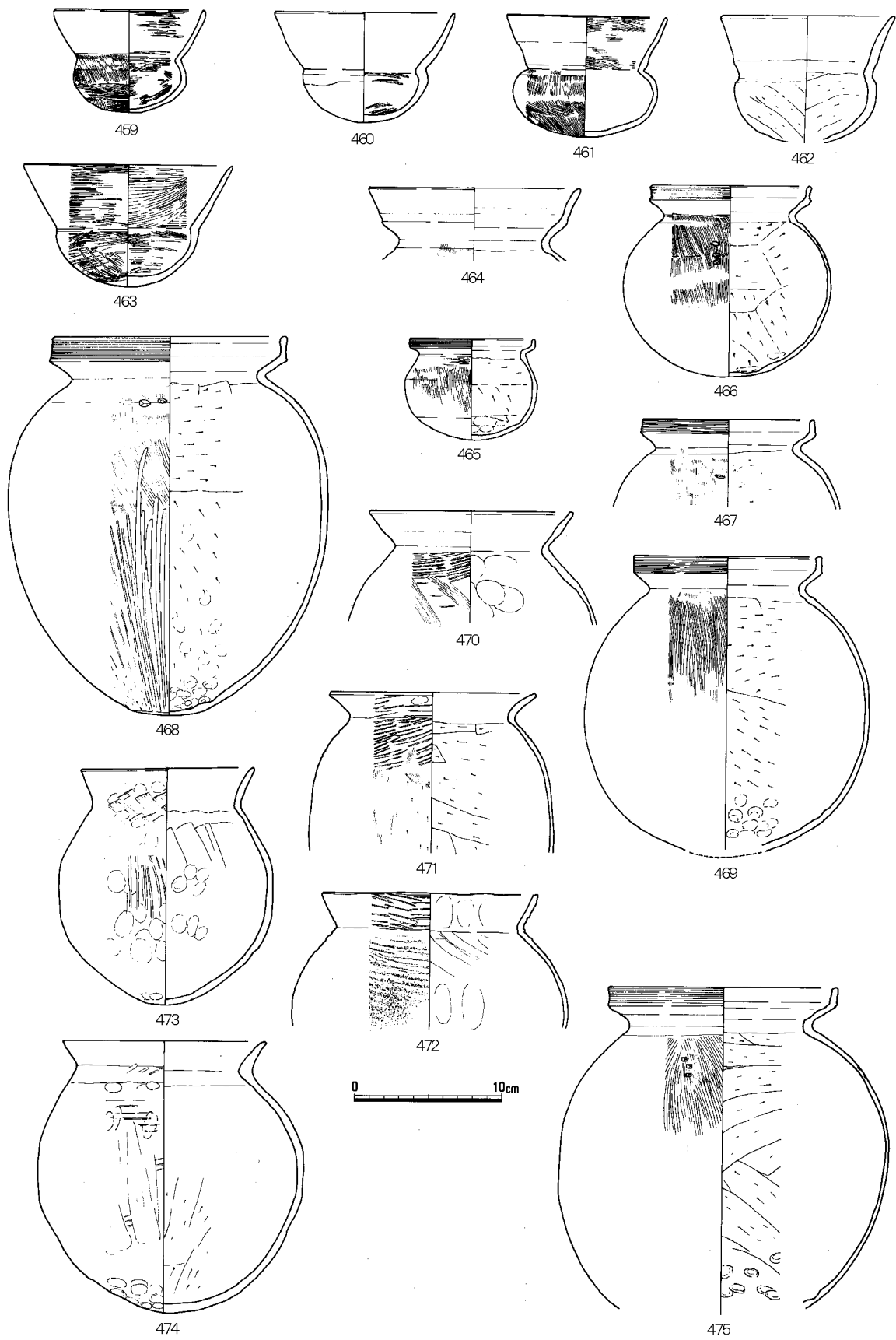


1 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質微砂
2 褐灰色 (10YR 4/1) 粘質微砂
3 にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質微砂
4 灰黄褐色 (10YR 5/3) 粘質微砂

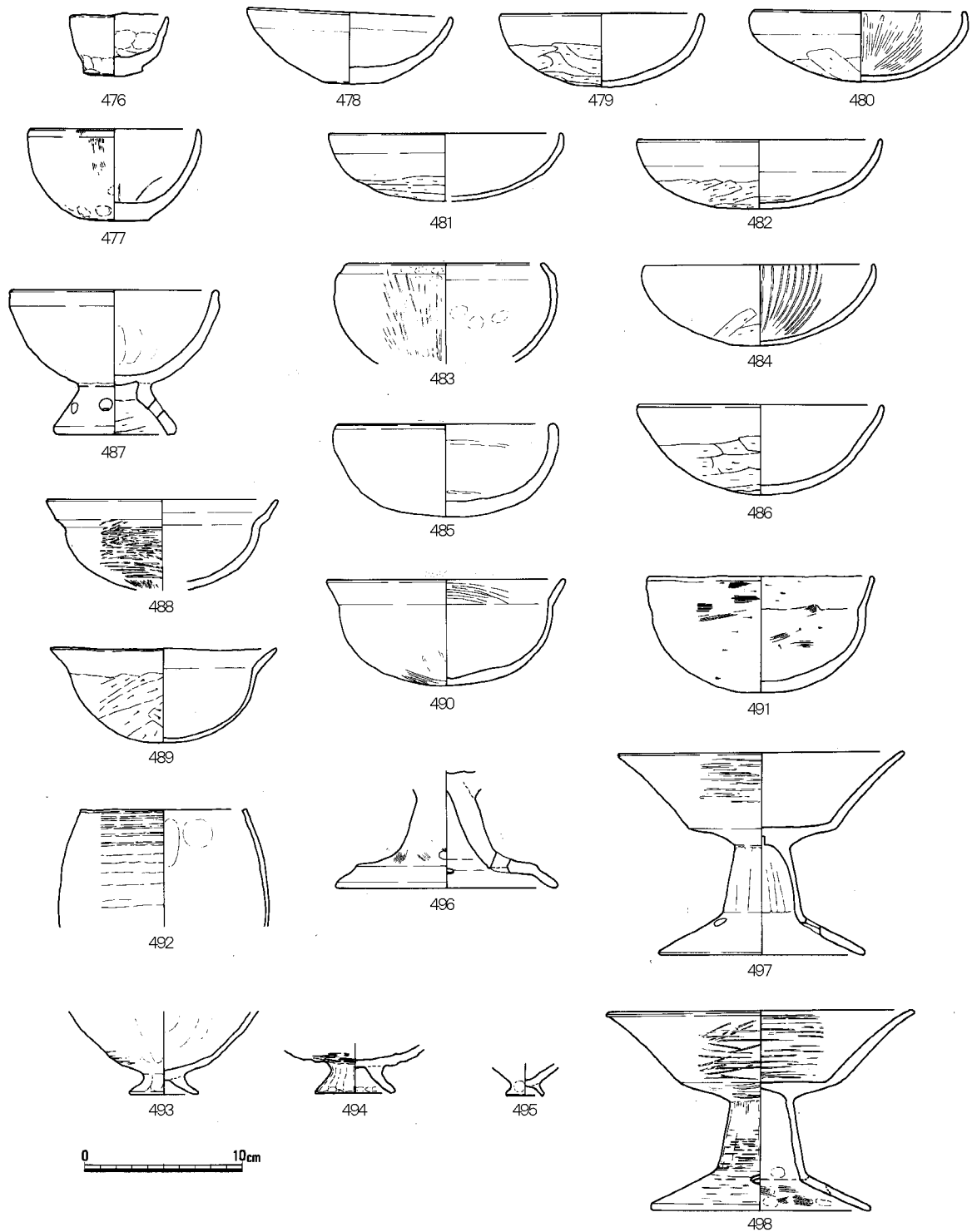
第96図 溝12断面図2 (1/60)



第97図 溝12出土遺物1 (1/4)



第98図 溝12出土遺物2 (1/4)



第99図 溝12出土遺物3 (1/4)

線的につなげて、まっすぐな溝としても差し支えないだろう。2区の中央部付近は、調査区西端に位置するため西側の肩は確認できなかった。3区では、特に北側で古代のたわみ4により上部を削平されていた。

完掘した状態で見ると、溝の断面は3区北側まで椀形で、3区南側では皿状になる。検出面での幅は2区中央が2.0m、2・3区境1.62m、3区中央1.57mで、3区南端で急に広がり約5.4mである。深

さは2区中央で83cm、2・3区境で43cm、3区南端で93cmを測る。3区南端では、底面がさらに長さ7.2m、幅最大1.17mの範囲で1段低く窪んでいる。底面の高さは2区中央で標高75cm、2・3区境で最も高く標高88cm、3区中央部で80cm、3区南端で48cmを測る。つまり、2区・3区境から北側へ13cm、南側へ40cm下がっている。

土層は大きく3層に分かれるが、第96図下の断面で第1層が上層、第2・3層を下層として、上下2段階と認識した。

遺物は、上層で最も顕著で、礫と土器の集中部分がいくつかのブロックになって出土した。3区北側で5つのブロック、南側でも溝幅が急激に拡大する部分で1つブロックを確認した。2区でも同様のブロックを確認している。ところが、遺物の残存状況は調査区によって異なる。2区では1個体のはっきり残っている状態で出土したが、3区では個体の識別が困難なほど碎けて出土したところが多い。特に古代のたわみ4により削平された部分で顕著であったが、削平されることにより土器の残りのよい部分が少なくなったのではないだろうか。

出土した遺物は土器と鉄器である。土器には壺・甕・高杯・鉢・器台の各種があり、ここでは代表的・特徴的なものを挙げていきたい。

遺物のおおよその出土位置は、2区北側で鉢525が、2区南側で壺499・502・507、甕512、高杯516、鉢524・526・541、ミニチュア543が出土した。3区北側には壺500・503、甕509・513・514、高杯521・522、台付鉢527、製塩土器530、鉢533・534、ミニチュア542、鼓形器台544・545があり、3区南側から壺504～506・508、甕501・510、小型の器台515、高杯517～520、鉢523・528・531・532・537～540、製塩土器529、手焙り形土器535・536、鼓形器台546、成川式土器の壺548・549、鉄鎌M2が出土した。

器種ごとに特徴を述べる。壺は499・500・502～508である。499・500・507が外反する二重口縁をもつ。口縁端部はやや張り出す。頸部下に刺突がみられたり、口縁外面に竹管文を巡らせる。500の刺突は3つで、底面に黒斑がある。505の外面は横位のタタキ後ナデ・ハケメを施す。508は口縁内面に煤が付着し、胴部外面に黒斑がある。

501・509～514は甕である。501は山陰系であろうか。509は被熱と剥落で調整が不明瞭である。510はほぼ完形、胴～底部外面に煤が付着する。布留式の搬入土器か。511～514は二重口縁で口縁外面に櫛描き沈線を施す甕である。513はやや肩が張る。514は外面に被熱痕がある。

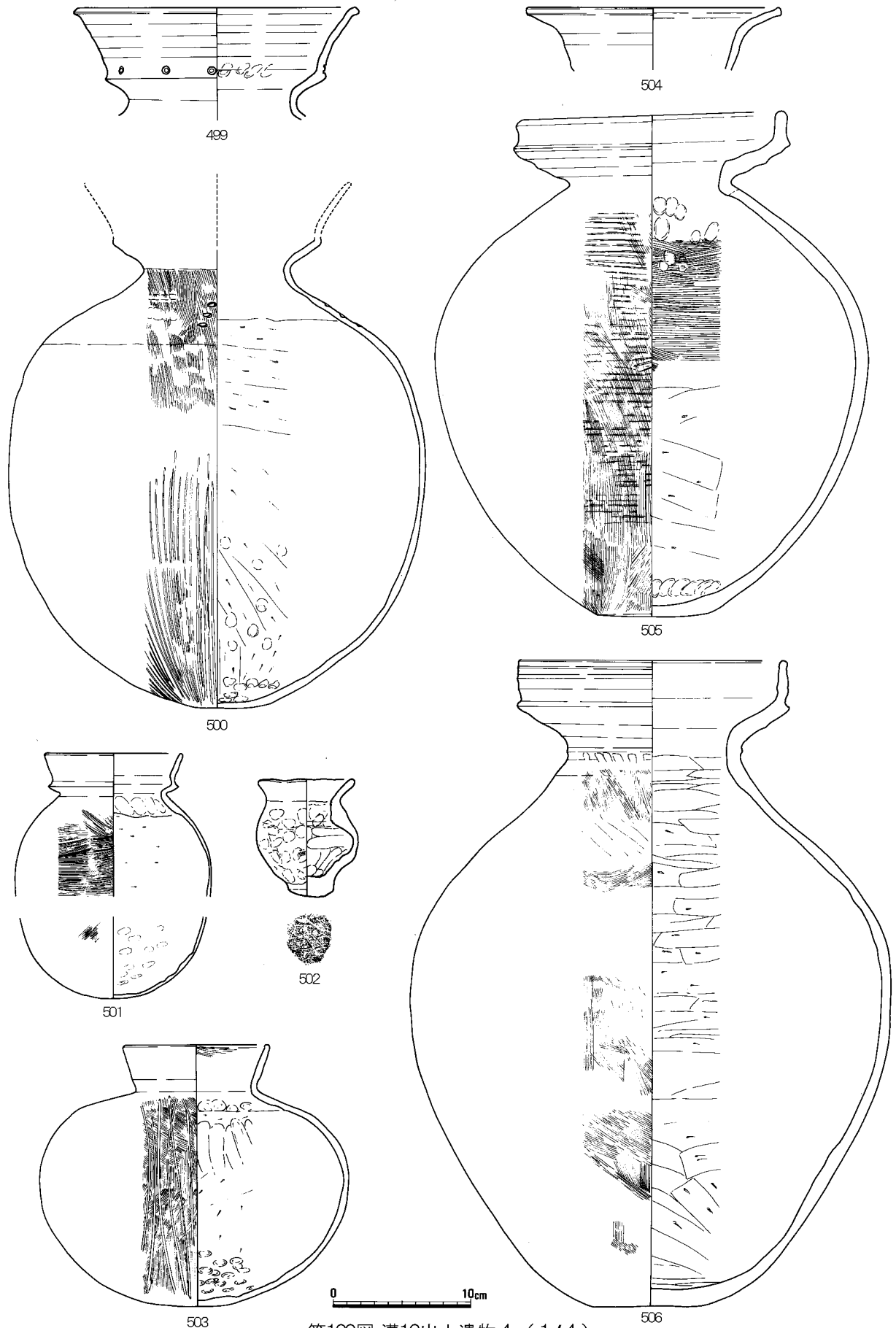
515は小形の器台で、穿孔は4か所と考えられる。516～522が高杯である。519の脚部外面調整は不明。520は円孔が1つ残存し、口縁外面に黒斑がある。

523～534・537～541は鉢に分類できる土器である。大形の523は外面に黒斑が数か所ある。528は外面黒斑がある。538・539には底面外面に被熱痕がある。540の外面ケズリは多方向から施される。

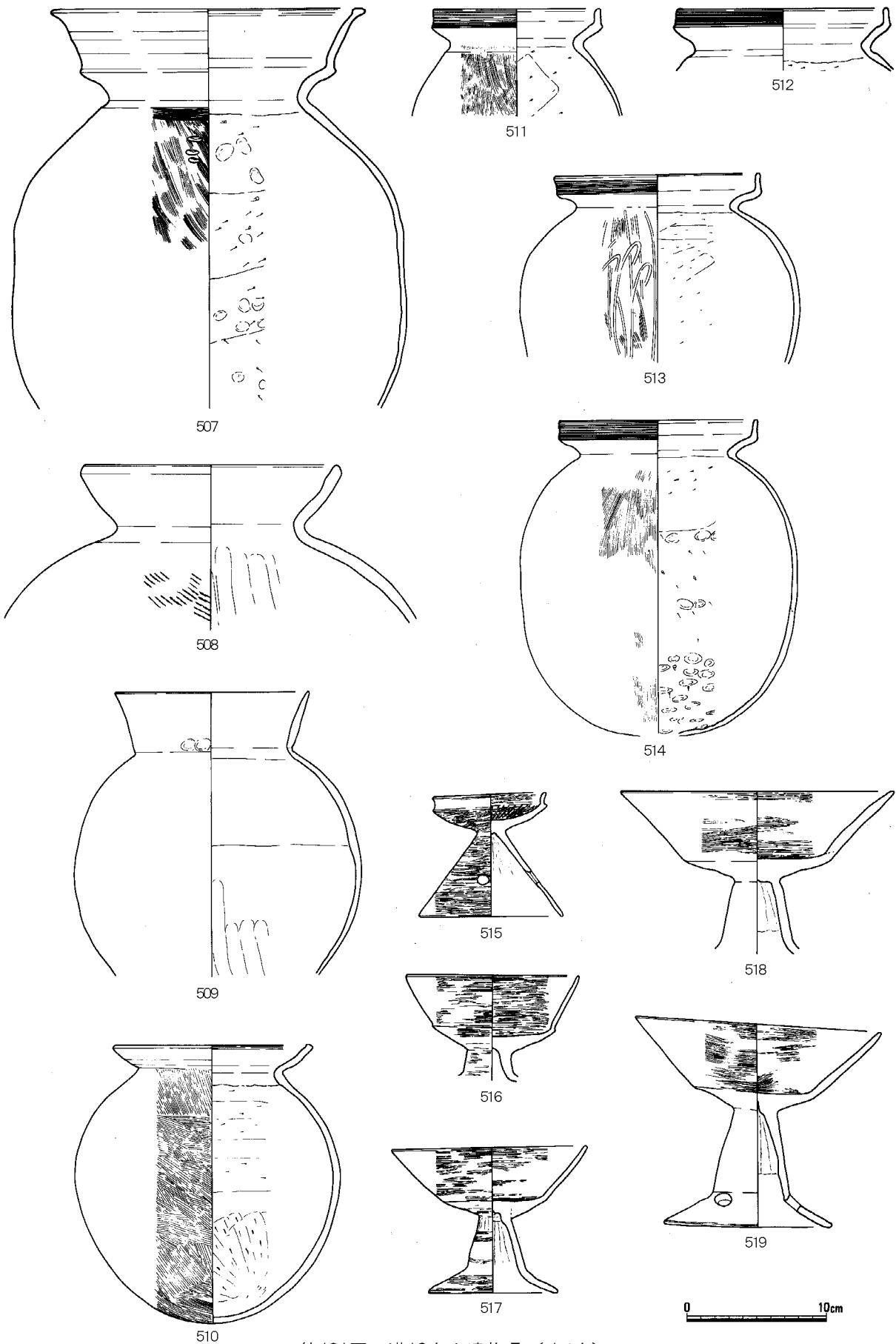
手焙り形土器が2点出土している。535の内面はユビオサエとナデで、胴部外面の調整は不明である。536は口縁端部に覆部の接合痕跡が見られるため、手焙り形土器の胴部と判断した。

542・543は手捏ね成形のミニチュア土器である。544～546は器台で、544・545は鼓形器台である。544は内外面剥落で調整不明である。胎土は比較的精良。545の内外面には丹塗りが見られる。546には黒斑がある。

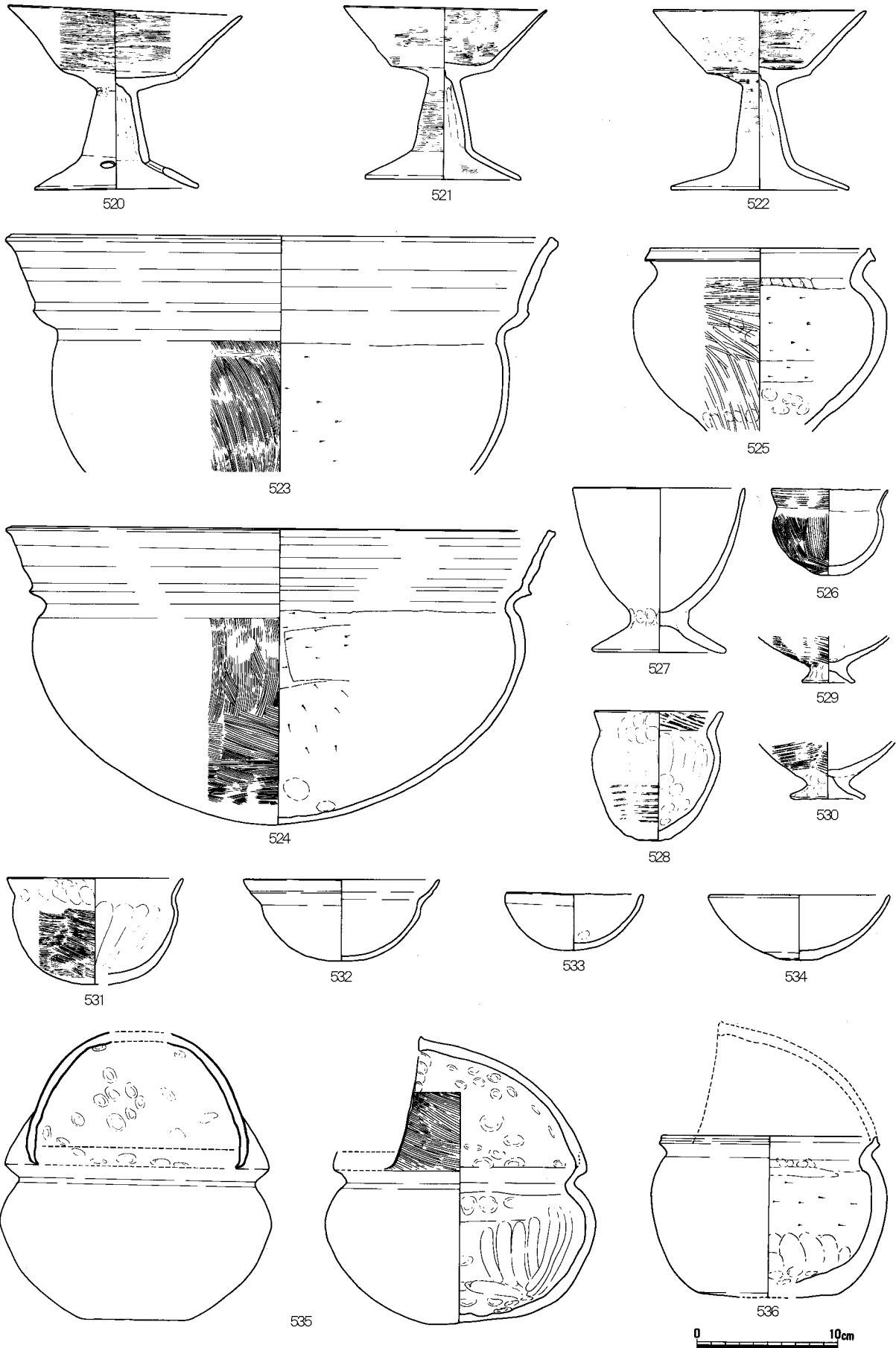
548・549は成川（なりかわ）式土器の壺である（註）。成川式土器は南九州の古墳時代前期の指標となる土器である。鹿児島県山川町成川遺跡は昭和33（1958）年に人骨233体、土器完形品107個を出土した弥生時代中期～古墳時代前期の墳墓である。この壺は成川式土器に特徴的な大形壺である。548で



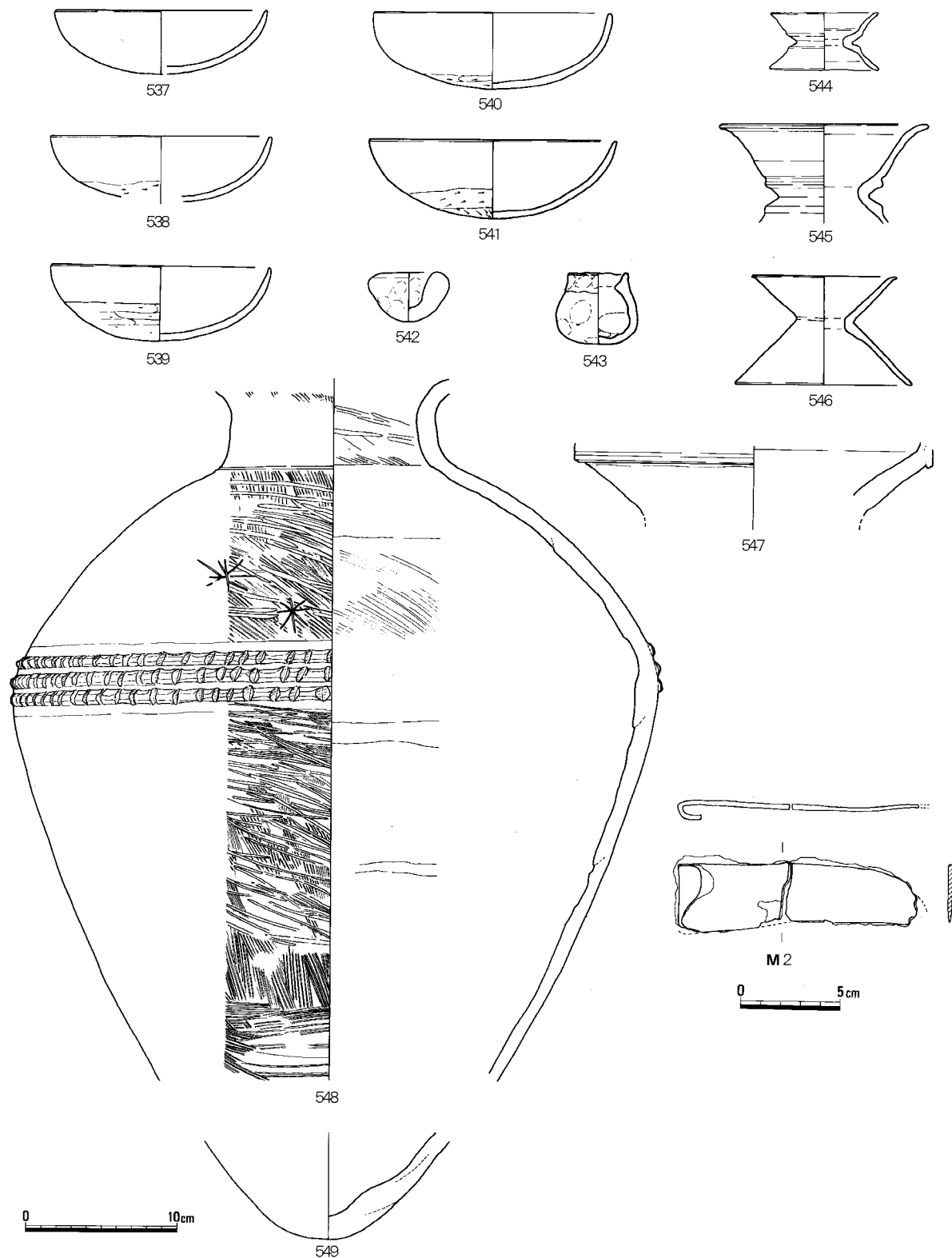
第100図 溝12出土遺物4 (1/4)



第101図 溝12出土遺物5 (1/4)



第102図 溝12出土遺物6 (1/4)



第103図 溝12出土遺物7 (1/4・1/3)

は口縁部が緩やかに開き、頸部と胴部の境がはっきりしていて、外面胴部最大径の位置に3条の刻み目突帯が付く。刻み目は縄状の工具で施文されている。また、肩部外面には星形の線刻が2か所認められる。547は別個体の口縁でやはり九州系の土器と考えられる。549は548と同一個体である可能性が高い丸底の底部である。また、548には胴部・底部外面に黒斑がある。

鉄器は、鉄鎌M2がある。柄との接続部分を折り曲げている。

この溝出土の土器は、全体として古墳時代前半（亀川上層式併行期）と考えられる。（氏平）

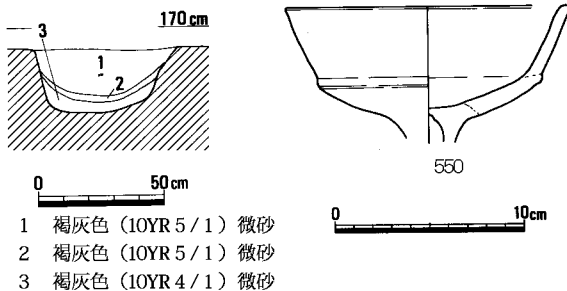
註

岡山県文化財保護審議委員の高橋 護氏にご教示頂いた。

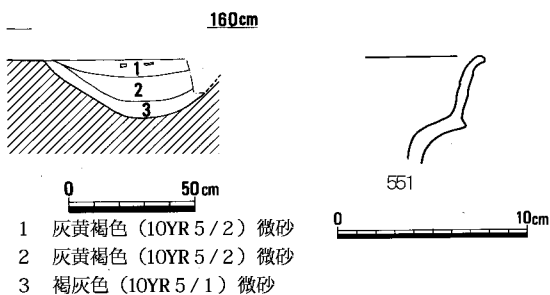
- ・『埋蔵文化財発掘調査報告第七 成川遺跡』文化庁 1974年
- ・『成川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24) 鹿児島県教育委員会 1983年

溝13（第66・104図、図版49）

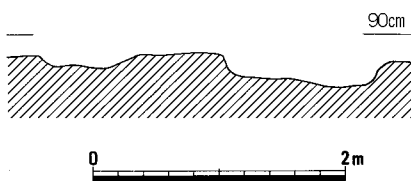
溝13は、3区南東で確認した、溝11と接触する溝である。溝11との切り合い関係はよくわからなかった。調査区内ではわずか1.5mの長さしか存在しないため、東西のどちらへ流れていたか不明である。調査区東側が微高地なので、おそらく東から溝11に向かって流れていたであろう。断面形は逆台形で、幅1.12m、深さ50cm、底面の標高は1mを測る。土層は3層に分層できるが、第2層は浅黄色土の塊を含み、層全体が黄色味を帯びる。遺物は、底面で550の高杯を検出した。この溝の埋没時期は、土器により古墳時代前半（川入大溝上層式併行期）といえるが、そうなると溝11よりは新しいことになる。この溝が溝11からさらに西へ延びていたとは考えにくいので、行く先が溝11と同じ方向だったのか、あるいは消失したと推定するのが妥当だろう。（氏平）



第104図 溝13断面図・出土遺物（1/30・1/4）



第105図 溝14断面図・出土遺物（1/30・1/4）



第106図 溝15・16断面図（1/60）

溝14（第66・105図、図版49）

溝14は、3区南側に位置し、調査区西側から溝12と接続する溝である。溝12の、ちょうど幅が広がる地点の付け根に接続している。調査区西端で幅1.1m、深さ48cm、底面標高85cmで、溝12との合流地点が幅1.54m、深さ75cm、底面標高85cmを測る。計測値からは、溝12から西へ流れていくのか、あるいは西から溝12に合流するのか判断できない。遺物は少量である。時期は出土遺物から、古墳時代前半（亀川上層式併行期）であろう。（氏平）

溝15・16（第66・106図、図版49）

溝15・16は、3区南西端を南北に流れる溝である。古墳時代前半の包含層直下で検出した。溝15は、調査区北端で幅1.3m、深さ38cm、底面標高51cmで、南端が幅1.3m、深さ30cm、底面標高50cmを測る。遺物は少量である。溝16は、調査区北端で幅1.13m、深さ20cm、底面標高69cmで、南端が幅1.3m、深さ10cm、底面標高64cmを測る。溝15と同様、遺物は少量である。出土遺物と土層観察から、古墳時代前半に2条とも同時に埋没した可能性が高い。（氏平）

5 祭祀遺構

土器溜り2 (第65・107・108図、図版55)

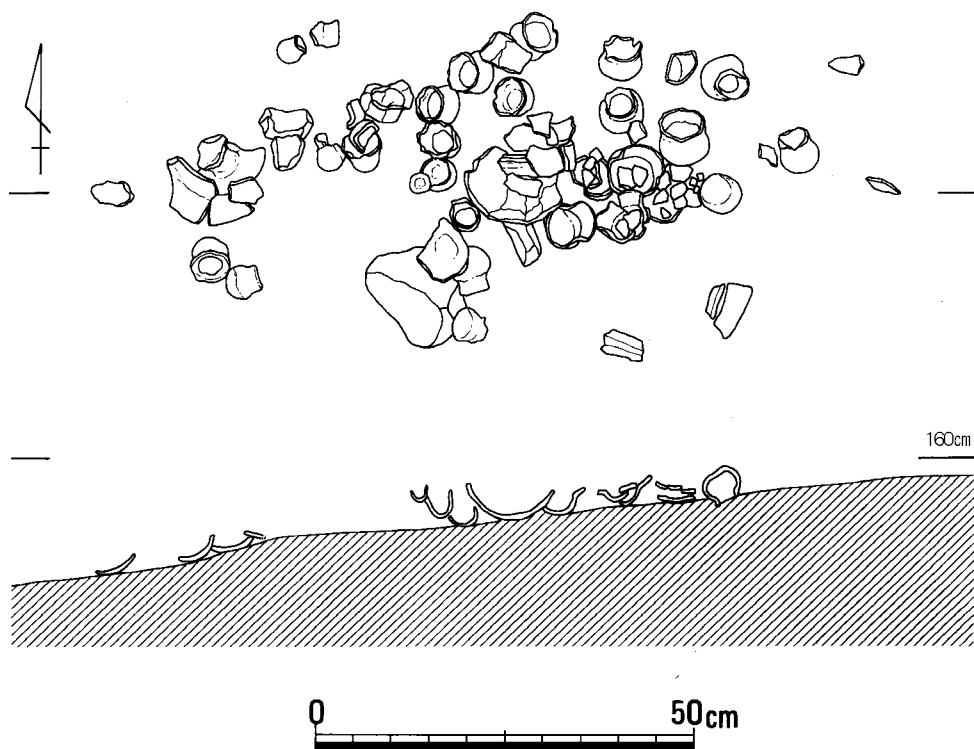
2区中央部西よりに検出した。東西1m、南北45cmの範囲に30数個体のミニチュア土器がまとまって出土した。位置的には、溝12の東肩と重なるが、出土した土器の状況をみると、西に向けてわずかに下がる斜面に検出した。このことは、溝はほぼ埋まり、その痕跡を示す程度にわずかに窪む状態の時に、この土器群は、形成されたものと推測される。ミニチュア土器は、いずれもユビオサエの痕跡が明瞭にみられ、手捏ねにより形成されたものである。形態からは罎と鉢がある。罎は口縁部が、552のようにわずかにみられるものから、568のように長く引き出されるものもある。558のように胴部と口縁部の境が明瞭のもの、572のように明瞭でないものもある。582は高杯である。杯部は、外面ハケメが施される。脚部は太く、裾に向けて少し開く。時期は、4世紀中～末頃と考えられる。(井上)

土器溜り3 (第66・109～112図、図版56)

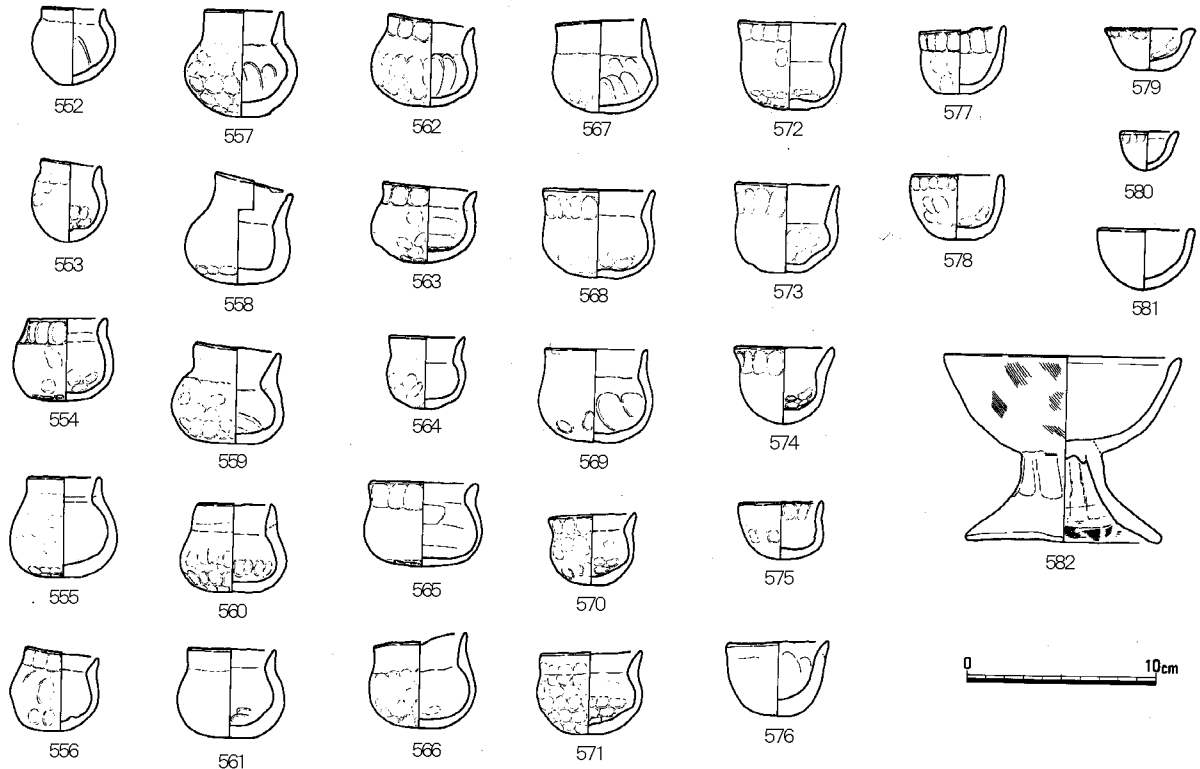
土器溜り3は、3区の南端中央部に位置し、さらに南の調査区外へ延びる。古墳時代前半の溝12上部に位置し、細砂の堆積したたわみの上に存在した。たわみは南北8.2m、東西5.3mの範囲で、中央が溝12の形状をなぞるように窪んでいるが、北端は消失している。全体は北側が丸くなるU字形であるが、南端は若干下ばの幅が狭くなり落ち込んでいる。その中に北東から南西にわたり帯状に土器が存在した。

土器溜り3が埋没している層は、第8図3区南壁土層断面図で中段の第3層にあたる。土質はやや粘質の細砂である。上層は古代～中世の包含層で砂質が強い。

土器はほとんど重ならずに出土した。遺物そのものの残存状況から、廃棄された時点からさほど流



第107図 土器溜り2 (1/10)



第108図 土器溜まり2出土遺物(1/4)

されていないようである。図化できたもので94個体分の土器を検出したが、そのうち57個体がミニチュア土器や手捏ね成形の土器である。以下に分類を試みたい。

最大径が10cm、器高が10cm未満で器形が一定せず、手捏ね成形の土器を便宜的にミニチュア土器とすると、出土遺物1・4に収載した土器がミニチュア土器といえよう。

出土遺物1のミニチュア土器は、大きさでみると、最大径6cmまでの小形584~606・622~626、10cmまでの大形の2つに分けられよう。形状での分類は難しいが、口縁端部がまっすぐで口径が最大径になる鉢形584~598、口縁端部が内傾する鉢形599~603、口縁端部をゆるく外反させる鉢形604~621、口縁端部を強めに外反させる壺を模した形622~630に区分した。手捏ね・ナデ以外の調整は、外面タタキの572、内面ヨコハケメの596、口縁内面ハケメの622がある。602・609は焼成後穿孔である。黒斑は外面の584で全体に、585・586・588・596・601・606・616で口縁部に、608で口縁~胴部に、611・618・620・621・622・629で胴部に、591で口縁・胴部・底部に、595・597・605・612・619で底部に、599で胴部~底部に存在する。625の黒斑は内外面にある。煤の付着は617で外面、593で外面口縁~胴部、598で外面底部にみられる。613は焼成が不良。

第111図出土遺物2には、小形の壺と鉢を示した。壺は大きさでは口径と器高が約10cmまでの631~640・642・645、それ以上の641・643・644・646~650・652の2つに分類できる。631は外部からの打撃で穿孔し、632にも穿孔が存在する。632・646には鉄片が入っていた。638・645は破碎された可能性がある。653には肩部外面に線刻があるが、舟を表したものだろうか。黒斑は、外面の胴部と底部に644、胴部に631・639・641・646、底部に647、外面全体に633・648で存在する。被熱は643・650・652でみられ、650は胴~底部に被熱があり、煤が付着する。651・654は手捏ね成形の壺である。653は鉢で口縁・底面に黒斑がある。

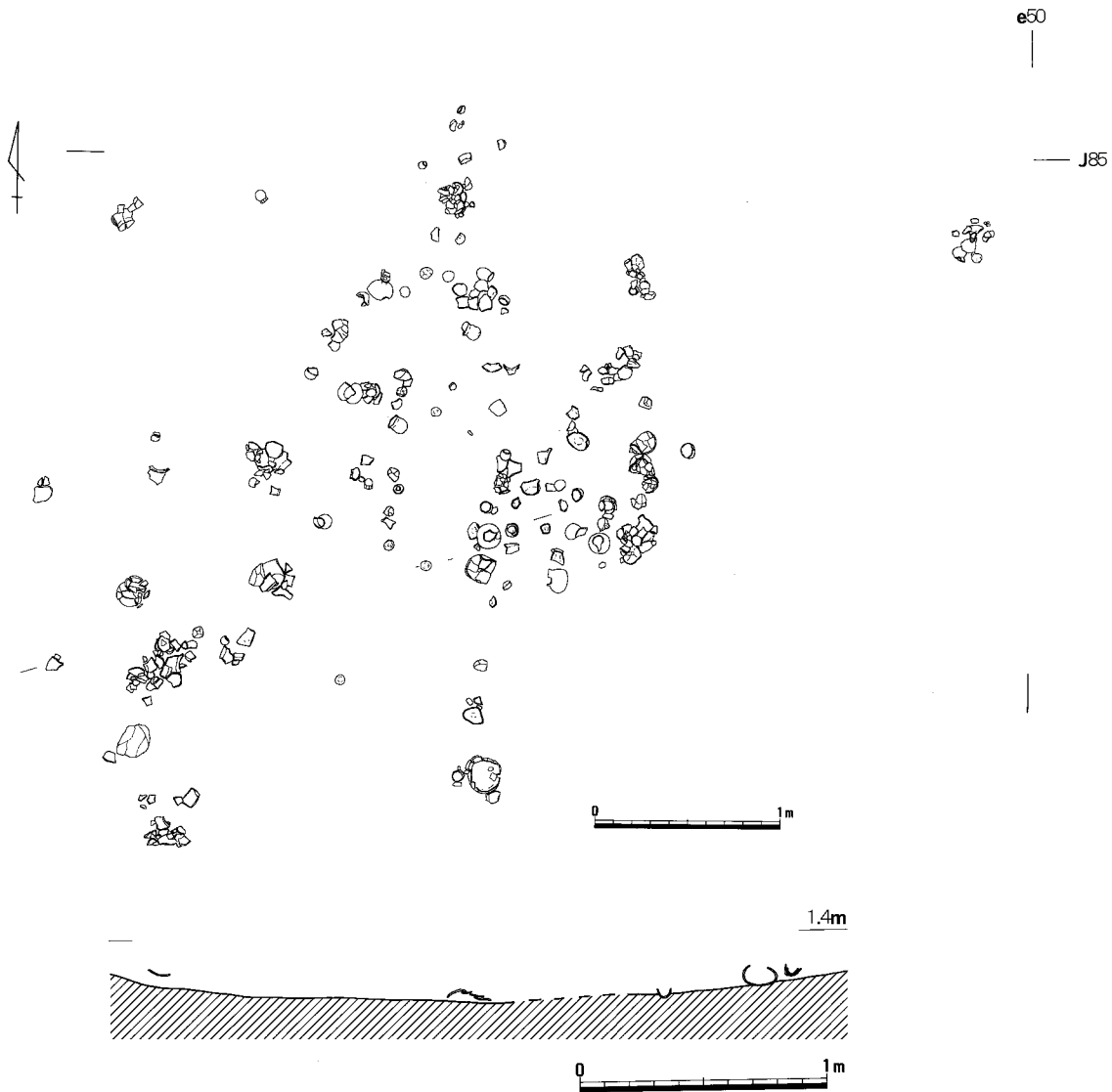
第8章 中撫川遺跡

第112図出土遺物3は、通常の甕655～661と高杯662～665である。655は外面胴部～底部に煤が付着する。657は赤色顔料塗布の可能性があり、内外面口縁端部に煤、外面肩部に黒斑が付く。659は外面に煤付着、被熱痕あり。661も被熱痕があり、内外面の器壁に剥落がみられる。

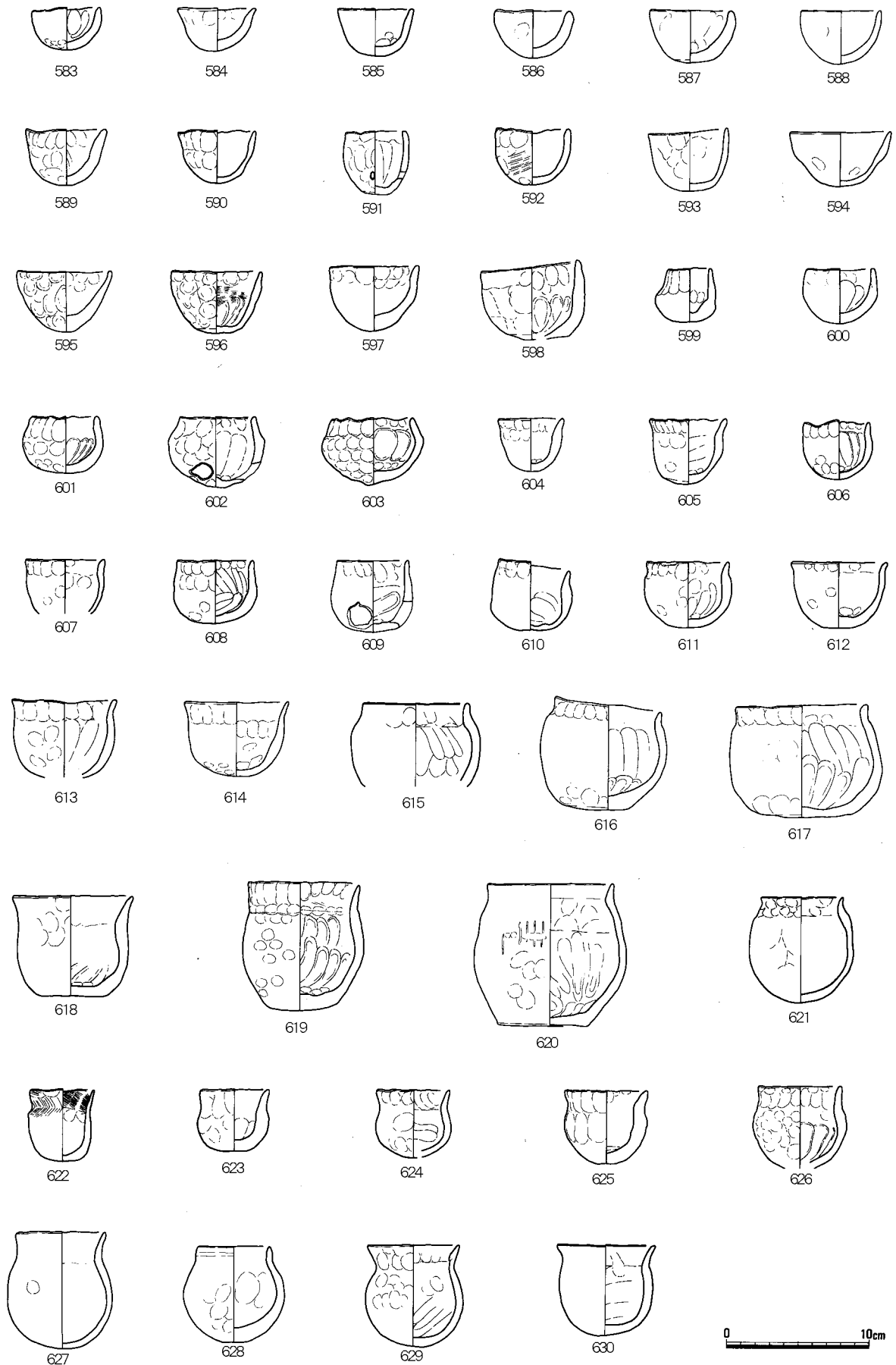
第113図出土遺物4では、入れ子になった土器と鉄器・玉類が入った土器を取り上げた。667は669の、668は670の中に入っていたものである。666は鉄片M3と滑石製白玉B2が入った状態で出土した。他に土器片が入っているが、666の破片ではなく混入であろう。口縁部を一部欠く他は完形で、外面胴～底部に黒斑がある。M3は鉄斧片の可能性もある。入れ子になった673と674の間には滑石製白玉B3が入っていた。671～676はいずれも手捏ね成形である。M4・M5は土器溜り中の鉄片である。

この土器溜りは、ミニチュア土器・手捏ね土器の完形品か完形に近いものがその主体をなしている。また土器それぞれに線刻のあるものや、焼成後穿孔、あるいは破碎されたと推測できるものもあった。さらに入れ子になったり、鉄片・玉をわざわざ入れた土器もある。このことから、この土器溜まりが祭祀に関する土器廃棄跡といっても差し支えないだろう。いっぽうで煤が付着したり、被熱がみられる土器もあり、その祭祀形態との関連が気になるところである。時期は古墳時代前半（川入大溝上層式併行期）である。

(氏平)

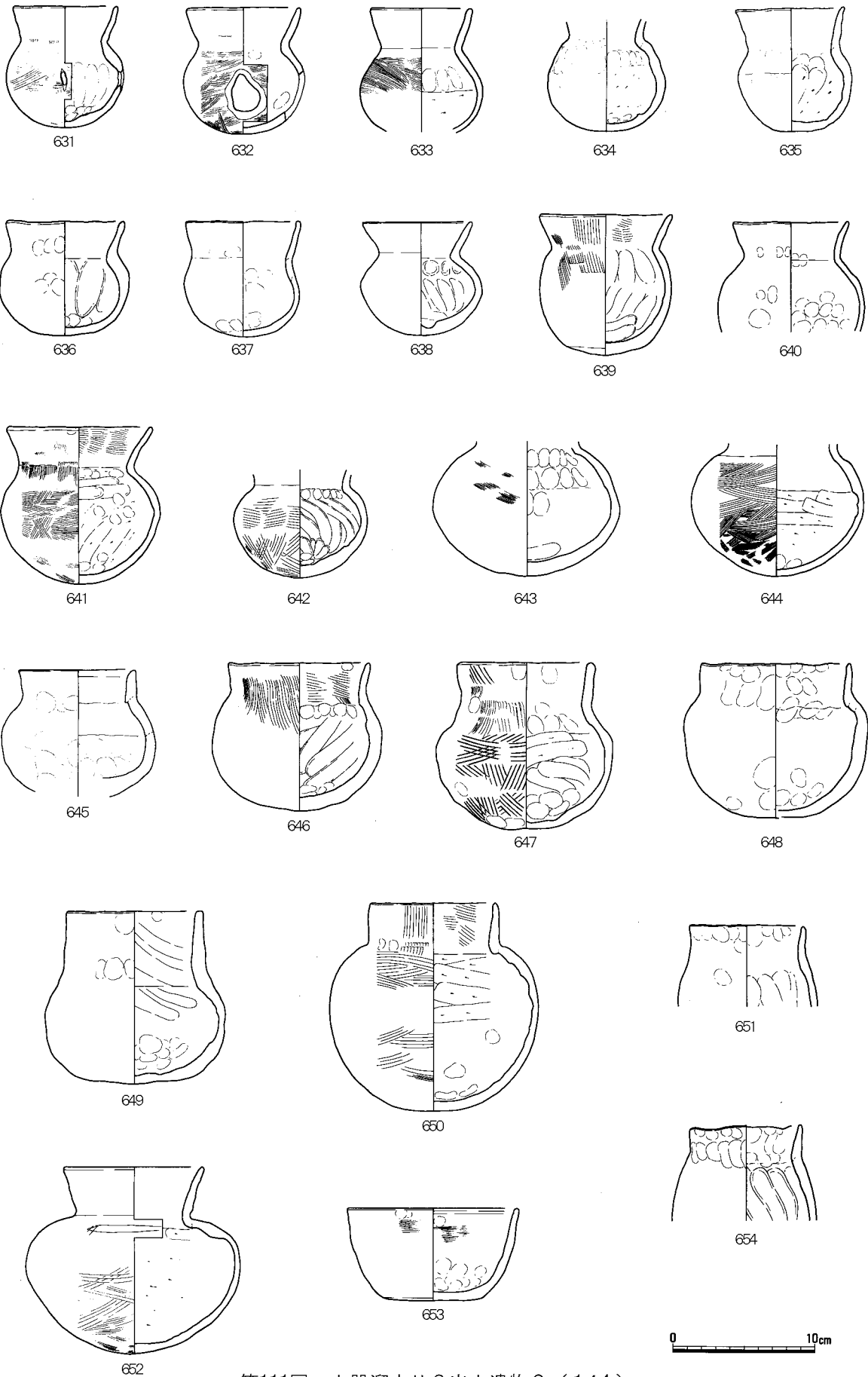


第109図 土器溜まり3 (1/40・1/30)

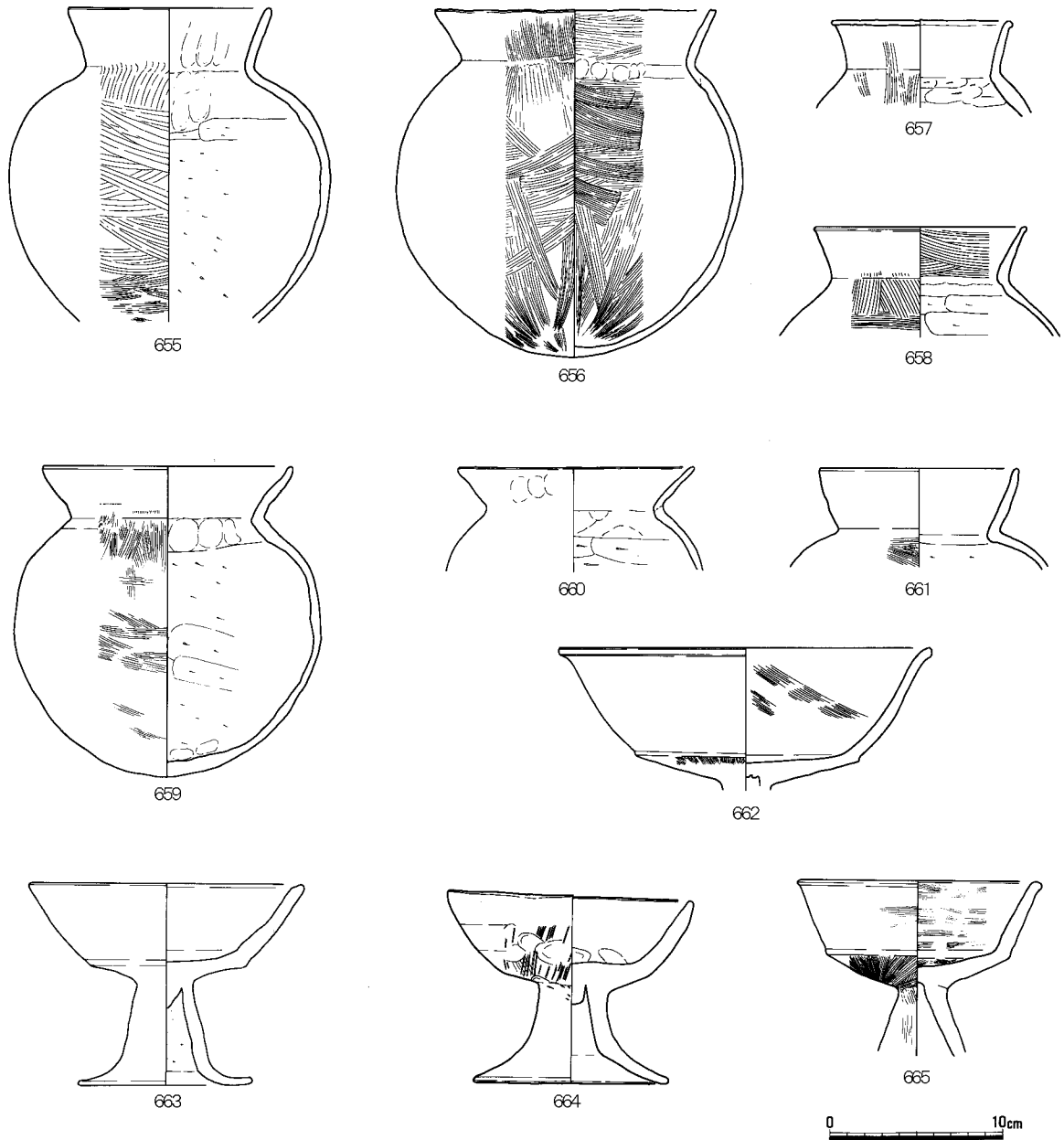


第110図 土器溜まり3出土遺物1 (1/4)

第8章 中撫川遺跡



第111図 土器溜まり3出土遺物2 (1/4)

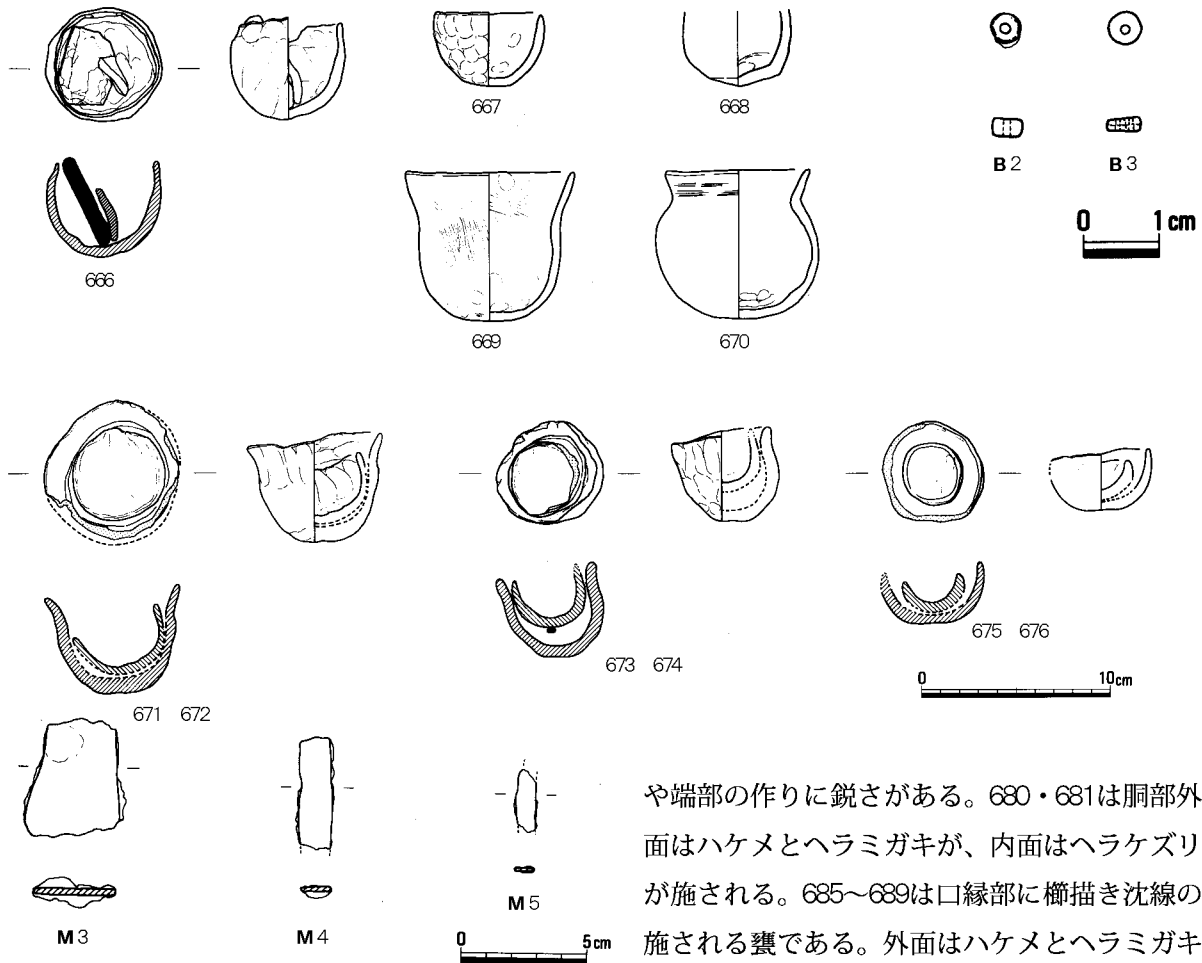


第112図 土器溜まり3出土遺物3 (1/4)

6 たわみ

たわみ1 (第65・114~118図、図版54)

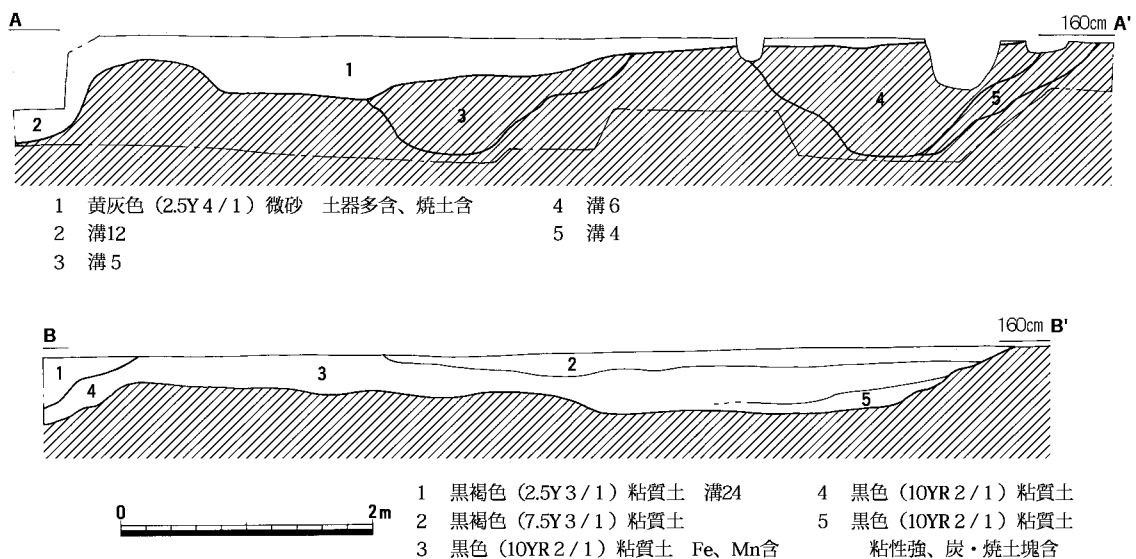
2区中央部から北にかけて検出した。南北に細長く、不定形に窪むものである。平面形はおおむね隅丸の長方形を呈するものとする事ができる。しかし、南と東の境界は比較的明瞭であったが、西側は明らかにできなかった。その事については、第114図の断面図で説明する。この遺構の下層には溝5・6・11などがあるがそれらとの境は明瞭であった。また、溝25についても明瞭に区別する事ができた。しかし、西側に存在する溝12とこの遺構の埋土の色、質に差異を見い出せず、断面観察からもその境界は確認できなかった。そのため、たわみ1の西側の境界線を明らかにすることができなかった。検出面での規模は、南北約15m、東西約7mを測る。検出面からの深さは、最も深い部分で約50cmを測る。677・678は埴である。小さめな胴部に対し口縁部は大きく開く。679は壺の口縁部で、稜線



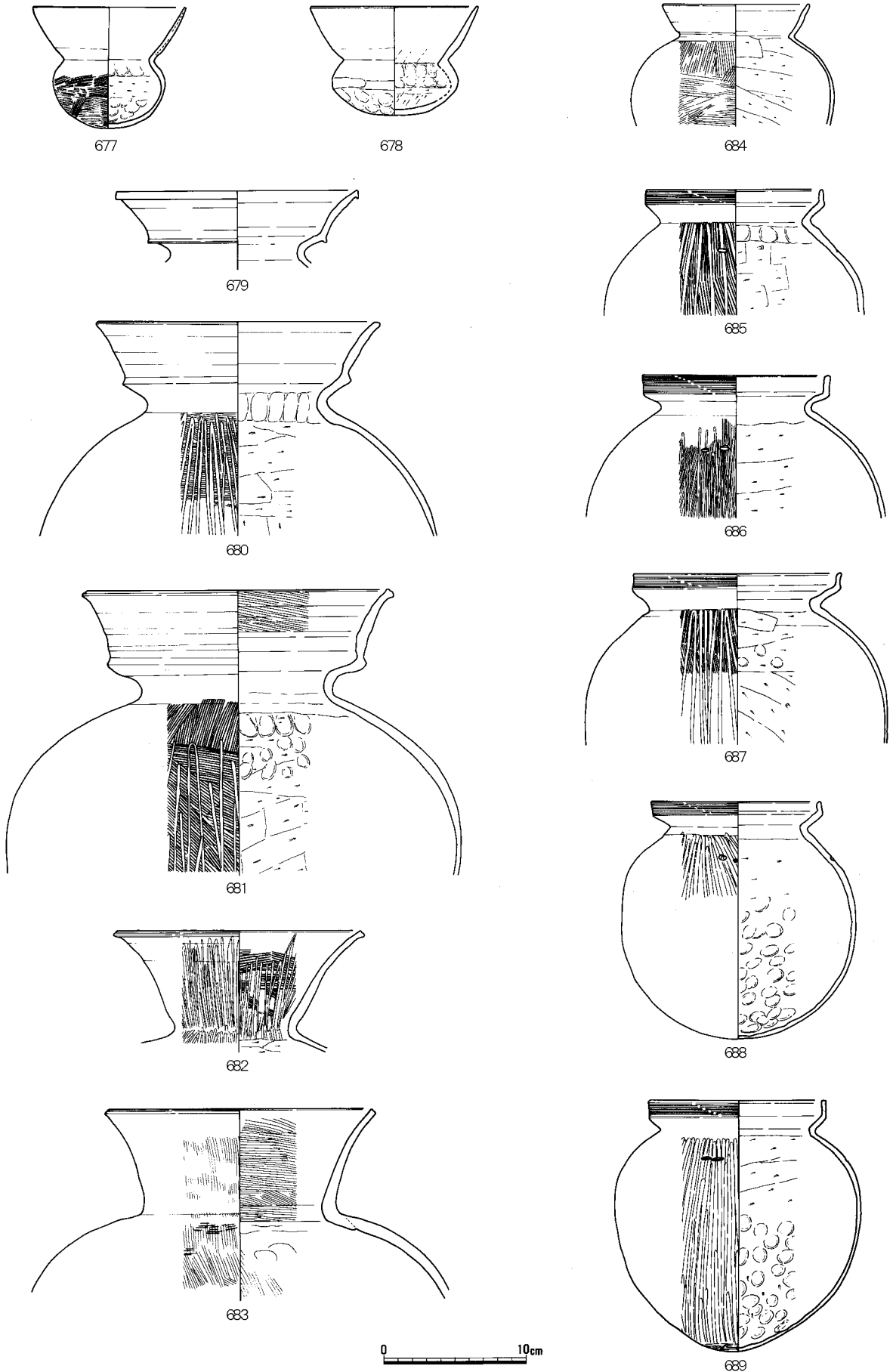
第113図 土器溜まり3出土遺物4 (1/4・1/2・1/1)

や端部の作りに鋭さがある。680・681は胴部外面はハケメとヘラミガキが、内面はヘラケズリが施される。685～689は口縁部に櫛描き沈線の施される甕である。外面はハケメとヘラミガキが、内面はヘラケズリとユビオサエが施される。胴部は球形に近いが、689は底部が少し尖っている。

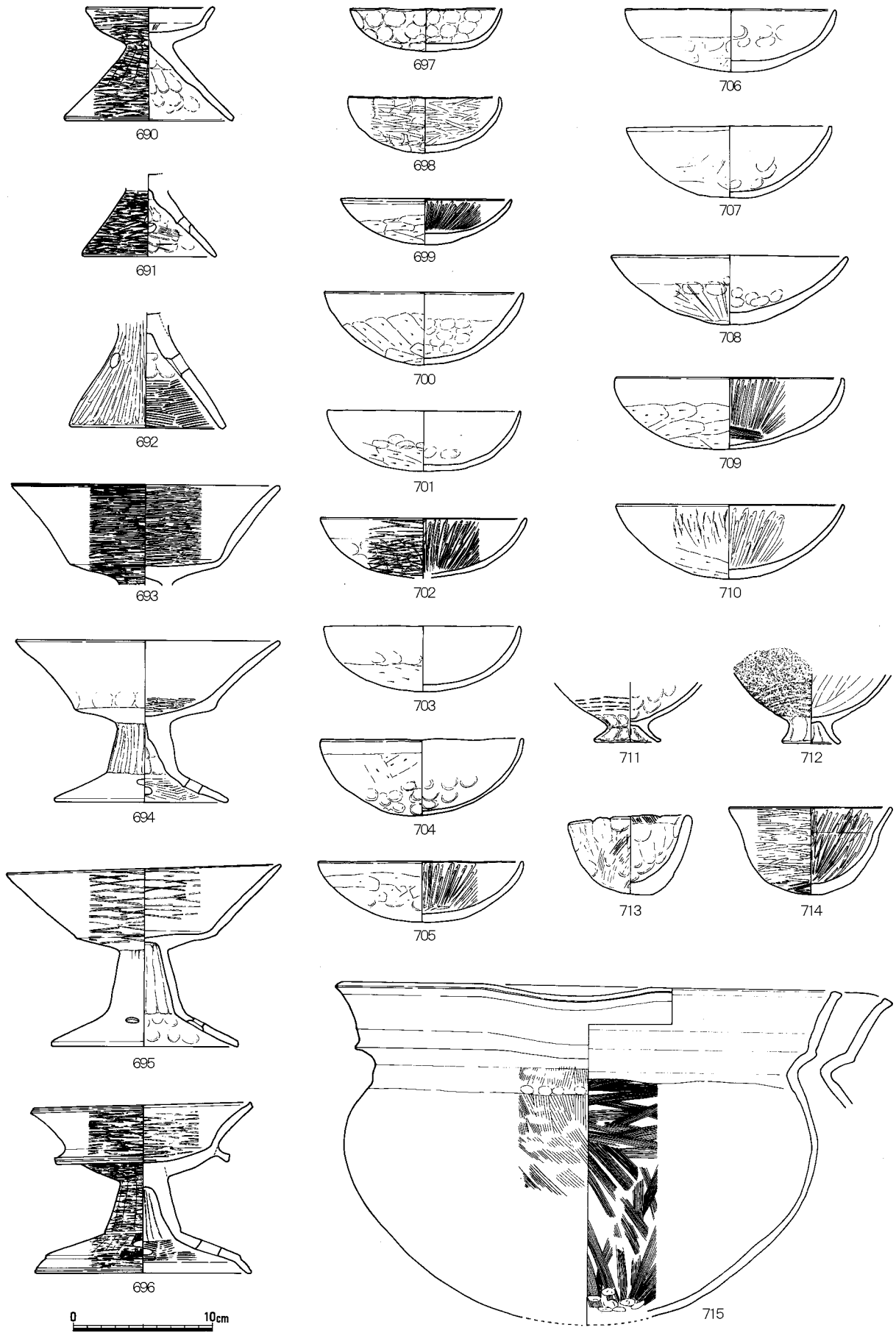
690～696は高杯である。690～692は小さな杯部を持ち、脚部は八字に開く。693～695は杯部の内外面と脚部の外面はヘラミガキが施され、脚柱部はやや太い。696は杯部に凸帯の付されるものである。697～710は小型の鉢である。浅く弧を描くもので底部は丸い。711・712は製塩土器である。外面にタ



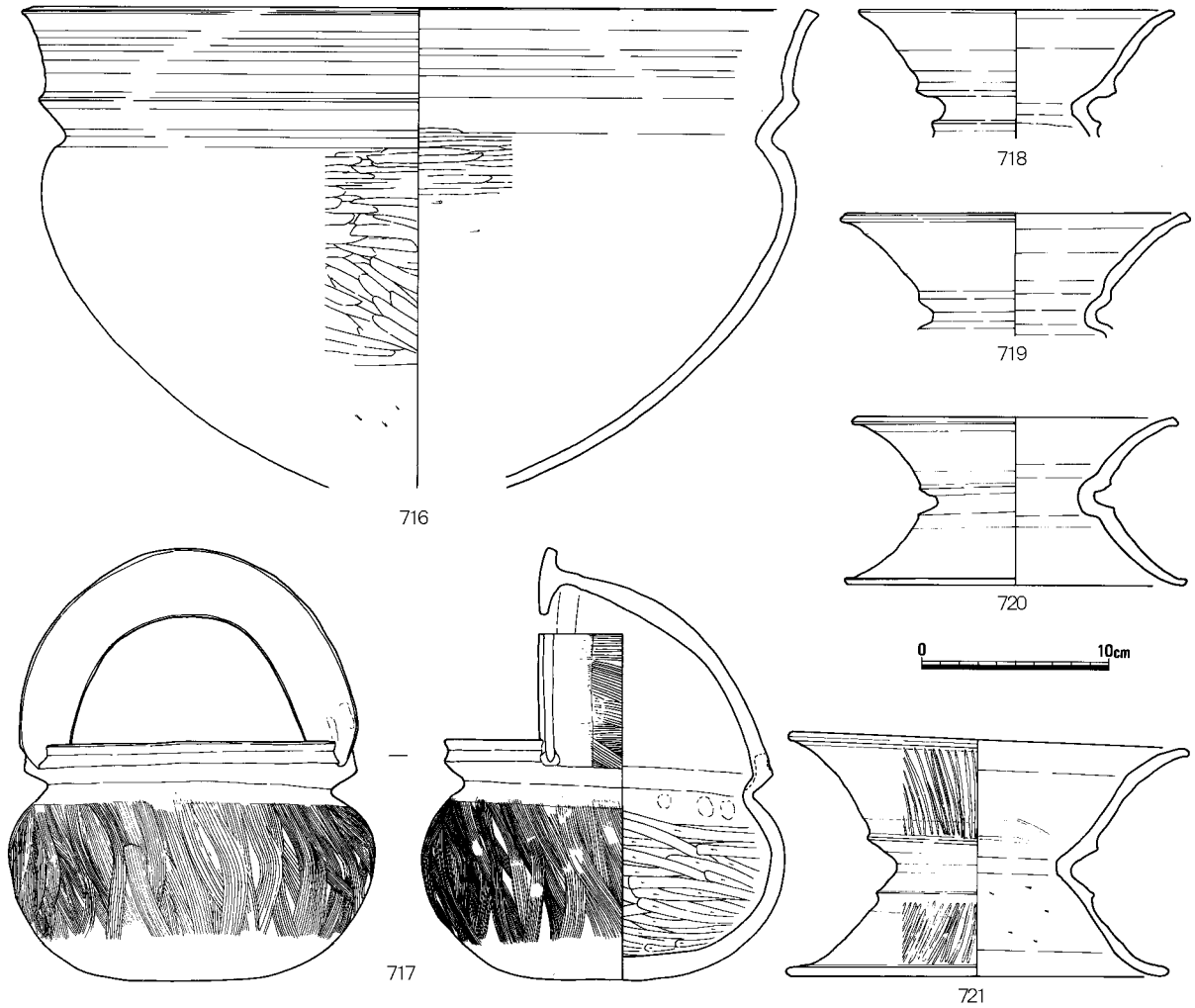
第114図 たわみ1断面図 (1/60)



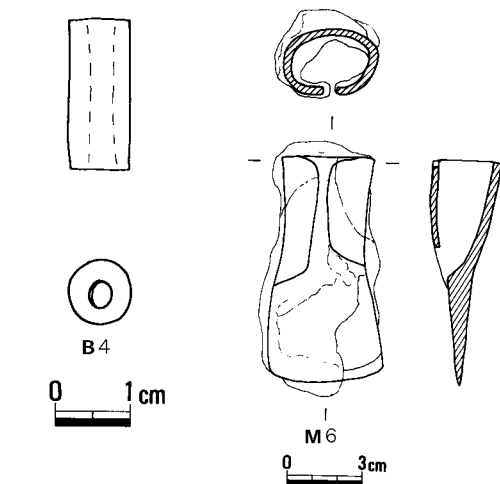
第115図 たわみ1出土遺物1 (1/4)



第116図 たわみ1出土遺物2 (1/4)



第117図 たわみ1出土遺物3 (1/4)



第118図 たわみ1出土遺物4
(1/1・1/3)

タキが施され、脚部は小さい。715は鉢で、胴部の内外面はハケメが施される。716も鉢で、胴部内外面はヘラミガキが施される。717は手焙り形土器である。胴部を作成した後に上部を貼り付けている。718～721は鼓形土器である。721は、外面と内面の上半はヘラミガキの後赤色顔料が塗布されている。内面下半はヘラケズリが施される。B4は碧玉製の管玉である。M6は鉄製の斧である。袋部は折り曲げることにより造られている。たわみ1は、古墳時代前期に属すると考えられる。(井上)

たわみ2 (第66図)

たわみ2は、3区南端に位置し、南側を土器溜り3を含む層に、北側を古代のたわみ4に切られる。溝12の上層に位置するが、明瞭な掘り方を伴っていなかったため、

たわみとした。長さは9.5mを測り、断面は皿状である。検出面での幅は北端で6.0m、中央が最大幅6.2m、南端5.3mである。底面の高さは北端で標高1.35m、中央部で1.34m、南端で1.29mを測る。遺物は少量で、須恵器は含まないため古墳時代前半に相当する。(氏平)

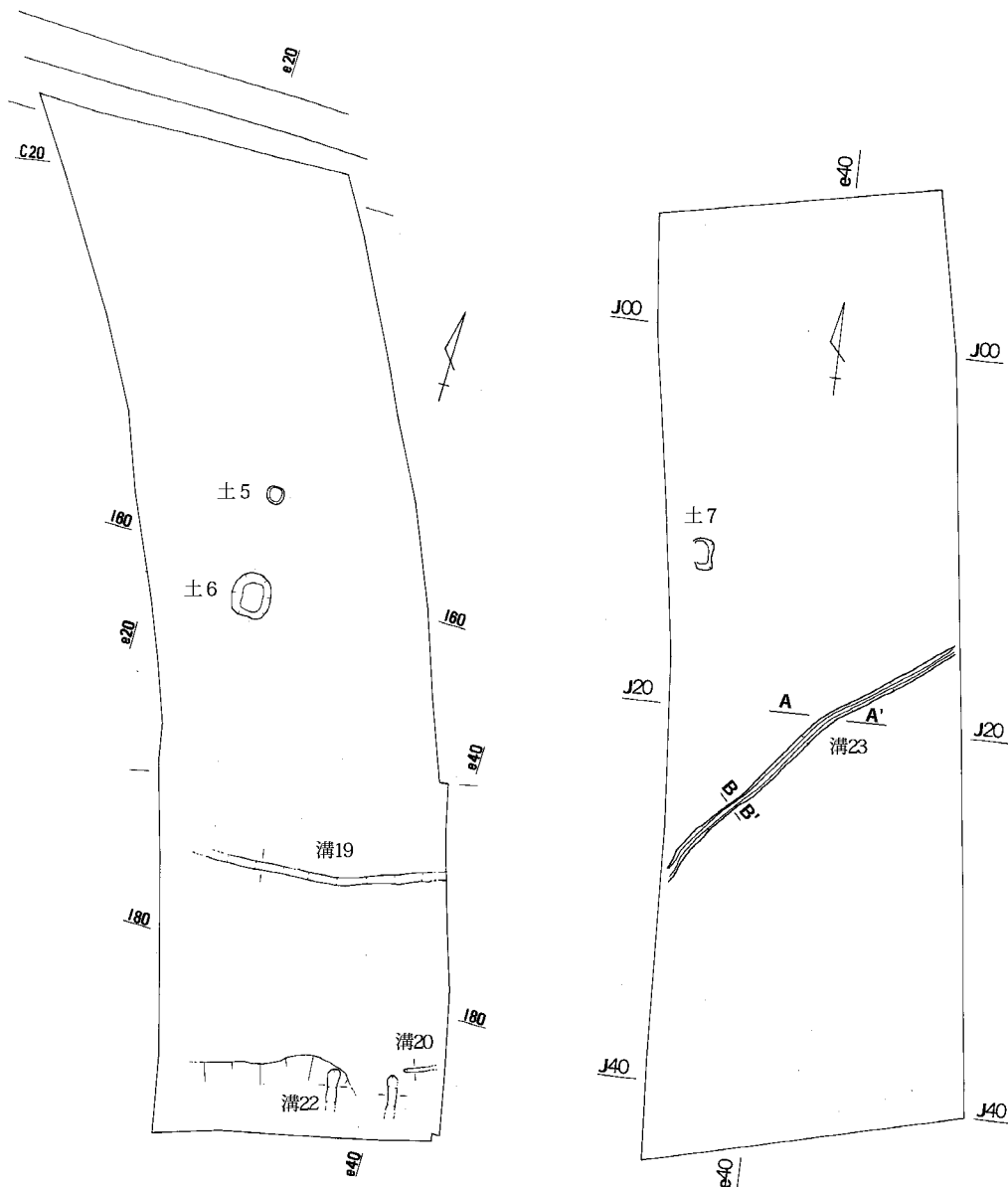
第5節 古墳時代後期の遺構・遺物

1 概要

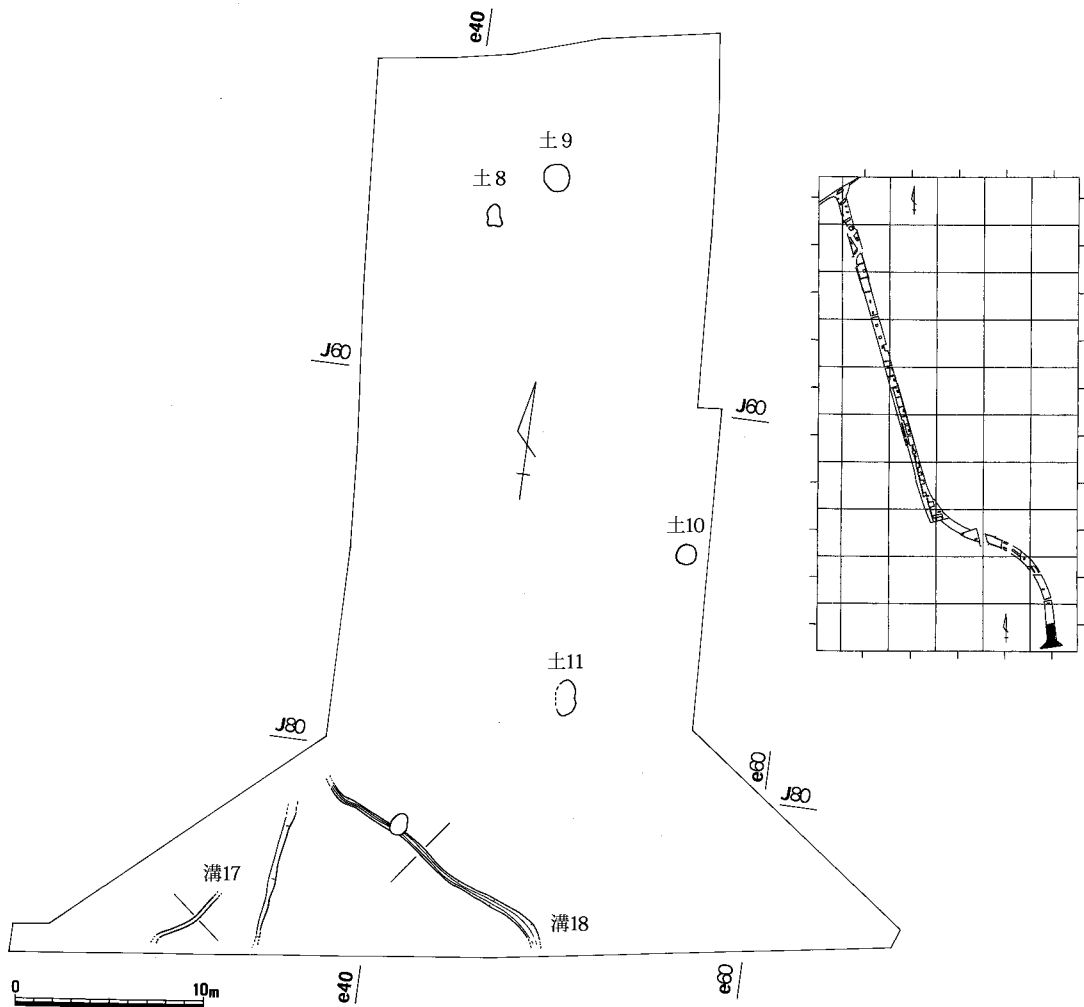
古墳時代後期の時期区分については、おおむね須恵器出現期以降を目安としている。すでに述べた新邸遺跡では古式の須恵器が認められたが、中撫川遺跡では伴うのが妥当な時期の土師器が、少なからず存在するものの、須恵器自体の共伴は明確に認められない。

当該時期の遺構は、土塋・溝を中心に1～3区で少数検出された。これは古代以降の遺構群による掘削や削平により損傷を受け、多くが検出困難な状態にあるためでもある。

出土遺物としては、後出時期の遺構に混入したものがあり、それらについても遺構に伴わない遺物として報告しておく。(岡田)



第119図 1・2区古墳時代後期遺構全体図 (1/400)



第120図 3区古墳時代後期遺構全体図 (1/400)

2 土壇

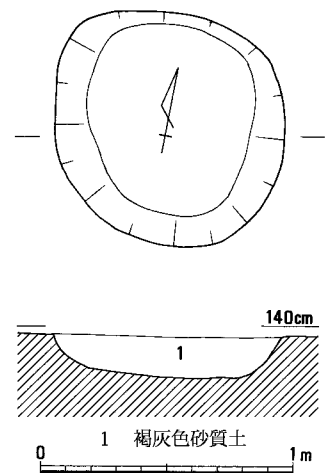
土壇5 (第119・121図)

1区の微高地部分北よりで検出され、不整な円形を示す。径約90cm前後、深さ15~20cmを測る浅い土壇である。埋積土は褐灰色砂質土で、出土遺物は須恵器小片のみである。(岡田)

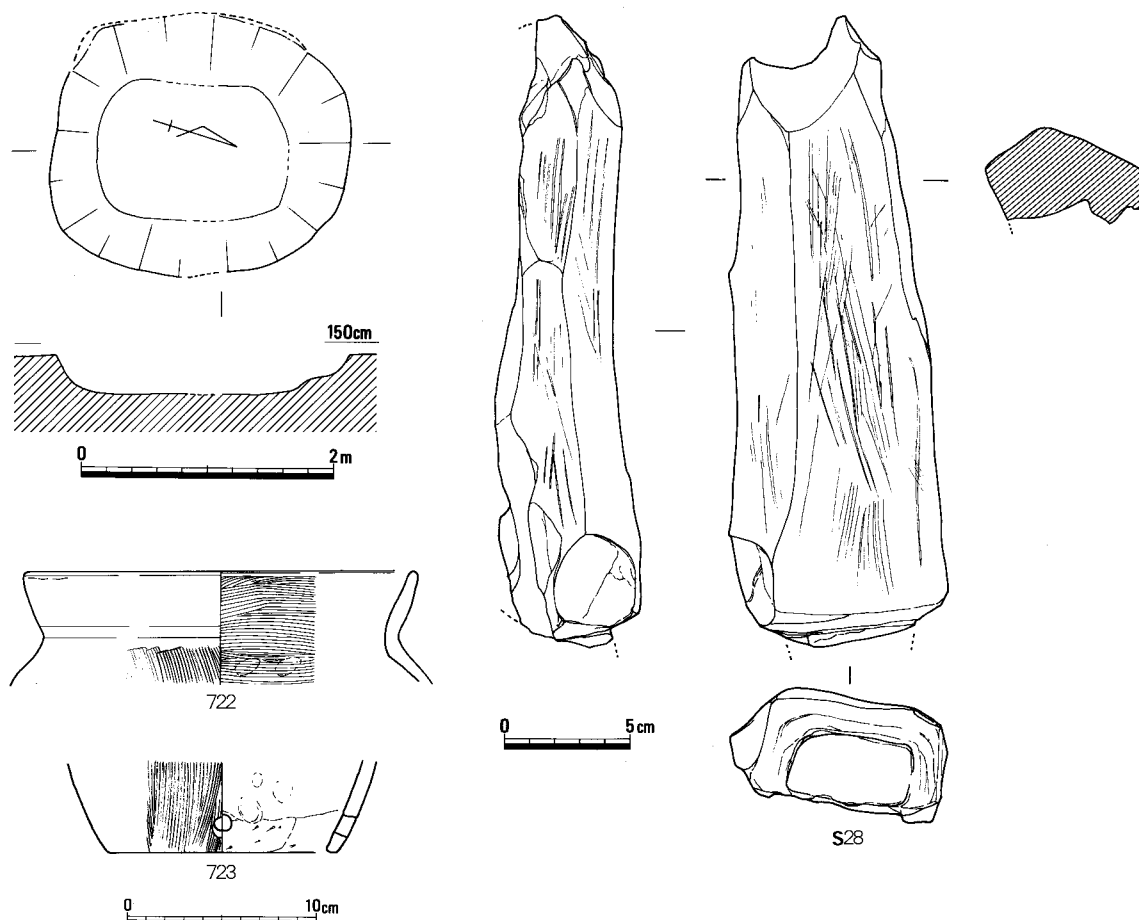
土壇6 (第119・122図)

土壇5の南方約5mで検出されたやや大型の土壇である。長径約2.4m、短径約2m、深さ約25cm前後を測る。埋積土は淡褐灰色砂質土の単一土層である。出土遺物には土師器の甕722・甕723がある。723の体部下端には、木の棒を挿しわたすための小円孔が穿たれる。S28は、最終的に金属製品の研磨を目的とした砥石として使用された可能性が高い石製品である。下の面には柄孔か軸孔にはめ込むためと思われる長方形の突起が作り出されている。

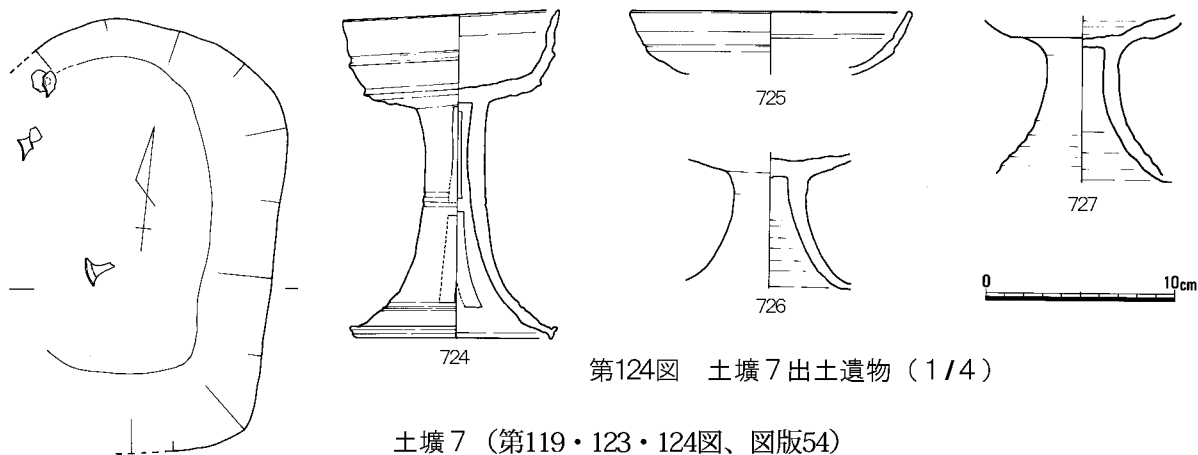
時期的には、6世紀後半に比定される。(岡田)



第121図 土壇5 (1/30)



第122図 土壌6・出土遺物 (1/30・1/4)



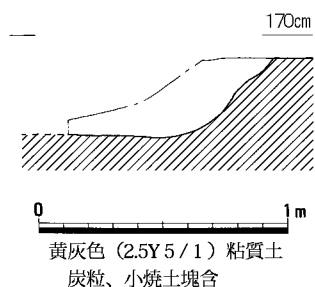
第124図 土壌7出土遺物 (1/4)

土壌7 (第119・123・124図、図版54)

調査区の西端で検出した。全体の形状は不明であるが、長方形に近い形を呈していたと考えられる。長辺約1.7m、短辺1.2m以上を測る。遺物は、須恵器の高杯が出土した。724は長脚の高杯で、方形透かしが2段に施される。6世紀中葉と考えられる。(井上)

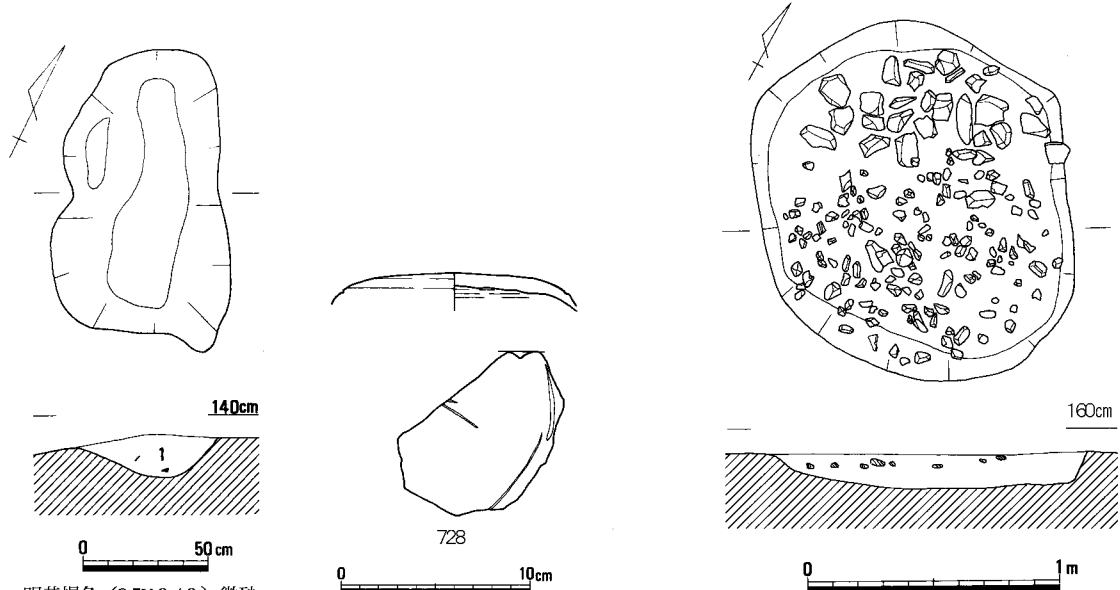
土壌8 (第120・125図)

土壌8は、3区の北西に位置する。平面は不整形で、検出面で長さ1.12m、幅最大71cmで、深さは18cmを測る。底面も不整形である。



黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
炭粒、小焼土塊含

第123図 土壌7 (1/30)



明黄褐色 (2.5Y 6/6) 微砂

第125図 土壙8・出土遺物 (1/30・1/4)

黄褐色 (2.5Y 5/4) 微砂 土器、炭含
第126図 土壙9 (1/30)

出土遺物は須恵器の杯蓋・壺底部で、遺構の時期は6世紀後半であろう。

(氏平)

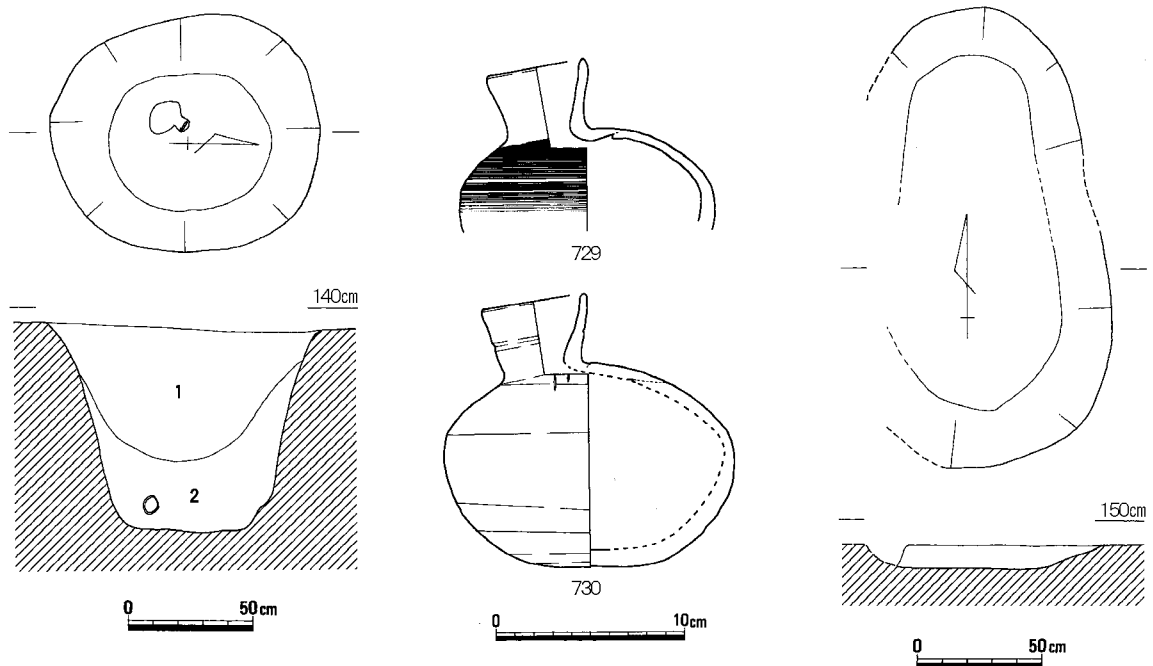
土壙9 (第120・126図)

土壙9は、3区の北中央に位置する。平面は隅丸の多角形を示し、長さ1.43m、幅最大1.22mで、深さは14cmを測り、底面標高1.35mである。礫の出土状況は、南から1mぐらいまでは小さい円礫が多く、そこから北は角礫が多くなる。礫の石材は花崗岩が多い。出土遺物には、古墳時代の須恵器片と混入の弥生・古墳時代の土器がある。この遺構は古墳時代後半に属するといえよう。

(氏平)

土壙10 (第120・127図、図版55)

土壙10は、3区の中央東端に位置する。平面は円形で、長さは1.06m、幅は最大約95cm、深さ80cm



1 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘質微砂

2 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘質土

第127図 土壙10・出土遺物 (1/30・1/4)

黄灰色 (2.5Y 5/1) 微砂 焼土塊、土器含

第128図 土壙11 (1/30)

第8章 中撫川遺跡

を測る。土層の第1層には土器片と黄褐色土ブロックを含み、第2層では遺物は出土状況で示した平瓶730のみであった。出土遺物には完形の730と第1層出土の平瓶729がある。729には頸部～肩部にカキメが見られるが、730はヨコナデのみである。時期は7世紀初頭であろう。(氏平)

土壇11 (第120・128図、図版55)

3区南に位置する。平面は楕円形、長さ1.8m、幅約80cm以上、深さ8cm、先に西側の溝11を掘削したので切り合いが不明である。遺物も少なく、時期は古墳時代後半の可能性が高い。(氏平)

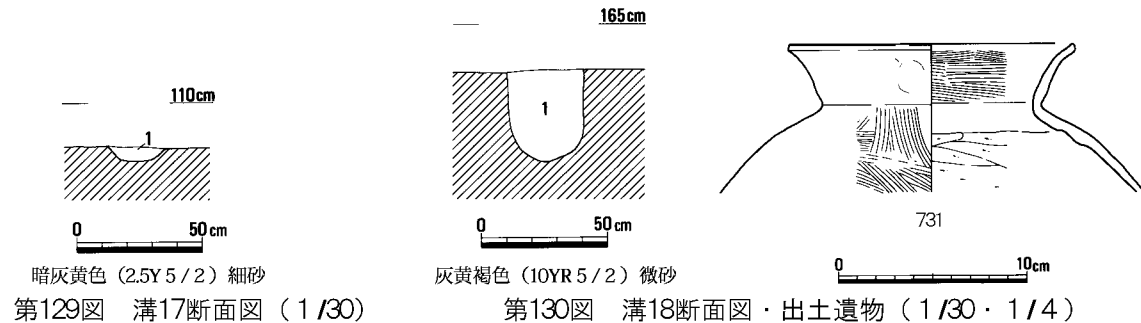
3 溝

溝17 (第120・129図)

3区南西端で古墳時代後半の包含層下に確認した、全長3.5mの溝である。埋土が砂層のため容易に認識できた。北端は幅が17cmで底面標高89cm、南端は幅21cmで底面標高86cmを測る。遺物は古墳時代前半の土師器が少量だが、遺構の時期は古墳時代後半と考えてよいだろう。(氏平)

溝18 (第120・130図)

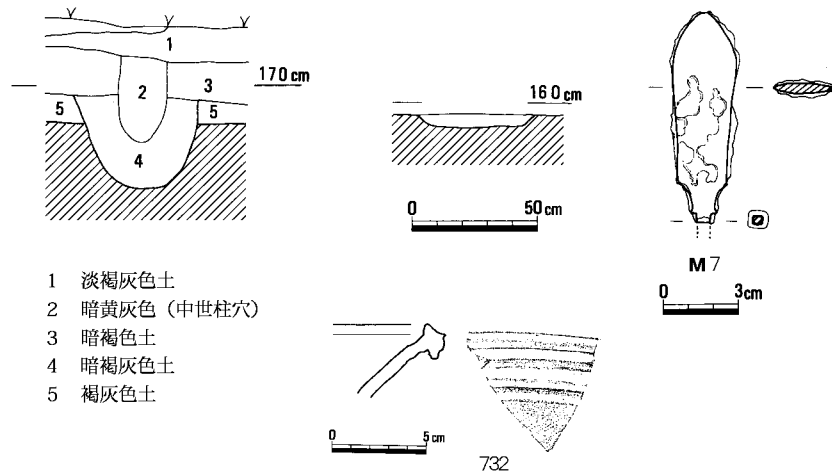
3区南端に位置し土器溜り3を切る溝である。北西から南東に流れ、幅は北側で27cm、南側で50cmで底面標高は北端1.15m、南端で1.02mを測る。断面形はU字形で、埋土はほぼ純粋な粗砂であった。遺物は少量の土師器片とサヌカイト片があり、図示したのは土師器甕片である。時期は土器溜り3より新しいことや2区溝23のように埋土が砂層の溝はそれまでの溝と流れる方向が異なることから、古墳時代後半であろう。(氏平)



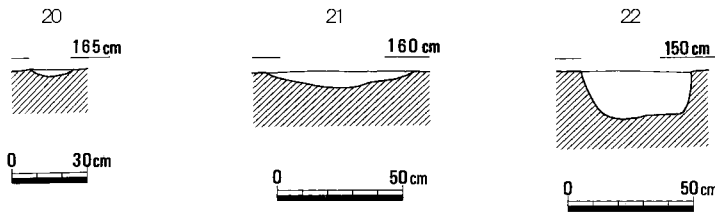
溝19 (第119・131図)

1区南よりで検出された東西方向の浅い溝である。検出全長約15mほどであるが、西端は古代溝・中世溝によって消滅する。断面形は、東端ではU字形を示すが場所によって一定しない。最大幅は約50cm、深さ約35cm前後を測る。

出土遺物は、さほど多くは認められないが、須恵器



甕732のほかに鉄鏃M7がある。732は比較的口唇部の作りは丁寧で鋭く、焼成も良好である。M7は大型の柳葉鏃で、茎部の大半を欠失する。鏃身下位に短い頸部が観察される。6世紀代に比定される。(岡田)



第132図 溝20～22断面図 (1/60・1/30)

溝20 (第119・132図)

1区の南東隅、溝19の南方約10mで検出された東西方向の細い溝である。幅約15cmで、断面形は凸レンズ形を示す。検出時は、溝21と竪穴住居状の遺構とも考えられた。出土遺物は皆無であるが、層位的に須恵器を伴う時期、6世紀代に比定される。(岡田)

溝21 (第119・132図)

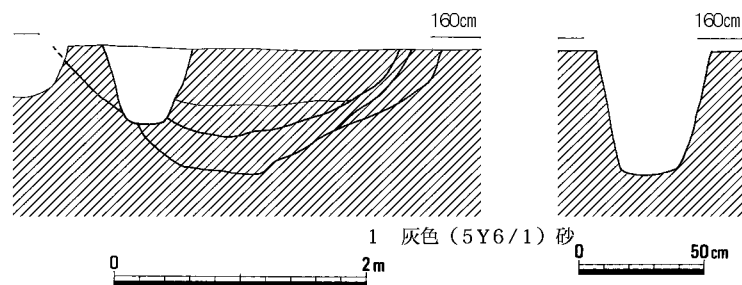
溝20のすぐ西側で検出された南北方向の溝である。西約3.5mには、ほぼ同規模の溝22が平行して検出された。この位置には中世溝43が先に検出されたため、複雑な平面状況を示していた。暗灰褐色を示す埋積土中からは、須恵器小片が出土している。6世紀代に比定されるだろう。(岡田)

溝22 (第119・132図)

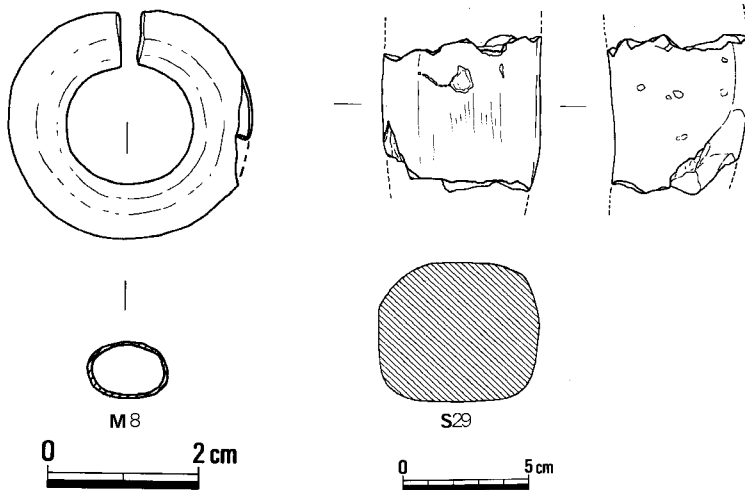
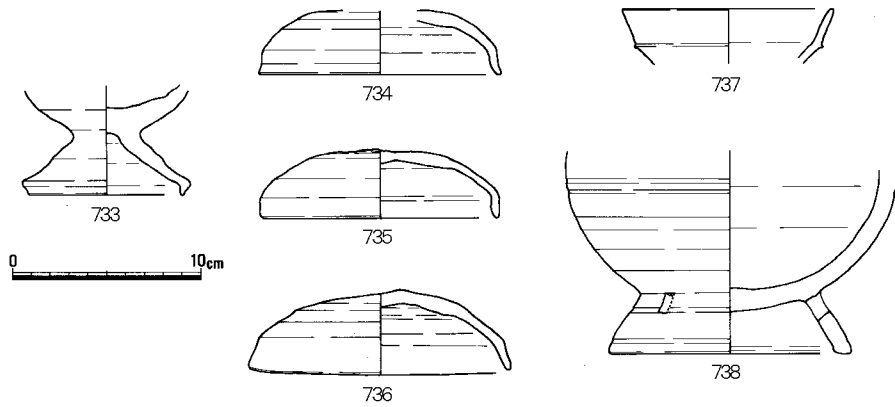
溝21の西側で検出された、やはり南北方向を示す溝である。断面形は明確な逆台形を示し、深さは約20cmと深い。北側では徐々に浅くなる。溝の機能や性格は明らかではないが、住居などに伴う溝である可能性は低いと考えられる。時期的には6世紀代に比定される。(岡田)

溝23 (第119・133図)

2区のほぼ中央部に検出した溝である。北東方向から、南西方向を向くものである。検出した全長は約20mを測る。この溝は、古墳時代前期の遺構である竪穴住居2と第133図に見るように溝11をも切るものである。検出面での溝の幅は45～50cmを測る。断面形は、逆台形を呈しており、両側の壁は垂直に近い立ち上がりを見せている。検出面からの深さは50～60cmを測る。底面は少し窪むもので、その幅22cm前後を測る。溝は灰色を呈する砂で埋まっている。出土遺物がないため、明確な時期は不明である。しかし、先にも述べたが、古墳時代前期の遺構を切っていることから、それらの時期よりは新しい。一方、掘立柱建物8の柱穴には明らかに切られており、また、溝25にも切られていることから7世紀よりは古いものとする事ができる。以上の事柄から時期を推定すれば、古墳時代後期に属するものと考えられる。(井上)



第133図 溝23断面図 (1/60・1/30)



第134図 3区遺構に伴わない出土遺物

(須恵器・金環・砥石；1/4・1/1・1/3)

4 遺構に伴わない遺物

ここでは、古墳時代後半の遺構に伴わない遺物を述べる。古墳時代後半の包含層は、3区南西端の溝17上層と3区南側中央のたわみ2上層にあった。南西端では古代の包含層の下層に位置したが、上層にも古墳時代後半の遺物が混ざっていた。3区北側から北では古代以降の削平が大きく、古墳時代後半の包含層もそれに伴い消失したと考え

られる。3区南側は地形が低く、また古墳時代後半以降に砂層の堆積があったため包含層が残ったのであろう。

733は3区北側のたわみ4混入遺物のうちの1つで、須恵器の台付壺であろう。734・737は3区南西端包含層の古代包含層部分出土で、おそらく混入である。いずれも須恵器で、734が杯蓋、737は高杯の可能性もある。735は3区南西端の古墳時代後半包含層部分に含まれていた。736は3区南端から出土のほぼ完形の須恵器杯蓋である。738は3区南側中央から出土した。上部を欠くが、台付壺であろう。これら須恵器の時期には幅があるが、6世紀末から7世紀前半までに含まれる。

M8は銅地金張りの耳環である。3区南端の調査区壁面で、壁面清掃中に検出した。第9図3区南壁土層断面図上から3段目で、第4層出土である。溝25の上層に当たり、溝の時期からすると遺物の方が古いように思える。検出時に一部を欠損したが、完形である。その際、中が中空であることを確認した。重量は4.14gと軽い。保存状態も非常に良好である。法万寺調査区周辺では、1972～73年の発掘調査（第9章註1）で銅地金張りの耳環1つ、1975年の調査（凡例註2、第9章註1）で銅地銀張りの耳環が1つ、いずれも包含層扱いであるが完形品が出土していて、今回で合計3点目となる。S28は砥石であろうか。一部に擦痕が認められ、その面が窪んでいる。 (氏平)

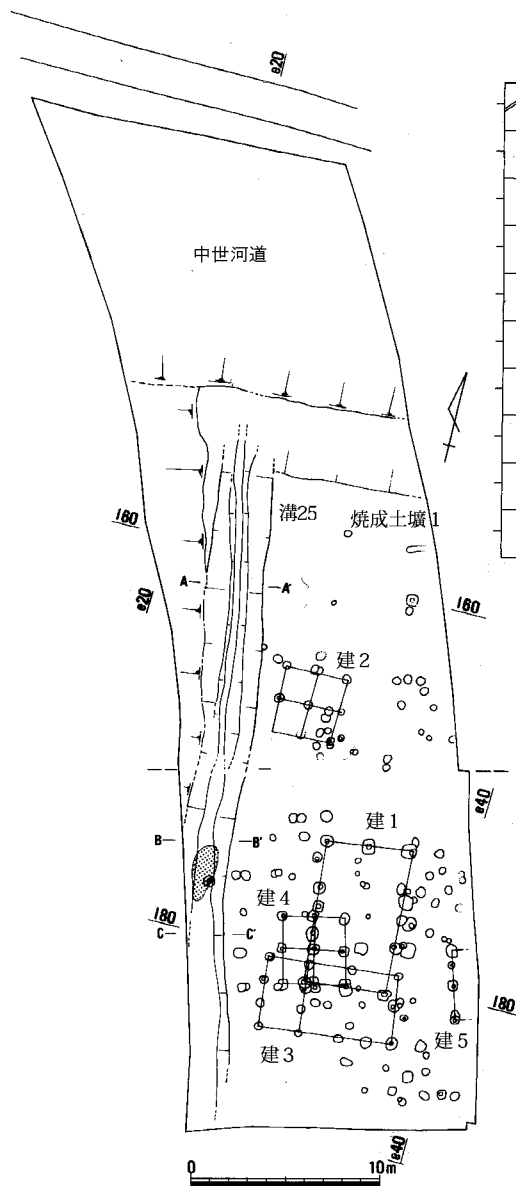
第6節 古代の遺構・遺物

1 概要

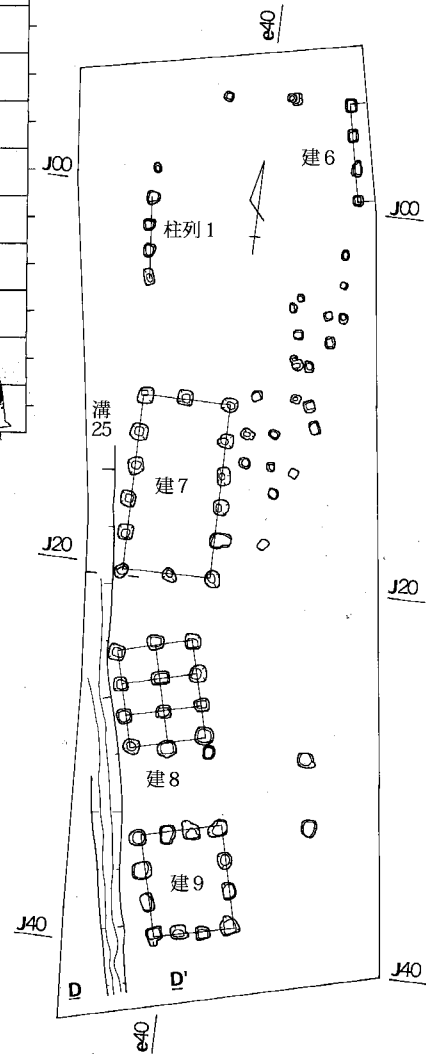
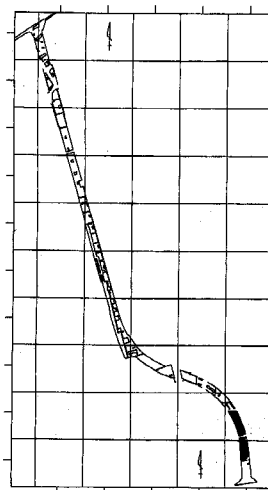
1 区の概要

古代に比定される遺構群の平面的な検出作業は、発掘調査過程では、多数の柱穴群が検出された中世の遺構群について実施した。

すでに数か所の土層観察によって、古代以前の遺構の存在については十分予測していたが、比較的まとまった遺物が出土する溝25や建築遺構を構成する柱穴も見つかり、ほぼ平行して検出作業を行っ



第135図 1区古代遺構全体図（古代Ⅰ・Ⅱ期）
（網目：土器集中部、◎：円面硯 1/400）



第136図 2区古代遺構全体図
（古代Ⅰ・Ⅱ期）（1/400）

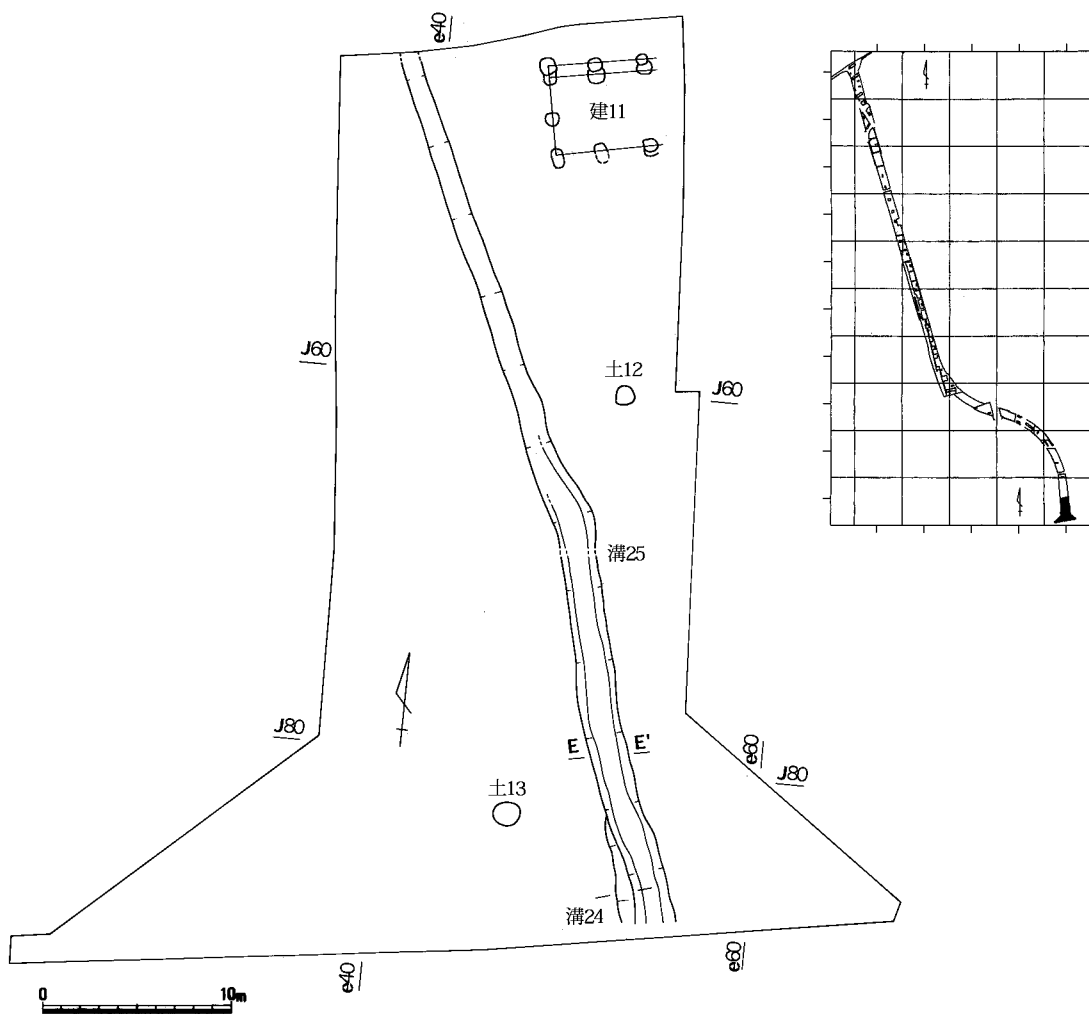
ていた2区と併せ、7世紀代から9世紀代にかけての遺構群の実態が明らかになった。

1区で検出された建物は計5棟分に留まるが、2区で検出された建物群に比較すると、柱穴の大きさや建物の規模はやや小さい。中心となる建物群は2区とその周辺に存在し、1区ではその北辺雑舎建物群の一部が検出されたといえるかもしれない。建物としてまとまった柱穴以外にも、それらと同規模の柱穴が検出され、その多くには柱穴痕跡が認められた。隅丸方形を呈する平面形の柱穴もみられるが、大半は円形で、径約30~50cmを測る規模のものである。

溝25の北端は河道によって失われ、西側肩は中世溝に切られる。地形的にも西側は低位となるため、建物群が存在する可能性はきわめて低いだろう。中世河道の位置には、すでに掛無堂遺跡で検出された護岸遺構に伴う古代の河道が存在していた可能性が高く、溝25もその河道と密接な関係にあったとみるべきであろう。 (岡田)

2区の概要

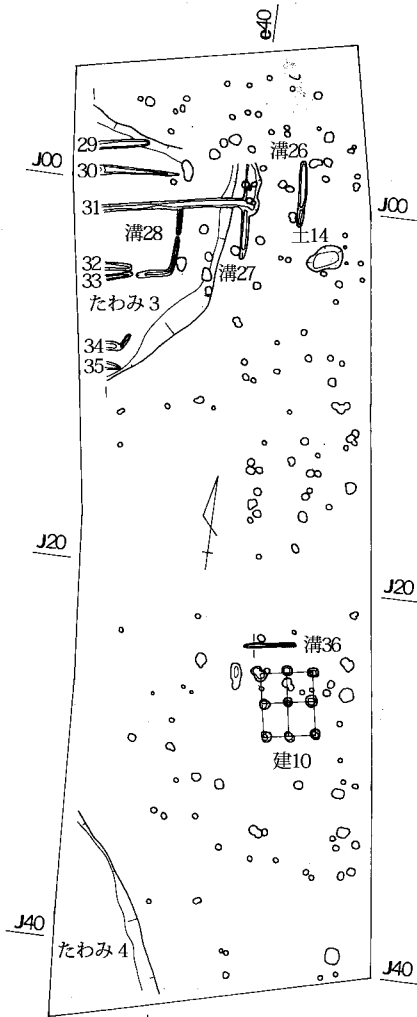
2区で検出した遺構は、掘立柱建物5棟、土壇1基、柱列1列、たわみ、溝などである。時期的には、7世紀代から、10、11世紀代までの遺構を検出した。今回の調査で、明らかに古代I期の遺構は、溝25とした遺構のみである。古代II期と考えられる遺構としては、掘立柱建物がある。掘立柱建物6~9までがその時期に属すると考えられる。遺構の重なる状況から、掘立柱建物9は、緑釉陶器を多



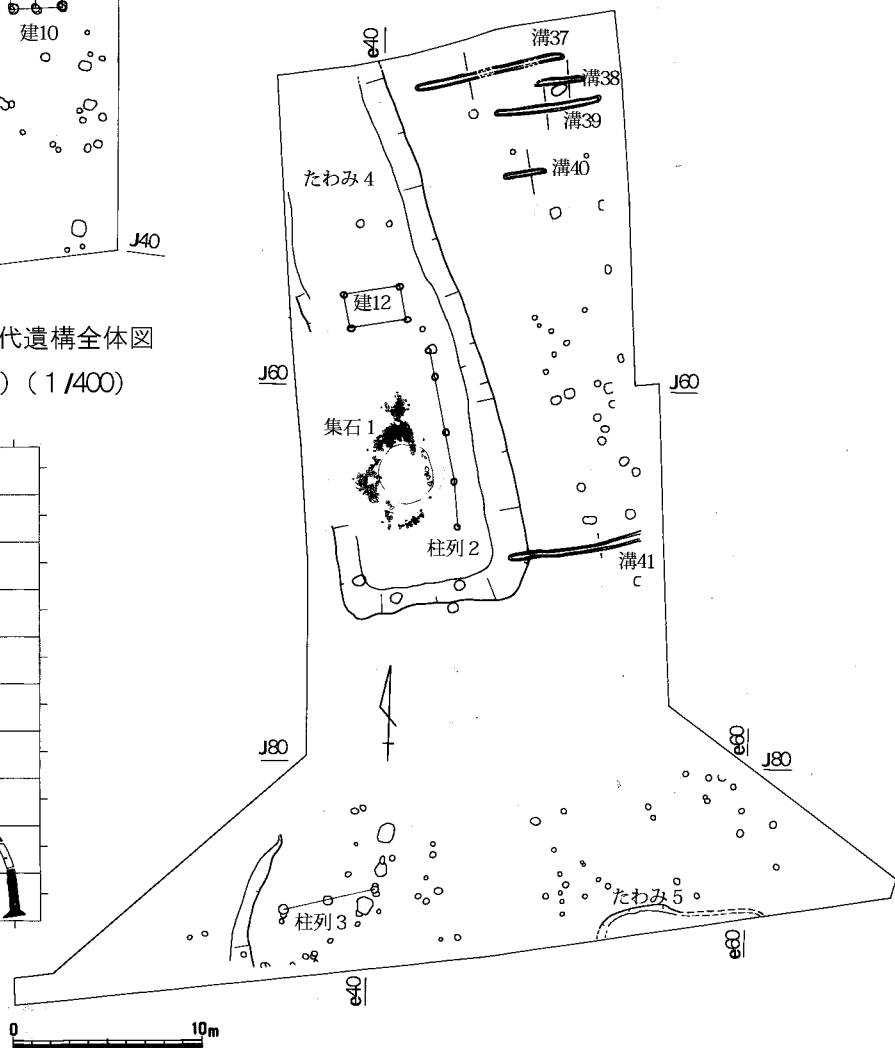
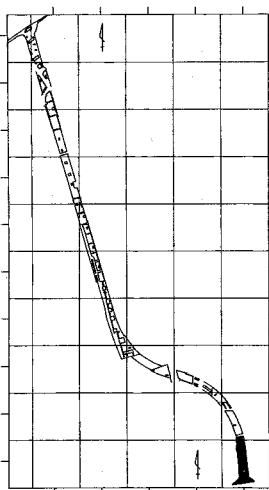
第137図 2区古代遺構全体図 (古代I・II期) (1/400)

く出土したたわみ4に切られており、たわみ4よりも古いことが確認されている。掘立柱建物群は、その棟の方向が、おおむね2種類ある。掘立柱建物7と、柱列1とは、真北に近い方向を示す。また、その他の掘立柱建物群は、その軸を少し西に振り、方向をほぼ同じくしている。掘立柱建物8・9は、同時存在と考えることも可能であろうが、その軸を異にするものとの関係については不明である。建物の形態としては、柱穴が建物の周囲にのみ存在する側柱建物と、縦横の柱通りのすべてに柱穴が存在する総柱建物とが存在する。

古代Ⅲ期の遺構としては、たわみ3とたわみ4がある。いずれも遺構の一部を調査したもので、その全体については不明である。しかし、両者共に9世紀前半と考えられる緑釉陶器が多く出土している。特殊な遺物としては、鋳型の破片が出土している。破断面に緑青が付着しており、青銅製品の鋳型と考えられる。また、



第138図 2区古代遺構全体図
(古代Ⅲ期以降) (1/400)



第139図 3区古代遺構全体図 (古代Ⅲ期以降) (1/400)

たわみ3の肩口から銅塊が出土している。たわみ3の周辺からは、溝群を検出した。溝群の出土遺物は、たわみ3と同時期と考えられ、遺構の性格を考える場合それらを総合したうえで考える必要がある。同じたわみでも、たわみ4にはそのようなものがみられないだけに、遺構の性格も異なるものと考えられる。

古代Ⅳ期の遺構としては、掘立柱建物10と、溝36を想定している。古代Ⅱ期までに属すると考えられる柱穴は少なかったが、Ⅲ・Ⅳ期に属すると考えられる柱穴の数は増えてくる。そのため、建物は、今少し存在した可能性はあるが、今回の調査ではまとめることはできなかった。(井上)

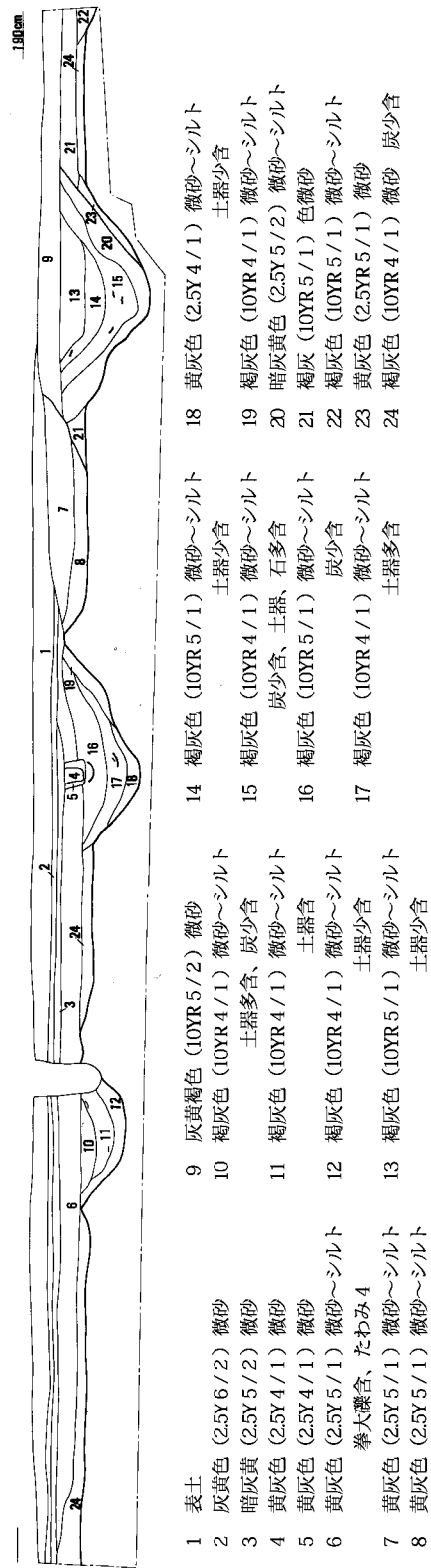
3区の概要

3区の古代は、掘立柱建物11と溝24・25のある7～8世紀(古代Ⅰ・Ⅱ期)まで、たわみ4中心の9世紀前半(古代Ⅲ期)、それ以降の3時期に区分できる。

7～8世紀では、北東に掘立柱建物11が立地し、その西を溝24・25が北から南へ流れるという1・2区と同様の様相である。ただし掘立柱建物11の南には建物は続かず、調査区南端まで遺構の希薄な状態である。溝24の西側も遺構がみられない。

9世紀前半は、たわみ4関連の遺構がある。たわみ4内には掘立柱建物12、柱列2、集石1があるが、すべてが同時ではないと思われる。建物12はたわみ4の埋没途中で構築された可能性もある。1×1間の小規模な建物だが、柱穴から完形の土師器皿が出土していることから、たわみ4の土器投棄時に同時に撤去されたのかもしれない。柱列2は建物ではなく、柵状の遺構が想定できる。集石1はたわみ4堆積土の上であり、検出したのは最終的な姿であるから、たわみ4と同時にどのような姿であったかは推測の域を出ない。おそらく礫を積み上げた山のようなものではないだろうか。集石1下の壇はたわみ4と同時に築かれたと言っていいだろう。溝41はたわみ4の南東に位置し、たわみ4から東へ排水するものである。

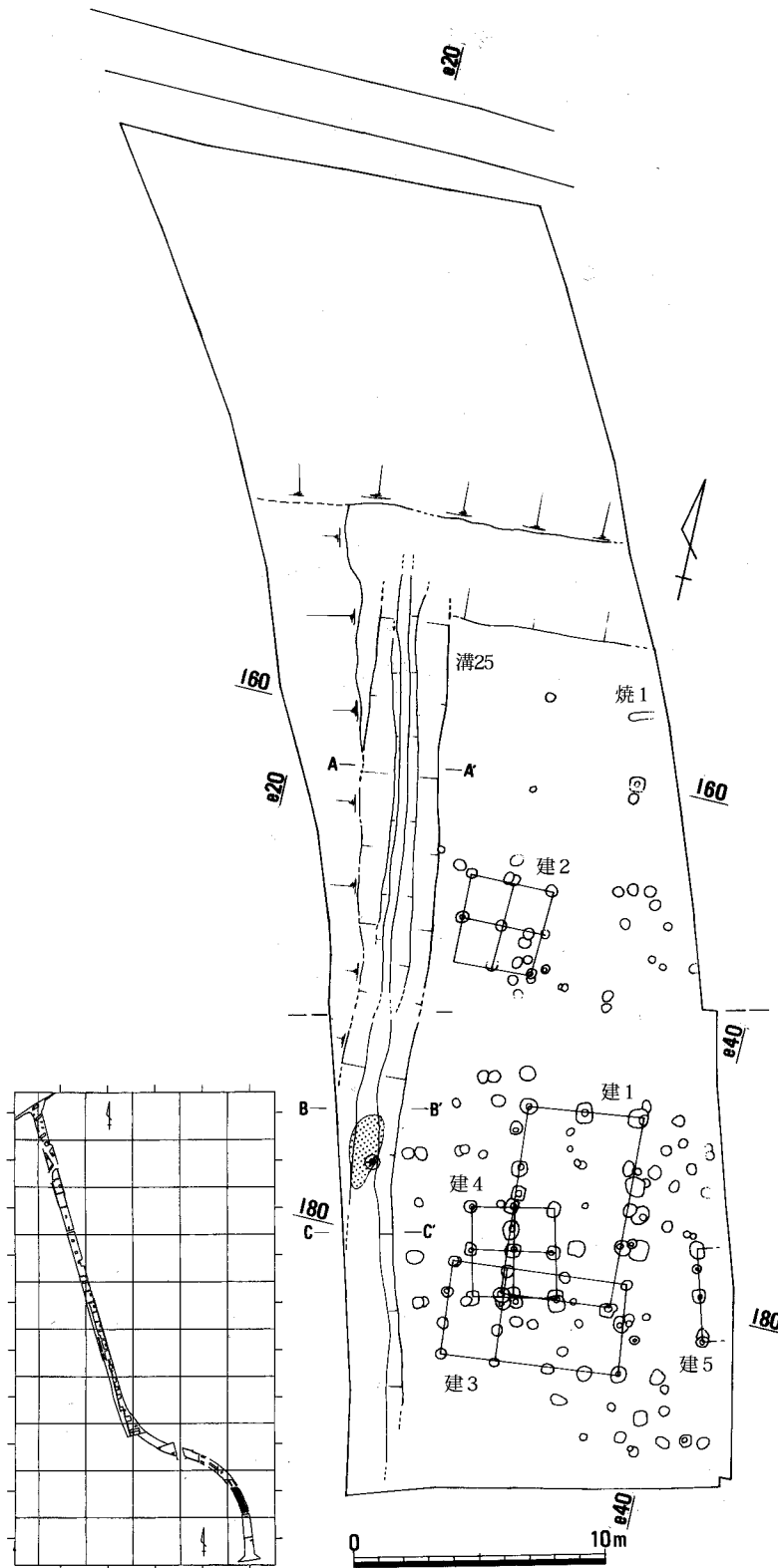
10世紀以降(古代Ⅳ期)の遺構は、建物は認識できなかったが、調査区の北東～南部で柱穴を多く確認した。掘立柱建物11の周辺と調査区中央南、柱列3とたわみ5の周辺の柱穴がこの時代に属する可能性が高い。遺物は黒色土器・土師器を中心としたものである。(氏平)



第140図 3区中央土層断面図(1/80)

2 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第141・142図、図版57・58)



第141図 1区古代遺構全体図(1/300)

1区では5棟の掘立柱建物が検出された。これらは、1区の南半分で検出され、溝25の東側の平坦な微高地上に集中する。

側柱建物3棟、総柱建物2棟で棟を南北方向に示すものが3棟、東西に示すものが2棟である。

これらの建物群と同時期の柱穴群は、中世遺構によってかなりの削平が行われ、上面は相当部分が失われている。そのためか、出土遺物はきわめて少ない。

掘立柱建物1は、南部分を掘立柱建物3と掘立柱建物4によって切られ、棟方向から掘立柱建物2と同時に存在した可能性もある。

南北3間、東西2間の側柱建物で、棟方向は西に $2^{\circ}25'$ 振る。2区の掘立柱建物7とほぼ同一の棟方向を示している。

柱穴は、円形もしくはやや方形を意識した、隅丸方形の平面形を示すものがみられる。後者では、妻部分の棟持柱が該当する。

柱穴の平面観察では、それらのすべてには円形の柱痕跡が認められ、15~30cm前後を測る。

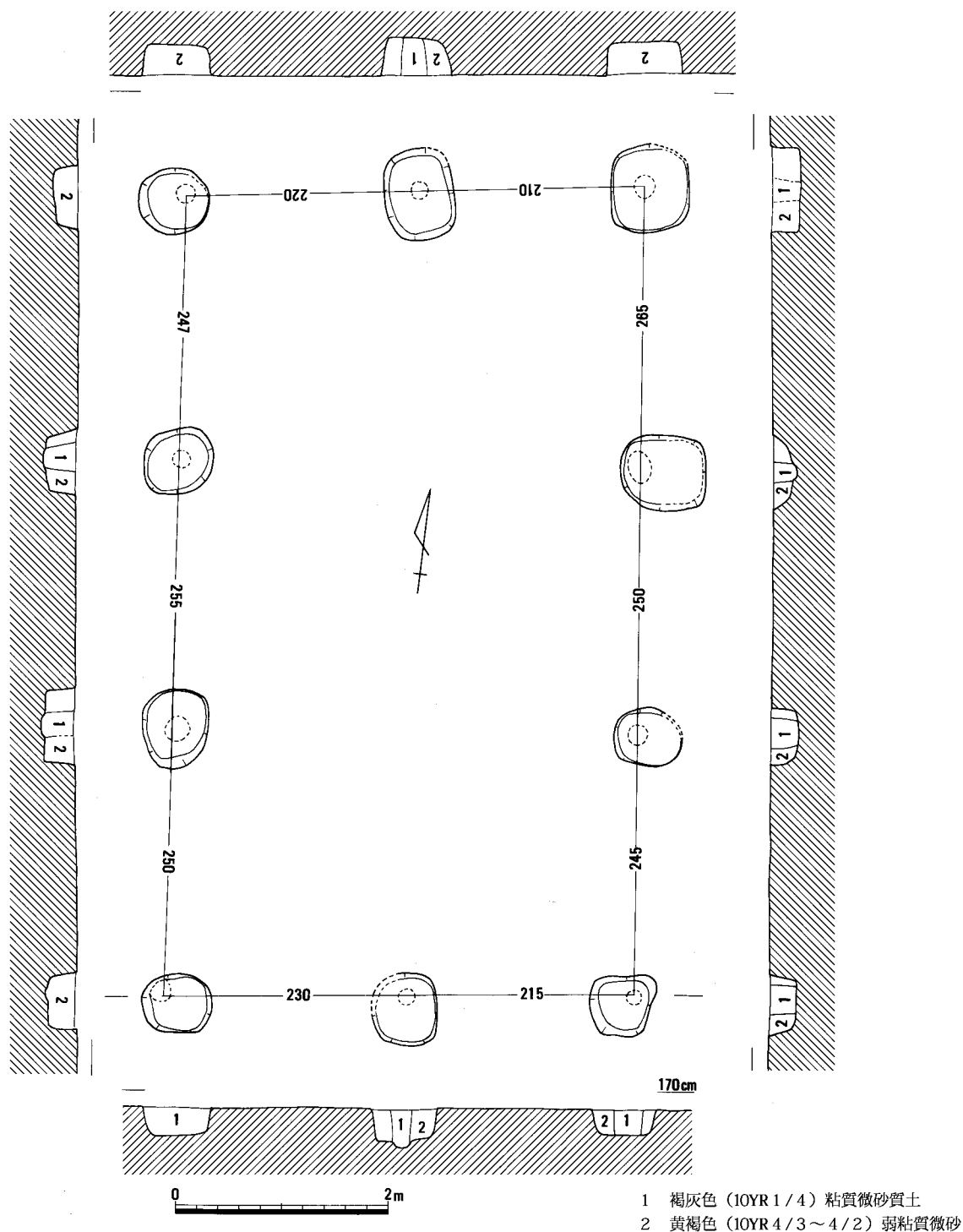
桁行は、2.45~2.65mとかなり不揃いであるが、おおむね当時の8尺を示す。梁間の柱間隔は、2.1~2.3mを測り、おおむね当時の7尺前後とみられる。

柱穴掘り方埋積土は、柱痕跡が黄褐色を呈する粘質微砂、埋め土は褐灰色粘質の微砂質土である。

第8章 中撫川遺跡

それぞれの柱穴の深さは、約25~40cm前後を測るが、柱痕跡部分はやや深くなる状況がある点に注意される。これは掘り方底面まで検出した後、丸い平面形が観察されることが多い。

出土遺物は土師器・須恵器の小片がわずかに認められるが図化できるものは皆無である。時期的には、古代Ⅱ期すなわち8世紀代に比定される可能性がもっとも高い。なお、掘立柱建物検出作業中に出土した遺物については、第147・148図に掲載する。(岡田)



第142図 掘立柱建物1 (1/60)

掘立柱建物 2 (第141・143図、図版57・58)

掘立柱建物 1 の北西方約 7 m で検出された総柱建物である。棟方向は南北とすると、ほぼ真北を示す。柱掘り方はすべてほぼ円形を呈し、径約 40 cm 前後を測るものが多い。

柱穴のうち 4 本には径約 15~20 cm 程度の柱痕跡が観察される。なお南西の隅柱は、試掘溝の設定により検出できなかった。

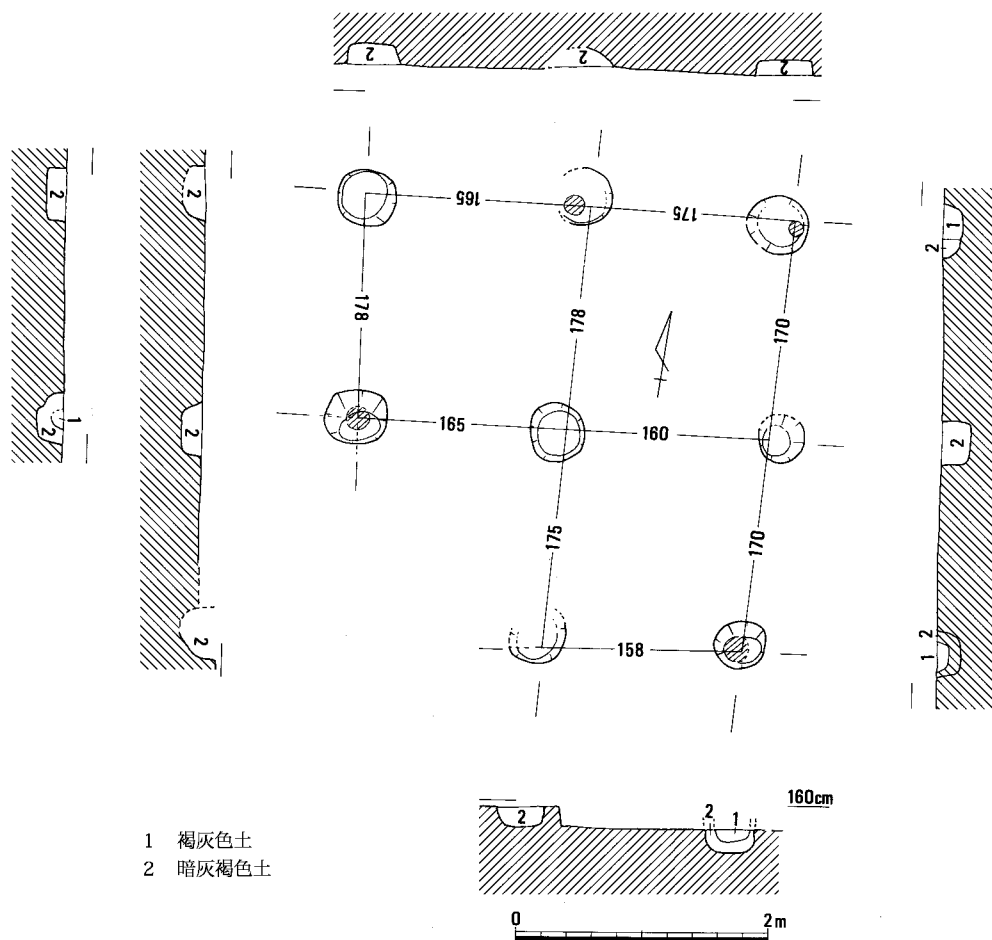
柱間は 1.58~1.78 m を測り、当時の 5~6 尺の間におさまる。柱穴からの出土遺物はほとんどみられないが、埋積土などから古代 II 期に比定される。(岡田)

掘立柱建物 3 (第141・144図、図版57・58)

掘立柱建物 1 の南側梁間付近で検出された東西に棟方向を示す桁行 3 間×梁間 2~3 間の側柱建物である。掘立柱建物 1 の棟方向とは、ほぼ直行する。建物の西側部分は、梁間が 3 間と推定したが、間仕切りのある建物の可能性も考慮した。東西の梁間はおよそ 3.8 m 前後を測り、ほぼ同じ柱間距離を示す。桁行は約 2.1~2.8 m と不ぞろいである。なお、一部の柱穴には、円形の柱痕跡が認められる。柱穴からの出土遺物は極めて少ないが、時期的には古代 II 期の範囲に比定される。(岡田)

掘立柱建物 4 (第141・145図、図版57・58)

2 間×2 間の総柱の掘立柱建物である。柱穴は、掘立柱建物 1 と掘立柱建物 3 の両方の柱穴を切っている。比較的整然とした柱配置を示し、ややいびつな円形の掘り方が検出された。ほぼ半数の柱穴には、円形の柱痕跡が認められる。

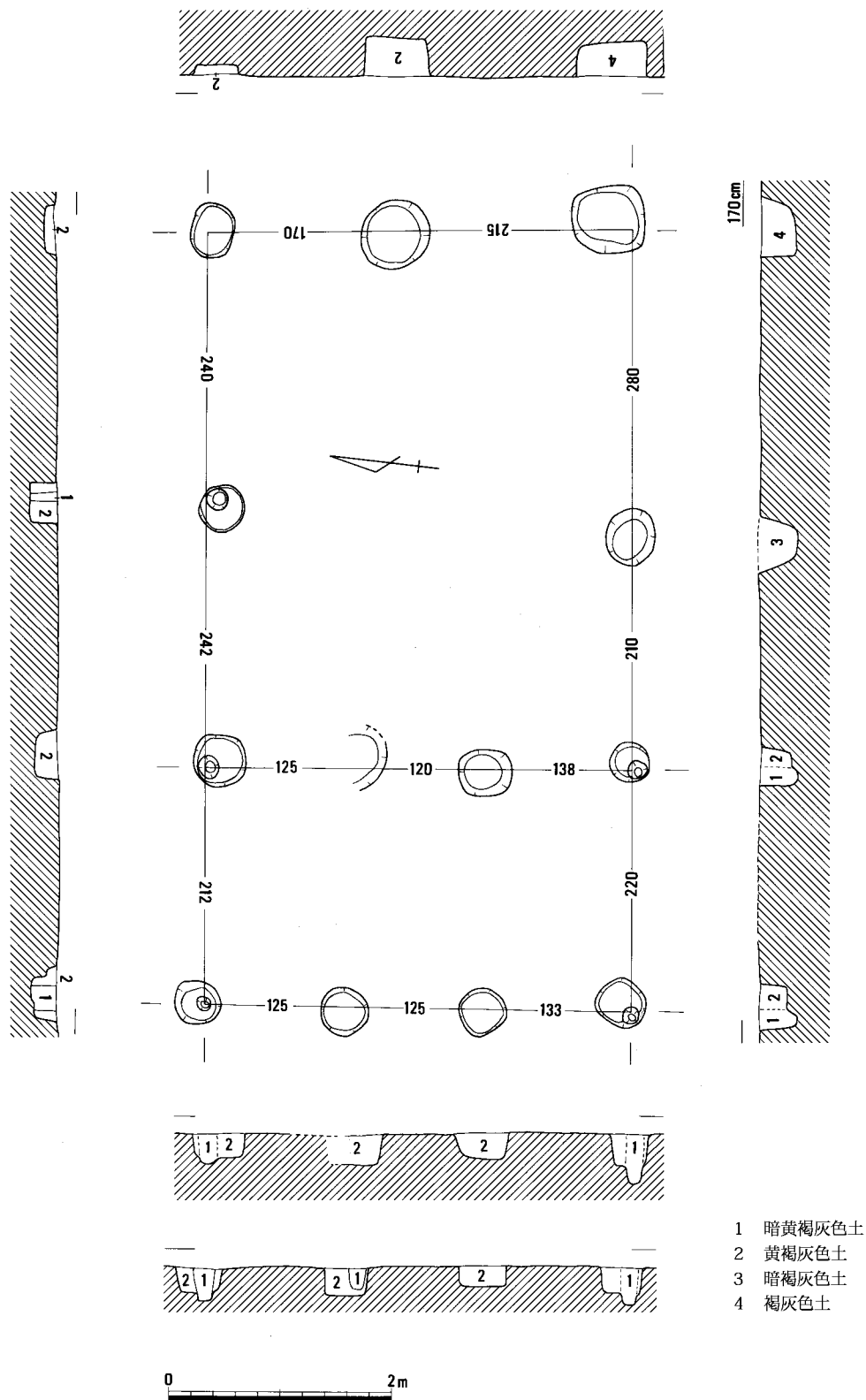


第143図 掘立柱建物 2 (1/60)

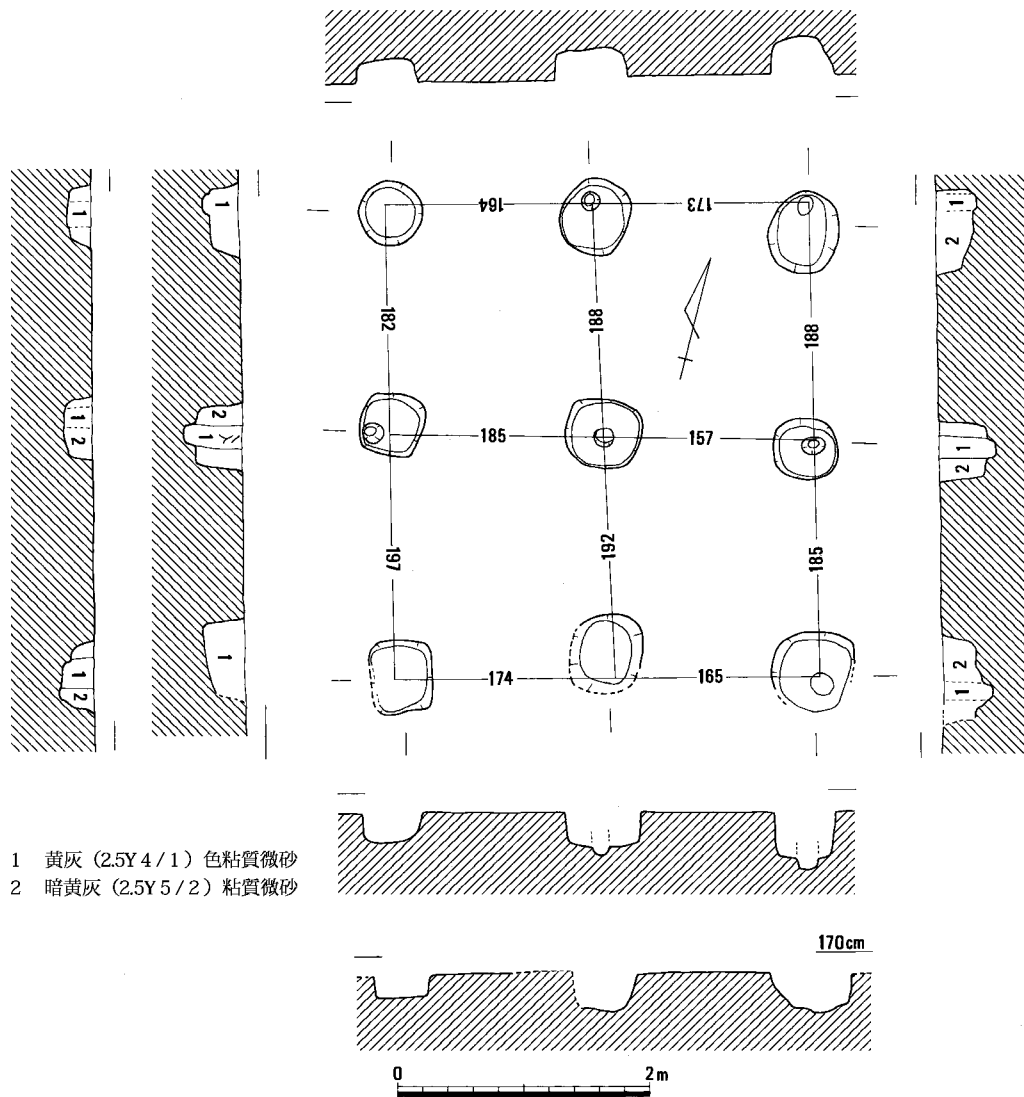
第8章 中撫川遺跡

棟方向を南北とすると、約11度西に振る。柱間は南北方向がわずかに長く6尺前後、東西方向は5～6尺前後を測る。規模は別として、2区の掘立柱建物8・9の棟方向に近似する。

柱穴は、他の掘立柱建物に比べると比較的深く、中世の削平を考慮すると元々かなり深く掘りこま



第144図 掘立柱建物3 (1/60)



1 黄灰 (2.5Y 4/1) 色粘質微砂
2 暗黄灰 (2.5Y 5/2) 粘質微砂

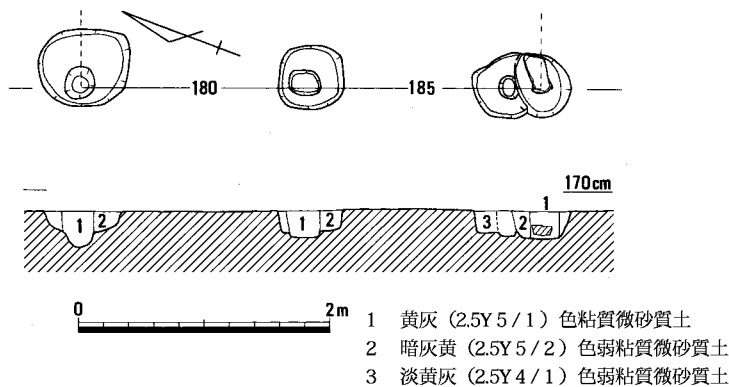
第145図 掘立柱建物 4 (1/60)

れた可能性がある。柱痕跡部分には沈下が顕著である。柱穴からの出土遺物はきわめて少量であるが、古代Ⅱ期あるいはⅢ期に比定される須恵器・土師器細片が認められる。(岡田)

掘立柱建物 5 (第141・146図、
図版57・58)

1区の東辺南よりで検出された、東西方向の建物の一部と考えられる。

西側梁間が2間分検出可能となった。柱間は約1.8mで当時の約6尺にあたる。すべての柱穴に柱痕跡が残る。棟方向は掘立柱建物4に近い。古代Ⅱ期に比定される。(岡田)



1 黄灰 (2.5Y 5/1) 色粘質微砂質土
2 暗黄灰 (2.5Y 5/2) 色弱粘質微砂質土
3 淡黄灰 (2.5Y 4/1) 色弱粘質微砂質土

第146図 掘立柱建物 5 (1/60)

1区掘立柱建物群周辺出土遺物（第147・148図）

1区の掘立柱建物群周辺では、中世遺構群の検出終了に伴い包含層の掘り下げ作業を行った。溝25検出作業とも平行して作業を進めたが、明らかに古代に比定される須恵器・土師器などが出土した。

第147図には、須恵器739～745、土師器747～752を掲載する。739・740は輪高台を持つ杯で、古代Ⅱ期に比定される。平坦な底部からやや外方する直線的な体部が特徴的である。

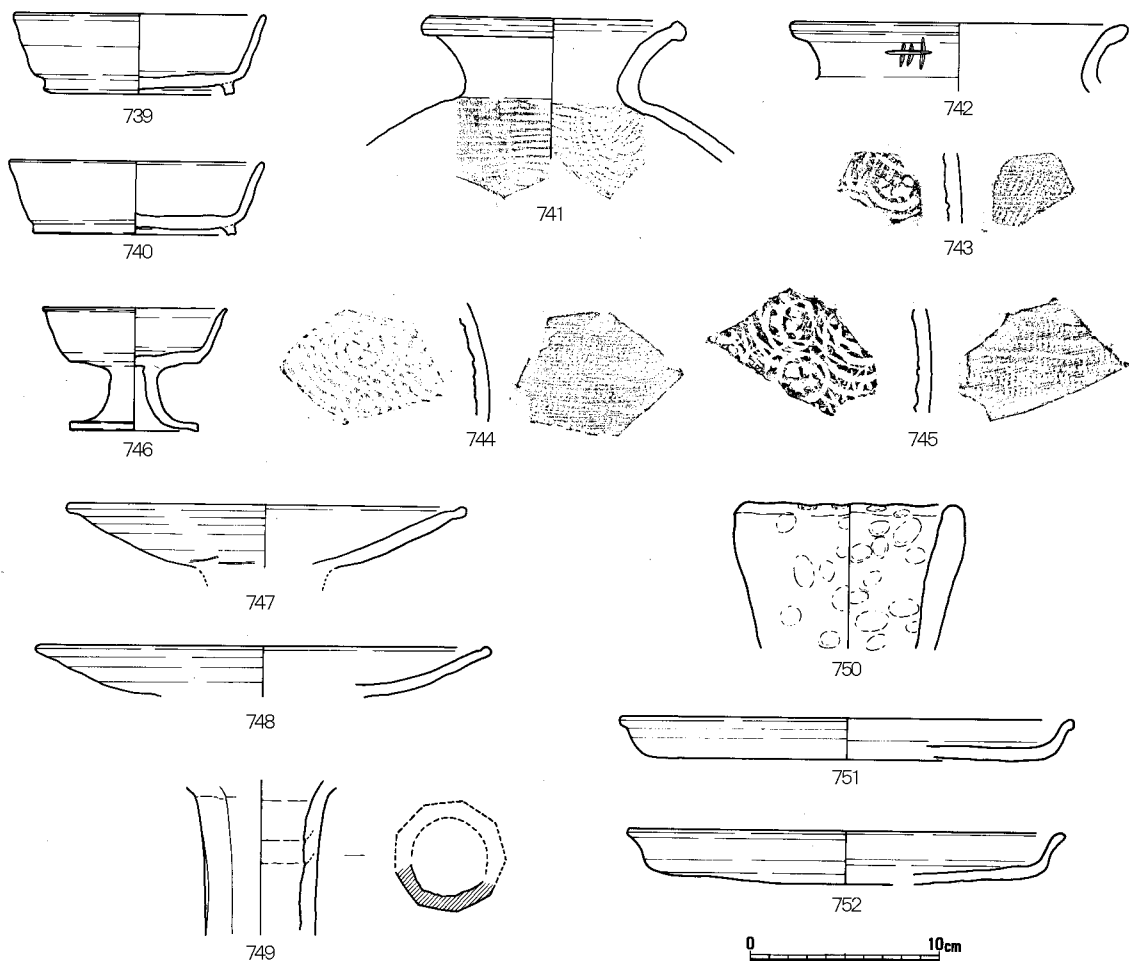
741は横瓶、742は頸部にヘラ記号が描かれる壺である。743～746は、甕の体部内面に車輪タタキが施されている。743は星形、744・745は「十」字形を示す。746は小型の高杯である。

747～749は高杯で、749は面取りが施された脚部である。外面には赤色顔料が塗布される。747・748の口縁端部はやや肥厚し、カエリ状となる形態の特徴が観察される。748の杯部内面には赤色顔料がわずかに残る。

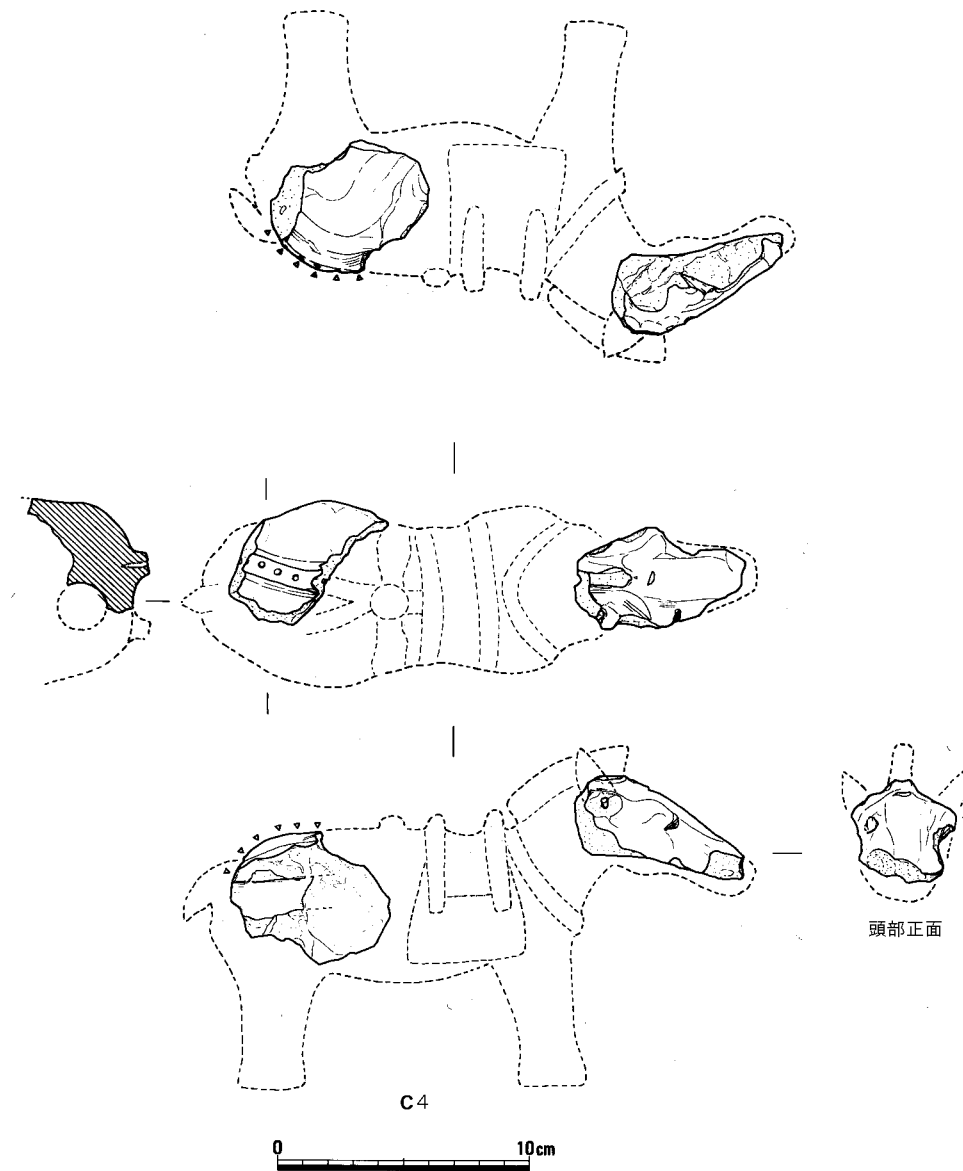
750は鉢形を示す器表がぶ厚い土師器である。坩堝のような用途が考えられるが、溶融物などの付着は認められない。

751・752は、皿ともいふべき浅い杯である。いずれも口唇部は丸みを持って外反する。751の外面には赤色顔料が残る。

第147図に掲載した土器の大半は古代Ⅱ期に比定されるが、小片には丹塗り土師器杯の破片も認められ、官衙的な供膳器種が揃う。おおむね8世紀代の前半から中葉前後に時期的な幅は限定される。



第147図 1区掘立柱建物周辺出土遺物1（1/4）

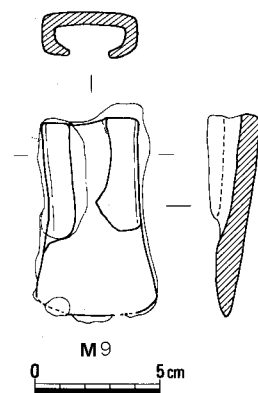


第148図 1区掘立柱建物周辺出土遺物2 (1/4)

第148図C4は土馬である。土師質の破片2点頭部と臀部が確認されている。眼窩の形成や耳や鬣の剥落部分が観察される。頭部での馬具の装着は不明瞭であるが、臀（尻）部には尻繫が貼り付けられている。尻繫には留め金具を連続刺突円孔で表現している。復元推定高約13cm、体長約23cm、幅約7cmを測る。

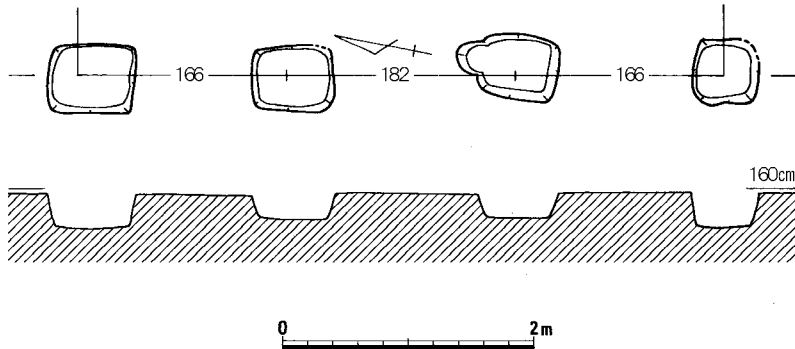
この土馬は、掘立柱建物群付近から溝25にかけての包含層中から出土したが、祭祀に伴って破碎、使用された可能性がきわめて高い。したがって、この場所で律令的祭祀が行われたことを示す有力な資料と考えられる。

M9は鉄斧である。表面は硬い錆に覆われていたため、X線撮影によって細部の観察・実測が可能となった。袋部は長方形を呈する。刃部は緩やかな弧を描き、使用感がある。 (岡田)



掘立柱建物 6 (第136・149図、図版57・61)

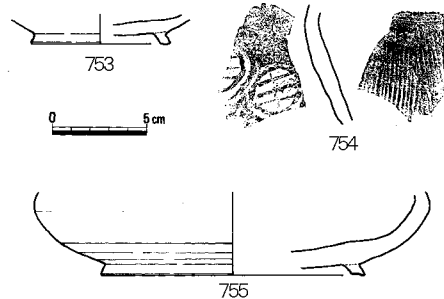
2区の北東端に4本の直列する柱穴を検出した。調査区内でそれに対応する柱穴を探したが、検出できなかったことから、東側に展開する掘立柱建物と理解している。柱穴の平面形は方形を呈するもので、長辺70cm、短辺50cmを測る。検出面からの深さは、約25cmを測る。柱の配置は、中央が広く両側が少し狭い。柱列の方向は、N - 11° - Wを測る。掘立柱建物の時期は、出土遺物がないため明確ではないが古代Ⅱ期に属するものと理解している。(井上)



第149図 掘立柱建物 6 (1/60)

掘立柱建物 7 (第136・150・151図、図版57～59)

2区の中央部西よりに検出した東西2間、南北5間の側柱建物である。ほとんどの柱穴に柱痕跡を検出した。その柱痕跡の心心間の距離で建物の規模を測ると、長辺西側が9.4m、同東側が9.1m、短辺北側が4.84m、同南側が4.69mを測る。柱穴の平面形は、基本的には方形を呈するものである。柱穴には、柱痕跡を検出したが、5個の柱穴からは柱根の木質が遺存するものもみられた。それらは、すべてヒノキと同定された。柱の直径は20～25cmを測る。柱穴は80cm角程度の大きさを基本とするもので、大きいものでは長辺が1.07mを測るものもある。検出面からの深さは、43cmから75cmを測る。長軸の方向はN - 30° - Wを測り、真北に非常に近い数値を示している。出土遺物として図示できるものは少なく、753は須恵器の杯である。貼り付けられた高台は少し外に開く。754は甕の胴部である。外面は平行タタキが、内面にもタタキが見られる。755は壺の底部である。内面はナデ、外面は胴部下端にヘラケズリ、その他はヨコナデが施され、高台は貼り付けられている。建物の時期は古代Ⅱ期に属するものと考えられる。(井上)

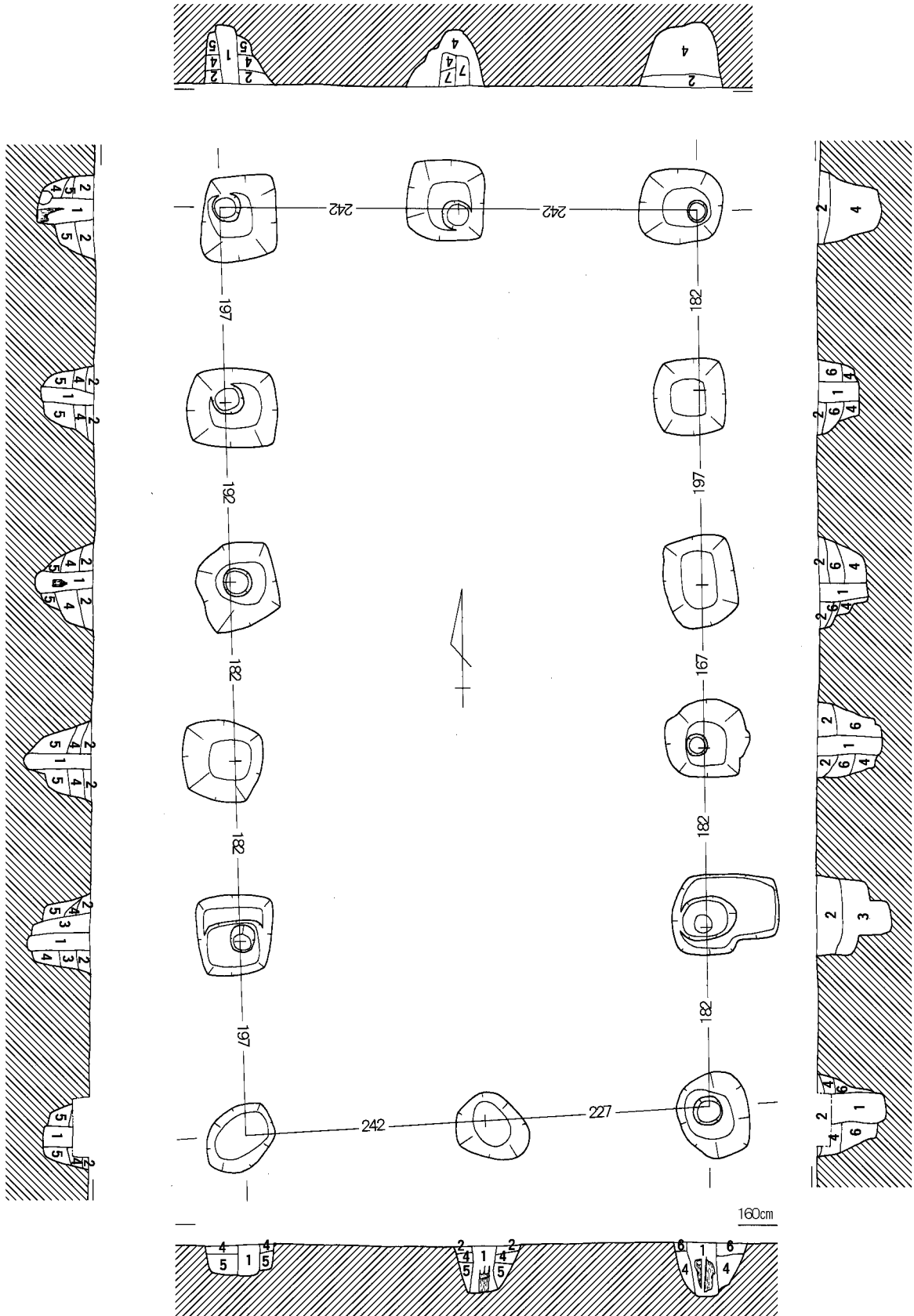


第150図 掘立柱建物 7 出土遺物 (1/4)

掘立柱建物 8 (第136・152図、図版57・59)

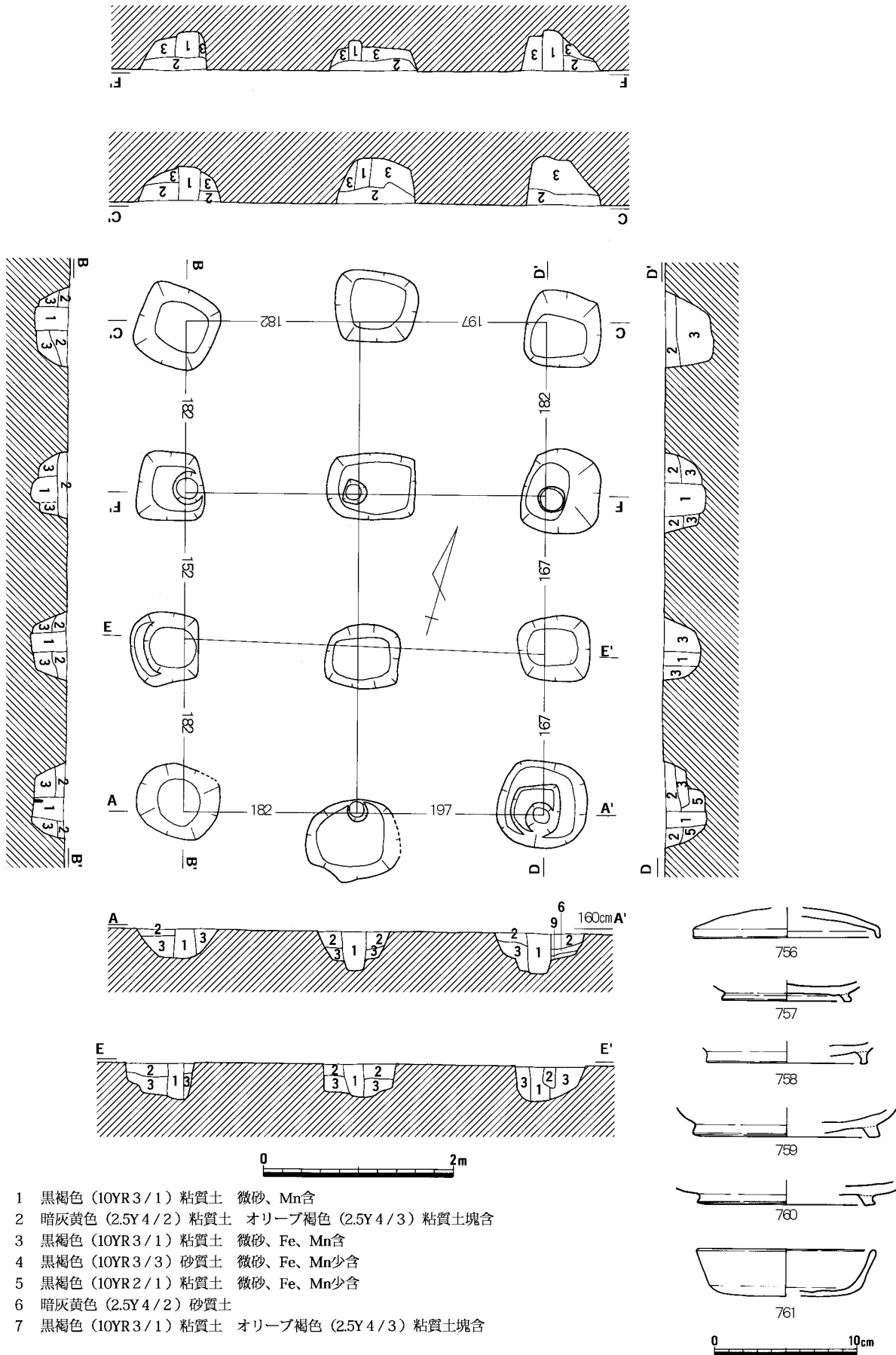
掘立柱建物 7 の南約 3 m の位置に検出した。東西 2 間、南北 3 間の総柱建物である。柱穴の平面形は方形を基本とするもので、辺長は 65cm から 80cm を測る。建物の規模は、長辺 5.16m、短辺 3.79m を測る。ほとんどの柱穴に柱痕跡を検出した。一部に木質の残存するものがみられ、スギと同定された。柱の直径は 25cm 程度と考えられる。長軸の方向は、N - 16° - W を測る。

出土遺物をみると、756 は須恵器の蓋である。端部が垂直に折り曲げられ、天井部は丸くやや高い。757～760 は、杯の底部で、高台は貼り付けられている。761 は土師器の杯で、内外面ヨコナデがみられる。建物の時期は、古代Ⅱ期に属するものと考えられる。(井上)

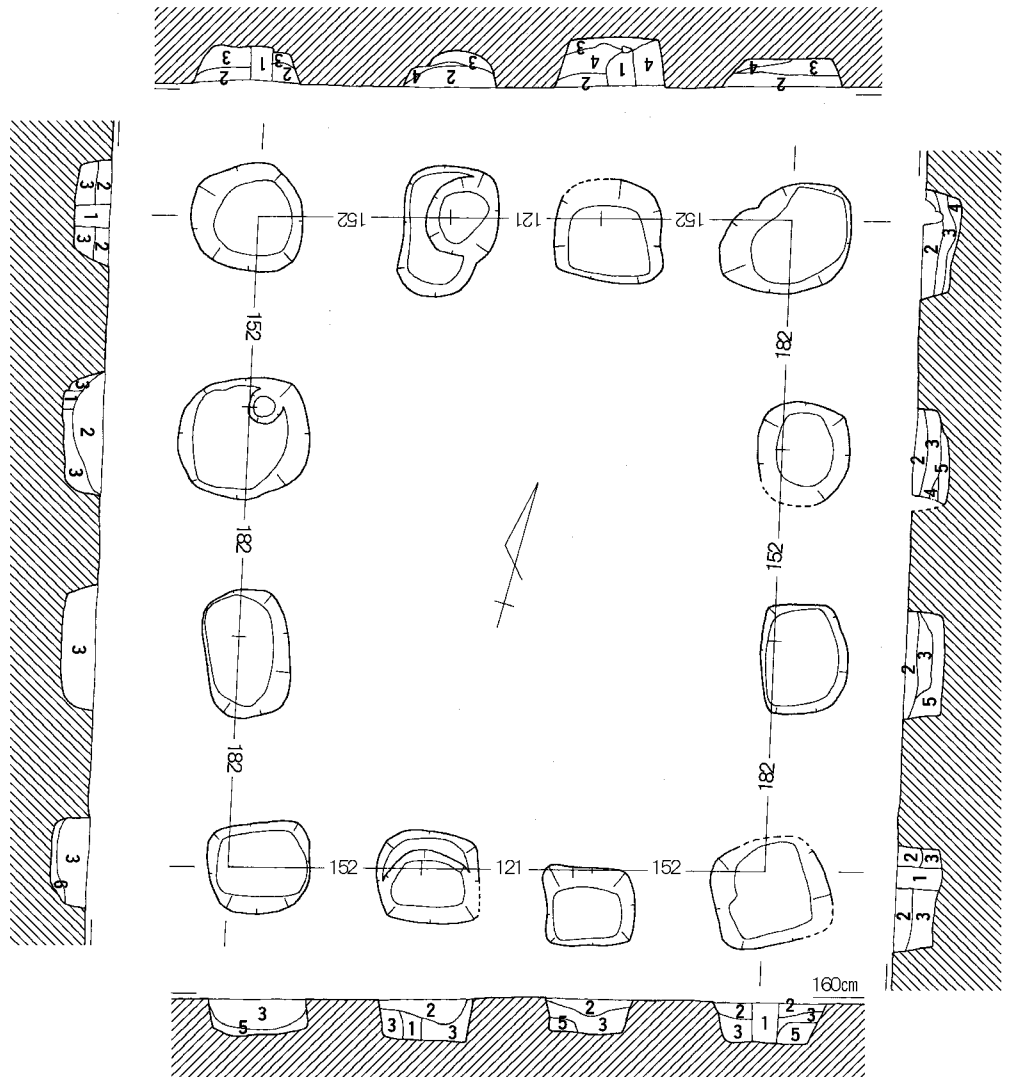


- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 (7.5YR 3/1) 粘質土 | 5 黒色 (10YR 2/1) 粘質土 粘質強、炭含 |
| 2 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土 | 6 黒褐色 (10YR 2/2) 粘質土 |
| 3 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土 | 7 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 |
| 4 黒色 (10YR 2/1) 粘質土 微砂、炭含 | にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土塊含 |

第151図 掘立柱建物 7 (1/60)



第152図 掘立柱建物8・出土遺物 (1/60・1/4)



- 1 黒褐色 (10YR 3/1) 粘質土
- 2 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘質土 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土塊含
- 3 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土
- 4 黒褐色 (2.5Y 3/2) 粘質土 暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘質土塊含
- 5 黒色 (10YR 2/2) 粘質土



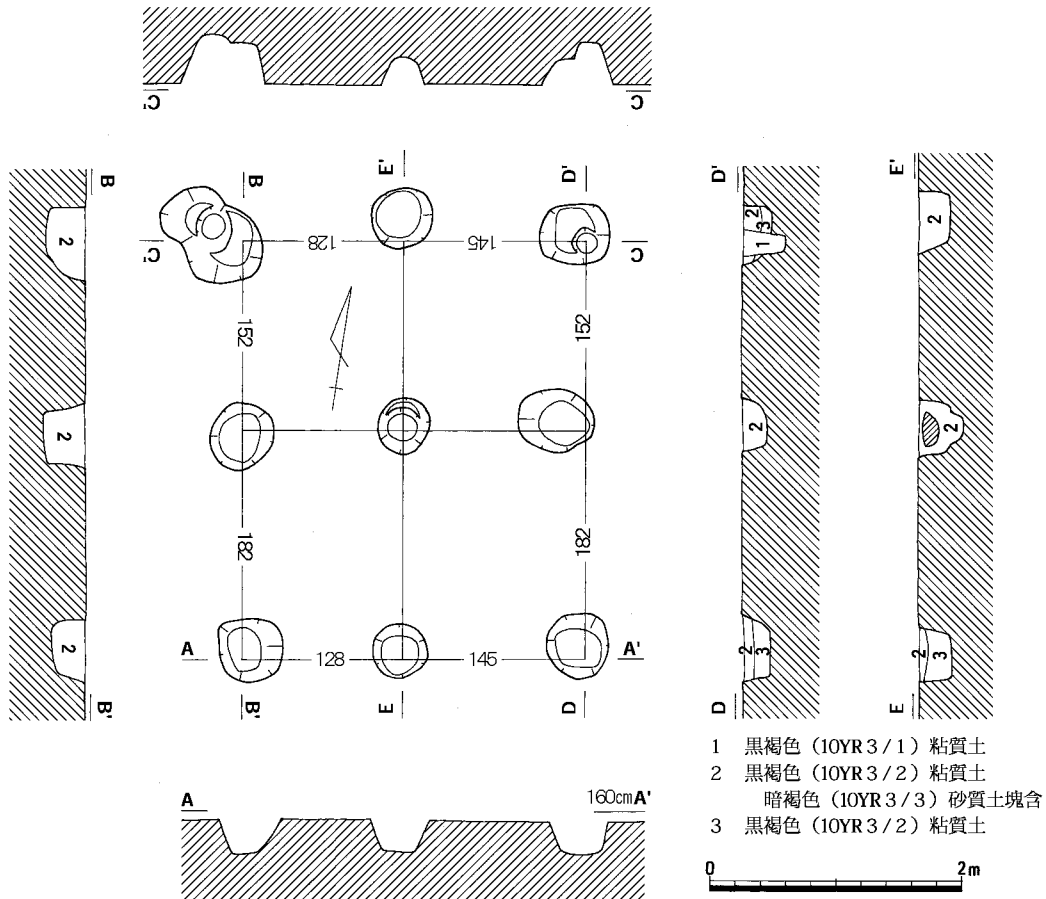
第153図 掘立柱建物9 (1/60)

掘立柱建物9 (第136・153図、図版57・59)

掘立柱建物8の南約4mの位置で検出した。東西3間、南北3間の側柱建物である。柱穴の平面形は方形を基本とするものであるが、辺が膨らみ円形に近いものもある。小さい柱穴で長辺70cm、短辺62cmを測る。大きい柱穴では長径1.05mを測る。検出面からの深さは、23~35cmを測る。柱痕跡から、柱の直径は20cm程度と観察される。柱穴の配置をみると、その間隔が狭いという特徴がみられる。柱間隔も1.82mを越えるものはないと考えられる。長軸の方向は、N - 13° 30' - Wを測り、掘立柱建物8とほぼ同じ方向を示しており、同一企画の基に建築された可能性が高いと考えられる。建物の時期は古代Ⅱ期に属するものと考えられる。 (井上)

掘立柱建物10 (第138・154図、図版57・60)

掘立柱建物8の東約4mの位置で検出した。東西2間、南北2間の総柱建物である。柱穴の平面形は、円形を基本とするもので、長径42~60cmを測る。検出面からの深さは、20~35cmを測る。柱痕跡を検出した断面の観察から、使用された柱の直径は15~17cmと推定される。柱間の距離は、東西方向



第154図 掘立柱建物10 (1/60)

は東側が広く1.45m、西側が1.28mを測る。南北方向は、北側が狭く1.52m、南側が1.82mを測る。以上のように、建物の規模は小さく、柱間も1.82mを超えるものはない。中央にある柱穴が、周りにある柱穴に比べて少し小さい傾向がみられる。長軸の方向は、N - 8° 50' - Wを測る。

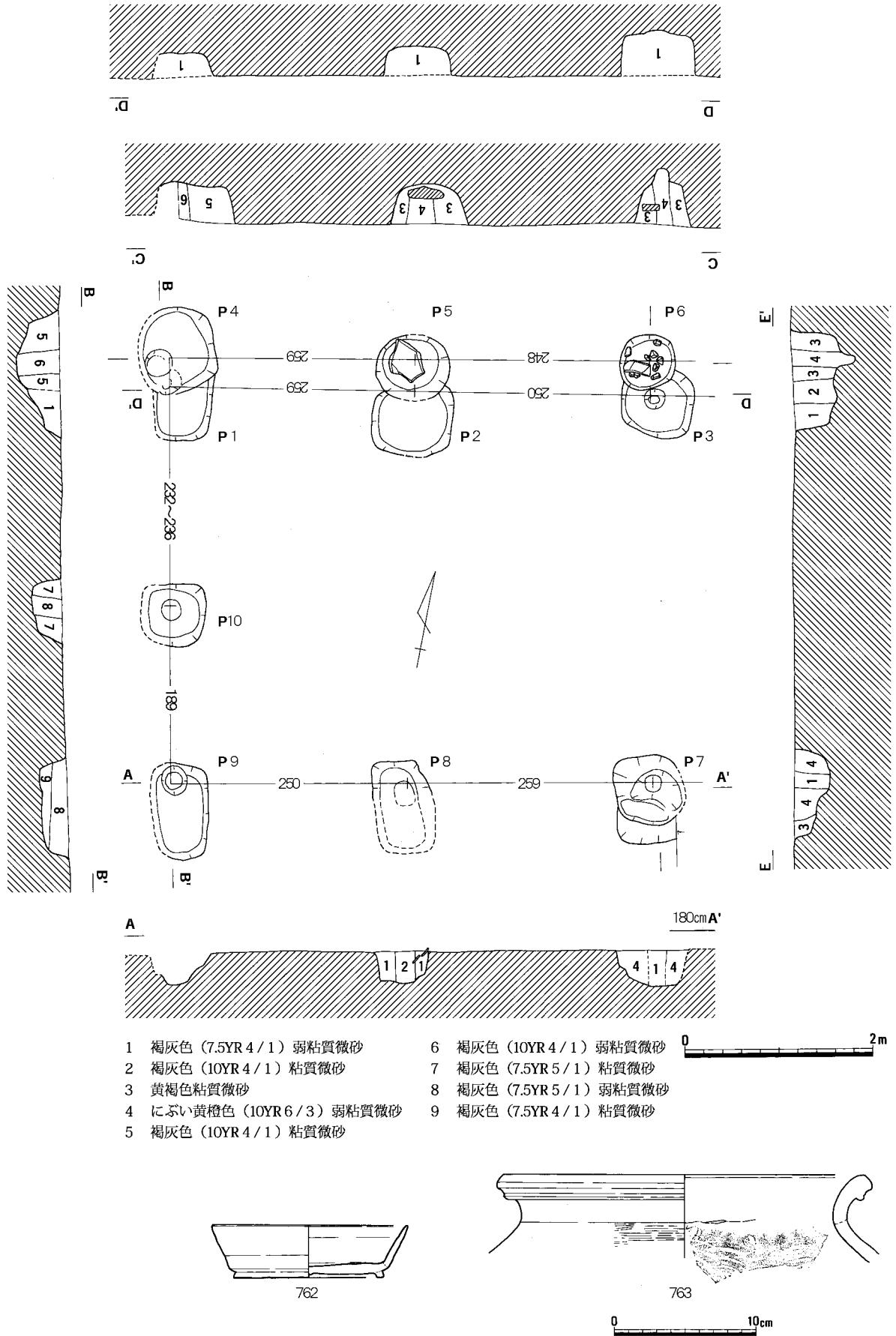
建物の時期は、伴出した遺物がないため明確にはわからないが、検出の状況や、周辺の遺構との関係から、9世紀後半以降のものであり、古代IV期に属するものと推定している。(井上)

掘立柱建物11 (第137・155図、図版57・60)

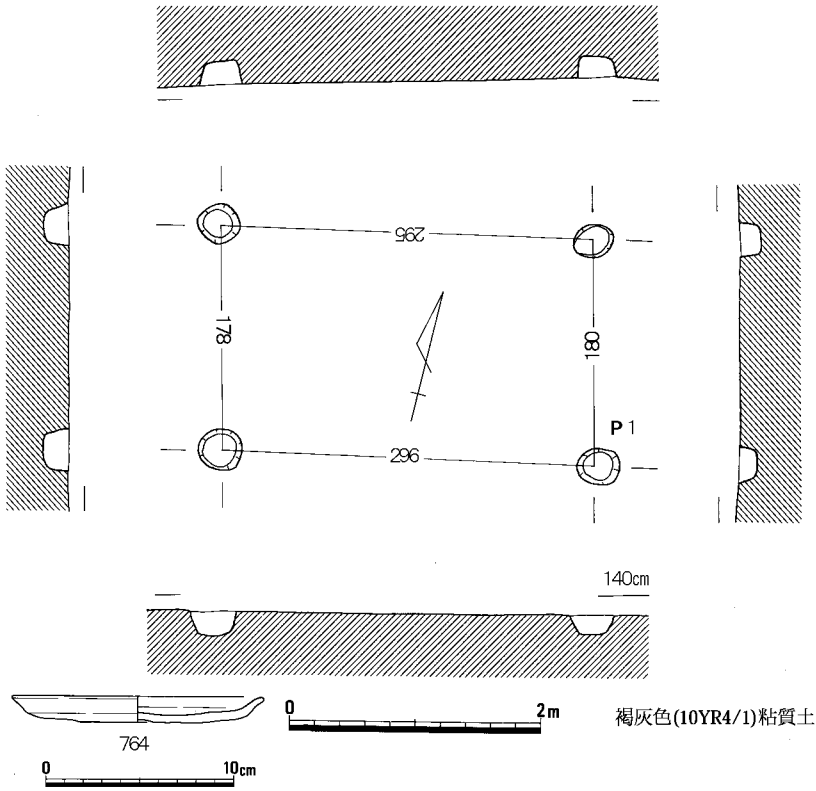
3区北東にあり調査区外へ延びる桁行2間、梁間2間以上の側柱建物である。西側へは広がらないが、東側は調査区外へ延びると思われる。北側の桁行には建て替えがあり、切り合い関係を検討した結果、P1～P3が古く外側のP4～P6が新しいことがわかった。P4～P8・P10では、直径20cm程度の柱痕が確認できた。P5には長さ45cm、厚さ13cmの板石による礎板が残されていた。P6の礎は柱の脇を固めていたのだろう。柱穴出土遺物は小片が多い。762は柱穴からではなく、P8とP9間南80cmの位置で検出した。建物と関連する可能性が高い。また763はP10出土である。遺物から、建物の時期は8世紀であろう。(氏平)

掘立柱建物12 (第139・156図、図版57・60)

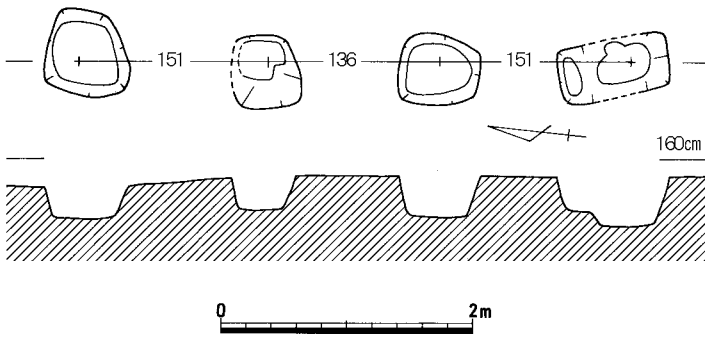
3区中央西にある桁行1間、梁間1間の建物である。たわみ4掘削中に検出し、たわみ4と関連する可能性が高い。P1から完形品の土師器皿764が出土し、時期は9世紀前半であろう。(氏平)



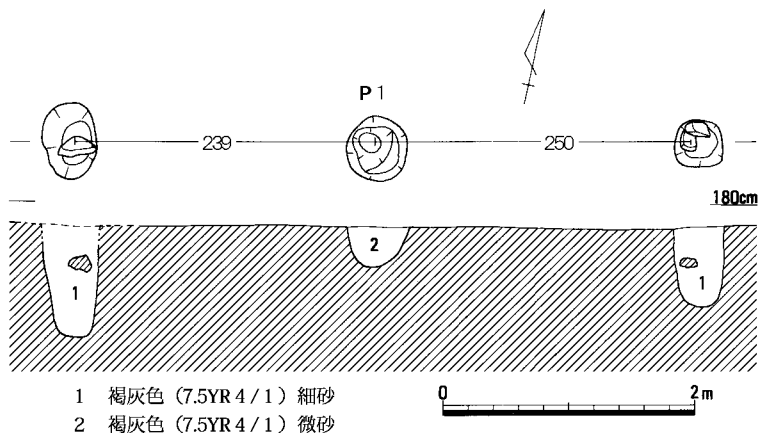
第155図 掘立柱建物11・出土遺物 (1/60・1/4)



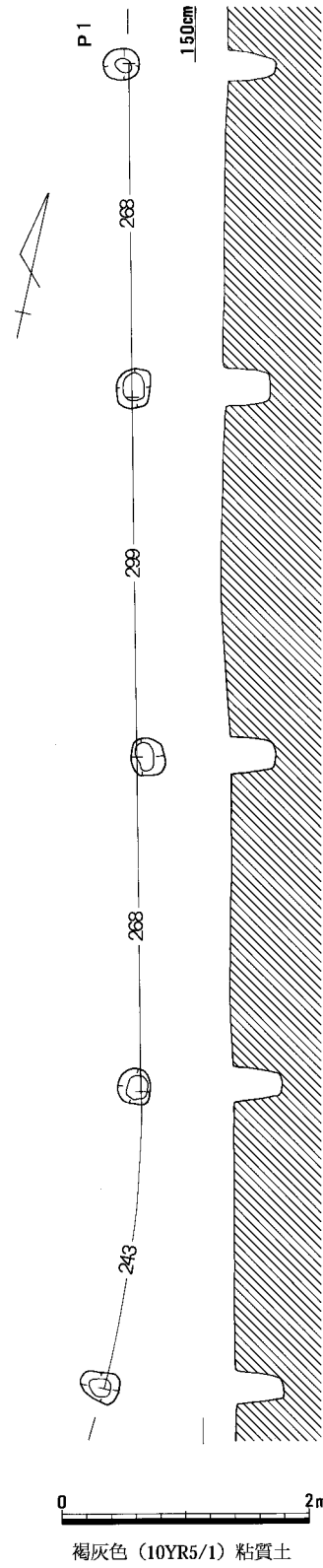
第156図 掘立柱建物12・出土遺物 (1/60・1/4)



第157図 柱列1 (1/60)



第159図 柱列3 (1/60)



第158図 柱列2 (1/60)

3 柱列

柱列1 (第136・157図)

掘立柱建物7の北約5mの位置に検出した。4本の柱穴が、南北に直列するものである。対応する柱穴を探したが、発見できなかったため柱列とした。柱の心心間の距離は、北から1.51m・1.36m・1.51mを測る。柱列の時期は、古代Ⅱ期と推定している。(井上)

柱列2 (第139・158図)

3区中央西にある南北方向の柱列。たわみ4と関連する可能性が高い。柱穴底面の標高は85~89cmを測る。遺物は小片であるがP1で土師器杯がある。時期は9世紀前半であろう。(氏平)

柱列3 (第139・159図)

3区南西にある2間の柱列。柱穴底面の標高にばらつきがあり83cm~1.34mを測る。遺物は小片であるが土師器・須恵器片がみられ、P1に黒色土器がある。時期は10世紀前半か。(氏平)

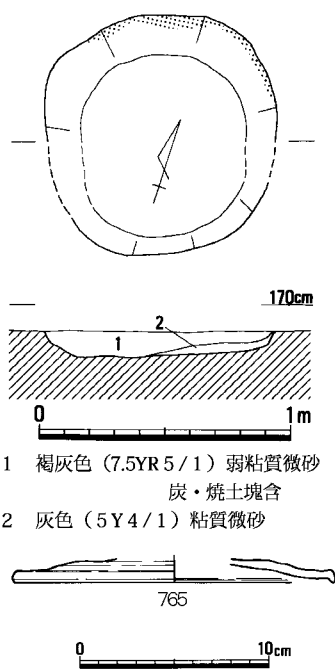
4 土壇

土壇12 (第137・160図)

3区中央東側に位置する。現代水田層直下で検出した。平面は円形で、検出面で南北95cm、東西93cmである。断面は皿状を呈し深さは10cm、底面の標高は1.5mを測る。土層は2層に分かれるが、第2層の方が炭・焼土を多く含む。壁~床面で2~3cm大の炭化材がみられた。壁面の北側と南側の一部に焼土が確認でき、いわゆる焼土土壇と考えた。時期は8世紀後半であろう。(氏平)

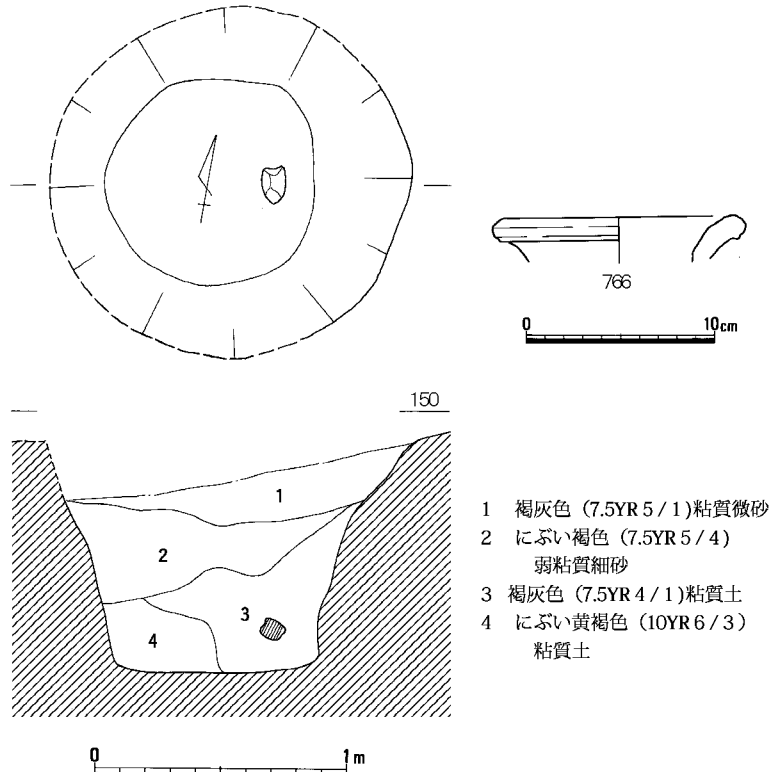
土壇13 (第137・161図)

3区の南端に位置する。復元すると直径1.4m程度の円形になる。断面は皿状を呈し深さは92cm、



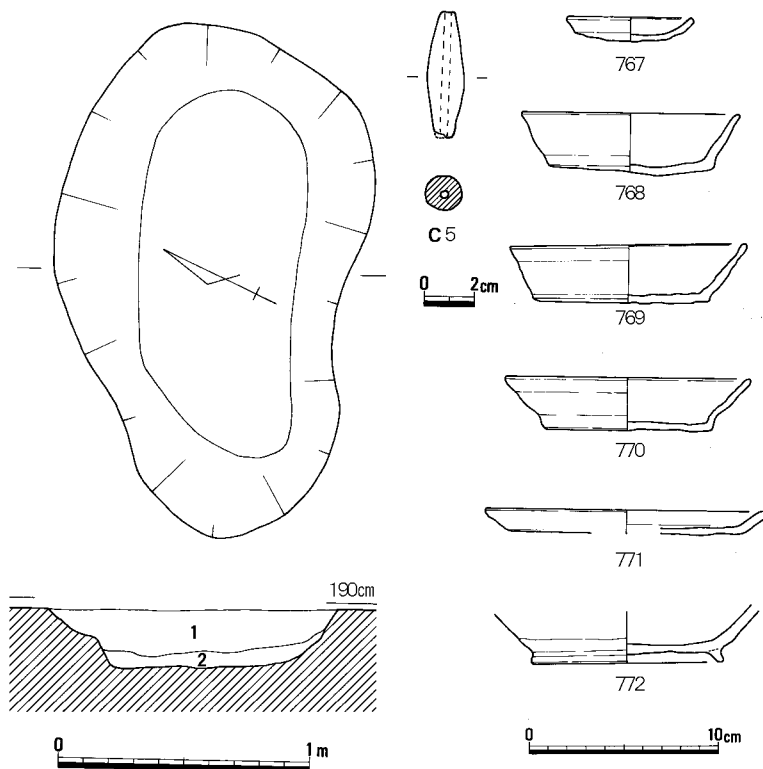
- 1 褐灰色 (7.5YR 5/1) 弱粘質微砂
炭・焼土塊含
- 2 灰色 (5Y 4/1) 粘質微砂

第160図 土壇12・出土遺物
(1/30・1/4)



- 1 褐灰色 (7.5YR 5/1) 粘質微砂
- 2 にぶい褐色 (7.5YR 5/4)
弱粘質細砂
- 3 褐灰色 (7.5YR 4/1) 粘質土
- 4 にぶい黄褐色 (10YR 6/3)
粘質土

第161図 土壇13・出土遺物 (1/30・1/4)



- 1 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂質土
- 2 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘質土

第162図 土壌14・出土遺物 (1/30・1/4)

底面の標高は45cmを測る。遺物は第2層までに含まれる。766は第1層出土の須恵器提瓶か壺の口縁部で、時期は6世紀前半だが混入だろう。遺構の時期は8世紀後半～9世紀であろうか。(氏平)

土壌14 (第138・162図)

2区の北辺に検出した。少し変形はしているが平面形は楕円形を呈している。土壌の規模は、長径2.04m、短径1.22mを測る。検出面からの深さは、22cmを測る。断面形をみると、浅く窪み、壁面は開きながら立ち上がり、底面は平坦である。

出土遺物を見ると、C5は土錘である。中央部が太く両端が細くなり、長軸方向に円孔が通る。767は土師器の小皿である。外底面はヘラオコシ後ナデがみられる。768～770は土師器の杯である。いずれも外底面はヘラオコシ後ナデがみられる。767には内面に一部に赤色顔料が残存している。772は土師器の杯で、高台が貼り付けられている。時期は古代Ⅲ期と考えられる。(井上)

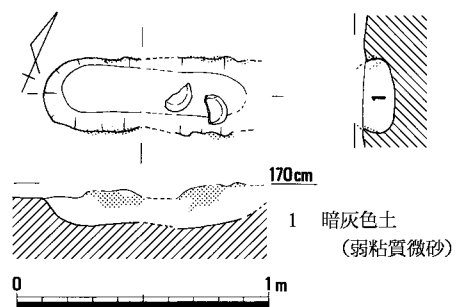
5 焼成土壌

焼成土壌1 (第135・141・163図)

1区の北東隅で検出された浅く細長い土壌である。ほぼ東西方向を示し、検出全長約80cm、幅約30cm、深さ約30cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈し、本来は筒形となっていた可能性がある。

周壁とその周囲は被熱による赤変が顕著でやや硬い。規模や形状から一回り大きい遺構、たとえば竪穴住居の一部とも考えられた。

773は土師器杯で、土壌中東寄りで半分に割れて出土している。加熱によるものか、器表面は剥落が目立つが外底部には糸切り痕跡がかすかに認められる。この土壌が筒型の形状を示すことから、土師器焼成のために掘りこまれた小規模な窯の可能性も考えられたが断定は避けない。時期的には古代Ⅲ期の可能性が高い。(岡田)



第163図 焼成土壌・出土遺物 (1/30・1/4)

6 溝

溝24 (第137・164図)

3区南端で溝25に切られる溝である。調査区内では約6m分検出したにすぎないが、溝25と同様に北から南へ流れているのであろう。断面は逆台形で、底面標高は1.11mを測る。土層は大きく2層に分かれるが、下層の方に土器・炭を多く含んでいる。埋土中には、量は少ないものの須恵器・土師器と獣骨が含まれていた。出土遺物は、蓋774と高杯脚端部775などがあり、それらからこの溝の埋没時期は7世紀後半～8世紀と推測できる。(氏平)

溝25 (第135～137・165～169図、図版57・63・64)

1区から3区にかけて断続的に検出された溝である。

1区では、中世河道によって切られた北部分を除く南側で南北方向に検出された。その距離約35mを測り、南半では西側肩が中世溝42によって失われている。

2区では掘立柱建物7の西側から検出が可能となり、およそ30mほど確認された。なお、掘立柱建物8はこの溝を切って建築されている。

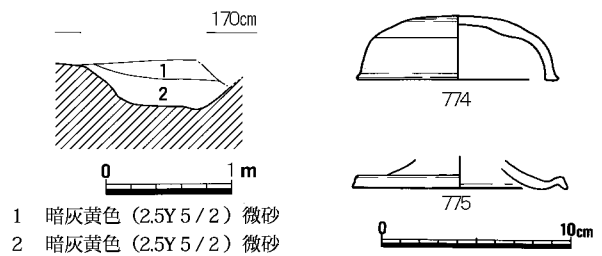
3区ではほぼ全面にわたってその存在が確認され、検出距離は約50mを測る。ただ北半部は、古代Ⅲ期のたわみ4に切れ、一部の検出にとどまる。

本章冒頭の第135～137図に掲げるように、1～3区にかけての溝25の形状は、必ずしも直線的な溝として掘開されておらず、2区から3区にかけては急激に流路を東に変えている。当時の地形が、この溝付近を境に、西側がやや低位となることから掘立柱建物を中心として形成された古代の遺構群の西限とみることも可能である。

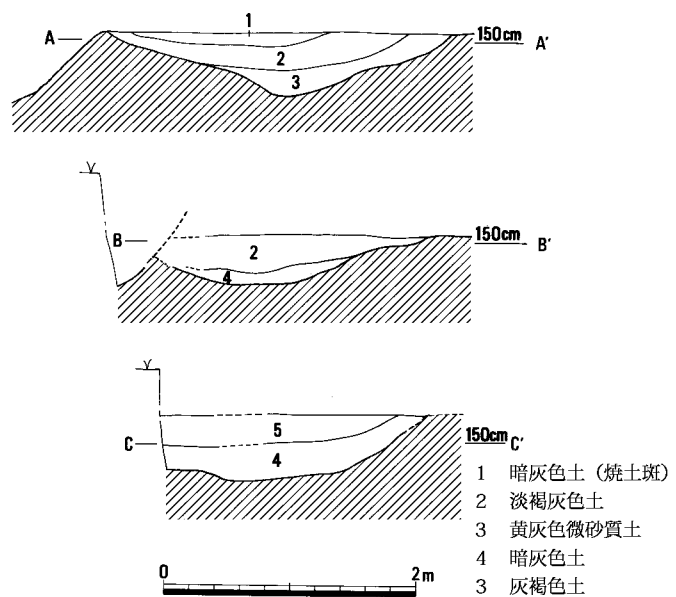
1区では第165図のように、最大幅約2.8m、深さ約20～30cmの規模で検出された。2ないし3層の埋積土は灰色あるいは灰褐色を基調とした砂質土で形成される。部分的に最上層には焼土がみられる。断面形は、不整な凸レンズ形を示し一定の形状は示さない。

2区では第166図のように残存度の良好な地点では、幅2.7m、深さ約50cmを測る。溝の断面の形状は、やはり凸レンズ形を示すが1区同様一定しない。

2区の出土遺物は土器以外に、大型の砥石S30や石製紡錘車S31、土錘C6、鉄製品の一部M10が



第164図 溝24断面図・出土遺物 (1/60・1/4)



第165図 1区溝25断面図 (1/30)

出土している。M10は扁平な断面形を示し、刀子の茎である可能性もある。

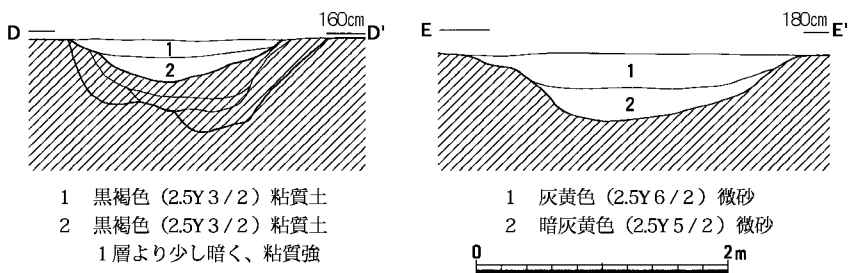
出土遺物のうち土器が大半を占めるが、1区では比較的まとまった土器群が得られた。第168図にそれらを掲げる。776~799は須恵器、800・801は土師器である。

776はほぼ完全に復元できた円面硯である。第135図の◎印に示す位置で、転倒した状態で出土した。高杯形を示し、脚部には長方形と十字形の透かしが飾られる。陸部は丸みを持って盛りあがるが、使用による平滑な磨滅は認められず、長期にわたる使用感が乏しい。胎土の肉眼観察によれば、閃緑岩起源の砂粒が認められ、他地域からの搬入品の可能性もある。今回の発掘調査で得られたもう1点の円面硯1059とともに文字に関わる数少ない遺物として特筆される。

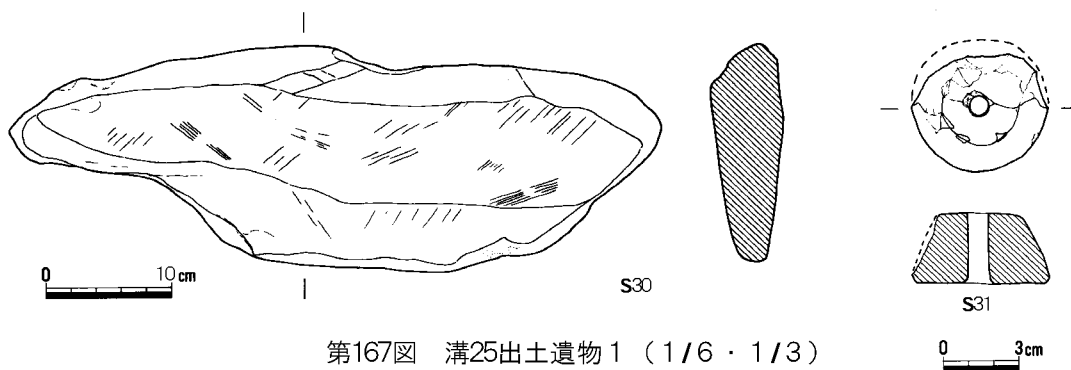
777は口縁部内面に身受けのカエリを持つ蓋である。天井部には宝珠ツマミが付けられる。7世紀中頃から第3四半期、古代I期に比定されるだろう。778・779はいずれも天井部に扁平なツマミを持つ。古代II期と考えて良いだろう。

780~783はいずれも蓋である。784は高台を持たない小型の杯である。785・786は椀ともいべき器種である。

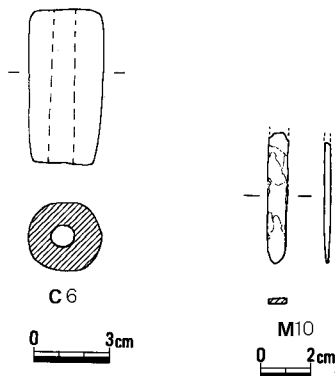
787~789はいずれも底部に貼付け高台を持つ杯であるが、788は蓋受け状の小さな立ち上がりがあり、



第166図 2・3区溝25断面図 (1/60)



第167図 溝25出土遺物1 (1/6・1/3)



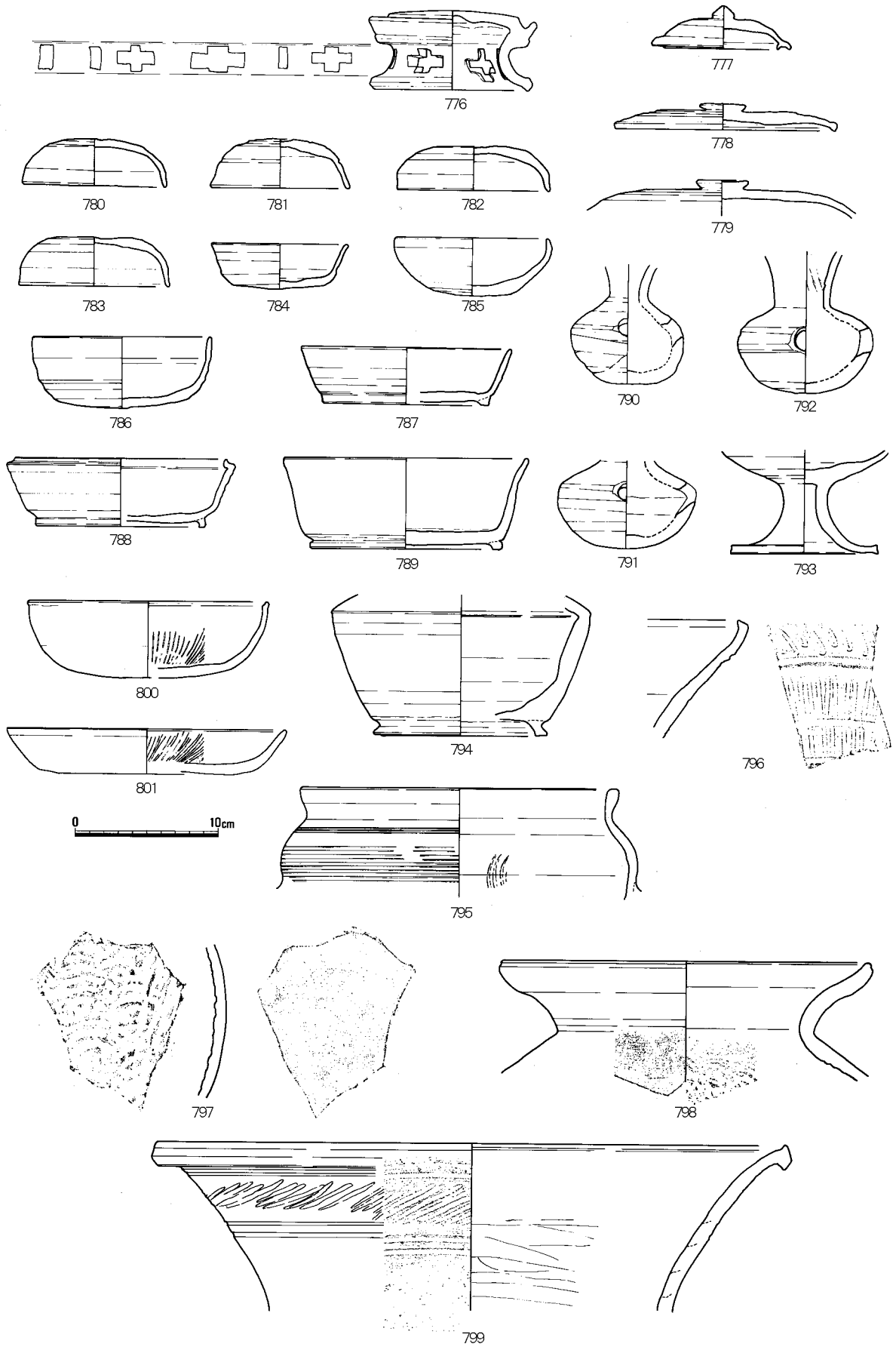
一種の壺ともいえる器種である。

790~792は甗である。いずれも頸部、口縁部を失う。

793は、比較的低脚の高杯である。794は口頸部を失った壺で、底部には外方する高台をもつ。体部の肩には弱い稜線が巡る。

795は瓦質に焼成された鉢形の須恵器である。体部には把手が剥脱した痕跡がある。体部には横位のカキ目調整痕跡が施される。

796~799は甗である。796・799はかなり大型の甗で口径がかな



第168図 溝25出土遺物2 (1区出土: 1/4)

り大きい。797の体部内面には車輪タタキが認められる。798は壺とも考えられる。

800・801は内面に放射状の暗文が施された杯と皿である。口唇部内側に弱い段がある。官衙的な供膳器種と考えられる。

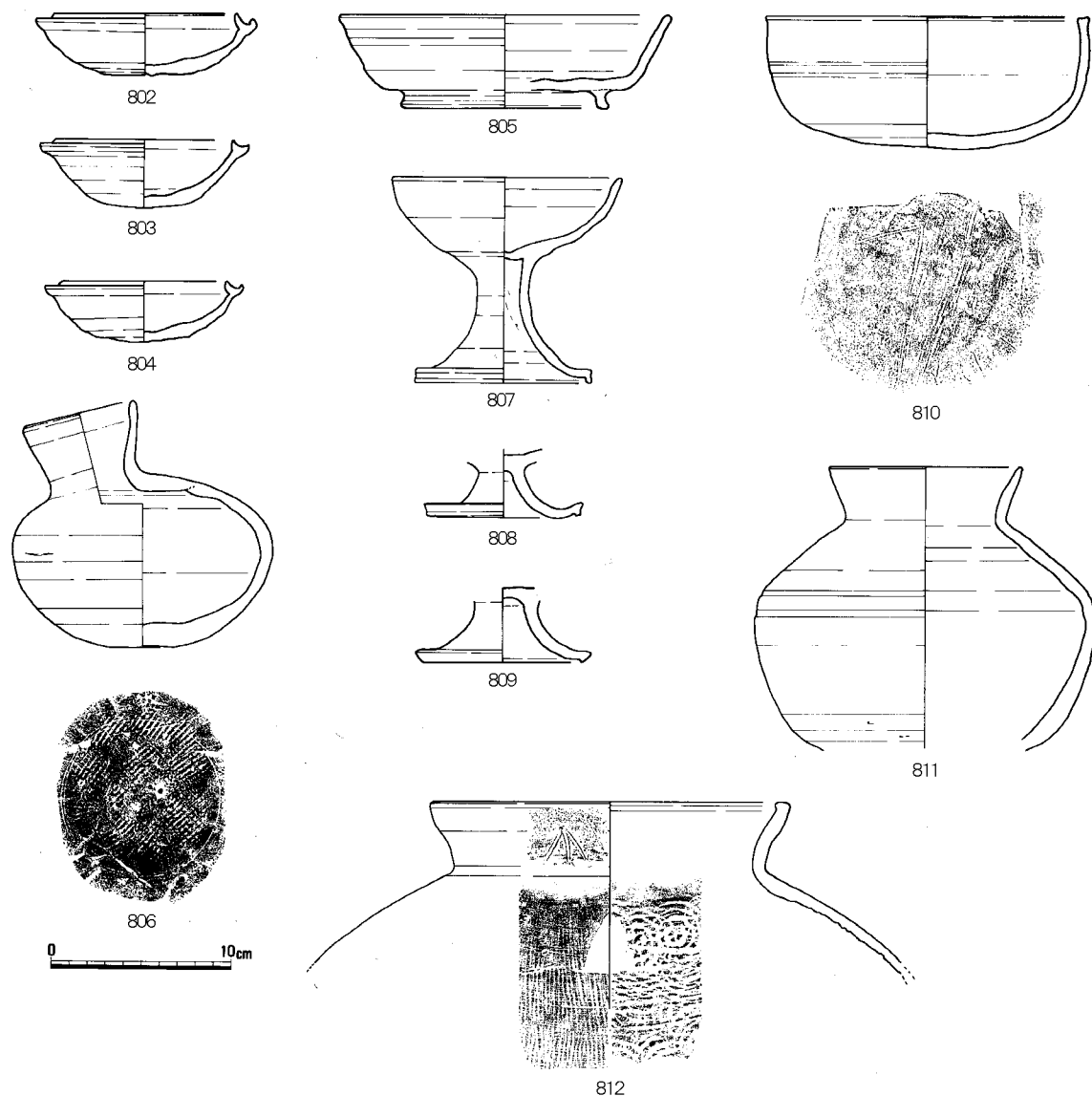
第169図には2・3区の溝25の出土土器を掲載する。2区では蓋受けの立ち上りを持つ杯802~804、低脚の高杯脚部808・809の須恵器が出土しているが、古代Ⅰ期あるいは多少古い7世紀前半の古い形式が含まれる。相対的に1区に比べると、たわみなどによって原状が失われ、出土遺物は少ない。

805は比較的高い高台を持つ杯である。古代Ⅱ期に比定される特徴が看取される。

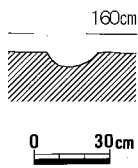
806は平瓶で、外底部には粗い布の圧痕が残る。807は、比較的高い脚柱をもつ高杯である。810は体部の深い大形の椀あるいは、鉢形の器種である。丁寧に製作された出土例が稀な器種で、口縁端部は平らで内側に傾斜する。

811は短頸壺である。体部下位は横位のヘラズリで仕上げられる。812は横瓶の可能性が高い。頸部に三つ又のヘラ記号が描かれる。

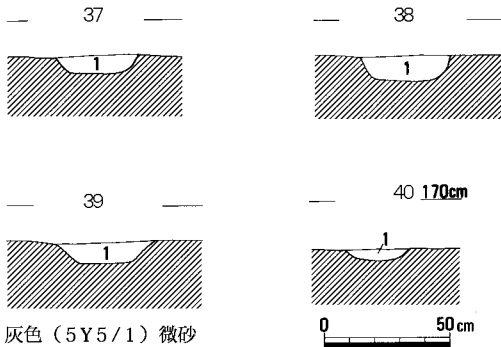
以上の遺物から溝25の存続・埋没時期は古代Ⅰ期からⅡ期に限定される可能性が高い。(岡田)



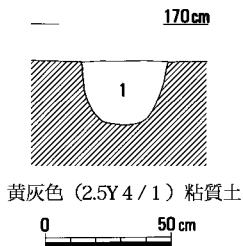
第169図 溝25出土遺物3 (2・3区出土: 1/4)



第170図 溝36断面図 (1/30)



第171図 溝37~40断面図 (1/30)



第172図 溝41断面図 (1/30)

溝26~35 (第138・173図)

2区の北辺に検出した。後述するたわみ3と関連するものと考えられる。埋まる土の色・質共にたわみ3と同じであり、遺物の時期差も感じられない。溝は、東西方向を向くものと、それに直行するものがある。溝の幅は、25~50cmを測る。断面形は逆台形を呈するものが多い。時期は、古代Ⅲ期に属すると考えられる。(井上)

溝36 (第138・170図)

掘立柱建物10の北約1mの位置に検出した。東西方向を向くもので、検出した全長は2.8mを測る。溝の幅は約20cm、検出面からの深さは約5cmを測る。溝は、掘立柱建物10の北側にほぼ並行して検出した。その位置関係から掘立柱建物10と関連する可能性は高いものと推定される。時期も同じく9世紀後半以降のものであり、古代Ⅳ期に属すると考えられる。(井上)

溝37~40 (第139・171図)

3区北東端に位置し、東西に流れる溝群である。溝37は調査区東端から約8mの長さを検出し、幅34cm、深さ2cm、底面の標高は1.50mを測る。溝38は調査区東端から約2.3mが残っていたが西側は不明である。幅32cm、深さ12cm、底面の標高は1.43mを測る。溝39は調査区東端から約5.3mの長さを検出したが西側は検出できず、幅38cm、深さ10cm、底面の標高は1.46mであった。溝40は東端から約2mの長さを検出し、幅26cm、深さ3cm、底面の標高は1.47mを測る。

の標高は1.47mを測る。

それぞれの溝で、断面形は逆台形から皿状であるが、底面の形は一定ではなく、数メートルごとに高さが微妙に上下して凸凹がある。埋土は各溝すべて同じで、色調は基盤層より若干白っぽい灰色、質感は基盤層に似る。遺物は溝39にはみられなかったが、溝37・38からは土師器・須恵器が、溝40では土師器が出土した。これらの溝の時期は断定しにくいだが、掘立柱建物11以降に掘削された可能性が高い。埋土は中世の遺構と比べると古代のものに近いと、9世紀以降とした。性格としては、耕作痕の可能性が最も高いが、たわみ4との関連も考えるとそうとも言い切れない。(氏平)

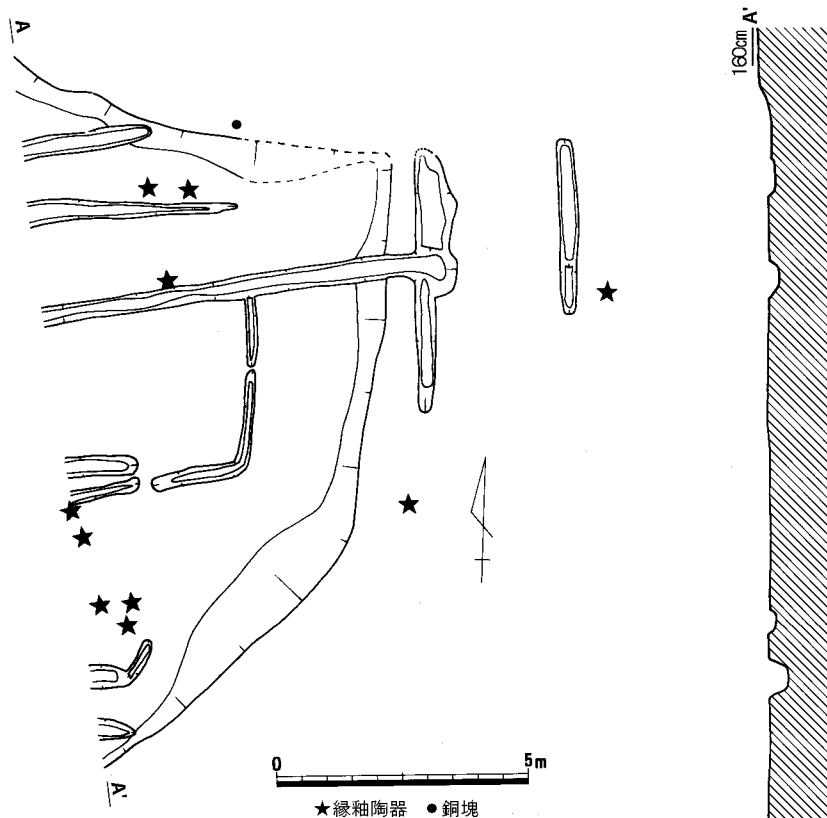
溝41 (第139・172図)

3区中央を東西に流れる溝である。東端は調査区端で、西端はたわみ4の中で消える。調査区東端から7.7mの長さを検出し、幅は東端で最大48cm、深さは東端で25cmである。底面の標高は東端が1.31m、西端が1.38mを測り、西から東へ低くなっている。断面形はU字形で、埋土はたわみ4に類似する。遺物には土師器の杯・甑や須恵器の蓋、緑釉陶器片がある。遺物の種類・質ともたわみ4と変わらないことや、埋土の類似から、この溝はたわみ4と同時に存在し、たわみ4から東の調査区外へ導水していたものであろう。(氏平)

7 たわみ

たわみ3 (第138・173~177図、図版57・62)

2区の北端に検出した。浅く窪むもので、検出した部分の平面形は、台形を呈している。規模は、最も広い部分で14.3m、東西方向の幅7.2mを測る。検出面からの深さは、20cmを測る。底面はほとんど平坦である。溝の項でも述べたが、たわみ3と重なるように溝を検出した。溝の深さは、深いもの

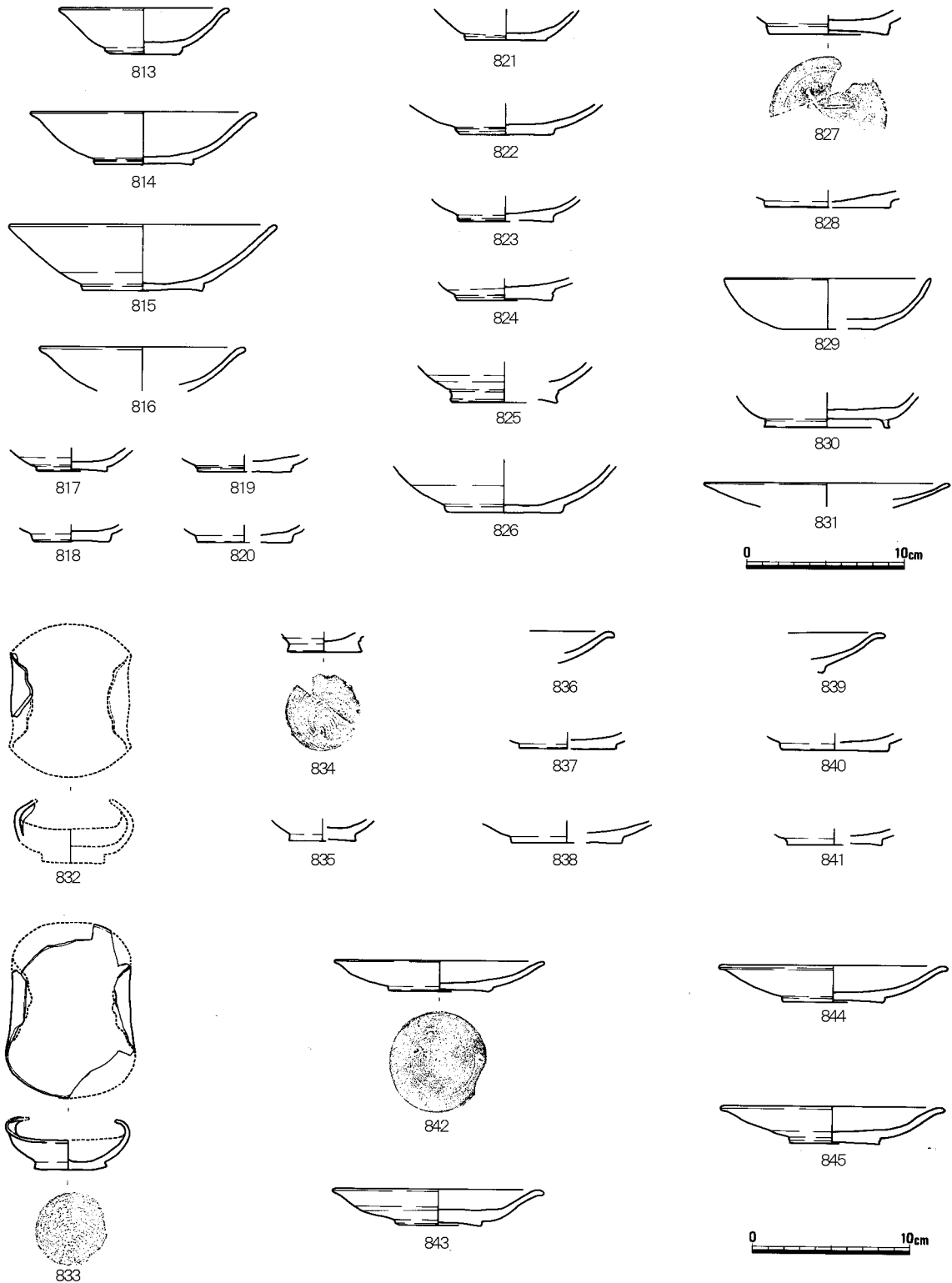


第173図 たわみ3 (1/200)

で約20cmを測る。その断面形を見ると、どの溝もほぼ逆台形を呈しており、底面は平坦である。また、直線的であるといった共通性がみられる。溝28~35は全くそのたわみの範囲に収まる。また、溝27と溝31は繋がっており先の溝群に含めることができる。溝26のみが少し離れているが、溝27に平行すること、埋土の色や質が同じであること、緑釉陶器の出土範囲に含まれることなどを考慮して同じ溝群を形成するものと考えている。そのことから、たわみとした窪地は溝26を含む範囲まで広がっていた可能性が高いものとする。そのことは、緑釉陶器の出土位置だけではなく、その他の土器類の出土範囲もおおよそこの範囲に重なることが指摘できる。このように、浅い窪地の底面に、平行する溝群と、それに直行する溝が存在する。そのことは、たわみ4とは、その性格を明らかに異にしている。この遺構については、その一部しか調査できていないこともあり、また、出土遺物についても特殊なものがあるが、その性格については不明である。しかし、鋳型・銅塊・羽口が出土していることは、それらとの関連性も考慮すべきと考える。

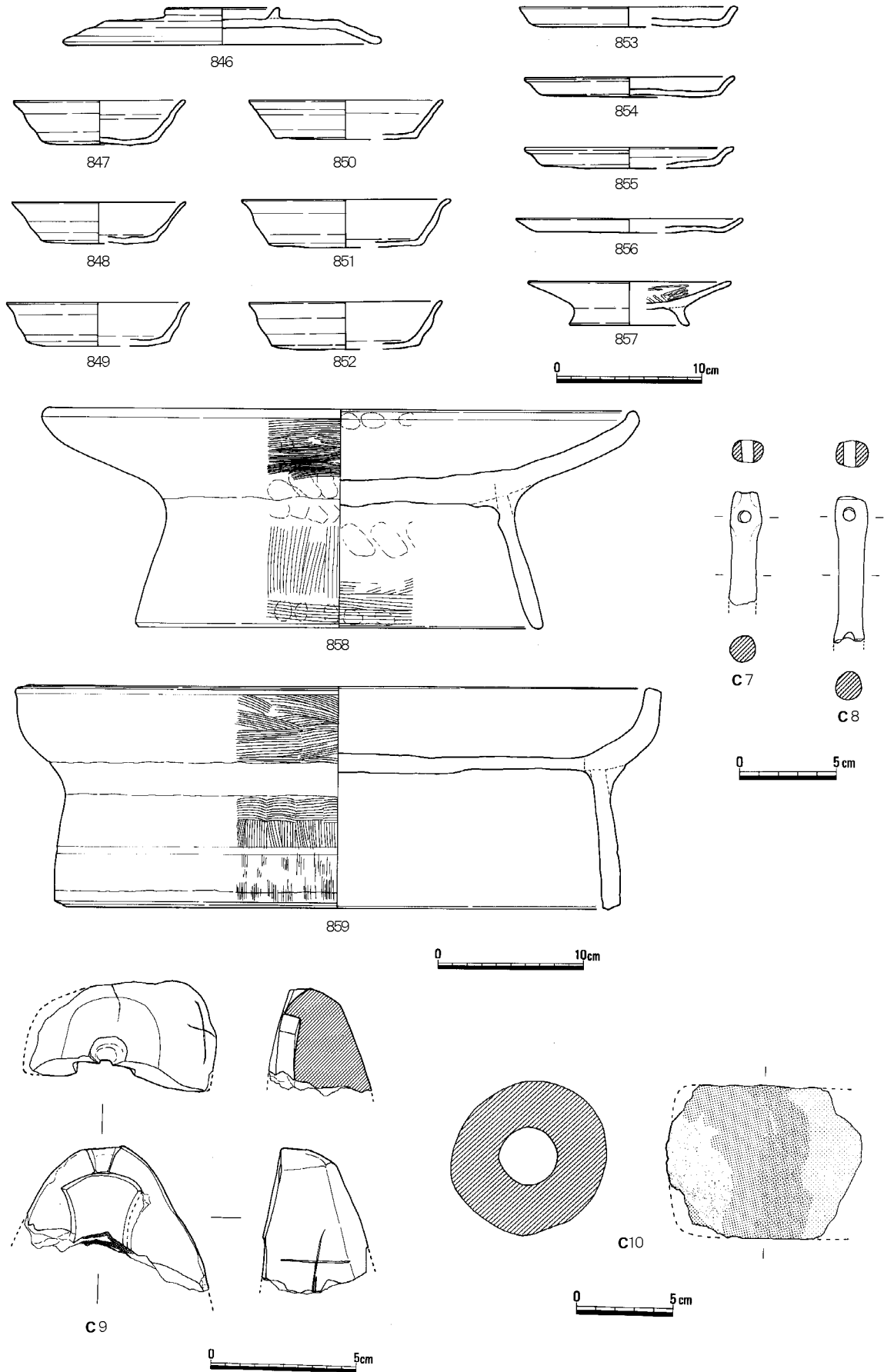
第174図 たわみ3断面図 (1/80)

出土遺物をみると、813～845は緑釉陶器である。813～830は椀である。その内828までは、いずれも外底部はヘラケズリで、円盤状に削り出した高台を持ち、全体に釉薬が施される。827は、外底面にヘラ記号「イ」が見られる。829は高台が付かない。830は、外底面にヘラケズリ後に高台が貼り付けられる。832～834は、耳皿である。外底部は、糸切りで、釉薬を施していない。831・835～845は、皿である。いずれも外底面はヘラケズリで、円盤状に削り出した高台を持ち、全面に釉薬が施される。829

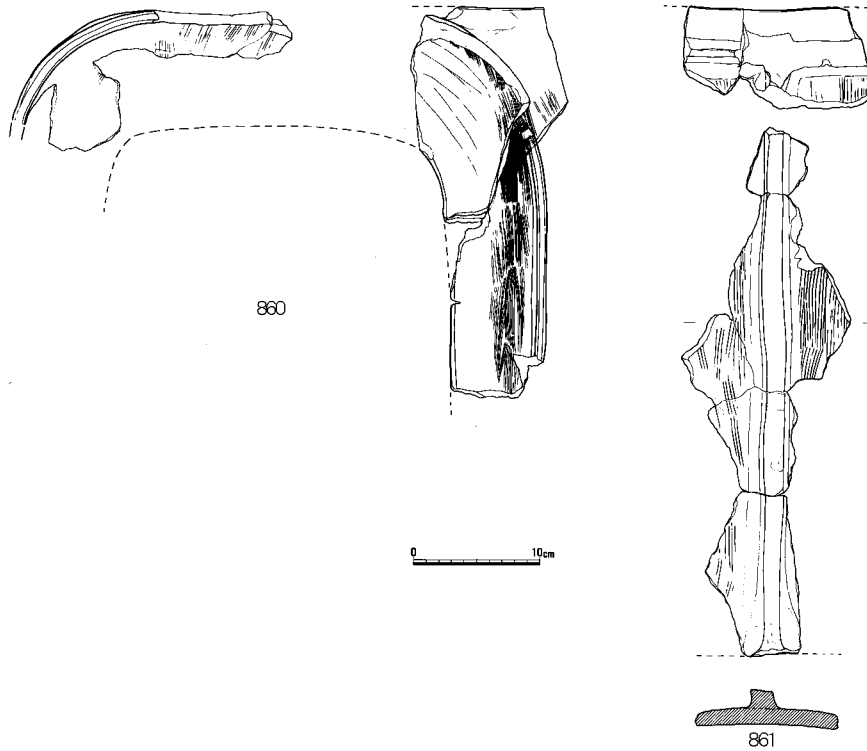


第175図 たわみ3出土遺物1（緑釉陶器：1/4）

第8章 中撫川遺跡



第176図 たわみ3出土遺物2 (土師器・鑄型他：1/2・1/3・1/4)



第177図 たわみ3出土遺物3（竈：1/6）

～831は猿投産で、その他は京都産と考えられる。時期は、9世紀前半と考えられる。

846は、土師器の蓋である。輪状のツマミが貼り付けられる。847～852は、土師器の杯である。全体にナデ、ヨコナデ調整が施され、赤色顔料が塗布される。

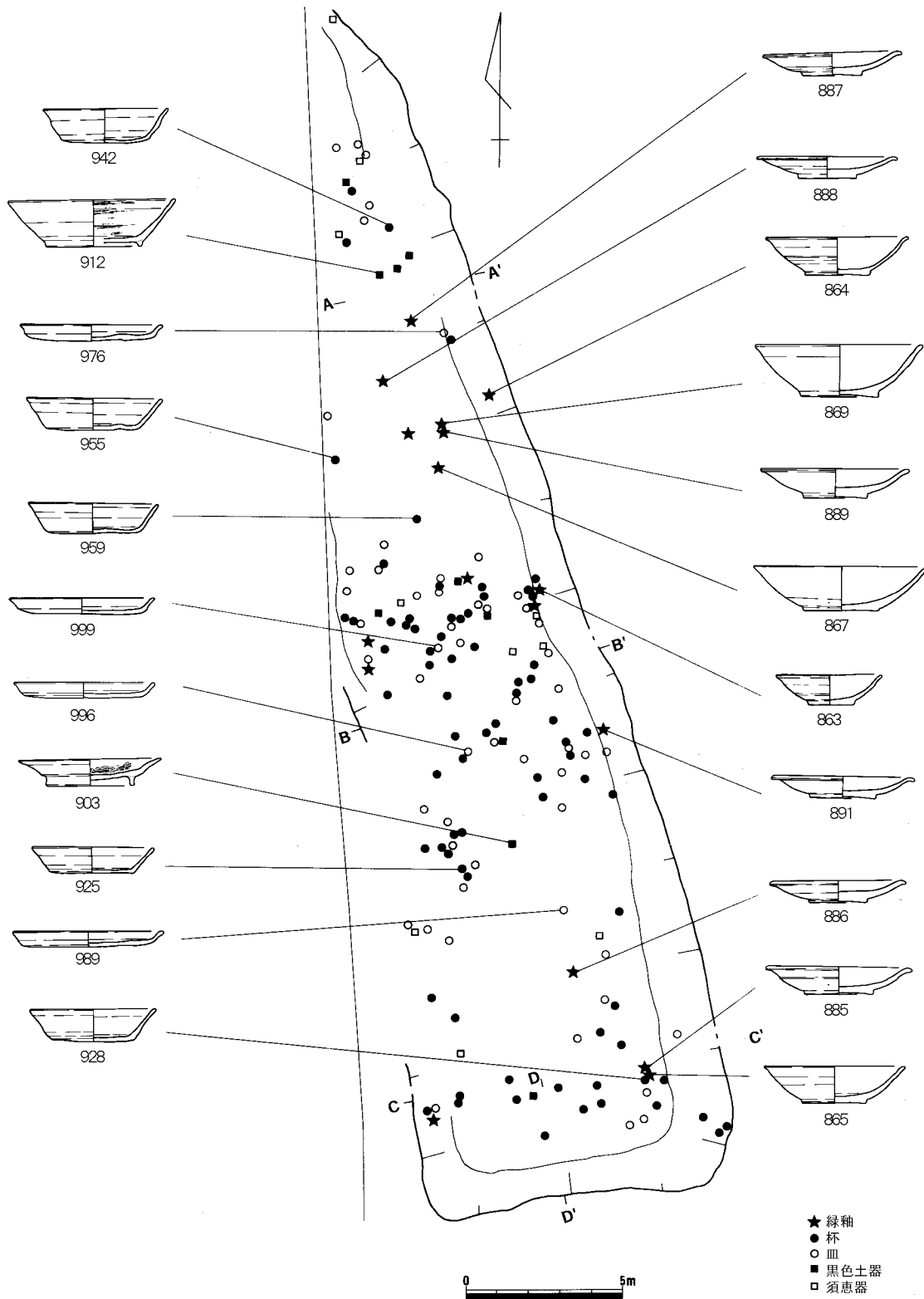
853～856は、土師器の皿である。856は、外底面にヘラ切りがみられる。その他は、全体にナデ、ヨコナデ調整が施され、赤色顔料が

塗布される。858は、台付の鉢である。口径約41cmを測る。外面はハケメ、内面はナデによる調整が施される。台は少し開き、内部下端にハケメ調整がみられる。859は、台付の鉢である。口径約45cmを測る。鉢部の外面は、ハケメ、内面はナデによる調整が施される。台はほぼ垂直に付けられ、外面ハケメ、内面はナデによる調整が施される。C7・C8は、棒状の両端に円孔が穿たれる土錘である。C9は、銅印の鈕の鋳型である。内面は黒色に変色しており鋳造に使用されたものである。C10は、羽口である。860・861は竈である。861は側面の破片で、凸帯が貼り付けられる。860・861は、製作技法に共通するものがみられ同一個体の可能性が高い。遺構は、古代Ⅲ期に属すると考えられる。（井上）
たわみ4（第138・139・178～185図、図版61～63）

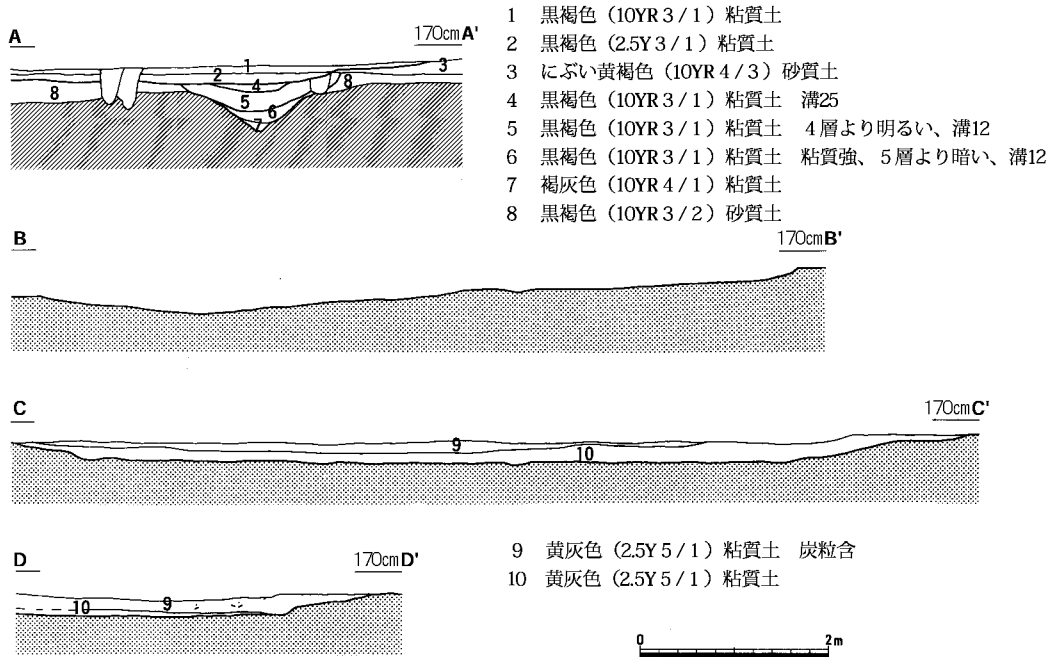
2区南西端から3区中央にかけて存在した。平面は南北約40m、東西約10mの長方形である。東西は北側の方が南側に比べ狭いようであるが、西端が調査区外になるため検証できなかった。底面の幅は中央で6.7m、南端で7.1mを測る。底面はほぼ平坦で、その標高は北側で1.30m、中央で1.27m、南側で1.30mである。検出面からの深さは25cmであった。断面形は皿状で、土層は2層に分かれる。色調は同じで、下層の方が上層より粘質が強くなる。上層に炭が含まれる地点もある。

遺物は全体図で示したように、折り重なって密集することなく散らばって出土した。詳細にみていくと、地点によって出土遺物に傾向があることがわかる。北端は土師器・黒色土器の集まりがみられ、その南に緑釉陶器の集まり（7個体）がある。中央は最も土器が密集している。南側には空白があるが、この部分は集石1の範囲である。南端は土師器杯を主にする土器の集まりである。緑釉陶器は東岸の北から10～20mの範囲と中央西岸、南端の東岸・西岸に分布する。黒色土器は北端で多くみられ、中央・南端にも若干存在する。また、土器以外に、図化していないが東岸のB-B'断面北1mと南2.5mの2か所に約1.5～2mの範囲で円礫の集中する地点が存在した。遺物は完形に近いものが多く、近接で接合したものもみられた。このことから、出土位置からあまり移動していないと考えられる。

土器を個別にみると、土器の表を上に向けたもの、裏を上に向けたものと垂直に近い状態のものが見られた。出土した方向がわかる個体について、裏表に分けて数を数えてみると、裏が67個、裏が69個であった。ほぼ半数ずつという結果である。このような数値と、裏表以外に垂直に近いものも存在



第178図 たわみ4・主要土器の分布 (1/200・1/6)



第179図 たわみ4断面図 (1/80)

するということは、裏表を意識せずに廃棄したことを示しているのではなかろうか。

遺物個々の出土した標高を見ていくと、北側の緑釉陶器の集まりは1.28~1.32mと高さが一定である。ところが、同じ集まりでも中央部分では1.25~1.43m、南部では1.27~1.37mと近くに位置する土器でも標高の差が10cm以上あり、その間に偏ることなく土器が存在している。ただ、近接した土器で高いものと低いものの差が10cmを超えることは少なく、数mごとにその高さは変化している様子が見える。また、西端では中央部より標高が3~6cm程度高くなる傾向がある。遺物の種類別では、緑釉陶器が低く、黒色土器が高い傾向はあるものの、土師器は最低1.27mから最高1.45mの間にまんべんなく分布している。須恵器は1.21~1.43mの間で高低の落差が大きい。

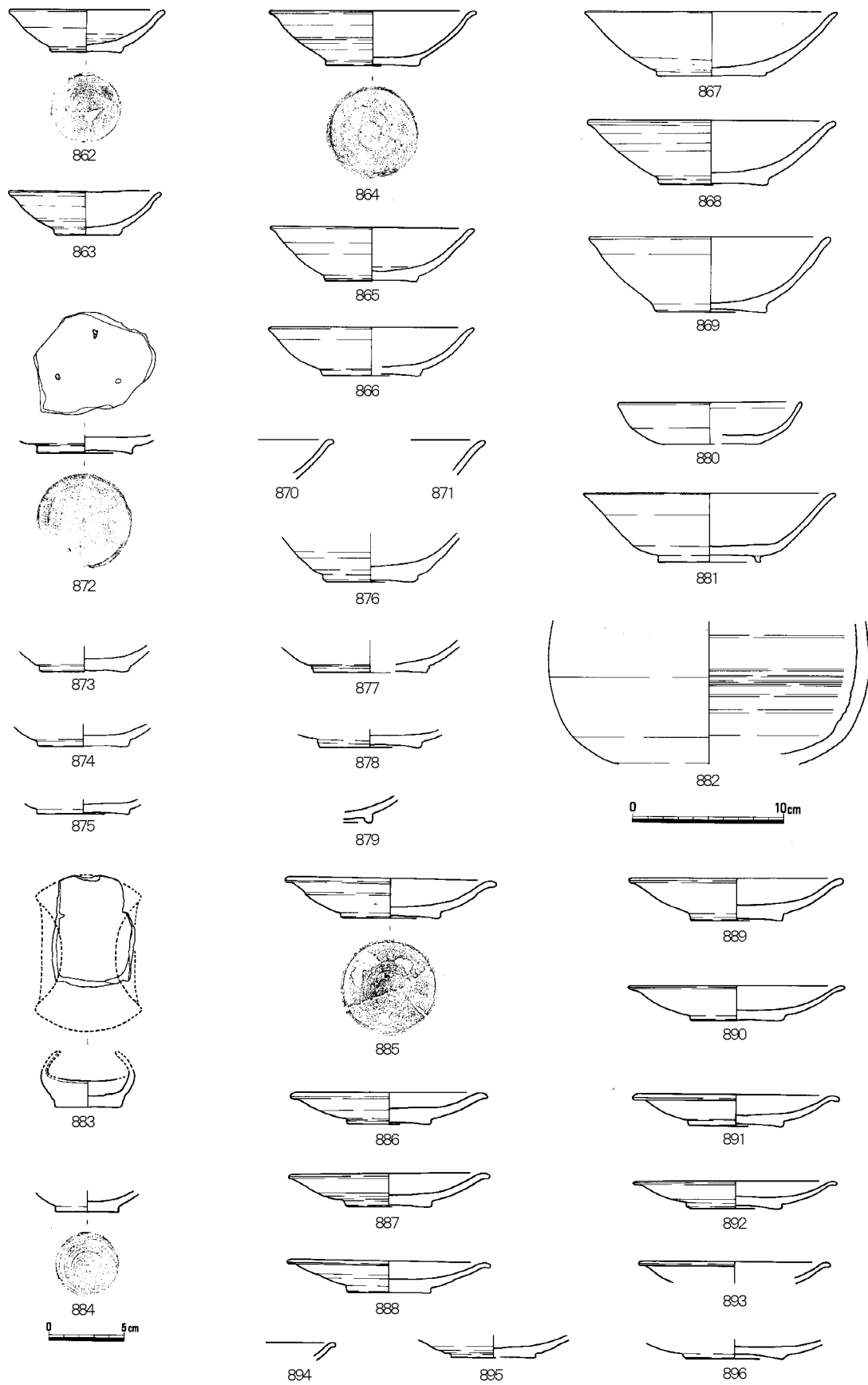
土器の出土状況を平面と立面に分けて分析したが、その結果、これらはほとんど同一層に分布し、ほぼ同時に散らばるように意図して廃棄されたことを表している。

これより、出土遺物を個別に取り上げる。主な遺物として緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・土師器・須恵器がある。その他に、掲載できなかったが須恵・土師質で外面縄目・内面布目の瓦小片があり、鉄器では釘が存在した。土製品として羽口や土鋸がみられた。量はごくわずかだが鉄滓や獣骨も出土している。ただし、獣骨は下層の溝25に属する可能性が高い。

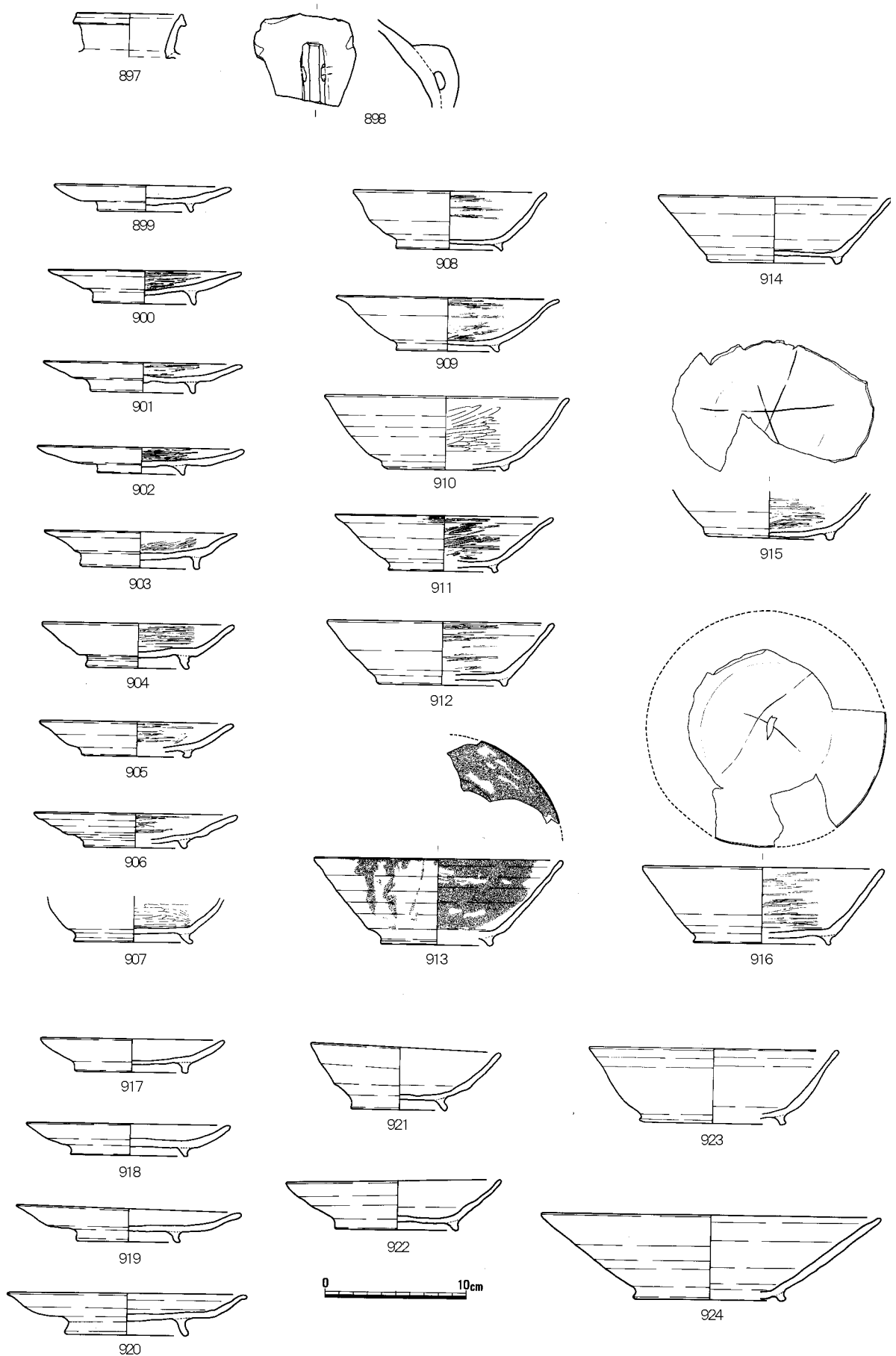
緑釉陶器は実測できたもので35個体、不可能だったものをあわせて約53個体が出土した。

★印のうち土器を明示していないものでは、868は863の西側で中央部、872・890は中央西端、880は東岸の石群中、892は南西端、896は889の西に位置した。862・866・870・871・874~879・881・882・891・893は埋土中からの出土である。なお、863は図示した位置の南に近接する破片(★印)と接合した。以下に器種と特徴を述べる。

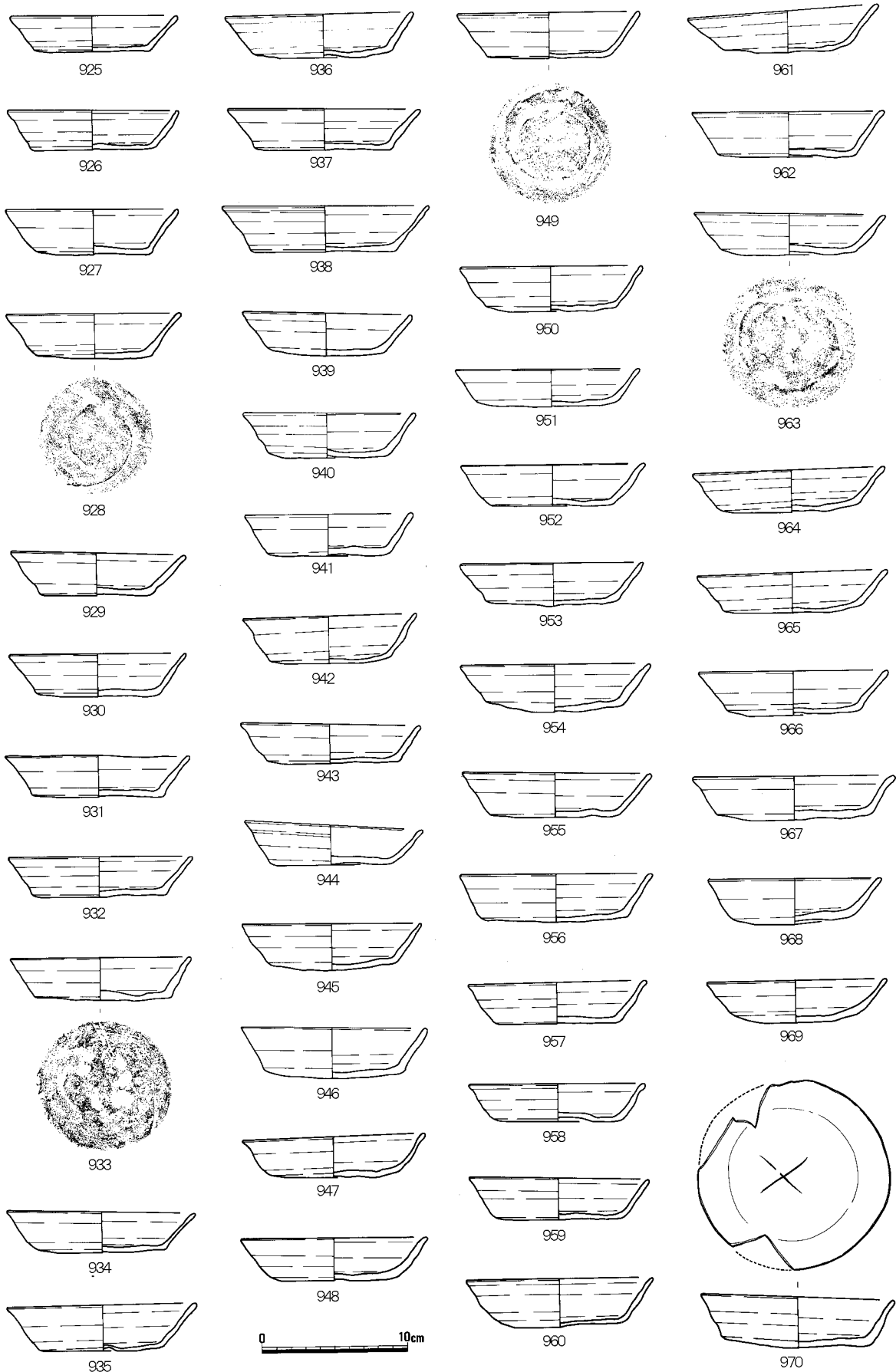
862~869は円盤状削り出し高台の椀である。口径が9.8~16.7cm、器高が2.8~6.5cm、底径が4.6~7.3cmを測る。素地はいずれも土師質、底部外面は糸切り後ケズリで、口縁端面は微妙に外反する。870・871は須恵質の素地である。872~878は円盤状削り出し高台のおそらく椀で、整形は上記と同じである。879は削り出し高台である。ここまでの京都産のもので、880~882は猿投産の緑釉陶器である。



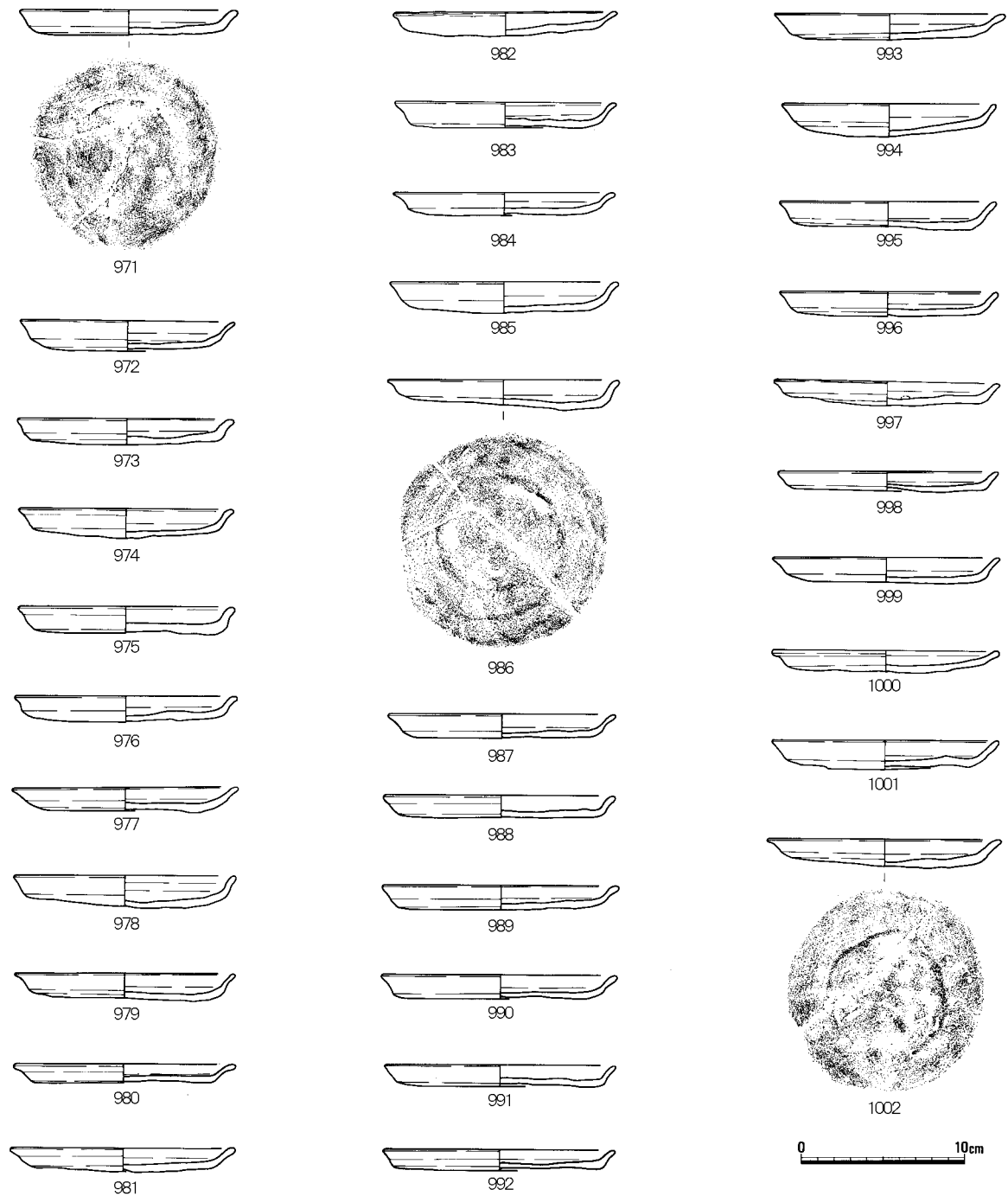
第180図 たわみ4出土遺物1（緑釉陶器：1/4）



第181図 たわみ4出土遺物2（灰釉陶器・土師器・黒色土器：1/4）



第182図 たわみ4出土遺物3 (土師器: 1/4)

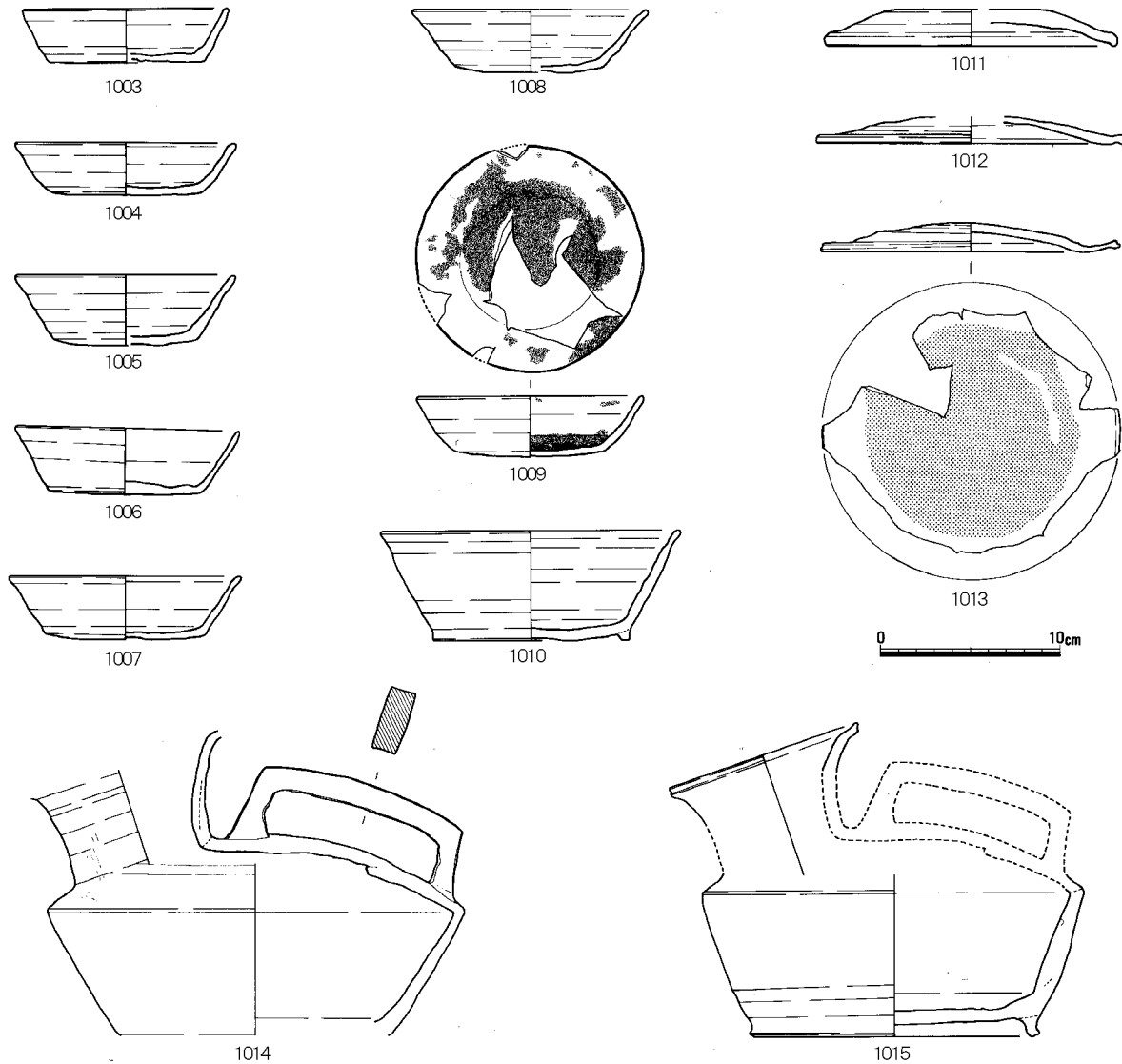


第183図 たわみ4出土遺物4（土師器：1/4）

880は無高台の椀で口縁端部に無釉の部分がある。882はいわゆる袋物で、内外面に施釉、貼り付け高台の痕跡がある。883・884は耳皿で、いずれも京都産である。884は残存状況が悪い。885～896は京都産の緑釉陶器皿である。口径が11.4～14.4cm、器高が1.9～2.8cm、底径が5.4～6.3cmを測る。893・894を除きいずれも円盤状削り出し高台をもち、全面に施釉し、底部外面はケズリで仕上げる。894のみ素地が須恵質である。896は内外面剥離が激しい。

このように、緑釉陶器はほとんど京都産で、一部に猿投産を含むが、いずれも9世紀前半の時期に限定される。

灰釉陶器は数が少ない。897は壺で内外面に施釉する。898は双耳壺で、外面のみ釉がある。



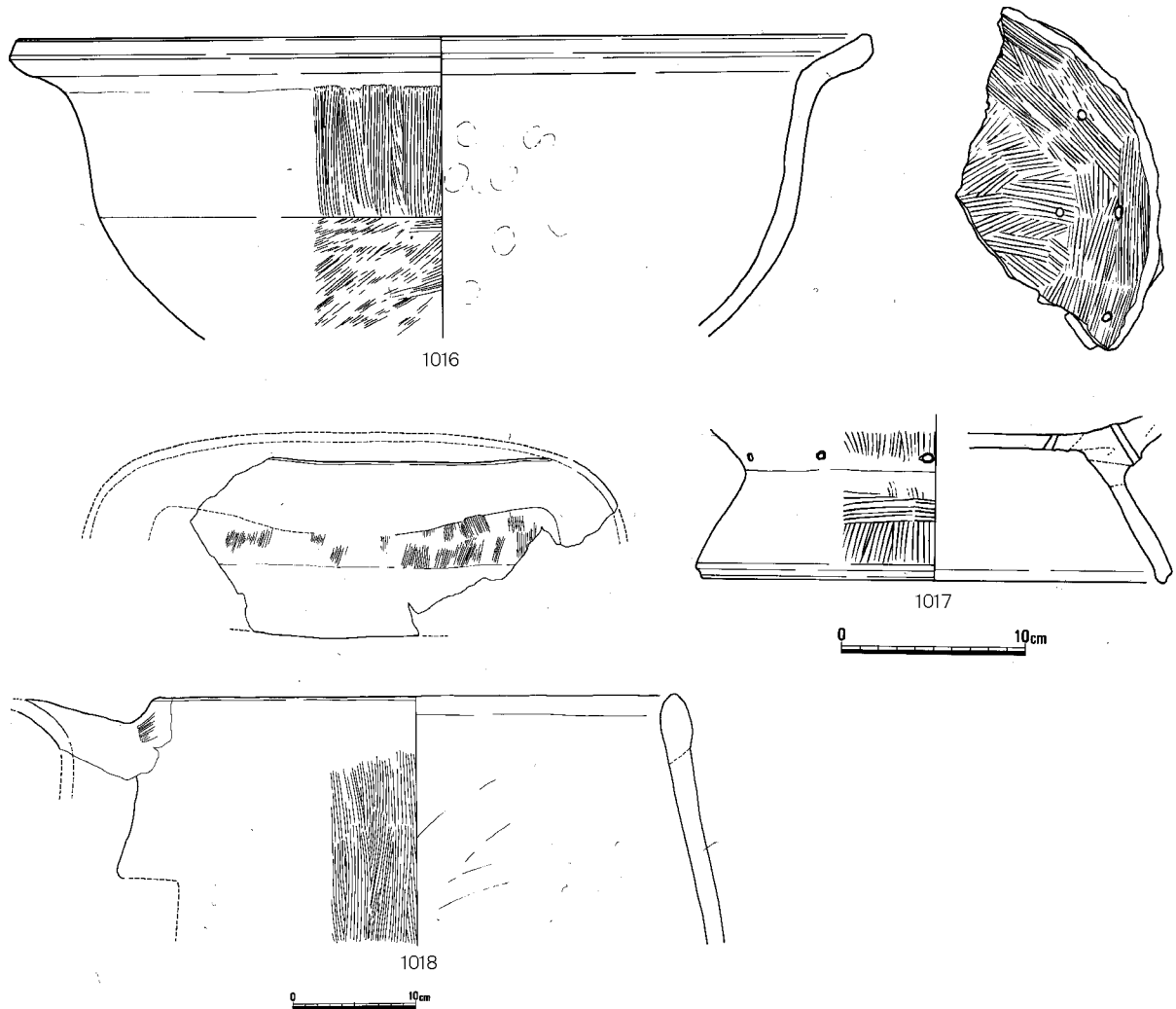
第184図 たわみ4 出土遺物5（土師器・須恵器；1/4）

黒色土器は、皿と椀がある。いずれも内面が黒い。■印のうち土器を示していないものでは、904が南端中央、908は中央西端の緑釉陶器北、909は891の西で996の東側、915は863の東2 mに位置した。

899～906は皿である。口径が13.5～14.6cm、器高が1.7～2.4cm、底径が6.1～8.1cmを測る。899は杯部内面の調整が不明である。高台は貼り付けの輪高台である。

907～916は椀で、口径が13.6～17.0cm、器高が4.0～5.4cm、底径が7.2～9.5cmを測る。908・911は内面のミガキが不明瞭。913は内面全体に黒漆付着、外面にも垂れている。914は内面全体はにぶい黄橙色を呈するが、口縁端部の内面は黒色、外面が灰色である。915の線刻は焼成後、916では焼成前の可能性が高い。

917～1002は土師器である。出土量で最も多いが、その大半を無高台の椀と皿で占める。高台を持つものは少数で、その形状は黒色土器と類似する。917～920は高台付きの皿で、口径が13.0～16.7cm、器高が2.2～3.0cm、底径が7.1～8.4cmを測る。918内面は丹塗りの可能性がある。921～924は高台付き椀で、口径が13.4～24.0cm、器高が3.7～6.0cm、底径が3.3～10.4cmを測る。924は外面に丹塗りで、内面は不明である。



第185図 たわみ4出土遺物6（土師器；1/4）

925～970の土師器碗は、口径が11.4～13.9cm、器高が2.4～3.9cm、底径が7.7～10.8cmを測る。いずれも内面はヨコナデで調整し、底面外面はヘラオコシ後ナデである。指頭押圧が残ることもある。ヘラオコシ未調整のものもある。936は口縁端部外面に煤が、口縁～底部内面に灯心痕跡が残り、灯明皿と言えよう。929・930・955・957・959では内面に、964は内外面に赤色顔料の痕跡がみられる。

971～1002の土師器皿は、口径が12.6～14.5cm、器高が0.9～2.3cm、底径が10.0～13.0cmを測る。いずれも内外面はヨコナデ・指頭押圧、底面外面はヘラオコシ後ナデで、指頭押圧もみられる。

1003～1009は須恵器杯である。口径11.3～12.8cm、器高2.9～3.9cm、底径7.8～8.7cmを測る。底面はヘラオコシ後ナデを施し、土師器杯と同様である。1009内面には漆が付着し、漆容器の可能性もある。1011～1013は須恵器蓋で、口径16.0～17.0cm、器高1.6～2.0cmを測る。1012はもともとツマミがないものであろう。1013は転用碗で、内面にわずかに墨痕がみられる。1014・1015は平瓶である。この他の須恵器としては、甕片がある。

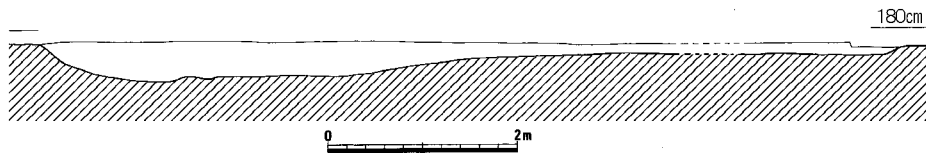
1016～1018は大形の土師器を載せた。1016の土鍋は口縁外面に黒斑がある。1017は盤で、たわみ3の858・859と同一の器種であろう。水切りのためであろうか、穿孔がみられる。

最後にこのたわみについての評価を少し述べたい。時期については、9世紀前半に比定できる緑釉陶器ほか碗・杯・皿類が大量にあり、それ以降の遺物を含まないため9世紀前半で廃絶したといえる。

椀・杯・皿類は完形品かそれに近い残存のものが多かった。また、土師器の杯・皿には赤色顔料の塗布されたものが存在する。このような遺物の量・質から、こわれたものをゴミと一緒に捨てたものではなく、もともと完形の遺物を意図的かつ大規模に投棄することが目的だった可能性が高い。また、出土状況から推測される投棄の様子は、粘質の強い土にあたかも無作為にまき散らしたものであり、このたわみが、乾燥しない粘質土の堆積があり水も流れていない状態であったことが前提になる。

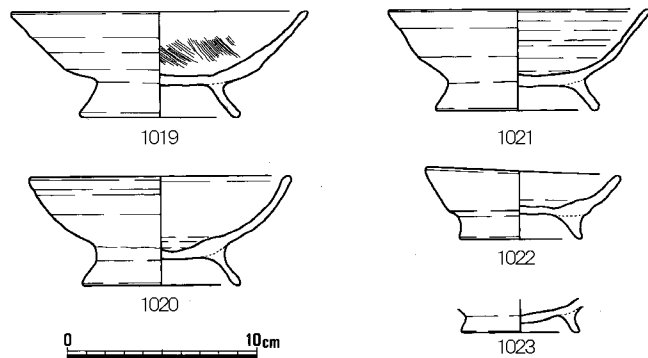
たわみ内には集石1・建物12・柱列2が存在する。このうち集石1の基底部の基盤層が周囲より高く残っていることや、たわみの底面が平坦に近いことから、たわみと集石1は人為的に掘削された可能性が高い。たわみ4と集石1・建物12・柱列2がすべて同時に存在する可能性もあるが、柱穴の深さから建物12はたわみが埋没していく過程で、柱列2は当初から存在したのではないだろうか。たわみ4と集石1・建物12・柱列2について、それらが関連した遺構であるならば、たわみ4が池、集石1が池の中島、建物12が池の中に建った簡易な小屋と想像するのもあながち突飛であるとはいえないだろう。

(氏平)



たわみ5 (第139・186図)

3区南端に接して検出した。北端のみ調査区内にあったと思われる。検出状況からみると、この遺構は調査区内で収束するとは思えず、調査区外へ延びていくのであろう。東西の範囲は約9m、南北は約1.5mで深さは最大33cm、底面の標高は最も低いところで1.29mを測る。埋土は褐灰色微砂～シルトの



第186図 たわみ5断面図・出土遺物 (1/80・1/4)

単一層で、断面は皿形だが東側の方が深い。底面は平らではなく、壁面にも段が存在する。

出土遺物には土師器などがある。図示したのは土師器椀で、1019～1021の比較的大形の椀、1022・1023の小形に分類できる。調整は1019で内面にハケメがみられる他はヨコナデあるいはナデで、成形は粘土紐積み上げの上ろくろ挽き、色調は灰白色、胎土に荒い砂粒を含む。

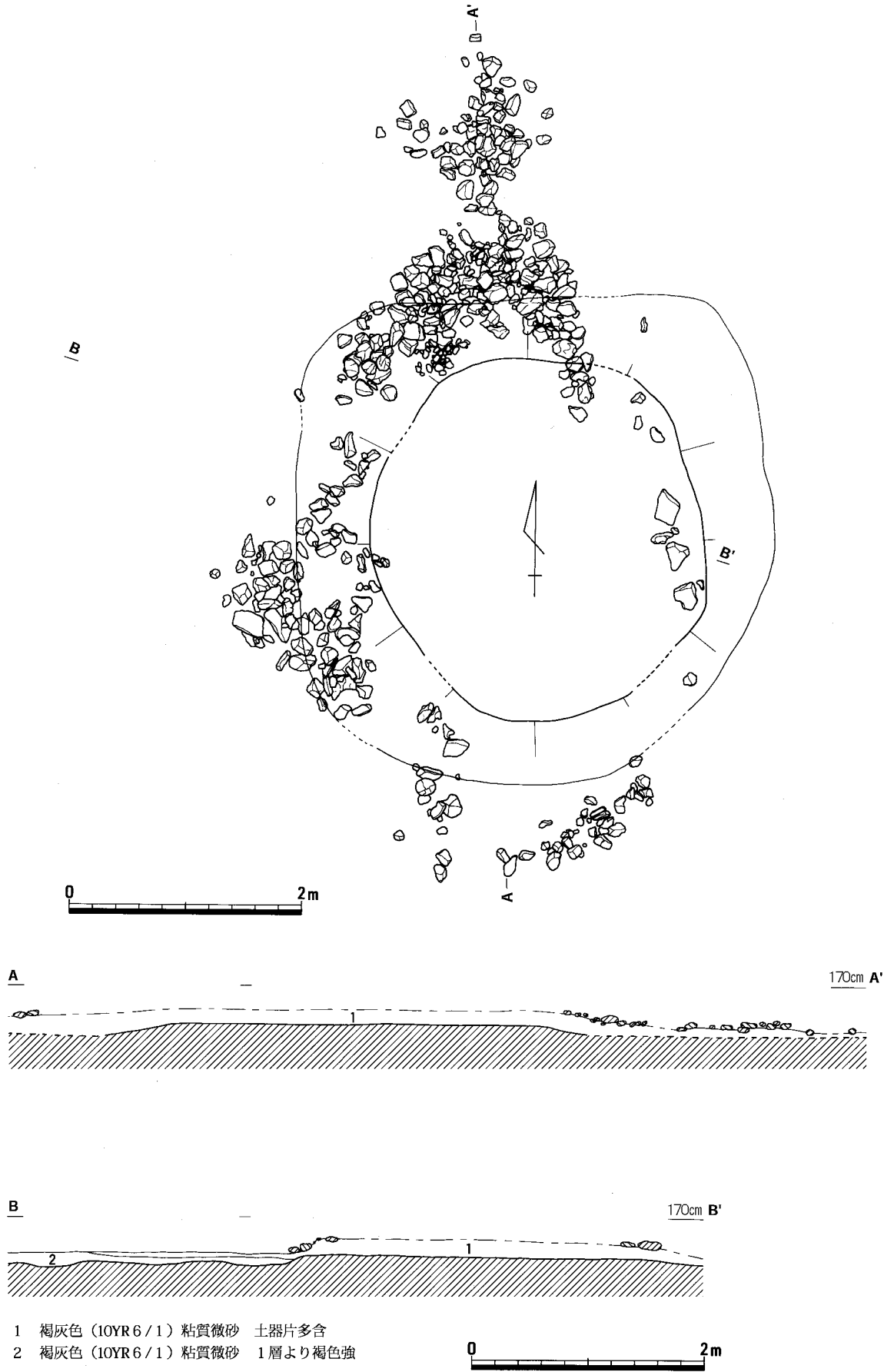
遺構の性格としては、溝や土壇とは想定しにくいためたわみとした。時期は遺物から、10世紀末～11世紀である。

(氏平)

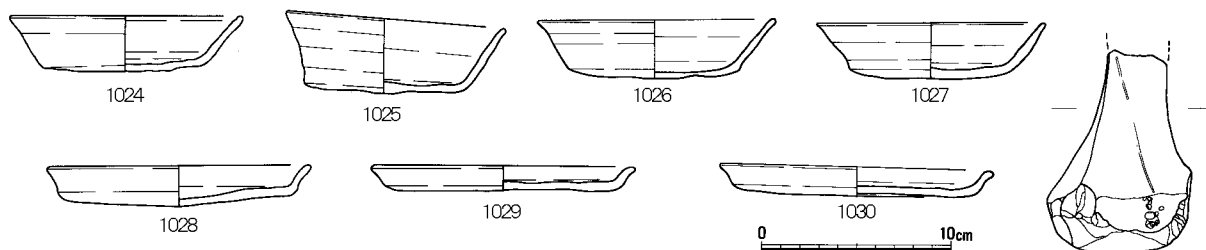
8 集石遺構

集石1 (第139・187・188図、図版62)

3区中央西、たわみ4内に位置する。当初集石部分をたわみ4埋土中で検出した。集石は北から大まかに4か所確認できた。最も北端が南北1.5m、東西1.5mの範囲、その南側で南北1.8m、東西2.1m、西側に南北2.5m、東西1.4m、南端で南北1.5m、東西2.1mの範囲に存在した。4か所の集石は、南北3.5m、東西1.5mの空白部分を中心に取り囲んでいる。東側でも礫を確認したが、著しく集中してい



第187図 集石1 (1/50)



第188図 集石1出土遺物（1/4・1/3）

る様子ではなかった。集石は標高1.36~1.54mの間に位置し、重なっている部分もあるが2重になる程度で、平坦に並んでいる。集石は中央の空白部分から端へ向かい緩やかに下がる。

集石を構成する礫はほとんど角礫で、大きさは2~30cm大である。その中には花崗岩の熱を受けて赤変したものがみられた。

集石の間に遺物を検出した。ほとんどが土器で、土師器・須恵器がある。土器は礫の間か下に埋もれている。礫の上面には出ているものはなかった。礫の間に垂直に立った土器もあった。

集石の下10~15cmで、基盤層をけずり残した壇を確認した。南北が4.2m、東西4.1mの隅丸方形で、上部は南北3.1m、東西2.8mの範囲で楕円形の平坦面である。この壇を検出中に8点の土器と砥石1点が出土した。土器はいずれも壇の斜面か裾で、平坦面上には確認できなかった。

集石と壇の関係は土層断面で確認できた。壇が最初に掘削され、たわみ4埋土である第2層が堆積し、その後集石が乗る第1層が堆積している。

出土遺物は土師器の杯と皿、砥石S32がある。北端の集石下から1027、北側の集石下から1024・1025、西側の集石下から1026・1028、集石中より1029、南端の集石下から1030が出土した。

以上の状況より、壇はたわみ4と同時に掘削された可能性が高い。その後、たわみ4が埋まる途中で再び壇に盛り土が成されたのであろう。この時、壇の上部が水平に削平され、集石が配置されたと考えられる。また、集石は本来の位置からさほど移動してはいないと思われる。（氏平）

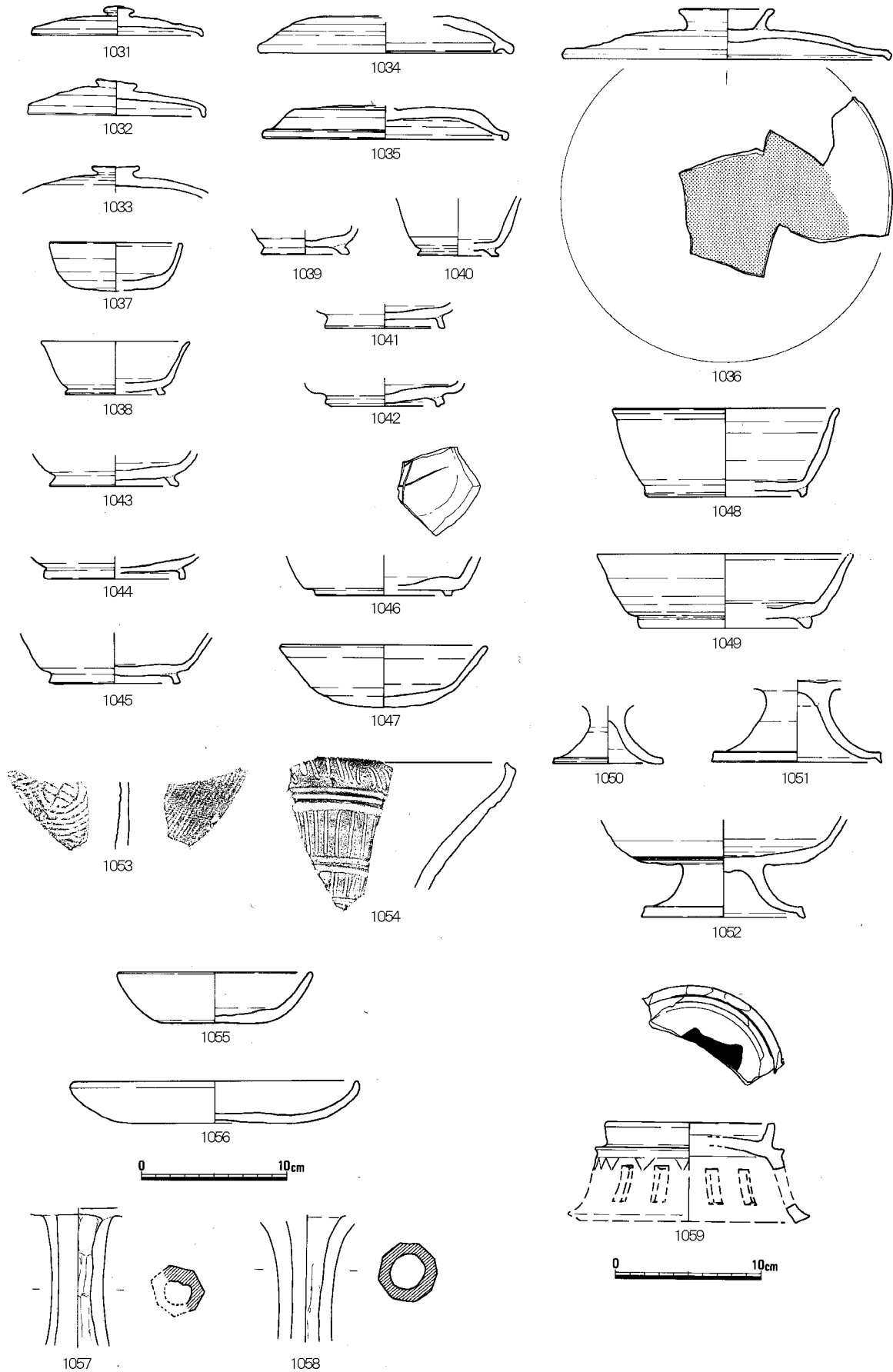
9 遺構に伴わない遺物

中撫川遺跡ではほぼ全域にわたって、弥生時代から中世にかけての遺構が検出され、それらに伴って多くの土器が出土している。これらが、純粋に遺構に伴って出土していれば良好な年代決定遺物として資料的価値は格段に高まるが、残念ながら大半は相当な攪乱を受け、混入が見受けられる。とりわけ古代の遺物は、時期的はざ間に位置することもあって、中世遺構による削平も加わり一括性のある土器は少ない。

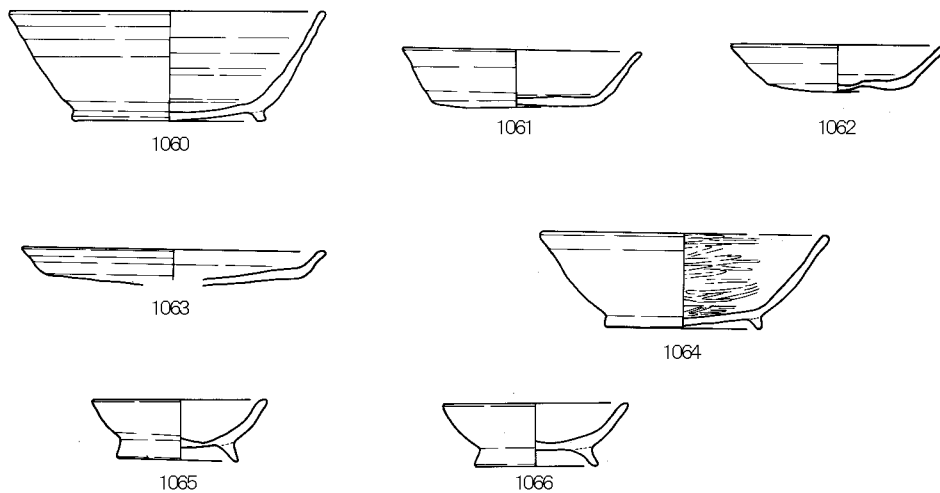
第189図以下に包含層あるいは、柱穴から出土した遺物について掲載する。

1031~1052はすべて須恵器で、1055~1058は土師器、1059は須恵質の円面硯である。1031~1036は蓋で、天井部に扁平なツマミを持つものと1036のように輪状のツマミを持つものがあるが、後者の出土は少数である。1034の内面には身受けのカエリがあり、古代I期の指標となる特徴が観察される。1036は天井部内面は平滑な磨滅痕跡があり、逆転して硯に転用されたことを示す。使用された範囲は図の網目部分に示す。

1037~1049は杯である。1039・1040のように小型のものと、1048・1049のようにやや大型のものが



第189図 1～3区包含層・柱穴出土遺物（須恵器・土師器・円面硯：1/4）



第190図 3区柱穴出土遺物（須恵器・土師器：1/4）

認められる。輪高台を持つものが多いが、1039・1047のように椀ともいべき器種もある。

1046の内面底部にはヘラによる×印の記号が見られる。これらの杯の中には、1036のような大型の蓋に対応する器種は見当たらない。これらの杯はおおむね古代Ⅰ期からⅡ期の時期的範囲に相当すると考えられる。

1050～1052は高杯である。いずれも低い脚部のみ観察できる。1051・1052には脚端には、通常みられる独特のカエリがあるが小型の1050にはない。

1053は甕あるいは壺の破片と考えられる。外面にはカキ目調整、内面には独特の車輪タタキとも異なる特徴的なタタキが看取される。類似するものとして、掘立柱建物7の柱穴から出土している754がある。それによると体部外面は平行タタキが認められるので、この破片もそれをカキ目調整で消されたことが推察される。

1054は大型の甕の口頸部である。口縁端部は内面に屈曲する特徴を持つ。棒状の工具により、単純な直線あるいは波状文が巡らされる。

1055・1056は杯というよりは皿というべき器種である。いずれも暗文は認められない。古代Ⅱ期以降に比定される。

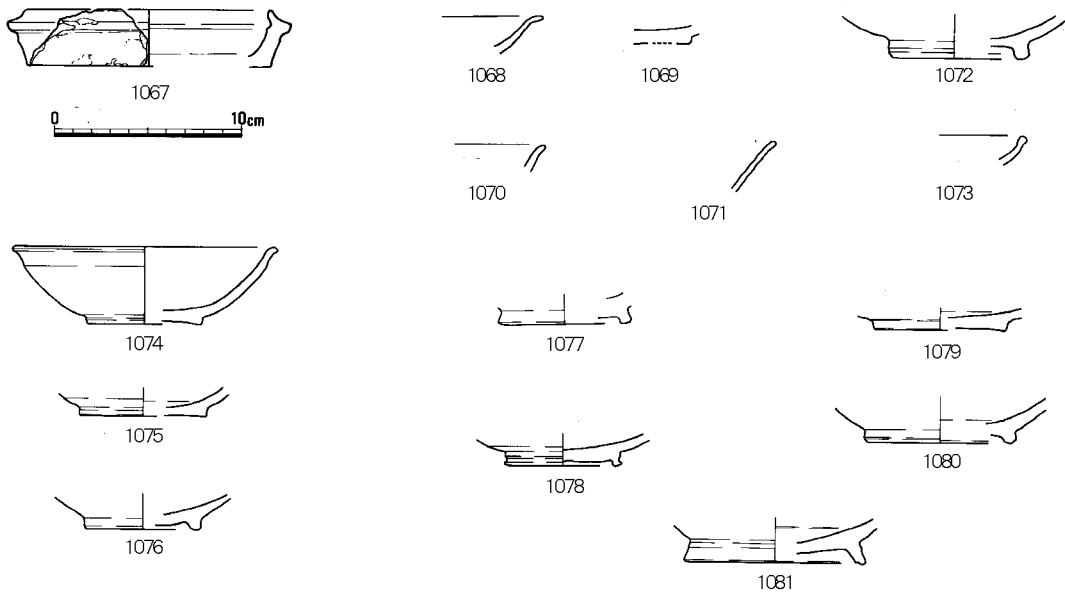
1057・1058は長脚の高杯である。いずれも丁寧な面取りが観察される。前者には平坦な杯部の一部がわずかに残る。古代Ⅱ期の特徴を示す。

1059は比較的小型の円面硯である。形式的にはいわゆる圈脚硯で長方形の透かしが巡る。脚部の上位に、鋸歯文状の装飾的なヘラ描き文が飾られる。上部は立ち上りが巡ることによって、硯としての円形の使用部分が形作られる。陸部と海部の境界は不明瞭で、陸部はわずかに高まる程度である。中央部は平滑に磨滅した顕著な使用痕跡が認められ、わずかな墨痕跡も観察される。焼成は良好で堅緻、時期的には古代Ⅱ期に比定するのが適切であろう。

第190図には、3区の古代に比定される柱穴から出土した須恵器・土師器・黒色土器を掲載する。

1060は須恵器杯である。大きく外方する体部下端に小ぶりの高台が付けられる。杯から椀への変化がうかがえる資料で、Ⅲ期に比定されるが、たわみ4出土の1010よりはやや古いタイプである。

1061～1063は土師器である。1061・1062はいずれも杯で、前者はたわみ3やたわみ4とほぼ同時期



第191図 1～3区包含層ほか、遺構に伴わない緑釉陶器（1/4）

に比定される。後者は、底部がやや揚げ底で後出的な要素がみられる。1063は皿である。たわみ3でも853～856の皿（盤）が出土しており、ほぼ同時期に比定される。

1065・1066は高台付きの小型椀である。しっかりとした高台は小ぶりの体部とはアンバランスで、古代IV期の特徴ともいえる。11世紀代に比定されるだろう。

第191図には、緑釉陶器を掲載する。

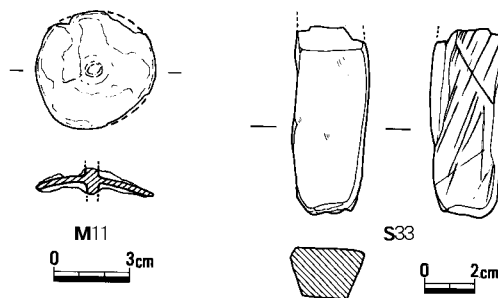
1067は比較的緑釉の出土がほとんどみられなかった1区から出土したもので、器種は火舎のような形態が考えられる。釉調は周防産の特徴を持つ。

1068～1072は2区で出土したもので、たわみ3で出土している緑釉陶器より後出的な形状を示し、9世紀中頃から10世紀に比定される京都産の緑釉陶器である。

1073～1081はいずれも3区で出土したもので、9世紀中頃以降10世紀前半にかけての時期に比定される緑釉陶器である。いずれも椀・皿で平高台よりも輪高台の方が多い。

なお1081は、近江産の特徴をもつ緑釉陶器椀である。

M11は軸棒が貫通したまま遺存する紡錘車である。断面形は傘状を呈する。S33は柱穴から出土した砥石で、素材は砂岩である。鋭利な鉄器に使用されたものであろう。（岡田）



第192図 2区包含層・柱穴出土遺物
（鉄器・砥石：1/3）

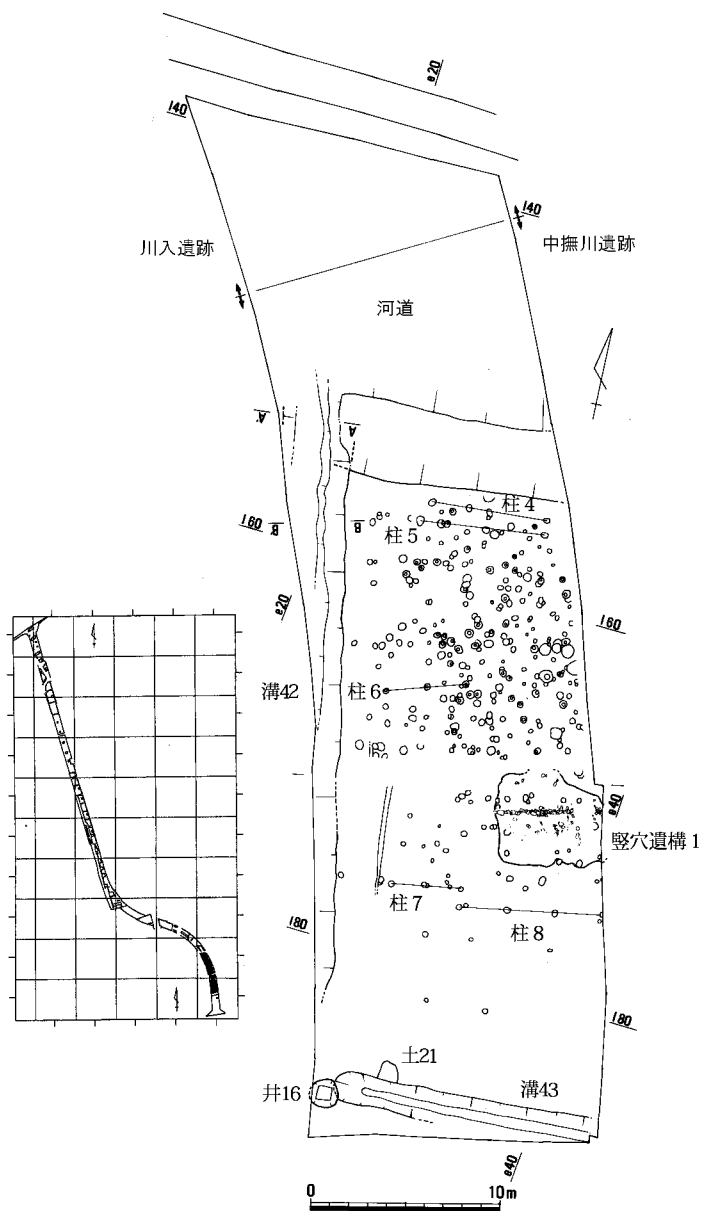
第7節 中世の遺構・遺物

1 概要

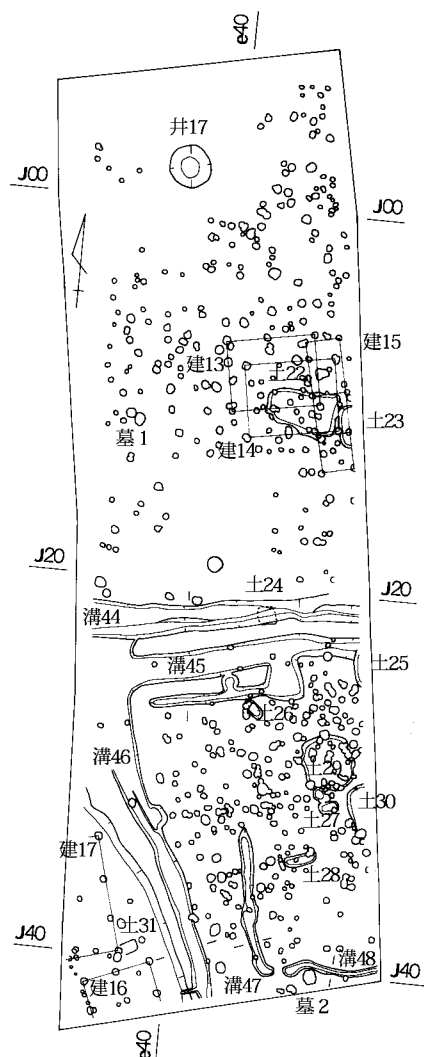
1 区の概要

本節では、おおむね鎌倉時代以降の発掘成果について述べる。

1区では、川入遺跡（大道西調査区）でも検出された河道が、調査区の北側1/4を占める。その南岸から南北方向に溝42が検出され、東側微高地に柱穴が多数検出された。調査区南辺では東西方向に溝43が検出されたが、これは貫流する溝ではなく、堀状の区画溝と考えられる。この溝42と溝43に囲まれた一面に、柱列・竪穴遺構1・土壌などが検出された。（岡田）



第193図 1区中世遺構全体図（1/400）



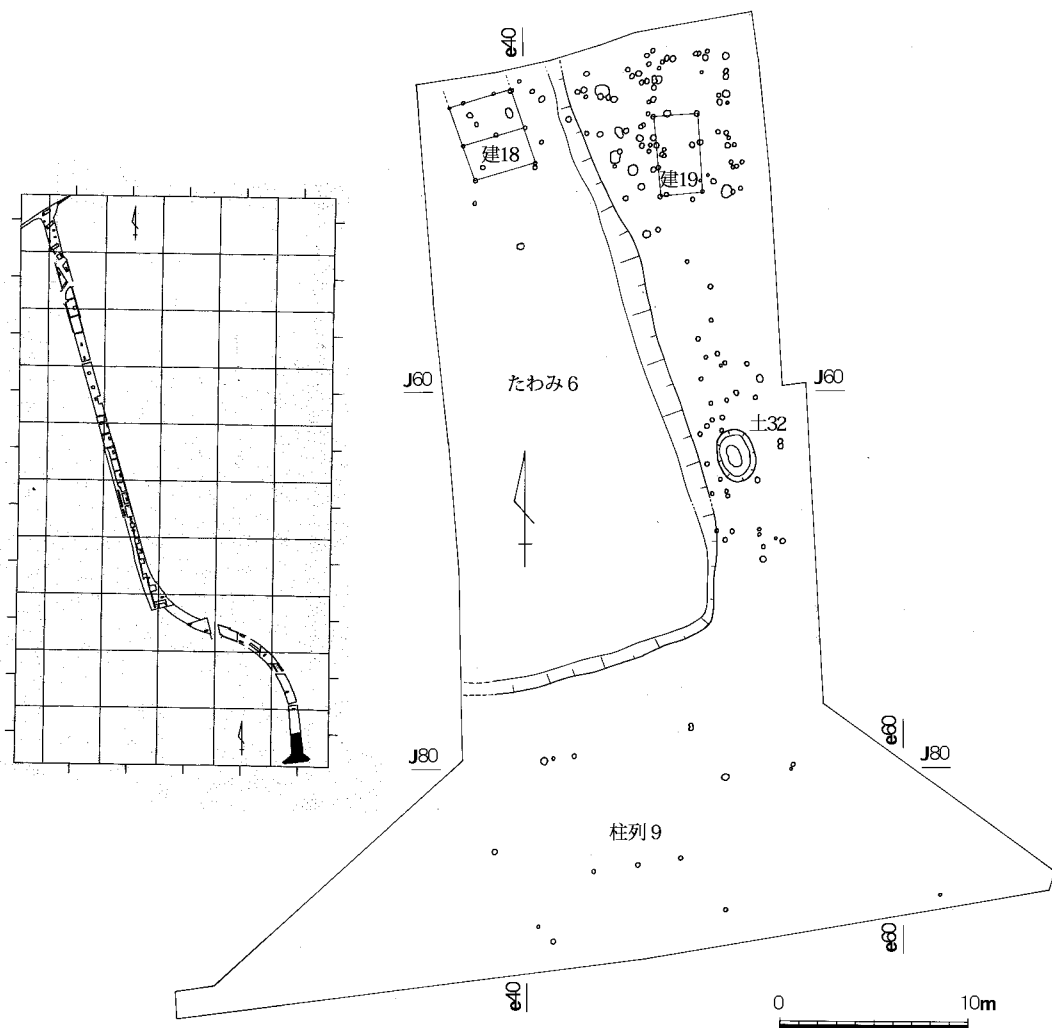
第194図 2区中世遺構全体図（1/400）

2区の概要

2区で検出した遺構は、掘立柱建物5棟、井戸1基、墓2基、溝5条、土壇10基、多数の柱穴と水田と考えられる浅い窪みである。柱穴は、多数検出できたが、掘立柱建物とまとめられたのは5棟のみである。溝は、調査区の南半分に検出した。調査区の中央部を東西に延びる溝と、それに直行する溝があり、区画する溝の性格が窺える。墓は、2基を検出した。そのうち墓1は、14、15世紀と考えられる柱穴に切られている。土壇では、土壇22から土錘が20数個まとまって出土している。溝44の南端に、たわみに水を引き込む取水口とみられるものを検出している。(井上)

3区の概要

3区の中世は、時期による遺構の区分が困難であった。遺構の主体が遺物の少ない柱穴であること、他の調査区に比べ中世段階の削平が多いことがその理由として挙げられよう。特に調査区の中央から南部は遺構が断片的にしか存在しなかった。全体的には、調査区の中央から北に遺構が集まり、北東側の掘立柱建物19から土壇32までの間が微高地と思われる。北西側はたわみ6が大半を占め、それと重複して掘立柱建物18がある。たわみ6は水田と考えられ、その岸部周辺にはたわみ6と同じ灰色の埋土で直径5cm程度の柱穴状の穴が多数みられた。稲株痕跡であろうか。(氏平)

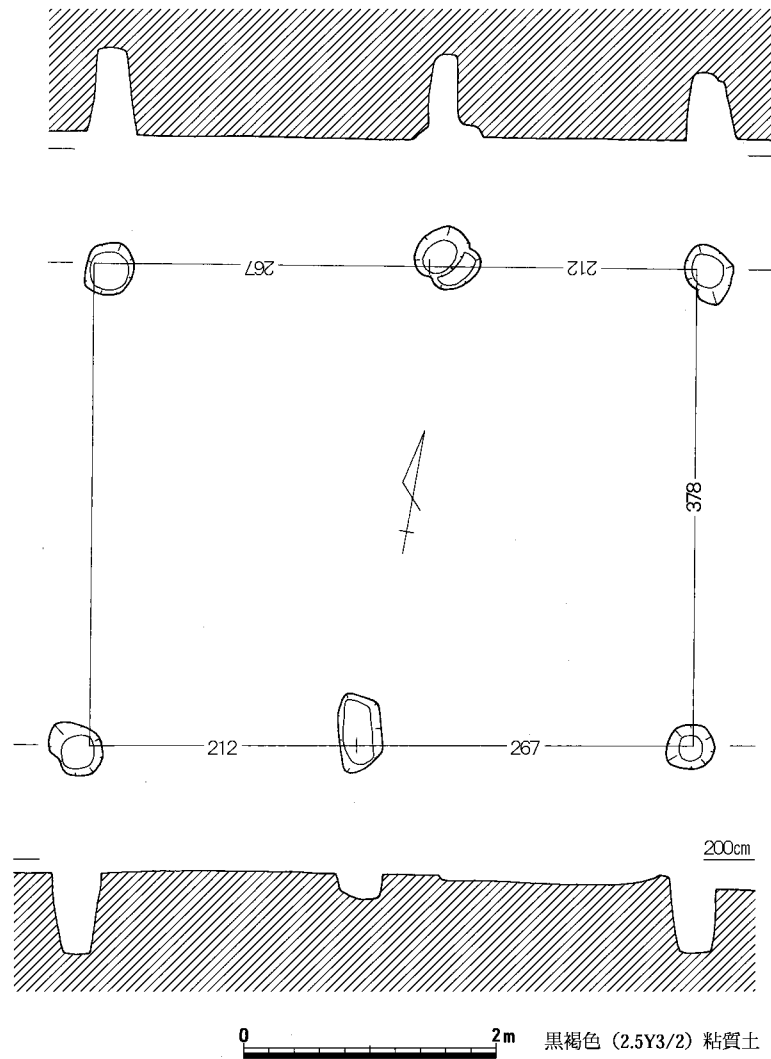


第195図 3区中世遺構全体図(1/400)

2 掘立柱建物

掘立柱建物13 (第194・196図、図版67)

2区の北半中央部東よりの位置に検出した。東西2間、南北1間の掘立柱建物である。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径35~45cmを測る。検出面からの深さは、浅いもので約20cm、深いもので約70cmを測る。柱間の距離は、桁行2.12、2.67m、梁間3.78mを測る。東西方向の全長は、4.79m



第196図 掘立柱建物13・出土遺物 (1/60・1/4)

出土の備前焼播鉢である。口縁端部は少し拡張し、端面は急角度の傾斜を持つ。内面には、7~8条の卸し目がまばらに施される。建物の時期は、掘立柱建物13と同じく14、15世紀に属するものと考えられる。(井上)

掘立柱建物15 (第194・198図、図版67)

掘立柱建物13、14の東側に一部重複する状態で検出した。検出したのは、東西1間、南北3間である。建物の西側に対応する柱穴を探したが、検出できなかったので、東側の用地外に展開するものと考えている。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径26~35cmを測る。検出面からの深さは、浅いもので17cm、深いもので約50cmを測る。柱間の距離は、東西1.82m、南北1.97~2.88mを測る。一部しか

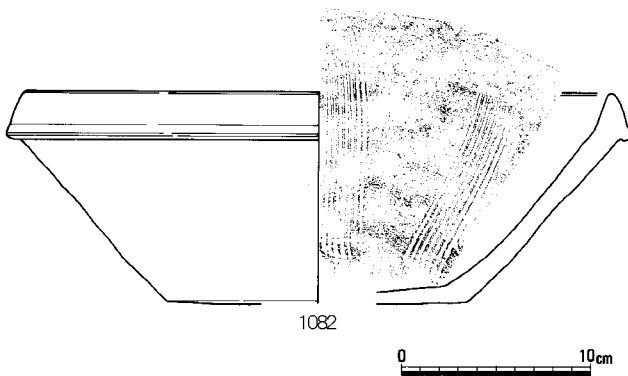
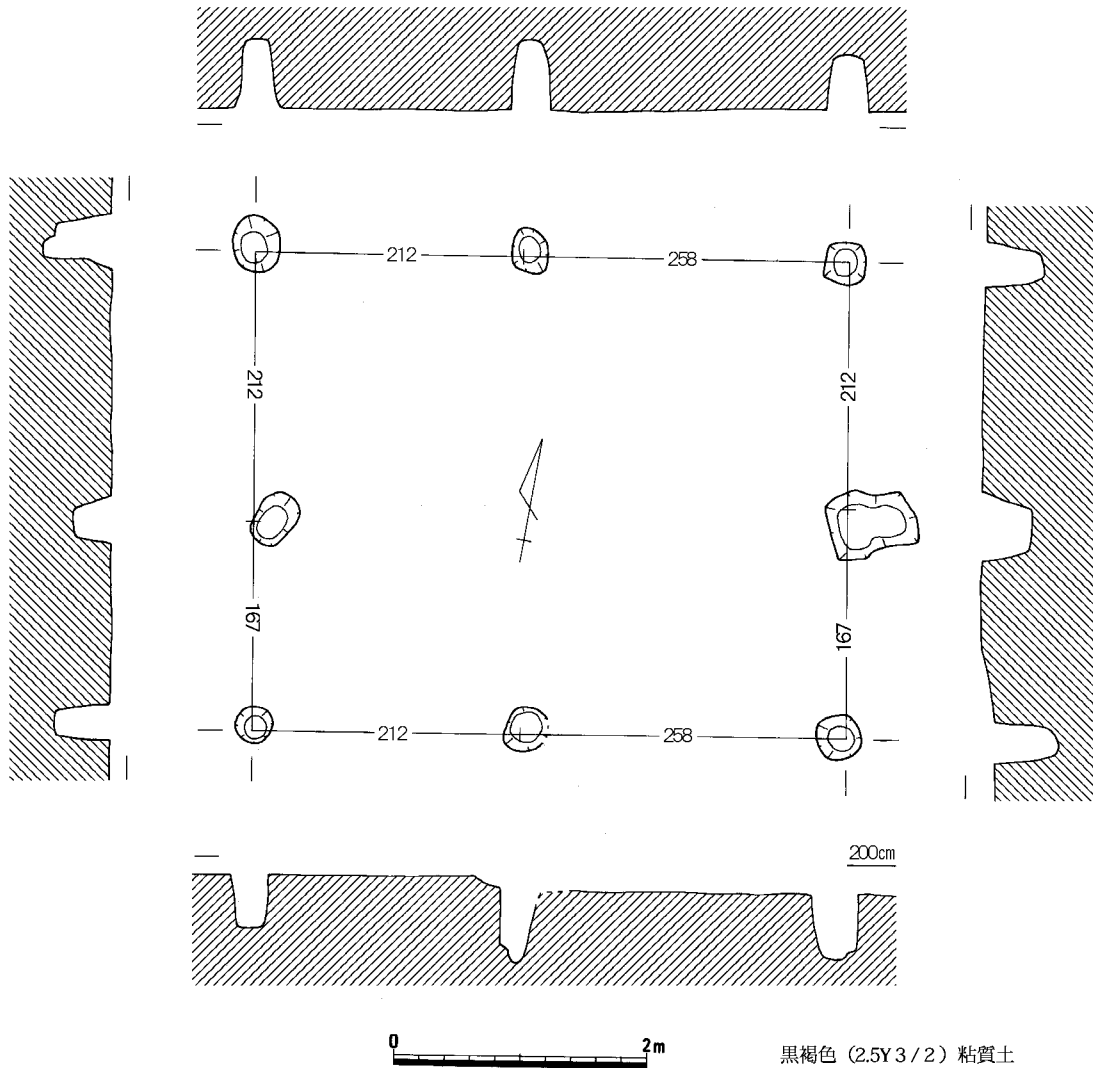
を測る。長軸の方向は、ほぼ東西を向くものである。真北からの角度は、N - 99° 45' - Wを測る。

建物の柱穴より出土した遺物に、明確に時期を示すものがないため明らかでないが、周辺に検出した遺構や出土遺物などから、中世後半の14、15世紀に属するものと推測される。(井上)

掘立柱建物14 (第194・197図、図版68)

掘立柱建物13の南東側に一部重なる状態で検出した。東西2間、南北2間の掘立柱建物である。柱穴の平面形は、円形を基本とするもので、長径28~52cmを測る。検出面からの深さは、浅いもので約43cm、深いもので約65cmを測る。柱間の距離は、桁行2.12~2.58m、梁間で1.67~2.12mを測る。建物の規模は、東西4.7m、南北3.79mを測る。建物の長軸方向はほぼ東西を向くものである。真北からの角度は、N - 99° 30' - Wを測る。

1082は、建物の南西角の柱穴から



第197図 掘立柱建物14 (1/60)

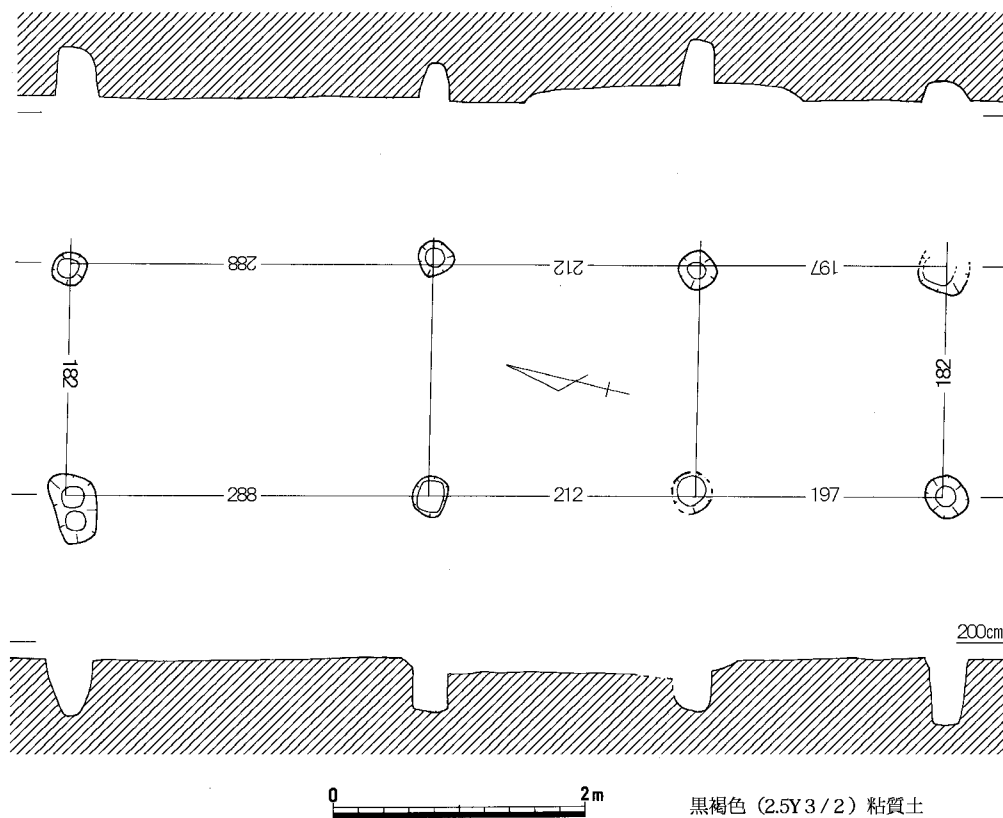
検出できていないため全体の形状は不明であるが、建物の一部に床を持つものと推測される。建物の長軸の方向も不明であるが、検出状態での長軸方向の角度は、真北からN - 18° 30' - Wを測る。

建物の柱穴からの出土遺物に、明確に時期を示す遺物がないが、周辺に検出した遺構や出土遺物などから、14・15世紀に属するものと考えられる。(井上)

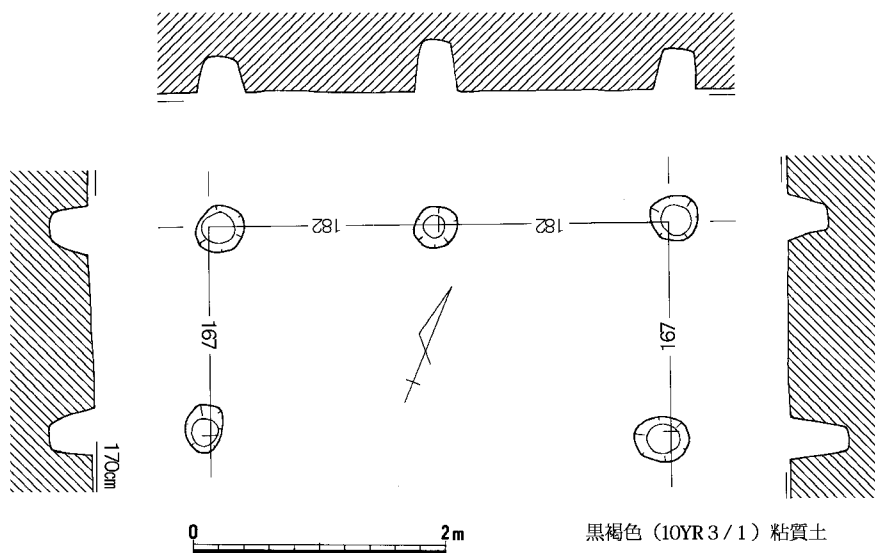
掘立柱建物16 (第194・199図、図版68)

2区の南西端部に検出した。検出した位置は、3区との境であり全体の規模は確認できなかった。検出したのは東西2間、南北1間である。柱穴の平面形は円形を呈するもので、長径33~44cmを測る。検出面からの深さは、浅いもので約30cm、深いもので約47cmを測る。柱間の距離は、東西1.82m、南北1.67mを測る。建物は南北に長いものと推測し、長軸方向の角度はN - 14° 30' - Wを測る。

建物は、たわみ4・6の範囲に含まれるが、調査の結果、たわみ4よりは新しく、たわみ6よりは



第198図 掘立柱建物15 (1/60)

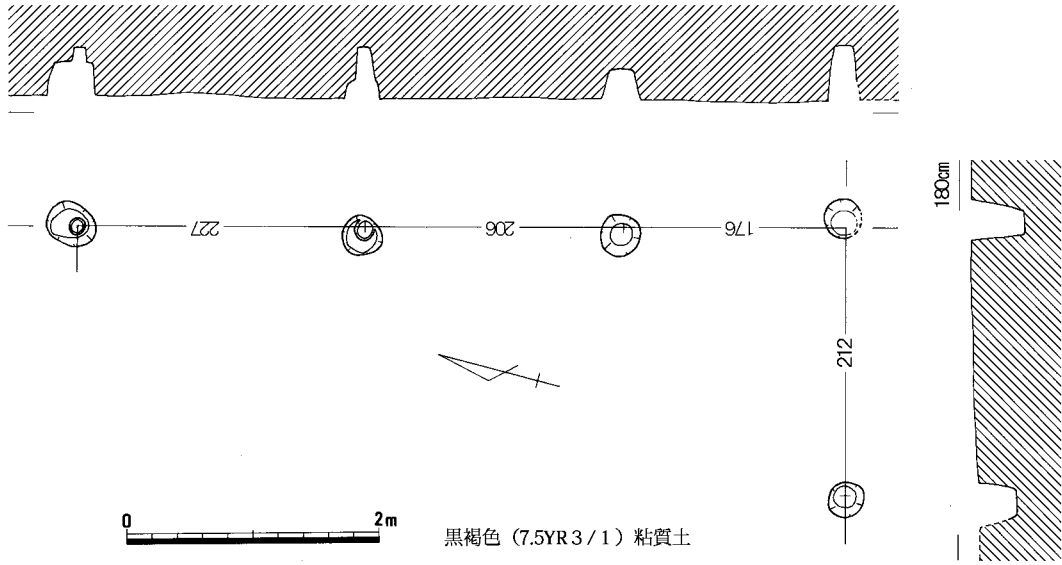


第199図 掘立柱建物16 (1/60)

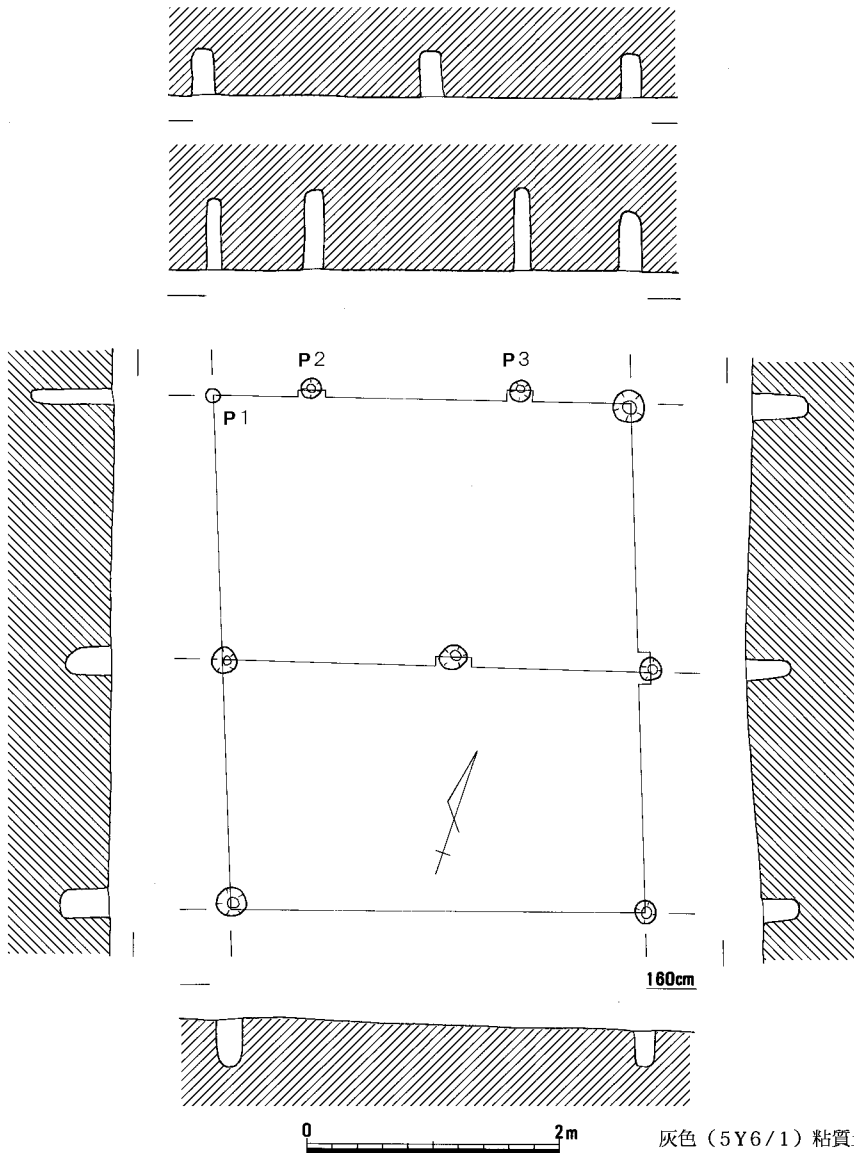
古いことが判明した。柱穴からの出土遺物に明確な時期を示すものがないが、たわみ6より古いことから14世紀代に属するものと考えられる。 (井上)

掘立柱建物17 (第194・200図、図版67)

掘立柱建物16の北約1mの位置に検出した。調査区の西端であるためその一部のみを検出した。検出したのは、東西1間、南北3間である。北側にはさらに関連の柱穴を探したが、検出できなかったことから、北側に広がることはないものと考えている。柱穴の平面形は、円形を呈するもので、長径



第200図 掘立柱建物17 (1/60)



第201図 掘立柱建物18 (1/60)

28~30cmを測る。検出面からの深さは、浅いもので23cm、深いもので45cmを測る。建物の長軸方向が不明であるため、南北方向の柱穴列の角度を測るとN - 14° 30' - Wとなる。建物の時期であるが、掘立柱建物16と同じ面で検出しており、14世紀代に属するものと考えられる。(井上)

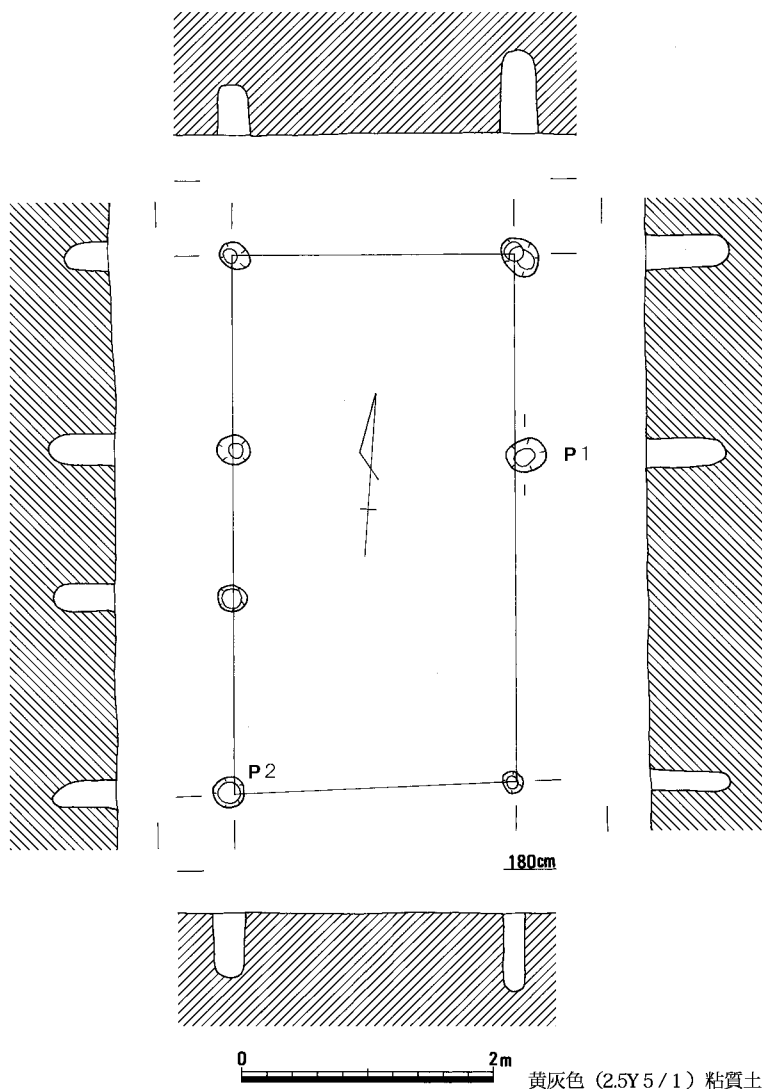
掘立柱建物18 (第195・201図)

3区北西端にあり南北方向の建物である。たわみ6の埋土除去後に検出した。北側は2区へ続く可能性がある。現状での棟方向はN - 17° - W、面積は15.4㎡を測る。

柱穴の埋土はたわみ6埋土と類似する灰色の粘質土である。柱穴埋土がたわみ6埋土と類似する理由としては、たわみ6の土を掘り起こしてこの建物の柱を埋めたか、あるいは建物廃絶後たわみ6由来の土が入り込んだ結果と考えられる。このことより、柱穴はたわみ6より新しいかもしれない。

柱穴の規模は、直径が検出面で18~25cm、深さが18~40cmである。図では柱穴の深さを復元している。P1~P3など柱穴の直径に対し深さが不自然に深いものが存在するが、柱痕のみを掘り下げて柱穴として認識してしまったものであるかもしれない。

北西端の柱穴以外の全ての柱穴から遺物が出土したが、ほとんど古代の遺物で下層のたわみ4に由来するものである。埋土がたわみ6と類似することから、建物の時期は13世紀以降であろう。(氏平)



第202図 掘立柱建物19 (1/60)

黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土

掘立柱建物19 (第195・202図)

3区中央西にある桁行2間?、梁間1間で、南北方向の建物である。現耕作土直下に検出した。棟方向はN - 4° - Wでほぼ真北、面積は9.7㎡を測る。

柱穴の規模は、直径が検出面で16~33cm、深さが19~45cmを測る。検出面は標高1.63m、柱穴底面の標高は1.17~1.43mであった。なお、図上では柱穴の深さを復元している。周囲には中世の柱穴が集中しているが、建物としてまとめられたのはこの1棟だけである。遺物は全ての柱穴から出土しているが、P1から土鍋片と早島式土器片が、P2から土鍋片が出土した。同じ中世の建物だが、掘立柱建物18の棟方向とたわみ6東岸の方向は一致するのに、掘立柱建物19の棟方向はそれとは異なる。このことが時期差かどうかは現状では断言できない。時期は、遺物から中世であろう。(氏平)

3 柱列

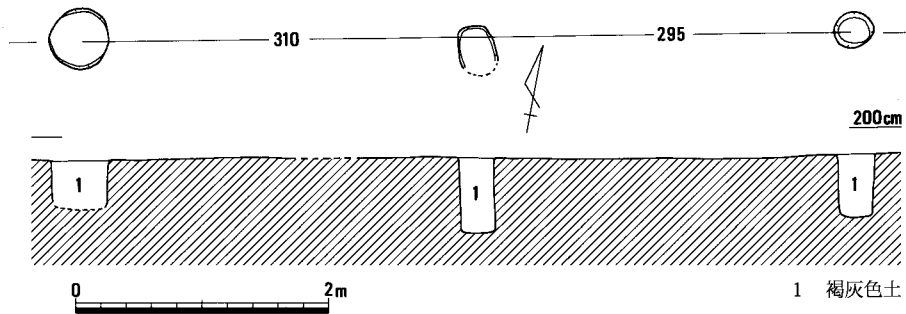
柱列4 (第193・203・209図、図版66)

1区の河道南岸で近接して検出された東西方向の柱列である。やや不ぞろいな円形の柱穴3本が直線的に並び、およそ柱間10尺等間を示す。柱穴の埋積土は褐灰色土である。本来は掘立柱建物の一部と考えられる。(岡田)

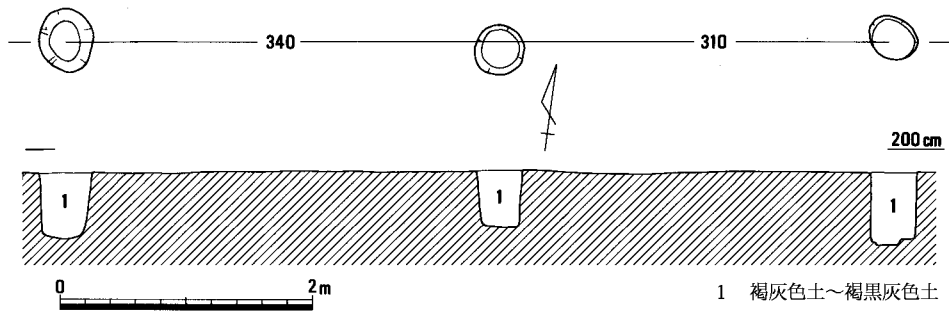
柱列5 (第193・204・209図、図版66)

柱列4のすぐ南で検出されたやはり東西方向を示す柱列で、円形の柱穴3本で構成される。柱間はやや長めで、10尺を越える。

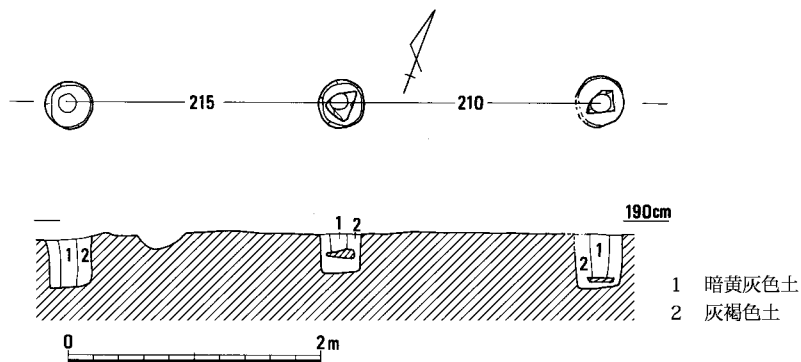
埋積土は褐灰色～褐黒灰色土で、深さは40～50cmである。掘り方からの出土遺物は土師器細片のみであるが、13～15世紀に比定されるだろう。(岡田)



第203図 柱列4 (1/60)



第204図 柱列5 (1/60)



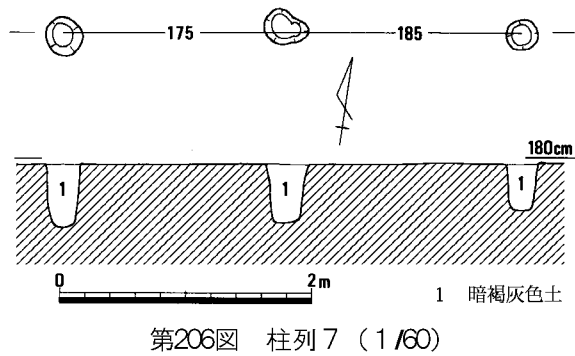
第205図 柱列6 (1/60)

第8章 中撫川遺跡

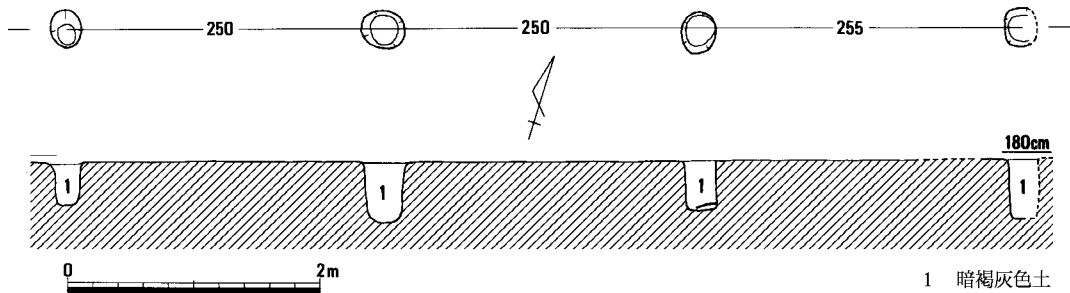
柱列6 (第193・205・209図、図版66)

柱列5の南約9m、竪穴遺構1の北西約12mで検出された。柱穴は小ぶりの円形を示し、ほぼ7尺等間を測る。

東側の2本には、平らな花崗岩が礎板として用いられている。すべての柱穴に柱痕跡が観察され、暗黄灰色を呈する。出土遺物は土師器細片のみである。(岡田)



第206図 柱列7 (1/60)



第207図 柱列8 (1/60)

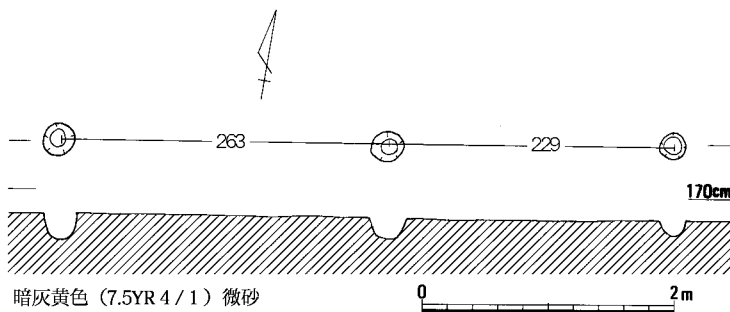
柱列7・8 (第193・206・207・209図、図版66)

竪穴遺構1の南側で検出されたいずれも東西方向を示す直線的な柱列である。

柱列7は約6尺等間、柱列8は8尺等間で平行して検出された。柱穴の埋積土はいずれも暗褐灰色土である。

北側の柱列7の東と柱列8の西部分は、筋違いに通路状に開放し、あたかも出入り口のような機能が推察される。この柱列を境に、柱穴の検出数が極端に異なり、南側が粗、北側が密度が高くなる点も注意すべきであろう。

時期的には、柱穴からの明確な出土遺物は認められないが、竪穴遺構1に近い時期、すなわち室町時代、15世紀中頃に比定されるだろう。(岡田)



第208図 柱列9 (1/60)

柱列9 (第208図)

3区南中央にある東西方向の柱列。単独で存在する。検出面の標高は1.64m、柱穴底面の標高は1.24～1.52mを測る。柱穴の直径は22～26cm、深さは検出面から12～40cmであった。遺物は土師器・須恵器の小片がある。時期は検出面の高さから中世であろう。(氏平)

1区の柱穴および出土遺物 (第209・210～215図)

1区では多数の柱穴が検出された。しかしながら、元は掘立柱建物を構成していた可能性が高い柱穴群をまとめきることは困難であった。先に柱列として取り上げたのは、試行錯誤の一手法であった。

本項では、いくつかの柱穴と柱穴からの出土遺物について説明を加えたい。

第210図には2本の柱穴（第209図P1・2）の実測図を掲げる。P2をP1が切って掘りこまれた状態がよく観察される。P1には柱の痕跡が斜線で示すように、明瞭で柱穴の底面では「沈下」が認められる。P2にも柱穴の痕跡があるが、柱は最終的に抜き取られたと考えられ、その中に1083の土師器椀、いわゆる早島式椀が出土している。図では伏せ置かれたようにみえるが、実際には上面の削平があるので、柱の抜き取り後に空洞化した時点で埋め置かれたと考えられよう。

P3からは土師器皿1084、土師器小皿1085～1088が一括出土している。これらのすべてが完形に近いので、何らかの意図で人為的に埋納されたものであることは確実であろう。

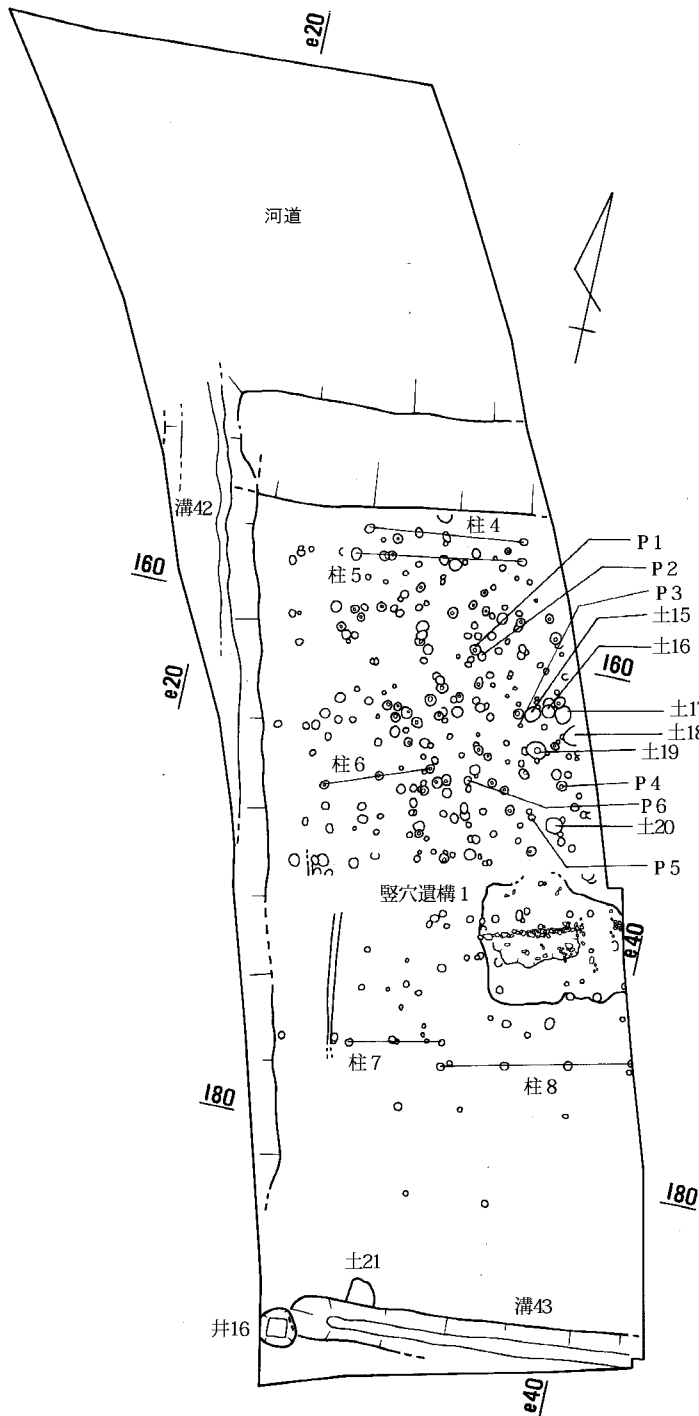
P4（柱穴）からは、14枚にのぼる銭貨が出土しているが、すべて銅銭である。出土層位は柱の抜き取り穴ではなく、掘り方からのもので、地鎮などの祭祀に伴って埋置された可能性が高い。

初鑄年のもっとも古い銭貨は唐代の開元通寶（621年）で、M12・13の2枚出土している。ついで祥符元寶M14、明道元寶M15、寧元寶M16～19、元豊通寶M20・21、紹聖元寶M23、政和通寶M24などの11世紀代の初鑄となる北宋銭が、大半を占めている。特に寧元寶は4枚出土しており、南約5mに位置する竪穴遺構でもみられる。

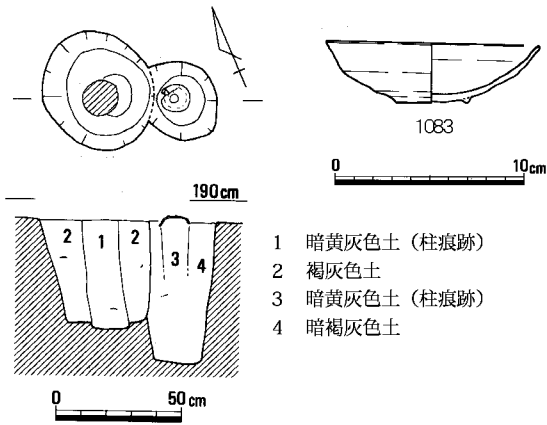
出土銭中でもっとも遅い1208年初鑄嘉定通寶M25は南宋銭で、折二銭といわれる。背面の方郭上位には「十」、下位に「二」が鑄出され、背十二と呼称される。これは嘉定12年の鑄造を示し、国内での出土例は比較的少ないとされている。（永井久美男「日本出土銭総覧 1996年版 兵庫埋蔵銭調査会 1996年刊」）

P4の南西約2mのP5からも、2枚の宋銭が出土している。

M26は大観通寶であるが、「通」「観」



第209図 1区中世遺構図（土壌・柱穴詳細図：1/300）

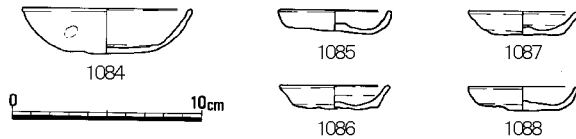


第210図 1区P 1・2、出土遺物(1/30・1/4)

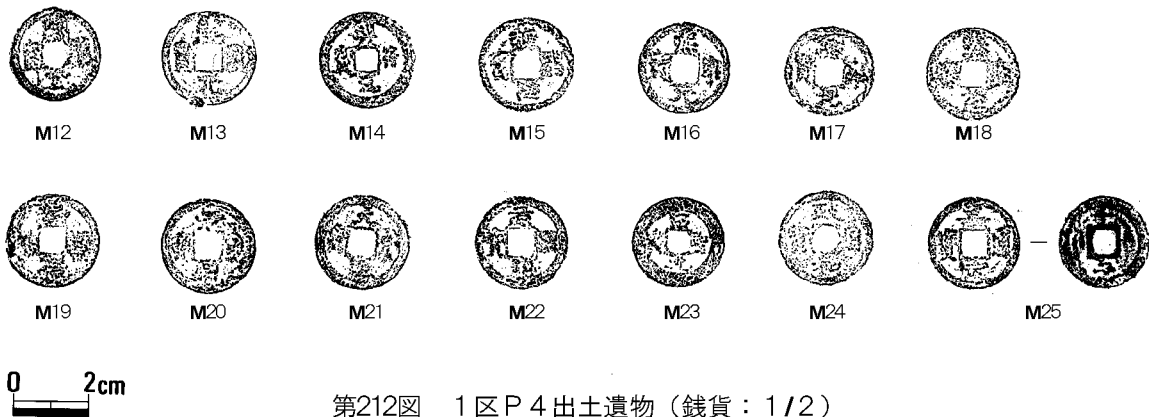
の2文字が確認された。対読の真書体である。

M27は紹聖元寶で、順読の行書体で銭文が鋳出される。

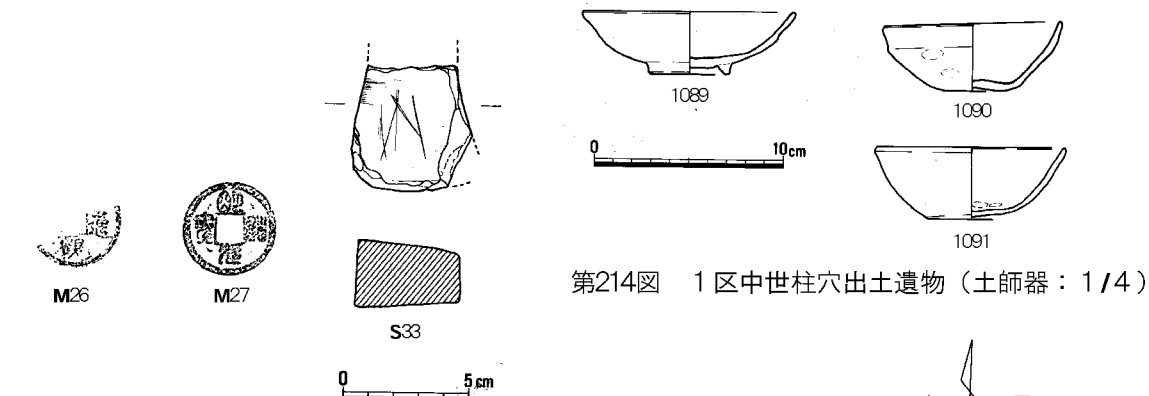
S33は、砂岩製の砥石である。4面すべてに使用による磨滅が認められる。



第211図 1区P 3出土遺物(土師器: 1/4)



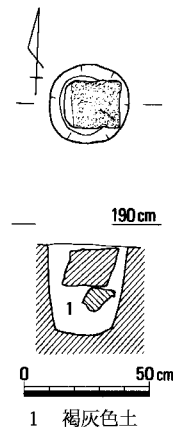
第212図 1区P 4出土遺物(銭貨: 1/2)



第214図 1区中世柱穴出土遺物(土師器: 1/4)

第213図 1区P 5出土遺物(銭貨・砥石: 1/2・1/3)

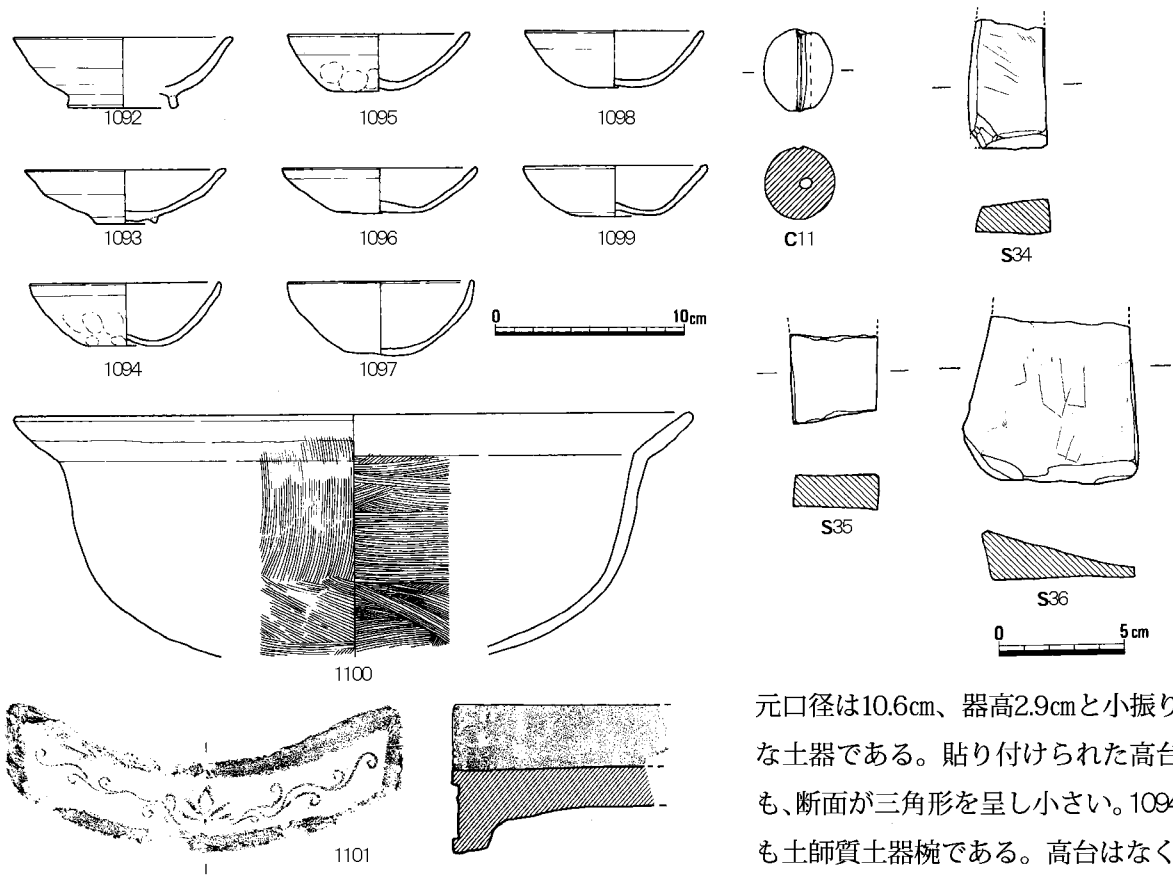
第14図にはいくつかの柱穴から出土した土師器を掲げる。1089は土師器碗で、いわゆる早島式碗の小型化した時期にあたる。高台は比較的安定感がある。1090・1091はいずれも薄手に作られた土師器碗で、いわゆるへソ碗と称されるように揚げ底となっている。1区の微高地部分で検出された柱穴の時期は、おおむね13世紀から15世紀に比定される。第215図は、礎板として平らな花崗岩が置かれた柱穴である。小割にして加工された石材を、下部に小さな根石で支えられた状態で検出した。建築物の不同沈下を極力避けるための工夫と考えられよう。(岡田)



第215図 1区P 6 (1/30)

2区の柱穴出土遺物（第216図）

中世の遺構面からは、建物としてのまとまりはできなかったが、柱穴と考えられる小土壇を多く検出した。それら柱穴から出土した遺物で、図示できたものを紹介する。それにより、中世においてもどのような時期に遺構が集中しているかの傾向が理解できると思う。1092は、土師質土器碗である。復元口径は11.6 cmを測り、貼り付けられた高台もしっかりしている。1093も土師質土器碗である。復



第216図 柱穴出土遺物（土師器・砥石：1/4・1/3）

外口径は10.6cm、器高2.9cmと小振りな土器である。貼り付けられた高台も、断面が三角形を呈し小さい。1094も土師質土器碗である。高台はなく、外底面は揚げ底に作られる。外面下半にはユビオサエがみられる。1095・1096も土師質土器碗である。同じく高台はなく、外底面は少し上げ底に作られる。1097も土師質土器碗である。同じく高台はなく、外底面はほとんど平らに作られる。1098も土師質土器碗である。同じく高台はなく、外底面は少し揚げ底に作られる。1099も土師質土器碗である。同じく高台はなく、外底面は揚げ底に作られる。1100は、土鍋である。口縁部は斜め上方に開きながら立ち上がり、ヨコナデが施される。胴部は、内外面共にハケメ調整であるが、外面は縦、斜め方向に、内面は横、斜め方向に施される。1101は、軒平瓦である。2個の柱穴から出土したものが接合した。瓦当面には、均整唐草文がみられる。外縁の幅は約1.5cmを測り、ほぼ均一の幅で巡る。顎裏面の高さは約2 cmを測る。凹面には、全体に布目痕がみられる。C11は、土錘である。球形に近い形状を呈している。外面に1条の溝が刻まれるが、半周のみである。S34～S36は、砥石である。完形品はないが、よく使い込まれており、使用することによる変形がみられる。

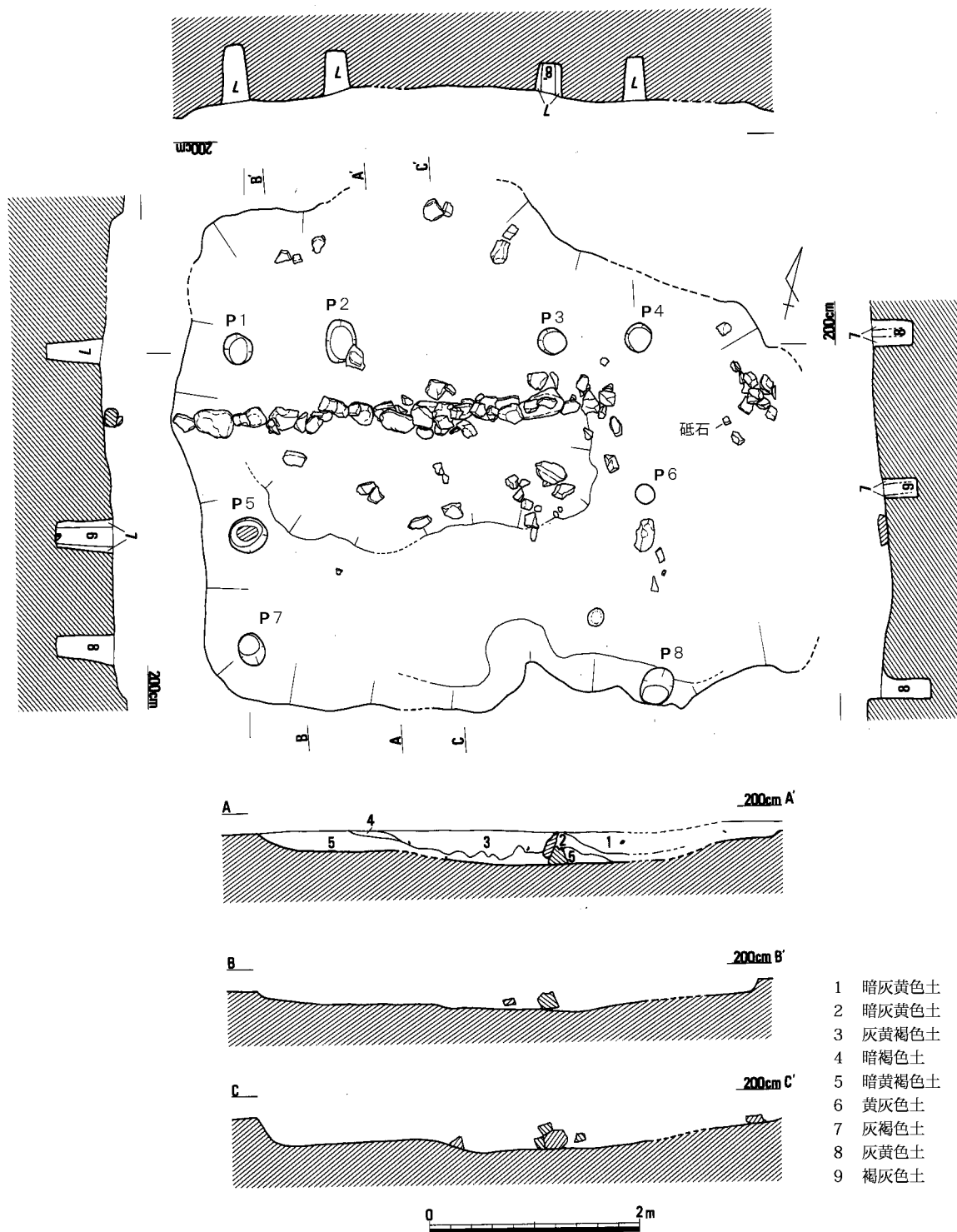
2区の柱穴から出土した遺物を概観したが、14・15世紀に属すると考えられる遺物の方が量的に多い。それに比べて、鎌倉時代前半期の遺物は僅少である。鎌倉時代後半頃の遺物が少しみられる傾向がある。このように14・15世紀の遺物が多いことは、2区の中世は、その時期に最盛期があったものと推測される。

（井上）

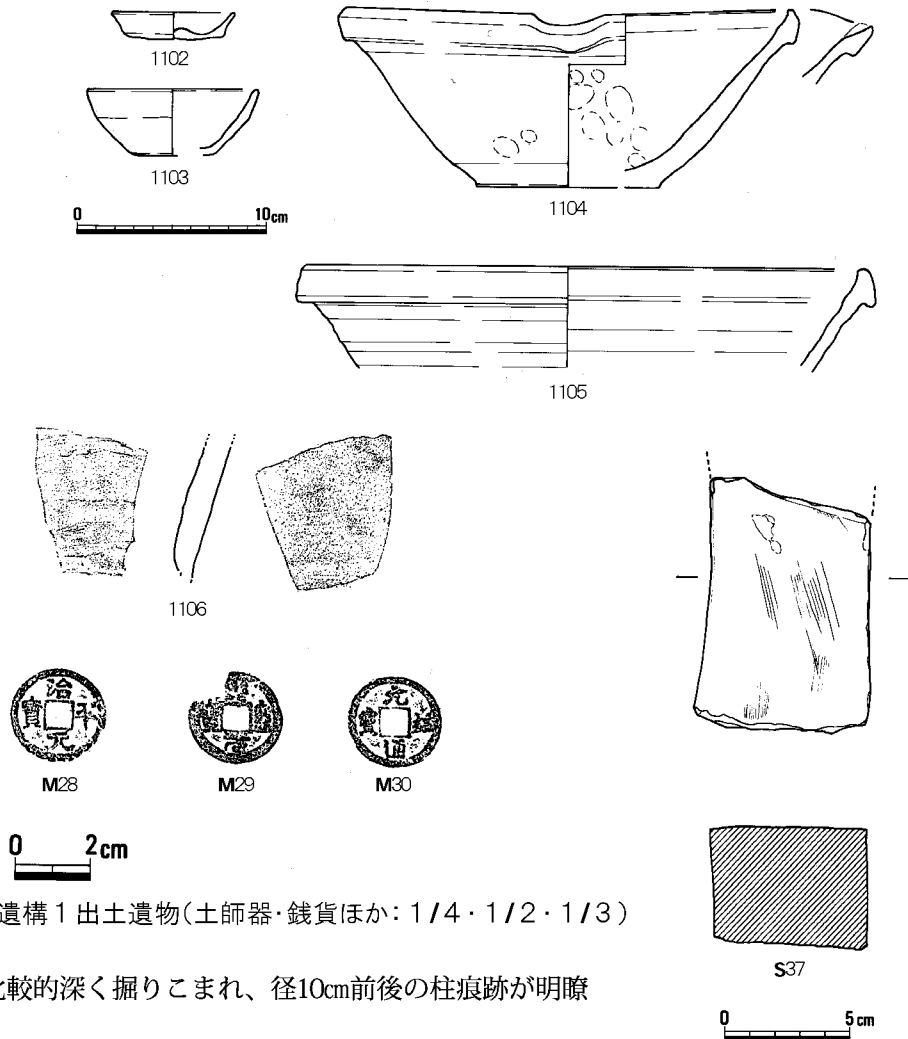
4 竪穴遺構

竪穴遺構 1 (第193・209・217・218図、図版66・67)

1区の中央東寄りで見出された、いびつな隅丸長方形を示す竪穴遺構である。東西約6m以上、南北約4~5m、深さ約30cm前後を測る。床面は平坦ではなく、緩やかな窪地となり、P1~8の柱穴が見出された。P1~4は東西に直線的に並び、南側のP5~8とともに覆屋を形成するものと思わ



第217図 竪穴遺構 1 (1/60)



第218図 竪穴遺構1出土遺物(土師器・銭貨ほか: 1/4・1/2・1/3)

れる。柱穴は比較的深く掘りこまれ、径10cm前後の柱痕跡が明瞭に観察される。

P 1～4の柱列に平行して、その南側に小児頭大の花崗岩を直線的に並べた石列が現れたが、その構築された目的や用途・機能については明らかではない。半数の花崗岩は被熱による赤変が認められ、現状での加熱の可能性も考えられたが、床面では被熱痕跡は認められない。したがって、花崗岩の赤変は元の大きな原石を小割りにする際、加熱した際発生した可能性もある。

床面あるいは埋積土中から1102・1103の土師器や、東播系の須恵器捏鉢1104・1105、瀬戸の灰釉陶器1106のほか、M28～30の宋銭、流紋岩製の砥石S37が出土している。

1102は外底部ヘラキリの小皿である。1103はいわゆるヘソ椀で、底部は失われているが、緩やかな体部が丸みをもって上方する。

1104・1105はいずれも口縁部が上下方に拡張する特徴を持つ。1104には片口部分が残存する破片である。1105の口縁部には自然釉がかかっている。

1106は瀬戸の灰釉陶器壺で床面に密着した状態で出土している。特徴的な白っぽい胎土が使用され焼成も良好堅緻な製品で、外面には灰緑色の自然釉が観察される。

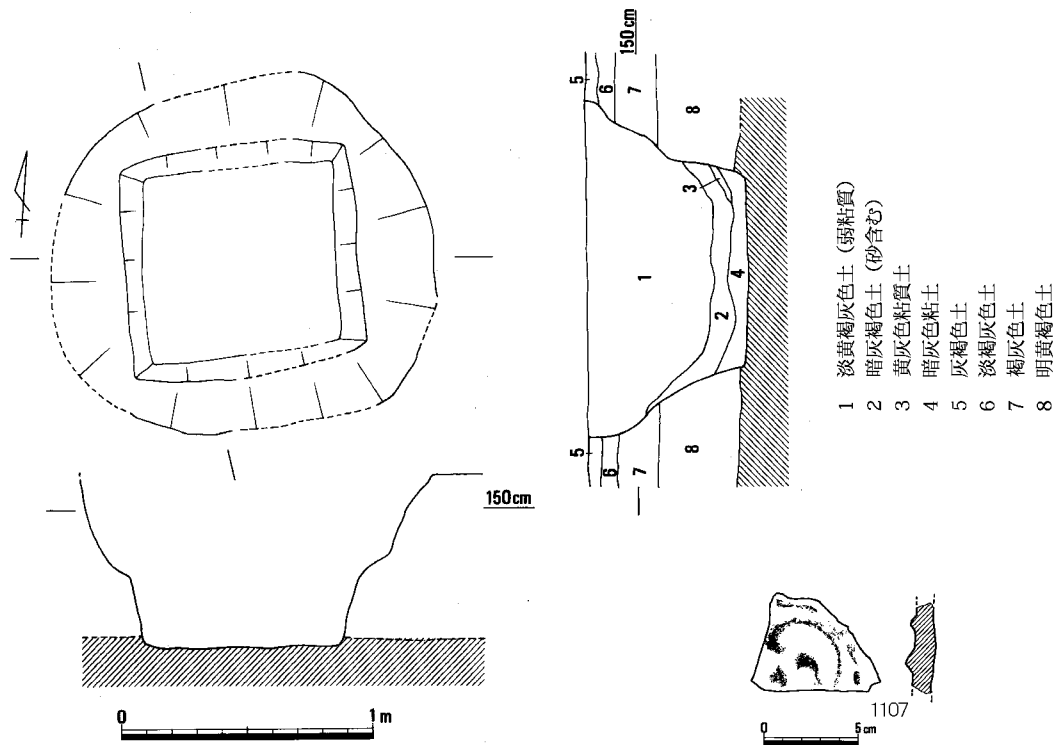
砥石S37も床面で出土しているが、この遺構が何らかの工房のような機能を持っていたことを示唆するが、金属製品やそれに関連する遺物は認められなかった。(岡田)

5 井戸

井戸16 (第209・219図)

1区の北西隅で検出された井戸で、溝43を切る。上面の掘り方は不整な円形を示すが、井底はあらかじめ95cm四方のほぼ正方形に整形されている。残存する深さは約60cmと浅い。

出土遺物は1107の軒丸瓦が下層から出土している。瓦当の中房部分のみが残存し、三つ巴文が観察される。燻し瓦のような焼成を示すが、類例は亀山焼の中にも散見するので、備中西部からもたらされた可能性が高い。室町時代、15世紀前後に比定される。(岡田)



第219図 井戸16・出土遺物(1/30・1/4)

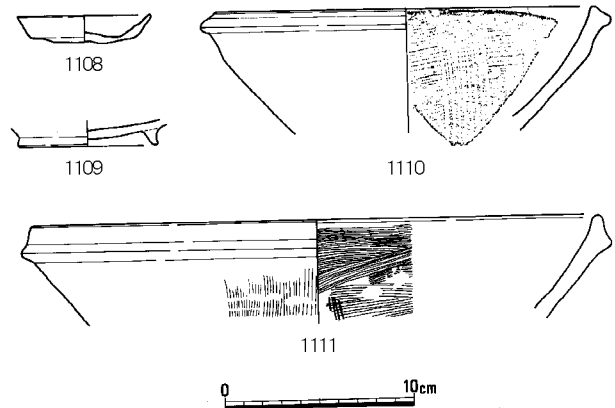
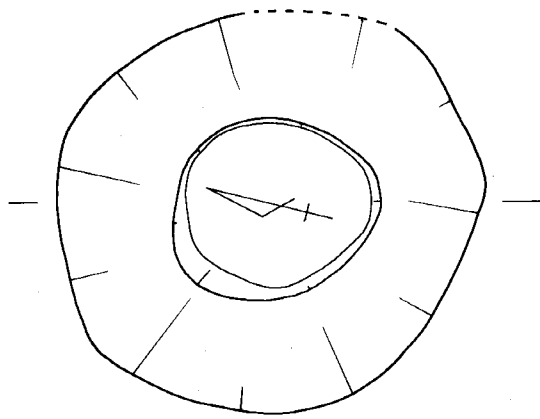
井戸17 (第194・220・221図、図版69)

2区の北辺に検出した。平面形は円形を呈するもので、検出面での規模は、長径2.23m、短径2.15mを測る。井戸の断面図を描くために南側半分を掘り下げて底面まで確認していたが、図面を描く前に壁の一部と共に崩落した。そのために断面図は、作成していない。調査中の観察から井戸の断面を復原すると、断面図に破線で示したように、上半は大きく開き、下半はほぼ垂直に掘られる。石組み、木質などはみられなかった。検出面からの深さは1.98mを測る。出土遺物をみると、1108は土師器の小皿である。外底面はヘラオコシが施される。1109は内黒の土器である。高台は貼り付けられる。1110は瓦質土器の播鉢で、内面に粗いハケ調整の後8本単位の卸し目がみられる。1111は土師質の播鉢である。井戸の時期は13世紀代と考えられる。(井上)

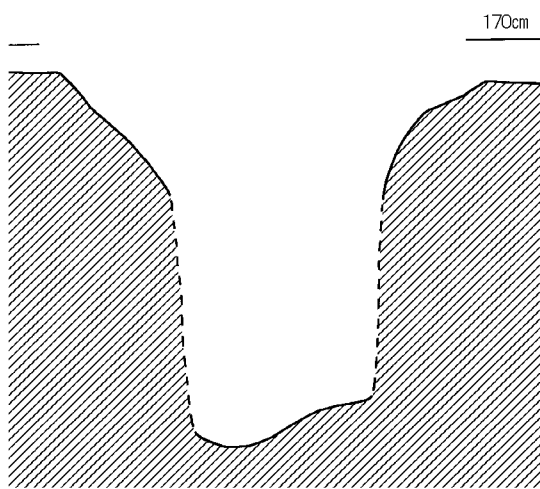
6 土壇

土壇15 (第209・222図)

1区の中央部東よりで検出された、不整な円形を示す浅い土壇である。土壇19までの土壇と共通す



第221図 井戸17出土遺物(1/4)



第220図 井戸17(1/40)

るのは、淡褐灰色の粗砂で埋積していることである。出土遺物な皆無である。(岡田)

土壌16 (第209・222図)

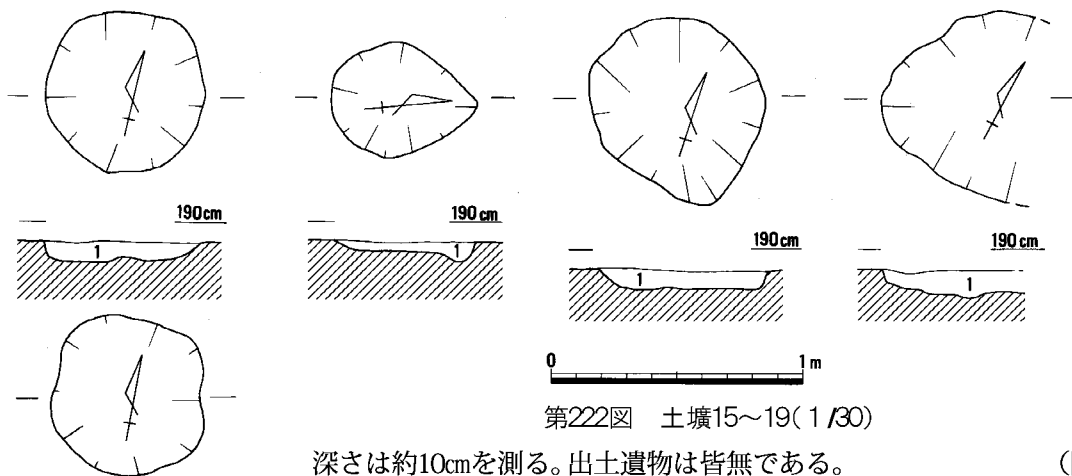
土壌15と土壌17にはさまって検出されたいびつな浅い土壌である。ほかの土壌と埋積土は共通するが、もっとも浅い。(岡田)

土壌17 (第209・222図)

土壌16の東側に近接して検出された。いびつな長円形を示す。埋積土はほかの土壌と同様粗砂で埋没する。(岡田)

土壌18 (第209・222図)

調査区の端にかかり、全体のおよそ半分が検出された。全形は最大の土壌であることを示す。

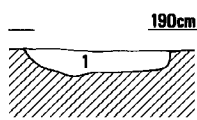


第222図 土壌15~19(1/30)

深さは約10cmを測る。出土遺物は皆無である。(岡田)

土壌19 (第209・222図)

土壌18の西側で検出された。ほかの4基の土壌群の西側にあたる。出土遺物はほかの土壌同様認められない。共通している、粗砂の埋積は一時期に河道が増水による土壌の水没を物語る。時期的には、土壌20とほ



1 淡褐灰色粗砂

ば同時期、室町時代14・15世紀代に比定される。

(岡田)

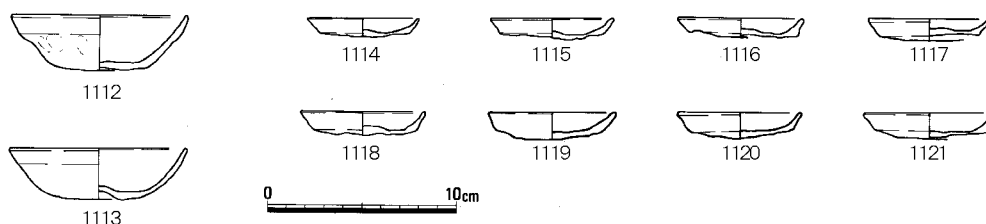
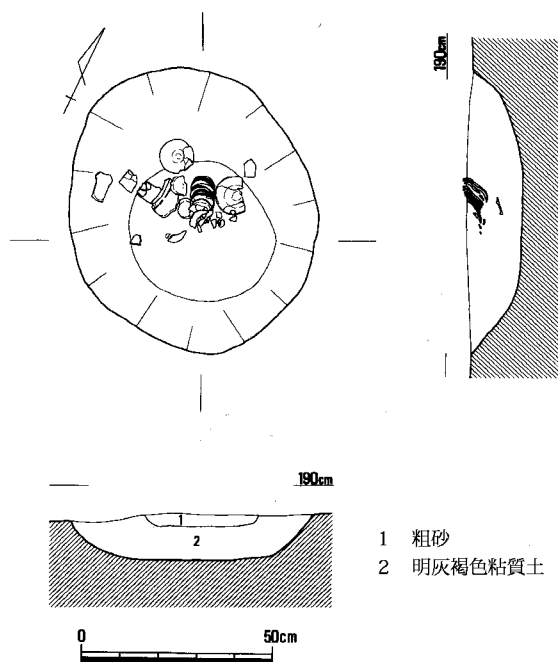
土壌20 (第209・223図、図版69)

竪穴遺構1の北側約2mで検出されたやや不整な円形を示す浅い土壌である。土壌15~19と共通する埋積土である淡褐灰色の粗砂が第1層にあたる。

中央部やや北寄りで土師器が集中的に出土している。1112・1113は椀で、いわゆるヘソ椀ともいわれる。外底部が揚げ底になる特徴がある。

1114~1121はいずれも小皿である。口径約5~7cmを測り、外底部へラキリが特徴である。ほかに数個体の破片がみられたが、一括重ねて埋納された可能性が高い。

以上の土師器の埋納状態は、地鎮あるいは鎮



第223図 土壌20・出土遺物(1/30・1/4)

壇的な祭祀に伴うことが考えられ、先に触れた柱の抜き取り穴への土師器埋納や、銭貨の埋納も共通する行為かもしれない。時期的には、室町時代それも溝43とほぼ同時期の15世紀に比定される可能性が高い。

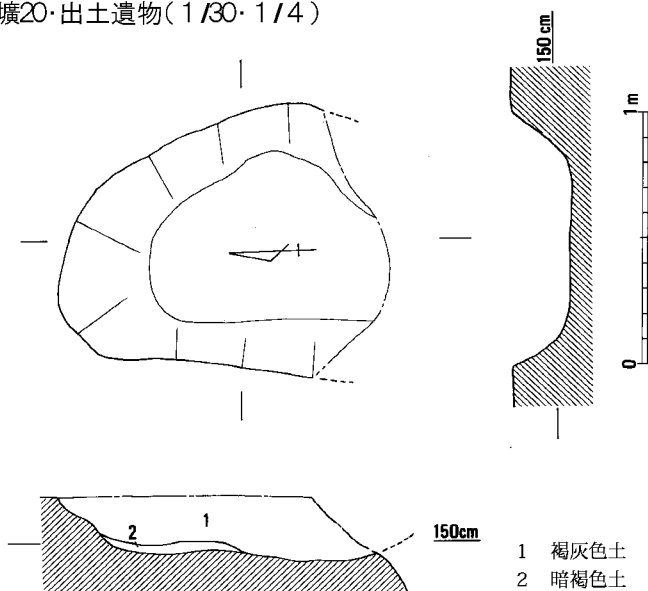
(岡田)

土壌21 (第209・224図)

1区の南端、溝43に切られた状態で検出された土壌の一部である。

出土遺物は皆無で、時期的な断定はできないが、埋積土から中世に比定される可能性が高い。

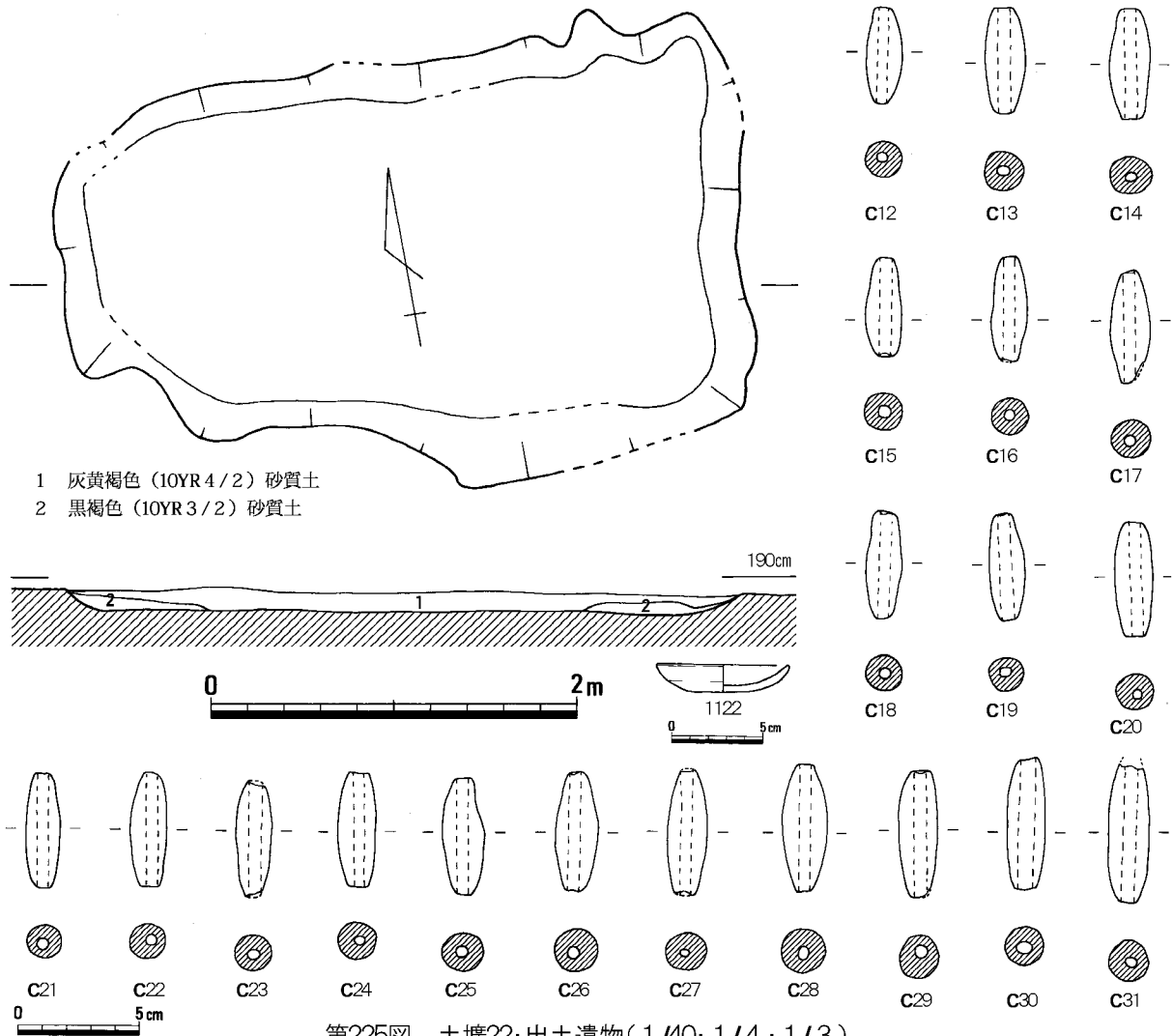
(岡田)



第224図 土壌21(1/30)

土壌22 (第194・225図)

掘立柱建物14と重なる位置に検出した。平面形は、定形ではないがおおむね長方形に近い形状を呈している。長軸は東西方向を向くもので、3.76mを測る。短辺は、1.94~2.4mを測る。検出面からの深さは11~13cmを測る。断面形をみると、壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。埋まる土



第225図 土壙22・出土遺物(1/40・1/4・1/3)

は、斜面に沿った部分に黒褐色の砂質土が堆積し、ほとんどは灰黄褐色の砂質土である。土壙の北西角付近から土鍾がまとまって出土したが、土器の出土はごく少量であった。

1122は、土師器の小皿である。外面の下半に軽いユビオサエがみられる他は、ナデによる調整がみられる。C12～C31は土鍾である。平面形が楕円形を呈するもので、長軸方向に円孔がある。最大径は中央部にあり、その胴部最大径は、1.4～1.75cmを測る。長さは、4.75～5.7cm、重さは、8～17gを量る。土壙の時期であるが、明確ではないが14・15世紀頃と推測される。(井上)

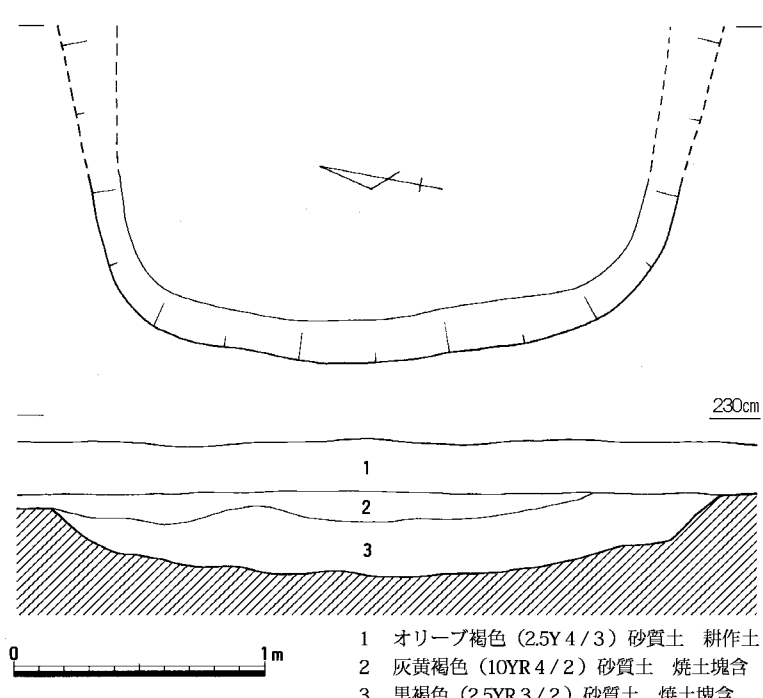
土壙23 (第194・226図)

土壙22に接して東側に検出した。調査区の東端に検出し、一部調査区外に延びるため全体の規模は不明である。平面形は、隅丸方形を呈するものと推測される。検出した最大長は2.64m、検出面からの深さは33cmを測る。時期は土壙22と同じ頃と考えている。(井上)

土壙24 (第194・227・228図)

2区のほぼ中央部に検出した。平面形は方形を呈するものである。長辺94cm、短辺92cmを測る。壁はやや急な斜面を持ち、底面は平坦である。検出面からの深さは13cmを測る。

1123は、備前焼の播鉢である。口縁端部が上下に拡張し、端面は傾斜する。内面には7条一単位の卸し目がまばらに施される。土壙の時期は、14世紀に属するものと考えられる。(井上)

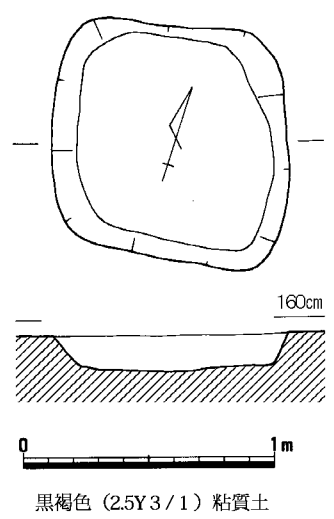


第226図 土壌23(1/30)

- 1 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂質土 耕作土
- 2 灰黄褐色 (10YR 4/2) 砂質土 焼土塊含
- 3 黒褐色 (2.5YR 3/2) 砂質土 焼土塊含

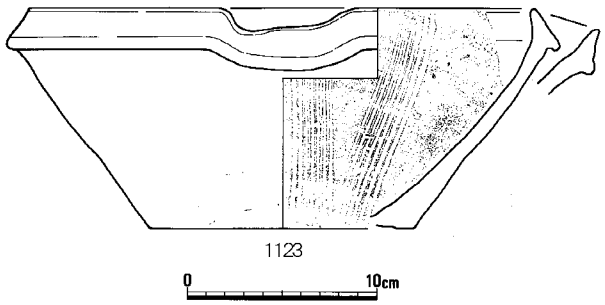
土壌25 (第194・229図)

2区の中央部東端に検出した。溝45と側溝に切られ、調査区外に広がることから、平面形は不明な部分が多いが、土壌23に似た形状を示すものと考えられる。調査区の東壁面に土壌の断面をみる事ができた。それによると、断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。壁面での幅2.48m、深さ26cmを測る。土壌の時期であるが、時期を明確に示す出土遺物がないが、周辺の状況からすれば、土壌24に同じか近い時期と考えられる。(井上)



第227図 土壌24(1/30)

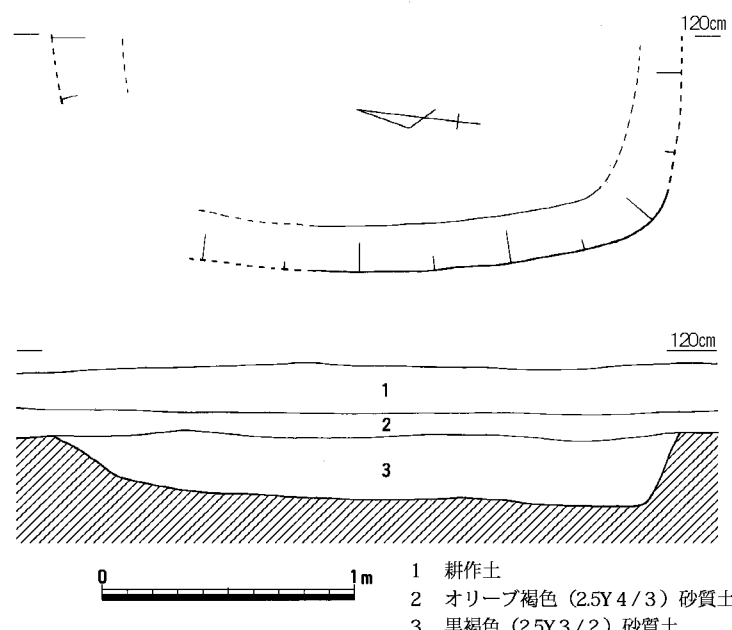
- 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘質土



第228図 土壌24出土遺物(1/4)

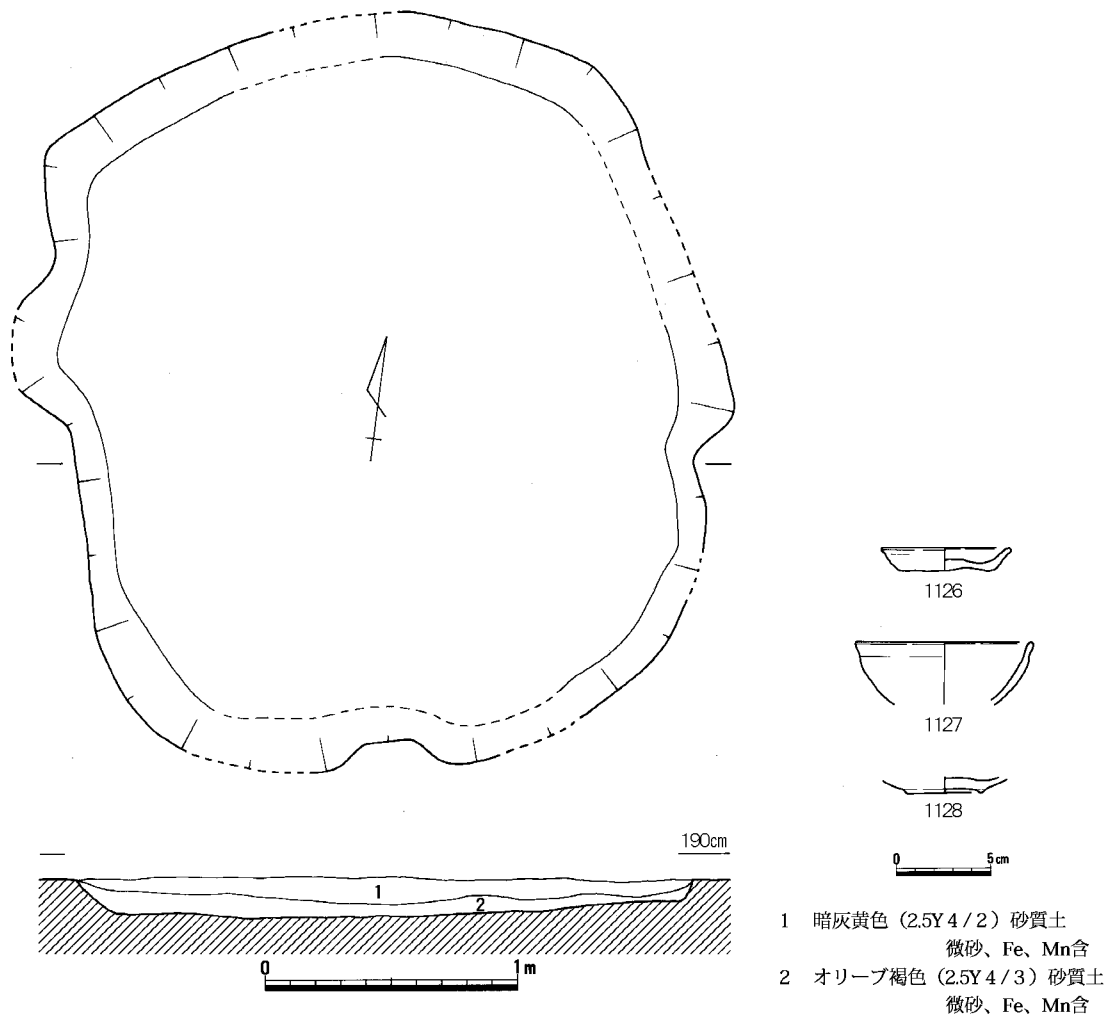
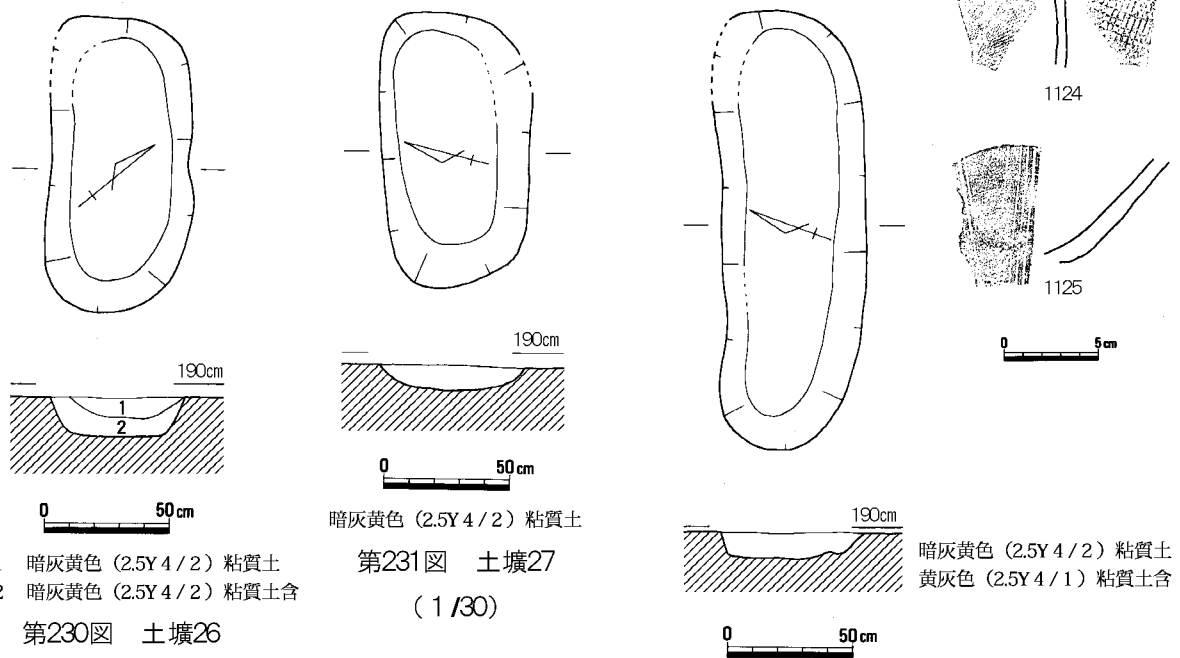
土壌26 (第194・230図)

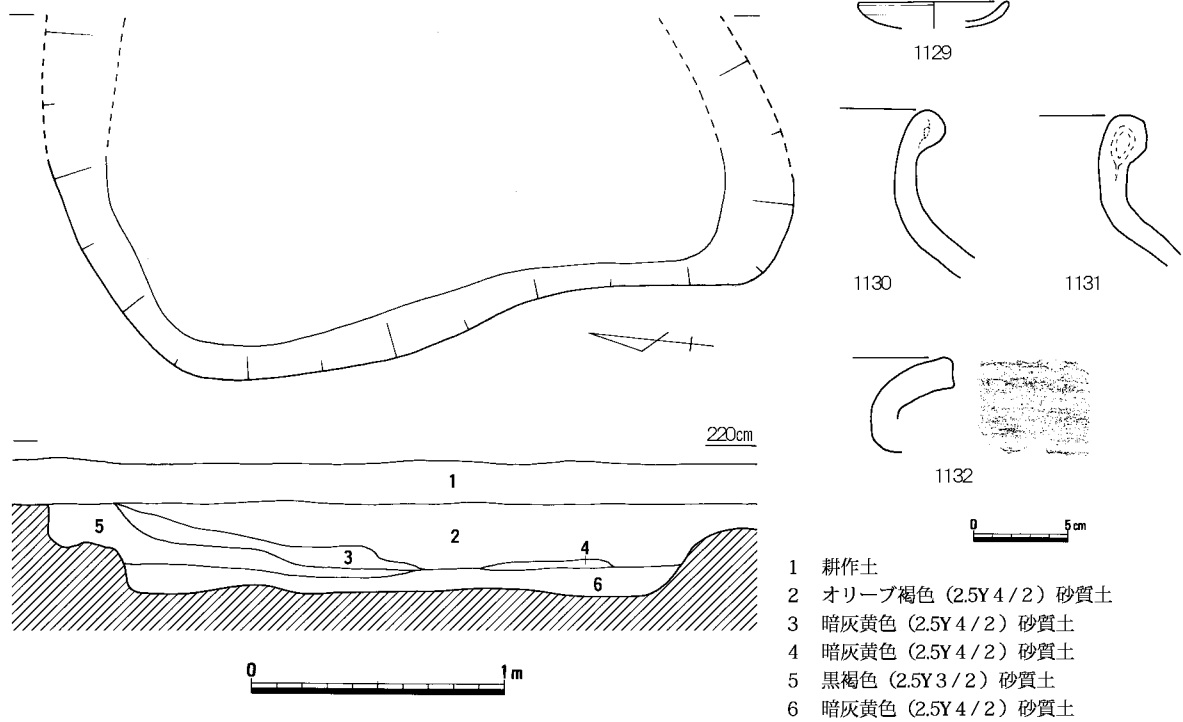
土壌25の西約5mの位置に検出した。平面形は、楕円形を呈するもので、長径1.19m、短径58cmを測る。断面形は、逆台形を呈しており、底面は平坦である。検出面からの深さは15cmを測る。土壌の時期は、14・15世紀と考えられる。(井上)



第229図 土壌25(1/30)

- 1 耕作土
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂質土
- 3 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂質土





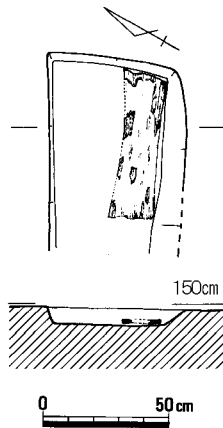
第234図 土壙30・出土遺物 (1/30・1/4)

土壙27 (第194・231図)

土壙26の南東約4.5mの位置に検出した。平面形は楕円形を呈するもので、長軸の方向は東西方向に近い。土壙の規模は、長径1.09m、短径59cmを測る。断面形は浅い椀形に窪むものである。底面もわずかに窪んでいる。検出面からの深さは9cmを測る。出土遺物が僅少であり、時期を明確に示すものがないが、調査の状況から、14・15世紀に属すると考えられる。(井上)

土壙28 (第194・232図)

土壙27の南南西約2mの位置に検出した。平面形は長楕円形を呈する。土壙の規模は、長径1.76m、短径56cmを測る。断面形は、逆台形を呈しており、底面は平坦である。検出面からの深さは9cmを測る。1124は、亀山焼の甕の胴部である。内面はハケメ、外面は格子目のタタキが施される。1125は、土師質土器の播鉢である。内面に卸し目が施されるが、使用のため一部が消えかかっている。時期は、14・15世紀と考えられる。(井上)



黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘質土

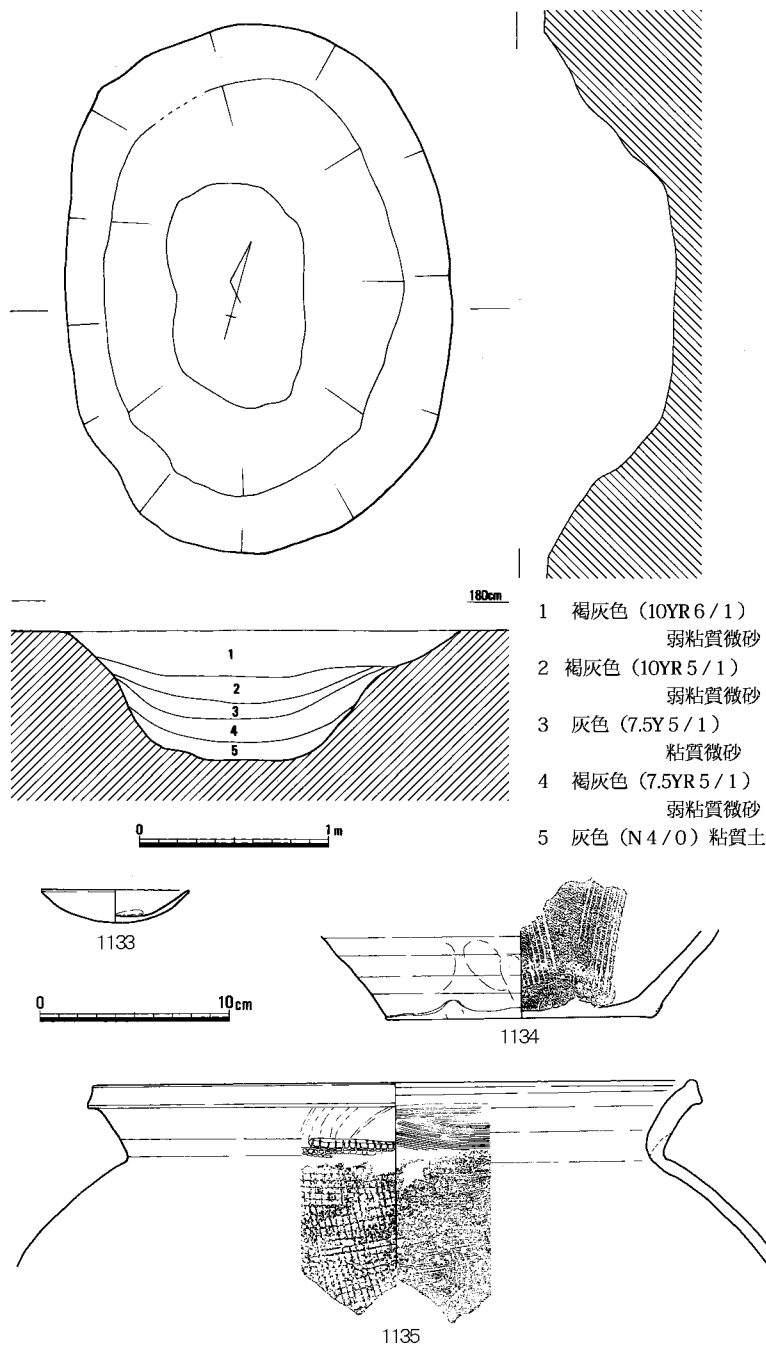
第235図 土壙31 (1/30)

土壙29 (第194・233図、図版70)

2区の南東部、土壙27の北約1mの位置に検出した。平面形は、円形に近い形状を呈する。土壙の規模は、長径3m、短径2.83mを測る。断面形を見ると、逆台形に近い形状を呈しているが、扁平である。底面は、わずかに窪んでいるが平坦に近い。検出面からの深さは、もっとも深い部分で16cm、壁際の浅い部分で9cmを測る。1126は、土師質土器の小皿である。外底面はヘラオコシ、他の部分はヨコナデが施される。1127は、中世土師質土器椀である。外面に布目痕跡と思える跡がみられる。口径は、9.4cm程度と小型である。1128は、中世土師質土器椀の底部である。底面には、高台が貼り付けられる。時期は、14世紀頃と考えられる。(井上)

土壙30 (第194・234図)

土壙27の東約1mの位置に検出した。調査区の端に位置しており、調査区外にも広がることから一部しか検出していない。そのため、全体の形状は不明である。検出した最大幅は2.97mを測る。断面形は逆台形を呈するものであるが、一部に段を有する。検出面からの深さは、34cmを測る。1129は土師質土器の小皿である。1130・1131は、備前焼の甕である。口縁端部は玉縁に作られる。1132は、亀山焼の甕である。外面に格子タタキが施される。時期は14・15世紀と考えられる。(井上)



第236図 土壙32・出土遺物 (1/40・1/4)

土壙31 (第194・235図)

立柱建物17の南東角の柱穴に重なるような位置に検出した。しかし、西側が削平されているために、その前後関係は不明である。土壙の平面形は長方形を呈するものであるが、一部削平されているので全体の規模は不明である。検出状態で大きさは、長辺80cm以上、短辺54cmを測る。底面は平坦で、床面に残存状態は悪いが、長さ58cm、幅16cmの範囲に木質を確認した。土壙の時期は、14世紀頃と推定される。(井上)

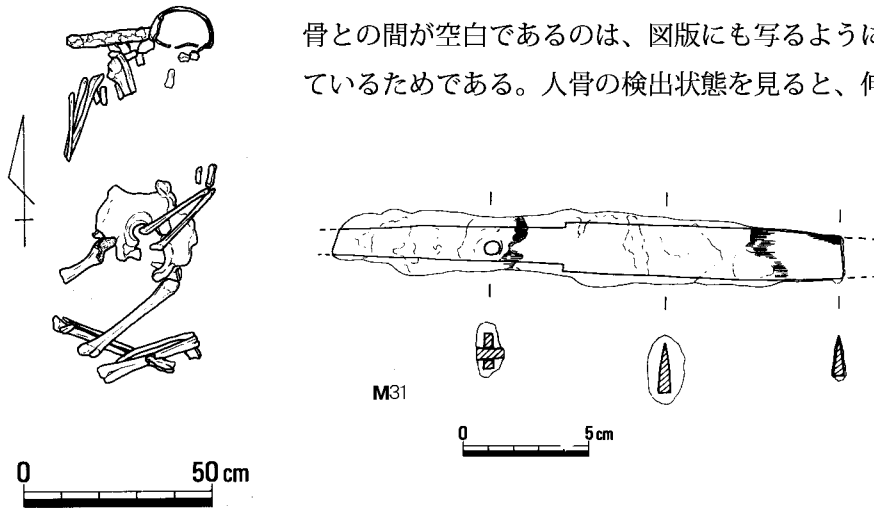
土壙32 (第195・236図、図版70)

3区中央東側に位置し、現代水田層直下で検出した。平面は南北に長い楕円形で、検出面で南北2.78m、東西2.04mである。断面は椀状を呈し深さは69cm、底面の標高は91cmを測る。掘り方には検出面から深さ20~25cmの所に傾斜の変換がみられ、そこから外側に開いている。土層は5層に分かれるが、第1・2層から5~20cm大の礫と土器が、第4・5層からセンダンの種子が出土した。遺物には図示した以外に瓦質土器片・鉄釘もある。1133は土師器皿であるが丸底である。内外面磨滅で調整がわかりにくい、内面にユビオサエがある。1135は亀山焼で、口縁部が直立気味、肩部内面は同心円タタキの上をハケメで消している。時期は15世紀~16世紀前半であろうか。(氏平)

7 墓

墓1 (第194・237図、図版68)

2区中央部より少し北よりの位置に検出した。耕作土直下の中世遺構検出時には発見できなかった。しかし、その面で検出した柱穴を掘り下げ中に歯牙が出土した。そこで、その柱穴の掘り下げは、中断していた。その後、全体を約20cm掘り下げているときに人骨を検出した。人骨に関係する土壌の掘方を探したが、検出はできなかった。人骨は、幅約45cm、長さ約1mの範囲に収まること、骨の移動



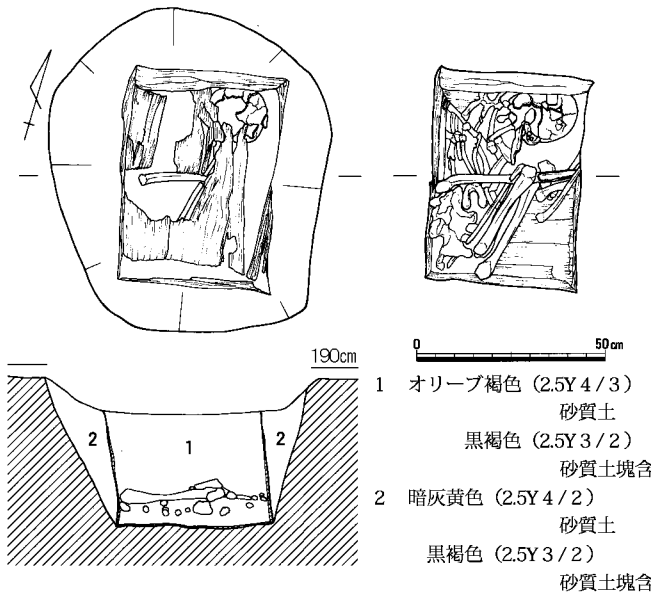
第237図 墓1・出土遺物(1/20・1/3)

がないことなどから土葬と考えられる。第237図にみるように、頭蓋骨と寛骨との間が空白であるのは、図版にも写るように新しい柱穴により切られているためである。人骨の検出状態を見ると、伸展葬ではなく、足は膝を

折り曲げている。検出できた骨は、頭蓋骨、上腕骨、前腕骨、寛骨、大腿骨、下腿骨などである。しかし、残存状態は悪く、取り上げるときにほとんどその形状を残さなかった。M31は、

頭蓋骨の下から出土した刀である。刃部も先に向けて細くなる状況が窺えるため、小刀の可能性が高い。一部に木質や、柄の目釘が残っており太刀拵えの状態で副葬されていたと考えられる。時期は、13世紀と推定される。(井上)

墓2 (第194・238図、図版69)



第238図 墓2(1/20)

2区の南端部に検出した。耕作土直下の中世遺構検出時に発見したものである。検出したのは、平面形が長円形を呈する土壌である。土壌の規模は、長径86cm、短径72cmを測る。掘り下げると木質が出土した。丹念にそれを追うと、骨と長方形の木棺が

出土した。木棺の規模は、長辺57cm、短辺

41cm、深さ30cmを測る。木棺内からは、1体分の人骨が出土した。人骨は、頭を北にして、下肢を胸の部分に抱え込むように折り曲げられ、東を向いて横向きに納められていた。検出時には、骨の遺存状態は良好に見えたが、以外に脆弱であったため良好な状態では取り上げられなかった。墓2の時期は、中世後半の16世紀頃と考えられる。

人骨については、大塚先生の所見を付載4に収録しているので、参照して頂きたい。(井上)

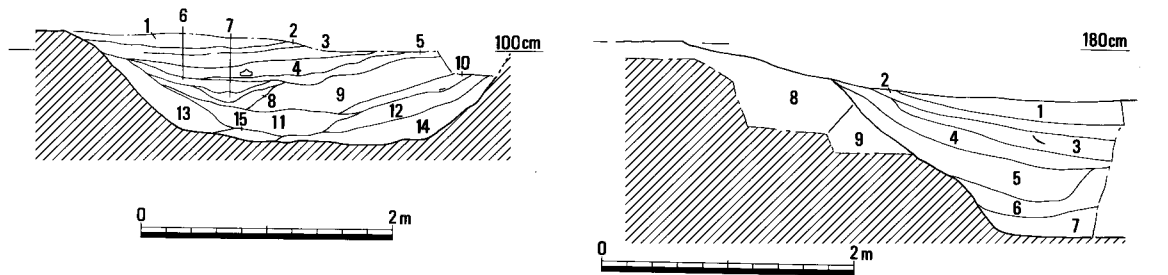
8 溝

溝42 (第193・209・239図、図版66)

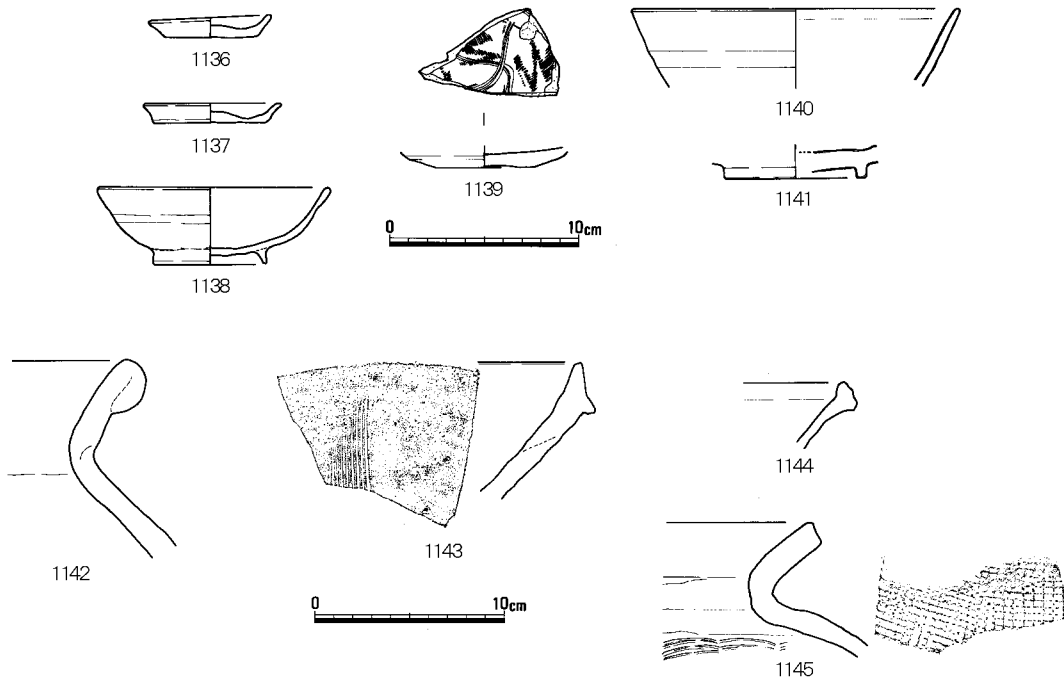
1区の西側で検出された直線のかつ大規模な南北方向の溝である。溝の全容は調査区の制約もあって不明であるが、人工的に掘削された遺構としては中世最大の遺構である。

発掘中は「大溝」と呼称していたとおり、土層断面観察によると幅約4m弱、深さ80cm~1.2m前後を測り、舟入も十分に可能な規模を示している。断面形は逆台形を示し、徐々に埋没していった状況が2か所の土層断面図によって明らかとなった。

第239図の右土層断面図の第3層から備前焼片、第4層から早鳥式椀片が出土しており、この溝がほぼ機能を失ったのは、室町時代中頃前後と考えられる。



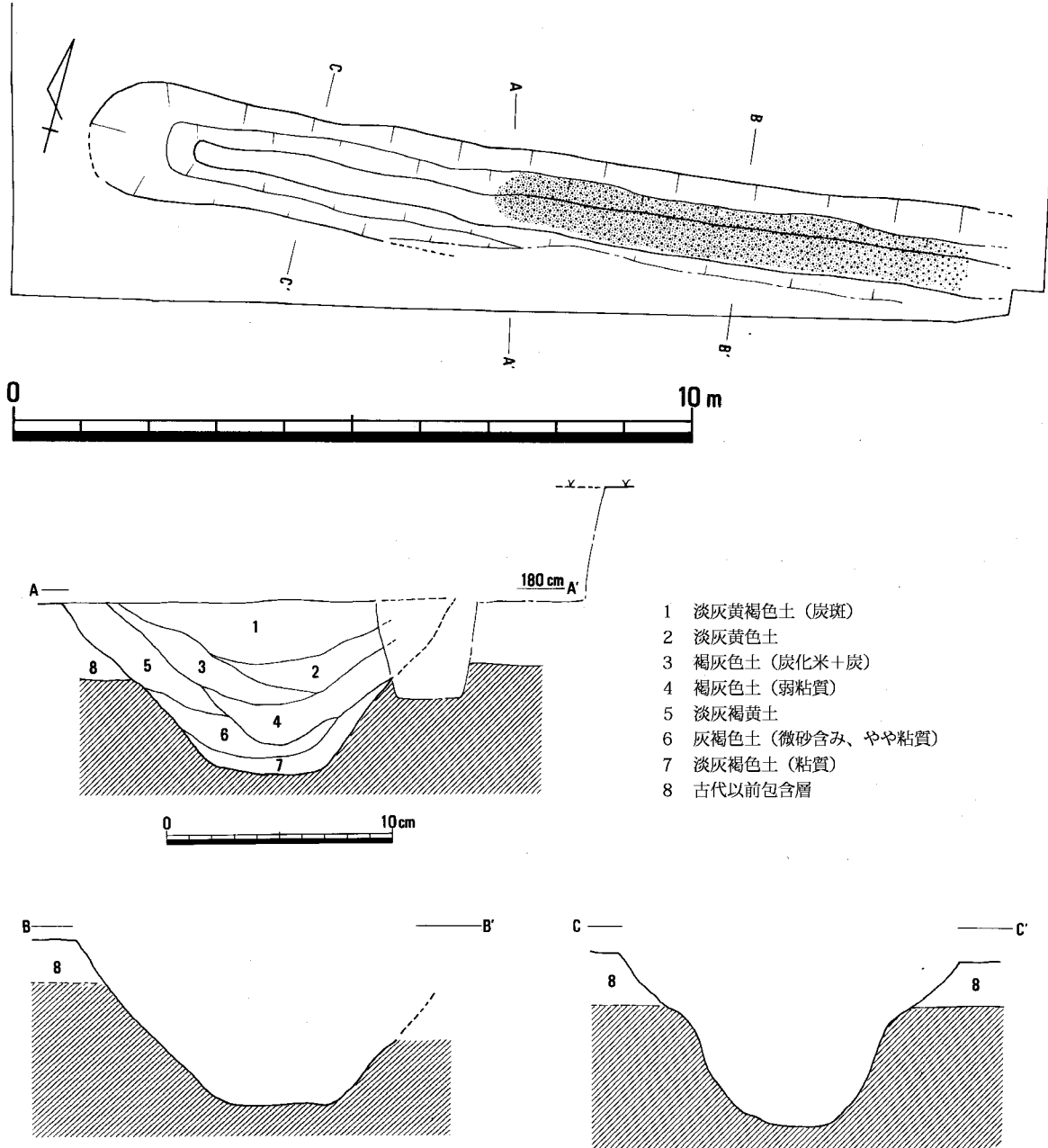
- | | | | |
|-----------------|---------------------|------------------|----------------|
| 1 褐灰色粘質土 | 8 褐灰色砂層+灰色粘質土 | 1 灰褐色土 | 8 明黄褐色土 |
| 2 暗褐灰色粘質土 | 9 暗灰色細砂粘質土 | 2 淡灰褐色土 (黄色土斑含む) | (弥生後期土器多含) |
| 3 褐灰色粘質土 (細砂含む) | 10 灰青色微砂質粘土 | 3 褐灰色土 (黄色土小斑含む) | 9 淡灰褐黄色土 (基盤層) |
| 4 暗灰色粘質土 (細砂含む) | 11 淡褐灰色砂層 (縞状粘質土含む) | 4 灰黄褐色土 | |
| 5 灰褐色粘質土 | 12 淡青灰色粘土 | 5 黒灰色粘土 (炭斑) | |
| 6 灰色粘質土 | 13 淡青灰色粘土 | 6 灰色粘土 (砂塊含む) | |
| 7 青灰色微砂粘土 | 14 灰青色粘土 | 7 青灰色粘土 | |



第239図 溝42土層断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

第8章 中撫川遺跡

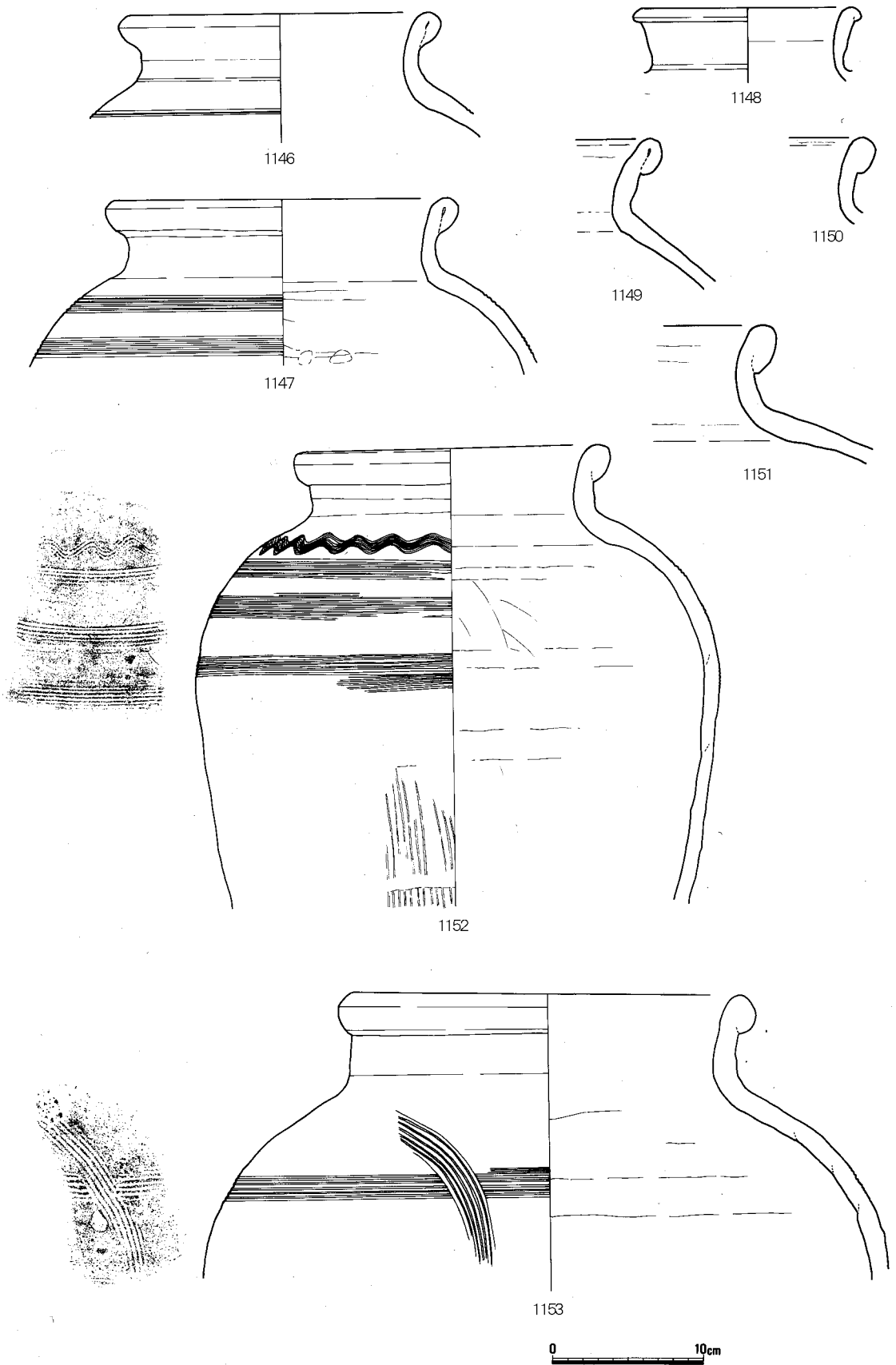
出土遺物は土師器1136~1138、青磁1139~1141、備前焼1142・1143、東播系須恵器1144、亀山焼1145と多種にわたり、しかも生産地も広汎である。1136・1137は小皿である。1138は土師器碗で、いわゆる早島式碗である。口径は約12cm、比較的しっかりとした高台をもつ。1139は青磁皿で、見込みには龍泉窯系の特徴を示す半肉彫りの文様が飾られる。1140・1141は碗で、いずれもガラス質の釉調が観察される。これらはすべて大陸からの輸入磁器である。1144はやや小型の捏鉢である。1145は甕で体部内面には同心円タタキ、外面には格子目タタキが看取される。(岡田)



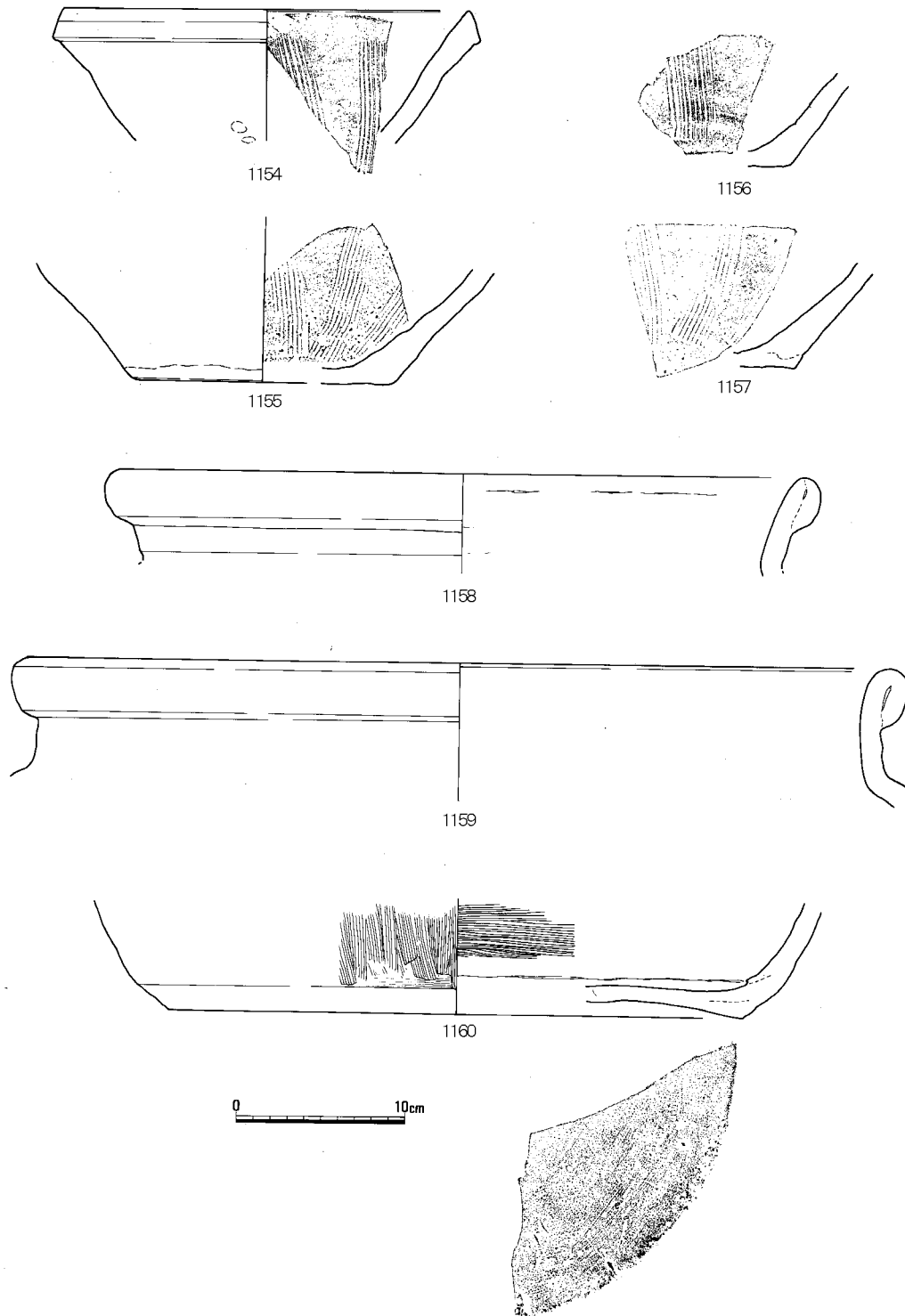
第240図 溝43 (1/100・1/30)

溝43 (第193・209・240~243図、図版71)

1区の南辺で検出された、検出全長約14m、幅約1.7m、深さ70cm前後を測る東西方向を示す直線的な溝である。貫流する溝ではなく、堀というべき形状を示し、溝底は幾分平らで断面形は逆台形を示す。東半分の溝底から北側法面にかけては、炭化穀物の濃密な分布(第240図網目部分)が観察された。



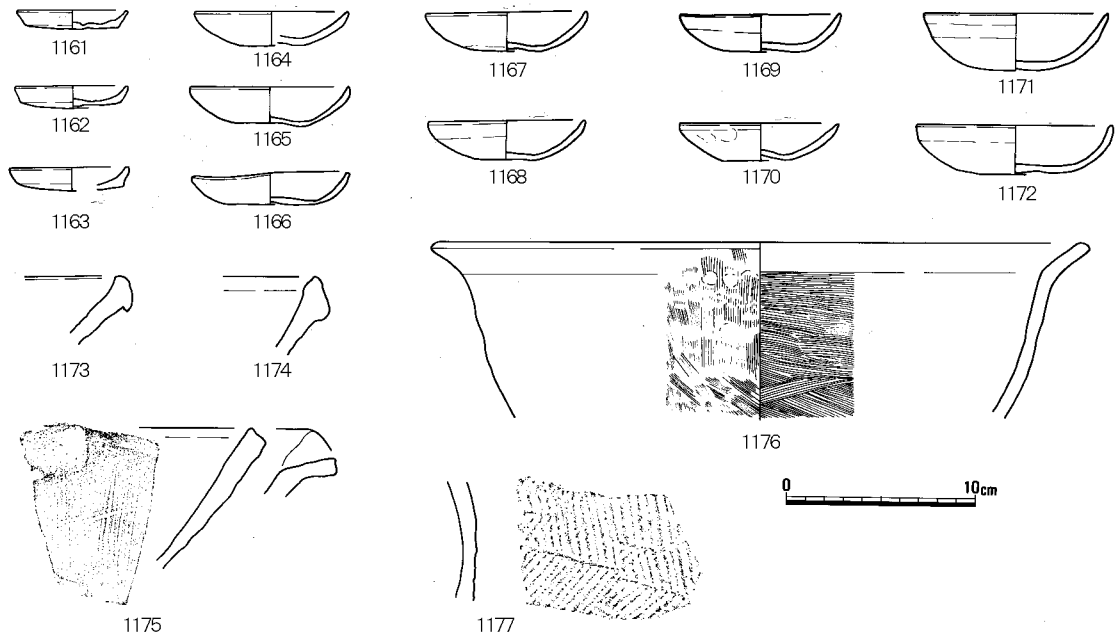
第241図 溝43出土遺物1（備前焼壺：1/4）



第242図 溝43出土遺物2（備前焼播鉢・甕：1/4）

埋積は下層から溝底にかけて顕著で、北側からの流入堆積が認められる。相伴遺物には生活用具としての土器として、土師器や備前焼があるが、大小の焼土塊の出土も目立つ。焼土塊の大半は拳大より小さく、不整形な個体をなし、赤橙色～黄橙色を呈している。中には面をなすものもある。土蔵あるいは土壁のような建築構造物の基礎部分である可能性もあるが、スサのような植物繊維の残痕はほとんど認められない。

炭化穀物については鋭意採集に努め、それらの同定分析については巻末付載3に収載する。



第243図 溝43出土遺物3

(土師器・亀山焼・石製品・鉄釘：1/4・1/3)

第241・242図には、備前焼を掲載する。器種には壺・播鉢・甕があり、いずれも備前焼特有の赤褐色を呈し、焼成堅緻で重量感のある破片が多数出土している。1146～1153は壺である。いずれも直立あるいはやや外方する短い口頸部をもち、口唇部は丸みを持って肥厚する玉縁となっている。

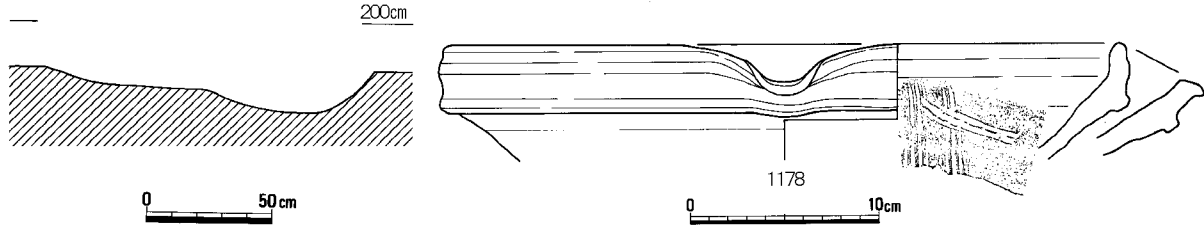
1146・1147には体部上位に平行櫛描き文が飾られ、1152のように波状文を加えたり、平行櫛描き文の上に大胆な袈裟襷文風の文様が加飾される1153もある。播鉢はさほど多く出土はみられない。1154は口縁部を残すやや小ぶりの播鉢である。1155～1157はいずれも体部下半から底部にかけての破片である。いずれも内面は使用による磨滅が認められる。1159・1160は大型の甕と考えられる。

1161～1163は土師器小皿、1164～1172は皿あるいは

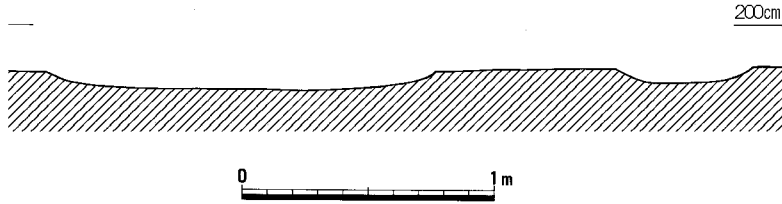
浅い椀と考えられる。1173・1174は東播系の捏鉢、1175は亀山焼の播鉢である。1176は土師器鍋で外面には煤が付着している。1177は東播系の壺で、綾杉状の平行タタキが顕著である。S38は砂岩製で、回転して使用した痕跡があり、茶臼の下臼の可能性が高い。M32は釘の可能性もある。出土遺物はおおむね14～15世紀の範囲におさまる。(岡田)

溝44 (第194・244図、図版70)

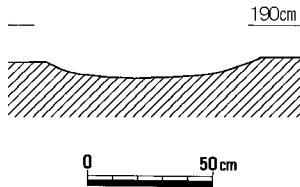
調査区のほぼ中央に検出した。東西方向を向くもので、全長約15mを調査した。幅は、約1.3mを測る。1178は、備前焼の播鉢である。時期は、15世紀頃と考えられる。(井上)



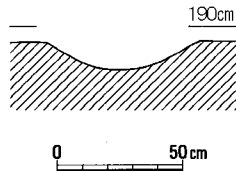
第244図 溝44断面図・出土遺物 (1/30・1/4)



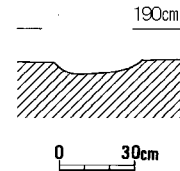
第245図 溝45断面図 (1/30)



第246図 溝46断面図 (1/30)



第247図 溝47断面図 (1/30)



第248図 溝48断面図 (1/30)

溝45 (第194・245図、図版70)

溝44に平行して南側に検出した。東西方向を向く溝で、全長約12mを調査した。溝は、浅く窪むもので、幅は約1.55m、検出面からの深さ約10cmを測る。出土遺物が僅少であるので明確な時期は不明であるが、調査時の観察から、溝44と同じか、非常に近い時期と考えられる。(井上)

溝46 (第194・246図)

溝45の西端に、それに直行する状態で検出した。南北方向を向くもので、全長約17mを調査した。溝は、浅く窪むもので、幅約85cm、検出面からの深さ8cmを測る。この溝は、溝45と1本に繋がる可能性が大きい。溝の南端部で、たわみ6につながる取水口状のものを検出した。たわみ6が水田であれば用水としての機能が考えられる。溝の時期は、溝45と同じ時期とすることができる。(井上)

溝47 (第194・247図)

溝46の東約3mの位置に検出した、南北方向で、溝46とほぼ並行する状態である。検出した溝の全長は約8mを測る。溝の幅は約20cm、検出面からの深さは約8cmを測る。溝の時期は、出土遺物がほとんどないので明確ではないが、検出時の観察から溝44に近い時期と考えられる。(井上)

溝48 (第194・248図)

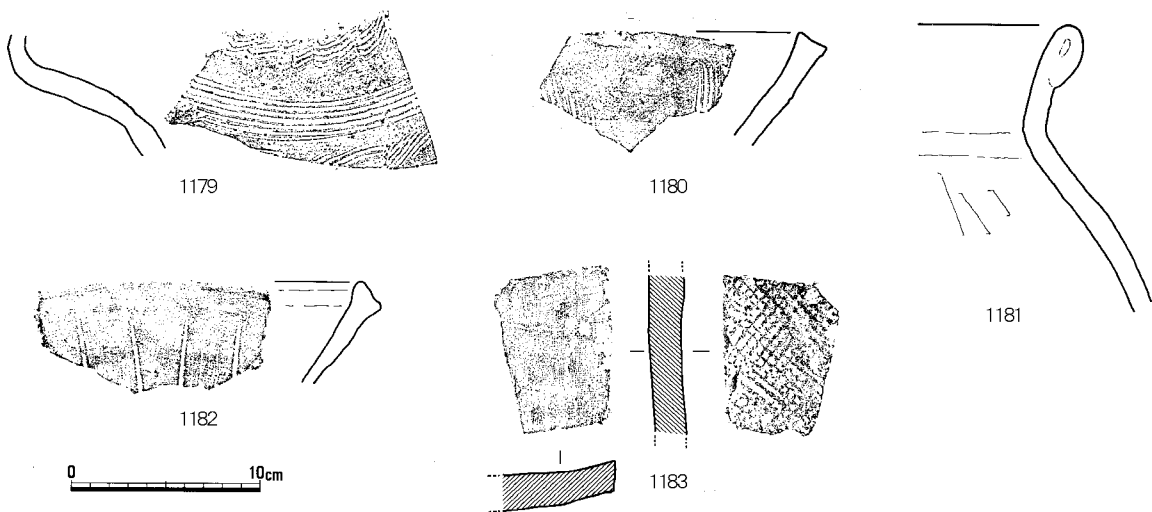
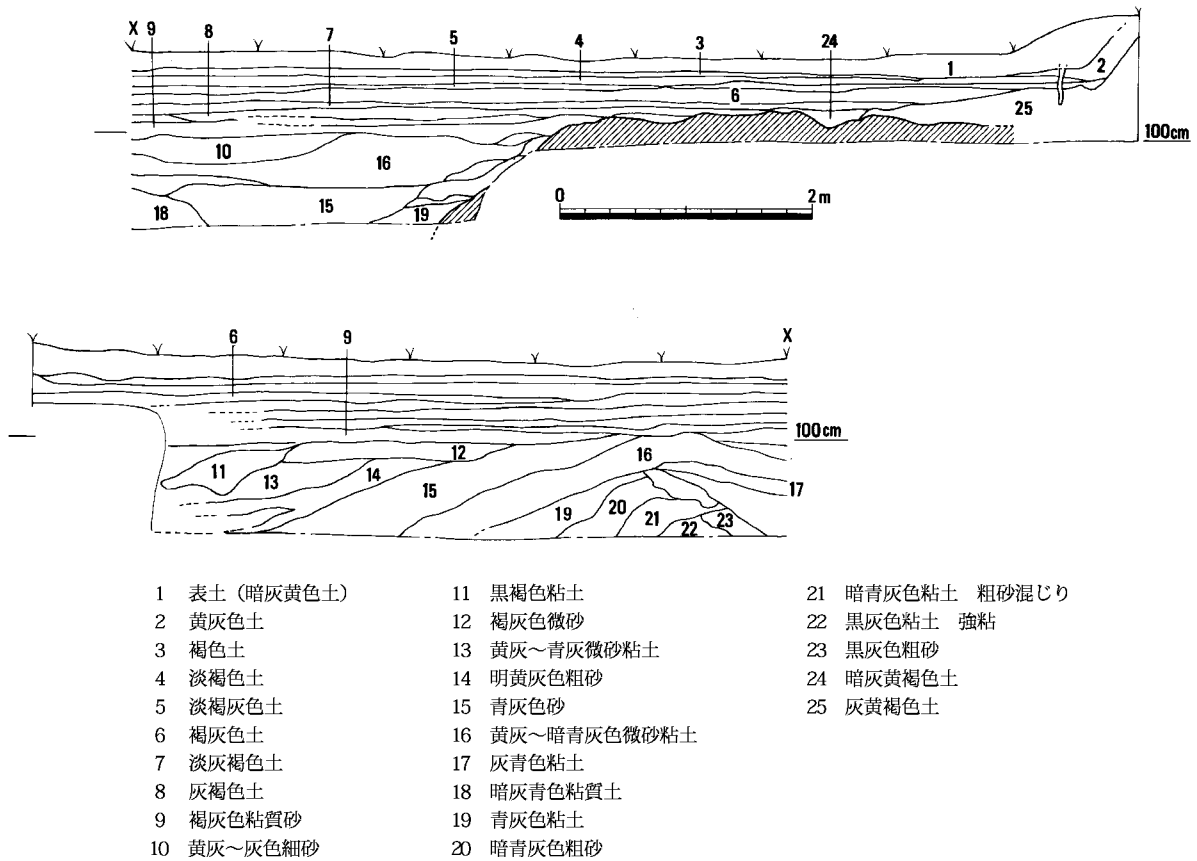
溝47の南端に、直行するように検出した。東西方向を向く溝の全長約5mを調査した。溝は、直進するものではなく、少しうねりながらさらに東に延びて調査区外に続くものである。溝の幅は約34cmを測る。溝は、浅く窪むもので、検出面からの深さは約5cmを測る。溝の時期は、出土遺物がほとんどないため、明確ではないが、検出時の観察から溝47とほぼ同時期と考えられる。(井上)

9 河道 (第193・209・249、図版66)

河道は北岸は川入遺跡に位置し、対岸である南岸が1区の北半を占めて検出された。

第249図の土層断面図では河道が徐々に埋積していった状況がうかがえるとともに、現在の地表面の状態も約40cm前後の段差があり、現地表の観察や航空写真によっても旧河道の存在を十分に認識することができる。

河道の埋積土はほとんどすべて砂層で形成されているが、第22層は黒灰色の粘土でこのあたりを境



第249図 1区河道断面図・出土遺物 (1/60・1/4)

に流路が変化したこともわかる。第25層は微高地の核をなす土層の表層部分と考えられ、斜線で示す堅硬な基盤は淡灰黄色を呈し、きわめて明るい色調を示す。

河道からの出土遺物は、上層では近世・近代の陶磁器などの遺物がかなりみられた。中世にさかのぼる遺物では、備前焼1179～1181、生産地不詳の須恵質播鉢1182、亀山焼瓦1183がある。

1179は壺の体部小片で、溝43で出土している波状文と直線文が組み合わされた文様が特徴的な壺である。1180は、播鉢で放射状の卸し目がわずかに残る。口縁部の拡張は小さい。1181は甕の破片で、口縁部はいわゆる玉縁で、断面は長円形に肥厚している。1182は須恵質の播鉢である。卸し目は放射状であるが、備前焼にくらべると細く、間隔が狭い。体部は薄手である。

1183は亀山焼の平瓦で凸面には斜行する格子目のタタキがみられる。以上の遺物から、河道がかなり埋没し規模が縮小した時期は、南北朝から室町時代中頃と推定される。(岡田)

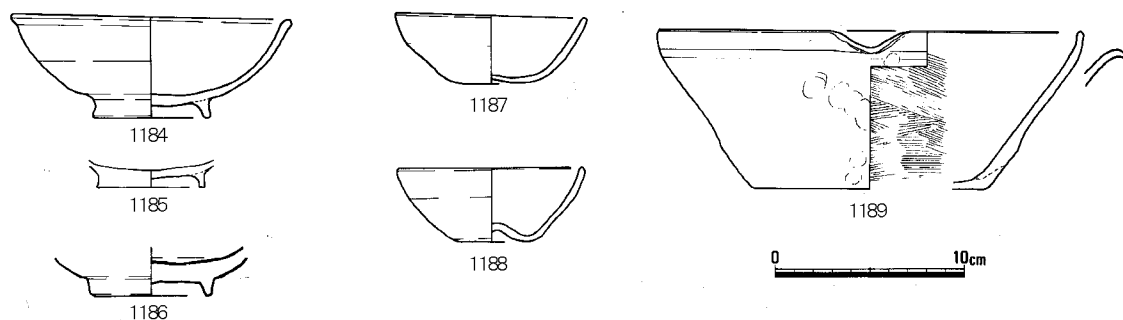
10 たわみ6 (水田) (第195図)

2区南西端から3区中央に存在し、現代水田直下で検出した。微高地部分の褐色に対し、灰色の土色であるため容易に認識できた。平面で南北45m、東西14mの範囲である。底面はほぼ平坦で、その標高は東岸部分で1.54～1.57m、西端で1.50m程度で、検出面からの深さは10～20cmを測る。土層は2～3層に分かれ、上部にマンガンの集中がある。土層観察と平面の状況から、たわみ4埋没後の窪みを利用した水田と考えた。遺物は1185・1187などで、それにより時期は中世である。(氏平)

11 遺構に伴わない遺物 (第250～254図)

1184は、土師質土器碗である。口径約14.5cm、高さ5.4cmを測り、この種の碗の中では大型に属す。貼り付けられた高台もしっかりしている。1185は、土師質土器碗の高台部分である。高台は、貼り付けられており、その径も大きく、1184と同じく12世紀頃と考えられる。1186は、青磁碗である。1187は、土師質土器碗である。口径約10cm、高さ3.5cmを測る。外底面は高台はなく、少し揚げ底になる。1188も同じく土師質碗である。大きさなどは、1187とほぼ同じであるが、外底面の揚げ底がさらに大きくなる。1189は、土師質土器鉢で、片口が付く。外面は、ナデ調整と指の押圧痕がみられる。内面はハケメ調整が施される。

C32は、土錘である。全長約9cmの円形の棒状の両端に円孔が開けられたものである。C33も土錘である。平面形が楕円形を呈しており、厚さは扁平で側面に溝が巡る。C34も土錘である。平面形は長楕円形を呈し、長軸方向に円孔が開く。外面には、片側のみに溝が刻まれている。C35は、大形の土

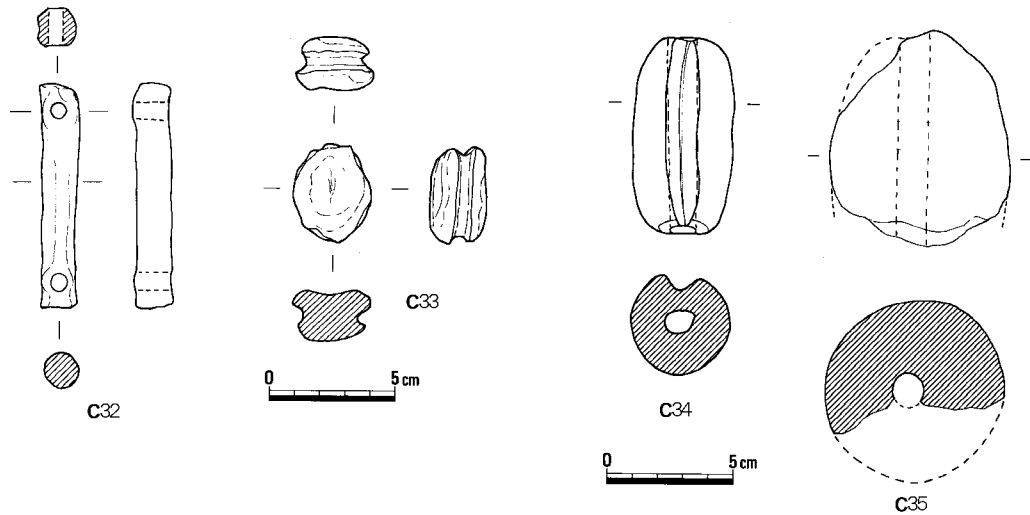


第250図 1～3区包含層出土遺物1 (土師器・青磁：1/4)

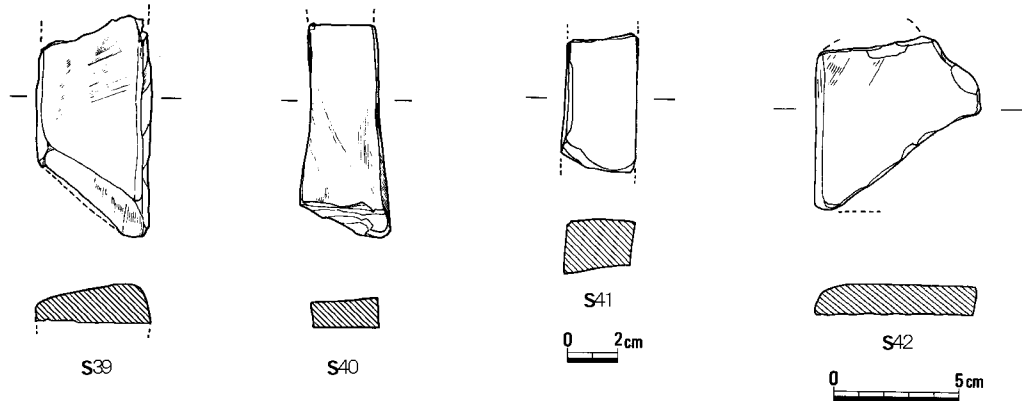
錘である。平面形は楕円形を呈し、長軸方向に円孔が開く。最大径は7.1cmを測る。

S39～S42は、砥石である。いずれも破損しており、完形品はない。どれもよく使われており、使用面は平滑である。材質は、S39は泥岩、S40は頁岩、S41は流紋岩、S42は砂岩である。

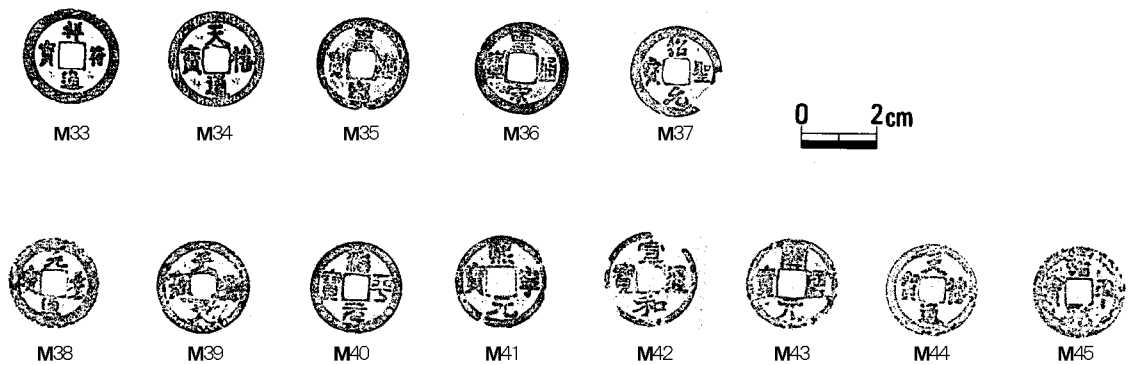
M33～M45は、銭貨である。銭文を列記すると「祥符通寶」「天禧通寶」「皇宋通寶」「皇宋通寶」「紹



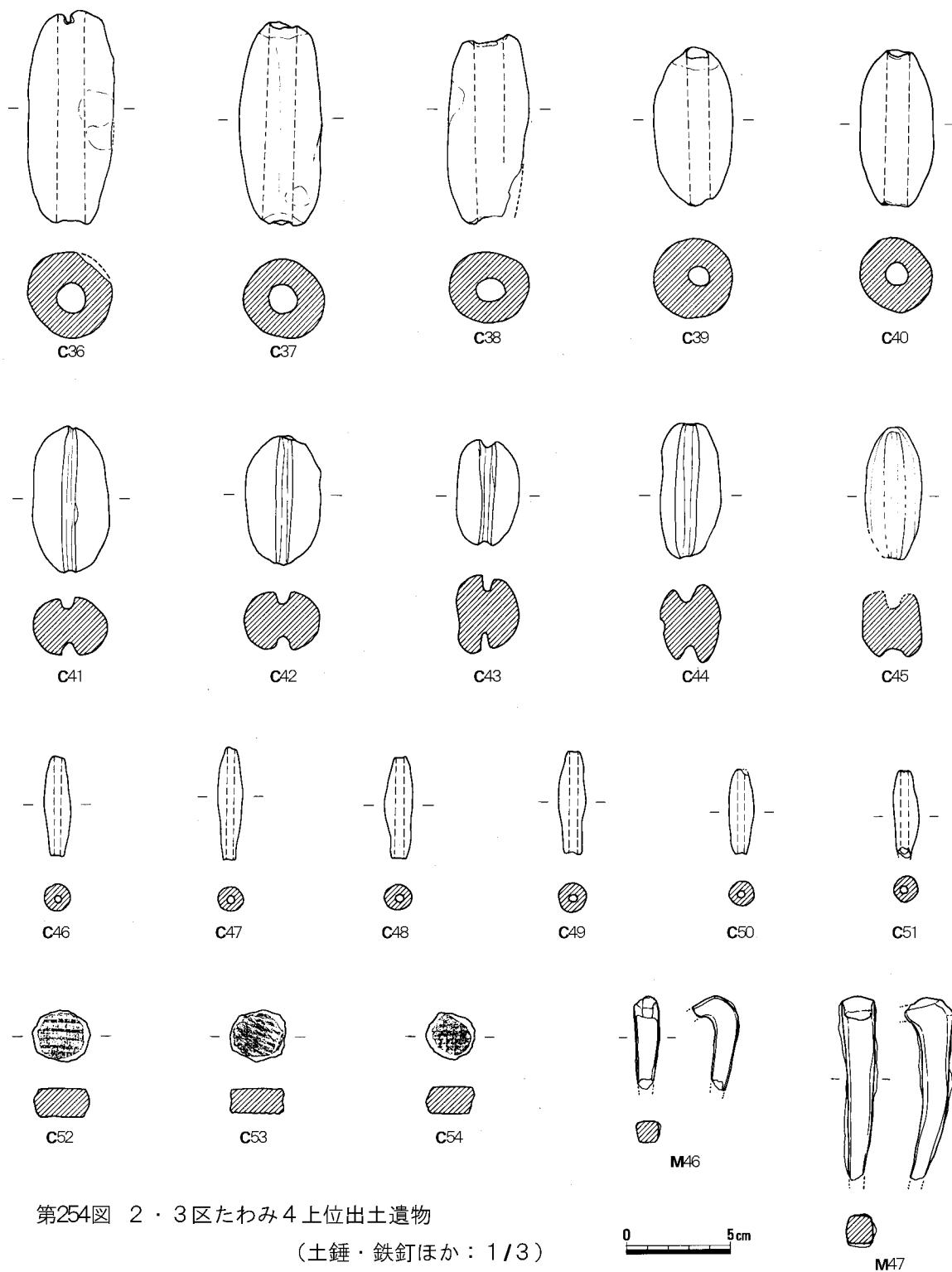
第251図 1・2区包含層出土遺物1（土錘：1/3）



第252図 1～3区包含層出土遺物2（砥石：1/3）



第253図 1・2区包含層出土遺物2（銭貨：1/2）



第254図 2・3区たわみ4上位出土遺物
(土錘・鉄釘ほか：1/3)

聖元寶」「元豊通寶」「天聖元寶」「紹聖元寶」「熙寧元寶」「宣和通寶」「開元通寶」「天禧通寶」「治平元寶」となる。このように出土銭貨は、ほとんどが北宋銭である。

C36～C40は土錘である。全長は約10cm～7.4cmを測り、長軸方向に円孔が開く。C41～C45は側面に溝の刻まれる土錘である。C46～C51は、細く長い土錘である。C52～C54は、須恵器の甕などを使用し、円盤状に加工したものである。M46・M47は鉄釘である。(井上)

第7節 小結

中撫川遺跡では、弥生時代前期から中世末葉までの遺構を検出している。時期により遺構密度の濃淡はあるがそれらを概観する。弥生時代前期であるが、検出した遺構は、溝1条である。1区から2区の中央部までは検出した。溝からの出土遺物は少ないが、調査区内の包含層からも出土しており、遺構の密度は低いが、近くに生活跡を推測することができる。中期では、溝を3条検出した。中期の後半を主体とするものである。土器の出土は少ないが、石製品では、石包丁・石斧・石鏃・砥石などがある。碧玉製の管玉や、鉄製の斧も出土している。後期では、竪穴住居・土壙・井戸・溝などを検出した。竪穴住居は1軒のみであるが、井戸は4基検出した。土器の出土量も増えており、近くに集落の存在が強く感じられる。また、土器の中には、畿内など他地域の影響の見られるものが散見する。

古墳時代前期の遺構は、竪穴住居・井戸・溝・祭祀遺構・たわみなどを検出した。竪穴住居は1軒のみである。井戸は11基を検出した。井戸の底に完形の土器が出土するもの、廃棄された井戸から大量の土器が出土したものなどがある。溝は7条を検出した。溝11・12からは大量の土器が出土している。祭祀遺構は、2か所に検出した。どちらもミニチュア土器が出土している。土器溜まり2からは、入れ子になったものや、ミニチュア土器に鉄製品を収めるものなどがある。たわみ1からは大量の土器が出土した。その中に、鼓形土器4個体や、完形の手焙り形土器などがある。土器の中には、畿内・東海・讃岐・山陰・南九州などの地域から直接持ち込まれたか、その影響を強く受けたものがみられる。また、碧玉製の管玉や鉄製の斧も出土している。後期の遺構は、土壙と溝を検出した。遺構の密度は低く調査区内に散在するものである。

古代の遺構は、掘立柱建物・柱列・土壙・溝・たわみ・集石遺構などを検出した。掘立柱建物は12棟を検出した。2区では、棟方向を揃えて並ぶものを検出した。掘り方も大きく奈良時代と考えられる。建物の棟方向をみると、北に近いものと、少し西に振るものとに分けられる。1区では、同一方向の建物が重複することからすれば、時期差のみを示すものでもないようである。建物の形態としては、側柱建物と、総柱建物がある。溝25は、おおむね7世紀代に属するものである。須恵器・土師器の杯・蓋・壺・甕・高杯などと伴に完形品の陶硯が出土している。たわみは3か所に検出した。たわみ3は、細い溝を伴うと考えられる。この遺構からは、多くの緑釉陶器が出土した。椀・皿・耳皿などがある。9世紀前半に属する。特殊な遺物としては、銅印の鋳型が出土している。また、銅塊も小さな塊ではあるが出土している。たわみ4からも、多くの緑釉陶器が出土した。椀・皿・耳皿・壺などがある。時期は、9世紀前半に属するものである。緑釉陶器はそのほとんどが京都産であり、数点猿投産のものが含まれている。たわみは、3と4ではその形態が異なる。どちらのたわみからも土師器の杯・皿が多く出土している。また、竈や、大形の台付鉢・土鍋などが出土している。

中世の遺構は、掘立柱建物・柱列・竪穴遺構・井戸・土壙・墓・溝などを検出した。掘立柱建物は、7棟を調査した。側柱の建物と内部に束柱を持つ建物がある。束柱を持つ建物は、間仕切り、もしくは床の存在を想定できる。竪穴遺構は、方形に浅く掘り窪め、中に石列を持つものである。井戸は2基を調査した。井側は検出されなかった。墓は、2基を調査した。いずれも人骨を検出した。墓1には刀が副葬されていた。墓2は、小さな木棺に埋葬された状態で検出した。出土遺物としては、土師質土器椀・土鍋・備前焼・亀山焼・宋銭などの銭貨・砥石・土錘などがある。 (井上)

中撫川遺跡土器観察表

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考
1	H 462	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝2 南半側溝部分のみ	縄文土器	鉢	赤褐色色	10YR 6	長石・石英 縄文が施され、下端に沈線が巡る
2	H 448	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝8	弥生土器	壺	明赤褐色	5YR 6	長石・石英 2条の沈線で区画された無軸木葉文
3	H 211	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝9	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 4	長石・石英 木葉文の一部か
4	H 447	中撫川1区	溝1	法万寺2区	溝9	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 2	長石・石英 肩部はケズリダシの段、重弧文を描く
5	H 452	中撫川1区	溝1	法万寺4区	溝4	弥生土器	壺	橙色	7.5YR 6	長石・石英・赤色酸 ヘラ描き沈線3条、外底部ミガキ、内外面ミガキ
6	H 484	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝9	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 4	長石・石英 底部に、焼成後の穿孔
7	H 183	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝9	弥生土器	壺	橙色	5YR 6	長石・石英 内外面ユビナデ、オサエ痕跡
8	H 219	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝2	弥生土器	壺	灰黄褐色	10YR 2	長石・石英 無軸木葉文がヘラ描きされる
9	H 210	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英 木葉文、無軸か
10	H 265	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝6	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英 無軸木葉文、3本の沈線で区画
11	H 213	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝8	弥生土器	壺	浅黄褐色	10YR 3	長石・石英 無軸木葉文、3本の沈線で区画
12	H 150	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	包含層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英 有軸木葉文、貼付突帯が巡る
13	H 212	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	包含層	弥生土器	壺	浅黄褐色	7.5YR 4	長石・石英 重弧文
14	H 451	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	P6	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 4	長石・石英 有軸木葉文か
15	H 209	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7 下層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 4	長石・石英 木葉文か重弧文か不明瞭
16	H 152	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	包含層	弥生土器	壺	橙色	5YR 6	長石・石英 2条の平行沈線の下部に重弧文
17	H 215	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝8	弥生土器	壺	橙色	5YR 6	長石・石英ほか 重弧文か
18	H 214	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝8	弥生土器	壺	灰白色	10YR 2	長石・石英 重弧文
19	H 218	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝2	弥生土器	壺	灰黄色	2.5Y 6	長石・石英 木葉文
20	H 207	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7	弥生土器	壺	白っぽい褐色		石英他砂粒多含 重弧文
21	H 208	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝5 E	弥生土器	壺	明褐色	7.5YR 6	長石・石英ほか 重弧文
22	H 480	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝8	弥生土器	壺	橙色	5YR 6	長石・石英・雲母 ケズリダシ段、2条の沈線
23	H 310	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺7区	溝2	弥生土器	壺	黄灰色	2.5Y 6	長石・石英ほか 沈線2条、外面ミガキ
24	H 44	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺4区	たわみ1 下層	弥生土器	壺	灰黄褐色	10YR 2	細砂、長石、石英 外面削り出し凸帯、ヘラミガキ、内面ナデ
25	H 206	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	包含層	弥生土器	壺	灰黒褐色		石英多含 ケズリダシ段、内面ミガキ
26	H 481	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝8	弥生土器	壺	橙色	5YR 6	長石・石英ほか 内外面ヘラミガキ
27	H 485	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝1	弥生土器	広口壺	にぶい黄褐色	10YR 4	長石・石英 口唇部と頸部に沈線1条
28	H 280	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区南端	溝9 南東端に接する	弥生土器	壺	浅黄褐色色	10YR 3	長石・石英 底部のみ。内傾接合
29	H 173	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	包含層	弥生土器	壺	にぶい赤褐色	5YR 4	長石・石英ほか 器表剥落
30	H 186	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝1	弥生土器	壺	橙色	2.5YR 6	長石・石英ほか 器表剥落
31	H 45	2区	遺構に伴わない	法万寺4区	たわみ1	弥生土器	壺	にぶい褐色	7.5YR 4	長石・石英・角閃石・雲母 口唇部刻み目、ヘラガキ沈線
32	H 191	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	包含層	弥生土器	壺	黄灰色		長石・石英 口唇部刻み目、体部上位沈線
33	H 277	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区	溝2 中層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英・雲母 内傾接合あり、ヘラ描き沈線
34	H 150	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺4区	包含層	弥生土器	壺	褐色	5YR 6	長石・石英・雲母 ヘラ描き沈線3条
35	H 273	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区		弥生土器	壺	褐色	5YR 6	長石・石英・雲母 内傾接合あり、ヘラ描き沈線
36	H 425	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺5区	溝9	弥生土器	壺	灰黄褐色	10YR 2	長石・石英・雲母 ヘラ描き沈線2条、口唇部刻み目
37	H 276	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区	溝2 中層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英・角閃石 内傾接合あり、口唇部刻み目、ヘラ描き沈線
38	H 274	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6 B 区東		弥生土器	壺	褐色	10YR 4	石英・長石・雲母 内傾接合あり。口唇部刻み目、ヘラ描き沈線
39	H 127	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺5区	溝1 上層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英・雲母・角閃石 ヘラ描き沈線4条、工具ナデ、口唇部刻み目
40	H 312	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺7区	土塊7	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英・雲母・角閃石 内傾接合、口唇部刻み目、ヘラ描き沈線
41	H 449	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺4区	溝0 下層	弥生土器	壺	にぶい褐色	7.5YR 4	長石・石英・雲母 ヘラ描き沈線5条、口唇部刻み目、ナデ
42	H 311	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺7区	表土中	弥生土器	壺	褐色	5YR 6	長石・石英多・雲母 内傾接合、L字口縁、ヘラ描き沈線
43	H 272	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区	溝23	弥生土器	壺	にぶい褐色	7.5YR 4	長石・石英・雲母・角閃石 内傾接合あり、口唇部刻み目、ヘラ描き沈線
44	H 282	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6 A 区		弥生土器	壺	浅黄色	10YR 3	長石・石英・雲母 内傾接合あり、ヘラ描き沈線あり
45	H 275	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区	溝2 上層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 4	長石・石英多・雲母 内傾接合あり、口唇部刻み目、ヘラ描き沈線
46	H 313	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺7 区南	溝3	弥生土器	壺	にぶい褐色	7.5YR 3	長石・石英・雲母 内傾接合、口唇部刻み目、ヘラ描き沈線
47	H 128	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺5区	溝1 上層	弥生土器	壺	にぶい褐色	7.5YR 4	長石・石英・雲母 口唇部刻み目
48	H 126	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺5区	溝1 上層	弥生土器	壺	にぶい褐色	7.5YR 4	長石・石英・雲母 口唇部刻み目
49	H 451	中撫川2区	遺構に伴わない	法万寺4区	溝8 下層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10YR 3	長石・石英・角閃石・雲母 逆L口縁、ユビオサエ、後部ナデ
50	H 281	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区	溝2	弥生土器	鉢	黒褐色	2.5Y 3	長石・石英・雲母多 内傾接合あり、内面ミガキ

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
51	H5 95	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝0上層	弥生土器	蓋	にぶい橙色	75 YR 4	長石・石英・角閃石	円孔2 個一対で2 か所
52	H1 427	中撫川2区	溝2	法万寺4区	溝0下層	弥生土器	台付壺	浅黄褐色	75 YR 8	石英・長石・角閃石・雲母	外面ミガキ、内面ユビオサエ、ナデ
53	H5 445	中撫川1区	溝2	法万寺3区	溝2	弥生土器	甕	にぶい黄橙	10 YR 2	長石・石英・雲母	口縁部に凹線4 条巡る
54	H1 428	中撫川2区	溝2	法万寺4区	溝0下層	弥生土器	甕	浅黄褐色	75 YR 8	長石・石英・角閃石・雲母	
55	H5 94	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝0上層	弥生土器	高杯	にぶい橙色	75 YR 4	長石・石英・角閃石・赤色酸化粒・雲母	体部内外面ミガキ、円盤充填
56	H5 446	中撫川1区	溝2	法万寺3区	溝2	弥生土器	高杯	浅黄橙	10 YR 8	長石・石英	脚部上位に細い沈線3 条
57	H7 270	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3下層	弥生土器	壺	橙色	25 YR 6	長石・石英・雲母・角閃石	口縁部に2 孔1 対の円孔が3 か所? 細い凹線あり
58	H7 306	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3上層	弥生土器	壺	にぶい橙色	75 YR 8	長石・石英・雲母	
59	H7 305	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3下層	弥生土器	甕	浅黄褐色	10 YR 8	長石・石英・雲母	口縁部棒状浮文3 本一組が2 か所残存
60	H7 271	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3中層	弥生土器	高杯	橙色	25 YR 6	長石・石英・雲母	脚部に円孔19 残存、合計25か、脚柱~裾外面調整不明
61	H6 215	中撫川3区	溝4	法万寺6区	溝2土器2	弥生土器	壺	灰白色	10 YR 2	長石・石英・角閃石・雲母	頸部焼成前穿孔2 個一組が2 対か、肩部外面からの穿孔1 か所
62	H7 307	中撫川3区	溝4	法万寺7区	溝23土器2	弥生土器	台付鉢	にぶい黄褐色	10 YR 8	長石・石英・雲母	頸部に円孔2 個一組が2 か所、脚部上部に2 個一組の円孔2 か所
63	H7 304	中撫川3区	溝4	法万寺7区	溝23	弥生土器	甕	灰白色	10 YR 2	長石・石英・雲母	頸部以下外面調整不明瞭
64	H7 308	中撫川3区	溝4	法万寺7区	溝23土器1	弥生土器	甕	灰黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	脚部に刺突あり
65	H6 270	中撫川3区	溝4	法万寺6区	溝2	弥生土器	高杯	浅黄褐色	75 YR 8	石英・長石・雲母	杯部中央円盤充填
66	H7 316	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺7区		弥生土器	壺	橙色	75 YR 6	石英・長石	頸部貼り付け突帯
67	H5 220	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝6 下層	弥生土器	高杯	灰白色	10 YR 2	長石・石英多	口縁端面に擬凹線風コナデ
68	H5 154	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	溝6 下層	弥生土器	甕	灰白色	10 YR 2	長石・石英・赤色酸化粒	口縁部に棒状浮文、頸部に刻み目突帯を加飾する
69	H5 157	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	溝6 南端	弥生土器	甕	にぶい橙色	75 YR 8	長石・赤色酸化粒	体部内面はハケ調整
70	H6 45	中撫川3区	遺構に伴わない	法万寺6区	土壇6	弥生土器	甕	灰白色	10 YR 2	長石・石英	口縁部棒状浮文3 本一組が1 か所残存
71	I7 263	中撫川3区	竅穴住居1	法万寺7区	焼土層	弥生土器	鉢	橙色	5 YR 6	長石・石英・赤色酸化粒・雲母	内面ヘラケズリ後ヘラミガキ
72	H7 261	中撫川3区	竅穴住居1	法万寺7区	南東隅南側	弥生土器	高杯	にぶい橙色	75 YR 4	長石・石英・赤色酸化粒・雲母	脚部のみ、円孔4 か所
73	H7 262	中撫川3区	竅穴住居1	法万寺7区	南東隅南側	弥生土器	高杯	にぶい黄褐色	10 YR 8	長石・石英・赤色酸化粒・雲母	焼成不良
74	H5 5	中撫川2区	井戸1	法万寺5区	井戸	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 8	長石・石英多	吹きこぼれ、煤付着
75	H5 17	中撫川2区	井戸2	法万寺5区	土壇1	弥生土器	直口壺	にぶい橙色	75 YR 4	長石・雲母	内外面入念ミガキ
76	H5 8	中撫川2区	井戸2	法万寺5区	土壇1	弥生土器	長頸壺	灰黄色	25 Y 2	長石・石英・角閃石	底部外面ヘラミガキ
77	H7 432	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	壺	橙色	5 YR 6	長石・石英・角閃石	頸部沈線螺旋状(2 本で1 単位)
78	H7 434	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	長頸壺	灰白色	10 YR 2	石英・長石・雲母	頸部外面に貝殻腹縁による刺突文
79	H7 425	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	壺	橙色	75 YR 6	石英・長石・角閃石	頸部外面タテハケ
80	H7 427	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	壺	にぶい橙色	5 YR 4	長石・石英	ハケメ荒い、胴部外面黒斑、底部外面煤付着
81	H7 424	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	壺	赤褐色	10 R 8	石英・長石・雲母	内外面被熱? 胴部外面黒斑
82	H7 442	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	にぶい橙色	75 YR 8	長石・石英	口縁端と胴部に煤付着
83	H7 435	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	褐灰色	10 YR 4	長石・雲母	
84	H7 416	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	浅黄褐色	10 YR 8	石英・長石・雲母	
85	H7 426	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	にぶい褐色	75 YR 8	石英・長石・角閃石・雲母	胴部外面煤・黒斑あり
86	H7 411	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	にぶい赤褐色	5 YR 4	石英・長石・角閃石	口縁ぐみあり
87	H7 414, 115	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	にぶい赤褐色	5 YR 4	石英・長石・雲母	外面胴部煤(吹きこぼれ)
88	H7 419	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	甕	にぶい橙色	75 YR 8	長石・石英・雲母	外面胴~底部被熱
89	H7 436	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	鉢	浅黄褐色	10 YR 8	精良	
90	H7 433	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	台付直口壺	灰白色	10 YR 2	精良	外面黒斑
91	H7 420	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	台付直口壺	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	外面胴部に打撃か? くぼみ・不整形貫通孔あり
92	H7 422	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	にぶい褐色	75 YR 8	精良	胎土は精製土
93	H7 423	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	橙色	75 YR 6	精良	胎土は精製土
94	H7 421	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	橙色	75 YR 6	長石・石英・雲母	外面口縁部に黒斑
95	H7 438	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	橙色	5 YR 6	精良	脚部穿孔合計6 個か、胎土は精製土
96	H7 437	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	灰黄色	25 Y 2	長石・雲母	荒いヘラミガキ、脚部外面穿孔6 か所
97	H7 440	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	橙色	5 YR 6	精良	胎土は精製土
98	H7 439	中撫川3区	井戸3	法万寺7区	土壇5	弥生土器	高杯	橙色	75 YR 6	精良	胎土は精製土
99	H5 3	中撫川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 8	石英・長石・雲母	外面、ハケメ、ミガキ、内面ユビオサエ、ケズリ
100	H5 25	中撫川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	内面ヘラケズリ
101	H5 21	中撫川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	一部煤付着

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
102	H 22	中瀬川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ、黒斑
103	H 27	中瀬川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	灰白色	10 YR 2	石英・角閃石・長石	口縁部に凹線
104	H 23	中瀬川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5 YR 3	石英・長石	内面ヘラケズリ
105	H 24	中瀬川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	浅黄褐色	7.5 YR 3	石英・長石	底部外面ヘラミガキ
106	H 26	中瀬川2区	土壇1	法万寺5区	土壇4	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英・角閃石	胴部外面ヨコナデ、ナデ、一部黒斑
107	H 1	中瀬川2区	土壇2	法万寺5区	土壇6	弥生土器	鉢	浅黄褐色	7.5 YR 4	長石・石英・雲母	外面ハケメ、内面ナデ、ヨコナデ、ヘラケズリ
108	H 2	中瀬川2区	土壇2	法万寺5区	土壇6	弥生土器	鉢	橙色	5 YR 6	長石	内外面ヘラミガキ、精製土器
109	H 416	中瀬川2区	土壇4	法万寺6区	土壇9	弥生土器	高杯	橙色	5 R 6	精良	口縁部に凹線4条巡る
110	H 417	中瀬川2区	土壇4	法万寺6区	土壇9	弥生土器	高杯	浅黄褐色	7.5 YR 4	精良	
111	H 248	中瀬川1区	溝5	法万寺2区	溝7 下層	弥生土器	長頸壺	灰黄色	2.5 Y 2	長石・石英多	頸部に沈線8条、下端に連続刺突文
112	H 278	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	長頸壺	灰黄色	2.5 Y 2	長石・石英多	頸部に沈線4条、下端に連続刺突文の痕跡
113	H 2	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	長頸壺	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英ほか	口縁部に2孔1対の円孔が3か所？細い凹線あり
114	H 170	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	長頸壺	灰白色	10 YR 1	石英・長石・雲母	頸部下端に刺突文が巡る
115	H 194	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	長頸壺	橙色	5 YR 6	石英・長石・雲母	体部に布目圧痕と穿孔
116	H 456	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	壺	灰白色	10 YR 1	長石・石英	搬入土器か
117	H 265	中瀬川1区	溝5	法万寺2区	溝6	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 2	石英・長石	体部下位に黒斑
118	H 255	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	台付壺	橙色	5 YR 6	長石・赤色酸化粒	精製土器
119	H 460	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6	長石・石英	体部外面は横位のタタキ後、縦位のミガキ
120	H 202	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	高杯	橙色	5 YR 6	石英・長石・雲母	内外面細いヘラミガキ、低脚
121	H 245	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	高杯	淡橙色	5 YR 4	石英・長石	杯部中央円盤充填
122	H 242	中瀬川1区	溝5	法万寺3区	溝6	弥生土器	甕	にぶい橙色	5 YR 4	長石・石英ほか	頸部貼り付け突帯
123	H 434	中瀬川2区	溝5	法万寺5区	溝8 土器2	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 2	石英・雲母	外面頸部荒いハケメ
124	H 431	中瀬川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	壺	橙色	5 YR 6	長石・石英・角閃石	外面頸部沈線螺旋状、ハケメ、内面ユビナデ
125	H 225	中瀬川3区	溝5	法万寺6A区	溝9 土器7	弥生土器	長頸壺	浅黄褐色	10 YR 3	石英・長石・雲母	体部内面はハケ調整
126	H 260	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	南壁溝9	弥生土器	壺	灰白色	2.5 Y 2	長石・石英・雲母	口縁外面上下に竹管文、円孔2列の刺突文あり
127	H 206	中瀬川3区	溝5	法万寺7区北	溝9 土器4	弥生土器	長頸壺	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	外面底部黒斑
128	H 204	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器7-1	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	底面外面ハケメ痕跡、搬入土器？
129	H 213	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器1	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6	石英・赤色酸化土粒 長石・雲母	焼成不良
130	H 252	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器0	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・雲母	外面胴部下位に黒斑
131	H 205	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器7	弥生土器	壺	にぶい橙色	5 YR 4	長石・石英・雲母	外面胴～底部に黒斑
132	H 64	中瀬川3区	溝5	法万寺4区	溝8 集石3	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・角閃石	搬入土器、外面稚拙な波状文・簾状文
133	H 91	中瀬川3区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	搬入土器、外面稚拙な簾状文・波状文・竹管文
134	H 302	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器7-3	弥生土器	壺	にぶい橙色	5 YR 4	長石・石英	内外面胴部ほぼ全体に黒斑？
135	H 436	中瀬川2区	溝5	法万寺4区	溝8	弥生土器	壺	にぶい橙色	5 YR 6	精良	外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ、ユビナデ
136	H 212	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 最下層	弥生土器	短頸壺	浅黄褐色	10 YR 3	石英・長石	外面肩部黒斑、外面調整不明瞭
137	H 214	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器2	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 3	石英・長石・雲母	肩部外面黒斑、口縁内面黒斑、肩部内面押圧痕
138	H 281	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器9	弥生土器	壺	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	口縁部凹線あり、外面口縁・胴部黒斑
139	H 446	中瀬川3区	溝5	法万寺4区	溝8 土器9	弥生土器	壺	橙色～灰黄色	2.5 Y 6	長石、石英、雲母	外面ミガキ、内面ケズリ、胴部外面黒斑あり
140	H 254	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 下層	弥生土器	甕	黒色	N 0	長石・石英	底部穿孔あり、底面黒斑、弥生中期の可能性高い
141	H 253	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器2	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・雲母	底部穿孔あり
142	H 299	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8-5	弥生土器	甕	橙色	2.5 Y 6	長石・石英・角閃石	搬入土器、内外面胴～底部煤付着
143	H 224	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器5	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5 YR 4	石英・長石・雲母	外面広範囲で煤付着、内面底部にもおこげあり
144	H 264	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器5	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英	外面底部煤付着・被熱で剥落、胴部穿孔
145	H 251	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器3	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英	外面底部黒斑
146	H 253	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器7	弥生土器	甕	灰白色	10 YR 2	石英・長石・雲母	外面底部煤付着
147	H 211	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器1	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	外面肩部磨滅
148	H 282	中瀬川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器2	弥生土器	甕	灰白色	5 YR 2	長石・石英	外面被熱で器表剥落、外面底部・内面胴～底部煤付着
149	H 415	2区	溝5	法万寺4区	溝8 下層	弥生土器	甕	灰黄色	2.5 Y 2	長石・石英・角閃石	外面ハケメ、内面ヘラケズリ
150	H 255	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器4	弥生土器	甕	灰白色	7.5 YR 1	石英・長石・雲母	底部外面煤付着
151	H 226	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器7	弥生土器	甕	灰黄褐色	10 YR 2	石英・長石・雲母	胴部外面黒斑
152	H 254	中瀬川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器0	弥生土器	甕	橙色	2.5 Y 6	石英・長石・雲母	胴部外面煤付着
153	H 458	中瀬川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器8	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・雲母	外面タタキ後ハケメ、内面ケズリ

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
154	H1-117	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8	弥生土器	甕	にぶい黄橙色	10YR7/2	長石・石英・角閃石	外面ハケメ、ミガキ、内面ケズリ、外面底部黒斑
155	H1-284	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器1	弥生土器	甕	にぶい橙色	5YR7/5	長石・石英	外面底部煤付着、外面胴～底部黒斑
156	H5-113	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5YR7/3	長石・石英	外面ミガキ、外面底部～外面煤付着・被熱痕
157	H5-110	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	甕	にぶい赤褐色	5YR5/4	長石・石英・雲母	外面工具ナデ、外面胴部煤付着
158	H1-283	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器5-2	弥生土器	甕	浅黄橙色	7.5YR5/3	長石・石英・雲母	外面底部煤付着・黒斑
159	H1-156	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器7	弥生土器	甕	にぶい黄橙色	10YR7/3	石英・長石・角閃石	外面刺突3個
160	H1-119	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器8	弥生土器	甕	にぶい黄橙色	10YR7/3	長石・石英・雲母	外面胴～底部煤付着
161	H5-135	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	甕	にぶい黄橙色	10YR7/3	長石・石英・雲母	刺突2個、外面煤付着・被熱痕
162	H1-159	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器7	弥生土器	甕	にぶい黄橙色	10YR7/3	長石・石英・雲母	外面ハケメ、ミガキ、刺突、外面煤付着・被熱痕
163	H1-457	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器9	弥生土器	甕	灰黄色	2.5Y7/2	長石・石英・雲母	
164	H1-300	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8-6	弥生土器	甕	橙色	2.5YR6/6	長石・石英	外面頸～胴部煤付着
165	H1-121	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 集石3	弥生土器	甕	橙色	5YR6/6	長石・石英	搬入土器(庄内系)、外面タタキ
166	H1-120	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器20	弥生土器	甕	赤色	10R5/6	長石・石英・雲母	外面ハケメ内面ヘラケズリ
167	H5-265	中撫川3区	溝5	法万寺6区	溝9 土器9	弥生土器	甕	にぶい橙色	7.5YR7/4	長石・石英・雲母	外面胴部煤付着
168	H1-301	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8	弥生土器	甕	にぶい橙色	2.5YR6/4	長石・石英	被熱により赤変、煤付着
169	H1-445	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 集石3	弥生土器	甕	橙色	5YR6/6	長石・石英	内外面ヘラケズリ後ナデ
170	H1-116	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 上層	弥生土器	甕	灰黄色	2.5Y7/2	長石・石英・雲母	外面ハケメ、内面ユビナデ→工具ナデ
171	H5-112	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	台付直口壺	にぶい橙色	5YR7/4	精良	胴部外面ヘラミガキ
172	H1-108	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 下層	弥生土器	台付直口壺	にぶい黄橙色	10YR7/2	長石・石英	外面ミガキ、脚部穿孔6個
173	H1-256	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9	弥生土器	高杯	浅黄橙色	10YR5/3	長石・石英・雲母	口縁外面黒斑
174	H1-107	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器20	弥生土器	高杯	赤色	10R5/8	長石・石英	内外面ミガキ
175	H1-113	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器7	弥生土器	高杯	橙色	5YR6/6	赤色酸化粒・長石	内外面ミガキ、穿孔4個
176	H1-257	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8-3	弥生土器	鉢	橙色	5YR6/8	精良	高杯より転用、脚部なし
177	H1-443	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 集石2	弥生土器	高杯	橙色	5YR6/6	精良	円孔4個、内外面ハケメ、ミガキ
178	H1-114	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 集石3	弥生土器	高杯	橙色	5YR6/6	精良	内外面ヘラミガキ、穿孔4個 口縁外面煤付着
179	H1-203	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8-2	弥生土器	高杯	橙色	5YR6/6	精良	円孔4か所
180	H1-255	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8-8	弥生土器	鉢	にぶい黄橙色	10YR7/2	長石・石英・雲母	下半部に穿孔あり
181	H1-110	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 下層	弥生土器	鉢	にぶい橙色	5YR6/4	長石・石英・角閃石	内外面ミガキ、外面黒斑
182	H1-442	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 集石3	弥生土器	鉢	明赤褐色	5YR5/6	精良、雲母・長石	内外面ヘラミガキ
183	H1-109	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 集石2	弥生土器	鉢	橙色	5YR7/6	精良	外面口縁煤付着
184	H1-144	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器9	弥生土器	鉢	にぶい橙色	7.5YR7/4	長石・石英・雲母	ナデ、ヨコナデ、煤付着
185	H5-124	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8 集石	弥生土器	鉢	にぶい橙色	7.5YR7/4	精良	底部ユビオサエ、
186	H1-112	中撫川2区	溝5	法万寺4区	溝8 土器9	弥生土器	台付鉢	にぶい黄橙色	10YR7/2	長石・石英	内外面ミガキ
187	H5-133	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	台付鉢	にぶい橙色	7.5YR7/3	長石・石英・雲母	外面ハケメ後ミガキ
188	H5-111	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	台付鉢	にぶい褐色	7.5YR6/3	長石・雲母・石英	内面ヘラケズリ後ミガキ
189	H5-248	中撫川2区	溝5	法万寺6区	溝9	弥生土器	台付壺	にぶい橙色	7.5YR7/4	石英・長石・雲母	底部外面調整不明瞭
190	H5-129	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	鉢	灰褐色	7.5YR6/2	長石・雲母	ユビオサエ後工具ナデ
191	H1-266	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器0	弥生土器	鉢	灰黄色	2.5Y7/2	長石・石英・雲母	口縁部楕円形、外面底面に黒斑
192	H5-130	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	鉢	にぶい橙色	7.5YR7/4	長石・石英・雲母	全体にユビオサエ
193	H1-259	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8	弥生土器	製塩土器	橙色	2.5YR6/6	長石・石英・雲母	外面タタキあり
194	H1-258	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器8	弥生土器	製塩土器	明赤褐色	2.5YR5/6	長石・石英・雲母	外面タタキあり
195	H5-210	中撫川3区	溝5	法万寺6区	溝9 上層	弥生土器	鉢	橙色	2.5YR6/8	石英・長石・雲母	外面胴部黒斑
196	H1-273	中撫川3区	溝5	法万寺7区	溝9 土器6	弥生土器	鉢	浅黄橙色	7.5YR5/3	長石・石英・雲母	外面タタキ
197	H5-84	中撫川2区	溝5	法万寺5区	溝8	弥生土器	手焙形土器	にぶい黄橙色	10YR7/2	石英・長石・雲母	外面底面黒斑
198	H1-132	中撫川2区	溝6	法万寺4区	溝9 下層	弥生土器	壺	橙色	5YR6/6	精良	煤付着、内面ケズリ後ナデ、口縁ヨコナデ、ミガキ
199	H1-250	中撫川3区	溝6	法万寺7区	溝2 土器0	弥生土器	長頸壺	橙色	7.5YR6/6	長石・石英・雲母	口縁外面に2連の竹管文、菱形の縄書文
200	H5-92	中撫川2区	溝6	法万寺5区	溝9	弥生土器	壺	浅黄橙色	7.5YR5/3	長石・石英・雲母	胴部外面ヘラミガキ、内面ハケメ→工具ナデ
201	H1-93	中撫川3区	溝6	法万寺7区	土壇3	弥生土器	壺	浅黄橙色	10YR5/3	石英・長石・雲母	外面胴～底部布目押圧、内面ユビオサエ後ナデ 外面線刻あり
202	H5-108	中撫川2区	溝6	法万寺5区	溝9 下層	弥生土器	鉢	にぶい黄橙色	10YR7/3	精良	手捏ね、ユビオサエ痕
203	H5-106	中撫川2区	溝6	法万寺5区	溝9	弥生土器	鉢	にぶい橙色	7.5YR7/4	精良	手捏ね、ユビオサエ痕
204	H1-269	中撫川3区	溝6	法万寺7区	溝2 土器8	弥生土器	甕	にぶい黄橙色	10YR6/4	長石・石英・雲母	外面胴～底部黒斑
205	H5-257	中撫川3区	溝6	法万寺6区	溝2	弥生土器	甕	浅黄橙色	10YR5/3	石英・長石・雲母	外面胴部黒斑、初痕跡
206	H1-90	中撫川3区	溝6	法万寺7区	土壇3	弥生土器	甕	灰黄色	2.5Y7/2	長石・石英	搬入土器(庄内系)
207	H1-161	中撫川2区	溝6	法万寺4区	たわみ	弥生土器	甕	橙色	7.5YR6/5	石英・長石・雲母	外面ハケメ、ミガキ、内面ケズリ 外面底部黒斑
208	H1-138	中撫川2区	溝6	法万寺4区	溝9	土師器?	高杯	にぶい橙色	5YR7/5	精良	内外面ミガキ、脚部ハケメ、円孔4個 外面口縁黒斑
209	H1-276	中撫川3区	溝6	法万寺7区	溝2 土器9	弥生土器	高杯	橙色	5YR7/6	精良	円孔4か所

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
210	HB 267	中撫川3区	溝6	法万寺6区	溝2土器1	弥生土器	鉢	灰白色	75 YR 2/2	長石・石英	内外面一部に煤付着
211	HF 314	中撫川3区	溝6	法万寺7区	溝2	弥生土器	台付鉢	赤褐色	25 YR 6/6	長石・石英・雲母	外面口縁～底部煤付着、内面口縁煤?底部に穿孔蓋に転用?
212	HB 260	中撫川3区	溝6	法万寺6区	溝2土器6	弥生土器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 7/4	石英・雲母	外面口縁～胴部煤付着口縁部修復の痕跡?
213	HF 277	中撫川3区	溝6	法万寺7区	溝2土器0	弥生土器	鉢	にぶい橙色	75 YR 7/4	長石・石英・雲母	外面胴～底面黒斑あり
214	HF 195	中撫川3区	溝6	法万寺7区	溝2	弥生土器	鉢	明赤褐色	25 YR 6/6	石英・長石・雲母	外面胴～底部黒斑
215	HE 236	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7/4	石英・長石	口縁部上端は平坦面
216	HE 225	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0下層	弥生土器	鉢	黄褐色	25 YR 6/2	石英・長石	外底部に木葉圧痕、畿内系搬入土器か
217	HE 240	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0下層	弥生土器	甕	灰黄色	25 Y 2/2	石英・長石ほか	
218	HE 237	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0下層	弥生土器	甕	にぶい橙色	75 YR 7/4	石英・長石ほか	外底部に未貫通の穿孔
219	HE 61	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0	弥生土器	手焙形土器	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	長石・石英・雲母	器壁は分厚い
220	HE 276	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0下層	弥生土器	高杯	浅黄褐色	10 YR 6/2	長石ほか精製	精製土器
221	HE 239	中撫川1区	溝7	法万寺2区	溝0	弥生土器	高杯	にぶい灰黄色	10 YR 7/2	石英・長石	精製土器
222	HB 132	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	長頸壺	にぶい黄褐色	10 YR 7/4	石英・長石・角閃石	頸部下端に貝殻圧痕、体部中央に穿孔
223	HB 280	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	直口壺	浅黄褐色	75 YR 6/3	長石・石英	精製土器、底部は揚げ底
224	HE 182	中撫川1区	溝8	法万寺2区	溝5	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 6/4	長石・石英・雲母	体部外面は斜行タタキ、内面はハケナデ
225	HB 226	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	甕	灰黄褐色	10 YR 6/2	長石・石英・角閃石	体部外面は斜行タタキ、内面はケズリ
226	HB 281	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	台付甕	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	石英・長石	体部ほぼ平面
227	HB 282	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	鉢	褐灰色	10 YR 1/1	石英・長石ほか	口縁は明瞭な平底
228	HB 158	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	鉢	灰黄色	25 Y 2/2	石英・長石ほか	口縁上位に沈線1条巡る
229	HB 279	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	鉢	にぶい黄橙	10 YR 7/4	長石・石英・雲母ほか	体部外面はタテハケ調整
230	HB 195	中撫川1区	溝8	法万寺3区	溝5	弥生土器	鉢	灰白色	25 YR 2/2	長石・石英ほか	内面に分厚く漆が付着、容器として使用か
231	HF 209	中撫川3区	溝9	法万寺7区	溝20	弥生土器	甕	にぶい橙色	75 YR 7/4	長石・石英・雲母	外面煤付着
232	HF 210	中撫川3区	溝9	法万寺7区	溝20上	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6/6	長石・石英・雲母	図上復元 黒斑あり?
233	HB 200	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	長頸壺	明赤褐色	25 YR 6/3	石英・長石ほか	口縁部に刻み目
234	HB 177	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	壺	にぶい赤褐色	5 YR 5/4	長石・石英・雲母ほか	底部完存、圧痕あり
235	HB 178	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	甕	橙色	5 YR 6/6	長石・石英ほか	体部外面細いミガキ
236	HB 175	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	甕	灰黄色	25 Y 2/2	長石・石英ほか	体部の内外面にミガキ
237	HB 201	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	長石・石英多	
238	HB 179	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	甕	明赤褐色	5 YR 6/6	長石・石英多	
239	HB 164	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	器台	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	長石・石英多	線刻2か所、筒部に円形方形の透かし孔
240	HB 196	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	高杯	灰白色	10 YR 2/2	長石・石英多	脚部完存、円孔4か所
241	HB 197	中撫川1区	土器溜まり1	法万寺3区	土器溜まり	弥生土器	鉢	灰黄色	25 Y 2/2	長石・石英多	底部は輪高台状
242	HB 176	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上～下層	弥生土器	長頸壺	灰白色	10 YR 2/2	石英・長石ほか	体部上位に刺突文が巡る
243	HB 284	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7南半下層	弥生土器	壺	浅黄褐色	75 YR 6/3	長石・石英	体部中央に穿孔
244	HB 294	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	台付直口壺	橙色	25 YR 6/6	長石・雲母ほか	精製土器
245	HB 286	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7/2	石英・角閃石ほか	
246	HB 461	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 6/3	長石・石英ほか	体部下層の外面に煤付着
247	HB 3	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上層	弥生土器	壺	橙色	25 YR 6/6	長石・石英ほか	体部下位に布目圧痕残る
248	HB 205	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7	弥生土器	壺	灰白色	10 YR 2/2	長石・石英・雲母ほか	体部上位にタタキ痕跡残る
249	HB 252	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上層	弥生土器	壺	灰白色	10 YR 2/2	石英・長石ほか	体部上位にタタキ痕跡残る
250	HB 204	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上層	弥生土器	壺	黄灰色	25 Y 2/2	石英・長石・雲母	体部内外面にミガキ調整を残す
251	HB 155	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	壺	橙色	5 YR 6/6	長石・石英・角閃石	体部内面は荒い工具ナデ、搬入土器か
252	HB 235	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上・下層	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 6/3	長石・石英・雲母ほか	讃岐からの搬入土器か、土師器の可能性
253	HE 246	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	溝7下層	弥生土器	甕	明赤褐色	25 YR 6/6	長石・石英多	赤色顔料塗布(丹塗り)
254	HE 285	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	溝7下層	弥生土器	甕	灰白色	10 YR 2/2	長石・石英多	外底部ミガキ
255	HB 69	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	甕	黄灰色	25 Y 2/2	雲母(精製土)	ミニチュア土器
256	HB 159	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上層	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	長石・石英ほか	口縁部ひずみ
257	HB 190	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	甕	灰黄色	25 Y 2/2	長石・石英ほか	煤付着
258	HB 293	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	甕	にぶい橙色	75 YR 6/6	長石・石英ほか	体部内面に接合痕
259	HB 67	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上層	弥生土器	甕	灰黄色	25 Y 2/2	長石・石英ほか	完形品
260	HE 60	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	溝7下層	弥生土器	甕	灰黄色	25 Y 2/2	長石・石英・雲母ほか	体部にヘラ状工具による線刻、布目痕跡
261	HB 68	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	甕	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	長石・石英多	体部に煤付着
262	HB 62	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	甕	橙色	25 Y 6/6	長石・石英多	加熱痕跡あり、煤付着
263	HE 247	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺2区	溝7下層	弥生土器	甕	明赤褐色	25 YR 6/6	長石・石英多	赤色顔料塗布
264	HB 70	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 7/3	長石・石英・角閃石	完形品
265	HB 287	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7上層	弥生土器	鉢	にぶい褐色	75 YR 6/3	長石・石英多	畿内からの搬入土器
266	HB 131	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 7/2	長石・石英多	ほぼ完形品
267	HB 244	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	鉢	明褐色	75 YR 7/2	長石・石英多	体部内面ヘラケズリ
268	HB 295	中撫川1区	遺構に伴わない	法万寺3区	溝7下層	弥生土器	高杯	浅黄色	10 YR 6/3	石英・長石ほか	脚部完存
269	HB 39	中撫川2区	堅穴住居2	法万寺4区	堅穴住居	土師器	甕	灰白色	10 YR 2/2	石英・長石・雲母	口縁部沈線1条

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
270	H1-125	中撫川2区	竪穴住居2	法万寺4区	竪穴住居	土師器	甕	灰黄色	25 Y7 L	長石・石英・雲母	外面ハケメ、ミガキ、内面ケズリ、エビオサエ
271	H1-65	中撫川2区	竪穴住居2	法万寺4区	竪穴住居	土師器	高杯	明赤褐色	25 YR5.6	長石・石英・雲母	杯部ヘラミガキ、脚部ハケメ、精製土
272	H1-41	中撫川2区	竪穴住居2	法万寺4区	竪穴住居	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母	外面下部押さえ痕
273	H1-40	中撫川2区	竪穴住居2	法万寺4区	竪穴住居	土師器	鉢	橙色	25 YR5.8	石英・長石・角閃石	外面下半ヘラケズリ
274	H2-26	中撫川1区	井戸5	法万寺2区	井戸4	土師器	高杯	褐色	5 YR7.6	長石・石英多	内外面ミガキ
275	H2-25	中撫川1区	井戸5	法万寺2区	井戸4	土師器	製塩土器	灰黄褐色	10 YR7.2	長石・石英多	体部外面下位にタタキ
276	H2-22	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	壺	褐色	5 YR6.6	石英・長石ほか	横位の細いミガキ
277	H2-15	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母ほか	口縁部櫛描き平行沈線
278	H2-17	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	褐色	5 YR6.6	長石・石英・雲母ほか	口縁部櫛描き平行沈線
279	H2-13	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母ほか	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
280	H2-42	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母ほか	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
281	H2-16	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	浅黄色	25 Y7.2	長石・石英多	口縁部櫛描き平行沈線
282	H2-11	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英多	口縁部櫛描き平行沈線
283	H2-20	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母ほか	口縁部櫛描き平行沈線
284	H2-40	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	碗	褐色	5 YR6.6	長石・石英	
285	H2-44	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	碗	にぶい黄褐色	10 YR7.2	長石・石英多	内面放射状ミガキ
286	H2-23	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	井戸3	土師器	碗	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英多	内面放射状ミガキ
287	H2-24	中撫川1区	井戸6 下層	法万寺3区	井戸3 下層	土師器	甕	灰黄色	25 Y7.2	長石・石英多	口縁部櫛描き平行沈線
288	H2-19	中撫川1区	井戸6 下層	法万寺3区	井戸3 下層	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母ほか	口縁部櫛描き平行沈線
289	H2-18	中撫川1区	井戸6 下層	法万寺3区	井戸3 下層	土師器	高杯	にぶい黄褐色	10 YR6.4	精良	精製土器
290	H2-21	中撫川1区	井戸7	法万寺3区	井戸2	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.2	長石・石英・角閃石	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
291	H2-9	中撫川1区	井戸7	法万寺3区	井戸2	土師器	碗	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英多	内面放射状ミガキ
292	H2-8	中撫川1区	井戸7	法万寺3区	井戸2	土師器	碗	褐色	5 YR6.6	長石・石英多	
293	H2-6	中撫川1区	井戸7	法万寺3区	井戸2	土師器	小型鉢	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英	ミニチュアか
294	H2-7	中撫川1区	井戸7	法万寺3区	井戸2	土師器	製塩土器	明赤褐色	25 YR5.6	長石・石英	
295	H2-2	中撫川2区	井戸8	法万寺4区	土壇20	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.2	長石・石英・雲母	胴部全体に煤付着
296	H2-3	中撫川2区	井戸8	法万寺4区	土壇20	土師器	甕	黒色	10 YR2.1	長石・石英・雲母	壊れた甕を再利用、外面煤付着
297	H2-25	中撫川2区	井戸8	法万寺4区	土壇20	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母	
298	H2-26	中撫川2区	井戸8	法万寺4区	土壇20	土師器	台付鉢	褐色	5 YR6.6	長石・雲母・角閃石	外面エビオサエ後ナデ
299	H2-27	中撫川2区	井戸8	法万寺4区	土壇20	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR6.8	石英・雲母	細かいミガキ
300	H2-4	中撫川2区	井戸9	法万寺4区	土壇9	土師器	甕	灰白色	10 YR7.1	長石・石英・雲母	内外面ハケを多用、内面下半ヘラケズリ
301	H2-5	中撫川2区	井戸9	法万寺4区	土壇9	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英	胴部外面煤付着
302	H2-1	中撫川2区	井戸9	法万寺4区	土壇9	土師器	甕	灰黄褐色	10 YR6.2	石英・長石・角閃石	煤付着、僅かに底部
303	H2-23	中撫川2区	井戸9	法万寺4区	土壇9	土師器	脚	褐灰色	10 YR4.1	雲母・長石	円孔4個
304	H2-22	中撫川2区	井戸9	法万寺4区	土壇9	土師器	台付鉢	褐色	5 YR7.6	長石・雲母	細かなミガキ、精製土器
305	H2-24	中撫川2区	井戸9	法万寺4区	土壇9	土師器	高杯	褐色	25 YR6.8	赤色酸化粒・雲母	内外面細かなミガキ
306	H2-7	中撫川2区	井戸11	法万寺5区	土壇2	土師器	甕	灰白色	10 YR7.1	長石・石英・雲母	外面ハケメ、ヘラミガキ
307	H2-49	中撫川2区	井戸11	法万寺5区	土壇2	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.2	長石・石英・雲母	胴部外面煤付着
308	H2-20	中撫川2区	井戸11	法万寺5区	土壇2	土師器	甕	黒色	10 YR2.1	長石・石英	外面全体に煤付着
309	H2-61	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	壺	明褐色	7.5 YR7.2	長石・石英	外面肩部黒斑
310	H2-50	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	壺	灰白色	10 YR8.2	長石・石英	内面調整不明瞭
311	H2-37	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	壺	黄褐色	7.5 YR8.4	石英・長石・雲母	内面頸部に黒斑?
312	H2-60	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	壺	にぶい黄褐色	7.5 YR7.4	石英・長石	内面底部エビオサエ後ケズリ
313	H2-32	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	浅黄褐色	7.5 YR8.4	石英・赤色酸化粒	外面胴部黒斑、内面黒斑?
314	H2-36	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	褐色	7.5 YR7.6	0.2 cm以下の砂粒多	口縁外面櫛描き沈線7条
315	H2-46	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.2	0.5~2.0 mm前後の砂粒	口縁外面櫛描き沈線7条
316	H2-53	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR6.8	0.2 cm以下の砂粒	口縁外面櫛描き沈線
317	H2-47	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	浅黄褐色	10 YR6.8	0.2 cm以下の砂粒	口縁外面櫛描き沈線6条
318	H2-56	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	にぶい褐色	7.5 YR7.1	0.5~2 mm程度の砂粒	口縁外面櫛描き沈線8条
319	H2-52	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	灰黄褐色	10 YR7.2	長石・石英・雲母	口縁外面櫛描き沈線8条
320	H2-51	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 YR7.8	長石・石英・雲母	口縁外面櫛描き沈線
321	H2-59	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	灰白色	10 YR7.1	長石・石英	外面肩部刺突3か所
322	H2-81	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	甕	にぶい褐色	7.5 YR7.8	石英・長石	外面肩部刺突2か所
323	H2-38	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢?	褐色	5 YR7.6	精良(赤色酸化土粒)	外面に黒斑?
324	H2-39	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	高杯	褐色	5 YR7.6	精良	脚部穿孔合計4個か
325	H2-40	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6 上層	土師器	高杯	褐色	5 YR7.6	長石・石英・雲母	脚部穿孔3個
326	H2-28	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6 上層	土師器	高杯	浅黄褐色	7.5 YR8.8	長石・石英	脚部穿孔3個
327	H2-1	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	高杯	褐色	5 YR7.6	精良	内外面工具ナデ?
328	H2-67	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR7.1	石英・長石	手捏ね
329	H2-66	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	小型壺	浅黄褐色	7.5 YR8.4	石英・長石	内面底面赤色顔料塗布 外面底面黒斑
330	H2-109	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鼓形器台	明赤褐色	25 YR5.6	長石・石英・雲母中	内外面丹塗布
331	H2-58	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	浅黄褐色	7.5 YR8.8	0.3 cm以下の砂粒	外面底面黒斑?被熱か
332	H2-48	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	褐色	5 YR6.6	精良	水こし粘土使用か
333	H2-68	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR7.8	石英・長石・雲母	成形時に内型使用か?
334	H2-38	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	褐色	7.5 YR6.6	石英・長石	外面底面黒斑 被熱?
335	H2-34	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	浅黄褐色	7.5 YR8.4	石英・長石	外面底面黒斑
336	H2-44	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6	土師器	鉢	褐色	7.5 YR7.6	石英・角閃石・長石	外面底面黒斑

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考
337	H6-41	中撫川3区	井戸2	法万寺6区	土壇6 上層	土師器	鉢	浅黄褐色 75 YR 6	長石・石英	
338	H6-100	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 2	長石・石英	内面剥落で調整不明瞭
339	H6-107	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 3	石英・長石・雲母	
340	H6-82	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 4	石英・長石・雲母	
341	H6-108	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 3	長石・石英	内面肩部はヘラケズリ?
342	H6-112	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 3	石英・長石	
343	H6-74	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	灰白色 10 YR 2	長石・石英・雲母	
344	H6-71	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい褐色 75 YR 6	石英・長石	外面胴～底部黒斑
345	H6-111	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 2	長石・石英・雲母	内外面に被熱影響
346	H6-62	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	灰白色 10 YR 2	石英・長石	外面肩部刺突2か所
347	H6-98	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	灰白色 10 YR 2	石英・長石・雲母	
348	H6-93	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 2	長石・石英・雲母	外面口縁描き沈線5条
349	H6-70	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい褐色 75 YR 3	長石・石英・雲母	外面肩部刺突2か所・外面口縁・胴～底部煤付着
350	H6-83	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	浅黄褐色 75 YR 6	長石・石英・雲母	外面口縁描き沈線7条・外面底部煤付着
351	H6-63	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい褐色 75 YR 4	石英・長石・雲母	外面口縁描き沈線0条・外面肩～底部煤付着・被熱痕あり
352	H6-77	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい褐色 75 YR 4	長石・石英・雲母	外面口縁煤付着
353	H6-89	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 4	石英・長石	外面肩部穿孔1か所
354	H6-87	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	灰黄褐色 10 YR 2	長石	外面全体に煤付着
355	H6-113	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	赤褐色 10 Y 6	長石・石英・雲母	外面口縁～肩部黒斑、内外面被熱?
356	H6-80	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 4	長石・石英・雲母	外面口縁描き沈線0条・外面肩部煤付着・被熱痕あり
357	H6-65	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 2	長石・石英・雲母	外面口縁描き沈線8条
358	H6-75	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	にぶい黄褐色 10 YR 3	長石・石英・雲母	外面口縁描き沈線8～9条・外面肩～胴部煤付着
359	H6-114	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	灰黄色 25 Y 2	長石・石英・雲母	外面口縁描き沈線1条
360	H6-86	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	灰白色 25 Y 1	長石・石英・雲母	搬入土器(東海系S字口縁壺) 外面ハケメ鋭い
361	H6-92	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	台付壺	褐色 5 YR 6	長石・石英・雲母	搬入土器(東海系S字口縁壺) 外面ハケメ鋭い
362	H6-88	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	灰白色 10 YR 2	長石・石英・雲母	搬入土器(畿内系?) 外面口縁煤付着
363	H6-122	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	黄灰色 25 Y 1	長石・石英・雲母	内面赤色顔料
364	H6-123	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	黄灰色 25 Y 1	長石・石英・雲母	内面赤色顔料付着、363と同一個体か。
365	H6-94	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	にぶい黄褐色 10 YR 4	長石・石英	
366	H6-85	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	にぶい褐色 75 YR 4	05～3mm程度の砂粒多 長石・石英ほか	器壁かなり薄い
367	H6-124	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	にぶい黄褐色 10 YR 3	05～2mm砂粒多 長石・石英ほか	外面底面黒斑?
368	H6-84	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	灰黄褐色 10 YR 2	15mm以下の砂粒多 長石・石英ほか	外面底面黒斑
369	H6-90	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	にぶい黄褐色 10 YR 3	01～1.5mm前後の砂粒多 長石・石英ほか	外面底面黒斑?
370	H6-105	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	にぶい褐色 75 YR 3	02～2mm前後砂粒多 長石・石英ほか	外面底面被熱痕あり
371	H6-72	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	明褐色 75 YR 2	03～3mm前後の砂粒多 長石・石英ほか	外面被熱による赤変あり
372	H6-73	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	にぶい褐色 75 YR 3	01～2mm前後の砂粒多 長石・石英ほか	外面胴部煤付着
373	H6-103	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	褐色 25 YR 6	02～2mm前後の砂粒多 長石・石英ほか	脚部穿孔3個
374	H6-102	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	褐色 5 YR 6	02～1mm前後の砂粒多 長石・石英ほか	脚部穿孔4個か
375	H6-76	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	褐色 5 YR 6	01～1mm前後の砂粒多 長石・石英ほか	脚部穿孔3個
376	H6-96	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	北東部	土師器	高杯	褐色 5 YR 6	精良	脚部穿孔4個か
377	H6-106	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	にぶい褐色 75 YR 4	精良	脚部穿孔4個か
378	H6-97	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	にぶい黄褐色 10 YR 3	長石・石英	脚部穿孔3個
379	H6-99	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	褐灰色 75 YR 1	雲母・石英	ミニチュアか、脚部穿孔4個
380	H6-285	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	浅黄色 25 Y 3	長石・石英	脚部穿孔3個
381	H6-101	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	高杯	褐色 5 YR 6	精良	内外面赤色顔料塗布
382	H6-79	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鉢	灰黄褐色 10 YR 2	05mm以下の微砂	底部穿孔、手捏ね整形
383	H6-78	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	鼓形器台	明褐色 25 YR 3	長石・石英	内外面赤色顔料塗布
384	H6-91	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	製塩土器	灰黄色 25 Y 2	長石・石英	外面胴～底部・内面胴部黒斑 未使用か
385	H6-286	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	製塩土器	にぶい褐色 5 YR 4	長石・石英・雲母	脚部のみ
386	H6-121	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	壺	煤付着で不明	05～1.0mm程度の砂粒	頸部に2本撚りの縄付着、釣瓶として使用か。外面全体煤・吹きこぼれ付着

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
387	H6 64	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	土師器	甕	黒色	15 0	長石・石英	口縁櫛描き沈線8条、外面肩部刺突3個 外面全体に煤
388	H6 271	中撫川3区	井戸13	法万寺6区	土壇7	土師器	甕	灰白色	5 Y7 2	長石・雲母	外面煤付着、内面炭化物付着
389	H7 403	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	壺	にぶい橙色	5 Y7 A	石英・長石	内面口縁に黒斑
390	H7 498	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	壺	浅黄褐色	7 5 Y7 B	精良	胴部穿孔1個
391	H7 102	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	甕	灰黄褐色	10 Y7 2	長石・石英・雲母	外面口縁へ胴部煤付着・被加熱痕跡あり
392	H7 400	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	甕	にぶい橙色	7 5 Y7 A	長石・石英・雲母	外面口縁へ胴部煤付着・被加熱痕跡あり
393	H7 99	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4北側	精製土器	鉢	にぶい黄褐色	10 Y7 B	精良	外面にしぼり痕?
394	H7 401	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 Y7 B	長石・石英・雲母	内外面に黒斑?
395	H7 408	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	溝2土壇4	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 Y7 B	石英・長石・雲母	内面剥落で調整不明瞭
396	H7 406	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	蓋	にぶい橙色	7 5 Y7 B	精良	つまみ径8~20cm 内面剥落で調整不明瞭
397	H7 409	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	溝2のそば土壇4土器	土師器	高杯	橙色	5 Y7 B	精良	
398	H7 407	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4土手部分第1層	土師器	高杯	橙色	5 Y7 B	精良	外面口縁黒斑
399	H7 404	中撫川3区	井戸4	法万寺7区	土壇4	土師器	高杯	淡橙色	5 Y7 B	精良	脚部穿孔4個か
400	H7 110	中撫川3区	井戸15	法万寺7区	土壇3	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 Y7 2	長石・石英・雲母	外面胴部黒斑
401	H7 91	中撫川3区	井戸15	法万寺7区	土壇3(井戸3)	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 Y7 2	石英・長石・雲母	口縁櫛書沈線5~6条 外面胴部黒斑 尖り気味の丸底
402	H7 92	中撫川3区	井戸15	法万寺7区	土壇3	土師器	甕	にぶい橙色	7 5 Y7 A	石英・長石・雲母	丸底、外面口縁、胴部煤(タール状光沢)、被加熱痕跡
403	H7 94	中撫川3区	井戸15	法万寺7区	土壇3	土師器	甕	明色褐色	2 5 Y7 B	石英・長石	外面底部被加熱痕跡
404	H2 241	中撫川1区	溝0	法万寺2区	溝0	土師器	壺	にぶい黄褐	10 Y7 B	石英・長石多	
405	H2 493	中撫川1区	溝0	法万寺2区	溝0	土師器	壺	にぶい黄褐	10 Y7 A	長石・石英・雲母	肩部外面に赤色顔料残、鵺岐から搬入か
406	H2 251	中撫川1区	溝0	法万寺2区	溝0	土師器	甕	にぶい黄褐	10 Y7 B	石英・長石・雲母多	口縁部櫛描き平行沈線
407	H2 238	中撫川1区	溝0	法万寺2区	溝0	土師器	鉢	灰白	2 5 Y8 2	石英・赤色酸化粒ほか	かすかに底部あり
408	H2 83	中撫川1区	溝0	法万寺2区	溝0	土師器	手焙形土器	黄褐	10 Y7 B	石英・長石	外面は丁寧なハケ調整
409	H2 296	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	壺	灰黄	2 5 Y7 2	長石・石英ほか	
410	H2 466	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	壺	にぶい黄褐	10 Y7 B	長石・石英ほか	山陰系直口壺
411	H2 289	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	壺	にぶい黄褐	10 Y7 B	石英・長石	山陰系か
412	H2 129	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	小型鉢	橙	5 Y7 B	長石・石英ほか	ミニチュア完形品
413	H2 71	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7上層	土師器	甕	にぶい黄褐	10 Y7 B	長石・石英ほか	完形品
414	H2 288	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	台付鉢	灰白	10 Y7 2	長石・石英ほか	
415	H2 4	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	高杯	にぶい黄褐	10 Y7 B	石英・長石・雲母	ほぼ完形品
416	H2 290	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7下層	土師器	高杯	橙	5 Y7 B	長石・赤色酸化粒	精製土器
417	H2 203	中撫川1区	溝1	法万寺3区	溝7上層	土師器	高杯	橙	7 5 Y7 B	精良	精製土器
418	H2 284	中撫川3区	溝1	法万寺6区	溝2上層	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 Y7 2	長石・石英・雲母	搬入土器(畿内系?) 口縁部に円形浮文2対7か所
419	H2 155	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9上層	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 Y7 B	長石・石英・雲母	搬入土器(畿内系?) 波状文、竹管文あり
420	H2 137	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9上層	土師器	壺	浅黄褐色	7 5 Y7 B	長石・石英・雲母	外面口縁へ胴部、内面口縁丹塗り、細かいミガキ
421	H7 297	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2上層土器29	土師器	壺	浅黄褐色	7 5 Y7 B	長石・石英	外面底部煤付着 内外面ハケ目調整
422	H7 493	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2上層土器28	土師器	壺	にぶい橙色	7 5 Y7 A	長石・赤色酸化粒	外面頸部刺突1個 外面底部煤付着
423	H2 114	中撫川2区	溝1	法万寺5区	溝9上層	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 Y7 2	石英・長石・雲母	外面ハケメ、内面ヘラケズリ、外面黒斑
424	H7 278	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器1	土師器	甕(甌?)	橙色	7 5 Y7 B	長石・石英	外面胴へ底面黒斑? 底部に焼成前穿孔2か所
425	H2 129	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9上層	土師器	ミニチュア壺	にぶい黄褐色	10 Y7 B	精良	手捏ね整形、ユビオサエ痕、外面上~中部黒斑
426	H2 107	中撫川2区	溝1	法万寺5区	溝9	土師器	ミニチュア高杯	にぶい褐色	7 5 Y7 B	長石・赤色酸化粒	円孔3個、脚柱ケズリ、ミガキ、杯内面ハケメ
427	H2 140	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9上層	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 Y7 B	長石・石英・角閃石	外面ミガキ、内面ケズリ、ユビオサエ
428	H7 315	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器7	土師器	甕	にぶい黄褐色	10 Y7 2	長石・石英・雲母	外面全体・内面下半煤付着。胴部上半タタキあり
429	H7 298	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器7	土師器	甕	橙色	2 5 Y7 B	長石・石英多	外面胴へ底面黒斑、外面胴部煤付着、底面削り取り
430	H2 131	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9	土師器	甕	灰褐色	7 5 Y7 2	長石・石英・雲母	外面工具ナデ、内面ケズリ、ナデ、ユビオサエ
431	H2 130	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9上層	土師器	甕	灰黄褐色	10 Y7 2	雲母・長石・石英	工具によるヨコナデ、庄内式III
432	H2 118	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9上層	土師器	甕	灰黄褐色	10 Y7 2	長石・石英・角閃石	細かいタタキ、内面ケズリ、庄内式III
433	H2 256	中撫川3区	溝1	法万寺6区	溝2	土師器	甕	橙色	7 5 Y7 B	石英・長石・雲母	外面底部黒斑あり、外面底部に粉痕跡

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
434	H 261	中撫川3区	溝1	法万寺6区	溝2	土師器	甕	橙色	5YR 6	長石・石英・赤色酸化粒	外面口縁・肩～底部煤付着
435	H 141	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10YR 2	長石・石英・雲母	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビナデ
436	H 139	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9 上層	土師器	甕	橙色	5YR 6	長石・石英・雲母	内外面ハケメ、底部にユビオサエ
437	H 280	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器3	土師器	鉢	にぶい橙色	7.5YR 4	長石・石英	
438	H 258	中撫川3区	溝1	法万寺6区	溝2土器5	土師器	鉢	明赤褐色	2.5YR 6	石英・長石・雲母	外面口縁～底部黒斑
439	H 263	中撫川3区	溝1	法万寺6区	溝2中層	土師器	台付鉢	にぶい橙色	7.5YR 3	長石・赤色酸化粒	被熱により器表剥落
440	H 288	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2上層土器29	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10YR 3	長石・石英・赤色酸化粒	外面口縁黒斑
441	H 268	中撫川3区	溝1	法万寺6区	溝2上層	土師器	鉢	灰黄褐色	10YR 2	長石・石英・赤色酸化粒多	内面工具ナデ
442	H 286	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器21	土師器	台付鉢	橙色	5YR 6	精良	内外面剥落で調整不明瞭
443	H 135	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9 上層	土師器	製塩土器	明褐色	7.5YR 2	長石・石英・雲母	
444	H 109	中撫川2区	溝1	法万寺5区	溝9 上層	土師器	高杯	橙色	2.5YR 6	精良	杯部内外面ヘラミガキ
445	H 133	中撫川2区	溝1	法万寺4区	溝9 土器3	土師器	高杯	橙色	5YR 7	精良、水漬し粘土	内底部ハケメ
446	H 279	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器26	土師器	高杯	灰白色	7.5YR 2	精良	内外面口縁脚端に黒斑、脚部穿孔4か所
447	H 303	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器9	土師器	高杯	橙色	5YR 3	精良	脚部穿孔4か所
448	H 285	中撫川3区	溝1	法万寺7区	溝2土器26	土師器	高杯	にぶい橙色	7.5YR 4	精良	脚部穿孔4か所
449	H 305	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	壺	灰黄	2.5Y 2	長石・石英	頸部下端に刻み目をもつ突帯が巡る
450	H 283	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	壺	橙	5YR 3	石英・赤色酸化粒	精製土器
451	H 163	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	壺	にぶい黄橙	10YR 6	長石・石英	外面赤色顔料塗布、頸部内面まで
452	H 192	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	壺	浅黄橙	10YR 3	長石・石英	精緻な刺突文が巡る、注口か把手がつく
453	H 301	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	壺	にぶい橙	7.5YR 4	長石・石英・雲母	口縁下位に竹管圧痕を加えた円形浮文
454	H 230	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	壺	浅黄橙	10YR 3	長石・石英	
455	H 267	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	壺	黄灰	2.5YR 2	長石・石英	
456	H 187	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	壺	灰白	10YR 2	長石・石英	全体に白っぽい
457	H 299	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	壺	にぶい黄褐	10YR 3	長石・石英・雲母	煤付着
458	H 216	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	壺?	にぶい橙	7.5YR 4	長石・石英	直線的な沈線文を描く
459	H 165	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	小型丸底埴	浅黄橙	10YR 3	長石・石英・雲母	加熱の可能性あり
460	H 166	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	小型丸底埴	浅黄橙	7.5YR 3	長石・石英・雲母	加熱の可能性あり
461	H 168	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	小型丸底埴	浅黄橙	10YR 3	長石・石英・雲母	
462	H 274	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	小型丸底埴	にぶい黄橙	10YR 3	長石・石英	煤付着、加熱使用か
463	H 169	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	小型丸底埴	灰白	10YR 2	長石・石英	内面に煤、低温加熱か
464	H 273	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	浅黄橙	7.5YR 3	長石・石英	
465	H 188	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 3	長石・石英ほか	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
466	H 189	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	灰黄	2.5Y 1	長石・石英ほか	口縁部櫛描き平行沈線
467	H 231	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 2	長石・石英・雲母	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
468	H 266	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 2	長石・石英ほか	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
469	H 243	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	灰黄褐	10YR 2	長石・石英ほか	口縁部櫛描き平行沈線、体部に煤付着
470	H 228	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 下層	土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 2	石英・長石	体部には平行タタキ
471	H 239	中撫川1区	溝2	法万寺2区		土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 4	長石・石英・雲母	体部には平行タタキ
472	H 227	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	にぶい橙	7.5YR 4	長石・石英・雲母	口縁部・体部に平行タタキ、搬入土器か
473	H 249	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 4	石英・長石	
474	H 256	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	甕	灰白	5YR 1	石英・長石	体部上位にタタキ痕跡、煤付着
475	H 292	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	甕	にぶい黄橙	10YR 2	石英・長石	口縁部櫛描き平行沈線、体部上位に刺突
476	H 298	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝A	土師器	小型鉢	にぶい黄橙	10YR 3	石英・長石	手捏ねミニチュア
477	H 167	中撫川1区	溝2	法万寺2区	サブトレンチ	土師器	鉢	にぶい橙	7.5YR 4	精良	精製土器
478	H 300	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	浅黄橙	10YR 3	長石・石英・雲母	ほぼ完形
479	H 296	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝A	土師器	鉢	にぶい黄橙	10YR 3	石英・長石	
480	H 229	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	鉢	にぶい黄橙	10YR 4	石英・長石	内面放射状ミガキ
481	H 268	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	灰白	10YR 2	石英・長石	
482	H 302	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	にぶい橙	7.5YR 3	石英・長石	ほぼ完形
483	H 233	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	橙	5YR 6	石英・長石	外面に煤付着
484	H 272	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙	10YR 2	石英・長石	内面放射状ミガキ
485	H 233	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙	10YR 3	石英・長石	
486	H 297	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝A	土師器	鉢	にぶい黄橙	10YR 2	石英・長石	
487	H 275	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 下層	土師器	台付鉢	にぶい橙	5YR 4	長石・石英・雲母	体部に2孔1対の穿孔
488	H 269	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	にぶい赤褐	5YR 4	長石・石英・雲母	加熱使用かタール付着
489	H 199	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	鉢	橙	5YR 6	石英・長石ほか	器表剥落

掲載番号	実測区番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
490	H2 234	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	鉢	にぶい黄橙	10 YR 6/3	石英・長石ほか	煤付着
491	H2 198	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙	10 YR 7/2	長石・石英・雲母	
492	H2 232	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	製塩土器	灰黄	2.5 Y 6/2	長石・石英・雲母	体部外面タタキ
493	H2 270	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	製塩土器	にぶい褐	7.5 YR 6/3	長石・石英・雲母	体部下位にタタキ痕跡
494	H2 303	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	製塩土器	橙	2.5 YR 6/3	石英・長石ほか	体部下位にタタキ痕跡
495	H2 304	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	製塩土器	橙	2.5 YR 6/3	石英・長石ほか	小型の製塩土器
496	H2 271	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	高杯	橙	2.5 YR 6/3	石英・長石ほか	外面赤色顔料
497	H2 306	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4	土師器	高杯	浅黄橙	7.5 YR 8/3	赤色酸化粒ほか精良	精製土器
498	H2 254	中撫川1区	溝2	法万寺2区	溝4 上層	土師器	高杯	浅黄橙	7.5 YR 8/3	赤色酸化粒ほか精良	脚部穿孔は3か所
499	H2 116	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 上層土器6	土師器	壺	浅黄橙色	10 YR 8/4	石英・長石・角閃石	口縁部外面に竹管文12個
500	H2 126	中撫川3区	溝2	法万寺6区南	溝2 上層時群B	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 7/3	石英・長石	外面肩部刺突3個、外面底部黒斑
501	H2 181	中撫川3区	溝2	法万寺7区南	溝2 上層	土師器	甕	浅黄橙色	7.5 YR 8/4	石英・長石	山陰系、直立口縁、ユビオサエの痕跡
502	H2 119	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 下層	弥生土器	壺	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	雲母・石英・長石	ユビオサエ、ユビナデ、布目、黒斑、手捏ね
503	H2 427	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	壺	灰黄色	2.5 Y 7/2	石英・長石	外面底部煤付着、外面底部被熱
504	H2 202	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	壺	浅黄橙色	10 YR 8/4	長石・石英・雲母	口縁部のみ
505	H2 267	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 6/4	長石・石英・雲母	外面横位タタキ後ハケ目あり、底面ナデ
506	H2 274	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝5	土師器	壺	灰白色	7.5 YR 8/2	長石・石英・雲母	外面ハケ目後部分的にミガキあり。外面底部黒斑
507	H2 423	中撫川3区	溝2	法万寺5区	溝1 土器4	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7/2	石英・長石・雲母	外面ハケ目、内面ケズリ、ユビオサエ、刺突3個
508	H2 200	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 7/4	長石・石英	外面タタキあり 外面肩部黒斑、内面口縁煤付着
509	H2 209	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2	土師器	壺	浅黄橙色	7.5 YR 6/3	石英・長石	外面被熱による赤変あり
510	H2 272	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝5 下層	土師器	甕	にぶい黄橙色	10 YR 7/4	長石・石英・雲母	外面胴～底部煤付着、搬入土器(畿内)?
511	H2 183	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	甕	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石・雲母	口縁部描き沈線7条
512	H2 422	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 上層	土師器	甕	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・長石・雲母	口縁部描き沈線8条
513	H2 207	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	甕	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石・雲母	口縁部描き沈線7条
514	H2 208	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	甕	赤色	10 R 5/6	石英・長石・雲母	外面被熱により赤変
515	H2 497	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	高杯(小型)	橙色	5 YR 8/3	精良	脚部穿孔4か所
516	H2 118	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 土器8	土師器	高杯	浅黄橙色	10 YR 8/3	精製土	内外面細かなミガキ
517	H2 492	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	高杯	にぶい橙色	7.5 YR 7/4	石英・長石・雲母	
518	H2 456	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	高杯	橙色	5 YR 7/6	精良	
519	H2 454	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2	土師器	高杯	橙色	5 YR 6/6	精良	脚部穿孔3個
520	H2 455	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2	土師器	高杯	橙色	5 YR 7/3	精良	外面口縁・脚部黒斑
521	H2 204	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	高杯	浅黄橙色	10 YR 8/4	精良	水こし粘土使用か
522	H2 205	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	高杯	にぶい橙色	7.5 YR 7/3	精良	水こし粘土使用か
523	H2 157	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石・角閃石	外面口縁～胴部黒斑?
524	H2 115	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 土器3	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石	外面ハケ目、内面ケズリ
525	H2 124	中撫川2区	溝2	法万寺4区	溝1 下層	弥生土器	鉢	にぶい橙色	7.5 YR 6/4	長石・角閃石	内面ケズリ、ユビオサエ
526	H2 421	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 下層	土師器	鉢	浅黄色	2.5 Y 7/2	石英・長石・雲母	外面ハケ目、内面ナデ、口縁外面ハケ、ヨコナデ
527	H2 219	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	台付鉢	にぶい黄橙色	10 YR 6/4	石英・長石・雲母	全体磨滅、被熱あり
528	H2 184	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 下層	土師器	甕	浅黄橙色	10 YR 8/3	石英・長石・雲母	外面胴部タタキ後縦のナデ
529	H2 498	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	製塩土器	にぶい黄褐色	10 YR 5/4	長石・石英	被熱あり
530	H2 220	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	製塩土器	橙色	2.5 YR 6/3	石英・長石・雲母	被熱あり
531	H2 482	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝5	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・長石・雲母	外面胴～底部黒斑?
532	H2 201	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	鉢	浅黄橙色	10 YR 8/4	精良	器壁かなり薄い 全体磨滅により調整不明瞭
533	H2 223	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 下層	土師器	鉢	にぶい橙色	7.5 YR 7/3	長石・石英・雲母	外面口縁～底部黒斑 外面弱い被熱?
534	H2 222	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	精良	外面底部黒斑
535	H2 458	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2	土師器	手焙形土器	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石・角閃石	外面胴部磨滅により調整不明
536	H2 499	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	手焙形土器	灰黄色	2.5 Y 7/2	長石・石英・雲母	鉢部のみ残存
537	H2 485	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝5	土師器	鉢	浅黄橙色	10 YR 8/3	石英・長石・雲母	全体磨滅により調整不明瞭
538	H2 467	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石・雲母	外面被熱により変色
539	H2 491	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 6/4	石英・長石・雲母	外面底部煤付着 内型使用か?
540	H2 468	中撫川3区	溝2	法万寺7区	溝2 土器3	土師器	鉢	灰黄色	2.5 Y 7/2	石英・長石・雲母	
541	H2 417	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 上層	土師器	鉢	灰黄色	2.5 Y 7/2	石英・長石	外底部ケズリ、ナデ
542	H2 221	中撫川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	鉢	灰黄色	2.5 Y 7/2	精良	手捏ね整形、ユビオサエ痕
543	H2 420	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝1 下層	土師器	鉢	灰黄色	2.5 Y 7/2	石英・長石・雲母	手捏ね整形、ユビオサエ、ナデ、接合痕跡

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
544	H6-110	中瀬川3区	溝2	法万寺6区	溝2 上層	土師器	鼓形器台	明橙	25 YR 6.8	石英・雲母	全体磨滅・剥落により調整不明瞭
545	H6-259	中瀬川3区	溝2	法万寺6区	溝2 下層	土師器	鼓型器台	にぶい橙色	75 YR 7 A	石英・長石・角閃石	内外面丹塗り
546	H7-196	中瀬川3区	溝2	法万寺7区	溝2 上層	土師器	器台	橙色	75 YR 7.6	精良	外面脚部黒斑
547	H7-194b	中瀬川3区	溝2	法万寺7区	溝5 上面	土師器	壺	灰黄色	25 Y 7.2	長石・石英・角閃石	口縁部のみ
548	H7-194	中瀬川3区	溝2	法万寺7区	溝5 上面	土師器	壺	にぶい橙色	75 YR 7 A	長石・石英・雲母	鹿児島県成川式土器。体部上位に刻み目をもつ突帯が巡る 外面胴部黒斑
549	H7-194c	中瀬川3区	溝2	法万寺7区	溝5 上面	土師器	壺	灰黄色	25 Y 7.2	長石・石英・角閃石・雲母	底部のみ 外面底面黒斑
550	H7-211	中瀬川3区	溝3	法万寺7区	溝2 土器	土師器	高杯	赤褐色	25 YR 8.8	長石・石英・雲母	器表剥落、赤味おびる
551	H7-265	中瀬川3区	溝4	法万寺7区	溝1	土師器	甕	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	長石・石英	山陰系?
552	H5-51	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	灰白色	10 YR 8.2	雲母・長石・石英	ユビオサエ、ユビナデ、胎土精良
553	H5-44	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	長石・角閃石・雲母	ユビオサエ、ユビナデ、胎土精良
554	H5-30	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・角閃石	ユビオサエ、ユビナデ
555	H5-37	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	黄灰色	25 YR 7.2	雲母・長石	ユビオサエ、ユビナデ、粘土接合痕
556	H5-36	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
557	H5-58	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	長石・雲母	ユビオサエ、ユビナデ、胎土精良、粘土接合痕
558	H5-41	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	黄灰色	25 YR 6 A	長石・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
559	H5-59	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	灰白色	10 YR 7 A	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
560	H5-45	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	黄灰色	25 YR 7.2	雲母・長石・石英	ユビオサエ、ユビナデ
561	H5-53	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	灰白色	10 YR 8.2	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
562	H5-50	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	石英・雲母・長石	ユビオサエ、ユビナデ
563	H5-31	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
564	H5-49	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	褐灰色	10 YR 6 A	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
565	H5-34	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい褐色	75 YR 8.3	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
566	H5-56	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	灰黄色	25 YR 7.2	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
567	H5-57	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	石英・長石・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
568	H5-39	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
569	H5-65	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 6.6	長石・石英	ユビオサエ、ユビナデ
570	H5-55	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	25 YR 6.6	石英・長石・角閃石	ユビオサエ、ユビナデ
571	H5-38	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	橙色	5 YR 7.8	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
572	H5-35	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい褐色	75 YR 6 A	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
573	H5-40	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	明赤褐色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
574	H5-42	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい褐色	75 YR 7.3	雲母・石英・長石	ユビオサエ、ユビナデ
575	H5-54	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	雲母・長石	ユビオサエ、ユビナデ
576	H5-33	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい黄橙色	10 YR 7.3	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
577	H5-32	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	埴	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	長石・角閃石・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
578	H5-48	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.3	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
579	H5-43	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	鉢	明褐灰色	75 YR 7.2	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
580	H5-47	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	鉢	にぶい褐色	75 YR 7 A	長石・石英・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
581	H5-52	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	鉢	褐灰色	10 YR 6 A	長石・雲母	ユビオサエ、ユビナデ
582	H5-60	中瀬川2区	土器溜り2	法万寺5区	土器群	土師器	高杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	長石・石英・雲母	
583	H7-52	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器1	土師器	鉢	明赤褐色	5 YR 6.6	長石・雲母	手捏ね成形
584	H7-445	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南中央	土師器	鉢	にぶい褐色	75 YR 6 A	長石・石英・雲母少	手捏ね成形
585	H7-40	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器2	土師器	鉢	褐灰色	10 YR 6 A	石英・長石	手捏ね成形
586	H7-146	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南中央	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	長石・石英・雲母	外面底面黒斑
587	H7-149	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.3	長石・石英	手捏ね成形
588	H7-61	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器3	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.3	1mm以下の砂粒、石英	外面口縁黒斑
589	H7-144	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南中央	土師器	鉢	灰白色	10 YR 8.2	長石中・赤色酸化粒	全体に白っぽく精良
590	H7-74	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器20	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	長石・石英	外面底面黒斑
591	H7-13	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器2	土師器	鉢	橙色	25 YR 6.8	1mm以下の砂粒	手捏ね成形
592	H7-78	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器20	土師器	鉢	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	外面タタキ状の圧痕
593	H7-34	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器5	土師器	鉢	灰褐色	5 YR 6.2	石英・長石	外面胴部煤付着
594	H7-187	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1	土師器	鉢	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	手捏ね成形
595	H7-35	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器5	土師器	鉢	橙色	5 YR 6.6	石英・長石	手捏ね成形、外面底面黒斑
596	H7-66	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器20	土師器	鉢	橙色	25 YR 6.6	石英・長石	外面胴部黒斑
597	H7-75	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器9	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.2	石英・長石	外面胴～底面黒斑
598	H7-14	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器6	土師器	鉢	橙色	5 YR 6.6	石英・長石	手捏ね成形、外面底面黒斑
599	H7-53	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器3	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7.3	長石・石英	手捏ね成形、外面胴部黒斑
600	H7-147	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南中央L=5m	土師器	鉢	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	外面口縁黒斑
601	H7-73	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器24	土師器	鉢	橙色	25 YR 6.6	長石・石英	手捏ね成形
602	H7-10	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器8	土師器	鉢	橙色	75 YR 7.6	石英・長石	外面肩部黒斑 底部焼成後穿孔
603	H7-50	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器3	土師器	鉢	橙色	75 YR 6.6	長石・石英	手捏ね成形
604	H7-186	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1 中央南	土師器	鉢	橙色	5 YR 6.6	長石・石英・雲母	手捏ね成形
605	H7-72	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器20	土師器	鉢	にぶい褐色	5 YR 7 A	長石・石英	外面底面黒斑
606	H7-51	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5 土器1	土師器	鉢	明赤褐色	5 YR 8.8	長石・雲母	手捏ね成形、外面口縁～底面黒斑

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考
607	H 59	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器3	土師器	鉢	橙色	25 YR 6	長石・石英 被熱(加)による赤変
608	H 49	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	鉢	黒褐色	10 YR 1A	長石・石英・雲母 手捏ね整形
609	H 41	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器4	土師器	鉢	橙色	5 YR 6	長石・石英 底部焼成後穿孔
610	H 77	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器26	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7	石英・長石 全体に磨滅している
611	H 76	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器27	土師器	鉢	橙色	7.5 YR 6	石英・長石 外面底面黒斑
612	H 48	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器1	土師器	鉢	褐色	7.5 YR 6	石英・長石 外面底面黒斑
613	H 143	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南中央	土師器	鉢	褐色	5 YR 6	長石・石英 内外面磨滅
614	H 188	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1	土師器	鉢	灰白色	10 YR 7A	長石・石英 手捏ね成形
615	H 7 37	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器4	土師器	鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7A	石英・長石 外面煤か黒斑?
616	H 148	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南中央	土師器	鉢	明赤褐色	5 YR 6	長石・石英
617	H 152	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5上面	土師器	鉢	褐色	5 YR 6	長石・石英 外面煤付着
618	H 42	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器8	土師器	鉢	褐色	7.5 YR 6	長石・石英 外面胴～底部黒斑
619	H 1	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器2	土師器	鉢	褐色	7.5 YR 6	長石・石英・雲母 外面胴～底部黒斑
620	H 30	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器5	土師器	鉢	明黄褐色	10 YR 6	2mm以下の砂粒 外面胴～底部黒斑
621	H 23	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	鉢	明褐色	7.5 YR 6	1mm以下の砂粒 外面胴～底部黒斑
622	H 44	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器21	土師器	壺	褐色	2.5 YR 6	石英・長石 外面胴部黒斑
623	H 39	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器11	土師器	壺	にぶい褐色	7.5 YR 6	石英・長石 手捏ね成形
624	H 60	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 6	長石・石英・角閃石 外面底面黒斑
625	H 64	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	にぶい赤褐色	2.5 YR 6	長石・石英・角閃石 手捏ね成形、内外面黒斑
626	H 58	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器3	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 6	長石・石英・角閃石 手捏ね整形
627	H 6	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器4	土師器	壺	褐色	5 YR 6	長石・石英 内面丁寧なナデ
628	H 33	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	明赤褐色	5 YR 6	石英・長石 外面底面に煤?
629	H 22	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	壺	にぶい褐色	7.5 YR 6	石英・長石 外面口縁・肩部黒斑
630	H 9	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	褐色	5 YR 6	石英・長石 内面底面黒斑?
631	H 3	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器20	土師器	壺	灰白色	2.5 Y 7A	石英・長石・角閃石・雲母 外面胴部黒斑、胴部穿孔あり
632	H 2	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器4	土師器	壺	褐色	7.5 YR 6	長石・石英・角閃石 中に鉄片あり、胴部穿孔1・欠損1
633	H 80	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器27	土師器	壺	褐灰色	10 YR 5A	長石・石英 外面全体が黒い
634	H 32	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7	長石・石英・雲母
635	H 451	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7	長石・石英・雲母 外面口縁荒いヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ
636	H 26	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器8	土師器	壺	にぶい褐色	7.5 YR 6	長石・石英
637	H 150	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1	土師器	壺	灰白色	10 YR 8	長石・石英・雲母 外面オサエ後ナデ
638	H 5	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器2	土師器	壺	褐色	5 YR 6	石英・長石・角閃石 故意に破砕か
639	H 24	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7	長石・石英・雲母 外面胴～底部黒斑
640	H 55	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	壺	明褐色	7.5 YR 7	長石・石英・雲母 外面胴部黒斑
641	H 25	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器2	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7	長石・石英・雲母 内面ユビオサエ後ケズか
642	H 42	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	褐色	7.5 YR 6	長石・石英・雲母 手捏ね成形
643	H 68	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器20	土師器	壺	灰褐色	5 YR 7	雲母・長石・石英
644	H 7	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	灰黄色	2.5 Y 7	長石・石英・角閃石 外面肩部・底部に黒斑
645	H 4	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器0	土師器	壺	褐色	2.5 YR 6	石英・長石・角閃石 外面胴部・底面煤付着 故意に破砕か
646	H 8	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	にぶい褐色	5 YR 7A	長石・石英・雲母 外面胴～底部黒斑
647	H 49	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	壺	褐色	5 YR 6	長石・石英 外面底面黒斑
648	H 54	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7	石英・長石 外面黒斑
649	H 63	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器8	土師器	壺	にぶい褐色	7.5 YR 6	長石・石英 外面ナデ
650	H 29	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器1	土師器	壺	にぶい褐色	7.5 YR 6	長石・石英・雲母 外面胴～底部被熱、外面底面煤?
651	H 81	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	鉢	浅黄褐色	10 YR 8	長石・石英
652	H 45	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器22	土師器	壺	赤色	10 R 8	石英・長石 煤付着 加(被)熱による赤変 線描(舟?)
653	H 65	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器26	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 7	長石・石英 外面口縁 底面黒斑
654	H 56	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器3	土師器	鉢	灰白色	10 YR 8	長石・石英 外面胴部黒斑
655	H 69	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器25	土師器	甕	にぶい赤褐色	5 YR 6	石英・長石 外面底部に黒斑
656	H 70	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器24	土師器	甕	褐灰色	7.5 YR 6	石英・長石・雲母 外面胴部黒斑
657	H 31	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器5	土師器	甕	にぶい褐色	7.5 YR 6	石英・長石 内面口縁・肩部煤、赤色顔料の使用の可能性
658	H 62	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器3	土師器	甕	浅黄褐色	10 YR 8	3mm以下の砂粒、石英
659	H 71	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器27	土師器	甕	灰白色	2.5 Y 8	長石・石英・雲母 外面胴～底面煤付着 被熱痕跡あり
660	H 43	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器8	土師器	甕	浅黄褐色	7.5 YR 6	2.5mm以下の砂粒 外面調整不明
661	H 79	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	甕	にぶい褐色	5 YR 6	長石・石英 被加熱痕跡あり
662	H 67	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器23	土師器	高杯	赤褐色	2.5 YR 6	長石・石英 (外面口縁に黒斑)?
663	H 213	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	たわみ1	土師器	高杯	灰白色	7.5 YR 8	石英・長石・雲母 外面口縁に黒斑
664	H 28	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器6	土師器	高杯	褐色	2.5 YR 7	2mm以下の砂粒多 被熱(体部下位～底部)
665	H 189	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	南半たわみ1	土師器	高杯	浅黄褐色	7.5 YR 6	長石・石英・角閃石 全面剥落して調整不明瞭
666	H 251	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器5	土師器	鉢	にぶい褐色	7.5 YR 6	長石・石英 鉄片・白玉1納める
667	H 21	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器2	土師器	鉢	黒褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母 669の中に入る
668	H 38	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	鉢	褐色	7.5 YR 6	角閃石・石英・長石 670の中に入る
669	H 20	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器2	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 7A	長石・角閃石・石英・雲母 667の中に入る
670	H 27	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器7	土師器	壺	灰黄色	2.5 Y 7	長石・石英 668の中に入る
671	H 46	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	鉢	浅黄褐色	7.5 YR 6	長石・石英 入れ子の外側
672	H 46	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	鉢	黒褐色	7.5 YR 3	長石・石英 入れ子の内側
673	H 47	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	鉢	浅黄褐色	7.5 YR 6	長石・石英 入れ子の外側、白玉1納める
674	H 47	中瀬川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器9	土師器	鉢	明赤褐色	2.5 YR 6	長石・石英・雲母 手捏ね成形、入れ子の内側

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
675	H 48	中撫川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器20	土師器	鉢	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	手握ね成形、入れ子の外側
676	H 48	中撫川3区	土器溜り3	法万寺7区	溝5土器20	土師器	鉢	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	手握ね成形、入れ子の内側
677	H 83	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ2	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 3	長石・石英・角閃石	胴部内面ヘラケズリ、ユビオサエ、ナデ
678	H 91	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	壺	にぶい黄橙色	10 YR 3	長石・石英・雲母	外面ヨコナデ、ユビオサエ、内面ケズリ、ユビオサエ
679	H 70	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英・雲母	稜線が明瞭、鋭敏な作り
680	H 71	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	にぶい黄橙色	10 YR 2	長石・石英・角閃石	外面ハケメ、ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
681	H 66	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	にぶい黄褐色	10 YR 3	角閃石・長石・石英・雲母	外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ、ユビオサエ
682	H 89	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	壺	灰白色	2.5 Y 1	長石・石英・角閃石・雲母	外面ヘラミガキ、内面ハケメ、ヘラミガキ
683	H 122	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	壺	黒褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	外面ハケ、タタキ、内面ヨコナデ
684	H 73	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 3	長石・石英・雲母	外面ハケメ、内面ヘラケズリ
685	H 68	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	にぶい黄橙色	10 YR 3	長石・石英・雲母	外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ、ユビオサエ
686	H 72	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	灰黄色	2.5 Y 2	長石・石英・雲母	外面ハケメ、ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、刺突2個
687	H 69	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	灰黄色	2.5 Y 1	長石・石英・雲母	外面ハケメ後ミガキ、内面ヘラケズリ、ユビオサエ
688	H 67	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	壺	橙色	2.5 YR 6	長石・石英・角閃石	加熱使用、外面ミガキ、内面ケズリ、ユビオサエ
689	H 90	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	壺	にぶい橙色	7.5 YR 3	長石・石英・角閃石	胴部下半煤付着
690	H 77	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	器台	橙色	5 YR 6	長石・雲母・精製粘土	外面ヘラミガキ
691	H 80	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	器台	橙色	7.5 YR 6	長石・赤色酸化粒	孔4、黒斑、ヘラミガキ
692	H 81	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	器台	にぶい黄橙色	10 YR 3	雲母・長石・石英	孔3、ヘラミガキ、ハケメ
693	H 82	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	高杯	橙色	2.5 YR 6	赤色酸化粒	細かいヘラミガキ
694	H 79	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	高杯	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英・雲母・角閃石	穿孔4、黒斑
695	H 78	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	高杯	橙色	5 YR 3	長石・石英・精製粘土	穿孔3、一部に布目痕跡
696	H 88	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	高杯	にぶい黄褐色	10 YR 2	細砂・赤色酸化粒	内外面細かいミガキ、
697	H 4 96	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英・角閃石	内外面ユビオサエ
698	H 404	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 2	精製粘土	内外面ミガキ
699	H 400	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	外面ヨコナデ、ケズリ、内面ヘラミガキ
700	H 98	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい橙色	7.5 YR 4	角閃石・長石・石英	外面ヨコナデ、ケズリ、内面ナデ、ユビオサエ
701	H 405	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	外面ケズリ、ナデ、内面ユビオサエ、ナデ
702	H 75	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 上層	土師器	鉢	浅黄褐色	7.5 YR 4	赤色酸化土粒・石英	ユビオサエ、ヘラミガキ
703	H 406	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 上層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	外面ケズリ、ユビオサエ、内面ナデ
704	H 86	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ2	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・雲母	下半ユビオサエ、黒斑
705	H 401	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	灰黄色	2.5 Y 2	長石・石英・角閃石	外面ケズリ、ヨコナデ、内面ヘラミガキ
706	H 403	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 上層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・角閃石	外面ヘラケズリユビオサエ、内面ユビオサエ、ナデ
707	H 402	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・雲母	外面ヘラケズリ、内面ユビオサエ、ナデ
708	H 99	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・角閃石・雲母	外面ヨコナデ、ケズリ、内面ナデ、ユビオサエ
709	H 97	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英	黒斑
710	H 76	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	褐灰色	10 YR 6	長石・石英・雲母	外面ヘラケズリ、ナデ、内面ミガキ
711	H 84	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ2	土師器	製塩土器	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英	外面タタキ、内面ユビオサエ
712	H 74	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	製塩土器	灰黄褐色	10 YR 2	長石・石英・金雲母	外面タタキ、内面ナデ
713	H 92	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 3	細砂・雲母	内外面ユビオサエ
714	H 87	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ2	土師器	鉢	橙色	5 YR 6	赤色酸化土粒	内外面ヘラミガキ、黒斑
715	H 57	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	鉢	橙色	2.5 YR 6	長石・石英・角閃石	体部赤変
716	H 428	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 上層	土師器	鉢	にぶい黄褐色	10 YR 2	石英・長石・雲母	外面荒く太いミガキ、内面ヘラケズリ 後部分的にミガキ
717	H 54	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	手焙形土器	にぶい橙色	7.5 YR 4	長石・石英・雲母	鉢形土器に覆い部を接合、覆い部端部は上下に拡張
718	H 85	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ2	土師器	鼓形器台	にぶい黄褐色	10 YR 2	長石・石英・雲母	受け部ヨコナデ、脚部内面ヘラケズリ
719	H 423	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 上層	土師器	鼓形器台	にぶい黄褐色	10 YR 3	長石・石英・雲母	内外面ヨコナデ
720	H 55	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	土師器	鼓形器台	明赤褐色	2.5 YR 6	長石・石英・雲母	内外面ヨコナデ、脚部内面以外赤色顔料塗彩

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
721	H1 56	中撫川2 区	たわみ1	法万寺4 区	たわみ1	土師器	鼓形器台	明赤褐色	25 YR 6	長石・石英・雲母	赤色顔料塗彩、ヘラミガキ、ヘラケズリ
722	H2 76	中撫川1 区	土壇6	法万寺2 区	土壇9	土師器	甕	明赤褐色	75 YR 6	石英・長石・雲母	
723	H2 77	中撫川1 区	土壇6	法万寺2 区	土壇9	土師器	甕	灰白色	10 YR 2	石英・長石・雲母	下端に穿孔
724	H1 48	中撫川2 区	土壇7	法万寺4 区	土壇7	須恵器	無蓋高杯	オリ ープ黒色	75 Y3 A	長石・石英	杯部外面に段、自然釉
725	H1 49	中撫川2 区	土壇7	法万寺4 区	土壇7	須恵器	高杯	灰色	5 Y6 A	石英・角閃石・雲母	内外面ヨコナデ
726	H1 21	中撫川2 区	土壇7	法万寺4 区	土壇7	須恵器	高杯	灰色	N 0	長石・石英 角閃石	脚部上端に接合痕跡か
727	H1 20	中撫川2 区	土壇7	法万寺4 区	土壇7	須恵器	高杯	灰色	N 0	長石・石英・雲母	脚部上端に接合痕跡
728	H6 250	中撫川3 区	土壇8	法万寺6 区	土壇0	須恵器	杯	青灰色	5 B 1	長石・石英・雲母	外面にヘラ記号?
729	H 95	中撫川3 区	土壇0	法万寺7 区	土壇7	須恵器	平瓶	灰色	N 0	長石・石英	外面胴部カキメ
730	H 96	中撫川3 区	土壇0	法万寺7 区	土壇7	須恵器	平瓶	灰白色	N 0	長石・石英・角閃石	外面頸部にヘラ痕跡
731	H 46	中撫川3 区	溝8	法万寺7 区	溝5 土器1	土師器	甕	褐灰色	5 YR 5 A	長石・石英・角閃石	土器溜り3 に伴う?
732	H 140	中撫川1 区	溝9	法万寺3 区	溝3	須恵器	甕	オリ ープ黒色	10 YR 3 A	長石・石英	頸部上位に連続刺突文
733	H 234	中撫川3 区	包含層	法万寺6 区	溝1	須恵器	台付壺	灰色	N 0	長石・石英・雲母	
734	H 247	中撫川3 区	包含層	法万寺7 区	たわみ	須恵器	蓋	灰色	5 Y6 A	長石・石英	
735	H 237	中撫川3 区	包含層	法万寺7 区	たわみ	須恵器	蓋	灰色	N 0	長石・石英・雲母	外面ヘラオコシ痕
736	H 171	中撫川3 区	包含層	法万寺7 区	南側溝	須恵器	蓋	暗オリ ープ灰色	5 G Y4 A	長石・石英	自然釉、焼けひずみあり
737	H 248	中撫川3 区	包含層	法万寺7 区	たわみ	須恵器	高杯?	灰色	N 0	長石・石英・雲母	内面自然釉
738	H 246	中撫川3 区	包含層	法万寺7 区	たわみ1 上層	須恵器	台付壺	灰白色	25 Y7 A	石英・長石・雲母	透かし孔3 か所
739	H 142	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	須恵器	杯	灰色	N 5 /	長石・石英	
740	H 92	中撫川1 区	包含層	法万寺2 区	包含層	須恵器	杯	灰色	N 5 /	長石・石英	
741	H 65	中撫川1 区	包含層	法万寺2 区	溝25 付近	須恵器	横瓶	灰色	N 6 /	石英ほか	
742	H 437	中撫川1 区	包含層	法万寺2 区	包含層	須恵器	壺	灰色	N 5 /	長石・石英	頸部にヘラ記号
743	H 217	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	須恵器	甕か壺	灰白色	25 Y8 A	長石・石英	内面に車輪タタキ
744	H 82	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	須恵器	甕か壺	灰白色	5 Y7 A	長石・石英	内面に車輪タタキ(十)
745	H 190	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	須恵器	甕か壺	灰色	5 Y6 A	長石・石英	内面に車輪タタキ(十)
746	H 93	中撫川1 区	包含層	法万寺2 区	建物周辺	土師器	高杯	黄灰色	25 Y6 A	長石・石英	
747	H 174	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	土師器	高杯	橙色	5 YR 6	長石・石英	口縁端部はやや肥厚
748	H 75	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	土師器	高杯	橙色	75 YR 6	長石・石英	口縁端部はやや肥厚、わずかに丹付着
749	H 436	中撫川1 区	包含層	法万寺2 区	包含層	土師器	高杯	橙色	25 YR 6 ~ 6.8	長石・石英	面取り高杯、内面接合痕跡、丹塗り
750	H 91	中撫川1 区	包含層	法万寺2 区	包含層	土師器	鉢形土器	黄灰色	25 Y6 A	長石・石英	厚い器壁、増場のような用途の可能性
751	H 125	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	土師器	盤	橙色	5 YR 6	長石・石英	
752	H 126	中撫川1 区	包含層	法万寺3 区	包含層	土師器	盤	にぶい橙色	75 YR 4	長石・石英	
753	H1 62	中撫川2 区	掘立柱建物7	法万寺4 区	建物4 - 14	須恵器	杯	灰色	N 0	長石	貼り付け高台
754	H1 63	中撫川2 区	掘立柱建物7	法万寺4 区	建物4 - 14	須恵器	甕	灰色	N 0	長石・雲母	
755	H1 59	中撫川2 区	掘立柱建物7	法万寺4 区	建物4 - 7	須恵器	壺	灰色	75 Y5 A	長石	貼り付け高台
756	H 89	中撫川2 区	掘立柱建物8	法万寺5 区	建物3 - 10	須恵器	蓋	灰色	N 0	長石	天井部丸く、口縁部は大きく屈曲する
757	H5 87	中撫川2 区	掘立柱建物8	法万寺5 区	建物3 - 9	須恵器	杯	灰色	N5 /0	長石	貼り付け高台、ヘラオコシ痕跡
758	H 86	中撫川2 区	掘立柱建物8	法万寺5 区	建物3 - 9	須恵器	杯	灰色	N 0	長石	貼り付け高台
759	H 85	中撫川2 区	掘立柱建物8	法万寺5 区	建物3 - 12	須恵器	杯	灰色	N 0	長石・角閃石	貼り付け高台
760	H 88	中撫川2 区	掘立柱建物8	法万寺5 区	建物3 - 9	須恵器	杯	灰色	N 0	長石・石英・雲母	貼り付け高台
761	H 71	中撫川2 区	掘立柱建物8	法万寺5 区	建物3 - 3	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	長石・石英・雲母	ナデ、ヨコナデ
762	H 227	中撫川3 区	掘立柱建物1	法万寺6 区	配置土器01	須恵器	杯	灰白色	75 Y8 A	石英・長石・雲母	丁寧なつくり
763	H 239	中撫川3 区	掘立柱建物1	法万寺6 区北	方形P126	須恵器	甕	オリ ープ黒色	5 Y3 A	長石・石英・雲母	
764	H 242	中撫川3 区	掘立柱建物2	法万寺6 区	P84	土師器	皿	にぶい褐色	75 TR 6	長石・石英・雲母	全体に暗い色調
765	H 249	中撫川3 区	土壇2	法万寺6 区	土壇2	須恵器	蓋	灰色	N 0	石英・長石・雲母	
766	H 97	中撫川3 区	土壇3	法万寺7 区	土壇2	須恵器	壺か横瓶	灰色	N 0	長石・石英	
767	H1 8	中撫川2 区	土壇4	法万寺4 区	土壇4	土師器	小皿	にぶい橙色	5 YR 4	角閃石・長石・石英	底面ヘラオコシ後ナデ
768	H1 11	中撫川2 区	土壇4	法万寺4 区	土壇4	土師器	杯	にぶい褐色	75 YR 6	長石・石英・角閃石	底面ヘラオコシ後ナデ
769	H1 9	中撫川2 区	土壇4	法万寺4 区	土壇4	土師器	杯	灰白色	25 Y8 2	石英・角閃石・長石	底面ヘラオコシ後ナデ
770	H1 10	中撫川2 区	土壇4	法万寺4 区	土壇4	土師器	杯	褐色	5 YR 6	石英・長石	底面ヘラオコシ後ナデ
771	H1 7	中撫川2 区	土壇4	法万寺4 区	土壇4	土師器	皿	にぶい褐色	75 YR 6	長石・石英・雲母	
772	H1 12	中撫川2 区	土壇4	法万寺4 区	土壇4	土師器	杯	褐色	75 YR 6	長石・石英・角閃石	貼り付け高台
773	H3-74	中撫川2 区	焼成土壇	法万寺2 区	焼成遺構	土師器	杯	にぶい橙	75 YR 4	長石・石英	やや不良 外底部は糸切り底で、やや揚げ底
774	H 264	中撫川3 区	溝24	法万寺7 区	溝9	須恵器	蓋	暗青灰色	5 B 1	長石・石英・雲母	焼成良
775	H 212	中撫川3 区	溝24	法万寺7 区	溝9	須恵器	高杯	暗青灰色		長石・石英・雲母	脚部のみ
776	H 88	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	円面碗	灰白色	25 Y8 A	角閃石・石英ほか	白っぽい胎土、搬入かほぼ完形品
777	H 97	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	蓋	灰色	N 0 /	長石・石英	身受けのカエリに、重ね焼きの痕跡あり
778	H 124	中撫川1 区	溝25	法万寺2 区	溝2 上層	須恵器	蓋	灰色	N 5 /	長石・石英	
779	H 123	中撫川1 区	溝25	法万寺2 区	溝2 上層	須恵器	蓋	灰色	N 5 /	長石・石英	
780	H 72	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	蓋	灰色	N 5 /	長石・石英	
781	H 84	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	蓋	灰色	N 5 /	長石・石英	
782	H 88	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	蓋	灰色	N 6 /	長石・石英	
783	H 72	中撫川1 区	溝25	法万寺2 区	溝2	須恵器	蓋	灰色	25 Y8 A	長石・石英	
784	H 400	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	杯	灰色	N 5 /	長石・石英	
785	H 85	中撫川1 区	溝25	法万寺3 区	溝2	須恵器	杯	灰白色	5 Y7 A	長石・石英	わずかな自然釉
786	H 90	中撫川1 区	溝25	法万寺2 区	溝2	須恵器	碗	灰色	N 6 /	長石・石英	

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
787	HB 87	中撫川1区	溝25	法万寺2区	溝2	須恵器	杯	灰色	N5 /	長石・石英	太めの輪高台
788	HB 121	中撫川1区	溝25	法万寺2区	溝2	須恵器	杯	灰色	5 Y6 A	長石・石英	蓋受けのカエリがある
789	HB 128	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	杯	にぶい橙色	5 YR6 B	長石・石英	やや大型、厚肉い底部
790	HB 120	中撫川1区	溝25	法万寺2区	溝2 上層	須恵器	甗	灰色	N6 /	長石・石英	体部完存
791	HB 79	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	甗	灰色	N5 /	長石・石英	体部完存
792	HB 98	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	甗	青灰色	5 PB5 A	長石・石英	体部完存
793	HB 78	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	高杯	灰白色	5 Y7 A	長石・石英	
794	HB 138	中撫川1区	溝25	法万寺2区	溝2 上層	須恵器	壺	灰色	7.5 Y6 A	長石・石英	肩部に自然釉
795	HB 89	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	甗	暗灰色	N8 /	長石・石英	瓦質焼成、体部に把手剥落痕跡
796	HB 139	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	甗	灰色	N6 /	長石・石英	ヘラ状工具による無造作な施文
797	HB 96	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	横瓶	灰色	5 Y4 A	長石・石英	内面に車輪タタキ
798	HB 95	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	壺	灰白色	N7 /	長石・石英	内面に車輪タタキ
799	HB 101	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	須恵器	甗	暗灰色	N8 /	長石・石英	大型の甗
800	HB 81	中撫川1区	溝25	法万寺3区	溝2	土師器	杯	橙色	5 YR 6	長石・石英・雲母	内面に放射状暗文、口唇部内側に段
801	HB 127	中撫川1区	溝25	法万寺2区	溝2	土師器	盤	黄橙色	10 YR 2	長石・石英・雲母	内面に放射状暗文、口唇部内側に段
802	HB 104	中撫川2区	溝25	法万寺5区	溝7	須恵器	杯	灰白色	N7 0	長石・石英	外底部ヘラケズリ
803	HF 317	中撫川3区	溝25	法万寺7区北	溝4 下層	須恵器	杯	灰色	N6 0	長石・石英・雲母	
804	HB 102	中撫川2区	溝25	法万寺5区	溝7 上層	須恵器	杯	灰白色	N7 0	長石・石英	受け部重ね焼き痕跡
805	HF 318	中撫川3区	溝25	法万寺7区	南側溝	須恵器	杯	灰色	N6 0	長石・石英・雲母	瓦質焼成
806	HF 292	中撫川3区	溝25	法万寺7区	溝4 北端	須恵器	平瓶	灰色	7.5 Y6 A	長石・石英	外底面タタキあり
807	HF 291	中撫川3区	溝25	法万寺7区	溝4 南端	須恵器	高杯	灰色	10 Y6 A	長石・石英	
808	HB 96	中撫川2区	溝25	法万寺5区	溝7	須恵器	高杯	灰色	N5 0	長石・石英	粗砂が目立つ
809	HB 101	中撫川2区	溝25	法万寺5区	溝7 上層	須恵器	高杯	灰白色	2.5 Y8 A	長石・石英	焼成不良
810	HF 289	中撫川3区	溝25	法万寺7区	溝4 上層	須恵器	鉢	灰白色	N8 0	長石・石英	外底面に、粗い削り
811	HF 309	中撫川3区	溝25	法万寺7区	溝4	須恵器	壺	灰白色	N8 0	長石・石英	
812	HF 209	中撫川3区	溝25			須恵器	壺	灰色	N6 0	長石・石英	底部にヘラ記号あり
813	HI-GR6	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	外底部ヘラ削り、円盤状削り出し高台、全面施釉、京都産、9世紀前半
814	HI-GR3	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	P49	緑釉陶器	碗	黄緑色		土師質	同上
815	HI-GR2	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	碗	淡黄緑色～明緑色		土師質、硬質	同上
816	HI-GR3	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	京都産、9世紀前半
817	HI-GR2	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	碗	黄緑色		土師質	外底部ヘラ削り、円盤状削り出し高台、全面施釉、京都産、9世紀前半
818	HI-GR2	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	同上
819	HI-GR9	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	同上
820	HI-GR0	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	同上
821	HI-GR8	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡緑色～淡灰緑色		土師質、6mm程砂含	同上
822	HI-GR1	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	同上
823	HI-GR1	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄(緑)色		土師質	同上
824	HI-GR2	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	外底部糸切り、京都産、9世紀前半
825	HI-GR8	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	T18	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	外底部ヘラ削り、円盤状削り出し高台、全面施釉、京都産、9世紀前半
826	HI-GR0	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構、P179	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	同上
827	HI-GR9	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	P54	緑釉陶器	碗	淡緑色～鮮緑色		土師質	同上、外底面ヘラ記号
828	HI-GR6	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄緑色		土師質	同上
829	HI-GR7	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	碗	黄色～淡黄緑色		土師質	内底部トチン痕、銀化、猿投産、9世紀前半
830	HI-5-GR	中撫川2区	たわみ3	法万寺4・5区	包含層	緑釉陶器	碗	淡黄緑色～淡黄色		土師質、やや硬質	貼り付け輪高台、トチン痕、猿投産、9世紀前半
831	HI-GR5	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構下層溝3	緑釉陶器	皿	淡黄緑色～くすんだ黄色		土師質	一部銀化、猿投産、9世紀前半
832	HI-5-GR	中撫川2区	たわみ3	法万寺4・5区	包含層	緑釉陶器	耳皿	鮮～明緑色		土師質	京都産、9世紀前半
833	HI-GR1	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	耳皿	淡緑色		土師質	外底部糸切り、外底部露胎、京都産、9世紀前半
834	HI-GR4	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構下層溝2	緑釉陶器	耳皿	濃緑色～灰緑色		土師質	同上
835	HI-GR2	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	耳皿	淡黄緑色		土師質	同上
836	HI-GR3	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	皿	淡黄緑色～淡緑色		土師質	京都産、9世紀前半
837	HI-GR7	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	外底部ヘラ削り、円盤状削り出し高台、全面施釉、京都産、9世紀前半
838	HI-GR4	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	同上
839	HI-GR0	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	皿	淡緑色		土師質	同上
840	HI-GR9	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	同上

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
841	HI-GR1	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	皿	濃緑色	土師質	同上	
842	HI-GR8	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	皿	深緑色	土師質、堅く緻密	同上、トチン痕跡	
843	HI-GR5	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	皿	淡黄緑色	土師質	良好 外底部ヘラケズリ、円盤状削り出し高台、京都産、9世紀前半	
844	HI-GR7	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	緑釉陶器	皿	淡黄緑色	土師質2mm程砂含	同上	
845	HI-GR11	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	皿	淡緑色	土師質	同上	
846	HI-17	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	蓋	橙色	5YR6.6	石英・角閃石・長石	輪状つまみ
847	HI-38	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	杯	にぶい黄橙色	10YR7.8	長石・石英・雲母	内面、外面体部丹塗り
848	HI-28	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	杯	浅黄橙色	7.5YR8.8	石英	内面、外面体部に丹塗り
849	HI-36	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	杯	浅黄橙色	7.5YR8.8	雲母・角閃石・長石	丹塗り
850	HI-29	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	杯	にぶい橙色	7.5YR6.4	長石・雲母	内面、外面体部に丹塗り(2.5YR6.7)
851	HI-31	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	杯	浅黄橙色	7.5YR6.4	長石・雲母	内面、外面体部丹に塗り
852	HI-30	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	杯	にぶい赤褐色	2.5YR5.4	石英・長石・角閃石	外面に焼きムラ
853	HI-34	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	皿	橙色	7.5YR6.6	長石・雲母	内面丹塗り
854	HI-32	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	皿	にぶい黄橙色	10YR7.4	長石・雲母・石英	丹塗り
855	HI-33	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	皿	にぶい黄橙色	10YR7.8	雲母・長石・石英	丹塗り
856	HI-35	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	皿	にぶい黄橙色	10YR6.4	長石・雲母	丹塗りか?
857	HI-37	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状	土師器	高台付皿	灰白色	10YR8.1	石英・長石	内面黒色
858	HI-154	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	土師器	台付鉢(盤)	明褐色	5YR7.2	石英・長石・雲母	内外面ハケメ、ユビオサエ、ユビナデ
859	HI-153	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	包含層	土師器	台付鉢(盤)	にぶい黄橙色	10YR7.2	長石・石英・雲母	外面ハケメ、内面ナデ
860	HI-160a	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	土師器	甕	橙色	2.5YR6.5	石英・長石	良好 外面ハケメ、凸帯貼付
861	HI-160b	中撫川2区	たわみ3	法万寺4区	池状遺構	土師器	甕	橙色	2.5YR6.5	石英・長石	良好 外面ハケメ、凸帯貼付、凸帯は角張る
862	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	包含層	緑釉陶器	椀	明黄緑色		土師質	トチン痕、内底部段、京都産、9世紀前半
863	HI-GR3	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器26	緑釉陶器	椀	淡黄緑色		土師質0.5~2mmの砂	外底部糸切り 後ケズリ、トチン痕、京都産、9世紀前半
864	HI-GR5	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器59	緑釉陶器	椀	明黄緑色		土師質0.5~1mmの砂	同上
865	HI-GR6	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器3	緑釉陶器	椀	淡緑色		土師質	同上
866	HI-GR6	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	椀	淡緑色~明緑色		土師質	同上
867	HI-GR2	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器56	緑釉陶器	椀	淡黄緑色		土師質0.5mm程の砂	トチン痕、京都産、9世紀前半
868	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器08	緑釉陶器	椀	明黄緑色		土師質	京都産、9世紀前半
869	HI-GR7	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器07	緑釉陶器	椀	淡緑色		土師質	京都産、9世紀前半
870	HI-GR8	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 最上層	緑釉陶器	椀	灰緑色		須恵質	京都産、9世紀前半
871	HI-GR10	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	緑釉陶器	椀	灰緑色		須恵質	京都産、9世紀前半
872	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 緑釉1	緑釉陶器	椀	淡緑色		土師質	同上
873	HI-GR2	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	東西ナンチ	緑釉陶器	椀	黄緑色		土師質	同上
874	HI-GR8	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	椀	淡黄緑色		土師質	同上
875	HI-GR2	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 緑釉2	緑釉陶器	椀	淡黄緑色		土師質	同上
876	HI-GR10	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	椀	淡緑色		土師質	同上
877	HI-GR7	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	椀	淡緑色		土師質	同上
878	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺5区	池状	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	同上
879	HI-GR8	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 最上層	緑釉陶器	椀	淡灰緑色		土師質	削り出し輪高台、高台露胎、京都産、9世紀前半
880	HI-GR6	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1(中央東石群)	緑釉陶器	無台椀	にぶい淡黄灰色		土師質	無高台、口唇部露胎、猿投産、9世紀前半
881	HI-GR3	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	椀	黄灰色~黄緑色		土師質1mm以下の砂	猿投産、9世紀前半
882	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	壺	淡灰緑色(一部銀化)		土師質、硬質	猿投産、9世紀前半
883	HI-GR2	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1(石群3付近)	緑釉陶器	耳皿	灰黄緑色		土師質1mm以下の砂	京都産、9世紀前半
884	HI-GR2	中撫川2区	たわみ4	法万寺5区	池状	緑釉陶器	耳皿?	淡緑色		土師質	外底部糸切り、円盤状削り出し高台、全面施釉、京都産、9世紀前半
885	HI-GR5	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器2	緑釉陶器	皿	淡緑色~淡黄緑色		土師質	同上
886	HI-GR4	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器06	緑釉陶器	皿	淡緑色		土師質0.5~1mmの砂	同上
887	HI-GR10	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器04	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	同上
888	HI-GR9	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器53	緑釉陶器	皿	淡黄緑色(銀化)		土師質	同上
889	HI-GR8	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器05	緑釉陶器	皿	淡緑色		土師質、0.5mm程の砂	同上
890	HI-GR2	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝4	緑釉陶器	皿	明黄緑色		土師質	同上
891	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器36	緑釉陶器	皿	淡緑色		土師質	同上
892	HI-GR9	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器3	緑釉陶器	皿	淡緑色		土師質0.1~2mmの砂	京都産、9世紀前半
893	HI-GR7	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	緑釉陶器	皿	淡灰黄色		土師質	京都産、9世紀前半
894	HI-GR1	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	中世水田層	緑釉陶器	皿	灰緑色		須恵質	京都産、9世紀前半
895	HI-GR5	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	包含層	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	京都産、9世紀前半
896	HI-GR4	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器09	緑釉陶器	皿	淡黄緑色		土師質	京都産、9世紀前半
897	HI-214	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	灰釉陶器	双耳瓶	灰緑色		精良	口縁部のみ、内外面施釉

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考
898	H 246	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器42	灰釉陶器	双耳壺?	灰緑色	精良	2段階の工程あり(上下の土の色の違い)
899	H 192	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	黒色土器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 6 A	石英・長石・雲母 高台はいびつな輪高台
900	H 495	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	黒色土器	皿	灰黄色	25 Y 7 2	雲母・石英・長石 ミガキの太さ2種類
901	H 196	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	黒色土器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7 B	石英・長石・雲母 内外面磨減で調整不明瞭
902	H 175	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	黒色土器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7 2	石英・長石・雲母 内外面ヘラミガキ
903	H 134	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器47	黒色土器	皿	浅黄橙色	75 YR 6 6	長石・石英・雲母
904	H 131	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	土器8(溝)	黒色土器	皿	橙色	5 YR 6 6	長石・石英・雲母 外面口縁黒斑?
905	H 198	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	黒色土器	皿	浅黄橙色	10 YR 6 6	角閃石・雲母・石英・長石
906	H 177	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	黒色土器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	雲母・石英・長石 外面高台以外黒色
907	H 23	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器28	黒色土器	碗	にぶい黄橙色	10 YR 7 2	長石・雲母・石英 外面はナデ・ヨコナデ
908	H 494	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器8	黒色土器	碗	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	雲母・石英・長石 内面調整不明瞭
909	H 493	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器43	黒色土器	碗	浅黄色	25 Y 7 3	雲母・石英・長石 口唇部の反り
910	H 17	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	黒色土器	碗	灰白色	10 YR 8 2	石英・長石・雲母 内面にミガキ
911	H 476	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	黒色土器	碗	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	石英・長石・雲母 内面調整不明瞭
912	H 64	中撫川2区	たわみ4	法万寺5区	池	黒色土器	碗	にぶい黄橙色	10 YR 6 3	石英・長石・雲母 貼付け高台、内面ミガキ
913	H 63	中撫川2区	たわみ4	法万寺5区	池	黒色土器	碗	にぶい橙色	75 YR 6 A	石英・長石 内面ほぼ全面に漆付着、 外面漆垂れる
914	H 133	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 東側北	黒色土器	碗	橙色	5 YR 6 3	長石・石英・雲母 法万寺2・3区のたわみ 4出土土器が接合
915	H 197	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器5	黒色土器	碗	にぶい黄橙色	10 YR 6 A	石英・長石・雲母
916	H 191	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	西側溝付近	黒色土器	碗	にぶい褐色	75 YR 6 3	石英・長石・雲母 内面底面に焼成前記号 (十文字)
917	H 201	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	石英・雲母・長石
918	H 202	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	南土手溝1	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	石英・長石・雲母 外面丹?
919	H 199	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器35	土師器	皿	淡黄色	25 Y 8 3	石英・長石・雲母
920	H 203	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	東西サブトレ 12	土師器	皿	橙色	5 YR 6 6	石英・長石・雲母
921	H 200	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	碗	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	石英・長石・雲母 外面に強めの稜が入る
922	H 178	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 東西側	土師器	碗	にぶい橙色	75 YR 6 A	石英・長石・雲母
923	H 12	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区		土師器	碗	橙色	25 YR 6 3	長石・石英・雲母 外面に丹彩
924	H 480	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 肩東側	土師器	碗	にぶい橙色	75 YR 6 A	石英・長石・雲母 外面丹塗り、内面不明瞭
925	H 135	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器30	土師器	杯	橙色	5 YR 6 3	長石・石英・角閃石 外面底面ヘラオコシ後ナデ
926	H 462	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器8	土師器	杯	橙色	5 YR 6 6	石英・長石・雲母
927	H 165	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器49	土師器	杯	橙色	5 YR 6 6	石英・長石 外面底面ヘラオコシ後ナデ
928	H 125	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器1	土師器	杯	灰黄色	25 Y 7 2	長石・石英 内面赤色顔料?
929	H 149	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 東岸	土師器	杯	浅黄色	25 Y 4 3	石英・長石 内底部に赤色顔料
930	H 160	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器20	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 6 A	石英・長石・角閃石 内面に赤色顔料
931	H 159	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器1	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	赤色酸化粒多 石英・長石 外底部ヘラオコシ後ナデ?
932	H 151	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器13	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 6 A	石英・長石・雲母 外底部ヘラオコシ後ナデ
933	H 4	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器8	土師器	杯	浅黄橙色	10 YR 6 A	石英・長石 同上
934	H 158	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器2	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	長石・石英 ゆがみあり。内外面磨減
935	H 166	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	土師器	杯	灰白色	10 YR 8 2	石英・長石・赤色酸化粒・雲母 底部ヘラオコシ後ナデ
936	H 166	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器2	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	石英・長石・雲母 内面に灯芯油痕?
937	H 142	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器18	土師器	杯	橙色	75 YR 6 6	長石・石英・雲母 外底部ナデ、ユビオサエあり
938	H 461	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	土器7	土師器	杯	橙色	75 YR 6 6	赤色酸化粒・長石 外底部ナデ
939	H 143	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	杯	灰黄色	25 Y 7 2	石英・長石・雲母 外底部ヘラオコシ後ナデ、 ユビオサエあり
940	H 5	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器54	土師器	杯	灰白色	10 YR 8 2	長石・石英・雲母 口縁黒斑
941	H 11	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器4	土師器	杯	浅黄橙色	75 YR 6 A	長石・石英・雲母 同上
942	H 29	中撫川3区	たわみ4	法万寺5区	池	土師器	坏	にぶい橙色	75 YR 7 A	長石・石英・角閃石 外面底面ヘラオコシ後ナデ、 体部ヨコナデ、ナデ
943	H 138	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器36	土師器	杯	橙色	5 YR 6 6	石英・長石・雲母 精製土
944	H 3	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器5	土師器	杯	橙色	75 YR 6 6	長石・石英・雲母 外面底面ヘラオコシ後未調整
945	H 163	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器7	土師器	杯	にぶい橙色	75 YR 7 A	石英・長石・雲母 外面底面ヘラオコシ後ユビオサエ
946	H 8	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器6	土師器	杯	浅黄橙色	75 YR 6 A	長石・石英・雲母 外面底面ヘラオコシ後ナデ、 体部ヨコナデ、ナデ
947	H 145	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器5	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	石英・長石・雲母 外面底面ヘラオコシ後ナデ、 ユビオサエあり
948	H 132	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器7	土師器	杯	浅黄橙色	10 YR 6 A	長石・石英・雲母 同上
949	H 164	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区		土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	石英・長石 外面底面ヘラオコシ後未調整
950	H 155	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器7	土師器	杯	灰白色	10 YR 8 A	石英・長石・雲母 内面丹彩
951	H 7	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器5	土師器	杯	浅黄橙色	75 YR 6 A	長石・石英・雲母
952	H 2	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器6	土師器	杯	浅黄橙色	75 YR 6 A	長石・石英・雲母 外面底面ヘラオコシ後未調整
953	H 25	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	杯	橙色	75 YR 6 6	長石・石英・雲母 外面底面ユビオサエあり
954	H 156	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器3	土師器	杯	浅黄橙色	75 YR 6 3	石英・長石・雲母 外面底面ヘラオコシ後ナデ、 ユビオサエあり
955	H 150	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器3	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	石英・長石・雲母 内底面のみ、にぶく赤色
956	H 137	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器5	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7 3	石英・長石・雲母 外面底面ヘラオコシ後ナデ、 ユビオサエあり

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
957	H 165	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 土器2	土師器	杯	浅黄橙色	10 YR 8/3	石英・長石・雲母	内面と外面の口縁部に丹が見られる 淡赤色
958	H 164	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器54	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	長石・石英・雲母多	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
959	H 152	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器50	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/A	石英・長石・雲母	内・外面に丹彩 にぶい赤色
960	H 167	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	杯	浅黄色	2.5 Y 7/3	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ
961	H 154	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器22	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ユビオサエあり
962	H 13	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器7	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	長石・石英・雲母	同上
963	H 10	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器30	土師器	杯	橙色	5 YR 7/6	長石・石英・雲母	同上
964	H 163	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区北	溝1	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・角閃石・長石	内面全体と外面にごくわずかの丹彩が見られる
965	H 162	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	土師器	杯	橙色	7.5 YR 6/A	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
966	H 159	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	包含層	土師器	杯	浅黄橙色	7.5 YR 6/A	石英・長石・雲母	同上
967	H 161	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 土器1	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・長石・雲母	同上
968	H 22	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器23	土師器	杯	灰黄色	2.5 Y 7/2	石英・長石・雲母少	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
969	H 148	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器2	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ
970	H 146	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器29	土師器	杯	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・雲母・長石	内面見込みに「十」字の線刻
971	H 168	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器15	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	長石・石英・雲母	外面黒斑有り ヨコナデ
972	H 184	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器39	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7/A	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ
973	H 173	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 土器1	土師器	皿	浅黄橙色	7.5 YR 7/A	長石・石英・雲母	外底部煤状付着痕
974	H 136	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器39	土師器	皿	灰色	N 6/0	長石・石英・雲母	底面外面黒斑
975	H 218	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	土師器	皿	浅黄橙色	7.5 YR 7/A	長石・石英・雲母	内面底面に丹塗彩
976	H 181	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器1・62	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7/A	長石・石英・雲母	外面丹彩
977	H 183	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	皿	浅黄橙色	10 YR 7/A	長石・石英・雲母	内面丹塗布
978	H 174	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 土器3	土師器	皿	にぶい橙色	5 YR 7/A	長石・石英・雲母	外面黒斑?
979	H 185	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器43・44	土師器	皿	浅黄橙色	10 YR 7/3	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
980	H 61	中撫川2区	たわみ4	法万寺5区	池	土師器	皿	橙色	7.5 YR 7/6	長石・石英・雲母	同上
981	H 15	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器46	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7/2	長石・石英・雲母	内面に薄い黒斑?
982	H 6	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器56	土師器	皿	浅黄橙色	10 YR 7/3	0.1mm以下の砂粒	外面底面ヘラオコシ後ナデ
983	H 19	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	皿	浅黄橙色	7.5 YR	長石・石英・雲母	底面黒斑?
984	H 179	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器41	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7/A	長石・石英・雲母	外面黒斑?
985	H 140	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器29	土師器	皿	浅黄橙色	10 YR 7/A	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
986	H 174	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器52	土師器	皿	浅黄橙色	7.5 YR 6/3	長石・石英・雲母	内面丹塗布
987	H 187	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器73	土師器	皿	橙色	2.5 YR 6/3	長石・石英・雲母	被熱あり
988	H 219	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	土師器	皿	橙色	5 YR 6/3	長石・石英・雲母	内外面磨滅のため調整不明瞭
989	H 169	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器34	土師器	皿	橙色	5 YR 6/3	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
990	H 188	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器58	土師器	皿	橙色	5 YR 6/3	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
991	H 172	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器39	土師器	皿	橙色	5 YR 7/6	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
992	H 62	中撫川3区	たわみ4	法万寺5区	池	土師器	皿	橙色	5 YR 6/3	長石・石英・雲母	外底部ヘラオコシ後ナデ、体部ヨコナデ、ナデ
993	H 175	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器27	土師器	皿	浅黄橙色	7.5 YR 6/3	長石・石英・雲母	内外面丹塗布
994	H 171	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器0	土師器	皿	橙色	5 YR 7/6	長石・石英・雲母	口縁部外面被熱痕
995	H 173	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器54	土師器	皿	浅黄橙色	10 YR 6/3	長石・石英・雲母	丹痕跡
996	H 177	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器37	土師器	皿	淡橙色	5 YR 8/A	石英・長石・雲母	内面丹塗布
997	H 9	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器38	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7/A	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後未調整
998	H 190	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 南西端	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 6/3	石英・長石・雲母	内面丹塗布
999	H 186	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器36	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・長石・雲母	内面丹塗布
1000	H 14	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器35	土師器	皿	浅黄色	2.5 Y 7/3	石英・長石・雲母	内面底面黒斑?
1001	H 18	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	皿	にぶい黄橙色	10 YR 7/3	石英・長石・雲母	底面外面押圧のみ。外面底面に黒斑?
1002	H 180	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器6	土師器	皿	橙色	5 YR 7/6	長石・石英・雲母	外面底面ヘラケズリ後ユビオサエ
1003	H 221	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	須恵器	杯	灰白色	N 7/0	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ
1004	H 215	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 土器0	須恵器	杯	灰白色	N 8/0	長石・石英・雲母	内面口縁に煤付着
1005	H 217	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	須恵器	杯	灰白色	N 8/0	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ
1006	H 441	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 土器58	須恵器	杯	明青灰色	5 B 1/A	長石・石英	内面に「火轆」あり
1007	H 232	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区		須恵器	杯	灰白色	N 7/0	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後未調整、布目痕?あり
1008	H 238	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	須恵器	杯	灰白色	N 8/0	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ
1009	H 218	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	須恵器	杯	灰白色	2.5 Y 7/A	石英・長石・雲母	内面漆付着 容器の可能性
1010	H 170	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1 東側L=4まで	須恵器	杯	青灰色	5 B 1/A	長石・石英・雲母	外面底部高台接合後ヨコナデ

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
1011	H6-237	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 西端	須恵器	蓋	灰白色	N6.0	長石・石英・雲母	つまみあり、脱落か
1012	H6-220	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区北	溝1	須恵器	蓋	灰色	N6.0	長石・石英・雲母	重ね焼痕 もともとつまみ無し？
1013	H6-217	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1 中央東石群付近	須恵器	転用硯	少し黄みがかった灰色		長石・石英	わずかな墨痕らしい箇所あり、滴状
1014	H6-278	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区		須恵器	平瓶	灰白色	N7.0	長石・石英	内面口縁～外面上部に自然釉付着
1015	H6-279	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	須恵器	平瓶	灰色		長石・石英	外面自然釉付着
1016	H6-287	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	鍋	にぶい黄橙色	10YR7.2	長石・石英	外面口縁に黒斑
1017	H6-288	中撫川3区	たわみ4	法万寺6区	溝1	土師器	盤	にぶい橙色	7.5YR7.4	長石・石英・雲母	穿孔内面から外面へ、内面から脚内面への2列
1018	H6-320	中撫川3区	たわみ4	法万寺7区	溝1	土師器	かまど	灰黄色	2.5Y7.2	長石・石英・雲母	
1019	H6-87	中撫川3区	たわみ5	法万寺7区	土壇3	土師器	椀	灰白色	7.5YR8.4	長石・石英	内面一部ハケメ
1020	H6-88	中撫川3区	たわみ5	法万寺7区	土壇3	土師器	椀	灰白色	2.5Y8.1	長石・石英	高台のみ残存
1021	H6-84	中撫川3区	たわみ5	法万寺7区	土壇3	土師器	椀	灰白色	10YR8.2	長石・石英	成形「ろくろびき」～輪積み(内型使わず)
1022	H6-86	中撫川3区	たわみ5	法万寺7区	土壇3	土師器	椀	灰白色	10YR8.1	長石・石英	
1023	H6-89	中撫川3区	たわみ5	法万寺7区	土壇3	土師器	椀	灰白色	2.5Y8.1	長石・石英	高台のみ残存
1024	H6-447	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-22	土師器	杯	にぶい橙色	7.5YR8.4	石英・長石・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
1025	H6-457	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-49	土師器	杯	灰白色	10YR8.2	石英・長石	内外面丹塗り
1026	H6-429	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-13	土師器	杯	橙色	5YR6.6	長石・石英・雲母	内面丹塗り、外面にもあった可能性あり
1027	H6-428	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-18	土師器	杯	淡橙色	5YR8.4	長石・石英・雲母	外面底面ナデ
1028	H6-482	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-16	土師器	皿	にぶい黄橙色	10YR7.4	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
1029	H6-476	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-7	土師器	皿	にぶい橙色	7.5YR7.4	石英・長石・雲母	外面丹影
1030	H6-430	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1-21	土師器	皿	浅黄橙色	7.5YR8.4	長石・石英・雲母	外面底面ヘラオコシ後ナデ、ユビオサエあり
1031	H6-228	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	杯蓋	灰色	N6.0	長石・石英・雲母	
1032	H6-229	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	杯蓋	灰色	N6.0	長石・石英	粗砂含 天井ゴマ
1033	H6-243	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	須恵器	杯蓋	灰白色	N7.0	長石・石英・雲母	やや瓦質 扁平なつまみ
1034	H6-296	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝	須恵器	蓋	灰色	N6.0	長石・石英・雲母	少
1035	H6-231	中撫川3区	包含層	法万寺6区	溝1	須恵器	蓋	灰白色	N7.0	長石・石英・雲母	
1036	H6-216	中撫川3区	包含層	法万寺6区	溝1 北端	須恵器	転用硯蓋	灰白色	N7.0	長石・石英	墨痕ほとんど見られず
1037	H6-231	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	蓋	灰色	N6.0	長石多	
1038	H6-235	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	椀	灰色	N6.0	長石・石英・雲母	内面に暗灰緑色の自然釉
1039	H6-234	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 ?	須恵器	壺?	灰白色	5Y8.1	長石・石英・雲母	
1040	H6-242	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	須恵器	杯	灰白色	2.5Y7.1	長石・石英	
1041	H6-240	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	須恵器	杯	灰色	5Y6.1	長石・雲母	
1042	H6-245	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	須恵器	杯	灰色	N5.0	長石・石英	
1043	H6-236	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	椀	灰白色	2.5Y7.1	長石・石英・雲母	
1044	H6-241	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	須恵器	杯	灰色	N6.0	長石・石英	瓦質
1045	H6-233	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	椀	灰色	N6.0	0.5mm以下の砂粒、長石・雲母・石英	
1046	H6-235	中撫川3区	包含層	法万寺6区	溝1 最下層	須恵器	杯	青灰色	5B5.1	長石・石英・雲母	
1047	H6-216	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝上層	須恵器	椀	灰白色	N6.0	長石・石英・雲母	丸底風の椀
1048	H6-172	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝1 肩東側	須恵器	杯	暗青灰色	5B1.1	長石・石英	
1049	H6-24	中撫川3区	包含層	法万寺6区	溝1	須恵器?	椀	灰白色	8A	0.1～3mm前後の砂粒	
1050	H6-249	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	須恵器	高杯	灰色	7.5Y6.1	長石・石英中	外面にゴマ
1051	H6-239	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ 古代後期分?)	須恵器	高杯	灰色	N6.0	長石・石英	
1052	H6-238	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 ?	須恵器	高杯	灰色	N1.0	1mm以下の砂粒	瓦質 低脚
1053	H6-230	中撫川3区	包含層	法万寺6区		須恵器	甕?	灰色	N6.0	0.2mm程の白色砂粒	
1054	H6-27	中撫川3区	包含層	法万寺6区	溝1 東	須恵器	壺(大型)	灰色	N6.0	長石・石英	
1055	H6-228	中撫川3区	包含層	法万寺6区	たわみ2	須恵器	杯	灰白色	N6.0	石英・長石・雲母	
1056	H6-179	中撫川3区	包含層	法万寺7区	南側溝	土師器	皿	橙色	5YR6.6	石英・長石・雲母	
1057	H6-294	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝1 底面	土師器	高杯	橙色	5YR7.6	精良、長石・石英	7面取り、8c 後半か
1058	H6-295	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝1 底面	土師器	高杯	にぶい黄橙色	10YR6.4	精良、長石・石英	9面取り、8c 後半か
1059	H6-105	中撫川2区	包含層	法万寺5区	たわみ	須恵器	円面硯	灰色	N6.0	長石・石英	線刻の鋸歯文、方形透かし、澁は使用により研磨されている
1060	H6-227	中撫川3区	柱穴出土	法万寺7区	P6	土師器	椀	橙色	5YR6.6	1mm以下の砂粒	須恵器 模倣タイプ
1061	H6-247	中撫川3区	柱穴出土	法万寺6区	R7	土師器	杯	灰白色	10YR8.1	2mm以下の砂粒	
1062	H6-222	中撫川3区	柱穴出土	法万寺7区	R2	土師器	杯	にぶい橙色	7.5YR7.4	0.5～2mm程度の砂粒	9世紀後半
1063	H6-225	中撫川3区	柱穴出土	法万寺7区	南東R7	土師器	皿	浅黄橙色	10YR8.3	1mm以下の砂粒多	
1064	H6-244	中撫川3区	柱穴出土	法万寺6区	建物1-P4	土師器	椀	にぶい赤褐色	5YR5.4	1mm以下の砂粒	復元実測 10C ?
1065	H6-223	中撫川3区	柱穴出土	法万寺7区	P2	土師器	小型椀	灰白色	2.5Y8.2	石英多、長石	
1066	H6-224	中撫川3区	柱穴出土	法万寺7区	P2	土師器	椀	浅黄橙色	10YR8.4	2.5mm以下の砂粒多	
1067	H6-GR1	中撫川1区	包含層	法万寺3区	包含層	緑釉陶器	火舎	濃緑色		土師質、やや硬質	周防産?、10世紀
1068	H6-GR5	中撫川2区	包含層	法万寺4区	井戸7	緑釉陶器	椀	淡青緑色		須恵質	京都産、9世紀後半
1069	H6-GR5	中撫川2区	包含層	法万寺4区	池状遺構	緑釉陶器	皿	灰緑色		土師質、堅緻	京都産、9世紀中葉
1070	H6-GR5	中撫川2区	包含層	法万寺5区	包含層	緑釉陶器		緑色		須恵質	9世紀後半～10世紀
1071	H6-GR3	中撫川3区	包含層	法万寺6区	包含層	緑釉陶器	椀	淡灰緑色		須恵質	9世紀後半～10世紀前半
1072	H6-GR3	中撫川2区	包含層	法万寺5区	包含層	緑釉陶器	椀	灰緑色		須恵質	京都産、9世紀後半
1073	H6-GR7	中撫川3区	包含層	法万寺7区	包含層	緑釉陶器		淡緑色		須恵質	京都産、9世紀後半
1074	H6-GR3	中撫川3区	包含層	法万寺6区	包含層	緑釉陶器	椀	緑灰色		須恵質	京都産、9世紀中～後半

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調	胎土	特徴・備考	
1075	H6-GR29	中撫川3区	包含層	法万寺6区	包含層	緑釉陶器	椀	灰緑色	須恵質	京都産、9世紀中～後半	
1076	H6-GR28	中撫川3区	包含層	法万寺6区	包含層	緑釉陶器	椀	淡緑色	土師質	削り出し輪高台、高台内側無釉、京都産、9世紀後半～10世紀前半	
1077	H7-GR6	中撫川3区	包含層	法万寺7区	たわみ3 上層	緑釉陶器	椀?	淡黄緑色	土師質	京都産、9世紀末～10世紀前半	
1078	H7-GR5	中撫川3区	包含層	法万寺7区	包含層	緑釉陶器	椀	灰緑色	須恵質	トチン痕、京都産、9世紀末～10世紀前半	
1079	H7-GR3	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝1	緑釉陶器	椀	淡灰緑色	須恵質	京都産、9世紀中～後半	
1080	H7-GR1	中撫川3区	包含層	法万寺7区	包含層	緑釉陶器	椀	淡灰緑色	須恵質	京都産、9世紀末～10世紀前半	
1081	H7-GR2	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝1	緑釉陶器	椀	濃緑色	須恵質	断面に漆付着、近江産、10世紀後半	
1082	H4 61	中撫川2区	掘立建物3	法万寺4区	P113	備前焼	播鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	長石・雲母	卸し目7本単位
1083	H2 92	中撫川1区	P 2	法万寺3区	P219	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・長石	早島式椀
1084	H2 115	中撫川1区	P 3	法万寺2区	P57	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・長石	ヘラオコシ後ナデ
1085	H2 119	中撫川1区	P 3	法万寺2区	P57	土師器	小皿	橙色	7.5 YR 6	精良	ヘラオコシ後ナデ
1086	H2 118	中撫川1区	P 3	法万寺2区	P57	土師器	小皿	橙色	7.5 YR 6	精良	ヘラオコシ後ナデ
1087	H2 116	中撫川1区	P 3	法万寺2区	P57	土師器	小皿	橙色	7.5 YR 6	精良	ヘラオコシ後ナデ
1088	H2 117	中撫川1区	P 3	法万寺2区	P57	土師器	小皿	橙色	7.5 YR 6	精良	ヘラオコシ後ナデ
1089	H2 1	中撫川1区		法万寺3区	P61	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	長石・石英	早島式椀
1090	H2 114	中撫川1区		法万寺2区	P233	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・長石	ヘソ椀
1091	H2 112	中撫川1区		法万寺2区	P76	土師器	椀	灰白色	10 YR 2	石英・長石	ヘソ椀
1092	H4 49	中撫川2区	柱穴出土	法万寺4区	P 1	土師器	椀	灰白色	2.5 Y 8 A	長石・雲母	貼り付け高台
1093	H4 47	中撫川2区	柱穴出土	法万寺4区	P420	土師器	椀	にぶい橙色	7.5 YR 6	雲母・長石	貼り付け高台
1094	H4 48	中撫川2区	柱穴出土	法万寺4区	P116	土師器	椀	浅黄橙色	10 YR 6	長石・石英	内面ナデ、外面ヨコナデ
1095	H4 46	中撫川2区	柱穴出土	法万寺4区	P179	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 7	長石・石英・雲母	外面ヨコナデ
1096	H5 70	中撫川2区	柱穴出土	法万寺5区	P45	土師器	椀	橙色	5 YR 6	石英・雲母・長石	ナデ、底部少し窪む
1097	H5 83	中撫川2区	柱穴出土	法万寺5区	P273	土師器	椀	橙色	7.5 YR 6	石英・長石・雲母	ナデ、ヨコナデ
1098	H5 80	中撫川2区	柱穴出土	法万寺5区	P249	土師器	椀	灰白色	7.5 YR 2	長石・石英・雲母	ナデ、オサエ、底部窪む
1099	H5 72	中撫川2区	柱穴出土	法万寺5区	P253	土師器	椀	灰白色	2.5 Y 8 A	石英・長石	ナデ、オサエ、底部窪む
1100	H4 60	中撫川2区	柱穴出土	法万寺4区	P179	土師器	鍋	にぶい黄橙色	10 YR 7	長石・石英・雲母	外面煤付着
1101	H4 58	中撫川2区	柱穴出土	法万寺4区	P103・119	瓦	軒平瓦	黄灰色	2.5 Y 5 A	石英・長石	内面布目、均整唐草文
1102	H2 134	中撫川1区	竪穴遺構1	法万寺3区	竪穴	土師器	小皿	椀	2.5 YR 6	精良	ヘラオコシ後ナデ
1103	H2 135	中撫川1区	竪穴遺構1	法万寺3区	竪穴	土師器	椀	灰白	10 YR 2	石英多	ヘソ椀
1104	H2 136	中撫川1区	竪穴遺構1	法万寺3区	竪穴	須恵器	捏鉢	灰	N6 /	石英・長石多	片口あり、東播系
1105	H2 141	中撫川1区	竪穴遺構1	法万寺3区	竪穴	須恵器	捏鉢	灰	N5 /	石英・長石多	口縁部自然釉、東播系
1106	H2 144	中撫川1区	竪穴遺構1	法万寺3区	竪穴	瀬戸	壺	にぶい黄橙	10 YR 7	精良	ほかに小片2点あり
1107	H2 147	中撫川1区	井戸6	法万寺3区	中世井戸	瓦	軒丸瓦	灰	5 Y 6 A	長石・石英	三つ巴文
1108	H4 45	中撫川2区	井戸7	法万寺4区	土壇5	土師器	小皿	浅黄橙色	10 YR 6	石英・長石・角閃石	底面ヘラオコシ
1109	H4 46	中撫川2区	井戸7	法万寺4区	土壇5	黒色土器	椀	浅黄橙色	7.5 YR 6	石英・長石・角閃石	貼り付け高台、内黒土器
1110	H4 44	中撫川2区	井戸7	法万寺4区	土壇5	瓦質土器	播鉢	黒色	N2 0	長石・石英・雲母	内面ハケ調整後卸し目
1111	H4 43	中撫川2区	井戸7	法万寺4区	土壇5	土師質	播鉢	灰色	5 Y 6 A	角閃石・長石・石英	僅かに下ろし目の痕跡
1112	H2 103	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	石英・雲母	ヘソ椀
1113	H2 102	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 7 A	石英多	ヘソ椀
1114	H2 111	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	橙色	5 YR 6 ~6.6	精良	ヘラオコシ
1115	H2 104	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	石英・雲母ほか	ヘラオコシ
1116	H2 105	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	精良	ヘラオコシ
1117	H2 108	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	精良	ヘラオコシ
1118	H2 107	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	精良	ヘラオコシ
1119	H2 110	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	精良	ヘラオコシ
1120	H2 106	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	精良	ヘラオコシ
1121	H2 109	中撫川1区	土壇20	法万寺2区	土壇4	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	精良	ヘラオコシ
1122	H4 6	中撫川2区	土壇22	法万寺4区	土壇3	土師器	小皿	にぶい橙色	2.5 YR 6 A	雲母・長石	体部外面ユビオサエ痕
1123	H5 90	中撫川2区	土壇24	法万寺5区	土壇0	備前焼	播鉢	灰褐色	7.5 YR 2	長石・石英	卸し目7条単位
1124	H5 40	中撫川2区	土壇28	法万寺5区	土壇3	亀山焼	甕	灰黄褐色	10 YR 6	長石・石英・雲母	外面格子目タタキ、内面ハケメ
1125	H5 9	中撫川2区	土壇28	法万寺5区	土壇3	土師質土器	播鉢	にぶい黄橙色	10 YR 7	長石・石英・雲母	外面タテハケ
1126	H5 4	中撫川2区	土壇29	法万寺5区	土壇8	土師器	小皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	長石・雲母	ヘラ切り未調整
1127	H5 5	中撫川2区	土壇29	法万寺5区	土壇8	土師器	椀	灰白色	2.5 Y 8 A	石英・雲母	外面に布目痕跡?
1128	H5 6	中撫川2区	土壇29	法万寺5区	土壇8	土師器	椀	浅黄橙色	7.5 YR 6	石英・長石・雲母	貼り付け高台
1129	H5 46	中撫川2区	土壇30	法万寺5区	土壇5	土師器	小皿	にぶい橙色	7.5 YR 7 A	雲母・長石	口縁部玉縁
1130	H5 45	中撫川2区	土壇30	法万寺5区	土壇5	備前焼	甕	灰色	N6 0	長石・赤色酸化土粒	口縁部玉縁
1131	H5 14	中撫川2区	土壇30	法万寺5区	土壇5	備前焼	甕	赤褐色	10 Y 4 A	長石・雲母	口縁部玉縁
1132	H5 43	中撫川2区	土壇30	法万寺5区	土壇5	亀山焼	甕	黒褐色	2.5 Y 3 A	長石・石英	口唇部、口縁部外面に格子目タタキ
1133	H5 118	中撫川3区	土壇22	法万寺6区	土壇1	土師器	小皿	にぶい橙色	2.5 YR 6 A	0.1 cm砂粒	丸底 器表面磨減
1134	H5 119	中撫川3区	土壇22	法万寺6区	土壇1	備前焼	播鉢	暗赤灰色	10 R 1 A	0.2 cm以下の砂粒	卸し目1条8本
1135	H5 120	中撫川3区	土壇22	法万寺6区	土壇1	亀山焼	甕	灰色	N6 0	0.3 cm以下の砂粒	
1136	H1 223	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝	土師器	皿	橙色	10 YR 6	長石・石英ほか精良	ヘラオコシ
1137	H1 222	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝	土師器	皿	灰白色	10 YR 2	長石・石英多	ヘラオコシ
1138	H1 221	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝	土師器	椀	にぶい黄橙色	10 YR 7	長石・石英多	早島式椀
1139	H2 73	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝上層	青磁	皿	灰緑色	5 Y 8	精良	素地2.5 Y 8 /2 灰白
1140	H1 64	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝	青磁	碗	オリープ灰色	7.5 Y 5.5	精良	ガラス質の釉
1141	H1 63	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝	青磁	碗	明オリープ灰	2.5 G Y 7 A	精良	外底部は露胎
1142	H2 262	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝上層	備前焼	甕	暗赤灰色	10 Y 3 A	長石・石英多	
1143	H2 260	中撫川1区	溝12	法万寺2区	大溝	備前焼	播鉢	暗赤褐色	10 YR 3	長石・石英多	卸し目1条8本単位

掲載番号	実測図番号	出土地区	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	器種	色調		胎土	特徴・備考
1144	FB 261	中撫川1区	溝42	法万寺2区	大溝上層	東播系	捏鉢	灰色	N5 A	長石・石英多	口縁部黒変
1145	HI 258	中撫川1区	溝42	法万寺2区	大溝上層	龜山焼	壺	灰色	5 Y6 A	石英・長石	口縁端部に格子目タタキ
1146	FB 48	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	褐灰色	10 YR1 A	長石・石英多	体部上位に沈線文が巡る
1147	FB 59	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	暗赤褐色	25 YR3 B	長石・石英多	体部上位に2条の沈線文
1148	FB 47	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	褐色	7.5 YR1 B	長石・石英多	自然釉がかかる
1149	FB 58	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	褐灰色	10 YR5 A	長石・石英多	自然釉がかかる
1150	FB 56	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	褐色	7.5 YR1 B	長石・石英多	自然釉がかかる
1151	FB 57	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	黒褐色	5 YR1 A	長石・石英多	自然釉がかかる
1152	FB 46	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	暗赤褐色	25 YR3 B	長石・石英多	肩部に沈線文
1153	FB 45	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	黒褐色	7.5 YR1 B	長石・石英多	肩部に沈線文
1154	FB 50	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	搦鉢	赤褐色	10 YR1 A	長石・石英多	1条8本の卸し目
1155	FB 44	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	搦鉢	にぶい赤褐色	5 YR1 B	長石・石英多	卸し目は1条8本、全体に自然釉
1156	FB 49	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	搦鉢	にぶい赤褐色	5 YR1 B	長石・石英多	卸し目は1条10本
1157	FB 54	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	搦鉢	暗褐色	10 YR3 B	長石・石英多	卸し目は1条8本
1158	FB 53	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	搦鉢	褐灰色	5 YR1 A	長石・石英多	大甕口縁部1/4残存
1159	FB 52	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	暗赤褐色	25 YR3 B	長石・石英多	大甕口縁部、自然釉かかる
1160	FB 51	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	備前焼	壺	にぶい赤褐色	5 YR1 B	長石・石英多	大甕の底部で、やや掘り底
1161	FB 34	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR7 B	精良	
1162	FB 35	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR7 A	精良	
1163	FB 36	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい橙色	7.5 YR7 A	精良	
1164	FB 29	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい黄褐色	10 YR7 B	石英・雲母多	
1165	FB 30	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい黄褐色	10 YR7 B	石英・雲母多	
1166	FB 40	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい橙色	10 YR7 A	長石・石英多	
1167	FB 32	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	明褐灰色	7.5 YR7 B	石英多	
1168	FB 33	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい黄褐色	10 YR7 B	石英ほか	
1169	FB 43	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	にぶい黄褐色	10 YR7 B	長石・石英多	完形品
1170	FB 31	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	浅黄褐色	10 YR8 B	石英・雲母多	
1171	FB 42	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	灰白色	7.5 YR8 B	長石・石英多	
1172	FB 28	中撫川1区	溝43中央部	法万寺3区	溝1中央部	土師器	皿	浅黄褐色	10 YR8 B	石英ほか	
1173	FB 38	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	須恵器	捏鉢	灰色	N6 /	長石・石英多	東播系
1174	FB 39	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	須恵器	捏鉢	灰色	N6 /	長石・石英多	東播系
1175	FB 41	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	龜山焼	搦鉢	黄灰色	2.5 Y6 A	長石・石英多	内面に卸し目
1176	FB 27	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1中層	土師器	鍋	にぶい橙色	10 YR7 B	石英・長石・雲母	体部外面に煤付着
1177	FB 37	中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	須恵器	壺	灰白色	2.5 Y8 B	長石・石英多	東播系(魚住)
1178	FB 100	中撫川2区	溝22	法万寺5区	溝1	備前焼	搦鉢	褐灰色	5 YR1 A	長石・石英・角閃石	卸し目9本単位
1179	HI 264	中撫川1区	河道	法万寺1区	河道	備前焼	壺	オリブ黒色	5 Y3 A	石英・長石ほか	体部に沈線文
1180	HI 256	中撫川1区	河道	法万寺1区	河道	備前焼	搦鉢	灰色	5 Y6 A	長石・石英多	
1181	HI 263	中撫川1区	河道	法万寺1区	河道	備前焼	壺	暗赤灰色	7.5 Y4 A	石英・長石ほか	体部に黄白の胡麻斑
1182	HI 257	中撫川1区	河道	法万寺1区	河道	土師質	搦鉢	灰白色	2.5 Y8 B	石英・長石・雲母	生産地不詳
1183	HI 259	中撫川1区	河道	法万寺1区	河道	龜山焼	平瓦	灰色	N5 /	石英・長石ほか	須恵質
1184	HF 169	中撫川3区		法万寺7区	包含層	土師器	椀	灰白色	10 YR8 A	長石・石英・雲母	
1185	HF 275	中撫川3区		法万寺7区	中世水田層	土師器	椀	灰白色	10 YR8 B	長石・石英多・雲母・角閃石	早島
1186	FB 172	中撫川1区	包含層	法万寺3区	包含層	白磁	碗	灰白色	2.5 Y8 A	精良	ガラス質の透明な釉、外底部露胎
1187	FB 43	中撫川2区		法万寺5区	たわみ	土師器	?	灰白色	10 YR8 B	石英・雲母	中世の水田域の肩口より出土
1188	FE 113	中撫川1区	包含層	法万寺2区	溝2上層	土師器	椀	灰白色	10 YR8 B	石英・長石・雲母	完形
1189	HF 252	中撫川3区		法万寺7区	溝1東側	土師器	片口鉢	にぶい橙色	7.5 YR8 A	長石・石英・雲母	

中撫川遺跡装飾品（玉）観察表

掲載番号	実測番号	出土地区名	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	石材	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚					
B1	H5-S	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝0 上層	管玉	153	32		01	明緑色	璧玉	弥生時代中期	孔径3mm
B2	H5-G	中撫川3区	土器溜まり3	法万寺7区	溝15 土器5	白玉	4	39	22	0.05	灰緑色	滑石	古墳時代前半	ミニチュア土器(667)内から
B3	H5-G	中撫川3区	土器溜まり3	法万寺7区	溝15 土器5	白玉	42	43	18	0.05	淡灰緑色~黒褐色	滑石	古墳時代前半	ミニチュア土器(674)内から
B4	H5-S	中撫川2区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1 下層	管玉	201	84		2.2	暗緑色	碧玉	古墳時代初頭	孔径9mm

中撫川遺跡土製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区	掲載遺構名	旧遺構名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	時期	備考
						最大長	最大幅	最大厚				
C1	H6-C2	中撫川3区		土壇6	土錘	74	34	35		黄灰色		孔径1mm
C2	H6-C4	中撫川3区		土壇7 2層	土錘	72	35	33	97	黒褐色		孔径2mm
C3	H6-C3	中撫川3区		土壇7 1層	土錘	70	30	36	107	浅黄色		孔径0mm
C4		中撫川1区	包含層	法万寺3区包含層	土馬	復元推定 約230		復元推定 約70	計約140	75 YR 8 A 浅橙	古代 II期	長石・石英を含む、焼成良好、土師質、尻繫を表現
C5	H6-C31	中撫川2区	土壇4	土壇4	土錘	50	15	14	9	にぶい黄橙色		
C6	H6-C1	中撫川2区	溝5	溝7 下層	土錘	61	30	27	62	褐灰色	古代	
C7	H6-C23	中撫川2区	たわみ3	池状遺構	土錘			165	14	橙色	古代	両端に円孔
C8	H6-C22	中撫川2区	たわみ3	池状遺構	土錘			165	145	にぶい橙色	古代	両端に円孔
C9	H4 -C33	中撫川2区	たわみ3	包含層	鍔型	495	565	355	55	浅黄橙色	古代	銅印の鍔型、被熱部は黒灰色、橙色、溶銅の滲れ、十字の刻線
C10	H4 -C32	中撫川2区	たわみ3	包含層	羽口	101	80	80			古代	孔径29~305mm、端部は溶融ガラス質
C11	H5 -C2	中撫川2区	たわみ4 上位	B0	土錘	325	275	29	25	灰黄色		
C12	H4 -C1	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	525	18	17	16	黄灰色	中世	
C13	H4 -C2	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	57	17	165	17	浅黄色	中世	
C14	H4 -C3	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	54	16	16	15	にぶい黄橙色	中世	
C15	H4 -C4	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	47	16	145	11	浅黄色	中世	
C16	H4 -C5	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	515	17	16	14	浅黄褐色	中世	
C17	H4 -C6	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	44	16	155	10	灰黄色	中世	
C18	H4 -C7	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	44	145	14	9	にぶい黄橙色	中世	
C19	H4 -C8	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	41	155	15	9	浅黄色	中世	
C20	H4 -C9	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	43	15	145	8	灰白色	中世	
C21	H4 -C10	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	475	15	15	10	にぶい黄橙色	中世	
C22	H4 -C11	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	45	15	15	10	にぶい黄橙色	中世	
C23	H4 -C12	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	50	18	175	14	灰白色	中世	
C24	H4 -C13	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	50	145	145	8	浅黄色	中世	
C25	H4 -C14	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	475	155	145	11	橙色	中世	
C26	H4 -C15	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	455	16	155	11	浅黄色	中世	
C27	H4 -C16	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	485	17	155	12	灰黄色	中世	
C28	H4 -C17	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	445	165	15	10	灰白色	中世	
C29	H4 -C18	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	47	14	135	9	にぶい黄橙色	中世	
C30	H4 -C19	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	47	15	145	10	灰黄褐色	中世	
C31	H4 -C20	中撫川2区	土壇2	土壇3	土錘	52	16	175	14	黄褐色	中世	
C32		中撫川1区	包含層	法万寺3区包含層	土錘	89	15	14	23	25 Y 8 A 灰白	古代~	長石・石英、棒状双孔、完形品
C33		中撫川1区	包含層	法万寺2区	土錘	38	31	21	26	10 Y 8 B 浅黄橙	古代~	長石・石英、周囲に溝を巡らす
C34	H4 -C21	中撫川2区	包含層	包含層	土錘	775	40	395	138	にぶい橙色		孔と片側面に溝
C35	H4 -C25	中撫川2区	包含層	包含層	土錘		715			橙色		
C36	H6 -C5	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 北端 L=133m	土錘	102	42	41	164	にぶい黄橙色		孔径35~14mm
C37	H7 -C1	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 最上層	土錘	97	39	38	146	浅黄色		孔径35~14mm
C38	H6 -C6	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 北端 L=133m	土錘	91	39	34	109	灰黄色		孔径1~14mm
C39	H6 -C7	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	75	38	38	99	灰白色		孔径9~10mm
C40	H6 -C7	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 最上層	土錘	74	35	36	98	灰白色		孔径1mm
C41	H7 -C2	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=13m	土錘	70	37	28	71	にぶい黄橙色		両側面に溝
C42	H6 -C1	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1	土錘	63	36	275	63	橙色		両側面に溝
C43	H7 -C4	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 底面	土錘	51	30	37	52	にぶい橙色		両側面に溝
C44	H7 -C3	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1	土錘	65	29	37	56	にぶい橙色		両側面に溝
C45	H5 -C3	中撫川2区	たわみ4 上位	池状	土錘	64	285	30	48	明赤褐色	古代	両側面に溝
C46	H6 -C8	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	48	13	13	8	にぶい褐色		
C47	H6 -C9	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	54	12	12	8	褐色		
C48	H6 -C10	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	49	13	12	8	褐色		
C49	H6 -C11	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	50	13	14	8	にぶい褐色		
C50	H6 -C12	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	40	12	12	6	褐色		
C51	H6 -C13	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	土錘	42	12	13	6	にぶい褐色		
C52	H6 -C15	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=137m	円盤形土製品	28	24	14	11	灰色		須恵器の転用
C53	H6 -C14	中撫川3区	たわみ4 上位	溝1 L=133m	円盤形土製品	26	24	12	10	灰色		須恵器の転用
C54	H6 -C16	中撫川3区	たわみ4 上位	西側溝	円盤形土製品	23	22	13	8	灰色		須恵器の転用

中撫川遺跡石器・石製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区名	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構名・層位	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
S1	H6-S2	中撫川3区	包含層	法万寺6区	溝1 南西側	磨製石包丁	52	27	7	1588	緑色片岩	弥生時代前期	曲物の綴じ皮素材か
S2	H6-S1	中撫川1区	溝2	法万寺3区	溝2	石鏃	197	167	3	069	サヌカイト	弥生時代中期	無茎凹基式
S3	H6-S5	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝0 上層	磨製蛤刃石斧	87	7	38	322	珩岩	弥生時代中期	
S4	H6-S6	中撫川2区	溝2	法万寺4区	溝0 下層	磨製蛤刃石斧	99	68	26	284	珩岩	弥生時代中期	
S5	H7-S16	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3 中層	砥石	65	46	37	156	流紋岩	弥生時代中期	鉄製工具による調整痕、孔は削り抜き
S6	H7-S13	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3 上層	石包丁	61	45.5	11	30.44	サヌカイト	弥生時代中期	鉄製工具による調整痕、孔は削り抜き
S7	H7-S10	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3 中層	石包丁	54	50	12	32.81	サヌカイト	弥生時代中期	
S8	H7-S12	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3 上層	石包丁	29.5	46	9.5	17.58	サヌカイト	弥生時代中期	焼けて炭化した部分がある
S9	H7-S11	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3 中層	RF	27	42	7	9.32	サヌカイト	弥生時代中期	
S10	H7-S14	中撫川3区	溝3	法万寺7区	溝3 上層	石包丁	60.5	54	10	26.86	サヌカイト	弥生時代中期	
S11	H6-S1	中撫川1区	包含層	法万寺2区	表採	石鏃	12.5	1.5	2.8	0.58	サヌカイト	弥生時代中期	無茎平基式
S12	H6-S2	中撫川1区	包含層	法万寺3区	溝	石鏃	26.5	1.8	5	1.95	サヌカイト	弥生時代中期	無茎平基式
S13	H6-S6	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝2	石鏃	21.6	12.5	3	0.95	サヌカイト	弥生時代中期	無茎平基式
S14	H7-S9	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝2 最下層	石鏃	78.5	43.5	14.5	51.8	サヌカイト	弥生時代中期	
S15	H7-S8	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝2	スレナイ	51.9	49.5	8.5	25.86	サヌカイト	弥生時代中期	
S16	H7-S15	中撫川3区	包含層	法万寺7区	溝2 上層	石包丁	8.5	48.5	9.7	51.87	サヌカイト	弥生時代中期	
S17	H6-S1	中撫川3区	包含層	法万寺6区	土壇6 第5層	RF	3.7	2.9	8.2	8.73	サヌカイト	弥生時代中期	
S18	H7-S7	中撫川3区	竪穴住居1	法万寺7区	南東住居	石鏃	1.55	1.0	3.5	0.41	サヌカイト	弥生時代中期?	混入の可能性
S19	H7-S5	中撫川3区	竪穴住居1	法万寺7区	南東住居	石鏃	1.65	1.25	2.7	0.63	サヌカイト	弥生時代中期?	混入の可能性
S20	H7-S1	中撫川3区	竪穴住居1	法万寺7区	南東住居	石鏃	1.85	2.15	4.6	1.99	サヌカイト	弥生時代中期?	やや大型で無茎平基式、混入の可能性
S21	H7-S2	中撫川3区	竪穴住居1	法万寺7区	南東住居	鏃or石鏃	3.8	1.55	3.6	2.1	サヌカイト	弥生時代中期?	混入の可能性
S22	H7-S3	中撫川3区	竪穴住居1	法万寺7区	南東住居	RF	3.9	2.25	5.3	4.04	サヌカイト	弥生時代中期?	混入の可能性
S23	H7-S1	中撫川3区	竪穴住居1	法万寺7区	南東隅 住居付近	RF	3.6	2.4	6.1	4.51	サヌカイト	弥生時代中期?	混入の可能性
S24	H6-S8	中撫川3区	溝5	法万寺6区	溝9	大型石包丁	1.80	1.30	2.3	52.898	サヌカイト	弥生時代中期?	混入の可能性
S25	H6-S1	中撫川2区	溝6	法万寺4区	溝9 上層	叩き石	8.6	6.4	5.7	5.04	閃緑岩	弥生時代中期?	混入の可能性
S26		中撫川1区	包含層	法万寺2区	包含層	石鏃	2.90	6.0	4	1.15	紅簾片岩	弥生時代?	玉作りの施溝分割技法用の石鏃か?
S27	H6-S5	中撫川2区	竪穴住居2	法万寺4区	住居1 上層	砥石	9.1	1.22	3.7	62.282	アブライト	古墳時代前期	
S28		中撫川1区	土壇6	法万寺2区	土壇9	不明	2.48	7.45	5.1	10.385	泥岩	古墳時代後期	最終的には砥石として使用か、灰黒色
S29	H6-S6	中撫川3区	包含層	法万寺6区	土壇7 1層	砥石	60.5	62.5	5.5	3.38	花崗斑岩	古墳時代?	
S30	H6-S6	中撫川2区	溝25	法万寺5区	溝7	砥石?	5.15	1.72	5.6	7.000	安山岩	飛鳥~奈良	古銅礫石安山岩、礎か?
S31	H6-S1	中撫川2区	溝25	法万寺5区	溝7 上層	紡錘車	5.45		2.8	60.25	凝灰岩	6世紀?	流紋岩質
S32	H6-S3	中撫川3区	集石1	法万寺6区	集石1 ー17	砥石	7.15	5.6	5.0	2.29	流紋岩	古代Ⅲ期	
S33	H6-S1	中撫川2区		法万寺4区	P121	砥石	7.5	2.9	1.95	9.0	流紋岩	古代?	
S34	H6-120	中撫川1区	柱穴	法万寺2区	P194	砥石	4.95	4.5	3.45	1.01	流紋岩	中世	4面使用
S35	H6-S2	中撫川2区	柱穴出土遺物	法万寺5区	P174	砥石	4.7	3.15	5	3.675	流紋岩	中世	
S36	H6-S2	中撫川2区	柱穴出土遺物	法万寺4区	P117	砥石	3.55	3.5	3.5	3.0	流紋岩	古代?	
S37	H6-S3	中撫川2区	柱穴出土遺物	法万寺5区	P273	砥石	6.7	7.0	2.9	1.37.4	流紋岩	中世	
S38	H6-	中撫川1区	竪穴遺構1	法万寺3区	竪穴遺構	砥石	9.9	6.9	5.05	5.24	流紋岩?	中世	4面使用
S39		中撫川1区	溝43	法万寺3区	溝1	不明	2.51	8.6	4.4	9.34	砂岩 細粒)	中世	県南部に多く産出、石臼状の円形を示す
S40	H6-S73	中撫川1区	包含層	法万寺2区	包含層	砥石	7.73	4.4	1.5	1.04	泥岩	中世	ホルンフェルス
S41	H6-S3	中撫川1区	包含層	法万寺2区	東側溝	砥石	7.4	3.5	1.65	5.6	頁岩	中世	4面使用
S42	H6-S1	中撫川2区	包含層	法万寺4区	側溝	砥石	5.1	2.85	2.4	5.6	流紋岩	中世	4面使用
S43	H6-S5	中撫川3区	包含層	法万寺6区	中世水田層	砥石	6.25	6.5	1.2	7.8	砂岩 細粒)	中世	
S43	H6-S5	中撫川3区	包含層	法万寺6区	中世水田層	砥石	6.25	6.5	1.2	7.8	砂岩 細粒)	中世	

中撫川遺跡金属製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区名	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考	
							最大長	最大幅	最大厚					
M1	H5-M1	中撫川2区	溝2	法万寺5区	溝10上層	斧	7.7	3.5	8	99.55	鉄	弥生時代中期	板状鉄斧	
M2	H7-M4	中撫川3区	溝12	法万寺7区	溝15上層	鎌	119.5	3.4	3	56.44	鉄	古墳時代前半		
M3	H7-M1	中撫川3区	土器溜まり3	法万寺7区	溝15 土器10				3.7	3		鉄	古墳時代前半	ミニチュア土器内
M4	H7-M2	中撫川3区	土器溜まり3	法万寺7区	溝15 土器4				1.4	1.5		鉄	古墳時代前半	ミニチュア土器内
M5	H7-M3	中撫川3区	土器溜まり3	法万寺7区	溝15 土器7				8	1		鉄	古墳時代前半	ミニチュア土器内
M6		中撫川1区	たわみ1	法万寺4区	たわみ1	斧	9.0	4.5	9.5	174.88	鉄	古墳時代初		
M7		中撫川1区	溝19上層	法万寺3区	溝3 上層	鉄鏃	8.4	2.5	5	24.71	鉄	古墳時代	両丸造り	
M8		中撫川3区		法万寺7区		金環	2.9	3.2	11.5	4.14	銅・金	古墳時代	中空	
M9		中撫川1区	掘立柱建物周辺	法万寺3区	掘立柱建物周辺	鉄斧	7.9	4.7	10	1225.37	鉄	古代Ⅱ期		
M10		中撫川1区	溝25下層	法万寺3区	溝2 下層	不明	5.15	7.5	2.8	1.65	鉄	古代Ⅰ～Ⅱ期	刃子の茎状	
M11		中撫川1区	包含層	法万寺4区	包含層(古代)	紡錘車			4.6	2		鉄	古代	鉄芯一部残存
M12	21	中撫川1区	P4	法万寺2区	柱穴	銅銭			24.00			銅	初鑄621年	唐 開元通寶
M13	31	中撫川1区	P4	法万寺2区		銅銭			25.00			銅	初鑄621年	唐 開元通寶

掲載番号	実測番号	出土地区	遺構・土層名	旧出土地区名	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
M14	29	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		25.50			銅	初鑄1008年	北宋 祥符元寶
M15	25	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		25.00			銅	初鑄1032年	北宋 明道元寶
M16	22	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.00			銅	初鑄1068年	北宋 熙寧元寶
M17	23	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		23.50			銅	初鑄1068年	北宋 熙寧元寶
M18	24	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		25.00			銅	初鑄1068年	北宋 熙寧元寶
M19	27	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.00			銅	初鑄1068年	北宋 熙寧元寶
M20	26	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.00			銅	初鑄1078年	北宋 元豐通寶
M21	32	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		25.00			銅	初鑄1078年	北宋 元豐通寶
M22	28	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.00			銅	初鑄1086年	北宋 元祐通寶
M23	30	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.00			銅	初鑄1094年	北宋 紹聖元寶
M24	19	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.00			銅	初鑄1111年	北宋 政和通寶
M25	20	中撫川1区	P 4	法万寺2区	P36	銅銭		24.50			銅	初鑄1208年	南宋 嘉定通寶
M26		中撫川1区	P 5	法万寺2区	P 34	銅銭		25.00			銅	初鑄1107年	北宋 大觀通寶
M27		中撫川1区	P 5	法万寺2区	P 34	銅銭		24.00			銅	初鑄1032年	北宋 明道元寶
M28	43	中撫川1区	堅穴遺構1	法万寺3区	堅穴遺構	銅銭		25.00			銅	初鑄1064年	北宋 治平元寶
M29	41	中撫川1区	堅穴遺構1	法万寺3区	堅穴遺構	銅銭		25.00			銅	初鑄1068年	北宋 熙寧元寶
M30	42	中撫川1区	堅穴遺構1	法万寺3区	堅穴遺構	銅銭		24.00			銅	初鑄1086年	北宋 元祐通寶
M31	H4-M2	中撫川2区	墓1	法万寺4区	土壇墓1	刀		20	5	96	鉄	中世	柄部目釘穴に目釘残存、一部に木質
M32		中撫川1区	溝13	法万寺3区	溝1	不明	44.50	9.00	6.00		鉄	中世	断面は長方形、釘か
M33	37	中撫川1区	包含層	法万寺3区	包含層	銅銭		25.00			銅	初鑄1008年	北宋 祥符元寶
M34	36	中撫川1区	包含層	法万寺3区	包含層	銅銭		25.00			銅	初鑄1017年	北宋 天禧通寶
M35	40	中撫川1区	包含層	法万寺3区	包含層	銅銭		24.00			銅	初鑄1039年	北宋 皇宋通寶
M36	39	中撫川1区	包含層	法万寺3区	包含層	銅銭		24.50			銅	初鑄1078年	北宋 元豐通寶
M37	35	中撫川1区	柱穴	法万寺3区	包含層	銅銭		24.00			銅	初鑄1023年	北宋 天聖元寶
M38	44	中撫川2区	包含層	法万寺4区	包含層	銅銭		23.00			銅	初鑄1078年	北宋 元豐通寶
M39	45	中撫川2区	包含層	法万寺4区	包含層	銅銭		25.00			銅	初鑄1023年	北宋 天聖元寶
M40	47	中撫川2区	包含層	法万寺4区	包含層	銅銭		24.00			銅	初鑄1094年	北宋 紹聖元寶
M41	48	中撫川2区	包含層	法万寺4区	包含層	銅銭		23.50			銅	初鑄1068年	北宋 熙寧元寶
M42	51	中撫川2区	包含層	法万寺5区	包含層	銅銭		24.00			銅	初鑄1119年	北宋 宣和通寶
M43	53	中撫川2区	包含層	法万寺4・5区	包含層	銅銭		23.00			銅	初鑄621年	唐 開元通寶
M44	54	中撫川2区	包含層	法万寺4・5区	包含層	銅銭		24.00			銅	初鑄1017年	北宋 天禧通寶

中撫川遺跡木製品観察表

掲載番号	実測番号	出土地区名	掲載遺構名	旧出土地区	旧遺構・土層名	種別	計測値 (mm)			樹種	木取り	時期	備考
							最大長	最大幅	最大厚				
W1	H6-W10	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7		278	39	33		芯持ち	古墳時代前期	曲物の綴じ皮素材か
W2	H6-W8	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7		230	32.5	12	コナラ属アカガシ亜属	板目	古墳時代前期	織機?
W3	H6-W12	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7		350	76	67		芯持ち	古墳時代前期	
W4	H6-W9	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	加工木	650	41	45	コナラ属アカガシ亜属 コナラ節	芯持ち	古墳時代前期	
W5	H6-W1	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	浮き子	159	92	93	サクラ属	芯持ち	古墳時代前期	鉄製工具による調整痕、孔は削り抜き
W6	H6-W2	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	浮き子	161	98	96	コナラ属アカガシ亜属	芯持ち	古墳時代前期	鉄製工具による調整痕、孔は削り抜き
W7	H6-W3	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	二又鉾	*518	21.60	5.13	コナラ属アカガシ亜属	板目	古墳時代前期	
W8	H6-W4	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	盤	*262	*89	15	スギ	柱目	古墳時代前期	焼けて炭化した部分がある
W9	H6-W5	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7		175	20	11		芯持ち	古墳時代前期	
W10	H6-W6	中撫川3区	井戸3	法万寺6区	土壇7	楔形	175.5	21	17	コナラ属アカガシ亜属	板目	古墳時代前期	焼け焦げ有り

第9章 まとめ

第1節 発掘調査の成果

発掘調査の着手時から、発掘対象遺跡名を「川入遺跡」として総称していた。これは、すでに「川入遺跡」の名称が、県南有数の集落遺跡として定着していたことに拠る。^(註1)そこで、発掘調査報告書作成を機に検討を加え、最終的に6つの遺跡すなわち新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡としてそれぞれ個別に収載することとした。

まず新邸遺跡は、すでに1950（昭和25）年、近藤義郎氏によって行われた「新邸貝塚」の発掘調査^(註2)によって大きな成果があり、この遺跡名は学史的にみて当然といえよう。今回の発掘調査実施箇所では旧河道が存在し、近隣の集落跡から流入したとみられる、縄文時代晩期から中世にかけての出土遺物が多数得られた。新邸貝塚で出土する弥生時代中期中葉の土器も少なからず出土し、間近に同時期の集落の存在をうかがわせる。遺跡の全体は、河道や貝塚を含めた広範な範囲が想定され、後期にかけての弥生土器の出土が示すように集落の拡大も推察される。

古墳時代では、今回の発掘で数少ない古式須恵器が出土している。後述の仏生田遺跡出土の新羅系須恵器の出土とともに特筆すべきであろう。

古墳時代終末期から古代Ⅰ期、すなわち7世紀前半から後半にかけてのまとまった遺物は、おもに3区から出土している。おそらく河道の東側から流入埋積したことは明らかで、当時の集落の存在についても改めて注意を払う必要がある。出土土器の中には、いわゆる飛鳥・藤原期に比定される土器がみられるが、とりわけ暗文が施された特徴的な土師器は、官衙的な供膳器種であることが想定され、注目に値する。^(註3)

後述の掛無堂遺跡や中撫川遺跡における護岸施設や掘立柱建物群などの成果を併せて考慮すると、遺跡の北方約2.5kmの津寺遺跡^(註4)や、北北西約10kmの古代山城として広く知られる鬼城山^(註5)への道筋との関わりにも注意される。つまり、瀬戸内海から進入すると「吉備津」を経て、東西方向の山陽道と交わり、さらに備中国中枢部に至る最短距離の道筋にあたるのである。

中世集落は、河道の周辺に形成された様子が出土遺物などから具体的に知ることができる。3区では土器類のほかに、湿潤な条件が幸いして木製品や獣骨が出土している。4区では、鎌倉時代に比定される下駄のほか、牛馬の骨がまとまって遺棄された状態で出土している。これらもやはり湿潤な条件で埋没していたため、歯牙や骨の表面の保存状態はきわめて良好で、付載5にその観察成果について収載することができた。

郷ノ溝遺跡も発掘調査当初は、川入遺跡郷ノ溝調査区と呼称していたが、今回字名をそのまま遺跡の名称とした。発掘調査実施地点では、2区の南から3区にかけての微高地と、1・2区を中心とした低位部が明確に識別された。前者では弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、地形に沿った南北方向の直線的な溝が検出された。

古墳時代後期になると、竪穴住居や西方から南東方向へ流走する溝も確認されている。この時期の

溝10からは鍛冶滓とみられる鉄滓や砥石が共伴して出土しており、鉄との深い関わりを持つ集落の存在をうかがわせる。なお、この時期の製塩土器も少数ではあるが確認されている。

古代から中世にかけても柱穴群や溝が検出されたが、明確な建築遺構は確認できなかった。少量の緑釉陶器片の中には、周防産の破片が含まれている点に注意される。^(註6)土製品の中には漁労具である土錘や、鍛冶に関わる鞆の羽口片もみられる。また鉄滓のなかには先述の鍛冶滓のほかに、精錬滓が存在することが判明している。その結果については付載1に収載する。

仏生田遺跡は、発掘当初の川入遺跡藤ノ木調査区と仏生田調査区を字名から統一した遺跡名称である。最終的に仏生田遺跡は1区から5区まで設定し、大半は岡山市納所仏生田である。1～3区の路線西側については、農道を境に字名が異なり一部は倉敷市域である。ちなみに字は共通で、それぞれ岡山市納所字木之子町、倉敷市日畑木之子町である。また、「吉備郡史一上巻一」に紹介され、周知の遺跡として知られる柿梨堂遺跡は、2区の最南端から3区の北端を含む地域にあたる。^(註7)また、4区は未調印による未発掘の調査区である。

まず、遺跡の北端の旧藤ノ木調査区にあたる1区では、郷ノ溝遺跡から続く微高地が広がり、溝を中心とした弥生時代から古墳時代にかけての遺構が確認されている。流走方向は北東から南西方向で微高地の形状と立地に沿ったものと考えられる。

弥生時代後期後半の溝4～6からは、岡山県南西部や備後地方のほかに、遠く山陰地方からもたらされた可能性が高い土器も出土しており、特筆される。後述の中撫川遺跡での古墳時代前期の搬入土師器と併せ、今回の発掘調査による大きな成果の一つといっても過言ではない。^(註8)

1区の微高地部分を南下すると徐々に遺構の検出や遺物の出土も希薄となり、水田あるいは低位部へと変化し、居住には不適な地勢と理解された。

2区では、2000年に新邸遺跡・郷ノ溝遺跡の発掘調査に着手していた時期に、トレンチ調査を実施した。その際朝鮮半島の影響を強く受けたとみられる須恵器高杯が出土したことから、全面調査に移行したエリアである。^(註9)最終的な地区名は2-E区にあたり、全面調査の結果、わずかに溝・土壌が検出されたにとどまった。しかし、近隣西方に当該時期の集落が存在する可能性は十分にあるとみられる。

中世後期の注目すべき遺物として銃弾の出土を挙げておく。仏生田遺跡1区・2区でそれぞれ1個ずつ、すでに述べた新邸遺跡・郷ノ溝遺跡で各1個ずつの計4個が出土している。いずれも直接遺構に伴わず、発射弾かどうか識別できないが、高松城の水攻め(1582年)の際、毛利方の軍勢と織田信長から派遣された羽柴秀吉軍が対峙し、その際の軍事的緊張の中での遺物である可能性が高い。新邸遺跡では同時期と考えられる鉄鏃も出土しており、今後の類例の増加を待ちたい貴重な資料である。^(註10)

3区は全体が砂堆となり、明確な微高地は存在しない。2区の南端で粘土層は消滅し、急激な落ち込みとなる。これは、旧足守川の氾濫源の一部とみることができる。遺物は、磨滅した弥生土器片など少量の出土にとどまるが、地形の変遷を知る上で今回の発掘調査の実施は有益であった。

5区では明瞭な水田層が数面確認された。灰褐色土壌の水平堆積層の存在が認められ、鉄分やマンガが凝集した畦畔痕跡も確認された。川入遺跡としての発掘調査では、すでに新幹線に伴う発掘調査で水田層が確認されているが^(註11)、今回の発掘調査ではこの仏生田遺跡5区だけで検出された。

掛無堂遺跡は、北方からの微高地が南側に延びた比較的安定したエリアと、東側の河道部分とに区分される。微高地では2棟の掘立柱建物の一部が検出され、古代の遺構の存在が明らかとなった。護岸遺構は、湿潤な埋没条件が幸いし、杭を打ち込んでさらに横木を補強する巧みな構築技術が観察さ

第5表 掛無堂遺跡 掘立柱建物一覧表

掲載遺構名	調査区名	旧調査区名	旧遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	掘方	時期	備考
					桁	梁							
掘立柱建物1	掛無堂1区	掛無堂1区	建物1	2×2	187~220	198~220		418		N-16° - W	方形	古代Ⅱ期	側柱建物? 南北棟
掘立柱建物2	掛無堂1区	掛無堂1区	建物2	2×2	227~249	205~206	479	411	19.68	N-103° 30' - W	方形	古代Ⅱ期	側柱建物? 南北棟

第6表 中撫川遺跡 掘立柱建物一覧表

掲載遺構名	調査区名	旧調査区名	旧遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	掘方	時期	備考
					桁	梁							
掘立柱建物1	中撫川1区	法万寺2区	建物3	3×2	245~265	210~230	752~760	430~445	34.65	N- 6° - W	円形・不整形	古代Ⅱ期	側柱建物、南北棟
掘立柱建物2	中撫川1区	法万寺3区	建物1	2×2	170~178	158~175	340	340	11.5	N- 2° 25' - W	円形	古代Ⅰ~Ⅱ期	総柱建物、南北棟
掘立柱建物3	中撫川1区	法万寺3区	建物4	3×2	212~280	170~215	694~710	383~385	26.95	N-96° 20' - W	円形・不整形	古代Ⅱ期	側柱建物、東西棟
掘立柱建物4	中撫川1区	法万寺3区	建物2	2×2	182~197	164~173	373~379	337~339	13.09	N-11° - W	円形・不整形	古代Ⅰ~Ⅱ期	総柱建物、南北棟
掘立柱建物5	中撫川1区	法万寺3区	建物5	2×2	180~185			365		N-110° - W	円形・不整形	古代Ⅱ期	側柱建物? 東西棟
掘立柱建物6	中撫川2区	法万寺4区		2×3	166~182					N-17° - W	不整形	古代	側柱建物? 東西棟?
掘立柱建物7	中撫川2区	法万寺4区	建物4	5×2	167~197	227~242	910~940	469~484	44.77	N-30° - W	不整形	古代	側柱建物、南北棟
掘立柱建物8	中撫川2区	法万寺5区	建物3	3×2	152~182	182~197	516	379	19.55	N-16° - W	不整形	古代	総柱建物、南北棟
掘立柱建物9	中撫川2区	法万寺5区	建物4	3×3	152~182	121~152	516	425	21.9	N-13° 30' - W	不整形	古代	側柱建物、南北棟
掘立柱建物10	中撫川2区	法万寺5区	建物5	2×2	152~182	128~145	334	273	9.12	N- 8° 50' - W	円形	古代	総柱建物、南北棟
掘立柱建物11	中撫川3区	法万寺6区	建物4	2×2	248~259	189~236		425		N-101° - W	円形	古代	側柱建物、東西棟

れた。古代の土木技術の一端を知ることができる貴重な遺構である。大型容器の槽や盤などの大型木製品などは、いわゆる飛鳥時代の須恵器とともに出土しており、津寺遺跡の護岸施設(註12)との関連性に注意すべきであろう。

川入遺跡は、旧大道西調査区である。大字が「川入」であることから、この遺跡名によって一般的に広く知られる「川入遺跡」の名称を継承することができたともいえる。発掘区は砂質土で形成された中世の微高地と北側から緩やかに蛇行する旧河道とに分かれる。河道をはさんだ対岸は、中撫川遺跡の北端となる。中世段階で、河道が徐々に埋まり、小規模となった過程が土層断面の観察や出土遺物などによって知ることができた。

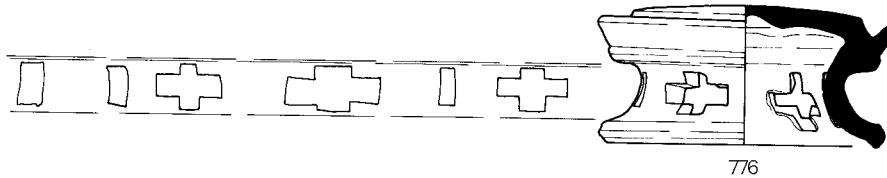
中撫川遺跡は、従来広く周知されている「川入遺跡」の中心部で、今回の発掘調査でもっとも検出遺構が多く、しかも出土遺物も膨大な量にのぼっている。量的な成果のみならず、時期的な幅も広く発掘調査の実施はかなりの労力と時間を要した。

出土遺物が示す時期は、おおむね弥生時代前期から中世におよび、ごくわずかな縄文土器片(後期)が認められた。中でも弥生時代中期から後期にかけての溝群と井戸からは、多数の土器が出土している。溝群の性格や機能については第2節に譲るが、出土遺物の中に山陰地方や畿内・四国をはじめとする他地域からの搬入、もしくは在地で模倣された可能性のある土器が少なからず認められた。すべての出自を明らかにすることはできなかったが、特筆すべき土器の一つに遠く薩摩半島からもたらされたと思われる「成川式」の壺形土器がある。(註13) 搬入の可能性が高い土器の存在は、遺跡の性格が瀬戸内海に面した海上交通の要所、「泊」のような性格があったと考えざるを得ない。人々の交流や往来を、土器などの具体的な物的資料によって知ることができると、あらためて認識を深めることができた。それぞれの土器の科学的な方法を用いた胎土分析によって、搬入土器の出自が一層鮮明になることが期待される。

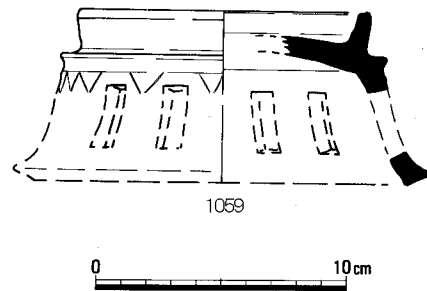
古代の遺構群は掘立柱建物を中心としてⅡ期からⅢ期にかけて形成され、狭小な発掘範囲にもかかわらず11棟以上の掘立柱建物が確認された。1区から3区にかけての微高地部分で集中的に検出された掘立柱建物のうち、もっとも規模の大きい掘立柱建物群は2区に集中している。そのうち、建物の全容が明らかになったものは7棟である。そのうち側柱建物は4棟、総柱建物は3棟である。掘立柱建物8と掘立柱建物9のように、面積はほぼ同規模かつ、柱通りを揃えた掘立柱建物があるが、屋と

倉というような明確な機能の区分はないものと考えられる。

掘立柱建物群の棟方向は大きく二通り認められ、ほぼ南北方向を示す一群（掘立柱建物1・2）と、やや西振する一群（掘立柱建物4・8・9）とに大別できる。前者は掘立柱建物7以北の、つまり2区北半から3区にかけての掘立柱建物群がおもに該当する。いずれにせよ、それぞれが一定の企画性をもって建築、配置されたことは確実であろう。



これらの掘立柱建物群の性格や機能を示唆する出土遺物として、円面硯2点がある。本文中に掲載した776と1059を再掲する。前者は1区の溝25から出土したもので、高杯形の形態が特徴的である。型式的には古代Ⅰ期に比定される可能性が高いとみられる。^(註14)微高地西辺で検出された溝25は、直線的な区画溝とは考えられないが、検出全長100m以上に及ぶ。出土遺物の中には暗文をもつ土師器第255図 中撫川遺跡1・2区出土円面硯実測図 (再掲図：1/3)



0 10cm

したがって、掘立柱建物群よりやや古い時期に製作・使用の可能性がある。また、後者には明瞭な使用痕跡や墨痕が看取される。

硯は、いうまでもなく当時の墨書文字の使用に不可欠な文房具であり、これらの掘立柱建物群が公的な施設である可能性を示している。円面硯は周辺の古代遺跡でも出土しているが、もっとも近い遺跡としては矢部南向遺跡がある。^(註15) 今回の発掘調査による出土遺物の中に、残念ながら墨書土器などの文字資料は含まれなかったが、今後周辺で発見される可能性が高いだろう。

さらに注目すべき遺物として、1区で出土した土馬(C4)がある。破碎された土馬の頭部と尻繫が装着された臀部の小片2点の発見に過ぎないが、当時遺跡所在地での律令的祭祀が行われたことを如実に示す貴重な遺物である。

文字の使用に密接な硯、公的な祭祀遺物である土馬、ついで特筆すべき古代Ⅱ・Ⅲ期に比定される遺物に銅印の鋳型がある。詳細は第3節に譲るが、当時の公文書に残される公印の製作が行われた可能性が高く、官営の工房の存在や鋳造技術者の居住を示唆する貴重な成果である。

古代Ⅲ期の遺構として2区と3区の2か所で「たわみ」状の大規模な遺構が検出された。はじめに検出された3区のとわみ4は集石遺構を伴い、発見当初は庭園に伴う園池のような機能や性格も考えられた。^(註16) これは、何にもまして、大量の緑釉陶器の出土があったことにも由来する。京都から搬入された当時の高級な焼き物が、これほど多量に出土した例は、地方ではかなり珍しく、共伴する土師器杯・皿など、一定の規格に統一された多量の供膳器種の存在と共に、遺跡地が、公的な施設として利用された可能性が高いとみるべきであろう。山陽道へ至る平地あるいは、川筋を利用した最短距

離の瀬戸内海から上陸する、至便かつ絶好の港湾施設が存在したかもしれない。この「たわみ」については、性格について断定的な結論を導くことはできなかったが、一方で「舟入」など実用的な性格も検討すべきかもしれない。本遺跡の古代における性格は、備中国の「津」の可能性が高いといえるだろう。

中世遺構は1区の北端で検出された河道があるが、発掘調査の実施が可能となった範囲はごくわずかである。河道のすぐ南1区では、中世に比定される一回り小規模な柱穴群が密集して検出された。検出範囲は、河道から導かれる溝42と、堀ともいべき機能が推定される溝43に区画されたエリアで、おもに土壇群や柱列、竪穴遺構などが検出された。柱穴群の大半は、かつては掘立柱建物を構成していたことは疑い得ないが、明確なまとまりを把握することが不可能なほど、密度が高い検出数であった。

河道や溝42からは、12世紀後半から14世紀代すなわち、鎌倉時代から室町時代にかけての土器類が認められ、輸入磁器も含まれる。微高地上の遺構では、備前焼が伴う遺構が目立ち、小型の日常什器である土師器が伴う。備前焼の他、亀山焼^(註17)も甕・播鉢・瓦などが認められている。中でも溝43からは、15世紀中頃の多数の備前焼が一括出土している。これらは、当然海路を利用して持ち運ばれたことが考えられる。なお、この溝43からは炭化した穀物が出土しており、付載3に詳細な分析結果を収載する。当時の農業生産の実態や食生活を物語る重要な出土遺物と考えられる。

1～3区では輸入陶磁器も少なからず認められるが、平安～鎌倉期に目立つ白磁よりも青磁の方が量的に優る。このことは、鎌倉時代後半から南北朝、室町時代にかけての集落が、周囲で営まれたことを間接的に示しているかもしれない。出土銭貨としては宋銭が相当数出土し、柱穴や竪穴遺構からまとまって出土した例は、当時の日常的な貨幣の使用を物語る。

今回の発掘調査では、道路改築（建設）に伴う路線内の限定された範囲の、しかも時間的な制約の中で最大の成果を挙げるべく、記録保存を前提にした精査に取り組んだ。中撫川遺跡では、検出遺構の複雑さに加え、膨大な出土遺物に苦慮する場面が多かった。日々の担当調査員の努力はもちろん、発掘作業員との協調作業により、多くの貴重な歴史資料を得ることができた。

平成14年度には、出土遺物や写真・図面の整理に取り組んだが、本書では事実報告を中心に調査成果を集約して述べるにとどまった。今後に残された課題として、弥生～古墳時代の搬入土器の出自の解明や科学的手法による胎土分析、緑釉陶器と共伴した供膳土器の数量的分類などがある。これらの一部は、白石 純氏や高橋照彦氏の指摘や助言によって取り組み始めた作業であるが、今回の報告書には意を尽くした結果を収載することができなかった。この責は、ひとえに非力な編集者が負うものであることを記しておく。

発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、同僚諸兄の激励や助言を得た。逐一、個々の内容については触れないが、あらためて謝意を表する次第である。

また、1999年から川入・中撫川遺跡の発掘調査を担当された岡山市埋蔵文化財センター職員（調査当時）安川 満・草原孝典両氏には未公表資料や検出遺構・遺物の検討に際して有益な助言を頂いた。録して深く感謝の意を表する次第である。 (岡田)

註

(註1) 川入遺跡については下記の発掘調査報告書がある。

・正岡睦夫ほか「川入遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974年

第9章 まとめ

- ・正岡睦夫ほか「第Ⅱ部 川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集～山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西）』岡山県教育委員会 1974年
 - ・柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入遺跡」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977年
 - ・柳瀬昭彦ほか『川入・上東～都市計画道路（富本町・三田線）に伴う埋蔵文化財発掘調査』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会 1977年
- (註2) 近藤義郎「備中新郎貝塚—中部瀬戸内地方中期弥生式文化の一つの様相」『古代学研究』第8号 古代学研究会 1953年
- (註3) おもに下記の文献を参考にした。
- ・西 弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立と背景』真陽社 1986年
 - ・林部 均「飛鳥・藤原地域の土器」『古代宮都形成過程の研究』青木書店 2001年
 - ・川越俊一「藤原宮条坊年代考—出土土器から見た存続期間—」『奈良文化財研究所学報第60冊 研究論集X I』奈良文化財研究所 2000年
- (註4) 下記の文献がおもに関連する。
- ・高畑知功「官衙の遺構について」『津寺遺跡5 山陽自動車道建設に伴う発掘調査15』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127 岡山県教育委員会 1998年
- (註5) 総社市奥坂の吉備高原南端の山頂（海拔約400m）に所在。
- 昭和46（1971）年、高橋 護氏によって古代山城である可能性が指摘され（高橋 護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117号 ニュー・サイエンス社 1976年）、1978年には学術調査が実施された。（『鬼ノ城』1980年 鬼ノ城学術調査委員会）
- 平成6（1994）年度、第1城門（現東門）の調査を皮切りに、総社市教育委員会による確認調査が継続され、現在に至っている。（総社市埋蔵文化財年報5（平成6年度）総社市教育委員会 1995年）
- 平成11（1999）年度には岡山県教育委員会によって城内の確認調査を実施した。（岡田 博「国指定史跡〔鬼城山〕整備事業に伴う確認調査』岡山県埋蔵文化財報告30 岡山県教育委員会 2000年）
- ・葛原克人「鬼城山城（鬼ノ城）」『総社市史・考古資料編』総社市市史編纂委員会 1987年
 - ・村上幸雄・乗岡 実『鬼ノ城と大廻り・小廻り』吉備考古ライブラリー2 吉備人出版 1999年
- (註6) 大阪大学文学部助教授 高橋照彦氏のご教示によるところが多い。また、下記の文献を参考にした。
- ・『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム資料 1994年
 - ・『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華』図録 五島美術館 1998年
 - ・高橋昭彦「平安期施釉陶磁器研究の現状と課題」『中近世土器の基礎研究』XV 日本中世土器研究会編 2000年
- (註7) 永山卯三郎編著『吉備郡史（上巻）』名著出版 1971年
- (註8) 亀山行雄「古墳時代の土器」『津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 岡山県教育委員会 1996年
- (註9) 島崎 東、大熊美保さんのご教示のほか下記の文献を参考にした。
- ・「東萊福泉洞古墳群Ⅰ」（釜山大学校博物館遺跡調査報告第5輯）釜山大学校博物館 1982年
- (註10) 鉄鏃については尾上元規氏のご教示を得た。
- (註11) 正岡睦夫「弥生時代及び古墳時代の水利と水田—西日本を中心として—（上・下）」『古代学研究』98・99号 古代学研究会 1982・1983年
- (註12) 柴田英樹「河道の護岸施設」『津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 岡山県教育委員会 1995年
- (註13) 鹿児島県揖宿郡山川町大字成川に所在する遺跡。
- 「成川式土器」については、高橋 護氏のほか、鹿児島県埋蔵文化財センター池畑耕一氏のご教示を得た。代表的な文献には下記の報告書がある。
- ・「成川遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告 第7 文化庁 1973年
 - ・「成川遺跡」（国道226号線成川バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告）鹿児島県教育委員会 1983年
- (註14) 陶硯の年代観については、下記の文献を参考にした。
- 栗山和之「墨書のひろがり」『古代人名録』所収 平成7年度特別展図録 近つ飛鳥資料館 1995年
- (註15) 岡田 博・中野雅美「矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告13』岡山県教育委員会 1983年

また、下記の文献に備中国を含む陶硯出土地が集成されている。

・伊藤 晃「岡山県出土の陶硯」『日本の陶硯』所収 五島美術館 1978年

・松尾洋平「備前・備中の古代陶硯」(『古事』所収 天理大学考古学研究室紀要第6冊) 天理大学考古学研究室 2002年

(註16) 下記の文献などを参考にした。当時の庭園遺構は曲線的で、護岸に石積みを持つなどの特徴がある。たわみ4の南端で検出された集石遺構が、「中島」あるいは「浮島」のような景観であったかどうか、護岸が同一レベルで築かれ貯水が可能であったか、そして十分な湛水があったのか、今後検討を深める必要がある。

・田中哲夫「平城京の庭園遺跡」『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告—奈良国立文化財研究所学報第44冊』奈良国立文化財研究所 1986年

(註17) 岡田 博ほか「亀山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69—山陽自動車道建設に伴う発掘調査3—』建設省岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1988年



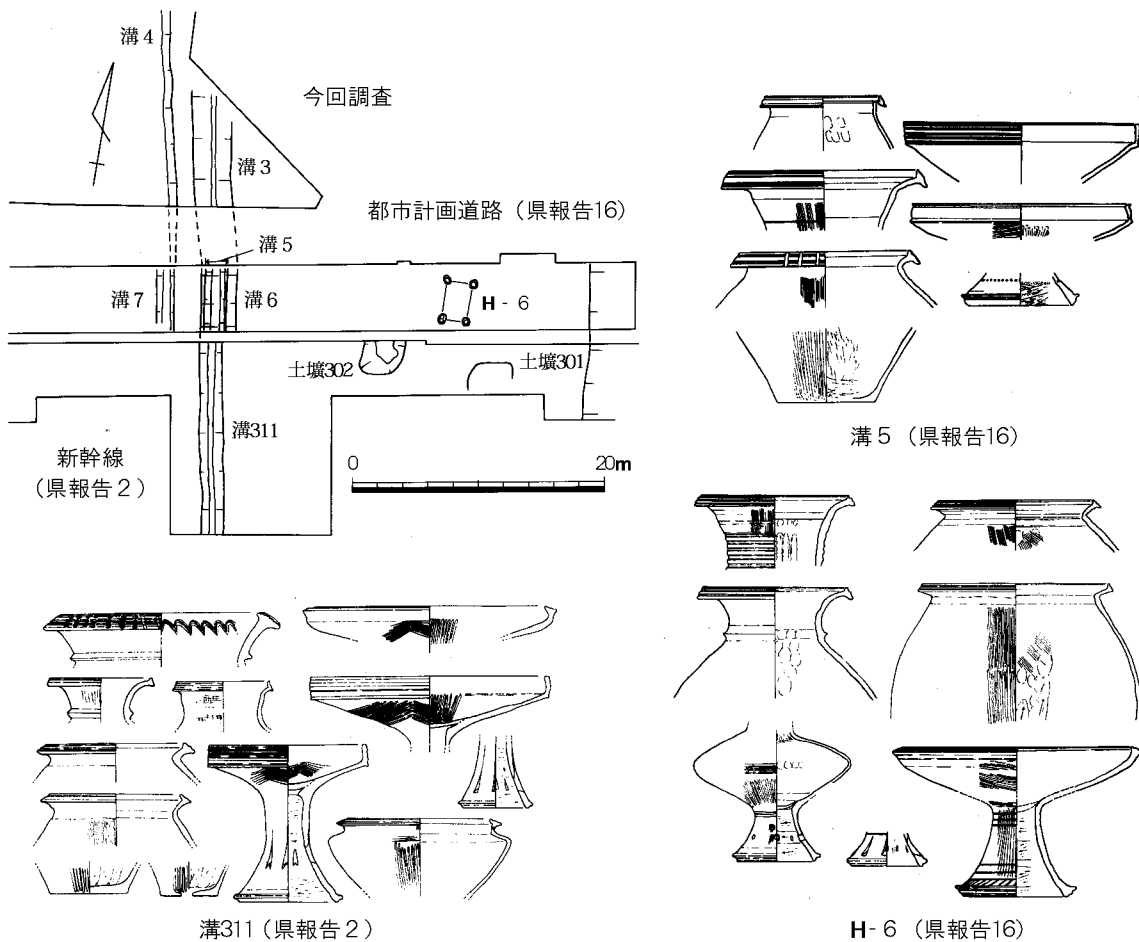
鬼城山から足守川流域、児島半島を望む

第2節 中撫川遺跡の弥生～古墳時代溝群

今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての溝を多数検出した。郷ノ溝から藤ノ木遺跡にかけては北東から南西方向に、中撫川遺跡ではほぼ南北に流れる溝群が確認できた。特に中撫川遺跡では、調査区の東西幅いっぱいに溝が流れる壮観な風景が再現された。今回の調査をもとに、過去の調査と重ね合わせ、川入遺跡・中撫川遺跡の法万寺地区における集落の実態に迫りたい。

川入遺跡・中撫川遺跡を弥生時代～古墳時代の拠点的な遺跡とした発端は、1972～1973年の新幹線建設に伴う発掘調査(註1)であった(以後、この調査を掲載報告書にちなみ〈県報告2〉と略する)。1975年の都市計画道路建設に伴う発掘調査(註2)はその北側で行われた(この調査を〈県報告16〉と略する)。この2回の調査は微高地を東西に横切っていたため、平地集落の遺構配置が明らかにできた。それと同時に、質量充実した遺構出土土器を基にして、本格的な弥生～古墳時代土器編年が編まれたのは周知の通りである。また、新幹線南側を岡山市教育委員会が発掘調査している(註3)。以下、時期別に遺構配置図と照らし合わせながらみていきたい。

まず、弥生時代中期であるが、最も西側に位置する溝4は〈県報告16〉溝7へと続く。その東の溝3は〈県報告16〉溝5・6、〈県報告2〉溝311へ、さらに南へ続いている。それらの東、微高地側では住居と土壌が確認されている。今回調査溝3では上下2層と認識したが、〈県報告16〉では溝5・溝



第256図 弥生時代中期の遺構と出土遺物 (1/600・1/8)

6 という別々の2つの溝として認識された。時期差であるのは間違いないだろう。

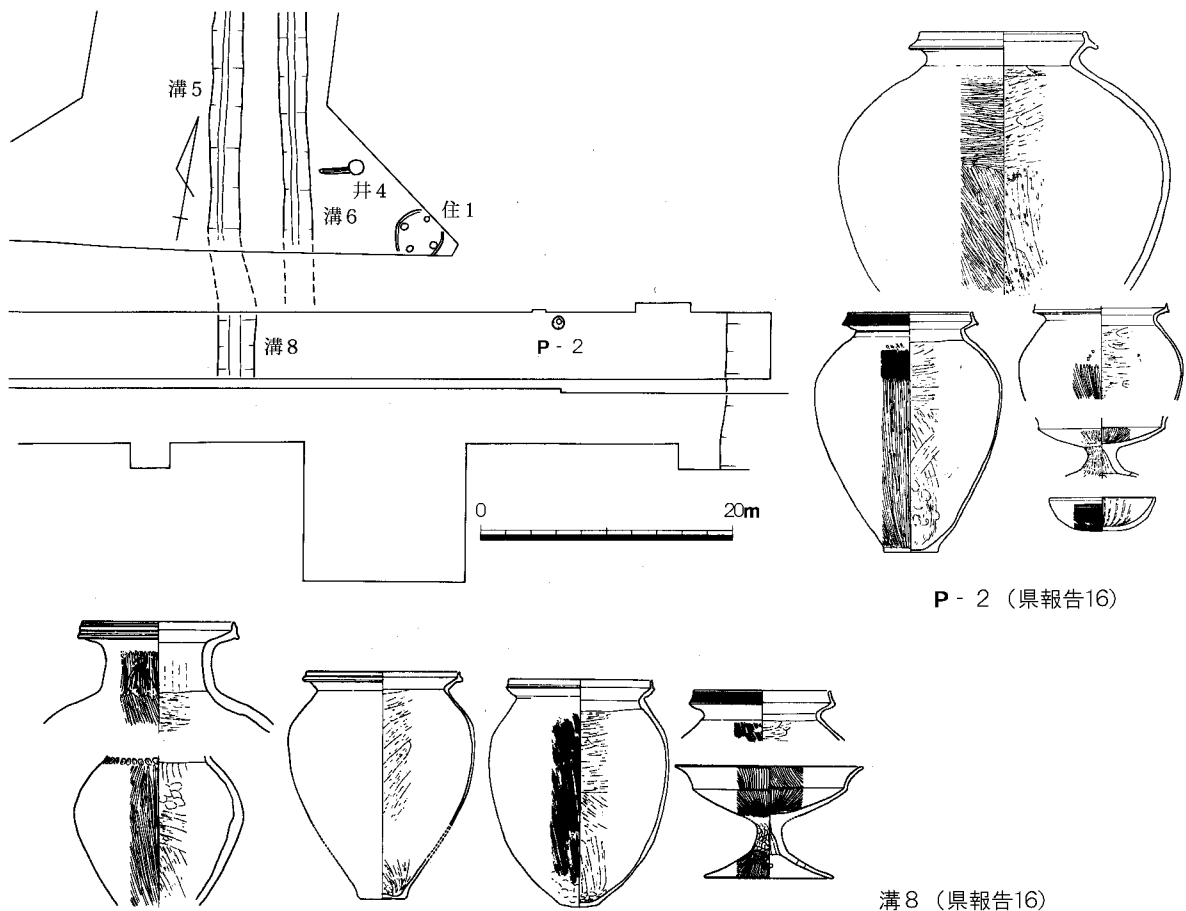
各遺構から出土した土器をみていくと、今回調査56・67が最も古く、弥・中・Ⅱ(註4)にさかのぼる。〈県報告16〉H-6出土土器・今回調査65・68・69などが弥・中・Ⅲの最も古い傾向の土器で、今回調査溝358～60などがそれに後続する。弥・中・Ⅲの最後には、当遺跡出土例は少ないが今回調査63など〈県報告16〉上東遺跡東鬼川市7-P-52併行の土器を挙げたい。

こうして、微高地西端に南北の溝が掘削されるのは、弥・中・Ⅱ終わり頃の可能性が高い。ただし、遺物・遺構共に多いのは弥・中・Ⅲの前～中頃である。弥・中・Ⅲ以降、弥生時代後期後葉(弥・後・Ⅲ)までの間は溝が確認できない。

弥生時代後期後葉(弥・後・Ⅲ)以降では、中期と同様2条の南北溝が認められる。西側は、今回調査溝5が〈県報告16〉溝8へと続いている。東側で今回調査溝6の南側は図では表していないが、古代まで溝が密集しているため、この時期の溝が消失していると考えられる。

これらの溝の東側に竪穴住居1軒、井戸5基が存在し、微高地縁辺の様相を呈している。今回調査竪穴住居1は、微高地の範囲が西へ広がったのに応じて溝ぎりぎりに建てられたものであろう。近くには今回調査井戸4があり、同時に存在した可能性が高い。竪穴住居1・井戸4の他、今回調査井戸1・2、土壌1・4は弥・後・Ⅲに相当する。今回調査溝5の出土遺物は弥・後・Ⅲ～Ⅳの遺物を含み、外来系として畿内系の132・133・165などがみられるのが特徴である。

古墳時代前期(古・前・Ⅰ～Ⅲ)も当初は、弥生時代と同様2条の南北溝が認められる。西側から今回調査溝12と〈県報告16〉大溝、〈県報告2〉溝321・322が1条の溝で、〈県報告16〉調査区から南

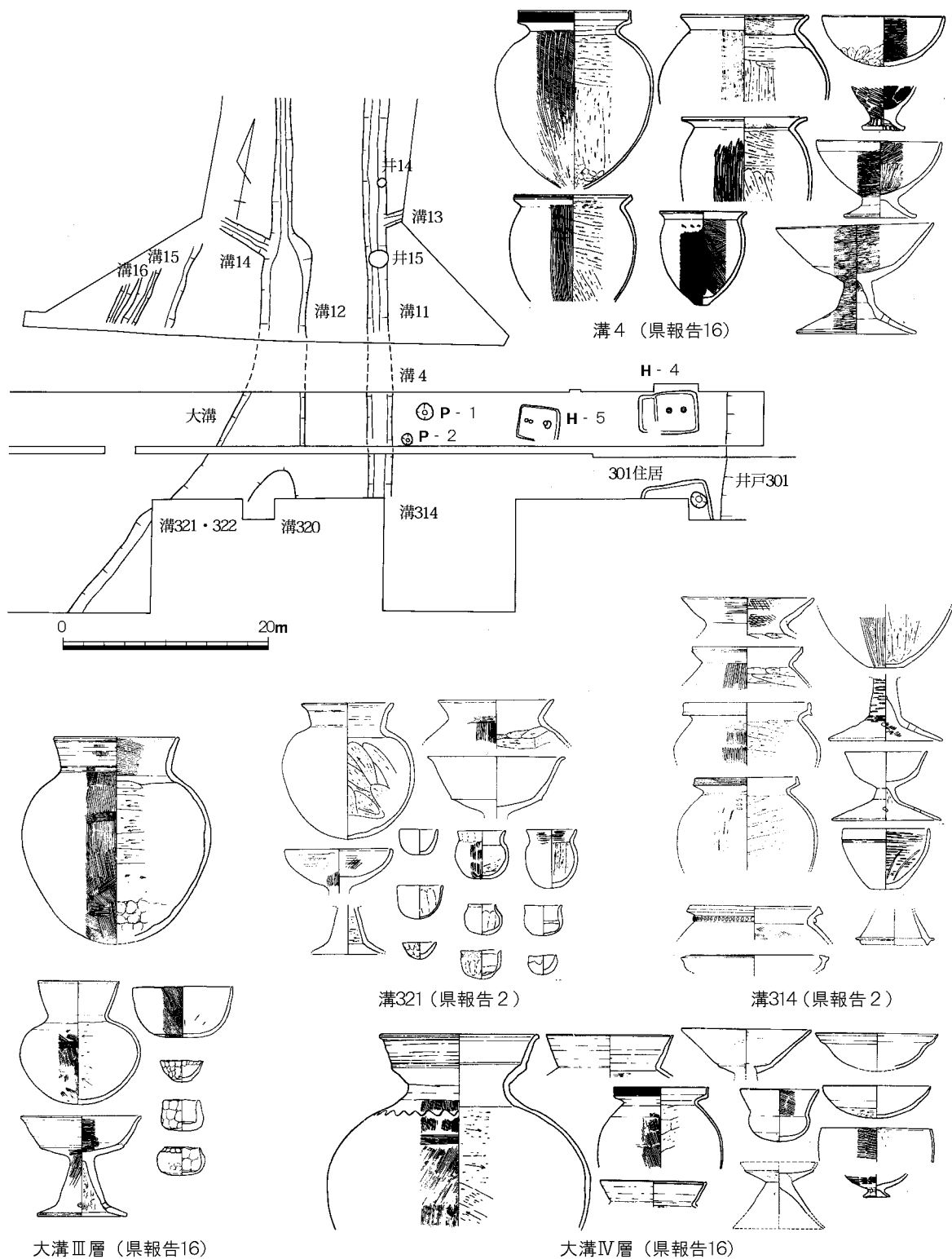


第257図 弥生時代後期の遺構と出土遺物(1/600・1/8)

第9章 まとめ

へは南西へ向きを変えている。それと対になるのは今回調査溝11と〈県報告16〉溝4、〈県報告2〉溝314である。これら溝の東側に住居4軒、井戸16基などが存在する。

今回調査溝12には弥・後・Ⅳ～古・前・Ⅱの土器が含まれるが、主な遺物は古・前・Ⅱに属する。外来系として、山陰系の501や搬入品の南九州系547～549などがある。溝12は後世に削平されているが、規模・形状は弥生時代の溝と同じであろう。そして溝12の埋没後、古・前・Ⅲの土器溜り3が形成さ



第258図 古墳時代前期の遺構と出土遺物 (1/600・1/8)

れる。出土遺物と層位関係から、溝12が〈県報告16〉大溝下層（Ⅳ層）・〈県報告2〉溝322に対応し、土器溜り3が〈県報告16〉大溝上層（Ⅲ層）・〈県報告2〉溝321に対応するものである。

今回調査溝11は古・前・Ⅰ～Ⅱの遺物を含み、中でも古・前・Ⅰが主体を成す。今回調査井戸14・15が古・前・Ⅱに相当し、これらは溝11埋没後に掘削されているので、溝11だけが古・前・Ⅰにはほとんど埋まっていた可能性が高い。ただし〈県報告16〉溝4にも古・前・Ⅱの土器がみられるので、古・前・Ⅱの早い段階で埋没したことも考えられ、注意を要する。〈県報告2〉溝314では弥生中期後葉の土器を含んでいるが、この溝を掘削するときに今回調査溝4をほとんど削り取ったため、その土器が混入しているであろう。溝以外の遺構について、大まかに分類すると次のようになる。

古・前・Ⅰ 今回調査井戸5・6・8・9・11 〈県報告16〉P-1（井戸）

古・前・Ⅱ 今回調査竪穴住居2 〈県報告16〉H-4・H-5

今回調査井戸7・12・13・14・15 〈県報告16〉P-2（井戸）〈県報告2〉井戸301

古・前・Ⅲ 今回調査溝13・土器溜り2

古・前・Ⅰ～Ⅱでは盛んに井戸が掘られ、竪穴住居も多く存在して拠点集落といえる内容を呈している。今回調査井戸14・15のように溝の埋め戻しと前後して掘削されたものもあり、集落域の拡大が溝の埋め戻しと井戸の掘削の状況から窺える。ところが、古・前・Ⅲではこれらが消失し、今回調査土器溜り2・3のような祭祀跡が目につく程度である。この原因としては、土器溜り3上下の堆積が細砂～粗砂であることから、近接する足守川などの洪水の可能性がある。さらに古墳時代後期になると、東西の溝はみられるが、それまでと同様な南北溝は存在しない。

こうして弥生時代中期から古墳時代前期までの遺構を概観してみたが、2条の南北溝が掘削・埋没を繰り返しながら継続して運用されている様子が鮮明になった。最後ではあるが、この溝の用途と廃絶について若干述べてみたい。

南北溝は従来用水路とされていた。しかし、この溝から配水するための東西方向の溝は、今回調査の溝14以外は認識できなかった。また、弥生～古墳時代の水田層も、存在する可能性としては調査区の西側が挙げられるものの、確定できていない。このため、南北溝の用途として必ずしも用水路だけに限定するのは難しい。法万寺調査区の北側には河道があり、南北溝はこの川と接続していた。南側は岡山市教育委員会の調査から、さらに続いていることが明らかである。ここでは、南北溝が北と南を結ぶ直線的な溝であることに注目すべきである。また、掘削当時の溝内は弥生～古墳時代の標高から滞水していたと想像できる。このような状況から考えて、南北溝は集落の境を区切ると同時に、用排水路として、あるいは物資運搬のための運河としても機能した、多目的な溝と想定しておきたい。ところが、古墳時代前期までは運用された南北溝も古・前・Ⅲを境として廃絶することになった。その契機としてはまず自然災害が考えられる。しかし、古墳時代前期までと比べ集落形態も変化したことで、もはやこの位置に南北溝が不要となったためともいえよう。（氏平）

註

（註1）正岡睦夫ほか「川入遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974年

（註2）柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入遺跡」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977年

（註3）高橋伸二・安川 満「川入・中撫川（市道）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1999（平成11）年度 2001年、河田健司・安川 満「川入・中撫川（市道）遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報1』2000（平成12）年度 2002年

（註4）凡例第1表 編年対比表を参照。

第3節 鑄型について

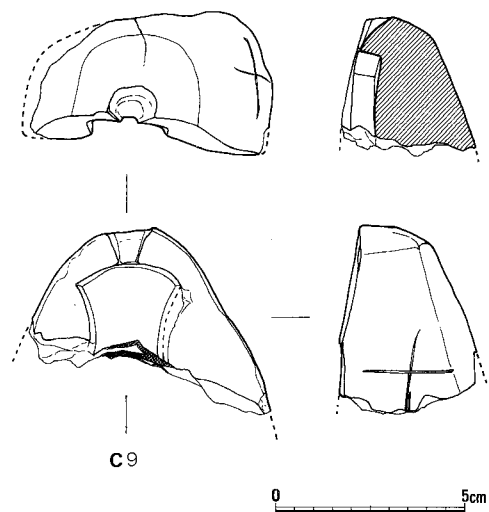
中撫川遺跡のたわみ3から1個の鑄型が出土している。たわみ3は、調査区の関係で、遺構の一部しか調査できなかった。遺構は、浅く窪むもので、その底面には平行する数条の溝と、それに直行する溝がみられる。遺構の性格は不明であるが、出土した遺物から古代Ⅲ期に比定され、おおむね9世紀前半代に限定される。多くの遺物に混じって京都産の緑釉陶器が数多く出土しており、注目する必要がある。鑄型は、それらの遺物に混じって出土したものである。遺構の性格は不明であるが、焼土面などはみられなかったことなどから、高熱作業をした場所とは考えられない。しかし、銅塊や羽口なども出土していることからすれば、近くに鑄造（鍛冶）工房が存在したことは間違いないものとする。

出土した鑄型を観察すると、微砂を含む粘土で作られており、その形状の外面から受ける感じは、むすびを思い浮かべるような三角形状を呈している。下半部を欠損しているため全体の形状は不明である。現状での計測値を示すと、最大長49.5mm、最大幅56.5mm、最大厚35.5mmを測り、重量は55gを量る。頂部には円形の湯口が存在しており、湯口の中央で半裁されている。合わせ面も良く残っている。外面の色調は、合わせ面を手前にして左側は黒色、右側は淡赤色を呈している。内面は、ほとんどが黒色であるが、合わせ面の右側が乳白色から淡赤色を呈している。湯口は、円錐形を逆にした形状で、篋状の工具で抉るように削り取られている。上端面の径は12mm、下端部の径は4mm、長さ9mmを測る。鑄型に刻まれた形状をみると、湯口を頂点に弧を呈し、その両端から内側に向けて弧を描く。その形状は、鈕を予測させる。最大幅は25mmを測る。型の彫り込みの深さは、7.5~8.5mmを測る。刻まれた型をみると、それぞれの面は平らで稜線は明瞭である。鈕の頂部と左側は、壁面の剥落もほとんどみられないが、右側面は、下端部の稜線は確認できるものの壁面は剥落がみられる。この形を古代印に求めると「隠岐倉印」「大神宮印」などの鈕に非常によく似ている。^(註1) 破断面とその直上のひび割れに緑青がみられる。平面図のトーンの部分がそれである。その状態からすれば、鑄込みの際に生じたひび割れに溶銅が流れ込んだことを示している。外面は、丁寧に仕上げられている。鑄込み面からみて右側外面に篋で描かれた「十」の記号がみられる。筆順をみると縦を書いた後、合わせ面側から入って右に抜けている。鑄型の形状からみて、鈕の部分は2個に分割されており、さらに印面が別個体として造られるものと考えられ、3個の部品で成り立つものと考えられる。そうであれば、記号は印面の天側と、鈕の天側を正確に合わせるものと考えられる。

銅塊は小さなもので、定まった形はしていない。素材としての銅塊ではなく、溶けた銅が何らかの理由で坩堝からこぼれたもので、形からすると、坩堝からこぼれたときに、何かの隙間に流れ込んだ、そのような形状を呈している。重量は、8.01gを量る。

岡山県下銅印の出土例

中撫川遺跡から出土した鑄型は、銅印の鈕の部分と考えている。岡山県からは、青銅製品の鑄型の出土例はあ



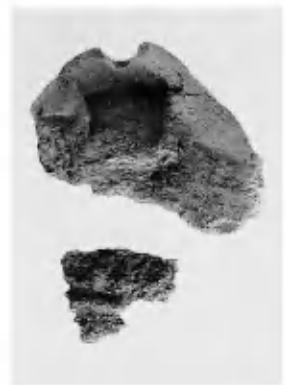
第259図 鑄型実測図（再掲図：1/2）

るものの、印については、初めての可能性がある。銅印は、発掘による出土品が2例ある。真庭郡落合町鹿田・須内遺跡^(註2)と倉敷市西坂・菅生小学校裏山遺跡^(註3)からそれぞれ1点出土している。須内遺跡出土のものは、鈕の形状は蒼鈕有孔で、鈕の頸部に3条の沈線が回る。現存する大きさは、高さ30mm、印面は方形で縦26mm、横26mmを測る。文字の周りには郭があり、印面には1文字が陽刻されており、「財」と読める。出土遺構については明確でない部分があり、遺構からの年代判定については明らかでないが、古代の範疇に入るものと考えられる。



鑄型（上面・平面・側面）

菅生小学校裏山遺跡出土のものは、鈕の形状は蒼鈕有孔で、現存する大きさは、高さ28mm、印面は方形で縦32mm、横32mmを測る。文字の周りには郭があり、印面には文字が陽刻されているが、釈読できない。包含層から出土したもので、そこに含まれる遺物から、印の年代は9～12世紀に属するものである。



鑄型割れ面の銅付着状況 銅塊（下段）

岡山県下銅印の伝世品^(註4)

和気郡吉井町是里に所在する宗形神社が所蔵するものである。銅印の鈕の形状は、蒼鈕有孔である。鈕頭の一部を欠損しており、残存高は29mm、復元高は30mmを測る。印面は方形であるが、少し変形しており台形を呈している。印面の大きさは縦33mm、横33mmを測る。文字の周りには郭があり、印面には文字が陽刻されている。文字は一字と考えられ、「貞」とも読めるが確かではない。古代の私印と考えられる一例であり、年代は平安時代と推定される。

遺跡出土の銅印鑄型

番匠地跡・久世原館跡^(註5)

8世紀後半から9世紀後半にかけての包含層が、2次堆積した層から、鈕部と印面部合わせて15点が出土している。鈕部は、鈕の形が彫り込まれたものと、鈕の裾が広がり印面部の背部となる部分のみが彫り込まれたものの2種類が出土している。鈕の形は蒼鈕である。印面部で、文字の読めるものは2種類ある。1文字のみのものは、「常」と読める。他の1種類は4文字と考えられ、2文字は、「磐」「郡」と解読されており、全体で「磐城郡印」と釈読されている。印面鑄型の天側には、小孔が穿たれている。鈕部鑄型の側面にも小孔が穿たれている。この遺跡からは、銅製品の鑄型として銅鏡、銅椀の鑄型も出土している。

台耕地遺跡^(註6)

印面部の鑄型が3個出土している。9世紀第3四半期と考えられる竪穴住居から1個出土している。全体の四分の一程度の破片で、印面の角部分である。文字は剥離のため読めない。また、10世紀第1四半期と考えられる竪穴住居から2個が出土している。1個のものは、文字面の剥離が著しく全く読めない。しかし、印面の端に銅が付着しており使用されたことを示している。他の1個は、「真」もしくは「直」と読める彫り込みがみられる。

谷津遺跡^(註7)

この遺跡からは、平安時代に属すると考えられる鑄銅工房址が検出されている。出土遺物には、鋸杖鑄型など銅製品の鑄型に混じり、鈕部の鑄型3個と、印面部の鑄型1個が出土している。鈕の形は蒼鈕である。鈕の鑄型は、中撫川遺跡や、番匠地跡遺跡のように合わせ目面に対し平面的に彫り込まれるものではなく、鈕の長軸に対し直行する合わせ面を持つ。印面部は、約四分の一程度残存するもので、文字の彫り込みの痕跡はみられるが釈読はできない。

上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡^(註8)

この遺跡は、国分僧寺、国分尼寺の造営に関係したと考えられる同時代の竪穴住居などの遺構を多く検出している。その内9世紀中頃から10世紀前半頃まで存続が考えられる、B区第1号住居跡から銅印鑄型が出土している。鑄型は、鈕部と印面部が合わせて4点出土している。鈕部は、小破片であり鈕の形状など詳細は不明である。印面部鑄型は、印面部がほとんど残存しているが、文字部分は剥落が激しくほとんど読めない。しかし、単体の文字が刻まれていたと推測され、「三」、「王」、「玉」などの画数の少ない文字の可能性が考えられている。

まとめ

他県から出土した銅印鑄型の鈕は、その形態が判明するものは全て蒼鈕であるが、中撫川遺跡から出土したものは、弧鈕である。あらためて鑄型に刻まれた鈕の形状をみると、上端はきれいに弧を描く。鈕の両側面は、鈕を挟むような弧を描くが、その曲がりには緩やかである。鑄型の大きさなどを隠岐倉印と比較すると、中撫川遺跡出土のものは、それよりも明らかに小さい。そのことは、印面の大きさも小さいと考えられる。隠岐倉印との比率から、印面の大きさを推定復元すると一辺は40mm以上で、50mm未満の大きさとなる。この大きさは、郡印もしくは、私印としての家印の大きさに相当するもので^(註9)、鑄造された印の種類を考える上での参考になるものと考えられる。また、鑄型の出土位置に近い場所において鑄造工房が存在したものと推定されることは、この遺跡の性格にも関わる問題である。緑釉陶器が多量に出土することなどからすれば、一般的な集落とすることは無理がある。番匠地跡・久世原館跡においては、郡印と私印の鑄型が出土しており、同じ工房でその両者が鑄造されたことを示している。また、郡印は、地方の組織において鑄造されていたことを示している。銅印がまだ特殊な時代であることを考えれば、製造場所も限定される可能性は高い。

中央政府における公印の鑄造については文献などから知られるところであるが^(註10-11)、地方における銅印の鑄造組織については不明である。しかし、特殊技能を必要とする集団を統括するものであることを考えれば、地方の官衙に関連する施設が考えられる。

鑄型に付着した銅と、出土した銅塊の分析結果を文末に第7・8表として掲載している。蛍光X線による非破壊の定性分析であるため、鑄型の土成分や、銅塊にも純粋成分以外に土などの成分が含まれていることが予想され、限界はあるとは思いますが、一つの傾向は読み取れる。この分析結果を、永嶋正春氏の分析結果^(註11)と比較してみると、永嶋の分類するタイプⅢと共通する元素がみられる。鑄型・銅塊ともに、銅・ヒ素・鉛・スズが含まれており、古代銅印の青銅質素材の範疇にはいることが確認される。また、鑄型・銅塊ともに各元素の分析値は異なるものの、共通する元素が確認されたことは、同じ工房に由来する可能性がさらに高まったものとする。

この銅印鑄型の時期であるが、先にも述べたが、9世紀前半の遺物と相伴している。このことから、ほぼ同時期の遺物と考えられる。

(井上)

第7表 銅塊分析結果

元素	Cu	Pb	As	Sn	Ag	Bi	Ni	Fe	Ca
濃度 (%)	38.42689	6.51418	1.22847	0.52039	0.20515	0.52409	0.20395	7.91476	1.34051
強度 (cps)	2230.997	146.322	217.23	14.538	7.432	14.986	10.988	436.119	58.829
変動 (cps)	5.6895	1.5619	1.8451	0.7346	0.7419	0.7435	0.8774	2.6167	1.1978
元素	K	Si	Ti	Mn	Al	Zr	Os	Rb	Sr
濃度 (%)	1.44974	28.4322	0.41184	0.11683	11.67343	0.09225	0.73731	0.09008	0.11772
強度 (cps)	43.629	566.929	7.739	4.904	113.278	10.829	383.867	7.385	9.628
変動 (cps)	1.1301	2.9823	0.7277	0.8115	1.5651	0.7641	2.4184	0.6688	0.7047

(分析 白石 純)

第8表 鑄型付着溶銅分析結果

元素	Cu	Pb	As	Sn	Ag	Bi	Ni	Fe	Ca
濃度 (%)	28.85976	16.73437	2.61691	18.148	1.12309			4.85843	0
強度 (cps)	178.437	46.963	64.497	42.158	4.032			21.885	2.375
変動 (cps)	1.3848	0.7299	0.8457	0.7124	0.3329			0.5249	0.2014
元素	K	Si	Ti	Mn	Al	Zr	Os	Rb	Sr
濃度 (%)	0	20.87512			6.70729		0.07704		
強度 (cps)	1.211	22.202			3.337		29.727		
変動 (cps)	0.1797	0.5136			0.2558		0.5894		

(分析 白石 純)

註

- (註1) 『日本古代印の基礎的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告 第79集』国立歴史民俗博物館 1999年
- (註2) 浅倉秀昭ほか「須内遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6—岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11—』岡山県教育委員会 1976年
- (註3) 中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査5—岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81—』岡山県教育委員会 1993年
- (註4) 伊藤 晃「考古編」『吉井町史』第2巻 岡山県赤磐郡吉井町 1991年
- (註5) 櫻村友延ほか「番匠地遺跡・久世原館跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告 第24冊』福島県いわき市 財団法人いわき市教育文化事業団 1989年
- (註6) 酒井清治ほか「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XIX・台耕地(II)」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984年
- (註7) 村田六郎太ほか「谷津遺跡—本文編—」『千葉市文化財調査報告書10』千葉市教育委員会 1984年
村田六郎太ほか「谷津遺跡—図版編—」『千葉市文化財調査報告書10』千葉市教育委員会 1991年
- (註8) 木津博明ほか「上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)」『群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第103集』群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990年
- (註9) 平川 南「古代郡印論」『日本古代印の基礎的研究—国立歴史民俗博物館研究報告第79集—』国立歴史民俗博物館 1999年
- (註10) 仁藤敦史「公印鑄造官司の変遷について」『日本古代印の基礎的研究—国立歴史民俗博物館研究報告第79集—』国立歴史民俗博物館 1999年
- (註11) 木内武男「日本古印の沿革」木内武雄編『日本の古印』二玄社 1965年
- (註12) 永嶋正春「非破壊手法による銅印の科学的研究」『日本古代印の基礎的研究—国立歴史民俗博物館研究報告第79集—』国立歴史民俗博物館 1999年

付 載 自然科学分野における報告

付載 1 郷ノ溝遺跡・新邸遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター

大 澤 正 己

付載 2 中撫川遺跡ほか出土緑釉陶器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

付載 3 中撫川遺跡出土炭化種子の識別

東京大学総合研究博物館人類先史部門

松 谷 暁 子

付載 4 中撫川遺跡（法万寺調査区）墓出土の人骨について

岡山大学大学院 医歯学総合研究科 人体構成学分野

大 塚 愛 二

付載 5 新邸遺跡・中撫川遺跡出土動物遺存体の分析

岡山理科大学理学部 生物化学科

富 岡 直 人

付載 1 郷ノ溝遺跡・新邸遺跡出土製鉄関連遺物の

金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤正己

概要

6世紀後半から9世紀後半に属する郷ノ溝遺跡2・3区、新邸遺跡3区)から出土した5点の鉄滓を調査して次の点が明らかになった。

〈1〉郷ノ溝遺跡3区出土鉄滓は、鉍石系鉄素材の沸し鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄滓の鉍物組成はヴスタイト(Wustite: FeO)主体で、化学組成は鉄分多く、脈石成分(TiO₂: 0.09%、V: <0.01%、CaO+MgO: 1.97%)は低め傾向にある。

〈2〉郷ノ溝遺跡2区、新邸遺跡3区出土の6～9世紀後半に属する鉄滓は、鉍石製錬滓であった。鉄滓の鉍物組成は、ヴスタイト+ファイヤライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂)、化学組成は脈石成分(TiO₂: 0.14~0.19%、V: <0.01~0.01%、MnO: 0.13~0.30%)はやや高めで塩基性成分(CaO+MgO)が鍛冶滓に比べて高め(2.01~3.71%)を特徴とする。当該域は6世紀後半から鉍石を原料とした製鉄の開始があった可能性を間接的に裏付ける。

1. いきさつ

新邸・郷ノ溝遺跡は岡山県吉備津・納所に所在し、一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査で、検出された弥生時代から中世へかけての水田・集落を主体とした複合遺跡である。当遺跡内より鉄滓が出土したので、当時の鉄事情を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

供試材の履歴と調査項目をTable.1に示す。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察、(2) 顕微鏡組織、(3) ビッカース断面硬度、(4) 化学組成分析。

3. 調査結果

(1) KBT-1: 鍛冶滓(郷ノ溝遺跡3区出土)

平面が不整楕円形状を呈した小型(12.8g)楕形滓の破片である。灰褐色の酸化土砂に厚く覆われて素地肌は分け辛い。試料採取の切断に際して通常の鉄滓に比べて脆く、粘結性に欠く材質となる。風化の影響であろう。顕微鏡組織をPhoto.1の①~⑤に示す。鉍物組成は白色粒状結晶のヴスタイトと錆化未凝集フェライト(純鉄、 α 鉄)のみは辛うじて組織を残すが、これら結晶の粒間は風化のために犯されて基地は消滅する。極低碳素鋼の繰返し折り曲げ鍛接の高熱作業の沸しを伴う鍛冶で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

次に化学組成分析をTable.2に示す。鉄分は多くて脈石成分（Ti、V、Mn）は低減傾向にある。全鉄分（Total Fe）は47.98%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.34%、酸化第1鉄（FeO）20.71%、錆化鉄含みで酸化第2鉄（Fe₂O₃）多くて45.10%の割合である。ガラス質成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は低めの20.38%で、このうちに塩基性成分（CaO+MgO）を1.97%含む。砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO₂）0.09%、バナジウム（V）0.01%以下、酸化マンガン（MnO）0.29%となる。五酸化リン（P₂O₅）は0.43%と多くて銅（Cu）も0.028%と高めである。これらの成分系は鉍石系の鍛錬鍛冶滓に分類される。時期的には出土した溝から、6世紀後半に比定される。

（2）KBT-2：製錬滓（郷ノ溝遺跡2区出土）

平面が不整三角形を呈する炉底塊破片である。表面は灰褐色で荒れの少ない肌に数点の気泡を露出させる。破面は緻密質で気泡は少ない。顕微鏡組織をPhoto.1の⑥～⑧に示す。鉍物組成は白色粒状結晶のヴスタイトと淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトが発達して鮮明に晶出し、鉍石製錬滓の晶癖を表わす。ピッカース断面硬度は白色粒状結晶の測定で453Hvが得られた。ヴスタイトの文献硬度値^(註1)の450～500Hvの範囲内に収まり、ヴスタイトと同定される。次は化学組成をTable.2に示す。鉄分（Total Fe）は高めの52.28%で、ガラス質成分も増えて29.51%になり、このうちの塩基性成分も3.71%と上昇する。更に脈石成分も高めで二酸化チタン（TiO₂）0.18%、バナジウム（V）0.01%以上は、前述鍛冶滓KBT-1に比べて2倍以上の増加は鉍石系製錬滓に分類される。

（3）KBT-3：製錬滓（新邸遺跡3区出土）

平面が台形を呈する炉底塊の側端部破片である。上下面と側面左手の炉壁ガラス化溶融物付着側は生きており、他の面は破面である。上面は流動性をもつが風化のためにザラツキ肌に変る。下面は緩やかな弧状を描き、ほぼ全面に青灰色炉壁粉が貼り付く。一部炉壁粉剥落部は大小気泡を露出する。

顕微鏡組織をPhoto.2に示す。①は上面溶融物付着個所である。炉壁粘土の溶融したガラス質スラグ中に淡灰色長柱状結晶のファイヤライトが晶出する。②～⑤が主要鉍物相のヴスタイトとファイヤライトである。両結晶は風化侵食を受けて、特に前者は黒くピット状孔を生じている。侵食具合は表層側に位置する②③が特に顕著である。⑥⑦は下面に近い側の組織で、淡灰色短柱状ファイヤライトと白色多角形結晶ヘーシナイト（Hercynite：FeO・Al₂O₃）を晶出する。炉壁粘土中のAl₂O₃の影響がより強く組織に表われている。⑧は滓中に取り込まれた木炭で、鉄と置換しているが既に錆化物となる。⑨は最表層のガラス質溶融物が自然腐食を受けて正常な組織を残していない状況を示す。なお、該品の白色粒状結晶の比較的残存状況の良好なものの硬度測定を実施した。値は303Hvと異常値を示して風化の激しさを感知させた。

Table.2に化学組成分析結果を示す。鉄分（Total Fe）が55.56%と多くてガラス質成分を24.64%と低めで炉底塊の特徴を呈す。二酸化チタン（TiO₂）は0.14%と前述KBT-1鍛冶滓に比べて1.5倍以上高めである。ただし、酸化マンガン（MnO）は0.13%で低値であった。五酸化リン（P₂O₅）の0.42%は高めで風化の影響があるのだろうか。いずれにしろ、成分傾向は鉍石製錬滓に分類される。

（4）KBT-4：流出孔滓

直径が2.0～3.0cmの棒状流出孔滓である。両側面が破面となる。流出孔は当初2.0cm前後に穿ち、こ

れが滓の流出により約3cmの楕円形状の拡がりをもよおす経過を止めた滓であろう。供試材は炉底塊に接する側から採取した。顕微鏡組織をPhoto.3の①～⑤に示す。①は表層部の組織である。発達した淡灰色長柱状結晶のファイヤライト主体に少量の白色粒状結晶のヴスタイトが晶出する。②③が平均的鉱物組成でファイヤライトとヴスタイトがほぼ均等に認められる。④は捲き込み木炭が鉄に置換されて木質を遺存させる。ヴスタイトは454Hvの硬度値であった。鉱石製錬滓の晶癖である。

化学組成をTable.2に示す。全鉄分(Total Fe)は46.15%でガラス質成分を33.87%を含む。二酸化チタン(TiO₂)0.19%、バナジウム(V)0.01%レベルで、酸化マンガン(MnO)0.30%、銅(Cu)0.027%など含有するところは、前述KBT-2炉底塊に近似する成分系である。異なるところは、五酸化リン(P₂O₅)のみが0.18%に対して0.34%と高い点である。塩基性成分(CaO+MgO)においても3.42%は大差なく、両者は9世紀後半と6世紀後半の層位の違いはあっても相似する。

(5) KBT-5：炉底塊

平面が不整五角形を呈する炉底塊の破片である。上面肌の荒れは少なく裏面は炉材粘土の付着がみられる。破面は気泡少なく緻密であった。鉱物組成は発達した淡灰色長柱状ファイヤライトと白色ヴスタイトで構成されて鉱石製錬滓の晶癖とみなされる。顕微鏡組織をPhoto.3の⑥～⑧に示す。⑦は局部組織の微小白色粒状結晶のヴスタイト晶出状況である。白色粒状結晶の硬度値は479Hvでヴスタイトに同定される。

化学組成分析結果をTable.2に示す。前述した7世紀後半代の炉底塊KBT-3に近似した成分系である。鉄分(Total Fe)57.53%にガラス質成分22.75%を主要構成成分とする。二酸化チタン(TiO₂)0.16%、バナジウム(V)0.01%以下、酸化マンガン(MnO)0.12%など平均的であるが銅(Cu)の0.041%は高めで、五酸化リン(P₂O₅)の0.25%は低めであった。これも組成的にみて鉱石製錬滓に分類される。

4. まとめ

新邸・郷ノ溝遺跡から出土した6世紀後半から9世紀後半に属する鉄滓は、鉱石系の鍛冶滓1点と、鉱石製錬滓4点に分類された。その4点の鉱石製錬滓はチタンやマンガンを指標におくと、6世紀後半のKBT-2と9世紀後半のKBT-4はTiO₂=0.18:0.19%、MnO=0.25:0.30%などの関係で近似し、更に7世紀後半のKBT-3と9世紀後半のKBT-5はTiO₂=0.14:0.16%、MnO=0.13:0.12%など同様の傾向を呈し、層位にもとづく違和感を与えることはない。

以上の結果は、旧足守川の微高地の何処かに6世紀後半から9世紀後半のいずれかの時期の製鉄・鍛冶の一貫体制のとられる操業があって、排出された一部の滓が流水により散布された可能性が窺われる。

岡山市内東部(百間川流域)の沖積平野の微高地においても古墳時代になると製鉄操業のあった可能性を過去に挙げている。^(註2) 今回の吉備津松島地区においても同じ指摘ができたわけである。

註

(註1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968。ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン(Ti)を固溶するので、600Hv以上であればウル

ボスピネルと同定している。更に700Hvを超えるとウルボスピネルとヘーシナイトの混合組成の例もありうる。

(註2) 大澤正己「原尾島(藤原光)遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書139)岡山県教育委員会 1999年

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値			調査項目					備考	
					大きさ (mm)	重量 (g)	形状	断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度		カーボン
KBT-1	郷ノ溝遺跡	3区溝10上層	鍛冶滓	6世紀後半	38×27×15	12.8	なし							
KBT-2	郷ノ溝遺跡	2区灰褐色粘土層	製錬滓(炉底塊)	6世紀後半	57×46×44	157.8	なし							
KBT-3	新邸遺跡	3区旧河道内の備高地真上	製錬滓	7世紀後半?	80×55×40	204.5	なし							
KBT-4	郷ノ溝遺跡	2区溝11	流出孔滓	古代~中世	80×35×25	58.1	なし							
KBT-5	郷ノ溝遺跡	2区L=1.88mまで掘り下げ	製錬滓(炉底塊)	古代~中世	57×48×56	224.1	なし							

Table.2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化鉄第1鉄 (FeO)	酸化鉄第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	二酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫酸 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	窒素 (N)	銅 (Cu)	耐火度	造滓成分 Total Fe	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	注
KBT-1	郷ノ溝遺跡	郷の溝2区溝5上層	鍛冶滓	6世紀後半	47.98	0.34	20.71	45.10	15.96	2.11	1.67	0.30	0.22	0.12	0.29	0.09	0.11	0.03	0.43	0.26	<0.01	0.028	20.38	0.425	0.002		
KBT-2	郷ノ溝遺跡	郷の溝1区灰褐色粘土層	製錬滓(炉底塊)	6世紀後半	52.28	0.05	58.68	9.46	20.20	4.36	2.90	0.81	0.87	0.37	0.25	0.18	0.01	0.01	0.18	0.09	<0.01	0.027	29.51	0.564	0.003		
KBT-3	新邸遺跡	新邸3区旧河道の備高地真上	製錬滓	7世紀後半	55.56	0.05	53.43	19.99	17.56	3.54	1.54	0.57	0.99	0.47	0.13	0.14	0.02	0.42	0.07	<0.01	0.030	24.67	0.444	0.003			
KBT-4	郷ノ溝遺跡	郷の溝1区No.12溝	流出孔滓	9世紀後半	46.15	0.10	45.47	15.31	24.21	4.98	2.85	0.57	0.76	0.50	0.30	0.19	0.01	0.01	0.34	0.17	0.01	0.027	33.87	0.734	0.004		
KBT-5	郷ノ溝遺跡	郷の溝1区L=1.88mまで掘り下げ	製錬滓(炉底塊)	9世紀後半	57.53	0.02	60.93	14.51	15.84	3.90	1.50	0.51	0.63	0.37	0.12	0.16	0.03	0.01	0.25	0.09	<0.01	0.041	22.75	0.395	0.003		

Table.3 出土遺物の調査結果のまとめ

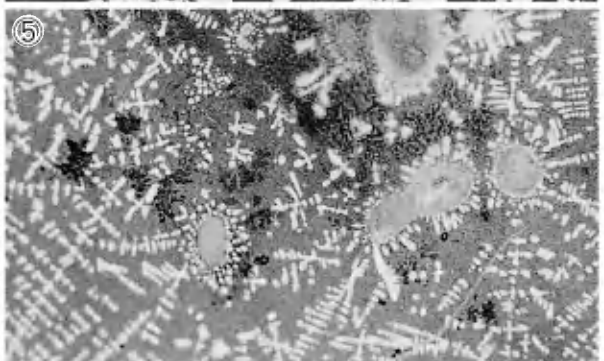
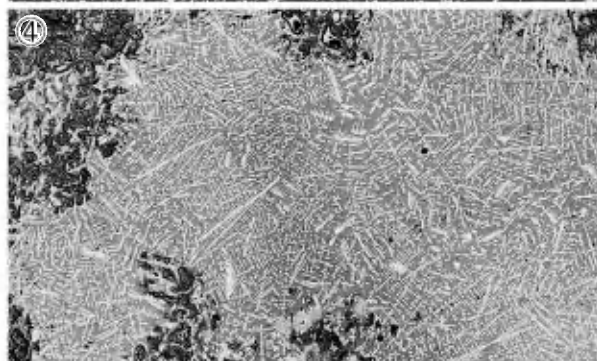
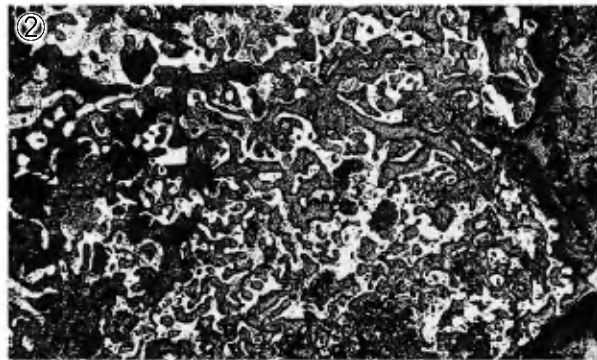
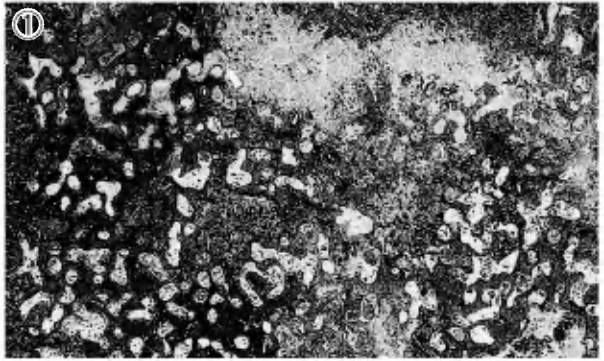
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目					所見			
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	珪酸性成分	TiO ₂	V		MnO	ガリウム成分	Cu
KBT-1	郷ノ溝遺跡	郷の溝2区溝5上層	鍛冶滓	6世紀後半	W+未凝集Fe, 基地風化消滅	47.98	45.10	1.97	0.09	<0.01	0.29	20.38	0.028	鉄石系製錬鉄滓
KBT-2	郷ノ溝遺跡	郷の溝1区灰褐色粘土層	製錬滓(炉底塊)	6世紀後半	F+W	52.28	9.46	3.71	0.18	<0.01	0.25	29.51	0.027	鉄石系製錬滓 K B T-4と組成対心
KBT-3	新邸遺跡	新邸3区旧河道内の備高地真上	製錬滓	7世紀後半	F+W, 局部F+H全体風化ダメージ	55.56	19.99	2.11	0.14	<0.01	0.13	24.67	0.030	鉄石系製錬滓 K B T-5と組成対心
KBT-4	郷ノ溝遺跡	郷の溝1区No.12溝	流出孔滓	9世紀後半	F+W	46.15	15.31	3.42	0.19	0.01	0.30	33.87	0.027	鉄石系製錬滓 K B T-2と組成対心
KBT-5	郷ノ溝遺跡	郷の溝1区L=1.88mまで掘り下げ	製錬滓(炉底塊)	9世紀後半	F+W	57.53	14.51	2.01	0.16	<0.01	0.12	22.75	0.041	鉄石系製錬滓 K B T-3と組成対心

W: Wüstite (FeO) Fe: Ferrite (α鉄, 純鉄) F: Fayalite (2FeO·SiO₂) H: Hercynite (FeO·Al₂O₃)

KBT - 1

鍛冶滓

- ①×100 ヴスタイト晶出
(風化激しく基地消滅)
- ②×100 ③×100
未凝集フェライト
(基地風化消滅)
- ④×100 ⑤×100
微小ヴスタイト晶出
(基地風化消滅)



KBT - 2

炉底塊

- ⑥×200 硬度圧痕
ヴスタイト：453Hv
- ⑦×100 ⑧×400
ヴスタイト+ファイヤライト

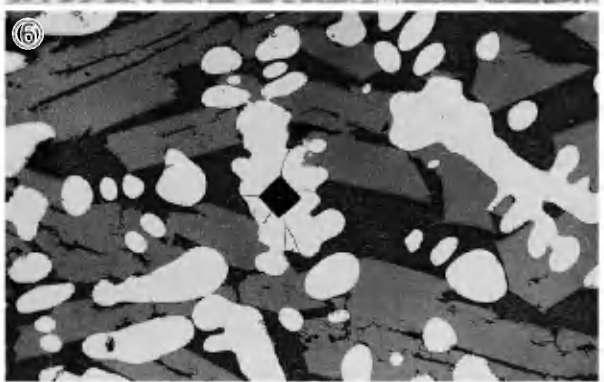


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織

KBT - 3

炉底塊

- ①×100 炉壁溶融物
ガラス溶融物とファイヤライト
- ②×100 ③×400
表層側ヴスタイト風化
- ④×100 ⑤×400
中央ヴスタイト風化
- ⑥×100 ⑦×400
- ⑧⑨×100 木炭とガラス

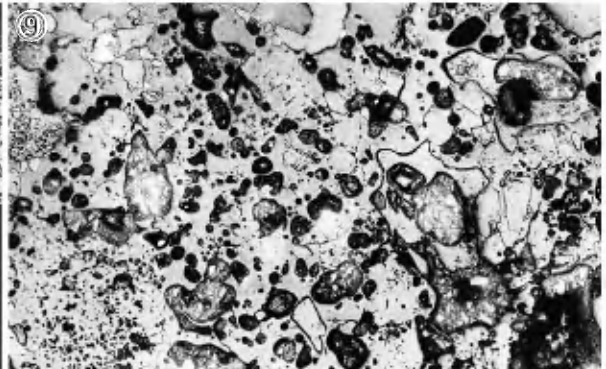
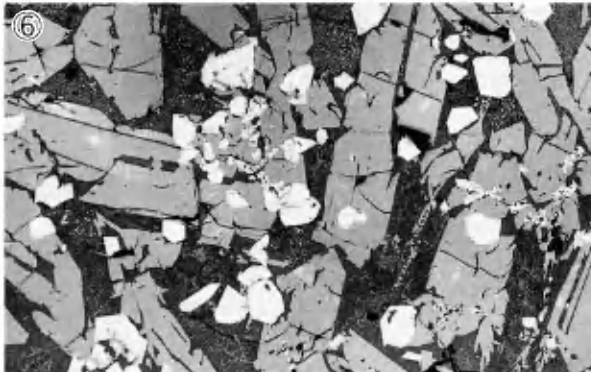
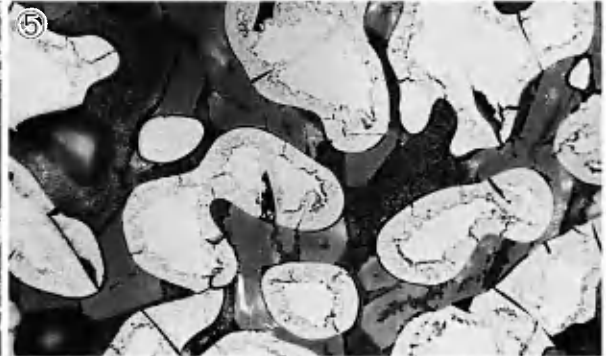
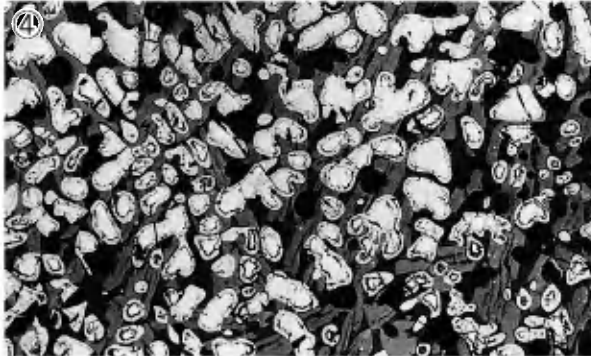
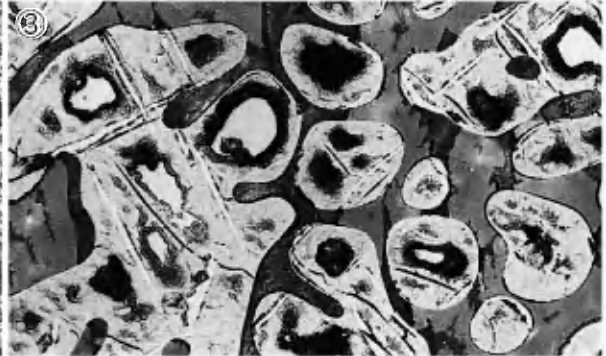
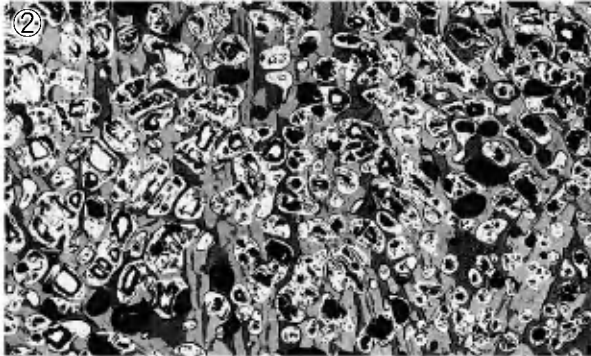
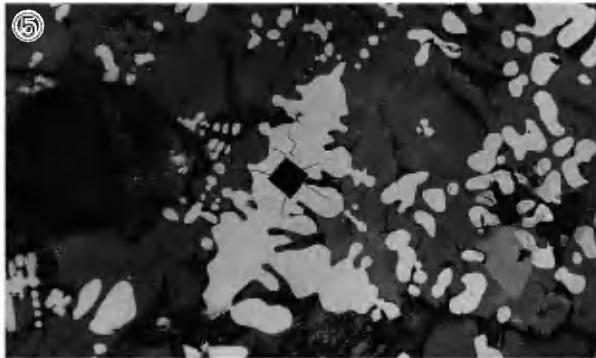
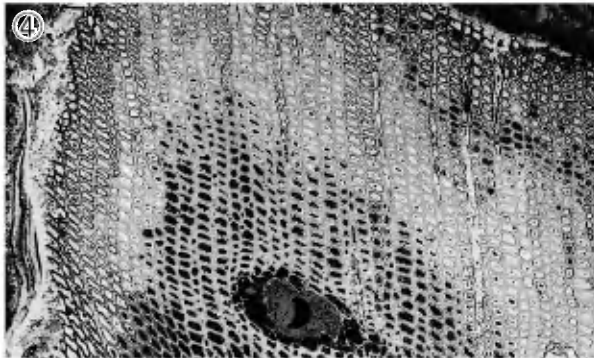
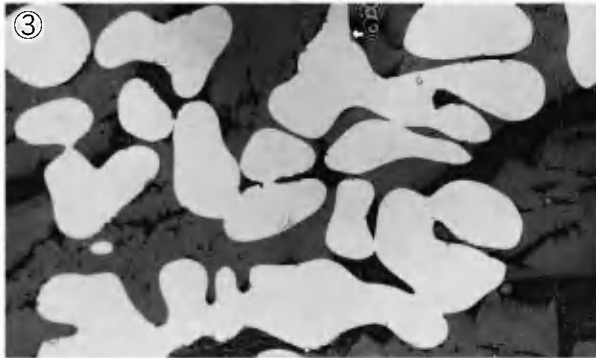
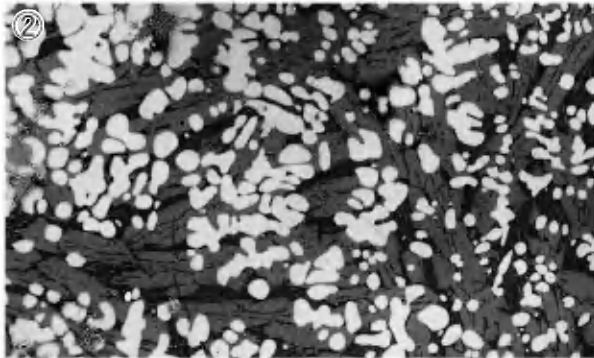
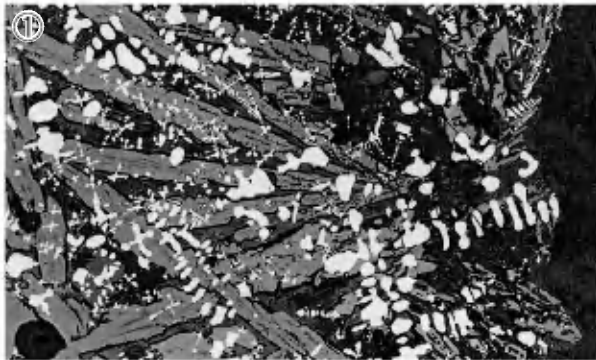


Photo.2 鉄滓の顕微鏡組織

KBT - 4

流出孔滓

- ①×100 表層部
ファイヤライト+ヴスタイト
- ②×100 ③×400 主要鉱物
ファイヤライト+ヴスタイト
- ④×100 木炭
- ⑤×100 硬度圧痕
ヴスタイト 454Hv



KBT - 5

炉底塊

- ⑥×100 代表組織
ファイヤライト+ヴスタイト
- ⑦×100 局部組織
微小ヴスタイト凝集気味
- ⑧×200 硬度圧痕
ヴスタイト：479Hv

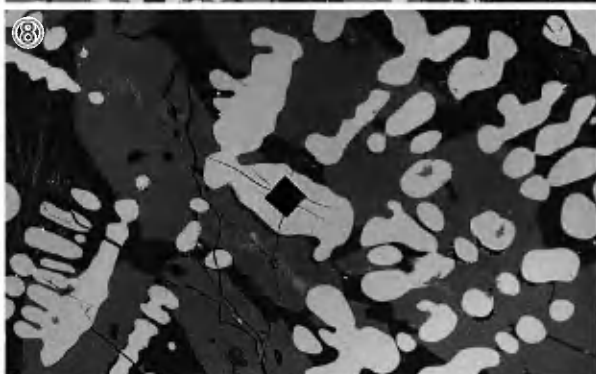
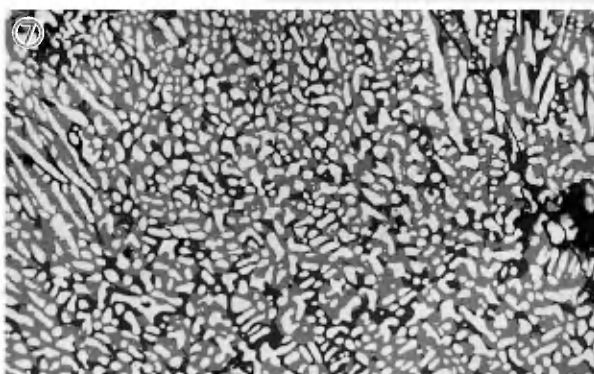
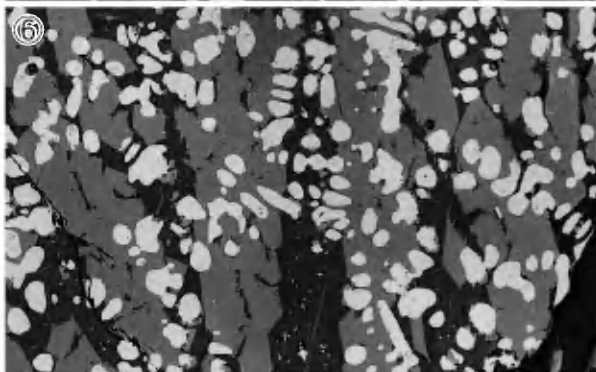
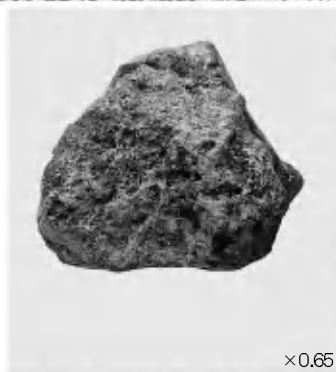


Photo.3 鉄滓の顕微鏡組織

付載2 中撫川遺跡ほか出土緑釉陶器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. 分析目的

中撫川遺跡、郷ノ溝遺跡、仏生田遺跡の遺構・包含層からは、椀・皿などの緑釉陶器が出土している。これら緑釉陶器の生産地は、考古学的（形態・技法）な検討で京都、近江、東海（猿投）、周防などの産地から搬入されていることがわかっている^(註1)。この分析では、理化学的な胎土分析によりこれら各産地の緑釉陶器が、各生産地別に分類できるかどうか検討した。また、筆者は以前、同様な緑釉陶器の胎土分析を岡山県窪木遺跡2^(註2)、鳥取県名和衣装谷遺跡^(註3)で実施し、各生産地で胎土が異なることがわかっている。

2. 分析方法・試料

分析は、蛍光X線分析法で行い、装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は13元素で、そのうちK（カリウム）、Ti（チタン）、Si（珪素）、Al（アルミニウム）の成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いてXY散布図を作成し検討した。

分析した土器は、第1表に示した椀、耳皿、皿など合計67点である。

3. 分析結果

中撫川遺跡ほかで出土した緑釉陶器で、器種（椀・耳皿・皿）、素地（須恵質・土師質）で、各産地に違いがあるかどうか調べた。

その結果、第1図K-Ti散布図では、京都産の椀・皿の器種による胎土の違いはみられなかったが、素地が須恵質か土師質で胎土の違いがあった。土師質はTi量が1.25%より多いところに分布し、須恵質はそれより少ないところに分布した。また、京都産のなかにも、K量の違いで2つの胎土に分類できた。それは、試料番号45・70・77・81の4点とそれ以外のものである。

近江産の2点は京都産の分布域に入った。

東海（猿投産）は、73（壺）と9（椀）・27（無台椀）・67（椀）・69（無台椀）の2つに分類できた。

第2図K-Ti散布図では、窪木遺跡、周防国府跡、山口県平原Ⅱ遺跡・川棚条里跡、京都市西京区小塩1号窯と、中撫川遺跡を比較した。すると、中撫川（京都産・近江産）と窪木（京都・近江産）がほぼ重なり、窪木（京都産）が小塩1号窯と重なった。そして、中撫川遺跡出土の45・70・77・81の4点の緑釉陶器は小塩1号窯の分布域に分布した。

また、窪木（防長産）と周防国府（周防産）、平原Ⅱ（長門産）、川棚条里（長門産）の防長産は、中撫川（京都産）や窪木（近江産）の畿内産とは重ならず判別できた。ただ、平原Ⅱと川棚条里は複数の胎土に分類でき、中撫川（京都産）や窪木（近江産）の分布域と一部重複する結果となった。

第3図Al-Si散布図では、周防国府（周防産）、平原Ⅱ（長門産）、川棚条里（長門産）のものが、中撫

川（京都産）、窪木（近江産）、窪木（京都産）のものに比べ、SiとAlの含有量が少なく判別できた。しかし、窪木（防長産）は、逆に中撫川（京都産）、窪木（近江産）、窪木（京都産）のものと同分布域が重なった。

4. まとめ

中撫川遺跡ほかから出土した緑釉陶器の胎土分析を実施し、以下のことが推定された。

（1）中撫川遺跡出土の緑釉陶器のうち、素地により胎土に違いがあることがわかった。それは、素地が土師質か須恵質により胎土に違いがみられた。また、京都産と推定される緑釉が2つの異なる胎土に分類でき、このうちの1つのグループには生産地である京都市西京区小塩1号窯が重なった。また、窪木（京都産）のなかにも、複数の胎土がみられ、中撫川と同様に京都産（小塩1号窯）と同じ胎土のものがあつた。

（2）周防国府跡（周防産）、山口県平原Ⅱ遺跡（長門産）・川棚条里跡（長門産）のものは、中撫川・仏生田（京都・近江産）、窪木（京都・近江産）のものと、SiとAl量が異なり、判別が可能であつた。また、窪木（防長産）のものは、周防国府跡（周防産）、山口県平原Ⅱ遺跡（長門産）・川棚条里跡（長門産）とは胎土が違い判別できた。

以上のように、これまで分析した消費地資料の緑釉陶器から推定されることをまとめたが、中撫川遺跡、窪木遺跡出土の京都産には、2つの胎土があることが推定された。1つは京都市小塩1号窯跡出土のものであつた。しかし、両遺跡出土の京都産と近江産は判別できなかつた。また、中撫川遺跡出土の東海（猿投産）は、周防国府跡（周防産）に分布し判別できなかつた。

そして、窪木（防長産）、周防国府跡（周防産）、平原Ⅱ（長門産）、川棚条里（長門産）は、各遺跡でまとめ、複数の胎土（生産地？）に分類された。そして、畿内産（京都・近江）とはSi・Alの含有量で違いがみられ、防長産（周防国府跡、平原Ⅱ、川棚条里）とは判別が可能であつた。

今回も、生産地資料ではなく、消費地資料からの検討で、各生産地の分類を試みたが、京都、防長産の各産地とも複数の胎土に分類され、当然のことながら、中撫川遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡には京都や防長産の複数の生産地から持ち込まれたことが推定された。今後は生産地資料を分析し、どの産地（窯跡）から持ち込まれたか、詳細な検討をする必要がある。

この分析の機会を与えて頂いた、岡田 博氏をはじめとし、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々には、いろいろとお世話になった。また、京都小塩1号窯の分析試料の提供では、百瀬正恒氏・森島康雄氏にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝致します。

註

（註1）考古学的な所見による生産地の同定は、大阪大学高橋照彦氏による。

（註2）白石 純「窪木遺跡出土土器の胎土分析」『窪木遺跡2』岡山県教育委員会 1998年

（註3）白石 純「名和衣装谷遺跡出土土器の胎土分析」『名和衣装谷遺跡ほか』鳥取県教育文化財団

2003

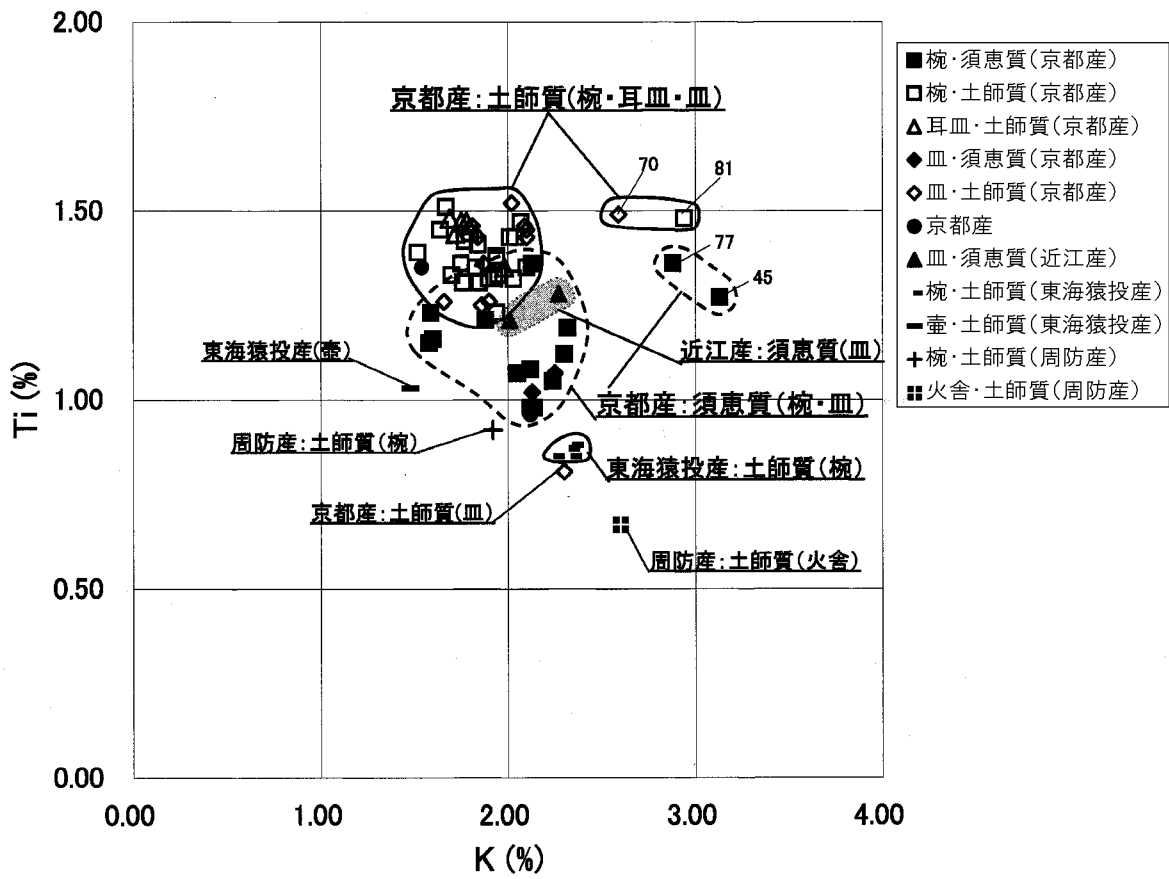


図1 中撫川遺跡ほか出土緑釉陶器の器種・素地による胎土差 (K-Ti散布図)

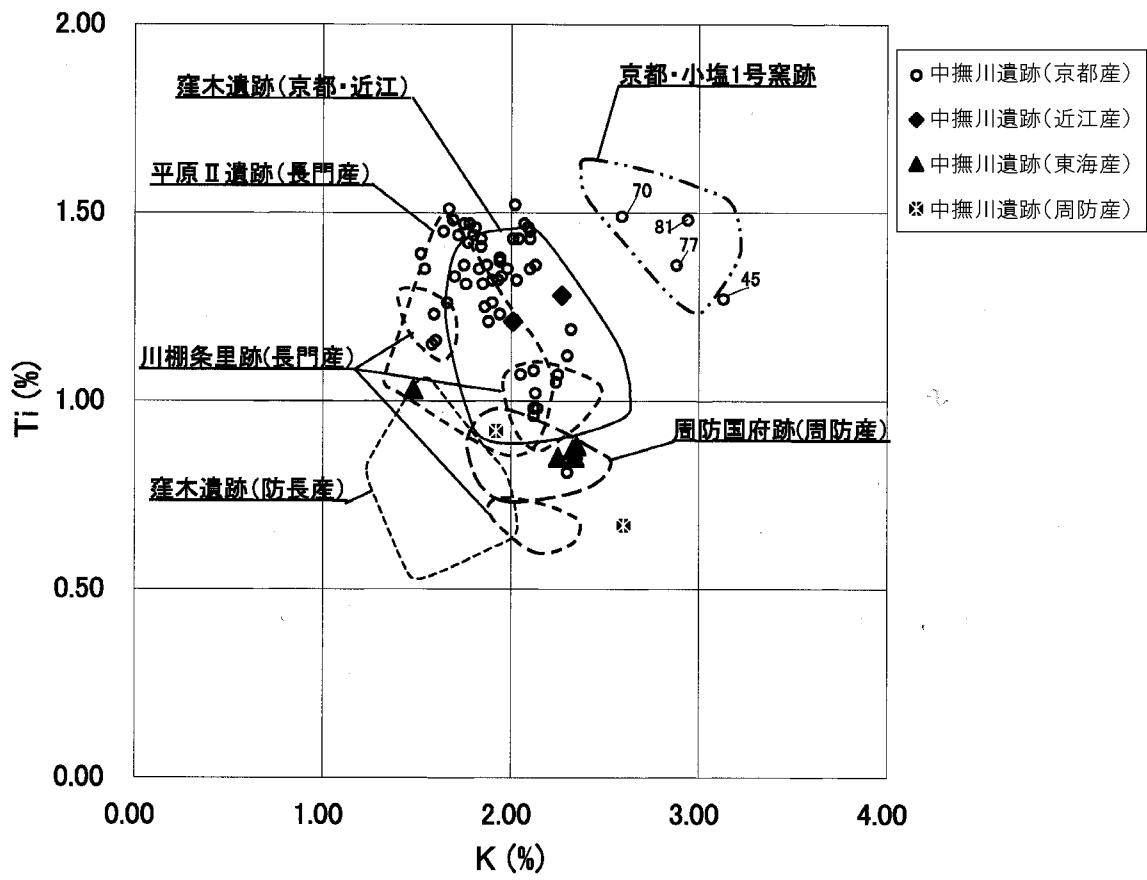


図2 中撫川遺跡と各地域遺跡出土緑釉陶器の比較 (K-Ti散布図)

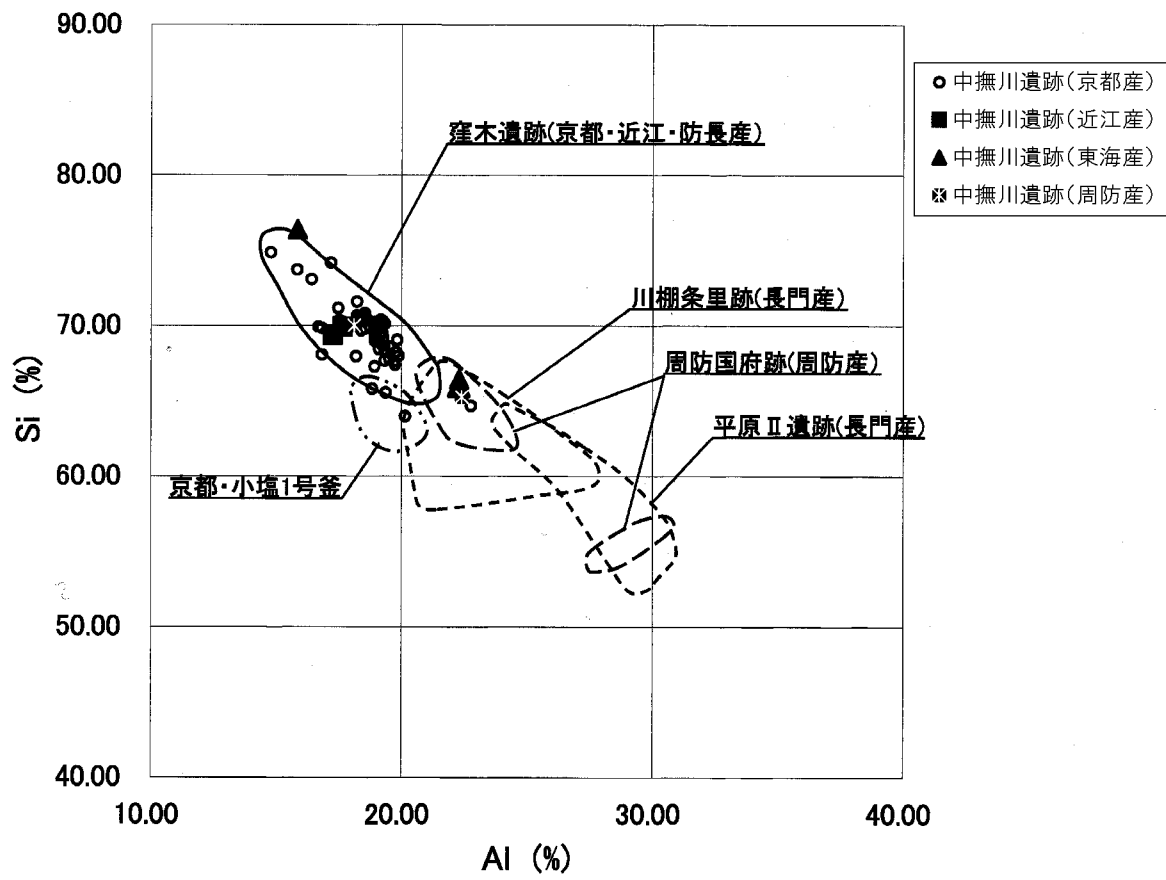


図3 中撫川遺跡と各地域遺跡出土緑釉陶器の比較 (Al-Si散布図)

第1表 中撫川遺跡ほか出土土器の胎土分析一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm.

番号	掲載番号	出土地区	種類	素地	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	備考
1	G79	郷ノ溝遺跡1区	碗?	須恵	69.84	1.19	16.81	4.48	0.06	1.83	0.22	3.08	2.32	0.01	191	127	374	京都産
2	G80	郷ノ溝遺跡1区	碗?	須恵	69.92	1.12	16.67	4.47	0.06	1.91	0.21	3.15	2.30	0.06	176	171	328	京都産
3	G100	郷ノ溝遺跡1区	碗?	土師?	65.29	0.92	22.39	4.52	0.05	1.92	0.57	2.23	1.92	0.01	214	187	247	周防産
4	B118	藤ノ木遺跡5区	皿	須恵	69.92	1.28	17.64	4.45	0.07	1.77	0.25	2.13	2.27	0.03	221	165	281	近江産
5	B116	藤ノ木遺跡5区	皿?	須恵	69.38	1.21	17.25	5.11	0.08	1.83	0.24	2.66	2.01	0.02	216	73	316	近江産
6	B117	藤ノ木遺跡5区	碗?	須恵	69.37	1.08	19.15	3.41	0.03	1.93	0.29	2.43	2.12	0.02	207	115	319	京都・篠産
7	B115	藤ノ木遺跡5区	碗	須恵	68.07	1.36	16.81	5.98	0.11	2.04	0.30	3.00	2.13	0.05	181	174	383	京都産
8	1067	中撫川遺跡1区	火舎?	土師	70.02	0.67	18.09	3.52	0.09	1.83	0.73	1.67	2.60	0.50	194	103	258	周防産?
9	830	中撫川遺跡2区	碗	土師	65.98	0.85	22.22	3.51	0.04	1.93	0.27	2.59	2.34	0.01	204	48	295	東海(猿投)
10	832	中撫川遺跡2区	耳皿	土師	70.25	1.47	18.28	2.86	0.04	1.94	0.40	2.52	1.78	0.27	170	259	277	京都産
13	824	中撫川遺跡2区	皿	土師	68.98	1.46	19.11	2.79	0.06	2.02	0.43	2.43	2.09	0.39	200	179	279	京都産
17	844	中撫川遺跡2区	皿	土師	68.45	1.25	19.09	2.25	0.02	2.17	0.40	4.03	1.86	0.17	201	192	277	京都産
18	821	中撫川遺跡2区	碗	土師	70.42	1.42	18.63	2.52	0.03	2.00	0.37	2.46	1.77	0.15	157	224	277	京都産
19	827	中撫川遺跡2区	碗	土師	70.12	1.23	19.34	2.73	0.03	1.84	0.37	2.03	1.94	0.17	188	141	275	京都産
20	826	中撫川遺跡2区	碗	土師	68.75	1.32	19.21	2.85	0.11	1.97	0.46	2.49	2.03	0.35	216	201	318	京都産
21	822	中撫川遺跡2区	碗	土師	69.92	1.35	18.91	2.48	0.04	1.93	0.38	2.40	2.10	0.16	226	170	321	京都産
22	815	中撫川遺跡2区	碗	土師	70.40	1.43	19.17	2.29	0.03	1.94	0.39	1.86	2.04	0.19	200	316	308	京都産
23	814	中撫川遺跡2区	碗	土師	70.67	1.44	18.21	2.60	0.03	2.02	0.38	2.40	1.80	0.22	192	131	298	京都産
24	834	中撫川遺跡2区	耳皿?	土師	70.36	1.44	17.51	2.83	0.10	1.96	0.51	2.28	1.72	1.02	121	314	265	京都産
25	831	中撫川遺跡2区	皿	土師	64.68	0.81	22.77	3.76	0.04	1.98	0.30	2.74	2.30	0.29	179	184	261	京都産
26	828	中撫川遺跡2区	碗	土師	69.73	1.32	18.97	2.63	0.08	1.95	0.40	2.23	1.93	0.33	188	221	309	京都産
27	829	中撫川遺跡2区	無台碗	土師	65.92	0.87	22.34	3.55	0.04	1.82	0.26	2.52	2.33	0.11	223	111	283	東海(猿投)
28	836	中撫川遺跡2区	皿?	土師	65.82	1.26	18.81	3.22	0.46	2.39	0.53	4.64	1.66	0.73	159	229	287	京都産
29	819	中撫川遺跡2区	碗?	土師	69.91	1.47	18.74	2.95	0.15	1.96	0.44	1.83	2.07	0.32	211	256	303	京都産
30	839	中撫川遺跡2区	皿	土師	69.40	1.43	18.95	2.76	0.04	2.03	0.39	2.36	2.10	0.25	223	252	308	京都産
31	823	中撫川遺跡2区	碗	土師	68.68	1.36	19.30	3.20	0.15	2.10	0.41	2.61	1.75	0.19	215	158	298	京都産
32	818	中撫川遺跡2区	皿?	土師	71.60	1.52	18.21	2.40	0.05	1.82	0.43	1.35	2.02	0.30	178	345	273	京都産
33	817	中撫川遺跡2区	碗?	土師	69.05	1.35	19.83	2.68	0.03	2.08	0.42	2.30	1.83	0.13	155	280	246	京都産
34	838	中撫川遺跡2区	皿?	土師	69.57	1.45	18.99	2.82	0.03	1.98	0.38	2.07	2.10	0.30	230	215	301	京都産
35		中撫川遺跡2区	碗?	須恵	74.87	1.16	14.77	2.24	0.02	1.88	0.40	2.82	1.60	0.08	173	145	284	京都産
36	825	中撫川遺跡2区	碗	土師	67.41	1.38	19.74	4.39	0.18	1.92	0.18	2.35	1.94	0.31	175	54	345	京都産
37	840	中撫川遺跡2区	皿?	土師	70.14	1.36	18.92	2.60	0.07	1.93	0.39	2.04	1.87	0.22	204	204	325	京都産
38	820	中撫川遺跡2区	碗?	土師	69.01	1.37	18.92	2.67	0.05	2.01	0.36	3.18	1.94	0.28	205	203	285	京都産
39	841	中撫川遺跡2区	皿?	土師	68.38	1.26	19.31	3.60	0.13	2.04	0.53	2.21	1.90	0.34	203	175	303	京都産
40	835	中撫川遺跡2区	耳皿?	土師	70.34	1.35	18.41	2.20	0.03	2.08	0.35	2.71	1.98	0.18	230	203	329	京都産
41	816	中撫川遺跡2区	碗?	土師	69.89	1.32	18.95	2.42	0.03	1.95	0.43	2.54	1.90	0.26	182	214	299	京都産
42	878	中撫川遺跡2区	皿?	土師	69.82	1.43	19.07	2.13	0.02	1.98	0.36	2.98	1.84	0.18	184	175	302	京都産
43	884	中撫川遺跡2区	耳皿?	土師	69.19	1.48	19.27	2.96	0.06	1.95	0.39	2.55	1.69	0.21	149	186	297	京都産
44	1072	中撫川遺跡2区	碗	須恵	69.81	0.98	18.54	3.13	0.04	1.94	0.27	2.82	2.14	0.11	201	107	316	京都産
45		中撫川遺跡2区	碗	須恵	65.56	1.27	19.37	5.25	0.07	2.26	0.24	2.40	3.13	0.09	280	115	333	京都産
46		中撫川遺跡2区	碗	土師	68.59	1.33	19.51	3.39	0.10	1.88	0.45	2.19	1.70	0.54	142	203	305	京都産
60	864	中撫川遺跡3区	碗	土師	69.53	1.45	19.23	3.17	0.02	1.91	0.39	1.94	1.64	0.45	155	180	293	京都産
61	866	中撫川遺跡3区	碗	土師	67.64	1.41	19.70	3.63	0.03	1.87	0.53	1.57	1.84	1.36	174	224	327	京都産
62	877	中撫川遺跡3区	碗	土師	67.79	1.31	19.51	3.39	0.06	1.89	0.52	2.11	1.85	1.06	208	236	324	京都産
63	874	中撫川遺跡3区	碗	土師	70.10	1.43	18.98	2.54	0.03	1.89	0.44	1.83	2.01	0.37	186	180	320	京都産
64	876	中撫川遺跡3区	碗	土師	70.82	1.31	18.53	2.15	0.03	1.98	0.23	2.87	1.76	0.11	160	129	321	京都産
65	873	中撫川遺跡3区	碗	土師	67.68	1.39	19.33	3.91	0.05	2.07	0.43	2.58	1.52	0.78	150	161	320	京都産
66	883	中撫川遺跡3区	耳皿	土師	71.16	1.47	17.46	2.62	0.04	1.86	0.55	2.16	1.75	0.77	164	181	295	京都産
67	881	中撫川遺跡3区	碗	土師	66.46	0.88	22.29	3.48	0.03	1.80	0.27	2.15	2.35	0.09	192	74	317	東海(猿投)
68	895	中撫川遺跡3区	皿?	土師	68.27	1.46	19.78	3.49	0.08	1.97	0.41	1.88	1.81	0.61	197	191	327	京都産
69	880	中撫川遺跡3区	無台碗	土師	65.88	0.85	22.22	3.60	0.04	1.86	0.25	2.65	2.25	0.15	200	98	294	東海(猿投)
70	893	中撫川遺跡3区	皿?	土師	69.69	1.49	18.38	2.36	0.02	1.97	0.40	2.73	2.59	0.12	198	179	309	京都産
71	1075	中撫川遺跡3区	碗	須恵	73.07	1.23	16.40	2.61	0.04	1.90	0.45	2.26	1.59	0.17	179	134	310	京都産
72	1071	中撫川遺跡3区	碗?	須恵	67.99	1.07	19.88	3.57	0.04	2.03	0.32	2.73	2.05	0.11	170	169	290	京都産
73	882	中撫川遺跡3区	壺類?	土師	76.40	1.03	15.84	1.58	0.02	1.55	0.14	1.59	1.48	0.14	141	134	325	東海(猿投)
74	872	中撫川遺跡3区	碗	土師	70.64	1.51	18.52	2.85	0.04	1.90	0.39	2.05	1.67	0.19	158	165	292	京都産
75	1081	中撫川遺跡3区	碗	須恵	69.97	1.21	17.92	3.98	0.05	1.82	0.26	2.62	1.88	0.12	174	135	317	近江産
76	1079	中撫川遺跡3区	碗	須恵	73.71	1.15	15.83	2.37	0.03	1.83	0.53	2.69	1.58	0.11	166	158	293	京都産
77	1080	中撫川遺跡3区	碗	須恵	67.97	1.36	18.17	4.96	0.06	1.96	0.28	2.03	2.88	0.13	241	116	359	京都産
78	1078	中撫川遺跡3区	碗	須恵	67.30	1.05	18.91	5.13	0.14	1.97	0.22	2.79	2.24	0.10	198	110	307	京都産
79	1077	中撫川遺跡3区		土師	69.12	0.96	18.93	3.15	0.04	1.99	0.25	3.07	2.12	0.10	209	131	324	京都産
80	1073	中撫川遺跡3区	皿?	須恵	70.28	1.07	19.27	2.05	0.03	1.88	0.21	2.12	2.25	0.14	182	136	273	京都産
81	879	中撫川遺跡3区	碗	土師	63.98	1.48	20.14	6.07	0.10	2.14	0.29	2.31	2.94	0.34	222	101	341	京都産
82	870	中撫川遺跡3区		須恵	74.18	1.35	17.17	2.34	0.03	1.70	0.22	1.14	1.54	0.14	182	87	332	京都産
83	871	中撫川遺跡3区	碗	須恵	70.54	0.98	18.31	3.14	0.04	1.81	0.26	2.38	2.12	0.13	204	111	336	京都産
84	894	中撫川遺跡3区	皿	須恵	69.25	1.02	18.92	3.34	0.05	1.89	0.30	2.76	2.13	0.09	200	111	294	京都産
85	875	中撫川遺跡3区	碗	土師	70.24	1.33	18.92	2.55	0.04	1.80	0.42	1.88	1.95	0.40	199	204	330	京都産

※G番号は郷ノ溝調査区、B番号は仏生田遺跡、番号のみは中撫川遺跡掲載番号を示す。掲載番号のないものは、実測図なし。

付載3 中撫川遺跡出土炭化種子の識別

東京大学総合研究博物館人類先史部門 松谷暁子

I 試料

中撫川遺跡1区の溝43から、備前焼や土師器などに混じって出土した炭化種子。廃絶時期は室町時代、15世紀中頃とのことである。

イネ、ムギ類などと区分され、プラスチック容器に保管されたものが6個である。便宜上以下のように番号を付けたが、これらの試料に出土地点の差異はなく、水洗選別後、ルーペにより、分けられたものという。

- 1 イネ633個と記載されたもの。
- 2 麦小粒38と記載されたもの。
- 3 麦大粒132と記載されたもの。
- 4 エゴマ? 22個と記載されたもの。
- 5 不明(豆類?) 49個と記載されたもの。
- 6 粒子の塊69個と記載されたもの。

その他、石膏型(10cm×8cm)が2点あり、灰色粘土、茶褐色土に炭化物が点在している。

II 観察の方法

実体顕微鏡で外形を観察し、小さな種子類、イネの粉片、その他表面の微細構造が必要と考えられるものは、走査型電子顕微鏡(SEM)による観察を行った。

III 実体顕微鏡による観察結果

試料1(写真2)

長さ約4-5mm、幅約2-3mmの楕円形をした粒で、各粒の中央には、内外穎の跡に相当する二本の線が認められる。また、一方の端には、胚の取れた跡に相当する凹みが存在する。これらの特徴から、糊が取れた状態のイネ粒と判断されるが、穎は存在していないものが多い。ひび割れや焼け膨れたものなど、加熱の痕を示すものも多い。

30粒について、長さ、幅、厚さを計測したところ、以下のものであった。(以下の単位はすべて、ミリメートル)

長さ	幅	厚さ						
5.1	2.9	1.9	5.0	3.2	2.0	5.1	2.9	2.3
4.6	2.7	1.9	5.9	2.3	1.9	6.1	2.7	1.9
5.4	2.7	1.8	4.8	2.9	2.4	4.4	2.9	1.6
4.6	2.9	2.0	6.2	2.8	2.0	4.2	2.5	1.5
4.9	3.1	2.4	4.9	2.9	1.9	5.0	2.8	2.0

4.7	3.0	2.3	5.0	3.7	2.2	4.7	3.2	2.0
5.5	2.5	1.9	5.1	2.7	2.1	5.1	3.1	1.8
5.1	3.6	2.4	5.1	2.9	2.8	4.8	3.4	3.3
4.8	3.1	2.3	4.7	2.7	2.5	4.7	3.3	2.2
5.5	2.8	2.4	4.8	3.4	2.2	4.1	2.6	1.7

日本の遺跡から出土した炭化米については、佐藤敏也氏による型分類がある（佐藤1971）。以前に観察した、津寺遺跡丸田調査区（平安時代）から出土した炭化米は、長さ4.2–4.8mm、幅2.2–3.0mm 厚さ1.4–2.2mm、の範囲にあり、佐藤氏による分類を適用すると、大部分がI Bに入ると報告した（松谷1994、ただしIをIIと誤って報告してしまったので、ここで訂正しておきたい）。この津寺遺跡出土イネ粒に比べると、中撫川遺跡から出土した炭化米は、長さも幅も厚さもすべて大きいことに気づく。平安時代から室町に至る間に穀物改良が進んだのであろうか。あるいはまた別の条件であらうか。

試料2 38粒（写真3）

外形や大きさは試料1のイネとほぼ同じでよく類似しているが、中央に一本の溝が存在し、胚の痕に相当する凹みは、溝のある面の裏側下方中央に認められるので、オオムギ粒と考えられる。

36粒あり、比較的細長い粒が多い。実体顕微鏡下では、穎は付着していないと判断される。

胚の痕がはっきりとして、先端が平らな10粒を計測したところ、

5.9x2.4x1.9 5.2x2.7x2.2 5.0x2.5x1.6 5.5x2.8x2.2 4.9x2.4x1.7

1.9x2.4x2.0 4.6x2.3x2.3 4.1x2.5x2.0 4.2x2.6x2.0 4.5x2.4x2.3であった。

津寺遺跡から出土したオオムギには、穎が残っているものがなかったが、それらと比較すると、中撫川遺跡の試料2は、やや小さい傾向がある。さらに、比較的小さな8粒の大きさは、

2.4x1.9x1.5 4.6x2.0x1.8 4.0x2.0x1.7 4.7x1.8x1.3

3.5x2.1x1.5 3.8x2.0x1.6 4.4x2.3x1.7 4.4x2.3x1.7であった。

イネ粒が2粒含まれており、大きさは4.7x2.8x2.0と、4.3x2.3x1.7で、試料1よりやや小さい。

試料3 153粒（写真4、5）

試料2と同じ特徴によりオオムギと判断されるものが136を数える。

写真でも容易にわかるように、試料2と比べて大きい。実体顕微鏡での観察で、穎が存在すると判断されるもの47粒と、穎が存在しないと判断されるものが89粒あった。

穎が存在するもの47粒は、上端が平らなものと、上端が丸いものに分けられるが、後者の方が穎の保存が良く、全体が穎で覆われている（写真4）。

上端が平らなもの16のうち、6個を計測したところ、以下のものであった。

6.5x3.6x3.1、5.3x3.5x3.1、5.8x3.7x3.0、5.9x3.9x3.2、5.0x3.5x2.7、5.0x2.9x2.0

上端が丸い31個については、10粒を計測。

6.5x3.3 7.1x4.2 6.8x3.7 5.9x3.7 7.3x3.0 6.6x3.0 6.3x2.9 6.2x3.3 6.6x2.9 6.8x3.3

穎が付着していない89粒は、小さなものやよじれているもの、その他、壊れているものなどが含まれている。

外形からコムギと考えられるものが6粒認められた。オオムギに比べて、長さがやや短く、幅は大

きい。オオムギは上下が細く紡錘形と表現できるのに対し、コムギは一般に上下を通してほぼ同じで樽状に近い。また、胚の痕が、オオムギは三角形に近いのに対し、コムギは扇形と言える（写真6）。コムギ4粒の長さとは幅は、5.0x3.4 4.2x2.9 4.8x2.9 4.5x3.5であった。津寺遺跡のものよりやや大きい傾向が見られる。

イネ粒が1点、混在しており、長さ4.5mm、幅3mmであった。

試料4

楕円形で長径2mm以下の小さな種子が多い。胚の痕と考えられる凹みが認められるものは、ミレット（イネ科雑穀）、すなわち、ヒエ、アワ、キビ、のどれか（あるいは複数）が存在すると予想されるため、比較的保存の良い6粒を選んで、SEMによる観察を行なった。

4-1 2.0x1.5mm 実体顕ではヒエ？と予想。

4-2 2.5x1.5mm 実体顕ではアワ？と予想

4-3 1.5x1.5mm 平坦な円形で、イネ科雑穀ではなさそうである。

4-4 2.0x1.7mm 半分しか残っていないと思われるが、イネ科雑穀らしい。

4-5 2.0x1.5mm 実体顕ではヒエ？と予想。

4-6 2.0x1.5mm 実体顕ではヒエ？と予想。試料5

試料5（写真6、7、8）

オオムギ23の他、コムギが7粒存在する。コムギの大きさは、4.5x3.5 3.4x3.4x2.8 3.8x2.9x2.7 3.8x2.8x2.7 4.1x3.0x2.8 3.0x2.7x2.1（一番小さい）で、試料3のコムギよりも小さいものが多い。

イネは著しく変形しているが、10点ある。

4x3、4x5、3.5x3の大きさで、三稜が観察される粒3点は、果皮が取れた状態のソバ粒と考えられる（写真7）。

マメのへそに似た形態が観察される炭化粒が1点あり、マメの可能性はあるが保存状態は極めて悪く、確認はできなかった（写真8）。

その他、殻状の小破片が3点あるが、何の破片か不明である。

試料6（写真1）

粒子の塊。イネ粒が3～6個くらい癒着したものが多い。穎はほとんど残っていないが、糊片が付着したものが1点あり、確認のため、SEMによる観察を行なった。

以上の他、石膏に付着した炭化物は、木材片とオオムギ粒と判断される。

IV 走査型電子顕微鏡による観察

実体顕微鏡下で保存が良いと予想された試料を選んで、アルミの試料台に両面テープを接着し、その上に試料をのせ、通電剤としてドータイトを周囲に塗り、蒸着装置で白金バナジウムの膜を蒸着後、走査電子顕微鏡（日立S-4500）で観察を行なった。

試料4 観察可能な雑穀らしいものは6粒あった。しかし、実体顕微鏡下でアワの可能性が考えられるものを、走査型電子顕微鏡で観察したところ、予想外に表面の保存が悪く、様々な部位の微細構造を観察しても同定の鍵となる明瞭な特徴を認めることが困難であった。そこで、次回に観察の折り、

同じ粒の裏面を観察したところ、厚い膜状構造がとぎれて下層が露出している部分が見つかり、ヒエの内外穎、および苞穎に特徴的な形態が観察され、ようやくヒエと判断できた粒が1粒あった(写真17-24)。他の5粒のうち、2粒は穎の表皮細胞が明瞭に観察されてはいないが、同じくヒエの類であろうと推測される(写真25-28)。他の2粒もイネ科雑穀であろうと推定されるが、ヒエかどうかの判断は困難であった(写真29-30)。残りの一粒、円形の粒はイネ科雑穀ではないが、何の種子か不明である(写真31-32)。

試料6 実体顕微鏡下で粉片と予想されたものがあり、SEM観察を行ったところ、イネ粉に特有の組織像が認められ、粉片が部分的に付着した状態のイネ粒が存在していることが確認された(写真9-10)。

試料2のオオムギ・実体顕微鏡下では、穎の存在が認められなかった2粒(1粒は溝側、別の粒は胚側)について、SEM観察を行なった。内外穎の表皮細胞に特徴的な毛や円形細胞などが観察され、2粒とも部分的に穎が付着していることが確認された。(写真11-14)。皮麦と考えられる。

試料5のコムギ2粒：溝の面と胚の面について観察した。コムギには、内外穎は残存していなかったが、果皮の横細胞が観察された(写真15-16)。

試料5のソバと考えられる種子についても表面を拡大し、表皮細胞を観察した(写真7下)。

V 結論：同定された植物の種類

実体顕微鏡と走査電子顕微鏡により同定された植物の種類をまとめると、次のようになる。

イネ：No.1とNo.6の他、No.2とNo.5でも少量見出されたが、内外穎、すなわち籾殻が残っているものはほとんど見出されなかった。

オオムギ：No.2、No.3の他、No.5でも、見出された。石膏型に付着した炭化材破片と考えられるものと一緒に観察された粒も、オオムギであった。

内外穎が保存されているものも多く、皮麦と考えられる。大きさの差異は、中央粒と側粒の違いによる部分が大きいと考えられる。

コムギ：No.3とNo.5で見出された。日本の他の遺跡でと同様、穎が付着しているものは一粒も認められない。

ソバ：No.5で果皮の取れたソバの実と考えられるものが3点、見出された。

津寺遺跡中屋調査区の井戸跡から出土したソバは、果皮だけが残っていた(松谷1996)。しかし、中撫川遺跡から出土したソバ粒は、北海道上ノ国町の勝山館跡から出土したソバ粒(松谷1989)や、東京都日野市落川・一宮遺跡の井戸跡から出土した粒(松谷1999)と同様、果皮が剥がれて種子の状態で出土したと判断される。

ヒエ：No.4で見出された。一粒は内外穎や苞穎が観察され、ヒエであることが確実であった。同類のその他の粒は、内外穎や苞穎の存在による確認ができなかったが、大きな胚その他の特徴は、キビやアワよりは、ヒエの可能性が高いと考えられる。

シソ科エゴマ・シソは、岡山県内では、津寺遺跡の他、弥生時代の南溝手遺跡から識別されている(松谷1996)。しかし、中撫川遺跡の試料からは見出されなかった。

マメ類についても確認はできなかった。

VI 津寺遺跡丸田調査区との比較

以前に観察した岡山県津寺遺跡丸田調査区（松谷1994）と、識別された植物の種類を比較して見ると、津寺遺跡で識別されたのは、イネ、コムギ、オオムギ、マメ、エゴマ、サンショウで、一番多いのはオオムギであった。中撫川遺跡では、エゴマやサンショウが見出されなかったが、イネとオオムギが多く、コムギも存在しているという点が共通している。また、中撫川遺跡では、イネの粒が塊状になった炭化物や、果皮の取れたソバ粒が見出されたが、マメの存在は確認できなかった。

津寺遺跡ではイネ科雑穀が識別されなかったが、中撫川遺跡ではヒエが一粒識別された。このヒエは、部分的にせよ、内外穎や苞穎が残存していたため、識別が可能であったが、内外穎が残っていない別の粒もヒエの可能性はある。岡山県では弥生時代の津島遺跡から、ヒエが二粒検出されている（笠原・武田1979）。しかし、一般にヒエよりアワの方が多くの遺跡から出土しており、最近経験した弥生後期の津島遺跡出土土器付着物でも、イネとともにアワが観察されている（松谷2003）ことなどから、アワの利用の方が多という印象を受けていたが、中撫川遺跡では、アワを確認することができなかった。

引用文献

- 笠原安夫・武田満子 1979 岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定研究。農学研究 58：117-179。
- 松谷暁子 1989 勝山館跡出土炭化種子の識別。「史跡上之国勝山館跡X—昭和63年度発掘調査整備事業概報—」、上ノ国町教育委員会、63-64, PL.22-24。
- 松谷暁子 1994 津寺遺跡丸田調査区出土植物遺残。「山陽自動車道建設に伴う発掘調査9」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90、499-507。
- 松谷暁子 1996a 南溝手遺跡出土の炭化種子について。「南溝手2」、338-342, 岡山県教育委員会。
- 松谷暁子 1999b 津寺遺跡中屋調査区出土の植物種子について。「津寺遺跡3」、289-290。
- 松谷暁子 1999 出土種子（作物等）の識別。「落川・一宮遺跡IV」落川・一宮遺跡（日野3・2・7号線）調査会、359-376。
- 松谷暁子 2003 津島遺跡出土の炭化物の識別。「津島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173 597-612。
- 佐藤敏也 1971 「日本の古代米」雄山閣。

写真図版説明

図版1 炭化粒の実体顕微鏡写真（ただし、写真7下はSEM写真）

- 1 炭化イネ粒塊（試料6）
- 2 イネ粒（試料1）：加熱による変形も認められる。
- 3 オオムギ粒（試料2）：左2粒が溝側で、右2粒は同じ粒の胚側。
- 4 穎の保存の良いオオムギ粒（試料3）。
- 5 オオムギ粒（試料3）：上2粒が溝側で、下が同粒の胚側。
- 6 コムギ粒（試料5）：左2粒が溝側で、右2粒は同じ粒の胚側
- 7 ソバと判断される粒（試料5）：全形（上）とその表面拡大（下）
- 8 マメ？（試料5）：上の写真中央にへそらしき構造が認められる。下の写真は、その裏面。

図版2 走査電子顕微鏡写真1 (イネ、オオムギ、コムギ)

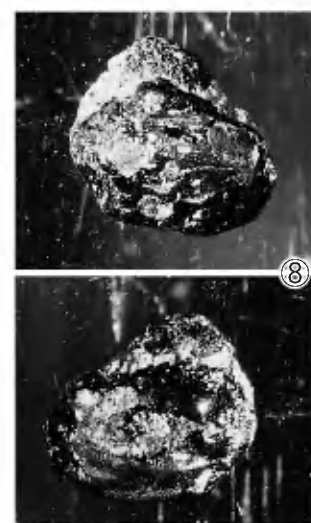
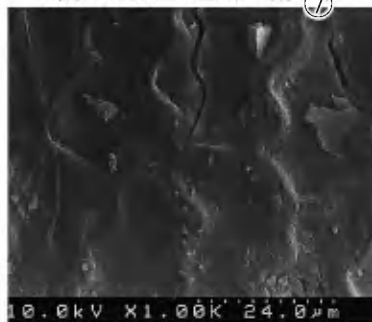
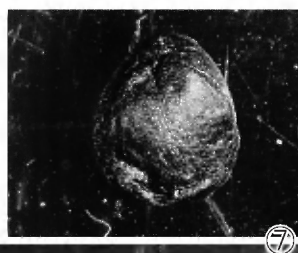
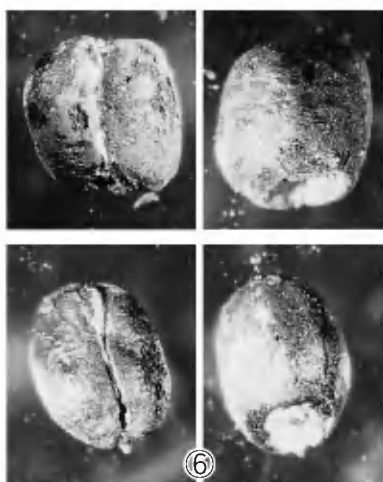
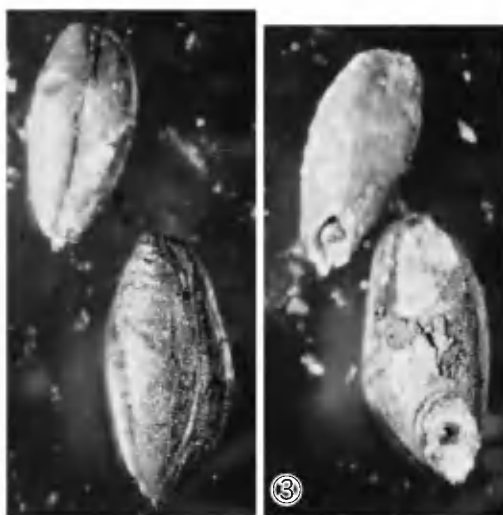
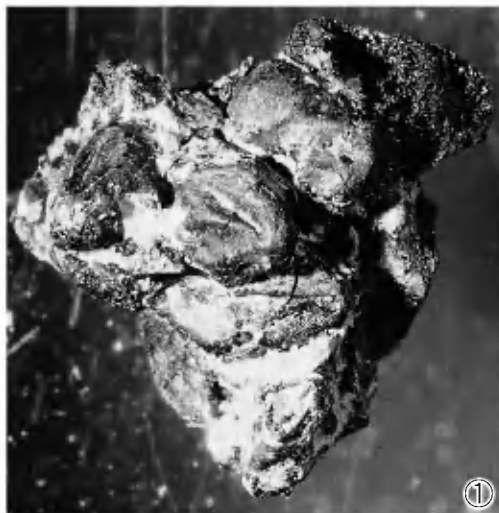
- 9 炭化粒塊から見出された穎残存イネ粒 (試料6)。
- 10 写真9の左上部分の拡大：糊片の裏側が観察された。
- 11 オオムギ粒溝側 (試料2)。
- 12 同粒の右部に残存していた穎の拡大写真。
- 13 別のオオムギ粒下方胚側の部分。
- 14 同粒の上部に残存していた外穎の表皮細胞。
- 15 コムギ (試料5)：胚の部分。
- 16 写真15の上部の果皮で観察された横細胞。

図版3 走査電子顕微鏡写真2：試料4の小種子

- 17 イネ科雑穀類似粒Aの全形：へそ側。右が上、左がへそ。
- 18 写真17の左下方拡大。
- 19 イネ科雑穀類似粒Aの全形：胚側。
- 20 同粒中央左寄り拡大写真。左の下の部分に外穎の表皮細胞が認められる。
- 21 同粒左、粒の先端部拡大。ヒエ属に特徴的な苞穎の短細胞が観察される。
- 22 同粒。写真21よりも右寄り部分の拡大。膜状のクチクラ層が剥がれて、所々に長い側枝の長細胞が観察される。
- 23 同粒中央下方部拡大：果皮細胞。
- 24 同粒中央左寄り部分拡大。

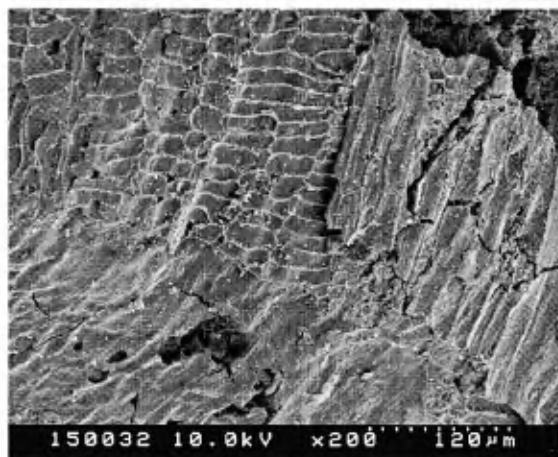
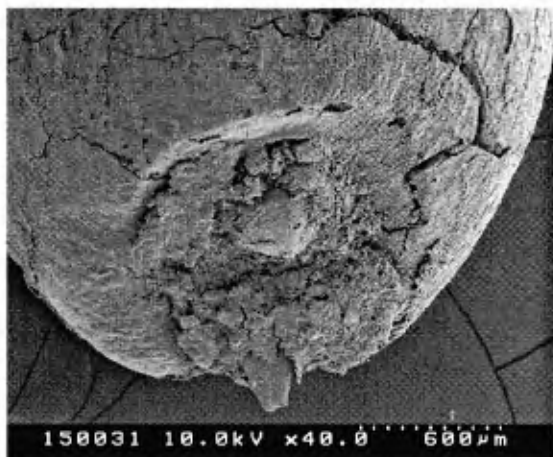
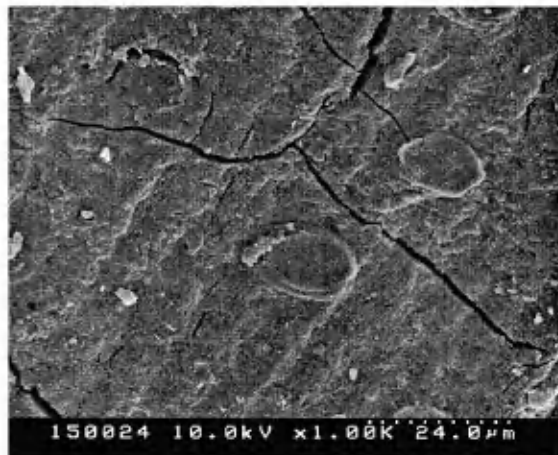
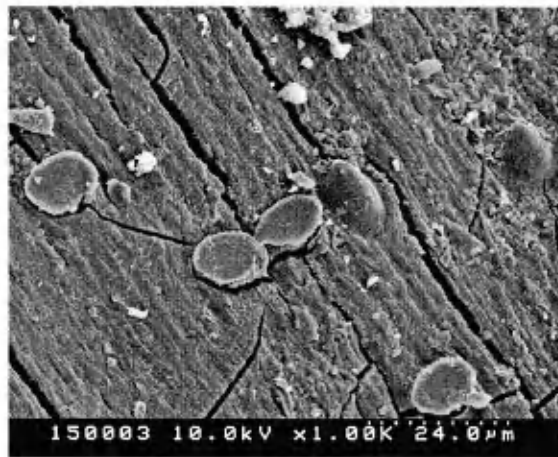
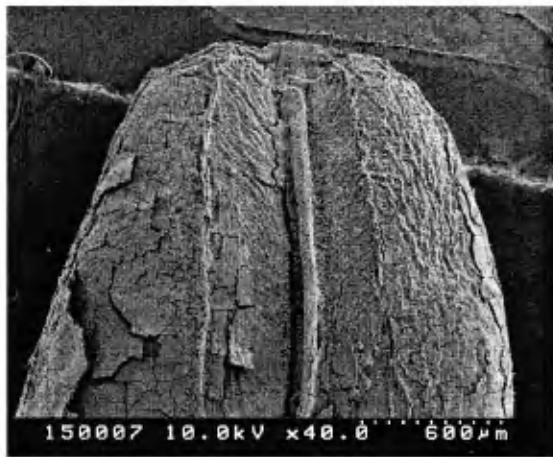
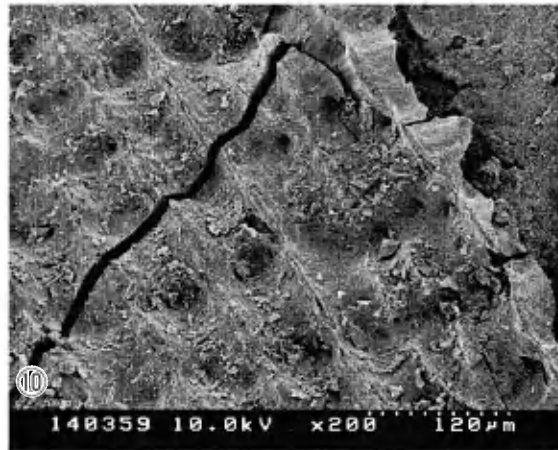
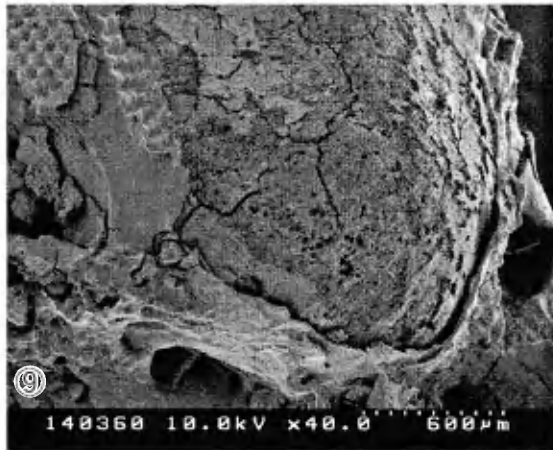
図版4 走査電子顕微鏡写真3

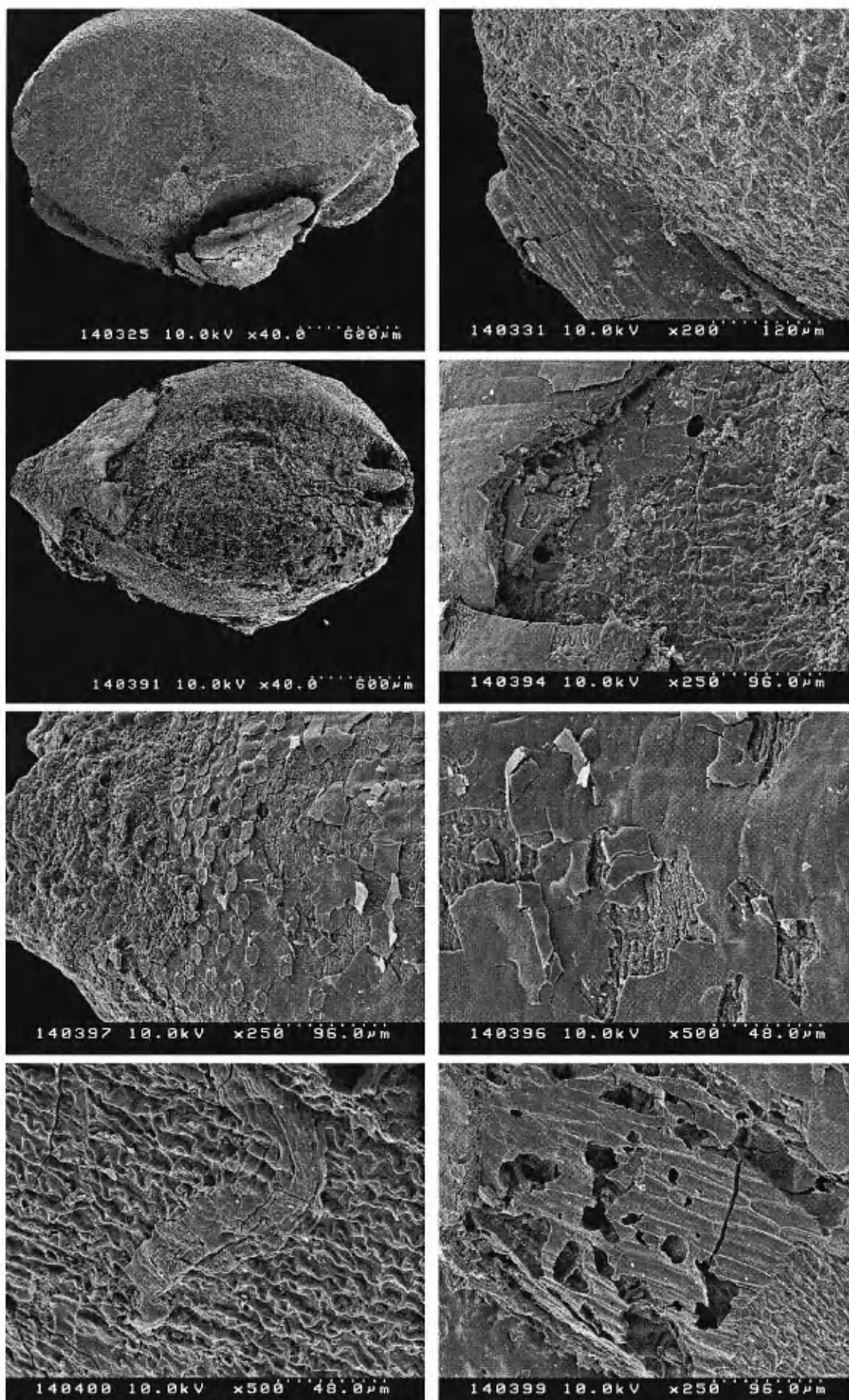
- 25 イネ科雑穀類似粒B (内穎側)：右側にへそが存在する。
- 26 写真25中央上部拡大。
- 27 イネ科雑穀類似粒C (外穎側)：大きな胚が存在する。
- 28 写真27の中央上部拡大。
- 29 イネ科雑穀類似粒D。
- 30 イネ科雑穀類似粒E。
- 31 不明小種子。
- 32 写真31中央部上面拡大。



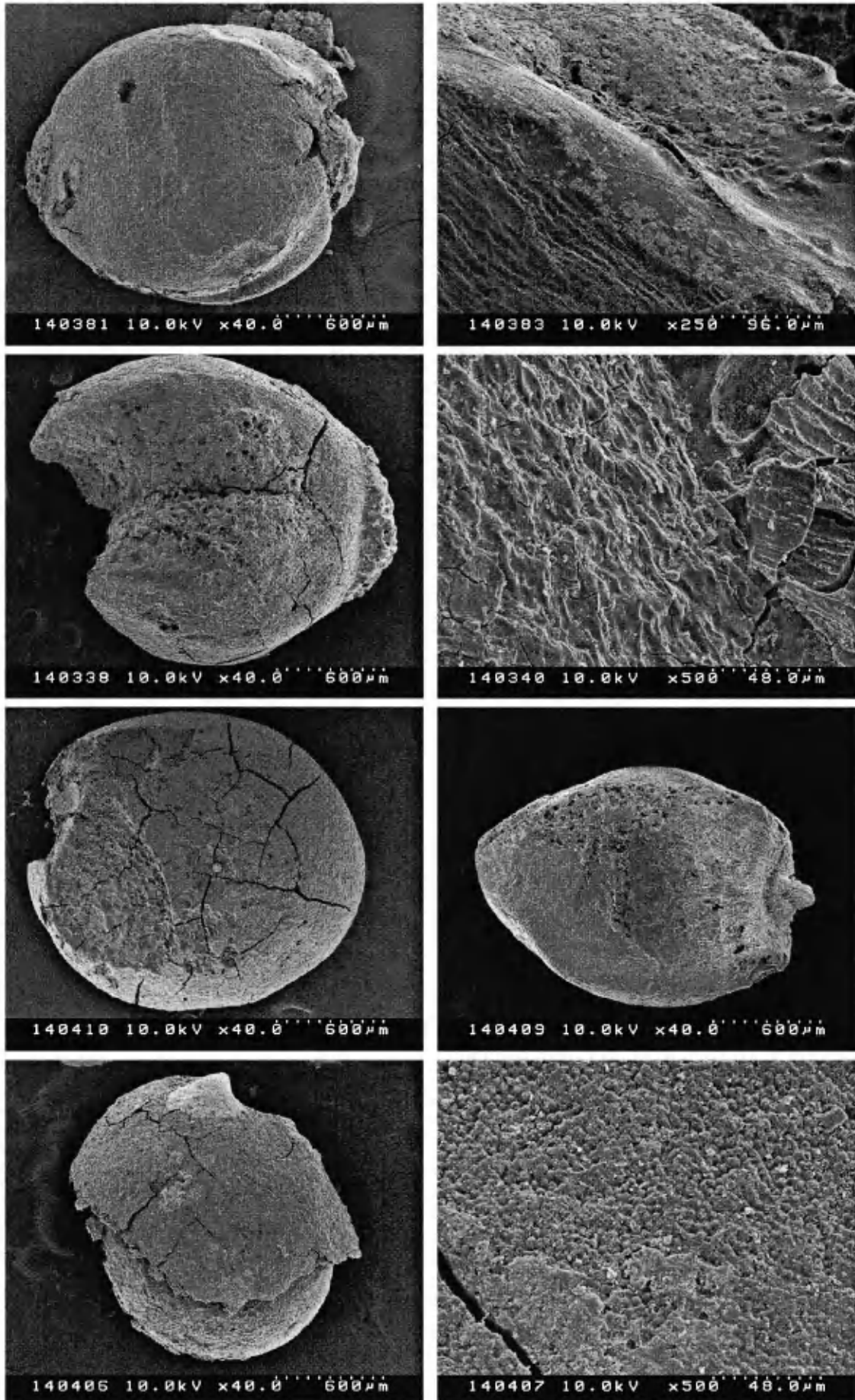
(スケール：×6.5)

图版 2





图版 4



付載 4 中撫川遺跡(法万寺調査区)墓出土の人骨について

岡山大学大学院 医歯学総合研究科 人体構成学分野 大塚愛二

はじめに

本稿は、岡山県岡山市中撫川遺跡（法万寺調査区）の墓から出土した、人骨に関するものである。本遺跡からは、2か所の墓が発掘され、それぞれ1個体ずつが検出された。

墓1の人骨について

頭を北に向け、膝を屈曲した状態で埋葬されていた。出土時の資料からは、頭蓋骨、上腕骨、前腕骨、寛骨、大腿骨、下腿骨が見られる。胸郭のほとんどを含む胴の骨格が、見られないのは、この墓よりも新しい時期に柱穴が掘られたために、同部位が欠如したものである。発掘担当者からの情報によれば、その新しい遺構が14世紀後半から15世紀と考えられ、他の諸状況を考え合わせて、古くても13世紀のものと考えられている。なお、頭蓋骨の下に鉄製の刀が副葬されていたことが分かっている。土壌や棺については、発掘過程で明らかになっていないが、この人骨が、膝を曲げた肢位で約45cm×100cmほどの長方形にちょうど収まっていること、死後も刀を持つほどの身分であったことから、少なくとも土壌は存在し、埋葬されたものと考えられている。骨の遺存状態は悪く、非常に脆弱になっており、骨を取り上げる過程でほとんど原形をとどめない状態になってしまった。

破片状態の骨の中で、所見の得られそうなものについて、述べる。明瞭な板間層より頭蓋冠の骨の断片であると考えられるものが多数見られた。上腕骨骨幹部の一部と考えられるもの：2点。やや押しつぶされている。当然、骨長は、計測できない。左大腿骨体上部と考えられる骨片があった。体部中央の横径は25mm、矢状径22mmであった。殿筋粗面は発達が悪く不明瞭であったが、これは骨の遺存状態が悪いためもともと粗面の発達が悪いのかどうか判断できない面もある。

歯牙は、比較的良く遺存しているが、それでも発掘回収できているのは、小白歯歯冠部2、小白歯歯冠部の一部2、大白歯歯冠部2（どちらもう歯あり）、大白歯歯冠部の一部2、不明の歯牙片1であった。切歯、犬歯は見あたらない。多くの歯が確認されていないのは、埋葬時点で、もともこの個体に無かったのか、それとも遺存されなかったのか結論しがたい。しかし、う歯に侵された歯が少なからず確認されることから、他の歯もう歯に侵されていた可能性は高く、そのため比較的良く残るはずの歯冠部が、う歯によって侵食あるいは生前に脱落していた可能性がある。エナメル質の磨耗は、進んでおり、30代は越えているものと考えられる。

直接的に、性別の手がかりになるものはないが、大腿骨の径が、男性のものにしては細すぎる。また、殿筋粗面も上述の問題は残すものの発達が悪く、男性のよりはるかに滑らかである。従って、女性の可能性が高いといえるが、確定的ではない。

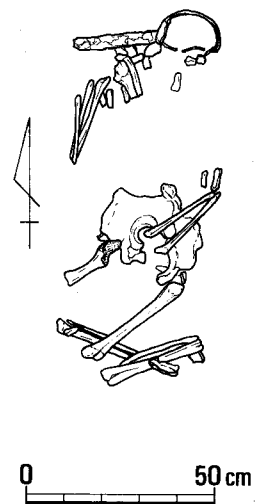


図1 墓1実測図（1/20）

墓2の人骨について

墓2は墓1の南にあり、頭部を北、殿部を南に向け、左側を下にした胸膝位で両下肢を抱え込むように折り曲げられた横臥屈葬である(写真1)。約40×60cmの小さな木棺に入っており、発掘担当者によれば、墓1よりも新しく、中世後半16世紀頃を想定するとのことである。出土の過程では、骨の遺存状態はよさそうに見えたが、発掘して洗浄しようとする、意外にもろく、発掘途中の段階で形があった長管骨の多くが原形をとどめない骨片となったようである。発掘途中の段階で、立ち会ったときに最も表層に近くあった右脛骨の全長を計測することができ、27cmあり、それに安藤の係数4.8を乗じて約130cm前後の身長であったものと推定される。



写真1 墓2検出状態

以下、同定された骨部について述べる。

後頭骨：一部であるが外後頭隆起の付近を含んでいる。外後頭隆起はそれほど著明な隆起粗面を形成していない。

頭頂骨：割れた破片として確認された。

側頭骨：左右共に、錐体と外耳道が遺存している(写真2)。

左眼窩から上顎：比較的良好に遺存している。

下顎骨：左右、下顎角から下顎枝およびオトガイ付近の骨片が検出されている(写真3)。咬筋粗面は、概して明瞭とはいえない。

椎骨：そのほとんどが骨片化しており同定困難なものが多かったが、第2頸椎と第7頸椎が同定できた。中でも、第2頸椎は、遺存状態がよく一部棘突起と横突起が欠損するものの、齒突起などはほぼ完全な状態で遺存されていた(写真4)。第7頸椎は、椎弓の左半部が遺存していた。その非常に長い棘突起にいたる椎弓とほぼ垂直に近い関節突起の関節面から第7頸椎であろうと判断された。

肋骨と胸骨：遺存状態が悪く、発掘時点ではそれらしきものが実測図(図2)等に記されているが、必ずしも取り上げられておらず、断片破片化したものの中に混ざっているものと考えられる。

鎖骨：右の外側半が遺存され、同定可能であった(写真5)。円錐靭帯結節や菱形靭帯線は隆起や凹凸に乏しかった。

上腕骨：はっきりと上腕骨を示す骨片は、左右の下端部で、上腕骨滑車部が確認される。他の部位は、断片化していて、特定できなかった。

大腿骨：左大腿骨の体部のうち、小転子直下付近から大腿骨中央までが良好に遺存していた。大腿骨体上横径は29mm、大腿骨上矢状径は21mmであった。殿筋粗面は、よく遺存していたが、凹凸は著明ではなかった。右大腿骨体部の下半から内側上窩付近の骨片が同定された。大腿骨頭は遊離骨片として同定された。

膝蓋骨は、左側のものが確認された。

脛骨：発掘当初は、比較的良好に遺存されていたかに見えたが、取出しから洗浄中に断片化している。土中にあった時点の右脛骨長は27cmであった(前述)。右脛骨体部中央1/2ほどが良好な遺存状



写真2 左側頭骨



写真4 第2頸椎

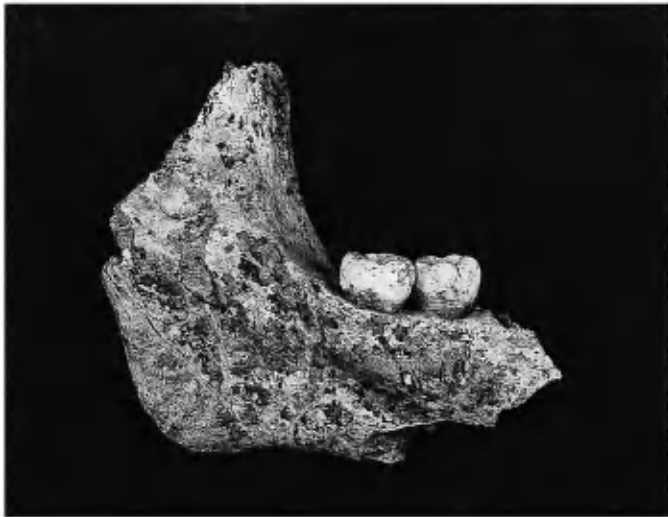


写真3 左下顎骨



写真5 右鎖骨



写真6 距骨（右、左）

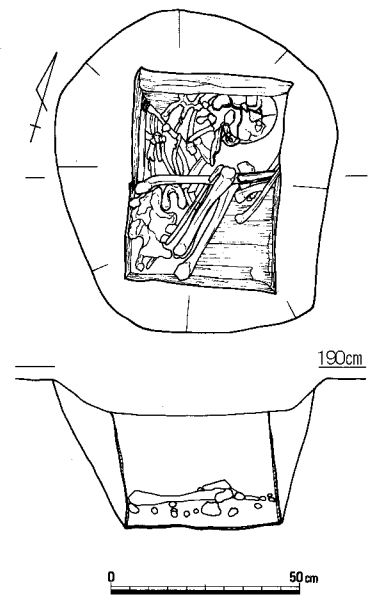


图2 墓2実測図 (1/20)

態を示している。

腓骨：発掘途中の土中にあった時点では、右腓骨の存在がはっきりと確認できているが、取出しから洗浄過程で、断片化している。

距骨：左右共に距骨滑車を含む大部分が遺存している（写真6）。細かい緻密骨皮質は、ほとんど脆弱破損をきたしている。

歯牙：切歯6個；犬歯4個；小白歯7個；大白歯8（遊離しているもの4）個を検出している（写真7）。左上顎骨と左下顎骨それぞれに第一大臼歯と第二大臼歯が2本ずつ付随して検出されている。第三大白歯は一本も確認できなかった。歯冠部のエナメル質は磨耗がほとんどなく、う歯に侵された歯も検出されていない。

この墓2に埋葬された個体の年齢を推定する手がかりとして、有力なものは歯牙の状態であろう。歯冠部のエナメル質の磨耗は極めて少なく、う歯もほとんどない。第三大白歯以外の永久歯はほぼすべて確認されるも、第三大白歯が確認されない。従って、永久歯がほぼ生えそろって、第三大白歯はまだできていない時期といえる。大腿骨頭の癒合がまだ終了していない。身長130cm前後。ということ考え合わせて、12～14歳と推定される。男女の性別については、確定的な骨部は確認されていない。この年齢の女子は同年齢男子よりも体格が大きいことがあっても不思議ではない。骨の表面の筋附着部（下顎骨の咬筋粗面や大腿骨の殿筋粗面など）は比較的平滑で、この年齢ごろの男子は男性ホルモンの影響が現れ始めて筋の発達がよくなると考えれば、やや女性的であると考えられる。また、鎖骨の円錐靭帯結節や菱形靭帯線などの靭帯附着部の性状も平滑でどちらかといえば女性的であると考えられる。



写真7 歯牙

付載5 新邸遺跡・中撫川遺跡出土

動物遺存体の分析

岡山理科大学理学部 生物化学科 富岡 直人

1 出土状況

岡山県岡山市吉備津、納所、川入、中撫川において実施された一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査（岡山県古代吉備文化財センター、平成12年4月10日から平成14年3月31日実施）によって新邸遺跡と中撫川遺跡から動物遺存体が検出された。いずれの地点とも低湿地性の堆積環境で、骨格多くの資料は低湿地性の埋存環境に影響され茶褐色に変化し、一部はビビアナイト（藍鉄鋼 (Vivianite: $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_8 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$)) を析出し脆弱化している。

新邸遺跡では、2・3・4区の中世の旧河道から一括性の高いブロックとして哺乳綱ウシ・ウマ遺存体が検出され、さらにその周辺の包含層に散乱した骨格が計61点検出された。この骨格ブロックの傍らより、14世紀後半に鋳造された明朝「洪武通寶」の銘を持つ銭が検出されている。

中撫川遺跡1区の包含層、河道、溝等から、古代に属するウシ・ウマ・ニホンジカ・イノシシ類の遺存体が9点が検出された。周辺からは円面硯等が検出されている。

2 出土動物遺存体の特徴

出土した動物遺存体資料を分類・同定し、第1表と第2表に記載を行うとともに、Driesch (1976) の示す計測法に則って計測するとともに、実体顕微鏡、生物顕微鏡で観察し、解体痕跡の分析、死亡年齢の推定を実施し、第2表に付記した。

検出された動物遺存体のうち綱目科属種の分類名が明らかになったものについて、標準和名と学名を第1表に掲げる。

第1表 新邸・中撫川遺跡出土動物遺存体種名表

tab 1 List of the animal remains from the Shin'yashiki and Natsukawa site

脊椎動物門	Vertebrata	ウマ科	Equidae
哺乳綱	Mammalia	ウマ	<i>Equus caballus</i> Linnaeus
ウシ目 (偶蹄目)	Artiodactyla	イノシシ科	Suidae
ウシ科	Bovidae	イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.
ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i> Gmelin	シカ科	Cervidae
ウマ目	Perissodactyla	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck

哺乳綱 Mammalia

今回の調査では、発掘中視認した動物遺存体の抽出を実施し、哺乳綱以外の動物遺存体は検出されなかった。

新邸2・3・4区から検出された動物遺存体のうち、種が同定された資料は、ウシとウマのみであり、種が特定できなかった資料もこれらの2種のいずれかに属する可能性が極めて高い。属性の詳細

は第2表に記す。

ウシ目 (偶蹄目) *Artiodactyla*
ウシ科 *Cavicornia*
ウシ *Bos taurus domesticus* Gmelin

古代と中世に属する遺存体が検出されたが、いずれも在来和牛の特徴を持つ小型のウシであった。

【古代】

中撫川遺跡1区の古代の遺構や包含層から、右上顎第3後臼歯(No.62)、右上顎第1後臼歯(No.66)、下顎第3後臼歯(No.63)、左中手骨(No.69)が検出された。

【中世】

新邸4区において検出された骨格ブロックの中でウシの遺存体は、左下顎骨(No.45)、右下顎骨(No.57)、左中手骨(No.48.52.18)、右中手骨(No.51)、左脛骨(No.22)、中足骨(No.23)、距骨(No.25)、左上腕骨(No.28)、左橈骨(No.30)、左尺骨(No.31)、肋骨(No.11,32,34)、左大腿骨(No.36)であった。

このブロック以外にも16点のウシ遺存体が中世の遺構や包含層から検出されている(第2表)。

ブロック出土骨格を西中川による在来和牛の研究(1989)と比較すると、No.45、57の下顎骨後臼歯列長は、黒色和種と口之島産和牛の雌程度の大きさで、復元算定した下顎骨最大長(Gonion caudale-Infradentale)が365.00mmと350mmであったことから、以下の様に120cm程度の体高であったことが推定された。

	下顎最大長 Goc-Id(cm)	復元体高 Body height(cm)
中撫川No.45	36.50	123.49
中撫川No.57	35.00	116.39

ウマ目 *Perissodactyla*
ウマ科 *Equidae*
ウマ *Equus caballus* Linnaeus

古代と中世に属する遺存体が検出されたが、いずれも在来馬の特徴を持つ小型のウマであった。

【古代】

中撫川遺跡の古代の溝25より、激しく風化した右中節骨(No.67)が検出された。

【中世】

新邸遺跡4区において検出された骨格ブロックの中でウマの遺存体は、左脛骨(No.1)、距骨(No.12)、右脛骨(No.37)、中足骨(No.40)、中心足根骨(No.42)の計5点で、ウシの11点と比較するとやや少なかった。また、分布も微妙に偏りが見られ、ウシとウマの処理に時間的空間的隔たりがあった可能性が考えられる(第1図)。

イノシシ科 *Suidae*
イノシシ類 *Sus scrofa* subsp. indet.

野生のイノシシとしては亜種として本州、四国、九州に生息するニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax*、南西諸島に生息するリュウキュウイノシシ *S. scrofa riukiuanus* が設定されているが、日本各地でブタと交配し一部は野生化している通称イノブタもみられる。遺跡出土イノシシ類資料について、松本彦七郎、直良信夫は更新世から縄文時代にかけてみられる大形のイノシシをニッポンイノ

シシ *S. nipponicus* およびその系統のミコトイノシシ *S. mikotonis* などと分類したが(松本 1917、1930、直良 1968)、これには反対意見も多く、現在のニホンイノシシと連続的なものであるとする考えも強い(林 1983)。またイノシシは各種ブタと容易に交配することから、ニホンイノシシと類似したブタとの混血ならば当然生体でも骨格でもイノシシかブタか分類することは困難となる。出土資料は破片が多く、いずれも形質的にブタ *S. scrofa domesticus* と断言できる資料は検出できなかった。本報告では、ブタも含むカテゴリーのイノシシ類 *S. s. subsp. indet* として報告する。

中撫川遺跡の古代の溝25から後臼歯(No.64)と右下顎骨臼歯部(No.70)が検出された。出土資料の特徴のみでは、家畜ブタかイノシシか判断は困難であった。

シカ科 Cervidae
ニホンジカ *Cervus nippon* Temminck

ニホンジカは一亜種 *C. n. nippon* にまとめられることもあるが、6つの亜種に分類し、本州産のものをホンシュウジカ *C. n. centralis*、九州、四国産のものをキュウシュウシカ *C. n. nippon* とする分類もある(大泰司 1983)。本報告ではニホンジカ *C. nippon* として記述する。

中撫川遺跡の古代の溝24より比較的小型の個体に由来する上顎第2,3後臼歯(No.68)が検出された。

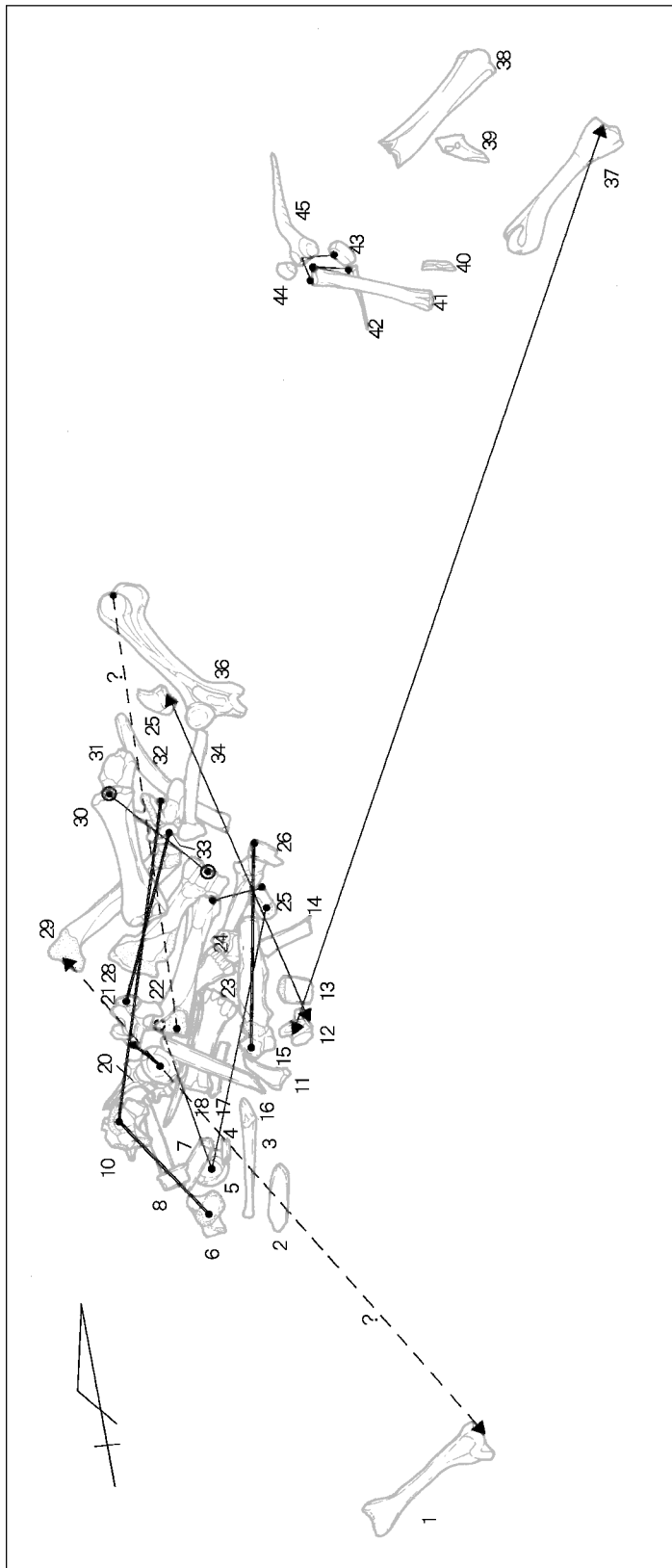
3 新邸・中撫川遺跡における動物処理と埋存環境の様相

それぞれの地点における動物遺存体の様相についてまとめ、遺物化の過程と、文化的脈絡を論ずる。
新邸遺跡

出土した動物遺存体の多くには、解体に際して残されたと考えられる切創が看取された。切創を含め損壊の詳細は第2表「破損」の項目に記載した。記載法は富岡(2003)と同様である。

新邸遺跡4区では、一括性が高かった資料群(写真1、2)について図面を製作し、ウシ・ウマの同一個体・接合関係の推定を実施した(第1図)。これによるとわずかに離れるブロック間であってもウマ後肢12・35・37について接合関係が確認され、短期間にこれらの動物遺存体の散布が起こったことが推定される。これらの動物遺存体の散布は、切創に見られるように人為的営為の影響を受けているものの、関節での接合関係を失った後、堆積したものと考えられる。同一個体や接合関係が推定された資料は、南北方向の20~50cm程度離れて接合する例が多く、四肢骨が流水的作用によって回転しながら移動し、その後堆積土中に埋没したと考えるのが妥当であろう。ただし、骨格の表面の保存は良好で、水による激しい磨耗はみられず、さらに小型の骨格まで検出されていることから、激しい水流による大きな攪乱や、日光や水による風化作用はなかったといえよう。さらに、当時この遺跡の周辺に出現する可能性が高いネズミやイヌ・オオカミといった動物群の噛痕も一切検出されなかった。これらの様子から、ウシ・ウマは、この地点付近で解体処理が行われて数日~1、2年程度の比較的早い段階で土砂に埋もれ、現位置を良好に保ちながら埋存していった可能性がうかがわれる。

一方でこれらの地点のような溝や河川、井戸では、雨ごい等漢神に関わる宗教的儀式が行われた可能性も高い。勿論、家畜を利用した儀式と皮革・食用の利用は相反するものではなく、一つのシステムとして組み上げられていた可能性もある。特に、頭蓋等が失われている状況は、儀礼の場所や頭蓋などを一時保管する地点へ頭蓋類を搬出した可能性をうかがわせる。



● ウシ *Bos*
 ▲ ウマ *Equus*
 — 同一個体が確認された解剖学的
 接合部分: **junction**
 - - - 同一個体の接合部分が推定され
 る場合: **presumative junction**
 図中の番号は、表2の「番号」に対応する。
Numbers indicate 'No.' in Tab.2.



第1図 新野遺跡4区出土骨格ブロック
 Fig.1 Block of bone 4th grid Shin'yashiki site

中撫川遺跡

出土動物遺存体とともに検出した土壌のpH分析を実施し、骨格の埋存状況の評価を実施した。土壌サンプルは、法万寺地点3区溝2南端上層から採集した。これを常温常圧で乾燥させた後、常法に従って測定したところpH6.68の弱酸性であった。これは骨格の保存にはやや適していないが、地下水によって空気が遮断されれば十分に骨格が保存される程度の弱酸性の埋存環境と評価される。さらに、花粉分析等にも適した土壌であると評価された。出土部位は明らかに歯のエナメル質に偏っており、稀に出土した骨格であるウマ中節骨の風化・磨滅が著しい事は、新邸遺跡と異なった様相を示しており、骨の埋存の適、不適のみならず、遺跡の機能差もうかがわせる。

総括

新邸遺跡、中撫川遺跡、いずれの地点も水が豊富に利用できる環境で、わずかな傾斜を持つ地点に動物遺存体の散布が集中していた。これは動物の解体作業を実施するのに適したポイントである。解体とともに生じる多量の血液や肉脂は、解体の道具や作業員、作業地点に付着・飛散する。これらは、多量の水によって洗い流す必要が生じる。さらに皮革や骨格といった道具類の素材となる資源を清掃するのに多量の水が有効である。

ただし、飲料水や清水が必要な作業にとっては、水源にこのような汚水を流すことは許されない行為であるから、流水の上流にこのような作業場所は設定できない。つまり作業場所は集落との位置関係から決定される。川入遺跡は、古代から中世にかけて、水が豊富で排水困難な広大な湿地の一角で、人々がアプローチしやすい自然堤防沿いに立地し、河川流路上集落の下手に位置していたことから、このような解体・処理場として長い間活用されていたのであろう。

謝辞

古代吉備文化財センターの皆様、中でも調査を御担当された岡田博、内藤善史、築地由行、高田恭一郎、小嶋善邦、三宅健夫の各位には、資料の抽出・保存処理に一方ならぬ御協力を賜った。資料の整理・記録にあたっては、谷村彩さんにお手伝いを頂いた。記して深謝申し上げます。

参考文献

- 阿部 永他 1994 『日本の哺乳類』(東海大学出版局)
- 今泉吉典、岡田弥一郎 1983 『学研生物図鑑 動物』(学研)
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』(北隆館)
- 内田 亨他 1972 『谷津・内田 動物分類名辞典』(中山書店)
- 内田 亨 1979 『新編日本動物図鑑』(北隆館)
- 岡田 要(校閲) 今泉吉典(著) 1960 『原色日本哺乳類図鑑』(保育社)
- 岡田 要 内田清之助 内田 亨 1965 『新日本動物図鑑』下(北隆館)
- 金子浩昌 1996 「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 津寺遺跡3 山陽自動車道建設に伴う発掘調査12』(岡山県教育委員会) :pp.282-285
- 金子浩昌 1995 「津寺遺跡出土の動物遺体」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 津寺遺跡2 山陽自動車道建設に伴う発掘調査』(岡山県教育委員会) :pp.597-604
- 久合田 勉 1932 『馬学 外貌篇』(日本中央競馬会)
- 久保和士 1995 「動物遺体の調査結果」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ(大阪市文化財協会) :pp.233-241
- 久保和士 1999 「ウマ・ウシをめぐる祭祀」『動物と人間の考古学』:pp.83-133(真陽社)
- 後藤仁敏、大泰司紀之編 1986 『歯の比較解剖学』(医師薬出版株式会社)
- 富岡直人 1998 「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『岡山城二の丸跡 中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告』(中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会) :pp.136-163
- 富岡直人 1999 「岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体」『岡山県埋蔵文化財調査報告138 加茂政所遺跡・高松原古

才遺跡・立田遺跡』(岡山県教育委員会) :pp.1111-1122

富岡直人、沖田絵麻 2000 「新蔵町3丁目遺跡出土動物遺存体『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書31 新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点』(徳島県教育委員会) :pp.427-438

富岡直人 2001 「上東遺跡出土動物遺存体と骨角製品」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157 下庄遺跡、上東遺跡』(岡山県教育委員会) :pp.24-39

富岡直人 2001 「岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』(岡山県教育委員会) :pp.89-12

富岡直人 2001 「井手天原遺跡出土動物遺存体『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156 岡谷大溝散布地、三須今溝遺跡、三須河原遺跡、三須畠田遺跡、井手見延遺跡、井手天原遺跡—国道429号線改良に伴う発掘調査Ⅱ—』(岡山県教育委員会) :pp.224-237

富岡直人 2003 「津島遺跡出土の動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173 津島遺跡4』(岡山県教育委員会) :pp.581-596

直良信夫 1968 『狩獵』(法政大学出版会)

西中川 駿 1989 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究—特に日本在来種との比較』(昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書)

林田重幸、山内忠平 1954 「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2(2-4):pp.122-126

林田重幸、山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6:146-156

林田重幸 1957 「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28(5):pp.301-306

松本彦七郎 1917 「介塚の猪及鹿に各二型あり」『動物学雑誌』339:pp.19-20

松本彦七郎 1930 「哺乳類及地質学的時代」『陸前國登米郡南方村青島介塚調査報告』(東北帝国大学理学部地質古生物学邦文報告) 19:pp.35-37

桃崎祐輔 1993 「古墳に伴う牛馬供儀の検討」『古文化談叢』31:pp.1-141

Driesch Angela 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harvard University



写真1 新邸遺跡4区出土骨格ブロック全景(東から)
Plate1. Block of bone, 4th grid in Shin'yashiki site (from east)



写真2 新邸遺跡4区出土骨格ブロック近影(集中部:東から)
Plate2. closer view (concentration)

第2表-2 新邸遺跡出土動物遺存体

Tab.2-2 Attribute list of animal remains in Shin'yashiki site

51	⑤	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウシ	中手骨	R	完形	d.p:f	なし?	茶褐色	viv	12057	SD 2656 BD 5180 GL 18505 GLc 18236 LI 1771	注記番号5
36	④	新邸地区	河道	中世	哺乳綱	ウシ	大腿骨	L	完形(大転子一部欠損)	d.p:f	偽切削?(近位端)	茶褐色	viv	45650	GLC 58070 SD 8490 DC 47 88 Bd 9600	52225と同一個体?
38	④	新邸地区	同上	中世	哺乳綱	ウシ	脛骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	cm(Daタイプ骨幹部前面)	茶褐色	viv	30941	Bd 6265 SD 5810	
22	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	脛骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	なし?	茶褐色	viv	29466	SD 5670	52325と同一個体 関節面がクワリアな為 接合していたと考えら れる 36と同一個体?
25	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	距骨	L	完形	f	偽切削(近位部遠位部)	茶褐色	viv	5139	GLI 6585 GLm 5895 Bd 4265	52225と同一個体 関節面がクワリな為接 合していたと考えられ る 36と同一個体?
5	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	中心+第4足根骨	L	完形(一部欠損)	f	なし?	茶褐色	viv	3041	GB 5530	22225と同一個体 関節面がクワリな為接 合していたと考えられ る 36と同一個体?
53	⑥	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウシ	中足骨	I	完形	d.p:f	偽切削(右内側骨幹部)	茶褐色	viv	13998	SD 2348 GLC 20155 BP 4230 BD 4742 GL 20425 LI 20015	
23	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	中足骨	L	完形	d.p:f	偽切削?(左外側遠位部)	茶褐色	viv	17297	Bd 5860 Bp 5045	52225と同一個体 関節面がクワリな為接 合していたと考えられ る 36と同一個体?
19	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	第1肋骨	L	近位端+骨幹部	p:f	sp	茶褐色	viv	1679		
34	③	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	第3肋骨	R	骨幹部	f?	cm(DI aタイプ内側0.5以上長さ約5mm)	茶褐色	viv	3089		
11	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	骨幹部	?	なし?	茶褐色	viv	3341		
32	③	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウシ	肋骨	L	骨幹部	?	なし?	茶褐色	viv	5087		
54	⑤	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部+近位端	f	なし?	茶褐色	viv 表面磨耗	3756		
55	⑤	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウシ	肋骨	R	骨幹部	?	不明	茶褐色	viv	3612		
29	⑧	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウマ	大腿骨	L	近位端+骨幹部	p:f	なし?	茶褐色	viv	26736	SD 3195 Bp 8960 BTr 6450	1と同一個体?
1	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウマ	脛骨	L	完形	p.d:f	なし?	茶褐色	viv	30955	GL 81480 LI 28670 Bp 7415 Bd: (865) Dd 5690 Sd 3145	29と同一個体?
37	④	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウマ	脛骨	R	完形	d.p:f	なし	茶褐色	viv	29475	GL 81565 Bd 6010 SD 8165 Dd 5740	1236と同一個体
12	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	ウマ	距骨	R	完形	f	偽切削	茶褐色	viv	4093	GB 5072 Bf 4040 GH 4906	3537と同一個体
35	④	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウマ	踵骨	R	下位(遠位端)+骨幹部	f?	不明	茶褐色	viv	3640	GB 4325 GW 4710	1237と同一個体
42	④	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウマ	中心足根骨	L	完形	p:f	なし	茶褐色	viv	20333	GB 5080	4041と接合 重量は3041,42を合わせたもの
41	④	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウマ	中足骨IV	L	完形	p:f	なし	茶褐色	viv	20333		4042と接合 重量は3041,42を合わせたもの
61	⑧	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウマ	中足骨III	L	完形	d.p:f	cm(Caタイプ骨幹部前位長20mm 264, Caタイプ骨幹部前位長1600 幅60) 表面剥落	茶褐色	viv	13519	SD 2237 GL 23905 LE 3225 BP 4024 BD 8880	注記番号88
40	④	新邸地区	"	中世	哺乳綱	ウマ	中足骨III	L	完形	d.p:f	偽切削?(前面)	茶褐色	viv	20333	GL 23500 Bp 4025 Bd 3695 CD 2550	41,42と接合 重量は3041,42を合わせたもの
7	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	胸椎	M	棘突起	f	なし?	茶褐色	viv	1425		N8 と接合
8	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	胸椎	M	棘突起	f	なし?	茶褐色	viv	1714		N7 と接合
13	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	胸椎	M	棘突起	?	なし?	茶褐色	viv	1048		
26	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	胸椎	M	棘突起	?	なし?	茶褐色	viv	798		1526 1と同一個体?
2	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	?	骨幹部	?	不明	茶褐色	viv	1950		
4	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	?	骨幹部	?	sp?	茶褐色	viv	578		
16	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色	viv	2353		
17	②	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	?	骨幹部	?	なし?	茶褐色	viv	1520		
9	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	L	骨幹部	?	偽切削(骨幹部)	茶褐色	viv	3607		
3	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	R	近位端+骨幹部	p:f	なし?	茶褐色	viv	2812		
14	①	新邸地区	"	中世(鎌倉時代)	哺乳綱	目不明(中型~大型)	肋骨	R	骨幹部	?	sp	茶褐色	viv	2938		
38	④	新邸地区	"	中世	哺乳綱	目不明(中型~大型)	不明	?	骨幹部	?	不明	茶褐色	viv	724		

() 内は復元値
DNoiはDriesch(1976)による値
vivはヒアサイトの析出
指標データは富岡(2003)と同様

第3表 中撫川遺跡出土動物遺存体

Tab.3 Attribute list of animal remains in the Nakanatsukawa site

番号 No.	箱番	調査区	遺構	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長	破損	風化	重量	計測値	備考	色調
70	⑥	中撫川Ⅰ区	溝25	古代	哺乳綱	イノシシ類	下顎骨	R	第2後臼歯○第3後臼歯○	第2後臼歯小窩独立第3後臼歯第1列まで咬耗開始	なし?	viv	2720	ME 1232 M61.3118 B 1570 R 1472 B1134		茶褐色
64	⑥	中撫川Ⅱ区	溝25	古代	哺乳綱	イノシシ類	後臼歯	?	歯冠部破片	咬耗開始	不明	viv	115	計測不能	注記番号 975	茶褐色
62	⑥	中撫川Ⅰ区	包含層	古代	哺乳綱	ウシ	上顎第3後臼歯	R	歯冠部エナメル質部分	咬耗開始	不明	viv	813	計測不能	注記番号 130	茶褐色
65	⑥	中撫川Ⅰ区	包含層	古代	哺乳綱	ウシ	上顎第3後臼歯	R	歯冠部エナメル質部分	エナメル質咬耗開始	なし?	viv	3082	L 2458 B 2374	注記番号 131	茶褐色
66	⑥	中撫川Ⅰ区	土器集中部	古代	哺乳綱	ウシ	上顎第1後臼歯	R	歯冠部エナメル質部分	小窩連結 平坦化未了	なし?	viv	1922	L 8054 咬合面長 3063 咬合面幅 2202 B 2346	注記番号 230	茶褐色
63	⑥	中撫川Ⅰ区	包含層	古代	哺乳綱	ウシ	下顎骨	L	第2後臼歯 前位(歯冠部エナメル質部)	咬耗開始	不明	viv	1236	計測不能	注記番号 225	茶褐色
69	⑥	中撫川Ⅰ区	溝25上層	古代	哺乳綱	ウシ	中手骨	L	完形	d,p,f	不明	viv	11330	GL 18670 GLc 18025 GLl 17885 SD 2718 DP 4980 BD 5248		茶褐色
67	⑥	中撫川Ⅰ区	溝25南半側溝部分	古代	哺乳綱	ウマ	中節骨	R	完形(遠位端近位端一部欠損)	f	なし?	viv 風化 程度強い	2182	計測不能		茶褐色
68	⑥	中撫川Ⅱ区	溝25	古代	哺乳綱	イノシシ類	上顎骨	R	第2後臼歯○第3後臼歯○	第2後臼歯第3後臼歯小窩連結	なし?	viv	969	ME L1695 B 1482 M6 L1860 B 1339 ME-M6 3560		茶褐色

() 内は測定値
DNoはDriesch(1976)による値
vivはビヒアナイトの析出



写真3 中撫川遺跡1区溝25遺物出土状態(矢印イノシシ類下顎骨; 東から)

Plate3. Artifacts and Ecofacts in Nakanatsukawa site (arrow indicates Mandible of *Sus scrofa*, from east)



写真4 中撫川遺跡1区溝25イノシシ下顎骨出土状態(東から)

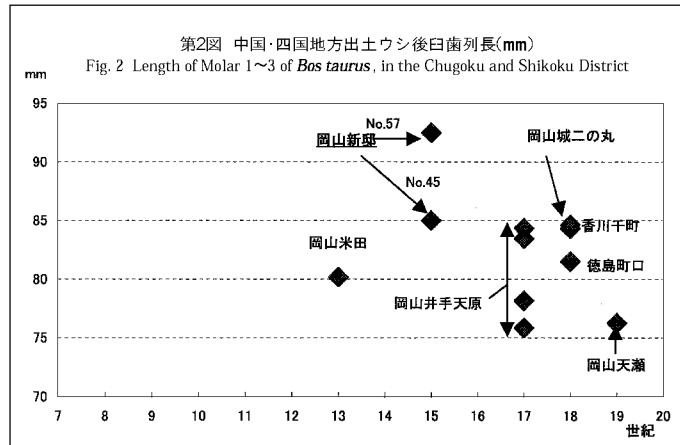
Plate4. Closer view of Mandible of *Sus scrofa*, in the Nakanatsukawa site

第4表 新邸・中撫川遺跡出土ウシ骨格による体高復元（西中川1989による）
 Tab. 4 Reconstructed Body Length of Bos from Shin'yashiki site and Nakanatsukawa site

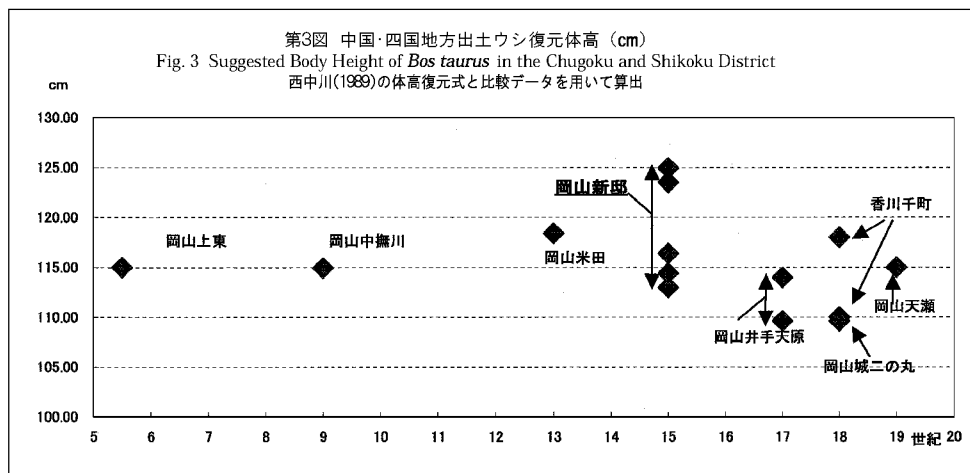
	時代Age	測定点 Measurement point	測定値 Measured length(cm)	復元体高 Body height(cm)	備考 Note
新邸No.45	中世 Middle	下顎骨 最大長 Goc-Id(cm)	36.50	123.49	測定値は復元値
新邸No.57	中世 Middle	下顎骨 最大長 Goc-Id(cm)	35.00	116.39	測定値は復元値
新邸No.30	中世 Middle	橈骨 最大長 GL of Rad	26.64	114.39	
新邸No.48	中世 Middle	中手骨 最大長 GL of MC	20.11	124.94	
新邸No.53	中世 Middle	中足骨 最大長 GL of Mt	20.43	112.96	
中撫川No.69	古代 Middle	中手骨 最大長 GL of MC	18.67	114.90	

第5表 新邸遺跡出土ウマ骨格による体高復元（西中川1989による）
 Tab. 5 Reconstructed Body Length of Equus from Shin'yashiki site

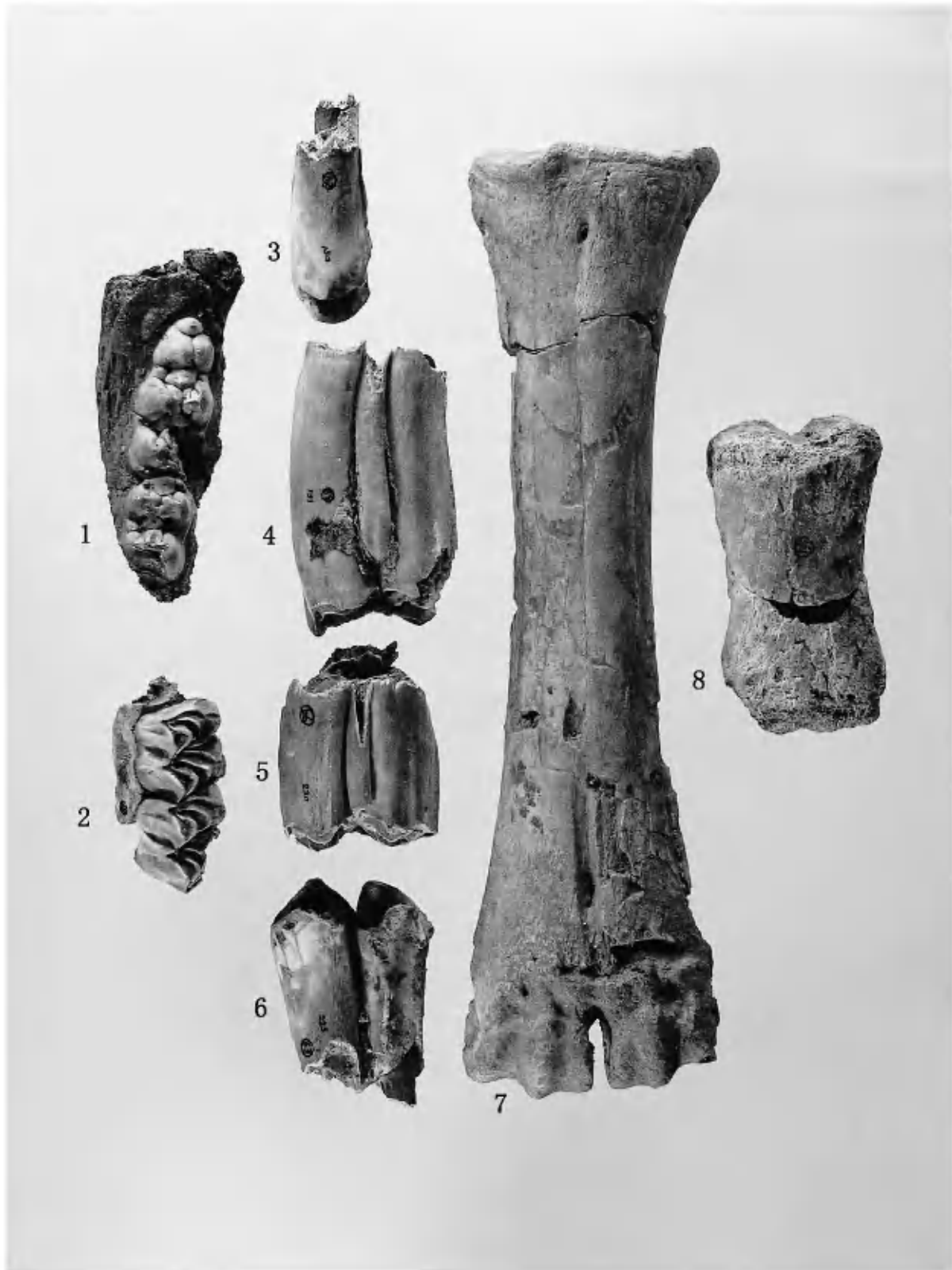
	時代Age	測定点 Measurement point	測定値 Measured length(cm)	復元体高 Body height(cm)	備考 Note
新邸No.1	中世 Middle	脛骨最大長 GL of Tib	31.48	123.31	
新邸No.37	中世 Middle	脛骨最大長 GL of Tib	31.57	123.66	
新邸No.61	中世 Middle	中足骨 最大 長 GL of Mt	23.91	118.16	
新邸No.40	中世 Middle	中足骨 最大 長 GL of Mt	23.50	116.14	



世紀	M1-3	所 属	備 考
13	80.19	米田遺跡	98-39-86 年代誤差大きい
17	78.15	井手天原 6-1	
17	83.48	井手天原 22-1	
17	84.36	井手天原 12付近 3	
17	75.84	井手天原 10-1	
19	76.25	天瀬遺跡	
18	81.5	徳島県町口	年代誤差大きい
13	85.02	新邸遺跡	年代誤差大きい
13	92.48	新邸遺跡	年代誤差大きい
18	84.65	岡山城二の丸	年代誤差大きい
18	84.33	香川県千町遺跡	



世紀	体高	測定値	部位	所 属	備 考
5~6	115.00	73.1	L.HumBd	上東遺跡	見島牛測定値から推測
13	118.39	412.3	B-P	米田遺跡	98-39-86 年代誤差大きい
17	113.96	18.535	L.McGL	井手天原 12付近 2	
17	109.62	19.852	R.MtGL	井手天原 12付近 1	
19	115.00	72.04	L.HumBd	天瀬遺跡	
13	123.49	36.5		新邸遺跡	年代誤差大きい
13	116.39	35		新邸遺跡	年代誤差大きい
13	114.39	26.64		新邸遺跡	年代誤差大きい
13	124.94	20.11		新邸遺跡	年代誤差大きい
13	112.96	20.43		新邸遺跡	年代誤差大きい
9?	114.90	18.67		中撫川遺跡	年代誤差大きい
18	110.00	84.65	Mand.Dno.7	岡山城二の丸	口之島雌測定値から推測
18	109.60	84.33	HumSD	香川千町遺跡	口之島雌測定値から推測
18	118.00	31.44-33.42	HumSD	香川千町遺跡	



第1図版 中撫川遺跡出土動物遺存体 Animal remains from the Nakanatsukawa site (Scale : 80%)
 1. イノシシ *Sus scrofa* subsp. Indet. (下顎骨 R Mandible) 2. ニホンジカ *Cervus nippon* (上顎骨 R Maxilla) 3-7. ウシ *Bos taurus domesticus* 3-5. 上顎骨 R Maxilla (3. 第3後臼歯 M3 4. 第3後臼歯 M3 5. 第1後臼歯 M1) 6. 下顎骨 L Mandible (第3後臼歯 M3) 7. 中手骨 L Metacarpal 8. ウマ *Equus caballus* (中節骨 R Middle phalanx)



第2図版 新邸遺跡出土動物遺存体 ウシ *Bos taurus domesticus* from Shin'yashiki site

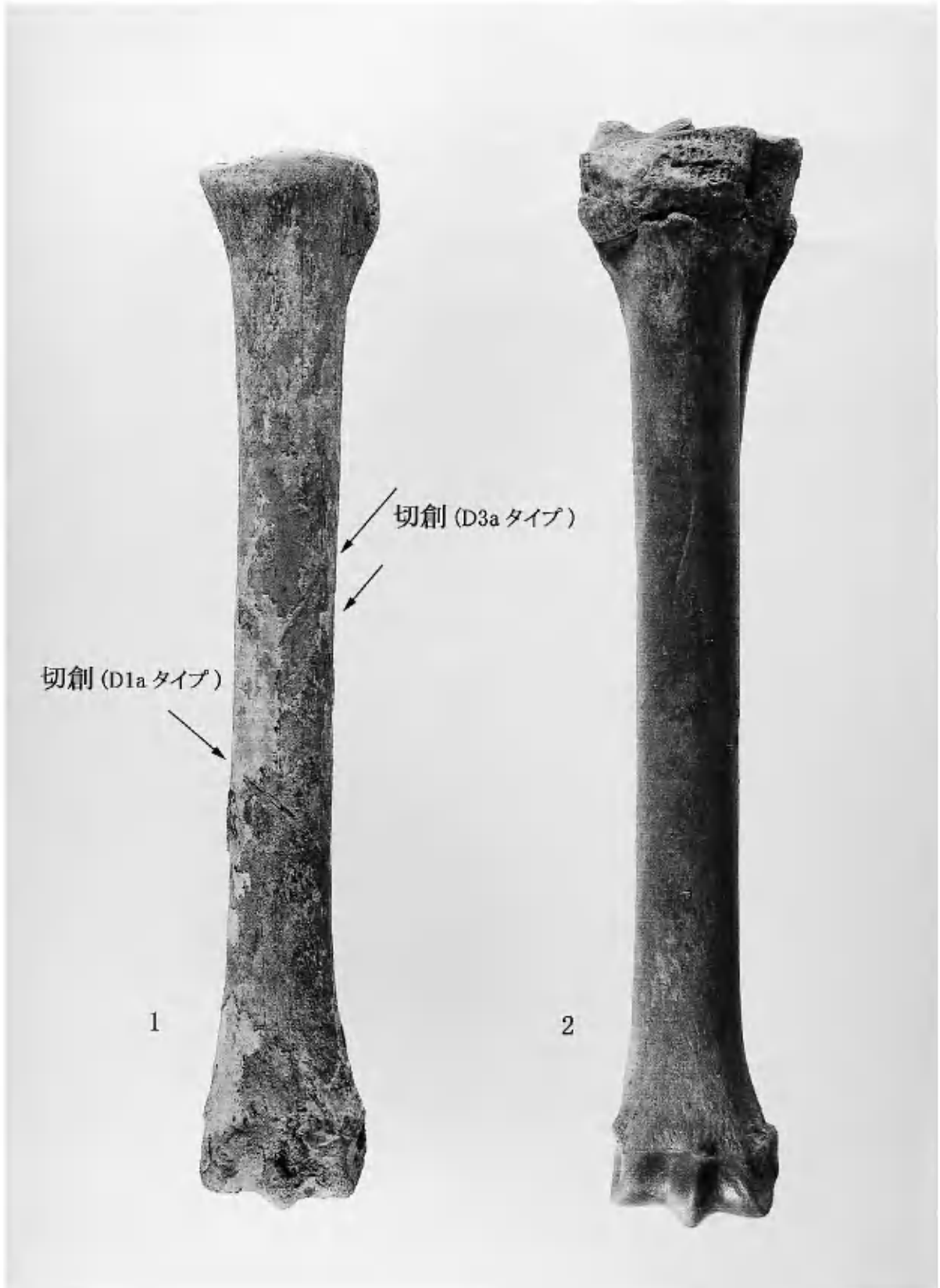
a (Scale : 35%) 1. 下顎骨 L Mandible

b (Scale : 36%) 1. 第6頸椎 6th cervical vertebrae 2. 第1胸椎 1st thoracic vertebrae 3. 第3肋骨 3rd rib 4. 脛骨 L Tibia 5. 肩甲骨 R Scapula



第3図版 新邸遺跡出土動物遺存体 ウマ *Equus caballus* from Shin'yashiki site (Scale : 43%)

1. 大腿骨 L Femur 2. 脛骨 L Tibia 3. 脛骨 R Tibia 4. 距骨 R Talus



第4図版 新邸遺跡出土動物遺存体 ウマ *Equus caballus* from Shin'yashiki site (Scale : 65%)
1. 第3中足骨 L 3rd Metacarpal 2. 第3中足骨 3rd Metatarsal、第4中足骨 4th Metatarsal、中心足根骨 L Central tarsal bone

1 発掘調査実施
遺跡の位置
(矢印: 鬼城山から)



2 新邸遺跡 3区
発掘前 (南から)



3 新邸貝塚の現状
(西から)





1 新邸遺跡1区
G2発掘調査状況
(西から)



2 新邸遺跡2区
G3北壁土層断面
(南から)



3 新邸遺跡3区
から1・2区を望む
(南から)

1 新邸遺跡3区
発掘調査風景
(南から)



2 新邸遺跡3区
獣骨出土状態
(北から)



3 新邸遺跡3区
獣骨(ウシ)顎骨
出土状態
(東から)





1 新邸遺跡3区
完掘状況
(北から)



2 新邸遺跡4区
発掘作業風景
(南東から)



3 新邸遺跡4区
発掘作業風景
(北から)

- 1 新邸遺跡4区
獣骨(ウシ・ウマ)
出土状態
(北から)



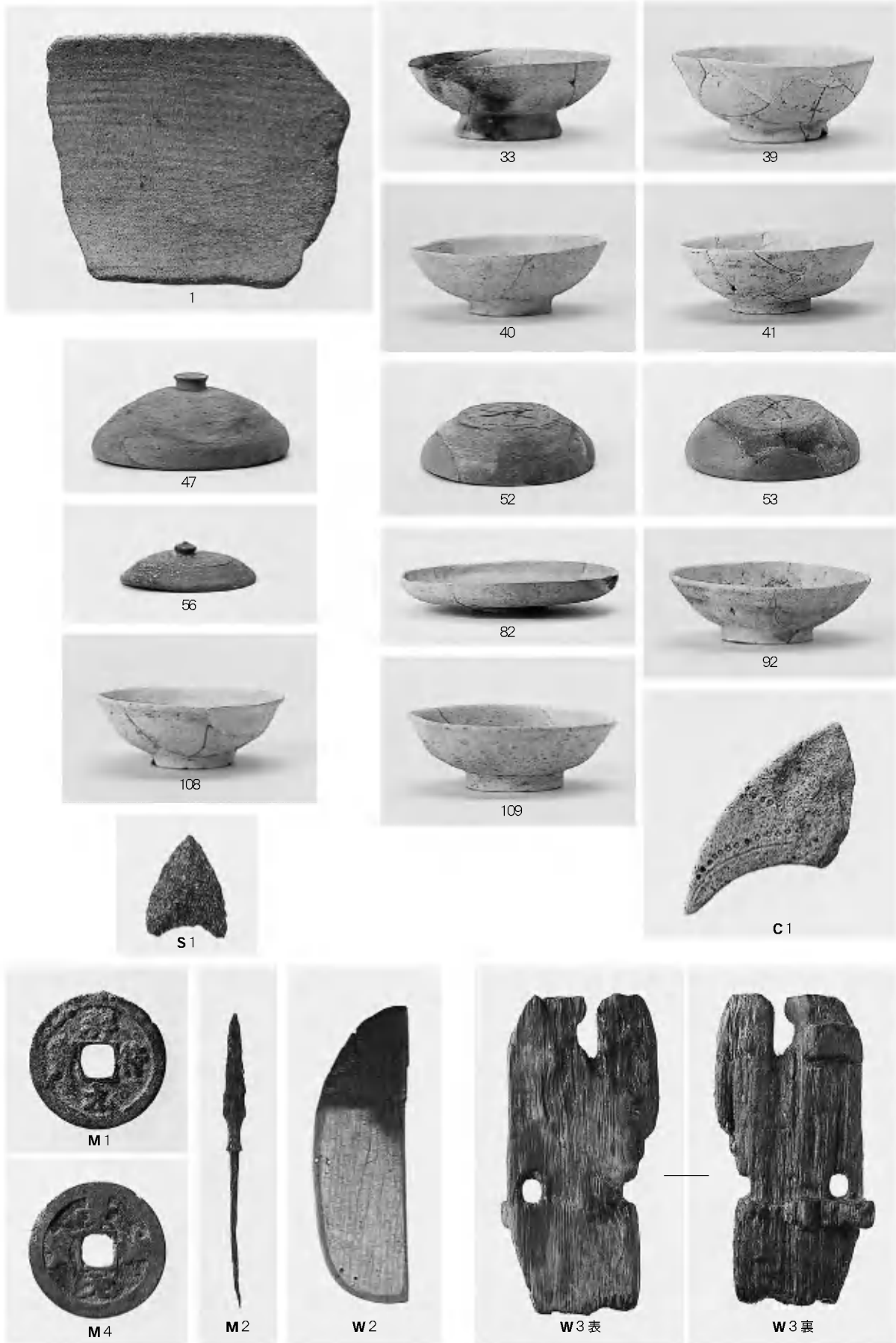
- 2 獣骨(ウシ・ウマ)出土状態
(北から)



- 3 新邸遺跡4区
河道内下駄
出土状態
(北から)

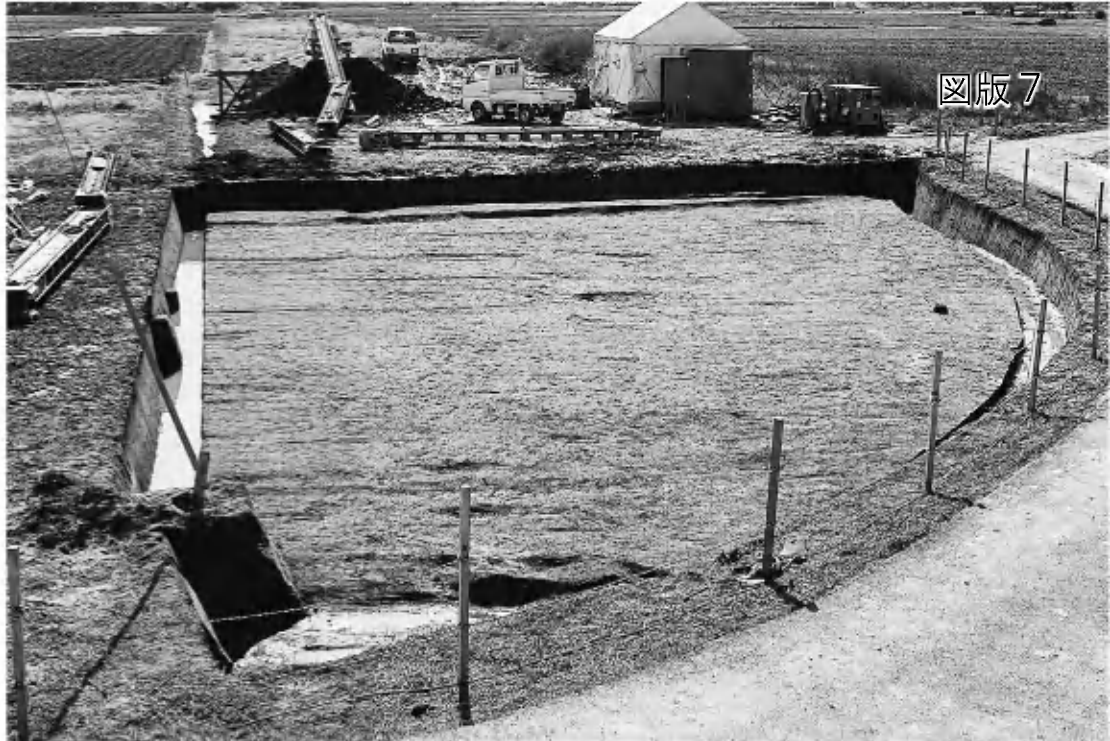


図版6



新邸遺跡出土遺物（縄文土器・土師器ほか）

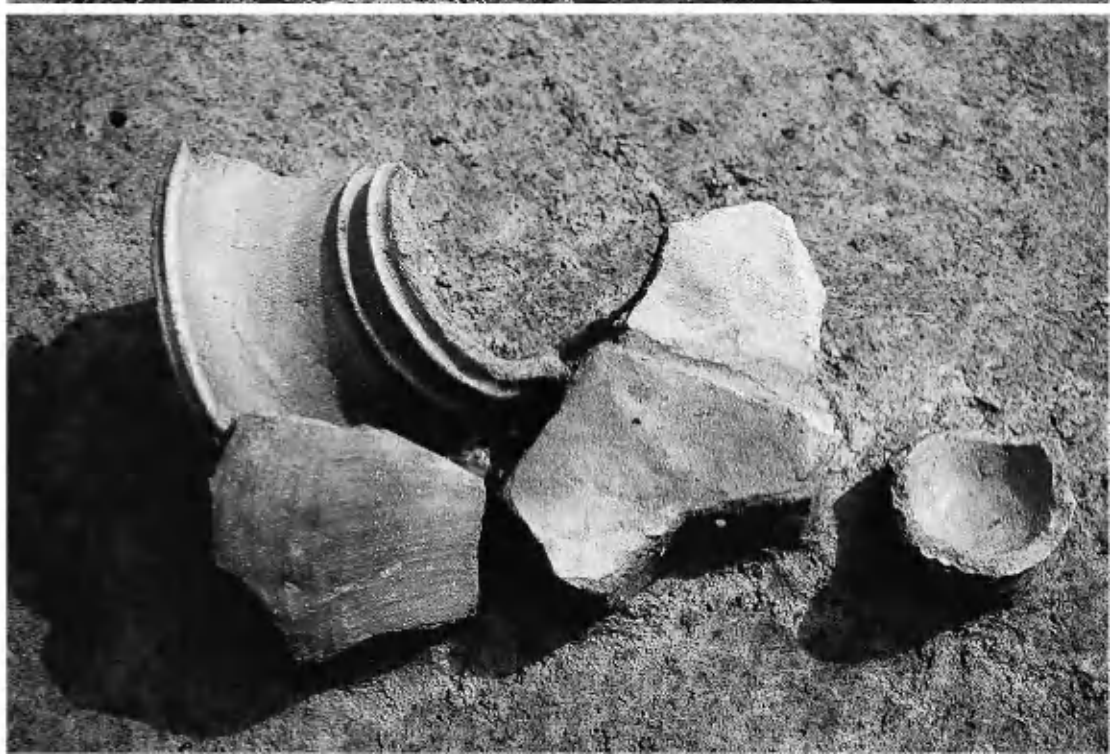
1 郷ノ溝遺跡1区
(北から)



2 郷ノ溝遺跡3区
溝2 (北東から)



3 郷ノ溝遺跡3区
溝2下層弥生土器
出土状態 (北から)





1 郷ノ溝遺跡3区
溝3完掘状況
(南から)



2 郷ノ溝遺跡3区
溝2・3土層断面
(西から)



3 郷ノ溝遺跡3区
弥生～古墳時代溝群
(南から)

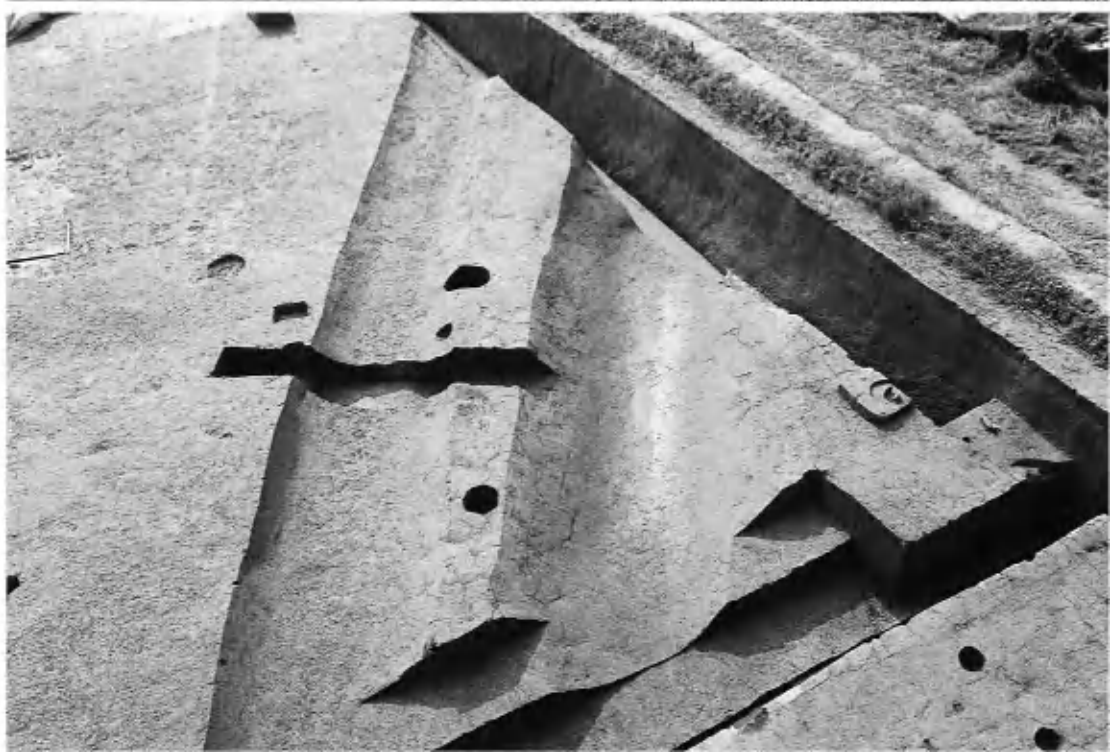
1 郷ノ溝遺跡3区
溝4完掘状況
(南から)



2 郷ノ溝遺跡3区
溝4弥生土器
出土状況
(南西から)



3 郷ノ溝遺跡3区
溝4・8
(北から)





1 郷ノ溝遺跡3区
中央部東西土層断面
(西から)



2 郷ノ溝遺跡3区
古墳時代遺構
検出作業
(北から)



3 郷ノ溝遺跡3区
弥生～古墳時代の
溝群(南から)

1 郷ノ溝遺跡3区
溝6発掘作業風景
(北から)



2 郷ノ溝遺跡3区
溝6北端部土器
出土状態(北から)



3 郷ノ溝遺跡3区
溝6土器出土
状態(南から)





1 郷ノ溝遺跡3区
溝5土器溜まり
(北から)



2 郷ノ溝遺跡3区
溝7土層断面
(南から)

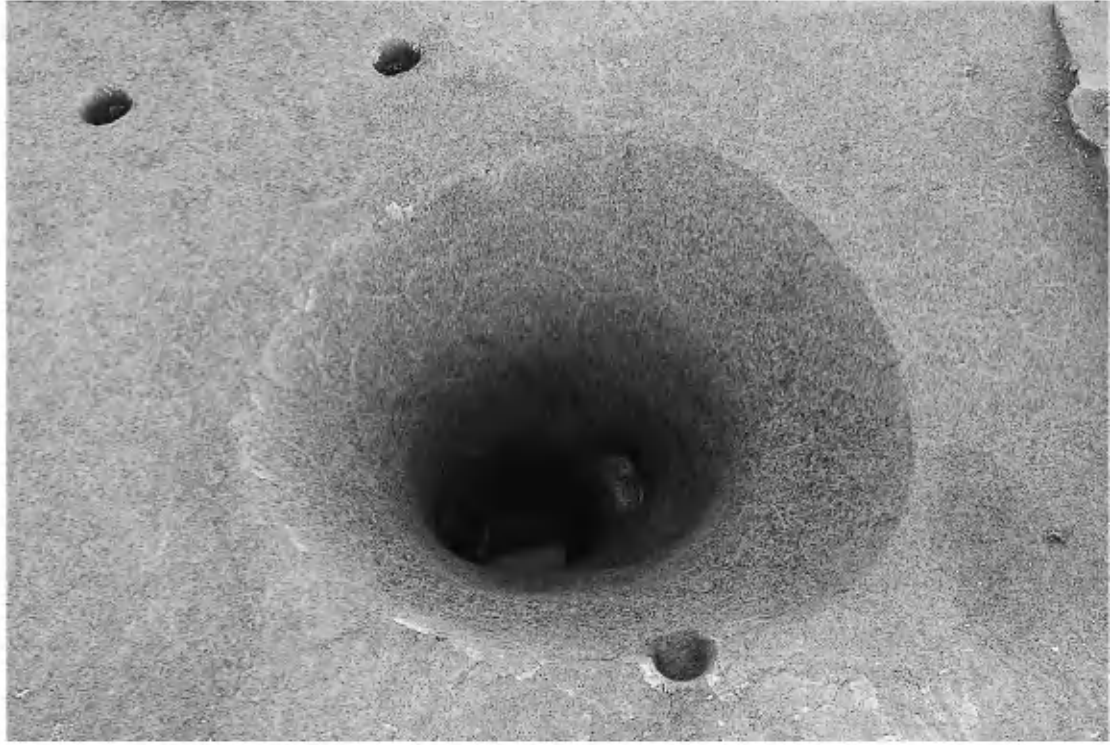


3 郷ノ溝遺跡3区
溝7 (北から)

1 郷ノ溝遺跡3区
古墳時代溝群
(北から)

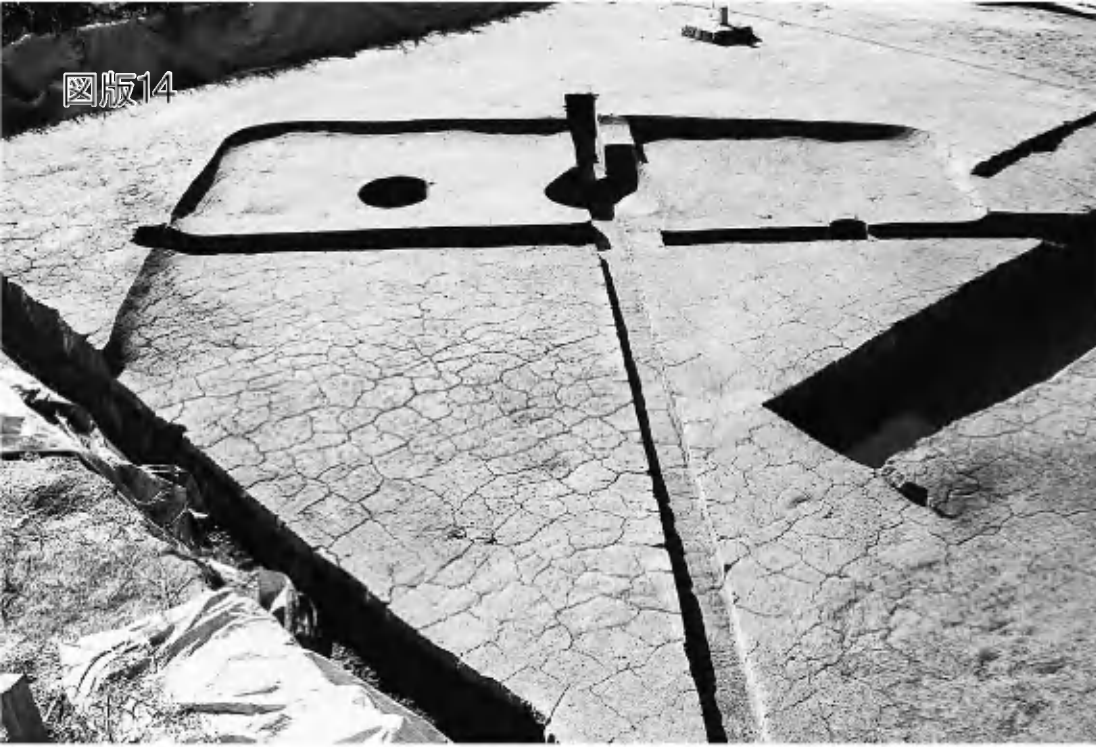


2 郷ノ溝遺跡3区
井戸1 (北西から)



3 郷ノ溝遺跡3区
南半古墳時代の
遺構群 (北から)





1 郷ノ溝遺跡3区
竪穴住居1
(南東から)



2 郷ノ溝遺跡3区
竪穴住居2検出状況
(南東から)



3 郷ノ溝遺跡3区
溝9周辺発掘調査風景
(南東から)

1 郷ノ溝遺跡3区
溝9完掘状況
(南東から)



2 郷ノ溝遺跡1区
東壁土層断面
(南から)



3 郷ノ溝遺跡2区
たわみ1・溝11
(東から)

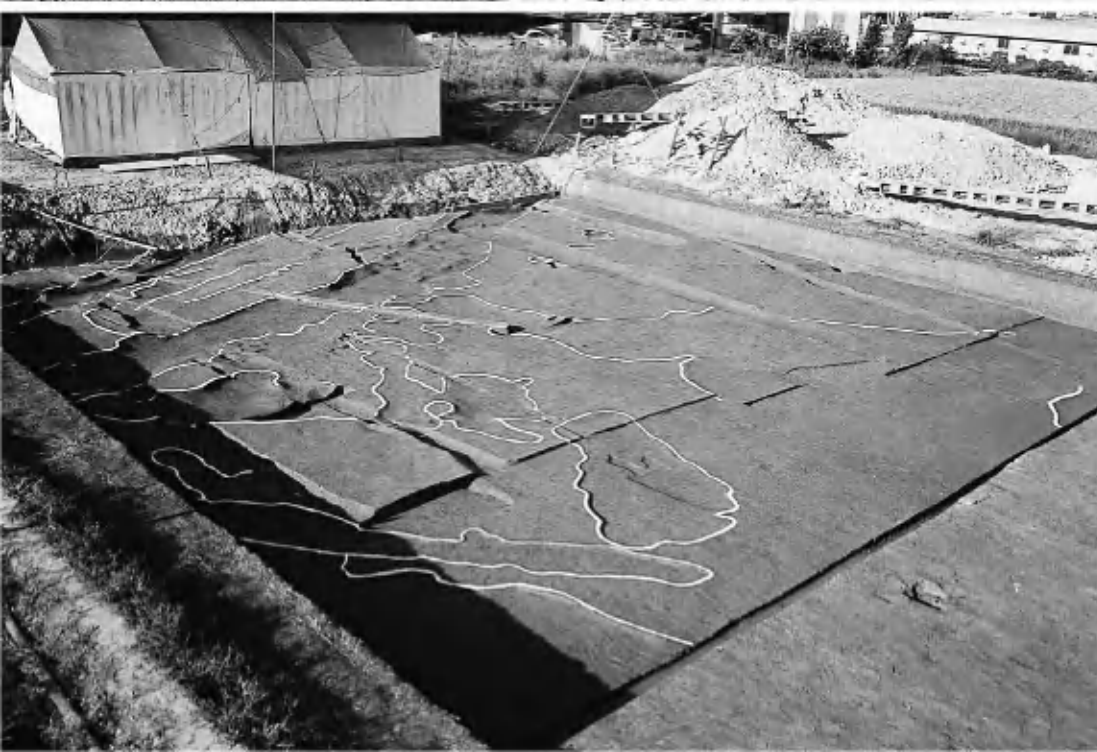




1 郷ノ溝遺跡2区
溝11~13
(東から)

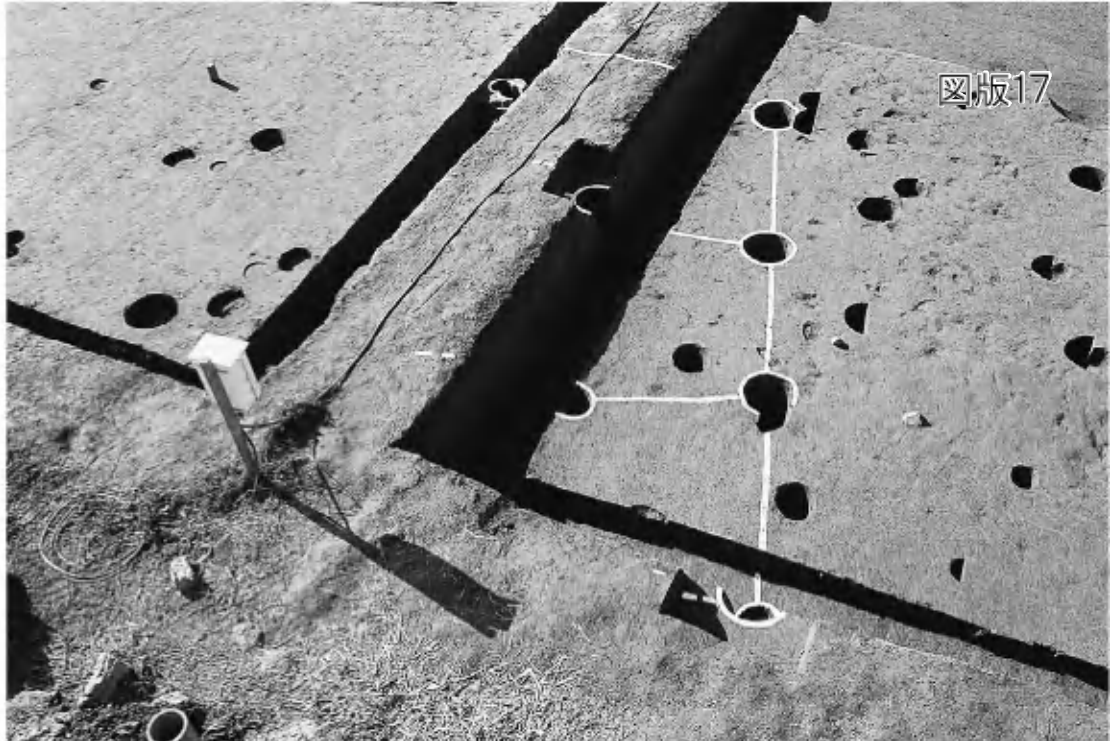


2 郷ノ溝遺跡2区
溝13・19・21
(南から)



3 郷ノ溝遺跡2区
溝11・12周辺たわみ
(南西から)

1 郷ノ溝遺跡2区
柱列1（東から）



2 郷ノ溝遺跡2区
溝16（北から）



3 郷ノ溝遺跡2区
水田畦畔
（南から）





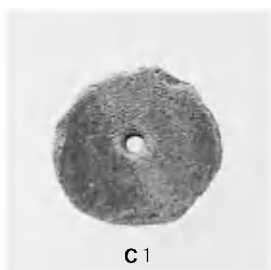
1 郷ノ溝遺跡3区
溝26 (東から)



2 郷ノ溝遺跡3区
溝29・30
(南から)



3 郷ノ溝遺跡3区
低位部 (北から)



郷ノ溝遺跡出土遺物（弥生土器・土師器・須恵器ほか）



1 仏生田遺跡1区
発掘調査風景
(東から)



2 仏生田遺跡1区
溝6・7付近
発掘作業風景
(北から)



3 仏生田遺跡1区
溝4発掘作業風景
(北から)

1 仏生田遺跡1区
溝5発掘作業風景
(北から)



2 仏生田遺跡1区
溝5土器出土状態
清掃作業
(北から)



3 仏生田遺跡1区
溝5土器集中
出土部分
(北から)





1 仏生田遺跡1区
溝2・4・5
(北東から)



2 仏生田遺跡1区
溝2・4～7
(北東から)



3 仏生田遺跡1区
遺構完掘状況
(北から)

1 仏生田遺跡1区
溝5 (北東から)



2 仏生田遺跡1区
溝14 (北東から)



3 仏生田遺跡1区
井戸1 (西から)





1 仏生田遺跡1区E20
付近発掘作業風景
(北から)



2 仏生田遺跡1区
溝8 (北から)



3 仏生田遺跡2-D区
北壁土層断面
(東から)

1 仏生田遺跡2区
全景（南から）



2 仏生田遺跡2区
発掘調査風景
（北から）



3 仏生田遺跡2-D区
北壁土層断面
（南東から）





1 仏生田遺跡2-E区
遺構検出状況
(北から)



2 仏生田遺跡2-E区
土壙3(南から)



3 仏生田遺跡2-F区
土層断面
(北から)

1 仏生田遺跡3区
北区（南から）



2 仏生田遺跡3区
トレンチ（南から）



3 仏生田遺跡3区
T5南壁（北から）

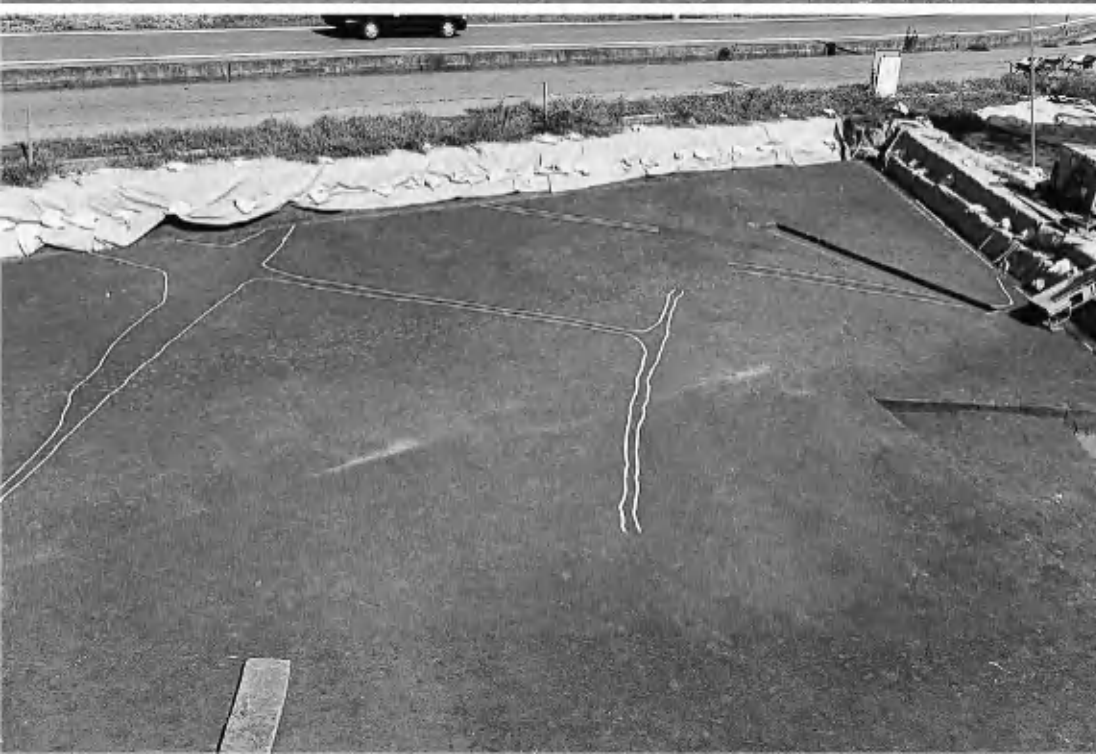




1 仏生田遺跡5区
溝21・22
(南から)



2 仏生田遺跡5区
古代水田
(西から)



3 仏生田遺跡5区
古代水田下層
(西から)

1 仏生田遺跡5区
土壌5・6
(南から)



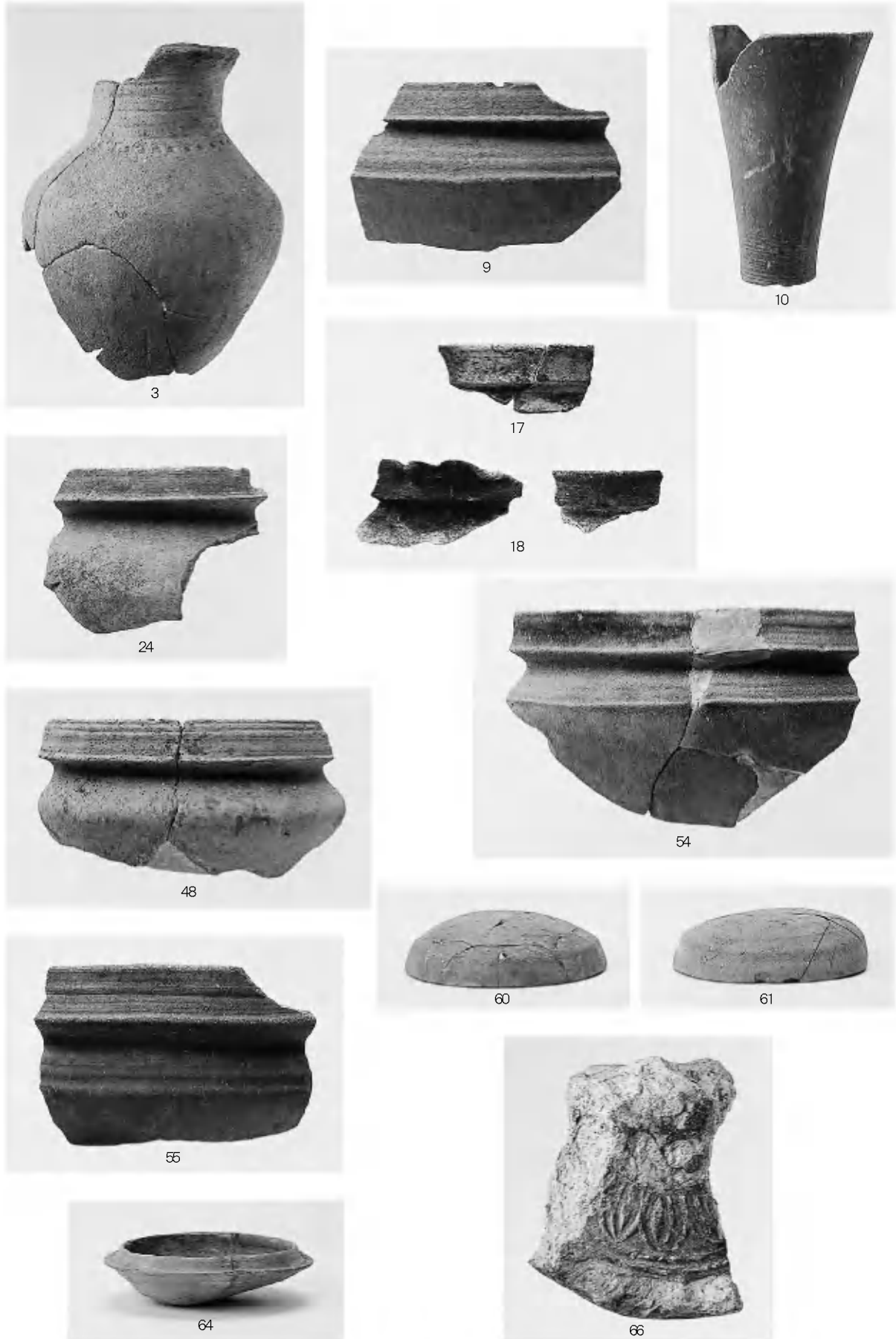
2 仏生田遺跡5区
土壌8 (南から)



3 仏生田遺跡5区
中世水田耕作痕
(西から)



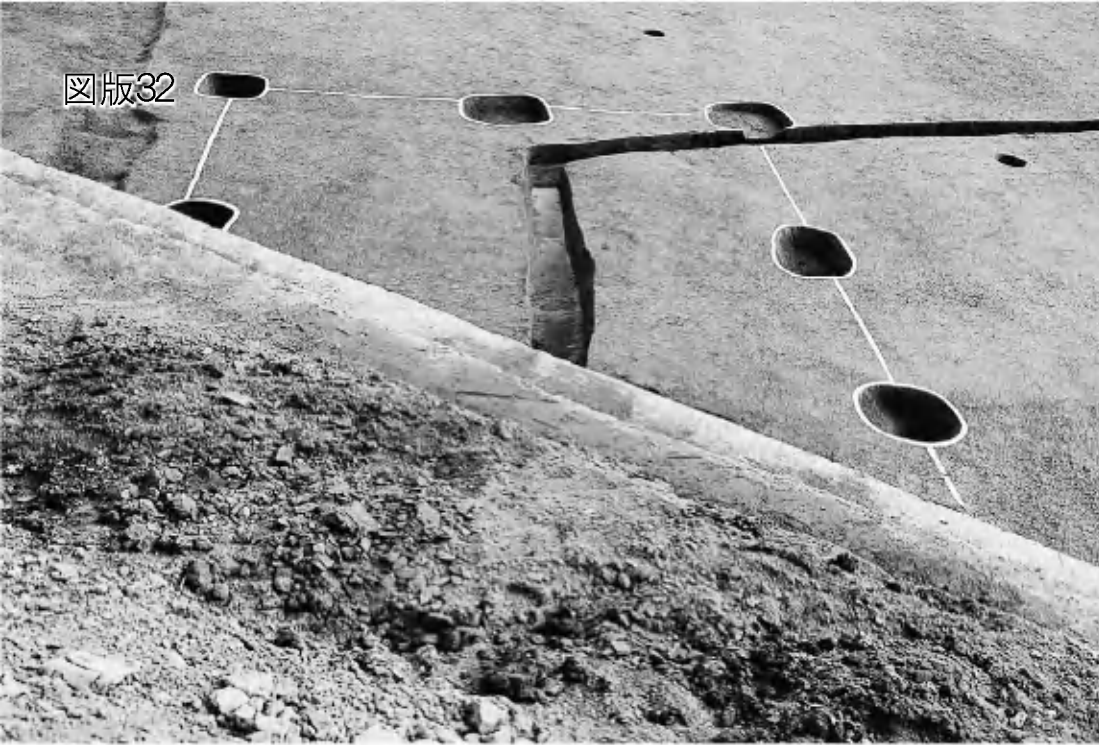
図版30



仏生田遺跡1区出土遺物(1) 弥生土器・須恵器ほか



仏生田遺跡 1区・2区・5区出土遺物(2) 土師器・石製品ほか



1 掛無堂遺跡
掘立柱建物 1
(北から)



2 掛無堂遺跡
掘立柱建物 2
(北から)



3 掛無堂遺跡
掘立柱建物群
(北から)

1 掛無堂遺跡
護岸断面
(北から)



2 掛無堂遺跡護岸
盤出土状態
(北から)



3 掛無堂遺跡護岸
槽、曲物出土状態
(西から)

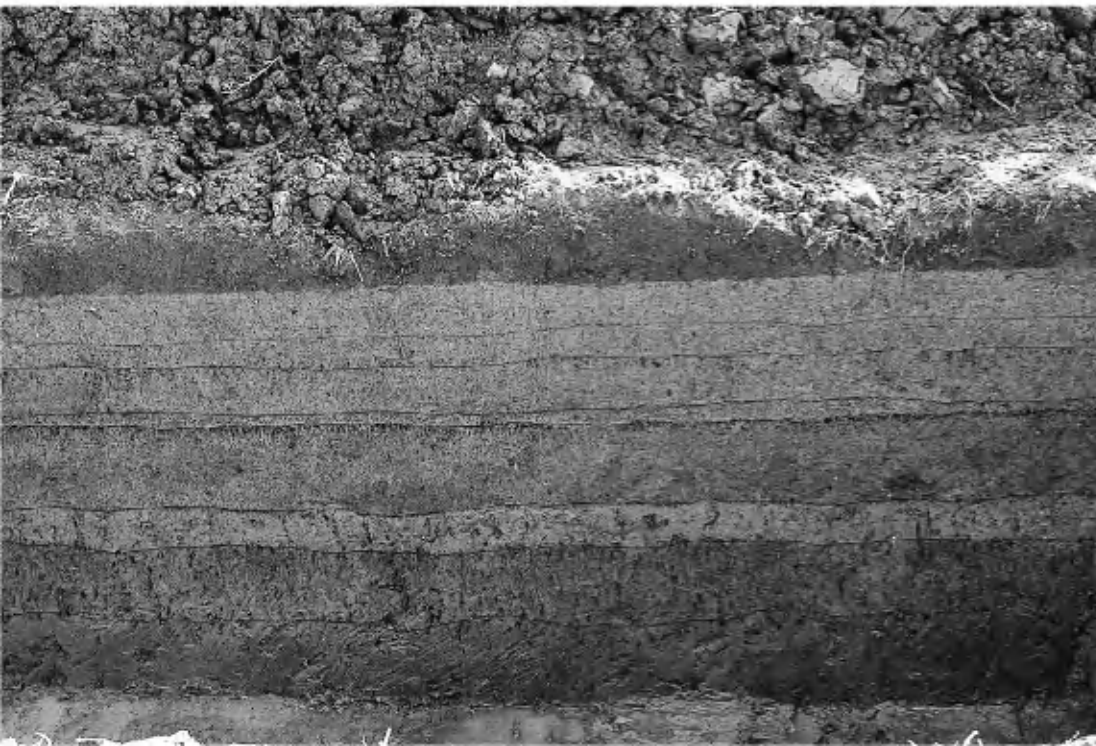




1 掛無堂遺跡
護岸検出状態
(北西から)



2 掛無堂遺跡
南壁断面
(北西から)



3 掛無堂遺跡
トレンチ1南壁断面
(北から)

1 掛無堂遺跡遠景
(北上空から)



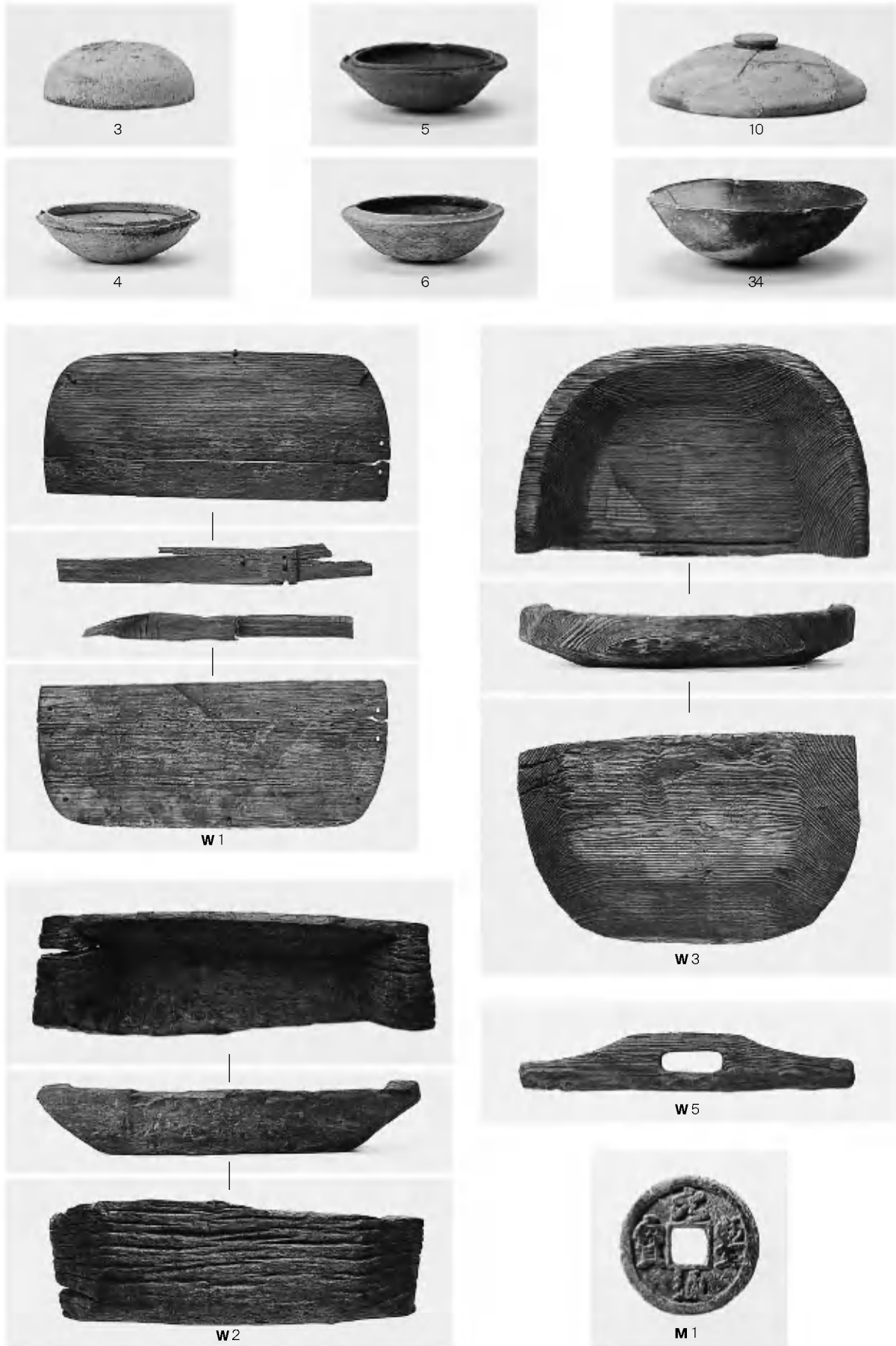
2 掛無堂遺跡
空中写真



3 掛無堂遺跡
現地説明会風景
(北から)



图版36



掛無堂遺跡出土遺物

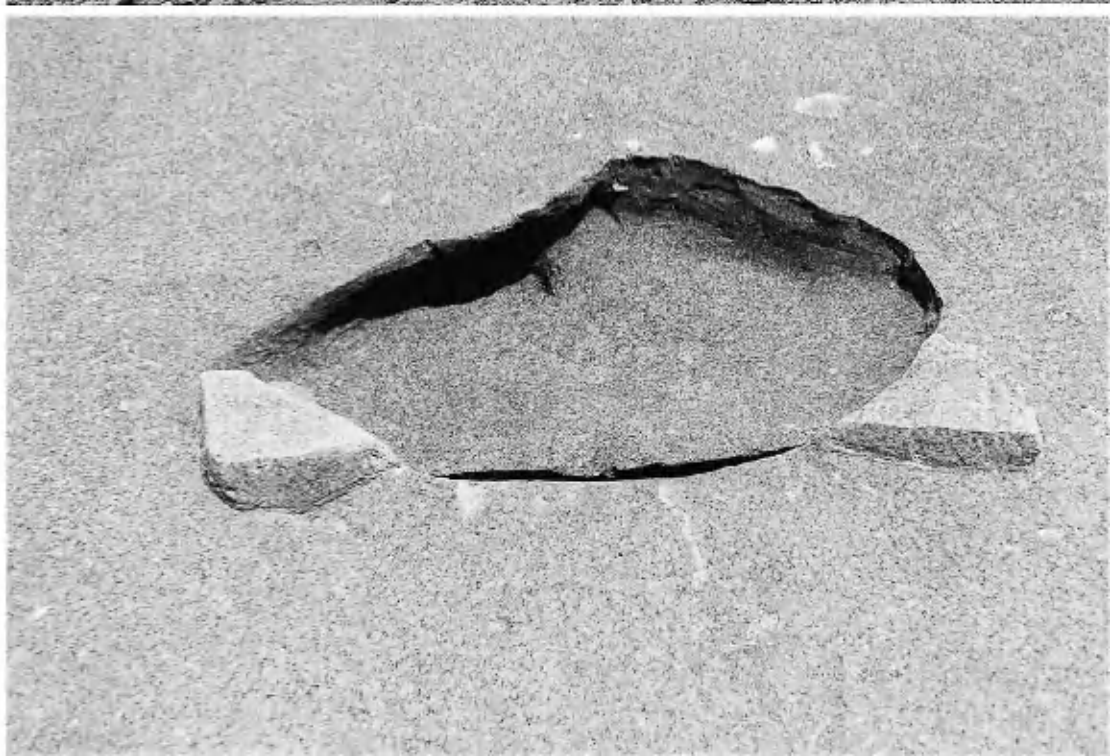
1 川入遺跡1区
トレンチ南壁断面
(北から)



2 川入遺跡2区
遺構全景
(西から)



3 川入遺跡2区
土壇1
(南西から)





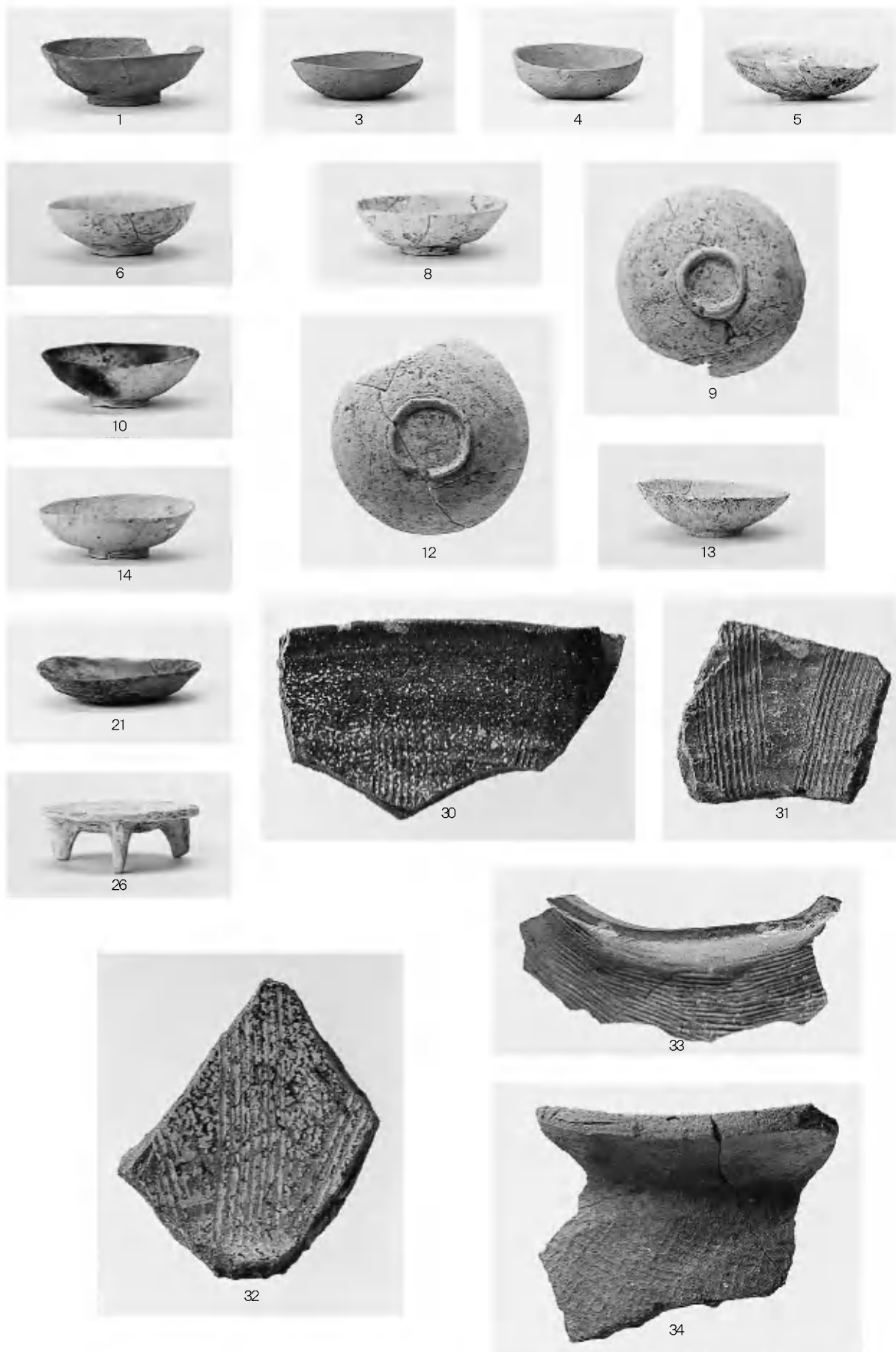
1 川入遺跡 3区
トレンチ断面
(北西から)



2 川入遺跡 4区
溝 1 調査風景
(東から)



3 川入遺跡 4区
溝 1 (西から)



川入遺跡出土遺物



1 中撫川遺跡
調査着手前全景
(北から)



2 中撫川遺跡
2・3区調査前
(南から)



3 中撫川遺跡1区
弥生時代発掘作業風景
(北から)

1 中撫川遺跡1区
溝5・7ほか
(南から)



2 中撫川遺跡1区
溝調査風景
(南から)



3 中撫川遺跡1区
溝1ほか
(南から)





1 中撫川遺跡1区
溝群完掘状況
(北から)



2 中撫川遺跡1区
溝2 (南から)



3 中撫川遺跡1区
溝2土層断面
(南から)

1 中撫川遺跡2区
溝群完掘状況
(北から)



2 中撫川遺跡3区
溝群
(北上空から)



3 中撫川遺跡3区
溝群完掘状況
(北から)





1 中撫川遺跡3区
溝3 (南から)



2 中撫川遺跡1区
溝5発掘風景
(南から)



3 中撫川遺跡1区
溝5土器出土状態
(北から)

1 中撫川遺跡1区
溝5土器出土状態
(東から)



2 中撫川遺跡1区
溝5土器群
(東から)



3 中撫川遺跡2区
溝5土器出土状態
(北から)





1 中撫川遺跡3区
溝6発掘風景
(西から)



2 中撫川遺跡3区
溝6(南から)

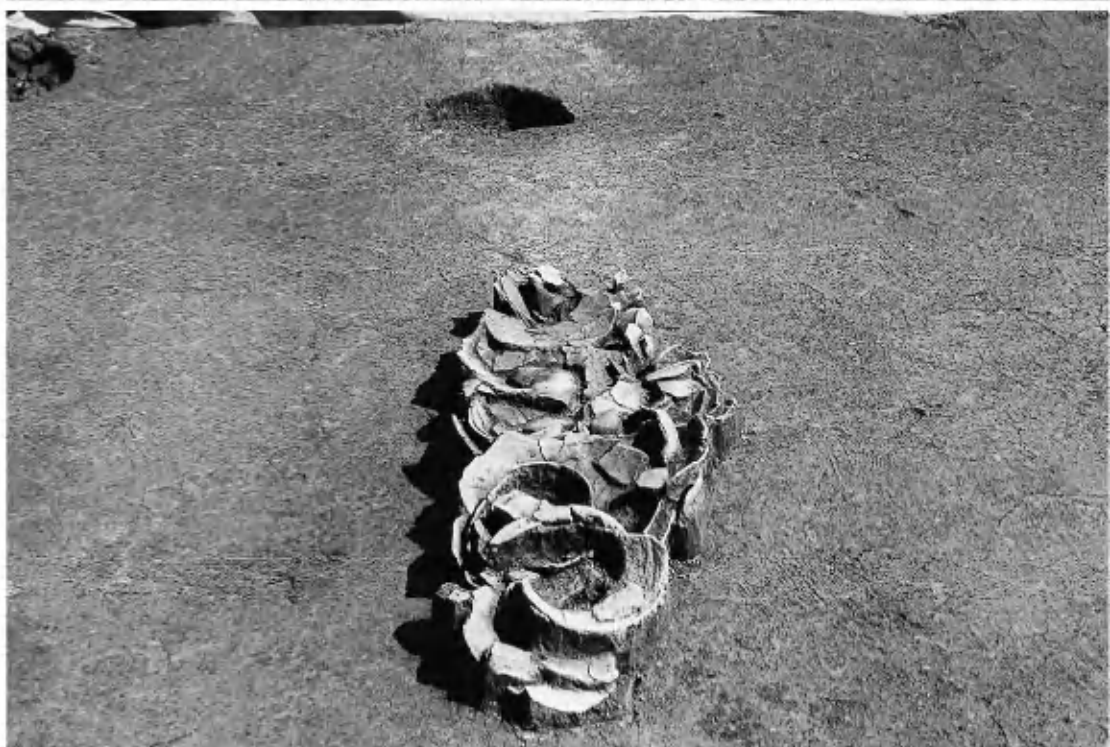


3 中撫川遺跡3区
溝6土層断面
(北から)

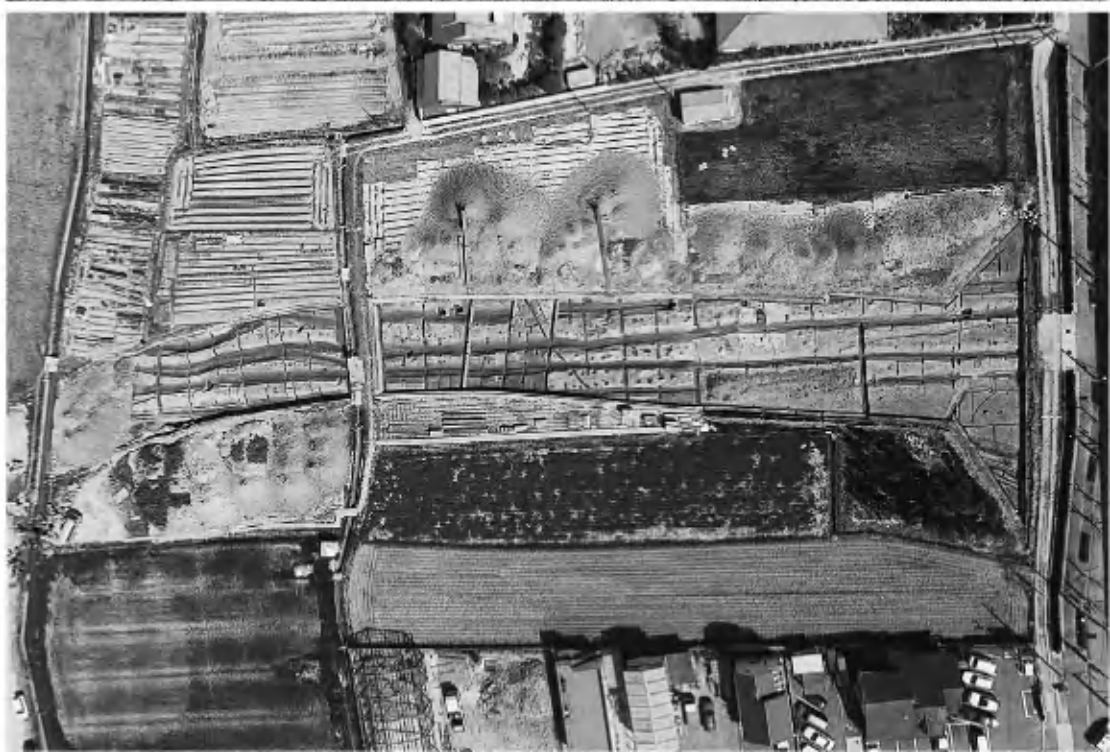
1 中撫川遺跡2区
溝5
(北から)

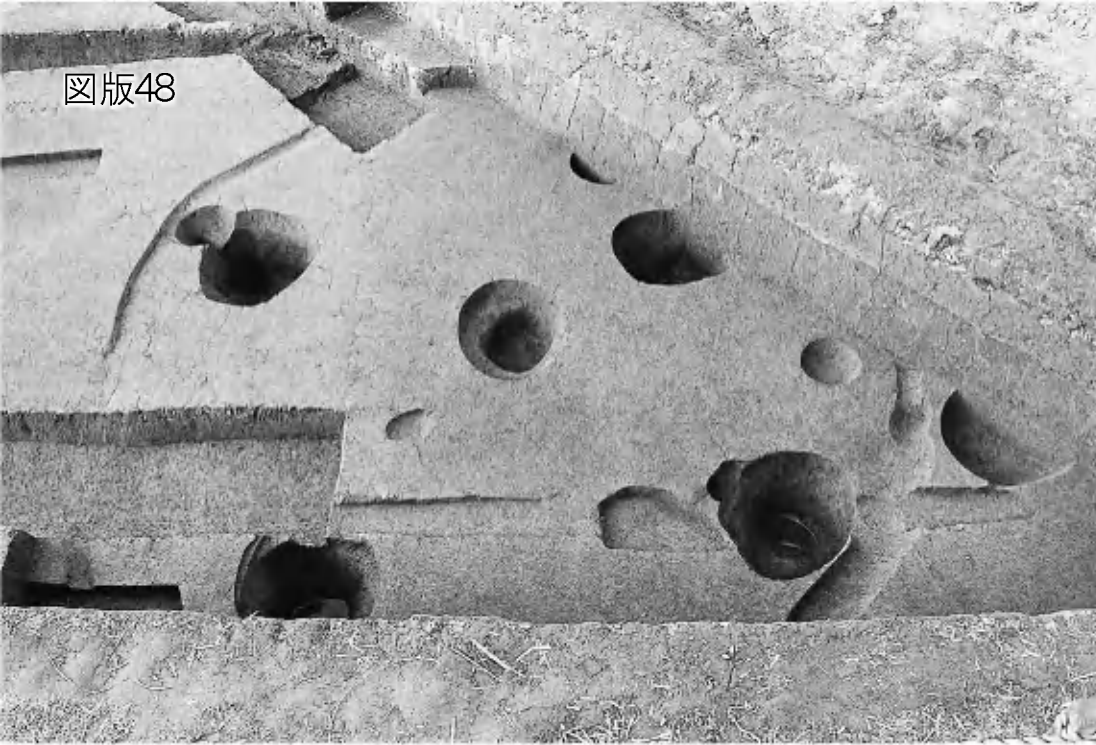


2 中撫川遺跡3区
溝10土器集中部分
(南から)



3 中撫川遺跡1～3区
完掘状況
(上空から)





1 中撫川遺跡3区
縦穴住居1
(南から)



2 中撫川遺跡2区
井戸2 (北から)



3 中撫川遺跡2区
井戸3土層断面
(北から)



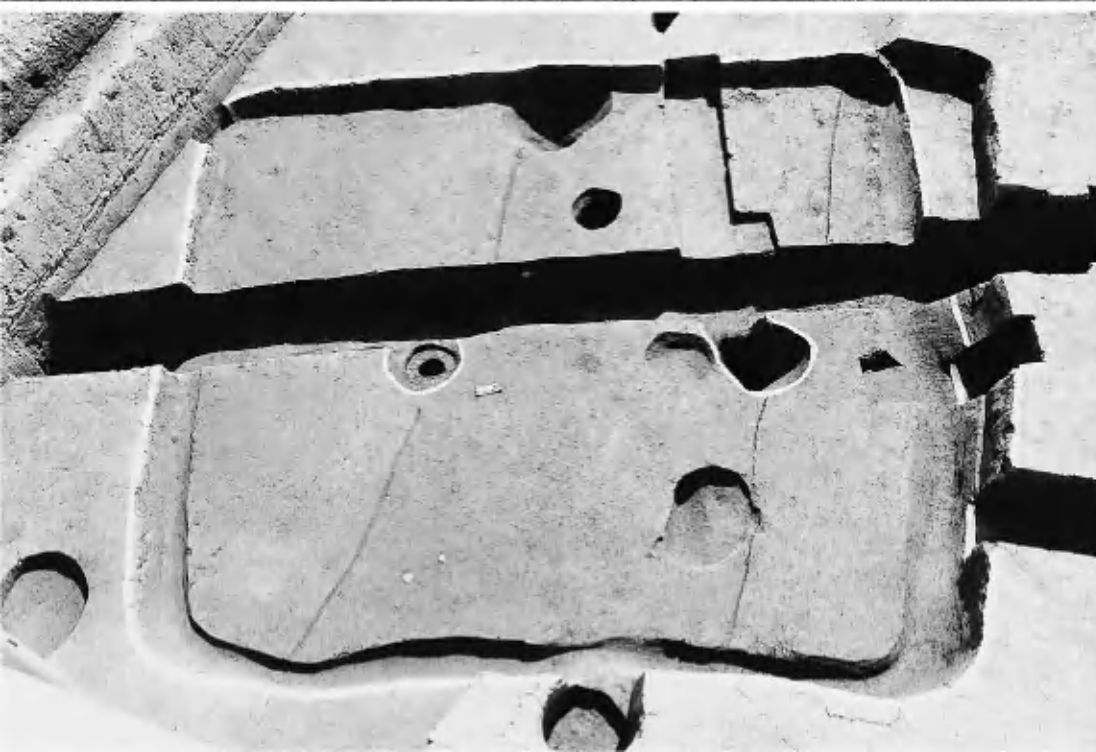
中撫川遺跡1～3区 古墳時代から弥生時代の溝群（北上空から）



1 中撫川遺跡3区
井戸4（北から）



2 中撫川遺跡1区
土器溜まり1
（東から）



3 中撫川遺跡2区
竪穴住居2
（北から）

1 中撫川遺跡1区
井戸6検出状態
(南東から)



2 中撫川遺跡2区
井戸8土層断面
(北から)



3 中撫川遺跡2区
井戸8完掘状況
(北から)





1 中撫川遺跡2区
井戸9（北から）



2 中撫川遺跡2区
井戸11（北から）



3 中撫川遺跡3区
井戸12（東から）

1 中撫川遺跡3区
井戸13土器出土状態
(東から)



2 中撫川遺跡3区
井戸13中層木製品
出土状態(西から)



3 中撫川遺跡3区
井戸13下層土器
出土状態(西から)





1 中撫川遺跡3区
井戸15（東から）



2 中撫川遺跡2区
たわみ1手焙り
形土器出土状態
（北から）



3 中撫川遺跡2区
土壇7（北から）

1 中撫川遺跡3区
土壇10(南から)



2 中撫川遺跡3区
土壇11(東から)



3 中撫川遺跡2区
土器溜まり2
(北から)





1 中撫川遺跡3区
土器溜まり3全景
(北から)



2 中撫川遺跡3区
土器溜まり3
「入れ子」の土器
(北から)



3 中撫川遺跡3区
土器溜まり3
土器出土状態
(北から)



中撫川遺跡1・2区 古代建物群全景（北上空から）



1 中撫川遺跡1区
掘立柱建物群
(西から)

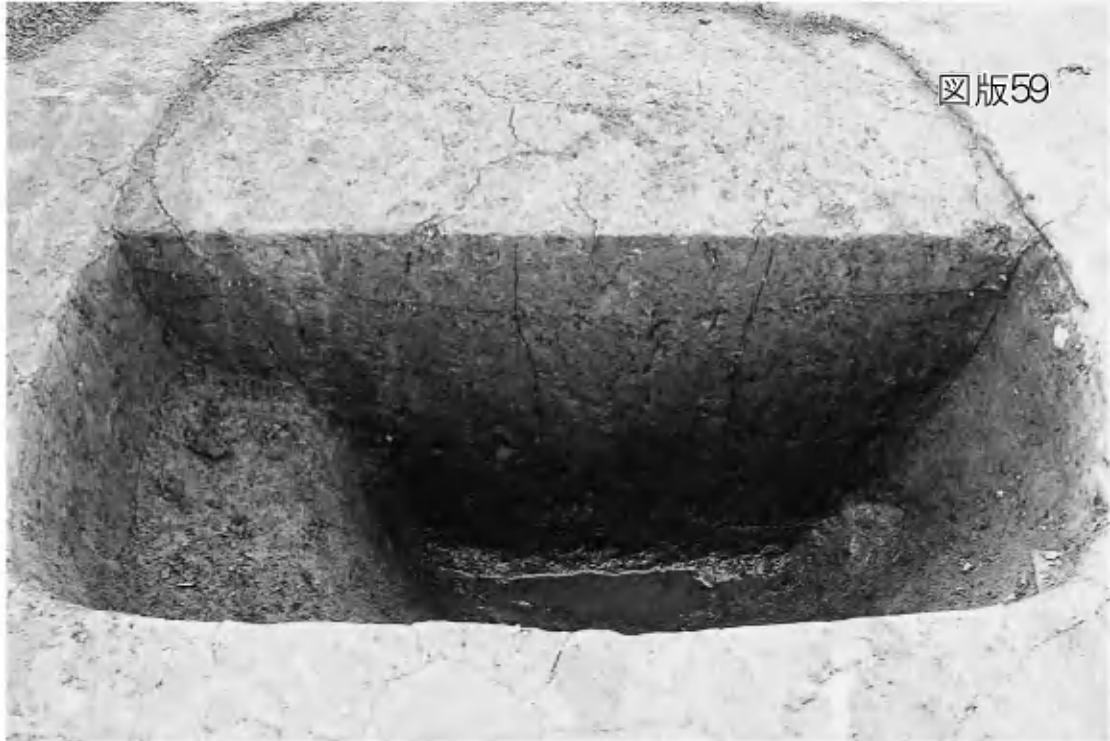


2 中撫川遺跡1区
掘立柱建物5
(北から)

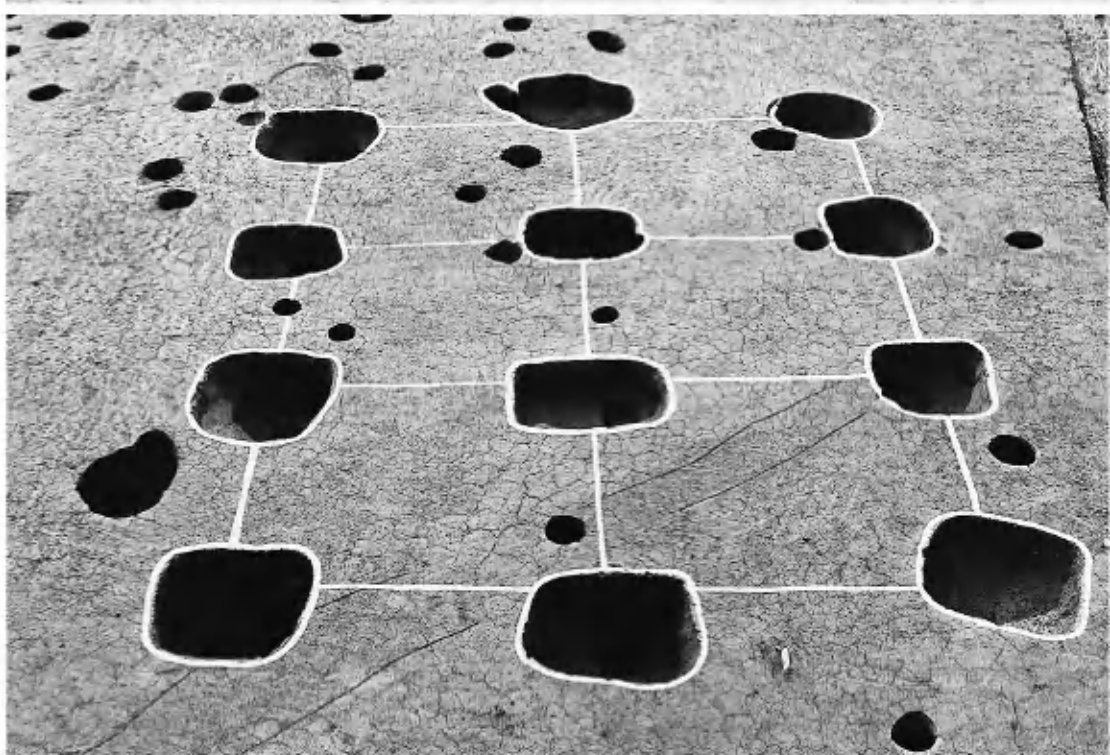


3 中撫川遺跡2区
掘立柱建物7
(北から)

1 中撫川遺跡2区
掘立柱建物7
柱穴断面
(東から)



2 中撫川遺跡2区
掘立柱建物8
(北から)

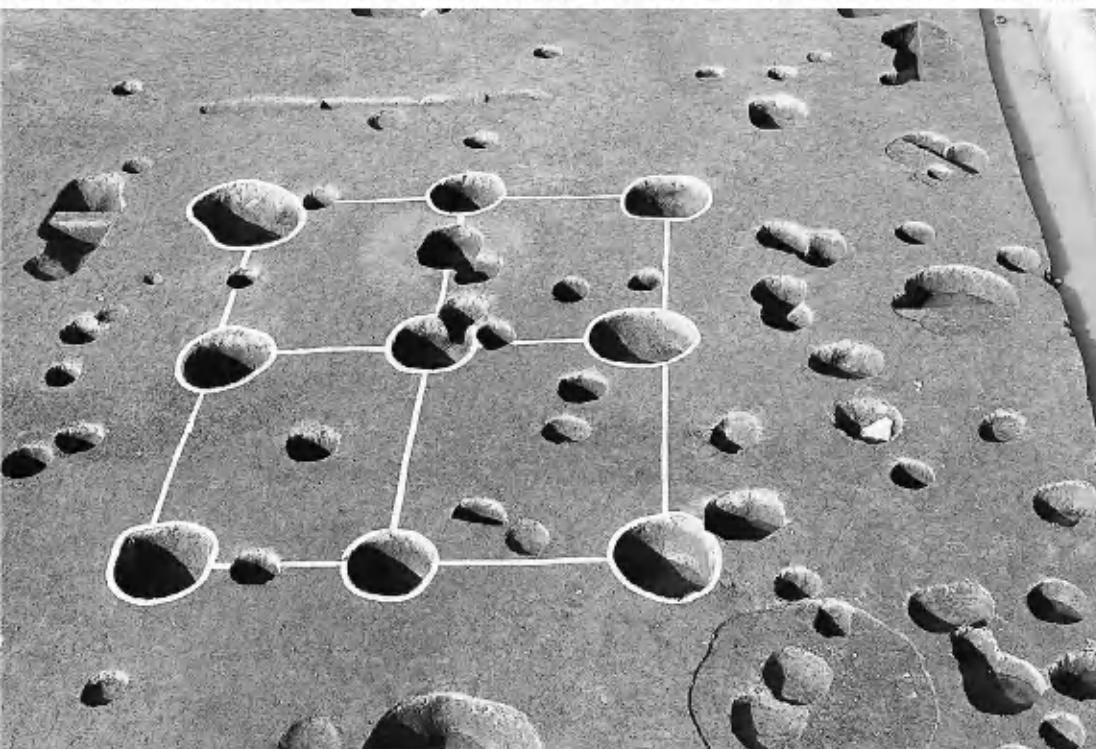


3 中撫川遺跡2区
掘立柱建物9
(東から)

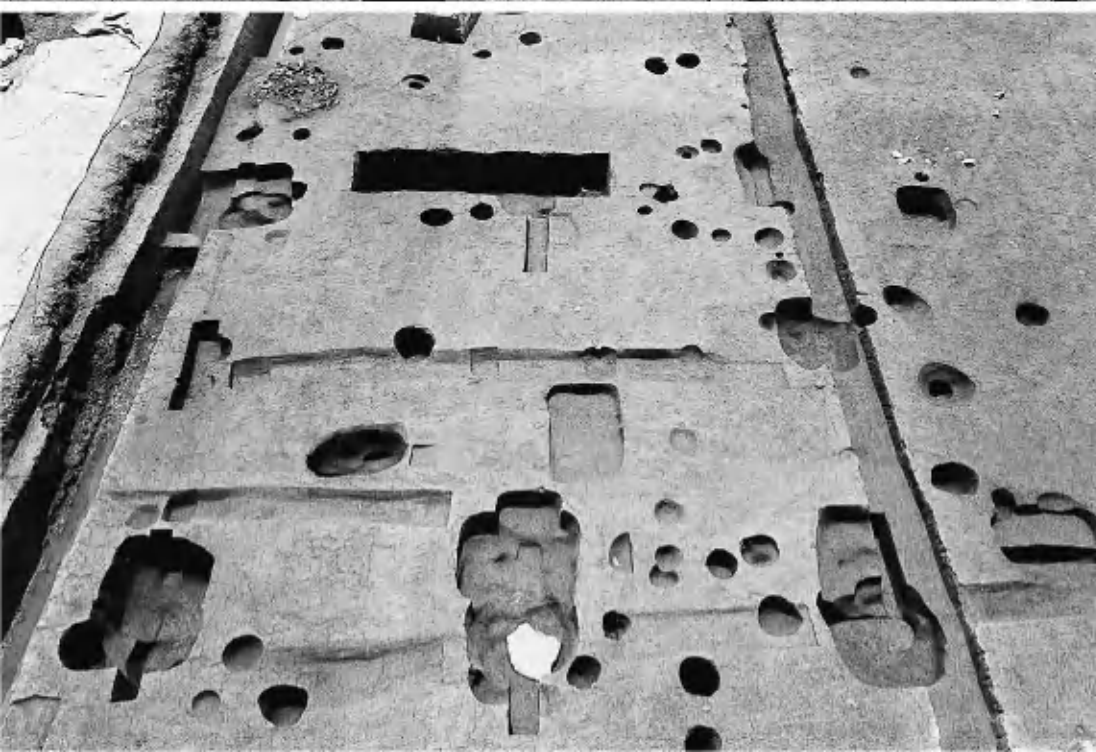




1 中撫川遺跡2区
掘立柱建物8・9
(北から)

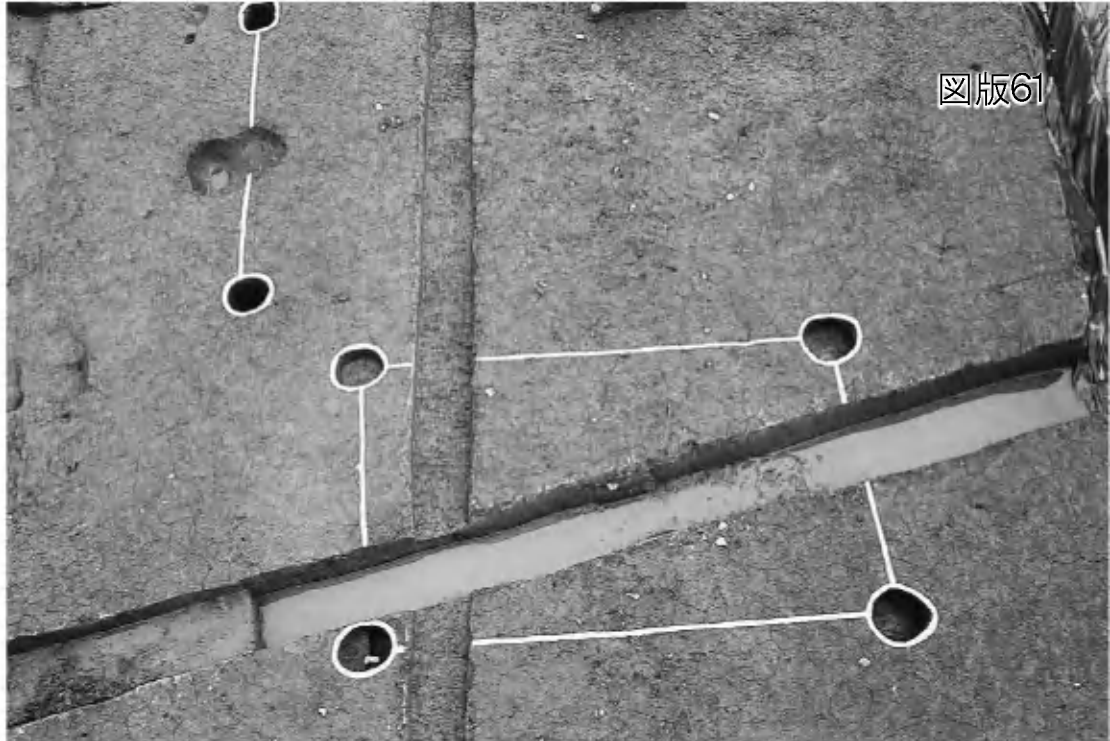


2 中撫川遺跡2区
掘立柱建物10
(南から)



3 中撫川遺跡3区
掘立柱建物11
(北から)

1 中撫川遺跡3区
掘立柱建物12
(北から)

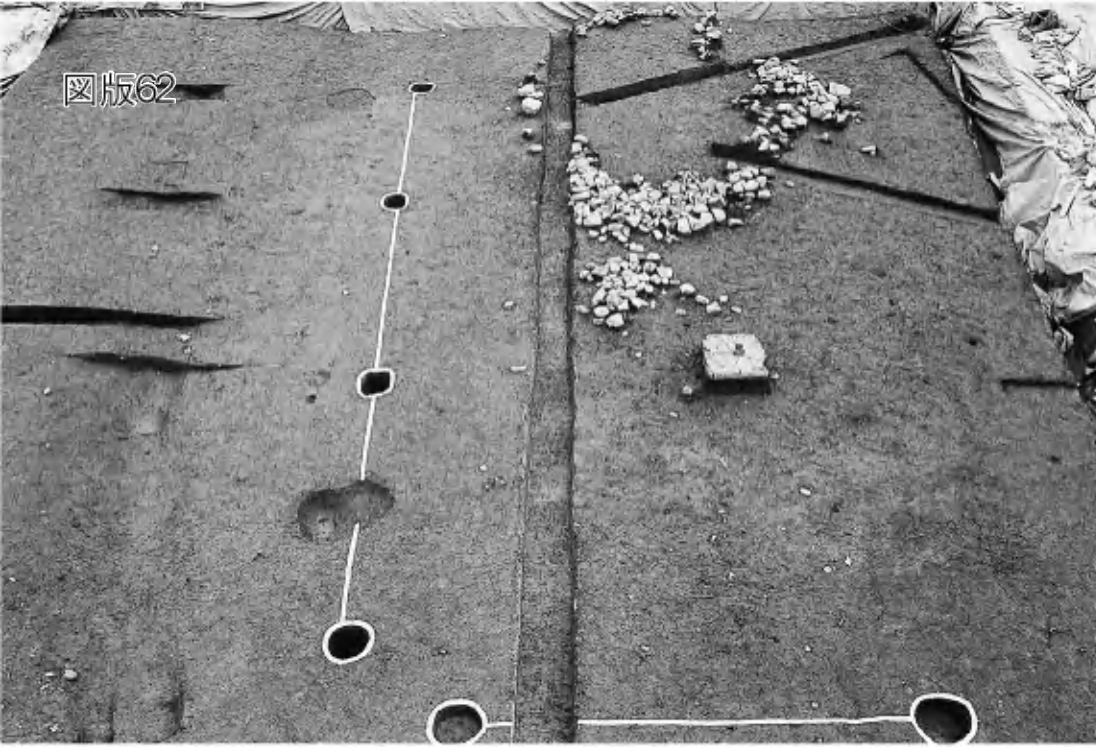


2 中撫川遺跡1・2区
掘立柱建物群と
周辺地形
(西上空から)



3 中撫川遺跡3区
たわみ4と集石1
調査風景(北から)





1 中撫川遺跡3区
集石1と柱列2
(北から)



2 中撫川遺跡3区
集石1
(北東から)



3 中撫川遺跡2区
たわみ4 検出状態
(東から)

1 中撫川遺跡3区
たわみ4全景
(北から)



2 中撫川遺跡3区
溝11・4・19土層
断面(北西から)



3 中撫川遺跡1区
溝25遺物出土状況
(南東から)





1 中撫川遺跡1区
溝25円面硯出土状態
(西から)



2 中撫川遺跡1区
溝25調査風景
(北から)



3 中撫川遺跡1区
溝25完掘状況
(南東から)

1 中撫川遺跡1区
河道西壁土層断面
(北東から)



2 中撫川遺跡1区
河道東壁
(北西から)



3 中撫川遺跡1区
中世河道調査風景
(北西から)

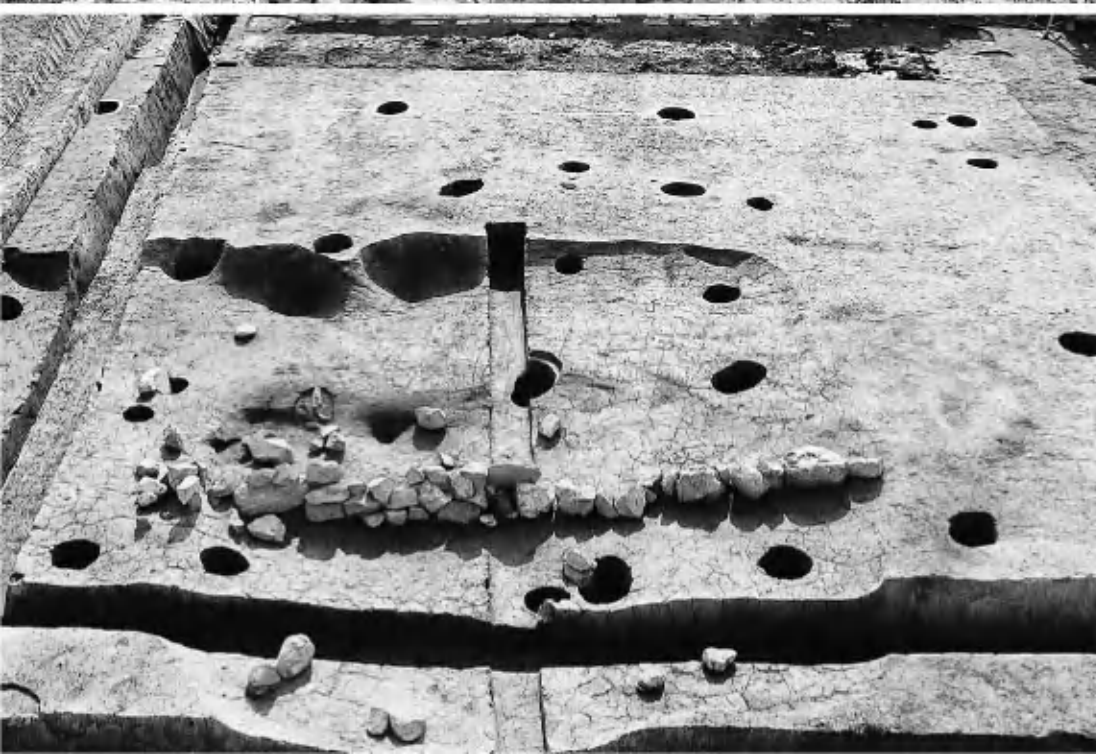




1 中撫川遺跡1区
河道・溝42
(北から)



2 中撫川遺跡1区
北半中世遺構群全景
(西から)



3 中撫川遺跡1区
竪穴遺構1と柱列8
(北から)

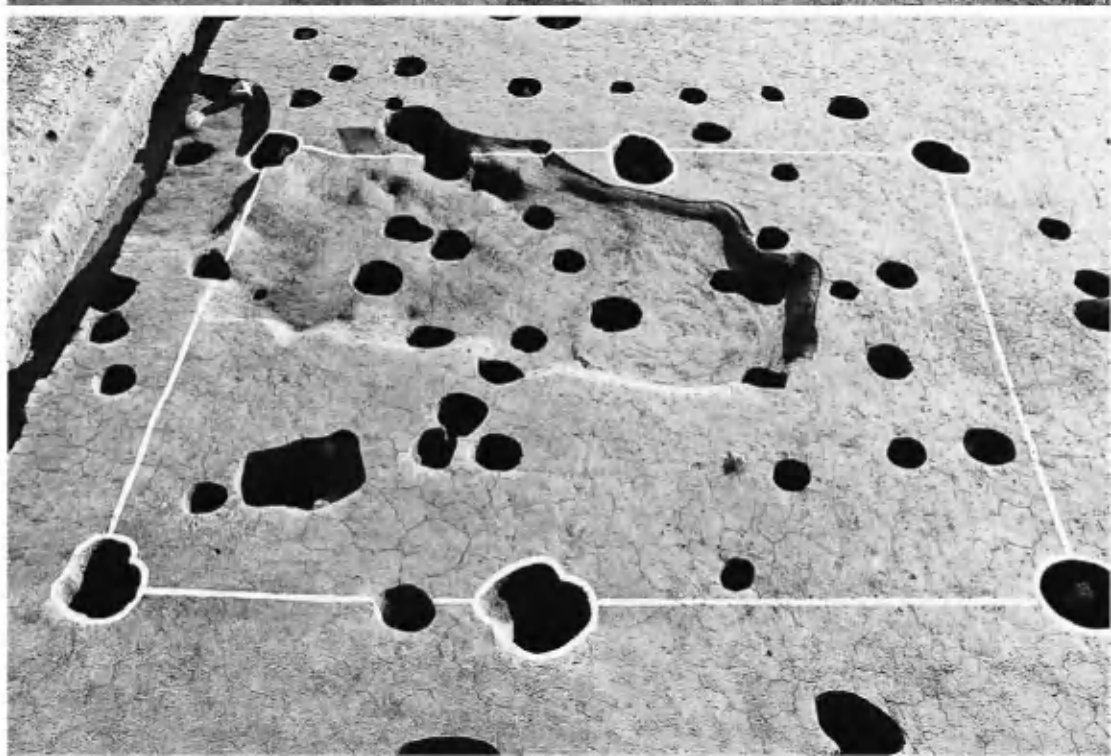
1 中撫川遺跡1区
竪穴遺構1
(東から)

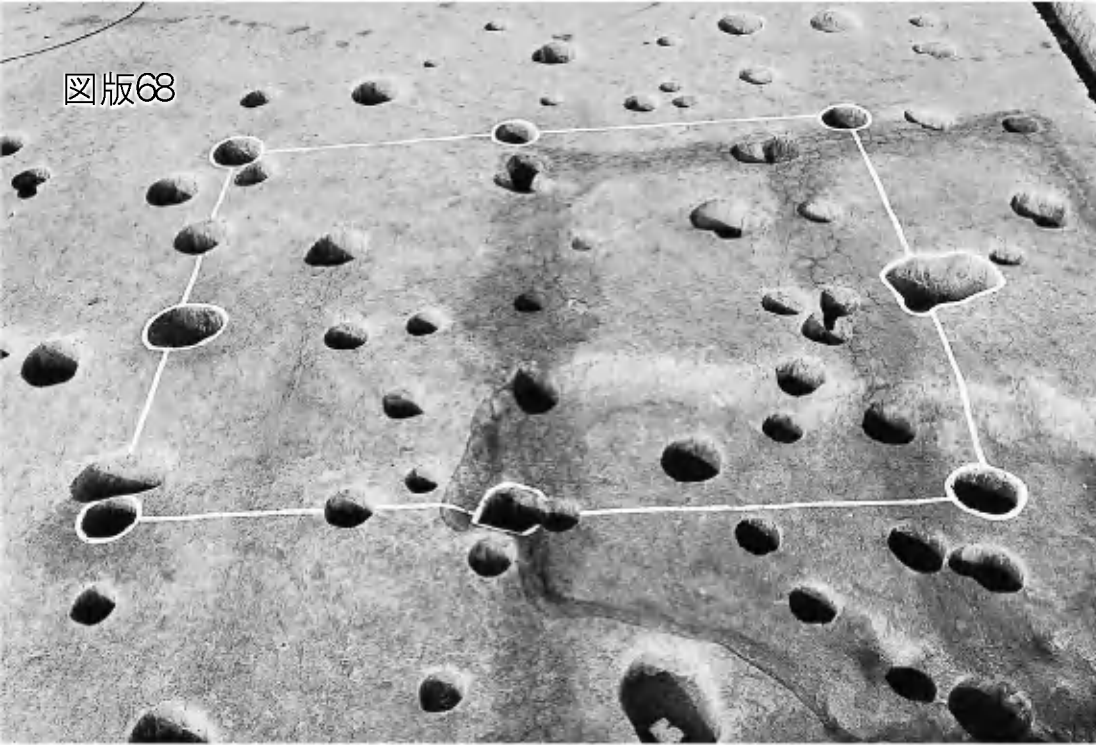


2 中撫川遺跡2区
中世遺構群
(北から)

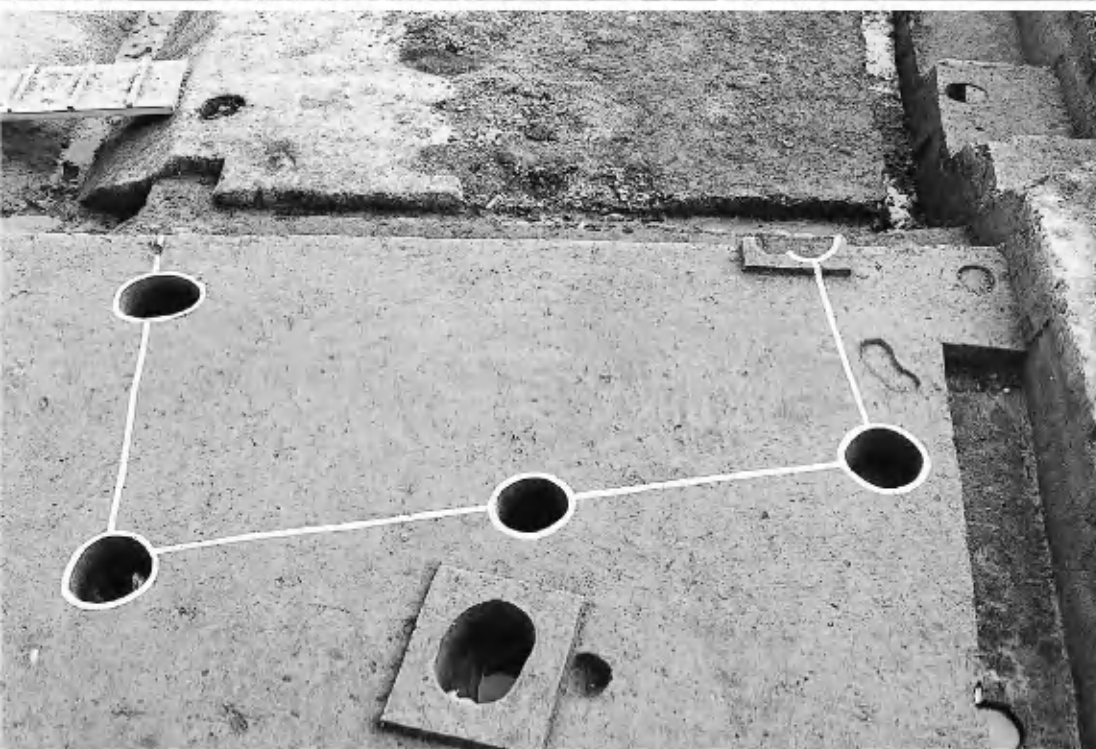


3 中撫川遺跡2区
掘立柱建物13
(北から)

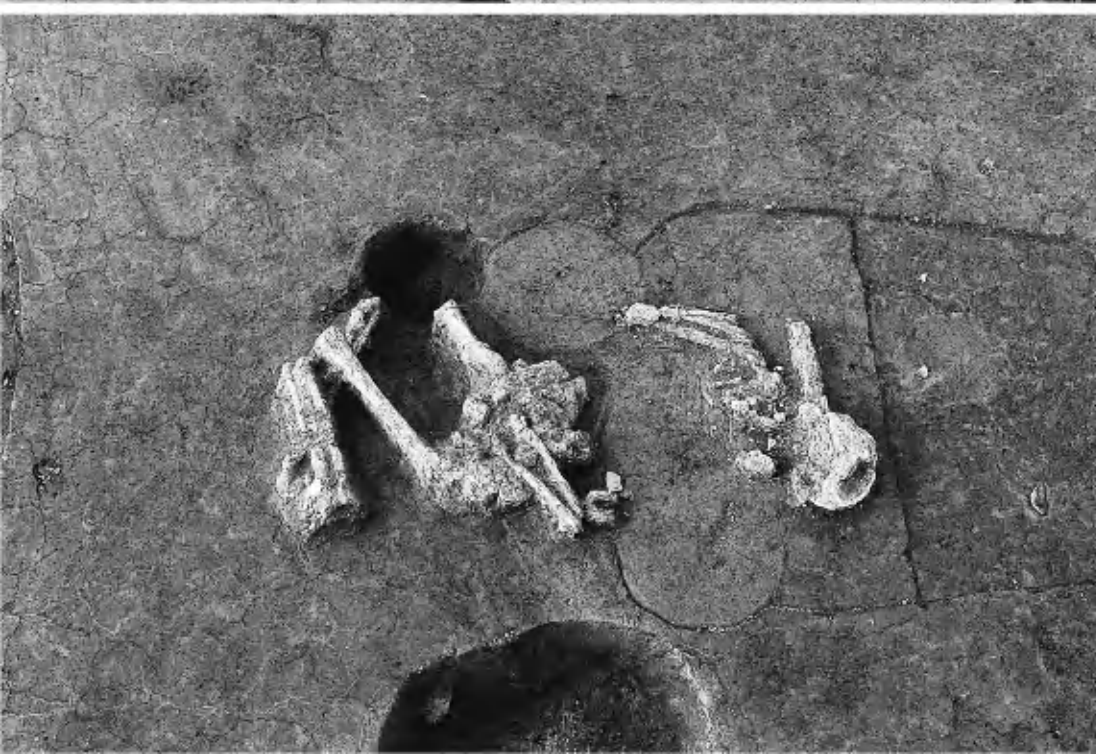




1 中撫川遺跡2区
掘立柱建物14
(南から)



2 中撫川遺跡2区
掘立柱建物16
(北から)



3 中撫川遺跡2区
墓1 (東から)

1 中撫川遺跡2区
墓2（北から）



2 中撫川遺跡2区
井戸17
（南東から）



3 中撫川遺跡1区
土壇20土器
出土状態
（西から）





1 中撫川遺跡2区
土壇29 (南から)



2 中撫川遺跡3区
土壇32 (北から)



3 中撫川遺跡2区
溝44・45
(西から)

1 中撫川遺跡1区
溝42土層断面
(西から)



2 中撫川遺跡1区
溝42備前焼
出土状態 (西から)



3 中撫川遺跡1区
溝42中央部土師器
出土状態 (東から)





弥生



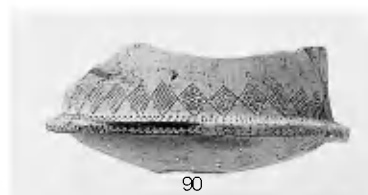
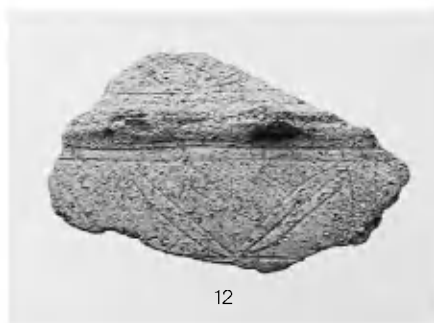
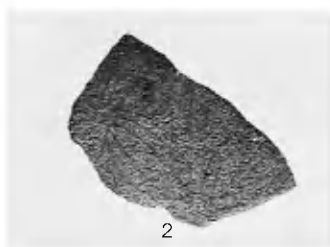
1 現地説明会
テント内の展示
(平成13年11月10日)



2 現地説明会
中撫川遺跡3区
溝6土器出土状況
(南から)



3 現地説明会
中撫川遺跡3区
井戸12・13付近
(東から)



中撫川遺跡出土遺物（1）弥生土器

图版74



中撫川遺跡出土遺物（2）弥生土器



134



135



136



138



139



142



145



148



149



154



164



168



169



172



174

中撫川遺跡出土遺物（3）弥生土器

図版76



中撫川遺跡出土遺物（4）弥生土器



222



230



240



241



239



239筒部拡大



242



246



247



248



249



250



251



255

中撫川遺跡出土遺物 (5) 弥生土器

図版78

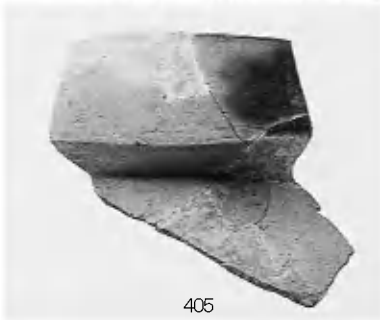


中撫川遺跡出土遺物（6）弥生土器・土師器



中撫川遺跡出土遺物（7）土師器

図版80



中撫川遺跡出土遺物（8）土師器



中撫川遺跡出土遺物（9）土師器

図版82



中撫川遺跡出土遺物 (10) 土師器・ミニチュア土器



中撫川遺跡出土遺物（11）ミニチュア土器・土師器

図版84

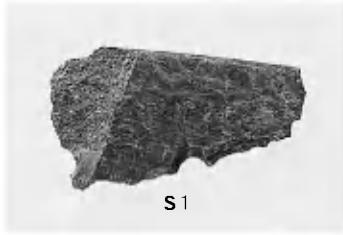


中撫川遺跡出土遺物 (12) 土師器・須恵器



中撫川遺跡出土遺物 (13) 緑釉陶器・土師器ほか

図版86



S1



S3



S4



S5



S11



S12



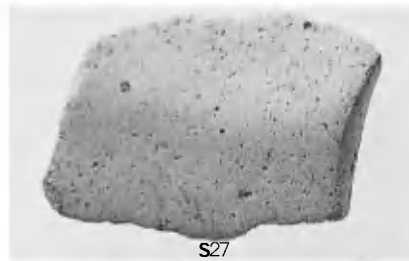
S16



S24



S26



S27



S28



S30

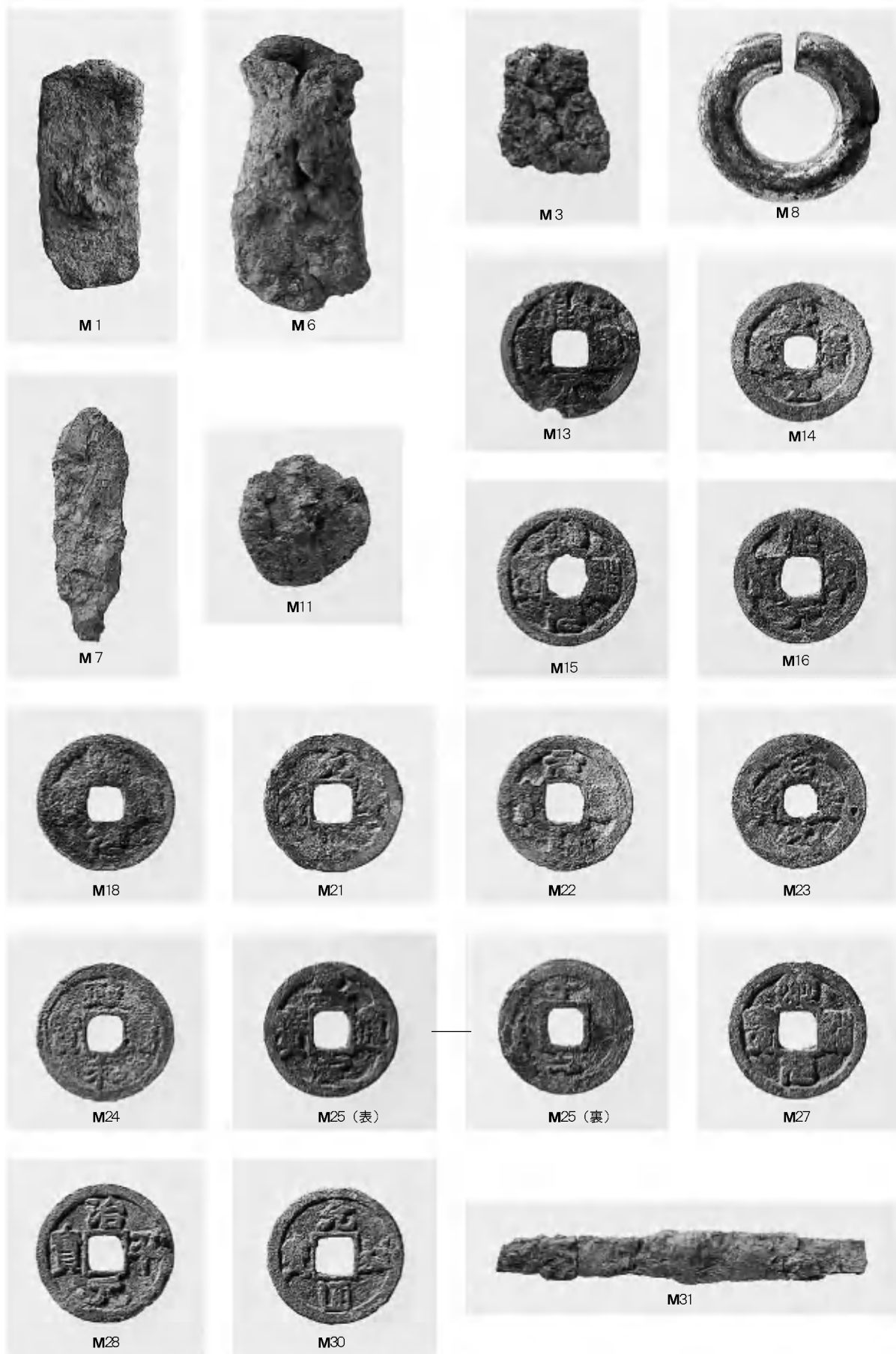


S31



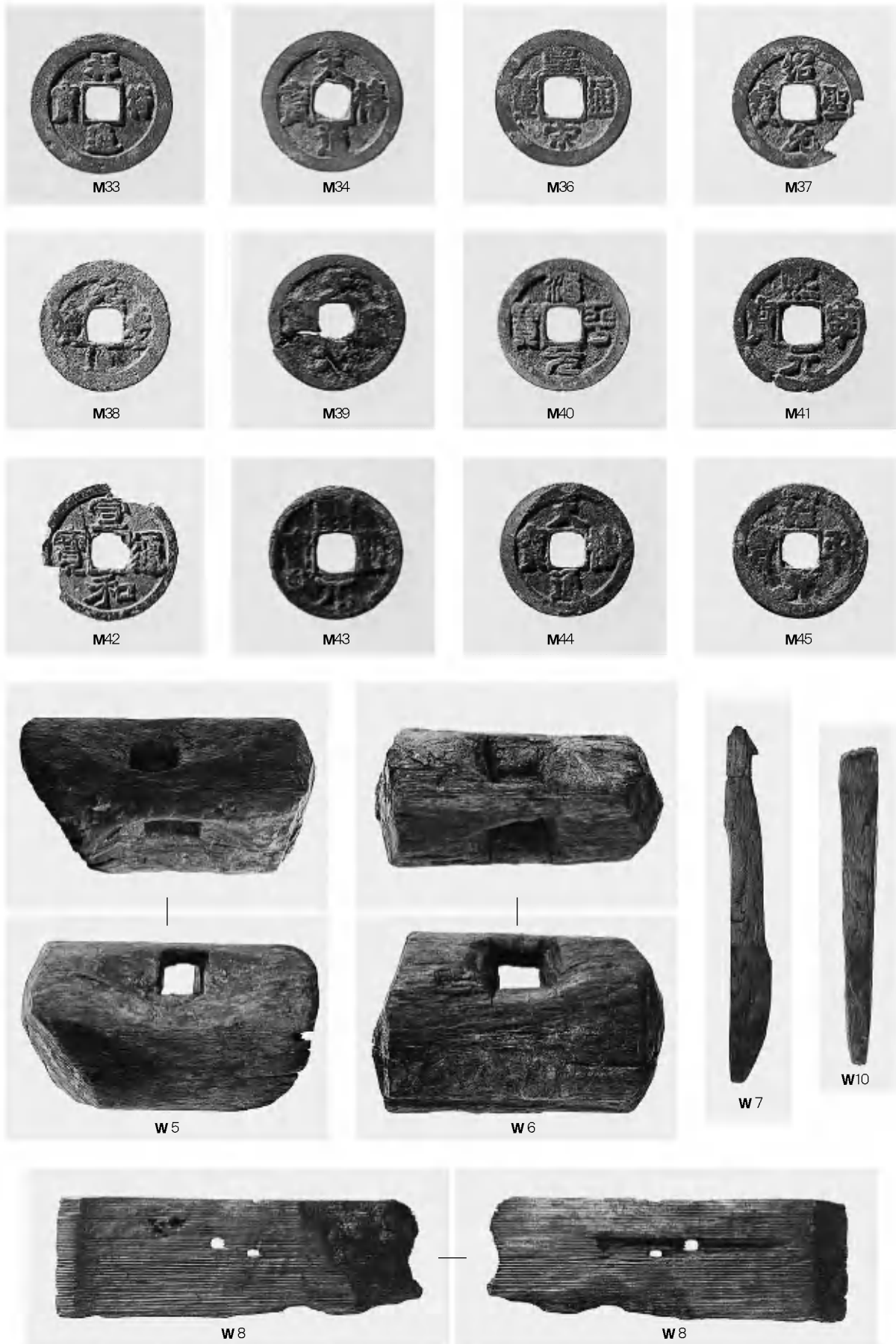
S32

中撫川遺跡出土遺物（14）石器・石製品



中撫川遺跡出土遺物（15）鉄器・銭貨ほか金属製品

図版88



中撫川遺跡出土遺物 (16) 銭貨・木製品

報告書抄録

ふりがな	しんやしきせき ごうのみぞいせき ぶしょうでんいせき かけなしどういせき かわいりいせき なかなつかわいせき								
書名	新邸遺跡・郷ノ溝遺跡・仏生田遺跡・掛無堂遺跡・川入遺跡・中撫川遺跡								
副書名	一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査								
巻次	I								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告								
シリーズ番号	182								
編著者名	岡田 博・井上 弘・柳瀬昭彦・高田恭一郎・氏平昭則・小嶋善邦・松尾佳子・三宅健夫・稲谷知子・大澤正己・白石 純・松谷暁子・大塚愛二・富岡直人								
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター								
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3				TEL 086-293-3211				
発行機関	岡山県教育委員会								
所在地	〒700-0824 岡山県岡山市内山下2-4-6				TEL 086-224-2111				
発行年月日	西暦2004年 3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	所在地		コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	岡山県	市町村	遺跡番号						
しんやしき 新邸遺跡	岡山市吉備津 倉敷市日畑	201 202			34° 39' 42"	133° 50' 7"	2000.4.10～ 7.10	600	一般県道 吉備津松 島線道路 改築に伴 う発掘調 査
ごうのみぞ 郷ノ溝遺跡	岡山市納所 倉敷市日畑	201			34° 39' 40"	133° 50' 7"	2000.6.5～ 2001.1.30	2,400	
ぶしょうでん 仏生田遺跡	岡山市納所	201			34° 39' 30"	133° 50' 12"	2000.12.6～ 2001.3.22 2001.4.9～9.3 2002.10.1～ 10.25	9,900	
かけなしどう 掛無堂遺跡	岡山市納所	201			34° 39' 20"	133° 50' 19"	2001.9.4～ 12.27	600	
かわいり 川入遺跡	岡山市川入	201			34° 39' 19"	133° 50' 23"	2001.4.9～ 9.26	800	
なかなつかわ 中撫川遺跡	岡山市中撫川	201			34° 39' 15"	133° 50' 24"	2001.4.9～ 2002.3.29	3,100	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
新邸遺跡	集落	弥生時代 ～中世	河道・溝		縄文土器・弥生土器・獣骨・ 石包丁・石錘				
郷ノ溝遺跡	集落	弥生時代 ～中世	竪穴住居・井戸・溝・ 柱穴群		弥生土器・土師器・須恵器				
仏生田遺跡	集落	古墳時代 ～中世	土壌・溝・井戸・竪穴 遺構・水田跡		須恵器・新羅系須恵器・緑釉 陶器・土師器・中世土器・白磁			山陰系土器、古 代水田跡	
掛無堂遺跡	集落	古代～中 世	掘立柱建物・護岸・河 道・溝		須恵器・木器(槽・盤・曲 物)・中世土器			護岸施設	
川入遺跡	集落	中世	土壌・河道		中世土器・備前焼				
中撫川遺跡	集落	弥生時代 ～中世	竪穴住居・掘立柱建 物・土壌・井戸・溝・ 墓		弥生土器・土師器・須恵器・ 緑釉陶器・円面硯・鑄型・中 世土器・備前焼・鉄製品・石器			搬入土器、多量 の緑釉陶器	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告182

新邸遺跡・郷ノ溝遺跡
仏生田遺跡・掛無堂遺跡
川入遺跡・中撫川遺跡

一般県道吉備津松島線道路改築に伴う発掘調査 I

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市玉柏390